魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ

リリカルＺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ

【Ｎコード】
Ｎ９１５４Ｍ

【作者名】
リリカルＺ

【あらすじ】
ベガ星連合軍との戦いを勝ち抜きその役目を終えようとしていたマジンガー達。
甲児達は１年ぶりに再会し、其処で実験中であった転移装置を使用した際に暴走事故に巻き込まれてしまった
甲児達が辿り着いた場所は魔法の発達した世界「ミッドチルダ」であった
そして、その世界を侵略せんと破壊を繰り返す巨大な敵「機鋼獣」軍団に遭遇する

強大な機鋼獣軍団に魔道士達と鋼鉄の巨人が共に挑む
果たして勝利するのはどちらか？

予告（前書き）

東映まんがまつり！

予告

夏休み、良い子の皆様に東映まんががお送りします、
長編映画「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」

ベガ星連合軍との戦いを勝ち抜き、その役目を終えようとしていた
マジンガー達
しかし、彼らの知らない異世界で新たなる強敵がその牙を剥いてきた
その名は『機鋼獣』
機械の体に鋼鉄の鎧を身に纏った怪物達が異世界「ミッドチルダ」
を侵略せんと攻撃を開始してきたのだ
強大な敵機鋼獣にはミッドチルダの誇る魔法攻撃が通用せず、魔導
士達に出来る事と言えば彼らを退かせる程度であった
だが、そこへ鉄の城が現れる

『誰が相手だろうと俺とマジンガーが叩き潰してやるぜ！マジィィ
ィィィンゴーーーーーー！』

強大な力を誇る機鋼獣軍団にあのスーパーロボット軍団が挑む

マジンガーＺが
グレートマジンガーが
ゲッターロボが
グレンダイザーが
異世界ミッドチルダを舞台に新たなる戦いが始まる

果たして勝つのは
機鋼獣軍団か？

それともスーパーロボット軍団か？

この夏は『魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ』にご期待下さい

同時上映『ボスボロットの顔芸百連発にご期待下さい』（嘘）

予告（後書き）

映画を見に来てくれたお子様たちには『歩くマジンガー人形』と『レイジングハート飴玉』をプレゼント（嘘）

語り

やぁ、俺の名前は兜　甲児。
君達と同じ、何の変わりべも無い極普通の青年だ
君達に一つ聞きたい

もし、君達が見知らぬ異世界に飛ばされ、そして其処が、巨大な悪の軍団により今にも呑み込まれそうになっていたら、君達はどうする？

その力に敢然と立ち向かうかい？
それとも、我が身可愛さに尻尾を巻いて逃げるかい？

この俺、兜　甲児は突然そんな世界に飛ばされてしまうのです
その世界とは・・・

魔法が存在し、時空管理局と言う組織が存在する異世界・・・名を『ミッドチルダ』
そして、そのミッドチルダを死と、絶望と、紅蓮の炎で包み込んでしまおうと襲い掛かる凶悪な軍勢、
機械の体に鋼鉄の鎧を身に纏った凶暴な獣達・・・その名は『機鋼獣』

どうだい？聞いただけで振るえが止まらないだろう
だけど、俺は逃げない！絶対に！！

え？何で逃げないのかって？

そりゃ決まってるさ
俺には頼れる仲間達が居るのさ

元の世界で一緒に戦った仲間達に加えて、この世界で魔法を駆使してミッドチルダを日々守っている組織、若いながらもその腕前は一流と来たもんだ
その組織は『機動六課』って言うんだ
そして、俺の相棒・・・恐ろしい戦闘能力を身につけた巨人ロボット
空にそびえる鉄の城にして、無敵のスーパーロボット!!

その名は・・・その名は・・・

『マジンガァァァァゼェェェェェット!!』

序章（前書き）

最初は甲児達しか出ません

序章

それは、何処とも知れぬ場所であった
辺りを不気味な光が照らし出し、その中では黒と紫の半分で彩られたローブを身に纏った人間が肩膝をついていた

「「お喜び下さい、王よ。間も無く我等の兵士達が完成いたします」」

ローブを身に纏った人間がそう言う
その顔は半分が男、もう半分が女の顔をしていた
そして、その人間の前には、人の脳らしきものが巨大なカプセルの中に浮んでいた

「我等が王がお造りした、無敵の兵士」
「決して死なず、恐れず、命令のままに動き残忍に・・・そして残酷に敵を倒す無血の機械兵」
「「その名は『機鋼獣』!!」」

ローブを身に纏った人間が諸手を上げて大声で叫ぶ
その顔は歓喜に満ちていた

「この機鋼獣を持ってすれば」
「地上の侵略などいとも容易い事で御座います」
『・・・・・』

ローブの人間が卑しく微笑む
すると、目の前のカプセルから声が響いてきた

『か・・・ぶ・・・と・・・・』
「「は?今何とおっしゃいましたか?王よ」」
『か・・・ぶ・・・と・・・・
こ・・・・う・・・・じ・・・・』
「か・ぶ・と」
「こ・う・じ」
「「かぶとこうじ。で御座いますか?」」
『・・・・・』

ローブの人間は聞いたが、それ以上は答えない
あるのはシーンと静まり返った静寂だけであった

「分かりました。王よ」
「そのかぶとこうじなる者を」
「「この『機鋼獣指揮将軍シュラ』が必ず連れて参りましょう」」

シュラと名乗るローブの人間は立ち上がり自分の胸に手を当てて宣言した
王と呼ばれる脳は何も言わず、只気泡を放つだけであった

＊＊＊

日本　光子力研究所

「やぁ、来たね甲児くん」
「お久しぶりです。弓教授」

黒い髪の青年「兜　甲児」が弓教授と握手を交わした

「いやぁ、こうして君と会うのも1年振りだよ」
「ベガ星連合軍との戦いの後ずっとアメリカに居ましたからね」

甲児がそう言う

「どうかね？円盤研究の方は」
「順調ですよ。・・・と言っても宇宙船の完成はもう少し先ですけどね」
「そうか・・・だが、君が此処まで成長したのを兜博士が見たらきっと喜ぶだろうね

そう言って弓教授は部屋の壁に掛けられた写真を見た
其処には片目を失くした強面の老人の顔が映っていた

光子力エネルギー、そして超合金Zの開発者であり、初代光子力研究所所長の「兜　十蔵」博士である

「お爺ちゃん・・・俺はやるよ。何時か俺の作った宇宙船で宇宙に住むいろいろな人々と交流を深めてみせる・・・だから、天国で見守っていてくれ」

ギュッと拳を握り締めて甲児は呟いた
其処でふと甲児は気づいた

「そういえば教授、例のあれはもう完成したんですか?」
「うむ、実はそれで君を呼んだんだ。もう他の皆も来てる筈だよ」
「何ですって!そりゃ不味いや!急がないと」

甲児は急ぎ部屋を出た

「はっはっは、何もそんなに慌てる事は無いじゃないか・・・あいかわらずだなぁ甲児くんは」

弓教授は笑いながらその後に続いた

＊＊＊

甲児が向かった場所、それは巨大な装置のある大きな部屋であった

そして、その部屋の中には

「遅かったな、甲児くん」
「もう皆揃ってるよ」

其処にはかつて共に戦った仲間であるグレートマジンガーのパイロットの「剣鉄也」そしてゲッターロボGのパイロットである「流竜馬」が居た

「鉄也さん！それにリョウくんも！」
「久しぶりだな、甲児くん」
「1年振り・・・だったかな？」
「ああ、皆元気そうだな」

3人はそう言って互いの肩を抱き合ってお互いの無事を喜びあった

「当たり前だ！そう簡単にくたばる筈が無いだろう？」
「と言っても、ベガ星連合軍との戦いが終った後、これと言った出撃は無かったから平和そのものだったけどな」

鉄也とリョウがそう言ってフッと笑う
すると其処へ、

「よう、相変わらず遅刻癖は直ってないみたいじゃねぇか甲児」
「しっかりしろよ甲児」

そう言って甲児を見ていたのは同じくゲッターロボGのパイロットである「神隼人」と「車弁慶」であった

「ちぇっ、ほんの少し遅れただけで酷い言い様だなぁ、ハヤトにベ

ンケイ」

甲児は目の前で悪態をつく2人に言う
リョウと同じチームを組むハヤトとベンケイである

「確かに戦闘は無かったが、出撃が無かったって訳じゃねぇんだけどよ」

「ああ、石油タンカーが座礁したり、大火災の消火作業とかにも俺達は駆りだされたからな」

「鉄也くんなんか横転した新幹線を起すのにグレートを使ってたからな」

「ありゃぁ見物だったぜ」

隼人が笑う

「おいおい、グレートは見世物じゃないんだぞ」

鉄也が少し不満そうに呟く

「ま、でももうすぐ俺達のマジンガーやゲッターもお役御免だけどな」

「ありゃ？ゲッターも博物館に送るのか？」

「ああ、既に研究所では新しいゲッター線の装置が開発されているから、もうゲッターロボを使う必要は無いんだ」

「だったら、いっその事博物館に送ってやった方がゲッターも幸せだろうって博士の計らいなのさ」

「そりゃそうだよな。研究所の隅っこで埃を被ってるよりはマシだしな」

甲児は言った

ベガ星連合軍との戦いを終えてから、これと言った戦闘は殆ど起きてないのだ
あるとすれば災害の救助や人間の手ではどうしようも無い際の出撃位であり、殆ど戦闘を行っていないのだ
それに、近年災害救助用のパワーローダーが開発されたので実質マジンガーやゲッターが救助活動に出撃する機会すら減っていたのだとなるとこのままスーパーロボットを研究所に置いておいても仕方が無いと言う判断の元、歴代のスーパーロボットを近年公開予定のロボット博物館に送る予定が立っていたのだ

「ゲッターもマジンガーも子供に結構人気があるからな。きっと大賑わい間違いないぜ」
「全くだな、何せ何度と無く人類の平和を守った英雄みたいなものだしな」
「懐かしいな・・・こうして皆と会うと昔を思い出すぜ」

甲児はふと懐かしく思った
かつて甲児達はマジンガーやゲッターに乗り数多くの巨大な悪と戦ってきたのだ
悪の科学者、地底からの脅威、そして宇宙からの侵略者である
だが、それも既に過去の話となり今では人類は平和の道を歩んでいた

「そう言えば鉄也さんって今何やってんだ?」
「今は防衛軍の教官をしているさ」
「へぇぇ、そりゃ防衛軍の皆に同情するぜ」
「どういう意味だ?」
「そのままの意味だぜ、鉄也」

隼人が答える
だが、その意味が分からず鉄也は首を傾げていた

「鉄也さんが鍛えたら強くなる前に皆伸びちまうんじゃねぇのか？」
「そんな事は無いぞ。其処はしっかりとメニューを組んでいるからな」
「嘘つけ！こないだ見てみたら鉄也の鬼教官っぷりに殆どの兵士が泣き喚いてたぜ」

そう、鉄也は今防衛軍の兵士達を強くするために教官を務めていたのだ
だが、その余りにも厳しいトレーニング方針の為に周りでは「鬼教官」とか「鬼の鉄也」と呼ばれている程なのだ
だが、本人からしてみればまだまだ軽い方であると言うもし彼が本気で鍛えようとしたら、恐らく死人が出る事間違いなしである

「相変わらず鉄也さんは特訓の虫だなぁ」
「戦いが無いとは言え何時何が起こるか分からんからな。常に体を鍛えるのは戦士としての務めみたいなものだ」
「その硬さは相変わらずだなぁ鉄也くん」
「リョウくんこそ、今は道場の師範を務めているんだろう？」
「まだ地方の道場だけどな」

竜馬は戦いが終った後、父が営む道場の内の一つのところで師範をしている
元々剣道の腕前が結構あった上にゲッターのパイロットという事で門下生が後を絶たないのだ
その為今竜馬の経営する道場はかなりの売り上げをたたき出しているのだ

「そんで隼人は新ゲッターの開発・・・んで弁慶はそのテストパイ

ロットか」
「ああ、今度のゲッターはゲッター線を使わないゲッターを作ろうと思ってな」
「これが中々のじゃじゃ馬なんだぜ」
「へぇぇ、あのトレーニングマシンで居眠りをする弁慶が言う程なんだから相当な物なんだな」

隼人は研究所で独自のゲッターの開発を行っていた
そして弁慶はその開発した試作ゲッターのテストパイロットをしている
皆それぞれの道を歩んでいたのだ
そうして話していると

「こううらあああああ！兜！俺様を忘れるとは良い度胸じゃないのさ！」
「全くだ！」
「俺達を忘れるなんてさ！」
「お！ボス、ヌケ、ムチャじゃねぇか！久しぶりだなぁ」

甲児は手を振って3人を出迎えた
彼らはかつて甲児と共に戦った仲間である
今では甲児の親友とも悪友とも呼べる仲である

「てめぇがアメリカに行っちまってから暇だったんだからな！」
「ハハハ、悪い悪い。でも俺も結構寂しかったんだぜ」
「ハハハ、嬉しい事言ってくれるじゃねぇのさ」
「まぁな」

そう言って甲児達はまた再会を喜んでいた
其処へ

「久しぶりね、甲児くん」
「さやかさん！」

甲児のパートナーであり現光子力研究所所長の弓教授の愛娘である
さやかが甲児の元へやってきた

「あれから1年振りね、甲児くん」
「ああ、そうだな。さやかさんも元気そうで何よりだよ」
「フフフ、有難うね甲児くん」

さやかがそう言ってニッコリと笑う
それを見て甲児が少し頬を染める

「ぬぬぬ～～～、兜の野朗・・・さやかと良い雰囲気造りやがって
～～～」

ボスがそんな2人を見て悔しそうな顔をする

「ボシュ～～、男のジェラシーはみっともないでしゅよ～」
「そうだぜぇ、あの2人はもう出来てるみたいだしさぁ」
「うるせぇ！俺だってなぁ・・・俺だってなぁ・・・可愛い子ちゃ
んにもてたいだわさぁ！」

と言って悔しそうにするボス
それを見て鉄也達は溜息を漏らす

「そういやぁ、鉄也」
「何だ？」

隼人が鉄也の方を向いて聞いてきた
それに何事かと思い鉄也は振り向く

「お前この間ジュンに何かプレゼント渡してたじゃねぇか。あれ何なんだ?」
「!!!・・・何故それを（汗」

鉄也が冷や汗をかきながら数歩下がった
それを聞きつけて他の皆が擦り寄る

「何々!鉄也さんジュンさんに何かプレゼントやったのか」
「鉄也さんもやるようになったわねぇ」
「あの堅物がなぁ」
「それは初耳だなぁ」
「一体何を送ったんだ?」

と、一斉に質問攻めにあっていた
それには流石の戦闘のプロもタジタジであった
壁を背にどう対応したら良いのか困り言葉に詰まっていた
すると

「あらあら、どうしたの皆で」
「あ!丁度良い所に」
「丁度良い?一体どうしたの?」

褐色の肌をした女性炎　ジュンが首を傾げた

「なぁジュンさん!こないだ鉄也さんに何かプレゼント貰ったみたいだけどさぁ」
「一体何貰ったんだ!まさか・・・ゆ・・・ゆび・・・」

「ああ！あれね」

ジュンは思い出したかのように手を叩くと、腰に挿してあるホルスターから1丁の銃を取り出した

「これよ」
「はぁ？」
「プレゼントって・・・」
「拳銃！？」
「なぁんだ」

それを見て一同は深く溜息を漏らした
恐らく予想を反してかなり地味だったのだろう

「まぁ、鉄也さんだってジュンさんにプレゼントを渡す位は出来たって事じゃないのか？」
「フッ、成長したな鉄也」
「そ・・・そうなのか？／／／」

鉄也は頬を染めながら視線を逸らしていた
すると其処へ

「いやぁ待たせたね」

遅れて弓教授がやってきた

「遅いですよ教授」
「そういわんでくれ、私ももう良い年なんだからそうそう早くは走れんよ」

額に浮ぶ汗をハンカチで拭いながら言った
それを見て皆が苦笑いを浮かべる

「それはそうとお父様、今回の実験は一体何なの？」
「うむ、実はかねてより早乙女博士や宇門博士と共同で研究してたこの「転移装置」がやっと完成したのでね、そのテストをしたいと思って呼んだんだ」
「それは本当ですか？教授」

甲児が飛び上がりそうになる

「まだテストを行った訳では無いので何とも言えないが、少なくとも安全性は保障出来ると思うよ」
「なぁ、転移装置って一体どんなもんなんだ？」
「分かり易く言えばテレポート装置みたいなもんさ」
「へ～、そりゃすげぇな」
「ああ、これを使えばフリード星に行く事も出来る筈だぜ」

甲児は自分で言った言葉にふと思い出した
かつてこの中にもう一人仲間が居たのだ
名前を「デューク・フリード」甲児の異星の友人であり掛け替えの無い仲間である
地球人の名前は「宇門　大介」といい、宇宙科学研究所の宇門博士の養子でもある
今は妹のマリアと共にフリード星の復興作業をしている筈である

「俺の宇宙船の完成はあと数年は掛かるからコレを使えば少しの人数だけど転送出来る代物なんだ」
「まだ試作型だからそれ程多くは転移出来ないがね」
「それでも凄いわお父様！」

「よっしゃぁ！んじゃ早速フリード星に行ってマリアちゃんに会いに行こうぜぃ！」
「まぁまぁ待ちたまえボス。君達転移する際にはロボットに乗ってくれないか？後、さやかとボス達は念のために宇宙服を着用していくんだ」
「え？どうしてなの？お父様」
「もし何らかの事故が起こって宇宙空間に投げ出されたら甲児くんたちは平気だがさやかやボス達は一溜まりもないからね」
「確かに、ボスボロットって、居住性は抜群だけど機密性はゼロだからなぁ」
「最悪ボスボロットで寝泊り出来るからな」
「夏とか蚊が五月蝿そうね」
それを聞いて一同がドッと笑う

＊＊＊

「それじゃ、皆、準備は良いかい？」
弓教授が装置のコントロールパネルの前に立っていた
そして、装置の前にはマジンガーに乗った甲児達が立っていた
「何時でも良いですよ教授」

甲児が通信でＯＫを送る

「では装置を起動させるよ」

そう言って弓教授が装置のスイッチを押す
すると装置から凄まじい電流が走りマジンガー達を包み込む
だが、甲児達が感電することは無い
そのように造られているからである

「さぁて、久しぶりに大介さんに会いに行くか」
「そう言って甲児くんも本当はマリアちゃんに会いたいんじゃないの？」
「さ・・・さやかさん、凄く目が怖いんですけど（汗」
「フフフ・・・フリード星についたら少し頭を冷やさせてあげるわね」
「ヒエェェェェ」

「フッ、相変わらずみたいだなあの２人は」
「そうね」
「・・・・・」
「どうしたの？鉄也」
「あ！い、いや・・・なんでもない・・・」
「？？？・・・そう」

「さて、これが俺達のゲッターの乗り納めだな」
「フッ、流石にそう思うと名残惜しい物だぜ」
「全くだな」

「は～やくあ～いた～いな～、マ～リアちゃ～ん♪」

（お・・・音痴だ・・・）
（これ・・・ずっと聞いてなきゃならないの？）

等など、機体の中ではそれぞれが会話をしていた
その時、装置を見ていた弓教授の顔色が変わった

「な、何だこれは！・・・座標が・・・・変わっていく」

そう、初めはフリード星に座標を送っていたはずが、勝手に座標が
変わり、全く別の星に座標が移っていたのだ

「何だ？この星は？見た事が無いぞ」

急ぎパネルを操作してテストを中止しようとしたが、それを激しい
電流が遮る

「ぐっ！」

その勢いで弓教授は吹き飛ばされる

「教授！」
「お父様！」

明らかに異変に気づいた甲児達はすぐさま助けに向かおうと機体を
動かした
だが、

「う・・・動かん」
「ど・・・どうなっているんだ？」
「おい・・・このままだとやばくないか」

「おいおい冗談んだろう（汗」
「ヒエ～～～～、死にたくないだわさ～～～～」
「畜生！俺達はどうなっちまうんだ！？」

甲児はマジンガーの中で激しく愚痴った
やがて彼らの視界は激しい閃光に包まれてしまった

＊＊＊

それから暫くして、弓教授は目を覚ました
そして、装置を見て驚愕の声を上げた

「甲児くん・・・さやか・・・それに皆は・・・」

何と、其処には無傷の装置しかなく、さっきまで其処にいた甲児達の姿は何処にも無かったのだ
弓教授は急ぎ装置を見た
すると、其処には転移したであろう星らしき名前が書かれていた

『ミッドチルダ』と

序章（後書き）

リリカルキャラは多分次に出します

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編開幕　出会い（前書き）

今回甲児とリリカルキャラが鉢合わせ
そして、何とあの男が登場します

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編開幕　出会い

甲児
「う・・・此処は・・・」

目を覚まして甲児は起き上がった
そして周りを見て甲児は驚愕した

甲児
「ど、どうなってんだ?俺は確か光子力研究所に居た筈なのに・・・
それに・・・此処はフリード星じゃねぇぞ!」

そう、今甲児の目の前に広がっているのはかつて見たフリード星とは違った世界であった
そして、何より驚いたのが

甲児
「それより・・・どうして俺一人なんだ?俺確かマジンガーに乗ってた筈なのに・・・何で俺一人だけこんな所で寝てるんだ?」

頭が痛くなってきた
一体此処は何処で皆は何処に居るのだろうか
頭を抑えながら甲児は空を見上げた
すると更に甲児は驚いた

甲児
「な、なんだありゃ!」

何と空では人が空を飛んでいるのだ

信じられない光景であった
人が何もつけずに空を飛ぶなど甲児の世界では・・・ましてやフリード星でも無理な事である
すると、この星は相当高度な科学技術の発達した星なのだろう
そう甲児は思えた
すると、付近の草むらから何かが近づく音が聞こえた

甲児
「誰だ！」

甲児は草むらを見た
今甲児は武器と呼べる物を持ってない
甲児は咄嗟に構えた
何時草むらから何かが襲ってきても対応出来るようにである

だが、一向に草むらから何かが出てくる気配が無い
それどころか、草むらから妙なひそひそ声が聞こえてきた

？？？
「どうすんのよスバル！あんたのせいで見つかっちゃったじゃない！」
？？？
「ごめ～んティア！ちょっとドジ踏んじゃって」
？？？
「謝って済む問題じゃないでしょうが（怒」
？？？
「ふぇ～ん、でも～」

詳しい内容は分からないがとにかく何かが甲児には聞こえた

甲児は咄嗟に足元に落ちていた手ごろな大きさの石ころを拾うと、
主室に草むらに投げつけた
ゴチンと言う音と「イダッ」と言う声が聞こえた
声色からして少女の声である

甲児
「あり？女の子！」

草むらから女の子の声がしたので甲児は驚いた
すると、草むらから青い髪のショートカットの髪型に白い鉢巻を巻いた少女が頭に大きなタンコブを付けて半泣きの状態で立ち上がりその横からオレンジ色のツインテールの髪型の少女が不機嫌そうに立ち上がった

？？？
「うう～～、痛いよ～～」
？？？
「はぁ～～、只石がぶつかっただけじゃないの。そんなに痛いわけ・・・ってうわ！でっかいタンコブ」
？？？
「触らないでね、結構痛いから」

２人がそんな会話をしていた
それを見ていた甲児は

甲児
「ええと・・・その・・・とにかく、すまん！」

と、とりあえず謝る事にした

？？？
「ああ、気にしないで下さい。コイツはこう見えて結構頑丈ですから」
オレンジ色の髪の少女が親指で青い髪の少女を指差した
？？？
「酷いよぉティア～、コレ結構痛いんだからねぇ」
青い髪の少女は更に涙目になって訴える
そんな少女の顔を見ると甲児の中に罪悪感が芽生えた
あの時石を投げたのは自分だからだ
その為に目の前の少女は大粒の涙を流しているのだから
甲児
「そ・・・そのぉ・・・やっぱ謝るわ・・・本当に悪かった」
？？？
「え？・・・えっと・・・これはご丁寧にどうも（汗」
？？？
「って、何あんたも釣られて謝ってるのよ」
青い髪の少女が甲児に釣られて謝ってるのを見てオレンジの髪の少女がその少女の頭をゴチンと殴る
少女は再び頭を抑えて蹲る
そんな少女を放っておいてオレンジの髪の少女は甲児の方を見た
？？？
「突然ですが？貴方は一体何者ですか？此処で何をしてたんですか？」

明らかに警察の職務質問であった
いきなりそんな事を聞かれたので甲児は眉を引くつかせる
だが、すぐに気を取り直して口を開く

甲児
「俺は兜　甲児ってんだ。そんな事より、此処は一体何処なんだ？
フリード星じゃないのは分かるけど」
？？？

「フリード星？聞いた事無い星ねぇ」
甲児
「聞いた事ないだって！！」
？？？

「ええ、残念ですけどそんな名前の星は聞いた事が無いわ」
甲児
「そうか・・・ってか、あんた等何者なんだ？しかもそんなへんちくりんな格好して」

甲児は２人が着ている服装を見た
オレンジの髪の少女の服装はギリギリ何かの組織の服に見えたが、
青い髪の少女の服装は何処かのダンサーのようにも見えた
しかもヘソ出しである
甲児はふと目のやり場に困った
それに青い髪の少女が首を傾げる

ティアナ
「そうですね、こちらが聞いたのに名乗らないのは筋違いですし・・
・私は『古代遺物管理部　機動六課』所属のティアナ・ランスター
二等陸士と言います・・・それで、こっちで蹲ってるのが」

ティアナはすぐ隣で未だに蹲ってる青い髪の少女を小突いて起す

ティアナ
「ほらスバル！あんたも自己紹介」
スバル
「あ、は、はい！同じく機動六課所属のスバル・ナカジマ二等陸士です！」

ビシッと敬礼のポーズを取ってスバルが自己紹介をする

甲児
「古代遺物管理部　機動六課？聞いた事無い組織だなぁ」

甲児は首を傾げた

スバル
「甲児さんはひょっとして地球出身なんですか？」
甲児
「出身って・・・此処地球じゃ無いのか？（当たり前だけど聞いてみるか」

そう思いながら甲児が聞いた

ティアナ
「此処はミッドチルダと言いまして、甲児さんの言う地球とは簡単に言うと別の星になりますね」
甲児
「成る程・・・と言うと此処は異なる星って事になるんだな」

冷静に分析する甲児を見てティアナは驚いた
普通なら混乱したり騒ぎ出したりする筈なのだ

それなのに目の前に居る甲児はそんな素振りを一切せずにぶつぶつと呟いている

ティアナ
「あ・・・あの・・・甲児さん」
甲児
「何だ？」
ティアナ
「その・・・不安じゃないんですか？」
甲児
「確かに不安もあるさ、けどこうして地球以外の星でこうして交流が持てると分かると逆に嬉しくて仕方ないんだよ」
スバル
「ああ！その気持ち私も分かります！異星の友達って事ですね！」
甲児
「そうそう、お前中々話が分かるじゃねぇか」
スバル
「そ、そうですか？・・・／／／」

甲児に褒められスバルは頬を染める

ティアナ
「甲児さんは地球では何をしてたんですか？」
甲児
「俺は『マジンガーZ』のパイロットをしてたんだ」
ティアナ
「マジンガー・・・・？」
スバル
「何ですか？それ」

2人はキョトンとした顔をしていた
そんな2人を見て甲児が逆に驚く

甲児
「お、お前ら・・・マジンガーを知らねぇのか?」
ティアナ
「は、はい・・・」
スバル
「以前見せて貰った資料にはそんな事書いてありませんでしたし・・・」
甲児
「どうなってんだ?」

甲児は眉を顰めた
地球の事を知ってるならマジンガーの事も知ってるだろうと思ったからだ
だが、目の前に居る2人はそのマジンガーを聞いても首を傾げるだけである
其処で甲児はふと気づいた

甲児
「もしかして・・・此処って異世界なのか?」
ティアナ
「え?・・・という事は」
スバル
「甲児さんって・・・『次元漂流者』なんですか?」
甲児
「次元漂流者?」
ティアナ
「簡単に言うと迷子の事です」

甲児
「参ったなぁ・・・」

甲児はバツの悪そうな顔で頭を掻いた
もしそうなら他の皆が何処に行ったのか皆目検討もつかない
それは少し不味い事である

甲児
（まさか異世界に飛ばされるとはなぁ・・・しかも皆と逸れちまったみたいだし、どうするかなぁ）

甲児が難しい顔で腕を組んでいた
すると

？？？
「何難しい顔しとるんじゃ？甲児」
甲児
「ん？」
ティアナ・スバル
「へ？」

突如老人の声が聞こえた
甲児は辺りをキョロキョロしだした
そう、その声は甲児自身何処かで聞いた事のある声だったからだ
スバルとティアナの２人もその声の主を探した
そして、甲児の肩に何かが乗ってるのに気づいた
だが、その肩に乗ってる者を見た途端

スバル・ティアナ
「キャアアアアアアアアアアアアアア」

と、大声で叫んで物凄い距離を下がった

甲児
「な、何だ2人共！俺に何かついてるか？」

スバル
「こ、こここここここ甲児さささささささん」

ティアナ
「かかかかかかかかか肩のうううううう上に」

明らかに何かに怯えるように甲児の肩を指差す
スバルはティアナの後ろに隠れており
ティアナは何時の間にか両手に銃を構えており銃口を向けているが、
手元が震えている

甲児
「へ？肩？」

そう言われて甲児は自分の肩を見た
其処には

？？？

「ハロー、甲児！久しぶりじゃのぉ」

甲児
「お、お爺ちゃん！！」

そう、甲児の肩に乗っていたのは何と死んだ筈の甲児の祖父「兜十蔵」であったのだ
だが、違う所と言えばその背丈がおよそ３０ｃｍ位しか無い事である

甲児
「ってか、ちっさ！何でこんなに小さいんだ？お爺ちゃん」

肩に乗ってた十蔵を手にとって甲児が聞いた
それを聞いていた2人は

スバル
「え？その人甲児さんのお爺さんなんですか？」
甲児
「ああ、兜　十蔵って言って俺の家族なんだ」
ティアナ
「す、凄い顔怖いんですけど（汗」

明らかに怯えた目線で十蔵を見る
そりゃそうだ
普通の人が見たら腰を抜かしそうな程の強面なのだ
だが、その2人に見られた十蔵は

十蔵
「いや～～～ん、そんなに見つめちゃ駄目じゃよ～～」

と、体をクネクネさせながら言う
それを聞いた3人は思い切りズッコケル

甲児
「お、お爺ちゃん！気の抜ける言い方は止めてくれ！」
スバル
「な、何か面白いお爺ちゃんだねティア」
ティアナ
「そ・・・そうね・・・（汗」

よろよろと起き上がりながら一同は十蔵を見る

十蔵
「しかし、甲児よ。お主も中々やるのぅ」
甲児
「はぁ？何がだよお爺ちゃん」
十蔵
「惚けおって！さやかやマリアちゃんと言う可愛い子ちゃんに惚れられてるのに其処にまたこんな可愛い子ちゃんと知り合いになりおって」
甲児
「はぁ？」

甲児は目を見開いた
どうやら十蔵には甲児とティアナ達が仲良さそうに見えたのだろう
確かに今こうして見ると2人共結構可愛い顔付きをしている
こんな所をさやかさんに見られたらどうなるだろう

甲児
（きっと殺される・・・）

甲児は途端に青ざめる
それ程までに女の嫉妬は怖いのだ

十蔵
「まぁ、2人共ボインちゃんじゃからワシはＯＫじゃが・・・う～む、これまた趣味が分かれるのぉ」
スバル
「へ？」

ティアナ
「な、何ですか？」
十蔵
「う～む、ヘソだし天然っ娘か、ツインテールのツンデレ・・・う～む、どちらも捨てがたいの～」
スバル
「へ・・・ヘソだし・・・／／／」
ティアナ
「つ・・・ツンデレ・・・（汗」

十蔵の言葉にスバルは顔を赤く染めティアナは呆れる

甲児
「お爺ちゃん、いい加減にしてくれ」

甲児はそんな十蔵を掴み上げる

十蔵
「何じゃ甲児！自分だけもておって！ワシだってあと７０年若かったら早速ゴーゴーヘＧＯじゃったのに」
甲児
「お爺ちゃんもう死んでるだろう！それに今時ゴーゴーって知ってる人も少ないぞ！俺良くやってるけど」

ゴーゴーを知らない人は劇場版「マジンガーＺ対暗黒大将軍」を見てください。冒頭で甲児達が踊ってます

スバル
「え！十蔵さんって・・・死んでるんですか？」

スバルが十蔵に聞く

十蔵
「いや～ん、十ちゃん♪って呼んでぇ」

スバル
「ええっと・・・十・・・ちゃん（汗」

十蔵
「ＯＫ！その恥じらいながらも言う所何か点数高いよ穣ちゃん」

グッと親指を立てて言う十蔵

スバル
「あ、有難う御座います」

褒められたのが余程嬉しかったのか頭をペコリと下げて礼を言う

甲児・ティアナ
「言わんで良い！」

そんなスバルにティアナと甲児のツッコミが炸裂する

十蔵
「んまぁ質問なんじゃがなぁ・・・確かにわしゃ死んだな。うん、一度な」

ティアナ
「それじゃ何で・・・しかもこんな小さなサイズに・・・」

十蔵
「うむ・・・どうやらワシは御主らが持っとるような『デバイス』と言う物になってしもうたようなんじゃ」

甲児

「デバイス？何だいそれ？」

甲児が首を傾げる

スバル
「ええと、簡単に言うとコレですよ」

そう言ってスバルは自分の腕に装備されたデバイス「リボルバーナックル」を見せる

甲児
「へ～、まるでマジンガーの腕だなぁ、なぁ、これって腕飛ばせるのか？」
スバル
「え？それはちょっと無理ですけど・・・（汗」
甲児
「あっそう・・・悪い、気にするな（汗」

余程気まずい事を聞いてしまったのか甲児が謝る

ティアナ
「スバル、それじゃ分からないでしょうが！ったく、私が説明します」

ティアナがデバイスの説明をする

ティアナ
「デバイスとは私達魔道士が魔法を使用する際にその補助的役割を担う道具で種類としては『インテリジェントデバイス』『アームドデバイス』『ストレージデバイス』『ユニゾンデバイス』『ブース

トデバイス』の5種類があるんです」
甲児
「へぇ、結構種類があるんだなぁ」

甲児は種類の多さに驚く

十蔵
「んで、ワシはその中のユニゾンデバイスになっとる訳じゃな」

十蔵は胸を張って言う

甲児
「ユニゾンって事は・・・誰かと融合出来るってのか？」
十蔵
「勿論じゃ！まぁ誰と融合出来るとかは知らんがな・・・まぁワシとしてはそこの可愛い子ちゃん達と融合したいんじゃがなぁ」
スバル
「ひぃっ！」

十蔵が二ヒヒと笑いながら二人を見る
スバルはその視線に怯え再びティアナの影に隠れる
ティアナも同様に少し怯え気味である
そんな2人を見て十蔵は少し落ち込む

十蔵
「そんなにワシの顔って怖い？」
甲児
「だ、大丈夫だよお爺ちゃん！2人共少しビックリしてるだけだからさ」

落ち込む十蔵を甲児が必死に慰める
すると

？？？

（スバル！ティアナ！聞こえる？）
スバル・ティアナ
（なのはさん！）

２人がとある方向に視線を向ける
甲児はその２人の変化に気づき同様に二人の方を向いた
だが、何も無い

甲児
（何だ？）

甲児は何があるのか理解出来ず首を傾げる

？？？

（今こっちで次元漂流者を保護したの。そっちは？）
ティアナ
（はい、こっちでも一人次元漂流者を保護しました）
スバル
（後その人にはユニゾンデバイスが一緒でしたよ）
？？？

（え？ユニゾン？）
スバル
（はい、凄く怖い人でしたけど（涙））

スバルはちらりと十蔵を見た
やっぱり改めて見るとかなり怖い

そう思いながら見ると十蔵がスバルの方を見る
本人は只見ただけなのだろうが、顔の位置とか影のかかり具合から
スバルには睨みつけてるように見えた
それを見たスバルが途端に青ざめてまたティアナの影に隠れる
それを見たティアナが溜息をつく

???

（とにかく、今からそっちに合流するから付近の安全を確保しておいてね）
スバル・ティアナ
（了解！）

会話を終えたのか2人が甲児の方を向く

甲児
「なぁ、さっき何してたんだ？」
ティアナ
「今のは念話と言いまして、簡単に言うと・・・」
甲児
「テレパシーの一種みたいなもんだな」
スバル
「え？分かるんですか？」
甲児
「まぁ、予想だけどな」
ティアナ
「簡単い言うとその通りです」
甲児
「マジか、そりゃ便利だなぁ」

甲児は心底そう思った

十蔵
「何じゃ！念話位ならわしにも出来るぞぉ！」
甲児
「本当かい？お爺ちゃん」
十蔵
「おう、任せろい！」

グッと親指を立てて十蔵が言う
すると十蔵は腕を組んで難しい顔をしだす
そして、暫くすると

十蔵
（甲児・・・甲児・・・）
甲児
「ん？・・・何か頭の中に声が・・・」
十蔵
（甲児・・・聞こえるか甲児）
甲児
「ああ、聞こえるぞお爺ちゃん」
十蔵
（よし、成功じゃな）

十蔵がグッと拳を握って頷く

十蔵
（ほんじゃ次は・・・）

十蔵は今度はスバルとティアナに念話を送る

十蔵
（スバルちゅわ～～ん、ティアナちゅわ～～ん、聞こえますか～～）
スバル
（は・・・・はい（汗）
ティアナ
（き・・・聞こえます（汗）

気の抜けるような声で言われた為二人の顔が引き攣る

甲児
（お爺ちゃん・・・本当に気が抜けるから止めてくれ）
十蔵
（なんの何の、本当に気を抜くのは此処からじゃぞぉ）

そう言って十蔵が念話を続ける

十蔵
（実は・・・甲児は小学6年生の時までオネショをしてたんじゃ）
甲児
「んなっ！！！！！」
スバル
「こ・・・甲児さんが・・・」
ティアナ
「そ、そんな事が・・・」

突然十蔵は念話で甲児の恥ずかしい過去を話し出す
因みに元ネタは4コママンガなので事実かどうかは知りません

甲児

「お、お爺ちゃん！いきなり何言い出すんだよ！」

自分の恥ずかしい過去を暴露されたので甲児の顔は滅茶苦茶赤くなる

十蔵
（好みの女の子は胸がボインでスラッとしたボディラインの娘で～、甲児が１６の頃は良くクラスメイトの女の子のスカートを捲ってたそうじゃぞぉ）

スバル
「ぼ・・・ボイン／／／」

ティアナ
「す・・・スカートを／／／」

スバルは咄嗟に自分の胸元を隠しティアナはスカートの裾を押さえる

甲児
「ちょっと待てえええええええええええええ！何でお爺ちゃんが知ってるんだあああああああああああああ！」

甲児が怒鳴る

十蔵
（そんで極めつけが・・・何と甲児のベットの下には大量の・・・）

甲児
「わあああああああああああああああああああああああああああああ！止めろおおお

十蔵
「とまぁ、こんな感じじゃな」
甲児
「こんな感じじゃな・・・じゃねえええええええええよ！何人の恥ずかしい過去を暴露してるんだよおおおおおおお！」
十蔵
「過去とはいずれ明かされるもんじゃろ」
甲児
「だからって初対面の女の子に言う事じゃねえだろう！もっと時と場所を考えてくれよおじいちゃん」
十蔵
「いやぁ、めんごめんご」

謝ってはいるが顔は明らかに悪びれた様子が無いむしろしてやったりと言った感じの顔である

スバル
「ええと・・・甲児さん」
ティアナ
「そんなに落ち込む事無いですよ」
甲児
「スバル・・・・ティアナ」

気を落とした甲児に優しく言葉を掛ける2人
そんな2人に甲児はジーンと胸を打たれる思いがした
そして2人の方を見ると、2人は甲児から結構距離を離していた

甲児
「おい・・・何でそんなに距離を置いてるんだ？」

スバル
「と・・・特に理由はありません」
ティアナ
「そうです！別に甲児さんを警戒してる訳じゃありませんから」
甲児
「嫌、思い切り警戒してるじゃねぇか！説得力ゼロだぞそれ」

甲児はそう言って更に落ち込む
そんな甲児に十蔵が優しく声をかける

十蔵
「まぁそんなに落ち込むな甲児、世の中色んな事があるさ」
甲児
「恨むぞ糞爺」

明らかに態度を変えた甲児
すると其処へ

？？？
「貴様等其処で何をしている」
甲児
「あん？」

甲児は声のした方を見る
其処には西洋風の鎧を見に纏った兵士が立っていた
明らかに好意を持って聞いてきたようには見えない
むしろ嫌な気がする

甲児
「此処に居ちゃ不味いのか？」

？？？
「ああ、不味いな。さっさと消えて貰おうか」
甲児
「へ、随分上から目線だな。てめぇ何様だ？」
？？？
「何だと？」

鎧の兵士と甲児が睨みあう
２人の視線の間に激しい火花が散る

スバル
「ちょっと、甲児さん！」
ティアナ
「いきなり喧嘩越しは駄目ですよ」

そんな甲児を２人が止める

？？？
「何！甲児だと！」

兵士が甲児の名を聞いた途端驚く

甲児
「何だ？そんな珍しい名前か？」
？？？
「貴様！名前は何と言う」
甲児
「俺か？俺は兜　甲児だ」
？？？
「兜　甲児・・・遂に見つけたぞ！」

そう言うと兵士は腕を振り上げた
するとその兵士の後ろから続々と兵士が現れる
その数は実に２０人は居る

甲児
「うげぇ、良くそんな暑そうな服着てられるなぁ（汗」

今時期的に夏らしく結構暑い
そんな時に鎧を着込んでいるから見てるこっちも暑くなりそうである

？？？
「兜甲児よ、我等が王が貴様を御所網だ！一緒に来てもらおうか」

兵士が甲児を指差す

甲児
「嫌だと言ったら？」
？？？
「少々痛い目にあって貰う」

そう言うと兵士達は一斉に武器を構える

スバル
「甲児さん！此処は私達が食い止めます！」
ティアナ
「甲児さんは今の内に安全な場所に避難して下さい」

甲児を守るようにスバルとティアナが陣取る
だが、

甲児
「おいおい、女の子に戦わせて自分は尻尾巻いてとんずら何か出来る訳ねえだろう」

そう言って甲児は2人の前に立つ

甲児
「丁度人暴れしたかったところだ、纏めて面倒見てやるから来やがれ！」
スバル
「え？ちょっと、甲児さん！」
ティアナ
「危険ですよ！早く避難して下さい！」

喧嘩越しに兵士達を見る甲児に2人が言う
だが甲児は

甲児
「心配すんな、こう見えても喧嘩は強い方だからよ」
スバル
「へぇそうなんですか・・・ってそうじゃないですよ！早く避難して下さいってば！」
甲児
「さぁどうした！さっさときやがれ」

甲児は腕で手招きの動作をする

？？？

「其処まで言うなら来てやろう！良いか、男は手足を切断しても構

わん！生きたまま捕らえろ！女共は用は無い！この場で殺せ！」

兵士が指示すると、他の兵士達が一斉に向かってくる
内何人かの兵士が甲児に向かって切りかかるが

甲児
「おせぇ！」

甲児は剣が振り下ろされる前にその兵士に向かって飛び蹴りを放つ
蹴りは顔面に命中し、兵士の頭はブチブチと音を立てて千切れた

甲児
「ありゃぁ、何だこりゃ」

甲児は千切れた断面を見た
其処には機械のコードが火花を散らしていた
どうやら中身は全て機械のようである

甲児
「へ、相手が機械ならやりやすいってもんだぜ！」

甲児は倒した兵士の剣を奪うと猛然と切りかかるまず手前に居た何人かの兵士を横薙ぎに切り払う
兵士達は胴体から真っ二つに切られ、切断面からはオイルが血のように噴出す
その後後ろから飛びかかってきた兵士には剣を後ろに回って突き刺す
そして思い切り振り回して投げ飛ばす

甲児
「どうした！そんなもんかぁ？それじゃ鉄火面や鉄十字兵の方が強

かったぜぇ！」

そう叫びながら更に兵士を倒していく

スバル
「す・・・凄い！甲児さんって・・・こんなに強いんだ」

ティアナ
「デバイスを装備してない民間人なのにこんなに強いなんて」

2人は甲児の戦い振りい唖然としていた
それ程までに甲児の戦い振りは凄まじかったのだ
まるで鬼か修羅である

？？？
「ええい！こうなったら一斉に飛びかかれ！」

今度は残りの兵士が一斉に甲児に向かって飛びかかってきた
流石にそれだけの数を相手にするのは少し厳しい
そう思った時

ティアナ
「クロスファイヤー・シュート！」

スバル
「リボルバー・シュート！」

甲児の後方からオレンジと青い色の光の弾丸が飛んできた
光の弾丸は殆どの兵士を倒す
甲児はその弾丸の被害を免れた残りの兵士を切り払う
そして弾丸を撃った者達を見る
その後ろでは自作の拳銃型デバイスを構えたティアナとリボルバー

ナックルを構えて立っているスバルの姿があった

甲児
「へぇ、お前等結構やるじゃん」
スバル
「えへへ、そうですか？／／／」
ティアナ
「これ位軽い物ですよ」

スバルは甲児に褒められて嬉しそうに頬を染め、ティアナも少し嬉しそうに答える

？？？
「ば・・・馬鹿な・・・我等機鋼兵がこうもあっさりと・・・」
甲児
「残るはてめぇだけみてぇだな」

甲児は怯える兵士に剣を突き立てる
そしてギロリと睨みつける
その視線に怯えた兵士が尻餅を付く
その様は余りにも無様であった

甲児
「さぁ答えて貰おうか？何で俺を狙う！王ってのは誰だ！」

甲児は尋問するかのように兵士に聞いた
だが、兵士は答えない

甲児
「答える気が無いなら腕の一本斬っても良いんだぜ」

???
「ひいいいいいいい!言います!言いますからそれだけは・・・ぐえ!」

突如兵士が苦しみ出した

甲児
「お、オイ!どうした?」
???
「ぐ・・・ぐるじい・・・だ・・だずげでぐでえええええええええええええええ」

まるで息を止められてるかの如く苦しんだ後、兵士は事切れた
そして、その兵士の後ろには黒と紫のローブを身に纏った男・・・
女が居た

???
「ふん、役立たずめ」

ローブを纏った人間がはき捨てるように言う
甲児はそのローブの人間を見た

甲児
(なんだ?こいつ・・・以前何処かで会ったような気がするぞ)

甲児はそのローブの人間に妙な感じを覚えた
其処へ、

スバル
「甲児さん!」

ティアナ
「大丈夫ですか?」
甲児
「ああ、俺は大丈夫だ!・・・それより」

甲児達はローブの人間を見る

甲児
「てめぇ、何者だ!」
???
「フフフ、冥土の土産に教えてやろう・・・私は機鋼獣指揮将軍のシュラだ」

そう言ってフードから顔を覗かせた
その顔は半分が男、そしてもう半分が女の顔をした化け物であった
そんな顔の化け物を見た途端スバルとティアナは血の気が引いた感じがした
だが、甲児は

甲児
「てめぇ!あしゅら男爵!生きてやがったのか?」
シュラ
「あしゅら?誰だそれは?私は機鋼獣指揮将軍の・・・」
甲児
「御託は良いんだよ!一体何時蘇ったんだか知らねぇが、また地獄に叩き落してやるぜ!」
シュラ
「ほざけ!いでよ!機鋼獣『モルモットン』よ」

シュラが手に持っていた杖を振り上げる

すると大地を揺るがし地面から巨大なロボットが姿を現した

ティアナ
「な、何あれ？」
スバル
「で・・・でっか～～」

スバルとティアナは余りの巨体さに度肝を抜かれた
そして甲児は

甲児
「な、何だありゃ！機械獣のパチモンかなんかか？」

甲児はそう思った

シュラ
「機鋼獣モルモットンよ！兜　甲児を捕らえよ！他の魔道士は踏み潰してしまえ！」
モルモットン
『グギャアアアアアアアアアアアア』

モルモットンは雄たけびを上げながら甲児に向かって拳を振り下ろした

甲児
「うおわ！」

咄嗟に甲児はかわす
その直後、凄まじい振動と地響きが響く
見ると、巨大な機鋼獣の腕が地面にめり込んでいたのだ

甲児
「何が捕らえるだ！完全に俺を殺す気じゃねぇか！」

甲児が愚痴る
だが、そんな甲児に向かって再び手を伸ばす

ティアナ
「甲児さん！クロスファイヤーシュート！」

ティアナは機鋼獣に向かって先ほどと同じクロスファイヤーシュートを放つ
オレンジ色の弾丸は全て機鋼獣モルモットンに命中する
だが、全て命中したにも関わらずモルモットンは無傷であった

ティアナ
「そんな！無傷だなんて・・・」
スバル
「だったらこれで！」

スバルはリボルバーナックルを構えてカードリッジをロードする
すると足元に魔法陣が展開される

スバル
「一撃・・・必倒ォォォォ・・・・ディバイィィィィン・バスタァァァァ！」

スバルのリボルバーナックルから青白い閃光が放たれる
それは機鋼獣を包み込む

甲児
「すげぇ、何だよあれ！」
ティアナ
「あれも魔法の一種ですけど」
甲児
「あれが魔法！？嘘だろう！魔法って言ったら「テクマクマヤコン」とか「マハリクマハリタ」とか呪文を唱えて杖なりコンパクトなりを使うんじゃねぇのか？」
ティアナ
「何の話ですか（汗」

ティアナが呆れる
そして、ディバインバスターの閃光が消えて、辺りを煙が覆い隠す

甲児
「やったか？」

誰もそう思った
だが、煙から突如機鋼獣の腕が飛び出した

甲児
「どわぁぁぁぁぁ！」

突然の事だったので完全に隙をつかれた
幸い捕まる事は避けたが煙が晴れると其処には、やはり無傷のモルモットンが居た

ティアナ
「そんな・・・スバルのディバインバスターを食らって無傷だなんて」

甲児
「ちっ見た目に反して結構頑丈じゃねぇか」

ティアナは青ざめて甲児は舌打ちする
ふと甲児はディバインバスターを撃ったスバルを見る
スバルは肩膝をついて結構苦しそうな表情を浮かべている

ティアナ
「スバル！」
甲児
「おい、大丈夫か？」

2人がスバルに近づく

スバル
「は・・・はい・・・けど・・・魔力を殆どあれに告ぎ込んじゃったんで・・・もうまともに動けなくて・・・」

どうやら先ほどの一撃で殆どの魔力をつぎ込んでしまったらしくかなりフラフラな状態である
だが、それでも機鋼獣はピンピンしている

シュラ
「ハハハ！やはり機鋼獣は無敵だ！貴様等魔道士など最早怖くは無いわぁ！」

その上では、何時の間にか小型の円盤に乗ったシュラが憎たらしく微笑む

甲児

「野朗・・・」

甲児はそんなシュラを恨めしく睨む

シュラ
「さぁ、機鋼獣よ！さっさとその男を捕らえて残りの魔道士を片付けてしまえ！」

機鋼獣は命令を受けると動けないスバルに向かって足を振り上げるそして思い切り振り下ろした

ティアナ
「スバル！」
甲児
「あぶねぇ！」

ティアナと甲児は咄嗟にスバルを抱えて走るその直後、背後にズシンと振動が響き渡った機鋼獣の足が深く地面にめり込んでいたのだ

スバル
「甲児さん・・・ティア・・・」
ティアナ
「全く、あんたは後先考えないんだから」
甲児
「立てるか？」
スバル
「さっきよりは大分楽になりましたから何とか立てます」

そう言って立つスバルの足はまだふら付いていた

甲児
（まだフラフラじゃねぇか・・・くそ！）

甲児は巨大な機鋼獣を見た
機鋼獣はまるで勝ち誇ったかのように雄たけびをあげている

甲児
「くそぉ・・・こんな時に・・・こんな時に・・・マジンガーがありゃぁあんな機鋼獣なんてぶちのめしてやるのに・・・」

甲児は拳を硬く握り締めた
握った拳からは血が滲み出る
機鋼獣が今度こそトドメを刺そうと拳を振り上げる

スバル
「甲児さん！ティア！此処は私が何とかしますから2人で逃げてください！」
ティアナ
「何言ってるの！そんな事出来る訳無いじゃない！」
スバル
「で、でも！」
甲児
「ばーろい！そう言うのは男の俺の役目だよ！」

そう言うと甲児は猛然と機鋼獣に向かって駆け出す

スバル
「あ、甲児さん！」

スバルは止めようと手を伸ばすが届かない

甲児
「やい！機鋼獣！」

甲児は機鋼獣の足元まで来ていた
機鋼獣は足元の甲児を見た

甲児
「このウスノロ！悔しかったら俺を捕まえてみやがれ！」

そう言って機鋼獣に向かってアカンベーをした
それを見た機鋼獣は甲児に向かって思い切り拳を振り下ろした

甲児
「おっと！」

だが、甲児はそれをひょいとかわす

甲児
「どうした？デカイだけで頭は空っぽなのかよ！この木偶の坊」

甲児は更に機鋼獣を囃し立てる
機鋼獣は更に激しく拳を突き出す
連続で拳を地面に叩きつけて甲児を捕らえようとする
が、全て甲児はかわしていく

甲児
「おいおい、機鋼獣なんてご大層な名前の割りにはそれしか芸の無いのかよ！もっと俺を楽しませろよ！」

余裕が出来たのか甲児が手招きをする
それに怒った機鋼獣であったが、ふと機鋼獣は別の方に視線を送る
その先には、フラつくスバルに肩を貸すティアナの姿があった

甲児
「まさか！」

甲児は嫌な予感がした
そしてそれは的中した
甲児を捕らえるのを一旦諦めて機鋼獣はスバルとティアナを片付けるのを優先したのだ

甲児
「不味い！二人とも逃げろ！」
ティアナ
「くっ・・・間に合わない」
スバル
「ティア！」

機鋼獣の拳が真っ直ぐ2人に振り下ろされた
そしてあわや直撃になろうとしたその時、

「ディバインバスター！」

突如、桜色の閃光が機鋼獣を吹き飛ばす

甲児
「な、今のは・・・ゲッタービーム？」

甲児は閃光の色を見てそう思った
だが、閃光を放ったのは予想を反していた
何と其処には、白い服を服を着た栗色の髪をした女性であったのだ
しかもその女性は空を飛んでいる

???

「2人共、大丈夫?」
スバル・ティアナ
「なのはさん!」

スバルとティアナは自分達を助けてくれた女性の名前を言う
無事なのを確認して女性は二コリと微笑む
其処へ、

甲児
「無事か?2人共」
スバル
「あ、甲児さん!」
なのは
「え?甲児さん?」

なのはは甲児と呼ばれる青年を見た

甲児
「ん?あんた・・・誰だ?」
十蔵
「うほっこれまた別嬪さんじゃのぉ」
なのは
「え?ユニゾンデバイス!?」

なのはは甲児の肩から現れた十蔵を見て驚く

十蔵
「いやぁ、これまたボインちゃんじゃのぉ！しかもミニスカートで生足チラリとはポイント高いぞぉ！」
なのは
「へ？・・・・」
甲児
「悪い・・・気にしないでくれ（汗」

甲児は話題についていけてないなのはにそう言うそして十蔵を少し下げて改めてなのはを見る

甲児
「俺は兜　甲児。あんたは？」
なのは
「私は高町　なのはと言います。二人がお世話になったみたいですね、代表してお礼を言います」
甲児
「なぁに、良いって事よ」

なのはに礼を言われて甲児は少し頬を染めるスバルとティアナも可愛いがこちらはそんな2人には無い女性らしさがあった
それが甲児の頬を染める要因であった
だが、その時再び轟音が響く
振り返ると、何と機鋼獣が立ち上がっていたのだ
だが、流石に無傷と言う訳では無く、装甲の所々がヒビ割れているなのは

「私のディバインバスターでも倒せないなんて・・・」
甲児
「ったく、頑丈さだけは一丁前だな」

甲児が愚痴る
そんな一同を見て機鋼獣は雄たけびを上げて腕を突き出す
すると、その腕が突如甲児達に向かって飛び込んできたのだ

なのは
「な！」
ティアナ
「嘘！」
スバル
「ええ！」
甲児
「なにぃ！」

４人は余りの突然の出来事に対応が遅れかわす事が出来なかった
幸いなのはが前に出て防御魔法を唱えたので直撃は避けたが、それ
でもかなりの衝撃が伝わってきた

甲児
「あの野朗・・・人の十八番をパクリやがって・・・」

甲児は怒った
そう、それは甲児の乗っていたマジンガーの十八番とも言える武器
の一つ「ロケットパンチ」に似ているのだ
だが、どうやらこれは撃ち終わりらしく、撃った後の腕はそのまま
大地に突き刺さっていた
そして、そのまま続けて残りの腕を放とうとした時、

？？？
「ダイアナンミサイル！」

突如２発のミサイルが空を切り機鋼獣に命中する
ミサイルは機鋼獣の腕を吹き飛ばし胴体に風穴を開けた
そして、機鋼獣はそのまま大地に倒れ暫く痙攣んした後爆発した

シュラ
「おおお！我等の機鋼獣が！」

シュラは機鋼獣が倒された事に驚愕した
甲児はあのミサイルを放ったのが何なのか予想出来た

甲児
「まさか・・・」

振り返ると、其処には青と紫を基調とした女性を模したロボットが立っていた
さやかの操る「ダイアナンＡ」である

さやか
「なのはちゃん！大丈夫？」
なのは
「さやかさん！」

なのははさやかの声に反応する

スバル
「え？なのはさん、それじゃさっき言ってた次元漂流者って」

なのは
「そう、彼女よ」
ティアナ
「ず・・・随分大きい女性なんですね（汗」

ティアナは再びダイアナンAを見上げる
その高さは２０m弱はある

なのは
「え？違うよティアナ、乗ってる人は普通の人だから安心して」
ティアナ
「そ、そうなんですか？」

ティアナは未だに疑いの感じを残していた
そりゃそうである
只でさえ信じられない出来事が連続して起こったのだから

さやか
「ところで、其処に居るのって」
甲児
「さやかさん！」
さやか
「やっぱり、甲児くん！」

さやかは足元に居る甲児に気づく
甲児も乗ってるのがさやかと気づいて少しホッとする

十蔵
「いやぁ、やっぱりさやかは綺麗じゃのぉ」
甲児

「お爺ちゃん・・・いい加減突然出てくるのは勘弁してくれないか」
流石にツッコミ疲れたのか甲児もツッコミに切れがなくなっていた

スバル
「ティア、そろそろ大丈夫だと思うから離しても良いよ」
ティアナ
「そう？」
スバル
「うん、多分大丈夫だから」

スバルが笑って言う
それにティアナは溜息をつきながらもそっと手を離す
スバルは自分の足で立とうとしたが、ふとした事でバランスを崩す

スバル
「あ！」
甲児
「あぶね！」

こけそうになるスバルを甲児が両肩を掴んで支える
そんな甲児を見てスバルの顔が赤くなる
だが、その行為こそ、甲児にとって最悪の事態になるとはこの時誰も予想していなかった

さやか
「甲児くん」
甲児
「ん？どうしたんださやかあああああああああああああああ
あああああ！」

甲児はさやかの乗ったダイアナンAを見て青ざめた
何故なら機体越しにも伝わる程のドス黒いオーラが漂っていたからだ

さやか
「随分と仲が良いみたいねぇ（ゴゴゴゴゴゴゴ」

さやかの言ってる事に甲児は自分がスバルの両肩を掴んでるのに気
づいてハッとして離す

甲児
「ご、誤解だ！さやかさん！俺は別にスバルとは何にも関係は持っ
ちゃいねぇから！」
さやか
「ふ～～～ん、スバルって言うんだ～～～、名前まで知ってるなん
て相当仲良くなったのね～」

さやかの効果音が明らかに変わった
背後のオーラが益々巨大になる
反対に甲児はどんどん小さくなる

甲児
「さ、さやかさん！これには深い深～～い事情があああああああ！」

甲児はティアナ達に助けを求めようと振り返った
だが、其処には既にスバルを避難させたティアナとなのはが真っ青
な顔になって離れていた
そして、何故か其処には十蔵の姿もあった

甲児

「お・・・お爺ちゃん？」
十蔵
「グッドラック！甲児」
甲児
「見捨てないでえええええええええええええええええええええ！」

甲児が十蔵に向かって手を伸ばす
だが、その後ろからドスンと地響きが響いた
恐る恐る甲児は振り返った
其処には鬼の形相になったさやかとダイアナンＡが立っていた

さやか
「甲児くん」
甲児
「は・・・はい・・・何でしょうか（ガクガクガクガク」
さやか
「少し・・・・頭冷やそうか」
甲児
「えっと・・・・許して♪」

ブチッ

さやか
「スカーーーーーーレットビーーーーーーーーーーム！」

ダイアナンＡの額からスカーレットビームが放たれた
それは真っ直ぐ甲児に直撃した
甲児

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

甲児は瞬く間にスカーレットビームに包まれてしまった
そして、黒こげになってその場に倒れた
そして、それをダイアナンAが思い切り踏みつける

さやか
「甲児くんの・・・甲児くんの馬鹿あああああああああああああああああああああ！」

泣きながらさやかはズシンズシンと甲児（であった物）を踏みつける
そんな光景をなのはとティアナは青ざめながら見ていた
そして十蔵は何時の間にかなのはの肩に乗りカッカッカと笑っている
そんでスバルは

スバル
「甲児さんと・・・仲良く・・・／／／／」

顔を真っ赤にしていた

出会い　終り

次回

甲児
機鋼獣モルモットンを倒した機動六課
だが、今度は更に強力な機鋼獣が現れる

パワーアップした機鋼獣に苦戦する機動六課とダイアナンＡだが、そこへ鉄の城が姿を現す

次回、魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ
「鉄の魔神」
に、テイイイイイイイイク、オォォォォォォォォフ！

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編開幕　出会い（後書き）

マジンガーは次回！

解説1（前書き）

簡単な説明だけ入れてみました

解説1

機鋼獣モルモットン

身長：１６ｍ
体重：４５ｔ

機鋼獣の試作型
対魔法装備を施しており魔法攻撃には絶大な防御力を誇る
思考能力は低く、甲児を捕獲しようとしたが、逆に殺害しようとした
また、馬鹿にされた際に逆切れして襲い掛かるなど知能の低さが伺える
だが、戦局を読む位の知能はあるらしく、動けないティアナ達に狙いを変えるなどの事をした
なのはのスターライトブレイカーすら耐え抜いたが、その後に訪れたダイアナンＡのミサイルにより破壊される
この事から魔法防御は高いが物理攻撃には弱いという弱点が浮び出した
外見は良くマンガでポーズを決める人形のような物

機鋼兵

中世の鎧を思わせる外観をした兵士
機鋼獣とは違い量産が効く為多数が量産されている
だが、対魔法装備は施されておらずスバルとティアナの魔法にあっけなく倒される
一応感情はあるらしく、甲児の鬼気迫る顔に怯える等の感情も見せただが、戦闘になれば残忍になり女子供でも容赦せず殺害する

解説1（後書き）

こんな感じです

鉄の魔神　前編（前書き）

余りにも長くなってしまったので前後編に分けます
相変わらずなのはは詳しくないですが頑張って書いてます

鉄の魔神　前編

「も、申し訳ありません！王よ・・・」
「とんだ邪魔が入ってしまい兜　甲児の誘拐に失敗したばかりか貴重な機鋼獣を失う事になってしまい」

前回機鋼獣をダイアナンＡに破壊された後逃げ帰ってきたシュラは王の前で土下座して謝っていた
すると、目の前から2本のレーザー砲台が現れ、シュラに向かって放たれる

「「グギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

その光線を受けてシュラは苦しむ

「「お、お許し下さい！王よおおおおおおおお！」」

シュラが苦しみながらも謝罪をする
やがてレーザーの砲撃が止みシュラは床に倒れる
煙が立ち昇る

「「う・・・ううう・・・」」

シュラの肩が震える
その震えは王の戒めとそして先の敗北による苦やしさが篭っていたのだ

「おのれ・・・おのれ・・・謎の機鋼獣め・・・おのれ機動六課め・・・次こそは・・・次こそは必ず貴様等を地獄へと叩き落してくれ

る」

シュラは立ち上がり、杖を掲げる
すると背後の壁が開き、其処から1体の巨大な機鋼獣が現れる

「この機鋼獣・・・ガラダブラを使って!!!」

其処には、巨大な鎌を頭につけた顔と両脇に長い首を持った機鋼獣が立っていた
それを見たシュラの顔がにやける

「機動六課め、首を洗って待っているがいいわ・・・フハハハハハハハハ!」

薄暗い空間の中でシュラの不気味な笑みが木霊していた

＊＊＊

一方、さやか達と合流した甲児はと言うと

甲児
「いてて・・・本当に死ぬかと思ったぜ」
さやか
「御免なさいね甲児くん」

前回さやかのダイアナンAの手により黒こげにされた甲児は額に絆創膏を張るという極めて軽傷で済んでいた（不思議だが）
しかし、スカーレットビームの直撃を受けたせいで甲児の肌はこんがり小麦色に日焼けしており、髪型は爆発アフロになっていた
因みにさやかはなのはとティアナの説得により誤解だと分かりこうして甲児に謝りながら絆創膏を貼っていたのであった

なのは
「スカーレットビームでこんがり焼かれて・・・」
ティアナ
「散々ふんずけられて・・・」
スバル
「そんな軽傷で済むなんて・・・」
十蔵
「我が孫ながら化け物みたいじゃのぉ」
なのは・ティアナ・スバル
（十蔵さんの方がよっぽど化け物みたいなんですが・・・（汗）

そうは思っても決して口には出さない一同であった

スバル
「そういえばさっき見て思ったんですけど・・・さやかさん」
さやか
「何？スバル」
スバル
「さっき機鋼獣を倒した武器って・・・あれ「質量兵器」ですよね」
さやか
「質量兵器？」
甲児

「要するに物質兵器の事だろう？」
なのは
「はい、そうです」
なのはが頷く
さやか
「でも、それがどうしたの？」
なのは
「此処ミッドチルダでは質量兵器の使用は禁止されてまして・・・
それを所持している場合は逮捕しなければならないんです」
さやか
「・・・・・ええええええええええええええええ！」
暫し沈黙した後さやかが驚愕した
つまりダイアナンＡは言ってしまえば質量兵器の塊である
そんな物を乗り回すさやかは当然この世界では御用となってしまうのだ
甲児
「ちょっと待てよ！って事は何か？この世界じゃオッパイミサイルは使えないのか？」
ティアナ
「お・・・オッパイ！！！」
甲児
「つまりボインの事だよ」
ティアナ
「そんな事は分かりますよ！」
顔を真っ赤にしてティアナが怒鳴る

なのはとスバルも顔を赤くする

甲児
「ダイアナンAの持ち味はあのオッパイミサイルなんだぞ！それが使えないなんてダイアナンの魅力が半減するじゃねぇか！」
なのは
「そ・・・そんなに熱弁されても困るんだけど・・・（汗」

拳を握って熱弁する甲児になのは達が引き攣った顔をしてさやかは呆れる
そして十蔵はうんうんと頷く

十蔵
「全くその通りじゃ！甲児よ」
甲児
「分かってくれるか！お爺ちゃん」
十蔵
「おうよ！やはり女子（おなご）はボインでボンキュッボンのナイスバディィに限るからのぉ」
甲児
「嫌全くその通りで」
さやか
「は～～～」

さやかはあきれ果てて言葉が無かった

さやか
「それはそうと・・・もしそれが不味いんだったら・・・これこのまま置いておいたら不味いわよねぇ」
なのは

「ええ・・・早くどうにかしないと管理局に差し押さえられてしまいますし」
甲児
「どうにかできないのか？」
十蔵
「いっそ分解しちまえばどうじゃ？」
甲児
「日が暮れるよ・・・それに分解出来たとしてどうやって運ぶ気だよお爺ちゃん」
十蔵
「う～～む、面倒臭いのぉ」
スバル
「折りたたむってのはどうですか？」
ティアナ
「スバル、布団じゃないんだから（汗」
なのは
「それだったら家の部署に持っていくってのはどうかな？」
さやか
「なのはさんの所？」
甲児
「それって、機動六課って所か？」
なのは
「はい、あそこなら何とか隠す事は出来そうですし」
甲児
「隠すって・・・（汗」
なのは
「はい、さっきの機鋼獣は恐らく私達の世界の武器では倒すのは無理だと思うんです。恐らく甲児さんの居た世界の武器じゃないと・・・でも管理局が目を光らせている以上野晒しには出来ませんし」
甲児

「それに、このままだと衣食住に困るしなぁ」
さやか
「そういえば私もそろそろシャワーとか浴びたいわぁ」
さやかが額の汗を拭う仕草をする
確かに甲児も激闘を終えた後なのか少し汗臭い気がした
なのは
「決まりですね」
なのはは手を打ってそう言った
十蔵
「ワシはなのはちゃんの居る所なら何処でもＯＫじゃよぉ」
なのは
「は・・・はぁ・・・（汗」
甲児
「お爺ちゃん、なのはちゃん浮いてるから離れてやれ」
擦り寄ろうとする十蔵を掴んで自分の所にもって行く甲児
十蔵
「何じゃ甲児！老い先短い老人の楽しみを奪ってそんなに楽しいのか？」
甲児
「お爺ちゃんもう死んでるだろうが！老い先も何も無いだろう」
十蔵
「あ、そうじゃった」
思い出すように十蔵が言う

それを聞いて甲児以外のメンバーがズッコケル

なのは
「お・・・面白いお爺ちゃんですね（汗」
十蔵
「むほほ～、なのはちゃんはワシの魅力が分かるんかぁ？」
なのは
「前言撤回！やっぱり怖いです！（涙」

十蔵に思い切り近づかれたのでなのはは思い切り下がる
しかも涙目で
そんな光景に一同が笑みを浮かべていた
すると、突然辺りが暗くなってきた

スバル
「あれ？もう夜になったのかなぁ？」
ティアナ
「何言ってんの！まだ１４時よ！」
甲児
「日食じゃないのか？」
スバル
「日食？」
甲児
「簡単に言うと月が太陽を隠してしまう現象の事さ」

甲児の説明にスバルが納得する

？？？
「間も無くこの世の終わりが訪れる」
一同

「！！！」

突如何処からともなく声が聞こえてきた
それは甲児とさやかは聞き覚えおのある声であった

さやか
「甲児くん！今の声って」
甲児
「ああ、あの時俺たちに予言した預言者の声だ」

それは甲児がＤｒ．ヘルとの戦いを終えて間もない頃であった
その預言者は近いうちにミケーネの戦闘獣が攻撃を開始すると予言したのだ
その正体は甲児の父「兜　剣造」であった
だが、甲児がその正体を知る事は遂に無かったのだ

？？？
「間も無くこの世の終わりが来る」
ティアナ
「なのはさん！あそこ！」
なのは
「え？」
スバル
「あれって！」

見ると、一本高い木のてっぺんに白髪で青い肌をした薄汚い老人が立っていた

なのは
「貴方は何者なんですか？」

？？？
「この世の終わりを告げる為遣わされた者だ」
なのは
「この世の・・・終わり・・・」
スバル
「え・・・縁起でも無い事言わないで下さい！！」

スバルが怯えながら言う
だが、老人は気に掛けず続ける

？？？
「空と海と大地から機械の体と鋼鉄の鎧を身に纏った怪物『機鋼獣』が現れる
奴等は町と言う町を破壊し、人と言う人を殺していく
奴等の前には魔道士の力は及ばず、ミッドチルダは死の星となってしまうだろう」

老人はそう宣言する

ティアナ
「でも、その機鋼獣ならさっきやっつけた筈よ！」
？？？
「あれは只の試作型に過ぎん」
ティアナ
「！！！」
甲児
「何だって！！」

それを聞いた一同は驚愕した
只でさえ苦戦した相手だと言うのにそれが只の試作型だとは

だとしたら本当の機鋼獣はどれ程強いのか
???
「次は本当の機鋼獣が訪れる
本当の機鋼獣の前にこの世界の力は余りにも無力だ
このままではこの星の生きとし生ける者は全て根絶やしにされる運命を辿るだろう」
スバル
「そ・・・そんな・・・」

スバルが悲しそうな言葉を発する

???
「だが、唯一その運命を変えられる者が居る」
なのは
「それは一体何ですか?」
???
「鉄の城『マジンガーZ』」
甲児
「マジンガー・・・Z」
???
「魔道士達よ、鋼鉄の巨人とそれを操る者達と共に機鋼獣と戦うのだ!この星を救うにはそれ以外に道は無い」
なのは
「鋼鉄の・・・巨人・・・」
???
「兜　甲児よ」
甲児
「何だ?」
???

「お前は間も無く最も信頼出来る仲間と会えるだろう」
甲児
「最も信頼出来る・・・仲間」
???
「その仲間と共に戦い機鋼獣を滅ぼすのだ!機鋼獣を全て倒さぬ限り、お前は元の世界へは帰れぬだろう」
甲児
「何だって!」

甲児は驚愕の声を上げる

???
「戦うのだ!兜　甲児よ!運命を変えるのだ!」

そう言い残して老人は霧のように消えてしまった

甲児
「また消えた・・・」
なのは
「甲児さん・・・あの予言は一体・・・」
甲児
「俺にも分からねぇ・・・けど・・・最も信頼出来る仲間って・・・」
さやか
「ボスじゃないの?」
甲児
「おいおい、ボスじゃ無理だろう」

さやかの言葉に甲児が苦笑いを浮かべた
甲児はふと最も信頼出来る仲間がボスだった場合を考えてみた

＊＊＊

ボス
「ジャンジャジャ～ン」

本人的にカッコよく登場したつもりのボス
目の前には一体の機鋼獣が待ち構えていた

ボス
「やい機鋼獣！このボスボロット様がケチョンケチョンにしてやるだわさ！」

そう言ってボスボロットは腕をブンブン回して機鋼獣に向かっていく

ボス
「ボロットパァァァンチ」

そしてボロットの腕を思い切り振り下ろす
だが、その腕は逆に宙を舞っていた
そして、本来ボスの手にある筈の手は何処にも無かった

ボス
「あらやだあああああああああ！腕が無いじゃないのおおおおお

おおおお！」

腕が取れて慌てまくるボス
そんなボスボロットを機鋼獣は払いのけるように吹き飛ばす

ボス
「ひえええええええええええええ！お助けえええええええええええええ
！」

そう言ってボスは星になった

＊＊＊

甲児
「・・・・・全く勝てる気がしねぇ（汗」
さやか
「・・・そうね（汗」

甲児とさやかは汗を流してそう言った
すると、

スバル
「あ、迎えが来ましたよ」

スバルがある方向を指差した
すると、其処には一機の巨大なヘリが飛行していた
ヘリはゆっくりと甲児達の前に降り立つ
すると、その中から金髪の女性が降りてきた

???

「なのは！」
なのは
「フェイトちゃん！」

フェイトと呼ばれた女性となのはは互いに手を取って互いの無事を感じ取った
それに続いて続々と降りてきた

???

「無事か？なのは！」
???

「スバルやティアナも無事みたいだな」
なのは
「ヴィータちゃん！」
スバル・ティアナ
「シグナム副隊長！」

オレンジ色の髪の背の小さな少女とピンク色の髪を後ろに縛ったポニーテールの女性がやってきた
まだ来る

???

「良かった！どうやら皆無事みたいだよ、キャロ」
???

「うん、心配だったけど無事みたいだね、エリオ君」

これまた小さい2人組みの少年少女が降りてきた

甲児
「なんだなんだ!?いきなり続々と出てきたぞ」

さやか
「これって・・・全部なのはちゃん達の仲間なの?」

なのは
「はい、皆私達の仲間です」

なのはが言う

十蔵
「むほぉぉぉぉ!パツキンのボインちゃんにポニーテールのボインちゃんまで居るとは!わしゃもう死んじゃそうじゃよぉ!」

フェイト達を見て十蔵が興奮しだす

甲児
「お爺ちゃん・・・少し黙っててくれないか（汗」

甲児は顔を抑えながら呟く

なのは
「それじゃ甲児さん、さやかさん、紹介するね。まず私の隣に居るのが機動六課ライトニング分隊隊長の・・・」

フェイト
「フェイト・T・ハラオウンと言います。宜しく」

甲児

「俺、兜　甲児。宜しくな（結構美人だなぁ」
さやか
「弓　さやかです。宜しく（ジロッ」

甲児がデレ～っとした表情でフェイトを見てそれをさやかがドス黒いオーラを纏って睨む
そのオーラを見てフェイトは怯える

なのは
「つ・・・次に行くね（汗」

話題を変えようとなのはは次の紹介に移る

なのは
「こっちの2人は私の所属するスターズ分隊、そしてフェイトちゃんのライトニング分隊の副隊長の・・・」
ヴィータ
「鉄槌の騎士、ヴィータだ」
シグナム
「烈火の将、シグナムだ」
十蔵
「へ？劣化の将？」
シグナム
「烈火だ！（怒」

十蔵の無理やりとも言えるボケにシグナムは多少額に血管を浮かべて怒鳴る
そして甲児はヴィータを見る

ヴィータ

「何だよ?あたしの顔に何かついてるか?」
甲児
「お前、ガキの癖に副隊長なんてやってるのか?」

ブチッ

ヴィータ
「人を見かけで判断するんじゃねえええええええええええええ!」

そう怒鳴った後ヴィータは「グラーフアイゼン」を甲児の頭に振り下ろす
グラーフアイゼンをモロに食らった甲児はそのままの勢いで地面に激突する

甲児
「いでえええええええ!」

グラーフアイゼンの直撃を受けた甲児は大きなタンコブを抑えて立ち上がる

甲児
「て、てめぇ・・・いきなり何しやがるんだ!?」

涙目で甲児は訴える

なのは
「甲児くん、ヴィータちゃんはこれでも１０００年位は生きてるんだよ」
甲児
「へ?マジ?」

目を見開いて聞く甲児になのはは頷く

ヴィータ
「分かったら私の事ガキ扱いするんじゃねぇぞ」
甲児
「信じられねぇ・・・１０００年も生きててそれっぽっちしか背が伸びねぇってのも悲しいなぁ」

ブチブチ

ヴィータ
「殺す！」
甲児
「どわあああああああ！いきなりそんなハンマー振り回すなあああああ」
ヴィータ
「うっせえええええええ！一辺頭かち割ってやるうううううう！」

ヴィータが完全に切れた顔になってグラーフアイゼンを振り回す
甲児はそれから必死に逃げる
だって当たったら痛いもん

シグナム
「ヴィータ、余りやり過ぎるなよ」
さやか
「すみません、後でお灸を据えておきますので」
シグナム
「弓も大変だな、あんなのが一緒だと」
さやか

「ええ・・・まぁ・・・」

同情するシグナムにさやかは苦笑いを浮かべる
さやかは遠い目でヴィータに虐待されている甲児を見ていた

ヴィータ
「ぶち抜けえええええええええ！」
甲児
「ぶち抜くなあああああああああ！」

・・・１０分後

甲児は頭に大量のタンコブを作って横たわっていた

スバル
「大丈夫ですか？甲児さん」
甲児
「あ・・・ああ・・・・何とか生きてるぜ」
ティアナ
「本当に丈夫ですねぇ・・・甲児さん」

ティアナは甲児の丈夫さに心底感心する

？？？
「あのぉ・・・そろそろ僕達の紹介を・・・」
なのは
「あ、御免ね（汗」

なのはの横にこれまたヴィータと同じ位背の小さい少年少女が立っていた

ヴィータ
「（ギロリ）」

すんません（汗）

なのは
「えっと・・・2人はフェイトちゃんの居るライトニング分隊の・・・」

エリオ
「エリオ・モンティアルです。宜しく」

キャロ
「キャロ・ル・ルシエと言います。宜しくお願いします」

甲児
「2人共・・・あのハンマー娘と同じで1000位生きてるのか？」

エリオ・キャロ
「へ？？？」

甲児の素っ頓狂な質問に2人はキョトンとする

ヴィータ
「やっぱ一辺ぶっ潰す（怒怒怒」

甲児
「ふざけんな！（逃」

再び甲児とヴィータの追いかけっこが開始される

エリオ
「えっと・・・止めないで大丈夫なんですか？」
さやか
「大丈夫よ。甲児くんの自業自得なんだし」
キャロ
「で、でも・・・ヴィータさんのデバイスに当たると痛いですよ（汗」
さやか
「大丈夫大丈夫！甲児くんを殺すには核ミサイルを使わないといけないから」
エリオ
「か！！！」
キャロ
「核ミサイル！！！」

とんでもない単語が出てきたので二人は驚く

さやか
「嫌ねぇ、冗談よ冗談」
エリオ
（とても冗談には見えなかったんですけど・・・）

その時さやかは真剣な顔で言ったらしくエリオは背筋の凍る思いがした
そしてそのまま視線を甲児に移す
甲児はと言うと、ヴィータにマウントを取られてグラーフアイゼンで何度も頭を殴られている
しかし、幾ら殴っても出血しないと言うのは彼が凄いのかヴィータが寸での所で手を抜いているのか微妙な所であった

＊＊＊

そんなこんなで甲児とさやかは機動六課の所有するヘリに乗り込んでなのは達と共に機動六課本部に向かっていた
へ？ダイアナンＡはどうしたかって？
ダイアナンＡは流石にヘリには乗らなかったのでヘリの下から吊るしています
巨大さの割りに軽かったのでギリギリ運べたようである
そして、そのヘリの中では

エリオ
「それじゃ甲児さんは元の世界ではマジンガーって言う名前の巨人で戦ってたんですか？」
甲児
「おうよ！迎え来る機械獣を返り討ちにしてやってたぜ」
エリオ
「凄い！一度見てみたいですよ」

甲児の話にエリオが目を輝かせていた
やはり年頃の少年なのかロボット物は好きらしい

甲児
「俺からして見れば魔法をバカスカ使うお前等の方がよっぽど凄いと思うけどなぁ」

エリオ
「僕達の世界では確かに魔法文化が発達してますが、甲児さんの言うような巨大なロボットの技術は殆ど無いんですよ」
甲児
「成る程な・・・どうりで機鋼獣相手に苦戦する訳だ」

甲児が納得する
どうやら原理は不明だが機鋼獣は魔法を用いた攻撃には圧倒的に強い様だ
それはエリオ達の口から聞いて推測出来た
エリオ達も同様に機鋼獣と戦闘を行ったようなのだ
だが、結果は散々な物であった
彼等の魔法は機鋼獣の前には尽く弾かれてしまい、唯一出来るのと言えば機鋼獣のエネルギーが尽きるまでとにかく時間を稼ぐ位であるそれを聞いた甲児はとても歯痒かった

無力だ・・・何て無力何だ

甲児はそう思った
マジンガーに乗れば甲児は超人兜　甲児となれる
だが、マジンガーに乗っていない甲児は只の人間である
ハッキリ言って此処に居る機動六課のメンバーの誰よりも弱い存在なのだ
甲児には彼等の言うリンカーコアも無ければデバイスも無い
甲児の祖父十蔵は自分をユニゾンデバイスと呼んでいるが詳しい能力は自分も分からないと言う始末である

甲児
「情けねぇよな」
エリオ

「え？」
甲児
「マジンガーに乗ってない俺はこんなにも弱いんだからよぉ・・・」

甲児はギュッと拳を握り締めた
自分の無力さを呪った
こんな時、常に側に居た筈のマジンガーは今は何処に居るのかさえ分からないのだ
そうなると、例え機鋼兵を倒せても機鋼獣を倒すのは不可能になる
現状で機鋼獣に対抗出来るのはさやかのダイアナンＡしかない
だが、戦闘用に改造されたとは言えダイアナンＡでは限界が来る
一刻も早くマジンガーを見つけねば
そう甲児は思っていた

スバル
「そんな事無いですよ！」
甲児
「スバル」
ティアナ
「私達は少なくとも甲児さんが弱い人とは思ってませんよ」
甲児
「ティアナ・・・お前」
スバル
「あの時甲児さんが居なかったら・・・正直私達今頃どうなってたか分かりませんし」
ティアナ
「それに、あの機鋼兵だって甲児さんが殆ど倒してしまいましたし」
シグナム
「何！それは本当か？」

ティアナの言葉にシグナムが反応した
その顔は驚愕の色一色であった

甲児
「そ、そんなに驚く事か？」
シグナム
「兜甲児、貴様は魔道士なのか？」
甲児
「いいや、俺はお前等みたいな魔法は使えないけど・・・それが何なんだ？」
ヴィータ
「それじゃお前は魔法も使わずにあの機鋼兵を倒したのか？」
キャロ
「凄いですねぇ、甲児さんって」

シグナムに続きヴィータもそれを聞く
ヴィータも同様に驚愕の顔をしていた
キャロは驚きの余り目が点になっていた

甲児
「ああ、まぁ大した奴等じゃ無かったけどな」
シグナム
「信じられん・・・只の人間が機鋼兵を倒すとは」
ヴィータ
「お前・・・一体何者なんだよ」

シグナムは驚きの余り目が点になりヴィータは甲児の正体に疑問を抱いていた

甲児

「お、おいおい、大袈裟だなぁ、あんな兵士を倒すなんて朝飯前だろう?それが何か問題でもあるのかよ」
なのは
「甲児君って凄い強いんですね」
フェイト
「魔法を使わずに機鋼兵を倒すなんて」

周りから甲児を見る目が変わる
最初はヴィータに虐められてる弱い人間と思っていたが、スバルとティアナの話を聞いてその考えが一変された
機鋼兵を素手で倒すわ機鋼獣に生身で挑むわ言ってしまえば無茶苦茶なのだ
普通の人間ならまずそんな事はしない筈である
しかし甲児はそれをやってのけたのだ
その時点で一同は甲児はとんでもない奴だと認識した

甲児
「そ、そういやぁお前等魔法を使うんだろ?だったら杖とかステッキとか無いのかよ?」
シグナム
「杖?それはこれの事か?」

そう言ってシグナムは自分のデバイス「レヴァンティン」を見せる
甲児はそれを見る
一見何の変哲の無い剣のようである
だが、

レヴァンティン
『始めまして、甲児さん』
甲児

「んな！！！」

突如レヴァンティンが喋り出した
それを聞いて甲児とさやかは度肝を抜かれた
思わず甲児はシートから滑り落ちる
余りの驚きように辺りも驚く

シグナム
「何だ？そんなに私のデバイスは珍しいのか？」
甲児
「な、ななな、何でデバイスが喋るんだ？」
シグナム
「何だ？ティアナから説明を受けてないのか？」
甲児
「え？」
ティアナ
「御免なさい、甲児さん・・・説明不足でした」

甲児の前でティアナは両手を合わせて謝罪していた
その後、甲児はデバイスの種類によっては自己の意識を持つ事を聞かされる
それを聞いて甲児はまた驚いた
物体が意識を持つ事は甲児の世界ではまず有り得ない事なのだからだ

甲児
「それじゃスバルやティアナのデバイスも喋るのか？」

甲児は2人のデバイスを見た
すると、2人は首を横に振った

スバル
「いえ、私のローラーは自作の物なので意思は無いんです」
ティアナ
「私のも同じく自作ですんで意志はありません」
甲児
「そうか・・・」
さやか
「でも、自作でそんなデバイスを作るなんて凄いのね二人とも」
スバル
「いやぁ、それ程でもないですよ／／／」
ティアナ
「これ位なら簡単ですから」

スバルは顔を赤らめて、ティアナはさも当然のように言う

甲児
「そうか?ティアナのデバイス結構出来が良いと思うけどなぁ」
ティアナ
「そ、そうですか・・・／／／」

だが、甲児が褒めた途端ティアナの顔に変化が出た
何故かとても嬉しそうな顔をしたのだ
だが、それは恋というより兄に褒められて喜ぶ妹のような物であった

甲児
「ああ、素人で其処までのを作るってのは相当な物だからなぁ、俺も自作のデバイスとか作ってみるかなぁ」

甲児は腕を組んで外を見た
外は空を飛んでいる為か青い空と白い雲しかない

唯一見えるのと言えば同じ高度を飛ぶ鳥位である
だが、その鳥を見た甲児はある異変に気づいた
何故なら、その鳥の形状がおかしいのだ
羽が生えてないのだ
鳥らしい羽の生えた感じが一向に見られない
しかもその表面は生物特有の皮膚ではなく、機械だったのだ

甲児
「何だあの鳥は？」

甲児は窓に目をやった
その鳥は徐々にヘリに近づく
そして、その鳥の正体が明らかになった
それは鳥と言うよりは白亜紀に居た翼竜のような形をしていたのだ
大きさからして５ｍ位の大きさはある
その翼竜は真っ直ぐ甲児達の乗るヘリを追っていたのだ

ヴィータ
「な、何だありゃ？」
なのは
「あれって・・・もしかして、プテラノドン？」

異変に気づいたなのは達も窓に目をやる
其処には２匹の翼竜型ロボットが飛んでいた
翼竜型ロボットは真っ直ぐヘリを追っている
それを見た甲児は直感した
こいつは敵だと

ヴィータ
「ヴァイス！気づかなかったのか？」

ヴィータは操縦席に居る男性に聞いた

ヴァイス
「奴等レーダーに反応しなかったんです！こっちだってさっき気づいたんですから！」

操縦しながら「ヴァイス・グランセニック」は言った
翼竜型ロボットはヘリの後方に移動すると、目から怪光線を放つ
怪光線はヘリの真横を掠める
その後も間髪入れずに翼竜は怪光線を放ち続ける

甲児
「畜生！あいつら飛べるからっていい気になりやがって！」

ヘリの中で甲児は唸った
相手が空中では手の出しようが無いのだ

甲児
「なぁ、あんたらの魔法であいつらを叩き落せないのか？」

シグナム
「無理だ！奴等には私達の魔法は全く効き目が無い」

ヴィータ
「私のグラーフアイゼンやシグナムのレヴァンティンですら弾き返した奴等なんだぞ」

シグナムとヴィータが悔しそうに言う
それを聞いて甲児は眉を顰めた

甲児

「何だ、この世界の騎士ってのは腑抜けの集まりなのか？」
シグナム
「何だと！」
甲児
「一度戦って駄目だったから諦めるのかって聞いてるんだよ！」
ヴィータ
「てんめぇ！」

ヴィータは甲児の胸倉を掴む
だが、甲児は微動だにしない
それどころか真っ直ぐヴィータを見る
ふと、甲児は回りに視線を送った

甲児
「おい、誰か飛べる奴いるか？」

甲児は回りに聞いた

なのは
「どうするの？甲児くん」
甲児
「このまま黙ってやられる気はねぇよ。それにこのままじゃ俺の腹の虫が収まらねぇからあいつらに一発ぶちかましてやりてえんだ」
なのは
「そ、そんな！無茶だよ甲児くん」

なのはは青ざめる
当然である
魔法ですら効かない相手に素手で挑もうと言うのだから

甲児
「へっ、無茶は俺の専売特許だぜ！任せな。それより誰かいねぇのか？」

甲児の言葉を聞いてなのはが立ち上がろうとしただが、その前に

ヴィータ
「私が連れてってやるよ」
なのは
「ヴィータちゃん」
ヴィータ
「おい、甲児」
甲児
「あん？」

ヴィータは甲児を睨む

ヴィータ
「大口を叩いたんだから結果を見せろよな。もしオメオメと逃げ帰ってきたら・・・」

ヴィータは言葉の途中でグラーフアイゼンを甲児の前に振る

ヴィータ
「こいつで今度こそお前の頭をかち割ってやるからな」
甲児
「上等だぜ！その時は煮るなり焼くなり好きにしな」

甲児がフッと笑いながら言う

それを見てヴィータも笑う

ヴィータ
「確かに聞いたからな」

シグナム
「ヴァイス！後部ハッチを開けてくれ！」

シグナムはヴァイスに言う
ヴァイスは驚愕の顔をする

ヴァイス
「しょ、正気ですか！？相手は機鋼獣なんですよ！シグナム副隊長達ですら勝てない相手を民間人が勝てる筈が無いじゃないですか！」

シグナム
「このまま黙ってて落とされるよりはマシだ！良いから言われた通りにしろ！」

ヴァイス
「知りませんよ！」

愚痴りながらもヴァイスは言われた通りにハッチを開ける
開いたハッチから猛烈な風が甲児達に吹き込む

甲児
「ヴィータ！俺をあの翼竜の頭の上まで連れてってくれ！」

ヴィータ
「振り落とされるなよ！」

ヴィータはそう言って甲児の腕を掴んで飛びあがった

なのは

「皆は防御魔法を展開させて！ヘリを守るの！」
一同
「了解！」

残りのメンバーは一斉に障壁を張ってヘリを守りに回った
機鋼獣の怪光線が数発障壁に当たる
そのたびに振動が響く
凄まじい衝撃であった

ヴィータ
「こりゃのんびり出来そうにねぇな」
甲児
「だな・・・急いでくれヴィータ」
ヴィータ
「生意気言いやがって・・・振り落とされるなよ」

そう言ってヴィータは急いで機鋼獣の元へ向かった
その間も機鋼獣はヘリの攻撃を続けた
全員で張っている障壁にも徐々にヒビが入ってきた
それ程までに機鋼獣の放つ怪光線が強力だったのだ
その上殆どのメンバーが先の戦闘で消耗している為思うように力が出せないのも理由であった

なのは
（ヴィータちゃん、急いで！もうもちそうに無いよ）

なのはが念話でヴィータに伝える

ヴィータ
（こっちはもうついた！もう少しだけもたしてくれ！）

同様にヴィータも念話し返す
ヴィータと甲児は機鋼獣の真上に来ていた
幸い機鋼獣達は甲児の存在に気づいていないのかヘリの攻撃を続けている

ヴィータ
「そんで、この後どうするんだ？」
甲児
「そのまま俺をあそこに降ろしてくれ」
甲児は一体の機鋼獣の頭の上を指差した

ヴィータ
「お前結構無茶やるな」
甲児
「言っただろう。無茶は俺の専売特許だってな」

甲児が軽くウィンクして言う
それを見てヴィータが笑う

ヴィータ
「そうかい、だったら行って来い！」

ヴィータは豪快に甲児を機鋼獣の頭の上に投げ飛ばす

甲児
「うおおおおおお！俺は降ろせとは行ったが投げろとは言ってねぇぞおおおおお！」

怒鳴りながらも甲児は無事に機鋼獣の頭の上に降り立つ
機鋼獣も異変に気づき甲児を振り落とそうと必死に頭を振る

甲児
「うお！この！・・・・大人しくしやがれ！」

甲児は機鋼獣の目に向かって鉄拳を叩き込む
だが、やはり機鋼獣なだけあってかなり硬い
甲児の手は血で滲んでいた
だが、それでも甲児は殴るのを止めない
機鋼獣の目が甲児の血で汚れていく
痛みの余り手の感覚がなくなりだしてきた
それでも甲児は殴り続ける
すると、徐々に機鋼獣の目にヒビが入り出した

甲児
「一撃で駄目なら百発でも二百発でも叩き込んでやらあああああああ！」

そう叫んで甲児は渾身の一撃を機鋼獣の目に叩き込んだ
バリーンと音を立てて機鋼獣の目が割れる
すると機鋼獣は奇声を上げて首を上げる

甲児
「んなろおおおおお！」

甲児はそのまま機鋼獣の首を引っ張る
すると機鋼獣はそのまま宙返りに似た行動そした
そして、その先には別の機鋼獣が居た

機鋼獣
「グギャアアアアアアアアアアア！」

甲児の乗っていた機鋼獣の嘴が別の機鋼獣の胴体を貫く
その際甲児は咄嗟に機鋼獣から飛び降りた
互いにぶつかり合った機鋼獣は激しい閃光を放ち上空で爆発した
だが、肝心の甲児はと言うと

甲児
「うおおおおおおおおおお！俺飛べねえんだったあああああああああ！」

咄嗟に機鋼獣から飛び降りたのは良かったんだが、自分が飛べない事を思い出し公開していた
だが、その甲児の腕をヴィータが掴む

ヴィータ
「やるじゃねぇか、見直したぜ」
甲児
「有難うよ。だけどどうせならなのはかフェイト辺りに褒めて欲しかったんだがな」

甲児が軽口を叩く
すると、ヴィータの眉間に再び数個血管が浮かび上がる

ヴィータ
「やっぱりお前今この場で頭叩き割ってやるうううううう！」
甲児
「わ、馬鹿！止めろ！此処空の上だから俺逃げ場が無いって・・・
ぎゃあああああああああああああ」

甲児は逃げ場が無い状態でヴィータのグラーフアイゼンを諸に食らっていた
それをヘリの中で見ていた一同が苦笑いを浮かべる

シグナム
「とんでもない奴だな」
エリオ
「でも凄いですよ甲児さんは・・・」
キャロ
「とても私達に真似出来ませんね」
さやか
「まぁ、甲児くんだし」
スバル
「あ、それ言えてるかも！」
ティアナ
「否定は出来ないわね」
なのは
「アハハハハハ（汗」

皆はヴィータに殴られながらも必死にヴィータにしがみつきながらもヘリに戻ってくる甲児を見て苦笑いを浮かべていた

＊＊＊

所変わって

「シュラ様」
「む！」

一体の機鋼兵がシュラの前に現れ方膝をついた

「申し上げます！機動六課を追跡していた機鋼獣「プテラン」が先刻破壊されました」
「何！敵はあの謎の機鋼獣か？」
「いいえ、違います」
「では、魔道士達が倒したと言うのか？」
「いえ、報告によりますと、只の民間人のようです！」
「な、馬鹿な！幾ら偵察用とは言え機鋼獣を民間人が倒すとは・・・」

シュラは驚きの余り数歩下がった

「コレをご覧下さい」

そう言って機鋼兵はモニターに映像を写す
其処には、甲児が機鋼獣を倒す一部始終が移されていた

「信じられん・・・あの機鋼獣を素手で倒してしまうとは」
「あの男・・・兜甲児には並ならぬ力を感じます」
「成る程・・・王が欲するのもこれで頷けるな」

シュラはそう言って微笑んだ

「よし！残りのモルモットンを集めよ！機鋼獣ガラダブラと共に今こそ機動六課本部を襲撃する！」
「ハッ！」

機鋼兵は返事をして部屋を出た

「フフフ、兜　甲児よ・・・今度こそ貴様を捕らえて私の忠実な機鋼獣に仕立て上げてやる」

シュラは映像に映る甲児を見て下卑た笑いを浮かべるのであった

後半に続く

鉄の魔神　前編（後書き）

結構疲れました（汗）
何か原作とは違う感じになってしまいました
ホントすんません

鉄の魔神　後編（前書き）

遂に鉄の城が登場
そして甲児に変化が？

鉄の魔神　後編

機鋼獣を倒した甲児はヴィータに連れられてヘリに戻ってきた
甲児の手は鮮血で塗れていた
なのは
「こ、甲児さん！」
スバル
「う、腕・・・大丈夫ですか？」
甲児
「ああ、大丈夫・・・と言いたいんだけど・・・かなり痛いんだよなぁ・・・これ（汗」
甲児は手をブラブラさせて言った
顔は笑っているが恐らくそれは皆を心配させまいとした甲児の計らいなのだろう
そうなのは達は思えた
なのは
「今すぐ治療しますので動かないで下さい！」
甲児
「お！なのはちゃんが治療してくれるなんて嬉しいねぇ♪そんじゃ宜しく頼むぜ」
甲児はなのはに向けてゆっくりと腕を差し出した
なのははその腕に治療魔法を施そうとした
が・・・
さやか
「あら、大丈夫よこの位」
そう言ってグイと自分の方に怪我した腕を寄せた
しかもかなり力強く
甲児
「イデデデデデデ！さ、さやかさん！かなり痛いんですけど（

涙」
さやか
「じっとしてなさい、今すぐ包帯を巻いてあげるから」
なのは
「あ・・・あのぉ・・・さやかさん・・・怪我でしたら私の治療魔法で・・・」
さやか
「何？（ゴゴゴゴゴゴゴゴ」
なのは
「な、何でもありません！」
なのはは青ざめて引き下がった
その光景にその場に居た一同も同様に青ざめる
キャロに居たっては余りの恐怖に涙目になってる
フェイト
「な・・・何あの人・・・」
シグナム
「なのは以上に・・・怖いぞ・・・」
ヴィータ
「・・・・・（涙目になりながら固まってる」
スバル
「こ・・・・怖いよ～～ティア～～」
ティアナ
「わ・・・私だって怖いわよ！（ガクガクガクガク」
エリオ
「さ・・・さやかさんって・・・こんなに怖かったんだ（青ざめている」
キャロ
「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い・・・・・・・・・（連呼している」
なのは
「・・・・・・（真っ白になってる」

一同が恐怖の顔一色に彩られてしまった
誰もさやかには逆らえない
それは例えなのはであっても・・・
甲児
「あ・・・あのぉ・・・皆・・・」
甲児が助けを求めようとなのは達に向かって手を伸ばす
だが・・・
さやか
「あら、こっち向いてなきゃ駄目じゃないの！」
さやかはなのは達の方を向く甲児の顔を無理やり自分の方に向けさせた
その際「ゴキンッ」と鈍い音が響いた
甲児の顔が苦悶に歪む
恐らく変な方向に首が曲がったのだろう
かなり痛そうだ
甲児
「ざ・・・ざやがざん・・・ぐび・・・・ぐびが・・・」
さやか
「え？何か言った？甲児くん（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」
甲児
「な・・・なんでもありまぜん」
甲児は涙目になって答えた
そんな甲児をなのは達は哀れみの目で見た
そして一斉に両手を合わせて合掌した
さやか
「よし、これでお終い」
そう言ってさやかは甲児の手を離した
甲児の手には慣れた手つきであったのかしっかりと包帯が巻かれていた
余程慣れていたのかかなり上手い出来であった

なのは
「上手いんですね、さやかさん」
さやか
「まぁ、甲児くんが何時も怪我ばかりしてるからね、その度に何時も私が治療してるからね」
フェイト
「凄いんですね・・・何時もこんな怪我をしてたんですか？」
さやか
「こんな怪我は日常茶飯事よ！酷い時なんか全身血まみれになった時もあったしね」
一同
「えええええええええええええええええええええ！」
さやかの一言に一同が驚愕する
見た所甲児の腕の傷は下手したら骨に異常があるかもしれない様なのだ
なのにこの怪我ですらさやかにとっては軽傷と言っているのだ
とても恐ろしい事である
これが常に自分達より巨大な敵と戦ってきた人間の証言なんだろうか
皆はそう思えた
甲児
「まぁ、こうして生きてるんだし、良かったって事で・・・」
キャロ
「そういう問題なんですか？」
エリオ
「前向きなんですね（汗」
さやか
「それが甲児くんの良い所だけどね」
甲児
「へへへ、すげえだろう！」
甲児は自慢げに鼻を擦る

さやか
「けど、それは欠点でもあるけどね」
甲児
「げぇっ、さやかさん酷いよぉ」
甲児は半泣きの顔でさやかに言う
だが、さやかは全く取り合おうとしなかった
十蔵
「ガッハッハッ！甲児、お前にしては随分軽い怪我で済んだのぉ！」
フェイト
「軽い怪我って・・・見た所その腕骨折してるみたいじゃないですか！それで軽傷って・・・貴方達の世界では一体どんな怪我をするんですか？」
十蔵
「うん？まぁ・・・それは本人に聞けば良いじゃろう」
十蔵は甲児に視線を送った
それを見て甲児は頬を掻く
一同の視線が送られる
仕方ないので甲児は口を開く
甲児
「しょうがねぇなぁ・・・じゃぁまずは・・・」

＊＊＊

甲児はなのは達に話した

今まで甲児が戦ってきた経緯を
そしてその戦いで出会った人や・・・永遠の別れとなってしまった人の事・・・
その中には、甲児の肉親も居た
そう・・・幼い頃に死別したと思っていた父・・・「兜　剣造」の事を・・・
その間・・・甲児は幾度と無く死線を潜り抜けてきたのだ
瀕死の重傷を負った事は数えれそうに無い程・・・
そんな戦いを甲児は経験して来たのだ
甲児
「んまぁ・・・大体そんなトコかな?・・・・・って、あれ?」
甲児は話し終えた後一同を見た
なのは達は甲児の話を聞いて胸にドシンと重い何かが圧し掛かっていた
甲児
「ど、どうしたんだ?皆・・・（汗」
なのは
「甲児さんって・・・そんな厳しい戦いを経験してきたんですね」
フェイト
「お父さんを亡くす何て・・・辛い事でしたね」
ヴィータ
「お前・・・良くそれで笑っていられんな」
シグナム
「強いんだな・・・お前は」
スバル
「ご・・・ごうじざん・・・がわいぞうぅぅぅぅぅ（大泣き」
ティアナ
「スバル・・・あんた泣きすぎよ（涙」
エリオ
「マジンガーに乗っての戦いはそれ程までに厳しい物だったんです

ね」
キャロ
「負けないで下さい！甲児さん！」
その場に居合わせた一同の目にはウルウルと涙が溜まっていた
それを見た甲児は対応に困った
確かに父を失ったのは悲しい出来事である
だが、それでも甲児は立ち止まる訳には行かなかった
偉大なる祖父や、父の後を継いで自分は自分で作った宇宙船に乗って外宇宙に居るであろう異星人と交流を持ちたいと思っていたのだ
その道のりは余りにも遠く、そして険しいだろう
だが、だからこそ甲児は目指しているのだ
甲児
「ま・・・まぁそんなに気にする事じゃねぇよ・・・」
甲児は手をヒラヒラさせて呟いた
そんな時、操縦席に居るヴァイスから声が聞こえた
ヴァイス
「もうすぐ到着しますよぉ」
甲児
「あ、ほら！もう着くってよ！」
甲児は話題を変えようと窓を指差した
だが、メンバーは未だに涙ぐんだ目で甲児を見ていた
甲児
（ど・・・どう対応したら良いんだ（汗）
まさか機動六課のメンバーがこんなに涙もろいとは思わなかった
そう思う甲児であった
十蔵
「いかんのぉ甲児。年頃の女子（おなご）を泣かすとは罪な男じゃのぉ」
甲児
「好きで泣かした訳じゃねぇよ！（怒」
甲児は肩を上げて呟く十蔵に怒鳴った

＊＊＊

機動六課本部に向かうヘリを遠くから見つめる3つの人影があった
3人の人であった
3人供同じ顔であった
白い肌の美しい女性であった
長い金色の髪を両端に束ねたツインテールの髪型であった
外観はとても美人である
だが、その顔からは生気が感じられなかった
それもそうだ
彼女たちは人間では無かったのだから
???
「標的・・・発見」
???
「任務・・・確認」
???
「第一目標・・・兜　甲児の・・・捕獲」
???
「第二目標・・・機動六課部隊長の・・・抹殺」
???
「任務・・・開始」
女性達の目が怪しく光った
その後ろには、無残に体を引き裂かれた管理局員の死体が転がって

いた

＊＊＊

本部に着いた甲児とさやかは部隊長の居るであろう部屋へ向かっていた

甲児
「なぁ、さやかさん」

さやか
「何？甲児くん」

甲児はさやかに耳打ちした

甲児
「機動六課の部隊長って・・・どんな人かなぁ？」

さやか
「さぁ・・・想像つかないわねぇ」

甲児
「こんだけすげぇ人達を束ねてる奴だろう？・・・きっと厳つい顔した筋肉マッチョの爺さんじゃねぇの？」

十蔵
「げぇ！！そりゃやじゃのう（汗」

十蔵は顔を青ざめて言った

どうやら想像してしまったようだ

それを見てさやかが苦笑いを浮かべるなのは

「心配しなくて良いよ、此処の部隊長は私達の同期だから」
甲児
「なのはちゃんの同期？」
さやか
「少なくとも年寄りでは無さそうね」
ホッとするさやか
そんな話をしている家に3人（と一体）は部隊長であろう人が居る
部屋の前に来ていた
なのは
「はやてちゃん、開けるね」
なのはが部屋の扉を開ける
甲児
（筋肉マッチョじゃありませように！）
甲児は両手を合わせて強く願った
そしてゆっくりと目を開いた
すると、其処には
？？？

「おう、よう来たな！そっちの人達が例の次元漂流者か？」
これまた栗色の髪をした女性がなのはに向かって手を振っていた
短い髪に髪留めをつけた髪の女性である
そんな女性を見て甲児がホッとする
どうやら筋肉マッチョじゃなかったのが良かったのだろう
なのは
「はやてちゃん、紹介するね、こちらの男の人が兜　甲児さん。それで女の人が弓　さやかさん。2人共同じ世界の人達みたいなの」
甲児
「兜　甲児だ、宜しくな」
さやか
「弓　さやかです。宜しく」
はやて

「うちは此処機動六課部隊長の「八神　はやて」や。宜しゅうな」
そう言うとはやては甲児に向かって握手を求めた
甲児もそれに応じようと手を伸ばす
だが、
十蔵
「ワシ兜　十蔵じゃ！宜しくな！」
と言って十蔵がはやてに握手していた
はやて
「な！何であんたがユニゾンデバイスもっとるんや！しかもこんな怖い顔の爺さんを！」
甲児
「すまん・・・それ・・・俺のお爺ちゃんなんだ・・・」
はやて
「あ！！！」
ふと、はやては口元を押さえた
さっき思いっきり怖い顔と言ってしまったからだ
はやては恐る恐る手元に居る十蔵を見た
十蔵ははやての上で体育座りをして手の上にのの字を書いている
相当落ち込んでいるようだ
はやて
「あああ、ええっと・・・そないに怖い顔やないでぇ！せやから安心しても大丈夫やでぇ十蔵はん（汗」
十蔵
「ホント？」
はやて
「うん、ホンマやでぇ！」
十蔵
「じゃぁ・・・ワシの事十ちゃんって呼んでぇ！」
はやて
「はぁ・・・・」

途端に態度を変えて十蔵ははやてに言い寄った
はやてを目を点にしていた
其処へ
？？？
「酷いですよぉ！私の事も紹介して下さいよぉ！」
はやての後ろからこれまた小さい少女がやってきた
小さいと言っても全長約３０ｃｍ位の大きさである
甲児
「なんだぁ！これまた小さいのが出たなぁ？」
さやか
「はやてさん！その子もユニゾンなんですか？」
はやて
「ああ、この子は「リインフォースツヴァイ」言うてな、うちは「リイン」って呼んどるんや」
リイン
「宜しくですぅ」
リインは甲児達に挨拶した
甲児とさやかもそれに返す
すると
十蔵
「ほほぉ、ワシと同類なのかぁ、宜しくのぉオ穣ちゃん」
十蔵がリインの目の前に現れた
するとリインは
リイン
「キャアアア

甲児
「お爺ちゃん・・・大丈夫か?」
十蔵
「駄目・・・ワシもう死ぬ・・・」
甲児が聞くが十蔵は未だに塞ぎこんだままであった
甲児はハァと溜息をつく
はやて
「早速やけど、本題に入らせてもろうて良いかな?」
甲児
「あ、ああ!良いぜ」
甲児達は用意された椅子に座った
その前にはなのはとはやてが座っている
はやて
「初めに言わしてもろうとな、さやかさんが乗っとった・・・確か、ダイアナンA。あれなぁどう見ても質量兵器なんやなぁ」
さやか
「ええ、それはなのはちゃんから聞かされました」
はやて
「せやからこのまま置いとくとさやかさんをうちら逮捕しなけりゃならんのや」
甲児
「何だって!」
甲児は思い切り机を叩いた
その衝撃で甲児の前の茶が倒れる
だが、そんな事を気にしてる余裕は甲児には無い
甲児
「どうしてだよ!さやかさんが居なかったら今頃あんたらは機鋼獣にやられてたんだぞ!」
はやて
「話は最後まで聞いてな」

甲児
「あ、わりぃ・・・」
思わず興奮してしまった事を恥ずかしく思い甲児は座り込む
はやて
「せやけど、さっき見してもろうた通り、あの機鋼獣は強敵や。何せなのはちゃんのスターライトブレイカーを直撃しても平気で動きよるからなぁ」
なのは
「あの時は正直驚いたよ」
甲児
「だな、俺もあれには驚かされたぜ」
甲児達もそれに同意する
はやて
「原理はよう分からんのやけんど、どうやらあの機鋼獣にはうちらの魔法が効かんよう作られたみたいなんや」
甲児
「そりゃこの世界じゃ厄介な話だな」
甲児の言うとおりであった
ミッドチルダでは機械が甲児達の世界程発達してない変わりに魔法と呼ばれる力が発達してるのだ
だが、その魔法が全く通じない相手、しかも巨大な敵が現れたのだそれは早急に解決せねばならない問題でもある
はやて
「そんでな、さっき時空管理局から辞令が下ってな、甲児にさやかの両名がうちらの部隊に入ってくれるんなら逮捕はしなくても良いって事になったんや」
甲児
「へぇ、時空管理局ってのも中々話の分かる奴が居るじゃねぇか」
さやか
「はぁ、良かった」

甲児は喜びさやかはホッと胸を撫で下ろす
だが、その時辺りを警報が鳴り響く
甲児
「何だ！」
甲児達は立ち上がった
フェイト
（なのは！はやて！聞こえる？）
なのは・はやて
（フェイトちゃん！）
なのはとはやてが念話を行う
その会話は甲児達には聞こえない
3人にしか聞こえないのだ
フェイト
（大変なの！本部前に機鋼獣が3体現れたの！）
なのは
（ええ！）
はやて
（さ、3体もやてぇ！）
なのはとはやては驚愕の余りガマのように汗を流す
フェイト
（2体は私達が戦ったのと似てるんだけど・・・残りの1体が今まで見た事が無い敵なの！それも凄く強い・・・）
フェイトの声が曇る
恐らく今現在戦っている真っ最中なのだろう
フェイト
（スバル達は機鋼獣と一緒に現れた機鋼兵の相手をさせてるんだけど、私達だけじゃ苦しいからなのは達もすぐに来て！）
なのは
（分かったよ！フェイトちゃん）
念話を終えたなのはが甲児達を見た

その表情はとても重苦しかった
甲児
「まさか、機鋼獣が来たのか？」
なのは
「・・・はい・・・それも、３体も」
さやか
「そんな！３体も？」
はやて
「今皆が戦ってるらしいんやけど、かなり苦しいみたいなんや」
さやか
「分かったわ！私で良ければ一緒に戦いましょう！」
なのは
「お願いね！さやかさん」
なのはとさやかは２人して急いで部屋を出た
甲児
「俺も行くぜ！」
はやて
「待ちぃや甲児はん！」
甲児
「な、何だよ！」
甲児は呼び止めたはやてを見た
はやて
「あんた、奴等に狙われとるんやろ？」
はやての言葉に甲児は思い出した
連中の狙いは明らかに兜甲児であった
しかも連中は甲児を殺害しようとしているのでは無く、捕獲しようとしているのだ
その理由が分からない
以前マジンガーに乗って戦っていた時は甲児を捕獲しようとする連中は殆ど居らず、その殆どが甲児を殺害しようとしていたのだ

その意図が分からない
もし甲児の脳が必要なら首を切り落とせば済む話だ
だが、奴等は何故か生かしたまま捕らえようとしている
一体何故
甲児は考えた
はやて
「うちらにはあんたの様な民間人を守る義務があるんや！悪いけど今あんたが出て行ったって皆の足引っ張るだけやで！」
甲児
「だからってこうして黙って見ていられるかよ！」
はやて
「頭冷やしぃや！あないな巨大な機鋼獣に生身のあんたが挑んで勝てる筈が無いやろ！」
甲児
「じゃぁどうしたら良いんだよ！」
甲児は大声ではやてに言う
だが、はやてもそれを睨み返す
お互いが激しく睨みあう
だが、その甲児の死線に一本の毛が見えた
金色の髪であった
一瞬フェイトの髪かと思った
だが、それはすぐに違うと分かった
それは髪に良く似た鋼線だったのだ
そして、甲児はその鋼線を使う敵を知っていた
今の甲児にとって最も恐れる敵である
甲児
「はやて！伏せろ！」
はやて
「ええ！わ！」
有無を言わさず甲児は無理矢理はやてをしゃがませた

その直後はやての頭があった箇所が切断された
鋭い切れ味である
もしあと数秒伏せるのが遅かったらはやての首は宙を舞っていた筈
である
はやて
「な、何や?」
状況が掴めていないはやてが混乱する
だが、甲児はそれが何者の攻撃なのかすぐに理解出来た
甲児
「誰だ!」
甲児は起き上がりながら後ろを振り向いた
其処には3人の女性が立っていた
3人供同じ顔であった
???
「目標・・・発見!」
???
「兜　甲児・・・捕獲!」
???
「八神　はやて・・・抹殺!」
3人の女性はまるで機械のような喋り口で話す
甲児はその3人の女性を見て苦い顔をする
甲児
「またお前等かよ・・・ガミアQ3」

＊＊＊

さやかは外に出て機鋼獣を見た途端自分は錯覚を見ているのかと思った
何故なら、2体のモルモットンの間に居る機鋼獣に見覚えがあったからだ
さやか
「あれって・・・ガラダK7に、ダブラスM2・・・」
そうかつて甲児とさやかが戦った機械獣・・・その2体が合わさっているのだ
なのは
「さやかさん、知ってるんですか?」
さやか
「ええ、私達の世界に居た機械獣って言うのに良く似てるんだけど・・・あの感じだと全くの別物みたいね」
さやかは目の前で魔道士達と戦っている機鋼獣を見た
戦っていると言っても魔道士の攻撃は殆ど機鋼獣には効いておらず、機鋼獣にとっては五月蝿い蝿か蚊を叩き落そうとしているような物である
そして、その中にはフェイトやシグナム、それにヴィータの姿もあった
3人供手持ちのデバイスで必死に応戦しているが、機鋼獣にはまるで効果が無い
これでハッキリ分かった
この世界にとって機鋼獣は天敵なのだ
魔法が唯一の攻撃手段である魔道士にとってその魔法を封じられれば只他の人より少し優れた人となってしまうのだ
なのは
「私は機鋼兵の応戦に向かいます!さやかさんは」
さやか

「ええ、ダイアナンＡで出来るだけやってみるわ」
なのは
「お願いします！」
そう言ってなのはは首元につけていた赤い玉を手に持った
なのは
「行くよ！レイジングハート」
レイジングハート
「Ｓｔａｎｄｂｙ　ｌａｄｙ」
レイジングハートがそう発音し、なのはは白いバリアジャケットに
身を包んだ
さやかはすぐ隣に停めてあったバイクに跨るとそのままダイアナン
Ａに向かって走る
さやか
「オーロラ光線！発射！」
さやかが叫ぶ
するとダイアナンＡの後部から虹色の光線が発射される
さやかはその光線の上を駆け上がりダイアナンＡとドッキングする
さやか
「行くわよ！機鋼獣！」
さやかのダイアナンＡが機鋼獣に向かっていく

＊＊＊

甲児とはやての前に現れた３人の女性

甲児はその女性達の名前を呼んだ
はやて
「なんなんや?そのガミアってのは」
甲児
「俺達の世界に居た殺人アンドロイドだ!気をつけろはやて!あの髪に触れたらバラバラにされちまうからな!」
はやて
「き・・・きをつけるわ」
はやては真っ青になって言った
甲児
「やいやい!テメェら何人ん家に土足で入り込んでんだ?来るんならノック位しやがれ!」
甲児が冗談交じりに叫ぶ
だが、ガミアは全く取り合おうとはしない
ガミアQ1
「兜　甲児・・・お前を捕獲する」
ガミアQ2
「手足を切断して・・・持ち帰る」
ガミアQ3
「それが・・・我々の任務」
甲児
「けっ、冗談じゃねぇや!」
甲児は吐き捨てるように言い放った
甲児
「素直についていかねぇと分かったら今度は無理矢理誘拐かよ!とことん腐ってんなテメェら!」
甲児はガミアを睨んで言う
ガミアは今度ははやてを見る
ガミアQ1
「八神　はやて・・・お前は殺す!」

はやて
「何やて！」
ガミアQ2
「首を切り落として、目をくり貫いて鼻を削ぎ落として皮を剥いでやる」
ガミアQ3
「内臓を全て取り出して晒し者にしてやる」
はやて
「・・・・・・・・・・・・」
ガミアの話を聞いてはやては真っ青になった
こいつら全く顔色を変えずに恐ろしい事を口走ったのだ
甲児の言うとおり彼女たちには人間の感情など一切含まれて居ない
人を殺す為に作られた殺人アンドロイドなのだ
そう思った途端、はやての中に恐怖が芽生えた
殺される
その一言が頭の中を何度も過ぎっていた
だが、そんなはやてを助けてくれたのは甲児であった
甲児
「やいやい！そんな物騒な事をはやてちゃんの前で言うんじゃねぇや！夢に出てきたらどうするんだ？」
はやて
「甲児はん・・・」
ガミア
「兜　甲児・・・貴様の弱点は既に把握しているぞ！」
甲児
「何！？」
甲児は目を顰めた
俺の弱点？
一体それは何だ？
そう思う前にガミアは動き出した

ガミア
「それは・・・これだ！」
そう言うと1体のガミアは長い髪を振り出した
だが、その標的は甲児ではなく・・・はやてであった
はやて
「ああ！」
甲児
「あぶねぇ！はやて」
甲児は咄嗟にはやてを庇った
その際に髪は甲児の肩を掠った
服は裂け、其処から鮮血が吹き出る
甲児の顔が苦悶の顔に歪む
幸い切断はされていない
傷もどうやら浅いようだ
出血は派手だが大した怪我ではなかった
甲児
「てめぇら！一体何の真似だ？」
ガミア
「分からんのか？それがお前の弱点だ！」
甲児
「何？」
ガミアQ1
「お前は例え自分の命が危険に晒されようとも己の命より他人の命を優先する。それがお前の致命的な弱点なのだ」
ガミアQ2
「我々は其処に突けば良いだけだ！そうすれば貴様は自滅する」
ガミアQ3
「何とも簡単な任務だ・・・つまらんな」
ガミアは物足りなそうに呟く
はやて

「舐めたらあかんで！うちだって魔道士や！あんたらを倒すくらい」
ガミアQ1
「此処で貴様の魔法を使うのか？」
はやて
「な！」
ガミアQ2
「知っているぞ！貴様の魔法は広域型だ！もしそれで我々を倒したとしても、その時は甲児も巻き添えだ」
はやて
「ぐっ・・・」
ガミアQ3
「最も、そうなる前に貴様の両腕は切断させてもらうがな」
そう言うな否や3人のガミアは一斉にはやてに向かって髪を飛ばすだが、その前に甲児が立ちはだかる
ガミアの髪は甲児の両肩、そして足に刺さる
甲児
「ぐあああああああああああ！」
はやて
「甲児！」
甲児が苦痛の悲鳴を上げる
刺さった箇所から大量の血が吹き出る
だが、ガミアの髪は尚も食い込んでいく
ガミアQ1
「愚かな奴だ・・・見ず知らずの人間の為に己が命を散らすとはな」
ガミアQ2
「所詮人間は全て馬鹿な生き物なのだ」
ガミアQ3
「違い無いな」
ガミア達は卑しい笑いを浮かべる
その笑いは何処か不気味さを感じた

甲児は葉を食いしばりながら仁王立ちしている
その後ろではやては歯を食いしばっていた
自分の魔法を使えば甲児を巻き込んでしまう
だが、このままでは甲児は死んでしまう
はやて
「もうええ！うちの事なんかええからはよ逃げるんや甲児！」
はやては甲児に向かって叫ぶ
だが、甲児ははやての方を向くとフッと笑う
甲児
「ば・・・ばっきゃろう！何処の世界に女をほっといて逃げる男が居るんだよ」
そう言うと甲児は再びガミアの方を向いた
甲児
「男ってのはな・・・自分より弱い奴を助ける為に命を賭けるんだ・・・それになぁ・・・こんなの只のかすり傷だぜ」
はやて
「何やせ我慢しとるんや！どう見たってそりゃ致死量やで！」
はやては甲児の体から流れる血を見た
明らかに既に致死量を超えている
なのに甲児は決して倒れようとはしないでいた
それどころか、甲児の瞳は燃え上がっていた
ガミアQ1
「何故だ・・・何故倒れない？」
ガミアQ2
「貴様のその出血は既に致死量を超えているはず・・・なのに何故？」
ガミアQ3
「理解不能・・・理解不能・・・」
甲児
「へっ・・・教えてやるぜ、ガラクタ共・・・例え死んでも決して

倒れない奴・・・それが人間であり・・・この俺！兜　甲児だあああ！」
甲児は大声で叫んだ
その時、甲児の体が眩い光に包まれた
はやて
「な、甲児！」
甲児
「な、何だ？」
光に包まれた甲児は混乱した
その時、甲児の頭に声が聞こえた
？？？

『見せて貰ったぜ！お前の熱い「闘志」を』
甲児
「だ、誰だお前は？」
？？？
『それでこそ俺の兄弟「兜　甲児」だ！』
甲児
「な、お前・・・まさか・・・うおおおおおおおおわあああああああああ！」
甲児の意識はすぐに現実に引き戻された
次に甲児が目を開くと、自分の変化に驚いた
何と甲児は、何時の間にか戦闘服を着込んでいたのだ
赤い色を基調としたかつてのパイロットスーツ
だが、その中に一つ変わっていた所があった
それは甲児の両手であった
甲児の両手にはパイロットスーツとは色違いのグローブが付けられていた
そして、グローグの甲には「Z」と書かれていた
甲児
「な、何だこりゃ？」

？？？
『それがお前のデバイス「Ｚグローブ」だ』
甲児
「Ｚ・・・グローブ・・・って言うか！お前は誰だよ！」
甲児は頭に響く声に怒鳴った
？？？
「おいおい、兄弟の顔を忘れたのか？」
甲児
「兄弟？」
？？？
「俺達は何時も一緒に戦ってきただろう？どんな辛い戦いだって、俺達は共に戦い抜いてきたじゃねぇか」
謎の声のそれを聞いて甲児は確信した
間違いない
この声の主は
甲児
「お前・・・まさか・・・Ｚ・・・マジンガーＺか？」
マジンガーＺ
『おうよ！お前の相棒であり兄弟であるマジンガーＺだぜ！』
Ｚグローブから甲児の相棒であり、兄弟である愛機、マジンガーＺの声が確かに甲児には聞こえた

＊＊＊

さやか
「スカーレットビーム！」
ダイアナンＡの額からリング状の光線が放たれる
機鋼獣はそれを受けて数歩引き下がる
だが、それだけであった
次の時には機鋼獣は頭にあった鎌を抜くと手に持ち思い切り投げ飛ばしてきた
さやか
「きゃぁ！」
さやかは悲鳴を上げた
凄まじい衝撃が襲ってきたのだ
見るとダイアナンの片腕が無い
先の鎌で吹き飛ばされたのだ
その後鎌は持ち主の下へと帰って行った
それから数秒後、ダイアナンの腕が大地に落下する
切断された箇所からオイルが流れる
その光景はとても痛々しい
もしこれが人間であったなら激痛の余りのた打ち回っていた筈であるフェイト
「さやかさん！」
さやか
「大丈夫よ！フェイトちゃん・・・でも・・・この機鋼獣・・・凄く強い」
さやかは目の前で奇声を上げる機鋼獣を見た
強い
とても強い
ダイアナンでは到底太刀打ち出来る相手では無い
こんな時、さやかの居た世界でならば、颯爽と現れた筈である
鋼の巨体に人間の熱い心を宿した正義の魔神
鉄の城「マジンガーＺ」が来る筈だった

だが、此処はさやかの居た世界では無い
全くの異世界なのだ
そして、この世界にはマジンガーは居ない
唯一機鋼獣に対抗出来るのは自分只一人なのだ
だが、目の前に居る機鋼獣は余りにも強い
その機鋼獣の足元には無残にも切り裂かれた魔道士の死体が転がっていた
中には機鋼獣の熱線により黒こげにされた死体もある
フェイトやシグナム、それにヴィータも無傷と言う訳ではない
彼女たちの服もところどころが破れていたりしていた
そして彼女たちのデバイスには少しだがヒビが入っている
このまま戦い続けても勝ち目は薄い
そんな時
シュラ
「ハハハハハハハハハ！いい様だな魔道士共よ！」
さやか
「貴方は！・・・あしゅら男爵！」
さやかは目の前に現れたシュラを見てそう言った
シュラ
「フン、貴様もそう言うか？我が名はシュラ！機鋼獣指揮将軍である」
シグナム
「機鋼獣・・・指揮将軍・・・だと？」
ヴィータ
「てめぇを倒せば機鋼獣は大人しくなるんだな！」
そう判断したヴィータは真っ先にグラーフアイゼンをシュラ目掛けて叩き付けた
だが、シュラはそれを片手で受け止める
ヴィータ
「な！私のグラーフアイゼンを・・・片手で」

シュラ
「フン、貴様等の力など所詮その程度よ」
そう言ってシュラはヴィータを突き飛ばす
ヴィータ
「グハッ！」
凄まじい衝撃がヴィータを襲う
そんなヴィータをシグナムが止める
シュラ
「冥土の土産に良い事を教えてやろう！今貴様等の本部に私の可愛い娘を進入させた！奴等の目的は兜　甲児の捕獲・・・そして、八神　はやての抹殺だ！」
シグナム・ヴィータ
「な！」
さやか
「何ですって！」
シュラ
「今頃八神　はやては娘達によって殺され肉の塊になっているだろう」
そう言ってシュラは下卑た笑いを浮かべる
さやか
「そんな・・・甲児くん」
さやかは涙目になった機動六課本部を見た

＊＊＊

ガミアQ1
「何だ・・・何が起こったと言うのだ?」
ガミアQ2
「分からん・・・こんな事は初めてだ」
ガミアQ3
「理解・・・出来ん」
ガミア達は己が目を疑った
何故なら目の前にはパイロットスーツに身を包んだ兜甲児が立っていたからだ
しかも先ほどの傷は殆ど無く、血も止まっていた
甲児
「へ、まさかZとこうして話せる日が来るなんてな。夢にまで見てたのが現実になるなんてな」
Z
「喜ぶのは後にしようぜ、それよりあの女をどうする気だ?」
甲児はガミア達を睨んだ
ガミア達は再び髪を浮かせる
甲児
「させるかよ!」
だが、それよりも早く甲児がガミアQ1に近づく
とても早かった
アンドロイドのガミアでさえ着いていけなかった程である
その為反応が遅れた
その隙を突いて甲児はガミアQ1の両方の髪を掴むと力任せに引き千切った
嘘みたいだった
鋼鉄製の糸がまるで紙のように簡単に切れたのだ
甲児
「すげぇ・・・どうなってんだ?」

甲児も驚いていた
ガミアの鋼鉄の糸を引き千切ったのだから驚きである
そんな甲児にZは答える
Z
『そのZグローブをつけたお前は俺と同じ超人になるんだ！そんじょそこらの敵じゃお前に傷一つつける事は出来ないぜ』
甲児
「ま、マジかよ！」
甲児は驚いた
そう、このZグローブをつけた事により、甲児は正真正銘超人、兜甲児となったのだ
ガミアQ2
「Q1、大丈夫か？」
ガミアQ1
「ああ、だが今甲児の相手は分が悪い！まずは女を殺せ」
ガミアQ3
「了解！」
そう言って3人は一斉にはやてに襲い掛かる
Z
『甲児！光子力ビームだ！』
甲児
「何だって！？そんなの出せるのかよ！」
Z
『当たり前だ！早く撃て！』
甲児
「わぁったよ！光子力ビィィィィィィム！」
甲児は指を指して叫んだ
すると指から光の光線が放たれる
光の光線はそのまま3体を貫く
3体のガミアははやての目の前で機能を停止して倒れた

甲児
「す・・・すげぇ・・・本当に出やがった・・・」
駄目元で放ったつもりが出てしまった事に甲児は驚いた
そんな甲児にはやてが近づく
はやて
「凄いなぁ甲児って、何時の間に魔道士になったん?」
甲児
「はぁ?魔道士?俺が?」
はやて
「ちゃうの?」
甲児
「い、嫌、良く分かんねぇよ!第一このグローブだって気がついたら嵌めてたんだし」
甲児は自分の手に嵌っているZグローブを見せた
Z
『オ喋りしてる場合じゃねぇだろう甲児』
甲児
「そうだった、外じゃ機鋼獣が暴れてるんだ!すぐに行かねぇと」
Z
『だったらパイルダーを呼べ!』
甲児
「パイルダーを呼ぶ?そんな事が出来るのか?」
Z
『ああ、外に出てパイルダーの名を呼べ!そうすれば来るぞ!』
甲児
「よし!行くぜ!はやて」
はやて
「ええ?行くって!ちょっと待ちいや!」
急ぎ外へ出る甲児をはやては追う
外へ出た甲児の目に映ったのは3体の機鋼獣に苦戦するダイアナン

Aであった
甲児
「さやかさん！」
はやて
「皆！」
はやては機鋼獣の足元に転がっている魔道士達の亡骸を見て言葉を失くした
どの魔道士もはやてと共にミッドチルダを守ってきた仲間達であったその仲間が無残にも亡骸となって転がっているのだ
甲児
「くそぉ・・・機鋼獣め」
甲児は本部から出てZグローブを天に翳す
そして叫ぶ
甲児
「ジェットパイルダァァァァ！」
甲児のZグローブのZの文字が光り輝く
すると、遥か彼方から深紅のマシン「ジェットパイルダー」が飛んできた
甲児
「すげぇ、マジで来たぜ！」
Z
『驚いてねぇでさっさと乗れ！』
甲児
「分かってるって！」
甲児は目の前に来たパイルダーに乗り込む
そしてそのまま機鋼獣に向かって飛んでいく
甲児
「さやかさん！皆！無事か？」
さやか
「甲児くん！それって・・・ジェットパイルダーなの？」

甲児
「ああ、後は俺に任せてくれ！」
ヴィータ
「何言ってんだ！そんな小型機で勝てる訳あるかよ！」
ヴィータはジェットパイルダーを見て言う
甲児
「へ、言ってくれるじゃねぇかヴィータ！そんじゃ見せてやるぜ！俺の相棒をな！」
ヴィータ
「な！」
シグナム
「相棒だと？」
甲児の乗ったジェットパイルダーは上空に飛びあがる
其処で甲児は大きく息を吸う
そしてカッと目を見開く
甲児
「マジィィィィィィィィィィン・ゴォォォォォォォォォォォォ！」
甲児は叫ぶ
するとパイルダーの真下に巨大な魔方陣が展開する

＊＊＊

スバル
「なのはさん！あれ！」

なのは
「あれは？」
なのは達は目の前に現れた巨大な魔法人を見て驚愕した
その大きさはおよそ１０ｍ弱はある
ティアナ
「あんな巨大な魔法陣、見た事ないですよ」
エリオ
「一体誰が・・・」
キャロ
「エリオ君！あれ」
エリオ
「あれは・・・」
エリオ達は上空を飛ぶジェットパイルダーを見る
ジェットパイルダーは魔方陣の真上に陣取るとゆっくりと降下しだした
それと同時に魔方陣から巨大なロボットが現れた
黒いボディに赤い胸、青い腕に黄色い瞳
雄雄しく聳え立つその巨大は見る人に勇気を与え全ての人に希望を与える
その巨人こそ、甲児の愛機であり兄弟であり、無敵のスーパーロボット
鉄の城「マジンガーＺ」であった
マジンガーＺが完全に出たと同時にパイルダーがマジンガーの頭部に向かって降りる
甲児
「パイルダァァァァァァ！オォォォォォォォン！」
甲児が叫びパイルダーが今マジンガーと一つになった
こうして、この世界に鉄の魔神が降り立ったのだ
マジンガーは両手を天に掲げ唸りを上げる
その姿は正に鋼鉄の巨人であった

エリオ
「凄い・・・あれが・・・マジンガー・・・Z」
エリオは甲児から教わったロボットの名前を呟いた
甲児
「行くぜ！マジンガーZ」
Z
『おう！久々に大暴れしてやるぜ！』
マジンガーZが腕を合わせて言う
甲児の体を通してマジンガーの鼓動を感じる
今甲児とZは一心同体となったのだ
シュラ
「な、何だあの機鋼獣は？」
突然のロボットの出現にシュラは戸惑う
甲児
「やい男女！こいつはてめぇの言う機鋼獣じゃねぇ！人類の希望と平和を守る正義のスーパーロボット！鉄の城、マジンガーZだぁぁぁ！」
シュラを指差して甲児は叫ぶ
シュラ
「マジンガーZだと・・・おのれえええええええ！機鋼獣軍団よ！相手はたかが一体だ！叩き潰してしまえ！」
シュラの命を受けまずは2体のモルモットンがZに向かった
モルモットンがZに向かって拳を突き出す
だが、
甲児
「おせぇ！」
Zはモルモットンの腕を掴み、そのまま強引に引き千切る
ブチブチとコードが千切れる音がする
火花を放ってモルモットンの腕が千切られた
その腕を放り投げてZはモルモットンの胴体目掛けて渾身の拳を叩

き込む
Ｚの拳はそのままモルモットンの体を突き抜ける
モルモットンはそのまま数秒痙攣した後爆発した
その爆煙からＺは猛然と現れる
今度はもう一体のモルモットンの頭を掴む
そしてそのまま握りつぶしてしまった
更に棒立ちになったモルモットンの横腹に向かって右回し蹴りを放つ
それを食らったモルモットンは胴体から真っ二つにされて爆発する
シュラ
「な・・・なんと言う事だ！ええい！ガラダブラよ！お前は無敵だ！奴を叩き潰せ！」
ガラダブラ
『ギシャアアアアアアアアアアアア！』
ガラダブラはマジンガーＺに向かって二本の鎌を放り投げる
二本の鎌は回転しながらまっすぐＺに向かっていく
だが、Ｚはその鎌を片手で払いのける
甲児
「そんなもんでこの俺とＺを倒す気かよ！」
甲児が睨みながら言う
その光景にシュラが怯える
甲児
「テメェらが傷つけた俺の仲間たちの分・・・１００倍にして返してやるぜ！」
マジンガーは両腕を突き出す
甲児
「食らえ！ロケットパァァァンチ！」
Ｚの両腕は轟音を上げて飛び出した
鋼鉄の腕は猛スピードで飛行し、斜線上に居たガラダブラの首と片腕を吹き飛ばす
その後、マジンガーの腕は放物線を描いてマジンガーの腕に戻った

シュラ
「な、何と・・・ガラダブラの装甲をまるで紙のように・・・」
シュラは余りの光景に絶句する
スバル
「す・・・凄い！」
ティアナ
「あれが・・・マジンガーの強さ・・・」
なのは
「私達が勝てなかった機鋼獣を・・・圧倒してる」
なのは達は最早言葉が無かった
圧倒的だったのだ
かつて、機鋼獣を相手にする際は管理局の魔道士をおよそ１００人近く動員して挑んだのだ
だが、それでも機鋼獣を倒すには至らなかった
それが、今目の前に居る鋼鉄の巨人は一撃の下に２体の機鋼獣を倒し、更には真の機鋼獣を圧倒しているのだ
甲児
「まだオネンネするのは早いぜ機鋼獣！」
Ｚが腕を鳴らしながら近づく
その時、ガラダブラの腹が突如開いた
甲児
「何！」
開いた腹から巨大なミサイルが飛び出したのだ
ミサイルはＺに当たると激しく爆発を起した
凄まじい威力であった
爆風がフェイト達に伝わってきた
シュラ
「ハハハハハ！様ァ見ろ！ガラダブラにはこういった奥の手があったのだ！これであのマジンガーもお陀仏だろう」
シュラがしてやったりと言った感じの声を上げる

フェイト
「そんな・・・」
シグナム
「あの爆発では・・・幾らマジンガーといえども」
ヴィータ
「畜生・・・」
一同の顔に暗い色が浮ぶ
だが、その顔は瞬く間に晴れていった
シュラ
「な、なに！」
煙の中から現れたのは、無傷のマジンガーZであった
マジンガーは怒りの篭った形相でガラダブラを睨む
甲児
「そんな武器でマジンガーを倒せると思ったのか？言った筈だぜ！１００倍返しだってなぁ！」
マジンガーはガラダブラの前で腕を天に掲げ仁王立ちした
すると胸の装甲版に熱が伝わる
あまりの熱のせいか蒸気が吹き出る
甲児
「くらえ！ブレストファイヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」
Zの胸から赤い熱線が放たれた
マジンガーZの最強の必殺技ブレストファイヤーだ
ブレストファイヤーはガラダブラを包み込む
ガラダブラの体はみるみるうちに溶けて液状の塊になりそのまま地面に溶け込んでしまった
シュラ
「おおお、何と言う事だ！撤退だ！」
シュラはそう言って霧のように消えてしまった
甲児

「やったぜぇぇぇ！見たか！俺とマジンガーの力を！」
甲児は機動六課の魔道士達に向かって腕を翳して叫んだ
それを見た魔道士達は歓喜の声を上げた
誰もがマジンガーZを見て希望を胸に抱いた
見る人に希望を与え、絶望の淵に沈む人々を救う物、それが鉄の城、
マジンガーZなのだ

＊＊＊

場所は変わり、此処は何処とも知れぬ場所
其処には一人の預言者が立っていた
預言者はマジンガーZの戦いを遠くから見ていたのだ
？？？

「遂に目覚めたのだな・・・甲児よ・・・だが、本当の戦いはこれ
からだ！これから先、もっと強力な機鋼獣が現れる！だが、お前と
マジンガーなら決して負ける事は無い！戦うんだ！甲児」
そう言って老人は霧の如く何処かへ消えてしまった

鉄の魔神　終

次回予告

遂に俺とマジンガーがミッドチルダに降り立ったぜ
これからはどんな機鋼獣が現れたって怖くねぇぜ
と思ったら、シグナムがいきなり俺と訓練したいだってぇ！？
勘弁してくれ！俺は可愛い子ちゃんを殴る趣味は無いんだよぉぉ

次回『訓練』に

テイィィィィィク、オォォォォォォォフ！

鉄の魔神　後編（後書き）

まさかの前後編になってしまった（汗）
後ちゃんと原作キャラにあってるか不安だ

解説2（前書き）

今回は新たに出現した機鋼獣や甲児のデバイスについて説明します

解説2

殺人アンドロイド　ガミアQ

甲児の世界にも出てきた殺人アンドロイド
金髪の長い髪を両端に束ねたツインテールの髪型をした美しい女性である
だが、その外見とは裏腹に殺しを生業とするロボットである
長い髪はその1本1本が鋼鉄製の糸で作られていてそれに斬られればたちまちにバラバラにされてしまう
甲児の捕獲とはやての抹殺を任務として機動六課本部に潜入し、甲児達を追い詰めるも其処でZの力に目覚めた甲児の光子力ビームを受けて機能停止にされる
因みに1体の呼称はそれぞれ番号で行われており「ガミアQ1」等名前の後に数字を入れて呼び合っている

機鋼獣ガラダブラ

身長：30m
体重：50t

機械獣「ガラダK7」そして「ダブラスM2」を合わせたような機鋼獣
そのパワーと強度はモルモットンの比にならない程であり、なのはのスターライトブレイカーやはやてのラグナロクブレイカーですら耐え切るほどと予想される
管理局の魔道士やダイアナンAを窮地に追い込むも、甲児の乗ったマジンガーZの放ったブレストファイヤーの前に溶かされる
甲児とマジンガーがミッドチルダにやってきて始めて倒された機鋼

獣の記念すべき第一号となった栄光ある機鋼獣である
主な武器は頭の鎌と両首から放つ熱線
そしてとっておきの武器として胸部に大型ミサイルを内臓している
その威力はニトロ爆弾のほぼ１０倍といわれている

機鋼獣プテラン

身長：（羽を広げた状態で）５ｍ
体重：０．５ｔ

偵察用に作られた機鋼獣
だが、それでも対魔法装備は施されている
空中を飛行でき最高速度はマッハ２
両目から放つ光線は浴びる物を原子レベルにまで分解してしまう
機動六課の乗ったヘリを追い詰めるも甲児の偶然の策により撃墜される

Ｚグローブ

甲児が内なる熱い闘志を燃やした事により目覚めた甲児専用のデバイス
グローブ型でありその甲には「Ｚ」と書かれている
瞬時にパイロットスーツを着ることが出来、またそのスーツはマジンガーとほぼ同等の強度を誇る
また、指先からは光子力ビームを放つことが出来、他にもまだまだ隠された力があるようである
因みにこのグローブを嵌める事で甲児はマジンガーＺと会話が出来るようになった

解説2（後書き）

とまぁ、こんな感じです。はい

特訓（前書き）

今回、甲児とシグナムが戦う事に
どうなる甲児
どうする甲児

特訓

時空管理局のとある一室には、深い隈髭を生やした太めの男性「レジアス・ゲイル」が頭を抱えていた
その隣で彼の秘書であり娘である「オーリス・ゲイル」が心配そうに見ていた
オーリス
「まだあの老人の言った事を気に掛けているのですか?」
レジアス
「うむ・・・」
オーリスの問いにレジアスは重々しく頷いた
元々険しい顔が更に険しくなる
レジアス
「一体・・・あの老人は何者だったんだ・・・それに・・・あの言葉は・・・」
レジアスは老人の事を考えていた

それは、今から少し遡る

其処ではある事で議論されていた
それは次元漂流者が使用していた兵器、そして現在ミッドチルダを襲っている機鋼獣についてであった
議員A
「なんとしてもあの次元漂流者を逮捕して質量兵器を封印すべきだ!」

議員Ｂ
「だが、あの兵器が機鋼獣を破壊したのは事実だ！この場はあれを使用すべきでは無いのか？」
議員Ｃ
「貴様！そのせいで過去に何があったのか忘れた訳ではあるまいな？」
議員Ｄ
「では我等の力だけで機鋼獣を倒せるとでも言うのか？」
議員Ｅ
「だからと言ってあんな余所者に頼っていられるか！」
議会は大混乱していた
そんな中、レジアス・ゲイルは居た
彼は思い顔をしていた
正直、彼自身としては質量兵器を使用する巨人などを許す訳にはいかない
だが、このまま悪戯に魔道士を死に追いやってよいものなのか
現状の魔道士の力では例えＳランクの魔道士でも機鋼獣を倒すのはまず無理だ
しかしその為に質量兵器を搭載した巨人を使って良い物か？
そんな思いが彼の中で渦巻いていた
そんな時、辺りが暗くなってきた
日が落ちたからではない
元々この中には日の光は届かない
では何故か、辺りの明かりが突如消え始めたのだ
そして、辺りを漆黒の闇が覆う
議員達はパニックに陥った
レジアスも事態を飲み込めず視線を泳がせる
その時、
？？？

「間の無く、この世の終わりが訪れる」

突如、老人の声が聞こえた
すると、辺りの電気が戻り光がついた
だが、視界が回復すると、其処には薄汚い老人が議会の中心に立っていた
議員
「な、なんだ貴様は！」
議員の一人が立ち上がって老人を指差す
老人はゆっくりと自分を指差す議員の方を向く
その顔は岩のような色をしており目に瞳は無い
白髪に長い髭を生やした布着れを体に巻いた老人は口を開く
？？？

「この世の終わりを告げる為に遣わされた者・・・とでも言っておこう」
議員
「この世の終わりだと？ふざけてるのか？」
議員達は老人を見て鼻を鳴らす
其処へ武装した魔道士達がやってきた
議会の異変に気づいてやってきたのだ
魔道士達は老人に向けてデバイスを構える
魔道士
「そこの老人！今すぐこちらの指示に従え！そうすれば手荒な真似はしない！」
魔道士の一人が叫ぶ
だが、老人は意に返さない
それどころか老人は話を続ける
？？？

「この世界を暗雲に包もうと機械の獣達に続き、遥か地底の底から眠りし悪魔達が目覚める、奴等はこの地上を取り戻そうと地上に住

む人々を全て滅ぼすだろう」
魔道士
「何を訳の分からない事を？」
議員
「何をしている！さっさとこの老人を捕らえろ！」
議員がヒステリックに老人を指差す
魔道士達はそれに答えるように一斉にバインドをかける
老人の体に光の輪がかけられる
？？？
「愚かな・・・」
だが、老人はそのバインドを片手で破壊する
魔道士
「な！！」
それには魔道士達と議員達は驚きの顔を見せる
？？？
「嘘だと思っているのか？ならば見せてやろう・・・この世界の未来の姿をな」
老人はそういうと天に向かって杖を掲げた
すると杖の先から空間の歪みが現れ、其処から未来のミッドチルダと思われる姿が見えた
だが、それはおぞましい物であった
町は紅蓮の炎に焼かれ、辺りには人の死体が転がっており、その上を機械の獣が歩く
グチャリと音を立てて死体を踏み潰す
その上で機械の獣が雄たけびを上げる
辺りには死臭が漂っていた
正に死の世界であった
議員
「こ・・・これが・・・未来の世界だと言うのか？・・・」
？？？

「そう・・・それもその未来は間も無く訪れる・・・機械と鋼鉄により作られた獣、『機鋼獣』の手によって」
老人の目がカッと見開かれる
その姿を見て議員達はおろか魔道士達の顔も恐怖に彩られる
そんな中、レジアスは立ち上がる
レジアス
「では、どうすればその未来を変えられるんだ!」
???
「異世界から来たりし若者達の力・・・そして、鋼鉄の鎧を身に纏った『鉄の巨人(くろがね)』の力を使うのだ」
レジアス
「鉄の・・・巨人・・・・だと?」
???
「運命を変える事が出来るのは・・・その巨人無しでは無理な事よ・・・良く考えるのだな」
そう言い残すと老人は霧の様に消えてしまった
議員達は青ざめた顔をしていた
魔道士達は余りの通告に絶望の顔に彩られ、中にはデバイスを落としガクリと膝を着く者も居た
そんな中、レジアスは決断したかのように立ち上がる
レジアス
「皆さん!どうだろうか?この際設立されたばかりの「機動六課」にその質量兵器を管理させると言うのは」
レジアスの言葉に議員達が驚く
議員
「しょ、正気かね?そんな事をすればどんな事になるか・・・」
レジアス
「ですが、未来を変えるには仕方の無い事だと思えます・・・背に腹は変えられません」
レジアスの目がジッと議員達を睨みつける

それには議員達は反論出来なかった
結局、異世界から来た質量兵器は機動六課が管理するという結論で纏まったのであった
（相変わらずのご都合主義である）

＊＊＊

その頃、甲児達は戦闘の後処理を行っていた
負傷した魔道士達の治療、そして殉職した魔道士達の埋葬であった
中には目を覆いたくなるような死に様をした魔道士達も居た
はやては思わず口元を抑えた
喉まででかかる不快感を必死に耐えた
そんな中、甲児とさやかは黙々と魔道士達の亡骸を運ぶ
２人共、何処か悲しい顔をしていた
甲児
「すまねぇな・・・俺がモタモタしてたばっかりに・・・安らかに眠ってくれよ」
さやか
「この世界は私達がきっと守ってみせるから・・・今は静かにお休みなさい」
２人は死体の一体一体にそう語りながら運ぶ
はやてはそんな甲児達を見て自分は何をやっているのだろうかと思った
彼等は自分にとって掛け替えの無い仲間であった筈だ

それが自分は何もしないでこんな事をしてて良い物か？
否、そんな筈が無い
ならばどうするべきか
そう思った時、はやては自然と体が動いた
はやて
「うちも手伝うで！」
はやても甲児達と一緒に魔道士の亡骸を抱える
その亡骸には両足と右手が無かった
機鋼獣によって切断されたのだ
はやてはこみ上げる不快感を抑えながらも死体を運ぶ
甲児
「おい、無理しなくて良いんだぜ」
はやて
「いんや！この人等はうちの仲間やったんや！うちが最後に弔ってやらんと可愛そうや！」
さやか
「優しいのね・・・はやてちゃん」
甲児
「ああ、まだ俺達と同じ年なのにな」
甲児達ははやての背中がとても頼もしく見えた
それから暫くして、治療を終えた残りのメンバーも駆けつけて一緒に死体を運んだ
魔道士の亡骸はそれぞれ簡素な造りの棺桶に収められた
そして、安らかに眠れるようにと埋葬されていった
甲児
「何処の世界に行っても、死に別れってのは辛いな・・・」
さやか
「そうね・・・」
寂しそうな顔をする甲児の側にさやかは寄り添う
その後ろでなのは達もまた悲しそうな顔をした

甲児達は静かに眠った魔道士達に向かって両手を合わせ、静かに黙祷を捧げた
（分かりにくいと思うが遺体はちゃんと墓地に送ったのであった）

＊＊＊

甲児
「へ～、結構いい部屋だなぁ」
埋葬を終えた甲児達は機動六課の宿泊部屋に来ていたはやて
「本当なら甲児個人の部屋を用意してやりたかったんやけどさっきの襲撃で少しやられてもうてな、甲児はエリオと共同で止まって欲しいんや」
甲児
「おう、俺は別に構わねぇぜ」
エリオ
「宜しくお願いします。甲児さん」
甲児
「おう、宜しくな！エリオ」
甲児はそう言うと親指を立てるはやて
「さやかさんはまた別の部屋やからついてきてな」
さやか
「分かったわ」

さやかははやてについていき部屋を出た
部屋の中は甲児とエリオのみとなった
甲児
「だ～～～、今日は何か疲れたぜ～～～」
2人だけになると甲児は早速部屋の真ん中で大の字になって寝る
そんな甲児を見てエリオが苦笑いを浮かべる
エリオ
「大変だったんですね、甲児さん（汗」
甲児
「当たり前だぜ！何せ元の世界で実験してたらいきなりこの世界に飛ばされるし、そしたらいきなり妙な兵士に襲われるし、今度はあのマネキンもどきに襲われるし、ヴィータに殴られるし、鳥に襲われるし、ヴィータに殴られるし、殺人アンドロイドに襲われるしって、大変だったんだぜ」
さり気にヴィータに殴られた事を根に持つ甲児であった
エリオ
「そ、それは・・・大変ですね（汗」
エリオは良くマンガで使われるような汗マークを顔に浮かべる
甲児
「そういやぁよぉ、エリオ」
エリオ
「何ですか？」
甲児
「お前どう見ても１０歳位だよなぁ、親とかはいねぇのか？」
エリオ
「・・・・・」
甲児の問いにエリオは黙り込んだ
それを見て甲児はバツの悪い顔をする
甲児
「悪い、聞いちゃ不味かったか・・・」

エリオ
「いいえ、そんな事無いですよ」
エリオは笑って言った
だが、それは作り笑いだと甲児はすぐに分かった
それを見てエリオの辿ってきた人生が決して安楽な物では無いのだと甲児は察した
ふと、エリオが口を開いた
エリオ
「実は・・・僕は普通の人間じゃないんです」
甲児
「どういう事だ?」
エリオ
「僕は・・・『プロジェクトF．A．T．E』で作られたクローン・・・人造生命体なんです」
甲児
「プロジェクト・・・フェイト?・・・何か、フェイトちゃんと同じ名前だなぁ・・・・まさか、フェイトちゃんも!」
エリオ
「はい・・・僕と同じ人造生命体です」
甲児
「なんてこった・・・」
エリオ
「僕は昔、モンディアル家の病死した一人息子を元に作られたんですが・・・それを研究施設の人達にその事を突きつけられた両親が僕を手放したんです。その後、送られた施設では皆僕の事を実験台かモルモットとしか見てなかったんです」
甲児
「ひでぇ話だな・・・」
甲児は胸の内が熱くなってきた
例えどんな理由があろうと、今此処に居るエリオは甲児と何ら変わ

らない人間なのだ
それを人間として扱わないなんて非人道的過ぎる行為である
エリオ
「そのせいで、僕は誰も信じられなくなってしまったんです・・・
でも、そんな僕に手を差し伸べてくれたのが・・・フェイトさんだ
ったんです」
甲児
「フェイトちゃんが？」
エリオ
「フェイトさんは、誰も信じられなかった僕を体を張って救ってく
れたんです・・・今ではフェイトさんは僕に取って母みたいな存在
なんです」
甲児
「へぇ・・・って、ちょっとまて！母ぁぁ！一体どうなってんだ！
？」
甲児はエリオの言葉に驚いた
エリオ
「えっと・・・僕とキャロはフェイトさんの・・・その・・・養子
なんです」
甲児
「マジかよ・・・あんな美人なお袋さんが居るなんて・・・お前幸
せもんだなぁ」
甲児はさも羨ましそうにエリオを見た
エリオはそんな甲児に苦笑いを浮かべる
エリオ
「そう言えば、甲児さんにはお母さんは居ないんですか？」
甲児
「いねぇよ」
エリオ
「え？」

甲児
「俺のお袋は、俺の弟「シロー」を生んですぐに死んだんだ・・・
マジンガーの実験でな・・・」
エリオ
「・・・・・」
エリオは黙り込んだ
自分は何て無神経な事を聞いてしまったんだろう
そう思っていたのだろう
そんなエリオの頭を甲児は優しく撫でる
甲児
「そんなしょぼくれた顔すんなよエリオ。俺は別に気にしちゃいねぇよ」
エリオ
「甲児さん・・・」
甲児
「それにな、今俺には家族同然の仲間達が居るんだ。寂しさなんて感じる暇すらねぇぜ」
エリオ
「ハハハ・・・凄い家族なんですね、甲児さんの家族って」
甲児
「まぁな。何かと俺の頭を冷やさせる暴力女に特訓マニアの鬼教官にボケの天才とかいろいろ居るぜ」
甲児は自分の家族を教えた
だが、今の発言を本人達に聞かれたら・・・恐らく甲児は生きて朝日を拝む事はできないだろう
エリオ
「・・・何だか、甲児さんの家族に会いたくなってきましたよ」
甲児
「そうか?ま、その内会えるさ。気長に待ちな」
エリオ

「はい！」
甲児
「さてと、んじゃ風呂でも入ってさっさと寝るか」
エリオ
「そうですね、甲児さん！」
甲児とエリオはそう言って部屋を出た

＊＊＊

翌日
甲児
「ふぁ～～～あぁ、おはよう、さやかさん」
さやか
「遅いわよ！甲児くん、なのはちゃん達はもうとっくに起きて訓練してるわよ」
大あくびをする甲児にさやかが愚痴った
甲児はまだ眠いのか目を擦って再び大あくびをする
因みに今甲児はさやかに連れられてなのは達の居る特訓場を目指していた
昨日汗を流した後流石に疲れたのかすぐに2人は寝てしまったのだ
それで翌朝、甲児はさやかに叩き起こされたのであった
それで、今に至るのだ
さやか
「ほら、着いたわよ」

甲児
「へ～、施設の中にこんな施設があるんだな～」
甲児は広い訓練場を見た
これ位の大きさなら恐らくマジンガーが暴れまわっても大丈夫だろう
そう思っていると
なのは
「あ、おはよう。甲児さん。さやかさん」
さやか
「おはよう、なのはちゃん」
甲児
「よう！元気そうじゃねぇか」
なのは
「アハハ、何時までも沈んでられないからね。それより、皆の特訓を見てみる？」
甲児
「特訓？」
甲児はビルの上から新人フォワード達の特訓の風景を見た
そして、ふと甲児は呟いた
甲児
「つくづくお前等のって魔法とは言い難いなぁ」
甲児の一言にその場に居合わせたなのは、さやか、フェイト、ヴィータ、シグナムはずっこける
なのは
「ええと・・・一応あれ魔法なんだけど・・・」
甲児
「あれで魔法かよ！どう見ても機械じゃねぇか！あれじゃ『魔法少女リリカルなのは』よりも『機甲少女メタリックなのは』って名乗った方がしっくりくるぞ！」
甲児の意味不明なぼやきに一同は対応に困る
そんな甲児はとりあえず置いておいて、なのはは下で訓練している

４人に目をやる
なのは
「ところで、甲児さんから見て家の新人達はどうかな？」
甲児
「あん？あいつらか？」
甲児は下で訓練しているスバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人
を見た
４人共連携して訓練用のターゲットを次々と破壊していく
甲児
「へぇ、皆結構やるじゃねぇか」
さやか
「そうね、つくづく魔法って凄いわねぇ」
さやかと甲児は４人の戦い振りに太鼓判を押す
だが、そんな中・・・甲児はある事に気づいた
甲児
「何か・・・ティアナの奴・・・少し無理してないか？」
さやか
「無理してるって？」
甲児
「何て言うか・・・力だけを求めてるって言うか・・・無理して強
くなろうとしてるのが見えるんだよなぁ」
甲児の呟きになのはが頷く
なのは
「うん・・・それは私としても悩みの種なんだよね」
さやか
「なんだか・・・昔の甲児くんみたいね」
甲児
「ああ・・・そうだな」
なのは
「甲児さんも昔はそうだったんですか？」

甲児
「ああ・・・あれは、俺が始めてマジンガーに乗った時だよ」

それは今からおよそ3年前、甲児が１６の時であった
甲児の祖父『兜　十蔵』は悪の科学者『Ｄｒ．ヘル』の軍団の手により殺されてしまったのだ
両親を失い、弟と共に大事な家族であった祖父を奪ったＤｒ．ヘルの軍団を甲児は強く憎み、彼等を滅ぼす為に甲児は無茶な戦いをしていたのだ
その為マジンガー自身も傷を負い、甲児も重傷を負う事も度々あっただが、それでも甲児は無茶を押し通して戦い続けた
そんな甲児を今の風にしてくれたのは、他でもない・・・さやかやボス達の掛け替えのない仲間たちであった
甲児は彼等の助力もあり今でも結構無茶な戦いはするがそれでも昔程酷い戦いはしなくなり、結果として祖父の仇を討つ事が出来たのだなのは

「そんな事が・・・」
甲児
「ああ・・・だから、今のティアナは昔の俺と同じであんな戦い方じゃ何時か自分が壊れちまう」
十蔵
「全くじゃなぁ・・・折角の可愛い子ちゃんがズタボロになるんは見るに耐えんわい」
甲児
「そうだなぁ・・・って！うわぁ！お爺ちゃん！何時から其処に居たんだよ」
気がつけば、甲児の肩に十蔵が座っていた
本当に神出鬼没とは彼の事を指すのだろう
フェイト

「私達もティアナの事についてはいろいろとしてるんだけど・・・
あの子頑固だから」
ヴィータ
「なのはの誘いも断ってたからなぁ」
甲児
「ティアナの奴って、何か目標ってあるのか？」
シグナム
「ティアナは執務間になるのが目的らしいんだ」
甲児
「執務間？」
フェイト
「事件の際には先だって行動する役職の事です」
甲児
「へぇ・・・結構凄いの目指してるんだなぁ、ティアナの奴」
さやか
「そうねぇ・・・甲児くんがティアナちゃんと同じ頃の時はとにかく脳みそ筋肉だったしねぇ」
甲児
「う・・・痛いトコつくねぇさやかさん」
さやか
「だってそうでしょ！テストで何時も赤点ばっかりとって卒業まで一体何回補習受けたと思ってるの？」
甲児
「返す言葉もありません（涙」
なのは
「アハハハハハ（汗」
甲児とさやかの会話になのは達は苦笑いを浮かべていた
甲児
「お！どうやら終ったみたいだぜ」
下では特訓のメニューを終えお互いに反省しあってるメンバーが居た

なのは
「皆大分動きがよくなって来たね」
ヴィータ
「だけどまだまだだな。もっと頑張って貰わねぇと実戦で怪我しちまうぜ」
ヴィータが心配そうに呟く
甲児
「なぁ、さやかさん」
さやか
「何、甲児くん？」
甲児
「今の特訓・・・もし鉄也さんが見たら何て言うと思う？」
さやか
「恐らく・・・・」
2人はもし鉄也が居た場合を想像した

鉄也
「こんな特訓で満足してるようじゃ甘いな！俺がみっちりしごいてやる！」
と言って鉄也が4人に地獄の特訓をさせている光景が目に浮んだ
その時の鉄也の顔は鬼にも悪魔にも見えたと言う

甲児
「絶対・・・こうなるよな（汗」
さやか
「・・・・そうね（汗」
2人は冷や汗を流した

鉄也の鬼教官ぶりは甲児達の耳に入っている
何でも歴戦のベテラン兵士ですら鉄也の特訓と聞いただけで尻尾を巻いて逃げ出すと言う程なのだから
今でも死人こそ出てはいないが鉄也の特訓にまともについてきた者は今の所一人も居ないのだ
なのは
「そうだ!甲児さんも特訓やってみますか?」
甲児
「お!良いのか?」
なのは
「ええ、はやてちゃんから聞いたけど、甲児さんにもデバイスが出来たって話ですし、皆にとっても良い経験になると思うんです」
なのはの言葉に甲児はくすぐったい思いがした
まさか其処まで言われるとは
だが、悪くは無い
丁度自分もこのZグローブを試してみたいと思っていた所であった
断る理由は無い
甲児
「良いぜ、何をすれば良いんだ?」
なのは
「うん・・・それは」
なのはが言おうとした時
すっと甲児の前にシグナムが現れた
シグナム
「私との模擬戦だ」
甲児
「んなにぃ!」
甲児は目を見開いた
シグナム
「私では不満か?」

甲児
「嫌、そうじゃねぇよ！俺もてっきりエリオ達みたいにターゲットを破壊するんじゃねぇの？」
シグナム
「お前にはあれは簡単すぎるだろう・・・それに聞いたぞ。お前はあの殺人アンドロイドを一人で倒したようだな」
甲児
「ま・・・まぁなぁ・・・」
シグナムは前日はやてに甲児に助けられた事を皆に話したのだ
突如甲児の腕にデバイス『Zグローブ』が装着された事
そして、それを使って殺人アンドロイド『ガミアQ』を一撃の元に葬り去った事を
それを聞いたシグナムは甲児の強さに興味を持ったのだ
戦って見たい
出来れば・・・全力で
シグナム
「お前の力量を見てみたいんだ。と言う訳でだ・・・殺り合おうじゃないか」
甲児
「おい！字が違うぞ！第一俺は女子供と殴りあう趣味はねぇ！」
甲児が顔を青くして必死に断ろうとするだが、
十蔵
「ええじゃないか甲児！やってやれよ」
甲児
「お、お爺ちゃん！？」
十蔵
（それにこれはチャンスじゃぞぉ！特訓と言っておいてドサクサに紛れてシグナムちゃんのボインに触れるチャンスじゃぞぉ）
甲児

（あのなぁ・・・そんな余裕は明らかにねぇだろう！俺はまだシグナムの実力を知らねぇんだしよぉ）
甲児と十蔵は互いに耳打ちする
甲児の言うとおりである
甲児はまだシグナムの実力を知らないのだ
知っているのはなのは達とさやか位である
咄嗟に甲児はシグナムを見た
シグナムはやる気マックスである
明らかにやるきだ
その証拠にシグナムは既にデバイスを装備してバリアジャケットを纏っている
甲児は軽く溜息をついた
甲児
「わぁったよ・・・その変わり、条件がある」

＊＊＊

スバル達フォワードメンバーは特訓場から甲児の居たところに来ていた
そして、甲児とシグナムの模擬戦をやると聞いて見に来たのだ
スバル
「甲児さん・・・大丈夫かなぁ（汗」
ティアナ
「分かんないわよ・・・何せ相手があのシグナム副隊長だし（汗」

エリオ
「甲児さん・・・無事に帰ってくれれば良いんですけど・・・」
キャロ
「心配だねぇ（汗」
すると、キャロの横に白い小さな竜が現れた
さやか
「あら、キャロちゃん！その白いトカゲって誰？」
キャロ
「あ、これはフリードリヒと言いまして竜の子供なんです」
さやか
「へ～、宜しくね、フリード」
フリード
「きゅく～」
フリードは軽く鳴いてさやかに挨拶する
すると、下の方でパイロットスーツを身にまとった甲児が現れる
その先にはシグナムがレヴァンティンを構えて待っている
なのは
「あ、始まるみたいだよ」
フェイト
「お手並み拝見だね」
ヴィータ
「ま、三枚に卸されない事を祈るか」
なのは
「ぶ、不気味な事言わないでよヴィータちゃん（汗」
なのはは思わず青ざめた

＊＊＊

甲児とシグナムはお互いに見合っていた
甲児は両手に嵌めたZグローブをギュッと締めて、シグナムはレヴァンティンを構える
甲児
「シグナムさんよぉ、さっき言った事・・・頼むぜ」
シグナム
「仕方ない・・・お前がそういう人間なんだったら止むを得んか」
シグナムは溜息混じりに言った
甲児の出した条件はこうである
甲児
「あんたは１００％の実力で来て良いぜ、その変わり俺があんたに触れればそれで仕舞いって事で」
要するに全力で来るシグナムに何処でも良いから触れれば終わりと言う条件をつけてきたのだ
最初は舐めているのかと思ったが、甲児曰く「俺は弱い奴と美人は死んでも殴らない」と言ってきたので仕方なくそれで承諾した
シグナム
「フッ・・・ならば触れる前にお前を切り刻むまでの事・・・」
甲児
「サラリと恐ろしい事呟くの止めてくんない（汗」
シグナムの顔つきが変わった
明らかに獲物を狩る狩人の目であった
それを見た甲児は青ざめる
まるで腹を空かした狼に出くわしたウサギのようである
甲児
（さて・・・どう出るかな）

甲児は頭の中で何度もシミュレーションしていた
だが、甲児にはシグナムの戦闘データがほぼ皆無なのだ
その為まずは少し戦ってみないと分からない所がある
甲児
（ま、何とかなるだろうな・・・）
気楽に思いながら甲児は構える
やがて、開戦の合図とも思えるシグナルが鳴らされる
すると、シグナムは猛然と甲児との間の距離を詰める
それに甲児は驚く
甲児
「は、はえええええええええええ！」
シグナム
「はぁぁっ！」
シグナムはまず横薙ぎにレヴァンティンを振った
甲児はそれを屈んでかわす
数本の毛が切れる感覚がした
顔中が汗で濡れる
甲児
（は、はえええええええええ！何だ今の！あのスピードで来るのかよ！こりゃ油断してたら真っ二つだな）
そのスピードに比べたら昨日の殺人アンドロイド等遅く感じる程である
そう思った甲児はバク転してシグナムと距離を離す
そして、指先をシグナムに向ける
甲児
「光子力ビーム！」
甲児の指先から光の粒子が放たれる
シグナムはそれをギリギリでかわす
シグナム
「この程度か！兜　甲児！」

そしてかわしざまに距離を詰め今度は兜割の要領で甲児の頭上に向けてレヴァンティンを振り下ろす
甲児
「んなろおおおおお！」
甲児はそれを白刃取りで受け止める
グローブから少量だが赤い雫が滴る
互いに目を見合う
ふと、シグナムが下がり甲児と距離を開ける
甲児
「何だ？」
甲児はシグナムの突然の行動に驚く
シグナム
「行くぞ！レヴァンティン」
レヴァンティン
『Ｃｏｎｓｅｎｔ．』
シグナムはレヴァンティンのカードリッジをロードする
するとレヴァンティンの刀身に炎が集まる
甲児
「げぇっ！」
甲児はそれを見て危険を察した
シグナム
「紫電一閃！」
炎を帯びたレヴァンティンを甲児に向けて放つ
辺りは爆煙に包まれて甲児の姿は見えなくなった
なのは
「し・・・シグナム！！」
エリオ
「こ、甲児さん！」
一同は甲児の身を案じた
一方で、シグナムは構えを解いた

恐らく仕留めたと思ったのだろう
シグナム
「もう少し出来ると思ったのだが・・・この程度か」
シグナムがフッと鼻を鳴らす
その時、
甲児
「おいおい、そう簡単に殺さないでくんねぇか？」
シグナム
「！！！」
シグナムは声のした方を見た
其処では両腕を目の前でクロスしてシグナムの一撃を防ぎきった甲児が居た
だが、完全に防げた訳ではなく、甲児の額には少し血が滲んでいた
シグナム
「やるな・・・私の紫電一閃を初見で防いだのは貴様が始めてだぞ」
甲児
「そりゃどうも」
甲児は軽く笑う
まだ明らかに余裕を持っていると言った表情である
久しぶりの強敵の登場にシグナムは内心心が躍った
これ程充実した戦いは何時以来だろう
自然とシグナムは笑っていた
そして笑いながらシグナムはまるで舞うかのように甲児に切りかかる
それを甲児は全てかわす
激しい攻防であった
シグナムが切りかかれば甲児はそれを身を翻してかわし、またはグローブを剣の腹に当てて打点をずらし、捌いていく
それは正に達人同士の戦いそのものであった
ヴィータ
「お、おい・・・マジかよ・・・あのシグナムと此処まで戦うなん

てよぉ」
ヴィータは思わず呟いた
シグナムの強さは機動六課に所属している者なら誰もが知っている
彼女と接近戦を挑んでまず勝てる者どころか触れる事が出来る者などそうは居ないのだ
だが、今目の前で甲児はそんなシグナムの攻撃をかわしていく
しかも、初見でシグナムの紫電一閃をかわしてしまうのだからそれは皆も驚くはずである
一体、甲児は何者なのだろうか？
皆の胸中にそんな疑問が浮んだ
ヴィータは隣を見た
隣ではフェイトとなのはが同様に目を丸くしている
そう、シグナムの強さを一番良く知っているのはこの二人なのだ
だからこそあのシグナムに此処まで戦っている甲児には目を見張る光景があったなのは
「・・・・・・・・・」
フェイト
「・・・・・・・・・」
2人共、言葉が無かった
嫌、出せなかったのだ
もしかしたら、次の瞬間に決着が着くかもしれない
そう思うと口を開くその一瞬の時間すら惜しく感じられた
だから2人共甲児とシグナムの戦いを食い入るように見ているのだ
だが、その隣では
スバル
「甲児さん！凄ぉぉぉい！」
エリオ
「凄い、あのシグナム副隊長と互角に戦うなんて・・・」
キャロ

「それに、甲児さんって大して魔法を使ってないし・・・」
フリード
「きゅく～」
ティアナ
「凄い・・・あんなに強いなんて・・・」
新人フォワードメンバーは甲児の戦い振りに興奮していた
大声を出して騒ぐ物
目を見開いて戦いを見る者
様々な見方をしていた
その横では
さやか
「へぇ、あのシグナムって人強いのねぇ」
十蔵
「ったく、甲児の奴さっさとシグナムちゃんのボインに触れば良いのに・・・何をもたついとるんじゃ？」
さやかはシグナムの強さを改めて知り、十蔵は甲児にじれったさを感じていた
そんな2人になのは、フェイト、ヴィータは目を細めて見た
はやて
「全く、十ちゃんの言う通りやなぁ、さっさとシグナムの胸掴めばええんに」
なのは
「は、はやてちゃん！！！」
フェイト
「ど、どうして此処に？」
2人は驚いた
何故ならさやかの隣には何時の間にかはやてとリインが居て甲児とシグナムの戦いを見ていたのだ
しかも甲児側で・・・
はやて

「いやぁ、何かこっちの方がおもろそう思って抜け出して来てもうたわ」
リイン
「リインもです～♪」
当然と言った顔ではやてとリインは言う
そんな2人になのは達は言葉が無かった
本当にあんたは部隊長か？
と、言いたげな顔をしていたが、其処は遭えて突っ込まないで置こうと思う
十蔵
「おんやぁ、リインちゃんも見に来たのかねぇ？それとも・・・ワシに会いに来たんかぁ？」
リイン
「こ・・・怖いですぅ～（ガクガクガクガク」
リインは振るえながらはやての後ろに隠れる
流石にリインは十蔵の顔になれないようである
まぁ、慣れない人が十蔵の顔を見たらまずそんな反応をするのは目に見えた事であるが
十蔵も流石にそう何時も落ち込む事はせず黙って甲児達の方を見る
甲児はと言うと、シグナムのスピードに慣れてきたのか段々簡単にシグナムの攻撃を捌いていく
そんな甲児にシグナムは驚く
なんと言う順応力の速さなのか
シグナムは甲児の順応力の速さに驚かされた
甲児はその隙を見逃さない
甲児
「隙ありぃ！」
甲児が咄嗟にシグナムに向けて手を伸ばす
だが、シグナムはそれをジャンプしてかわす
シグナム

「甘い！」
甲児
「ちっ！そう簡単にいかねぇか」
空振りした方の手を強く握って甲児は唸る
シグナム
「相手がお前なら容赦はせん！レヴァンティン」
シグナムが再びカードリッジをロードする
すると、シグナムの持っていたアームドデバイス「レヴァンティン」は剣状態から連結刀形態「シュランゲフォルム」となった
突然剣の形状が変わった事に甲児は驚いた
甲児
「おいおい、こっちはやっとこさあんたのスピードに慣れてきたってのに其処で隠し玉かよぉ！」
シグナム
「それが戦いと言う物だろう！行くぞ！」
シュランゲフォルムとなったレヴァンティンに炎が纏われていく
そして、それをあたかも生き物のように振り回し甲児に叩きつける
シグナム
「飛竜一閃！！」
炎を纏った連結刀が甲児に向かって蛇のように飛んでいく
甲児はそれをジャンプしてかわす
そして跳躍して頭からシグナムを飛び越す
シグナム
「何！」
まさかこの飛竜一閃をかわすとは
シグナムは信じられないと言った顔をした
紫電一閃を防がれて今度は飛竜一閃をかわされたのだ
甲児はそんなシグナムの後ろに降り立つと
甲児
「貰ったぁ！」

一気に距離を詰めシグナムを抱え込むように手を伸ばす
シグナム
「しまった！」
甲児
「これで、終りだぁ！」
そう言って甲児が伸ばした先には

『フニッ』

甲児
「ありゃ？」
なのは
「え？」
フェイト
「あ？」
ヴィータ
「あ・・・あいつ・・・・」
スバル
「うわぁ・・・」
エリオ
「こ、甲児さん・・・」
キャロ
「あわわ・・・」
ティアナ
「な・・・」

はやて
「おお！」
十蔵
「うおぉ！」
リイン
「ひゃぁ！」
さやか
「！！！！！！！」
シグナム
「・・・・・・・・／／／／／／／／」
一同は固まった
何故かと言うと、甲児もそれは薄々予想出来た
甲児は自分の手を伸ばした先を見た
甲児の腕はシグナムの脇を通って上半身にあるある場所に辿り着いていた
それは、人間で言う『胸』のある場所である
そう・・・甲児が触れた物・・・・・それは

シグナムの『ボイン』であった

シグナム
「・・・・・甲児・・・・・」
甲児
「は・・・はい？・・・・」
甲児が恐る恐るシグナムの方を見る
シグナムの顔には明らかに怒りの表情になっていた
怒りの篭った目で甲児を睨む
それを見て甲児は一気に青ざめる
シグナム
「貴様・・・これがしたくてそんな条件をつきつけたのか？（ゴゴ

ゴゴゴゴゴ」
甲児
「ご、誤解だ！シグナムさん！今のは事故であって決してわざとじゃないんだ！これ本当だから！」
甲児はシグナムから離れて両手をヒラヒラさせて必死に弁解する
だが、シグナムは聞く耳持たずである
レヴァンティンを両手で構え再び刀身に炎を纏う
甲児
「た、タンマ！俺が触れたら勝ちって言ったじゃん！だからもうこの勝負は俺の勝ちの筈・・・」
シグナム
「しらんな」
甲児
「う、うそおおおおおおおおおおおおお！」
突然シグナムの口から聞かされた言葉に甲児は驚く
そう、シグナムは甲児との口約束を放棄したのだ
それでも騎士かあんた！と、甲児は心の中で思った
ちらりと、甲児はビルの上に居るなのは達を見た
なのは達は顔を真っ赤にして固まっており、はやてはニヤニヤしている
そんで十蔵は「よくやったぞ！甲児」と叫んで上機嫌に笑っている
明らかに助ける気ゼロである
そして、ふとある事に気づいた
さやかがその場に居ない・・・
・・・まさか！
甲児の脳裏に嫌なビジョンが浮んだ
さやか
「甲児くん・・・」
甲児
「ヒィィィッ！」

後ろからさやかの声が響き甲児はビクンと震えた
そして恐る恐る振り向いた
其処には腕をボキボキと鳴らして聳え立つさやかが居た
さやか
「随分と大胆な行動に出たわねぇ（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」
甲児
「ご、誤解なんだ！さやかさん！これはあくまでも事故であった故意でやった事では・・・」
シグナム
「聞こえんな（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」
甲児
「え？（汗」
シグナムは某世紀末アニメに出てきそうな台詞を言いながらレヴァンティンを振り上げた
さやかも拳を振り上げる
甲児
「あ・・・あのぉ・・・2人共？」
さやか
「甲児くん・・・・・少し・・・・・」
シグナム
「頭冷やせ」
甲児
「え？またこの展開ですか？」
甲児の目からは滝の如く涙が流れた
そして・・・
さやか・シグナム
「甲児　（くん）のバカアアア

甲児
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
再び甲児は悲鳴を上げた
辺りは爆音と爆煙と甲児の悲鳴が三重奏を奏でる
それは正に恐怖の合唱であった
そんな甲児を見て一同はとりあえず甲児が無事に帰ってくる事を祈って揃って合掌した

＊＊＊

「もう大丈夫ですよ」
その後、甲児は黒こげになって医務室に運ばれた
其処に居た医務官の「シャマル」は初め甲児が「生きてる」のかさえ疑問に思う程であった
しかし、其処は主人公
何と超人的な回復力で回復し、今では額に包帯を巻く程度にまで回復している
因みに何故額に包帯かと言うと、其処にさやかの鉄拳が当たったからだ
また、例にもよって甲児の髪型は爆発アフロである
甲児
「いやぁ、それにしても酷い目にあったぜぇ」
シャマル

「でも、それでこの程度の怪我で済むなんて、貴方頑丈なんですねぇ」
シャマルは甲児の頑丈さに驚いた
普通なら入院する位の怪我なのに、甲児はすぐに回復してしまったのだ
全く、この男の生命力はご家庭の天敵並にしぶといのだろう
シャマル
「因みに聞くけど・・・一番何が痛かった？」
シャマルは興味本位で甲児に聞いた
すると甲児は当然と言わんばかりにこう言った
甲児
「さやかさんの鉄拳」

特訓　終

次回予告
甲児
いやぁ、今回は酷い目にあったぜ
次はホテルの警備って言うけど、俺とマジンガーなら楽勝だぜ！
って、おい・・・あれって、まさか『ゲッターロボ』！！
次回『ホテル・アグスタ』次回もこの小説にテイィィィク・オォォォォォフ

特訓（後書き）

Z『今回俺の出番無かったな』
作者「いやぁ、今回は作者が書きたい事ばっかり書いてましたから」
甲児「その為に俺は三途の川を渡りそうになったんだぞ」
作者「まぁ、生きてたんだしいいじゃん」
甲児「良くねぇ！」

バキィィィィィン

作者「げぼぉっ！お、お前・・・弱い奴と美人は殴らないんじゃなかったのか？」
甲児「お前は別だぁぁ！」

ドカバキドカバキ

作者「ぎゃあああああああああああああああ！」

なのは「こ・・・甲児くん・・・（汗」

ホテル・アグスタ　前編（前書き）

今回、遂に十蔵の隠された力が明らかに
そして、今回はちょっとムフフが含まれているようないないような・
・・・

ホテル・アグスタ　前編

甲児「ロケットパァァァンチ！」
機鋼獣「グギャアアアアアアアアア！」
マジンガーの鉄拳がその日襲撃した機鋼獣を貫いた
マジンガーの強さは異常であった
今まで多くの魔道士達が挑み、そして敵わなかった巨大な機械と鋼鉄の獣をあのマジンガーがほぼ一撃で倒してしまったのだ
その姿は見る物に希望を与え、逆に機鋼獣軍団に絶望を与える鉄の巨人であった
そんな姿が、巨大なモニターに映っていた
その映像を、シュラは悔しそうに眺めていた
シュラ「おのれぇ・・・憎き鉄の巨人めぇ・・・」
現にシュラは此処数日度々ミッドチルダを襲撃していたのだ
だが、その度に機動六課とマジンガーZの手により手持ちの機鋼獣は尽く破壊されてしまっていたのだ
その為、今回も王の手により激しいお仕置きを食らい、自慢の一張羅が黒こげとなっていたのだ
溜まらなく悔しかった
何故、何故勝てないのか
今までは違っていた
此処ミッドチルダは魔法文化が発達しているが、その変わり巨大な機械兵器の文化は無いのであった
その為、魔法攻撃に強い態勢を持つ装甲を持った巨大兵器『機鋼獣』を使用すればこの世界の支配など容易であった
だが、突如現れた謎の次元漂流者の介入により状況が一変していた
特にあの男、「兜　甲児」が厄介であった
王があの男を捕獲せよと命じた為大勢の機鋼兵を導入したのだが、それを尽く蹴散らされてしまった

その後、3体の機鋼獣を、更には機動六課の部隊長を抹殺する為にと殺人アンドロイドを送ったが、それすらもあの男にやられてしまった
しかも、突然黒い巨人「マジンガーZ」を呼び出し、3体の機鋼獣を瞬く間に破壊してしまったのだ
その後も、次々と新しい機鋼獣を放つも、全てマジンガーの前に敗れ去るのであった
シュラ「一体・・・一体、どうすれば奴に勝てるのだ・・・それに・・・あの姿は・・・あれに似ているでは無いか・・・」
シュラは古い記憶にあった魔神をマジンガーZを重ねていた
それが一体何なのかシュラには分からなかった
姿こそは分かってはいたが、それが何なのかまでは分からなかった
だからこそ引っかかる
そう思ったのだ
???「フン、機鋼獣指揮将軍の貴様が情けない」
シュラ「む、貴様らは・・・」
シュラの前には20mはある巨大な西洋風の鎧を着た・・・嫌、西洋風の鎧が体となった巨大なロボットが数体居た
シュラ「貴様ら・・・機鋼騎士！」
機鋼騎士「たかが機械兵士の一人如きにてこずるとは情けない・・・それでは機鋼獣指揮将軍の名が泣くではないか」
シュラ「う、五月蝿い！だからこうしてあのマジンガーZと言う機械兵士を倒す策を講じておるのだぞ」
機鋼騎士「無い頭を絞った所でロクな策など沸かぬだろう」
シュラ「なにぃ！」
機鋼騎士はフンと鼻を鳴らす
シュラはそんな機鋼騎士を睨みつける
だが、大きさが違うせいか大した脅威など感じない
むしろそんなシュラを見て機鋼騎士達は上機嫌に笑う
機鋼騎士「其処までにしておけ、アギレス」

機鋼騎士「ハッ、デウス様」
アギレスと呼ばれた機鋼騎士は方膝をついた
デウス「アギレスよ。次の戦いには貴様が出でよ。そして我等が悲願を邪魔する存在を抹消するのだ！機鋼騎士である貴様なら容易い事であろう」
アギレス「はっ！、この機鋼騎士アギレス！デウス様の名の下、必ずやあのマジンガーZとやらを葬って見せます」
アギレスはそう言って立ち上がる
その顔には機械で作られた目とその中から湧き上がる闘志が見えた

＊＊＊

一方で、此処は所変わって機動六課の訓練施設
其処では新人フォワードメンバーが日夜訓練をしていた
隊長のなのはとフェイトの指導の元４人は厳しい訓練をこなしていた
その隣で甲児はと言うと
シグナム「兜　甲児いいいいいいいいいいいいいいいいいい！」
ヴィータ「一辺死ねえええええええええええええええええええええ！」
甲児「ふざけんなあああああああああああああああああああああああああああああああ！」
甲児はデバイスを構えてバリアジャケットを纏って、更に殺気マックスなシグナムとヴィータに追い回されていた
２人共明らかに目が殺す気満々である

その中で甲児は涙を流しながら逃げ回っている
何故こうなってしまったかと言うと・・・
それは先日の事であった

＊＊＊

【夕べ】
本日も特訓を終えた後、甲児とエリオは特訓の汗を流そうと共に風呂に入っていた
因みに、またシグナムとさやかにボコボコにされている甲児であった
甲児の髪型は未だに爆発アフロのままであり、それを見てエリオは必死に笑いを堪えていた
そんなエリオを見て甲児は少しムッとする
だが、だからと言って甲児は怒ったりしない
それが大人である
そう甲児は思った・・・と言うか思う事にした
甲児「いててて・・・、マジで死ぬかと思ったぜ」
腕をグルグル回して甲児は呟く
その体には傷跡らしき物が大小少なからず刻み込まれていた
それは、先ほどシグナムに受けた傷では無い
もっと古い傷である
そう、甲児が元の世界で戦ってきた時の傷である
その傷が、今まで甲児が戦ってきた戦いの激しさを想像させた
そんな傷を隣に居たエリオは見ていた

因みに、今風呂場には甲児とエリオ・・・そしてユニゾンとなった十蔵しかいない
と、言うのも機動六課の隊員はエリオを除き殆どが「女性」なのだ
正にハーレム、または桃源郷とでも呼べる世界であった
普通なら喜ぶシチュエーションなのだが、人一倍真面目なエリオは正直参っていた
そんな時に甲児が来てくれたのでエリオは幾分か楽になっていた
と言うのも、甲児はどうしてかとても接し易い存在なのだ
自分の出生を話しても彼はエリオを普通の人として見てくれた
それがエリオには嬉しかったのだろう
それ以来エリオは甲児に信頼を置いていた
今では甲児の事を兄のように思っている節もある
甲児もエリオの事が何処となく弟の「シロー」に似てる気がしてるので甲児自身もエリオを弟のように接していた
今では、２人は本当の兄弟の様に仲が良い

ふと、エリオは甲児の乗ったロボット、マジンガーZを考えていた
鋼のボディに絶大な力、そして何よりあの巨体である
少年の心を刺激するには十分過ぎる程である
年頃の男の子が好きなのは異性とロボットなのであろう
エリオ「それにしても凄いですよね・・・マジンガーって」
唐突にエリオが口にした
その呟きに甲児は気づく
するとニヤッと笑って甲児が得意げに話す
甲児「ああ、マジンガーには色々な人の思いが篭ってるからな」
エリオ「色々な人の・・・思いですか？」
エリオは首を傾げながら聞いた
それに甲児は頷く
そう、マジンガーZは祖父十蔵が孫の甲児の為に作ったロボットである

そして、光子力研究所の所員達や、他にも多くの科学者達がマジンガーに携わってきたのだ
その思いがそのままマジンガーの強さとなっているのだ
だからマジンガーは強い
どんな相手でも負ける筈が無いのだ
例え、傷ついて倒れる日が来ようと、その時は再び二本の足で大地に立つ
戦いが終るその日まで
甲児「さてと・・・何時までも浸かってるとのぼせちまうから体洗ってさっさと寝るか」
エリオ「そうですね」
十蔵「甲児ぃ！背中流してくれぃ」
甲児「へいへい」
軽く返事して甲児達はシャワーのある所へ向かう
すると、隣の方から何やら声が聞こえてきた
甲児「うん？」
その声が気になり、甲児は壁に耳を押した
エリオ「どうしたんですか？甲児さん」
そんな甲児が気になったのかエリオが聞いた
だが、甲児は「し～っ」と指を立てて言うだけだった
気になったエリオと十蔵も同じように壁に耳を押し付ける
其処から聞こえてきたのは・・・

はやて「いやぁ、さやかさんって結構大きいんやなぁ。ひょっとしてなのはちゃんよりあるんやないの？」
さやか「え～、そうかしら？」
なのは「にゃはは、パッと見は同じ位だもんねぇ」
はやて「んじゃぁ、実際に計ってみるぅ♪」
さやか「ちょっと・・・はやてちゃん？手をワキワキさせてどうし

たの?何か怖いんだけど（汗」
はやて「大丈夫やでぇ。優しくするから安心しぃや」
なのは「出た!はやてちゃんの悪い癖!」
さやか「えええええええええええええ!」
はやて「うりゃあああ!」

ムンズ

さやか「きゃっ!」
はやて「お～、こりゃ結構ボリュームあるでぇ、なのはちゃんの時と少し違う気もするけど・・・大きさは同じ位やなぁ」
なのは「え?そうなの?」
はやて「んじゃぁ、次はなのはちゃんの番やなぁ、そしたら次はこの中に居る全員もおんなじやでぇ」
一同「えええ!」
はやて「ほらほら、往生しいや!なのはちゃん」
なのは「えええ!ちょ、はやてちゃん!やめ・・・・ニャアアアアアアア!」

そんな会話であった
その会話を聞いていたエリオの顔は一気に赤くなる
エリオ「な・・・何か・・・・聞いちゃ不味い気がしたんですが・・・」
赤くなった顔のままエリオは甲児の方を見る
甲児「何言ってんだ!エリオ、お前も男の子だろう!これ位聞いて顔を赤くするなんて修行が足りないなぁ」
そう言ってる甲児の鼻からは・・・滝のように鼻血が流れていた
流れた鼻血はそのまま床を流れて排水溝に流れていく
エリオ「いや、甲児さんの方が重傷ですから!何鼻血流してるんで

すか！って言うか止血して下さい！死にますよぉ！」
そう、目の前で甲児は正に致死量程の鼻血を流していたのだ
だが、甲児は全く聞き入れない
そんなにまで壁の向こうの会話を聞きたいのか
エリオはそう思った
十蔵「何じゃ、２人共情けない！ワシなんかこの通りじゃぞぉ！」
そう言う十蔵はと言うと・・・鼻血こそ出してないが、目からこれまた滝のように血の涙を流していた
それを見てエリオが青ざめる
こちらもまた致死量なのだからだ
エリオ「ですから２人共止血して下さいってば！本当に死にますよぉ（汗」
エリオに言われ二人はどうにか止血した
そして壁の向こう・・・先ほどの声が聞こえた場所
・・・そう、『女湯』を隔てる壁を見ていた
十蔵「甲児！」
甲児「ああ、分かってるぜ！お爺ちゃん」
甲児と十蔵は互いに腕を組んで言い合う
エリオにはそれが何なのか分からず首を傾げる
エリオ「一体何が分かったんですか？」
話題に着いていけないエリオの肩に甲児はそっと腕を回す
そして、エリオの耳元に囁く
甲児「エリオ・・・お前・・・好きな子とか居るのか？」
エリオ「いいいいいいいいい！」
突然聞かれた事にエリオは再び顔を真っ赤にした
もうこれでもかと言うほど真っ赤である
どの位真っ赤かと言うと、トマトを連想してほしい
恐らくその位である
甲児「ほほぅ・・・その反応だと居るんだな？・・・あの壁の向こうに」

そう言って甲児は女湯を隔てる壁を指差した
エリオ「ええと・・・その・・・あの・・・」
エリオは回答に渋る
そんなエリオに甲児は虐め甲斐のありそうな顔をする
甲児「ははぁん・・・ひょっとして・・・キャロか？」
エリオ「ギクゥゥゥ！！」
キャロの名前を出された途端、エリオの肩が大きく震えた
それを見て甲児は悟った
エリオが好きな子はキャロなのだと
それを見て甲児はニヤニヤしだす
甲児「なぁ、エリオ・・・お前ももう１０歳だ・・・そろそろ異性に興味を持っても良い年頃の筈だ」
エリオ「は・・・・・はぁ・・・・・・（汗」
甲児「と、言う訳で！一緒に覗こうぜ・・・『女湯』を」
エリオ「はいいい

エリオ「そ、それは不味いですよ！甲児さん！」
甲児「あん？何だエリオ？まさかビビッたのか？」
エリオ「それもありますけど・・・あの向こうには、なのはさんやフェイトさん達が居るんですよ！管理局の中でも屈指の魔道士なんですよ！」
エリオはあえてなのは達の強さを強調させるように言う
甲児「だから良いんじゃねぇか」
エリオ「え？」
甲児「あのなのはちゃんやフェイトちゃん達のヌードを見れるんなら今を置いて他に無いだろう！」
エリオ（しまったあああああああああああ！逆効果だあああああああああああああ！）
エリオは墓穴を掘ってしまった
例え管理局のエースと言ったところで、甲児にしてみれば一人の女性でしかないのだ
そんな甲児に強さを幾ら説いた所で所詮馬の耳に念仏であった
エリオ「で、でも・・・もし見つかったら、そしたらなのはさん達からスターライト・ブレイカーやサンダー・スマッシャーとか食らう羽目になりますよ！」
甲児「へん、スターライト・ブレイカーやサンダー・スマッシャーが怖くて、機鋼獣と戦えるかよ」
甲児は鼻を鳴らす
そう、甲児にとっては反撃などを心配よりも今が大事なのだ
そう、壁の向こうにある『桃源郷』が・・・
エリオ「で、でも甲児さん！」
甲児「エリオ・・・男ならウダウダ言うもんじゃないんだぜ」
エリオ「エ！」
甲児は真剣な眼差しでエリオを見た
今までにない位真剣な目であった
そんな目を見てエリオは言葉を失った

そう、男なら口で語る前に体で語れ
そう言いたいのだろう
そう思えた
だが、幾ら真剣な眼差しをしたところで・・・今甲児達がやろうとしてるのは明らかに犯罪なのだ
それは機動六課隊員のエリオとしては断固阻止しなければならない事なのだ
エリオ「甲児さん！どうしても覗くって言うんなら僕は武力行使に出ても止めます！セットアッ・・・」
甲児「させるかぁ！」
エリオがストラーダをセットアップする前に甲児は電光石火の速さで待機状態のストラーダを奪いそれを十蔵に渡す
十蔵はそれをキャッチして腕に抱えた
それを見てエリオは膝を着いた
決着は付いたのだ
今のエリオは普通の人より少し運動神経がある子供でしかない
機鋼兵や機鋼獣を生身で倒した甲児とは到底渡り合う事など出来ないのだ
そんなエリオの肩に甲児はそっと手を置く
甲児「安心しろエリオ」
エリオ「甲児さん・・・」
甲児「男ってのはな・・・少なからず罪を作ってるもんなんだよ」
エリオ「いや、それ全然説得力無いですからあああああああああ！ってか、やっぱ覗く気マックスなんですねぇえええええええええ！」
甲児「当然よぉぉぉぉぉ！いざゆかん！桃源郷へえええええええええ！」
甲児はエリオの首根っこを掴んで引っ張っていく
エリオも必死に抵抗するが、所詮焼け石に水である
つまり、抵抗も無駄であった
エリオ「止めて下さいいいいいいいいいい！僕はまだ犯罪者にな

りたくないよおおおおおおおお！助けてくださあああああああああああい！なのはさあああああああああん、フェイトさあああああああああああああああん！」
エリオは必死に叫ぶ
だが、そんな時女湯はと言うと

さやか「今隣から何か聞こえた気がしたんだけど？」
はやて「気のせいやないのか？」
なのは「甲児さんとエリオ君がお互い背中を流し合ってたりして♪」
フェイト「ああ、最近あの2人まるで本当の兄弟みたいに仲良いもんね」
とこちらでは甲児達が今正に覗きに来るなど露知らずであった
皆で湯に浸かり楽しく会話していた
スバル「いいなぁ、ねえティア！私達も背中流しっこしようよ」
ティアナ「何であんたとしなきゃなんないのよ！」
ティアナは少し不機嫌そうに言った
シグナム「むぅ・・・・・」
ヴィータ「どうした？シグナム」
シグナム「いや・・・どうも甲児と聞くと・・・胸がな・・・・／／／」
ヴィータ「ああ、成る程な」
ヴィータはシグナムの行動を見て大体察した
以前特訓とは言え甲児はシグナムの・・・ボインを鷲掴みしてしまったのだ
その為シグナムとさやかの手により制裁を加えられたのであった
恐らくあれで懲りたのだろう
そうシグナムは思った
シャマル「あらあら、シグナムが顔を染めるなんて珍しいわねぇ」
そんなシグナムをシャマルは物珍しそうに見る
キャロ「う～ん、やっぱり私も男湯に行くべきだったかなぁ」

今にしてキャロは男湯に入りたそうな顔をしていた
と言うのも、此処の湯では１２歳以下ならどちらに入ってもＯＫなのだ
まぁダイナミックキャラが聞いたらまず全員女湯に直行だと思うがそんなこんなの会話をしている時、甲児達はと言うと

甲児（ぬおおおおおおおおお！こりゃ・・・正に天国じゃねぇか！）
十蔵（ううううう・・・た、溜まらんわい・・・）
甲児と十蔵は壁を乗り出して女湯を見ていた
其処には、なのは達の一糸纏わぬ生まれたままの姿が映っていた
甲児と十蔵が再び盛大に鼻血を流す
その横で、エリオは甲児に首根っこを捕まれながら、無理矢理見せられていた
そして、エリオの顔も真っ赤になる
鼻血こそ出してないが、今にも出しそうな勢いである
甲児（くっ・・・湯船でこっちの姿が見えないのは救いだけど・・・これじゃ全部見えねぇなねぇか！）
十蔵（全くじゃ！これじゃ楽しみが半減じゃぞ）
エリオ（まだ覗くんですか！２人共！！）
あくまで女湯に悟られないようにこそこそと話し合う３人（正確には２人と１体）
甲児達の前では、今正に桃源郷と呼べる光景があったのだ
例えるなら『ヴィーナスの誕生』のような光景であった
つくづく甲児はカメラを持ってこなかった事を後悔した
こんな光景もしかしたらもう二度と味わえないかも知れないからだ
そんな事をしていると
シグナム「むっ！」
人一倍勘の鋭いシグナムが何かの視線を感じた
ヴィータ「どうした？シグナム」

シグナム「誰かが覗いてる！」
ヴィータ「何いぃぃ！一体誰が・・・・・ハッ！」
ヴィータはすぐに察した
今六課内に居る男でしかもなのは達が居るにも関わらず堂々と覗く事が出来る男と言ったら一人しか思いつかない
それを知ったヴィータはすぐに念話で女性達に送った
すると、一斉に女性達の視線が壁の上に向けられる
甲児「やべ！ばれた！」
十蔵「しもた！」
エリオ「えええ！僕もですか！？」
其処には鼻血を流してる甲児と十蔵、そして首根っこを捕まれてるエリオの姿があった
それを見た一同は
一同「キャアアア

『Ｕｎｉｓｏｎ　Ｉｎｎ』

３人
「へ？」
突如、３人を光が包み込んだ
眩い光である
３人が光に包まれている時、

ドドドドドドドドドドドド！

と、男湯に駆けて来る音が響いた
そう、さっき覗かれた女性陣である
しかも、殆どの女性が殺気に満ちた顔をしている
なのはも、今回やっと白い魔王に覚醒出来たのだ
いやぁ、良かった良かった
なのは「甲児くん・・・少し頭冷やしてあげるんだから（怒」
フェイト「エリオに変な事教えて・・・只じゃ済まさないんだから（怒」
シグナム「今度こそ切り刻んで刺身にしてやる（怒」
ヴィータ「ぜってぇぶっ潰す（怒」
さやか「甲児くん・・・覚悟は良いわねぇ（怒怒怒」
と、こちらのメンバーが怒りマックスであった
え？他のメンバーはどうしたかって？
ティアナとスバルは顔を真っ赤にしながらついてきており、キャロはエリオに会うという口実ついでについてきおり、はやては面白そうなのでついてきており、シャマルは大惨事にならないようについてきていた
そして、扉を開ける
なのは・フェイト・さやか
「甲児くん！」

シグナム・ヴィータ
「甲児いいい！！！」
一斉に風呂場に居るであろう甲児を見た
だが、其処に居たのは
甲児？
「いてて・・・ったく、どうなっちまったんだ？」
と、言って甲児が起き上がった
だが、その外見は変わっていた
まず髪の色が違うのだ
以前の黒い髪ではなく、エリオと同じ赤い髪であった
そして、次に驚いたのは着ている服であった
何と、それはエリオと同じバリアジャケット姿であったのだ
ただし、ズボンは半ズボンではなく長ズボンになってる
そんな姿の自分を見て甲児は驚く
甲児「んなぁ！どうなってんだ！これ？俺何時の間にエリオと同じ服なんて・・・ってか、エリオ！お爺ちゃん！何処だ？」
甲児は必死に周りを見回して２人を探した
すると
十蔵（こ、此処は何処じゃあああああああああ！）
エリオ（ど、何処なんですかあああああああああ！）
何と、甲児の中から２人の声が響いたのだ
甲児「んな！エリオ！それにお爺ちゃんも、何で俺の中から声がするんだ？」
甲児は驚いた
それもそうだ
何しろ甲児の体の中から２人の声がするのだからだ
そして、十蔵は遂に気づいたのであった
十蔵「分かったぞ！わしは誰かと融合出来るのではなく、誰かと誰かを融合させる事が出来るユニゾンだったんじゃ」
甲児・エリオ

「（なにいいい

と言って皆とは反対方向へ走り去った
そう、逃げたのだ
余りの速度の為一瞬対応が遅れたが、その後なのはたちは
「逃げられたあああああああああああああああああ！」
と叫ぶのであった

部屋に戻ってきた甲児は未だにユニゾンしたままであった
甲児「なぁ、これって一体どうやったら解けるんだ？」
十蔵（さぁな、ワシにもさっぱりじゃわい）
エリオ（って、どうするんですか！これじゃ僕ずっとこのままなんですか？）
エリオが叫ぶ
そりゃ困るだろう
そうなったらエリオはまず腹が減る
そして、キャロとデートも出来なくなるだろう
エリオ「そ、そういう事言わないで下さいよぉ／／／／」
おお、初々しいのぉ若人よ
とまぁ、そんなんだと困るよねぇ
ってな訳で、そろそろ時間だろう
甲児「おわっ！」
突如甲児をまたあの閃光が包み込んだ
そして、光が消えた時、其処には甲児、エリオ、十蔵がタオル一枚の姿で座っていた
そう、元に戻ったのだ
エリオ「た、助かったみたい・・・ですねぇ」
十蔵「ふぅむ、どうやら融合が出来るのは３０分が限界のようじゃのう」
甲児「でも凄かったなぁ、まさかエリオの魔法が使えるようになるなんてよぉ」
エリオ「そうですね・・・と言う事は、もしかしたら十蔵さんが居

れば他の人とも融合出来るんじゃないんですか？」
十蔵「むぉ！そりゃ大発見じゃぞぉ甲児！早速明日試してみるか！」
甲児「そりゃいいぜ！・・・と、とりあえず何かドッと疲れたな・・・今日はもう寝るか」
エリオ「そうですね・・・僕も何だか凄く疲れましたし（色々な意味で」
十蔵「なんじゃ軟弱じゃのぉ！わしゃまだまだ平気じゃぞぉ！」
そう言って十蔵はカッカッカと笑う
そんな十蔵は無視して甲児とエリオは服を着て部屋の明かりを消したんで、翌日
甲児「さぁて、今回は誰と融合するかなぁ」
十蔵「楽しみじゃのぉ！」
昨晩の融合が余程面白かったのか甲児と十蔵はウキウキしながら特訓場に来た
だが、待っていたのは悪夢であった
シグナム「来たな・・・兜　甲児（怒怒怒怒怒怒」
ヴィータ「待ってたぜ・・・この覗き魔（怒怒怒怒怒怒怒怒」
其処には、額に幾つもの青筋を浮かべたシグナムとヴィータが臨戦態勢で待っていた
それを見た甲児が青ざめる
甲児「ええと・・・これは一体・・・」
シグナム「特訓だ！ただし・・・」
ヴィータ「あたしらと2対1でな」
2人がデバイスを構える
甲児は咄嗟に踵を返して逃げようとするだが、
シグナム「逃がすか！バインド！」
甲児「ぐわっ！」
突如、甲児の両腕がバインドにより縛られる

そして、その延長上には少し長い紐らしき物をシグナムが握っている
シグナム「これで貴様は私の半径１０m以上先から逃げる事は出来ない」
ヴィータ「覚悟は良いか？兜　甲児」
甲児「うぞぉ！これって何？特訓じゃねぇよ！これまんま拷問じゃねぇか！」
甲児は涙を流して叫んだ
だが、２人は聞く耳持たずである
シグナム「高町達から頼まれたのだ、今日の特訓は甲児を・・・・・殺す気でやれ・・・とな」
ヴィータ「日頃の行いが悪かったからこうなったんだ。恨むならこんな風になった自分を恨みな」
そう言って２人が一斉に襲い掛かってきた
甲児「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」

と、言う訳である
そして、時間は戻り

甲児「亜ｗ@はオウィエｇヴィオア；ｈぐあ；ｇてゃｗｆ：あのｄｇは@０上：ｇは損ｇｄｊヴィａｗｉｅ０ｇｕｈｗ－ｇｖ名を；ｈｒｇ@：ｗｇｈａｗｏ；ｉａｈｗｕ０ｉ@ｒｇｈ：ｗｊヴァンウィウｇｈ０@１ｑｇｈオｗｇｆｈｗ@ｇ：０ｈを；ｇｏｕｗｈｅｇ@：ｗ（声にならない叫び」
声にならない様な叫び声を上げて甲児は２人の攻撃を諸に食らうのであった
その光景を遠くから特訓しながら見ていたエリオは青ざめた
エリオ「何時か・・・僕もあんな風に修正されるのかなぁ（ガクガクガクガク」
と心の中で呟くのであった

ホテル・アグスタ　前編（後書き）

兜甲児
全身大火傷
内臓破裂
全身複雑骨折
おたふく風邪
にきび
全治・・・・・2時間！！

感想お待ちしてます

ホテル・アグスタ　中篇（前書き）

今回原作崩壊ネタがかなりあると思います
まぁ、甲児だったらやりかねないと思って見て下さい

ホテル・アグスタ　中篇

甲児
「いててて・・・ひでぇ目にあったぜ・・・」
特訓（と証したシグナムとヴィータのリンチ）を受けてどれ位経ったのだろう
気がつくと、辺りはすっかり日が沈んでいた
空には月が浮ぶ
時間からして夜中の0時であろうか
結局あの後ずっと気絶していたのだろう
それにしても・・・
甲児
「幾ら怒ってるからって・・・せめて部屋へ連れてってくれても良いのによぉ・・・（汗」
甲児は一人愚痴った
確かにこんな所で夜を明かしたらそれこそ風を引いてしまうだろうとりあえず一人風呂でも入って寝るとするかそう思って甲児は立ち上がった
すると、遠くから銃声が響いた
甲児
「ん？」
甲児は銃声のした方を見た
其処には、オレンジ色の魔力光が放たれていた
その色の魔力光を見て甲児はその場に居るのが誰か理解出来た
甲児「あの光・・・ティアナか・・・でも、こんな時間に何してんだ？」
甲児は不思議に思いその光の場所に向かった

ティアナは今、必死に練習をしていた
勿論、一人でである
既に夜中の0時を回っており、隊員達の殆どが寝ているこの時間も、
ティアナは特訓をしていた
ティアナ
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
肩で息をしてかなり苦しそうな顔をするティアナ
だが、それでもティアナは自作の拳銃型デバイスを構えてターゲットを狙い打つ
銃声が響いた
だが、弾丸はターゲットを逸れて遠くのビルに当たる
ティアナ
「ぐっ・・・」
悔しそうに唇を噛む
腰のホルスターから替えの弾丸を取り出し、銃に装填する
そして再びターゲットを狙い打とうとした時、

甲児
「よう」

ふと、声がした
ティアナは声のした方を見た
其処には、崩れたビルに背中を預けながらティアナの特訓を見る甲児が居た
ティアナ
「こ・・・甲児さん・・・」
甲児
「随分熱心にやるんだな」

そう言って甲児は手に持っていた物をティアナ目掛けて放り投げる
ティアナはそれを手に取る
それは缶ジュースであった
ひんやりとした冷たさがティアナの手から伝わってくる
甲児
「少し休もうぜ、そんなんじゃ１００発撃ったって当たんねぇよ」
ティアナ
「・・・・はい・・・」
ティアナは元気無く頷いた
２人は丁度良い高さの瓦礫に腰を下ろした
甲児は懐からもう一つの缶ジュースを取り出すとそれを少し煽った
そして、月を見上げる
甲児
「いやぁ、この世界の月も綺麗なんだなぁ」
ティアナ
「・・・そうですね」
明らかにティアナは不機嫌であった
特訓の邪魔をされて虫の居所が悪いのだろう
そんな事甲児は百も承知であった
ただ、今のまま続けたらきっと何時かティアナは壊れてしまう
そう思ったからこうして呼び止めたのだ
甲児
「なぁ、ティアナ・・・お前何でそんなにムキになって強くなろうとするんだ？」
ティアナ
「え？」
甲児
「俺からして見れば、お前結構強いと思うぜ。良く回りも見るし、的確に指示を出すしよぉ」
甲児は軽く笑いながら言う

だが、ティアナは一向に沈んだままだ
甲児から貰った缶ジュースを両手で挟むように持って強く握り締める
噛んだ唇から紅い雫が零れ落ちる
それを見て甲児の顔つきが変わった
甲児
「何か・・・訳有りなんだな」
ティアナ
「私・・・機動六課の中で・・・凡人なんです」
甲児
「凡人？」
ティアナ
「私には・・・スバルみたいな才能は無いし・・・キャロみたいなレアスキルも無い・・・他の皆と比べても魔力も低い・・・こんな凡人の私がこんな所に居て良いのかなって思って・・・」
甲児
「ふ～ん・・・それで、体ぶっ壊すまで練習しようってか？」
ティアナ
「・・・・・・」
ティアナは黙って頷いた
それを見て甲児ははぁと溜息をついた
甲児
「まるで昔の俺と同じだな」
ティアナ
「甲児さんと？」
甲児
「ああ・・・昔な・・・俺の大切な家族が・・・・殺されたんだ」
ティアナ
「え！？」
甲児は以前なのは達に話した事をティアナにも話した
甲児の祖父、兜　十蔵がＤｒ．ヘルの軍団の手により殺害された事

その復讐の為に甲児は無茶な戦いを繰り返した事
そのせいで甲児は何度となく死線を彷徨った事
そして、その度に仲間達が涙を流した事を・・・
ティアナ
「そんな事が・・・」
甲児
「ああ」
甲児は静かに頷くと、缶ジュースをまた煽る
そして、ティアナの方を見た
甲児
「このままお前が無茶な特訓を続けていったら、きっと・・・お前の仲間が泣く事になるぞ」
ティアナは黙り込んだ
甲児は何も言わない
只真剣にティアナを見つめている
ふと、ティアナが口を開いた
ティアナ
「・・・・・昔・・・私には、一人の兄が居たんです」
甲児
「・・・・・」
ティアナは一人語り出した
それを甲児は黙って聞いていた
ティアナ
「名前をティーダ・ランスター。首都航空隊所属の一等空位の魔道士だったんです」
甲児
（一等空位って事は・・・なのはと同じ階級か・・・って事は、そいつは相当なエリートだったんだな）
ティアナ
「幼い頃に両親を失くした私にとって、兄さんは私にとってたった

一人の家族だったんです・・・でも、私が１０歳の時・・・任務の際に・・・」
ティアナは言葉を失くした
その沈黙が何を語っているのか
甲児は察した
この子も、俺と同じ、両親を失った子だったのか
ティアナ
「そして、兄さんの葬式の時・・・兄さんの上司の人が・・・・・・」

『例え死んででも犯人を捕らえるべきだった！』
『ティーダは役立たずだ！』

ティアナ
「私・・・そんな事言われて・・・・悔しくて・・・・・う・・・・・」
ティアナは顔を下に向けた
足元に数滴の雫が零れ落ちる
そんなティアナの頭に、そっと甲児の手が添えられる
甲児
「お前も・・・俺と同じ・・・なんだな」
ティアナ
「甲児さん・・・」
ティアナは甲児の顔を見た
とても優しい顔だった
甲児はティアナに向かって優しく微笑みながらそっと頭を撫でたのだ
そして、ティアナは甲児のもう片方の手を見た
其処には、先ほどまであった缶ジュースの空き缶を握りつぶしている手があった
空き缶は甲児の握力でグシャグシャになっており、握った手から血が滴り落ちている
怒っているのだ

兄の死を愚弄した人間を
そして、兄を死に追いやった犯人を・・・
決して顔にも、口にも出さない変わりに、こうして甲児は己の体を
震わせているのだ
甲児
「俺も・・・ガキの頃にお袋が事故で死んで・・・お爺ちゃんも死
んで・・・そして・・・お父さんも・・・死んだんだ・・・」
ティアナ
「甲児さん・・・」
甲児
「だけどよ・・・ティアナ、お前は一人じゃねぇだろう」
ティアナ
「え？」
ティアナは不思議そうな声を出した
それを見て甲児はニッとする
甲児
「機動六課の皆・・・なのはやフェイト・・・それにスバルやエリ
オ、キャロやヴォルケンリッターの皆・・・お前の家族だろう？」
ティアナ
「私の・・・家族・・・」
甲児
「お前の兄さんは役立たずじゃねぇ・・・立派な兄貴だよ！そんで・
・・お前は凡人じゃねぇ！立派な俺達の仲間だ！」
ティアナ
「甲児さん・・・」
ティアナの目にとめどなく涙が溢れる
だが、それを甲児に見せないように必死に拭う
それを見かねた甲児がそっとティアナを自分の胸元に寄せる
甲児
「泣きたきゃ泣け、俺の胸でよけりゃ貸してやるよ」

ティアナ
「う・・・ううううう・・・」
その日、ティアナは大声で泣いた
何時振りだろう
こんなに大声で泣いたのは
そして、何時振りだろう
こんなに優しくされたのは
そう、ティアナは思った
暫くして、ティアナはそっと甲児から離れた
彼女の目からは既に涙は消え、さっきよりも晴れ晴れとした顔をしていた
ティアナ
「有難う御座います、甲児さん・・・何だか、胸がスッとしたみたいです」
甲児
「そうかい？」
甲児は満面の笑みで笑う
それに釣られてティアナも笑う
すると、甲児はすっと立ち上がる
甲児
「ついでだ、良い物を見せてやるよ」
ティアナ
「良い物？」
甲児
「ついてきな」
そう言って歩き出す甲児の後をティアナは追いかけた
すると、その先には、1台のジェットパイルダーが置いてあった
甲児
「今から行けばまだ間に合うだろうな」
甲児はパイルダーに飛び乗ると慣れた手つきでパイルダーを起動さ

せる
ティアナはその光景をじっと見ていた
甲児
「乗れよ」
ティアナ
「え？」
甲児
「急がねぇと、見れなくなっちまうからよ」
ティアナ
「あ、は、はい！」
ティアナはそう言って頬を染めながら甲児のパイルダーの中に入った
だが、元々パイルダーは一人乗りである
その為か、必然的に、ティアナは甲児の膝の上に乗る形になる
ティアナ
「・・・／／／／／／／」
ティアナは顔を真っ赤にさせる
そんなティアナをお構いなしに甲児は操縦桿を握る
甲児
「しっかり掴ってろよ」
ティアナ
「は・・・はい！」
ティアナはぐっと身構える
甲児は操縦桿を動かして、パイルダーを上昇させる
高度がグングン上昇していく
余りの速度の為か、ティアナは思い切り目を瞑っていた
やがて、暫くしてから、パイルダーが上昇を止めた
甲児「
もうついたぞ、目を開けな」
甲児に言われ、ティアナは少しずつ、目を開いた
そして、其処に映っていた物は

ティアナ
「うわぁ・・・」
それは、夜の明かりで照らされるミッドチルダの町であった
その光景は、まるで星の海のようであった
余りの綺麗さにティアナは言葉を失くす
甲児
「綺麗だろ？」
ティアナ
「はい！・・・私・・・初めて見ました！」
甲児
「お前達が守ったんだぜ・・・この風景を」
ティアナ
「私達が？」
甲児は頷いた
甲児
「俺達が命がけで戦った勲章が・・・あの町の景色なのさ」
ティアナ
「あの町の・・・景色・・・」
ティアナはまた夜の街を見た
まるで吸い込まれそうな美しさであった
手を伸ばせばこの手に光が取れそうな程の輝きを放っている
甲児
「因みに言うとな・・・これは俺達だけの秘密だぞ！」
ティアナ
「え？」
ティアナは振り返った
甲児は人差し指を口元に当てて「し～っ」と言う感じのポーズを取っている
甲児
「だってそうだろう。もしこれがスバルやエリオの耳に入って見ろ

よ。きっと「乗りた〜い」とか「見た〜い」とか言って騒ぐ事間違いないからよぉ」
ティアナ
「ぷっ・・・・アハハハハハ」
ティアナは大声で笑った
甲児が内緒にして欲しい理由がそれとは
案外甲児も心配性なのだなぁとティアナはこの時思うのであった
甲児
「ふぁ〜〜あ、何か眠くなってきたなぁ・・・一っ風呂浴びて寝るとするかぁ・・・」
ティアナ
「そうですね・・・・アフッ」
気がつくと、ティアナも小さく欠伸をしていた
それを見て甲児は大声で笑う
それに釣られてティアナもまた大声で笑うのであった
そんな2人とパイルダーを夜の街が照らしていく

＊＊＊

翌朝、甲児は眠い目を擦りながら特訓場に来ていた
大きな欠伸をしながらヨロヨロと歩く
まるで二日酔いの親父である
甲児
「ふぁ〜〜〜あぁ、おはよう・・・」

さやか
「おはよう甲児くん・・・また寝坊助ね」
さやかは目やにのついた顔の甲児を見て笑う
その横にはなのはやフェイト、他にもシグナムやヴィータも居た
皆朝のフォワード陣の訓練を見ているようだ
甲児
「朝から熱心だねぇあいつら」
なのは
「まぁね」
フェイト
「けど、なのはの課題って結構厳しいけど、皆頑張ってこなしてるよ」
フェイトは笑って言う
甲児はそんな４人の特訓の風景を見ていた
４人共連携してターゲットを破壊している
だが、その中で一つ変わった事があった
それは、ティアナである
以前のような無理をした戦法は取らなくなり、自分らしいスタイルで戦っているのだ
その上、他の３人に的確に指示を出しながらも自分も拳銃型デバイスで遠距離から狙撃している
連携の取れた陣形となっているのだ
なのは
「ティアナ・・・何だか変わったよね」
シグナム
「ああ、以前のような無理をした戦法を取らなくなったせいか、非常に戦いやすくなっているな」
ヴィータ
「おい、甲児」
甲児

「あん？何だヴィータ」
甲児はヴィータの方を見た
まだ眠気が抜け気っていないのか目を擦っている
ヴィータ
「お前、ティアナに何かしたのか？」
ヴィータが質問した
今まで機動六課の上司メンバーがティアナに指示を出しても、ティアナは聞き入れる事は余りしなかった
それが、一夜にして此処まで変わったのだ
そんな事が出来るのは恐らく部外者しかいない
となると、自然に的が絞れた
すると、甲児は頬を掻いて呟いた
甲児
「なぁに、ちょいと昔話をしただけさ」
甲児はそう言ってニィッと笑った

＊＊＊

朝の特訓を見た後、甲児はある場所に来ていた
甲児
「よう、シャーリーさん」
シャリオ
「あ、甲児さん！」
其処に居た女性ははやての髪の色より少し濃い目の長い髪をして眼

鏡を掛けた女性であった
名前を「シャリオ・フィニーノ」通信士であるが、同時に「デバイスマスター」の称号を持つ女性だ
甲児は親しみを込めてシャーリーと呼んでいる
甲児はシャーリーに近づくと、懐から2枚のプリントを取り出してシャーリーに見せた
甲児
「俺なりに考えたデバイスなんだけど・・・どうかな?」
シャーリーは甲児に渡されたプリントを見た
それは、デバイスの設計図であった
形は二丁拳銃型のデバイスにローラーブーツ型のデバイスである
二つとも、人格を内臓している事からインテリジェントデバイスである事が分かった
二つの設計図を見てシャーリーは驚く
シャーリー
「凄いですよ!甲児さん!異世界の人である貴方が此処まで精密な設計図を作れるなんて」
甲児
「へへ、昔取った杵柄って奴さ・・・こういうのは得意分野なんでね」
甲児は自慢げに鼻を擦った
甲児は元の世界で一人で万能円盤「ＴＦＯ」を完成させた事がある
その時は設計から開発まで全て一人でこなしたのだ
その為、このような設計図を作るのは得意であり、また好きでもあった
シャーリー
「しかし、驚いたなぁ・・・私ほんの触り程度しか教えてないのに、それで此処まで精密な設計図を作るなんて」
そう、甲児はここ数日シャーリーにデバイスの構造についてレクチャーを受けていたのだ

甲児はこの世界に来てデバイスと言う物に興味を持ち、是非作ってみたいと思ったのだ
其処でデバイスマスターと呼び名の高い彼女にレクチャーを受けることにした
甲児
「一応名前も俺的に決めてあるんですよ」
シャーリー
「へ～、何て名前なの？」
甲児
「拳銃型のデバイスの名前が『クロスミラージュ』、んでローラーブーツ型のデバイスが『マッハキャリバー』って名前にしたんすよ」
甲児は設計図を指差しながら言った
シャーリーは名前を言われた設計図を見ていた
其処には、今まで彼女達が苦戦していた課題が全て書き込まれているのだ
現にこのタイプのインテリジェントデバイスの開発には何度か行った事がある
だが、その度に問題が発生して難航していたのだ
だが、それを甲児はたった一人で解決してしまったのだ
つくづく兜一族は凄いと思わせられる
甲児
「とりあえず、これを使うのはティアナとスバルを想定して作ったんだけどな」
シャーリー
「そうですね、それじゃ早速開発に取り掛かりますよ・・・この設計図があればかなり早い期間で完成させられますよ」
甲児
「あ、じゃぁ俺も手伝うよ。丁度デバイスを作ってみたかったし」
シャーリー
「良いんですか？この設計図を作った甲児さんが居てくれるなら心

強いですよ」
甲児
「おう、任せておけって！」
甲児は自分の胸を叩いて言った

ホテル・アグスタ　中篇（後書き）

ティアナ
「この小説では、私とスバルのデバイスの開発に甲児さんが関わってたんですね」
甲児
「ああ、何かこの世界に来て俺もデバイスを作ってみたくて設計図を描いていたんだ」
スバル
「うわぁ、楽しみだなぁ！早く使いたいねぇ、ティア」
ティアナ
「うん！そうだね」
甲児
「へへ、ま、楽しみにしてろよ♪」
スバル・ティアナ
「はい！！」
甲児
「そう言やぁ、次回は少し長くなりそうなんだってな」
作者
「はぁ、ちょっと前振り長すぎたもんで、後編で一気に書く事になってしまって」
甲児
「ま、しっかり頼むぜ作者さんよ」
作者
「はい・・・」

ホテル・アグスタ　後編（前書き）

甲児
「今回はかなり長い話になるんだったな」
作者
「はい、正直どうなるか不安です」
甲児
「しっかりしろよ！作者だろう？」
作者
「はい・・・」

ホテル・アグスタ　後編

甲児は今機動六課内にある格納庫に来ていた
其処には、隊員達が使用する大型ヘリの他に、質量兵器であるダイアナンA、そしてマジンガーZが格納されていた
今、格納庫内ではヘリの整備に整備員達が大忙しである
だが、ダイアナンA、そして、マジンガーZの整備は行き届いていない
理由は簡単である
この世界の整備士達はマジンガーを見るのは初めてなのだ
その為、中の構造は殆ど未知の技術なのだ
その為下手に触れない代物なのだ
なので、マジンガーの整備は専ら甲児とさやかの共同作業である
さやか
「甲児くん、こっちは終ったよ」
甲児
「サンキュー、さやかさん」
甲児は指を立てて言った
甲児とさやかは今マジンガーの装甲の修理をしていた
と言ってもやってる事と言えば継ぎ接ぎにも似た作業であった
さやか
「やっぱり此処じゃまともな整備が出来ないわね」
甲児
「仕方ないさ、この世界には元々巨大兵器の技術が無いんだから、こうして少なからず道具を貸してくれるだけでも有り難い事さ」
さやか
「そうね・・・」
さやかもそれを聞いて納得した
此処のスタッフも悪戦苦闘しながらもマジンガーの整備を手伝って

くれている
だが、甲児達からしてみればまだまだ力不足である
今までこんな巨大なロボットを整備した事が無いので仕方ないと言えば仕方ないが、それ以上に甲児にとっての問題があった
甲児
「やっぱり・・・エネルギーがもう底を着きそうだな」
甲児はパイルダーの計器にある一つのメーターを見て愚痴った
そう、エネルギーメーターである
マジンガーの生命力とも言える光子力の残量を示すメーターである
今そのメーターはイエローゾーンとレッドゾーンの間に位置していた
分かり易く言うと残りの光子力エネルギーは四分の一も無い状態なのだ
それが甲児にとっての悩みの種であった
と言うのも、この世界には光子力エネルギー、そして超合金Zの元となるジャパニウム鉱石が無いのだ
幸い甲児はジャパニウム鉱石の加工技術を有している為じゃパニウム鉱石があれば其処から光子力エネルギーを生成する事が出来るだが、そのジャパニウム鉱石がこの世界には存在しないのだ
以前はやてにその事を聞かれかぶりを振られた時には目の前が暗くなる気がした
現在この世界で機鋼獣を倒せるのは甲児のマジンガーZとさやかのダイアナンAしか無い
だが、今そのマジンガーのエネルギー残量はかなり心もとない状態となっているのだ
その上、装甲の修理も満足に出来ない為マジンガーの各所の装甲は痛み出していた
このまま戦闘を行えばいずれマジンガーは動かなくなってしまうだろう
そうなってしまえばこの世界で機鋼獣を倒せる力は後さやかのダイアナンAしかなくなってしまう

だが、そのダイアナンAも以前戦った機鋼獣ガラダブラとの戦いの傷を治す術も無くそのまま痛々しい状態となっている
事実上対抗手段が無くなってしまうのだ
甲児はそう思い自然と険しい顔になった
甲児自身もこの世界、ミッドチルダが気に入っていたのだ
最初はとんでもない所に飛ばされたと思っていたが、其処に住む人達と触れ合っていく内にこの世界も悪くないと思っていたのだ
だからこそ、甲児はこの世界の住人達を守りたかったのだ
だが、このままではいずれマジンガーにも限界が訪れる日が来るそうなる前に何か手を打たないといけないのだ
くそっ、こんな時に鉄也さんやリョウくん達が居れば心強い筈なのに！！
甲児は今は居ない仲間を考えて頭の中で愚痴っていた
エリオ
「甲児さぁぁぁぁん！」
キャロ
「さやかさぁぁぁん！」
ふと、下の方から声がした
甲児とさやかは下を見た
其処にはなにやら巨大なバスケットを抱えたエリオとキャロが手を振っていた
エリオ
「差し入れ持って着ましたよぉ！」
キャロ
「少し休憩しましょぉ！」
2人が下から思い切り叫ぶ
甲児
「いやっほぉ！丁度腹が減ってたんだ！行こうぜさやかさん！」
さやか
「もう、食いしん坊ねぇ甲児くんは」

茶化しながらもさやかは内心ホッとしていた
もしかしたら甲児は異世界に飛ばされた不安と自分でしか機鋼獣を倒せないというプレッシャーに押しつぶされていると思っていたからだ
だが、今さやかの目の前に居る甲児はとても明るい顔をしている
そんな甲児を見てさやかはホッとした
甲児
「早く行こうぜさやかさん！俺もう腹減って穴が開きそうだぜ」
さやか
「フフ・・・はいはい」
甲児とさやかはゴンドラに飛び乗り操作をして降りた
下ではエリオとキャロがシートを敷いて甲児達を待っていた
ゴンドラを降りて甲児達はシートに座る
まるでピクニックか遠足気分であった
甲児
「悪いな二人共、後で食堂で食いに行こうと思ってたけど結構作業に時間食っちまってよ」
エリオ
「大丈夫ですよ。僕達も今食べようと思って持ってきましたし」
そう言ってエリオは既に握り飯を頬張っていた
と言っても、その握り飯は甲児の顔ぐらいはある巨大なサイズであった
甲児
「って、でけぇなお前の握り飯」
キャロ
「食堂の人に頼んで材料を分けて貰って作ってきたんです」
エリオ
「握ったのが僕なんで僕用のサイズになっちゃいまして」
それを聞いた途端甲児は大声で笑った
甲児

「確かに、お前結構食うからな、これ位あって十分なんだろうな」
甲児はエリオの握った握り飯に齧り付いた
さやかも少し頂く
塩加減は程良い位の効きで、巻いてあった海苔のパリッとした食感がまた心地よかった
また、具として使っている魚も異世界の為種類は分からないが油がのっていて美味であった
まず甲児達の世界ではお目に掛かれない味である
甲児
「うんめぇ！これ本当にお前が握ったのか？」
エリオ
「はい！・・・って、僕この握り飯しか作ってなくて／／／」
さやか
「それでも美味しいわよ！塩加減も握り具合も丁度良いし、案外エリオ君って料理の才能あるのかもね」
さやかはそう言ってキャロが作ったであろうサンドイッチに手を伸ばす
柔らかいパンの中にはレタスとハムを挟んだシンプルな物である
それをさやかは一口食べる
これまた中々どうしてか美味であったのだ
さやか
「うん、これも美味しい！二人とも料理上手なのね！」
キャロ
「そ・・・そうですか／／／」
エリオ
「あはは・・・／／／」
エリオとキャロは自分の作ってきた料理を褒められて嬉しいのか頬を紅く染める
甲児はニヤリとしてエリオの肩に腕を回す
甲児

「良かったじゃねぇかエリオ。お前の好きなキャロは料理上手でよお」
エリオ
「えええ！！！」
甲児
「これなら将来良い嫁さんになるぜ！頑張って落とせよ」
エリオ
「なななななな何言ってんですか甲児さささささん」
エリオは真っ赤な顔をして動揺する
その仕草が甲児には溜まらなく面白かったのか腹を抑えて笑う
そんな甲児にさやかが軽く小突く
さやか
「もう、弱いもの虐めは止めなさい」
甲児
「いてて・・・御免よ、さやかさん」
甲児は小突かれた頭を抑えて言う
すると、
スバル
「あ、やっぱり此処に居た！」
ティアナ
「２人共作業中だったんですね」
スバルとティアナが大皿を持ってやってきた
甲児
「スバル！それにティアナも！」
さやか
「どうしたの？一体」
スバル
「私達も一緒に食べようと思って」
ティアナ
「おかず持ってきちゃいました」

ティアナの持ってきたのは皿一杯に盛られた肉野菜炒めであった
そして、スバルの持ってきたのはこれまた皿一杯のスパゲッティ・・
・の筈なのだが、何故か半分削られるように無くなっていた
不信に思った甲児がスバルの口元を見ると、スバルの口の周りには
ベッタリとミートソースがついていた
それを見て甲児はまた笑い出した
さやかも口元を押さえて笑い出す
ティアナ
「スバル！あんたあれ程言ったのにまた摘まみ食いしたのね（怒」
スバル
「御免ティア！だってお腹空いててつい・・・（照」
ティアナ
「ドアホオオオオオオオオオオオオ！」
ティアナの怒声と同時に拳骨がスバルに直撃する
スバルは「ギャフン」と言って頭を抑えた
甲児
「ハハハ、仕方ないさ、何せもう結構な時間だしな」
甲児の腕時計では既に夜の１０時を回っていた
さやか
「ティアナちゃんもその位で許してあげたら？」
ティアナ
「甘いですよ！二人とも！こいつは甘やかすとすぐに付け上がるんですから」
スバル
「え～、そんな事無いよ～」
スバルは心外だと言いたそうな顔で言う
だが、ティアナは未だに怖い顔をして睨んでいる
甲児は苦笑いを浮べながら２人の持ってきたおかずを口に運ぶ
これまた結構な味であった
この世界って結構飯が美味いんだなぁ

そう思えた
なのは
「あ、やっぱり皆此処にいたんだ」
フェイト
「なのはの予想があたったね」
すると、今度はなのは、フェイトコンビがやってきた
なのはは肩にしょった少し大きめのクーラーボックスを担いでいる
フェイトは両手一杯の飲み物を抱えている
甲児
「お、なのはちゃんにフェイトちゃん！」
さやか
「２人も来たんですね」
なのは
「うん、甲児さん達が見えないんで探してたんです」
フェイト
「そしたら、格納庫に居るかなぁと思って来てみたら案の定でしたね」
２人はそう言ってシートの中に腰を落とす
スバル
「なのはさん、そのクーラーボックスの中って何ですか？」
なのは
「ああ、これね。この中には自家製のお菓子が入ってるの」
フェイト
「なのはの実家は喫茶店をやってるんだよ。だからなのはの菓子の腕前は結構凄いよ」
エリオ
「それ凄いですね」
キャロ
「うわぁ、楽しみです！」
フリード

「きゅく～～！」
何時の間にかフリードも現れて嬉しそうにしている
甲児
「たはは・・・何か凄い事になったな」
さやか
「そうね、まるで宴会みたいね」
甲児達の目の前には皆が持ち寄って着たおかずで一杯になりつつあった
だが、これで終る筈が無い
はやて
「くおおおらあああああ！うちを置いてこないな面白い事しよって！あんたら全員逮捕やあ！」
そう言ってはやてとシグナム、ヴィータ、シャマルが現れた
４人共大皿を持っている
甲児
「あり？シグナムにヴィータって料理出来たんだ？」
シグナム
「喧嘩を売っているのか？甲児」
ヴィータ
「こう見えても少し位は出来るつもりだぞ！」
甲児
「つもりかよ！」
２人は甲児を睨みながら言うが、明らかに自信が無さそうである
恐らくそれ程上手く出来ないのであろう
そう甲児は予想出来た
シャマル
「私は結構自信あるんですよ」
甲児
「へ～、そりゃ楽しみだなぁ」
やはり見た目通りだなぁと甲児は思った

そして、シャマルが置いた皿を見た時・・・甲児は己が目を疑った
それは、確かに魚の料理なのだが、何やら妙な色のソースがかかっていた
どんな色なのか説明もし難いような色である
甲児は真っ青になりながらシャマルに聞いた
甲児
「えっと・・・・シャマルさん・・・このソースって・・・一体・・・なに？・・・（汗」
シャマル
「ええ、市販のソースを沢山入れたんですよ」
ニッコリとした顔でシャマルは言う
甲児は再びソースを見た
明らかに色が変である
これが市販のソース？だとしたらこんなソース売れる筈が無い
甲児
「因みに・・・どんなソースを使ったんですか？」
シャマル
「色々です。ウスターソースに、マヨネーズに、キッコーマンに、醤油に酒にお酢に豆板醤に重曹にオリーブオイルにその辺に生えてたきのこに草に生き物にケチャップに鶏がらスープにウランにプルト・・・ゲフンゲフン、とにかく、色々入ってます♪」
甲児
「・・・・・・・・・（真っ青」
甲児は青ざめた
要するにあるだけのものをぶち込んだというのだ
しかも、さっきのが聞き間違いでなければ、何かとてつもなくヤバイ物が入ってる気がした
これって、食えるのか？
甲児はシャマルが持ってきたおぞましい色を放つ魚料理を見てそう思った

そんな甲児にシグナムが言い寄る
シグナム
「シャマルは自分では料理上手と思ってるらしいが、それを食べて病院送りになった者は数知れずだ、気をつけろ」
甲児
「ま、マジですか！！！」
甲児は驚愕した
すると、他の奴が持ってきたのも不味いのか？
そう思えた
だが、シャマルのは確かに不味そうだが、他のはそうでもなかった
特にはやてが持ってきたおかずは一層美味そうに見える
ヴィータ
「はやての料理は凄い美味いぞ」
はやて
「当たり前や！うちの料理を食べたら口から波動砲が出せるからなぁ」
甲児
「そいつはすげぇや！」
何時の間にか格納庫が賑やかになっていた
皆も料理を囲んで一斉に料理を摘まむ（シャマルの持ってきた料理以外）
どの料理もかなりの美味で思わず甲児の顔も綻んだ（シャマルの持ってきた料理以外）
ヴァイス
「おい、甲児の旦那！俺を呼ばないなんて酷いじゃねぇか」
甲児
「お！ヴァイスの旦那！あんたも来たのかい？」
甲児とヴァイスは以外と気が合うのかあの後（鉄の魔神　参照）互いに旦那と呼び合って結構仲良くなっていた
ヴァイス

「へへへ、宴会と聞いちゃ来ない訳にはいかねぇだろう！」
そう言ってるヴァイスの手には1本の酒瓶が握られていた
其処には「レジアス殺し」と書かれていた
さやか
「なぁに、そのレジアス殺しって？」
ヴァイス
「酒の名称さ、管理局の中将がこれまた鬼みたいだからそれにちなんで作ったらしいぜ」
甲児
「お！いいねぇ、丁度酒が欲しいと思った所だったからな」
フェイト
「って、甲児さんはまだ未成年じゃないですか！駄目ですよ！お酒なんて飲んだら！」
フェイトが慌てて止めようとする
だが、甲児は聞かない
甲児
「なぁに、あと一年したら２０歳になるんだし、前祝って事で良いじゃん」
フェイト
「良くありません！執務間としてそんな事は絶対に許しませんよ！」
十蔵
「硬いのぉフェイトちゃんは。そんなんじゃすぐに皺皺のオババになってしまうぞぉ」
フェイト
「大きなお世話です！ッて言うか！十蔵さんは何時も唐突過ぎます！心臓に悪いですよ！」
内心驚きながらも頑張って堪えるフェイト
だが、額は汗だくである
まだ十蔵の顔に慣れてないらしい
十蔵はそんなフェイトにお構いなしに自分のサイズにあったお猪口

を取り出す
十蔵
「さてと、そんじゃなのはちゃん、ワシにお酌してくれんかのぉ」
なのは
「む、無理です・・・（汗」
なのはは引き攣った顔でやんわり断った
事実無理である
全長３０ｃｍしかない十蔵が持ってるお猪口はそれこそミリ単位しか無いのだ
そんなお猪口に注ぐなど、１ｍ先のミジンコを打ち抜くのと同じ位（言い過ぎか）難しいのだ
仕方ないのではやてはリインを呼ぶはやて
「リイン、十ちゃんにお酌したってな」
リイン
「は、はい（怖いよぉ」
内心ビクつきながらもリインは頑張って十蔵にお酌する
十蔵はそれを一気に飲み干しプハァと満悦顔をする
十蔵
「いやぁ、やっぱ美人な穣ちゃんにお酌してもらうと酒の味がまた一段と増すのぉ」
十蔵は甲児の肩の上で嬉しそうに飲んでいる
その横で甲児はヴァイスにお酒を注いで貰っているヴァイス
「ほれ、甲児の旦那！ググッと一杯！」
甲児
「おほ、悪いねぇヴァイスの旦那」
コップに並々に注がれた酒を甲児は軽く煽る
半分飲んだところで甲児はコップを口元から離し赤い顔をしてプハァと息を吐く

甲児
「か～～～！うめぇ！やっぱ美味い飯には美味い酒だよなぁ！」
ヴァイス
「おほ！甲児の旦那も酒の味が分かるんだねぇ」
甲児とヴァイスはさも美味そうに酒を飲んでいく
２人共次第に顔が赤くなっていく
なのははその光景を苦笑いで見ており、フェイトは少し不機嫌そうに見ている
はやてはまだ飲めないのを少し羨ましそうに見つめる
さやかはその隣で額を押さえる
スバル
「ねぇティア、お酒って美味しいのかなぁ？」
ティアナ
「私に聞かないでよ。飲んだこと無いんだから（汗」
スバルは酒に興味を持ったらしく隣に座っていたティアナに聞いた
それにティアナは面倒臭そうに返す
そんな会話を聞いた甲児が
甲児
「何だスバル、お前飲みたいのか？」
と言って自分の飲んでいたコップを差し出す
スバル
「え？良いんですか！」
甲児
「全部飲むなよ」
スバル
「わぁい！やったぁ！」
スバルは喜んで甲児の持っていたコップを取ると一口飲んでみた
さやか
「か、間接キス！！！」
さやかはさり気に顔を紅くしていた

他のメンバーも同様に紅くなる
そんな中、酒を飲んだスバルが
スバル
「うえ～～～～～、にが～～～～い！」
いかにも苦そうな顔をして舌を出す
それを見て甲児とヴァイスが笑う
甲児
「ハッハッハ、まだスバルには無理だったな」
ヴァイス
「ま、お子様はジュースでも飲んでなさいって事だな」
甲児
「エリオとキャロは後十年したら飲ましてやるよ」
そう言って甲児は残っていた酒を一気に煽る
そして、またプハァと言った
結局その後その場に居た職員達も集まり格納庫は大宴会さながらの様子となった
出てきた料理は殆どが皆の胃袋に入っていった（シャマルの料理以外）
それで、甲児が翌日二日酔いになったのは言うまでも無い

＊＊＊

その日、甲児ははやてに呼ばれて部隊長室に来ていた
はやて

「実はな、甲児の言ってたあのジャパニウムなんやけどな、上手くすれば手に入るかもしれへんのよ」
甲児
「本当か！？」
甲児は飛びあがる気持ちを必死に押さえ込んだ
はやて
「今夜ホテル・アグスタで行われるロストギアのオークションがあるんや、うちらはそのオークションの護衛を任されたんやけどな、もしかしたらその中にジャパニウムが紛れ込んでる可能性があるかもしれへんのや」
甲児
「しれないって・・・確証じゃないのかよ！」
甲児は聞いたがはやてはかぶりを振った
はやて
「残念やけど確証は無いんや、何せジャパニウムっちゅう鉱石はうちらの世界では何の使い道も無い代物やさかい皆アクセサリー程度にしかみぃひんやろ？せやから皆へんちくりんな名前を付ける事もあるんや」
甲児
「書類で見るんじゃ分からないって訳か・・・だけど、少し希望が見えたぜ」
はやて
「おおきに！」
甲児
「それじゃそのオークションの護衛は俺も参加するぜ」
はやて
「勿論そうして貰うと助かるわ、何せ機鋼獣と戦えるんは甲児のマジンガーZしか無いしなぁ」
はやては思い出すように呟く
今まで戦ってきた機鋼獣の殆どは甲児のマジンガーZが葬っている

機動六課の魔道士達も参加して攻撃しているが、やはりあの鎧の効果なのだろうか決定打にはならない
魔法攻撃は全て完全とは言わないが弾き返されてしまうのだ
原理は分からないが、どうやら魔法を使わないマジンガーの物理攻撃には弱いらしくしかもマジンガーの強さが常軌を逸している為連戦を勝ち抜いて来たのだ
しかし、はやて自信も分かるほど、今のマジンガーは傷ついている
何とか手を貸してあげたいのだが、此処の施設では満足に修理を行う事も出来ない状態なのだ
しかもマジンガーは何故か魔法の修復を一切受け付けない
その為手作業で修理するしかないのだ
それがまたマジンガーの修理が難航する原因の一つでもあるのだ
しかも以前話したと思うがこの世界にはジャパニウムが存在しないと言われている
その為マジンガーの修理どころかエネルギーの補給も出来ないのだ
今でこそ動かせないダイアナンＡのエネルギーを分けて動いているが、既にダイアナンのエネルギーは空となっている
動かせても後一回が限度である
最早藁にも縋る思いの時にこの情報が入ったのだ
甲児にはとても嬉しい情報でもあった
はやて
「そう言や甲児」
甲児
「何だ？」
甲児は飛びあがるのを止めてはやての方を向く
はやて
「こないだ見せて貰った甲児が設計したデバイスの事なんやけど」
甲児
「クロスミラージュとマッハキャリバーだろう」
はやて

「そう、それそれ、それって後どの位で完成するん？」
甲児
「大体出来上がってるから、今日中には完成するぜ」
はやて
「ほんまか？それやったら今夜の仕事には間に合いそうやな」
甲児
「それだったら余裕だぜ、後はテストをすれば大丈夫だからな」
甲児は頷いて答えた
それは以前甲児がシャーリーに渡した甲児がティアナとスバルの自作デバイスの設計図を改良して作り出したインテリジェントデバイスである
その設計図を最初見た時はシャーリーは勿論、機動六課の全員（スバルとティアナには内緒）が驚いたと言う
それ程の完成度を誇っていたのだ
今はシャーリーの下で最終審査を受けており、それを通れば晴れて実戦投入が可能となるのだ
甲児
「一応あの２人の自作デバイスを元に作ったからあれは二人に渡そうと思ってるけどな」
はやて
「そっか、そならそのデバイスは甲児が渡してくれへんか？」
甲児
「え？何でだよ？それなら直属の上司のなのはにやらせれば良いだろう？何で俺なんだ」
はやて
「スバルもティアナも甲児の事偉く信頼しとるようやしな、それに甲児が作ったって言ったら多分あの２人喜ぶと思うしな」
それを聞いて甲児は納得した
どうやら自分は年下に気に入られる才能があるらしい
自分はそんな事に気を使った気はさらさらないのだが・・・

甲児
「分かった、デバイスが完成しだい俺が2人に渡しとくよ」
はやて
「おおきに！それから、そのオークションなんやけどな、さやかさんを借りてもええか？」
甲児
「え？別に良いけど何で？」
はやて
「うちらジャパニウムを見た事が無いんや、せやから少しでもジャパニウムに詳しい人と一緒に居て欲しいんや。そんでさやかさんを借りたいんやけど」
成る程、要するにジャパニウムを落選する際に見落とさないように着いていて欲しいと言う訳だな
と、甲児は思った
確かにジャパニウムは加工次第では膨大なエネルギーを生み出す結晶なのだ
だが、加工の仕方を間違えると大惨事になる危険性を含んでいる
その為、この世界ではもしあったとしても大した価値にはならないであろう
使うとしてもせいぜいアクセサリー程度の事だろう
そう思えた
それに、今はダイアナンAは言ってしまえば使い物にならない状態である
むしろはやて達と一緒の方が安全なのかも知れない
そう思えた
甲児
「分かった、それじゃその時の外の警備は俺達に任せときな」
はやて
「ほんまおおきにや！あんた異世界から来た言うんにほんまに話の分かるやっちゃなぁ」

甲児
「へへ、それが俺、兜　甲児様よ」
甲児は自慢げに自分の胸板を叩く
そしてむせった

＊＊＊

その日の夜、甲児達を乗せたヘリは一路ホテル・アグスタを目指していた
ヘリの中では今回行われるであろう作戦がはやての口から説明されるはやて
「今回の任務はオークションが行われている間のホテルの警備や。今回のオークションの品を狙って機鋼獣が来るかもしれへんし、他にも武力勢力が来ないとも限らん、十分に警戒したってな」
はやての説明にその場に居た一同が返事をするなのは
「それと、今回はオークションでもしジャパニウムが出品される可能性があると思ってさやかさんも私達と一緒に行動してもらいます」
さやか
「足手まといにならないようにするわ」
甲児
「頼むぜ、さやかさん」
さやか
「任せてよ、甲児くん」

さやかは片目を閉じて笑う
俗に言うウィンクである
甲児
「ま、さやかさんはかなり強いから、護衛の必要なんて無いだろうけどな」
さやか
「それどういう意味？」
腕をボキボキと鳴らしながらさやかは甲児に言い寄る
甲児は顔を青ざめながら下がる
当然さっきのはほんの冗談のつもりだ
本当は心配で溜まらないのだ
だからこそ、こういう冗談を言って場を和ませようとしていた
それはさやかも理解していた
だからこそ、さやかもこうした冗談を言ったのだ
甲児
「ところで、２人共そのデバイスの調子はどうだ？」
甲児は出撃前に完成したデバイスを渡したティアナとスバルを見ていた
２人共既にバリアジャケットを展開してデバイスの点検をしている
ティアナ
「問題ないですよ」
スバル
「流石甲児さんの設計したデバイスですね！私にフィットしますよ」
甲児
「そりゃそうさ、何せ元はお前等の自作デバイスだしな」
気に入ってもらえたのが良かったのか甲児は上機嫌に返した
それをエリオとキャロが少し羨ましそうに眺める
甲児
「何だ？エリオ、ひょっとしてお前も作って欲しかったのか？」
エリオ

「え？・・・ええ、少し・・・／／／」
キャロ
「わ、私も・・・／／／」
甲児
「ハハハ、心配すんなよ、他にも色々作りたい物があるからその時にはお前等のも考えてやるよ」
その言葉を聞いた途端2人の顔が明るくなった
やはり其処は子供である
そう甲児は思えた
ふと、甲児は壁の端に視線が行った
其処には一匹の狼が寝ていたのだ
毛並みの良い青色の狼である
へぇ、この世界には狼を飼う風習があるんだな
そう思った甲児は主室に狼に近づく
すると、
？？？
「む、私に何か用か？」
甲児
「どわあああああああああああああ！！」
甲児は思わず腰を抜かした
それもその筈
狼が喋ったのだ
普通甲児の世界では動物は喋らない（一部聞き取れる程度の言語を話す者も居たりするが）
それでも喋らないのが普通なのだ
だが、今目の前に居る狼は普通に聞き取れる言語で喋ったのだ
一体どうなってんだ？この世界は
甲児はそう思っているとはやて
「あ、その子はザフィーラ言うてな、シグナム達と同じヴォルケン

リッターの守護獣なんや」
甲児
「え?こいつもシグナム達と同じ騎士・・・じゃねぇや、守護獣なのか?」
ザフィーラ
「宜しく頼む」
はやて
「ほんまはな、以前格納庫でやった宴会の時も来とったんやでぇ、せやけど甲児がベロンベロンに酔っとってその際にザフィーラを見て『おい、犬っころ!こっちに来て枕になれ』って言うなりザフィーラの尻尾を掴んで腹を枕にしてたんやで」
甲児
「ま・・・マジ(汗」
正直全く憶えていない
そんな事をしてたのか、俺って
だが、はやての会話はこれで終りでは無かった
はやて
「他にも甲児は酔った勢いであ~んな事や、こ~んな事もしとったっけなぁ~」
甲児
「な、何だ!何をしたんだ?俺?」
甲児は慌てた顔ではやてを見る
だが、はやては甲児から視線を逸らす
勿論わざとだ
甲児は仕方なく回りに聞いた
甲児
「なぁ、なのは!俺って夕べ一体なにを・・・」
なのは
「わぁぁ、星が綺麗だなぁぁ(わざと視線を逸らしてる」
甲児

「フェイト！俺って夕べ何もしてないよな！してないって・・・」
フェイト
「私は何も知りません！私は何も知りません！私は何も知りません！私は何も知りません！私は何も知りません！（以下千行省略」
甲児
「スバル！俺、夕べお前等に何かしたか？」
スバル
「あ～、早くマッハキャリバーで走り回りたいな～♪（聞いてない」
甲児
「ティアナ！頼む！俺の身の潔白を証明・・・」
ティアナ
「さ、さぁて、クロスミラージュの点検しないと（わざとっぽく離れる」
甲児
「エリオ！キャロ！俺何もしてないよな！な！」
エリオ
「グ～グ～（狸寝入り」
キャロ
「ス～ス～（同じく」
甲児
「シグナム！ヴィータ！この通りだ！何もしてないって言ってくれ！」
シグナム
「見損なったぞ、甲児（冷ややかな視線を送る」
ヴィータ
「てめぇがあんな事するとはな（同じく」
甲児
「シャマルさん！俺・・・」
シャマル
「大丈夫よ甲児くん、人には一つや二つ間違いを犯す事だってある

わよ（笑顔で言う」
甲児
「さ、さやかさん！さやかさんだけが頼りだ！頼む！」
さやか
「・・・・・／／／／／／（ポッ」
さやかの顔を見た途端、甲児の脳裏に電流が走った
まさか・・・まさか・・・
酔った勢いで・・・まさか・・・・さやかさんに・・・・・
（自主規制）をしちまったのかあああああああああああああああ！
公に口走れない単語を頭に浮かべて甲児は蹲る
そして後悔の念に捕らえられる
その光景をはやては必死に笑うのを堪えながら見る
はやて
（プププ、皆サンキューな）
なのは
（は、はやてちゃん・・・あんまり虐めない方が・・・）
はやて
（平気や平気や、どうせ暫くしたらケロッとしとるやろうしな）
フェイト
（そうだと良いんだけど・・・）
そう、はやての言ったあんな事やこんな事は完全なでまかせだったのだ
只、その時の記憶が無い甲児には証拠を探る事が出来ず、自己嫌悪に陥っていた
その光景をヘリの中にいたはやては腹を抑えて笑い、なのは、フェイトは同情の視線を送り、ティアナは両手を合わせて謝罪しており、スバルは全く気にしておらず、エリオとキャロは意味が分からず、シグナムとヴィータは当然だと言った顔をして、シャマルは相変わらず笑っていた

そんなこんなでヘリはホテル・アグスタに辿り着いた
はやて
「ほんじゃ作戦通りに頼むで皆の衆」
スバル・ティアナ・エリオ・キャロ
「はい！」
甲児
「任せろい！」
シグナム
「了解した」
ヴィータ
「あいよ」
ザフィーラ
「心得た」
シャマル
「気をつけてね、はやてちゃん」
はやて
「それから、なのはちゃん、フェイトちゃん、それからさやかさん
にはこれに着替えて貰うわ」
そう言ってはやてが取り出した物は

＊＊＊

甲児
「マジィィィィン・ゴォォォォォ！」

甲児はすぐさまパイルダーに乗りマジンガーを呼んだ
真下からマジンガーが転送される
甲児
「パイルダァァァァ・オォォォォン！」
甲児の乗ったパイルダーとマジンガーが一つになる
一心同体になったマジンガーが夜空に向かって大きく腕を伸ばし吠える
その光景は何処か頼もしく、そしてかっこよかった
だが、その体の節々は連戦の傷が痛々しく残っている
無理も無い、この世界ではマジンガーの整備は殆ど無理なのだ
何しろ超合金Zと呼ばれる未知の物質で固められた体なのだ
それと同じ合金はこの世界では生成出来ないのだ
その為今回のオークションで何としてもジャパニウムを入手しなければならないのだ
甲児は息巻いていた
もし、今回ジャパニウムが手に入らなかった場合は、その時はマジンガーは物言わぬ鉄の塊となってしまう
それだけは避けたかった
甲児の顔が自然と強張る
弱気になるな甲児
この世界で唯一機鋼獣と戦えるのは俺しか居ないんだ
グレートもゲッターも居ない今、頼れるのはこのマジンガーZしか無いんだ
その俺が弱気になってどうする
自らを叱咤激励して甲児は操縦桿を握る
そして、通信機を渡したはやてから、朗報が来るのをじっと待っていた
その隣では、同じく待機中のフォワードメンバーが居た
皆甲児の身を案じているのだ
マジンガーは今ではミッドチルダにとっては救世主のような物であ

った
今まで多くの魔道士が挑んでは返り討ちにあっていた機鋼獣をたった一体で蹴散らしてきたのだから
だが、どれ程強いロボットでも、エネルギーが無くなれば動かなくなってしまう
今回の任務は正に賭けでもあった
ティアナ
「ジャパニウム・・・あるかなぁ・・・」
スバル
「きっと見つかるよ！だから私達も今回の任務、甲児さんと一緒に頑張ろうね！」
ティアナ
「そうね」
エリオ
「でも、マジンガー・・・かなりボロボロだね」
キャロ
「うん・・・皆頑張ってたみたいだけど・・・やっぱり私達の世界じゃマジンガーの整備は出来ないからね」
エリオ
「うん・・・」
エリオは悔しかった
彼にとって正に兄貴分とも呼べる甲児に対し自分は何も出来ないのが非常に悔しかったのだ
自分ではマジンガーの代わりにはなれない
その思いがエリオに纏わり着いていた
キャロ
「エリオ君」
エリオ
「え？」
キャロ

「どうしたの？凄く怖い顔してたけど」
エリオ
「え？そ、そう・・・御免・・・少し考え事してたから・・・」
申し訳無さそうに頭を掻く
甲児
「何だ？キャロの事考えてたのか？このムッツリスケベ」
エリオ
「うわわ！こ、甲児さん！聞いてたんですか？」
甲児
「いや～、暇だからよぉ、ついそっちの会話盗聴しちまったよ」
エリオ
「ゆ、油断も隙も無い人だなぁ・・・」
エリオは心底そう思った
甲児
「なぁ、エリオ」
エリオ
「え？」
ふと、甲児の口調が変わった
真剣な口調だった
甲児
「あんまり思いつめるなよ」
エリオ
「甲児さん」
甲児
「お前はマジンガーの代わりになる必要は無いんだよ。お前はお前だ！こうして一緒に戦ってくれるだけでも俺は頑張れるんだ。だからあんま思いつめるなよ。」
エリオ
「・・・はい！」
エリオは元気良く答えた

シグナムとヴィータは遠目でその会話を聞いていた
正直、最近の甲児を見る目が2人は変わっていた
甲児は確かに覗きはするし、スケベだし、ボインは・・・・触ったし、とにかく変態スレスレのような奴なのだ
だが、何故か不思議と彼の周りには人が集まっていく
そして、彼に対しては誰でも心を開くのだ
あのティアナでさえも甲児に心を開いた
一体何者なのだろうか
そうシグナムとヴィータは思った
シャマル
「え？何コレ！」
すると、シャマルが何か発見したのか驚きの声を上げる
シグナム
「どうした？シャマル」
シャマル
「このホテルに何か巨大な物が一体近づいてくるの・・・大きさからして・・・機鋼獣！」
一同の顔に戦慄が走る
ヴィータ
「やっぱり来やがったか」
シグナム
「ああ、そうだな」
2人はそう言ってデバイスを構える
シャマルとザフィーラも臨戦態勢を取る
そして、4人の目の前の茂みが動いた

＊＊＊

一方、さやか達はオークションの会場に紛れていた
因みに、今彼女達は管理局の制服を着ていない
着ているのは、少し高値の付きそうなドレスであった
さやか
「まさかこんな所でドレスを着るなんて・・・でも、ちょっと嬉しいかも／／／」
なのは
「にゃはは、あくまで潜入ですから、それにこの格好の方が怪しまれずに済みますしね」
フェイト
「そうだね・・・でも、男の人から声かけられるのはどうにかならないのかなぁ（汗」
フェイトは多少くたびれながら言った
現に彼女達はこの会場に来るまでに幾多の男達から声を掛けられていたのだ
だが、その度に断ってきたが
はやては流石部隊長なのか目の前で多数の男達と楽しく話し合っている
そこは凄いなと認めていた
すると、
？？？
「あれ？なのは！」
なのは
「あ！ユーノ君！」
なのは達の前に一人の男性が現れた
金色の髪をして後ろ髪を結んでおり、メガネを掛けた男性である

さやか
「なのはちゃん、その人は知り合い？」
なのは
「はい、紹介しますね。この人はユーノ・スクライア。私はユーノ君って呼んでます」
詳しい説明は公式サイトかウィキペディアを参考にして下さい
さやか
「私は弓　さやか。宜しくね」
ユーノ
「こちらこそ、宜しく」
さやかとユーノは互いに握手しあう
ユーノ
「なのは、もしかしてさやかさんって・・・」
なのは
「うん、さやかさんは次元漂流者なんだ」
ユーノ
「やっぱり・・・？？でも何でそのさやかさんがこんな所に？」
さやか
「実は、今回のオークションで欲しい物がありまして・・・ユーノ君、『ジャパニウム』って知ってる？」
ユーノ
「ジャパニウム？・・・御免なさい。そんな物は聞いた事がありません」
ユーノは申し訳なさそうにかぶりを振る
それを見てさやかは慌てて手を振る
さやか
「ううん、知らないんなら良いんだ！この後出品されてくる商品を見れば分かるから」
ユーノ
「あ、それでしたら此処にその写真がありますよ」

そう言ってユーノは今回出品されるであろう品の写真をさやかに渡した
さやかはユーノにお礼を言うとペラペラと写真を捲った
そして、ある一枚の写真に辿り着いた
それは、エメラルドグリーンに輝く綺麗な鉱石であった
さやか
「間違いないわ、これがジャパニウムよ！」
さやかは今程神の存在を信じようと思った事は無い
しかも、それは当初の予想通り出品される品の中で一番安い価格なのだ
これなら手に入れられるかもしれない
そう思えた
ユーノ
「良かったですね」
なのは
「有難う、ユーノ君」
ユーノ
「どういたしまして」
ユーノとなのはは互いに笑顔で見つめ合っていた
さやか
（もしかして・・・2人って付き合ってるのかなぁ？）
ふと、さやかは思った

＊＊＊

機動六課がホテルを警備する中、遠くの茂みの中からホテルを覗く影があった
？？？
「どうするんです？このままホテルに入っちまいますかい？」
？？？
「馬鹿野朗！そんな泥棒紛いな事が出来るか！」
？？？
「でも、ここんとこ３日位ろくな物食べてないから腹減ったでしゅよ～」
？？？
「う！・・・それは俺も同じだ・・・だけど、天下の俺様が泥棒なんて出来るか！」
其処には３人組の男達が話し合っていた
３人供少しやつれた顔をしている
？？？
「とにかく、警備の人に頼んで何か恵んで貰おうぜ」
？？？
「賛成！」
？？？
「同じく！」
満場一致して３人は奥に止めてあったロボットに乗り込んだ
そのロボットは、全てがガラクタで出来ていたのだ

＊＊＊

一方、甲児は暇を持て余していた
甲児
「ふぁ～～ぁあ、暇だなぁ」
操縦桿に足を置いて大きな欠伸をして甲児が呟いていた
甲児
「あ～～あ、こんな時にあいつ等が居ればな～～」
スバル
「あいつ等って誰ですか？甲児さん」
何時の間にかマジンガーの肩に乗っていたスバルが聞く
他にもティアナやエリオ、キャロも乗っている
甲児
「ああ、俺達の居た世界で俺の悪友なんだけどよ、あいつ等と居ると退屈しないんだよ」
甲児は懐かしむように呟く
すると、
シグナム
（お前達！聞こえるか？）
４人
「シグナムさん！」
甲児
「あん？どうしたんだ？」
甲児は十蔵が居ないと念話が使えないらしく首を傾げる
シグナム
（今こちらに機鋼獣が現れた！すまんが至急甲児を呼んでくれ！）
ティアナ
（分かりました！私達も向かいます！）
念話を切てティアナが甲児の方を向く
ティアナ

「甲児さん！機鋼獣です！機鋼獣が現れました！」
甲児
「へん！おいでなすったか！」
甲児は両の拳を叩いて意気込んだ
操縦桿を握り至急マジンガーをシグナム達の方へ向かわせる
そこでは、既にヴォルケンリッターのメンバーが一体の機鋼獣と戦闘を開始していた
だが、甲児はその機鋼獣を見て首を傾げていた
甲児
「あの機鋼獣・・・何処かで・・・」
甲児の目の前では全身ガラクタで出来た正にギャグキャラ、又はお笑いロボットとも言える感じのロボットが必死にヴォルケンリッターの攻撃から逃げ回っていた
ヴィータ
「おら、ぶち抜けえええええええええええ！」
シグナム
「切り裂け！レヴァンティン！」
ザフィーラ
「逃がさん！」
シャマル
「バインド！」
シャマルのバインドが機鋼獣を捕らえる
？？？
「ひえええええええええ！助けてえええええええええええええ！」
機鋼獣から声が響いた
ヴィータ
「へ～、喋る機鋼獣なんて珍しいなぁ、これ持ち帰ったらはやて喜ぶかな？」
シグナム
「面倒だ！この場で破壊する！」

ザフィーラ
「丁度マジンガーZが来た！後は甲児に任せよう」
？？？
「ま、マジンガーZだとぉ！」
甲児
「その声は・・・まさかボス！」
甲児はやっと思いだした
そう、あれは機鋼獣じゃない！
甲児と共に幾多の戦いを戦い抜いてきた仲間『ボス』とその愛機『ボスボロット』であった
甲児
「ボス！お前、ボスなんだな！」
ボス
「か、兜！お前本当に兜なんだな～～～」
ヌケ
「やったっすよ！ボスウウウウウウ！」
ムチャ
「マジンガーだあああ！やっと知ってる奴に会えたんだあああああああああ！」
ボス達とボロットが目に涙を浮かべてマジンガーの元へ駆け寄る
甲児も嬉しさがこみ上げてきた
やっとまた仲間にめぐり合えたのだ
ボス
「兜おおおおおおおおおおおおおお！会いたかったぜコンチキショウウウウウウウウウウウウ！」
ヌケ・ムチャ
「兜オオオオオオオオオオオオオオ！」
甲児
「ボス！この野朗！散々心配させやがって！元気だったか？」
マジンガーとボスボロットはそれぞれ互いに腕を掴みあって再会を

喜んでいた
その光景をシグナム達は唖然とした表情で見る
ヴィータ
「甲児、それ機鋼獣じゃねぇのか？」
甲児
「ああ、こいつはボスって言って俺の仲間だ」
シグナム
「ボス？それが名前なのか？ふざけた名前だな」
シグナムがボスボロットに近づく
すると、突然ボスボロットの両の目がハートマークになる
シグナム
「な！」
ボス
「うひょ～～～～！こりゃまた偉くボインちゃんが居るじゃないのさあああああああ！」
シグナム
「ぼ・・・ボイン／／／／」
シグナムは甲児との特訓以来ボインとの言葉が苦手になってしまった理由が知りたい人はサブタイトル『特訓』を見てくれ
甲児
「おい、ボス！あんまりシグナムを見るなよ。レヴァンティンで刺身にされちまうぞ」
ボス
「兜おおおおおお！てめぇなに一人で良い思いしてんだよこの野朗！」
甲児
「はぁ？何が良い思いだよ」
ボス
「そうじゃねぇか！周りにこんなにボインちゃんが居るんだぜ！俺だったらもう天国に行く気持ちになっちまうだわさ～～」

甲児
「あ・・・確かにな」
甲児は半ば苦笑いを浮かべた
確かに、自分も以前はそうだったな
と思うのであった
スバル
「へぇ、この人が甲児さんの知り合いなんですか？」
甲児
「まぁな」
スバルは興味本位でボスボロットに近づく
見れば見る程面白いロボットであった
スバル
「へ～、これ全部ガラクタで出来てるんだ～、一体どんな原理で動いてるんだろう？」
ボス
「ゴラァ！其処のガキンチョ！俺様のボスボロットにさわんじゃねぇ！」
スバル
「が、ガキンチョ・・・」
暗いせいかボスはスバルが男だと思ったのだろう
そう言った
それを聞いたスバルはショックの余りその場で蹲る
甲児
「おい、ボス・・・スバルは『女』だぞ」
ボス
「え？マジ？」
ボスは改めてスバルを見た
確かにボーイフィッシュな外見だが、何処と無く女の子と言った雰囲気をまとっている
そして、何より胸に二つのボインが見られた

ボス
「うひょぉ！これまた美人ちゃん発見！」
ボスは目をこれまたハートマークにしてスバルを見る
スバルはそんなボスの顔に怯えてしまったのか
スバル
「シュウゥゥウトオォオォオォ！（涙」
ボス
「ぎゃあああああああああああ！」
突然スバルはリボルバーシュートを放った
ボスボロットはそれを顔に直撃し、口から煙を吐いてる
それを見た甲児達は
一同
「何やってんの？スバルウゥゥゥゥゥゥゥ」
と叫ぶのであった
それに対し
スバル
「な、何か怖かったんでつい・・・」
と指を押しながら言っていた
そんな時、
シャマル
「な、何！」
シグナム
「どうした？シャマル」
シャマル
「もう一つ何かが近づいてくるの」
ヴィータ
「また甲児の仲間か？」
シャマル
「違う・・・でも、今まで感じたことの無い気迫を放ってるわ」
甲児

「機械が気迫を放つだって！」
信じられなかった
まさか機械が自分の意思を持っているのか？
そう思っていた
思わず甲児達は茂みの向こうを見る
すると、そこから現れたのは異様な姿であった
まるで中世の世界から抜き出てきたような鎧を身に纏った姿
堅牢な鎧である
白銀の色をした鎧が月の光に照らされて光り輝く
だが、何より甲児の目が行ったのはその頭であった
長い髪だ
金色の長い髪が兜の上から現れていたのだ
それもかなり長い
足の付け根まで延びているのだ
甲児は思わず構えた
恐らくコイツは敵だ
そう思えた
すると鎧の怪物はマジンガーZの前で立ち止まる
？？？
「貴様がマジンガーZか？」
甲児
「お前は誰だ？」
機鋼獣が喋った
その光景に甲児とボス以外の誰もが驚いていた
だが、甲児とボス達は驚かない
以前も驚かされたからだ
ミケーネの戦闘獣
かれらも同じように喋ったからだ
鎧の化け物は甲児に向かって名乗りを上げる
アギレス

「我こそは機鋼騎士『アギレス』マジンガーZよ！貴様に決闘を申し込む」
アギレスと名乗った機鋼騎士はマジンガーZを指差した
甲児
「へ、この兜　甲児様とタイマン張ろうたぁ良い度胸だぜ！その勝負乗った！」
マジンガーが数歩前に出る
腕をボキボキと鳴らしながらアギレスの前に立つと構えを取った
アギレスも同様に構えた
アギレス
「フン、このアギレス相手に丸腰で挑むとは舐められた物よ」
そう言ってアギレスは腰に挿したサーベルを抜き放った
フェンシングで使うような細身のサーベルである
甲児
「生憎、俺のマジンガーは殴り合い専門なんでな！こっちの方がしっくり来るんだよ」
アギレス
「成る程」
アギレスとマジンガーが互いに睨みあう
スバル
「甲児さん！」
ティアナ
「私達も！」
アギレス
「邪魔はさせん」
アギレスは開いていた手を天に翳す
すると何処からとも無く大勢の機鋼獣が現れた
だが、サイズは小さい
大きくても５m位のしかない
ザフィーラ

「な、何だあいつらは？」
アギレス
「そいつらは『小型機鋼獣』だ。貴様等魔道士を皆殺しにする為に我が王が作って下さった物よ」
アギレスが自信を持って言う
甲児
「何誇らしげに言ってんだよ！所詮てめぇの親玉が作った代物だろうが！」
アギレス
「黙れ！」
アギレスは怒りを露にサーベルを突く
マジンガーはそれをかわし、カウンターにパンチをアギレスの顔に当てる
アギレス
「ぐっ！」
アギレスは顔を抑えながらバックステップで下がる
甲児はマジンガーの手を見た
其処には殴った筈の手が少しだけ歪に凹んでいるのが見えた
何て硬い鎧なんだ
今まで戦ってきた機鋼獣とは比べ物にならない強度だ
こりゃエネルギーの心配はしてられないな
甲児は一人心の中で愚痴っていた

＊＊＊

甲児達が戦っている間、オークション会場では半ばパニック状態に陥っていた
観客の人々がわれ先にと出口を目指して逃げ惑う
その観客達をなのは達機動六課隊員が先導していくなのは
「皆さん！落ち着いて下さい！」
フェイト
「私達が安全な場所まで誘導します」
はやて
「慌てないで！順番に避難して下さい！」
さやか
「お年寄りから先に避難して下さい！手の開いてる人が居ましたら救助の補佐をして下さい」
なのは達が必死に呼びかける
これではジャパニウムどころでは無い
だが、何としてもジャパニウムを手に入れねば
そう思っていると、会場から甲高い悲鳴が響き渡ったなのは
「何？」
さやか
「行って見ましょう」
さやか達は悲鳴のあった方へ駆け寄る
そして驚愕した
其処には一組のカップルの無残にもバラバラに切り裂かれた死体と、長い髪をした美しい女性の姿があったからだ
？？？
「弓　さやかだな」
さやか
「貴方は・・・ガミアQ」

はやて
「あぁ、この前うちを狙って来た殺人アンドロイドや！」
はやてが指差す
ガミアはニヤリと微笑む
ガミア
「弓　さやか。我が王が貴様の命を御所望だ、此処で死んでもらう」
なのは
「そうはさせないわ！」
フェイト
「さやかさんは下がってて！はやてちゃん」
はやて
「分かった！さ、行くで！」
さやか
「２人共、気をつけてね」
さやかとはやては急ぎ会場を後にした
ガミアはそれを追おうとしたが、それをなのはとフェイトが遮る
ガミア
「生意気な人間風情が、私の任務を邪魔すると言うのか？」
なのは
「邪魔させてもらいます」
フェイト
「貴方を逮捕します」
２人はそれぞれデバイスを起動させてバリアジャケットを纏う
ガミア
「フン、エース・オブ・エースに閃光の死神か・・・これは私一人
では厳しいな」
なのは
「抵抗しないのならば悪いようにはしません」
フェイト
「大人しく着いて来て下さい」

ガミア
「聞こえなかったのか？『私一人では厳しい』と言ったのだぞ」
ガミアは微笑んだ
2人は言ってる事の意味が分からなかった
突如、ガミアの体が三つに分かれた
嫌、違う
ガミアは元々3体居たんだ
なのはとフェイトの目の前には3体の同じ顔のガミアが立っていた
ガミアQ1
「ターゲットは取り逃がしたのか？」
ガミアQ2
「問題無い、奴にはQ4を向かわせた」
ガミアQ3
「そうか、では我々はこの2人を始末すれば良いのだな」
3体のガミアはなのはとフェイトを睨む
ガミア
「行くぞ！」
ガミア達は突然飛びあがった
なのはとフェイトは上を見上げる
其処には3体のガミアが長い髪をまるで鞭のように撓らせて2人に放つ
なのは
「危ない！」
2人は咄嗟にかわした
その直後、ガミアの長い髪が地面に突き刺さった
ぞっとする光景であった
床を髪が貫いているのだ
これでは例えバリアジャケットを纏っていても意味を成さないだろう
当たれば先ほどのカップルのような状態になる
そんな考えが2人の頭の中を過ぎった

ガミアQ1
「フフフ、恐怖に支配されている顔だな？」
ガミアQ2
「人間とはつくづく哀れな生き物だな。我々のように恐怖を感じなくなれば楽な物を」
ガミアQ3
「全くだ、哀れとしか言い様の無い事だな」
3体のガミアはケラケラと笑う
その笑顔がとても機械的で何処か恐ろしげであった
2人はそんな笑顔に戦慄を覚えながらもデバイスを構える
フェイト
（なのは、一辺に相手してたら駄目！此処は一体ずつ倒さないと）
なのは
（うん、分かったよフェイトちゃん！）
2人は念話で会話しあう
するとフェイトはバルディッシュをザンバーフォームに変形させて一体のガミアに猛然と突っ込んでいく
ガミアQ1
「愚かな」
冷ややかに微笑んだガミアが両の髪をフェイトに向けて放つ
フェイトは一撃目をかわし、二撃目をバルディッシュで弾く
ガミアQ2
「何をしている！Q1」
懐に入られようとしていたQ1の元へQ2とQ3が割って入ろうとする
なのは
「ディバインシュゥゥゥタァァァ！」
しかし、それをなのはの放った魔力弾が遮る
2体のガミアは咄嗟にかわす
だが、その間にフェイトがQ1の両髪を切断する

ガミアQ1
「くっ！」
攻撃方法を失ったガミアは踵を返して逃げようとする
だが、それをフェイトが許さない
フェイト
「はあああああああああああ！」
ザンバーモードのバルディッシュを思い切り横薙ぎに払う
金色に輝く魔力の刃を背中から受けたQ1は胴体から真っ二つに切断される
其処からオイルが血のように吹き出る
ドサリと力なく大地に倒れる
それを見てなのはとフェイトは不快感を露にした
此処まで人間にそっくりなんて
そう思えたのだ
だが、それとは対照的にQ2とQ3は全く動揺していない
それどころか倒されたQ1の頭部を無残にも踏み潰したのだ
グシャリと音を立てて頭部が潰れる
中から機械の部品と脳と思われる物が飛び出る
ガミアQ2
「役立たずが」
ガミアQ3
「所詮この程度、仕方のない事だ」
そう言って微笑む2体のガミア
なのは達はそんなガミアを見て恐怖する
ガミアはまるで人形のようだ
嫌、正確には人形なのだ
彼女達は何者かに作られた人形に他ならない
只獲物を殺す為にのみ作られた存在
それが彼女達なのだ
ガミアQ2

「だが、Q1がやられてしまっては連携が取れないな」
ガミアQ3
「仕方ない、増援を呼ぶか」
なのは・フェイト
「え！」
2人はその言葉に驚いた
増援！
まだこんな化け物が居るのか
何時の間に忍び込んだのだろう
嫌、一体どうやって入り込んだのだろう
2人は考えてしまった
その間にも、2体のガミアは髪を振るわせる
すると、音も無く何処からか大勢のガミアが表れた
その数ざっと20体
ガミアQ7
「これがQ1を倒したと言う魔道士達か」
ガミアQ5
「余り強そうには見えないな」
ガミアQ6
「まぁいい、どうせ我等全員で掛かれば容易く殺せよう」
総勢20体のガミアが微笑む

＊＊＊

外では機動六課のメンバーとボスボロットがアギレスの放った小型機鋼獣と戦闘を繰り広げていた
外見は今まで戦ってきた機鋼獣そのものである
だが、今まで厄介であった魔法を無効化する能力は省かれているらしく、これなら機動六課のメンバーでも充分に倒せる相手でもあった
現に、今機動六課のメンバーが押しているのだ
数でこそ小型機鋼獣が圧倒的に勝っている
だが、ヴォルケンリッターのシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルに続き、新人フォワードメンバーのスバル、エリオ、キャロ、そしてティアナ達の強さは圧巻であった
同じ土俵に上がれば彼女達にほぼ敵は無いのだ
シグナム
「ヴィータ！そっちはどうだ！」
ヴィータ
「ああ、小さくなったせいか大した奴等じゃねぇ！すぐに片付けて新人達のフォローに向かうぜ」
ザフィーラ
「了解した！」
シャマル
「急ぎましょう！」
ヴォルケンリッターは互いに頷きあう
そしてすぐさま周りにいた小型機鋼獣を蹴散らしていく
シグナムが切り裂き、ヴィータが叩き潰し、ザフィーラが光の柱で突き刺し、シャマルが鋼線で引き裂く
流石はベルカの騎士と言った戦い振りである
一方で、新人フォワードメンバーも小型機鋼獣軍団に健闘していた
スバル
「魔法が効くとこいつら大した敵じゃないね」
ティアナ

「油断しちゃ駄目よ！こいつら数だけは結構居るみたいだし」
エリオ
「そうですね、まるで蟻の大群ですよ」
キャロ
「キリが無いですね（汗」
互いに無事を確認しながらも次々と機鋼獣を撃破していく
流石日頃からなのはやフェイトに厳しい訓練を受けている為か素晴らしい動きを見せる
その横ではボスボロットが小型機鋼獣を踏み潰していく
ボス
「おらおらぁ！このボスボロット様に踏み潰されたい奴ぁ掛かって着やがれ！」
腕をブンブン振り回してボスが言う
すると小型機鋼獣軍団が一斉にボスボロットに群がっていく
あっという間にボロットは小型機鋼獣に埋め尽くされてしまった
ボス
「ひえええええええええええ！お助けえええええええええええ」
ヌケ・ムチャ
「ボスのアホオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
そんなボスの姿に一同は唖然とする
ふと、視線を移す
其処には機鋼騎士アギレスと戦う甲児とマジンガーZの姿があった
アギレスが無数の突きを放つ
マジンガーはそれを出来る限り払いのけて懐に入り込み鉄拳を叩き込む
鈍い金属音が響く
だが、アギレスには傷一つついていない
それどころか殴った筈のマジンガーの拳が凹んでいくのだ
こいつ・・・マジンガーより硬い装甲をしてやがる

甲児は舌打ちした
となれば殴り合いではケリは着かない
エネルギー武器で片付けるしかない
そう思っていると、アギレスのサーベルがマジンガーのコクピットに迫る
甲児
「おわっ！」
咄嗟に首を捻ってかわす
この野朗！
かわしざまに目から光線を放つ
光子力ビームだ
光子力ビームはアギレスの頭部に命中し、兜を吹き飛ばす
アギレス
「ぐぅぅっ！」
よろよろとした足取りをしながら額を押さえる
手の間から破損した兜が見える
だが、その中から見える赤い瞳は殺気に満ち溢れていた
思わず身震いしてしまった
それ程までの強大な殺気を感じたのだ
長引けばコチラが不利になる
一気にケリをつけねば
甲児
「エネルギーの心配はしてられねぇ！一気に方をつけてやる！」
甲児は目の前のスイッチを押す
マジンガーは両腕を天に構えて仁王立ちする
胸の放熱板が白熱し、其処から高熱の熱線が放たれる
ブレストファイヤーだ
ブレストファイヤーは真っ直ぐアギレスに向かって飛んでいく
だが、其処でアギレスに変化が訪れた
アギレスの髪が逆立ったのだ

そしてブレストファイヤーを髪で受け止める
甲児
「なにぃっ！」
その光景を見て甲児は絶句した
髪が輝いているのだ
そしてブレストファイヤーは髪に吸い込まれていくように消えている
恐らく吸収しているのだ
甲児
「くっ！」
急ぎ甲児はブレストファイヤーのスイッチを切った
その直後、アギレスの髪から熱線が放たれた
熱線は真っ直ぐマジンガーに直撃する
甲児
「うわあああああ！」
甲児は叫んだ
激しい衝撃と熱がコクピットに伝わる
咄嗟にサイドステップで避ける
マジンガーの装甲の各所が溶けかけていた
ブレストファイヤーのエネルギーをそのまま返してきたのだ
何て奴だ
マジンガーの拳を受け付けない鋼鉄の鎧に加え、エネルギーを吸収する長い髪
下手な攻撃ではアギレスにダメージは与えられない
甲児
「ならば！こいつでどうだ！」
マジンガーの口から猛烈な突風が吹き出た
その突風はアギレスを包み込む
ルストハリケーン
酸性を含んだ風を吹きつけ、相手をボロボロにしてしまうマジンガーの武器の一つである

アギレス
「ちっ！」
アギレスも咄嗟に飛びあがってルストハリケーンをかわす
鋼の鎧もルストハリケーンは効くらしく鎧のあちこちが変色していた
マジンガーとアギレスは互いに見合っていた
力は恐らく互角
となれば次の一手で決めなければマジンガーが不利になってしまう
今、マジンガーのエネルギーは底を着きかけているのだ
そんな時、突如上空を何かが飛来した
何だ？
甲児達、そしてアギレスすらも上空を見上げた
其処には、赤と白と黄色の三色の戦闘機が飛んでいた
甲児
「あれは・・・まさか！」
甲児は驚愕した
そう、あれは・・・だが、そんな筈は無い
何故なら、あれは・・・
そう思っていた甲児の目の前で、３機の戦闘機は空中で一つに合わさる
その姿を見て甲児とボスは驚愕した
ボス
「兜！あれって・・・まさか！」
甲児
「馬鹿言うんじゃねぇ！あれがある筈無いんだ！あれは・・・あのロボットは・・・」
甲児は目の前に降り立ったロボットを見て言葉を失った
赤い顔に黄色い目、特徴的な耳をして背中のマントを羽織っている
その姿は・・・そのロボットの名は・・・
甲児

「げ・・・・『ゲッター・・・・・ロボ・・・・』」

ホテル・アグスタ　終り

次回予告

甲児
「突然現れた旧ゲッターロボ
だが、こいつは既に俺達の世界では存在しない筈のロボットの筈
それが何故、そして何故ゲッターが俺達に襲い掛かるんだ！
何故なんだ！ゲッターロボ！
次回、『悪夢！！マジンガーZ対ゲッターロボ』
次回もこの小説にテイィィィィィク・オォォォォォォフ！！」

ホテル・アグスタ　後編（後書き）

何故ゲッターが現れたのか？
そして、そのゲッターを操るのは何者なのか？
そして、ホテル内に残ったなのは達の運命は？
それは次回の話しで

解説3（前書き）

今回は敵の勢力についてと、十蔵の能力について説明します

解説3

敵勢力
詳しい事は未だに不明な点が多い
一体何処から現れ何の目的で暴れるのか皆目検討が着かない
只一つ分かる事は、彼等は人類を完全に敵視している事だけである

機鋼獣
機械の体に鋼鉄の鎧を纏った怪物
突如としてミッドチルダに現れ、見境無く攻撃を行う
彼等には以前から管理局も悩まされており対策に困っていた
彼等の纏う鋼鉄の鎧は魔法攻撃を殆ど弾き返してしまい、その強度はランクＳＳの魔法でも貫くのは容易では無い
だが、物理攻撃には弱いらしく、マジンガーでなら簡単に破壊出来る

機鋼騎士
機鋼獣より更に強力な存在
自分の意思を持っているらしく自己の判断で行動できる
また、纏っている鎧もかなりの強度があるらしく、マジンガーの拳を弾き返す程
詳しい詳細はまた後ほど紹介する

機鋼騎士アギレス
突如マジンガーの前に現れた機鋼騎士
まだ若輩者らしく言動が荒っぽい
武器はフェンシングのようなサーベルと長い髪
その髪は敵のエネルギー（魔法も含む）を吸収して跳ね返す力を持つ
果たして、マジンガーはこれに勝てるのか？

次は十蔵の能力について

念話
十蔵が近くに居れば念話の使えない甲児でも念話を聞き取ることが出来る
（会話に参加は出来ない）

複合融合（クロス・ユニゾン）
十蔵を介して二人の人間を一人にしてしまう融合
基本的に母体は甲児のみで他の人間を母体には出来ない
これを行う事で甲児は融合した者の能力や魔法が使えるようになる
また、その効果はマジンガーにも影響される
だが、ユニゾン出来る時間は３０分と短い

解説3（後書き）

こんな感じです

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　前編（前書き）

突如目の前に現れたゲッターロボ
奴は一体・・・
そして、ホテル内に残ったなのはとフェイト、そしてはやてとさやかの運命は？

魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ

甲児「始まるぜ！」

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　前編

甲児
「な、何で・・・何でゲッターロボが此処に・・・」

甲児は己が目を疑った
そう、今甲児達の目の前に現れたのは見間違う筈が無い
かつて恐竜帝国から人類を守った早乙女研究所所長の早乙女博士がゲッター線の宇宙開発の為に作ったのを急遽戦闘用に改造したロボット『ゲッターロボ』なのだ
だが、ゲッターロボはゲッターチームの一人『巴　武蔵』の死と引き換えに恐竜帝国を滅ぼした後、皆の前で廃棄処分した筈である
それは甲児達も見ていた
そう、あの燃える炎の中で崩れるゲッターロボ
そのゲッターを見て涙する早乙女研究所所員一同
その涙も、崩れるゲッターも、甲児は見ていたのだ
そのゲッターロボが今、甲児の目の前に現れたのだ

アギレス
「貴様！何者だ？神聖なる決闘の邪魔をするとは！」

突如現れたゲッターロボに苛立ちアギレスがサーベルをゲッターロボに向ける
だが、ゲッターロボは答えない
只ジッとアギレスを睨んでいる
その視線は何処か冷たかった

ボス
「おい、兜！何で旧ゲッターがこんな所に居るんだよ！」

甲児
「そんなの俺だって知りたいぜ！それに・・・一体誰が乗ってるんだ？」

少なくとも、甲児の知ってるゲッターチームでは無いと分かった
もし乗ってるのがゲッターチームならまず最初に甲児に声を掛けてくる筈だ
だが、ゲッターはマジンガーに見向きもしない
それがまず違うと判断出来た
だとすれば今目の前に居るゲッターは一体

アギレス
「答えろ！貴様は一体何者なのだ！」

苛立ちを込めたサーベルをゲッターロボの面前に突きつける
その時、ゲッターが動いた
アギレスのサーベルを払いのけ一気に距離を詰めると肩に手を伸ばし其処から延びた物を掴んで思い切り振りぬいた
手に握られていたのはトマホークだ
ゲッターロボが使う武器でその切れ味は相当な物である
そして、ゲッターがトマホークを使って斬ったのは

アギレス
「ぎゃあああああああああああああ！」

アギレスは自分の頭を抑えた
そう、髪だ
ゲッターは一撃の下に髪を切り落としたのだ
髪を切り落とされてアギレスが悶える

アギレス
「髪が！私の髪がああああああああ！」

アギレスの自慢の髪が大地に降り注ぐ
その光景をゲッターは見下ろす
すると再びゲッターはトマホークを振るう
今度はアギレスの右腕が宙を舞う
腕と一緒にオイルが激しく夜空に舞い上がる
アギレスの悲鳴が一層激しくなる

アギレス
「お、おのれえええええええええええ！」

アギレスは痛みと怒りで錯乱状態になっていた
そのままの状態で持っていたサーベルをゲッターに向けて放つ
だが、其処にゲッターの姿は無かった
甲児は視線を上空に向けた
上空には3機の戦闘機が飛行していた
オープンゲットだ
ゲッターの特殊能力の一つであり、武器でもある
瞬時の内に1体のロボットから3機のマシンに分離変形が可能のロボット
それはゲッターロボしか居ない
上空で3機が一体のロボットになる
だが、さっきとは形状が違う
今度は白いロボットだ
細身のボディに両腕がドリルとアームになっている
地上戦闘用のゲッター2だ
因みに最初に現れたのは空中戦用のゲッター1である
ゲッター2はアギレスに向かって回転するドリルを突きつける

アギレスはバックステップでそれをかわす
ドリルは地面に向かって突き刺さる
だが、それはゲッター自身も予測していた
ゲッターは地面にドリルを叩きつけると、そのまま土煙を巻き上げて地面に潜ってしまったのだ
土煙が晴れた後、見えたのはゲッターが掘ったであろう穴だけであった

アギレス
「ど、何処だ！何処に行った？」

アギレスは周りを見渡す
だが、周りにはゲッターの姿は無い
逃げたのか？
と思っていたアギレスの足元が激しく揺れた

アギレス
「はっ！！！」

アギレスが異変に気づいた時には、全てが遅かった
地中からアギレス目掛けてゲッター2が現れたのだ
ゲッター2の腕のドリルはアギレスの腹を貫いた
激しい金属音と共に貫かれた箇所からオイルが溢れ出る

アギレス
「ぎゃあああああああああああああああ！」

アギレスの絶叫が響き渡る
そのままゲッターはアギレスを上空に投げ飛ばす
その直後、ゲッターはまた3機に分かれた

3機が上空で1体になる
今度はゲッター1であった
ゲッター1は両手にトマホークを持ちそのままアギレスに飛び掛る
一瞬・・・見ていた甲児達にとっては一瞬の内の出来事だったのだろう
しかし、その一瞬の間にゲッター1はアギレスの左腕と両足と頭部を切断し、残った胴体をバラバラに切り刻んでしまった
最早、アギレスは何も言わない・・・嫌、言えない体となってしまった
アギレスは何も言わない、何も考えない、そう、アギレスは只の残骸となってしまったのだから
その残骸の上にゲッターは降り立つ
両手に持ったトマホークにはアギレスのオイルがベットリとこびり付いていた
甲児達は声が出せなかった
そんな光景が今目の前で起こっていたのだ

＊＊＊

ホテル内ではなのはとフェイトがボロボロの状態になっていた
その周りには無残にも破壊された殺人アンドロイド「ガミアQ」の残骸が転がっていた
だが、ガミアの数はまだ5体は居る
2人のバリアジャケットは所々が裂け、其処から僅かだが出血して

いる
それが今までの戦いの凄まじさを物語っていた
2人は肩で息をしていた
それ程までに体力と魔力を消費していたのだ
それに比べてガミア達は余裕の笑みを浮かべている

ガミア
「そろそろトドメを刺させて貰おう」

そして、今正に2人の命を刈り取ろうと長い髪を伸ばす
2人がヨロヨロとデバイスを構える

ガミア
「まだ歯向かう気か？」
なのは
「当然です！」
フェイト
「私達は此処で倒れる訳にはいかないんです！」
ガミア
「愚かな・・・ならば貴様等を殺してその首をミッドチルダ中の晒し者にしてやる」

そう言ってガミアが一斉に髪を振り上げる
だが、そんなガミアを突如稲妻が襲い掛かった

ガミア
「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

激しい閃光が5体のガミアを包み込む
2人は余りの閃光の為目を手で覆った

そして、目を開いた時、目の前に居た筈の5体のガミアは黒こげの炭になっていた

なのは
「凄い・・・これ、フェイトちゃんがやったの？」
フェイト
「ううん、私じゃない・・・一体誰が・・・」

フェイトは周りを見回した
すると、自分達の頭上に一人の老人が居るのに気づいた
フェイトはなのはにその老人の場所を教える
なのはも同様に見上げる
そして驚愕する
あの老人は！
初めて甲児さんと出会った時に現れた予言者
でも、それが何故こんな所に

フェイト
「なのは！あのお爺さんを知ってるの？」
なのは
「うん！私が始めて甲児さんと会った時に現れたお爺さんなんだけど・・・いきなり訳の分からない事を言ってたから詳しい事は分からないの」
フェイト
「分からないって・・・あのお爺さん・・・一体・・・」

フェイトは再び老人の居た場所を見た
だが、其処には既に老人の姿は何処にも無かった

フェイト

「あ、あれ?あのお爺さんは一体何処に?」
なのは
「フェイトちゃん!それより早くはやてちゃんと合流しないと」
フェイト
「そ、そうだよね!」

なのはに言われやっとフェイトは今の状況に気づいた
そうだ、今は詮索は後回しだ
急がないと二人の身が危ない
そう思った二人は傷ついた体を引きずりながらその場を後にした
2人が完全に部屋から居なくなった後
突如老人が黒こげになったガミアの前に現れた

???
「まさか此処までやれる程回復しているとは・・・急がねば・・・」

そう言うと、老人は再び姿を消した

＊＊＊

さやかとはやては通路を走っていた
とても狭い通路であった
と言っても普通の通路なのだが、はやてにとっては狭すぎるのだ
此処でははやては魔法が使えないのだ

もし使えばその時はさやかも巻き込んでしまう事になる
そんな事は出来なかった
だが、甲児との約束もある
絶対にさやかを無事に逃がさねば
そんな考えをしていたはやての顔は自然と険しくなっていた

さやか
「はやてちゃん」
はやて
「ん？どしたんや、さやかさん」
さやか
「御免なさいね・・・結局私皆の足引っ張っちゃって」
はやて
「ううん、そないな事無いで！あれは言ってしまえば不可抗力みたいなもんなんや」

はやては言葉を強めてさやかを励ます
そう、あのガミアの襲撃は想定していなかった
さやかの責任ではない
それよりもはやては外が気になっていた
もしかしたら機鋼獣が来ているのかもしれない
そう思っていたはやての首元に突如、金色の髪が絡みついてきた

はやて
「あぐっ！」
さやか
「はやてちゃん！」

さやかが見る
その先には1体のガミアが居た

ガミアQ4
「機動六課部隊長・・・貴様を殺す・・・」

ガミアが恐ろしい笑みを浮かべてはやてを持ち上げる
はやても必死に首に絡みついた髪を解こうともがく
だが、その力は凄まじく解ける気配がしない

はやて
「うぐ・・・うぅぅ・・・」

はやての顔が赤くなる
顔が段々苦悶の表情になっていく
それを見てガミアが嬉しそうな顔をする

さやか
「このぉ！」

さやかはガミアに向かって飛び蹴りを放つ
それはガミアの頭部に当たり吹き飛ぶ
その際にはやてを落としてしまう
さやかははやてに近づく
一気に酸素が入り込んで来たのかはやてはむせ返っていた

さやか
「大丈夫？はやてちゃん」
はやて
「お・・・おおきに・・・せやけど・・・此処じゃうち魔法使えんやないか・・・相変わらずセコイ奴やで・・・」

はやては涙目でガミアを見た
ガミアは起き上がると顔を摩った
さやかに蹴られた箇所である
その怒りにはとてつもない怒りが込められていた
そして、その怒りの矛先はさやかに向けられていた

はやて
「危ない！さやかさん！」

はやては咄嗟にさやかを突き飛ばす
その直後、はやての両肩に痛みが走る
ガミアの髪がはやての両肩を掠めたのだ
肩の服が裂け鮮血が飛び散る

はやて
「ぐっ・・・」
さやか
「はやてちゃん」

さやかがはやてに近づく
だが、そんなさやかの足をまたガミアの髪が掠める

さやか
「あう！」

さやかはその場に倒れる
さやかの足からは血が滴る
激痛がさやかの顔を歪める
２人は動けなくなってしまった
そんな２人に髪を揺らしてガミアが迫り来る

ガミアが頭を振って勢い良く金色に輝く無数の髪を2人に向けて放つ
もう駄目だと思い二人は目を瞑る

・・・だが、何時まで経っても二人には痛みが無かった
不信に思って二人は目を開ける
すると、目の前に居たガミアの頭部は何かによって引き千切られていた
そして、その目の前には一人の男が立っていた

さやか
「あ・・・貴方は・・・」

その男はさやかの知っている人物であった
その人物の名前は・・・

＊＊＊

甲児達の前に現れた旧ゲッターロボはアギレスが動かないと判断して今度は甲児達の方を向いた
ゲッターの視線が甲児達に突き刺さる

ヴィータ
「お、おい甲児、あれは一体何なんだよ」

甲児
「あれは・・・間違いない、ゲッターロボだ！」
ヴィータ
「下駄ロボ？」
シャマル
「ヴィータちゃん！ゲッターロボよ！」

間違ったヴィータをシャマルが正す
だが、ヴィータはそんな事を気にしてなかった
それよりもゲッターは黙って甲児達を見ていた
甲児は不信に思った
何故何も言わないのか
もし乗っているのが甲児の知っている仲間ならまず通信を送って互いの無事を確認し合うのが普通だ
だが、あのゲッターは通信どころか手を振りもしない
それに、あのゲッターからは何か異様な気迫を感じるのだ
それが甲児の頭に引っかかった
一体こいつは味方なのか？それとも・・・

スバル
「甲児さん！あれきっと味方ですよ！」
甲児
「何でそう言いきれるんだ？スバル」
スバル
「だって、あのロボット機鋼騎士をやっつけたんですよ！きっと私達のピンチを聞きつけて駆けつけてくれたんですよ！」
甲児
「・・・・・」

甲児は黙り込んだ

そんな上手い話がある筈が無い
それにもしそうなら甲児は諸手を上げて喜べる
だが、何故か甲児は喜べなかった
それが甲児自身も不思議でならなかった
ふと、ティアナ達を見た
ティアナも甲児と同様にゲッターを不信に見ていた
エリオとキャロはゲッターの戦い振りに感動しているのか目が輝いていた
そしてヴォルケンリッターを見た
シグナムはやはり疑いの目でゲッターを見ている
それはヴィータも同様だる
シャマルとザフィーラも決して警戒を緩めない
甲児も身構えた
恐らく、こいつは味方じゃない
そう甲児は思えた

ゲッター
「・・・・・」

ゲッターは無言のまま甲児から視線を移し、機動六課の面々を見た
ふと、ゲッターの視線がスバルに止まる
スバルは自分を見てると知って挨拶にと軽く手を振る

スバル
「ど・・・どうも・・・」

少し苦笑いではあるが笑ってそう言った
だが、ゲッターはそんなスバルに対し思いがけない行動に出た
それに甲児は気づいて

甲児
「あぶねぇ！逃げろ、スバル！」
スバル
「へ？」

と、叫んだ
だが、スバルは状況に気づいてない
そして目の前を向いた時、ゲッターのトマホークが真っ直ぐスバルに向かって放たれていたのだ

ティアナ
「スバルウゥゥゥゥゥ！」

ティアナが叫ぶ
咄嗟に駆け出すも間に合わない
トマホークがスバルを切り裂こうとした時、その目の前に突如ヴィータが現れグラーフアイゼンで弾く

ヴィータ
「グウゥゥゥゥ！」
スバル
「ヴィータ副隊長！」

ヴィータは苦悶の表情を浮かべる
凄まじい衝撃が彼女を襲ったのだ
ふと、ヴィータは自分のデバイスを見た
ヴィータのデバイス、グラーフアイゼンはトマホークを弾いた箇所を中心にヒビが入っていた
もしあとほんの少しだけ威力があったら、ヴィータとスバルは2人揃って真っ二つであった

それに気づいてスバルが青ざめる
甲児はゲッターを見た
これではっきりした
あいつは敵だ！
そう思った甲児の行動は早かった
一気にゲッターとの距離を詰める
ゲッターはそんなマジンガーにトマホークを振り下ろす
マジンガーはそれを振り払い、そのままゲッターの顔に目掛けて拳を突き出す
諸に拳を食らったゲッターがよろめく

甲児
「おら！もう1発食らえ！」

そのままもう片方の手で追撃を加えるマジンガー
だが、拳を突き出した先にはゲッターは居なかった
すぐに甲児は何処に言ったか理解出来た
上を見上げると其処には変形したゲッター2がドリルを回転させてマジンガーZに迫る

甲児
「おっと！」

甲児はバックステップでかわす
そしてゲッター2は再び地面に潜った

甲児
「へっ！さっき見た物が二度も通じるかよ！」

甲児は真下から出るだろうと思い其処に拳を突きたてた

いつでもロケットパンチが放てるようにである
だが、それは以外な方法で打ち破られた

シグナム
「甲児！後ろだ！」
甲児
「何！？」

甲児は振り返った
その時には、ゲッター2のドリルが既にマジンガーに迫っていた
しまった！
完全に意表を突かれた
この距離ではかわす事も払う事も出来ない
直撃コースである
だが、

エリオ
「サンダァァァレイジィィィ！」

突如横からゲッター2を稲妻が襲った
稲妻を受けてゲッター2は吹き飛ぶ
甲児は稲妻を放った人物を見た
それはエリオであった
エリオが自身のデバイス「ストラーダ」を構えて立っている

エリオ
「大丈夫ですか？甲児さん」
甲児
「サンキュー、助かったぜ」

甲児は親指を立てて意思を示す
それを見てエリオもホッとする
甲児はそのままゲッター2を見る
横からの突然の攻撃に少し戸惑ったようだが、すぐに体制を立て直した
だが、其処へ多数の魔法の攻撃がゲッターを襲う
オレンジの誘導弾が、
青い光弾が
竜の炎が
それぞれゲッター2を襲う

ティアナ
「甲児さん！」
スバル
「加勢します！」
キャロ
「援護は任せて下さい」

其処には、巨大化したフリードに乗ったキャロ、スバル、ティアナが居た
それを見て甲児がニッと微笑む

甲児
「サンキューお前等！後ろは任せたぜ！」

甲児はそう言って目の前に居るゲッター2を見た
あれだけの攻撃を受けたと言うのに傷はそれ程深くない
だが、決して無傷と言う訳ではなく、所々装甲にヒビが入ってる

甲児

「今の俺には頼りになる仲間が居るんだ！こいつらが居る限り負ける気は起きないぜ！」

と言って猛然とゲッター2に突っ込んでいく
その後ろから4人が砲撃を当てる
勿論マジンガーには当たらないように考慮してある

ヴィータ
「ったく、あたしらを置いて勝手に盛り上がりやがって！」
シグナム
「我等も続くか」
ザフィーラ
「言われるまでも無い」
シャマル
「行きましょう！皆さん」

ヴォルケンリッターの4人も続く
謎のパイロットが操るゲッターロボ
それに対するは甲児の操るマジンガーZ、そして機動六課のメンバー
今、この異世界で起こる筈の無い戦いが幕を開ける

ボス
「おい！俺様を忘れるなよ！」

あ、ボスも居たんだった（汗）

甲児
「行くぜ！ゲッターロボ！！」

甲児とマジンガーが勢い良く拳を振るう

だが、ゲッター2が目にも留まらぬスピードで走りその拳をかわす

甲児
「何！」

咄嗟にかわされ甲児はハッとした
そう、これがゲッター2の持つ力である
今、ゲッター2はマジンガーの周りをグルグル回っている
しかも、その数は4体に増えている
嫌、正確には1体しか居ないのだ
だが、猛スピードで駆け回る事により分身が発生しているのだ

スバル
「あれって、ティアの魔法に似てない？」

ティアナ
「違うわ！あれは高速で移動してるせいで起こる所謂幻覚みたいな物よ」

ティアナはパッと見て説明する
その通りである
あれは高速で移動して分身を発生させるゲッター2の代名詞とも言える能力『ゲッタービジョン』である

甲児
「んなろぉ！この兜甲児様にそんなめくらましが通用するとでも思ったか！」

マジンガーが移動するゲッター2に向かって光子力ビームを放つ
だが、当たったのはゲッター2の分身であり、光子力ビームはそのまま遥か遠くへ消えていった

甲児
「ちっ、」

甲児は舌打ちした
無駄なエネルギーは使えないのだ
こうしている内にも状況は悪くなる一方なのだ
エネルギーは残り少ない
ホテル内に居るであろうさやか達の身も気になる
それに相手はあのゲッターロボ
不安要素が多すぎる

ヴィータ
「おい、このままだとこっちはジリ貧じゃねぇか！」
ティアナ
「あれは高速で移動する事によって起こる現象なんです！ですから
移動さえ止めてしまえば分身は消えます！」

ティアナが分析する

シャマル
「だったら足を止めれば良いのね」
ザフィーラ
「それなら任せろ！」

シャマルとザフィーラが飛び出す

ザフィーラ
「俺が奴の足を止める！その隙にシャマルが拘束をしてくれ」
シャマル

「分かりました」

そう言うや否や、ザフィーラはゲッター2の進路上に氷の結界を敷いた
突然の出現に驚いたのかゲッター2は一瞬怯む
その隙をシャマルが見逃す筈が無かった

シャマル
「クラールヴィント！」

シャマルが放った鋼線がゲッター2を雁字搦めに拘束していく
そしてゲッター2は遂に1体だけになった

甲児
「サンキュー！お二人さん！」

甲児は弾んだ声で言ってゲッターに腕を飛ばした
バキィと音がしたと共にゲッター2の顔が歪む
そしてかなりの距離を吹き飛んだ

甲児
「逃がすか！もう一発食らえ！」

間髪入れずに残った腕も飛ばす
だが、其処はゲッターロボ
すぐにシャマルの拘束を解いてまた3機に分離した
3機に分離されては流石の甲児でも追いつけない
何故なら3機とも飛行速度はマッハ2位は出しているのだ
狙って当てられる速度じゃない
そうこうしている内に3機は再び上空で1体になった

またゲッター1だ
両手にトマホークを構えている

甲児
「勝負を賭ける気だな！」

甲児は息巻いた
上等だ！
力押しならこちらにも幾らか分がある
何より殴り合いで負ける事など甲児には有り得ないと思っていたからだ
そんな時

十蔵
『く～～、頭が痛いわい！』
甲児
「お爺ちゃん！やっと起きたのか？」

よろよろと甲児の肩から十蔵が現れた
二日酔いなのか頭を痛そうに抑えている

十蔵
『ん？なんじゃ甲児！今戦闘中なのか？』
甲児
「ああ、そうだよ！それより大丈夫か？お爺ちゃん」
十蔵
『なんの、この兜十蔵！たかが二日酔いでくたばる訳・・・うえぇぇぇ』

そうは言ったがすぐに背中を向けて吐くポーズをとる十蔵

それを見て甲児が顔を顰める

甲児
「だあああああああ！もう！無理なら出てくるなよお爺ちゃん！」

十蔵
『うえぇ～～、気持ち悪～～・・・んで、相手はまた機鋼獣か何か？』

甲児
「嫌、相手は・・・ゲッターロボだ」

甲児の言葉に十蔵は眉を顰める

十蔵
「何じゃおぬし等喧嘩でもしたんか？喧嘩なら自分の体でやらんか！」

甲児
「これが喧嘩ならとっくに降りて殴り合ってるだろうが！違うよ、明らかに敵なんだよあれは」

十蔵はそう言われて目の前の敵を見た
目の前にはジリジリとトマホークを構えて迫るゲッター１の姿があった
明らかにゲッターから背筋の凍る程の殺気を感じる
それはユニゾンである十蔵にも理解出来た

十蔵
「確かに、こりゃちと苦戦するかもな・・・よっしゃ！甲児、早速あのユニゾンをやってみようではないか！」

甲児
「ええ！でもあれってマジンガーにも影響するのか？」

甲児は首を捻った
確かにあの時は咄嗟にだが出来た
だが、それがマジンガーにも影響を及ぼすのかは甚だ疑問なのだ
だが、十蔵は指を立てて自信有りげな顔をしている

十蔵
「任せぃ！バッチリ影響を及ぼしてやるわい！」
甲児
「そうかい！分かった！」

甲児は納得して通信機のスイッチを入れた

甲児
「エリオ！聞こえるか？」
エリオ
『甲児さん！どうしたんですか？』
甲児
「さっきお爺ちゃんがやっと起きたんだ！ユニゾンするぞ！来い」
エリオ
『えぇ！あれやるんですかぁ！？』
甲児
「この状況だ！一気にケリをつけるぞ！」
エリオ
『分かりました！』

エリオは納得し、フリードから飛び降りてマジンガーの肩に乗る

十蔵
「ええか！２人共、掛け声は「クロス・ユニゾン」じゃぞ！」

エリオ
「ええ！叫ばないといけないんですか？」
十蔵
「そりゃそうじゃろぅ、お約束じゃぞぉ」
エリオ
「は、はぁ・・・（汗」
甲児
「仕方ねぇ！んじゃ行くぞ！」
エリオ・甲児
「クロス・ユニゾン！」

2人が叫ぶ
するとマジンガーとエリオは眩い光に包まれる
余りの閃光の為目の前に居たゲッターは思わず目を瞑る
そして、閃光が晴れた時、其処にはマジンガーの姿しか無かった

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　前編（後書き）

Z『俺が出てない（汗』
作者「すまん・・・今回の話しも半分は空想だ」
Z『それと俺の出ないのには訳があるのか？』
作者「嫌、特にない」
Z『ブレストファイヤァァァ！』
作者「ぎゃあああああああ！止めろ！焼ける！こんがり小麦色に焼けるうううううううう！」

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　後編（前書き）

今回、何とあの男が出現！
今後どういった絡みを見せるのだろうか？

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　後編

ザフィーラ
「何だ！何が起こったんだ！？」
複合融合（クロスユニゾン）を始めて見たザフィーラは驚きの言葉を出す
そして、それはボスも同じであった

ボス
「お、おいおい！ありゃぁ何だ？」
ヴィータ
「原理は分からないんだが、あの十蔵って爺が居ると甲児は誰かとユニゾン出来るみたいなんだ」
ザフィーラ
「何だと？ユニゾンにそんな能力は無い筈だぞ！」
ヴィータ
「そんなの私が知るかよ！」

ヴィータが怒鳴る
そんな中、エリオとユニゾンした甲児はマジンガーの操縦桿を握る
甲児の腕を通してエリオ、そしてマジンガーの力が伝わってくる

甲児
「よぅし！どうやら成功したみたいだな」
エリオ
（はい！今僕は甲児さんの中に居るみたいですね）
十蔵
（成功じゃぁ！こうなったらもうお前のもんじゃ！さっさと畳んじまえぇ！）

甲児
「おうよぉ！行くぞぉ、Ｚランサァァァ！！」

甲児は叫んだ
するとマジンガーの両腕から2本の棒状の物体が現れた
それを目の前で1本に束ねる
するとそれはマジンガーの目の前で1本の黄金の槍へと変わった
その姿は彼とユニゾンしたエリオ・モンディアルが使用するデバイス「ストラーダ」に酷似していた
只、その槍の刃の根元には輝く「Ｚ」の文字が刻まれていた

エリオ
（こ・・・これって・・・僕のストラーダと似てる）
十蔵
（ああ、お前さんとユニゾンしとるからなぁ、そいつを参考にさせて貰ったんじゃよ）
甲児
「そっか・・・んじゃエリオ！お前のデバイス、ちょいと借りるぜぇぇ」

Ｚランサーを両手に構えたマジンガーＺは一直線に目の前に居る敵、ゲッターロボを目指した
ゲッターもまた、両手に構えたトマホークを振りかざしてマジンガーに襲い掛かる
マジンガーＺの槍
ゲッターロボのトマホーク
その双方が互いに空中でぶつかり合う
トマホークとランサーが激しくぶつかり合い火花を散らす

甲児

「んなぁぁぁろぉぉぉぉ！」

マジンガーはランサーを横なぎに振り払いゲッターを吹き飛ばす
ゲッターは空中で一回転して地面に着地する
其処へランサーの刃が飛んでくる
だが、それをトマホークを使って打点をずらす
ランサーの刃はゲッターの首を掠めてそのままマジンガーの手元に戻る
今度はゲッターがトマホークを振り下ろす
それをマジンガーがランサーを使って捌いてかわす
そしてかわしざまにランサーを振るう
今度はそれをジャンプでかわす

甲児
「この野朗！」

甲児は舌打ちしつつもランサーを振り上げる
ランサーの腹の部分がゲッターの横腹に当たりそのまま地面に叩き落す

甲児
「貰ったぁぁ！」

トドメと言わんばかりにマジンガーは跳躍してゲッターに向かってランサーを突き刺す
だが、ランサーが地面に刺さる頃にはゲッターの姿は無かった
ゲッターはマジンガーの上空で再び3機のマシンに分離していたのだ

甲児
「ちっ！」

マジンガーは振り返った
其処にはまたゲッター2になっていたゲッターロボが居た
ゲッター2は再び何体もの分身を作り出す
ゲッタービジョンだ

甲児
「へん！何時までもそんな目くらましが通用すると思うなよ！」

マジンガーはランサーを下段に構えると一瞬の内にゲッターと同じ速度にまで加速した
ソニックムーブだ
今目の前には数体のゲッター2とマジンガーが交戦している
その戦いは凄まじいの一言であった

ザフィーラ
「凄まじい・・・あれが、マジンガーの力なのか？」

マジンガーの戦いを始めて見たザフィーラは驚きの一言しかなかった

シグナム
「嫌、あのZランサーやソニックムーブはエリオとユニゾンする事で得た能力だ！Zだけの力じゃない」

シグナムは言う
それでも目の前で起こっている戦いは凄まじい物であった
２０ｍを超える巨体同士が激しく戦い合っているのだ
その力はほぼ互角と言った所であった

十蔵

（甲児！後１５分しか無いぞ！）
甲児
「分かってる！こうなったら一気にケリをつけてやる！」

マジンガーが距離を開ける為ゲッター２に向かってランサーを振る
ゲッター２はそれをオープンゲットでかわす
そして、マジンガーと少し距離を離した所でゲッター１になる
ゲッター１は腹の部分から丸いレンズを現す
其処から桜色のエネルギーが集中する

エリオ
（甲児さん！あれって・・・）

エリオは驚愕した
似ているのだ
スターズ分隊隊長のなのはと良く似た光を放つ閃光なのだ
だが、甲児はそれが何なのか知っていた
だからこそ、甲児も覚悟を決める

甲児
「上等だ！こっちも腹を括ってやるぜ！」

ランサーをまた二つにして手の中に仕舞うとマジンガーはその場で
仁王立ちした
胸の放熱板が白熱化する
ゲッターのレンズにも桜色の粒子が集まってくる
そして、次の瞬間
両者の閃光がぶつかり合い、プラズマ光が発せられた
マジンガーＺのブレストファイヤーとゲッターロボのゲッタービー
ムである

エリオ
（うわあああああああああ！）
甲児
「うおおおおおおおおおお！」
十蔵
（いけえええええええ！）

両者の力はほぼ互角
互いに一進一退の攻防を展開していた
だが、

『其処までだ』

突如、上空から声が響いて来た
甲児達は上空を見上げる

甲児
「な！まさか・・・」

甲児は己が目を疑った
そんな馬鹿な
あれがある筈が無い
何故ならあれは・・・
白い巨大な飛行要塞
そして特徴的な頭部
正に空を征服する為に作られた凶悪無比な飛行要塞・・・その名は

甲児
「飛行要塞・・・・・グール」

？？？
「その通り」

突如、グールから声が響いた
それは甲児の聞き覚えのある声であった
そう、甲児が憎んでも憎みきれない思いを胸に戦ってきた相手
忘れようとしても忘れられないその声の主
その名は

甲児
「てめぇかあああああああああああ！ドクタァァァァァヘルゥゥゥゥゥゥ！！」

甲児はグールに向かって叫んだ
その声には怒りと憎しみが篭っていた
その顔には殺気が込められていた
憎い、憎い、憎い、
かつて祖父を殺し、更には父を殺し、そして多くの仲間と人の命を奪っていった悪の天才科学者
古代ミケーネの繁栄した島『バードス島』を根城とし、数多の機械獣を繰り出し世界制服を企んだ男
だが、その男の野望は兜　甲児とその愛機、マジンガーZの活躍により永遠に叶う事は無かった
その男が、何故この異世界ミッドチルダに居るのか
甲児には分からなかった
嫌、知りたくも無かった
出来る事なら二度と会いたくもなかった
その因縁の相手が今、甲児の目の前に居るのだ

Ｄｒ．ヘル

「久しぶりだな。兜　甲児」
甲児
「けっ、地獄から舞い戻って来やがったか！死に損ないの糞爺！！」
Ｄｒ．ヘル
「フフフ、何とも心地良い響きよ。かつての仇敵とこうして再び合間見えるとはな」

Ｄｒ．ヘルは不気味な笑みを浮かべて再会を喜んでいた
だが、甲児は喜べる状況では無い
少なくともあの男を見てから甲児は笑うのを止めた
その雰囲気が変わったのをフォワードメンバーは気づいていた

スバル
「何だろう・・・あの大きな飛行機が来てから甲児さんずっと怒ってるみたいだけど」
ティアナ
「そんなの知らないわよ・・・一体あの飛行機に何があるって言うの？」
キャロ
「良く分かりませんけど・・・あの飛行機からとてつもない悪意が感じられます」
スバル・ティアナ
「悪意？」

２人の問いにキャロが頷いた
そして、また空に浮ぶ飛行要塞グールを見上げる

甲児
「てめぇ！一体どうやってこの世界に来やがったんだ？」
Ｄｒ．ヘル

「フフフ、貴様に教える程ワシは過保護では無いのでな。知りたければ自分で探るが良い。戻るぞ！ゲッター」

Ｄｒ．ヘルがバードスの杖を掲げて指示を送る
するとゲッターロボはすぐさま3機に分離してグールの元へ戻っていった

甲児
「待て！Ｄｒ．ヘル！！」

甲児はそれを覆うと駆け出す
だが、其処で異変が起きた
突如マジンガーを光が包み込んだ

十蔵
（しもた！時間切れじゃ！）

十蔵が舌打ち混じりに言った
そして、光が晴れると、其処には両膝を大地につけて座るマジンガーと、その肩に座るエリオの姿があった
どちらもかなり消耗しているようである

エリオは肩で息をしており、甲児は操縦桿にもたれかかっている
どちらもかなり苦しそうだった

甲児
「え・・・エリオ・・・お前は・・・大丈夫か？」
エリオ
「な・・・何とか大丈夫・・・です・・・」
十蔵

「むむぅ・・・どうやらこのクロス・ユニゾンは双方の魔力、体力をかなり使うみたいじゃのぉ」

十蔵は新発見と言わんばかりの顔で呟いていた

甲児
「そ・・・それより・・・エネルギーは・・・・あぁ！！」

甲児はエネルギーメーターを見て愕然とした
エネルギーメーターは『E』を指していたのだ
つまり『空』である

甲児
「しまった・・・これじゃもうマジンガーは動かねぇじゃねぇか」

甲児は思いきり操縦桿を叩く
ダンと大きな音がパイルダー内に響き渡った

Z
『おい、俺に当たるのは勘弁してくれないか』

甲児
「あ、悪いZ、けどよ、これじゃもうお前動けないんだろう？」

Z
『エネルギー系の武器は使えなくなるが戦闘は何とか可能だぜ』

マジンガーZは言う
どうやら完全に動かなくなる事だけは無いようだ
ホッとする甲児
そしてすぐさまグールを睨む

Ｄｒ．ヘル
「フフフ、今回はほんの挨拶代わりだ！だが、いずれ貴様と其処に居る目障りな魔道士共は我が機鋼獣軍団が必ず叩き潰してくれる」

そう言うとＤｒ．ヘルは高らかに笑い声を上げた
その不気味な笑い声は甲児や十蔵だけでなく、フォワードメンバーやヴォルケンリッターのメンバーにも戦慄を与えた

スバル
「あ・・・あれが・・・私達の・・・敵？」

スバルは目の前に聳え立つ強大な敵を見た
そして愕然とした
目の前には質量兵器の塊と言った巨大な要塞が飛行しているのだ
しかも、チラリとだが、その要塞の背中には無数の機鋼獣がこちらを睨んでいたのだ
その機鋼獣の１体１体の視線がスバルに突き刺さると思うと、身が縮こまる思いがした

ティアナ
「スバル・・・スバル！！」
スバル
「え？」
ティアナ
「飲み込まれてどうするのよ！何時ものあんたらしくないじゃない！」
スバル
「ご、御免・・・ティア」

スバルは謝った

そう、自分達が敵の力に飲まれてどうする
この世界を機鋼獣から救えるのは自分達しか居ないのだ
そう心に言い聞かせた

シグナム
「あれが・・・Ｄｒ．ヘル」
ヴィータ
「兜　甲児が・・・戦った男か・・・」
シャマル
「背筋が凍る思いでしたね・・・」
ザフィーラ
「ああ・・・あんな気迫を持つ男を見たのは・・・何年振りだろうか・・・」

ヴォルケンリッターもまたＤｒ．ヘルの放つ異様な気迫に怯え気味であった
そして、甲児達は

エリオ
「甲児さん・・・僕達は・・・勝てるんでしょうか？」
甲児
「エリオ・・・勝てるか？じゃない・・・勝つんだ！俺達は勝たなきゃならないんだ！」

甲児は拳を硬く握り締めてそう言った
負ける訳には行かない
もし負けてしまえば、また多くの人の血と涙が流れる事になる
そんな事はさせない
甲児はそう誓った

＊＊＊

その頃、ホテル内を探索していたなのはとフェイトは

なのは
「こ、これって・・・」
フェイト
「嘘・・・」

2人は己が目を疑った
嘘であって欲しい
2人はそう思った
思いたかった
だが、現実は余りにも非情であった
其処にあったのは
さやかのヘアバンドと、はやての髪飾り
そして、夥しい量の血の跡であった
なのはとフェイトはそれぞれを手に取る

なのは
「間違いない・・・これは・・・さやかさんがつけてた物だよ・・・」
フェイト
「こっちは・・・はやての・・・まさか・・・この血も・・・」

そう思った時、二人の脳裏には無残にも殺人アンドロイド達の手によりバラバラに切り裂かれて無残な姿となったさやかとはやてが浮んだ
２人は青ざめる
信じたくない
だが、目の前にある光景がそう語っていた
２人の死体は何処にも無い
だが、こうして２人が身に着けていた物がある
それは、２人が死亡し、殺人アンドロイドによりその死体を持ち去られたと言う予想を打ち立てるのには充分過ぎる物であった

＊＊＊

甲児
「そんな・・・・そんな・・・」
なのは
「御免なさい・・・」
フェイト
「私達が来た時には・・・もう・・・」

甲児の手には、さやかが身に着けていたヘアバンドが握られていた
それは、まさしく、弓　さやかの死を意味していた物であった
甲児の中に、例えようの無い後悔の念と激しい怒りと憎しみが沸き

あがっていた
その感情が甲児の心を締め付ける
甲児は少しでもその感情から逃れる為に、ありったけの声を上げて泣き叫んだ

甲児
「うおおお

フェイトの言葉を甲児は遮った
皆は甲児を見た
甲児の目には、かつての優しい青年の面影は何処にも無かった
只、怒りと憎しみが支配した悪魔の様な顔だけであった

甲児
「許さねぇ・・・機鋼獣共！あいつらを皆殺しにしてやるぅぅ！」

甲児は怒りに我を忘れた
今、彼の中を憤怒の如く怒りの炎が滾っているのだ
その時、機動六課のヘリが彼等の頭上より降り立って来た
その中から、ヘリのパイロットを務めているヴァイスが降りて来た

ヴァイス
「大変だ！機鋼獣軍団が、手薄の本部を襲撃しているらしい」

一同
「ええ！！！」

ヴァイス
「奴等、初めから二面作戦のつもりだったんだ」

ヴィータ
「こうしちゃいられねぇ！早く戻らねぇと」

甲児
「嫌、俺一人で良い」

エリオ
「こ、甲児さん・・・」

甲児
「てめぇらは足手まといだ。此処は俺一人で良い」

シグナム
「な、何を言うんだ！今のマジンガーで何処まで戦えると思ってる

んだ！」
シャマル
「そうです！それよりも、皆で協力して機鋼獣を・・・」
甲児
「うるせぇ！」
シャマル
「・・・・・」

甲児の怒声がその場に居たメンバーの言葉を奪った
それ程までに甲児の憤りは凄まじかったのだ

甲児
「てめぇらじゃ機鋼獣には勝てねぇ！ハッキリ言って邪魔なんだよ！」
ヴィータ
「な、何だと！」
甲児
「機鋼獣の1体も倒せねぇ奴がデカイ面するんじゃねぇ！奴等は俺一人で片付ける！てめぇらは此処でジッとしてろ」

そう言って甲児は誰も乗っていないヘリに向かって指を翳す
その瞬間、甲児の指先から光子力ビームが放たれ、ヘリは瞬く間にガラクタと化してしまった

なのは
「こ、甲児くん！」
甲児
「良いか！もし着いてきたら、お前等もこのヘリみたいにしてやるからな！分かったか！」

そう言い残して甲児はパイルダーに乗り、飛び立った

甲児
「待ってろよ！機鋼獣ｳｳｳ！てめぇら全員纏めて叩き潰してやる！」

甲児を乗せたパイルダーはマジンガーとドッキングし、そのまま六課本部へと向かっていった
その光景を、なのは達は只見つめるしか出来なかった

＊＊＊

所変わり、此処は何処かの研究室
其処では、甲児とマジンガーの戦い、そして先ほどの語らいの一部始終が映っていた
そして、其処には、白髪の預言者がその映像を見ていた

？？？

「馬鹿者が、お前一人であの強大な機鋼獣軍団に勝てる筈が無いだろう。この世界の魔道士達と手を合わせてこそ、今のマジンガーは全力を出せると言うのに」

預言者はパネルに拳を叩きつけて言った
彼にも、甲児の怒りは我が身の如く理解出来たのだ

だからこそ、今此処で兜　甲児、そしてマジンガーZを失う訳にはいかない
預言者は決意の表情を浮かべる

???

「このままでは、マジンガーZは倒れ、ミッドチルダは死の世界になってしまう・・・・だが、見殺しには出来ん！」

そう言って預言者は顔に手をやる
そして、自らの顔を引っ張り、その預言者と言う名の仮面を取り払った
其処には、紫色の髪をし、黄色い瞳をもった若い科学者の姿があった

???

「いよいよ、我々が動く時なのかもしれん」

そう言って科学者は後ろを振り向いた
其処には、赤いパイロットスーツを身に纏った、青年が立ち、科学者を見つめていた

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　終

次回予告

甲児
「もう誰も死なせない！

もう誰も傷つけさせない！
傷つくのは、俺一人で十分だ！
機鋼獣軍団！さやかさんの弔い合戦だ！一人残らず地獄に送り込んでやるぜぇ！」

次回『集結！ロボット軍団！！』次回もこの小説に

テイィィィィク・オォォォォォフ！！！

悪夢！！！マジンガーZ対ゲッターロボ　後編（後書き）

Z
『なぁ、最後のあれって、かなりネタバレじゃないのか？』
作者
「まぁ、原作を知ってる人なら「ああ、アイツか」ってな具合に気づくだろうね」
Z
『大丈夫なのか？何か原作と違う気がするが（汗』
作者
「大丈夫だ！こっから先は多分原作とは余り絡まないかも知れない気がするから」
Z
『ボロ雑巾になりやがれ！ルストハリケェェェン！』
作者
「ぎゃあああああああああああああああああああ！」

解説４（前書き）

今回は新武装と敵についてです

解説4

クロス・ユニゾン（エリオ）

エリオとユニゾンした事で甲児とマジンガーはエリオの能力の一部を使用できるようになる
また、オリジナルの武器も生成できる

Zランサー

エリオの使用デバイス「ストラーダ」を元に十蔵が生成したマジンガーZの新しい武器
形状は似ているが、槍の刃の根元には「Z」と彫られている
最初は二つになっており、それを腕から取り出してあわせることで槍になる
また、この槍は二つにして投げる事も可能

ソニックムーブ

高速で移動する能力
これを使用してゲッター2のゲッタービジョンと渡り合った

敵紹介

ゲッターロボ

かつて、甲児の居た世界で地上を侵略せんと攻撃してきた地底勢力「恐竜帝国」を退ける為に早乙女博士が宇宙開発用ロボットを急遽戦闘用に改造したのがこのゲッターロボである
武装は少ないが3段階に変形出来る強みを持ち、陸、海、空と戦う

場所を選ばない
だが、最終決戦において無敵戦艦ダイの攻撃により大破、その後、巴　武蔵の特攻により恐竜帝国は滅亡、後に早乙女研究所所員達の前で廃棄処分の元燃え尽きた

Ｄｒ．ヘル
甲児の宿敵
祖父、兜　十蔵を殺害した張本人であり有名な科学者
かつて十蔵博士と共にギリシャの「バードス島」に眠っていた古代兵器を改造し「機械獣」として世界制服を開始した
だが、それを予測していた十蔵博士の作った「マジンガーＺ」により機械獣は破壊され、Ｄｒ．ヘル自身も死亡する
だが、後に「地獄大元帥」として復活し、鉄也を苦しめた
最後は甲児の実父「兜　剣造」の身を挺した特攻を受けて行動不能に陥った無敵要塞デモニカと共にマジンガー軍団の総攻撃を受けて爆死
今回出現したのはあくまでホログラムであったので本体があるのかは謎である

飛行要塞グール
Ｄｒ．ヘルが作った大型要塞
数十体の機鋼獣を搭載出来る上に、重爆撃能力も有しており、これが数十機あればミッドチルダを火の海に変える事が出来るとされている

集結！ロボット軍団！　前編（前書き）

機動六課のメンバーと決別した甲児
彼は一人機鋼獣軍団に戦いを挑む
ボロボロのマジンガーで、果たして何処まで戦えるのか？

集結！ロボット軍団！　前編

機動六課とマジンガーZがホテル・アグスタにて護衛の任についていた時、それを狙って機鋼獣指揮将軍のシュラは攻撃を仕掛けた

シュラ
「フハハハ、この時を待っていたのだ！マジンガー無き六課の本部を叩き潰す事など赤子の手を捻る事より簡単な事だ！ゆけぃ！機鋼獣軍団！」

シュラの指揮する機鋼獣軍団！
その総数は何と２０体を超える程の大軍団であった
その数の機鋼獣軍団を相手に管理局の魔道士達は足止めも出来なかった

「な、何て強さなんだ・・・」
「まるで・・・歯が立たない」

魔道士達は自らの無力さを呪った
彼等の誇る魔法は機鋼獣の前では無力も同然であったのだ
機鋼獣軍団は只、命令されるがままに魔道士達を血祭りに上げ、機動六課本部を壊滅状態にしてしまった
今、甲児達の根城であった機動六課本部は、瓦礫の山と化し、紅蓮の炎が彩っていた

シュラ
「フン、何と容易い事よ・・・思えば、マジンガーZが居なければこの世界、ミッドチルダの侵略もこれと同じ位に容易であった筈。歯ごたえのない」

シュラは見下ろした
眼下では機鋼獣軍団の攻撃により壊滅した魔道士達が傷ついた体を
引きずって機鋼獣達から逃げているのが見えた
滑稽・・・そう、余りにも滑稽であった
マジンガーが居ないこの時、幾ら魔道士が集まった所で機鋼獣には
勝てる筈も無いのだ

シュラ
「フン、逃がすと思うか？機鋼獣軍団よ！その虫けら共を捻り潰し
てしまえぃ！」

シュラが持っていた杖を翳し機鋼獣軍団に命令を送る
機鋼獣軍団は命令通り逃げ惑う魔道士達にトドメを刺さんと襲い掛
かる
その光景を目の当たりにした魔道士達の顔に絶望の色が映る
だが、

甲児
「そうは問屋が卸すかあああああああああああ！」

1体の機鋼獣が黒い拳を食らい粉砕される

シュラ
「おおお！あれは・・・マジンガーZ！何故だ？貴様は今ホテル・
アグスタに居る筈！それが何故？」
甲児
「機鋼獣共！貴様等のせいでさやかさんが死んだ！これはさやかさ
んの弔い合戦だ！！てめぇら一人残らず・・・地獄に叩き落してや
る！」

甲児は叫んだ
甲児の目には例えようの無い深い悲しみと憎しみに満ち溢れていた
今、彼を突き動かしているのはさやかを失った事の悲しみ、そして機鋼獣への憎しみであった
その甲児の心に呼応するかのように今のマジンガーの瞳は黄色から赤になっていた
そして、マジンガーの戦う姿は、魔道士達にはそれが悪魔の様に見えたのだ

「あ・・・悪魔だ！」
「あれは・・・間違いない！あれは破壊の悪魔だ！」

誰もが口々にそう言う
そう、今のマジンガーはミッドチルダの守護神にあらず、今のマジンガーは、復讐に駆られた悪魔なのだ

甲児
「行くぞおおおおおおおおおお！機鋼獣うううううううううう」

＊＊＊

甲児が機鋼獣軍団と戦っている時、機動六課の魔道士達は甲児の言

葉に苦い思いを感じていた

甲児
『機鋼獣を倒せないお前等はハッキリ言って足手まといなんだよ！』

その一言は彼女達の胸に深く突き刺さった

なのは
「確かに・・・私達の力じゃ機鋼獣には勝てないかもしれない・・・」

フェイト
「でも、このまま甲児くんとマジンガーが倒されるのを黙って見てるなんて出来ないよ」

シグナム
「それに、あそこは主はやてが苦肉の思いで立ち上げた組織、それをあんな機鋼獣などに踏みにじらせる訳にはいかない」

ザフィーラ
「私も同じ意見だ！」

シャマル
「たとえ、勝負にならなくても、私達は私達の戦いをしましょう！」

そう言って魔道士達は決心する
だが、そこでヴィータはある事に気づいた

ヴィータ
「なぁ、フォワードの新人の奴等はどうしたんだ？」

なのは
「え？」

その一言で、彼女達は今、この場に新人達の４人が居ない事に気づ

いた

ザフィーラ
「そう言えば、あのガラクタロボットも居ないぞ！」
シグナム
「まさか・・・あいつ等！」

その時、その場に居合わせた一同が同じ事を考えていた
となれば、一刻の猶予も無い
急がねばならない

なのは
「急いで行こう！幸い皆飛んで行けるんだし！魔力を使っちゃうかもしれないけど・・・のんびりしてられないよ」

なのはの一言に皆が頷く
そして、一斉に飛んで行こうとした時

？？？
「ちょい待ち！」
一同
「え？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた
そして、皆が振り向いた・・・其処には

＊＊＊

甲児は鬼気迫る勢いで次々と機鋼獣を蹴散らしていた
迫り来る機鋼獣をその腕で殴り壊し、叩き潰し、捻り潰していった
その戦いは正に悪鬼羅刹の如くであった
そんな戦いをするマジンガーの体には機鋼獣の体を流れていたオイルが返り血の如くこびり付いていた

シュラ
「おおぉぉ、何故だ！これだけの戦力差がありながら・・・何故勝てんのだ」

シュラの顔に恐怖が生まれた
それ程までにマジンガーの戦いは凄まじいのだ
気がつけば、２０体居た機鋼獣も今では数える程しか居なくなってしまった
マジンガーは上空を飛ぶシュラを指差した

甲児
「シュラ！！！次はてめぇの番だ！！覚悟しやがれぇぇ！！！」

甲児の怒声が響く
それを聞いたシュラの顔は青ざめる
マジンガーの紅く輝く瞳がまるで射殺すかの如くシュラを睨んでいたのだ
このままでは勝てない
間違いなくマジンガーに殺される
そう思った

？？？

「フン、これだけの機鋼獣を投入しておきながら、情けない」

シュラ

「な！！！この声は」

シュラは声のした方を見た

其処には、分厚い西洋風の鎧を見に纏った5体の巨人が立っていた

その姿を甲児は知っていた

そう、彼等は・・・

甲児

「機鋼・・・騎士・・・」

？？？

「ほぅ、我等を知っているのだな・・・アギレスを破っただけの事はある」

5体の中で一際大きい機鋼騎士が以外そうに呟いた

甲児

「けっ、丁度良いぜ！5体も雁首揃えて来てくれたんだ！てめぇら纏めて叩き潰してやるぜ！」

？？？

「調子に乗るなよ！脆弱な人間如きが、我等機鋼騎士に勝てる筈が無いだろう」

頭部に1本の立派な角を生やした兜を被った機鋼騎士が唸った

声色からしてこの中で一番若いのであろう

？？？

「止せザルム！人間如きの言葉に耳を貸す必要などない！耳が腐るぞ」
ザルム
「すまん、兄者」

ザルムの横に居た機鋼騎士が宥めた
ザルムよりも一回り大きく、額には二本の角が生えている
また、両肩にも1本ずつ角が生えている

？？？
「それにしてもあの黒い体・・・何度見てもほれぼれする・・・醜い人間共にしては良い物を作った物だ」

５体の中で一番細身の機鋼騎士がうっとりした視線でマジンガーを見つめていた
白銀の鎧に頭にはモヒカンのような飾りを着けた兜を被っている

？？？
「我等が王の命令は搭乗者の捕獲だ！だが、あの機体には用は無い、コクピットを回収した後に破壊するのだ」

そして、中心に立っていた黄金の鎧を纏っていた機鋼騎士が他の４体に命令する

？？？
「ねぇ、デウス様、あの機体、宜しければ私が貰っても宜しいでしょうか？」
デウス
「またか、ベルゼウスよ・・・まぁ良い、好きにせよ」
？？？

「ガハハ、ベルゼウスは物好きよのぉ、あんな貧弱な機鋼兵士の何処が良いのだ？」

機鋼騎士達はそれぞれの会話を楽しんでいた
明らかにマジンガーと甲児を無視していたのだ
それに甲児の怒りは更に増していった

甲児
「やいやい！人の事を無視しやがって！てめぇら何者だ！」

甲児が５体の機鋼騎士を指差す
すると、５体の機鋼騎士がマジンガーの方を向いた

デウス
「これは申し訳ない。つい話しに花が咲いてしまってなぁ・・・では、改めて」

デウスはあくまで紳士的に話しをする

デウス
「我等は、機鋼帝国にその者ありと謳われた『機鋼騎士５人衆』だ！」

機鋼帝国・・・初めてでる単語であった
それが甲児達の戦う敵の名称なのだろうか
そして、彼等は自分達を機鋼騎士５人衆と名乗った
恐らく今までの敵の様にはいかないだろう
甲児はそう思った
だが、弱みを見せれば瞬く間に攻め落とされる
そう思い、甲児は強気を見せた

甲児
「へん！笑わせんな！こちとらついさっき機鋼騎士の一体を叩きのめしたばかりなんだぜ！」
？？？
「ガハハ、アギレス如きを倒した位で良い気になるとはおめでたい奴じゃのぉ」
デウス
「アギレスは我等機鋼騎士の中では最も弱い部類に入る者。そいつを倒した位で舞い上がるとは笑止千万！」
甲児
「なん・・・だと・・・」

甲児は言葉を奪われた
ついさっき苦戦を強いられたあのアギレスが機鋼騎士の中では最も弱い敵だと言うのだ
それは正に衝撃的であった
となれば、今目の前に居る５人はそれ以上と言う事になる

デウス
「フフフ・・・どうやら面を食らっているようだのぅ、そろそろ我等の自己紹介をせねばならんのかのぉ」

デウスはそう言って後ろに視線を送った
すると、２体の機鋼騎士が歩み寄った

ジェルム
「我が名は機鋼騎士ジェルム！」
ザルム
「同じく、ザルム！」

デウス
「2人は兄弟でな、その連携技によって今まで何百人とも言える魔道士共を血祭りにあげていった事か・・・」

デウスは忍び笑いをしながら説明する
続いて、5体の中で一際大きい機鋼騎士が歩み寄る

ガデス
「ワシの名はガデス！今から貴様を鉄の塊に変えてやるわ」

ガデスはそう言って巨大な鉄槌を取り出す
その大きさはガデスの体と同じ位はあった

デウス
「ガデスの力は管理局の誇る戦艦すら一撃の元に沈める程の頼もしい奴よ」

デウスがガデスの肩に手を置いてそう言った
今度は一際細い機鋼騎士が歩み寄る

ベルゼウス
「私の名前はベルゼウス。以降宜しく、美しい黒き魔神♪」

ベルゼウスはマジンガーに向かって卑しく合図を送る
それを見て甲児は寒気がした
まるでオカマである

デウス
「フフフ、ベルゼウスのナリを見て舐めて掛からない方が良いぞ。こいつの操る鞭を食らえば待っているのは確実な死なのだからな」

デウスが説明し終えると、４体は後ろに引き下がる
そして、地面に突き刺していた巨大な剣を持ち上げて、再び地面に叩きつけてデウスがマジンガーを睨む

デウス
「そして、俺が機鋼騎士を束ねる者、名をデウス！」

５体がそれぞれマジンガーを睨んで言った
その姿は自信に満ち溢れていた
殺気のギラつくマジンガーを見ても彼等は動揺どころか眉一つ動かす気配が無かった
それどころか、今のマジンガーを見てむしろ楽しそうにしているのだそれを見て甲児は腹が立った

甲児
「上等だ！機鋼騎士だか何だか知らねぇがてめぇら全員このマジンガーZと兜　甲児様が纏めて叩き潰してやる！さっさと掛かって来やがれ！」
デウス
「愚かな・・・」

デウスが剣を振り上げてマジンガーに向かおうとしただが、それをガデスが止める

ガデス
「待て、デウス！此処はワシ等に任せて貰おう」
ジェルム
「その通り、こんなガラクタ相手にデウス様が出る事などありません」

ザルム
「我等だけで充分であります」
ベルゼウス
「ウフフ、さぁ、遊んであげるわよぉ」

マジンガーの前に4体の機鋼騎士が立ちはだかる
デウスは軽く溜息をつくと、近くの瓦礫に腰を降ろした
そして、剣を横に突き刺すと、両手で顎を支える姿勢で戦いを見守る事にした
我関せずと言った構えである

甲児
「おいてめぇ！俺は全員で来いって言ったんだ！てめぇも来やがれ！」
ガデス
「それはワシ等に勝ってからほざけ！」

そう言ってガデスはマジンガーに向かって巨大な鉄槌を振り下ろす
マジンガーはそれをバックステップでかわす
巨大な鉄槌は地面を抉り、周囲に深く大きな亀裂を作った
あんな物を直撃すればマジンガーと言えども只では済まないだろう
そう思うと甲児は固唾を飲んだ

ジェルム
「余所見してる余裕があるのかなぁ？」
ザルム
「無いんじゃないのかなぁ？」

ジェルムとザルムの兄弟がマジンガーを取り囲むかのように走り回る
2人共かなりのスピードだ

恐らくゲッター2に匹敵する程だろう
とても肉眼では捉えられない程である

ジェルム
「死ねえええええええええええ！」
ザルム
「きしゃあああああああああ！」

突如、上空から飛翔して2体が襲い掛かる
ジェルムは巨大な槍を
ザルムは2本のククリ刀を振りかざして

甲児
「ちぃっ！」

マジンガーは咄嗟に前転して2体の攻撃をかわす
そして、すぐさま立ち上がろうとした時、

ベルゼウス
「ホホホ！後ろがお留守ねぇ！」
甲児
「何！」

甲児は振り向こうとした
だが、それよりも早くベルゼウスの操る鞭がマジンガーを絡めとる
鞭はまるで生きてるかの如くマジンガーの両腕を塞ぎ、動きを封じる
その直後、凄まじい電流がマジンガーを、そして甲児を襲う

甲児
「うわあああああああああああああああああ！」

甲児の悲鳴が響き渡った
体中を凄まじい痛みが襲う
目が血走る
意識が混沌としてきた
体が言う事を効かない
そんな感覚が甲児を襲った

ベルゼウス
「お嫌だ、人間とは何故こんな下品な声を上げるのだろう。聞いてるだけで虫唾が走る」

ベルゼウスはさも嫌そうに呟く
だが、マジンガーを見た時、彼の顔は一変した

ベルゼウス
「それに比べて、お前は美しい・・・その黒いボディ、赤い胸、吸い込まれるような瞳・・・ああ、見てるだけで胸が張り裂けそうだ・・・早くお前を私のコレクションに加えたい！」

ベルゼウスはそう言うと、両手で鞭を持つ
すると、更に激しい電流が甲児を襲う

甲児
「ぐわあああああああああああああああ！」
ベルゼウス
「ホホホホホホホホホ！聞こえるわ！聞こえるわよ！お前の部品の軋む音、回路の焼ききれる音、装甲の歪む音、全て上等の響きを奏でているわぁ！素晴らしい！お前は本当に素晴らしい作品だ！人間共の手にあるには惜しい！お前は今日から私の物だあああああ

あああ！」

ベルゼウスの瞳がカッと見開く
その視線の先では、マジンガーが肩膝をついていた
甲児の意識ももう殆ど無い状態であった
負ける訳には行かない
俺にはさやかさんの仇を討たなければならないんだ
その思いだけが甲児の意識を繋ぎとめていた
だが、それも薄れて徐々に甲児の目蓋が降りていった

その時、閃光がベルゼウスを襲った

ベルゼウス
「ぎゃあああああああああ！私の顔があああああ！」

ベルゼウスは突如顔に痛みを感じ鞭を離してしまった

甲児
「今だ！ぬううううおおおおおおおりゃあああああああ！」

甲児は持てる力を振り絞って操縦桿を握る
マジンガーはその力に答えて自らを縛っていた鞭を引き千切る

甲児
「今のは・・・まさか！」
？？？

「甲児さぁぁぁん！」

甲児は声のした方を見た
其処には、巨大化したフリードに乗ったスバル、ティアナ、エリオ、

キャロの４人、そしてその下を走るボスボロットの姿があった

甲児
「お、お前等！」
スバル
「えへへ、助けに来ました！」
ティアナ
「間一髪でしたね」

２人が安心した顔でマジンガーを見る
それは初めて甲児の役に立てたと実感して喜ぶ顔であった
だが、甲児の顔は喜んでいない

甲児
「馬鹿野朗！何で来たんだ！わざわざ死にに来たのか？さっさと逃げろ！」

甲児は怒鳴って追い返そうとする
だが、それで引き下がるフォワードメンバーでは無い

ティアナ
「甲児さん！甲児さんは以前私に言ってくれたじゃないですか！私達は皆大事な仲間だって！」
エリオ
「僕も甲児さんには色々お世話になったんです！一人で戦うなんて言わないで下さい！」
スバル
「そうです！私達何時も一緒に戦ってきたじゃないですか！今更抜けるなんて水臭いですよ！」
キャロ

「お願いです！甲児さん！」
甲児
「お前等・・・俺の気も知れないで・・・」

甲児が視線を逸らして呟く

ボス
「ばっかやろう！」
甲児
「ぐう！」

ボスボロットがマジンガーの顔を殴る
ボロットの一撃を受けてマジンガーは仰け反る

甲児
「ぼ・・・ボス・・・」
ボス
「何一人で全部背負おうとしてんだよ！さやかが居なくなって辛いのは皆同じなんだよ！てめぇだけが辛いんじゃねぇ！自惚れてんじゃねぇぞ！」
甲児
「な、俺が自惚れてるだと！？」

甲児がボスを睨みつける
だが、ボスは全く怯まない

甲児
「てめぇなんかに言われたくねぇ！」

マジンガーは思い切りボロットを殴る

だが、ボロットは大した痛みも見せず殴り返す
それを受けて今度はマジンガーは尻餅を付く

ボス
「へん！そんなヘッピリ腰のパンチなんざ効かねぇな！」
甲児
「な、何だと・・・」
ボス
「今のてめぇは復讐って言う小さい目標に目が眩んだ愚かな小物だ！俺の知ってる兜　甲児はそんな器の小さい奴じゃなかったぜ！」
甲児
「ボス・・・・・」

甲児はボスのその一言に胸が打たれた
そうだ、今まで俺は何のために戦ってきたんだ
お爺ちゃんを殺した奴等の復讐
違う！断じて違う
俺が今までマジンガーに乗って戦ってきた理由
それは、人類の平和を守る為だ！
それなのに、俺は何て小さな男なのだろう
さやかを守れなかった自分に腹を立てて全てを否定し、仲間にあんな酷い事を言ってしまった
甲児は自分で自分の顔を殴った
口からは赤い血が吹き出る
だが、そのお陰で甲児は今目が覚めた

甲児
「サンキュー、ボス。お前のお陰で目が覚めたぜ」
ボス
「兜！」

甲児
「俺とマジンガーは復讐の為に戦ってきたんじゃねぇ！人類の平和を守る為に戦って来たんだ！」

甲児の目は以前と同じ・・・嫌、それ以上の熱い闘志の炎で燃え上がっていた

デウス
「話しは済んだかね？」

そんな甲児達を呼ぶようにデウスが言葉を掛けた

甲児
「皆！すまねぇ！今更言えた義理じゃねぇが！頼む、俺に力を貸してくれ！」
スバル
「勿論ですよ！」
ティアナ
「私達の力を使って下さい！」
エリオ
「僕達も一生懸命戦います」
キャロ
「だから、もうあんな怖い事は言わないで下さいね」
甲児
「皆・・・（グス）有難うよ！」

甲児は滲み出た涙を親指で拭った

スバル
「あれ？ひょっとして甲児さん、泣いてたんですか？」

甲児
「馬鹿！違うよ・・・こりゃ、あれだ・・・目にゴミが入ったんだよ」

咄嗟に誤魔化す甲児
そして、再び４体に目をやる
４体は戦闘態勢を整えて今か今かと襲い掛かろうとしていた

甲児
「いいか、あいつらは以前の機鋼獣とは訳が違う、全力で行くぞ！」
ボス
「おっしゃぁ！」
ス・テ・エ・キ
「はい！」
甲児
「おっしゃぁ！行くぜぇ！」

甲児達は猛然と機鋼騎士達に飛び掛った
機鋼騎士達も襲い掛かる
マジンガーＺとフォワードメンバー対、機鋼騎士４体
果たして勝つのはどちらか？

集結！ロボット軍団！　前編（後書き）

後編に続く

集結！ロボット軍団！　中篇（前書き）

マジンガーZ最大のピンチ！
遂にマジンガーが機鋼獣達に敗れる？

集結！ロボット軍団！　中篇

デウスは目の前に起こっている光景を眺めていた
デウスの目に映るのは、自分の腕利きの４人の機鋼騎士が戦っている所である
普通ならこの程度の事で食い入る様に見る事は無い
だが、今回は相手が違った

甲児
「うおおおおりゃあああああ！」

機鋼騎士と戦っているのは、今まで幾多もの機鋼獣を葬ってきた鉄の城マジンガーＺ
そして、選りすぐりの魔道士達を集めた組織、機動六課の所属する新人魔道士達
更にはガラクタで出来たロボットまで戦闘に参加していた
デウスは己が目を食い入るように戦闘に向けた
マジンガーは長きに渡る戦闘のせいで既にボロボロになり、エネルギーも底をついて格闘戦しか出来ない状態になっているのだ
にも関わらず、機鋼騎士達と互角に渡り合っているのだ
そして、その後方を魔道士達が魔法攻撃で援護し、その周りをスクラップロボットが目障りに動き回っていた

ガデス
「砕け散るが良いぃぃぃぃ！」
甲児
「ざけんじゃねぇぇぇ！」

ガデスの振り下ろした鉄槌をマジンガーは両腕で掴んだ

デウスの片腕であり、共に長きに渡る戦闘を戦い抜いてきたガデス
そのガデスの鉄槌が振り下ろされれば、その先にあるのは鉄屑の山
だけであった
だが、その鉄槌をマジンガーは受け止めたのだ

ガデス
「ほほぉ・・・ワシの鉄槌を受け止めるとは、そんな華奢な体で中
々の強物よのぉ」
甲児
「うっせぇデカブツ！てめぇ如きに負けるマジンガーじゃねぇ！」

ガデスとマジンガーは互いに睨みあう
その力は互角の一線を辿っていた
だが、この時、マジンガーはほぼ無防備であった
その隙を見逃す機鋼騎士では無い

ジェルム
「力はあるようだが」
ザルム
「後ろがお留守だぜぇ！シャッハァァァ！」

ジェルムとザルムの刃が背後からマジンガーに迫る
だが、それはマジンガーに突き刺さる事は無かった
何故なら

スバル・ティアナ
「シュゥゥゥト！」

2人の魔道士の放つ弾丸がジェルムとザルムの頭部に当たり、退か
せたからだ

ジェルム
「おのれ・・・脆弱な人間の分際で」
ザルム
「生意気だぜぇ！」

ジェルムとザルムは狙いを2人に変えて襲い掛かる

ティアナ
「スバル！」
スバル
「うん！」

2人は互いに頷き合い左右に分かれた
その直後に2体の武器が振り下ろされた

ジェルム
「おのれぇ」
ザルム
「ちょこまかと！」

2体は悔しい顔をした
そう、機鋼獣クラスの巨体にとって素早く動き回る人間を倒すのは
実は至難の業なのだ
考えても見て欲しい
手に持った箸で飛び回る蝿を捕まえるのが達人の技といわれるよう
に、素早く動き回る人間を手持ちの武器で仕留めるのは困難なのだ
今、機鋼騎士達はそれを身を持って知ったのであった

ベルゼウス

「フン、人間如きに翻弄されるとは情けない」

ベルゼウスは鼻で笑いながら両手を広げた
すると、ベルゼウスの両腕にある１０本の指が長く伸びた
そう、ベルゼウスは今１０本の鞭を持つ事になったのだ

ベルゼウス
「さぁ、マジンガーＺ！今すぐ私の物となるのだぁぁぁ！」

ベルゼウスの鞭が撓りマジンガーＺに向かって放たれようとした正
にその時、

エリオ
「サンダァァァレイジィィィ！」
ベルゼウス
「ぐわぁぁぁ！」

突如、ベルゼウスは顔を抑えた
其処には、マジンガーＺの背中を守るように、巨大化したフリード
と、それに乗るエリオ、キャロの姿があった

エリオ
「マジンガーＺに・・・甲児さんに近づけさせるもんか！」
ベルゼウス
「おのれ・・・人間の小僧があぁぁぁぁぁ！」

ベルゼウスは怒りに満ちた顔でエリオ達を睨んだ
そして、１０本の撓る鞭を思い切り地面に叩き付けた

キャロ

「エリオ君！フリードは私が指示するから、エリオ君は」
エリオ
「分かってる！あいつの相手は僕がする」

エリオはストラーダを構える

エリオ
「行くぞ！機鋼騎士！」

エリオが叫ぶ
それに呼応して、フリードが吠え、真っ直ぐにベルゼウスに向かっていく

おかしい、何かがおかしい
デウスはそう思った
今まで魔道士達の攻撃が機鋼獣に通じる事は無かった
まして、機鋼獣より遥かに強度の増している機鋼騎士に攻撃が通じる筈が無い
なのに何故奴等の攻撃が通じるのか

甲児
「不信がってるみたいだな！デウス！」
デウス
「何？」

デウスはマジンガーZを見た
マジンガーZはガデスを両手で持ち上げていた
マジンガーZを遥かに増す巨体にも関わらずマジンガーZはその巨

体を軽々と持ち上げているのだ

甲児
「教えてやろうか！何故あいつらの攻撃が通じるのか？」

デウス
「な、何故だ！」

甲児
「知らねぇんなら教えてやるぜ、スバルとティアナのデバイスは俺が作ったんだぜ！あいつらのデバイスは俺が作った特注品なんだ！それに、お前等の鎧の構造なんざトックに調べがついてんだよ」

デウス
「何！」

甲児
「てめぇらの鎧の構造、恐らく何らかの波長であいつ等の魔法を遮断してるんだろう？だが、そいつはある物質には効力を発揮しない！そして、その物質は・・・『超合金Z』だ！」

デウス
「まさか・・・其処まで調べがついていたとは・・・」

デウスは驚いていた
そう、彼等機鋼獣の体を魔法攻撃から守っていた見えない鎧・・・
それは今まで幾多の魔道士達を苦しめた鎧であったのだ
だが、その鎧はマジンガーZの攻撃には全く効力を発揮しなかった
何故か、それはその鎧の唯一の弱点こそが、マジンガーZの体を作っている『超合金Z』だったのだ

デウス
「成る程・・・だが、それが一体何故・・・」

甲児
「分からないのか？スバルとティアナのデバイスは・・・マジンガ

ーZの体、つまり『超合金Z』で出来てるんだ！」

それは、正に驚愕の事実であった
何と、甲児はマジンガーの体を作っていた超合金Zを使ってスバルとティアナのデバイスを生成したのであった

甲児
「結構作るのに苦労したんだぜ。何せ超合金Zを加工するのに六課の整備士が総動員しての作業だったんだからなぁ」

甲児はそう言い終わると思い切り腕を振ってガデスを投げ飛ばす
ガデスはそのまま放物線を描いて地面に落ちていった

ガデス
「な、何て奴じゃ・・・このワシを投げ飛ばすとは・・・」
甲児
「喧嘩はがたいじゃねぇ！腕っ節で決まるんだよ！」

マジンガーは自分の腕を見せ付けて言った
だが、それではエリオは一体何故なのか
甲児が作ったデバイスはスバルとティアナのデバイスのみであるにも関わらず、エリオの攻撃は機鋼騎士に通じているのだ
それは一体何故

甲児
「へへ、俺も初めは信じられなかったけどな・・・どうやら俺とユニゾンしたことによってアイツのデバイスにも変化が出ちまったみたいなんだよな」

そう、エリオのデバイスは甲児とユニゾンした事によりその構造が

マジンガーと同じ構造になってしまったのだ
言うなれば、この3人はこの世界で唯一機鋼獣に対抗出来る魔道士なのだ

デウス
「やはり・・・お前は危険過ぎる・・・王の命令が無ければ直ちにこの場で殺せた物を」
甲児
「安心しな！てめぇら纏めて地獄に送り届けてやるぜ」
？？？
「それはどうかな？」
甲児
「誰だ？」

甲児は声のした方を見た
それは遥か空の上であった
先ほどまで晴れ渡っていた空が突如暗雲に覆われ、稲妻が降り立つ

甲児
「な、突然空が・・・」
？？？
「久しぶりだなぁ、甲児」
甲児
「何？何故俺を知っているんだ！」
？？？
「冷たいなぁ・・・忘れたのか？私はかつて、お前のオシメを変えた事だってあるんだぞ」
甲児
「知るもんか！御託並べてねぇでさっさと名乗りやがれ！」

甲児とマジンガーZは上空を指差す
だが、暗雲はそれ以上答えない
じれったい思いを感じていると、周りに変化が起きたのに気づいた

甲児
「な！機鋼騎士達が！」

それは、機鋼騎士達が突如怯えだした事であった
今の今まで強敵として見てきた機鋼騎士達がまるで赤子のように怯えているのだ

デウス
「おおぉぉぉ！機鋼王様！」
ジェルム
「王が・・・王がお怒りになっておられる」
ザルム
「お許しを・・・お許し下さい・・・王よ」
ガデス
「ワシらは決して王の命に背いてはおりません！ですから・・・どうか、命ばかりはお助けを！」
ベルゼウス
「どうか、罰だけは・・・」

５体はその場で上空に向かって跪いた
まるで許しを請うかの如く
その時、５体の機鋼騎士達に向かって激しい稲妻が降り注いだ

機鋼騎士
「ギャアアアアアアアアアアアアアアア！」

5体の機鋼騎士達は苦しんでいた
その光景を兜　甲児、そしてフォワードメンバーは驚きの眼差しで見つめていた
一体何故、何故こんな事をするのだろうか
何故、こいつは俺を知っているのだろうか
どうして、こいつは俺を必要とするのだろうか
甲児には分からなかった
少なくとも、今の甲児には分からなかった

機鋼王
「この愚か者共！下等な人間如きに遅れをとりおって！それでも誇り高き機鋼騎士か！」
デウス
「も・・・申し訳ありません・・・王よ・・・」

全身から煙を出しながらデウスは謝罪の言葉を述べた

機鋼王
「さっさと甲児を連れて来い！何時までも遊んでいるようなら容赦はせんぞ！！」
デウス
「はっ！誓って！！」

デウスは深く頭を下げると、そのまま立ち上がった

デウス
「皆の者！王は大変お怒りだ！最早遊びは終りにして、さっさとマジンガーを片付けて兜甲児を王の下へ連れて行くのだ」
ジェ・ザ・ガ・ベ
「ハハッ！」

４体は敬礼のポーズを取る
そして、５体が一斉にマジンガーに迫る

スバル
「甲児さん！」
ティアナ
「私達も一緒に・・・」
シュラ
「そうはさせんぞ！」
ス・テ・エ・キ
「！！！」

突如、４人の前に機鋼獣指揮将軍のシュラが立ちはだかった

スバル
「どいてよ！でないと只じゃ済まさないよ！」
シュラ
「ほほぉ、どう済まさないのかな？」
ティアナ
「こうするのよ」

ティアナは間髪入れずにクロスミラージュを構えて弾丸を放った
弾丸は真っ直ぐシュラ目掛けて飛んでいった

シュラ
「馬鹿め！」

だが、突如シュラの周りを青白い幕が覆った
その幕はクロスミラージュから放たれた弾丸を弾き飛ばす

ティアナ
「そんな！」
シュラ
「フフフ、この機鋼獣指揮将軍と言われた私が、何の準備も無く攻めて来たと思っていたのか？貴様等を始末する算段などとうに打ってあるのだ」

そう言ってシュラが杖を天に掲げた
すると、先ほどまで何も無かった場所に突如、丸い円盤状の物が現れた

スバル
「ティアナ！あれ！」
ティアナ
「え！」
エリオ
「あれって一体！」
キャロ
「分かりません！」

４人がその円盤を見る
円盤の周囲からは長細い管が現れ、それらは４人を囲むように地面に突き刺さる
そして、円盤から白い閃光と共に眩い光線が放たれる

エリオ
「うわあああああああああああああ！」
ス・テ・キ
「きゃあああああああああああああ！」

４人は叫ぶ
その光線は体全てをまるで巨大な針に刺されたかのような激痛を与えるのだ
それを見てシュラは高らかに笑う

シュラ
「フハハハハ！機鋼獣デスネットの誇る殺人光線の味はいかがかな？その光線は貴様等魔道士を拷問する為に開発した物だが、それを私が戦闘用に改造したのだ」

ティアナ
「ご・・・・拷問・・・・ですって？・・・・・・」

シュラ
「その通り、この光線は貴様等に地獄の苦しみを与えながらゆっくりと死へと誘う死の宣告者なのだ！その輪に入ったが最後、貴様等の命運は只一つ・・・『死』あるのみだ！」

シュラが杖を突き出して笑う
その笑みはまるで地獄の鬼の如くであった

甲児
「みんな！今助けるぞ！」

ベルゼウス
「おおっと！そうはいかないわよぉ！」

デスネットに捕まった４人を救おうと駆け出すマジンガーをベルゼウスの１０本の鞭が絡めとる

甲児
「し、しまった！・・・・・」

ベルゼウス
「ンフフ～、つ・か・ま・え・た♪」

そう言った直後、ベルゼウスの１０本の鞭から激しい電流が流れた
その威力は、鞭の数と同じ・・・即ち１０倍の威力であった

甲児
「うぐわあああああああああああああ！」

激しい痛みが甲児の全身を襲った
腕が、足が、体中が悲鳴を上げている
指先一本すら動かす事が出来ない
それ程の激痛が甲児を襲っていたのだ

ベルゼウス
「ホホホホホ！例え王の命令だとしても、その美しいロボットは頂いて行くわよぉ！」

ベルゼウスが下卑た笑いを浮かべる
そして、マジンガーの左右からジェルムとザルムが駆け寄る

ジェルム
「マジンガアアアアアアア！」
ザルム
「死ねエエエエエエエエエエ！」

ジェルムとザルムの武器がそれぞれマジンガーの横腹を刺し貫く

甲児
「わあああああああああああああ！」

刺し貫かれたマジンガーの腹部からオイルが血のように噴出す
その光景はとても痛々しかった
マジンガーが悲鳴にも似た雄たけびを上げる

ベルゼウス
「ちょっと！人のコレクションを傷物にしないでよ！」
ジェルム
「五月蝿い！命令が優先だ！」
ザルム
「その通り！」

抗議するベルゼウスを2人が制す

デウス
「よし、ガデス！パイルダーを回収しろ！その後にマジンガーと魔道士達を抹殺する」
ガデス
「ハッ！」

ガデスはそう言うと、巨大な腕をマジンガーの頭部にあるパイルダーに手を伸ばす

ボス
「この野朗！マジンガーに何しやがる！」
ガデス
「邪魔だ！このガラクタ」

ガデスは持っていた鉄槌でボスボロットを吹き飛ばす

ボス
「ヒエエェェェ！お助けエェェェェ」

ボロットはそのまま遥か上空に吹き飛び、星となってしまった

甲児
「ぼ、ボスウゥゥゥゥゥゥゥ！」

甲児は叫ぶ
ガデスはそのままパイルダーを掴み思い切り引き抜こうとする

甲児
「この野朗！・・・その手を・・・手を離せェェェ」

甲児が叫ぶ、だが、その声には力が篭ってない
その間も甲児の体を激痛が襲い、マジンガーの腹部の傷は更に広がっていく

ガデス
「諦めろ兜　甲児！貴様等の負けだ！我等機鋼帝国に仇名した時点で既に貴様等の命運は決まっていたのだ」

ベルゼウス
「ククク・・・それに見ろ、お前の仲間達は既に事切れる寸前だぞぉ」

甲児
「な・・・・・なにぃ・・・・・」

甲児は薄れる意識の中捕らえられた４人を見た
４人は機鋼獣デスネットの放つ殺人光線の中で既に倒れており最早立ち上がる気力すら無くなっていた

甲児
（スバル・・・ティアナ・・・エリオ・・・キャロ・・・フリード・
・・・・す・・・すまねぇ・・・俺なんかの為に・・・ち・・・ち
く・・・しょう・・・）

甲児はそう呟いた後、静かに意識を失おうとしていた
そして、ゆっくりと両の目蓋が閉じられる

???
『まだだ！』
甲児
「へ？」
???
『まだ負けてはいないぞ！』
甲児
「この声は！・・・まさか！」

それは甲児の聞き覚えのある声であった
その直後、赤い何かが飛来し、マジンガーを高速していたガデスの
腕、ジェルムとザルムの武器、ベルゼウスの指を切断した

ベルゼウス・ガデス
「ギャアアアアアアアアアアアアア！」
ジェルム・ザルム
「何イィィィ！」
甲児

「あ・・・あれは・・・」

甲児はその武器に見覚えがあった
そして、空を見上げた
其処には1体の巨大なロボットが居た
黒いボディに赤い放熱板
マジンガーZに似ている部分があるが、マジンガーZより一回り大きい
所々尖った箇所がある
その姿は正に偉大な勇者であった
人々はその巨人をこう呼んでいた

その名は・・・・『グレートマジンガー』

集結！ロボット軍団！　中篇（後書き）

Z「いやぁ、遂に登場グレートマジンガー！」
作者「後編は大逆転の予感が沸いてくるよぉ！」
Z&作者
「お楽しみに！」

集結！ロボット軍団！　後編（前書き）

今回は結構長めです
そんでかなり原作崩壊です
覚悟は宜しいですか？

集結！ロボット軍団！　後編

上空には赤い翼を持った黒き巨人・・・嫌、黒き魔神が居た
かつて、ミケーネの戦闘獣軍団を退かせ、闇の帝王ですら遂に倒す事の出来なかったロボット
マジンガーZの兄弟にして、偉大な勇者
人々はそのロボットをこう呼んでいた

『グレートマジンガー』

甲児の目の前には今赤いV字型の放熱板を元の位置に戻すグレートの姿が映っていた
だが、甲児は未だ喜べる状況ではなかった
もしかしたら、このグレートもまたDr.ヘルの差し向けた敵なのかもしれない
そんな疑いが甲児の念頭にはあったのだ
だが、その疑いの心は次に聞こえて来る声で吹き飛んでいった

???

「無事か?甲児くん」
甲児
「その声は!鉄也さん!鉄也さんか!」
鉄也
「何言ってんだ!例え世界が変わっても、この剣　鉄也は世界にたった一人だぜ」

その声は確かにグレートから聞こえてきた

間違いない、あのグレートは味方だ
そして、あれに乗っているのは甲児に取ってとても頼もしい味方であった
ミケーネ帝国と戦い、その他にも多くの戦いに参加した戦闘のプロ
甲児の兄貴分にして同じ父の元に育った男
名を『剣　鉄也』

鉄也
「すまない、甲児くん！助けるのが遅くなってしまって」
甲児
「へへっ、良いって事よ」

甲児は鼻を摩って答えた
とても頼もしい仲間である
さやかに続き同じ世界の仲間とこうして出会えたのだ

鉄也
「さぁ甲児くん。俺と君とでダブルマジンガーとなろうじゃないか！」
甲児
「そうしたいのは山々なんだけど・・・生憎エネルギーが底をついちまって・・・それに、もうマジンガーも限界なんだ」

甲児はメーター各所を見る
其処には、先ほどの電撃を受けて殆どの計器がいかれている光景であった
計器からは煙が立ち昇っている
とても動ける状態とは思えなかった
だが、鉄也はフッと微笑んだ

鉄也
「何を言ってる。そんなのはマジンガーに聞けば分かる事じゃないか」
甲児
「え？マジンガーに？」

甲児はそう聞かれ改めて計器を見た
すると、目の前のモニターに光り輝く『Z』の文字が浮かび上がった

甲児
「Z・・・お前・・・」
Z
『ったく、お前は俺が居ないとロクな事になんねぇなぁ』

Zは少し溜息混じりに言う
だが、甲児は申し訳なさそうな顔をする

甲児
「すまねぇZ・・・俺はお前を一時的にとは言え悪魔にしちまった・・・それに・・・こんなに傷だらけにしちまって」
Z
『おいおい、こんなの只のカスリ傷にもなんねぇよ・・・それに、まだ俺達は悪魔じゃないだろう？』
甲児
「何？」
Z
『今もこうして俺達が立ち上がるのを待っている奴等が居るだろう？だったら立ち上がろうぜ！この2本の足でしっかりと大地に立とうぜ！何せ俺達は』
甲児

「そうだ！お爺ちゃんはマジンガーは神にも悪魔にも成れるって言った・・・だけどマジンガーは神でも悪魔でもない！・・・人類の平和を守る正義の『魔神』なんだ！」

甲児はそう言って操縦桿を握る
その目には真っ赤に燃え上がる闘志が滾っていた
それに呼応するかのようにパイルダーの各計器に火が入っていく

Z
『よぉし！そんじゃ第2ラウンドと行こうぜ！』
甲児
「ああ！見せてやるぜ！俺とマジンガーの底力をなぁぁぁ！マジィィィィィィィン・パワァァァァァァァ！」

マジンガーは立ち上がった
その力強い両足でしっかりと大地に立つ
そして、マジンガーの両目に再び眩しいばかりの光がともる
そして、両腕を天に掲げるかのように上げて復活の雄たけびを上げる
今、此処にマジンガーZが再び立ち上がったのだ

甲児
「Z、お前はやっぱり凄い奴だぜ」
Z
『当たり前だろう！俺は神をも悪魔をも超える『魔神』なんだぜ！そんな事より、メーターを見な』
甲児
「メーター？・・・おぉ！」

甲児は思わず声を上げた
そう、上げるしか無かった

何故なら、今の今まで空になっていたエネルギーがメーターを振り切る程までになっていたのだ

Z
『これで心置きなく戦えるだろう！行くぜ兄弟！』
甲児
「ああ、今までの分！百倍・・・嫌、千倍にして返してやる！行くぜマジンガー！」

完全復活したマジンガーZとグレートマジンガー
今此処に、無敵のダブルマジンガーが集結したのだ

＊＊＊

シュラ
「ば、馬鹿な・・・マジンガーが二体も居たのか？」

突然のグレートの出現、そしてマジンガーZの完全復活にシュラが恐れおののく
その刹那、突如桜色の閃光が機鋼獣デスネットを射抜く

シュラ
「何！」
スバル

「い・・・今の・・・光は・・・・」

閃光を受けたデスネットはそのまま上空で抵抗も出来ず爆散した
それにより４人を捕らえていた殺人光線も止む

？？？
「皆！大丈夫？」
？？？
「遅くなって御免ね」

ゆっくりと起き上がる４人に見覚えのある２人が現れる
白いバリアジャケットと黒のバリアジャケットを身に纏った２人で
あった

４人
「なのはさん！フェイトさん！」
なのは
「間に合ったみたいだね」
フェイト
「うん、皆立てる？」

２人は４人に立てるかどうか聞く
それを聞かれた４人もまたマジンガーと同じように立ち上がる

スバル
「そんなの当然ですよ！」
ティアナ
「こんなので倒れる程ヤワじゃありません！」
エリオ
「まだまだ戦えます！」

キャロ
「私もいけます！」

そう言った４人の瞳は燃え上がっていた
マジンガーの勇姿を見て４人の魂に火がついたのだ
今この４人の魂の炎を消せる物は存在しないであろう

シュラ
「お・・・おのれぇ・・・何故だ、何故貴様等魔道士が機鋼獣を倒せるのだ！？」
なのは
「何時までも貴方達にやられっぱなしだと思わないでね！」
フェイト
「人間は限界を超えて成長出来る存在なんだよ！それに、さっき甲児くんが言ったようにもう貴方の鎧の効果は皆知ってるんだよ！」

２人はデバイスをシュラに向けて構える

シュラ
「ほざけぇ！こうなったら残った機鋼獣全てを投入してくれるわあああああ！」

シュラが杖を掲げる
すると戦場を包み込むように巨大な魔方陣が現れ、其処から続々と機鋼獣が現れる
その数・・・実に１００体は居た

シュラ
「ハハハハハハ！いかに機鋼獣と戦えるようになったとは言えこの数と戦うのは不可能だろう！」

シュラが下卑た笑いを浮かべる
だが、それを見て鉄也が鼻で笑う

鉄也
「おい、助けに来たのが俺達だけだと思ってるのか？」
シュラ
「何！」
甲児
「鉄也さん！それってまさか」
？？？
「その通りだ、甲児くん！」

突如、彼等の上空を高速で３機のマシンが飛び立った
それぞれが赤、青、黄色と色がついていた
３機はそれぞれ上空で１列になる

？？？
「チェェェンジ・ドラゴォォォン・スイィィィッチオォォォン！！」

青年の声と共に上から赤、青、黄の順に一つになる
そして、一つになったマシンが１体のロボットとなった
赤い色が特徴の５０ｍの巨大ロボットであった

甲児
「げ・・・ゲッタードラゴン！！」
スバル
「なのはさん！あれも味方なんですか？」
なのは

「そうだよ、あれも甲児さんの居た世界の仲間なんだよ」
ティアナ
「大きい・・・マジンガーの2倍はありますよ」

ティアナ達の見る中でゲッタードラゴンが降り立つ

甲児
「もしかして、それに乗ってるのは・・・」
???
「久しぶりだな。甲児くん」
甲児
「リョウ、やっぱりリョウ君か！」

それは甲児の聞き覚えのある声であった
声からして熱血感が漂う気がする
栗色の短い髪に青い瞳をした好青年である
その青年こそゲッターチームのリーダー『流　竜馬』であった

竜馬
「鉄也くん、どうする？機鋼騎士は俺達で倒すかい？」
鉄也
「嫌、俺と甲児くんで片付ける。奴等には甲児くんが世話になったからな。そのツケを払わせてやる」

そう言ってる鉄也の顔は何処か笑っていた
それを見て竜馬も苦笑いを浮かべる

竜馬
「やれやれ、こっちは雑魚掃除か・・・相変わらず美味しい所はしっかり頂く主義なんだなぁ鉄也くんは」

鉄也
「それが俺だからな。それじゃ行くぜ甲児くん！」
甲児
「おう！今までの借りを延滞料金付きで返してやるぜ！」

腕をボキボキと鳴らしてマジンガーは歩み寄る
その光景を見て機鋼騎士達は退く
凄まじい闘気（オーラ）が漂っていたのだ
それは隣に居たグレートも同じであった
機鋼騎士達にはマジンガーとグレートが数倍にも大きく見えた

デウス
「な、何をうろたえているんだ！相手はたった2体だろうが！ジェルム、ザルム！お前達の連携を見せ付けてやれ！」
ジェルム・ザルム
「ハッ！」

ジェルムとザルムがそれぞれ再び武器を構えて襲い掛かる

鉄也
「甲児くん！これを使え！」

グレートが右足から諸刃の剣を取り出す
そしてそれをマジンガー目掛けて投げつけてそれを受け取る

甲児
「サンキュー！鉄也さん！行くぜ」
鉄也
「おう！」

それにマジンガーとグレートが迎え撃つ

ジェルム
「何がグレートマジンガーだ！死ねぇ！」

ジェルムの長い槍がグレートマジンガーの頭部を狙って突き出す

鉄也
「甘いな！」

だが、グレートはそれを片手で払いのけ、それと同時にブレードを振ってジェルムの片腕を切り落とす

ジェルム
「ギャアアアアアアアア！腕が・・・・俺の腕がああああああああ！」

鉄也
「どうした？1対1では大した事ないんだな」

ジェルムは決して弱くは無かった
彼の槍捌きに今まで幾多もの魔道士が犠牲になっていった事かでは何故ジェルムの腕が飛ぶような事態になったのか
答えは明白である
そう、鉄也が強すぎるのだ
鉄也と、グレートマジンガーが余りにも強すぎるのだ
グレートは腕を押さえて苦しむジェルムに間髪入れずにその頭目掛けて腕を飛ばす

ジェルム
「ヒィッ！」

鉄也
「食らえ！アトミィィィック・パァァンチ！」

グレートの腕はジェルムの兜を粉々に砕き、その中にあった電子頭脳が部品を撒き散らして吹き飛ぶ
そのまま放物線を描きながら腕はグレートの元へと戻っていく
それとほぼ同時にジェルムは仰向けに倒れ数秒痙攣した後に爆発した

ザルム
「兄者アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ザルムが悲痛の叫びを上げる
そして、怒りの篭った眼差しで目の前に居るマジンガーZを睨む

ザルム
「おのれ・・・おのれ人間め・・・おのれ・・・マジンガァァァァァァァァ！」

怒声を上げながら両手のククリ刀を振り回す
それに対し、Zはマジンガーブレードを両手で構える

甲児
「てめぇには横っ腹を貫かれた分しっかり返させて貰うぜえええええええええ！」

マジンガーは猛然と突進する
マジンガーのブレードとザルムのククリ刀が空中で激しくぶつかり合う
だが、体を貫いたのはZのマジンガーブレードであった
ザルムのククリ刀は刃の部分が空に舞い上がり、残った柄の部分だ

けが握られていた

ザルム
「ぐうううううえぇぇぇぇぇ！」

ザルムが激痛を思わせる叫びを上げる
貫かれた箇所と口から夥しい量のオイルを吐き出す
甲児は刺さったブレードの角度を９０度変え、横に薙ぐ
オイルを纏ったブレードがザルムの横腹から抜き出る
それと一緒に細かい機械部品が飛び散る

甲児
「てめぇの宴会芸も見飽きたぜ！地獄に行って鬼達にでも見せてきな！ルストハリケェェェェエン！」

マジンガーの口から猛烈な風が吹き出た
それは強力な酸を含んだ風である
それを浴びたザルムの鎧は瞬く間にボロボロになりやがて塵となり
この世から姿を消した

デウス
「ば・・・馬鹿な・・・ジェルムとザルムが・・・こうもアッサリと・・・」

デウスは信じられないと言った思いであった
機鋼騎士５人衆と謳われたジェルムとザルムが目の前に居る２体の魔神により完膚なきまでに叩きのめされたのだ
それは、正に彼にとっては信じられない光景でもあった
夢なら覚めて欲しい
そうさえ思えた

だが、これが現実なのだ
今、彼の目の前には強大な力を持った魔神・・・マジンガーが立っているのだ

ベルゼウス
「ひょ～～～ホホホ！今度は私が相手よぉぉぉぉ！」
鉄也
「むっ！」

ベルゼウスは両手の１０本の鞭をグレートに巻きつけた

ベルゼウス
「ホホホ！お前も痺れてしまいなさい！」

そう言ってベルゼウスの体から高圧電流が流れた
それはグレートを通じて鉄也を襲う

鉄也
「ぐうっ！」

それには流石の鉄也も答える
少し声を上げて顔を歪めた

ベルゼウス
「ホホホホホホホ！王からはお前の捕獲は命じられていない！お前は黒こげにしてその美しいロボットを頂いていくわよぉ！」

ベルゼウスの趣味の悪い声が聞こえて来る
だが、鉄也はそんなベルゼウスを見て笑った

鉄也
「フン、こんな電撃で俺を殺せると思ってるのか？」
ベルゼウス
「何！？」
鉄也
「お前に本当の電撃を教えてやるぜ！」

そう言ってグレートは上空に腕を掲げた
すると、グレート目掛けて一筋の雷が降り注ぐ
それをグレートの顔についた2本の角で受け取り、そのまま腕に移る

鉄也
「サンダァァァァァァ・ブレェェェェェェェク！」

雷を腕に蓄えてそれを一気にベルゼウスに向けて放つ
ベルゼウスは回避しようとしたが、両腕をグレートに絡ませている
為動く事が出来なかった
その為真っ直ぐにサンダーブレークを直撃してしまった

ベルゼウス
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ベルゼウスは断末魔の悲鳴を上げた
いかに強固な鎧と言えども１００万ボルトを誇るサンダーブレーク
を防ぐ手立ては無く、ベルゼウスの体は物の数秒で真っ黒な炭と化
してしまった

鉄也
「憶えておけ！マジンガーは貴様等のコレクションじゃない！平和
を守る守護神だ！」

音を立てて崩れるベルゼウスの残骸に向かって吐き捨てるように鉄也が言った

ガデス
「おのれぇぇぇ！マジンガー！こうなったら貴様だけでも死ねぃ！」
甲児
「上等だ！ケリをつけてやるぜ！」

マジンガーは真っ向からガデスの巨大なハンマーを受け止める
大地が揺れ、マジンガーの足元の地面が音を立てて割れる

ガデス
「ガはハハハ！このまま貴様を鉄屑に変えてやるわ！」
甲児
「舐めんじゃねぇ！俺とマジンガーがそんなトンカチで倒される訳ねえだろうがあああああああああ！」

甲児の叫びとマジンガーの咆哮が共に発せられる
それと同時にマジンガーは抑えていた巨大な鉄槌をその2本の腕で握りつぶしてしまった

ガデス
「ば、馬鹿な・・・ワシの・・・ワシの鉄槌を素手で砕くなど・・・」
甲児
「てめぇには俺の拳をくれてやるぜぇぇぇぇ！」

唸りを上げてマジンガーの豪腕がガデスのどてっぱらをぶち抜く
それはそのまま突き抜けてガデスの背中まで突き破った

ガデス
「グワアアアアアアアアアアアア！ワシの・・・ワシの鋼の体がアアアアアアアアアアアアアア！」
甲児
「てめぇが只の鋼なら俺達マジンガーは『鋼鉄』だ！」
ガデス
「そ・・・そんな・・・馬鹿な・・・我等・・・機鋼・・・騎士が・・・負ける・・・など・・・ありえ・・・」
甲児
「御託は地獄で言え！ブレストファイヤアアアァァァァァァァァァァ！」

マジンガーの胸の放熱板から赤い熱線が放たれる
それはグロッキーになっていたガデスを包み込む

ガデス
「ギャアアアアアアアアアアアアアア！・・・・機構帝国・・・・・バンザアアアアアアアアアアアアアアアイ！」

両手を広げて叫び、そのままガデスは物言わぬ鉄の塊に姿を変えた

甲児
「おう機鋼獣！これがマジンガーの本当の力よ！」

物言わぬ鉄の塊になったガデスに向かって甲児が言い放った

＊＊＊

甲児と鉄也が機鋼騎士を圧倒している時、なのは達もまた機鋼獣と激闘を繰り広げていた

なのは・スバル
「ディバイィィィィン・バスタァァァァァ！」

なのはとスバルの同時攻撃が直線状の機鋼獣を飲み込んでいく

竜馬
「ほう、この世界の魔道士と言うのはかなり出来るみたいだな」

竜馬がなのは達の戦い振りに驚く

隼人
「リョウ、こりゃ俺達も負けてられないぜ」

弁慶
「あいつらに見せてやろうぜ！俺達ゲッターチームの強さをよぉ」

竜馬
「勿論だ！行くぞぉ！」

ゲッタードラゴンは両肩から2本の取ってを掴む
それを手元に持っていくと、それは諸刃の巨大なトマホークとなった

竜馬

「トマホォォク・ブゥゥゥメラン！」

両手に持ったそれを勢い良く投げつける
2本のトマホークはそのまま放物線を描き、斜線上にいた機鋼獣達を次々に切り裂いていく

竜馬
「お次はこれだ！ゲッタァァァビィィィィム！」

ゲッタードラゴンの額から桜色の光線が放たれる
ゲッター線を超高温にして放つゲッタードラゴンの必殺武器の一つ『ゲッタービーム』である
ゲッタービームはそのまま地面を抉り、斜線上に居た機鋼獣を次々と破壊していく

エリオ
「凄い、なのはさんのスターライトブレイカーとどっちが強いんだろう？」
キャロ
「エリオくん・・・それって比べて良い物なの？（汗」
フェイト
「止めた方が良いと思うよ・・・多分取り返しのつかない事になると思うから（汗」

フェイトはなのはのスターライトブレイカーを実体験している為絶対なのはの方が強いと思っているようだ
だが、もし生身でゲッタービームを食らえば骨も残らないであろう
何故ならゲッタービームには魔法に良くある『非殺傷設定』など無いのだから

フェイト
「エリオ！合わせて」
エリオ
「任せて下さい！フェイトさん！」

フェイトとエリオが互いにデバイスに稲妻を集める
そして、それを目の前に居る機鋼獣に向けて放つ

フェイト・エリオ
「サンダァァァ・レイジィィィ！」

２人のサンダーレイジーが斜線上に居た機鋼獣を飲み込んでいく
数では圧倒的に勝っていても腕前等ではなのは達の方が部があった
だが、それでも数は一向に減る兆しが無い

竜馬
「ちっ、これじゃイタチごっこだぜ」

竜馬が舌打ちする

ティアナ
「クロスファイヤァァァ・シュゥゥゥト！」

ティアナがオレンジの魔力弾を４つ放つ
４つの魔力弾は次々と機鋼獣を打ち抜いていく
だが、途中でティアナが息切れしたのか地面に激突して消える
肩膝を付き荒く息を吐く

ティアナ
「くっ・・・せめてもっとクロスファイヤーが撃てたら・・・」

ティアナが歯噛みしていると

十蔵
『手はあるぞぉ！』

ティアナ
「じゅ、十蔵さん！？」

突然ティアナの目の前に十蔵が現れた

ティアナ
「それで、手って一体どんな手があるんですか？」

十蔵
『決まっとるじゃろう！クロス・ユニゾンじゃ！』

ティアナ
「ユニゾン！・・・私が・・・ですか？」

ティアナが自分を指差す
それに十蔵が頷く

十蔵
『お主の魔法と甲児のガッツがあれば不可能は無いワイ！』

ティアナ
「そんな・・・でも、もし失敗したら・・・」

ティアナは知っていた
それはユニゾンデバイスとユニゾンした際にもし失敗した時である
それは以前ユニゾンに失敗して大惨事に陥った真新しい記憶が彼女の脳裏を過ぎっていた
エリオの時は殆ど偶発的であったが、今回も成功すると言う保証は

何処にもない
それがティアナを渋らせた

十蔵
『何を言っとる！やる前から失敗する事を考える奴などおらんぞ！』
ティアナ
「十蔵さん・・・分かりました！やります！」
十蔵
『それでこそティアナちゃんじゃ！』

十蔵は親指を立てて言う

＊＊＊

甲児
「何！本気か？お爺ちゃん！」
十蔵
『本気も本気じゃ！良いからさっさとワシんとこ来い！』
甲児
「分かった！すぐ行く」

甲児はそう返事してスイッチを切る

鉄也

「何か名案が浮んだのか？」
甲児
「ああ、雑魚共を一掃する良い手だぜ」
鉄也
「そいつは良い」

鉄也は喜んだ
事実幾ら何でもこれだけの機鋼獣を相手にするのは少し骨が折れるならばその一掃出来ると言う手に乗るのが利口と言った物である

デウス
「何を企んでいるか知らんが！そうはさせんぞ」

だが、その2人を阻むかのようにデウスが立ちはだかる

甲児
「しつこいなぁお前さんも」
デウス
「機鋼騎士5人衆も残るは私一人、こうなれば貴様等どちらかと刺し違えてでも・・・」
鉄也
「甲児くん、此処は俺に任せろ」
甲児
「あいよ！そんじゃ頼むぜ鉄也さん」
鉄也
「ああ」

鉄也はフッと笑いながら答える
そして、デウスの前に立つと両手にマジンガーブレードを構える

デウス
「わが名は機鋼騎士5人衆の頭目、デウス！貴校の名は？」
鉄也
「剣　鉄也だ！」
デウス
「剣　鉄也か・・・良い名だ！では行くぞ！」
鉄也
「来い！」

デウスの巨大な剣とグレートの2本のマジンガーブレードが互いに
空中で交差しあう
それは凄まじい金属音を立てて激しい火花を散らす

デウス
「むぅぅん」

デウスが力任せに剣をグレート目掛けて振り下ろす

鉄也
「何の！」

それを2本のブレードを頭上で交差させて防ぐ
そのまま思い切りデウスを押しのける

デウス
「くっ！」

余りのパワーに弱冠押され気味であったが、すぐに地面に降り立ち
体制を立て直す
其処にグレートが突っ込んでくる

鉄也
「うおおぉぉぉぉ！」

雄たけびを上げてグレートが2本のブレードを交互に振るう
それをデウスは片方は剣で払いのけ、もう片方は身を返してかわす
互いに一歩も引かぬ接線であった

鉄也
「やるな！」
デウス
「貴様こそ！」

デウスと鉄也は互いにニヤリとする
お互いを強者と認めた際に起こる現象である
その間も両者は激しく剣をぶつけあった
激しい金属音と火花が散る音が2人を包み込んでいた
今、鉄也にはデウスしか見えない
それはデウスもまた同じであった

デウス
「遊びは終りだ！」

デウスはグレートに向かって一振り振るう
勿論それはグレートに簡単にかわされる
だが、それが狙いであった
バックステップでかわして地面に降り立った所を狙って、デウスは
胸の装甲版を開いたのだ
其処には一面ガラスで出来た胸が現れた

鉄也
「何！」
デウス
「此処から放たれるビーム砲なら貴様を倒せる筈！死ねぇ！グレートマジンガー！」
鉄也
「舐めるな！ブレストバァァァァン！」

グレートマジンガーの胸に取り付けられていたV字型の放熱板から熱線が放たれる
それと同時にデウスの胸から白色の光線が放たれた
それらは空中でぶつかりあい、プラズマ光を発する
凄まじい閃光であった

鉄也
「むぅぅぅ・・・」
デウス
「ぐぅぅぅ・・・」

2人が唸る
互いの光線はほぼ互角であった
2体共一歩もその場から動かずに光線を放ち続ける
だが、そんな鉄也のグレートを背後から衝撃が襲った

鉄也
「むぅ！」

鉄也は振り返った
見ると、其処には炭になった筈のベルゼウスが居た
嫌、正確には半分炭化しているのだ

ベルゼウスは残った片腕をグレートに絡み付けて、最後の力を振り絞って電撃を流す

鉄也
「ぐうぅぅぅあぁぁぁぁぁ！」

鉄也が苦痛の声を上げる
ベルゼウスの最後の力を振り絞った一撃なのだ

ベルゼウス
「さぁ、デウス様！今の内にトドメを！」
デウス
「おぉ！」

デウスは今が好機と剣を水平に構えて突進する

鉄也
「ぐぅっ！」

鉄也が歯噛みした
その時、

？？？
「ラグナロク・ブレイカァァァ！」

突如、白い閃光がデウスに命中する

デウス
「グギャアアアアアアアアアアアア！」

デウスが悲痛の叫びを上げる
鉄也にはそれを撃ったのが誰なのか分かった
???
「光子力ビィィィム」
そして、鉄也を拘束していたベルゼウスに4本の閃光が襲い掛かった
ベルゼウス
「ギャアアアアアアアアアアアアア！」
閃光を浴びたベルゼウスは今度こそ二度と蘇らぬように粉々となってしまった
鉄也
「ふぅ、助かったぜ」
鉄也が後ろを振り返った
其処には、
はやて
「すんません鉄也さん！おそうなって」
ジュン
「大丈夫？鉄也」
さやか
「と言っても、そう簡単にやられる鉄也さんじゃ無いですよね」
鉄也
「フッ、当たり前だ」
鉄也の目の前にはバリアジャケットを纏ったはやてとビューナスA、

そして黒い機体に赤い胸をしたマジンガーに良く似た女性型ロボットが居た

はやて
「鉄也さん！後ろ」
鉄也
「むっ！」

鉄也は振り返る
すると、其処にはヨロヨロと立ち上がりながらも胸の装甲版を無理矢理開くデウスの姿があった

デウス
「おのれ・・・おのれえええええええええええええええ！貴様等まとめて死ねえええええええええええええ！」

デウスが完全に立ち上がり胸の装甲版にエネルギーが集まっていく

鉄也
「往生際が悪いぜ！」

そう叫んでグレートは両手に持っていたマジンガーブレードを同時に投げつける
2本のブレードはデウスの左右の胸に深々と突き刺さる

デウス
「グエエエエエエエエエエエエエエエ！」

突き刺さったブレードはデウスの背中を突き抜けてそのまま止まる
その姿はとても痛々しかった

鉄也
「貴様は所詮作り物の騎士だ！あいつらの方がよっぽど騎士らしかったぜ」

吐き捨てるように鉄也は言う
そして、グレートは天空に向かって両手を突き上げる
天空より2筋の稲妻が降り注ぎ！それがグレートの両腕に集まる
それは凄まじい閃光となってグレートの腕を包む

鉄也
「落ちろ！二度と戻ってこない地獄の奥底へ！ダブルサンダァァァァブレェェェェェク！」

両腕に集めたエネルギーを同時に放つ
２本の閃光はデウスの胸に突き刺さったマジンガーブレードに当たる
それを通してデウス全身に２００万ボルトのエネルギーが突き抜ける

デウス
「グウウウウウウウウウウウオオオ

そう叫んだ後、デウスは激しい爆発を起した

鉄也
「ふぅ・・・どうやらこれで全部のようだな」

デウスの撃墜を確認してグレートは腕を下ろす

鉄也
「後は任せたぜ・・・甲児くん、マジンガーZ」

＊＊＊

十蔵
『来たか！甲児』

甲児
「おう、来たぜ」

十蔵達の前にマジンガーがやってくる

十蔵
『うっしゃぁ！甲児、早速ユニゾンじゃ！』

甲児
「はぁ、誰と？」

ティアナ
「私です！」
甲児
「ティアナ！お前と！？・・・出来るのか？」

甲児は不安になった
それは未だにエリオ以外の人間とクロス・ユニゾンしていないからだ

十蔵
『何言っとる！男じゃろう！覚悟を決めんか！』
甲児
「お爺ちゃん・・・へっ！確かにな、此処で尻込みしてたら兜　甲児の名が泣くってもんだぜ！んじゃ頼むぜティアナ！」
ティアナ
「はい！」

ティアナは返事してマジンガーの手に乗る

甲児・ティアナ
「クロス・ユニゾン！」

2人が叫ぶ
それに呼応して十蔵が輝き、マジンガーとティアナを包み込んでいく

シュラ
「な、なにぃ！この光は！？」

初めてクロス・ユニゾンを見たシュラは驚きの声を上げる
そして、閃光が晴れた時には、其処にはマジンガーの姿しかなかった
だが、甲児の髪は黒髪からオレンジ色の髪になる

十蔵
（成功じゃぁ！）
ティアナ
（やったぁ！）
甲児
「おっしゃぁ！」

甲児は腕を振り上げて喜ぶ

シュラ
「ええい！ユニゾン出来たからなんだと言うのだ！機鋼獣共よ！さっさと奴を片付けろ！」

シュラの命令に呼応して残った機鋼獣（７０体）が一斉に襲い掛かるだが、マジンガーは決して動じない

甲児
「ティアナ！俺達の合体技を見せてやろうぜ！」
ティアナ
（はい！）

マジンガーは両腕を目の前に少し空間を空けておくすると、その間にオレンジ色の巨大な球体が現れる

甲児・ティアナ
『クロス・ファイヤアアァァァァァァ』

２人が叫んでマジンガーは思い切り球体を投げつけるだが、それは機鋼獣の方向では無く遥か上空であった

上空に投げつけられたクロスファイヤーはそのまま空に消えていって見えなくなる

なのは
「え？」
スバル
「あれ？」
フェイト
「な、なんで？」
エリオ
「空に？」
キャロ
「？？？？？」

それを見ていたなのは達は思わず目を見開く
そして、それを見ていたシュラは

シュラ
「ハハハハハハ！馬鹿め！気でも狂ったか！さぁ今の内だ！さっさとマジンガーを片付けろ」

機鋼獣が一斉に襲い掛かる
だが、その時、

機鋼獣
『グギャアアアアアアアアアア！』

突如１体の機鋼獣が悲痛の叫びを上げる
それは上空から何かとてつも無く速い物が落ちて機鋼獣に直撃した跡であった

シュラ
「な、何だ！」
甲児
「上を見ろ！」
シュラ
「上だと・・・・・な！」

シュラは上空を見てわが目を疑った
それは、天空から雨霰の如く無数の何かが降り注いで来たのだ
それは・・・それこそは・・・

なのは
『ロケット・・・パンチ！』

そう、それこそは無数の黒き腕、マジンガーの両腕と同じロケットパンチであった
だが、何故！何故これ程のロケットパンチは降り注ぐのか

スバル
「凄い、まるでロケットパンチの雨だよ！」
フェイト
「あれが・・・ティアナと融合したマジンガーの力・・・」
エリオ
「凄い、まるでロケットパンチ乱れうちですね」
キャロ

「エリオ君、興奮しすぎだよ！」

その姿を見てスバル達は驚きと興奮を隠せなかった
その間にも上空から降り注ぐロケットパンチは次々と機鋼獣を倒していく

十蔵
（どうじゃ！ちびったか！）
ティアナ
（名づけて、クロスファイヤーロケットパンチ・・・そして）
甲児
「ロケットパンチ・・・百連発だあああああああああああああ！」

3人が叫ぶ
無数のロケットパンチがまるでマジンガーの意のままに動き敵を貫いていく

十蔵
（砕け！）
ティアナ
（ぶち抜け！）
甲児
「打ち砕けえええええええええええ！」

無数のロケットパンチは瞬く間に機鋼獣達を飲み込んでいく
それに飲み込まれた機鋼獣に逃れる術など無くロケットパンチの雨霰を受けて残骸のみを残した
機鋼獣達の数はその時は７０体も居たのに後残り数体を残すのみとなった

シュラ
「な、何だとおおおおおおおおおおお！」

シュラは驚きの声をあげる

甲児
「来い！皆」

マジンガーが手を翳す
するとその手に向かって全てのロケットパンチが集まっていく
やがて、全てが集まると、マジンガーの右腕は数十倍の大きさに膨れ上がっていた

ティアナ
（甲児さん！）
十蔵
（トドメにどでかいのをぶち込んでやれぃ！）
甲児
「おうよ！ギガントォォォォ・ロケットォォォォパァァァンチ！」

マジンガーの巨大な右腕が轟音を上げて残りの機鋼獣目掛けて飛んでいく
それは斜線上に居た機鋼獣を全て飲み込み塵も残さない程に分解していった
そして、放物線を描き元の大きさに戻ったロケットパンチがマジンガーの腕に戻っていく

シュラ
「おおおおおおおおおおおお！恐ろしい・・・マジンガ

ーが恐ろしい・・・一体何体機鋼獣を投入すれば勝てるのだ・・・
恐ろしい・・・恐ろしいいいいいいいいいいいいい！」

シュラは叫びながら霧のように消えていった

甲児
「やったぜえええええええええええええええ！」

マジンガーと甲児は天空に向かって拳を突き上げて勝利を宣言した
それと共にその場に居た皆も諸手を上げて勝利を喜ぶ

＊＊＊

甲児
「さやかさん！本当にさやかさんなんだね！」
さやか
「心配かけて御免ね、甲児くん」

甲児の目の前にはヘアバンドを付けて居ないが、元気な姿のさやかが居た

甲児はそんなさやかを思い切り抱きしめる

甲児
「よかった・・・本当に良かった」
さやか
「ちょ、甲児くん・・・／／／」

さやかは赤面した
そりゃそうだ
何せ周りにはなのは達に加え鉄也達もいるのだ
なのは達は頬を赤らめ、鉄也達はフッと笑っている

なのは
「でも、私達もはやてちゃんが来た時には驚いたんだよ」

なのはが話した
それは、甲児とフォワードメンバーが居なくなってすぐの事であった

＊＊＊

はやて
「ちょい待ち！」
なのは
「は、はやてちゃん！」

シグナム
「主よ！ご無事だったんですか！？」
ヴィータ
「はやて・・・ホントにはやてなのか？」

一同は目の前に居るはやてを驚きの視線で見つめる

はやて
「なに言うとるんや！この通り足だってあるで！」

そう言ってはやては自分の足を叩く
其処にはちゃんと2本の足があった

なのは
「でも、それじゃ一体誰が助けてくれたの？」
はやて
「それは、この人なんや」

そう言ってはやてが手を伸ばすと、其処には赤い戦闘服を着た青年が立っていた
そして、その隣にはさやかも居た

フェイト
「さやかさん！」
さやか
「心配かけて御免なさい」

さやかは申し訳なさそうに言う

はやて

「紹介するな、この人はさやかさんの世界の人で名前を『剣　鉄也』って言うんや」
鉄也
「宜しく頼む」
なのは
「こちらこそ」

そう言って2人は握手する

はやて
「早速やけど、今行ったって機鋼獣に返り討ちにあうで」

はやては突如真剣な顔でそう言う

なのは
「でも、甲児くんやスバル達だけじゃ心配だよ！」
はやて
「分かっとる！その為にこうしてうちが来たんや、それにな上を見てや」
シャマル
「上？・・・！！！」

一同は上を見て驚愕した
上空には青い機体色をした巨大な鯨を模した戦艦が浮んでいたのだ
何時の間に此処に来たのだろうか
その戦艦は徐々に降下して、やがて完全に着陸する

はやて
「皆これで一気に本部へ向かうで！その中で皆のデバイスに対機鋼獣用の装備を取り付けてくれる言うてるから」

シグナム
「本当ですか？」
ヴィータ
「これで、あたしらもあの機鋼獣と互角に戦えるんだな！？はやて」
はやて
「勿論や！」

はやては頷く
それを聞いて一同の顔に希望が浮かび上がる
これでもう甲児だけに重荷を背負わせる必要は無くなった
これからは皆で戦える
そう思うと嬉しさがこみ上げてきたのだ

鉄也
「時間が無い、さっさと行くぞ」
なのは
「はい！」

そう返事してなのは達は鯨型戦艦『スカイホエール』に乗り込んだ

＊＊＊

はやて
「てな訳だったんや」
スバル
「成る程！そうだったんですね！」
甲児
「ちょっと待てよ！それじゃ通路にわざわざヘアバンドや髪飾りを置いてったのは何でだ？」
はやて
「いや～、あれはな、黙って行くと心配させそう思ってちょっと気を利かせて置いといたんや、あ！因みにあの床の血は全部アンドロイドの血やでぇ」

はやては笑いながら言う
それを聞いて甲児は

甲児
「紛らわしい事するなあああああああああああああああああああ（怒）」

と、怒鳴ったらしい

ジュン
「フフ、相変わらず甲児くんは元気そうね」
鉄也
「当然だろう、それが甲児くんの良い所でもあるんだからな」

そんな光景を見て鉄也とジュンは微笑んだ
ふと、甲児はさやかの乗ってきたロボットを見た

それは、甲児も見覚えのあるロボットであった
そう、それはとても悲しいロボットであった
兜　十蔵がマジンガーのパートナーとして設計図を残した物をＤｒ．ヘルが設計図を奪い建造したロボット
その名は

甲児
「ミネルバＸ・・・でも、どうしてこれが・・・」
さやか
「私も初めは驚いたわ、このミネルバがスカイホエールの中に有ったのよ」

さやかは言う
それには甲児も納得するしか無かった
そんな甲児達の所にスカイホエールがやってきた

？？？
『鉄也「あああああああ！迎えに来たわよおおおおおおおん』
甲児
「あああああああああ！ボス！ボスじゃねぇか！」

スカイホエールの頭の部分で元気に手を振るのはガデスに吹っ飛ばされたボスとボスボロットであった

ボス
「ガハハハ！このボスボロットが来たからにはもう安心してくれ可愛い子ちゃん達！機鋼獣だろうが機鋼騎士だろうがケチョンケチョンに・・・」
ヌケ
「ボシュ～、何かもう終ってるみたいでしゅよぉ」

ボス
「あ・・・ありぃ？」

ボスはそれを聞いてキョトンとした顔をする
それを見てその場に居た皆が一斉に笑い出す

＊＊＊

甲児
「すっげぇなぁ・・・何てでかさだよ」

甲児達はスカイホエールの中に入っていた
その中は機動六課の格納庫の倍位の大きさはあり、マジンガーでもゲッターでも余裕で収容できた

竜馬
「これだけの戦艦があれば整備も充分に行えるぞ」
甲児
「本当か？そりゃ助かるぜ」

甲児は本心からそう言った
何せ今まではロクに整備も行えなかったのだから

鉄也

「フッ、それにこれからは俺達が一緒に居るんだ」
甲児
「そうだな、それに機動六課の皆も機鋼獣と戦えるようになったんだ。もう奴等なんざ怖くないぜ！」
ボス
「それより何より、このボスボロット様が居れば正に鬼に金棒だぜぃ！」
なのは
「それはどうなんだろう？（汗」

なのはは目の前に居るボスボロットを見て呟いた
全てが言うなればガラクタで出来たロボットなのだ
はっきり言ってマジンガー以上に謎の多いロボットである

スバル
「凄いよねぇ、一体どうやって動いてるんだろうね？これ」
ヴィータ
「さぁなぁ・・・それはさっぱり分かんねぇなぁ」
フェイト
「でも、コクピットの中は結構居心地良かったよ」
エリオ
「何かコクピットって言うより部屋って感じでしまからね」
キャロ
「ひょっとして、ボスさんはボロットの中で寝泊りしてるんですか？」
ボス
「結構住み心地良いんだぜ」
ムチャ
「オ穣ちゃん達なら大歓迎だぜぃ」
ヌケ

「お茶にお煎餅も有るよぉ」
ティアナ
「え・・・遠慮しておきます（汗」

ティアナ達はやんわり断った

鉄也
「フッ、戦闘に関しては余り役には立たんがな」
ボス
「くおぉぉら！鉄也！それは余計な一言だろうが！」

ボスが指を指して叫ぶ
だが、鉄也は鼻で笑うだけであった
其処へ、

？？？
「うわぁ、凄いッス！本当にマジンガーが居るッスよぉ」
？？？
「本当だ！鉄也兄さんの言ったとおりグレートと良く似てるねぇ」

マジンガーを眺めるように数人の少女たちが群がっていた
皆全身タイツのような服を身に纏っている

甲児
「あん？誰だお前等？」
？？？
「あ、ひょっとしてあんたが兜　甲児ッスか？」
甲児
「そうだぜ、君は？」
ウェンディ

「私はウェンディって言うッス！甲児さんの事は鉄ニィから聞いてるッスよぉ」
甲児
「へぇ、俺も結構有名になったなぁ・・・って、鉄ニィ？それってひょっとして」
鉄也
「俺の事だ」

話しを聞いてたのか鉄也が割って入ってきた

ウェンディ
「鉄ニィ！無事だったんスねぇ！」
鉄也
「当たり前だ！あんな奴等に倒される程落ちぶれちゃいねぇよ」
隼人
「実はな、鉄也はこの世界に来てから教え子が出来てな。そいつらが鉄也の事を兄貴みたいに思ってるからその愛称がついたらしいんだ」
ボス
「なぬぅ！鉄也のヤロー！一人だけ良い思いしやがって！ズリィぞ！」

ボスが悔しがって言う

其処へ他の少女たちが寄ってくる

チンク
「私はチンクと言います。貴方の事は兄上から聞いています」
セッテ
「セッテです。宜しく」

オットー
「オットーです・・・宜しく」
ディード
「ディードです。宜しくお願いします」
甲児
「俺兜　甲児。いやぁ、こんなに可愛い子ちゃん達に知り渡っちまって、これじゃ変装しなきゃ外を歩けねぇなぁ（デレ～」

鉄也の教え子達に尊敬の眼差しを送られて甲児はかなり嬉しそうな顔をしていた
その後ろでさやかはこれまたどす黒いオーラを纏って甲児を睨んでいた
それを見てなのは達六課のメンバーは青ざめる
恐らく甲児は今夜地獄を見るだろう
そう思えた
その時、突如甲児の足が地面に沈んだ

甲児
「な、何だ！」
スバル
「こ、甲児さん！」
ティアナ
「すぐ行きます」
甲児
「うおおわあああああああ！どうなってるんだあああああ！」

そう叫ぶ
だが、すぐに甲児は頭まで地面に埋もれてしまう
其処へ鉄也がやってくる

鉄也
「セイン、悪戯は其処までにしておけ」
セイン
「は～い」

地面から返事がした
振り向くと、地面からゆっくりと青い髪の少女が現れた

セイン
「宜しくね甲児さん。私はセインって言います」
甲児
「へ、へぇ・・・そうなのかぁ・・・それより・・・早く出して（汗」

見ると甲児は頭だけ出ている所謂生首状態であった
その後セインの手により甲児は出てきたが、甲児の災難はこれからであった

???
「うおおおおおおおおおおおお！」
甲児
「ん？なんだあああああああああああああ！」

突如声がして振り返ると其処にはスバルに良く似たナックルを持った少女が甲児に殴りかかった
突然の事だったので甲児は回避する事が出来ずまともに受けてそのまま放物線を描いて飛んでいった
そして、地面に落ちて大量の砂煙が舞う

はやて

「うひゃぁ、甲児はん大丈夫かいなぁ？」
フェイト
「って、今のは・・・」
スバル
「うわぁ・・・私とお揃いだぁ」
エリオ
「って、そんな事より甲児さんは大丈夫なんですか？」

そう、エリオの言うとおりである
一同は吹き飛ばされた甲児を見る
すると

甲児
「いてて・・・いきなり何するんだよ」

殴られた頬を抑えながら甲児がやってきた
不思議と無傷である（顔以外）
それを見てウェンディが驚く

ウェンディ
「凄い！鉄ニィの言う通りッス！ノーヴェの鉄拳を食らって生きてるなんて」
ノーヴェ
「へ～、兄貴が一目置くだけの事はあるんだな」

殴った張本人であるノーヴェは全然悪びれた態度を見せず感心する

甲児
「てめぇ！いきなり殴るなよ！すげぇ痛かったんだからな！」
ノーヴェ

「避けないお前が悪い！」
甲児
「んだとぉ！（怒」
ノーヴェ
「やるかぁ！（怒」

甲児とノーヴェは互いに睨みあう
だが、それを間に入って鉄也が止める

鉄也
「止せ、ノーヴェ。すまんな甲児くん、こいつは少し血の気が多いが根は言い奴なんだ。勘弁してやってくれ」
甲児
「ま、良いけどさ・・・けど、これからは不意打ちは勘弁してくれよ」
ノーヴェ
「分かった、それじゃ今から殴ってやる！」
甲児
「もう殴っただろう！これ以上殴るな！顔が変になっちまう」
ノーヴェ
「安心しろ！元から変な顔してるからこれ以上変な顔になんねぇよ」
甲児
「俺はボスじゃねぇんだ！」
ボス
「そりゃどういう意味だ！兜ォォ！」

さり気にボスを引き合いに出されたのが不満になったのかボスが怒る
其処へまた誰かがやってきた

？？？

「あぁ、やっぱりこんな所で油を売ってる！」
？？？
「お前達、ドクターが呼んでいるんだ！それ位にしておけ・・・なぁんてね♪」

一人は紫の長い髪をした綺麗な女性であった
もう一人は栗色の髪を両端で束ねた変わった髪形をしたメガネを掛けた女性である

ウェンディ
「ウーノ姉にクア姉！」
甲児
「あん？まだ居るのか？」

甲児はまたやってきた女性達を見た
相変わらず目のやり場に困る服装をしている
本人達は大して気にしてないらしいが甲児にしてみれば困った物である

ウーノ
「始めまして甲児さん。妹達がご迷惑をお掛けしまして・・・私はウーノと申します」
クアットロ
「私はクアットロって言います。後で甲児さんの事解剖しても良いですか？」
甲児
「な、何かさり気に恐ろしい事言われた気がするんだけど（汗」
ウェンディ
「クア姉はそういう趣味だから気をつけた方が良いッスよぉ」

と、そっと甲児に耳打ちする
それを聞いて甲児が青ざめる
咄嗟に視線を移した甲児の先には、ゲッターチームの一人である弁慶の前に親しげに話す少女が居た

???

「弁慶さん、怪我とか無い？」

弁慶

「安心しなディエチ！あんな奴等俺達が畳んじまったぜ」

ディエチ

「うん・・・でも、弁慶さんが怪我もなく戻ってきて本当に良かった／／／」

弁慶

「大袈裟だなぁ。あんな奴等に怪我されるほど俺は弱くねぇよ！」

弁慶はガハハと大きく口を開けて笑う
そんな弁慶を見てディエチと呼ばれる少女は頬を染める
甲児は側に居たウェンディにそっと聞く

甲児

「なぁ、あの子ってもしかして・・・」

ウェンディ

「うん、どうやらディエチは弁慶さんに惚れてるみたいッスよ」

甲児

「うへぇ、世の中は分かんねぇなぁ。弁慶の何処が良いんだ？」

と、これまた失礼な会話をしていると

???

「姉上、ドクターがお待ちになってます」

？？？
「急いだ方が良いと思うわよ」

これまた2人がやってきた
一人は青紫の色の髪で背丈も頭一個分大きな女性であり、もう一人は金色の長い髪をした女性であった

甲児
「ま、また来た！！」
トーレ
「私はナンバーズＮｏ．３、トーレと言います」
ドゥーエ
「私はドゥーエ。宜しくね甲児くん」
甲児
「よ、宜しく（赤面」

これまた甲児の顔が赤く染まった
ふと、なのははナンバーズと言う単語に引っかかる物を感じた

なのは
「え？ひょっとして貴方たちは・・・」
オットー
「はい、僕達は人間じゃありません」
甲児
「何！」

それにはその場に居た鉄矢とゲッターチーム以外の一同が驚く

さやか
「それって、どういう事？」

セイン
「私等は『戦闘機人』って言うんだ」
エリオ
「戦闘・・・機人？」
甲児
「つまり、アンドロイドみたいな物なのか？」
ノーヴェ
「へぇ、良く分かるじゃねぇか！頭は空っぽじゃねぇんだな」
甲児
「少なくともお前よりは頭良いぜ」
ノーヴェ
「ぶっ潰す！（怒」
ヴィータ
「手を貸すぜ（怒」

怒ったノーヴェとそれに便乗してヴィータも甲児に襲い掛かる
それに甲児は涙目になって逃げ回る
それを見てウーノは溜息を吐く

ウーノ
「と、とにかく・・・ドクターがお待ちですので皆さんついてきて下さい・・・ノーヴェ！いい加減にしなさい！」
はやて
「ヴィータ！その辺にしとき！」
ノーヴェ・ヴィータ
「は～い」

2人が声を揃えて返事する
その下では全身ボロ雑巾のようにされた甲児が横たわっていた

＊＊＊

ウーノ
「ドクター、連れて来ました」
？？？
「有難う」

ウーノに連れられて来た甲児達の前には一人の青年が立っていた
紫色の髪に黄色い瞳をした白衣を羽織った若い男性である
顔立ちは言うなればそれなりの美形といった感じである
その男性は甲児達を見て微笑む

ジェイル
「初めて会うね。私は『ジェイル・スカリエッティ』と言う。君たちと同じ、機鋼獣と戦っている者だ」
甲児
「あんたも機鋼獣と戦ってるのか？」

甲児の問いにジェイルは頷いた

ノーヴェ
「このスカイホエールもドクターが作ったんだぜ！すげぇだろう！」
甲児
「お前が威張ってどうするんだよ（汗」

胸を張って威張るノーヴェに甲児がやんわりと突っ込む
そんな2人を差し置いてはやてが歩み寄る

はやて
「スカリエッティ博士、あん時はうちらを助けてくれてホンマ感謝しとるわ。でも一つ聞かせてな。なしてうちらを助けてくれたんや？」

ジェイル
「今この世界で機鋼獣と対抗出来るのは我々と君たちだけだからだ」

はやて
「それだけで・・・助けてくれたんか？」

ジェイル
「他に理由が居るかい？」

ジェイルの問いにはやてはかぶりを振る
どうやら納得したようだ
それを見てジェイル博士は口を開く

ジェイル
「知っての通り、この世界を侵略しようとしている機鋼獣は魔道士の攻撃を尽く弾き返す鎧を纏っている。その為現存の魔道士では機鋼獣に対抗するのは難しい。しかし、だからと言ってマジンガーだけでもこれから先厳しくなるだろうと私は予測したんだ」

甲児
「成る程、それで俺達で協力しあって機鋼獣を倒そうって話しになったんですね」

甲児の問いに頷く

ジェイル
「この戦艦なら君達のロボットに充分な整備を出来るように設計してある。他にも様々な機能を有してあるので移動要塞としても使用は可能だ」
ボス
「ウヒョォ！まさに至れりつくせりじゃねぇか」
なのは
「でも、それなら私達のような一組織では無く、管理局全体に呼びかけたらどうですか？」

なのはの問いも最もである
もし機鋼獣の鎧の弱点を見つけたのならそれを管理局に知らせたほうが得策だと言うのだ
だが、その問いにジェイル博士はかぶりを振った

ジェイル
「今の時空管理局は何かを企んでいる。少なくとも今は全面的に信用する訳にはいかないんだ」
甲児
「何処の世界でも人間ってのは裏があるんだなぁ」
十蔵
『全くじゃなぁ』

其処へまた突然十蔵が現れた
言っておくが決して書くのを忘れた訳では無いので悪しからず

ウェンディ
「うわ！小さいお爺ちゃんッスねぇ！」
十蔵
『ウッヒョォ！こりゃまた美人が増えたのぉ！ワシもう死んでも良

いかもしれん！』
甲児
「いや、だからお爺ちゃんはもう死んでるだろうっての」
甲児が十蔵に突っ込む
十蔵
『む、そうじゃな・・・それより、甲児！すまんがワシとこのジェイル博士と2人っきりにしてくれんか？』
甲児
「ん？どうしてだい突然」
十蔵
「なぁに、男同士の大人の会話じゃよ！子供にゃまだ早い話しじゃからさっさと出て行け！シッシッ」
手を振って甲児を追い返す十蔵
ジェイル
「そうだな。皆さん、すまないが彼と2人っきりで話しがしたいんだ。少しの間席を外してくれないか？」
はやて
「しゃぁないなぁ、けど十ちゃん！あんましょうもない話をしたら承知せぇへんでぇ！」
十蔵
『分かっとるわい！』
甲児
「そんじゃ皆、行こうか」
そう言って甲児達は部屋を出て行った
部屋の唯一の扉は閉じられ鍵も掛けられた

それを確認して十蔵は振り返った
とても真剣な顔である

十蔵
『さて・・・それじゃ聞かせて貰おうか・・・ジェイル・スカリエッティ・・・嫌、『兜　剣造』よ』

ジェイル（剣造）
「フッ、やはりお父さんには分かりましたか」

正体を見破られてジェイル（剣造）はフッと笑った

十蔵
『当たり前じゃ！ワシはお主の父親なんじゃぞ！お主の正体を見破るなんぞ朝飯前じゃ！それより・・・何故甲児達の前で名前を偽った』

ジェイル
「私には・・・その名を名乗る資格が無いからですよ」

十蔵
「あん？どういう意味じゃ？」

ジェイル
「見ての通り、兜　剣造は既に死んだ人間なのです。今この体は仮の肉体なのです」

十蔵
「そんなのは百も承知じゃ！じゃが、甲児も大人じゃ！事情を話せばきっと分かる筈、なのに何故わざわざ偽名を使ったんじゃ！お主だって甲児と会えるのは嬉しい筈じゃろう」

十蔵の言葉にジェイルは後ろを向き、装置の上に手を置いた
その手は硬く握られている

ジェイル
「出来る事なら・・・今すぐにでも本当の名を名乗って愛する息子をこの手で抱きしめたいですよ・・・ですが、私には父親を名乗る資格などないのです」
十蔵
「そりゃどういう意味じゃ？剣造」
ジェイル
「私には、甲児と別れた後すぐに養子を貰いました」
十蔵
「鉄也じゃな」

十蔵の答えにジェイルは頷く

ジェイル
「私は、その時地球を守ると言う使命感の為に鉄也の心を見ようとはしなかった。心の何処かでは彼を実の息子と思っていながら、彼を息子のように接する事が出来なかった・・・その為、私は彼の心と体に深い傷を作ってしまったんです」

それはミケーネ帝国との最終決戦の時であった
アメリカから帰国して戦列に加わった甲児と剣造は出会い、剣造は大きく成長した甲児を見て親子の再会を喜んだ
だが、それを見た鉄也は自分が孤児と言う事に深い傷を負い、甲児との連携を拒否し絶体絶命の窮地に立たされてしまう
そんな鉄也を救う為、剣造は自らの命を投げ捨てて研究所の飛行部分で敵要塞に体当たりして彼の命を救ったのだった

ジェイル
「あの時、私が鉄也を実の息子と同じように接していれば、あんな悲劇は起こらなかった筈・・・悔やんでも悔やみきれる物じゃあり

ません」
十蔵
「剣造・・・お主・・・」
ジェイル
「お父さん・・・お願いです。私の正体は甲児達には黙っていて下さい。出来る事なら、このまま甲児達が無事に元の世界に帰るまで、私はこの体『ジェイル・スカリエッティ』として生きていくつもりなのです」

ジェイルの強い視線が十蔵に降り注ぐ
十蔵はそれに深い溜息を吐く

十蔵
「分かったわい・・・お主の頼みじゃろう、黙っといてやるわい」
ジェイル
「有難う御座います・・・お父さん」

納得してくれた十蔵にジェイル博士は深く頭を下げた
十蔵はそんな我が子を見て溜息をつくのであった

集結！ロボット軍団！　終

次回予告

晴れて機動六課とナンバーズが協力する事になった
それじゃ絆を深める為にいっちょ皆で騒ぎまくるか！

次回『大騒ぎ！宴会大騒動』

次回もこの小説に
テイィィィィィィク・オォォォォォォォォォォォフ！

集結！ロボット軍団！　後編（後書き）

Ｚ『おい、これってかなり不味いんじゃねぇのか』
作者「いやぁ、妄想爆発って感じでねぇ」
Ｚ『だからってそんなオチは無いだろう！ちゃんと先の事も考えてるのか？』
作者「ジェンジェン！」
Ｚ『光子力ビィィィィィィィィム！』
作者「あんぎゃあああああああああ！」

設定5（前書き）

今回は色々やります

設定5

機鋼騎士5人衆

機鋼騎士の中でも選りすぐりの精鋭を集めた部隊
そのどれもが機鋼獣を遥かに凌ぐ力を持つ

デウス

３０Ｍ
４５ｔ

機鋼騎士5人衆のリーダー的存在
武器は巨大な剣
常に前線で指揮をとるが、彼が戦場に出るのはこれはと認めた敵が出た時だけである
また、胸の装甲版から放たれるビーム砲は水爆と同じ威力を誇る

ガデス

４５Ｍ
６０ｔ

デウスの片腕的存在
身の丈ほどある巨大な鉄槌を振り回す
武器はこれしかないが一振りで管理局の所有する戦艦を叩き落すほどの力を持つ

ベルゼウス

４０Ｍ
２０ｔ

機鋼騎士の一人
オカマ口調をするがその実力は侮れず、両手の１０本の指がそれぞれ鞭のように伸びて撓る
更には其処から２０万Ｖの電撃を放てる

ジェルム

３０Ｍ
２５ｔ

機鋼騎士の一人でザルムの兄
兄弟で連携して戦う事が多い
使用武器は長い槍
１秒間に１０回刺す事が可能

ザルム

３０Ｍ
２５ｔ

機鋼騎士の一人でジェルムの弟
２本のククリ刀を用いて華麗に舞うように戦う
普段は少し若輩的な発言が目立つが、戦闘になると一変して凶悪な言動を発するようになる

クロス・ユニゾン（ティアナ）

ティアナとクロス・ユニゾンした状態
これによりティアナの使用魔法クロスファイヤーが使用できる
また、それを応用した戦法として最大チャージしたクロスファイヤーを上空に放ち無数に破裂させて敵目掛けて飛ばすという技を見せた。それが『ロケットパンチ百連発』である

ロケットパンチ百連発

上空に放ったクロスファイヤーが無数に分裂し、それが全てマジンガーの腕を模した姿になり一斉に敵に襲い掛かる
その様は正にロケットパンチの雨霰である
また、ロケットパンチを手元に集めて巨大にさせて放つことも可能

スカイホエール

４００Ｍ
２０００ｔ

鯨を模した飛行要塞
内部には簡単な施設の他にスーパーロボットを完璧に整備出来る施設も用意されている
武装は２門の光子力ビーム砲に光子力ミサイル

更にはバリアも張れる多機能付きであり、陸、海、空、宇と場所を選ばず運用が可能

設定5（後書き）

とまぁこんな感じです

大騒ぎ！宴会大騒動（前書き）

今回は作者のおふざけ話です

大騒ぎ！宴会大騒動

前回のあらすじ

甲児達は絶体絶命のピンチを鉄也達によって救われた
そして、そこで甲児は元の世界の仲間達に出会う
更に移動要塞「スカイホエール」の中で新しい仲間「ナンバーズ」
とも知り合う
そして、其処で紫色の髪をした科学者「ジェイル・スカリエッティ」
と顔をあわせる
だが、ジェイルの正体は、死んだ筈の甲児の父「兜　剣造」であった
父、兜　十蔵に正体を見破られた剣造は逢えて甲児の前では偽名を
名乗り正体を隠して欲しいと十蔵に頼み、十蔵はその頼みを承諾した
そして、一向は彼等の隠れ家に辿り着く
今回の物語は此処から始まる

＊＊＊

甲児達はスカイホエールから降りて彼等のアジトと思われる通路を
歩いていた
少し薄暗い通路であり天井はかなり高かった
そして、通路を抜けた先には巨大なメインルームがあった
其処にはミッドチルダ全域の映像が映し出されていた

甲児
「すっげぇ・・・まるでＳＦの秘密基地みたいだなぁ」
甲児は思わず呟く
ボス
「へ～、んじゃ俺達はその秘密基地の隊員みたいなんだなぁ」
ヌケ
「カッコイイっす！ボシュ～」
ムチャ
「こりゃ俺達も頑張って働かないとなぁ」
鉄也
「フッ、期待しないでおくぜ」
ボス
「そりゃどういう意味だわさ！鉄也」

ボスが睨みつけるが鉄矢は無視する
一方でウーノとクアットロはメインルームに着くやすぐにモニターに視線を移す
そして、慣れた手つきでパネルを操作すると、目の前のメインスクリーンに映像が映し出されていた
其処はこのアジトの格納庫らしく、其処ではマジンガーやゲッターが見慣れない小型ロボットによって整備されていた

甲児
「何だ？あの丸っこいロボットは？」
ノーヴェ
「ああ、あれは『ガジェット』って言うんだ。一応防衛能力もあるんだけど、専ら機体の整備に使ってるな」

甲児
「へ～、便利だな～、人の手を使わずに整備をしてくれるのか～」

それは有り難い事であった
事実甲児が機動六課に居た頃は其処の整備士の手伝いがあったとはいえ専ら自分が整備を行っていたのだ
戦闘と整備の両立はかなりキツイ
だが、此処では疲れ知らずのガジェットと言うロボットが整備を行ってくれるらしくその上此処にはマジンガーのエネルギーや装甲の材料になるジャパニウムがあるらしくその辺の問題も一気に解決したと言えるのだ

ヴァイス
「しかし、おたくら何時の間にこんな凄い基地を作ったんだぁ？」
クアットロ
「それは企業秘密ですわぁ♪」

可愛い子ぶってクアットロが言う

ヴィータ
「企業って・・・お前等これ企業でやってんのか？」
ウーノ
「いいえ、我々は言ってしまえば民間の組織です」
甲児
「そこんとこは俺達と同じなんだな」
なのは
「民間の人があんな凄いロボットを持ってるって・・・甲児さんの世界ってどんな世界なんだろう（汗」

なのはが呟く

確かにそうだ
只の民間がこんな恐ろしいロボットを持っていたら、そしてもしこんなロボットが敵になったらと思うとゾッとする

甲児
「心配ねぇよなのはちゃん」
なのは
「甲児くん」
甲児
「マジンガーは絶対敵になったりしねぇよ。この俺『兜　甲児』が操る限り、マジンガーは平和の守護神なんだ」

甲児は拳を握り締めてそう言った
視線の先では、甲児のマジンガーが複数のガジェットによって破損箇所を修復されていた

＊＊＊

十蔵
「しっかし剣造・・・お主は良いのぉ」
ジェイル
「は？一体何がですか？お父さん」

十蔵とジェイル（剣造）は話しを終えて通路を歩いていた

無論、２人だけである
十蔵はジェイルの肩に座って頬杖をかいている

十蔵
「お主はそんなイケメンになっとるじゃないか！ワシなんぞこんなおっかない顔じゃぞ！行く度女子に怖がられるんじゃぞ」
ジェイル
「そ・・・それは同情しますね・・・」

ジェイル（だから剣造だよ）は改めて十蔵の顔を見た
実の息子である剣造は大して気にはしなかったが、初めての人が見たら地獄から這い出た鬼の様な形相をしている
夜中にバッタリ会ったら間違いなく失禁物になるだろう
そんな事を考えながら二人は扉を開ける
すると其処では・・・

甲児
「よ～し、もうちょい右だな～」
スバル
「これくらいですか～？」
ティアナ
「もうちょっと左じゃない？」
ノーヴェ
「兄貴！これ何処置くんだ？」
鉄也
「壁際に立てかけておけば良いさ」
ディエチ
「弁慶さん、これ味見てもらえます？」
弁慶
「どれ・・・お！中々いける味だぜぇ！」

ウェンディ
「はいどいたどいたッスよ～」
キャロ
「通りま～す」
竜馬
「なのはちゃん、其処の画鋲取ってくれないか？」
なのは
「はい、どうぞ」
ボス
「うっし、仮装衣装もバッチリ用意出来たぜ」
ヴィータ
「お前・・・本気でそれ着る気か？（汗」
隼人
「ふ、こりゃ面白くなってきたな」
オットー
「は、隼人さん・・・それは懲り過ぎなのでは（汗」

以下略
他の人達
「おい！（怒」

とまぁそんなこんなで此処は言ってしまえば作戦室
と言ってもかなり広い部屋である
そんで今この部屋の中を甲児達が皆で模様替えをしていた
何やら派手な模様替えである

十蔵
「おほぉ！こりゃまた派手じゃのぉ！何か祭りでもやるんか？」

十蔵は楽しそうに眺めていた

それとは対照的にジェイルは頭を抱える

剣造
（な、なにやってるんだ・・・甲児は（汗）

ジェイルは引き攣った顔をして甲児に近づいた

ジェイル
「こ、甲児くん・・・これは一体・・・」

甲児
「ああ、折角ナンバーズの皆と知り合ったんだしパーッと騒ごうと思ってさ」

十蔵
「成る程！そりゃ良い考えじゃな！」

甲児の提案に十蔵は嬉しそうな顔をする

剣造
（だからって・・・作戦室でやる事は無いだろう（汗）

ジェイル（剣造）は部屋の飾り付けを見た
どう見ても宴会の飾りつけに見えた
そして、それこそが後に語られる『悪魔の大宴会』となるとは誰も予想だにしていないのであった

＊＊＊

はやて
「うっしゃぁ！飾りつけも終ったし、ここらで機動六課とナンバーズとマジンガーチーム達による大宴会を始めるでぇ！」

ジュース片手にはやてが号令を掛ける
それに合わせて全員が飲み物を持ってあわせる
そして、すぐさま目の前に置かれた料理に突っ込んでいく影が複数あった

甲児
「てめぇ！ノーヴェ！そりゃ俺のゆでたまごだ！」
ノーヴェ
「うっせぇ！こりゃ私が先に目を付けてたんだ！」

甲児とノーヴェが互いに箸でゆで卵を掴んで引き寄せようとしている
丸いゆでたまごは箸で捕まれ歪（いびつ）な形になっていく
刹那

ツルン

甲児・ノーヴェ
「ああ！」

2人の持っていた箸からゆでたまごが抜け出る
そして上空を飛ぶ

そして、そのまま

フリード
「パクン！」
甲児・ノーヴェ
「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

ゆでたまごはダイレクトにフリードの口に入っていった

キャロ
「美味しい？フリード」
フリード
「キュク～」

フリードは嬉しそうに羽をばたつかせる

甲児
「くっ・・・こうなったら！」
ノーヴェ
「こっちのウィンナーを！」

と言ってウィンナーの載ってる皿を見ると、其処は既に空であった

ウェンディ
「あり？狙ってたッスか？」
スバル
「もう無いよ」

其処には口一杯に詰め込んでいるウェンディとスバルが居た

しかも数秒で飲み込んでしまった
どんな体してんだこいつら

甲児
「何いいいいいいいいいいい！」
ノーヴェ
「畜生！こうなったらこっちの料理を」

と言って二人が振り向いた先には、既に無くなりそうになっているブロッコリーがあった

甲児・ノーヴェ
「貰ったあああああああああああああ！」

2人が一斉に箸を伸ばすだが、

ヒョイ

???
「（モグモグ）」

それはその皿の前に居た紫色の長髪をした少女が食べていた

ノーヴェ
「んがあああああああああああああ！」
甲児
「のおおおおおおおおおおおお！・・・ってか、誰？」

甲児は初めて見る顔の少女に聞いた

？？？
「よぉ、ルー、食ってるか？」
？？？
「（コク）」

その少女の上に赤い髪をした体長３０ｃｍ位の小さな少女が居た

甲児
「ま・・・またユニゾンが（汗」
リイン
「わぁ、リインとお揃いですぅ♪」

リインは赤い髪のユニゾンに近づく

？？？
「へぇ、あたしの他にユニゾンが居たんだなぁ」
リイン
「始めまして。リインって言います」
アギト
「あたしはアギト。んでこっちがルーテシア・・・ルーテシア・アルピーノってんだ。宜しくな」

アギトと呼ばれたユニゾンは皆に紹介する

甲児
「俺、兜　甲児。宜しくな」
ルーテシア
「・・・宜しく」

ルーテシアは静かに言って会釈をした

十蔵
「わしもユニゾンなんじゃぞぉ！」

そんな中、十蔵はアギトとリインに近づいた
アギトは十蔵を見て

アギト
「ぎゃあああああああああああああああああ！化け物おおおお

顔は真っ赤になって鼻水が垂れている

十蔵
「ふぃ～、全く、いきなりの歓迎じゃのぉ・・・まぁこんなんじゃワシャ死なんがな」

ガッハッハと笑いながら十蔵は言う

アギト
「な・・・なぁ・・・アイツもあたしらと同じユニゾンなのか？」

リイン
「は・・・はい・・・そうみたいですぅ（汗」

未だに慣れないのかリインは怯えながら十蔵を見る
十蔵はそれに気づかないのか他のナンバーズの娘達にお酌を要求していく
そしてその度に怖がられている
そりゃそうだ
いかに戦闘機人と言えども十蔵の顔は怖いのだ
十蔵はかなりショックを受けたのかガクンとうな垂れる

剣造
（同情するよ、お父さん）

そんな考えをしながらジェイル（剣造）は麦茶を飲む

さて、他の方ではと言うと

シグナム
「流　竜馬」

竜馬
「ん?何ですかシグナムさん」
シグナム
「隼人から聞いた。お前は元の世界では道場の師範をしているのだな」
竜馬
「ええ、まぁ小さな道場ですがね」

頬を掻きながら竜馬は言う

シグナム
「道場の大きさなど関係ない!私には分かる、お前はかなりの剣の使い手だ」
竜馬
「・・・・流石ベルカの騎士ですね・・・それで、一体俺に何の用ですか?」
シグナム
「単刀直入に言う!私と勝負して貰おう」
竜馬
「・・・・分かりました。俺としてもシグナムさんと一度手合わせしてみたかったですからね」

竜馬とシグナムは互いにその場に立ちシグナムと竜馬は互いに木刀を構える
因みに何故シグナムが木刀かと言うと相手に合わせる為である
だが、今此処は訓練場では無く宴会場なのだ
従って

ト―レ
「お前等!場所を考えろ!!」

クアットロ
「そうですわ！此処でやったら邪魔よ！」

トーレとクアットロを筆頭に次々と止めろコールが出てくる
それを聞いて二人はハッとする

竜馬
「す・・・すみません」
シグナム
「面目ない・・・」

2人はすぐにしゃがみこんだ

はやて
「ほんまにシグナムは強い奴を見ると戦いたくなるんやなぁ」
ヴィータ
「甲児の時は酷い目にあったからな・・・どう見ても竜馬や鉄也はまともそうだしな」

ヴィータは鉄矢と竜馬を見て言う

さやか
「そうでも無いわよ」
ヴィータ
「さやか！そりゃどういう意味だ？」
さやか
「鉄也さんは大の特訓好きで、暇さえあれば四六時中特訓してるし、竜馬さんは結構融通の利かない所があるのよ」
ヴィータ
「へ～、そうなのかぁ」

ヴィータは少し驚きの顔で2人を見るんで、鉄也はと言うと

鉄也
「ほぉ、高町は教導官をしているんだな」
なのは
「はい、鉄也さんは防衛軍の教官をしているんですよね」
鉄也
「まぁな」

同じ教導官同士話に花が咲いていた

鉄也
「因みに、高町はどんな特訓をしているんだ?」
なのは
「基本的にチームワークを意識した特訓をさせていますよ。鉄也さんは?」
鉄也
「俺も基本は同じだ。だが、俺は魔法が使えないから基礎体力をつける特訓が主だな」

そう言ってお互いの特訓メニューを見せ合う

鉄也
「成る程・・・確かにこれは理に適っている・・・あいつらにも魔法の特訓をさせた方が良いな」
なのは
「鉄也さんの特訓も凄く参考になりますよ。流石防衛軍の鬼教官ですね」

そう言って互いに訓練のメニューについて話しあう二人
気のせいか2人共何故かとても楽しそうだ
鉄矢也至っては何処か黒い笑みを浮かべている

ヴィータ
「な・・・何か・・・鉄也が怖いんだけど・・・」
さやか
「だから言ったでしょう・・・鉄也さんも結構凄いって」

涙目になっているヴィータにさやかがそっと肩を乗せる
そんでこっちでは・・・

ディエチ
「弁慶さん、美味しい？」
弁慶
「おぉ！こりゃうめぇや！これディエチが作ったのか？」

弁慶の問いにディエチは無言で頷く
それを見て弁慶はガハハと笑う

弁慶
「そりゃ凄いな、お前将来良い嫁さんになれるぜ」
ディエチ
「え！！／／／

「畜生・・・何で俺様はもてなくて弁慶はもてるんだよ！おんなじブ男キャラじゃねぇか（怒」

手に持っていたジュースを一気に煽ってダンと思い切り机に叩きつける
それを見てたセインが

セイン
「何か弁慶さんが命を救ってくれたってのが理由で惚れたみたいだよ」
ボス
「あぁ？何だそりゃ？」

首を傾げるボスの下に今度はオットーが来る

オットー
「実は初めて弁慶さんと出会った時は僕とディエチは敵と思ってたんです」

【回想】

それは甲児がスバル達と出会た時のほんの少し後

弁慶
「いてて・・・何処だ？此処は・・・」

弁慶は薄暗い通路の中で目覚める
其処には誰も居らず、弁慶一人であった

弁慶

「おおおおおおい！リョウ！ハヤト！何処だあああああああ！」

大声で叫ぶも返事は返って来ない

弁慶
「参ったなぁ・・・俺一人かぁ・・・」

溜息をついて頭を掻く弁慶
すると、目の前から何かがやってきた

弁慶
「ん？何だありゃ」

それは小型の警備ロボットのようであった
それも複数

弁慶
「あり？ひょっとして俺の事狙ってるのか？」

弁慶の予想は的中した
複数の警備ロボットは弁慶目掛けて赤いレーザーを発射してきた

弁慶
「うお！あぶねえ！」

咄嗟にかわす弁慶
だが、攻撃が止む気配は無い
すると、すぐ横に丁度良い大きさの鉄パイプが落ちていた
大きさからしてバットと同じサイズである

弁慶
「よっしゃ！こりゃ丁度良いぜ」

鉄パイプを構えて立ち上がる
当然そんな弁慶に向かって警備ロボット達は一斉に攻撃を開始するだが、

弁慶
「よっしゃあああああああああ！」

掛け声と共に目一杯の力を込めてパイプを振るうすると、迫って来たレーザーを何と全て打ち返したのだ
打ち返されたレーザーは全て警備ロボットに命中して破壊される
後に残ったのは警備ロボットの残骸だけであった
それを見て弁慶が不味そうな顔をする

弁慶
「やっべぇ・・・勢い余って壊しちまった・・・これじゃ此処の人に怒られちまうなぁ」

バツの悪そうな顔で頭を掻く弁慶
すると、其処に2人の人影が現れる
オットーとディエチである
2人はこの時はまだ弁慶を敵と認識してた為か互いに武器を手に持っている

オットー
「そんな！ガジェットが全て破壊されてる！」
ディエチ

「見て、オットー・・・これ、全部一撃で倒されてる」

2人は破壊されたガジェットを見て驚いた
どれもほぼ一撃で破壊されているのだ
そんな事魔道士どころか戦闘機人である自分達でも難しい事である

弁慶
「いやぁ、悪い悪い、君達のかい？そのロボット」
オットー
「！！！」
ディエチ
「誰？！」

突如前方から声がしたので2人は武器を構えた
其処には鉄パイプを肩に担いでいる弁慶の姿があった
弁慶は余り2人を刺激しないようにと笑って手を振っている
だが、2人は構えを解こうとはしない

オットー
「貴方ですか？ガジェットを破壊したのは？」
弁慶
「へぇ、これガジェットって言うのか・・・良く出来てるよなぁ。でも悪かったな、壊しちまって」
ディエチ
「貴方が・・・破壊したんですか？」
弁慶
「ああ、本当ならレーザーを打ち返すだけにしたかったんだけどつい条件反射って奴でそのロボットに当てちまったんだ。御免な」

弁慶は頭を下げる

だが、2人は信じられないと言った顔をしていた
まさかその手に持っている鉄パイプでこれだけのガジェットを破壊したと言うのだろうか
だとしたらとんでもない怪物である
正直自分とディエチの2人で勝てるのだろうか
そうオットーは思った

ディエチ
「う・・・動かないで下さい！」

ディエチは内心恐れながらも武器を弁慶に構えた
オットーは焦った
何故なら、自分にもし武器を向けられた場合、辿り着く答えは一つしかないからだ
もしそれで目の前の弁慶が襲い掛かってきたらそれこそ終りだ
オットーの額に冷や汗が流れる

弁慶
「おいおい、そんなに怖がる事ねぇよ。別に乱暴はしないからさ」

だが、目の前の弁慶は手に持っていた鉄パイプを手放し抵抗をしない素振りを見せた
それに2人は以外と思った
だが、それなら話しが早いと2人は近づく

ディエチ
「とりあえず、貴方を拘束します」
オットー
「抵抗しなければ手荒な扱いはしません」
弁慶

「ああ、俺も喧嘩は好きじゃねぇから乱暴はしねぇよ」

弁慶は笑って言った
何て澄んだ笑顔なのだろう
彼には何の後ろめた思いも何もない
完全に2人を信じ切っている目だ
オットーはそんな弁慶に呆れるような思いをしていた
それはディエチもこの時は同じだったのだろう
そう、あの時までは

ガジェット
「ギギ・・・ギギギ・・・」

3人の後ろで残骸になっていた筈の1体のガジェットが居た
それはまだ息があり、目の前に居る弁慶に狙いを定める
そして、手からレーザーを放とうとした時、

グラッ

それは神の悪戯か、はたまた天の誤算か、ガジェットの腕が突如折れ、それと同時にレーザーが発射された
そして、そのレーザーの矛先は弁慶では無く

ディエチ
「ハッ!!!」
オットー
「ディエチ!」

そう、それは偶然にもディエチに向かって真っ直ぐ放たれたのだ
オットーが庇おうと駆けつけるも僅差で間に合わない

レーザーが真っ直ぐディエチに当たろうとしたその時

突如、彼女の目の前を黒い大きな何かが遮った

弁慶
「ぐぅぅ！」
ディエチ
「え！」
オットー
「貴方は・・・」

そう、その大きな何かは弁慶であった
弁慶は咄嗟にディエチの前に立ちレーザーから彼女を庇ったのだ
弁慶の左肩はレーザーを受けたのか血が流れている
だが、レーザーは突き抜ける事は無くそこで消えた
それと同時にガジェットも事切れる

弁慶
「いてて・・・大丈夫かい？」
ディエチ
「どうして・・・」
弁慶
「へ？」
ディエチ
「どうして私を助けたんですか？」

ディエチは聞いた
何故自分を助けたのか
言ってしまえば弁慶とディエチは敵である

それなのに何故自分を助けたのか
それをディエチは知りたかった
それに対し、弁慶は笑いながら

弁慶
「別に理由なんかねぇよ。只俺がそうしたかっただけさ」

と言ったのだ
その一言にディエチは心を打たれた
この人には敵も味方も関係ない
こんな人は始めてだ

ディエチ
「でも、私は貴方とは違う・・・私は『戦闘機人』なんですよ！」
弁慶
「そんなの関係ねぇよ。俺にとっちゃあんたも立派な人間みたいだしな」
ディエチ
「え・・・」
弁慶
「それに、先輩が言ってたんだ。『可愛い子ちゃんはどんな事があっても守るもんだ』ってさ」
ディエチ
「か・・・可愛い・・・／／／

初めての感覚だった
そして、それが『恋』だと気づくのはそう時間の掛かる事では無かった
横に居たオットーもそれに気づくのに少しだが時間が掛かった

＊＊＊

オットー
「と言う訳なんです」
ボス
「な・・・何てご都合主義」

これでは惚れて当然だなぁとボスは思えた
その横でディエチは弁慶の腕に抱きついて幸せそうな顔をしている
弁慶は何故ディエチがくっついているのか分からないでいた
そう、弁慶は色恋には酷く鈍感な男なのだ

さて、そんなこんなで宴会は盛り上がりを見せた
となると、一番に騒ぎを起こすおは決まってこの男である

甲児
「おっしゃぁ！盛り上がってきた所だし！隠し芸大会でもやろうぜぇ！」

突如立ち上がって甲児が叫ぶ

さやか
「か・・・隠し芸大会？」
ジュン
「いきなりねぇ」
ノーヴェ
「へぇ、面白そうだなぁ」
スバル
「なのはさん、隠し芸って何ですか？」
なのは
「う～ん・・・簡単に言うとその人にしか出来ない特技を見せ合うって事かな？」
ウェンディ
「やろうッス！」
十蔵
「うっしゃぁ！此処はわしの裸踊りを見せる時じゃな！」
ジェイル
「お父さん止めて下さい。夢に出ますから（汗」

と、会場は一気に大盛り上がりを見せた
そして、栄えあるトップバッターは・・・

ボス
「ジャンジャジャ～ン」

と大声を上げてボスが壇上に名乗り出た
本人はカッコ良く出たつもりなのだろうが側から見ると面白かった
そして

ボス
「1番！ボス。本名は作者も原作者も知りません！今からコスプレします」

と、高らかに宣言する
本名を知らない事にリリカル組みは驚きの声を上げて、甲児達マジンガー組みは今更言うか？と言いたげな顔をして見守る
そんな中

ボス
「セェェェットアァァァップ！」

と、叫ぶとほぼ同時に垂れ幕が下がる
準備周到である

そして、待つ事数分

垂れ幕が少しずつ上がり、中から出て来たのは

甲児
「げっ！」
鉄也
「うっ！」
竜馬
「なっ！」
さやか

「えっ！」
ジュン
「はっ！」
十蔵
「んがっ！」
ジェイル（剣造）
「なぁっ！」
スバル
「うわっ！」
ティアナ
「いいっ！」
ヴィータ
「・・・・・（真っ青になってる」
シグナム
「・・・・・（真っ白になってる」
シャマル
「えっと・・・」
ザフィーラ
「う・・・」
ナンバーズ
「プッ！」
フェイト
「うそっ！」
はやて
「何やて！」
なのは
「！！！！！」

一同が驚きと呆れの声を上げた
それもその筈

何せ今のボスの格好は

・・・・『なのは』の『バリアジャケット』を着た姿だったのだから
しかもカツラ付きで
読者の皆様はボスがパッツンパッツンの白いバリアジャケットを着た姿をご想像下さい
きっと青ざめます

ボス
「行くわよん、ボスジングハート」

と言って持っていた杖の先端は、本来赤い玉なのだが、其処には変わりにボロットの頭部が付いていた

ボスジングハート
『Ｊｅｓｕｓ　ａｎｄ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒｉｎｇ』

因みにデバイスの声はボスが腹話術で出してる声である
（独学で読んだ為かかなりなまりが酷い・・・しかも片言）
そして・・・

ボス
「さぁ、皆の頭を少し冷やしてあげるわよん」

とクルンと回ってポーズを決める
だが、

甲児・ノーヴェ
「キモイわあああああああああああああああああああああああああ！」

と叫びながら二人の息のあった蹴りがボスの後頭部にヒットする

ボス
「にょおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

変な声をあげながら錐揉み状に飛んでいくボス

甲児
「何て格好してんだ！ボス」
ノーヴェ
「折角の飯が不味くなっちまったじゃねぇか！」

ノーヴェの言う事も最もだろうと会場に居た物達も頷く

甲児
「大体！それ何処で仕入れて来たんだ！？」
ボス
「いやぁん、女の子の服にイチャモンつけるなんて甲児くんひど～い」
甲児

「だからその喋り方止めろ！寒イボが立つわ！」
額に大量の血管を浮かべて甲児が怒鳴る

フェイト
「あ・・・アハハ・・・ボス君って結構ユーモアあるんだね」
と言いながらフェイトはなのはの方を見た
そして青ざめた

なのは
「・・・・・・・・・・（目の辺りが黒い」

其処には、顔は笑っているが目が笑ってないなのはの姿があった
そして、何時の間にかバリアジャケットを身に纏っていた

フェイト
「な・・・なのは・・・・・（汗」
なのは
「フェイトちゃん・・・やっと私この小説で白い魔王になれそうだよ（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」
フェイト
「・・・・・・・・・・・・・（無言で泣いている」

余りの恐ろしさにフェイトは滝のように涙を流す
そして、その周りに居たメンバー達も同様に恐れる
エリオとキャロに至っては互いに抱き合いながら震えている
フリードは恐怖の余り硬直していた
そんな一同を無視してなのははゆっくりと壇上に上がる
そして、ボスの肩を掴む

ボス
「あり?どったのなのはちゃん」
なのは
「ボス君・・・・・少し・・・・・頭冷やそうか?」

と言ってレイジングハートの切っ先がボスの鼻先に向けられる
よく見ると、彼女の足元には魔方陣が敷かれており、カードリッジが限界までロードされていた証拠としてその場に何発かの薬莢が落ちていた

なのは
「スタァァァァァライトォォォブレイカァァァァァァァァァァァァァァァ!」
ボス
「ンギャアアア

アフロの髪型になりながらも大喜びでボスは宣言する
その様にリリカル組みは己が目を疑った

甲児
「ちくしょおおおおおおおおお！俺も食らいたかったあああああ！なのはちゃん！今すぐに俺にもそのＳＬＢを撃ってくれ！」
なのは
「ええ！それはちょっと・・・」

甲児の予想外の反応に流石のなのはも戸惑いを見せる
そんな甲児の背後に忍び寄る影が

大魔王（さやか）
「あら？そんなにＳＬＢが食らいたいの？」
甲児
「さ・・・さやかさん（汗」
大魔王（さやか）
「それじゃ食らわせてあげる・・・・ただし、ＳＬＢだけどね（しめつけグージョン）♪」
甲児
「さやかさん！それはかなり語呂がわｒ『ガシッ』あう・・・・・・・」

甲児が言い終わる前にさやかの豪腕が甲児の頭を掴んだ
そして軽々と持ち上げる
不気味な音を立てながら甲児の頭が歪に歪んでいく

甲児
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！御免なさ

いさやかさん！謝るから許してえええええええ

したり料理に落ちたりしたのでかなり不評の上全員のデバイス攻撃で星にされたり

トーレ
「と・・・東京タワー／／／／／」

以外にも手先の器用（だから何時だよ）だったトーレがあや取りで東京タワーを作ったり

隼人
「はぁっ！」

隼人が何も無い場所から空中3回転捻り2回転ねじりを決めたり（どんなだよ）

ルーテシア
「はい！」
エリオ
「ブッ！（ベチャッ）」

ルーテシアが二人羽織りでエリオの顔にケーキをぶつけたり

十蔵
「アギトちゅわ～ん、お酌して～」
アギト
「怖いんじゃあああああああああああああ！」
十蔵
「あちゃあああああああああ！」
リイン
「あわわわわ！すぐに消化しなきゃあああああ！」

十蔵がアギトをナンパして燃やされ、それをリインが消そうとしていたり
・・・って言うか、リイン・・・『消化』じゃなくて『消火』だ

スバル
「は～～い、何時もより余計に回っておりま～す」

スバルが傘を回して上に乗ってる箱を回したり

鉄也
「布団が吹っ飛んだ！！」

鉄也が寒いギャグを言って一気に場を氷つかせたり

ティアナ
「あんたそりゃ違うでしょうが！」

ヌケ
「あ～、こりゃ一本取られちまったなぁ」

ムチャ
「いや、もう１０本位取られてるんじゃないの？」

ティアナがヌケとムチャで漫才をやったり（当然ティアナがツッコミです）

ノーヴェ
「どうだあああああああああああああああ！」

甲児
「なんのおおおおおおおおおおおおおお！」

甲児とノーヴェが張り合って重いものを持ち上げていたり（ってか、復活早いなぁあんた）

シグナム
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」

竜馬
「とおおおあああああああああああああ！」

シグナムと竜馬が互いに木刀で試合していたり

セッテ
「楽しいかい？ピッケル君？」
ピッケル
『うん、とっても楽しいよお姉さん』

セッテが腹話術をしていたり

セイン
「生首」

セインが顔に赤い液体を塗って笑えない一発芸を見せたり（トマトジュースです）

ウェンディ
「こらあああああああああ！私のランディングボード返すッスううううううううう！」
ボス
「いやっほおおおおお！ご機嫌だぜえええええええええええい！」

ボスがウェンディのランディングボードを乗り回したり（本人激怒）

クアットロ
「は～い、それじゃ今からこの酸性トイレ洗浄剤とアルカリ性トイレ洗浄剤を混ぜるとぉ？」

ブシュウウウウウウワアアアアアアアアアア

ウーノ
「ぎゃあああああああああ！目が痛いいいい

「ちょっと待て！それは普通私がやる物だろうが！」

丸い円盤に縛られたチンクに向かってナイフを投げようとするキャロ（的は際どい位置にある）

弁慶
「お～い、御代わりくれ～」

ディエチ
「弁慶さん、良く食べますね～」

ヴィータ
「ってか、お前どんな胃袋してんだよ（汗」

目の前にそれこそバベルの塔の如くどんぶりが重ねられている中、未だに食い続ける弁慶
それを目を輝かせながら見るディエチと呆れながら見るヴィータ

オットー
「ショートコント、『自爆』」

オットーがガジェットを操作してショートコントをやったり（自爆して破片はダイナミックチームに突き刺さった）

はやて
「さぁ、ザッフィー！あの火の輪を潜るんや！」

ザフィーラ
「主よ・・・あんた私を犬扱いしてないか？（汗」

目の前で轟々と燃え盛る火の輪を潜れと無茶苦茶な命令をするはやてに困惑するザフィーラ

シャマル
「ああ、忙しい忙しい・・・誰か手を貸して～～～」
シャマルは宴会で負傷した人の救済に駆け回っていたり
ディード
「おのれ～～～、にっくきマジンガーZめ～～～」
ディードは顔半分を黒く塗ってあしゅら男爵の物真似をしたり
ジュン
「ふん！」
ジュンはオリンピックに出せば金メダル間違い無しと言われてる位の重さのバーベルを軽々と持ち上げたり
とまぁ・・・こんな感じで宴会はハチャメチャの滅茶苦茶状態になっていた
そして、翌朝になって全員ヘベレケ状態になっていたと言う
＊＊＊

所変わって、此処は不気味な実験室
其処には一人の老人が巨大なカプセルを見ていた
カプセルの中には一つ目をした不気味な怪物が息を潜めていた

Ｄｒ．ヘル
「フフフ・・・遂に完成したぞ！後は『あれ』さえ手に入れれば実戦に使用出来る状態になる」

Ｄｒ．ヘルはパネルを操作する
すると、其処に画面が映し出されて、青く輝く宝石の様な物体が映し出された

Ｄｒ．ヘル
「この『ジュエルシード』さえ手に入れれば・・・ワシの最高傑作・・・機鋼獣を越える強力な兵器が完成する・・・そうすれば、あのマジンガー等一捻りよウハハハハハハハハハハハハ！」

不気味な部屋の中でＤｒ．ヘルの笑い声が木霊した
それをカプセルの怪物は見ていた

？？？
「ギシャアアアアアアアアアアア！」

そして咆哮する
この怪物は一体何者なのだろうか
そして、Ｄｒ．ヘルが作ろうとしている機鋼獣を越える兵器をは？

それは・・・また後に話すとしよう

大騒ぎ！宴会大騒動　　終

次回予告

ミッドチルダの月が紅く染まった
まさか！だが奴等は滅んだ筈
なのに何故！？

次回『登場！宇宙の王者』

次回もこの小説に
テイィィィィィィィク・オォォォォォォォォォォフ！

大騒ぎ！宴会大騒動（後書き）

次回はちゃんとバトルしますよ

外伝1　天才コック「兜　甲児」！？（前書き）

骨休め企画です

外伝1　天才コック「兜　甲児」！？

この話は、まだ甲児達が機動六課の本部に居た頃の話しである

甲児
「え？夕食をご馳走してくれるの？」

その日、訓練場内に甲児の声が響いていた

エリオ
「はい、折角知り合えたんですし、偶には家で晩御飯を食べたいなって思って」
甲児
「ラッキー！丁度今月金欠だったから助かったぜ！夕食代浮いたぁ！」
エリオ
「あはは・・・甲児さんも大変ですね（汗」

事実甲児は今金銭的に困っていた
マジンガーで戦うのは言ってしまえばボランティアであり、幾ら機鋼獣を倒しても甲児には一銭も入ってこない
仕方ないので機動六課の仕事を手伝ってその際の報酬で食いつなぐしかないのだ
管理局も意外とケチなのだ
しかも、機動六課の食堂は有料の為そうそう利用は出来ない
仕方無いので普段は専ら食材を買って自分で調理するのが殆どである
そんな時のお呼び出しである
今の甲児にとっては正に地獄に仏であった

エリオ
「丁度、かあ・・・フェイトさんも良いって言ってますし」
甲児
「あ、そうか！お前確かフェイトちゃんがお袋代わりなんだよな・・・良いよなぁ美人の母ちゃんなんてよぉ」
と言いながらエリオの肩を肘で突付く

エリオ
「ええ／／／そ、そんなぁ・・・別にそんな気が有る訳じゃ・・・」
甲児
「そんな気ってどんな気だぁ？」
エリオ
「あう・・・」

エリオは黙り込んだ
恐らく返答に困ったのだろう
甲児もそれ以上からかうのは止めた
思春期の少年をからかうのは面白いがやり過ぎると可愛そうだからである

甲児
「そうだ！折角だしさやかさんも呼んで来るかな」
エリオ
「そうですね」
甲児
「んじゃ、ちょっと待っててくれ」

と言って甲児は早速さやかの居るであろう場所へ向かった
その場所とは・・・・

甲児
「さやかさぁぁぁん、今日エリオの家で晩めｓ・・・」
さやか
「キャアアアアアアアア！甲児くんのエッチイイイイイイイ！」
甲児
「ゲボォ！」

さやかの怒声と共に投げつけられた石鹸が見事に甲児の眉間にクリーンヒットした
そう、さやかの居るであろう場所とは『シャワー室』であった

さやか
「話しは後で聞くからとにかく出てって！」
甲児
「は、は～い！」

甲児はこれ以上何か投げつけられては不味いと思い一目散に退散した
そして、数分後
湯気を立ち上らせながらさやかが出てきた

さやか
「ふぅ・・・それで話しって何？甲児くん」
甲児
「ああ、実はさぁ・・・」

甲児は先ほどの事を話した

さやか
「ふ～ん、それは良いわねぇ、でも御免なさい。私も今日なのはち

ゃんに誘われてるの」
甲児
「そっか・・・んじゃ今日は仕方ないな」
さやか
「ええ、誘ってくれて有難うね甲児くん」
甲児
「いやいや・・・さやかさんと一緒なら飯も美味くなると思ってさ」
さやか
「んもう、上手なんだから・・・後、一つ言っておくわね」
甲児
「何？」
さやか（魔王）
「くれぐれも・・・フェイトちゃんに（ピー）な事しちゃ駄目よ」

どす黒いオーラを纏った状態でさやかは睨みながら甲児に言う
それを見て甲児は青ざめながら

甲児
「りょ、了解しましたあああああああ！」

と、敬礼のポーズを取って言うのであった

＊＊＊

夕方
甲児はエリオに連れられてエリオの住んでる自宅に連れてこられた

エリオ
「此処が僕の住んでる家です」

エリオは自分の家を指差した
それなりに大きな家である

甲児
「へ～、お前結構良い家に住んでるんだなぁ」

甲児は正直に言う

エリオ
「さ、とにかく中に入って下さい」
甲児
「おう、邪魔するぜぃ」

と言って甲児は家に入っていった

フェイト
「いらっしゃい、甲児くん」

家に入ると私服姿のフェイトが出迎えてくれた
普段の制服姿も良いがこちらも中々捨てた物では無いな
そう甲児は思えた

さやか
（くれぐれも、フェイトちゃんに（ピー）な事しちゃ駄目よ）

甲児
「ハッ！いかんいかん」
思わず鼻の下を伸ばしそうになるのを首を振って制した
危ない危ない
危うくさやかさんに地獄の鉄拳を食らう所だった
今回の晩御飯は正に命掛けである
？？？
「へぇ、あんたがフェイトの言ってた兜　甲児って奴なんだ」
甲児
「あん？何だぁ」
甲児は声のした方を見た
其処にはエリオよりも小さそうな少女が甲児を見ていた
甲児
「あのなぁ、穣ちゃん。一応俺の方が年上なんだから敬語を使わないと駄目だろう？」
？？？
「穣ちゃんじゃないやい！私は『アルフ』って言うの。ナリはこんなだけど列記とした使い魔なんだよ」
甲児
「使い魔？何じゃそりゃ？」
アルフ
「主の魔力を頂く変わりに、主を命掛けで守る言わばボディーガードみたいなもんさ」
甲児
「成る程、要するに使いっぱしりみたいなもんか」

アルフ
「そういう風な思い方しないでくれる（汗」
流石にそんな思われ方はしたくなかったのかアルフが引き攣った顔で言う

キャロ
「フェイトさん、そろそろ夕飯の支度しましょう」
フェイト
「そうね、甲児さん。すぐに夕飯の支度しますんで台所で待ってて下さい」
甲児
「イヤッホォ！腹減ったぜぇ！フェイトちゃんの手料理楽しみぃ」

意気揚々と甲児は台所へ向かった
しかし、台所に着いた途端、甲児は立ち止まった
何故なら・・・・本来皆が座って食べる筈のテーブルには、何故か未開封のカップ麺やらカップ焼きそばなどが置かれていたからだ

甲児
「えっと・・・・何コレ？」

甲児は手元にあった赤いき○ねを手にとってアルフに聞いた

アルフ
「何って、それが晩御飯だよ」
甲児
「おいおい、冗談も休み休みにしてくれよ。何が悲しくてこんなインスタント食品なんか食わなきゃなんねぇんだよ」
アルフ

「だって仕方ないじゃん！家で料理出来る人『居ない』んだし」

アルフのその一言で甲児は凍りついた
え？何？この家って・・・・誰も料理作れないの？
甲児は静かにフェイトに視線を送った
どうやら聞いてたらしく、フェイトも視線を徐々に逸らす

甲児
「おい、エリオ・・・どういう事だ？こりゃ・・・」
エリオ
「えっと・・・家だと・・・普段はこんな食卓なもんで・・・」

指の先端を押しながらエリオは言う
それを聞いて甲児の脳裏に電流が走った

甲児
（って事はつまり・・・今夜はカップ麺んんんんんんんんんん！）

そんなのは絶対にイヤだ
何が悲しくてカップ麺なんか食うんだ！
そう、甲児は思った
こうなったら、取るべき道は一つしかない

甲児
「仕方ねぇなぁ。今日は俺が飯作ってやるよ」
フェイト
「え！！」

甲児の一言にフェイトは勿論、キャロやアルフも驚いていた

だが、エリオ一人は驚いていなかった
むしろ少し笑っていた

甲児
（成る程ね、ようやくエリオの魂胆が見えたよ）

要するにエリオは甲児と一緒にご飯が食べたかったのでは無く、甲児の作ったご飯が食べたかったのだ
実際に甲児とエリオは同じ部屋で寝泊りしてるので何度か甲児の作ったご飯を食べた事がある
どれも美味い上にかなりレベルが高いのだ
だが、甲児の腕前を知らないアルフは

アルフ
「ちょっと、あんた料理何か作れるの？」

と、聞く

甲児
「当たり前だろう！これでも家じゃ家事全般やってたんだぜ。料理は得意中の得意だぜ」

甲児は自信有りげに答える
それを聞いてフェイトは逆に沈み込む
甲児にとって得意中の得意である料理はフェイトにとっては苦手中の苦手な物でもあったのだから

甲児
「さてと、んじゃちゃっちゃと作るからよ。そのインスタント食品は退けといてくれよ」

そう言って甲児は自前のエプロン（何時持ってきたかは突っ込まないでね）を着て厨房に向かう

フェイト
「エプロン姿の甲児くん・・・初めて見た」

フェイトはエプロンを身に纏った甲児を見て異様な新鮮さを感じた

甲児
「さてと・・・冷蔵庫には何があるかなぁっと」

甲児は冷蔵庫を開けて中を見た
中は以外にも野菜、肉、調味料等など一通り揃っていた

甲児
「この家誰も料理出来ないのに何でこんなに品揃えが豊富なんだ？」
フェイト
「偶になのはが料理を作りに来てくれるんだよ」
甲児
「へぇ～、そうなのなぁ・・・ってうおわぁ！」

突然後ろから声がしたのに甲児はビックリした
後ろには興味を持ったフェイトが見ていた

フェイト
「それで甲児くん。今夜の献立はどうするの？」
甲児
「そうだなぁ、こんなに品揃えが良いなら・・・あれにするか」

甲児の頭の電球に光が灯った
そして、甲児は冷蔵庫から食材を取り出す
そして、包丁を取って食材を刻んでいく

フェイト
「す・・・凄い・・・・・」

フェイトは甲児の調理している動きに目が奪われた
とても素早いのだ
自分では食材を切り終わるのに最低でも１時間は掛かる
だが、甲児は山積みにされた食材をおよそ１０分も経たずに全て刻み終えてしまったのだ
そして、それを調理し易いように大きさ別に別々のボールに分ける

甲児
「さて、次は」

今度は大きめの鍋をコンロの上に置く
そして油を敷いて鍋を温め、適当な温度になった所で食材を流し込む
ジュワーと気持ちの良い音で食材が鍋の中でダンスを踊る
甲児はスパテラ（木べらの事だよ）を使ってそれを鍋にくっつかないように混ぜる
やがて食材が良い色になった所で甲児は鍋に水を入れ味付けをして更に煮込む

甲児
「後は蓋してと・・・さ、次だ」

キビキビとした動きで甲児は別の作業に移った
甲児が取り出したのは米である

米を人数分＋α（＋αは言わずも分かるよね）取り出し良く磨いでから鍋に入れる
そして分量より少し多目に水を入れて少し漬ける
その間に使った食器などを手早く片し、今度はサラダの準備とばかりに生野菜を次々に刻んで盛り付けていく

甲児
「さて、そろそろ時間か」

サラダを盛り終わった時点で甲児は米の入った鍋をコンロに持っていき火をつける
やや強火で鍋を温め、ある程度時間が経った所で火を弱める
其処から更に時間が経った所で今度は完全に火を消してしまった蒸らしである

甲児
「よし、仕上げだな」

今度は最初に仕込んでいた鍋を開ける
鍋の中にはグツグツと食材が煮えていた
今度は其処にカレー粉と様々な香辛料を入れる
そして隠し味にコーヒーを入れて良くかき混ぜてあたり皿（味見用のお皿だよ）に少量入れて味を見る

甲児
「よし、これでＯＫだな」

そう言った所で今度は米も出来た様である
甲児は早速ご飯を人数分用意しておいた大皿に盛り、その上に先ほど作った物をかける

甲児
「うっし、完成だ！」

甲児は手を叩いて宣言した
その間、僅か1時間弱
フェイトだったら未だに食材と格闘している時間である

フェイト
「・・・・・・・・・」

余りの凄さにフェイトは言葉が無かった

＊＊＊

「いただきま～す」

食卓に並べられたのは甲児作『カレーライス、野菜サラダ』であった
カレーには様々な具が入っており、またルーにも多種多様のスパイスがありこれがまた美味であった
サラダも斬り方が良かったのか歯ごたえが良く食が進んだ

アルフ
「うま～～い！甲児って料理出来たんだねぇ！美味いよ！」

キャロ
「本当！凄い美味しいです！もしかしたら機動六課の食堂より美味しいかもしれません！」
フェイト
「美味しい！・・・でも、何故か悔しい・・・」
エリオ
「ガツガツガツガツ（夢中でがっついてる」

４人の反応はかなりの好印象であった（フェイトは微妙であったが）

甲児
「おいおい、そんなに褒めるなよぉ。照れるじゃねぇか／／／」

甲児は頬を少し染めて言った
その日は甲児に作った夕食を食べて皆ご満悦であった
因みに甲児はその日はエリオの私室に寝た

甲児
「へ～、これがお前の部屋か～」

以外とスッキリした部屋であった

エリオ
「アハハ・・・何にもないですけど」
甲児
「イヤ・・・ひょっとしてこのベットの下にエロ本とか隠してたりしてないか？」
エリオ
「何でそうなるんですか！隠してないですよ！」

顔を紅く染めてエリオは叫ぶ
そんなエリオを見て甲児はニヤける

甲児
「ほほぅ、ムキになる所がまた怪しいなぁ・・・どれ、いっちょ見てやるか！」
エリオ
「あわわ！止めて下さいよ」

エリオの制止も振り切って甲児は思いきりベットを跳ね除ける
その中には

甲児
「何じゃこりゃ・・・マジンガーの・・・写真？」

其処には様々な角度からのマジンガーが映っていた
それを見られてエリオは少し恥ずかしがる

エリオ
「えっと・・・マジンガーって凄いカッコよかった物で・・・つい・・・」
甲児
「へぇ～、お前中々良い趣味してるなぁ」

そう言って甲児はベットを戻す
そして簡単な雑談をした後寝に入った（因みに甲児は床で寝た）

＊＊＊

翌日

なのは
「甲児さん」
甲児
「ん？何だなのはちゃん」
なのは
「聞きましたよ、甲児さんって結構料理上手なんですね」
甲児
「ん？まぁな」

別に隠す程の事でも無かったので甲児は頷いた
それを聞いてなのははは

なのは
「それでしたら、週に一回皆さんに料理を作って下さい」
甲児
「なにいいいいいいいいいいいい！」

その日から、甲児は毎週月曜日に六課のフォワードメンバーに料理を作る羽目になってしまった
因みに、ナンバーズと合流してからも変わらずである

外伝1　天才コック「兜　甲児」！？（後書き）

今回の話しはあくまでフェイトが料理出来ないと言う設定の元書きました

登場！宇宙の王者　前編（前書き）

Ｄｒ．ヘルが作り出した機鋼獣を超える兵器とは一体
そして、今回何とあの人が出ます

登場！宇宙の王者　前編

シュラ
「ぐぎゃあああああああああああああああああああああああ！」

薄暗い部屋の中で機鋼獣指揮将軍であるシュラが苦しんでいた
シュラを苦しめているのは左右の壁から放たれる高出力の電撃である
そして、そのシュラの前には人の何倍もありそうな巨大な脳がカプセルの中に浮んでいた
その脳らしき者が怒気に満ちた声でシュラに言う

???
「この愚か者！機鋼獣だけでなく、機鋼騎士を投入したにも関わらず全て破壊され、その上貴様一人おめおめと逃げ帰って来おって！」
シュラ
「お許しを・・・お許し下さい・・・王よおおおおおおおおおおお！」
???
「ならん！貴様の為に貴重な戦力が一体どれ程失われたか！貴様分かっているのかあああああああああああ！」

更にシュラに浴びせられる電撃の威力が増す

シュラ
「ぐぎゃあああああああああああああああああああああああ！」

余りの激痛の為にシュラの目が徐々に白めになっていく

「お待ち下さい。王よ」
？？？
「む！」

そんなシュラを救済するかのように一人の老人「Ｄｒ．ヘル」が現れる

？？？
「ヘルか、何用だ？」
ヘル
「ハッ、お喜び下さい王よ。つい今しがた私の最高傑作が完成の域まで達しました」
？？？
「何と！それは誠か？」

王の言葉にヘルは静かに頷く

？？？
「でかしたぞヘルよ！」
ヘル
「ですが、後一つ足りない物が御座います」
？？？
「何？それは一体なんだ」
ヘル
「はい、それは時空管理局が管理しているロストギアで・・・『ジュエルシード』とやらが必要なのです」
？？？
「成る程、だが我等に残された兵力は残り少ない・・・其処に居る馬鹿のせいでな」

シュラ
「も・・・申し訳ありません」

シュラは地面に擦れる程に頭を下げた

ヘル
「ふん、まぁ良い、手駒ならこちらにもある。奴らなら大丈夫でしょう」
？？？

「ほほぅ、どうやら到着したみたいだな」
ヘル
「はい、以前投入したガミアとは違ってこやつらは中々出来ますぞ」

そう言ってヘルは後ろを振り向いた
其処には・・・・・

＊＊＊

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

女性は逃げていた
何故かは分からない
只、逃げているのだ
本能がそう言っている

『逃げろ』と
後ろから何かが追って来る
背筋の凍る思いがした
生きた心地がしない
息が荒くなる
それでも女性は懸命に走った
此処が何処なのか
何処へ行けば助かるのか
そんな事は分からない
とにかく逃げていた
助かりたい・・・助かりたい
女性の胸中はそんな思いで一杯であった
だが、

「あう！」

疲労と酸欠のせいか女性はバランスを崩しその場に倒れる
すぐには起き上がれない
足を挫いたようだ
涙目になって必死に起き上がろうとする女性に『それ』は迫って来た
異形な怪物であった
鋭い牙を持ち、鋭利に尖った爪で地面を歩き、大きな目玉がギョロリと女性を睨む
そして、主室に振り上げられた爪が・・・・女性の胸を刺し貫いた

「キャアアア

＊＊＊

甲児
「あちゃぁ！またゲームオーバーかぁ」
ノーヴェ
「下手だなぁ甲児は」

此処はスカリエッティ博士（剣造）が密かに作った地下施設の一室
今甲児とノーヴェはミッドチルダで大流行中のゲーム『バイトバザール』をやっていた
勿論ホラーゲームである

甲児
「そう言うノーヴェだって俺より前に死んじまったじゃねぇか」
ノーヴェ
「バッキャロウ！あれはあれだよ・・・手が滑ったんだよ」
甲児
「ほほぉ・・・手が滑っただけで満タンあったＨＰが一気にゼロになるもんなのかねぇ？」

甲児はニヤニヤしてる
それを見て額に血管を浮かべたノーヴェが

ノーヴェ
「ぶっ潰す！」

と言ってガンナックルを思い切り甲児にぶつけようとする

甲児
「待て待て！暴力は大人気ないぞ！」
ノーヴェ
「うっせぇ！今日と言う今日は勘弁ならん！」

あわやノーヴェの鉄拳が甲児の顔面に降りかかろうとしたその時

ウェンディ
「あ、此処に居たッス！」
ボス
「くぉぉら！兜ォォ！何ノーヴェちゃんといちゃついてるんだ！」

ボスから見れば甲児とノーヴェがいちゃついてるように見えたのだろう

ノーヴェ
「いちゃついてねぇ！」

それをノーヴェが必死に否定する

甲児
「大声出すトコが怪しいなぁ（ニヤニヤ」
ノーヴェ
「うるせえええええええええええええ！」
甲児
「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

顔を真っ赤にしたノーヴェが何度も甲児の顔面にガンナックルを叩きつける
甲児の顔は梅干のようにしわくちゃになっていた

ボス
「って、それどころじゃねぇんだよ！兜、早く来い！」
甲児
「ん・・・ふぁにぶぁあっづぁんづぁよヴぉず（何があったんだよボス）」
ボス
「月が・・・月が真っ赤になってるんだよ」
ノーヴェ
「はぁ？月ってのは真っ白なもんだぜぇ、ボス、お前寝ぼけてるんじゃねぇの？」
ボス
「嘘だと思うんならさっさと来い！」

＊＊＊

ノーヴェと甲児はボスに連れられて外に出る
そして、上空の月を見る
それは、確かに真っ赤に染まっていた
甲児

「な・・・何で月が真っ赤に・・・」
ノーヴェ
「本当だなぁ・・・ありゃぁ一体なんだ？」
ウェンディ
「さぁ？博士に聞いてみる必要があるッスねぇ」

甲児とボスの後ろでノーヴェとウェンディが話し合っている
この世界の住人はそれが何を意味するのか分からないようである
だが、それを最も良く理解していた甲児は青ざめた
そう、それこそかつて甲児の居た地球に攻めて来た恐るべき侵略者達の戦いの狼煙でもあったのだから

甲児
「ノーヴェ！ウェンディ！すぐに皆を作戦室に集めてくれ！」
ノーヴェ
「え？何でだよ」
甲児
「訳は後で話す！とにかく急げ！」
ノーヴェ
「わ・・・分かった！」
ウェンディ
「私も急ぐッス」

ノーヴェはジェットエッジ、ウェンディはランディングボードに乗って足早に戻っていった

甲児
「急ぐぞ、ボス」
ボス
「あいよ！」

それに続いて甲児達も戻る

甲児
（間違いない・・・あれは・・・・あれは『ベガ星連合軍』の攻撃の合図だ！）

＊＊＊

シュラ
「な、何だあれは？」

月の変化は機鋼帝国も見ていた

ヘル
「ほぉ・・・あれはベガ星連合軍の攻撃の狼煙だな」

シュラ
「Ｄｒ．ヘル！貴様知っているのか？」

ヘル
「わしも詳しくは知らん・・・・だが、これは利用出来るかもな」

Ｄｒ．ヘルは口元を歪める

すると、その後ろから歩み寄って来る者が居た

？？？
「おい、Ｄｒ．ヘル！」
ヘル
「む、来たか」
？？？
「行動は何時起こすんだ？？」
ヘル
「まぁ待て、あ奴等が暴れている隙に行動しろ。そうすれば楽に手に入る」
？？？
「フン、良いだろう」
そう一言言ってそれは立ち去っていった

＊＊＊

ジェイル
「それで、月が紅くなったのが奴等の進攻の合図だと言うのかい？」
甲児
「間違いありません！あれはベガ星連合軍の攻撃開始の狼煙です」
作戦室に全員を集めて甲児は言う

さやか
「で、でも甲児くん！そのベガ星連合軍は私達が倒した筈よ！それが何で・・・」
鉄也
「さやか、忘れたのか？この世界は俺達の居た世界じゃないんだ」
さやか
「あ！」

鉄也の一言でさやかはハッとした
そうだ、忘れかけていたが、今甲児達が居る世界は甲児達の居た世界ではない
だとしたらベガ星連合軍が生きていても余り不思議では無いと思えた

ボス
「おいおい、だとしたらミケーネ帝国や恐竜帝国とかも出てくるって事もあるのかよ？」
鉄也
「恐らくはあるだろうな」
隼人
「冗談にしちゃキツイ話だぜ」

隼人が肩を挙げて言う
それは甲児達も同じであった
もしかしたら、今まで戦ってきた敵が全て蘇ってるのかもしれない
現にあしゅら男爵も「シュラ」と名前を変えて生き返っているし、
あのＤｒ．ヘルも出てきたのだ
そう思えても不思議では無い

なのは
「そのベガ星連合軍とは一体なんですか？」

なのはが手を挙げて聞く

甲児
「俺達の世界に現れた凶悪な異星人だ」

竜馬
「俺達全員が力を合わせてやっと倒せた奴等だからな」

鉄也
「だが、今回は機鋼獣も居る。もし奴等が手を組んだらかなり厄介な話しになるぞ」

鉄也の一言で当たりがざわめく
機鋼獣とベガ星連合軍が手を組む
正直考えたくない話であった
そんな中、甲児は一人別の事を考えていた

甲児
（こんな時・・・あの人が居てくれたら心強いのになぁ）

甲児の脳裏に一人の青年が浮かび上がった
それは、かつて甲児達と共にベガ星連合軍と戦った勇敢な青年であった

＊＊＊

一方、赤く染まった月の裏側では、新たな悪意が芽を開こうとしていた

???

「ガンダル指令、スカルムーン基地の建設は完了致しました」

???

「ご苦労であったな。ブラッキーよ」

ワインを片手に揺らしながら青い肌をした男「ガンダル指令」が言うそれに特徴的な顔と耳をした男「ブラッキー」が頭を下げる

ガンダル

「しかし・・・見れば見るほど地球と良く似た星だ・・・何と美しい」

ブラッキー

「全くに御座います。このような美しい星をあのような低脳な猿共が支配しているなど勿体無いの一言に尽きます」

ガンダル

「うむ、あの様な美しい星は我等ベガ星連合軍が支配してこそ価値のあるものだ」

そう言った時、ガンダル指令の顔が青い男の顔から突如赤い女の顔に変わった

ガンダル指令のもう一つの姿「レディガンダル」である

レディガンダル

「ブラッキーよ！貴様に円盤部隊と円盤獣ギルギルを預ける。直ちにあの星「ミッドチルダ」の首都「グラナガン」に赴き邪魔な人間共を皆殺しにして来い！」

ブラッキー
「有り難きお言葉！このブラッキー！見事あの星に住み着く邪魔な人間共を抹殺し、あの星を我等が王「ベガ大王様」に授ける事を誓います」
レディガンダル
「期待しておるぞ。ブラッキー」

そう言い終わるとまたレディガンダルの顔がガンダルの顔に戻る

ガンダル
「吉報を待っている」

＊＊＊

時刻は朝になっていた
普段なら町の人々が忙しく歩くであろう歩行者達の道路の一角で人々が屯していた

「ひでぇもんだ」

人ごみの中心に居た男性が呟く
服装からして管理局の職員である
そして、その隣で青い長髪の女性が居た

ギンガ
「とても人間の犯行とは思えませんね」

彼女の名は「ギンガ・ナカジマ」
陸士部隊１０８部隊に所属している魔道士である
苗字から分かる通り、彼女は機動六課所属のスバル・ナカジマの姉である

「全くだ、巨大な何かで心臓を一突き・・・んでその後鋭利な刃物か何かで脳を抉り出して体をバラバラにしてやがる・・・胸糞悪い」

目の前には２０代位の若い女性の死体があった
だが、それはとても直視出来る物では無かった
心臓にはポッカリと穴が開き、頭部は原型を留めておらず脳は無くなっており、手足は勿論内蔵まで掻き出されて死んでいる

ギンガ
「まるで・・・獣か何かが襲ったみたいな跡ですね」
「おいおい、動物園からライオンでも逃げ出したのか？だとしたら仕事も早いんだが・・・どうもこいつは獣のように生易しいもんじゃねぇぞ」
ギンガ
「勘・・・ですか？」
「ああ、俺っちの勘がビンビンに言ってやがる・・・「こいつぁ只の事件じゃねぇっ」てな」

男性は顎に手をやってそう言う
ギンガも同様に指を顎に当てて考える

ギンガ

「今ミッドチルダを騒がしてる機鋼獣の仕業でしょうか？」
「だとしたって何で人間を一人襲うなんて面倒な事するんだ？機鋼獣なら町ごと破壊すれば済む話じゃねぇか」
ギンガ
「確かにそうですね」

ギンガも機鋼獣の話しは耳にしていた
S級魔道士の攻撃を受けても傷一つ負わない鋼鉄の鎧を身に纏った機械の怪物
今までそいつらに何人・・・いや、何十人の魔道士が犠牲になった事か

ギンガ
「ですが、最近はあのマジンガーと名乗るロボット達のお陰で目立った被害は出てないみたいですよ」
「けっ、あんなのに頼ってたらお飯（まんま）の食い上げだぜ」

男は不満そうに呟く
そう、全てがマジンガーを認めている訳では無いのだ
中には「質量兵器なんて使いやがって」
「でかいだけのガラクタ何かに助けられるなんて」
「俺達の世界には必要ない力だ！」

等マジンガーの力を認めない者も少なからず居たのだ

ギンガ
「そうは言ってられないと思いますよ。以前だって、マジンガー達が居たからこそ被害を最小限に留められたんですから」

＊＊＊

ミッドチルダの首都グラナガン
其処に1隻の戦艦が飛行していた
飛行要塞グールである

シュラ
「フハハハ！この電撃作戦ならマジンガー共も対応出来まい！空と陸と海から同時に攻めるのだ！」

シュラが杖を掲げる
すると、グールの中から飛行型機鋼獣軍団が現れる
機鋼獣軍団は口からレーザー砲やミサイルを発射して町を破壊していく

シュラ
「破壊せよ！破壊せよ！この星の支配者が誰なのか愚かな人間共に教えてやるのだ！」

シュラが手を広げて叫ぶ

???
「なら是非教えて欲しいもんだな」
シュラ
「何！」

シュラは声のした方を向いた
其処には黒き魔神「グレートマジンガー」が腕を組んでこちらを見下ろしていた
そして、その肩には一人の魔道士が乗っていた

鉄也
「一気に片付けるぞ！テスタロッサ」

フェイト
「はい、鉄矢さん！」

鉄也の号令を合図に動き出した
機鋼獣軍団もグレートマジンガーとフェイトの存在に気づき襲い掛かる

鉄也
「どうやらまだ懲りてないみたいだな。なら今度は徹底的に叩きのめしてやる！」

グレートの口から猛烈な風が吹き出た

鉄也
「グレェェェトタイフゥゥゥゥゥゥン！」

それはマジンガーと同じく強力な酸を含んだ猛烈な風である
その風の威力は名が指す通り正に「台風」であった

機鋼獣
『ギエエエエエエエエエエエエ！』

グレートの放った猛烈な風を受けた数体の機鋼獣はそれこそ塵になるのに1分も掛からなかった

フェイト
「行くよ！バルディッシュ」
バルディッシュ
『了解！マスター』

グレートの横ではフェイトがバルディッシュのエネルギー剣で機鋼獣を両断していく
以前ならバルディッシュのエネルギー剣は機鋼獣の鎧を裂く事は不可能であったが、甲児の理論と十蔵博士と剣造博士（スカリエッティ博士ね）そしてクアットロの協力の元六課のデバイスは対機鋼獣用にカスタマイズされたのだ
それにより六課の魔道士達はこの世界で唯一機鋼獣を倒せる存在になったのだ

シュラ
「うぬぬ・・・よもや魔道士共が機鋼獣を倒せるようになっていたとは・・・」

シュラが歯噛みする
そんな時、ふとシュラの周囲に巨大な影が覆う

シュラ
「な、何だ！」

頭上を見る
すると其処には巨大なハンマーが今にも振り下ろされようとしていた

ヴィータ
「相手はマジンガーだけじゃねぇんだぜえええええええええ！」

ヴィータのデバイス「グラーフアイゼン」がグールの頭部に直撃する
凄まじい衝撃がシュラを襲う

シュラ
「お、おのれぇ！何をしている！機鋼獣達よ！早くあの目障りな魔道士を片付けろ！」

シュラが杖を掲げて命じる
その命を受けて3体の機鋼獣が一斉にヴィータに襲い掛かる
だが、

「紫電一閃！」

突如3体の機鋼獣が真っ二つにされた
そして、爆発した機鋼獣の前にはレヴァンティンを構えたシグナムが居た

シグナム
「機鋼獣！今まで貴様等に倒されてきた魔道士達の無念！此処で晴らす！」

シグナムのレヴァンティンが真っ直ぐにグールに突きつけられる

シュラ
「グヌヌ～、何故だ・・・何故こうまでやられる・・・まさか3人も魔道士が居たとは・・・」
？？？

「いいえ、５人よ！」
シュラ
「何！」

突如、グールが揺れた
見ると、グールの周囲を細い糸の様な物が動きを封じていたのだ

シャマル
「クラールヴィントにはこういった使い方もあるんです！」

グールの上にはクラールヴィントを使いグールの動きを封じるシャマルの姿があった

シュラ
「き、貴様・・・何時の間に！」
シャマル
「ザフィーラ！」
ザフィーラ
「任せよ！」

その隣に突如紺色の薄い羽織を着た青年が現れる
彼は人間状態のザフィーラである

ザフィーラ
「うおおおおおおおおおおお！」

ザフィーラは叫びながら拳をグールに叩きつける
するとグールを氷の柱が串刺し状態にしてしまった
グールの周囲には氷で出来た柱が痛々しく抜き出ていた

シュラ
「うおおおお！ぐ・・・グールが・・・飛行要塞グールが・・・」
「シュラ様！メインエンジンが大破しました！これ以上の航行は不可能です」

機鋼兵がシュラに告げる
グールの周囲からは黒い煙が立ち篭っていた
後一押しで落とせそうなほどに

シグナム
「鉄也、フェイト！締めは任せたぞ！」
鉄也
「ああ、任せろ」
フェイト
「分かりました」

頷くと、グレートマジンガーとフェイトはグールの真上に飛び立つ

鉄也
「フェイト、グレートの肩に乗れ」
フェイト
「はい！」

フェイトはグレートの肩に乗るとバルディッシュを天に掲げる
グレートも片腕を天に掲げる
そんな2人に向かって天空から激しい稲妻が降り注ぐ
一つはグレートの腕に、もう一つはバルディッシュに落ちる

鉄也
「ダブルライトニング」

フェイト
「バスタアアアァァァァァ！」

そして、同時に稲妻を放つ
それは真っ直ぐにグールに向かって飛び、凄まじい稲妻がグールを飲み込む

シュラ
「ギャアアアアアアアアアアアア！脱出だあああああああ！」

シュラが命じ、グールの頭部が飛び出した

シュラ
「何故だ・・・何故勝てないのだ・・・我等の機鋼獣ではマジンガーには勝てないのか・・・」

シュラは口惜しい思いでグレートを見た
そして思い切り杖を地面に叩きつける
叩きつけられた地面が深く抉れた

鉄也
「どうやらこっちは片付いたみたいだな」
フェイト
「そうみたいですね」

残骸と化した機鋼獣達を見てフェイトと鉄也は呟いた

シグナム
「後は奴等に任せるとするか」

シグナムはそう言ってレヴァンティンを鞘に収めた

＊＊＊

一方で、グラナガンとはまた別の首都では地上型機鋼獣がビルをなぎ倒していた
そして、それを指揮しているのは、機鋼騎士の一人「アポロン」であった

アポロン
「行け！機鋼獣軍団！この機鋼騎士アポロンの名をミッドチルダ中に響き渡らせるのだ」

白銀で出来た巨大な鎌を振り上げてアポロンが命令するだが、

甲児
「そうは問屋が卸さねぇぜ！」
アポロン
「何！」

アポロンは声のした方を見た
其処には既に数機の機鋼獣を引き千切っていた鉄の城、マジンガー

Zが立っていた

甲児
「やいやい、機鋼獣共！この兜　甲児様とマジンガーZが居る限り好き勝手はさせねぇぜ！」

パイルダーの風防ガラスを開けて甲児がアポロン目掛けて指を指して叫ぶ
それを聞いたアポロンは明らかに不機嫌な顔になった

アポロン
「ええい！生意気な奴め！相手はたかが1体だ！さっさと叩き潰せ！」

そう言ってアポロンが命令する
それを受けて機鋼獣軍団がマジンガーZに迫る

甲児
「させるかよ！ドリルミサァァイル！」

それを迎え撃つかのようにマジンガーの両腕が持ち上がり、その中から先端がドリルになった小型ミサイルが無数に飛び出した
無数のミサイルは機鋼獣に突き刺さるも突き抜ける事は無くその場で止まってしまった

アポロン
「馬鹿め！そんな豆鉄砲で機鋼獣を破壊出来る物か！」

甲児
「今だ！チンク」

チンク

（ランブルデトネイター！起動！）

甲児の声に呼応してユニゾンしていたチンクが叫ぶ
それと同時に機鋼獣に刺さっていたドリルミサイルが一斉に爆発した
その威力は凄まじく、一瞬にして機鋼獣を粉々にしてしまった

アポロン
「何だ？一体何が起こったというんだ？」
甲児
「へん！これがチンクの能力だぜ」
チンク
（甲児の言う通り戦闘前にユニゾンしておいて正解だったな）

そう、甲児は戦闘開始寸前にチンクとクロス・ユニゾンしたのだ
これによりチンクのＩＳであるランブルデトネイターを使用出来るようになったのだ
そして、それをマジンガーの武器であるドリルミサイルに吹き込む事によって威力を倍増させたのだ

アポロン
「ぐ・・・だ、だが・・・戦力ではまだこちらが上よ！残存兵力を全て叩き込んでくれるわ！」

そう言ってアポロンが合図を送った
すると地面から大勢の機鋼獣が現れた
その数はこれまた凄い数である

甲児
「か～、こりゃ俺一人じゃちとキツイかなぁ（汗」

甲児はバツの悪い顔をする

アポロン
「ガッハッハッハ！今更命乞いか？だが貴様はこのままなぶり殺しにしてやるわ」

甲児のその言葉を聞いて勝利を確信したアポロンが鎌を振り上げて宣言する
だが、甲児はニヤリとする

甲児
「聞こえなかったのか？「俺一人」って言ったんだぜ」
アポロン
「何！それはまさか・・・」
スバル
「はあああああああああああああああ！」
ノーヴェ
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」

突如側面から青色と黄色のレールが現れた
そのレールは機鋼獣数体の動きを封じるかのように陣取る
そして、そのレールの上を高速で走る魔道士が居た
スバルとノーヴェである

ノーヴェ
「青髪！私に合わせろ！」
スバル
「オッケィ！任してよ！」

互いにレールを駆け上がり、天辺に達した所で空高く飛び上がりリ

ボルバーナックルを回転させる

ノーヴェ
「ダブルリボルバァァァァァ」
スバル
「ナァァァァァックル！」

2人のナックルは同時に拘束していた機鋼獣を脳天から貫き破壊する
地面に降り立ち、残心を決めた時には機鋼獣は物言わぬ残骸と化していた

アポロン
「ば・・・馬鹿な！・・・何故魔道士が我等機鋼獣を倒せるのだ？」

アポロンは困惑していた
彼は今の今まで僻地の任務に赴いていた為マジンガーの活躍と新生機動六課の強さを知らなかったのだ
また、彼自身慢心があり、何処かで魔道士を舐めていたそのツケが回ってきたのだ

ウェンディ
「2人して抜け駆けはずるいッスよぉ！」
ティアナ
「突っ込み過ぎて怪我したら元も子もないでしょう！」

その上空からランディングボードに乗ったウェンディとティアナが機鋼獣を撃ち抜いていた

ティアナ
「仕上げ行くよ！」

ウェンディ
「合点ッス！」

ティアナはランディングボードから飛び降り、ウェンディもまたランディングボードを手に持ち替えて構える

ウェンディ
「エリアルショット！撃ち抜けッスゥゥゥ！」
ティアナ
「クロスファイヤァァァシュゥゥウト！」

2人の放った魔力弾は的確に機鋼獣の急所に当たり機鋼獣は爆散するその様は華麗の一言であった

甲児
「おいおい、何かティアナの奴最近めっちゃ強くなってないか？」
チンク
（ああ、何でも最近は私達と一緒に兄上の特訓もしているんでな。恐らくそれで強くなったんだと思える）
甲児
「ま、マジかよ（汗」

新人フォワードの特訓は当初はなのはとフェイトが中心であったが、ナンバーズと一緒になってからは、彼女達の教官であった鉄矢も混じっての共同訓練となった
だが、その訓練は今まで以上に凄まじさを増した
だが、その変わり彼女達はメキメキ実力をつけてきたのだ
その結果が今回の戦闘である

甲児

「しっかし・・・お宅ら良くあの鉄矢さんの特訓についていけるなぁ・・・ベテラン兵士ですら震えて逃げ出す鬼教官なのに」

チンク

（いや、兄上は常に我等の事を気に掛けてメニューを組んでくれるから安心出来るんだ。むしろ音を上げる兵士が情けないのではないのか？）

甲児

「い、嫌に酷い事言うんだなお前（汗」

甲児はチンクが以外にも毒舌家だと言う事に気づく

アポロン

「お・・・おのれぇ・・・こうなればマジンガー！貴様と一対一の決闘を申し込む！」

甲児

「へっ！望む所だ！返り討ちにしてやるぜ！」

マジンガーが唸りを挙げてアポロンに駆け寄るだが、その時アポロンが動きを見せる

アポロン

「馬鹿め！」

手持ちの武器を地面に突き刺すと、突如マジンガーの周りの地面が持ち上がり、マジンガーの動きを封じる

甲児

「な、何じゃこりゃ！」

アポロン

「ハハハ！馬鹿め！これで貴様は身動き一つ出来ん！死ねぇぇ！」

そう言ってアポロンは胸から眩しいほどの高出力ビーム砲を放った
その威力は遠目から見ても凄まじさが予想でき、直撃すればマジンガーでも只ではすまない
だが、甲児は慌てなかった
何故なら

甲児
「ユニゾンチェェンジ！」

次の瞬間、マジンガーを拘束していた柱ごとビームが焼き払った
跡には何も残っていない
そう、マジンガーでさえも

アポロン
「勝った・・・勝ったぞ！この機鋼騎士アポロン様があのマジンガーZを仕留めたのだあああああああああ！」

鎌を振り上げて雄たけびを挙げるアポロン

甲児
「誰を倒したって？」
アポロン
「な、何！」

アポロンは振り返った
何と、其処には先ほど倒した筈のマジンガーZが居た
しかも、その肩にはユニゾンしていた筈のチンクが居た

甲児

「へへ～、こいつらとユニゾンするとこういった芸当も出来るんだぜ」

セイン
（どう？私が居て良かったでしょう？）

ユニゾンを解いたチンクに代わって今度はセインがユニゾンしていた

甲児
「サンキュー、セイン。今回はお前が居なかったらちょっとヤバかったかもな」

セイン
（どう致しまして）

褒められて嬉しかったのかセイン自身も少し嬉しそうだ

エリオ
「甲児さん！」

甲児
「お、エリオ！」

そんなマジンガーの足元にエリオが駆け寄る

エリオ
「機鋼獣は粗方片付けました」

甲児
「うっしゃぁ！残るはコイツだけだ！一気に決めるぜエリオ！」

エリオ
「はい！」

頷いてエリオがジャンプしてマジンガーの肩に乗る

甲児
「ユニゾンチェェンジ！」

甲児が叫ぶ
するとマジンガーに乗っていたエリオが光に包まれてそのままマジンガーに吸い込まれていく
そして、それとは対照的にセインがマジンガーから出てくる

甲児
「行くぜ！ゼェェットランサァァァァァ！」

甲児は叫び両腕から2本の棒を取り出し一つにする
それは一本の槍に変わる

アポロン
「おのれぇ！」

アポロンが巨大な鎌を振り下ろす

甲児
「おおおおおおりゃあああああああ！」

その鎌を甲児のランサーが受け止める
激しい火花と振動が伝わる
そのまま2体は鍔迫り合いになる
互いの力と力がぶつかり合う
互いの武器が金属音を奏でる
ふと、マジンガーは横にずれる
そして、その力を利用したまま思い切りアポロンの首元にランサー

の腹を叩きつける

アポロン
「ガハァッ！」

アポロンは凄まじい衝撃にうめき声を上げてその場に膝をつく
そんなアポロンに向かってランサーの刃を突き立てる

甲児
「どうした？てめぇら機鋼騎士ってのはこの程度なのかよ！」

アポロン
「な、舐めるなぁぁぁ！」

アポロンは鎌を両手で持ち替えて思い切り横に薙ぐ
それをランサーで受け止めるマジンガー
だが、突如アポロンの目が光った

甲児
「何！」

甲児は咄嗟に距離を置いた
そして、その直後、アポロンの周囲は激しい熱を帯びた
周りの森林が自然発火を起こしていく

アポロン
「ハハハハハ！これが俺の奥の手よ！僅か数分しか持たないが今の俺は太陽と同じ温度を持っているのだ！いかにマジンガーと言えども太陽の熱には耐えられまい！死ねぇ！」

アポロンが高熱を発しながらマジンガーに迫る

甲児
「アポロン、急激に温めたコップを急激に冷ますとどうなるか知ってるか？」
アポロン
「ん？何だ突然、そんなの知るか！」
甲児
「なら教えてやるぜ！」

そう言ってマジンガーはユニゾンを解いた
マジンガーの肩にエリオが現れる
そして、それとほぼ同時にもう片方の肩に誰かが乗る

はやて
「うっしゃぁ！うちの出番やなぁ」
甲児
「おう、しっかり頼むぜはやて」
はやて
「任しときぃ！」

親指を立てて言うはやて
そして光に包まれてマジンガーと同化する

甲児
「うっしゃぁ！そんじゃ見せてやるぜ！マジンガーの新必殺技」

マジンガーの口から冷気の篭った風が流れる
そして、それが徐々に強まっていく

甲児

「食らえ！ルストブリザアアアアアアアアアアアアド！」

マジンガーの口から猛烈な風がアポロンに吹き付けられた
だが、只の風では無い
冷気を込めた「冷風」なのだ
しかも氷点下に行く程の
それを直撃したアポロンの体には徐々にヒビが入っていく

アポロン
「ぐわあああああああああああああああ！何故だ！何故私の体にヒビがあああああああああああ！」
甲児
「それが原理なんだよ！急激に熱した物を急激に冷やすと脆くなる。こんなの小学生でも習うぜ！もう一辺小学校からやり直してきやがれ！
ロケットパァァァンチ」

トドメとばかりに腕を飛ばす
その腕はアポロンの体を貫き放物線を描いて帰還する

アポロン
「ギャアアアアアアアアアアアアアア！」

断末魔の悲鳴を挙げてアポロンは爆発した

甲児
「へん！最近の機鋼獣は骨がねぇぜ！」
スバル
「仕方ないよ甲児さん、今までは甲児さん一人だったけど今は私達も機鋼獣と戦えるようになったし」

ノーヴェ
「何より私達が居る事が大きいしな」
甲児
「はは、ちげぇねぇや」
甲児はハハハと笑う
甲児
「さてと、海には『あいつら』が行ったから安心だろう」
と、甲児は空を見上げながら呟いた

＊＊＊

所代わって、此処は深海
其処には数体の機鋼獣が泳いでいた
そして、その中には1隻の巨大な潜水艦があった
『海底要塞ブード』である

「フフフ、陸と空の奴等が時間を稼いでいる間に我々が格都市を破壊してくれる。例え空と陸を制しても海までは奴等は来るまい」
ブードの指揮官はそう予想していた
だが、その予想は思いも掛けない形で崩される事となる

「か、艦長！何か大きな物体がこちらに接近してきます・・・速い」
機鋼兵の進言に艦長は慌てる
「馬鹿な！こんな速さで泳ぐ物など有り得ん！まさかロストギアか？」
「いえ、魔力反応は検出されません・・・これは、質量兵器です！」
「質量兵器だと！まさか」
艦長は目の前のモニターに目をやった
其処には背中にミサイルを背負った無骨なロボットが居た
そう、それは『ゲッターポセイドン』である
弁慶
「ハハハ、ゲッターロボは水中だって戦えるんだぜ！」
ポセイドンのパイロットである弁慶は大声で言った
「な、何だと！ゲッターロボは水中でも戦えるのか？ええい！機鋼獣軍団！相手はたった一体だ！さっさと片付けろ！」
艦長の命令を受けて機鋼獣軍団が襲い掛かる
弁慶
「俺一人でも片付けられるんだがそうすると上で待ってる奴等が怒るからな。わりぃが外に出てもらうぜ！
ゲッタァァァサイクロン」
ゲッターポセイドンの胸の装甲版が開き、顔の周りから巨大なファ

ンが姿を現した
そして、それが回転して巨大な渦巻きを生み、機鋼獣軍団を空に舞い上げる

「な、何て力だ！だが、あの程度で機鋼獣が破壊出来る筈が無い！」
弁慶
「おいおい、上には俺の仲間が居るんだぜ」
「なにぃ！」

弁慶の不敵な笑みを見て艦長は驚愕の声を挙げた

上空に巻き上げられた機鋼獣を待っていた物は・・・

トーレ
「今だ！撃て！」
キャロ
「お願い！フリード」
フリード
「ギュオオオオオオオオオオ」
オットー
「当てる！」
ディエチ
「当たって！」
セッテ
「切り裂け！」
なのは
「ディバイィィィンバスタァァァ」

スカイホエールの甲板の上で待機していた魔道士達による一斉砲撃

である
その上スカイホエールからも光子力ビーム砲が放たれた
それにより機鋼獣達は一瞬の内に塵と化してしまった

ディエチ
「凄い、弁慶さんはやっぱり凄いよ」
トーレ
「ディエチ。それは弁慶が凄いんじゃなくてゲッターロボの力による物だと思うんだが（汗」

目を輝かせているディエチにトーレがやんわり突っ込みを入れた

なのは
「あはは・・・でも、この作戦を立案した隼人さんは凄いね」
キャロ
「ええ、海から来る機鋼獣なら恐らく空中敵性な無いと判断しての作戦でしたからね」
オットー
「でもこれって・・・僕達だけじゃ出来ない作戦ですよね（汗」
セッテ
「うん・・・ゲッターロボが居て初めて成功する作戦だもんね」

一同は破壊した機鋼獣の残骸が海に落ちるのを見ていた
すると、海面を割って3機のマシンが飛び出した
ゲットマシンである

竜馬
「こちらドラゴン1、作戦は成功だ！後は上がってくるブードを仕留めるだけだ」
隼人

「奴さんの装甲に穴を開けてやったからな、今に息苦しくなって出てくるぜ」

隼人がしてやったりと言った感じの笑みを見せる
所変わって、ブードの中では

「駄目です！排水し切れません」
「ええい！ゲッターロボめ、ブードにこれ程までの大穴を開けていきおって」

ブードの横腹には直径２ｍ位の穴が開いていた
ゲッターポセイドンが拳をつきたててこじ開けた穴である
このまま水中に居たのでは水浸しになってしまう

「仕方ない！一時浮上だ！」

艦長の命を受けてブードが海面から姿を現す
だが、それこそが狙いであった

竜馬
「チェェェンジドラゴォォン・スイィィィッチオォォォン！」

３機のゲットマシンが合体しゲッタードラゴンになる

竜馬
「なのはちゃん、締めで行くぞ」
なのは
「はい！」

ゲッタードラゴンの横になのはが陣取る

カードリッジを最大でロードし足元に魔方陣が描かれる
ゲッターも両手を天に掲げるポーズを取り額のランプにエネルギーが集まっていく

なのは
「全力全開！スタァァァァァライトォォォォォ」
竜馬
「ゲッタァァァァァァァ」
なのは
「ブレイカアアアアアアアアアアアア！」
竜馬
「ビイイイイイイイイイイイイイイイム！」

2人から放たれた桜色の光線は真っ直ぐに浮上してきたブードを直撃した
装甲を抉り内部を破壊し、高熱がブードを覆う

「うおおおおおおおおおお！だ、脱出だあああああああああ！」

艦長が命令する
ブードの頭部が飛び出し、それから数秒してブードの本体が爆発した

ディエチ
「あ！変な顔が逃げる」
弁慶
「野朗！逃がすか！」
隼人
「リョウ！あれで決めようぜ」
竜馬
「よし！行くぞ！隼人、弁慶！」

ゲッタードラゴンは空中に舞い上がる

竜馬
「ゲッタァァァァァァシャァァァァァァァイン！」

竜馬の叫びと同時に3人が全く同じタイミングでペダルを踏み込む
目の前の3つのランプが点灯し、ゲッタードラゴンを眩い光が覆う
そして、そのまま高速でダッシュしたブードに向かって突っ込んでいく

竜馬
「シャイイイイイイイイイイイイインスパアアア

彼等の面前には残骸と化した機鋼獣の姿があった
陸、海、空と3方向から攻める作戦はナンバーズとマジンガー達を加えた新生機動六課の手により完全に失敗に終った

＊＊＊

ギンガ
「あの時彼等が居なかったら今頃この町は火の海でしたよ」
「んなこたぁ分かってるんだよ・・・それより、さっさと聞き込み行くぞ」
ギンガ
「はい、暗黒寺刑事」

ギンガは目の前の男の名前を呼んで彼についていった

登場！宇宙の王者　前編（後書き）

続く

登場！宇宙の王者　中篇（前書き）

今回は色々な話のごっちゃです

？？？

「僕の出番はまだなの？」

もうちょっと待ってね

登場！宇宙の王者　中篇

ギンガと暗黒寺が見た現場は忽ちニュースで報道された
そして、そのニュースをなのは達も見ていた

なのは
「酷い・・・」
はやて
「まるで獣に襲われたみたいな仏やな」
リイン
「こ、怖いです～」
さやか
「でも・・・あの手口・・・何処かで・・・」

さやかは顎に手をやって考えた
何処かで・・・そう、何処かで見た覚えのある手口なのだ
だが思い出せない
そんな自分が腹立たしく思えた

はやて
「とにかく、今は捜査局に任せとくしかないな。まだ管理局から命令が降りてない以上下手に動き回れないし」

はやての言うとおりである
今までは左程問題視はしていなかったのだが、マジンガーZに続き、グレートやゲッター等の質量兵器
などが機動六課に配属された事によりいよいよ上からの厳しい目線が光り出したのだ
その為無闇に事件に首を突っ込めなくなってしまったのだ

下手をすると言われの無い罪状を突きつけられてマジンガーを奪われる危険性があるからだ

はやて
「今んとこはカリムさんとクロノ提督が気配りしてくれるから何とか動けるけんど、ぶっちゃけ機動六課はあんまり管理局内でもいい評判は聞かないんやなぁ」
さやか
「カリム？クロノ？・・・その人って一体誰なの？」
なのは
「カリム・グラシア。聖王教会・教会騎士団に所属している騎士で、はやてのお姉さんみたいな人なんです」
はやて
「そんでクロノ・ハラオウンは管理局の戦艦クラウディアの艦長でうち等の監査役でもって、フェイトの義理のお兄さんなんや」
さやか
「へぇ、フェイトちゃんのお兄さんかぁ・・・」

それを聞いてさやかは少しだけ2人に興味を持った
出来る事なら会って見たいなと思えた
だが、現状はそうは行かないだろう
何故なら今機動六課の本部は機鋼獣の襲撃を受けて破壊されており、現在は管理局の僅かな魔道士達と剣造博士の送ったガジェット達の手により急ピッチで修復作業が行われていた
その為今はこうしてこの地下施設に居るのだが、今此処に管理局の職員を入れるのは非常に不味い
何故ならもしそれが原因でこの場所を機鋼獣達に気づかれるのは厄介だからだ
ふと、さやかは町に出て行った甲児達の身が心配になった

さやか
「甲児くん・・・大丈夫かしら・・・」

＊＊＊

さやかが心配する中、我等が甲児はと言うと

甲児
「うげぇ！此処も休みかよ！」

甲児が愚痴る
その前には本日閉店と書かれた看板を立てかけた飲食店があった
因みに今日は特にやる事も無く暇だったので町に繰り出していたと言う次第だったのだ
しかし、そこで飯を食おうとしたがその度に閉店の看板を掲げられて甲児自身うんざりしていたのだった

甲児
「やれやれ、どうするかなぁ・・・スバル達は何処行ったか分かんねぇし鉄也さんは鉄也さんで探し者がるってんでどっか行っちまったし腹は減ったし・・・」

甲児は自分の腹を抑えて呟いた
さっきから甲児の腹はひっきり無しに鳴り捲っているのだ

???
「ほぅ、腹減りか、何なら俺が奢ってやろうか？」
甲児
「あん？」

甲児は振り返った
其処にはギンガと暗黒寺刑事が居た

暗黒寺
「ただし、職務質問つきだがな」
甲児
「あんたら何者だ？」
ギンガ
「兜　甲児さんですね？」
甲児
「へぇ、俺の事を知ってるんだな」
暗黒寺
「ったりめぇよ。お前さんは今やこのミッドチルダじゃ有名人だからなぁ」

暗黒寺が帽子の唾を下げて言う

ギンガ
「自己紹介が遅れました。私は陸士１０８部隊所属の「ギンガ・ナカジマ」と言います」
甲児
「ナカジマ？ひょっとしてあんた・・・スバルの・・・」
ギンガ
「はい、スバルは私の妹です」

甲児
「へ〜、お姉さんかぁ・・・どうりで何処か似てるような雰囲気がした感じがした訳だぜぇ」

甲児は納得して隣の男に視線を移す

暗黒寺
「俺は暗黒寺。只の国家権力の狗さ」

甲児
「不気味な名前だなぁ・・・それに、そんな事自分の口から言うかぁ？」

暗黒寺
「しょうがねぇだろうが。事実なんだしよぉ」

甲児に突っ込まれて少し不機嫌そうに暗黒寺が言い返す

暗黒寺
「それよりどうするんだ？飯位なら奢ってやるぜ」

甲児
「あんた一人だったらお断りしてた所だが、ギンガちゃんが居るんだったら喜んで奢らせて貰うかな」

暗黒寺
「けっ、現金な野朗だぜ・・・着いて来な」

暗黒寺とギンガに甲児は着いていった

＊＊＊

一方、スバル達はと言うと

スバル
「んまぁい！」

スバルは何処かの出店で出していた新作アイス「ダイナミックスペシャル」を食べてご満悦な顔をしていた
ティアナは普通のバニラ味のアイスを食べており、ノーヴェとウェンディはそれぞれ苺味、チンクはチョコ味を食べていた

ティアナ
「あんた本当にアイスが好きよねぇ（汗」
ノーヴェ
「へぇ、私アイスって初めて食べたけど結構美味いんだなぁ」
ウェンディ
「本当ッス！鉄ニィの特訓の時に食べる野戦料理とどっちが美味いッスかねぇ？」
チンク
「う～む、微妙な話しだなぁ」

ウェンディの質問に真剣に悩み出すチンク

ティアナ
「それってどんな料理なの？」
ウェンディ
「ん～っと、蛇（へび）の開きに牛蛙（ウシガエル）のスープ、トカゲの団子にイモリの燻製（くんせい）

製にそれから・・・」
ティアナ
「御免！聞いた私が馬鹿だったわ（汗」

真っ青になった顔でティアナはウェンディの口を封じる
その横でスバルが涎を垂らしていた

スバル
「なんだか美味しそうだねぇ、それ」
ウェンディ
「美味いッスよ！特に蛇なんて鰻（うなぎ）みたいな味がして牛蛙なんて・・・」
ティアナ
「やめてえええええええええええええええええええええええええ（大泣き」

耳を塞いで滝のように涙を流して叫ぶティアナ
まぁ確かに年頃の女子にとっては少々キツイ話だったんだろうねぇ

ノーヴェ
「あり？そう言えばエリオとキャロはどうしたんだ？」
ウェンディ
「まさか2人っきりでデートッスかぁ？隅に置けないッスねぇ」

ウェンディが楽しそうに呟く

ティアナ
「違うわよ。何か2人で自然鑑賞をするって言ってたけど」
ノーヴェ
「それって・・・」

スバル
「まるっきりデートじゃん」
ティアナ
「アッ！！」

ノーヴェとスバルに突っ込みを入れられて初めてティアナは気づいた

チンク
「だとしたらそっとしておくのが良いだろう」

其処は大人だと言いたげにチンクはさらりと言う・・・・が

ノーヴェ
「うっしゃぁ！早速２人のデート現場に行こうぜぇ！」
ウェンディ
「んでもって滅茶苦茶からかいに行ってやるッスゥゥゥ！」
スバル
「わぁぁぁい、面白そう！私も行くぅ」

この３人は明らかに茶化しに行く気ＭＡＸであった

チンク
「って貴様等あああああああああ！話し聞いてたのかあああああああ！」
ティアナ
「あんた達！自分が彼氏居ないからってひがみ根性はみっともないわよ！」

そんな３人をティアナとチンクが止めに入る

ノーヴェ
「んじゃぁティアナは彼氏いるのかよ？」
ティアナ
「・・・・・・・・・・・・」

暫しの沈黙
そして、

ティアナ
「ド畜生オオオオオオオオオオ！デートの邪魔したるウウウウウウウウウウウ！（大泣き」

これまた滝のように涙を流してティアナが立ち上がった

ノーヴェ
「おお！隊長が立ち上がったぞ！」
ウェンディ
「隊長！我等も続くッス！」
スバル
「私達は常に隊長の側に居ます！」

そんなティアナを面白そうに見た3人が何故かティアナを隊長に祭り上げていた

ティアナ
「良い！たかが１０歳の若人（わこうど）に先を越された私達の心の痛みを死ぬほどあの二人に思い知らせてやるのよ！」
ス・ウ・ノ
「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

4人は一致団結した
それを見て

チンク
「おいいいいいいいいいい！お前等には道徳心と言う物が無いのか
あああああああああああ！」

チンクの叫び声が辺りに響き渡ったと言う

＊＊＊

一方、その頃鉄也はと言うと

鉄也
「おっ！探してた本がやっとあった！」

鉄也は本屋に来ていた
そして鉄也が手に持っているのは古き良き次代に流行っていた漫画
「鉄〇ア〇ム」の文庫本であった

鉄也
「中々原版は見つからないな・・・まぁ仕方ないか」

少々残念がりながらもお目当ての本が見つかり上機嫌になる鉄也
その時、ふと横の視線に何がが動くのを横目で鉄也は見た

鉄也
「何だ？」

鉄也は横を向いた
其処は狭い路地裏であった

鉄也
（鼠（ねずみ）にしては大きかったな・・・まさか凶悪犯が逃げ込んでるのか？）

鉄也の顔は一変して厳しい顔つきになった
もしそうなら今の内に始末しておかねば犠牲者が出てしまう
鉄也は胸ポケットを摩り護身用の銃があるか確認する
鉄也の手には銃らしき感触が掴めた

鉄也
（よし、弾は以前いれたから大丈夫だ）

意を決して鉄也は路地裏に入っていく
辺りは少し薄暗く、町の明るさに比べると大違いであった
しかも掃除が行き届いていないのかかなり匂いがキツイ
そんな中、鉄也は胸のポケットから大型拳銃「デザートイーグル」
を取り出し、安全装置（セイフティー）を外した
何時でも発砲出来るように周囲に気を配りながら人差し指をトリガーに引っ掛ける
そして、奥の曲がり角に差し掛かり即座に躍り出て銃を構えようと

した時、鉄也は固まった

鉄也
「な・・・こ、子供！」

其処には弱冠5歳位の金髪の小さな少女がボロボロの服を身に纏って壁の隅で震えていた
目は片方が赤、もう片方が緑色と色違いである
少女は鉄也を見て更に恐怖の顔に染まる
恐らく鉄也が持ってた銃を見てそれを自分に向けるのだろうと思って怖がっているのだろう

鉄也
（こんな小さな子供が何故こんな所に・・・それにこんなボロボロの服を・・・）

鉄也は少女を見てかつての自分を思い出した
鉄也は物心つく頃から孤児であった
その為孤児院では何時も一人ぼっちであった
親の顔も知らず、毎晩毎晩知らない筈の両親の顔を必死になって書いていた頃
とても寂しかった
その頃の自分と今目の前で震えている少女を鉄也は重ねて見ていたのだ

鉄也
（この子も・・・俺と同じ一人ぼっちなのか・・・）

鉄也は銃の安全装置（セイフティー）を掛けてポケットに仕舞うとゆっくりと少女に近づいた

少女はそんな鉄矢に恐れ逃げ出す
だが、その後ろは高い壁であり少女は壁の隅に背を預けて涙目になって震えていた
そんな少女の前に鉄矢は肩膝を下ろす
そして、優しく語り掛ける

鉄也
「お前も・・・俺と同じで寂しかったんだな」

少女
「あ・・・・う・・・・・」

少女は鉄也の優しい笑みを見て恐怖の心から開放される気持ちになった
すると、今度は今まで溜め込んでいた気持ちが爆発しだしたのか止め処なく涙が溢れ出す
そんな少女の頭を鉄矢がそっと撫でる

鉄也
「辛かっただろう・・・泣きたい時に泣けないのは辛いからな・・・今は思いっきり泣け」

少女
「ううう・・・・・うあああああ」

少女は鉄也に抱きつくと大声で泣いた
そんな少女をそっと抱きしめて鉄也は優しく頭を撫でていた

＊＊＊

暗黒寺とギンガに連れられて甲児はとあるファミリーレストランに来ていた

甲児
「ちぇっ、奢ってくれるって言ってもファミレスかよ」
暗黒寺
「贅沢言うな！国家権力の狗でも生活は苦しいんだよ」

暗黒寺は不貞腐れる甲児に愚痴る
そして、隣でメニューを凝視するギンガを見て

暗黒寺
「おい、ギンガ。１品だけにしろよ」
ギンガ
「ええ！は・・・はい・・・」

それを言われてギンガは物凄くショボリした
甲児は頭に？マークを浮かべる
そんな甲児に暗黒寺が耳打ちする

暗黒寺
（あいつに飯食わせると全財産が吹っ飛ぶんだよ）
甲児
（成る程・・・そういやぁスバルも結構食ってたからなぁ）

甲児は以前料理を作った際にスバルが物凄い勢いで料理を平らげる

のを見て驚いた事があった
それを見て流石姉妹だなぁと甲児は思った

暗黒寺
「さてと、料理が来るまで時間があるな・・・その間ちと俺っちと話しをしようや」
甲児
「野朗と話すのはあんま好きじゃないんだが、まぁ奢りだし良いぜ。で、何を話すんだ?」
暗黒寺
「これだ」

暗黒寺は懐から数枚の写真を取り出して甲児の前に投げつけた
甲児はそれを目の前に取りじっと見る

暗黒寺
「最近起こっている猟奇殺人の仏の写真だ。お前さんこれについて何か心当たりあるか?」
甲児
「と・・・言われても・・・」
暗黒寺
「と・・・言われても?」

甲児は黙り込む
暗黒寺はそんな甲児をじっと見詰める
ギンガもまた同じく甲児をじっと見つめる

甲児
「と・・・・・・・・言われても・・・・・・・・」

暗黒寺
「と・・・・・・・・・言われても?」
ギンガ
「・・・・・・・・・

甲児
「こ・・・これは!!!!」
暗黒寺
「どうやら心当たりがあるみたいだな」
暗黒寺はニヤリとする
甲児
(何てこった・・・この手口はあいつらと同じだ・・・・でも、何で奴等が此処(ミッドチルダ)に・・・ベガ星連合軍と良いこの写真と良い、一体何がどうなってやがんだ)
甲児は写真を見ながら心の中で呟いた
自然と顔は汗で濡れる
暗黒寺
「俺達は今その星を追ってる。何か手がかりでも何でも良いから教えてくんねぇか?」
甲児
「悪い事は言わねぇ。この事件から即刻引くんだ」
ギンガ
「え?」
暗黒寺
「あんだと?」
ギンガは驚きの顔になり暗黒寺は不満そうな顔をする
甲児
「この犯人はあんたら人間の力じゃ手に負えない奴等だ。追った所でこれと同じ運命を辿る事になるぞ」

そう言って甲児は1枚の写真を投げつけた
それは若い女性が首を切断されて内臓を掻き出された見るも無残な死に様である
とても飯時に見れる物では無い

暗黒寺
「そんで、お前さんはこのまま奴等に仏を作らせとけって言いてぇのか？」
甲児
「そうじゃねぇ。こいつらは俺達に任せておけって言って・・・」
暗黒寺
「自惚れてんじゃねぇ！」

暗黒寺は思い切りテーブルを叩きつける
その際にコップが倒れ水が机を濡らすも誰も気にしない

暗黒寺
「良いか！奴等と戦ってんのはお前等だけじゃねぇ！俺達だって命掛けで戦ってんだ！そんなのに適わねぇからって尻尾巻いて逃げるなんざ出来る訳ねぇだろうが！」

暗黒寺は真剣な目で甲児を睨む
其処にはとてつもない決意の意思が込められていた
その目を見て甲児は観念したのか

甲児
「分かったよ・・・」

と言ってそっと息を吐くのであった

暗黒寺
「よし、それじゃ教えてくれ！その犯人ってのは一体何者なんだ」
甲児
「言う前に一つ言っておく、今から言う事は嘘偽りでも無い、列記とした真実だ」
ギンガ
「何でそんな事を言うんですか？」
甲児
「こう言っておかないと絶対にあんたらは信じないだろうからさ」
暗黒寺
「前置きは良い！それよりさっさと言いやがれ」

急かすように暗黒寺は言う

甲児
「これは・・・人間の仕業じゃない・・・人間以上の力を持った悪魔・・・そう、『悪魔』達の仕業だ」
ギンガ
「あ・・・・・」
暗黒寺
「悪魔だとぉ！！」

流石のギンガと暗黒寺も悪魔と言う単語が出てくるのには驚いていただが、甲児は続ける

甲児
「奴等は自分達を『デーモン一族』と名乗っていた」
暗黒寺
「デーモン一族？」

甲児
「遥か昔、恐竜の生きていた時代に地球を支配していた者達だ」
ギンガ
「地球と言うと・・・なのはさんの居た星・・・」

ギンガは呟く

甲児
「奴等は強くなる為に合体を繰り返す」
暗黒寺
「合体？」
甲児
「2体が互いに合体して1体のデーモンになる。だが、それは強くなる変わりに次第に醜くなっていく・・・そして、その姿は正しく悪魔そのものなんだ」
ギンガ
「そんな恐ろしい奴等が・・・このミッドチルダに・・・」

ギンガは青ざめた
もしそうなら今すぐにでも倒さなければならない
だが、甲児は更に続ける

甲児
「デーモンは自分の持つ能力の他に超能力を使える。そして奴等は人間を常食とする、下手な奴が挑んでも返って奴等に餌を与えるようなもんだ」
暗黒寺
「・・・・・・」
ギンガ
「・・・・・・」

暗黒寺もギンガも黙り込んだ
まさかこんなとんでもない奴が居たとは
想像しても居なかった
これなら暗黒寺が言った通り、動物園から獣が逃げ出したと言う事件の方がよっぽど簡単であった

甲児
「分かったか?俺の言った意味が。あんた等管理局が束になって掛かったって奴等デーモン一族には勝てない」
暗黒寺
「んじゃぁ、お前さんは勝てるって言うのかよ」
甲児
「舐めるなよ。これでも元居た世界では奴等を相手にして倒した経歴を持ってるんだぜ」
ギンガ
「凄い」

甲児の経歴を聞いてギンガは思った事を口にした
暗黒寺は聞きたい事を聞いたのか顔を緩める

暗黒寺
「成る程な・・・確かにそんな奴等じゃなけりゃこんなご大層な真似は出来ねぇな・・・ところで、話しは変わるけどよ。お前さん確か機動六課に居るんだよな?」
甲児
「ん、ああ。そうだけど」
暗黒寺
「んじゃ、ティアナは元気にしてるか?」
甲児

「ああ、元気だけど・・・あんたティアナの何なんだ?」
暗黒寺
「ティアナ・・・と、言うよりはそいつの兄貴のダチだったんだよ。俺は」
甲児
「兄貴って・・・ティーダの!」

甲児の問いに暗黒寺は頷いた
そして、遠い目をして語り出す

暗黒寺
「俺とあいつは・・・昔っから馬が合ってよぉ・・・仕事が終ったら良く近くの屋台で飲み明かしてたもんだぜ」

＊＊＊

【数年前】

ミッドチルダ某所にある小さな屋台

暗黒寺
「畜生!また振られた!」

一升瓶片手に顔を真っ赤にした暗黒寺が唸っていた

ティーダ
「お前は理想が高すぎるんだよ暗黒寺」

その横でカップ酒とおでんを口にしてる青年が居た
彼こそがティアナの兄「ティーダ・ランスター」であった

暗黒寺
「ばっきゃろう！良いかティーダ！理想が高いって言ってもなぁ！俺の理想の嫁さんは『パツ金』で『ボイン』で『スレンダー』な『お姉さん』なんだよ！それの何処が高いんだよ」
ティーダ
「充分高いだろう（汗」

暗黒寺の理想の嫁さん構造図に呆れるティーダ

ティーダ
「それならフェイト執務官はどうだ？彼女金髪だし、あと数年したらお前好みの女性になるんじゃないのか？」
暗黒寺
「ああ！？何が悲しくて尻（けつ）の青いガキと付き合わなくちゃなんねんだよ！」
ティーダ
「ま、確かにな・・・」
暗黒寺
「俺は年上が好みなんだよ！年下なんて願い下げだぜ」

手をヒラヒラさせて言い、その後再び一升瓶の中にある酒をコップに入れて一気に煽る
その横でチビリと酒を飲むティーダ

ふと、ティーダは手につけてる時計を見る

ティーダ
「っと、そろそろ帰らないとな」
暗黒寺
「あん？なんだよもう帰るのかよ！もっと飲もうぜ」
ティーダ
「生憎、家で妹が待ってるんだ。あんま長居してると泣いちまうからよ」
暗黒寺
「妹？ああ、ティアナの事か！相変わらずお前は妹思いだねぇ、このシスコン」
ティーダ
「黙れ酔っ払い（怒」
暗黒寺
「んだと？（怒」

暗黒寺が立ち上がってティーダを睨む
ティーダも同様に暗黒寺を睨む
だが、

ティーダ
「プッ！」
暗黒寺
「ダーーーーハッハハハハハ！」

突然2人して笑い出した

ティーダ
「ったく、お前もいい加減結婚して世帯を持ったらどうなんだ？も

う良い年だろう？」
暗黒寺
「てめぇにだけは言われたくねぇ！良いか！絶対に妹を泣かせんじゃねぇぞ！そん時は地獄の果てまで行ってでもお前をぶん殴ってやるからよ」
ティーダ
「そんなの決まってるだろう。たった一人の妹を泣かせる兄貴が居るかよ」

ティーダはフッと笑って言う
それを見て暗黒寺も笑う

暗黒寺
「明日、また飲もうぜ」
ティーダ
「ああ、また明日な」

そう言ってティーダは手を振りながら夜の街に消えていった

暗黒寺
「さてと・・・親父ィィ、はんぺんとがんもくれ」

暗黒寺は再び屋台で飲み明かした

＊＊＊

【現在　ファミレス】

暗黒寺
「その翌日の任務で・・・ティーダは死んだんだ」
甲児
「そんな事が・・・」

甲児の胸には悲しさで一杯になっていた
事実甲児もＤｒ．ヘルとの戦いや多くの戦いで友と呼べる者を何人も失った事がある
やはり死に別れは一番辛いものだ

暗黒寺
「あいつは・・・あいつはどんな時だって必死にやってきたんだ・・・なのに・・・なのに・・・」

暗黒寺はテーブルに拳を押し付ける
その腕が震えている

＊＊＊

【会見場】

暗黒寺はティーダ殉職の際の会見場に来ていた
その顔はとても暗かった

暗黒寺
（馬鹿野朗・・・約束したじゃねぇか。また飲もうってよぉ）

暗黒寺は強く歯を食いしばった
その横で、震える少女が居た
オレンジの髪をした9歳位の少女だ

暗黒寺
「お前・・・もしかして」
ティアナ
「私・・・ティアナって言います・・・今日任務で死んだ・・・兄さんの・・・妹です・・・」

ティアナは目に涙を浮べながら言った
そんなティアナの頭を暗黒寺は優しく撫でた

暗黒寺
「そうか・・・・叔父さんもよぉ・・・ティーダとは仲良かったんだよ」
ティアナ
「え？」
暗黒寺
「すまねぇな・・・俺が駆けつければあいつを助けてやれたってのに・・・」
ティアナ
「叔父さん・・・・」

ティアナは暗黒寺の顔を見た
とても悲しそうな顔をしていた
そんな時、会談場にティーダの上官が上がってきた
そして、長ったらしい演説をしていた
今の暗黒寺にもティアナにもその話は耳に入らない
だが、次の一言は今も2人の耳に刻まれていた

「あの時、ティーダ・ランスターは死んででも犯人を捕まえるべきだった。全く、役立たずを持つと苦労するものだ」
暗黒寺
「なっ！」
ティアナ
「！！！！！！」

その一言に暗黒寺は立ち上がった
そして、横目でティアナを見た
ティアナはたった一人の肉親である兄を公の場で侮辱された事により深く傷つき大粒の涙を流していた
それを見た暗黒寺は切れた

「我等は無能者ティーダの尻拭いをする為一層犯人逮捕に力を注ぎ・・・」
暗黒寺
「おい！」

ガシッ

ふと、上官の胸倉を暗黒寺は掴む

「な、何だ貴様！」
暗黒寺
「その無能者のダチだった男だ！」

そう言って暗黒寺は上官を思い切り殴り倒す
その様に会場は騒ぎ出す

「き、貴様！上官に手を出して・・・一体何者だ！」
暗黒寺
「あん？俺は暗黒寺。只の国家権力の狗だよ」

そう言って今度は両手で上官の胸倉を掴む

「や、止めろ！貴様・・・上官に手を出して只で済むと思ってるのか？」
暗黒寺
「ああ？知らねぇなぁ。俺っちは元々そんなに頭良くないんでなぁ。だけどなぁ・・・ダチ公を侮辱されて黙ってられる程、人間出来ちゃ居ねぇんだよ！」

再び上官の顔に鉄拳を叩き込む
上官の顔が歪に歪み、ゴキゴキと音がした
恐らく顎の骨が砕けたのだろう

「た・・・たしゅけてくで・・・」
暗黒寺
「聞こえねぇなぁ。てめぇみてぇな奴ぁ、あの世でティーダに詫びてきやがれ」

暗黒寺は恐怖で震える上官に銃口を突きつける

上官は恐怖で真っ白になり震えだす
そして、引き金を引こうとしたその時

ティナア
「止めて！」
暗黒寺
「ん！」

暗黒寺は振り返った
其処には涙目になりながらも暗黒寺を睨むティアナの姿があった

ティアナ
「酷いよ叔父さん！兄さんの・・・兄さんの前で酷い事しないで」

ティアナは涙目になって睨む
それを見て暗黒寺は一気に戦意が冷めてしまった

「バインド」

その時、丁度到着した魔道士達の手によって暗黒寺は拘束される

暗黒寺
「な、何しやがる！」
「暗黒寺！上官侮辱罪、並びに殺人未遂で逮捕する！」
暗黒寺
「何だと！クソッ離せ！離しやがれえええええええええええええええ！」

暗黒寺は大声で叫ぶ
だが、その声は誰も聞き届ける事は無かった

只一人、暗黒寺を止めたティアナ以外は

＊＊＊

【現在】

暗黒寺
「あの時銃口を突きつけたせいで殺人未遂を被せられちまってよぉ。結局今の今まで務所の中で不味い飯を食わされてたって訳だ」
甲児
「まさか・・・あんたにそんな過去が・・・」

甲児は始めて聞いた
それはギンガも同じであった

暗黒寺
「だが、状況が状況だったんだろうな。一時釈放の代わりにこうして難事件に狩り出されるって訳よ。こいつをお供にしてな」

そう言って暗黒寺は親指でギンガを指差す

甲児
「そうなのか？」
ギンガ

「ええ、管理局もまだ彼の事を信じていないので・・・保険みたいな物です」
暗黒寺
「何か間違いを起こすようなら躊躇(ためら)わずその場で殺害しろって命令付きだとよ。ケッ、胸糞悪い」

暗黒寺は不機嫌な顔をしてふんぞり返る
それに少し同情の気持ちが芽生えた甲児であった

登場！宇宙の王者　中篇（後書き）

次回で何とか出してみます

登場！宇宙の王者　後編（前書き）

今回ついに登場します

？？？

「やっとなんだね」

待たせたね

登場！宇宙の王者　後編

場所は変わって、此処は地下アジトのドック
そこで十蔵と剣造（スカリエッティね）とウーノとクアットロはある物を製造していた
それは紅に輝く大きな翼であった

十蔵
「やれやれ、ようやく完成したわい」

十蔵が額の汗を拭う仕草をする

ジェイル
「ええ、何せこれの設計は弓教授でしたからね。一から作るのは結構骨が折れる事でしたよ」

十蔵
「全くじゃ、ウーノちゃんやクアットロちゃんが居ったからこうして完成が早まったもんじゃな」

ウーノ
「お役に立てて光栄ですドクター、兜博士」

クアットロ
「こんなの私にとってはお茶の子歳々なのよねぇ♪」

ウーノは礼儀正しく受け答えし、クアットロは上機嫌に答える

十蔵
「さて、後は出撃の時を待つだけじゃな」

ジェイル
「そうですね」

そう言う4人は目の前に佇(たたず)む紅の翼『ジェットスクランダー』を眺めていた

＊＊＊

所変わって、此処はミッドチルダにある自然公園
其処では自然が生い茂っており、様々な動物が楽しく暮らしている
昨今、若いカップルやアベックがデートスポットとして利用している為、この時期は暇なニー・・・
ゲフン、失礼。熱々なカップル達がお互いの愛を感じあっていた
そして、その中には

キャロ
「綺麗だね、エリオ君」
エリオ
「そ・・・そうだね／／／／／」

自然公園の景色にうっとりするキャロとその横で顔を真っ赤にしてるエリオの姿があった
2人は湖の見える原っぱで腰を下ろして鳥達が飛び立つのを見ていた
キャロはエリオと2人っきりになれてとても幸せそうであった
エリオもキャロと2人っきりになれたのは嬉しかったのだが、如何せんデート経験0（ゼロ）である為どう対応すれば良いのか分からないのだ

エリオ
（どうしよう・・・思い切ってキャロをデートに誘ったは良いけどこの先どうすれば良いのか全然分からないよ、この間皆にアドバイスを聞いたけど皆ロクな答えしなかったしなぁ）
エリオはこの間皆に相談した時の事を思い出していた

＊＊＊

【数日前】

甲児
「はぁっ、デートの秘訣について？」
エリオ
「は、はい！是非甲児さん達にご教授願いたく思いましてまして・・・」
鉄也
「ガチガチだぞエリオ」
隼人
「もっと肩の力を抜けよ。そんなんじゃ女の方から愛想つかされちまうぜ」
エリオ
「ソ、ソンナ・・・僕ハコンナニリラックスシテルノニ・・・」

明らかに緊張し過ぎているのかガチガチになっている
しかも動作が何故かロボットダンス風になっていた

甲児
「やれやれ、こりゃ重傷だなぁ（汗」

甲児達は溜息をついた
仕方ないのでそれぞれの意見を出す事にした

甲児の意見

甲児
「思い切って告っちまえよ」
エリオ
「それが出来たら苦労しません！（汗」

鉄也の意見

鉄也
「アマゾン川で1週間二人っきりで生活すれば距離が縮まるんじゃないのか？」
エリオ
「仲が縮まる前に寿命が縮まります（汗」

竜馬の意見

竜馬
「公園で一緒に散歩なんてどうだ？」
エリオ

「それは良いですねぇ。参考にさせて頂きます」

隼人の意見

隼人
「部屋中にキャロの顔を貼り付ければ慣れるだろうよ」
エリオ
「夢に出て来そうなので止めてください（汗」

弁慶の意見

弁慶
「飯でも食ったらどうだ？」
エリオ
「しょっちゅう一緒に食べてますけど（汗」

ボスの意見

ボス
「良いよな良いよな顔の良い奴は皆可愛い子ちゃんに好かれてさぁ、あの弁慶ですら彼女が出来たってのに何で俺様には彼女が出来ないんだろうなぁ、やっぱ人間顔なのかなぁ、それじゃ俺様は一生独身で生きないと（ブツブツ」
エリオ
「・・・・・・・・・・（汗」

スバルの意見

スバル
「一緒にマラソンするってのはどう？」

エリオ
「キャロああ見えて運動音痴なんですけど（汗」

ノーヴェの意見

ノーヴェ
「いっそ一思いにぶん殴っちまえ！」
エリオ
「フリードで燃やされます（汗」

ウェンディの意見

ウェンディ
「チャットでネット友達から始めるってのは？」
エリオ
「僕パソコン持ってません（汗」

ドゥーエの意見

ドゥーエ
「大人の魅力で落とすってのは♪（チラッ」
エリオ
「僕達まだ子供なので無理です（汗」

トーレの意見

トーレ
「ヒマラヤ山脈で二人で上れば距離が縮まるだろう」
エリオ
「その前に凍りつきます（汗」

ティアナの意見

ティアナ
「夕日に向かって「〇〇～～～、好きだあああああ」って言えば良いんじゃない？」
エリオ
「何で夕日なんですか？（汗」

クアットロの意見

クアットロ
「緊張しなくなるように緊張する器官を取り除いてあげようか？♪」
エリオ
「え・・・遠慮しておきます（汗」

セインの意見

セイン
「遊園地でデート～～♪」
エリオ
「付近に遊園地ありませんよ（汗」

ディエチの意見

ディエチ
「なのはさんのＳＬＢを仁王立ちで防ぐのは？」
エリオ
「弁慶さんじゃ無いんですから無理です！食らったら間違い無く灰にされます（汗」

オットーの意見

オットー
「頑張れ、エリオ君」
エリオ
「あ、有難う（汗」

セッテの意見

セッテ
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ジィッと見つめている」
エリオ
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（何故か無言になる」

ディードの意見

ディード
「お許し下さい。Ｄｒ．ヘル～～～（化粧したまま」
エリオ
「気に入ったんですか？ディードさん（汗」

十蔵の意見

十蔵
「んなもんホテルに連れてって（ピー）して（ピー）しまくれば大丈夫じゃろう」
エリオ
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

剣造（スカリエッティ）の意見

ジェイル（剣造）
「下駄の緒が切れた際に結んであげると高感度がアップするよ」
エリオ
「僕もキャロも靴なんですけど（汗」

ルーテシアの意見

ルーテシア
「デートって何？」
エリオ
「・・・・・（涙」

フェイトの意見

フェイト
「そっかぁ、もうエリオもそんな年なんだぁ（上の空」
エリオ
「・・・・・・・・・・（汗」

その後も様々な人に聞くが・・・結局ロクな意見が返って来なかった

＊＊＊

エリオ
（結局、竜馬さんの意見しか参考にならなかった（汗））

軽く溜息をついてエリオが俯く

キャロ
「楽しいね♪エリオ君♪」
エリオ
「え・・・う、うん！とっても楽しいね」

愛想笑いで返すエリオに満面の笑みで返すキャロ
それを見てエリオは更に顔を真っ赤に染める
そんな二人を物陰から眺める者達が居た

ノーヴェ
「へぇ、何か普通な感じだな」
ウェンディ
「てっきりハードなシーンを予想してたんスけどねぇ」
スバル
「エリオ君って案外「初心（うぶ）」だからさ」
ティアナ
「あんたが言える立場じゃないでしょうが」

４人が茂みからこっそりと眺めている

チンク
「お前等いい加減にしろ」
４人

「うひゃぁ！」

後ろから突然チンクの声がしたので思わず驚く４人

ノーヴェ
「ち、チンク姉！脅かさないでくれよ」
ウェンディ
「全くッス！驚きの余りブレストファイヤーが出せそうになった気がしたッス」
スバル
「私はロケットパンチが出そう」
ティアナ
「嫌、無理だから（汗」

やんわりと突っ込むティアナ

チンク
「全く・・・お前等は悲しくないのか？良い年して年下のデートを覗き見するなんて」
４人
「・・・・・・・・・」

チンクに言われウッとなる４人
因みに何故かその場で正座していた

チンク
「こういう時はだな、年上の者としてあの二人の行く末を見守ってやるのが筋と言う物だろう。それを彼氏が居ないからと言う理由で詰まらぬ行為に走るなど、愚の骨頂だぞお前等」
４人

「・・・・・・・・」

グウの音も出ないとは正にこの事である
チンクの言った事に４人は全く反論出来なかった
チンクの言う事が正しかったからだ

チンク
「さ、この場は二人だけにさせて我等は・・・」

キャロ
「あ、湖に居るのって・・・ディエチさん！」
エリオ
「それに弁慶さんも居るよ！」

チンク
「んなあああああああにいいいいいい！（怒怒怒怒怒」

それを聞いてチンクが額に血管を浮かべて飛び出そうとする
それをノーヴェとウェンディが止める

ウェンディ
「お、落ち着くッス！チンク姉！」
ノーヴェ
「さっき自分が言ったばっかじゃねぇか！此処は年上の者として二人の行く末を見守ってやろうって」
チンク
「離せえええええええええええええ！あんな筋肉馬鹿に大事な妹をやれるかあああああああああ！（激怒」

額に大量の血管を浮かべてチンクが両手からスティンガーを取り出す

そして、その視線の先には

＊＊＊

エリオ
「弁慶さん」
弁慶
「よぉ、エリオとキャロじゃねぇか」
ディエチ
「二人も鳥さん達にご飯あげに来たの？」
キャロ
「私達は自然鑑賞に来たんですよ」

エリオとキャロの前では湖に浮んでいる鳥達に餌をあげるディエチと弁慶が居た

エリオ
「弁慶さんは動物が好きなんですね」
弁慶
「ああ、俺はこうして動物達と触れ合うのが好きだからな。偶にこうして動物達に餌をやりに来てるんだ」
ディエチ
「今日は私もその付き添いで来たの」
キャロ

「そうなんですかぁ」

エリオとキャロもそれに釣られて湖を見る
湖では沢山の鳥達が楽しそうに泳いだり飛び立ったり魚を取ったりしている
まるで楽園のようであった
この公園に居る時だけは機鋼獣の事を忘れられそうであった

～～～～～♪

そんな時、何処からかギターの音色が聞こえてきた

エリオ
「ギターの音？」
キャロ
「何だろう・・・凄く優しい曲だね」
ディエチ
「うん、私もそう思えるよ」
弁慶
「ん？あの木の下に誰か居るぜ」

弁慶が指差す方向には、大きな木があり、其処に背を預けるように座っていた青年がギターを弾いていた
服装は何処か牧場で見かけるような服をしており、濃い茶色の髪をした青年であった
その青年を見て、弁慶はそれが誰であるか思い出した

弁慶

「あれって・・・ひょっとして大介君じゃねぇか！」
ディエチ
「知ってるの？弁慶さん」
弁慶
「ああ、俺達の仲間なんだ。ちょっくら挨拶に行こうぜ」

そう言って弁慶とディエチは大介の元へ向かう
エリオとキャロもそれに続く

チンク
「逃がすかあああああああああああああ！」
ウェンディ
「落ち着くッス！チンク姉えええええええええ！」
ノーヴェ
「幾ら何でもそれは不味いから！スティンガーにＩＳ使用したらとんでもない事になるから！」
チンク
「離せえええええええええええええええええ！」

その後ろでは今にもＩＳを起動させたスティンガーを投げそうになってるチンクの姿があった
額には大量の青筋が立っており、両目とも血走っていた
（説明不足だが、今回チンクは両目とも開いてます）

スバル
「何か皆あの木の方に行ったみたいだね」
ティアナ
「知り合いでも居たんじゃない？」

スバルは木の下に居た青年に興味を持ち其処に向かう

ティアナもやれやれとしながらもそれについていく
ウェンディとノーヴェもチンクを必死に宥めながらついていく

＊＊＊

青年は木陰で楽しそうにギターを弾いていた
とても安らぐ音色であった
その周りには青年の弾くギターの音色を聞こうと動物達が集まっていた
其処へ

弁慶
「よう、大介君」
大介
「ん？君は・・・弁慶君か」
弁慶
「久しぶりだなぁ」
大介
「元気だったかい？弁慶君」

大介は立ち上がり弁慶と固い握手を交わした
そして、その後ろに居るディエチ達に気づく

大介

「この子達は？」
弁慶
「ああ、この世界で知り合った俺達の仲間なんだ。今俺達はこの世界を守るためにこうして皆で戦ってるんだぜ」
大介
「ほぉ、凄いなぁ」

大介は関心の意思を示す

ディエチ
「始めまして、ディエチです」
エリオ
「僕はエリオ・モンディアルって言います」
キャロ
「キャロ・ル・ルシエと申します。宜しくお願いします」

3人は自己紹介する

大介
「僕は「宇門　大介」弁慶君とは元の世界で共に戦っていた仲なんだ。宜しく」

そう言って大介は3人と握手を交わす

弁慶
「それにしても大介君、一体どうして君はこの世界に来たんだい？」
大介
「うん・・・実はね・・・」

大介が理由を話そうとした時

エリオ
「な、何ですか！あれは」

エリオは上空を指差す
皆はそれに釣られて上空を指差す
其処には、１隻の巨大な円盤と無数の小型円盤、そして数体の巨大なロボットが飛来してきたのだ

弁慶
「あれは！」
大介
「やはり・・・此処に来たのか！」

大介は怒気に満ちた顔になる
すると其処へスバル達が駆けつける

スバル
「皆！」
エリオ
「スバルさん！皆」
ティアナ
「とんだデートになっちゃったわね」
エリオ
「ええ！で、デートって・・・別にそんなんじゃ・・・（汗」
ウェンディ
「隠しても無駄ッスよ！顔に全部書いてあるッスよぉ」

ウェンディがニヤけながら言う

ノーヴェ
「とにかく、今はあいつ等をどうにかしねぇとよぉ」
チンク
「確かに、今はノーヴェの言うとおりだな」
と言いながらもチンクは未だに弁慶の事を睨んでいた
だが、弁慶はその視線に気づかないでいた

弁慶
「おっしゃぁ！・・・と、言いたいが今俺はゲッターに乗ってないからどうしようも無いんだよなぁ」

弁慶が参ったと言わんばかりの顔をしていた
いかに常人離れした弁慶と言えども空中の相手にはどうしようも無いのだ

大介
「此処は僕に任せてくれ！君たちはその間に付近の人達を避難させてくれ」
ノーヴェ
「おい！あんた一人で何が出来るんだよ！それよりあんたこそ逃げた方が良いんじゃないのか？」
ウェディ
「ノーヴェの言う通りッスよ！此処は私達新生機動六課に任せて早く逃げるッスよ！」
大介
「僕は逃げる訳にはいかない・・・あいつら悪魔に背中を向ける訳にはいかないんだ！」

そう言って大介は湖の方に向かう

そして、空高くジャンプして、

大介
「デュウゥゥゥゥゥゥクフリイィィィィィド！」

大介は叫ぶ
すると大介の姿はカウボーイっぽい服装から一瞬で赤い戦闘服に切り替わる

デューク・フリード
「来い！グレンダイザァァァ」

大介の叫びに呼応するかのように湖から1台の巨大なＵＦＯが姿を現した
そして、そのＵＦＯにデュークは乗り込む

ウェンディ
「ウハッ！またでっかいＵＦＯが現れたッスよぉ！」
キャロ
「でも、あの顔・・・何処かマジンガーに似てるような」
弁慶
「とにかく！俺達は今の内に付近の人達の避難に専念しよう！」
一同
「はい！」

弁慶の言葉に一同が頷く
その中で大介はグレンダイザーに乗り込み円盤の大群に一人向かっていく

デューク

「行くぞ！ベガ星連合軍！」

＊＊＊

その頃、少女を保護した鉄也の周りには無数の機鋼兵が立っていた

鉄也
「どうやらこの子の保護者・・・って訳じゃ無さそうだな」

鉄也は横目で少女を見た
少女は鉄也のズボンにしがみついてブルブル震えている
怖いのだ
それを見て鉄也は少女の頭を優しく撫でた

「其処のお前、大人しくその娘をこちらに寄越せ！」

鉄也
「何故だ？どう見てもお前等を怖がってるぞ」
「理由はどうでも良い！手足を切断されたくなければ大人しく寄越せ！」

目の前の1体が怒気の篭った声で怒鳴る
その声にビクッとする少女

鉄也

「悪いがそれは出来ないな」
「貴様！貴様その娘など知らない顔であろう。何故そんな娘を庇おうとする？貴様には一文の価値も無いだろう」
鉄也
「この子が俺を頼っているからだ」
「何？」
鉄也
「悪いが、俺を頼ってきた子を無下に出来る程落ちぶれちゃいないんでな。それに俺は悪事に加担する気はさらさら無い」
「おのれ・・・ええい！構わん、男を殺せ！」

機鋼兵が一斉に鉄矢に向かって飛び掛る

鉄也
「下がってろ・・・すぐに片をつける」

少女は軽く頷いて数歩下がった

鉄也
「うおおおおおおおおおおお！」

その光景は正に圧巻であった
並み居る機鋼兵を鉄矢はたった一人で蹴散らしてしまったのだ
腕をへし折り、頭を握りつぶし、胴体に風穴を開ける
それらを全て素手でやり遂げたのだから凄まじい
そして、最初は数十体は居たであろう機鋼兵も今では隊長を残すのみとなった

鉄也
「残るはお前一人だな」

「くっ・・・こうなったら！」

機鋼兵は懐から短剣を取り出して主室に投げつけた
その先には

少女
「ヒッ！」

少女が居た
だが、

ドスッ

鉄也
「グゥッ！」

それを鉄也が庇う
鉄矢の右胸には短剣が深く突き刺さり鮮血が飛び散る

「ハハハ、馬鹿め！ガキを守るために深手を負いおって！これで貴様は虫の息の筈！一気に切り殺してやる！」

腰に刺していた長剣を抜き放ち飛び上がる機鋼兵
だが、

バシィッ

「な、なにぃ！」

機鋼兵の前では信じられない光景が浮んでいた

確かに機鋼兵の剣は鉄也の肩を切り裂いていた
だが、それは皮一枚程度で止まっている
しかも、それ以上押しても引いても動かないのだ
疑問に思い手元を見てみた
それは、鉄也が片手で剣を抑えていたからだ

鉄也
「危うく心臓に刺さる所だったぜ・・・この程度かすり傷にもならん！」
「ば・・・化け物・・・」
鉄也
「俺に喧嘩を売った事をあの世で後悔しろ！」

そう言って兵士の剣を叩き折り兵士の胸に鉄拳を叩き込む
メキメキと音を立てて鉄矢の拳は兵士の体の中に入っていく

「ゲボオオオオオオオオ」
鉄也
「フン！」

そして、鉄也は兵士の心臓とも呼べる動力炉を取り出すと、それを握りつぶした
兵士はそのまま動かなくなり、少しした後、仰向けに倒れた

鉄也
「ふぅ・・・どうやら・・・片付いた・・・な・・・」

そう言い終わると鉄也は倒れる
その周囲を赤い液体が彩っていく

少女
「あ・・あああ！」

少女はそんな鉄也を必死に揺らした
起きて！起きて！
そんな思いを込めて必死に揺らす
だが、鉄也は一向に目覚める気配が無い
再び少女の目に涙が浮んだ時、

鉄也
「心配するな・・・少し・・・眠くなっただけだ・・・」

と言って意識を取り戻した鉄也が少女の頭を撫でた
それを見て少女は笑顔を取り戻す
すると其処へ

なのは
「て、鉄也さん！」

騒ぎを聞きつけて駆けつけてきたなのはは血まみれの鉄也と機鋼兵の残骸とその横に居る少女を見て驚愕した

鉄矢
「なのは・・・か・・・すまん・・・が・・・俺達を・・・運んで・・・くれない・・・か？・・・・」
なのは
「喋らないで下さい！酷い出血です・・・すぐに手当てしますから」

そう言ってなのははその場で応急処置を施した後、地下基地へと運んでいった

少女も一緒に

＊＊＊

一方、暗黒寺と会話していた甲児の携帯に通信が入る

甲児
「おう、どうした？」
シャマル
『甲児君！大変よ！この先の自然公園に謎の円盤部隊が現れたみたいなの！』
甲児
「何ですって！」
シャマル
「今公園は大パニックになってるの！早く来て！」
甲児
「分かりました！すぐに向かいます」

甲児は携帯の電源を切ると立ち上がった
それを見て暗黒寺は只事では無いなと予感する

暗黒寺
「どうやら何かやばい事でも起きたみたいだな」
甲児

「ああ、この先の自然公園に謎の敵が出現したみたいなんだ」
ギンガ
「大変！あそこには今の時間だと沢山のカップルが居る筈！このままじゃ大勢の死傷者が出てしまいます」
暗黒寺
「けっ、アベックを助けるのも気が退けるがしゃぁねぇ！俺達も行くぞ」
ギンガ
「え？あの・・・料理は？」

ギンガの目の前にはたった今運ばれてきた料理が美味しそうに湯気を出していた

暗黒寺
「んなもん食ってる暇ねぇだろうが！さっさと行くぞ！」
ギンガ
「そんあああああああああああ！」

暗黒寺に後ろ首を掴まれてギンガは店を連れ出されたギンガは終始涙目であった

「お、お客さあああああああん！お勘定はあああ！」
暗黒寺
「飯食ってねぇんだ！んなもん払えるか！」

店員に一括して店を出る
店の中から「食い逃げだあああああ」と叫ぶ声が上がったが大して気にしない

甲児

「あんた等も来るのか？」
暗黒寺
「ったりめぇだろう！事件のある所暗黒寺あり！だぜ」
ギンガ
「初めて聞きますよそれ」
暗黒寺
「俺がたった今決めた事だよ」

それを聞いてギンガと甲児は苦笑いを浮かべる

甲児
「よし、それじゃ二人共パイルダーを呼ぶから乗ってくれ
ジェェェェットパイルダァァァァァ！」

甲児が空に向かって叫ぶ
すると上空からジェットパイルダーが降り立つ
甲児と暗黒寺とギンガはそれに乗り込む
だが、パイルダーは元々一人乗りである
従って

暗黒寺
「せ・・・せめぇ・・・」
ギンガ
「あ・・・暗黒寺さん・・・もうちょっと詰めて下さい」
暗黒寺
「バッキャロウ！これ以上詰められるか！お前が小さくなれ！」
ギンガ
「無理です！」
甲児
「飛ばすぜ！しっかり捕まっててくれよ」

甲児はアクセル全開でパイルダーを飛ばした

＊＊＊

その頃、ここ自然公園では無数の円盤が攻撃を開始していた
その下では弁慶達が必死に避難活動を行っていた

スバル
「急いで避難して下さい！」
ウェンディ
「慌てちゃ駄目ッスよぉ！押さない、駆けない、喋らない、戻らないッスよぉ」
チンク
「ウェンディ、それは使う場所が違うぞ・・・とにかく、我々が先導しますから落ち着いて下さい」

等とその場に居たメンバーが必死に避難誘導をしている中

デューク
「スピンソーサー！」

グレンダイザーを乗せた大型ＵＦＯ「スペイザー」に乗ったデューク・フリードが小型円盤「ミニフォー」を相手に戦いを始めていた

ベガ星連合軍のミニフォーではグレンダイザーに勝てる筈も無く次々と撃墜されていく

ブラッキー
「あれは・・・グレンダイザー！まさかこの世界に来ているとは・・・ええい！円盤獣ギルギル、ジンジン、グビグビよ！貴様等で協力してグレンダイザーを倒せ」

ブラッキーの命令を受けて3機の円盤獣がスペイザーに襲い掛かる

デューク
「ベガ星連合軍め！お前達にこの美しい星を渡しはしないぞ！シュウウウトイン」

天井のレバーを引く
するとデュークの乗ったシートが下へ移動する
そして、一回転しながらシートはグレンダイザーの口部分に移る

デューク
「ダイザァァァゴォォォ！」

その掛け声と共にスペイザーからグレンダイザーが降り立つ
その姿はマジンガーと何処か似ているフォルムをしていた
それこそが宇宙の王者「グレンダイザー」なのだ

デューク
「行くぞ！円盤獣！」

グレンダイザーは目の前に降り立った円盤獣の1体に殴りかかる
ガツンと音がして円盤が機動を外れて降り立つ

すると、円盤から亀を思わせる手足と顔が現れる
円盤獣ギルギルの真の姿である
同じくグレンダイザーと似た頭部と二本の伸縮自在の腕を出した円盤獣ジンジン
２本の巨大な回転する盾と無数の鋭い足を持った円盤獣グビグビ
この３体がグレンダイザーを取り囲んでいた

ブラッキー
「フハハハハハ！流石のグレンダイザーもこれだけの数が相手では勝ち目があるまい！やれ！やってしまえ！円盤獣達よ！」

ブラッキーが勝ち誇ったかのような声を挙げる

「バッキャロー！この俺を忘れて貰っちゃぁ困るぜぃ！」

叫びながら甲児のジェットパイルダーが現れる
そして３機のゲットマシンも現れる

竜馬
「弁慶！無事か？」

弁慶
「リョウ！ハヤト！」

隼人
「その様子だと無事みたいだな」

隼人がニヤリとする

弁慶
「当たり前だろう！そう簡単にくたばる俺じゃねぇぜ！」

竜馬

「弁慶！ポセイドン号はオート操縦にしてある。すぐに乗り込め！」
弁慶
「あいよ！そんじゃ皆！後は頼むぜ」

弁慶が後ろを向いて皆に言う

ディエチ
「気をつけてね弁慶さん！」
弁慶
「任しとけぃ！」

親指を立てて言い、降り立ってきたポセイドン号に乗り込む
パイルダーも暗黒寺とギンガを降ろして飛び立つ

暗黒寺
「いてて・・・ったく、酷い目にあったぜ」
ギンガ
「あ・・・頭がクラクラする・・・」

暗黒寺とギンガはフラフラしながらそう言っていた

スバル
「ぎ、ギン姉！どうしてギン姉がこんな所に？」
ギンガ
「詮索は後！それより今私達が出来る事をしましょう！」
スバル
「う・・・うん！」

スバルは頷く

暗黒寺
「やれやれ、其処は姉らしいんだなお前は」
ギンガ
「一言余計です」

余計な事を呟いた暗黒寺をジロリと睨むギンガ
そんなギンガの視線に気づきながらも無視してロボットを見る暗黒寺

暗黒寺
「けっ、頼むぜ・・・デカブツ共」

＊＊＊

甲児
「マジィィィィン・ゴォォォォォォ！」

甲児が叫ぶ
すると湖の真ん中に巨大な魔方陣が現れ、其処からマジンガーZが現れる

甲児
「パイルダァァァ・オォォォォン！」

マジンガーの頭部にパイルダーがドッキングする

マジンガーの両目が光り命が吹き込まれる
両手を振り上げて雄たけびを挙げる

甲児
「さぁ俺とマジンガーの相手になるのはどいつだ?」

甲児が叫ぶ
すると上空に居た円盤獣ジンジンが襲い掛かってきた
目からレーザー砲を放つ

甲児
「おわっ!」

甲児は咄嗟にかわす

甲児
「野朗!」

かわしざまに光子力ビームを放つもあっさりとかわされる
ジンジンはまるで地上に居るマジンガーをあざ笑うかのように空を
飛びまわる

甲児
「畜生!スクランダーがあればあんな奴等どうって事無いのに!・・
・そうだ!スバルのウィングロードなら空に行けるかも知れない!」

甲児は咄嗟に思いついた
そして通信を送る

甲児

「スバル！聞こえるか？」
スバル
『甲児さん！どうしたんですか？』
甲児
「今すぐ来てくれ！ユニゾンするぞ！」
スバル
『イヤッホーー！待ってましたぁ！』

嬉しそうに飛び上がるスバル
そして通信が切れると同時にマジンガーに向かってウイングロードが駆けられる
そして、それを通ってスバルがマジンガーに肩に乗る

甲児
「お爺ちゃん！居るか？」
十蔵
『あいよ！準備完了じゃ！』
甲児
「ようし！」

甲児・スバル
「クロス・ユニゾン！」

二人が叫び、マジンガーとスバルが光に包まれる
・・・だが、

バチン

甲児
「ぐぅっ！」

スバル
「あうっ！」

その二人をまるで電流が走るかのように引き離されてしまった
マジンガーは湖に落ちてしまい、スバルはそのまま地面に落下した

ティアナ
「スバル！大丈夫？」
スバル
「いたた・・・あれ？何で私はユニゾン出来ないの？」

何故かユニゾン出来なかった事に疑問を感じるスバル
それは甲児も同じであった

甲児
「ど・・・どうなってんだ？故障でもしたのか？」
十蔵
『バッカモン！わしゃこの通り正常じゃわい！』
甲児
「んじゃどうしてスバルとユニゾン出来ないんだよ！」
十蔵
『それは・・・わしにも分からん』
甲児
「んなアホな！」

甲児が信じられないと言った顔をする
その時、突如振動が甲児を襲った

甲児
「な、何だ！」

見ると、ジンジンがマジンガーを抱えて飛び上がっていた
高度がグングン上がっていく

甲児
「ぐうううううううううううう！じ・・・Gがきつい・・・・・・・」

十蔵
『不味いぞ甲児・・・このまま地面に叩きつけられたらマジンガーは無事でもお主が参ってしまうぞ！』

そう、いかに強化されたパイロットスーツを身にまとっても大気圏ギリギリの高度まで上昇した所で落とされては溜まった物では無いのだ

甲児
「畜生！離しやがれ！」

必死になって拘束から逃れようとするだが、２本の腕がまるで蛸の足のようにマジンガーに絡みついて離れようとしないそのまま高度がグングン上昇していくそして、ある一定の高度に達するとマジンガーをそのまま叩き落したい

甲児
「うわあああああああああああああああああああ！」

甲児は叫んだ
マジンガーはそのまま地面にまッさかさまに落ちていくこのままでは甲児がバラバラになってしまう

その時

ジェイル
『聞こえるか！甲児君！』
甲児
「ジェイル博士！」
ジェイル
『今君の元にジェットスクランダーを送った！』
甲児
「ジェットスクランダー！完成したんですか！」
ジェイル
『ああ、だが一発勝負だ！ドッキングに失敗したら全ての終わりだと思ってくれ！』
甲児
「了解！任せて下さい！」

甲児は視線を送った
その先には紅に輝く赤い翼がマジンガーを目指していた

甲児
「スクランダァァァクロォォォォス！」

上空でマジンガーZとジェットスクランダーが十字を描いて一つになる
スクランダーが今マジンガーZと一つになった
これでマジンガーは今、空飛ぶスーパーロボットとなったのだ

甲児
「よっしゃあああああ！これでてめぇと互角に戦えるぜ！」

マジンガーは上空を旋回していたジンジンを指差す

地上ではグレンダイザーと円盤獣ギルギルが戦っていた

ギルギル
『キシャアアアアアアアアアア！』

ギルギルが目からビーム砲を発射する

デューク
「ハンドビィィィム！」

それを迎え撃つ為にグレンダイザーは両腕の甲から光るビーム砲を発射する
上空でお互いのビームが交差する
激しい閃光が辺りを照らす
だが、次の瞬間、ギルギルに向かって2本の腕が飛んできた
スクリュークラッシャーパンチである
2本の腕はギルギルの両腕を吹き飛ばす
粉砕された腕からオイルと部品が飛び散る
ギルギルが悲痛の叫びを上げる

デューク
「お前達悪魔に容赦はしないぞ！ダブルハァァァケン」

グレンダイザーの両肩にあった半月状の飾りが飛び出し、それを上空で1本にあわせる
その時間、実にコンマ5秒
それは1本の半月上の刃になる

デューク
「はあああああああああああ！」

ダブルハーケンを思い切りギルギルの背中に突き刺す
ズブズブと深くめり込んでいく

デューク
「此処はお前達悪魔の来る所じゃない！出て行けえええええええええええ！」

グレンダイザーは飛び上がり、天に向かって角を突き出す
すると、さっきまで快晴だった空に雨雲が広がり、一筋の雷光がグレンダイザーの頭にある角に集まる

デューク
「スペェェェスサンダァァァァ！」

そしてそれをダブルハーケンの刺さっている箇所に向けて放つ
グレンダイザーの放ったスペースサンダーはダブルハーケンを通してギルギルの体中を回っていく

ギルギル
「ギイイイイイイエエエエエエエエエエエエエエ！」

断末魔の叫びを上げた後、ギルギルは爆発した
その最後をグレンダイザーは、そしてデューク・フリードは見ていた

デューク
「悪魔め・・・」

憎しみの篭った目で残骸となったギルギルを見下ろしていた

ゲッタードラゴンは円盤獣グビグビと戦闘を行っていた

竜馬
「ダブルトマホォォォク！」

両手に諸刃の斧を構えて切りかかる
だが、それはグビグビの手につけられた巨大な盾により防がれる

竜馬
「くっ！」

舌打ちしながら後ろ飛びに距離を開ける
その隙を狙ってたのかグビグビが腹から数発のミサイルを放つ

竜馬
「舐めるな！トマホォォォォクブゥゥゥゥゥメラン！」

それを迎撃する為右手のトマホークを放物線上に投げる
トマホークはミサイルを次々と両断して破壊していく
しかし、一発のミサイルを仕損じてしまい、軌道を外れたミサイルが湖に居た動物達の方に落下する

弁慶
「ああ！」

弁慶の視線の先には悲惨な光景が映っていた
グビグビの放ったミサイルによって大勢の動物達が無残な死骸となってしまったのだ
その様を見て弁慶の中に怒りの炎が沸々と湧き上がってきた

弁慶
「許せねぇ・・・あの野朗だけは絶対に許せねぇ！」

弁慶は操縦桿を折れる位の力で握りまるで血が出る程にまで歯を食いしばった

弁慶
「リョウ！俺に代わってくれ！」
竜馬
「弁慶！無茶だ！アイツの守りは鉄壁なんだぞ！お前のポセイドンでどうにかなる相手じゃない！」
弁慶
「あいつは・・・あいつは何の罪も無い動物達を殺しやがったんだ！絶対に許せねぇ！」
竜馬
「駄目だ！そんな個人的な感情では戦わせられない！隼人、頼めるか？」
隼人
「待てリョウ、奴さんの守りは完璧だ！こりゃライガーでもどうにかなりそうもねぇな！一か八か弁慶に託してみた方が良い」
竜馬
「しかし・・・」

竜馬は渋る
其処へ弁慶が叫ぶ

弁慶
「頼むリョウ！俺にやらせてくれ！どうしても俺の手であいつを倒したいんだ！」
竜馬
「弁慶・・・分かった！分散するぞ！オォォォォォプンゲェェェェェット！」

ゲッタードラゴンは3機のマシンに分離した
それからポセイドン、ドラゴン、ライガーの順に一列に並ぶ

弁慶
「チェンジポセイドン・スイィィッチオォォン！」

弁慶の叫びと共に3機のマシンは1体のロボットになる
ゲッターポセイドンである

弁慶
「行くぞ！動物達の仇だあああああああああああ！」

ポセイドンは足をキャタピラにして突っ込む
グビグビも盾を高速で回転させながら突撃していく
お互いがパンチの届く距離にまで接近する
最初に攻撃を仕掛けたのはグビグビであった
高速回転する盾を思い切りポセイドンにぶつけてくる
凄まじい振動が弁慶に伝わってくる

弁慶
「ぬおおおおお！」

弁慶が悲鳴を挙げる
だが、その目は死んではいない
そのままポセイドンは自分にたたきつけられている盾を両手で掴む
そして力任せに引き千切った

グビグビ
『グギャアアアアアアア！』

引き千切られた箇所から火花と数個の部品が撒き散らされる
ポセイドンは千切った盾を放り投げてグビグビに掴みかかる

弁慶
「てめぇなんぞに負けるゲッターポセイドンじゃねぇ！食らえぃ！
武蔵先輩直伝のぉぉぉ！元祖大雪山おろしいいい

弁慶
「皆・・・仇は討ったぜ」
弁慶はポセイドン越しに動かなくなった動物達を見下ろしていた

ジェットスクランダーとドッキングしたマジンガーZは空中でジンジンと戦っていた

甲児
「ちょこまかしやがって！」
甲児は牽制にとドリルミサイルを放つ
無数のミサイルのうち数発は命中するも当たっただけで大したダメージにはならないでいた

甲児
「くそぉ！やっぱチンクとユニゾンしないと大したダメージは与えられないか！だが、ユニゾンしに戻っていたら逃げ遅れた人達が危ない！此処は素で行くしかないか！」

意を決してマジンガーは突っ込む
ジンジンはそんなマジンガーを迎え撃つかのように長い腕を伸ばして振り下ろす
勢いをつけて襲ってきた腕をマジンガーは両手をクロスして防ぐ
激しい火花と振動がコクピットに伝わってくる
だが、それでも甲児は怯まない

甲児
「野朗！てめぇには以前ＴＦＯをぶっ壊された恨みがあるんだ！今この場で晴らしてやるぜ！」

防いだ後、戻そうとするジンジンの腕をマジンガーは両腕でガッチリと掴む
そしてそのまま空中で回転する

甲児
「うおおお

そして、その回転の力を利用してロケットパンチを放つ
その力は岩盤すら容易く砕くとさえ言われている
そして、その放たれた鉄拳はジンジンをまるで紙のように貫き天を舞う
ロケットパンチがマジンガーの腕に戻るのとジンジンが爆発するのはほぼ同時であった

ブラッキー
「お・・・おのれぇ！まさかグレンダイザーが現れるとは・・・ええい！撤退だ！」

予想外の出来事に焦ったブラッキーは直ちに部隊を後退させる
甲児達は追おうとしたが、止めた
それは地上の風景を見たからだ
戦闘前は美しい公園だった場所が、今では見るも無残な瓦礫の山と化してしまったのだ

甲児
「ひでぇ・・・」

そう呟きながらマジンガーは大地に下りる
其処にゲッターとグレンが歩み寄る

竜馬
「やったな、甲児くん」
甲児
「ああ、だけど・・・公園が滅茶苦茶になっちまった」
大介
「そうだな・・・だが、僕達が戦わなかったらもっと悲惨な光景が

広がっていた筈だよ」
甲児
「大介さん」
大介
「久しぶりだね、甲児くん・・・」
甲児
「本当だな・・・ベガ星連合軍との戦いの時以来だからな」

そう言ってマジンガーとグレンは互いに見詰め合う
まるで互いに再会を喜ぶかのように

一方、地上では避難を終えたティアナ達がマジンガー達を見ていた

ティアナ
「あれがグレンダイザー・・・か」
ウェンディ
「凄いッスねぇ！あの円盤の化け物をあっさり倒しちゃったッスよ！」

ウェンディが興奮しながら言う
だが、その横では

スバル
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（暗い」

スバルが物凄く落ち込んでいた
何故かは理由は明白であった

スバル
「何で・・・私だけユニゾン出来なかったんだろう・・・・・」

である
その後、遅れて到着したスカイホエールとさやか達、そして新生機動六課のメンバー全員で公園の復旧作業が行われたのは言うまでもない事である

＊＊＊

戦闘を終えて帰還した甲児達の耳に、鉄也が負傷したとの報せが届いた
その報せを聞いて甲児達は脱兎の如く医務室に駆け込んだ

甲児
「鉄也さん！大丈夫・・・」
鉄也
「ん？どうした」

甲児の視線の先には、背中に１００ｋｇはあるだろう錘を乗せて腕立て伏せをする包帯を巻いた鉄也の姿があった

シャマル

「て、鉄也さん！あれ程言ったでしょう！安静にしてなきゃ駄目だって！」

そんな鉄也に青ざめたシャマルが駆け寄る
理由は明白だろう
怪我人がそんな無茶な特訓をしてたら医者なら誰だって青ざめる物だ

鉄也
「こんなもんは掠り傷だ！すぐ治る」
シャマル
「掠り傷って！後５ｍｍ右にずれてたら心臓を貫いていたんですよ！完全に重傷です！」
鉄也
「だからと言って何時までも寝ている訳には行かないだろう！体が鈍っちまう」
甲児
「いや！鉄也さんなら鈍らないから（汗」

以外と元気だった鉄矢にホッと安堵する甲児
するとその後ろから

？？？
「パパ！」

と、言う少女が現れた

鉄也
「ん？」
甲児
「え！？」

？？？
「パパ！駄目じゃない！安静にしてなさいって先生が言ってたでしょう！」

其処には金髪の少女が居た
背は小さく、年はパッと見で5歳位の少女だ
目の色が左右で違っており、顔立ちはとても綺麗だ
その少女が・・・何故か鉄也をパパと呼んでいたのだ

甲児
「い・・・一体・・・どういう事？・・・これ・・・」

甲児が理解に苦しんでいる所に

なのは
「その子はね、鉄也さんが保護した子なの」
甲児
「鉄也さんが！」

悩む甲児に手を差し伸べるようになのはが説明に入った

なのは
「あの後血まみれの鉄也さんを応急処置で治療して連れ帰ってきたの・・・」

【数刻前】

基地に帰った鉄也は早急に治療が施された
幸いにも急所は外れており、出血の割りには大した怪我では無かった

シャマル
「驚きですよ！普通なら致死量の出血量なのに全然異常が見られないんですから」
鉄也
「当たり前だ！あんなのでくたばる程俺はやわじゃない！」

胸に包帯を幾重にも巻いた鉄也が言う
すると其処へ例の少女が歩み寄る

鉄也
「お前は・・・さっきの子か」
？？？
「・・・（コクッ）」

鉄也は少女の顔を見る
少女は鉄也がなんとも無かったのを理解しホッとする
そんな少女に鉄也はそっと頭を撫でる

鉄也
「心配かけたな」

そして優しく微笑む
其処へシャマルが言い寄る

シャマル
「鉄也さん、その子なんですけど」
鉄也

「身元が分かったのか？」

鉄也の問いにシャマルはかぶりを振った

シャマル
「いえ、それより・・・その子は人間じゃないんです」

鉄也
「何！」

シャマル
「その子は・・・フェイトちゃんやエリオ君と同じ「人造生命体」なんです」

鉄也
「人造・・・生命体・・・そうか」

鉄也は理解する
だが、それだけであった

鉄也
「それはそうと、この子はこれからどうするつもりなんだ？」

シャマル
「今の所はこちらで保護するつもりです」

鉄也
「成る程、なら高町かテスタロッサあたりにでも頼むか・・・あいつらなら大丈夫だろう」

そう言って立ち上がる
そしてなのは達の下へ向かおうとする鉄也の足を何かが掴む

鉄也
「む？」

鉄也は自分を掴んだ者を見た
さっきの少女だ
さっきの少女が必死になって鉄矢の足にしがみついている

鉄也
「何だ？」
？？？

「行かないで！」
鉄也
「！！！」
？？？

「パパ！行かないで！・・・もう・・・もう、寂しいのは嫌！だから・・・だから行かないで！」

少女は涙目になって鉄也に訴える
その目を見て鉄也はハッとした
俺を父親だと思っているのか？
そう思った
かつて、鉄也は所長である兜　剣造を本当の父の様に思っていた
だが、それは偽りであった
剣造にとっての本当の息子は兜　甲児であり自分は違うのだ
その思いが自分を追い詰め、最終的にはあんな悲劇を招いてしまったのだ
そんな自分を父親として見ている
そんな時、自分はどうすれば良いのか
鉄也は分からなかった

鉄也
「シャマル・・・俺はどうすれば良いんだ？」

シャマル
「え？」
鉄也
「俺は父親が何なのか知らないんだ。頼む、教えてくれ・・・俺はどうすれば良いんだ」
鉄也は真剣な顔でシャマルに聞いた
それにシャマルはこう答える
シャマル
「その子の名前を呼んであげなさい・・・そうすれば、貴方の心をその子も分かってくれる筈」
シャマルの答えを聞いた鉄也は少女の前に肩膝をついてジッと目を見る
鉄也
「俺は剣　鉄也・・・君の名前は？」
ヴィヴィオ
「ヴィヴィオ・・・私、ヴィヴィオって言うの」
鉄也
「そうか・・・俺の躾（しつけ）は厳しいぞ・・・それでも良いか？」
鉄也の問いに少女は強く首を振った
それに鉄也は微笑みながらヴィヴィオの頭を撫でた
鉄也
「よし、今日から俺はお前の親父（パパ）だ」
ヴィヴィオ
「パパ！」

ヴィヴィオは満面の笑みで鉄也に抱きついた

＊＊＊

なのは
「と、言う訳なの」
甲児
「信じられねぇ・・・あの鉄也さんが子持ちになっちまったのか・・・待てよ！そんじゃジュンさんは？」

甲児が疑問に思っていると

ジュン
「鉄也！寝てなきゃ駄目じゃない！」
鉄也
「ジュン・・・お前までそう言うのか？」

騒ぎを聞きつけてジュンがやってきた

ヴィヴィオ
「ジュンママ！」
ジュン
「ヴィヴィオ！鉄也を止めて！放っておくと何時もこれなんだから

！」

呆れながらジュンが言う

ヴィヴィオ
「うん！鉄也パパ！無理は駄目だよ！パパはゆっくり寝てなきゃ駄目なんだから！」

鉄也
「し・・・しかし・・・」

ジュン
「しかしもへったくれも無いわよ！貴方は今怪我してるんだから大人しくしてなさい！」

鉄也
「む・・・・・むぅ・・・・・」

鉄也が黙り込んだ
流石の鉄也もジュンとヴィヴィオの板ばさみには適わず、渋々ベットに戻った
その横にヴィヴィオとジュンが付き添う

鉄也
「な・・・何で横に居るんだ？お前等（汗」

ヴィヴィオ
「見張りだよ！」

ジュン
「こうして見てないと貴方はすぐ特訓するんだから・・・今日一日はこうして見張っています」

鉄也
「・・・・・勝手にしろ！」

鉄也はそう言い放ってベットに潜り込んだ
そんな鉄也を見てジュンとヴィヴィオが笑う
それを後ろでなのはと甲児が唖然とした顔で見ていた

甲児
「す・・・すげぇ・・・・」
なのは
「あの鉄也さんを・・・丸め込んじゃった」

梃子でも動かない鉄也でも、愛娘とパートナーには適わないのであった

＊＊＊

その頃、此処は何処かの研究施設
その中にあの男は居た

Ｄｒ．ヘル
「フッフッフ、奴等が暴れてくれたお陰で容易に手に入ったわい・・・まぁ、途中で邪魔が入ってしまったせいか1個しか手に入らなかったのは仕方ない」

そう言ってるＤｒ．ヘルの手には青く輝く宝石「ジュエルシード」が握られていた

Ｄｒ．ヘル
「フッフッフ、解析は順調・・・後はこれをこいつらに組み込めば完成だ」

Ｄｒ．ヘルの顔に不気味な笑みが浮ぶ

？？？

『嬉しそうだなぁ。Ｄｒ．ヘル』
Ｄｒ．ヘル
「む、貴様等か・・・何の用だ？」

Ｄｒ．ヘルはモニターに映る人間を見た
旧ソ連を思わせる軍服を身に纏った軍人である
だが、その男の頭には２本の大きな角が生えていた

？？？

『決まっておろう！こちらは約束を果たした・・・次は貴様の番だ！』
Ｄｒ．ヘル
「分かっておる・・・貴様等のボスをワシの手で生き返らせてやろう」
？？？

『おぉ、それは有り難い！是非頼むぞ！』
Ｄｒ．ヘル
「任せておけ」
？？？

『ではワシは失礼する。これでも忙しい身なのでな・・・また後ほど連絡を寄越す、それまでには良い返事を待っているぞ。百鬼ブラァァイ！』

そう言って通信は途切れた

Ｄｒ．ヘル
「ふん、所詮は捨て駒よ、精々ワシの為に働いて貰おう・・・そして、遂にお前の復活の時だぞ」

そう言ってＤｒ．ヘルは目の前の巨大なカプセルに浮ぶ不気味な怪物を見た

Ｄｒ．ヘル
「悔しかろう・・・数年前、侵略を開始しようとした時、あの男がお前をこんな目に会わせたのだからなぁ」

Ｄｒ．ヘルの脳裏に一人の男が浮かび上がる
そして、その男を思い浮かべた時、彼の顔が怒りに染まる

Ｄｒ．ヘル
「今にしても腹が煮え繰り返る思いよ！『ジェイル・スカリエッティ』・・・嫌！『兜　剣造』！！！
奴の為にワシはまた一からやり直す羽目となってしまった・・・だが、その苦労も遂に報われる！」

Ｄｒ．ヘルが両手を広げて叫ぶ
その新たなる脅威の名を
この星、ミッドチルダを紅蓮の炎に染める怪物の名を
その名は・・・

Ｄｒ．ヘル
「遂に完成するぞ！ワシの新たなる兵器・・・・古代ミケーネが

残した戦闘頭脳『ケドラ』。
そして、機鋼獣を超える『合成獣』が！
フフフフフフフフ・・・・・ハーーーーーーーーッハッハッハッハッハッハッハ！」

薄暗い研究室の中、Ｄｒ．ヘルの笑い声が何時までも響き渡っていた

登場！宇宙の王者　　終

次回予告

ユーノの誘いで俺達は古代遺跡の発掘調査の手伝いをする事になった
俺あんまり古代文明には興味無いんだけどなぁ
って、ちょっと待てよ！此処に描かれているのって
・・・まさか、マジンガー！

次回『古代のマジンガー！？』次回もこの小説に

テイィィィィィク・オォォォォォォォフ！

登場！宇宙の王者　後編（後書き）

Z
『今回ついにグレンダイザーが出たな』
作者
「いやぁ、やっと出ましたね」
Z
『だけどさぁ、最初に散々デーモンネタ出してたのに結局全然出てこねぇじゃん！』
作者
「すまん、正直出すタイミングが無かった。何時か出すから勘弁してくれ」
Z
『そうか、なら今回はこれで勘弁してやるよ、『ドリルミサイルデトネイター』
（チンクとのユニゾン済み』
作者
「ちょっ、そりゃチートだろってギャアアアアアアアアアアアア！」

外伝2　7年振りの再会（前書き）

本編で書き忘れたので書いておきます

外伝２　７年振りの再会

暗黒寺
「俺は暗黒寺、見ての通り国家権力の狗だ」

甲児達に付いて行き地下基地の格納庫で皆に自己紹介をする
それに皆は唖然とした顔で聞いていた
それを気にせず暗黒寺は続ける

暗黒寺
「そして、隣のこいつは俺の忠実な下僕の・・・」
ギンガ
「誰が下僕ですか！（怒）・・・コホン！陸士１０８部隊所属の『ギンガ・ナカジマ』です。今はこの人のお目付け役をさせて貰っています」

余計な事を口走りそうになった暗黒寺にツッコミを入れてギンガは自己紹介をする

スバル
「ねぇ、何でギン姉はこんな変な叔父さんの御付なんかやってるの？」
暗黒寺
「うっせぇぞガキ！鼻に銃弾ぶち込んで奥歯ガタガタ言わせてやろうか？」
スバル
「す・・・すみません（涙目」

暗黒寺に睨まれて思わず涙目になるスバル

そんなスバルを隣に居たフェイトが慰める

ノーヴェ
「んで、何でお前がついてきたんだよ？」
暗黒寺
「あん？此処に居れば何かと事件に巻き込まれるだろう。だから来たんだよ」
ウェンディ
「意味分かんないッス（汗」
ディード
「変人なのかなぁ？」
クアットロ
「いや・・・あの顔はきっと変人を通り越して変態よきっと」
トーレ
「オットーもあんな風になっては駄目だぞ」
オットー
「大丈夫です。絶対にあんな大人に何かなりたくないですから」
セイン
「旦那さんとしてもお断りだね」
ディエチ
「当然です！」
セッテ
「・・・・・・（軽蔑の眼差し」

と、口々に酷い事を口走るナンバーズ（一部視線のみ）

暗黒寺
「てめぇら・・・全員鼻の穴に鉛弾ぶち込まれたいのかあああああ！」
ギンガ

「落ち着いて下さい暗黒寺さん！子供相手に大人気ないですよ！」

ピストルを振り回す暗黒寺を後ろから羽交い絞めにして抑えるギンガ
その光景に一同は何処か不安な気持ちになった
其処へ

ティアナ
「どうしたの？この騒ぎは」
スバル
「あ、ティアナ！」

遅れてスカイホエールから降りてきたティアナが来た
そして、暗黒寺を見る

暗黒寺
「あん？誰だお前？」
ティアナ
「憶えてませんか？・・・昔・・・7年前に会ったはずですよ」
暗黒寺
「7年前・・・お前、まさか・・・『ティアナ』か！」
ティアナ
「向こうでは落ち着いて挨拶できませんでしたよね。改めて、お久しぶりです。暗黒寺さん」

ティアナは暗黒寺に向かって一礼する
そんなティアナを見て暗黒寺は鼻を擦る

暗黒寺
「へっ、立派になりやがって・・・ティーダの野朗が見たらきっと喜ぶぜ」

さっきまでの危ない人から一変して何処か優しそうな顔になった
その変化に皆が驚く

ティアナ
「暗黒寺さん」
暗黒寺
「何だ？」
ティアナ
「ちょっと・・・話良いですか？・・・二人だけで話したいんです」
暗黒寺
「ああ、構わないぜ」

ティアナと暗黒寺のその話を聞いていた一同は一気に慌てる

ノーヴェ
「ええ！ま、まさか告白！」
ウェンディ
「ティアナ！相手が居ないからって早まっちゃ駄目ッスよ！」
チンク
「人生を投げ捨てるのはまだ早いぞティアナ！」
フェイト
「諦めないで！ティアナならまだチャンスがあるから！」
スバル
「ティアアアアアアアアアア！カムバアアアアアアアアアアック！」
ティアナ
「うっさいわボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

ガスッ

スバル
「あうっ！」

ティアナの鉄拳を受けてスバルはその場に倒れる

ティアナ
「ったく、そんなんじゃ無いわよ、ちょっと昔の話がしたいだけよ」
暗黒寺
「それにな、俺は尻（けつ）の青いガキには興味無いんだよ。俺より年上（25歳以上）の女しか興味ないの」

そう言い残して暗黒寺とティアナは二人して格納庫を後にした

ギンガ
「スバル・・・大丈夫？」
スバル
「あうううううう・・・お星様がキラキラ光ってるうううううううう」

ギンガの目の前でスバルは目を螺旋上に回して気を失っていた

＊＊＊

暗黒寺とティアナは基地の誰も居ない通路に来ていた
流石に外に出るのは不味いので基地の中である

ティアナ
「聞きましたよ・・・ずっと刑務所の中に居たんですね」
暗黒寺
「ああ、全く毎日毎日犬の餌みたいな飯食わされて嫌んなっちまったぜ」
ティアナ
「でも、暗黒寺さんは国家権力の『狗』なんでしょ？」
暗黒寺
「いぃ！・・・相変わらず痛いトコ突くぜ・・・其処はお前の兄貴と変わんねぇな」

帽子を下げて暗黒寺は呟く
ティアナも視線を下げる

ティアナ
「あの時は・・・すみませんでした」
暗黒寺
「あの時？・・・あの時って何時だよ？」
ティアナ
「兄さんの会見の時・・・兄さんの事を酷く言った上官に対して、暗黒寺さんは本気で怒ってくれた」
暗黒寺
「ったりめぇだろう！俺にとっちゃアイツはダチだったんだからよぉ」

暗黒寺とティーダ
この二人のコンビは管理局でも有名であった

片や一流魔道士
片や魔法を嫌いデバイスを装備せず素で難事件を解決していく凄腕刑事
この二人のコンビに勝るコンビはいなかった
だが、

暗黒寺
「あの時、俺が別の事件（やま）に行ってなけりゃアイツは死ななかったんだ」

そう、ティーダが死ぬきっかけとなった事件の日、暗黒寺は強盗犯の追跡の仕事をしていた
その強盗は店員を殺害し、客の数人も手にかけた極悪人であり、その上市内でも問答無用に発砲していた
とても手に負えない為暗黒寺が駆り出されたのだ
本来ならティーダと共に任務に就く筈だったのだ

ティアナ
「暗黒寺さんのせいじゃありませんよ」
暗黒寺
「そうは言ってもよぉ・・・やるせねぇよ・・・くそっ」

暗黒寺は苦虫を噛むような顔をする

ティアナ
「暗黒寺さんは、本気で怒ってくれた・・・なのに・・・そんな暗黒寺さんに・・・私は酷い事を・・・」

ティアナの脳裏にかつて暗黒寺に言い放った言葉が鮮明に蘇る

ティアナ
『兄さんの前で酷い事しないで！』

まるでフラッシュバックの様に鮮明にティアナの脳裏に蘇る
すると、ティアナは更に暗い顔をする
だが、そんなティアナの頭に暗黒寺は手を乗せる

暗黒寺
「正直なぁ、お前には感謝してるんだぜ」
ティアナ
「え？」
暗黒寺
「あの時・・・お前が止めてくれなかったら・・・今頃俺は本当にあの糞上官をぶっ殺してたかも知れねぇ・・・そしたら俺は立派な犯罪者さ・・・二度とシャバの空気なんか吸えねぇよ」

暗黒寺はふざけた顔でそう言う
明らかにティアナに気を使わせない為である

ティアナ
「暗黒寺さん」
暗黒寺
「だからよ・・・そんな気に病むな・・・お前がやった事は正しいんだからよ」
ティアナ
「ハイ！」

涙目になりながらもティアナは元気良く返事した
暗黒寺

（ティーダ。あの世で見てるか？お前の妹は立派になってるぜ。腕前はまだヒヨッコだが、きっと近い内こいつはお前の夢を実現するだろうよ・・・だから、だからその様をあの世で見てろよ・・・俺も近い内きっとそっちに行くからよ）

暗黒寺は帽子の唾を親指で押し上げて空を見上げた

暗黒寺
（そっちで美味い酒とつまみを用意して待っていてくれよ・・・相棒（ティーダ））

外伝2　7年振りの再会（後書き）

え～、こんな感じです
結構いい話っぽく書けたかなぁ？

特別企画　1（前書き）

今回急遽特別企画を設けました
どうぞご覧下さい

特別企画　1

作者
「特別企画～～～イエ～～～～イ！」
甲児
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
作者
「あ、あれ？どうしたの甲児くん・・・何かすっごい暗いよ？」
甲児
「暗い・・・じゃねぇよ！一体何の用だよ（怒」
作者
「いやぁ、実はねぇ、今回読者の皆様にお力を貸して頂こうかと思って」
甲児
「何だよまたかよ・・・本当にお前って駄目作者だよなぁ」
作者
「すんません」
甲児
「まぁでもよぉ、この『魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ』も結構好評かだよなぁ」
作者
「ええ、最初はもしかしたらなのはファンの方から『なのはを汚すな！』とか『原作をぶち壊すな！』とか『そもそもマジンガーとなのはのコラボなんてありえないんだよ！』とかお叱りのコメントを貰うのかとヒヤヒヤしてましたからねぇ」
甲児
「まぁ確かにな。そもそも俺達スーパーロボットアニメとなのはちゃん達の様な魔女っ子（死語）アニメがコラボするなんて本来有り得ない事だからなぁ」

作者
「そうですよねぇ」
甲児
「おまけに作者なのはの話殆ど知らねぇし」
作者
「すんません・・・知ってるのはキャラクター位です・・・それもほんの一部の」
甲児
「益々駄目じゃねぇか（汗」
作者
「反省してます」
甲児
「んで、今回は何の用なんだよ」
作者
「はっ！そうでした！実は今回私が考えたオリジナル能力について話しをしたかったのです」
甲児
「オリジナル能力？」
作者
「そう！その名も・・・

『クロス・ユニゾン』

についてです」
甲児
「ああ、そう言えばこの能力原作には無い能力だよなぁ」

作者
「そうです、と言う訳なので今この場で分かっている限りの説明を致します」

クロス・ユニゾン

説明
この能力により異なる人種同士を一つに纏める事が出来る能力である
但し、その為にはクロス・ユニゾンが出来るユニゾンデバイスが必要になる
現状でそれが出来るのは甲児の祖父「兜　十蔵」しか居ない

特徴
・異なる人種同士が一つになれる
・融合した人の能力をそのまま使える
（例：エリオ・ソニックムーブ、ティアナ・クロスファイヤー）等
・それらはマジンガーに搭乗した状態でも影響される
・また、融合した人から半径３００m以内に居ればその人物と任意にユニゾンを変える事が出来るこれを『ユニゾン・チェンジ』と言う
・ユニゾン出来る時間は３０分だけ、それを過ぎると自動的にユニゾンが解除され、１時間の間クロス・ユニゾンは使用出来なくなる
・クロス・ユニゾンは魔道士とだけ出来る。その為マジンガー同士でのユニゾンは不可！
・また、ユニゾンデバイスとのユニゾンも不可
・ユニゾンするまでの時間（ぱっと見５秒位）は殆ど無防備になる
・スバルとユニゾンは出来ない（これについては後に話します）
・クロス・ユニゾンが行えるのは今の所「兜　甲児」のみ、それ以外の人間は行えない

作者
「以上だな」
甲児
「なぁ、何でスバルとはユニゾン出来ないんだ？」
作者
「それについては何時か話す・・・んで、今回の話しは此処だ！」
甲児
「此処って・・・クロス・ユニゾンについてか？」
作者
「そう！今の所でクロス・ユニゾンを行ったのは実に５人」
甲児
「ええと・・・まず最初はエリオだろう、次にティアナ、そんでもってチンク、その次はセイン、最後ははやて、か」
作者
「因みにその人物達とユニゾンした際に使える技を自分なりにピックアップしてみたのがこれだ」

ユニゾンした際に使える技、武器

エリオ
・Ｚランサー
エリオのデバイスと酷似しているが、色の違いと槍の刃の根元に輝く「Ｚ」の文字がある事
また、ランサーを投げる事で「ランサーブーメラン」が使用可能（まだ使ってないけどね）
・ソニックムーブ
高速で移動する魔法
マジンガーで使用すると残像が作り出せる

但し、これは甲児自身にかなりの負担を掛けるので余り長く使用出来ない

ティアナ
・クロスファイヤー
ティアナの代表的な魔法
複数のエネルギー弾を自在に操り敵を倒す
マジンガーとユニゾンすると、何故かエネルギー弾では無くロケットパンチになる
・ロケットパンチ百連発
ティアナとクロス・ユニゾンした際に使える最強の技
最大でチャージしたクロス・ファイヤーを空に放ち、それを炸裂させて雨霰（あめあられ）の如くロケットパンチを放つ
これもやはり使用にはかなりの体力が要るのでそう易々とは使用出来ない

チンク
・ドリルミサイルデトネイター
マジンガーの放つドリルミサイルにチンクＩＳ「ランブルデトネイター」を付加する事で破壊力を増す能力
これによりドリルミサイルの威力は数十倍に増す
因みにこれは他にある「ミサイルパンチ」や「フィンガーミサイル」等にも付加可能である

セイン
・ディープダイバー
セインとユニゾンする事により地形に潜り込む事が可能になる
これにより敵の攻撃をかわしたり、障害物をすり抜けるなどの事も可能
但し、長時間潜っていると酔うので注意が必要（多分慣れてないか

ら）

はやて
・ルストブリザード
はやての広域魔法にマジンガーの「ルストハリケーン」を合わせた技
はやてのS級魔力の付加によりその威力はマジンガーの「冷凍ビーム」の実に数十倍の威力になる
但し、使い方を間違えると偉い事になる

作者
「と、まぁこんなトコだな」
甲児
「よくもまぁこんなに考えたなぁお前（汗」
作者
「エッヘン！凄いだろう！」
甲児
「威張るな！」
作者
「さてと、本題は実はこの先なんだ」
甲児
「この先って？」
作者
「まぁ本音言っちゃうとさぁ、このまま俺だけでクロス・ユニゾンのバリエーションを考えても良いんだけど、それじゃ詰まんねぇじゃん」
甲児
「成る程」
作者
「其処で！読者の皆様にお力をお借りしたいなぁと思いまして」

甲児
「ほうほう」
作者
「この小説をご覧の人で、『この人』とのユニゾンで『こんな技』を使って欲しいって希望があったらドシドシ書いて下さい（感想で）」
甲児
「結局読者頼みかよ！（怒」
作者
「実はもう一つあるんだ！」
甲児
「今度は何だよ（呆」
作者
「今回の話し「登場！宇宙の王者　中篇」でスバルが食べてたアイス「ダイナミックスペシャル」興味無いかい？」
甲児
「す・・・少し興味あるかも・・・」
作者
「んじゃ説明するぜ」

ダイナミックスペシャル

バニラ、苺、レモン、メロン、チョコ、コーヒー、オレンジ、抹茶、林檎、ブドウ、バナナ、梅干味のアイスが一気に楽しめる超極上アイス
しかもてっ辺にはあの高級食材の「海鼠（なまこ）」が乗っていると言う贅沢な一品
一個１２５０円

作者
「こんな感じだ」
甲児
「すげぇなぁ（汗）・・・んで、これが一体何なんだよ」
作者
「此処で読者の皆様に質問！」

・質問：この3つの中で食べたいのはどれですか？

1：甲児の手料理
2：鉄矢の野戦料理
3：ダイナミックスペシャル

以上3つの中から選んで下さい
追伸：この中で一番低かった料理をこちらに居る「ティアナ・ランスター」さんに食べて貰います

ティアナ
「ん～～～～～～～！ん～～～～～～～！（縛られてる」
甲児
「ひ、ひでぇ・・・（汗」
作者
「良いじゃん！どれも美味そうなんだし」
甲児
「お前・・・本当にドSだな」
作者
「あ、分かった？」
甲児

「は～～～（溜息」
作者
「ってな訳で読者の皆様・・・お返事お待ちしてまぁす！」
甲児
「本編も宜しく～～」
ティアナ
「ん～～～～～～～～～！ん～～～～～～～～～～～！（激しく暴れている」

追伸：ティアナがどんな格好で縛られているかは・・・ご想像にお任せします

特別企画　1（後書き）

お返事お待ちしてます

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編終幕　古代のマジンガー！？（前書き）

今回甲児達は遺跡調査に出かける
其処で以外な物を見つけるのであった

StrikerS編終幕　古代のマジンガー!?

此処はミッドチルダの某所にある空港の待合室内
その一室の中でスーツ姿の青年が腕時計で時間を気にしながら待っていた
その人物とは

なのは
「ユーノく～～ん」
ユーノ
「あ、来た!」

そう、此処に居た青年の名は『ユーノ・スクライア』
読者の中には「あれ?こいつ何時出たっけ?」と思ってしまう人も居るだろうが彼は「ホテル・アグスタ　後編」でちゃんと出ているのだ
そして、今回は何故彼が出ているのかと言うと

ユーノ
「始めまして、僕はユーノ・スクライアと言います」
甲児
「俺、兜　甲児。宜しくなユーノ」
鉄也
「剣　鉄也だ。宜しく頼む」
竜馬
「流　竜馬です。宜しく」
隼人
「神　隼人だ」
弁慶

「車　弁慶ってんだ！宜しくな」
大介
「僕は宇門　大介と言います。宜しく」

ユーノは初めて会うメンバーと握手をかわした

ユーノ
「それにしても、鉄矢さんと会うのはホテル・アグスタ以来ですね」
鉄也
「そうだな」
甲児
「何だよ！二人とも以前に会ってたのか？」
ユーノ
「ええ、僕は以前鉄也さん達に助けられたんです」

それは、ホテル・アグスタがガミア部隊の襲撃を受けていた時であった
ユーノは一人観客達を避難させていた
すると、其処へ2体のガミアが襲撃してきたのだ
ユーノも何とか応戦するも、相手は殺人アンドロイド
防戦一方となってしまい絶対絶命の窮地に立たされてしまった
そんな時に現れてガミアを倒してくれたのが鉄也だったのだ
そのお陰でユーノも無事に脱出出来たのだ

ユーノ
「と、言う訳なんですよ」
なのは
「良かった。ユーノ君が無事で」
なのははユーノが無事だったのにホッとしていた

気のせいかなのはの顔が少し赤く染まっている
ユーノもそれを見て少し赤く染めている

甲児
（ははぁん・・・もしかして）

甲児は少し虐め甲斐がありそうな顔になる

甲児
「ハイハ～イ、二人は付き合ってるんですか？」
なのは・ユーノ
「！！！！！！！！！！」

突然大声で言う甲児に二人は顔を真っ赤にする
どうやら脈ありらしい

ユーノ
「こ、こここ甲児さん！そそそそんな大声でいいいい言わなくたっていいいい良いじゃないですか／／／／／／／／」
なのは
「そそそそうですよ！そそそそそれにわわわ私とゆゆゆユーノ君はそのそのつつつ付き合ってるなんて関係じゃ・・・・／／／／／／」

言葉の途中でなのはが固まってしまった
それを見て甲児が満足そうな笑みを浮かべる
そして、トドメにとユーノに腕を絡めてそっと耳打ちする

甲児
（ユーノよぉ、男見せねぇと・・・なのは他の男に獲られちまうぜぇ）

ユーノ
「ギクゥッ」

甲児の耳打ちを聞いてユーノはビクッと震える

ユーノ
（えええええええええええええ！ぼ、僕は別になのはが幸せならだれでも・・・）
甲児
（ほほ～、良いのかなぁ・・・なのは俺から見てもかな～り可愛いぜ～、何せ料理は美味いし優しいし、美人だし、面倒見は良いし、スタイルは抜群だし、ボインだし・・・そんな可愛い子ちゃんを世間の男が放って置くと思うかい？）
ユーノ
「う・・・・・」

最早グウの音も出なくなったのかユーノは黙り込む

鉄也
「その辺にしておけ、甲児くん」
甲児
「へ～い」

そんなユーノに鉄也が助け舟を出した

ユーノ
「た・・・助かった～～」

甲児が引いた事によりユーノはホッと一息つくのであった

なのは
「大丈夫？ユーノ君」
ユーノ
「え？あ、ああ・・・大丈夫だよ、なのは・・・えっと・・・それじゃこれから皆さんに説明させて頂きます・・・えっと・・・その前に・・・何で君が居るの？」
スバル
「へ？」

ユーノは見た
其処には何故か全く関係ないスバルが居た

なのは
「アハハ・・・それにはね」

なのはが昨日の出来事について説明した

＊＊＊

【昨日】

ユーノ
『と、言う訳でして、是非こちらの遺跡の調査にマジンガーとゲッターをお借りしたいのです』

ジェイル
「成る程・・・確かにそれはマジンガーが無くてはならないだろうね・・・分かった、甲児君達に伝えておくよ」
ユーノ
『有難う御座います』
そう言ってユーノ通信は途切れた

十蔵
「何じゃ?遺跡調査か?」
それとほぼ同時に十蔵が表れた

ジェイル
「ええ、甲児達には良い経験になるでしょうし・・・何よりこの星の文化を知る良い機会ですし」
十蔵
「ま、何事も若いうちに経験しておくのが大事じゃからのぅ」
そう言って十蔵はカッカッカと笑う

＊＊＊

ジェイル

「と、言う訳で君達にお呼びが掛かったと言う訳なんだ」

スカリエッティ博士はユーノとの会話を甲児達に話した

甲児
「へぇ、古代遺跡の調査にマジンガーが必要なのかぁ」

大介
「古代の文明ですか・・・確かに興味がありますね」

鉄也
「だが、それなら誰か一人で充分じゃないのか？何で俺達全員で行く必要がある？」

ジェイル
「念の為だろう・・・此処最近機鋼獣の目立った攻撃は無いし、いざとなったら彼女達だけでもどうにかなる・・・まぁ、休暇みたいな感じで行って来ると良いさ」

鉄也
「むぅ・・・」

明らかに不満そうな鉄也
そんな鉄也に苦笑いを浮かべる甲児

竜馬
「ですが、俺達ゲッターロボでも入れる場所なんですか？」

ジェイル
「それなら心配要らないさ。先ほど調べさせて貰った所かなり余裕があったからね」

隼人
「成る程、いざとなった時に戦闘は出来るって訳だな」

隼人はフッと笑いながら言う

竜馬
「それなら何の問題も無いな」
甲児
「よっしゃぁ、そうと決まったら早速行こうぜ！」
ジェイル
「おいおい、出発は明日だよ。そんなに焦る必要は無いさ甲児くん」
鉄也
「フッ、その性格は変わらずのようだな」
甲児
「いけねぇ、すっかり忘れてたぜ」

甲児が頬を少し染めて舌を出す
それを見て一同が笑う

＊＊＊

甲児
「って言う訳で俺達は明日遺跡の調査に行って来る事になったんだ」
ウェンディ
「へ～、遺跡ッスかぁ・・・何か埃っぽそうッスねぇ」
チンク
「ウェンディ、埃どころか苔（こけ）とかも生えてると思うぞ」

ウェンディ
「うげぇ！行きたくないッスねぇ」

ウェンディは明らかに嫌そうな顔をする

ヴァイス
「にしてもたかが遺跡の調査でマジンガーを使うなんて大事だねぇ。
そんなに中には危険な物があるのかねぇ」
甲児
「さぁなぁ？それは行って見ないと分かんねぇよ」

甲児がお手上げのポーズを取る

ティアナ
「何にしても、その間の留守は任せておいて下さい」
ノーヴェ
「お前が居なくたって何とかしてみせるからよ」
甲児
「ハハハッ、頼もしいな・・・って、あれ？スバルは？」

甲児はふとスバルが居ない事に気づいた

ティアナ
「ああ、スバルなら・・・あそこで」

ティアナが指差す先・・・・そこでスバルは一人沈んでいた

スバル
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

スバルは格納庫の端っこで一人体育座りをして落ち込んでいた
辺りから暗いオーラが漂っている
付近に居るだけで自分も暗くなってしまいそうな程だ

甲児
「な・・・何でスバルあんなに暗いの？」
ティアナ
「前の戦いの時、スバル甲児さんとユニゾン出来るって喜んでたんですけど・・・」

それは以前の戦いの時であった
甲児はスバルとクロス・ユニゾンを行ったのだが

バチン

甲児
『グゥッ！』
スバル
『アウッ！』

何故かスバルとはクロス・ユニゾン出来なかったのであった

ティアナ
「それ以来スバル元気無くて・・・」

ティアナも元気の無いスバルを少し心配そうに見ていた
普段は鬱陶しいと感じているが、やはり元気が無いと少し寂しいらしい

はぁと溜息を吐き甲児はスバルの元へ向かう

甲児
「よぉ、スバル」
スバル
「あ・・・・甲児さん・・・・・」

スバルは振り返った
その顔を見て甲児はギョッとした
目は虚ろになり頬はこけて生気が抜けたような顔をしていた

甲児
「お、お前・・・・なんて顔してんだよ!」
スバル
「そ・・・そんなに悪い顔ですかぁ?・・・・・」

明らかに声に元気が無い
相当ショックだったのだろう
頬を掻いて甲児が何か対策は無いか考える
其処で

甲児
「な、なぁ・・・スバル。明日俺達遺跡の調査に行くんだけどさぁ・・・その時俺の護衛についてきてくれないか?」
スバル
「え?・・・・・」
甲児
「正直俺一人だとちょっと危なそうな調査なんだよ。だから誰か一緒についてきてくれないかなぁと思ってたんだけどよぉ」

そう言ってチラリと横目でスバルを見る
スバルの目が徐々に輝きを取り戻してきた
そして、

スバル
「行きます！行かせて下さい！」

物の数秒で元気になった
甲児はホッとしたような呆れたような気持ちになった

＊＊＊

なのは
「と、言う訳なの」
ユーノ
「な・・・成る程（汗」

ユーノはスバルのついてきた理由にそんな理由があったのかと納得する
それから暫くして一向はその遺跡に調査に向かった
因みになのははその後基地に戻った

＊＊＊

甲児達はその遺跡の前に来ていた
かなりの大きさであった
例えるなら東京ドーム数百個分と言ったところだろうか
確かにこれならマジンガーが入っても余裕だろう

ユーノ
「それじゃ行きましょう」
甲児
「あいよ！」

ユーノの指示を受けて各々が準備に入る

甲児・鉄也
「マジィィィィンゴォォォォォォ」
竜馬
「チェェェェンジドラゴォォォン！スイィィィッチオォォォォォォォン！」
大介
「シュウウウウトイン！ダイザァァァァゴォォォォォォォ！」
甲児
「パイルダァァァァァオォォォォォォン！」
鉄也
「ファイヤァァァァァァオォォォォォォォン！」

ユーノの前に４体の魔神が姿を現した
初めてマジンガーを見たユーノは驚きの声をあげた

ユーノ
「凄い・・・こんな巨大なロボットが動き回れるなんて・・・一体どんな技術を使ってるんだろう」

少しだけマジンガーに興味を持ったユーノであった

＊＊＊

マジンガーに乗った甲児達は真っ直ぐに続く通路を歩いていた
その通路はかなり広く、まるでマジンガーがその通路にとっては普通の人間サイズのようであった

弁慶
「しっかしでっかい遺跡だなぁ・・・こんなデカイ遺跡があったなんてなぁ」
隼人
「ああ、それにこの遺跡・・・１０００年や２０００年なんてもんじゃねぇ、もっと年月が経ってると思うぜ」
スバル
「そ、そうなんですか？」

スバルが驚きの声を上げる
因みにスバルは護衛の意味を込めて甲児のパイルダーの中に入っている

鉄也
「とにかく行くぞ、とっとと調査を終らせて帰らないとな」
隼人
「娘が心配か？鉄矢」
鉄也
「まぁな、今頃首を長くして待ってるだろうし」
ユーノ
「って、鉄也さん子供居たんですか？」
鉄也
「血は繋がってないがな」

鉄也の言い分に意味が分からず首を傾げるユーノ
すると、目の前に巨大な壁が聳え立った

甲児
「何だこりゃ？行き止まりじゃねぇか？」
大介
「これは参ったな」

大介は顎に手をやる
すると、スバルが何か発見する

スバル
「あ！甲児さん、あそこに何か小さな窪みみたいの有りますよ？」
甲児
「え？」

甲児はスバルの指差す場所を見た
確かに何か窪みみたいなのがあった

甲児
「何だ？此処からじゃ見えねぇなぁ」
スバル
「見てきましょうか？」
甲児
「ああ、頼む」

甲児はパイルダーのガラスを開き、目の前に手を持っていく
その手の上にスバルは飛び乗り、窪みのある場所まで連れて行って貰う
スバルはその窪みを見た
窪みは手の形をしており、丁度パーの形をしていた

スバル
「これ・・・誰かの手形ですよ」
甲児
「手形？一体誰のだ？」

甲児が首を傾げる
しかし、そんな甲児を他所にスバルは手形に自分の手を押し込む
すると、何故かピッタリはまった

スバル
「ああ！甲児さん！この手形、私の手にピッタリですよ！」
甲児
「え？マジ！」

甲児は驚く
だが、次の瞬間壁が動き出した

スバル
「わわわ！一体何？」
甲児
「壁が・・・動いた」

甲児達の目の前で分厚い壁が動き出したのだ
そして、奥に続くであろう小さな道が現れた

ユーノ
「信じられない・・・まさかこんな開け方があったなんて」

ユーノは驚く

鉄也
「お前・・・一体どうやってこの道を通るつもりだったんだ？」
ユーノ
「ええと・・・マジンガーで破壊して通ろうかなぁと」
甲児
「お前・・・それで調査って呼べるのかよ（汗」

サラリと危ない事を口走るユーノを他所に一同はロボットを降りた
この先はロボットで行くには狭すぎるので降りて歩く事になったのだ
通路の先は真っ暗な階段が続いていた
ユーノは先頭を歩きたいまつを片手に辺りを照らす

ユーノ

「凄い・・・こんな古い遺跡・・・今まで見た事ないですよ」

ユーノらスクライア一族は本来遺跡を掘り起こすのを生業とする一族（多分）である
その為大概の遺跡を見てもユーノは驚きはしなかった
だが、今彼の目の前にあるのはそれを遥かに凌駕する程の歴史を持った文明があったのだ
その証拠は階段の壁を描く絵である

ユーノ
「見てください、この絵は描かれた物でもなければ彫られた物でもない・・・まるで初めから其処にあったかのように描かれています」
隼人
「とんでもない技術だなぁ」
スバル
「へ～」

甲児達は驚いているが、スバルにはチンプンカンプンらしく余り興味が無いらしい
だが、その絵を見て甲児達はある事に気づいた

甲児
「お、おい・・・この絵に描かれているのって・・・」
鉄也
「ああ・・・間違いない」

其処に描かれていたのは、１体の黒い魔神が無数の怪物と戦っている場面であった
そして、その黒い魔神の姿は『マジンガー』にそっくりであったのだ

ユーノ
「確かに・・・この絵に描かれているのはマジンガーと同じですね」
甲児
「可笑しくねぇか?此処はミッドチルダだぜ!何でミッドチルダの遺跡にマジンガーの絵があるんだよ!」
竜馬
「分からない・・・とにかく進むしか無いだろう」

疑問は残るが此処に留まってても答えが出るわけでは無い
甲児達は先を進む事にした
階段を降り終ると、また目の前に巨大な壁が聳え立っていた

甲児
「またかよ(汗」

甲児はウンザリした顔でそう言う

大介
「ん?壁に何か書いてある」

大介は壁に描かれている何かに気づく
それを読もうとしたが、何と書いてあるのかさっぱり分からなかった

大介
「駄目だ、僕じゃ分からない・・・ユーノ君・・・君なら分かるかい?」

大介はユーノの方を向くがユーノはかぶりを振った

ユーノ

「残念ですけど、此処まで古い文字は僕でも読めないんですよ」
鉄也
「参ったな・・・此処で立ち往生か」

鉄也が愚痴った
一同が進退窮まった顔をしていると

スバル
「『遥か昔・・・我等人の子を守る為黒き魔神が神々に戦いを挑んだ我等はその戦いを後の世に伝える為、此処に書き記す』・・・って、書いてありますよ」
ユーノ
「な！」
甲児
「にぃ！」

一同は驚いた
何と、あのユーノでさえ読めなかった古代文字をスバルが呼んでしまったのだ
しかもアッサリと

弁慶
「スバル・・・お前古代文字とか読めるのか？」
スバル
「全然読めませんよ・・・ただ、この文字は何となく読めたんです」
隼人
「どうなってんだ？」

隼人が眉を顰めていると、また壁が動き出した
そして、また長い通路が現れた

スバル
「え？ひょっとして・・・私が開けたんですか？（汗」
甲児
「そうとしか考えられねぇだろうなぁ（汗」

壁が動き出してオロオロするスバルに甲児はそう言う
とりあえずまた進む事にした
その通路にもまた絵が描かれていた
其処には今度は7体の巨大な怪物と戦っている魔神の姿が描かれていた
人間、昆虫、魚、猛獣、爬虫類、鳥、悪霊
それらを模した巨大な怪物を相手に一人で戦う黒き魔神の絵である
その絵を見て鉄也が驚きの声を上げる

鉄也
「これは！ミケーネ7大将軍！」
甲児
「本当だ！でも何でこいつらがこの遺跡に描かれているんだ？」

甲児にも見覚えのある顔ぶれであった

超人将軍ユリシーザ
昆虫将軍スカラベス
魔魚将軍アンゴラス
猛獣将軍ライガーン
妖爬虫将軍ドレイドゥ
怪鳥将軍バーダラー
悪霊将軍ハーディアス

そう、全て見覚えのある顔ぶれであった
そして、その7大将軍の後ろで巨大な剣を構えて立っている者

鉄也
「暗黒大将軍！」

そう、それは鉄也には見覚えのある敵であった
ミケーネの戦闘将軍であり、鉄也と死闘の末に惜しくも敗れたミケーネの将軍「暗黒大将軍」であった
だが、腑に落ちない点が多すぎる
何故ミケーネ7大将軍が此処ミッドチルダの古代遺跡の壁画に描かれているのだろうか
そもそも、このマジンガーは一体何なのだろうか
所々が尖っており、身長も絵から察するにグレートより大きい
太い腕と足、胸には「Z」と描かれた丸い球体が埋め込まれている
甲児も、鉄也も知らないマジンガーであった

ユーノ
「とりあえず、先に進みましょう」

絵に夢中になる甲児と鉄矢にユーノはそう言って先に進む
そして、また壁に差し掛かった

甲児
「スバル、頼む」
スバル
「はい・・・」

スバルはじっと壁に描かれた文字を見る
今度は少し難しいのか解読に時間が掛かった

そして、ゆっくりと語り出す

スバル
「『黒き魔神の力で神々は退かせる事が出来た、だがその神々の中から最強の7人の将軍、そしてそれを束ねる大将軍が現れる
魔神は苦しい戦いになるもこれに勝利し、我等人の子に光を授けてくれた』・・・って書いてありますよ」

スバルが解読を終えるとまた壁が動き出した
まただ、何故かこの遺跡はスバルを何処かへ誘っているようだ
だが、何故？
何故スバルはこの文字が読めるんだ？
甲児の脳裏にはその疑問がひしめき合っていた
だが、それでも歩を進めるしかない
甲児達は先に進んだ
其処にも絵が描かれていた
今度は黒き魔神よりも数倍はあろう巨大で不気味な怪物と戦っている姿であった

甲児
「今度は見た事ない怪物だなぁ」
鉄也
「ああ、だが、大きさはかなりあるぞ」

鉄也は絵に描かれていた怪物を見た
黒を貴重とした不気味な体
そして、腹には無数の牙が生えた大きな口
更にはその額には縦に４つの目がついていた
まるで、冥界の王を思わせる顔立ちであった
その冥界の王を思わせる怪物が業火を吐き地を焼き海を枯らし空を

黒く染める
黒き魔神もそれに挑むがかなり厳しい戦いをしていた
絵を見ていると、今度もまた壁が現れた
例にもよってスバルが其処に書かれている文字の解読を行う

スバル
「『神々は遂に我等を滅ぼす事を決めた。今黒き魔神の前に立っているのは地獄の王、冥府の王である『暗黒神』である。暗黒神は地獄の業火で地を焼き海を枯らし、空を黒く染める
黒き魔神もこれに挑むも力及ばず、我等人の子は、只救いを求め祈るしか道は無かった』・・・って書いてありますよ」

スバルが解読を終えるとまた壁が動いた
これでハッキリした
この遺跡はスバルが居ないと先へは進めないのだ
つくづくあの時スバルを連れて行こうとして良かったと甲児は思った

竜馬
「どうやら次で最後みたいだな」

隼人
「やれやれ、鬼が出てくるか、蛇が出てくるか・・・だな」

弁慶
「おいおい、不気味な事言うなよ」

隼人の言葉に弱冠身震いしながらも先を進む
また其処には絵が描かれていた
其処には人の子達、即ち人間が何か本のような物を使って冥府の王を封印している場面が描かれていた
ふと、甲児はその人間達が使っている本を見た
何処かで見た気がした

甲児
「ひょっとして・・・これって、はやての使ってた『夜天の書』じゃないのか？」
鉄也
「確かに似ているな」
大介
「だとしたら、はやてちゃんはこんな恐ろしい化け物が封印されている書を使っていると言う事になるのかな？」
竜馬
「考えたくないな」

竜馬はゾッとした
こんな恐ろしい怪物と共に戦うのはハッキリ言って御免被る
そう言いたげであった
そして、最後の壁が立ちはだかった
早速スバルは文字の解読に入る

スバル
「『我等人の子、遂に冥府の王を封じ込める術を見つける。遥か昔、古代の失われし都より授かった呪われし書。我等はこれを用いて冥府の王を封じ込める事が出来た
だが、黒き魔神もまた神々との戦いに傷つき深き眠りにつく
魔神に選ばれし者・・・『ゼノン』と共に』って書いてありますよ」

スバルが解読を終えた時、最後の壁が開いた
そして、目の前には広い空間が聳え立っていた
一同は部屋の中へ入る
そして、一同は目の前に聳える巨大な石像を見る

甲児

「こ・・・これって・・・・」
スバル
「・・・マジンガー」

甲児達の目の前には絵に描かれていた黒き魔神が聳え立っていた
魔神は物言わぬ石像となって甲児達の前に立っていた

甲児
「間違いない・・・これはマジンガーだ!俺達の知らないマジンガーだ!」

甲児は叫ぶ
そうとしか見えなかった
顔も、体も、腕も、全てが甲児と鉄矢の乗るマジンガーに似ていたのだ
その時、

十蔵
『ヤッホー!甲児、調子はどうじゃ!』
甲児
「お、お爺ちゃん!」
ジェイル
『心配になってね、こうして連絡を入れたんだ』
ウーノ
『何か変わった事でもありましたか?』
甲児
「そうだ!お爺ちゃん、この遺跡にはマジンガーがあったんだ!」
十蔵
『何じゃと!』

それには十蔵も、そしてスカリエッティも驚く

ジェイル
『甲児君、そのマジンガーとやらの映像をこちらに送ってくれないか？』

甲児
「今石像の前に居ますんでそれを送ります」

甲児は目の前に佇む魔神の石像をカメラに捉えて送信した
送信された絵は直ちに十蔵達に送られる

十蔵
『こ・・・これは！』

十蔵は送られた絵を見て驚愕の顔になる
甲児が首を傾げた

スバル
「甲児さあああああああん！こっちにも何か文字が書いてありますよおおおおおおお！」

そんな時、スバルは手を振って甲児達を呼んでいた

甲児
「何だ？まだあるのかよ」

愚痴りながらも甲児達はスバルの元へ向かう
一同がスバルの居た台座に到着する

スバル

「それじゃ読みますね・・・『我等人の子を守りし黒き魔神・・・
我等人の子はこの偉大なる黒き魔神をこの神殿に祭る。
黒き神・・・『ゴッドマジンガー』を此処に永遠に祭る
そして、何時の日か、再びこの地に災いが振り注ぐ時、魔神の戦士
の意思を告ぐ者が現れ、必ずや災いを打ち滅ぼすと信じて』・・・・
・って書いてあります」

スバルが解読を終える
ユーノは目の前に聳(そび)える魔神を見る
魔神は物言わぬ石の塊となって甲児達の前で立っているだけであった

スバル
「でも凄いですよねぇ、こんな大きなマジンガーが凄い昔に戦って
たんですよね」

そう言ってスバルは石像に触れる
その時、スバルの触れた石像が突如光を放つ

スバル
「え？」
甲児
「な、何だ！」
鉄也
「わ、分からん！」

突如眩しい光が甲児達の視界を奪う

スバル
「こ、甲児さん！」

スバルが甲児達の元へ駆け寄ろうとした
だが、

スバル
「え！・・・う、腕が・・・腕が離れない・・・」

石像を触れていた腕がまるでくっついたかのように離れなくなって
しまったのだ
それだけなく、何とスバルの腕が徐々に石像に取り込まれていく

スバル
「ええ！せ・・・石像の中に・・・中に取り込まれるぅ！！」
甲児
「スバル！」

甲児達がスバルの元へ向かおうとした
だが、

バチン！

ユーノ
「うわ！」

何故かユーノだけが弾き飛ばされる

甲児
「ユーノ！」

甲児達が吹き飛ばされたユーノを見た
その時、甲児達を白い膜が覆った

竜馬
「な、何だ！」
隼人
「分からん！」
弁慶
「くそぉ！」

弁慶は膜に触れる
だが、膜はまるで分厚い壁となって弁慶達が出るのを拒む

鉄也
「駄目だ！まるで鋼鉄の壁だ！」
大介
「くっ、こっちも駄目だ！」

大介達が必死に膜を破ろうとするが、膜は全くビクともしない
甲児も膜を破ろうと必死に殴りつけるが、まるで歯が立たない
そんな甲児達の前で

甲児
「スバル！」

目の前では既に半分以上取り込まれたスバルがこちらに向かって手を伸ばしている
まるで救いを求めるかのように

スバル
「こ・・・う・・・じ・・・さ・・・・ん・・・・・・・
た・・・・・・・す・・・・・・け・・・・・」

そう聞こえたのが最後であった
遂には顔も取り込まれていき、最後は右腕も全て石像に飲み込まれてしまった

甲児
「スバル！クソオオオオオオオオオ！」

甲児は両手で膜を叩いた
そして、激しい光が甲児達を襲った

「うわあああああああああああああああああああああ」

甲児達の悲鳴が遺跡内に響き渡る

＊＊＊

ユーノ
「う・・・・うう・・・・」

ユーノは目を覚ました
だが、其処にはユーノ一人しか居なかった

ユーノ

「皆・・・何処に行ったんだ？」

ユーノは立ち上がり必死に甲児達の名前を叫んだ
だが、その叫びに答える者は居らず、只叫び声だけが空しく遺跡内に響き渡るだけであった

＊＊＊

甲児達の異変の一部始終を十蔵とスカリエッティは見ていた

十蔵
「なんて事じゃ・・・まさかあれがこの世界に来ているとは・・・」
ジェイル
「お父さん・・・」

十蔵とジェイルは暗い顔をする

十蔵
「剣造・・・どうやら今回の事件・・・ワシ等には無関係とは行かなくなったぞ」
ジェイル
「はい・・・そうですね」

十蔵とジェイルは甲児に送られた画像を見て険しい顔をした

そう、この写真に写っている魔神こそ、この戦いの鍵を握る存在なのだ
だが、それに気づくのは・・・もう少し先の事

古代のマジンガー！？　終

次回予告

突然見た事も無い場所に飛ばされちまった俺
此処って何処だ？
んでもって、お前・・・まさか、フェイト？

次回『いざ行かん、過去への旅』
次回もこの小説に
テイィィィィィィクオォォォォォォォォフ！

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編終幕　古代のマジンガー！？（後書き）

Ｚ
『次回は遂に無印編か』
作者
「はい、やっと作者の知ってる話に入れましたよ」
Ｚ
『それなら何で最初から無印編やらなかったんだ？』
作者
「いや、初めから無印行くと『ストライカーズ』行く頃には甲児達ってオッサンじゃないですか。それがちょっと嫌だったんで少し捻ってみました♪」
Ｚ
『いや、捻りすぎじゃないのか？（汗』
作者
「反省してます」
Ｚ
『まぁ次回で挽回しろよ』
作者
「はい・・・」

無印編開幕　　いざ行かん、過去への旅（前書き）

今回から無印編スタートです！

無印編開幕　　いざ行かん、過去への旅

甲児は真っ白な空間の中を泳いでいた
と言ってもクロールや背泳ぎではない
只その空間の中を漂っているのだ

甲児
「此処は・・・何処だ?・・・皆は・・・何処だ?」

甲児は周りを見回した
だが、周りには誰も居ない
自分一人であった

???
『・・・・・じ』
甲児
「???」
???
『・・・・うじ』
甲児
「誰だ?」
???
『甲児』
甲児
「誰だ?俺を呼ぶのは」

甲児は声のした方を見た
其処には霧がかってて見えなかったがシルエットからして女性である事が見て取れた

甲児
（何だ・・・俺は・・・この人を知っている・・・何故だ?）
???
『甲児・・・これから私が言う事を良く聞きなさい』
甲児
「あんたは一体何者なんだ!俺達はこれから何処へ行くんだ!」
???
『甲児・・・貴方達はこれから過去への旅に出るのです』
甲児
「過去だと?」

甲児は首を傾げた
一体何故過去に行く必要があるのだろうか
そんな疑問を抱く甲児に声は続ける

???
『甲児・・・これから貴方が歩む旅は悲しき過去の旅
其処には多くの悲しみが満ち溢れています』
甲児
「悲しみ・・・だと?」
???
『ですが・・・その悲しみの運命を受け入れるのも、その悲しみの運命に抗うのも貴方の自由です』
甲児
「一体貴方は何が言いたいんだ!さっぱり訳が分からない」
???
『いずれ、貴方と出会う日が来る・・・でも、それはまだ先の話』

そう言うと霧の女性は徐々に消え始めた

甲児
「ま、待ってくれ！あんたにはまだ聞きたい事があるんだ！」
？？？
『甲児・・・貴方なら悲しき運命を変える事が出来る・・・何故なら、貴方は人間を超えた『魔神』
の力を持っているのだから』
甲児
「魔神の力・・・それって『マジンガー』の事なのか？」
？？？
『さようなら、甲児・・・何時かまた会いましょう』

そう言って霧の女性は完全に消え去った

甲児
「ま、待ってくれ・・・うわあああああああああああああああ！」

それと同時に甲児を強烈な衝撃が襲った
その衝撃により甲児は意識を手放す

＊＊＊

甲児

「う・・・こ・・・此処は？」

目を覚ました甲児の目に映ってきたのは、高級そうなホテルの一室であった
甲児はそのホテルの一室にあるソファーの上に寝かされていたのだ

甲児
「此処は・・・何処だ？」

甲児は起き上がって辺りを見回していた
誰も居ないのだろうか気配を感じない
その時であった

？？？
「あ、もう起きて大丈夫なんですか？」

ふと声が聞こえた
何処か聞き覚えのある声であった
甲児は声のした方を見た
其処には見覚えのある顔が居た
金色の髪を両端に束ねた所謂ツインテールの髪型
穏やかそうな顔立ちをした少女であった

甲児
「ふぇ・・・フェイト！」
フェイト
「え？どうして私の名前を知ってるんですか？」

フェイトと呼ばれた少女は首を傾げた
明らかにおかしい

甲児の知っているフェイトは１９の女性だ
だが、今目の前に居るフェイトはまだ9歳になるかならないかの少女だった
一体どういう事なのだろうか
甲児は理解に苦しむ
そんな中、夢で言われた事を思い出した

？？？

『これから貴方は過去の旅に出るのです』

甲児
（もしかして・・・俺は過去に来てしまったのか？）

甲児はそう思った
嫌、そう思わざるを得なかった
何故なら現に目の前には幼いフェイトの姿があるのだから
フェイトは未だにどうして自分の名前を知っているのか疑問に思っており頭に？マークを浮かべている

？？？

「あ、そいつもう起きたんだ」

すると、また別の声が聞こえてきた
今度は女性であった
オレンジ色の髪をしており頭には犬・・・もとい、狼のような耳が生えており、後ろには尻尾まで生えている

甲児
「誰だ？お前」
？？？

「何？フェイトは知っててあたしは知らないの？酷いなぁ」

女性は不満そうな顔をする

フェイト
「仕方ないよアルフ・・・私はきっと他の誰かと間違えたんだよ」

フェイトがそう言って宥める

甲児
「な！アルフだとぉ！」

甲児はフェイトが言った言葉に驚いた
フェイトもアルフも突然大声を出されたことに驚く

甲児
（どうなってんだ？アルフとは以前会った事があったけど、あの時は確かガキだった筈だぞ！なのに今目の前に居るアルフは大人じゃねぇか・・・しかもボインだし・・・一体どうなってんだ？）

何が何だか訳が分からなくなってきた
甲児は頭から湯気が出る思いになって頭を抱えた

フェイト
「あ、あんまり思いつめないで下さいね。無理しちゃうと大変だし」

アルフ
「フェイト。ひょっとしてこいつお腹減ってるんじゃないの？」

フェイト
「そっか、そうだよね・・・それにもうこんな時間だし・・・えっと・・・」

甲児
「甲児・・・俺の名前は兜　甲児だぜ」

甲児は一応自己紹介をする

フェイト
「甲児さん・・・今からご飯にするんですけど・・・その・・・お腹減ってます？」
甲児
「あ・・・そう言えば腹が減ってたのをすっかり忘れてたぜ。もう腹と背中の皮がくっつきそうだよ」
アルフ
「アハハハ、あんた面白いねぇ」

甲児の例えにアルフが腹を抱えて笑う

フェイト
「それじゃ今すぐ準備しますね」

そう言ってフェイトは台所に向かった
やかんに水を入れる音がする
ふと、甲児は思いだした

甲児
（そう言えば・・・フェイトって料理出来たっけ？）

甲児は思い出した
答えは『ＮＯ』である
だとしたら、このまま行くと晩御飯は・・・

カップ麺
カップ焼きそば
冷凍食品

ジャンクフードの山
はっきり言って食いたくない
そう思った甲児は立ち上がる

甲児
「ちょっと待て！」
フェイト
「ど、どうしたんですか？」
甲児
「フェイト・・・ひょっとして・・・それカップ麺のお湯？」
フェイト
「えっと・・・そうですけど」

予想通りであった

甲児
「飯は俺が作るから、お前はアルフと一緒に机のセッティングをしてくれ」
アルフ
「ちょっとあんた、料理出来るの？」
甲児
「任せろ！料理は得意中の得意だからよ」
フェイト
「でも・・・うち材料殆ど無いですよ・・・アルフが面白そうって言って買ってきた使い方の分からない食材ばかりですし」

フェイトが申し訳なさそうに言う

甲児
「どんな材料があるんだい？」
フェイト
「えっと・・・今冷蔵庫にあるのが全部です・・・」

甲児は早速冷蔵庫の中を見た
確かに殆ど無い
多少変わった食材はあるが、基本的にスッカラカンである
だが、野菜が数種類あるのとお肉に牛乳・・・それに粉類も幾らか揃っている

甲児
「これならあれが作れるな・・・」
フェイト
「何が作れるんですか？」
甲児
「ま、この兜　甲児さんに任せておきなさいって」

甲児はニッコリ笑って言う
フェイトはそれに頷き部屋に戻る

甲児
「さてと・・・そんじゃチャッチャと作っちまうとするか」

甲児が腕まくりをして作業に入る

＊＊＊

アルフ
「あ、何か良い匂いがしてきた！」
フェイト
「本当だ・・・何だろう・・・凄く懐かしい匂い」

セッティングを終えたフェイトとアルフはキッチンから漂う匂いに
心を奪われた
誰しも良い匂いには弱い物だ
そして、甲児が鍋を持ってやってきた

甲児
「はいおまっとさん！今回は甲児シェフ特性シチューだぜぃ」

と言って机の真ん中に置かれたのは鍋一杯に作られたホワイトシチ
ューであった
それを見て二人の目が輝く

アルフ
「あれ？でも家って確かシチューの元無かった筈なんだけど」
甲児
「俺はレトルトは使わない派なんだ。カレーもシチューも一から作
るのが好きだからさ」
フェイト
「凄い！」
甲児

「さ、飯が冷めちまうよ。さっさと食おうぜ」

甲児が後で持ってきた皿とスプーンを配る
付け合せに食パンとサラダもついてきた
ってか、何時作ったんだこの男は（汗）

甲児
「んじゃ、いただきま～す」
フェイト・アルフ
「いただきま～す」

3人は手を合わせて合掌し、シチューを盛って一口食べる
そして、甲児のシチューを食べた二人は思わず目が丸くなる

甲児
「どした？」
フェイト
「お・・・・」
アルフ
「美味しい！」
甲児
「お！本当か？」
フェイト
「うん！凄く美味しいよ！甲児さん！」
アルフ
「ちょっと何！この味・・・ひょっとしてあんたどっかの高級レストランで働いてたの？」

アルフの問いに甲児はかぶりを振る

甲児
「そんなんじゃねぇさ！只家の事情で家事は俺がやってんだ。特に料理は得意なんだぜ」
フェイト
「へ～、良いなぁ」

フェイトはそんな甲児を羨ましそうな目で見る

甲児
「良かったら教えてやろうか？」
フェイト
「ホント！」
甲児
「ああ、暫く厄介になるからな。それに、俺も楽しいし」
フェイト
「うん！有難う甲児さん！」
甲児
「へへ、良いって事よ！」

甲児は鼻を摩る

＊＊＊

やがて鍋一杯に作ったシチューを3人で平らげて片し終えた甲児は

ソファーにもたれかかっていた

甲児
「やれやれ・・・どうやら本当に過去に来ちまったみたいだな」

今にして甲児は此処が過去だと認識した
幼いフェイト
それが過去だと思わせる要因でもあった
だが、それだけでは此処が何処なのか分からない
かと言って余り無用心に二人に聞く訳にはいかない
下手な事をして歴史を変える訳にはいかないのだ
そんな事をすれば『タイムパラドックス』が起きてしまう
元の時間に帰れなくなってしまうだろう

甲児
「難しいなぁ・・・こんな時鉄也さんやリョウ君、それに大介さんが居てくれれば心強いんだけど」

甲児は今更ながら居ないメンバーの名前を呟いた
だが、こんな状況に一人で放り出されるよりは幾分かマシである
そう思っていた時

甲児
「ん？」

甲児はふとフェイトのおかしな行動に目が行った
アルフも一緒だ
二人して玄関に向かっている
確か、今は夜中の１０時だ
子供が出歩くには遅すぎる時間である

甲児
（一体何をする気だ？あいつら）
気になった甲児はこっそり後をつける事にした

＊＊＊

アルフ
「どうやら此処みたいだね。フェイト」
フェイト
「うん・・・そうだね」

フェイトとアルフはとある公園に来ていた
そんな二人を甲児は物陰から見ていた

甲児
（あの二人・・・一体何をする気なんだ？）

甲児はバレないようにそっと見ていた

フェイト
「アルフ、結界は張ってある？」
アルフ

「モチ！これで派手に暴れても問題無いよ」
フェイト
「良かった」

ホッと安堵してフェイトは手を水平に翳すと、手の甲に付けていた三角状の物を見る

フェイト
「起きて、バルディッシュ」
バルディッシュ
『ｙｅｓ，ｓｉｒ』

機械的な音声が響くと同時に甲に納まっていた物体は宙に浮び、黒い杖になる

甲児
（ありゃぁ、バルディッシュ・・・でも、形が弱冠違う・・・カードリッジシステムが無い・・・初めは無かったのか）

チラリと見ただけで形状を分析する甲児
そんな甲児に気づかず、フェイトはバルディッシュを持ってある物を探す

フェイト
「・・・・あった！」
アルフ
「本当だ！」

二人はすぐに草むらの中に駆け寄る
そして、何やら青く輝く石のような物を拾う

甲児
（何だ？あれは）

甲児には只の光る石ころにしか見えなかった
だが、それをフェイトがバルディッシュで触れると、突如その石は
吸い込まれるようにバルディッシュの中に消えていった

甲児
（な！・・・消えた？）

甲児は己が目を疑った
だが、事実であった
確かに青い石はバルディッシュの中に消えていったのだ

フェイト
「ふぅ・・・どうにか暴走を起こす前に回収出来たね」
アルフ
「上出来上出来！さ・・・甲児が心配する前にさっさと帰ろうよ」
フェイト
「うん！」

フェイト達が踵を返して帰ろうとする

甲児
（不味い・・・さっさとずらかるか）

甲児も急いで戻ろうとした
その時、

？？？
『ギシャアアアアアアアアア！』
甲児
「何だ！」
甲児の耳に突如獣の叫び声が上がった
急いで振り返る
すると、其処には・・・

＊＊＊

それは突然二人の前に現れた
大きい、パッと見て２０ｍ位はある
骸骨のような顔をして耳には２本の巨大な鎌が付けられている
かなり醜悪なデザインであった

アルフ
「な、何あれ！」
フェイト
「分からない・・・でも、あれからも反応がある」
アルフ
「マジ？」

アルフは信じられないと言った顔をしていた

フェイト
「反応があるのなら回収しなきゃ！」

アルフ
「ちょっ、無茶だよフェイト！相手がでか過ぎるよ！」

フェイト
「でも、このまま放っておいたら町が滅茶苦茶にされちゃう」

甲児
「俺に任せろ！」

フェイト
「え？」

アルフ
「甲児・・・来てたの？」

アルフとフェイトの前に甲児は歩み出た
こうなってしまったら知らぬ振りなど出来ない
それが兜　甲児なのだから

アルフ
「任せろって言うけど、一体どうやってあいつと戦う気なのさぁ？」

甲児
「こうするのさ！・・・ジェットパイルダァァァ！」

甲児は天に向かって叫ぶ
すると、上空から一機の小型機が降りて来た
そして、それは甲児の目の前に降り立つ

甲児
「よし、どうやらこの世界でも召還は可能みたいだな」

アルフ
「ちょ、何それ！」
甲児
「見てな、今に度肝を抜いてやるからよ」
そう言って甲児はパイルダーに乗り込むと上昇する
そして、

甲児
「マジィィィンゴォォォォォ！」

甲児は叫ぶ
すると、パイルダーの真下に巨大な魔方陣が現れる
そして、その中から黒き魔神「マジンガーZ」が現れた

アルフ
「わ！また何か出た！」
フェイト
「大きい・・・大きな巨人」

二人が見てる中、甲児の乗ったパイルダーがマジンガーの真上に位置する
そして

甲児
「パイルダァァァオォォォォォォン！」

マジンガーの頭部にパイルダーがドッキングする
両目が光り輝く
両手を天に翳して雄たけびを挙げる

今、正にマジンガーZは甲児の手足となったのだ

甲児
「行くぞ！」

甲児は目の前に居た敵に構える
怪物は頭についていた鎌を取り外すと、主室に振り下ろした

甲児
「おっと！」

それを咄嗟に掴む
ギギギと機械の軋む音がし、マジンガーの足が僅かに地面に沈む
凄まじいパワーだ

甲児
「んなろぉ！パワーで俺とマジンガーに勝てると思ってんじゃねぇ！」

甲児は力任せに怪物を持ち上げた
そして前に向かって放り投げる
突然の出来事に怪物は対応出来ずそのまま背中から地面に落下する

アルフ
「うっはぁ！フェイト今の見た！凄いじゃんあの巨人、あの怪物を投げ飛ばしたよ」
フェイト
「うん、凄いね」

その光景にアルフとフェイトは興奮気味であった

そんな中、甲児のマジンガーは戦いを続ける

甲児
「うおおおおおおおお！」

倒れた怪物に馬乗りになってひたすらに殴り続ける
右、左、右、左と交互に拳を怪物の頭に叩きつける
怪物の顔が歪に歪んでいく
トドメにと顔面に向かって拳を叩きつけようとした時

？？？
『ガアアアアアアア！』

怪物は突如マジンガーに向かって炎を吐いた
猛烈な熱気がパイルダーを通して甲児に伝わる

甲児
「うわっ！」

思わず飛び退く
その隙に怪物は立ち上がり体制を立て直す
そして、手に持った鎌を思い切りマジンガーに向かって投げつけた
甲児は未だに視力が回復してないのか目を擦っていた
その為対応が遅れる
だが、

ガキン

甲児

「な！」

甲児は目の前で信じられない光景に出くわした
それは、自分に向かって投げつけられた鎌をフェイトが抑えたのだ

フェイト
「くううぅぅ！」

だが、凄まじい衝撃が彼女の体を襲う
幸い命中は避けられたがその拍子にフェイトは後ろに吹き飛んでしまう

甲児
「あぶねぇ！」

そんなフェイトをマジンガーの腕が救う
甲児は掌で気を失っているフェイトを見てホッとする
どうやら外傷は無いみたいだ
そんな時、怪物が再びもう一つの鎌を投げようとしていた

甲児
「野朗！調子に乗るんじゃねぇ！ブレストファイヤァァァ！」

マジンガーの胸の放熱板から超高温の熱線が放たれる
その熱線は瞬く間に怪物を包み込み、物の数秒で溶かしてしまった

甲児
「ふぅ・・・結構やばかったかな？」

額の汗を拭って甲児が呟く

＊＊＊

フェイト
「う・・・うう・・・」
甲児
「気がついたか？」
フェイト
「あ、甲児さん！」

フェイトは起き上がろうとする
だが、それを全身の激痛が許さなかった

フェイト
「つっ！」
甲児
「無理すんな！あんな物を受け止めたんだ！体が悲鳴を挙げるのも
無理ねぇよ・・・それより」

甲児はフェイトに向かって青く輝く石を見せた

フェイト
「あ！」
甲児

「探してたんだろう？」
フェイト
「・・・見てたんですか？」
甲児
「ああ・・・正直悪いと思ってたけどよぉ」
甲児はバツの悪い顔で頭を掻く

フェイト
「御免なさい・・甲児さん」
甲児
「ん？何でフェイトが謝るんだ？」
フェイト
「私がもっと早くあのジュエルシードの反応に気づいていれば甲児さんを巻き込まなかったのに」

フェイトが突如暗い顔をする
こいつ・・こんな暗い奴だったっけ？
少なくとも現在の世界で会ったフェイトはこんな暗い顔はしなかったもっと明るかった
となると、彼女の身にきっと何かあったのだろうと容易に想像出来たそう思った甲児はそっとフェイトの頭を撫でる

甲児
「なぁに、気にすんなよフェイト」
フェイト
「甲児さん」
甲児
「あんなの俺に掛かれば朝飯前さ！それにな、これは俺が自分で首を突っ込んだんだ。お前のせいじゃねぇよ」

フェイト
「で・・・でも・・・」
甲児
「はい、其処まで！」

これ以上何か言おうとするフェイトを無理矢理甲児は止めた

甲児
「続きはとりあえず帰ってからにしようぜ。此処に居ると何かと面倒事に巻き込まれちまうしよ」
フェイト
「あ・・・うん」
アルフ
「フェイト、立てる？」
フェイト
「大丈夫だよ、アルフ」

フェイトは自分の足で立とうとするだが、足元がふらつくのかすぐにバランスを崩してしまう

甲児
「おっと！」

だが、そんなフェイトを甲児が庇う

甲児
「ったく、フラフラじゃねぇか・・・無理しやがって」
フェイト
「御免なさい」
甲児

「しょうがねぇなぁ・・・よっと」
フェイト
「ええ！／／／」

甲児はフェイトを抱きかかえた
所謂「お姫様抱っこ」である
普通の女性ならこんな格好されたら少し恥ずかしい

フェイト
「こ・・・甲児さん／／／」
甲児
「あんま動くなよ、すぐに帰るからよ」
フェイト
「は・・・はい・・・／／／」

甲児の一言を聞いてフェイトは大人しくなった
それを見てアルフが面白そうな顔をする

＊＊＊

甲児達の戦いを遠くから見つめる影があった
？？？
「やれやれ、やっとお出ましかい？」

茶色いサングラスを掛けた軽そうな男が呟く

???

「だが、1体のようだな・・・女将の話しだと4体居ると聞いていたが・・・」

スキンヘッドの上に顔に十字の傷を負った男が顎にてをやって呟く

???

「なぁに、その内出てくるんじゃねぇのぉ?」

メキシカンの格好をした細身の男が銃を舌で舐めながら言った

???

「・・・・・・・・・」

脇に刀を挿した男が無言で甲児達を見ていた

???

「何にしても、此処は女将に報告せにゃならんな」

???

「あぁ、こりゃ忙しくなりそうだなぁ」

???

「へへ、退屈せずにすみそうですねぃ、先生」

???

「・・・・・(コクッ」

遠目から甲児達を見つめる4人の影

彼等は一体何者なのだろうか

そして、彼等の目的は一体
そして、彼等は甲児の味方なのか・・・それとも、敵なのか？
それは、また後の話しで

いざ行かん、過去への旅　　終

次回予告
いやぁ参ったぜ、目を覚ましたら過去に来ててそんでもってフェイトがあんなちっこいんだもんなぁ
あれ？そう言えば他の皆は何処に居るんだ？
次回『魔法少女と偉大な勇者』
次回もこの小説に
テイィィィィィクオォォォォォォォフ！

無印編開幕　　いざ行かん、過去への旅（後書き）

次回はなのはの話を書くつもりです

魔法少女と偉大な勇者（前書き）

今回、幼いなのはと偉大な勇者がメインです

魔法少女と偉大な勇者

甲児とマジンガーZの戦いは翌朝には新聞沙汰になっていた

甲児
「『突如現る謎の2体の怪ロボット・・・内一体を撃破・・・黒いロボットの行方は以前として不明・・・果たして、敵か味方か』・・・かぁ・・・やっぱこの世界じゃマジンガーは知られてないんだなぁ（汗」

今朝届いた新聞を読んで落胆する甲児
その新聞には何とデカデカとマジンガーZが映っていたのだ
何時の間に撮られたのか
それ以前に

甲児
「敵か味方か・・・かぁ・・・元居た世界じゃ押しも押されぬ英雄なのに、こっちじゃ危険な兵器になっちまうんだなぁ・・・Z」

Z
『全くだな・・・俺は十蔵博士からお前の言う事を聞くように作られたからどうなるかはお前次第だがな』

甲児
「有難うよZ・・・だけど俺は絶対にお前を悪魔にしたりはしねぇよ」

Z
『そりゃどうも』

甲児の嵌めているZグローブからZの声が響いている
因みにマジンガーは戦いの後すぐさま魔方陣で退去させた

あのまま居座らせたら何かと迷惑になるし、最悪警察沙汰になってしまう
そうなるとフェイト達に迷惑が掛かってしまうし、第一格好が悪いそう思っていた

フェイト
「でも、凄いんですね・・・マジンガーって」
甲児
「ん？フェイトか」

甲児の後ろからフェイトが新聞に載ってる写真を見て呟いた
余談だが、アルフは今散歩中である

フェイト
「甲児さんはあんな『ロストギア』を扱って平気なんですか？」
甲児
「ロストギア？それって昨日集めてたジュエルシードと同じ奴の事か？」

甲児の問いにフェイトが頷いた
それを聞いて甲児が頬を掻く

甲児
「あのな、フェイト・・・マジンガーは兵器でも無ければロストギアでも無いんだ」
フェイト
「え？じゃぁ何ですか？」
甲児
「人類の平和を守る正義の魔神さ」
フェイト

「ま・・・魔神？」
甲児
「神にも悪魔にもなれるから間を取って『魔神』って俺は呼んでるんだ」

甲児が自信たっぷりに言う
それを聞いたフェイトの目が輝く

フェイト
「魔神・・・何だか凄くカッコイイですね！」
甲児
「お！分かる？」
フェイト
「はい！凄く」

フェイトの反応に甲児は何処かくすぐったい思いになった
そして、気晴らしにテレビを付ける
すると

テレビ
『それにしても先生、まさか一夜の内に４体の巨人が現れるなんて驚きですねぇ』
『ええ、しかも内２体は同時に現れた黒い巨人によって破壊されてますからね・・・全く、これが何かの前触れで無ければ良いのですが・・・』

甲児
「何！４体だと！」

甲児はテレビで報じられる内容に驚いた

まさか、他にも巨人が現れたのか？
そう思っている甲児を他所にニュースは続けられる

テレビ
『先生、それで、巨人を倒した黒い巨人は一体何だったのでしょうねぇ？』
『さぁ、それは分かりませんねぇ、映像はこちらになりますが・・・』

そう言ってテレビに映像が映し出される
１体は甲児のマジンガーＺであり、もう一体は

甲児
「な！グレートマジンガー！」

甲児は声を挙げた
そう、其処に映っているのは紛れも無くグレートマジンガーだったのだ

フェイト
「甲児さん、知ってるんですか？」
甲児
「ああ、俺の仲間だ」
フェイト
「え！」

そう聞いてフェイトもテレビを見た
其処には未だに2体の『魔神』について激しい議論を続けているテレビの映像があった

＊＊＊

海鳴市　喫茶店　『翠屋』　リビング

此処にまた、甲児と同じようにテレビを見る二人が居た
一人は９歳位の少女である
そして、もう一人は２０代の男性であった
少女がテレビの映像を見て男性の顔を見る

なのは
「結構大騒ぎになっちゃいましたね・・・鉄也さん」
鉄也
「ああ・・・」

少女「高町　なのは」の横で男性「剣　鉄也」は重い顔をした
無理も無い
こうしてテレビに堂々と載ってしまったのだから

なのは
「やっぱりあれだけ大きいと騒ぎも大きくなりますよね（汗」
鉄也
「だが、あそこで俺が止めに入ってなければお前が大変な目にあってた筈だ」
ユーノ

「そうだよ、鉄也さんの言うとおりだと思うよ」
鉄也の横からいた・・・失礼、フェレットが現れてなのはに語る
なのは
「うん、そうだね・・・ユーノ君」

なのはは『ユーノ』と名乗るフェレットに向かって言った
読者の皆様には訳が分からないであろう
何故剣　鉄也が此処に居るのか
何故グレートが知れ渡ってしまったのか
その話をする為には、一度時間を戻す事にしよう

全て、は・・・昨日に起こった出来事なのだ

＊＊＊

1日前　正午

私、「高町　なのは」は海鳴市に住む極普通の小学3年生です
家族はお父さんとお母さん、それにお兄ちゃんとお姉ちゃんの合わせて5人家族
皆お互い仲が良くて・・・少し私だけ仲間外れな気がするのは私だ

けでしょうか（汗）
ですが、今日この日、家に新しい家族が増える事になるとは、この時はまだ知りませんでした

なのは
「あのフェレットさん・・・大丈夫かなぁ？・・・」

この日、私は友達のアリサちゃんとすずかちゃんと一緒に道で怪我したフェレットさんを動物病院に連れて行きました
お医者さんの話しだとフェレットさんは大した怪我じゃないのですぐに退院出来るって言ってました

アリサ
「心配性ねぇ、なのはは・・・」

なのはの横で友達のアリサ・バニングスが溜息を漏らす

すずか
「しょうがないよ、私も少し心配だし・・・でも、退院出来たとして、どうするの？」

友達の月村すずかが聞く

アリサ
「う～ん・・・家じゃ無理ねぇ・・・犬居るし（汗」

すずか
「家も・・・猫が（汗」

なのは
「家は・・・何も飼ってないよ・・・でも、大丈夫かなぁ・・・」

なのはが心配そうな顔をする
とりあえず、家族に相談してみる事にする・・・と言って今日は帰る事にした
そして、家に入ろうとした時、ふと、上から何かが来る気配を感じてなのはは上を向いた
そして、目を点にした
何故なら

なのは
「ウヒャァ！」

思わず声をあげてその場から離れる
それとほぼ同時に一人の男性が降って来たのだ
なのはは降って来た男を見る
年齢はパッと見て２０代に入った位であり、所々からみられる傷跡が彼の歩んでいた人生が決して平坦な道では無い事を思わせていた
そして、何よりも彼の服装は何故かボロボロであった
体の節々も傷だらけであり、かなりの重傷だと幼いなのはでも理解出来た

なのは
「ど・・・どうしよう・・・このままだと・・・この人・・・」

死んでしまう
そう思えた
だが、そうは言ってもなのはにはどうすれば良いのか分からずオロオロしてしまう
無理も無い
まだ幼い少女が突然空から降ってきて、しかも傷だらけの男が目の前に現れたのだ

平静を保つ事事態無理な話である

???

「どうしたんだい？なのは」

なのは

「あ、お父さん！」

其処へなのはの父「高町　士郎」が現れた

どうやら店も終り帰って来たようだ

なのはは目の前に居る男性を指差し事の経緯を説明した

士郎

「成る程、確かにこのままじゃ危険だ・・・すぐに治療しよう」

そう言って士郎は青年を抱えて家に入っていった

なのはもそれに続く

＊＊＊

士郎となのはが青年の治療を終える頃には家族全員が集合していた

此処で高町家全員を紹介しておこう

まずは、ご存知一家の大黒柱である「高町　士郎」喫茶店『翠屋』

を経営している

近所のサッカーチームのコーチを務めている

だが、彼には色々と謎が多い

続いて長男の「高町　恭也」士郎の指導の元かなりの腕前を持つようになった
かなりのシスコン気味である

今度は長女の「高町　美由紀」高町家の長女でありなのはの姉に当たる
兄恭也から武術を習っているのだが、こいつら本当に兄妹なのかと思われる程仲が良い

そして、士郎の妻の「高町　桃子」士郎とは新婚並にラブラブである『翠屋』を立ち上げた張本人
かなりの菓子の腕前を持つ

そして、高町家次女の「高町　なのは」言わずと知れた恭也と美由紀の妹であり、未来のエース・オブ・エースである
だが、この時はまだ普通の小学3年生である

そんな高町家が治療を施した青年を見下ろしていた

恭也
「なのは、本当にこの人空から降って来たのか？」

恭也が未だに信じられないと言った顔で聞く

なのは
「うん、勿論だよ！私この目で見たもん」
美由紀
「でも何で家に？しかも玄関の前に？」
恭也

「窓から侵入しようとして落ちたんじゃないのか？」

士郎

「嫌、それは無いだろう」

恭也の意見を士郎は切り捨てた

恭也

「どうしてそう言いきれるんだい？父さん」

士郎

「この人の体に刻まれている無数の傷がそう語っているのさ・・・恐らく、彼の歩んできた道はとても険しく、辛い道だったんだろう」

士郎は青年の体に刻まれた傷跡を見て同情の視線を送った

桃子

「まぁ、何にしても治療は施したから暫くすれば目を覚ます筈よ」

周りを落ち着かせる為に桃子が言う

すると

青年

「う・・・こ・・・此処は！」

青年はゆっくりと目を開けた

なのは

「あ！起きた！」

そんな青年を見ようとなのはが身を乗り出す

青年
「・・・・誰だ?」
士郎
「ほら、なのは・・・君、怪我の方は大丈夫かい?」
青年
「怪我?・・・・グッ!」

士郎に言われて初めて自分が怪我を負っていた事を知る
そのせいか顔が歪んでいく

士郎
「無理はしない方が良い、僕から見ても君はかなりの重傷を負っていたんだ」
桃子
「暫くはゆっくりしていくと良いわ」
青年
「すまない・・・」

士郎と桃子に言われて青年は再び横になった

なのは
「お兄さんは一体誰なの?」
青年
「俺か?・・・俺は・・・・・・・・・『誰』だ!」
なのは
「え?」
青年
「俺は一体誰なんだ!思い出せない!俺は一体誰で何故こんな傷を負ってしまったんだ!思い出せない・・・何も、思い出せない!」

青年は頭を抱える
余程自分の過去を知りたがっているのだろう

恭也
「おいおい、無理して思い出そうとしても体に響くだけだぞ」
美由紀
「そうそう、それに記憶が無いのなら尚の事安静にしてないと」
青年
「くっ・・・」

青年は苦虫を噛み潰すような顔をする

士郎
「記憶喪失か・・・辛いだろうな・・・ところで、君は何か身分証明出来る物とか持ってないのかい？」
青年
「身分証明？」

青年は士郎に言われて自分の体の周囲を探った
すると、１枚の写真を取り出した
其処には、髭を生やした白衣を身に纏った男性と日焼けした肌の少女、それに男性に抱きつく少年が居た

青年
「これは・・・」

青年は写真の裏を捲った
其処には殴り書きで『剣　鉄也』と書かれていた

鉄也

「剣・・・鉄也・・・これが俺の名前なのか？」
なのは
「へぇ、鉄也さんって言うんだぁ・・・私、高町　なのはって言います。宜しくね」
士郎
「お！最初に自己紹介をとられてしまったな・・・僕は高町　士郎。此処に居る子供達の父親だよ」
桃子
「私は高町　桃子。この子達の母です」
恭也
「僕は高町　恭也。宜しく、鉄也さん」
美由紀
「私は高町　美由紀と言います。何か困った事があったら何でも言ってね」

高町家全員が鉄也に自己紹介をする
それを聞いて鉄也も不器用ながら自己紹介をする

鉄也
「剣・・・鉄也だ・・・暫くは厄介になる・・・頼む」

そう言って鉄也は頭を下げる

なのは
（こうして、私達高町家に新しい家族が増えました
ちょっと怖い顔だけど、凄く優しい・・・私の、もう一人のお兄ちゃんです）

＊＊＊

鉄也が来て暫くした後、なのはは自室に戻っていた
既に夕食は済ませてあり、皆はそれぞれの部屋に戻っていた
因みに鉄也は『何処でも構わない』と言う事なので不本意ながら屋根裏部屋に寝て貰う事になった

なのは
「はぁ・・・新しいお兄ちゃんかぁ・・・」

なのははふと鉄也の事を考えた
少し怖い顔付きをしていたが、同時に何処か父・士郎に似た安心感が感じられた
ひょっとして、あの人には子供が居るのかなぁ?と思えた

なのは
「鉄也さん・・・早く記憶が戻ると良いなぁ」

そう呟いていた
すると、

???
『助けて!』
なのは
「え?」
???

『助けて！』
なのは
「だ、誰？」

なのははは自分の頭の中に語りかける言葉に飛び起きた
それは、以前自分が怪我したフェレットを見つける際に聞いた声に似ていた

なのは
（もしかして・・・あのフェレットさんに何かあったんじゃ）

そう思ったなのはの行動は早い
すぐに外着に着替えて玄関を飛び出す

鉄也
「何処へ行くきだ？」
なのは
「鉄也さん！」

玄関を出ると、壁にもたれかかるように鉄也が立っていた

鉄也
「子供が出歩く時間じゃないぞ」
なのは
「鉄也さん！行かせて下さい！あの子が・・・あの子が私を呼んでるんです！」
鉄也
「あの子？・・・あの子とは一体誰だ？」
なのは
「ええと・・・私がお昼に助けたフェレットさんなんです・・・き

っと何か恐ろしい目にあってる筈なんです」
鉄也
「・・・・・」

鉄也はなのはの目を見た
その目は真剣そのものであった
恐らくこのまま止めてもきっと自分を押し倒してでも行くつもりだろう
そう思った鉄也は軽く溜息をつく

鉄也
「分かった・・・俺も行こう」
なのは
「え？」
鉄也
「お前達には恩義がある、軽い恩返しとでも思ってくれ」
なのは
「でも・・・それじゃ鉄也さんも怒られちゃう」
鉄也
「それなら心配ない」

そう言って鉄也はある物を取り出した
それは、火の用心と呼びかける際に使う拍子木が握られていた

なのは
「それは？」
鉄也
「丁度市内の見回りの当番が回って来たんだ。だからそれについて行った・・・と言っておけばお咎めは無いだろう」
なのは

「て・・・鉄也さん」
なのはの顔がパッと明るくなる
鉄也
「さ、行くぞ」
なのは
「はい！」
鉄也となのはは急ぎフェレットの居る動物病院に向かった
＊＊＊
なのは
「此処です」
鉄也
「動物病院・・・此処にそのフェレットが居るのか？」
なのはと鉄也は明かりの消えた動物病院に辿り着いていた
突如、その入り口が激しい爆発を起こす
鉄也
「危ない！」
なのは

「ひゃぁ！」

咄嗟に危険を察知した鉄也がなのはを抱えて飛び下がる
そのそして、激しい爆煙が動物病院の入り口から出てくる

なのは
「な・・・何？」
鉄也
「これは・・・むっ！」

ふと、鉄也は視線の先に包帯を巻いたフェレットが飛び出すのを見た
その後ろから、異形の化け物がフェレットを追い掛け回していた

？？？

『ガアアアアアアアアアアアア！』
なのは
「ヒッ！」
鉄也
「クッ・・・高町！下がってろ」

鉄也はそう言って駆け出す

鉄也
「はあああああああ！」

そして、異形の化け物に向かって渾身の蹴りを当てる

？？？

『グエエエエエエ！』

化け物は鉄也の蹴りを受けて仰け反る
だが、それだけであった
蹴った鉄也の足を化け物は掴みそのまま壁に叩きつける

鉄也
「ガハッ！」

凄まじい衝撃が鉄也を襲う
口から血を吐き出す
だが、それでも化け物は鉄也を今度は地面に叩きつけようとする

鉄也
「いい加減にしろ！」

そんな化け物に鉄也は渾身の鉄拳を当てる
鉄拳は化け物の顔面に当たり、顔を抑えて蹲る
その隙に鉄也は化け物から距離を開ける

なのは
「鉄也さん！大丈夫ですか？」
鉄也
「ああ、どうやら俺の体はかなり頑丈らしい・・・それより、お前はすぐに逃げろ！」
なのは
「え？」
鉄也
「こいつは明らかにヤバイ・・・俺が時間を稼ぐから早く逃げろ！」
なのは
「そんな！・・・それじゃ鉄也さんが・・・」
鉄也

「言うとおりにしろ！」

渋るなのはに鉄也は怒鳴る
一瞬なのはは怯える
そんななのはを見て鉄也は一言「すまん」と言って再び化け物に向かっていく

鉄也
「うおおおおおおおおお！」

鉄也と化け物は激しい殴り合いを展開する
鉄也が化け物の顔に鉄拳を叩き込めば、化け物は鉄也の原に突きを放つ
化け物が鉄也の脇腹に重い一撃を当てれば、お返しにと鉄也の蹴りが化け物の腹に響く
正に一進一退の攻防であった
しかし、忘れないで欲しい
鉄也は今重傷を負っているのだ
そのペナルティが少なからず鉄也を苦しめる

鉄也
「ぐう・・・」

鉄也の顔に苦悶の表情が伺える
服のあちこちから血が滲み出てきた
だが、それでも鉄也は攻撃の手を緩めない

なのは
「どうしよう・・・このままじゃ鉄也さんが・・・」

なのははは手に傷ついたフェレットを抱えながらどうすれば良いか悩んでいた
その時、
？？？
「う・・・うう・・・はっ！」
なのは
「あ！気がついたんだね」
？？？
「此処は・・・そうだ！奴は」
なのは
「え？・・・えええええええええええ！」

なのははは思わず叫んだ
無理も無い
何故なら今なのはの手に収められているフェレットが喋ったのだから

？？？
「あ？・・・えっと・・・君は・・・確か・・・僕を助けてくれた・・・」
なのは
「あ・・・私、高町なのはって言うの・・・えっと・・・君は？」
ユーノ
「僕はユーノ・・・「ユーノ・スクライア」って言います。それよりあの化け物は」
なのは
「あ！そうだ」

なのははははっとして鉄也を見る
かなり旗色が悪くなっている

重傷の傷跡が更に開き出し、出血の量が増している
このままでは危険だ

ユーノ
「なのはって言ったよね・・・これを使って」
なのは
「え？」

ユーノはなのはに赤い玉を差し出す

なのは
「何？これ・・・」
ユーノ
「あれに対抗出来る物だよ。僕じゃ扱えないけど・・・僕の念話を聞けた君なら使える筈」

ユーノに言われてなのはは赤い玉を手に取る

ユーノ
「それを持って強く念じるんだ」
なのは
「ね、念じる？」
ユーノ
「そう、自分の戦う姿を・・・強い姿を・・・」
なのは
「強い・・・姿・・・」

なのはは瞬時に脳裏に思い描いた
白い法衣を身に纏い戦う自分の姿を

ユーノ
「そして叫ぶんだ！『セットアップ』と」
なのは
「セェェエエットアァァァァァァップ！」

なのはは叫んだ
すると、彼女の周りを桜色の光が包み込む

なのは
「ふぇぇぇぇ！一体なにぃぃ！？」
ユーノ
「怖がらなくて良い！そのデバイス「レイジング・ハート」が君の思いに答えようとしてるんだ」
なのは
「れ・・・レイジング・・・ハート？」

なのはは首を傾げる
その光景は戦っていた鉄也にも見えた

鉄也
「な、何だあれは？」

やがて、桜色の光が晴れると、其処には白い法衣を身に纏ったなのはが居た

なのは
「え・・・えええ・・・えええええええええええええええ！」

突然の事になのはは驚く
それは当然であろう

いきなり光に包まれて、しかも光が晴れたと思ったら何と今度は頭でイメージした法衣を身にまとっているのだから

ユーノ
「凄い・・・やっぱり彼女には僕以上の素質があったんだ」
なのは
「ね・・・ねぇ・・・これって一体・・・」
ユーノ
「危ない！」
なのは
「え？」

なのはは振り返った
すると、突如狙いをなのはに変えて化け物が飛び掛ってきたのだ

鉄也
「高町！」
なのは
「き・・・きゃぁぁぁ！」

思わず手を翳して防ごうとした
当然そんな物では防げる筈が無い
化け物の爪がなのはを襲おうとした時、突如見えない何かによって阻まれてしまった

？？？

『ガアアアアアア！』

化け物はその力に驚き距離を開ける
なのははその力に驚く

なのは
「え？一体何？・・・私がやったの？」
鉄也
「無事か？高町」

驚くなのはの元に鉄也が駆けつける
所々から血が出ているが、本人は気にしてない

ユーノ
「なのは！あの化け物を封印して！」
なのは
「え？どうやって！」
ユーノ
「君の頭に既に描かれている筈だよ！魔法が！」
なのは
「ええ！ま、魔法？」
鉄也
「魔法・・・だと！」

その言葉になのはのみならず鉄也も驚く
なのはは戸惑うが、言われた通りに頭に思い描いていた技を思い出す
そして、杖を化け物に向けて構えると、その先から桜色の閃光が飛び出した

？？？
『ギイエエエエエエエエエ！』

化け物は苦悶の声を挙げた
先ほどの一撃のせいなのか化け物のどてっぱらには大きな穴が開い

ている

ユーノ
「凄い！これなら」
なのは
「え・・・今の私がやったの？」

思わず戸惑うなのは
化け物は勝てないと判断したのか逃げの体制に入る

鉄也
「む！アイツ逃げる気だぞ！」
ユーノ
「いけない！なのは、追いかけて！」
なのは
「う、うん！」

なのはが追撃を放とうとしたとの時、

？？？
『ギシャアアアアアア！』

突如別の泣き声が聞こえた
そして、逃げに入った化け物を巨大な何かの腕が掴み挙げる

なのは
「えええええ！な、何？」
ユーノ
「あれは・・・」
鉄也

「でかい・・・」

3人（正確には1匹）の目の前には2本の首を持った巨大な怪物が
化け物を握りつぶしていた

???

『グギャアアアアアア』

握りつぶされた化け物が断末魔の悲鳴を挙げて砕け散る
そして、怪物の腕には小さな青い宝石が残っていた

ユーノ
「ああ！あれは」

ユーノは叫ぶ
しかし、怪物はその宝石を何と自らの口に放り込んで飲み込んでしまった

???

『ギシャアアアアアアアア！』

そして、眼下に居るなのは達を見下ろす
思わずこけそうになるなのは
ユーノも及び腰である
だが、鉄也は何処か引っかかる思いがした

鉄也
「何だ・・・俺は、アイツを見た事がある・・・だが、何故？」

喉の奥で引っかかるような不快な思いが鉄也を襲っていた

そんな鉄也達に向かって怪物が思い切り足を振り下ろした

鉄也
「は！危ない！」
なのは
「ニャァ！」
ユーノ
「わっ！」

鉄也は咄嗟になのはを抱えて飛びのき、ユーノもそれに続く
それのほぼ直後に怪物の足が落とされる
後数秒回避が遅れていたらペシャンコであった

鉄也
（くっ・・・どうする・・・あんな怪物に対抗出来る力があるのか？）

鉄也は歯噛みした
何か・・・何かある筈なんだ
そう思っていた

ズキン

すると、突如鉄也を激しい頭痛が襲った

鉄也
「ぐぅっ・・・な、何だ？」

鉄也の脳裏に断片的なイメージが描かれる
それは、自分に向かって赤い戦闘機が降り立つ場面であった

そして、鉄也はその戦闘機の名前をこう呼んでいた

鉄也
「ブレェェェンコンドル！」

咄嗟に鉄也は叫んだ
すると、空の彼方から赤い戦闘機が降り立つ

鉄也
「これは・・・」

鉄也は見た
これこそ先ほど自分の脳裏に描かれた戦闘機と同じなのだ
これに乗ればあの怪物と戦えるのだろうか
疑いの思いも込みながら鉄也はブレーンコンドルに乗り込む

鉄也
「俺はあの怪物を何とかする。お前達は安全な場所に隠れてろ」
なのは
「ええ！て、鉄也さん！」
鉄也
「行くぞ！ブレーンコンドル」

鉄也が操縦桿を握りコンドルを飛ばす
その飛行速度は凄まじく、思わず鉄也も苦悶の表情になる
だが、それもすぐに慣れた
そして、眼前に広がる怪物を見る

鉄也
「この野朗！これでも食らえ！」

コンドルが怪物に向かってミサイルを放った
ミサイルは怪物の頭部に命中して爆発する

鉄也
「どうだ？」

爆煙の晴れた時には、無傷の怪物がブレーンコンドルに向かってレーザー砲を放っていた

鉄也
「くっ！」

身を翻してかわすコンドル
駄目だ！このままでは勝てない
どうすれば勝てるんだ
鉄也は再び悩んだ
すると、また彼の脳裏に別のビジョンが浮ぶ
それはコンドルに乗った鉄也が黒き魔神を呼び出し、それとドッキングする姿であった
もしかしたら、これこそが怪物を倒せる力なのかもしれない
そう思った鉄也は藁にも縋る思いで叫ぶ

鉄也
「マジィィィィィィィィィィンゴォォォォォォォォォォ！」

鉄也は叫んだ
すると、コンドルの真下に巨大な魔方陣が現れ、其処から黒き巨人が姿を出した

ユーノ
「ま、また怪物が現れた！」
なのは
「黒い・・・巨人」

なのは達は突如現れた黒い巨人・・・嫌、黒い『魔神』を見た
そして、その魔神の頭部に向かってコンドルが急降下していく

鉄也
「ファイヤァァァァァオォォォォォォォン！」

コンドルが魔神の頭部とドッキングする
魔神の両目が光り輝く
この時、鉄也は魔神と一体になったのだ

鉄也
「こいつは・・・分かる！分かるぞ！俺はコイツの動かし方が分かる！ようし・・・行くぞぉ！」

鉄也は叫び猛然と怪物に向かって飛び掛る
魔神の鉄拳が怪物を吹き飛ばす

？？？
『ギエエエエエエエエ！』

殴り飛ばされた怪物がそのまま大地に倒れる
凄まじいパワーだ
あの怪物を殴り倒すなんて
そのパワーに鉄也自身も驚いていた
だが、怪物もヨロヨロとだが起き上がる

すると、2本の顔から突如レーザー砲を発射した

鉄也
「うおっ！」

咄嗟に両腕をクロスしてガードする
そのガードした腕目掛けてレーザー砲が放たれる
凄まじい閃光と火花が散る
だが、魔神には全く効いていない

鉄也
「凄い・・・こいつは凄い・・・あのレーザー砲を食らってなんともないなんて・・・ようし、今度はこっちの番だ！」

レーザー砲を弾き魔神は腕を怪物に向かって突き出す

鉄也
「食らえ！アトミィィックパァァァンチ！」

2本脳でが真っ直ぐ怪物目掛けて飛んでいく
片方は怪物の首を、もう片方は怪物の片腕を吹き飛ばす
吹き飛ばされた箇所から夥しい量のオイルが漏れる

？？？
『グギャアアアアアアアア！』

怪物が悲鳴を挙げる
2本の腕はそのまま放物線を描きながら魔神の下へ戻っていった
怪物は最早錯乱状態に陥り、そのまま魔神に向かって突進してきた

鉄也
「往生際が悪いぜ！これでトドメだ！ブレストバァァァン！」
魔神の胸についていた赤い放熱板から超高温の熱線が放たれた
その熱線は怪物をみるみる内にドロドロの物体に変えてしまった
鉄也
「ふぅ・・・どうにか終ったみたいだな」
戦闘を終えて溜息をつく鉄也
ユーノ
「凄い・・・あの巨人は一体」
なのは
「でも、何で鉄也さんはあれを扱えるんだろう？」
なのはは疑問に思っていた
すると、遠くからサイレンの鳴り響く音が聞こえる
ユーノ
「ま、不味い」
なのは
「ふぇぇぇ！このままじゃ私捕まっちゃうの？」
鉄也
「高町！フェレット、グレートの腕に乗れ」
その時鉄也の乗った魔神が片膝をついてなのは達の前に腕をそっと
差し出した
なのは

「う・・・うん・・・さ、ユーノ君」
ユーノ
「待って・・・あった！」

ユーノはさっき倒した怪物の残骸から青く輝く宝石を取り出して、
魔神の腕に乗った

鉄也
「よし、しっかり捕まってろよ。スクランブルウゥゥウダァァァァァッシュ！」

鉄也が叫ぶ
すると、魔神の背中から赤い翼が現れ、魔神を空に誘った

なのは
「うわぁ・・・凄い、この魔神さん・・・お空を飛んでるよぉ！」
ユーノ
「し・・・信じられない・・・こんな巨体を空に飛ばすなんて・・・」
鉄也
「とにかく、近くの公園に避難する・・・しっかり捕まってろよ」

そう言って魔神は加速する

＊＊＊

戦闘を終えた箇所では警察や消防隊などが駆けつけて一騒ぎ起きていた
そんな公園を遠めから眺める二つの影があった

???

「おやおや、何か騒がしいと思ったら・・・とんでもない事になってるねぇ」

しわくちゃの老婆がその光景を眺めながら呟いていた

???

「なぁに、連中が本気で暴れたらこんなもんじゃ済まないさ」

その隣に居た女性がニヤケながら言った

???

「どうすんだい？女将さん・・・いよいよあたし等も動くかい？」

???

「嫌、まだだね。もう少し様子を見るとしようじゃないのさ」

老婆の問いに女将と言われた女性は返した
とても重い顔をしている

???

「そうさ、焦っちゃ駄目だよ・・・あたしはこの日が来るのをずっと待ってたんだからさぁ」

そう呟いた女将の顔はとても嬉しそうであった

その笑みが一体何を物語っているのか
それは、彼女以外誰も知らない

魔法少女と偉大な勇者　終

次回予告

テレビでグレートマジンガーが映った
って事は鉄也さんもこっちに来てるって事になるんだな
とりあえずこれで一安心って、鉄也さん！一体何をするんだ！

次回『思わぬ再会！』
次回もこの小説に
テイィィィィィクオォォォォォォォフ！

魔法少女と偉大な勇者（後書き）

すんません、何かいろいろとはしょっちゃいました（汗）

外伝3　入れ替わりで大騒ぎ！俺がアイツでアイツが俺で？？？（前書き）

今回鉄也と竜馬の経緯を簡単にですが教えます

外伝3　入れ替わりで大騒ぎ！俺がアイツでアイツが俺で？？？

これは、新生機動六課の元にデューク・フリードとグレンダイザーが加わってすぐ後の話

＊＊＊

それは何処かの研究室であった
一人の科学者が不気味な笑みを浮かべていた

？？？

「フフフ、遂に完成したぞぉ・・・やっぱりワシは天才科学者なのじゃ
これで念願の目的が果たせるのじゃあああああああ！」

薄暗い研究室の中で科学者が不気味に笑っていた
その笑い声が研究室の中に響き渡っている

ジェイル
「何やってるんですか？お父さん（汗」

其処へスカリエッティ博士こと兜　剣造博士（中身ね）がやってきた

十蔵
「何じゃ剣造！折角人がマッドな科学者の真似して遊んでいたって言うのに」

不満そうに兜十蔵博士（ユニゾンサイズ）が愚痴を漏らした

ジェイル
「気持ちは分かりますが、時間を考えて下さい。今皆寝ているんですよ・・・変に大騒ぎして起きたらどうするんですか？（汗」

そう、此処は何処かの研究室と言うか・・・ダイナミックチームの地下施設の一角であった
まぁ其処の中の一室にある研究室の中で十蔵博士が何か妙な装置を発明していたのであった

ジェイル
「んで、今回は何を作っていたんですか？お父さん」

半ば呆れながらスカリエッティ博士は聞いた

十蔵

「うむ、良い質問じゃぞ剣造！これはなぁ・・・『入れ替わり装置』別名『変わるワヨン１号』じゃ」

と、ネーミングセンス０（ゼロ）と思わせるへんちくりんな装置が目の前にあった
どんな装置かと言うと・・・まぁ説明もメンドイので各自ご自由にご想像下さい

ジェイル
「また下らない発明を（汗」
十蔵
「まぁまぁそう言わずに・・・ところで剣造、お主に頼みがあｒ『嫌ですよ』あう」

即答であった

十蔵
「何じゃ！ワシャまだ何も言っては居らぬぞ！」
ジェイル
「お父さんの言いたい事は分かりますよ・・・大方『実験台になれ』って言いたいんでしょう？」
十蔵
「良く分かったのぉ」
ジェイル
「あんたの実験のせいで一体何回死に掛かったと思ってるんですか？」

ジェイルが呆れながらも問う

十蔵

「う～ん、１００回位かのぉ？」
ジェイル
「２００回や３００回じゃすみませんでしょうが（怒）お父さんは何かと言うとすぐに変な発明を私に押し付けてその度に私は大怪我してきたんですからね！あの時だって」

それは、剣造が3歳の頃であった
剣造が3歳の誕生日を迎えた時

十蔵
「剣造、誕生日のお祝いじゃ」

と言って十蔵は自作の三輪車を剣造に渡した

剣造
「有難う、お父さん・・・早速乗ってみて良い？」
十蔵
「おぉ、良いぞぉ良いぞぉ！」

剣造は喜んで早速三輪車に跨り漕ごうとする

十蔵
「あ、言い忘れたけど、それは一漕ぎする度にマッハ3のスピードで走ｒ『ドガアアアアアアアアアン！』あり？」

物凄い衝撃が響き、振り向くと、其処にはぶっ壊れた三輪車と壁に思い切り叩きつけられた剣造の姿があった

十蔵
「あ・・・いわんこっちゃない」

兜　剣造　３歳

全身複雑骨折
脳髄陥没
内臓破裂
おたふく風邪
イボ痔
他多数

全治６ヶ月
合計１５針縫う羽目になるも、奇跡的に一命は取り留めた

ジェイル
「あれがそもそもの始まりだったんですよ」
十蔵
「おお！そんな事もあったのぉ！」
ジェイル
「他にもありますよ！」

それは、剣造が高校生の頃であった

十蔵
「剣造！科学コンクール入賞祝いにワシがバイクを作ってやったぞ！」

剣造
「本当ですか！」

嬉しそうに喜ぶが、嫌な事に気づく

剣造
「お父さん・・・ひょっとしてこれって・・・」

十蔵
「安心せい！これはマッハ３で走るような装置は無いぞぃ」

剣造
「そ、そうですか（ホッ」

安心して剣造はバイクに跨り走ろうとする

十蔵
「その変わりマッハ１０のスピードで空を飛ｂ『ズガシャアアアアアアアアアアアアアン』ありゃ？」

見ると、全壊になったバイクと天井に体半分が突き刺さった剣造の姿があった

兜　剣造　１６歳

頭蓋骨骨折

頚骨骨折

切り傷
擦り傷
口内炎
下痢
その他多数

全治８ヶ月
合計２５針縫う程の重傷にも関わらず一命を取り留める

ジェイル
「他にも一体どれ程の珍発明があったと思ってるんですか？」
十蔵
「んまぁ研究には失敗もつき物じゃしのぉ」
ジェイル
「その発明の為に一体私にどれ程死ぬような思いをさせたんですか？」
十蔵
「何じゃ人聞きの悪い！ちょいと三途の川を渡ってきて欲しいって言った位じゃろうが」
ジェイル
「遠まわしに死ね！って言ってる事じゃないですか！（激怒」

額に大量の血管を浮かべて怒る
それを聞いて十蔵はブゥと不機嫌な顔をする

十蔵

「やれやれ、しょうがないのぉ・・・実験は明日にして今日は寝るとするか」
ジェイル
「そうして下さい（汗」

やっと寝る気になったか
と安心してジェイルも実験室の部屋の明かりを消した
だが、それがまさかあんな大事件になるとは、この時は誰も知らなかったのであった

＊＊＊

翌日

何時ものように新生機動六課のメンバーは各自特訓にあけくれていた
そんな時、

甲児
「ありゃ？お爺ちゃんは何処だ？」

甲児は十蔵を探していた

なのは
「どうしたの？甲児くん」

甲児
「いやぁ、クロス・ユニゾンの練習がしたかったんだけどさぁ・・・
どうもお爺ちゃんが何処にも居ないんだよなぁ」
フェイト
「そう言えばジェイル博士も見えないね」

十蔵と同時にジェイル博士も見えなかった
何故居ないかと言うと・・・

ジェイル
「あ・・・貴方と言う人は・・・」
十蔵
「ウヒャヒャ！まぁ死なんから安心せぃ！」

十蔵がゲラゲラ笑い、ジェイルがボロクソになっていた
一体どうなっているかと言うと

ジェイル
「幾ら私が非協力的だからと言って寝込みを襲う事は無いでしょうが」

そう、昨日の実験の協力を断った腹いせにとジェイル博士（剣造ね）が寝ている間に最新式の高速自足装甲装置の実験台にしたのだ
どういう装置かと言うと、まぁ言ってしまえば超高速で回転する装置である
それを生身の人間がやれば間違いなく酔う
とまぁそんな状態なので今ジェイル博士は頭がフラフラの状態でまともに動けない状態なのだ

十蔵

「んま、お主は暫くそのままでゆっくりしておれぃ・・・んじゃ、わしゃこれで」

そう言って意気揚々と十蔵は去って行った

ジェイル
「お・・・お父さん・・・恨み・・・ますから・・・ね・・・・」

そう言ってジェイル博士は意識を失った

＊＊＊

十蔵は鼻歌混じりに通路を歩いていた

十蔵
「さて、一体誰を実験台にしようかのぉ？・・・やっぱ此処は孫の甲児が適任じゃのぉ」

そう言って早速甲児を探そうとしていた時

なのは
「あ、十蔵さん！」
フェイト
「こんな所に居たんですね」

十蔵
「おぉ！こりゃなのはちゃんにフェイトちゃんでは無いか！一体どうしたんじゃ？」

十蔵は飛び上がるのを必死に抑えて二人を見たすると

鉄也
「十蔵博士、甲児君が探してましたよ」

竜馬
「甲児くんがクロス・ユニゾンを練習したいと言って待っていますよ」

其処へ今度は鉄也と竜馬がやってきたそれを見た十蔵はニヤリとする

十蔵
（こりゃ良いわぃ、この４人で実験してみるかのぉ）「あ～、折角なんじゃが、ちと遣り残した事があってのぉ、すまんが４人共ワシについて来てくれんか？」

なのは
「遣り残した事？」

フェイト
「一体何ですか？」

十蔵
「ん・・・まぁついて来てくれれば分かるわぃ」

そう言って十蔵は４人を昨日の実験室に連れて行った

その頃、甲児はと言うと

ヴィータ
「兜甲児いいいいいいいいいい！」
シグナム
「覚悟おおおおおおおおおおおお！」
ノーヴェ
「一辺死ねえええええええええ！」
甲児
「ンギャアアアアアアアアア！」

ヴィータ、シグナムの上にノーヴェが加わり甲児にリンチを加えていた
何故甲児がこんな目にあっているかと言うと・・・まぁ大体は想像がつくので言うのは止めます

そんでもって場所は戻って昨日の実験室にて

十蔵
「とまぁ、これが昨日ワシが作ってた装置なんじゃ」

そう言ってる十蔵達の前にはへんちくりんな装置があった

なのは
「えっと・・・何ですか？これは」
十蔵
「まぁ詳しい説明は後回しにして４人共この装置に近づいてくれんかのぉ」
フェイト

「えっと・・・これに近づけば良いんですか？」
鉄也
「全く、下らない」
竜馬
「仕方ない・・・言われた通りにしよう」

やれやれと言った感じで４人は装置に近づく
十蔵は其処でリモコンのスイッチを押す
すると、装置は突如眩い光を放ちだす
そして、凄まじい爆発を起こす

なのは・フェイト
「ニャアアアアアアアアアアアア！」
鉄也・竜馬
「ドワアアアアアアアアアアア！」

その爆発に４人は巻き込まれる
十蔵は比較的安全な位置に居たので大した事は無かった
そして、暫くして爆煙が晴れた時、４人は横たわっていた

ジェイル
「一体何の爆音ですか？・・・まさか！」

其処へ、やっと意識を取り戻したジェイル博士が十蔵の実験室に入って、その異変に気づく

十蔵
「あ！厄介なのが来たおった」
ジェイル
「な！鉄也君！それに皆」

ジェイルはその場に倒れる４人を見る

なのは
「う・・・」
フェイト
「ううう・・・」

それとほぼ同時になのはとフェイトがまず目を覚ます

ジェイル
「二人共！無事かい？」

ジェイルが目覚めた二人に聞く

なのは
「ええ、俺は大丈夫です」
フェイト
「くそっ、一体何が起こったってんだ！」

二人が起き上がるのは良かったのだが、

ジェイル
「え？」

明らかに様子が可笑しい
その時、

鉄也
「う・・・」

竜馬
「うう・・・」

今度は竜馬と鉄也が目を覚ます

ジェイル
「鉄也君！竜馬君！」

ジェイルが今度は二人を見る
すると

竜馬
「う～～ん、フェイトちゃん・・・大丈夫？」
鉄也
「うん、私は大丈夫・・・それよりなのはは？」

と、これまた明らかに可笑しい事になっていた

ジェイル
「え？これまたどうなってるんだ？」
十蔵
「おぉ！実験は成功じゃ！」

十蔵は実験の成功を確信する

なのは？
「博士！今の爆発は一体何なんですか？俺達に一体何があったんですか？」
フェイト？
「こっちだって遊んでいる訳にはいかないんだ！さっさと終らせて

くれないか？」

未だに異変に気づかないなのは？とフェイト？

竜馬？

「そうですよ博士、私達には皆の特訓を見なきゃならないんですから」

鉄也？

「そうですよ！十蔵さんのお遊びに付き合ってる暇は無いんですよぉ！」

コチラも未だに異変に気づかない竜馬？と鉄也？

まぁこのまま居ても面白いがそろそろ気づくだろう

なのは？

「ん？どうしたんだ鉄也くん、嫌に声が高いが？」

フェイト？

「そう言うリョウ君も声が変だぜ」

竜馬？

「どうしたの？フェイトちゃん、声が低いよ？」

鉄也？

「なのはも、ひょっとして風邪？」

と言ってお互いの顔を見る

そして、異変に気づく

なのは？

「ん？何でフェイト君が居るんだ？」

フェイト？

「そっちこそ、何で高町が居るんだ？」

竜馬？
「あれ？どうして鉄也さんが居るんですか？」
鉄也？
「そっちだってどうして竜馬さんが居るんですか？」

そして、４人が互いを見る
そして、

なのは？・フェイト？
「あれ？何で俺達が居るんだ？」
竜馬？鉄也？
「あれ？何で私達が居るの？」

そして、初めて異変に気づいた
それに気づいた４人は

なのは（竜馬）・フェイト（鉄也）
「何じゃコリャアアアアアアアアア！」
竜馬　（なのは）・鉄也　（フェイト）
「何これえええええええええええ！」

と大声で絶叫するのであった

＊＊＊

竜馬　（なのは）
「つまり、この装置は互いを入れ替えさせる装置だったんですか？」
十蔵
「んま、そういう事じゃ」
鉄也　（フェイト）
「何でそんな装置を作ったんですか？」
十蔵
「ん？暇じゃったから」

十蔵の返答に呆れる二人

なのは（竜馬）
「どうでも良いがこの服装はどうにかならないか？変にスースーするんだが」
フェイト（鉄也）
「俺も同意権だぜ！こんな動きにくい体じゃ特訓も出来やしねぇ」

なのは（竜馬）はスカートの裾を摩って言う
フェイト（鉄也）は肩をブンブン回して呟く
それを見て

竜馬　（なのは）・鉄也　（フェイト）
「止めてください（涙」

涙目になって必死にやめるように言う二人
因みにこんがらがっている読者さんは・・・まぁ気合でどうにかしてもらおう

なのは（竜馬）

「なぁ、なのはちゃんはズボンとか持ってないのか？」
竜馬　（なのは）
「持ってないですよ・・・って言うか、私の声で男喋りは止めてください（涙」

腕を組んで男らしく言うなのは（竜馬）に涙しながら言う竜馬　（なのは）
フェイト（鉄也）
「だあああああああああ！鬱陶しいなぁこの髪！いっそバッサリ切ってやる！（怒」
鉄也　（フェイト）
「それだけは止めてえええええええええええええええええええええ！（号泣」

こっちではハサミ片手に怒ったフェイト（鉄也）を必死に止める鉄也　（フェイト）が居た

十蔵
「う～～ん、こりゃ面白いのぉ」
ジェイル
「お父さん・・・今すぐ戻して下さい！」

ジェイルは十蔵を掴み挙げてギロッと睨む
それは明らかに「潰すけど良いよね。答えは聞かないけど」と言いたげな顔である

十蔵
「そうは行ってもなぁ・・・あれ、ぶっ壊れちまったし」
竜馬　（なのは）
「ふぇぇぇぇ！それじゃ私達ずっとこのままなんですか？（涙」

身をクネクネさせながら聞く竜馬　（なのは）
ハッキリ言って気持ち悪い

鉄也　（フェイト）
「そんなあああああ！これじゃエリオやキャロと一緒に住めないですよおおおおおお！（涙」

こちらではまるで乙女の瞳のような顔でウルウルする鉄也　（フェイト）が居た

なのは（竜馬）
「だあああああああああ！人の体で何やってんだあああああああああなのはちゃあああああああん！（怒」
フェイト（鉄也）
「おいテスタロッサ！俺の体で変な事するなあああああああ！（怒」

こちらでは自分の体で変な事をしてる二人に怒る

十蔵
「んまぁ暫くはそのままじゃのぉ」
竜馬　（なのは）
「えっと・・・それって具体的にどの位なんですか？」
十蔵
「んまぁ、ざっと2～3日位」
竜馬　（なのは）・鉄也　（フェイト）
「嫌アアアア

「何だとオオオ

隼人・弁慶
「！！！！！！！」

竜馬　（なのは）の受け答えを聞いた途端、二人は固まった
そして、竜馬　（なのは）はハッとした

竜馬　（なのは）
（いけない！今私は竜馬さんだったっけ！）

ハッとして口元を押さえる

隼人
「リョウ・・・お前・・・頭でも打ったのか？」
弁慶
「何だよお前・・・変だぞ？」

二人が細い目で見る

竜馬　（なのは）
「ニャハハ・・・あ～、ゲフンゲフン・・・あ～、何でもないさ、
それより一体どうしたんだ？二人して」

必死に誤魔化そうとする
そんな竜馬　（なのは）に二人は首を傾げるもとりあえず気にしな
い事にした

隼人
「おいおい、何言ってるんだ？今日は特訓をする日だろう？」
弁慶
「ったく、言いだしっぺのお前がそれでどうするんだよ」

竜馬　（なのは）
「あ、ああ！そ、そうだったな・・・も、勿論憶えてるよ」（ええええええ！特訓！何それ！知らない、全然知らないよおおおおおお！）

口では知ってる事を装っている物の、内面は混乱しっぱなしである
そんな竜馬　（なのは）を隼人と弁慶は不振に思う

弁慶
（なぁ、隼人・・・リョウの奴・・・何処か可笑しくねぇか？）
隼人
（ああ、一体どうしたんだ？）
弁慶
（まぁ、とにかく特訓をやろうぜ）
隼人
（そうだな）

とりあえず気にせず二人は竜馬　（なのは）を連れて行く

竜馬　（なのは）
（ふぇえええええええええええん！一体特訓って何いいいいいいいいいい！聞いてないよおおおおおおおおおお！）

と、心の中で必死に叫ぶ竜馬　（なのは）であった

＊＊＊

一方、これまた入れ替わった鉄也　（フェイト）は落ち込んでいた

鉄也　（フェイト）
「ううー・・・どうしよう・・・こんな格好じゃエリオやキャロに会えないよぉ・・・もし会ったらきっと怖がられちゃうよぉ」

何気に失礼な事を口走る鉄也　（フェイト）
其処へ

甲児
「おお～い、鉄也さ～～ん」
鉄也　（フェイト）
「え？甲児くん？」

甲児が手を振りながらやってきた

甲児
「やっと見つけたよ鉄也さん」
鉄也　（フェイト）
「どうしたの甲児くん、私に何か用？」
甲児
「て・・・・鉄也さん？・・・・・何女みたいな話し方してるんだい？（汗」

思わず数歩下がる甲児

そして、鉄也　（フェイト）はハッとする

鉄也　（フェイト）
（い、いけない！今は私が鉄也さんなんだったっけ！）「え・・・ええと！す、少しふざけてみただけだよ・・・余り気にしないでくれ・・・ハハ、ハハハハハ（汗」

思いっきり作り笑いで鉄也　（フェイト）は誤魔化した
それに甲児は目を細めるもとりあえず用件を話す事にした

甲児
「早く行こうぜ！今日は俺と鉄也さんで模擬戦なんだからよ」
鉄也　（フェイト）
「あ、ああ・・・分かった」（えええええええええええ！模擬戦！？何、何いいいいいいいいい！聞いてないよおおおおおおおおお！ひょっとして、殴りあうのおおおおおお！嫌だよおおおおおおお！私喧嘩とか嫌だよおおおおおおおお！）

と、内心泣きまくりながら鉄也　（フェイト）が叫んでいた
そんな鉄也　（フェイト）を引きずりながら甲児が格納庫へ向かう

＊＊＊

こちらでは入れ替わったなのは（竜馬）が通路を歩いていた

なのは（竜馬）
「そう言えば、今日は隼人と弁慶と合体の特訓をする事になってたなぁ・・・なのはちゃん、合体出来るかなぁ？」

なのは（竜馬）は心配する
その頃、竜馬　（なのは）はと言うと

竜馬　（なのは）
「ニャアアア

窓越しに合体の特訓を見ていたなのは（竜馬）がはあと溜息をついていた

なのは（竜馬）
「やれやれ、こりゃ大騒ぎになる前に隼人達に言うしかないな」

そう言ってなのは（竜馬）は特訓場へ向かった

＊＊＊

同じ頃、フェイト（鉄也）はと言うと

フェイト（鉄也）
「あ、そう言えば今日は甲児くんと模擬戦の筈だったな・・・フェイトの奴、ちゃんとグレートを動かせてるだろうか？」

心配になったフェイト（鉄也）が特訓場に向かった
其処では

鉄也　（フェイト）
「イヤアアア

「オオオオオオオオオオオオリャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

其処ではブンブンとグレートを振り回すマジンガーZの姿があった

鉄也　（フェイト）
「んぎゃあああああああああああ！こ、甲児くん！ストップ！ストオオオオオオオオップ！止めてエエエエエエエエエエエエ！」

甲児
「へへ！何言ってんだよ鉄也さん！特訓に待ったなしって言ったのはあんただぜ！それトドメだあああああああああああ！」

最後に思い切りグレートを地面に叩きつける

鉄也　（フェイト）
「きゅうぅぅぅ」

思い切り叩き付けられてしまい鉄也　（フェイト）は目を回してしまう

甲児
「ありゃ？一体どうしたんだぁ鉄也さん・・・こんなんで目を回すなんて鉄也さんらしくねぇなぁ」

動かなくなったグレートを見て甲児が首を傾げる

フェイト（鉄也）
「・・・まぁ、予想はしてたが・・・こりゃ酷いなぁ」

フェイト（鉄也）はマジンガー同士の模擬戦を見て苦い顔をしていた

フェイト（鉄也）
「やれやれ、面倒になるとやばいからさっさと事情を説明してくるか」
頭をボリボリと掻きながらフェイト（鉄也）が特訓上へ向かった

＊＊＊

ゲッターチームと合体練習を終えた竜馬　（なのは）はその場にへたり込んでいた
竜馬　（なのは）
「はふぅぅぅ～～～、し・・・死ぬかと思った～～～」
結局、あの後合体どころかまともに飛行すら出来ずに終った
その為隼人は不機嫌になり弁慶はやれやれと言う顔をしながら去って行った
竜馬　（なのは）
「う～～ん、どうしよう・・・竜馬さんの体なのに何か竜馬さんに悪い事しちゃったかなぁ？（汗」
そう思いながら呟いていた

すると

？？？

「こんな所に居たんだな」

竜馬　（なのは）

「え？」

竜馬　（なのは）は声のした方を向いた

其処には銀髪の髪をしたナンバーズのチンクが居た

竜馬　（なのは）

「チンク・・・」

チンク

「少し話がしたいんだ・・・場所を変えないか？」

竜馬　（なのは）

「あ・・・ああ・・・」

とりあえず断る気も無いのでチンクについていく事にした

そして、こちらでは

鉄也　（フェイト）

「あううう～～～・・・もう駄目～～～」

其処では倒れたグレートの横で大の字になって寝てる鉄也　（フェイト）の姿があった

あの後、結局甲児のマジンガーZにメッタメタにやられてこの様である

甲児は終始首を傾げたままであったが、とりあえず気にせず帰って

いった

鉄也　（フェイト）
「あうう～～～、どうしよう・・・鉄也さんの体なのにこんな無様な戦い方しちゃって・・・怒られちゃうかなぁ？（汗」

内心鉄也に怒られる事を恐れているフェイト
するとそこへ

？？？
「どうした？お前にしてはバテるのが早いじゃないか」
鉄也　（フェイト）
「え？」

声がしたので起き上がってみてみると、其処には青いショートカットのナンバースのトーレが居た

鉄也　（フェイト）
「トーレ・・・」
トーレ
「少し良いか？話がしたいんだ」
鉄也　（フェイト）
「あ・・・ああ、良いよ」

こちらも特に断る理由も無いのでついていく事にした

それから暫くして

なのは（竜馬）

「あれ？なのはちゃんは何処に行ったんだ？」

少し遅れてなのは（竜馬）がやってきた
しかし、其処には竜馬　（なのは）はおろかゲッターチームの姿すら無かった

なのは（竜馬）
「参ったなぁ・・・もしかすると、あそこか？」

また、それはフェイト（鉄也）も同じであった

フェイト（鉄也）
「ったく、テスタロッサの奴、俺のグレートを倒したままにして一体何処に行ったんだ（怒」

額に青筋を浮かべてフェイト（鉄也）が辺りを見回した
恐らく、この後フェイトは鉄也からこっぴどく説教を食らう事だろうだが、今は鉄也　（フェイト）を探すのが先であるすると、とある場所が思い浮かんだ

フェイト　（鉄也）
「とりあえず、あそこに行ってみるか」

＊＊＊

チンクとトーレに連れられて竜馬　（なのは）と鉄也　（フェイト）
はとある場所に来ていた
其処は、訓練場を思わせているが、何処か古めかしい

竜馬　（なのは）
「此処は？」
鉄也　（フェイト）
「特訓場・・・でも、かなり古い」

二人はこの施設にこんな場所があった事に驚く

トーレ
「憶えてないか？」
チンク
「此処が、私達がお前達と始めてあった場所だ」
竜馬　（なのは）・鉄也　（フェイト）
「え！？」

二人は驚きの顔を見せる
そんな顔に気にせずトーレとチンクは話す

＊＊＊

それは、甲児達がこの世界に来るほんの少し前であった

チンク
「はあああああああああああ！」
トーレ
「うおおおおおおおおおお！」

特訓場でチンクとトーレは激しくぶつかり合っていた
勿論訓練である
この時のナンバーズは性能は高いが実戦経験が圧倒的に不足していたのだ
その為実戦経験のあるチンクとトーレが妹達に教えることになったのだが、彼女達も経験は浅い内に入る
その為、普段はこうして互いに腕を高めあっているのだ

チンク
「く・・・」
トーレ
「立て、チンク！私達に休んでいる暇は無いんだ！」
チンク
「はぁ・・・はぁ・・・しょ、承知してます」

ヨロヨロとチンクは立ち上がる
そして、スティンガーを両腕に構える
トーレもインパルスブレードを展開させる

トーレ
（ドクターは私達の命を救ってくれた・・・なのに、私達はドクタ

ーの役に立てない・・・クッ、何の為の戦闘機人なんだ）

トーレは歯噛みした
自分の命の恩人でもあるスカリエッティ博士にその恩を返したい
だが、今この世界を襲おうとしてる機鋼獣はあまりにも強力だ
今ナンバーズ全員で掛かっても勝てるかどうか怪しい
だが、博士の決意に報いる為にもなんとしても機鋼獣を倒せるようにならなければならない
その為には優秀な指導者が必要であった
だが、今この場にはその指導者が居ない
その為自分達が教えなければならないのだ
そう思っていた時、二人の間に激しい光が現れた

トーレ
「なっ！」
チンク
「こ・・・コレは！」

二人は思わず視界を塞ぐ
そして、暫くして目を開けると、其処には４人の人間が寝ていた

トーレ
「な！・・・人間？」
チンク
「そんな・・・一体どうやって」

これる筈は無かった
この施設は誰にも知られていない
それなのにこの者達は入ってきた
一体何者なのだろうか

そう思っていた時

鉄也
「く・・・うぅ・・・」

青年の一人が目を覚ました
それに続いて残りのメンバーも目を覚ます

竜馬
「こ・・・此処は？」

隼人
「分からん・・・だが、俺達の知らない場所みたいだぜ」

ジュン
「え？それってどういう意味？」

鉄也
「お喋りしてる暇は無いみたいだぜ」

鉄也は皆に言った
その視線の先には、明らかに敵意を表しているトーレとチンクがいた
どうやら歓迎の意思は無いらしい

トーレ
「貴様等！一体どうやって此処に来た！」

鉄也
「さぁな、こっちが聞きたい位だぜ」

トーレ
「白を切るか・・・なら無理矢理吐かせるまで！」

そう言うや否や、トーレは鉄也目掛けて突進してきた

竜馬
「鉄也くん！」
チンク
「貴様の相手は私だ！」
竜馬
「くっ！」

竜馬は咄嗟にかわす
するとその場所にスティンガーが刺さった

竜馬
「何をする！」
チンク
「侵入者は排除する！覚悟！！」

チンクはそう言って更にスティンガーを投げつける

竜馬
「ちっ！」

竜馬は咄嗟にジャンプしてかわす
そして、一気に距離を詰めてチンクに接近戦を挑む

チンク
「は、速い！」
竜馬
「止めろ！俺達に戦う意思は無い！」
チンク
「そんなデマカセなど信じられるか！」

チンクはそう叫んでスティンガーを逆手に持って振るう

竜馬
「クッ！・・・止むを得ん」

仕方ないと判断して、竜馬はチンクに当身を当てる

チンク
「ぐぅっ！」

強烈な一撃がチンクを襲う
その一撃はチンクの意識を刈り取るのには充分であった

トーレ
「チンク！くっ！・・・うおおおおおおおお！」

トーレはインパルスブレードを使い鉄也に攻撃を行う
だが、鉄也はその一撃を全て片手で払いのける
その光景にトーレは驚く

トーレ
「馬鹿な！戦闘機人の攻撃を生身の人間が・・・それも片手でかわすのか？」

その光景にトーレは驚く
その動揺がトーレに一瞬の隙を生んだ
そして、それを見逃す鉄也では無かった

鉄也
「フンッ！」

トーレ
「ガハッ！」

鉄也は瞬時にトーレの背後に回りこみ彼女の首筋に手刀を当てる
そして、トーレはそのまま倒れこんでしまった

＊＊＊

トーレ
「ハッ！」
ジュン
「気がついた？」

トーレは起き上がった時、目の前に居るジュンに驚く

トーレ
「なっ、貴様！」
ジュン
「さっきは御免なさいね。お互い驚いていたみたいだから・・・鉄也達には今お灸を据えておいたから」

そう言って指差す先には、頭に巨大なタンコブを作って地面に突っ伏する竜馬と鉄也が居た
そして、ジュンの腕は煙を吹いていた

恐らくジュンが鉄拳制裁を加えたのだろう

トーレ
「・・・負けたのか・・・私は・・・生身の人間に負けたのか・・・」

トーレにとってこれ程悔しい事は無かった
生身の人間に負けたのだ
戦う為に作られた存在である筈なのに、その自分が生身の人間にすら勝てない
それが彼女の心を傷つけた

ジュン
「そんなに落ち込まないで」
トーレ
「同情など要らん・・・所詮・・・我々はこの程度の力しか持ってないのだな」
鉄也
「そうでは無いぞ」
トーレ
「な！」

声のした方を見た
見ると、鉄也と竜馬が起き上がっていた
（頭には未だにタンコブがあるが）

鉄也
「お前の戦い方、決して悪くない・・・だが、自己流に懲りすぎだ。それじゃ実戦では通用しないぞ」
竜馬

「君達はまだまだ強くなれる。諦めなければもっと強くなれるさ」

二人はそう言う
その言葉にトーレは心を打たれる

トーレ
「私は・・・まだまだ強くなれるのか？」
鉄也
「ああ、自信を持て」
トーレ
「フッ・・・よもや人間であるお前に慰められるとはな・・・だが、感謝する・・・ところで、チンクは」
チンク
「私なら此処です」
トーレ
「チンク」

其処には、まだ少し腹の辺りを摩ってるチンクが居た

竜馬
「すまん、手加減したつもりだったんだが、」
チンク
「気にしないで下さい・・・この程度でどうにかなる程弱い作りじゃありませんから」

チンクは竜馬に対してそう言った

トーレ
「お前達・・・名前は何と言うんだ？」
鉄也

「剣　鉄也だ」
ジュン
「私は炎　ジュンよ」
竜馬
「流　竜馬だ」
隼人
「神　隼人」

４人は自己紹介をした
トーレは決心した表情で鉄也達を見る
そして、

トーレ
「頼む！私達に戦い方を教えてくれないか？」

トーレは鉄也達に対し頭を下げた

鉄也
「俺の教えはキツイぞ・・・それでも構わないか？」
トーレ
「ああ、構わない！私達は何としても強くならなければならないんだ！」
竜馬
「鉄也くん・・・本気で教えるのかい？」
鉄也
「・・・分かった。ただし、もし泣き言を言うようなら縛り上げて海の底に叩き落すからその覚悟でいろ！」
トーレ
「すまない」

トーレは頭を上げる事が出来なかった
何故なら、今彼女の目からは熱い何かが流れていたからだ

ジュン
「ちょっと、鉄也！本気で教えるの？」
鉄也
「フッ、少なくともこいつらなら元の世界に居る奴等より教え甲斐がありそうだからな」

と微笑みながら鉄也は言った
こうして、鉄也は彼女達ナンバーズに戦い方を教える事になったのであった
余談だが、鉄也が彼女達に戦い方を教えていく内に、皆して鉄也の事を「兄」として呼ぶようになってしまったと言うらしい

＊＊＊

トーレ
「フッ、今にしては昔話だな」
チンク
「ですが、あの時のお陰で私達は変われたんです」
トーレ
「ああ、そうだな」

チンクの言葉にトーレはフッと微笑む

鉄也　（フェイト）
「そ、そんな事が・・・」
竜馬　（なのは）
「し、知らなかった・・・」

二人は只その話を黙って聞いてるしかなかった
その時、

フェイト（鉄也）
「やっぱり此処に居たか」
なのは（竜馬）
「やれやれ、探したよ」
トーレ
「な！フェイト！何故此処に」
チンク
「この場所は私達と竜馬と鉄也達しか知らない筈！なのに何故」
なのは（竜馬）・フェイト（鉄也）
「それは俺が竜馬（鉄也）だからだ」
トーレ・チンク
「え？？？」

言ってる事の意味が分からず二人の頭には？マークが宙を舞っている

鉄也　（フェイト）
「えっと・・・実は、私フェイト・テスタロッサなんです」
竜馬　（なのは）
「私は・・・高町　なのはです」
フェイト（鉄也）

「それで、俺が剣　鉄也だ」
なのは（竜馬）
「俺が流　竜馬だ」

４人が事情を説明する
すると

トーレ・チンク
「なにいいい

外伝3　入れ替わりで大騒ぎ！俺がアイツでアイツが俺で？？？（後書き）

ちょっと無理矢理だったかな？（汗）

思わぬ再会（前書き）

記憶を失った鉄也と甲児が出会う
それは、とてつもない激闘の序曲でもあった

思わぬ再会

マジンガーZとグレートマジンガーが怪ロボットを破壊してから数日が経っていた
その間特に変わった事は無く、その間甲児達は比較的のんびりしていた
だが、そう言う物が大抵すぐに終るのが世の常でもある
今回もそんな日であった

甲児
「へ？ジュエルシードの反応があった？」
フェイト
「うん、急いで回収しないと」

フェイトは言った
どうやらまたあのジュエルシードの反応があったらしい
フェイトはそれを回収しに行くと言っているのだ

甲児
（そういやぁ何でフェイトがジュエルシードを集めてるのか知らねぇなぁ）「なぁ、何でフェイトはジュエルシードを集めてるんだ？」
フェイト
「お母さんの為なの」
甲児
「お袋さんの？」

フェイトは頷く

フェイト

「お母さんがジュエルシードが必要って言ってるの・・・だから私は集めるの」
甲児
（成る程ねぇ・・・にしても、こんな幼い子供にあんなとんでもねぇ代物を集めさせるなんて、どんなスパルタな親だよ全く）

甲児は内心で呟いた
恐らく、こんな事を言うフェイトは止めても無駄だろう
それは自分も同じだからだ
もし、自分の母親が同じ事を言ったら、恐らく甲児も同じ事をしているだろう
甲児も母親の愛が欲しかったのだ

甲児
「うっし、んじゃ俺もそのジュエルシード集め手伝ってやるよ」
フェイト
「ええ！」
アルフ
「おっ！そりゃ助かるねぇ。あのマジンガーだったっけ？あれの力があればロストギアなんてケチョンケチョンだしね」
フェイト
「駄目だよアルフ」
アルフ
「え～、何でさぁ」

話の腰を折るフェイトにアルフがむくれる

フェイト
「だって、甲児さんは無関係なんだよ！そんな人をあんな危険な目に合わせられないよ」

甲児
「おいおい、だったら俺からも言わせて貰うけどよぉ、まだ小さいガキのお前こそそんな無理しちゃ不味いだろう」
フェイト
「え・・・で、でも」
甲児
「でももへったくれもねぇよ。こういうときは目上の人に頼っても良いんだぜ」
フェイト
「甲児さん・・・」
甲児
「それによぉ、もしまたあんなデカイ怪物が現れたらどうするんだ？」
フェイト
「そ、それは・・・」

フェイトは言葉に詰まった
恐らくあの怪物は機鋼獣だ
何故この世界に居るかは不明だが、相手が機鋼獣であればこの時代の魔道士であるなのはやフェイトでは相手にならない
となるとマジンガーの力が必要なのだ
だが、フェイトは未だに渋る
それは甲児を危険な事に巻き込みたくないのだ
それが彼女の優しさでもあり、また弱さでもあった

甲児
「心配すんなってフェイト、俺には神にも悪魔にもなれる魔神がついてるんだぜ！な、Z」
Z
『おう！大船に乗った気でいてくれて構わないぜ』

Zグローブから Z の声が響いた

甲児
「って訳だ、俺はついていくぜ。何せお前にもしもの事があったら料理を教えられねぇからな。まだ教えてねぇのもあるし」

フェイト
「甲児さん・・・それじゃ約束して下さい」

甲児
「ん？何をだ」

フェイト
「絶対に・・・無茶しないで下さい」

甲児
「ハハハ、そりゃ無理だな」

フェイト
「え？」

甲児
「何たって、無茶は俺の『専売特許』だしよ。ま、気をつけるよ」

甲児の返答にアルフは大笑いして、フェイトは困った顔をする
そして、外に出て現場に向かおうとした時

甲児
「なぁ、その場所ってこっから近いのか？」

フェイト
「う～ん、そう遠くは無いと思うよ」

甲児
「ならパイルダーで行こうぜ、その方がお前も疲れないし何よりすぐにマジンガーを呼べるしよ」

アルフ

「あ、それ良いね！私もパイルダーに乗ってみたかったし」
フェイト
「えと・・・良いんですか？」
甲児
「前にも言っただろ。こんな時は目上の人に頼れってな」

甲児は親指を立てて言う
そして、天に向かってパイルダーの名を叫ぶ
それから数刻してパイルダーが降り立った

甲児
「さて、んじゃそのジュエルシードがある場所へ案内してくれよ」
フェイト
「うん！」

フェイトとアルフはパイルダーに乗り込み、甲児に場所を教えた

甲児
「よぉし！んじゃぁ行くぜぃ！」

パイルダーはそのまま空高く舞い上がり、フェイトが教えた場所へ
真っ直ぐに向かっていった

＊＊＊

甲児達がジュエルシードの反応のする場所へ向かっている時、なのはは鉄也とユーノを連れて月村邸に来ていた
因みに何故鉄也が一緒なのかと言うと、学校で鉄也の事を話した所会って見たいとせがまれたので鉄也に頭を下げてついて来て貰ったのだ
そして、一緒についてきたユーノはと言うと

猫
「ウニャアアアアアアアアア！」
ユーノ
（わあああああああああああああああああああああ！）「キュウウウウウウウウウウウウウ！」

月村邸に飼われている猫達に餌と間違えられて追い掛け回されていた
そして、そのまま茂みの奥に入っていく

なのは
（だ・・・大丈夫かなぁ・・・ユーノ君（汗）

横目でなのははユーノを心配する

アリサ
「ねぇなのは、その『鉄也さん』ってどんな人なの？」
なのは
「ん？ええっとねぇ・・・顔は凄く怖いんだけど・・・とっても優しい人だよ」
すずか
「こ・・・怖いの？」

なのは
「う、うん・・・私も最初見た時はビックリしちゃって」
鉄也
「余計なお世話だ」

そんな事を言うなのはの後ろから声がした
振り返ると、何故か其処にはタキシードを着こなした鉄也が片手でお茶やお菓子をおぼんで持って来ていた

アリサ
「え？この人が鉄也さん？」
なのは
「う、うん・・・そうだよ」
すずか
「でも・・・何でそんな格好してるの？」
鉄也
「お前の姉に着せられたんだ・・・ほれ」

愚痴を零しながらも鉄也は慣れた手つきで彼女達の元にお茶と菓子を置いていく
因みにすずかの姉「月村　忍」はなのはの兄恭也と結構仲が良い・・・と言うかもう恋仲と言っても良い間柄でもあるそうこうしていると、

ユーノ
（なのは！聞こえる？）
なのは
（ユーノ君！）

ユーノの念話がなのはに聞こえた

ユーノ
（近くでジュエルシードの反応があったんだ！）
なのは
（分かった、すぐ行くね）
なのはは話を終えると立ち上がる

アリサ
「どうしたの？」
なのは
「ちょっとユーノ君が心配になったから探してくるね」
すずか
「あ、それなら私達も一緒に行こうか？」
なのは
「あ、大丈夫だよ！そんなに遠くへ行ってないだろうし」
アリサ
「何言ってんの！こんな広い庭にあんた一人で行ったら迷子になるわよ」
鉄也
「心配するな、俺も一緒に行く」
すずか
「鉄也さん！」

アリサとすずかが驚く中、鉄也がなのはの顔を見るその視線の意味を察したのかなのはは頷く

なのは
「とにかく、すぐに戻ってくるから安心して」
アリサ

「う、うん・・・」
すずか
「わかった」

なのはの言葉を信じて二人は待つ事にした

なのは
「鉄也さん」
鉄也
「ああ」

なのはと鉄也は茂みの奥へ行った（鉄也は未だにタキシードである）

＊＊＊

なのはと鉄也はユーノの指定した地点に来ていた

ユーノ
「なのは！」
なのは
「ユーノ君！」
鉄也
「ユーノ、この近くにジュエルシードがあるのか？」

ユーノ
「はい、この付近で反応があります」
そう言ってると、突如地響きが鳴り響いた

なのは
「な、何？」
ユーノ
「ま、まさか、もう何かと融合してしまったのか？」

そうこうしている内に3人の元に振動の元がやってきた
それは

猫
「ウニャアアアアアアア」
なのは
「え？」
ユーノ
「い？」
鉄也
「な？」

其処には、巨大化した猫が居た
だが、敵意は感じられない
どうやら自我はあるようだ

なのは
「えっと・・・ユーノ君・・・あれは？」
ユーノ
「お・・・恐らく・・・あの猫の「大きくなりたい」って言う思いが具現化したんだと思う（汗」

鉄也
「何にせよ、あれからジュエルシードを回収すれば良いんだな」
鉄也は腕を鳴らしながら近づく
なのは
「て、鉄也さん！一体何をするんですか？」
鉄也
「決まってるだろう！あの猫の腹なりを軽く小突けば吐き出すだろう」
ユーノ
「そ、そうか！まだ完全に融合してない今の内に吐き出せば」
鉄也
「そう言う事だ」
そう言って鉄也は猫に近づく
だが、その猫を突如黄色い魔力弾が襲う
猫
「ウニャアアアアアアアアン（叫」
鉄也
「何！」
なのは
「い、今のは！」
なのは達は声のした方を見た
其処には、赤いパイルダー号に乗ってバルディッシュを構えるフェイトの姿があった

＊＊＊

甲児
「おいおい、いきなり発砲は無いだろう？（汗」
フェイト
「御免、でも急がないとあの猫が手遅れになっちゃうし」
甲児
「成る程ねぇ・・・んじゃ急いで向かうとすっか」

甲児は急いでパイルダーを猫の付近に移動させる
そして、下を見て驚きの声を挙げる

甲児
「な！あれは鉄也さん！」

甲児の眼下にはパイルダーを見上げる鉄也の姿と、そして幼いなのはの姿があった

フェイト
「甲児さんの知り合いなんですか？」
甲児
「ああ、俺の仲間だ」
アルフ
「へぇ、結構怖い顔してるねぇ」

アルフは鉄也の顔を見て率直な意見を述べる
それにフェイトが引き攣った顔をしながらとがめる

甲児
「とにかく、まず俺が鉄也さんと話しをつけてくる。もしかすれば手伝ってくれるかもしんねぇしよ」
フェイト
「気をつけてね」
甲児
「任しておけって」

甲児はパイルダーから降りて鉄也の方に歩み寄った

甲児
「よぉ、鉄也さん」
鉄也
「・・・・・」

甲児は親しみの篭った声で鉄也に言う
だが、鉄也は無反応で睨みつけている
それに甲児は多少の疑問を持ちながらも尚も近づく

甲児
「鉄也さん、心配したんだぜ。一体今まで何処に・・・」
鉄也
「誰だお前？」
甲児
「なっ！」

鉄也の口から予想外の言葉が帰って来た

それに甲児は驚愕の顔になる

甲児
「て、鉄也さん！俺を忘れたのか？俺だ！兜　甲児だよ！」

鉄也
「何言ってんだ？俺は貴様なんぞ知らんぞ・・・それよりさっさと
此処から立ち去れ。邪魔だ」

甲児
「なっ！何だと！」

甲児は睨む
だが、そんな甲児を鉄也は歯牙にもかけずフェイトの方を見る

鉄也
「さっき魔力弾を撃ったのはお前か？」

鉄也はフェイトを睨む
その視線にフェイトは少し怯えるも無言で頷く

鉄也
「そうか・・・なら！」

甲児
「！！！」

甲児は鉄也が何をしようとしたのか理解した
鉄也は突如高く跳躍した後、フェイトに向けてとび蹴りを放ったのだ

甲児
「あぶねぇ！フェイト！」

それを甲児が庇う
衝撃が背中を襲う
苦痛で顔が歪む

甲児
「つっ・・・一体何の真似だ！冗談にしちゃやり過ぎだぜ！」
鉄也
「黙れ！こいつに飲み込まれたジュエルシードは元々此処に居るユーノが見つけたものだ！それを俺達が回収してるんだ！てめぇらがやってるのは猫糞（ネコババ）と同じ行為なんだよ」
甲児
「な、何だとぉ！（怒」

流石の甲児も泥棒呼ばわりされて黙ってる筈が無い
鉄也に対し怒りの篭った眼差しで睨みつける

甲児
「フェイト！鉄也さんは俺が引き受けるから、お前はジュエルシードを頼む」
フェイト
「は、はい！」
アルフ
「任せたよ」

アルフとフェイトはジュエルシードを飲み込んだ猫に向かう

鉄也
「行かせるか！」
甲児
「そうはいくか！」

フェイトを追いかけようとする鉄也に甲児はタックルを掛ける
衝撃の為鉄也はその場に倒れる

鉄也
「貴様・・・」
甲児
「悪いが鉄也さん、フェイトの邪魔はさせられねぇな」
鉄也
「良いだろう、こちらも高町の邪魔をされると厄介だ。此処でケリをつけてやる」

鉄也と甲児が互いに距離を開けて喧嘩の構えを取る
最初に動いたのは甲児であった

甲児
「うおぉぉ！」

甲児の右ストレートが鉄也の顔面を捉える
だが、それを鉄也は首を捻ってかわす

鉄也
「遅い！」

お返しにと甲児のみぞおちにニーキックを当てる

甲児
「ガハッ！」

甲児の体がくの字に曲がる

その隙を見逃す筈も無く甲児の背中に肘鉄を当てる

甲児
「ぐっ・・・相変わらず容赦ねぇぜ！」

少し涙目になりながらも体制を立て直す
鉄也はそんな甲児を畳みかけようと飛び掛る

甲児
「このぉ！何時までもやられっぱなしだと思うなよ！」

甲児は鉄也の腕を掴んで背負い投げの要領で投げ飛ばす
鉄也の体が地面に叩きつけられる

鉄也
「グゥッ！」

苦悶の表情を浮かべる
だが、それでも鉄也は立ち上がる

甲児
「ったく、タフさは相変わらずだなぁ」

鉄也
「それはお互い様だろう！」

お互いにそう言いあって今度は力比べをする
お互いの腕を掴んで押し合いに持ち込む

甲児
「ぬうううおおおおおおお！」

鉄也
「ぐうううあああああああ！」

二人とも額に血管を浮かべて目を血走らせながら力を込めるすると、其処へ、

フェイト
「甲児さん！」
甲児
「フェイトか？」
アルフ
「ジュエルシードの回収終ったよ！さっさとずらかろう」
甲児
「あいよ！」

甲児は鉄也から距離を開けてパイルダーに向かう

鉄也
「逃がすか！」

そんな甲児を鉄也が追いかけるだが、

フェイト
「御免なさい！」

そんな鉄也にフェイトが電撃を浴びせる

鉄也
「グハッ！」

凄まじい衝撃が起こり、鉄也は地面に倒れる

甲児
「お、おいフェイト・・・あれ？」

フェイト
「大丈夫、手加減はしたから」

甲児
「へへ、サンキュー・・・んじゃずらかるぜ」

パイルダーに乗り込んだ3人が悠々と空に飛んでいった

なのは
「鉄也さん！」

鉄也
「た・・・高町か・・・」

鉄也は痺れる体に鞭を打って立ち上がる

なのは
「御免なさい・・・ジュエルシード・・・取られちゃった」

シュンとするなのは
彼女の手には傷つきグッタリした子猫が抱かれていた
鉄也はそんななのはにそっと言う

鉄也
「気にするな、取られたのなら取り返せば良い・・・それより、早く戻ろう」

なのは

「は・・・はい」

返事はするも何処か沈んでしまったなのは

鉄也

「兜　甲児・・・覚えていろ！・・・この借りは必ず返してやる」

鉄也はパイルダーの去っていった空を何時までも眺めていた

＊＊＊

ジュエルシードを回収した甲児達はホテルの一室に戻っていた

甲児はその部屋のソファーに座ってぼんやりと考え事をしていた

フェイトはそんな甲児を心配そうに見つめ、アルフはドッグフードを食べていた

アルフ

「プハ～、やっぱこのドッグフードは美味いねぇ」

甲児

「お前・・・本当は犬なんだな（汗」

アルフ

「犬じゃない！狼だ！」

甲児

「ドッグフード片手に言っても説得力ねぇよ！・・・はぁ」

何処か元気の無い甲児
そんな甲児にフェイトが問う

フェイト
「甲児さん・・・ひょっとして、あの『鉄也さん』って人の事考えてたの？」
甲児
「ん？・・・ああ・・・」
アルフ
「ねぇ、その鉄也って甲児のなんなの？」
甲児
「・・・・・・俺の、ライバルでもあり、目標であり・・・そして、・・・・頼れる兄貴だ」
フェイト
「お兄さん？」
甲児
「血は繋がってないんだけどよ、同じ父親の元で育ったんだ」

甲児は言う
その間も何処か沈んだ顔であった

フェイト
「辛いんですか？」
甲児
「正直言うとかなりな・・・だけど、鉄也さんは俺の事を忘れてた・・・一体どうして」
アルフ
「きっとその内思い出すんじゃないの？」
甲児

「だと良いがな」

確かにアルフの言うとおりである
もし鉄也が記憶喪失になっているのであればその内きっと思い出すであろう
だが、もし何か意図的に記憶を封じられているのならばこの先鉄也はきっと甲児の前に立ちはだかるであろう
それはかなりきつい話でもある

甲児
（くそっ、一体なにがどうなってんだ！気がついたら過去に来てるし、機鋼獣は出てくるし、鉄也さんは敵になっちまうし・・・訳わかんねぇよ）

甲児は一人心の中で愚痴るのであった

思わぬ再会　終

次回予告

今度のジュエルシードの反応は温泉宿で出やがった
折角だしフェイトとアルフも連れて温泉に行くか！
って、やっぱなのはちゃんや鉄也さんも来てたんだな（汗）

次回『激突、マジンガー対マジンガー』

次回もこの小説に

テイィィィィィィィクオオオオオオオオオフ

思わぬ再会（後書き）

次回は、あの謎の人物達が出てくるよ

過去編　過去の出会い（前書き）

今回から無印編と併合してこの「スバル編」を書いていきます
石像に吸い込まれたスバル
果たして彼女はこれからどうなるのか？

過去編　過去の出会い

読者の皆様は覚えているだろうか
あの古代遺跡での出来事を

そう、甲児達を過去の世界に飛ばした現象である
しかし、そこで誰かを忘れてはいないだろうか

甲児
『スバル！クソオオオオオオオオオオ！』

そう、スバル・ナカジマ
彼女もまたマジンガーを模した石像の中に吸い込まれてしまったのだ
一体彼女は何処へ行ったのか？
今回は彼女を視点にした話をしようと思う

＊＊＊

スバルは何も無い空間の中を只重力に従って落下していた

スバル
「うわあああああああああああああ！ど、何処まで落ちるのおおおおおおおおおおお！（泣」

半泣きの状態でスバルは叫ぶ
だが、答えてくれる者も居なければ捕まえれる物も無い
ただひたすら落ち続けていく

スバル
「このまま落ち続けるなんて嫌だよぉ！絶対に甲児さん達の所へ戻るんだから！」

と言って必死に鳥のように腕をばたつかせるスバル
だが、それで飛べる筈も無く、只ひたすらに真下へ落ちていく

スバル
「ふえええええええええええん！このまま私ずっと落ち続けるのぉ？まだ、新作アイスを食べてないし、見たいアニメだってあったし、ティアや皆と仲良くしたかったし、他にも色々やりたい事あったのにいいいいいいいいいいいい！死にたくないよおおおおおおおおおお！（号泣」

大粒の涙を流しながらひたすらに落ちていくスバル
やがて、その先に眩い光の道が見え始める

スバル
「え？ひょっとして・・・あそこって・・・天国？・・・って事は、私やっぱり死んじゃったのぉ？（涙」

涙しながら悲しい発想をするスバルを他所に光はスバルを包み込んでいく
そして、スバルの視界が完全に光によって奪われた時、彼女の意識はまるで溶け込むかのように薄れていった

＊＊＊

？？？
『み・・・きみ・・・君！』
スバル
「う・・・う～ん・・・」
？？？
『起きてよ・・・君！』
スバル
「はっ！」

スバルは飛び起きた
見ると、其処は小高い原っぱであった
そして、隣には、

スバル

「えっと・・・誰？」

スバルの目の前にはスバルにとても良く似た少年が居た
髪の色から髪型、目の色まで一緒である
唯一違うのは性別と、彼の右腕には見慣れない模様のタトゥーが彫られている事であった

？？？

「アハハ・・・その様子だと無事みたいだね。僕は『ゼノン』この原っぱで良く昼寝してるんだ。だけど突然君が降って来たからビックリしたんだよ」
スバル
「降って来た？」

スバルは首を傾げた
そして、フラフラする頭を必死に平静に保とうと頭を振る
そして、正常になった頭でゼノンと呼ばれる少年を見た
年は自分と同じ位かもしくは一つ上位
それ以外は大して気になる事は無かった
嫌、一つあった
それは彼が着ている服装であった
彼の着ている服は、言ってしまえば古代ギリシャ人が着ていた薄着の服に良く似ていたのだ
こんな服今のミッドチルダを何処を探してもある筈が無い
そう思うとふと疑問に思えた

スバル
「ねぇ、此処は何処？」
ゼノン
「此処？此処は『ミッドガルド』って言う町さ・・・ひょっとして

君此処に来るのは初めてかい？」
スバル
（ミッドガルド？聞いた事無い名前だなぁ）「あ、ねぇ・・・グラナガンは何処に行ったら行けるの？」
ゼノン
「グラナガン？・・・聞いた事無いなぁ・・・君は其処から来たのかい？」
スバル
「ええ？グラナガンを知らないの？ミッドチルダの首都だよぉ！」
ゼノン
「ミッドチルダ？う～ん、分からないなぁ・・・そもそも君は一体どうして空から落ちて来たんだい？」
スバル
「えっと・・・それは・・・」

スバルは此処に来た経緯をゼノンに話した

ゼノン
「成る程、遺跡の調査をしていたら石像に吸い込まれてしまった・・・と言うのか」
スバル
「信じて貰えますか？」
ゼノン
「胡散臭いけど信じるしかないかもね」

ゼノンは多少引き攣った顔で言う
そして、ふと気づいた

ゼノン
「そう言えば、君はこれから寝泊りとかどうするの？」

スバル
「あ！そう言えば・・・どうしよう（汗」

そう、此処にはスバルの知り合い等居ない上に寝泊り出来る場所も無い
その上この世界では手持ちのお金は使い物にならないだろう
となると野宿しか道が無いのだ

ゼノン
「良ければ僕達の寝泊りしている施設があるから其処に来るかい？」
スバル
「え？良いんですか！」
ゼノン
「困った時はお互い様だしね。それに、君は何だか他人とは思えないし」
スバル
「え？それってどういう事？」
ゼノン
「何でもないさ・・・それより案内するよ。急がないと日が暮れちゃうからね」

そう言ってゼノンはスバルに手を差し出す
スバルはその手を握って立ち上がる
温かい手であった
生きている人間
きっと皆こんな風に温かい手をしてるのだろう
そう、スバルは実感した

＊＊＊

ゼノン
「此処がそうさ」

そう言ってゼノンが指差した場所、それは建物とは言えそうも無い穴倉のような場所であった
嫌、この場合洞窟と言った方が正しいだろう

スバル
「こ・・・此処に住んでるの？」
ゼノン
「僕だけじゃないさ。都を追われて逃げ延びた人達は皆此処にいるよ」
スバル
「『追われる』それって一体」
？？？
「おおおおおおおおい！」

スバルの言葉を突如男の声が遮った
その男は黒い髪で背の高い青年であった

ゼノン
「あ、ザル」
ザル
「よぉゼノン。帰りが早いじゃないか、何か見つけたのか？・・・

って、その子は？」
ゼノン
「ああ、突然空から降って来た子なんだ。名前は・・・」
スバル
「始めまして、スバル・ナカジマって言います」
ザル
「俺はザル。宜しくなスバル」

ザルはスバルに笑顔で言う
そして、ゼノンに腕を回して耳打ちする

ザル
（よぉ、ゼノン・・・結構な可愛い子ちゃんじゃねぇか。ひょっとしてお前の彼女か？）
ゼノン
（違うよ、本当に空から降って来た子なんだ）
ザル
（ふ～ん、ま、良いけどよ）

ザルは納得してゼノンから手を離す
そして、ゼノンはスバルの方を向く

ゼノン
「突然だけどスバル」
スバル
「何？」
ゼノン
「僕達の居る場所ではファミリーネームを名乗るのは控えてね」
スバル
「え？どうして？」

ゼノン
「此処では皆ファミリーネームは名乗らないようにしてるんだ。余り無闇に名乗らない方が良いよ。でないと此処に居られなくなるからね」
スバル
「うわぁ・・・き、気を付けます（汗」

意味は分からないがとりあえず納得する事にした
どうやら何か訳有りのようである

＊＊＊

ザル
「改めて自己紹介とさせて貰うぜお嬢さん。俺の名は「ザル」ゼノンとはガキの頃からの腐れ縁なんだ」
バロン
「私は「バロン」と言う。ゼノンの父上の代から仕えている・・・宜しく頼む」
ゼノン
「そして、僕がゼノン。このレジスタンスのリーダーを勤めているよ」

細身のザル、年老いた巨漢のバロン、そしてゼノンがスバルに自己

紹介をした

スバル
「えっと・・・始めまして、スバルと申します・・・えっと・・・
幾つか質問宜しいですか？」
ゼノン
「どうぞ」

ゼノンが答える

スバル
「此処って新暦じゃないんですか？」
ゼノン
「新暦？そんな時代じゃないよ。今は『旧暦』と呼ばれているよ」
スバル
「きゅ、旧暦！！」

その言葉に驚いた
旧暦と言えば何千年も昔に終った年号である
つまり、スバルは少なくとも４０００年位昔に飛ばされてしまったのだと思われる

ゼノン
「どうしたんだい？」
スバル
「い、いえ！何でもないです・・・あともう一つ・・・そのレジスタンスって一体なんですか？」
ザル
「神々の兵士と戦う組織の事さ」
スバル

「神々の兵士？」
バロン
「我等人の子を凌ぐ巨体さを持つ機械の巨人達だ」
ゼノン
「僕達はその神々の兵士と戦っているんだ」
スバル
「その神々の兵士って一体何？」

スバルがゼノン達に聞こうとした刹那であった
突如、凄まじい地響きが４人を襲う
余りの振動の為スバルは思わず尻餅を付く

スバル
「い、今の振動は一体何？」
ザル
「奴等だ！奴等が人間狩りを始めやがったんだ！」
スバル
「に、人間狩り？」
ゼノン
「行くぞ！二人とも」

ゼノンは二人にそう言い、壁に立てかけられた槍を持つ
ザルは細身の剣レイピアを腰に挿し
バロンは巨大な斧を肩に担ぐ

スバル
「ちょ、ちょっと待って！それで戦うの？」
ゼノン
「勿論だよ。僕達はこれで何度も奴等を退けてきたんだ」
ザル

「たまに負けるけどね」
スバル
「そんな・・・危険ですよ！」
バロン
「それは承知の上の事」
ゼノン
「だけど、僕達が戦わないと多く人達が奴等の手に掛かってしまうんだ」
スバル
「ゼノン・・・」

スバルはゼノンを見た
何処か悲しげであった
彼には何か人に言えない悲しい過去があったのだろう
そう予想できた

ゼノン
「行こう！僕達で皆が逃げる時間を稼ぐんだ」
ザル・バロン
「おう！」
ゼノン
「スバル、君は此処に居て。大丈夫、すぐ戻ってくるから」
スバル
「あ、ゼノン！」

ゼノンはスバルの静止を振り切り飛び出していった
どうしよう、この世界には恐らくマジンガーは居ないのだろう
それどころか、あの様子だとこの世界には魔法やデバイス等も存在していなさそうである
となると、あんな原始的な武器で戦える筈が無い

スバル
「行かなきゃ」

スバルは決心して外に出る
何の為に強さを求めたのか
そうスバルは考えた
誰かを守る為
誰かを救う為

・・・違う！

本当は只、あの人に追いつきたかったからだ
あの時、自分を助けてくれた男の人のように
あの人・・・・・『流　竜馬』の様に

＊＊＊

ゼノン達は機械の怪物の暴れている町に辿り着いた
其処には1体の機械の怪物が町を踏み荒らして暴れている

ザル
「ゼノン、どうやら相手は逸れた機械兵士みたいだぜ」

ゼノン
「ああ、そうだな・・・だが、町の人達には脅威だ」
バロン
「俺が奴をひきつける・・・その間にお前達は町の人達を避難させろ」
ゼノン
「嫌、それは僕の役目だ」
バロン
「ゼノン！」
ゼノン
「大丈夫だよバロン。僕には『魔神の力』があるから・・・それより頼むよ」

ゼノンは笑ってバロン達に言った
全く疑いの無い澄んだ笑顔である
全く、こんなお人よしがまだこの世にいたとは
そう思えた二人は

ザル
「わぁったよ、その代り、絶対に無茶すんなよ！」
バロン
「まだお前は死んではならないんだ！お前にはやる事がある」
ゼノン
「ああ、分かってる・・・行くぞ！」

ゼノンの合図と共に3人は行動に移る
ゼノンは真っ直ぐに怪物へ向かった

ゼノン
「行くぞ！機械兵士！」

ゼノンは槍を構えて走り出す
機械兵士もゼノンの気配に気づき手に持っていた剣を振り下ろす
凄まじい地響きと砂煙が舞う
だが、ゼノンはそこには居なかった
ゼノンは振り下ろされた剣を上って機械兵士の顔に辿り着いていたのだ

ゼノン
「うおおおおおおおおお！」

そして思い切り槍を薙ぎ払う
その歳に槍の穂先に電撃が走る
それを受けた機械兵士が吹き飛ぶ

ゼノン
「どうだ！」

地面に着地してゼノンが機械兵士を見る
だが、機械兵士は何事も無かったかのように立ち上がる

ゼノン
「くっ！、やはり今まで以上に強くなってる・・・僕の力じゃ効かないのか？」

ゼノンは舌打ちする
嫌、挫けている暇なんか無い
一撃で効かないのなら何度でも叩き込めば良い
それだけの事
そう思いゼノンは再び槍を構えて走り出す

機械兵士は再びゼノン目掛けて剣を振り下ろす
ゼノンは今度は跳躍してそのまま機械兵士の顔に飛び移ろうとした
だが、その時機械兵士の顔に異変が起こった

ゼノン
「！！！」

ゼノンがそれに気づいたが、既に遅しであった
機械兵士がゼノンに向けて口を開き、其処から猛烈な炎を吐き出した
炎はゼノンを包み込みその体を焼き焦がしていく

ゼノン
「うわあああああああああああああ！」

ゼノンは苦痛の声を挙げる
完全に油断していた
まさかこんな能力があったなんて
煙を挙げながらゼノンは地面に叩きつけられた
衝撃に体中の骨が悲鳴を挙げる
恐らく肋骨の辺りが折れたのだろう
激痛が体を襲う

ゼノン
「く・・・うぅ・・・・」

ゼノンは必死に立ち上がろうとするが、それを体の痛みが許さない
すぐにまた地面に背中を預ける
そんなゼノンにトドメを刺そうと機械兵士が迫り来る
其処へ

スバル
「ゼノン！」
ゼノン
「す・・・スバル！」

ゼノンは驚きの顔になった
何と其処には本来居ない筈のスバルが居たのだ

スバル
「ゼノン！・・・酷い怪我・・・すぐに治療しないと」
ゼノン
「な・・・何で来たんだ！来るなって言ったじゃないか！」
スバル
「御免なさい・・・でも、黙ってじっとしてるなんて・・・出来ないよ！」

スバルはゼノンにそう言う
そんな二人に機械兵士はせまり来る
２０Ｍを越す巨体が今にも二人を踏み潰そうと足を振り上げる

ゼノン
「くっ！」

ゼノンは覚悟を決めて目を瞑る
だが、そんなゼノンを突如奇妙な感覚が襲った

ゼノン
「え？」

目を開くと、機械兵士がかなり遠くに居るのだ

そして、自分を抱えている人を見た

スバル
「大丈夫？」
ゼノン
「き・・・君は？」

其処にはバリアジャケットを身に纏ったスバルが居た
白い戦闘衣服がゼノンには輝いて見えた

スバル
「ゼノンは此処に居て！アイツは私が倒すから」
ゼノン
「倒すって・・・君も魔神の力を使えるのかい？」
スバル
「う～ん、良くわかんないけどそんなものかな？」

首を傾げてそう言う
そんなスバルにゼノンは呆れる

スバル
「とにかく、此処は任せて！行くよ、マッハキャリバー！」
マッハキャリバー
『了解！』
ゼノン
「しゃ、喋った！」

ゼノンにはデバイスの存在は初めてらしく、ましてやそれが喋るともなれば驚きである
そして、スバルは拳を地面に叩きつける

スバル
「ウィング・ロォォォォォォォド！」

スバルの斜線上に青く輝くレールが敷かれる
それは、真っ直ぐ機械兵士へ向けて放たれる

ゼノン
「こ・・・これは！」
スバル
「いっけえええええええええええええ！」

スバルはウィングロードに乗り加速する
機械兵士はまた別の奴が来たと認識し今度はスバルに剣を振り下ろす
スバルはそれを避けず真っ向から受け止める

スバル
「ぐうううぅぅぅぅ！」

凄まじい衝撃が襲い掛かる
リボルバーナックルから激しい火花が舞い散る
兵士がそのまま地面に叩き落そうと両手で力を込める
だが、その時スバルはフッと横に避けた
その為兵士はバランスを大きく崩し膝を突く

スバル
「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

その隙を突きスバルはリボルバーナックルを思い切り兵士の顔に叩きつける

グシャァと音を立てて兵士の顔が歪む
明らかにダメージを与えている
その光景にゼノンは驚いていた
其処へ

ザル
「ゼノン！」
バロン
「無事か？」

避難を終えたザルとバロンが合流した
ザルは動けないゼノンに肩を貸す
そして、目の前で機械兵士と戦うスバルの姿を見る

ザル
「お、おい！あれってお前が連れてきた穣ちゃんじゃねぇのか？」
ゼノン
「ああ、そうだ」
バロン
「信じられん・・・あの機械兵士を圧倒してる・・・何者なんだ？」
ザル
「どっちでも良いだろうよ。それよりあれならもしかしたら勝っちまうんじゃねぇのか？」

ザルは期待を込める
３人の見る中、スバルは機械兵士を圧倒していた

スバル
「変だなぁ・・・何だか何時もより脆く感じる・・・私・・・強くなったのかな？・・・そんな訳ないか」

確かにスバルが疑問に思うのも無理は無かった
今まで戦ってきた機鋼獣達はマジンガーの協力無しではまともに戦う事など出来なかったのだ
しかし、今目の前に居る機械の兵士を相手にスバルは善戦しているもしかすれば、このまま勝てるのかもしれない
そんな思いがスバルの中にはあった
だが、それが彼女に油断を招いた
一気に勝負を掛けようと再び兵士の頭部に攻撃を仕掛ける
しかし、それはゼノンと同じ事であった
兵士は再び口を開く
其処から見えるのは真っ赤な炎であった
それは、今にもスバルに向かって放たれようとしていた

スバル
「う・・・不味い！」

回避は間に合わない
となれば、あれしかない

スバル
「一撃・・・必倒ォォォォォォォォ」

スバルがリボルバーナックルを装備した腕を後ろに下げて力を溜める
その足元には青い魔方陣が張られる
そして、兵士が炎を吐くのとほぼ同時にそれは放たれた

スバル
「ディバイィィィィィィン・バスタァァァァァァ！」

スバルのリボルバーナックルから青白い閃光が放たれる
それは兵士の吐き出した炎ごと兵士の頭を吹き飛ばす
頭部を失った兵士はそのまま硬直し、後ろに倒れる
一方、スバルは持てる魔力を全て使い果たしてしまいその場に倒れる

ゼノン
「スバル！」

ゼノンは急ぎスバルの元へ駆けつける

スバル
「あ・・・ゼノン・・・」

相当消耗してるのか顔は汗だくになっていて息が荒い

ザル
「スゲェな姉ちゃん！あの兵士をやっつけちまう何てよぉ」
バロン
「大したもんだ。我等でもアレを倒すのは至難の業だと言うのに」
スバル
「そ・・・そんな／／／」

二人から賞賛されてスバルは頬を染める
そんな中、ゼノンがスバルに手を差し出す

ゼノン
「立てるかい？」
スバル
「ええっと・・・無理」

即答だった
ゼノンはフッと笑いスバルを抱き起こす

スバル
「ええ！」

スバルは思わず頬を染める
そう、スバルは今ゼノンに俗に言う『お姫様抱っこ』をされているのだ

ゼノン
「今回は君のお陰で被害を少なく出来たんだ。これ位はさせてくれ」
スバル
「あ・・・あうあうあう／／／／」

最早言葉が無かった
今のスバルの頭の中はそれは真っ白になっており動けなくなっていたそんなスバルに気づかないのかゼノンはそのまま歩き出す

ザル
（なぁ、バロン）
バロン
（何だ？）

ザルはそんなゼノンとスバルを見ながらバロンに耳打ちする

ザル
（あの二人・・・何か面白そうだな）
バロン
（フッ、確かにな・・・だが、それはゼノンとあの子が決める事だ・

・・俺達は温かく見守ってやろう）

ザルとバロンは目の前に居るゼノンとスバルを見ていた
スバルは余程疲れていたのか、其処がゼノンの腕の中だと言う事も
忘れ静かに目蓋を閉じて眠ってしまった

果たして、此処は本当に過去なのだろうか
そして、スバルに現代に戻る手段はあるのだろうか
それは誰にも分からない
スバルも・・・今は只静かに眠るのであった

スバル編　過去の出会い　終り

過去編　過去の出会い（後書き）

スバル
「な・・・何か凄いことになってる（汗」
作者
「だなぁ、甲児達は１０年前なのにお前は４０００年も昔に飛ばされてるしな」
スバル
「わ・・・私に何か恨みでもあるんですか？」
作者
「いんやぁ、只作者は好きなキャラクターにはとことん茨（いばら）の道を歩ませるのが好きなだけだよ」
スバル
「ドＳウウウウウウウウウウウウ！」

激突！マジンガー対マジンガー　前編（前書き）

今回なのは達が温泉に向かう
ダイナミック作品で温泉と言ったら・・・

激突！マジンガー対マジンガー　前編

その日、なのはは家族と一緒にとある場所へ向かっていた

なのは
「ねぇお父さん、今日私達が行く所って何処なの？」

士郎
「うん、父さんが昔お世話になった人達が経営する温泉宿なんだ」

なのは
「お父さんがお世話になった人達？」

なのはが首を傾げた
車の中には、高町家の他、アリス、すずか、忍、そして鉄也も居た
（後ユーノも）
今回その父・士郎の元に温泉宿への招待券が送られてきたので折角だし皆で行くかっと言う事でこうなったのだ
やがて、温泉宿と思わしき旅館に辿り着く
なのは達はその旅館の看板を読んだ

アリス
「『くろがね屋』？・・・何か変わった名前の旅館ねぇ」

すずか
「そうだね、あんまり聞かないし、最近オープンしたのかなぁ」

忍
「でもすみませんね。私達まで呼んでいただいて」

桃子
「いえいえ、旅行は大勢居た方が楽しいですし、何よりなのはと恭也が喜びますから」

因みに忍を呼んだのは母である

恭也
「か、母さん！」
士郎
「良いじゃないか。父さんも母さんもお前と忍さんの仲は良いと思ってるんだぞ」
美由紀
「いよっ、この色男」
恭也
「父さんに美由紀まで・・・参ったなぁ／／／／」

頬を染めながら階段を上がる
そんな中、鉄也は

鉄也
「やれやれ、平和なもんだ」
ユーノ
「良いじゃないですか。たまにはこうした息抜きも必要ですし」
鉄也
「ま、確かに高町にはそんな日も必要なのだろうな」

肩に乗ったユーノと話しながら階段を上る
そして、入り口に入った時

???
「いらっしゃいませ」

この旅館の番頭が頭を下げてなのは達を迎え入れた
だが、その番頭はスキンヘッドで顔に十字の傷を持っていた

ハッキリ言って夜中に見たくない顔である
当然そんな顔を見たアリサとすずかとなのははアリサ・すずか・なのは
「いやあああああああああああああああああああああ！」
と、悲鳴を上げてしまうのであった
しかし
士郎
「やぁ、久しぶりだねクロス」
クロス
「こりゃぁ、士郎の旦那じゃありませんか！お久しぶりですね」
士郎とクロスは互いに肩を叩き合って再会を喜んでいた
なのは
「お・・・お父さん！この人と知り合いなの？」
なのはが鉄也の後ろに隠れながら聞く
アリサとすずかも同様に鉄也の後ろに隠れる
鉄也
（何で俺の後ろなんだ？）
鉄也はそう思った
士郎
「ははは、あぁ此処の人達とは昔一緒に仕事してた仲だったんだよ」
なのは

（どんな仕事してたの？お父さん（汗）

心の底からそう思うなのはであった
すると、クロスは今度は桃子の方を見る

クロス
「お久しぶりです。桃子さん」
桃子
「久しぶりねぇ。女将は元気にしてる？」
クロス
「はい、それはお元気ですとも」

久しぶりの再会にクロスも顔が綻ぶ
だが、やっぱり怖い
その為なのは達は鉄也の背に隠れて震えている
それを見てクロスが頬を掻く

クロス
「すまないねぇオ穣ちゃんたち。叔父さんこんな顔だから怖がらせちまったかい？」
なのは
「ふぇ？・・・えぇと・・・だ、大丈夫です・・・ちょっとビックリしただけですし」
アリサ
「そ、そうそう・・・だから、安心して良いですよ」
すずか
「うんうん（激しく頭を振っている」
忍
「そ、そうそう・・・全然怖がって無いから（と言いつつ恭也の後ろに隠れる」

口ではそう言ってても皆クロスを怖がっていた
やれやれと言った顔でクロスは一同を旅館に案内する

旅館の中は結構広く、全員が入っても余裕がある位であった

クロス
「では、こゆっくり」

クロスはそう言って部屋を出た
クロスが居なくなったのを見てなのは達はフゥと安心する

なのは
「こ、怖かった～」
アリサ
「わ、私も～」
すずか
「クロスさんには失礼だと思いましたが・・・私も怖かったです」

3人供恐怖の余り暫く立てないでいた
そんな3人を見て士郎は笑う

鉄也
「しかし、あんたは一体何をやってたんだ?」
士郎
「まぁ、その内教えるよ」

士郎は意地悪く笑う
それを見て鉄也は首を傾げる

士郎
「さて、恭也・・・会わせたい人が居るからちょっとついて来なさい」
恭也
「ん？一体誰なんだい父さん」
士郎
「俺のお師匠さん・・・と言った所かな」

士郎の言ってる事の意味に首を傾げる恭也であるが、とりあえずついて行く事にした

なのは
「お父さんのお師匠さんって・・・一体誰なんだろう？」
鉄也
「さぁな」

なのはの問いに鉄也は肩を上げる
ふと、鉄也は周りを見た
鉄也の周りには士郎と恭也を覗き、殆どが女性なのだ（あ、ユーノが居たか？）
その為、今の鉄也には非常に居心地が悪かった

鉄也
「少し、旅館の中を歩き回ってくる」

そう言って鉄也は部屋を出た

なのは
「私も中を見て来ようかな」

そう言ってなのはとユーノも同様に出て行く

一方、別の部屋では

アルフ
「いやぁ、まさかこんな付近にジュエルシードがあって良かったねぇ」
甲児
「へへ、違ぇねぇや」

こちらでは甲児とアルフが居た

アルフ
「さぁて、私は風呂にでも入ってくるかなぁ」
甲児
「背中流してやろうか？」
アルフ
「噛み付かれたい？」
甲児
「流させてくれるなら」
アルフ
「・・・・・・・・（汗」

アルフは対応に困った
まさかそんな事言われるのだから

甲児

「ハハハッ！冗談だよ・・・さて、俺もぼちぼち風呂入ってくるかな」

アルフ

「甲児が言うと冗談に聞こえないよ（汗」

アルフは苦笑いを浮べながら言う

そうこうして二人もまた浴槽へ向かう

すると、

甲児

「ん？あれって・・・・鉄也さんじゃ」

アルフ

「あ、あの時の魔道士！」

甲児とアルフの前に鉄也となのはの姿があった

鉄也となのはも同様に甲児とアルフを見つける

なのは

「えっと・・・あれって、」

鉄也

「兜　甲児・・・」

甲児

「鉄也さん」

４人は互いに見合う

甲児

「アルフ、俺は少し鉄也さんと話しをしてくる」

アルフ

「あいよ、気をつけてね」

鉄也
「高町、俺も兜　甲児と話しがある」
なのは
「うん、気をつけてね」

お互い一言言って互いにデコをぶつける位の距離に近づく
今にも殴り合いが始まりそうな空気であった

甲児
「此処じゃ迷惑が掛かる・・・場所を変えようぜ」
鉄也
「良いだろう」

そう言って二人は庭先に向かった

アルフ
「さてと・・・」

アルフはなのはを見た
嫌、睨んだと言った方が正しかった

甲児と鉄也は庭を歩いていた

鉄也
「奇遇だな、まさかお前も此処に来ていたとはな」
甲児
「ああ、全く奇遇だぜ」

甲児は苦笑いを浮かべる

甲児
「鉄也さん・・・本当に俺の事を憶えていないのか?」
鉄也
「いい加減しつこいぞ。俺は貴様の事など知らん」
鉄也の回答に甲児は暗い顔をする

甲児
「鉄也さん・・・まさかあんた、記憶が・・・」
鉄也
「確かに、俺は記憶を無くした・・・もしかしたら・・・俺達は仲間だったのかもしれないな」
甲児
「鉄也さん・・・俺達は・・・」
鉄也
「だが、今は敵と味方だ!」

甲児の言葉を遮って鉄也は答えた
そして甲児をジロッと睨みつける

鉄也
「兜　甲児と言ったな・・・今此処で言わせて貰う。もし今後俺達の邪魔をしようと言うのなら・・・容赦はしないぞ」
甲児
「鉄也さん・・・俺も同じだ!」

お互いにそう言いあって甲児と鉄也は互いに睨みあう
だが、甲児の視線は震えていた
本当なら戦いたくない

それが甲児の心の声であった
だが、今の鉄也には甲児の声は届かない
そして、無情にも今二人は敵同士となってしまった

???

「やれやれ、こりゃまた面倒な事になっちまったなぁ（汗」

そんな二人を遠くから見つめる影があった
サングラスを掛け、妙に斜めに構えた男性であった

???

「こりゃ、女将さんに報告しないと不味いねぇ」

ボリボリと頭を掻いて男性はその場から離れる

士郎と恭也はとある場所に向かっていた
其処は

恭也
「父さん・・・どうして厨房なんかに？」
士郎
「黙ってついて来れば分かる」

恭也の問いに父はそう答えるだけであった
やがて、中に入ると、其処には一人の料理人が居た
嫌、居なかったのだ
その男は只ジッと料理を見つめていた

士郎
「お久しぶりです・・・先生」
先生
「・・・・・・（コクッ」

先生は士郎の方を向いて頷くだけであった
恭也は訳が分からなかった
本当にこの人が士郎のお師匠様なのだろうか？

士郎
「以前此処でお世話になった時にこの人の剣術を教わったんだ」
恭也
「こ・・・この人にぃ？」

正直信じられなかった
目の前に居るのは少し小太りな料理人にしか見えない
とても父に剣術の指南など出来そうにない外見である
しかし、それはすぐに撤回する事になった
先生と名乗る料理人がまな板を出し、目一杯の食材を取り出した
そして、包丁を手に持った瞬間、既に終っていた
何と、瞬きしている間に材料が全て切られていたのだ
それも全て同じ厚さ、使い方によって様々な大きさなどはあっても
決して雑ではない
むしろそれは神業に近かった
更に先生は何故か恭也の目の前に何も入っていない水槽を出す
其処にはなみなみと水が煎れられている
其処に先ほど切った魚の骨を入れる
すると、何と言う事だろうか！骨しか無い筈の魚が水槽の中で元気
に泳いでいるのだ

恭也
「な！」

それには恭也も最早驚くしか無かった
これは神業と言って良いのだろうか
嫌、既に神業の領域を超えているのかもしれない
それ程までの腕前だったのだ

士郎
「分かっただろう。先生の腕前が。今の俺達が二人掛かりで掛かっても、恐らく１０秒も掛からず先生に斬られるだろうな」
恭也
「し、信じられない・・・世の中にはこんな凄腕の剣豪がいたのか」

恭也は目を丸くしていた
だが、士郎は笑っている

士郎
「いんや、先生よりももっと手強いのが居るぞ」
恭也
「えぇ！まだ居るの？」
士郎
「ついてきな」

と言って、今度連れてこられた場所は、とある一室でありそこには
一人の老婆が忙しく働いていた
しかし、その動きは神速を超えた程であった
まるで老婆が何人にも居るように見える

士郎

「や、お菊姉さんお久しぶり」
お菊
「ん？・・・おやおや、士郎ちゃんじゃないかい！元気だったかい？」

と言っていたお菊姉さんは既に士郎の肩を叩いていた
その光景に恭也は目が飛び出す程の衝撃を覚えた
何故なら、今居た距離から士郎の居た距離までどう見ても５ｍ弱はあった
その距離を一瞬で来てしまうとは
何者なんだこの老婆は
と恭也は思えた

士郎
「お菊姉さん、紹介するよ、こいつが俺の息子の恭也だ」
恭也
「ど・・・どうも・・・（汗」

恭也は最早驚きの連続のせいでまともな思考を持ち合わせていなかった
その為顔は引き攣り汗が顔を濡らしていた

その頃、甲児はとある場所に来ていた

甲児
「お～い、フェイト～」
フェイト
「あ、甲児さん！」

木の上から声がすると思ったらその上からフェイトが飛び降りて来た

甲児
「見つかったか？」
フェイト
「うん、でも・・・動くのは夜になってからだね」
甲児
「だな・・・後、此処に前の魔道士が来てたぜ」
フェイト
「え？」

フェイトは驚きの声をあげる
甲児は頭を数回掻く

甲児
「まぁ、またあの時と同じで俺が鉄也さんをひきつけるからその隙にお前がジュエルシードを封印してくれ」
フェイト
「・・・甲児さん・・・」
甲児
「ん？どした？」
フェイト
「やっぱり・・・鉄也さんと戦うのって辛い？」

フェイトは申し訳なさそうに聞く
それに対し、甲児は軽く頷く

フェイト
「・・・行っても・・・良いんだよ」
甲児

「え？」
フェイト
「これ以上甲児さんに迷惑は掛けられないし・・・それに、私のせいで鉄也さんと戦う事になるのも辛いでしょ？」

そう言ってフェイトは甲児に背中を向ける
それは無言で「さようなら」と言っているようであった
そのフェイトの背中が僅かに揺れている
甲児はフゥと溜息を吐き、そしてフェイトの元に近づいて彼女の頭をそっと撫でる

甲児
「馬鹿だな・・・」
フェイト
「甲児さん」
甲児
「お前を放っておいていけるかよ」
フェイト
「で、でも・・・」
甲児
「それによぉ、鉄也さんに加えて俺まであっちに行ったら反則だろう？俺がこっちに居る位が丁度良いのさ」
フェイト
「？？？良く分かんない」
甲児
「ハハハ、まぁお前ももう少し大きくなったら分かるよ」
フェイト
「うぅ・・・子供扱いしないで下さいよぉ」

頬を膨らませて甲児を睨む

不覚にもそんなフェイトを少し可愛いと思ってしまった
そんな自分に平手打ちをかます

＊＊＊

やがて夜になり、甲児達はジュエルシードのあるとある泉に来ていた

甲児
「さて、そんじゃ厄介なのが来る前にさっさと片付けちまおうぜ」
フェイト
「うん、そうだね」

頷いてフェイトはバルディッシュを起動させる
フェイトの腕には起動したバルディッシュが握られていた

甲児
「さぁて・・・お宝は何処かなぁ・・・っと？」
アルフ
「ご機嫌だねぇ、甲児」
フェイト
「アハハ・・・ん？」
甲児
「有ったか？」
フェイト

「御免、ちょっと黙ってて」

フェイトはジュエルシードがあるであろう箇所にバルディッシュを向ける
すると、泉の水面から青く輝く宝石「ジュエルシード」が現れた

甲児
「おっとぉ、ドンピシャだな！」

甲児が軽く口笛を吹きながらジュエルシードを眺める
だが、その時

アルフ
「フェイト！」
フェイト
「どうしたの？」
甲児
「どうやら・・・厄介な奴等が来ちまったみたいだな」

甲児の視線の先には、既にバリアジャケットを身に纏ったなのはと、ユーノ
そして鉄也が居た

甲児
「・・・鉄也さん」
鉄也
「やはり来たか・・・兜　甲児」

甲児と鉄也は互いに睨みあう

なのは
「貴方は・・・」
アルフ
「あ～あ、やっぱり来ちゃったかぁ・・・言ったよねぇ私・・・「良い子にしてないとガブリって行くって」」
アルフも同様になのはを睨む

甲児
「おいおい、お前そんな脅しみたいな事言ったのか？」

甲児はアルフに軽口を叩く
すると、アルフの姿は人間の姿から瞬く間に狼の姿になった
その変化に甲児が驚く

甲児
「な！お前犬になれたのか？」

ガブッ

その刹那、突如甲児の視界が暗闇に覆われた
そして地味な痛みが甲児の頭に広がった
アルフが噛み付いているのだ

甲児
「いててて！こ、コラアルフ！てめぇ人様の頭齧ってんじゃねぇ！躾（しつけ）がなってねぇぞ！」
アルフ
「だから私は犬じゃなくて狼だって何度言ったら分かるんだい！この馬鹿甲児」

噛み付きながらもアルフは怒鳴る
そしてペッと吐き出す
甲児の額にはうっすらと血と噛み付いた跡が残っていた

フェイト
「えっと・・・大丈夫ですか？甲児さん」
甲児
「ああ・・・大丈夫だよ・・・それより」

甲児は鉄也に視線を戻す
鉄也も同様に甲児を睨む

甲児
「さぁて、以前の続きと行こうか」
鉄也
「良いだろう」

そう言い合って鉄也と甲児は同時に空を見る
そして目を見開いて自分の相棒を呼ぶ

甲児
「ジェェェェットパイルダァァァァ！」
鉄也
「ブレェェェェンコンドォォォル！」

叫んだ二人の元に相棒であるジェットパイルダーとブレーンコンドルが降り立つ
そして二人はそれに乗り込み空高く舞い上がる
そして、

甲児・鉄也
「マジィィィィィィンゴォォォォォォォォォォォ！」

と叫ぶ
その叫びに呼応してマジンガーZとグレートマジンガーが魔方陣から現れる
そして、その頭部にドッキングする

甲児
「パイルダァァァァオォォォォォォン！」
鉄也
「ファイヤァァァァァオォォォォォォン！」

甲児のパイルダーがZの頭部に、鉄也のコンドルがグレートの頭部にそれぞれドッキングする
そして2体の魔神の瞳が輝く

甲児
「ヘン、今度はマジンガーでやるってか！幾ら相手がグレートだからって容赦はしないぜ」
鉄也
「こちらも同じだ！相手が貴様だろうと全力を尽くす！手加減んはいらん！掛かって来い！」
甲児
「おう！行くぜぇ！」

2体の魔神がそれぞれ駆け出し、互いに拳をぶつけ合う

激突！マジンガー対マジンガー　前編（後書き）

続く

激突！マジンガー対マジンガー　後編（前書き）

マジンガーZ対グレートマジンガー

高町なのは対フェイト・テスタロッサ

フェレット対犬

有り得ない戦いが今此処に

ユーノ
「って、何で僕がフェレットなの？」
アルフ
「私は犬じゃなくて狼だよ！噛み付くよ（怒」

はいはい、うっさいからとっとと始めるぞ

激突！マジンガー対マジンガー　後編

甲児のマジンガーZと鉄也のグレートマジンガーが激しく拳のぶつけ合いをしていた

甲児
「うおおおおおおおおおおおおおお！」
鉄也
「おおおおおおおおおおおおおおお！」

二人共声高らかに拳をぶつけ続ける
2体の魔神の拳は寸分違わず拳同士がぶつかり合う
凄まじい衝撃と激しい火花が飛び散る
その衝撃は操縦桿を通して甲児に伝わった

甲児
「こ・・・これが・・・グレートの力・・・」

甲児は今始めてグレートの強さを実感していた
今まで訓練がてら模擬戦で戦った事はあっても、どれも本気で戦った訳ではない
しかし、今はお互い本気でぶつかり合っているのだ
その為この肌で、この手で、この体全てで甲児はグレートの強さを実感していた
正直、絶対に敵に回したくない相手である
そんな相手が今、目の前で敵として現れているのだ

甲児
「ちっ！」

甲児は舌打ちし、咄嗟に距離を開けた
そして腕を水平に構える

甲児
「ロケットパンチ！」

構えたZの腕が飛び出す
ロケット噴射を利用して放つロケットパンチである
だが、それはグレートも同様であった

鉄也
「アトミックパンチ！」

グレートの右腕もZと同様にロケット噴射で飛び出していた
Zのロケットパンチとグレートのアトミックパンチが互いにぶつかり合う
だが、押し勝ったのはグレートであった

甲児
「グハッ！」

甲児に激しい衝撃が走る
グレートの腕がZの胸に当たったのだ
幸いロケットパンチとのぶつかり合いで威力が殺された為致命傷にはならなかったが、それでもかなりの衝撃が伝わってきた
もし直撃しようものならZと言えども只では済まないだろう

甲児
「くそっ！」

苦い顔をしながらも甲児は腕を戻して立ち上がる
グレートも同様に腕を戻す
だが、そのグレートには余裕の表情が伺えた

鉄也
「どうした？お前の魔神はその程度の力しか無いのか？」

甲児
「んなろぉぉぉぉ！」

その一言が甲児には癪に障った
マジンガーZは亡き十蔵が甲児に残したたった一つの遺産なのだ
それを馬鹿にされる事は祖父兜十蔵をこけにしたのと同じ意味であった

甲児
「幾ら鉄也さんでもマジンガーZを侮辱するなら容赦はしねぇ！ブレストファイヤァァァ！」

マジンガーZが両手を天に突き出して吠える
その胸の放熱板から赤い熱線が放たれる

鉄也
「だったら俺を倒して見せろ！ブレストバァァァン！」

グレートは両腕を横に水平に伸ばす
そして胸のV字型放熱板からマジンガーZと同じ熱線が放たれる
二つの熱線は空中でぶつかり合い、激しいプラズマ光を発する

甲児

「ぐうぅぅぅぅぅ」
鉄也
「むうぅぅぅぅぅ」

2人が苦しい声を上げる
少しでも気を緩めれば熱線が襲い掛かり溶かされてしまう
そんな恐怖が2人を襲っていた
その為2人とも片時も相手から視線を外す事は出来ない
その時、凄まじい衝撃が2体の魔神を吹き飛ばす
プラズマ光が暴発したのだ
その拍子に2体は吹き飛び背中から大地に落ちる

甲児
「グハッ！」
鉄也
「グゥッ！」

凄まじい衝撃が襲い掛かる
幾らパイロットスーツと言えども衝撃を全て吸収する事は出来ない
余りの衝撃に甲児は不快感を覚える
今日食べた物が口から出そうになった
だが、涙目になりながらも必死に飲み込む
大事なパイルダーを汚したくないのだ

甲児
「ち・・・ちっくしょう・・・」

ヨロヨロと立ち上がるZ、それはグレートも同じであった
鉄也

「くっ・・・武器では被害が拡大するだけか・・・」

鉄也は周りを見た
周りではマジンガーが暴れた事によって木々がなぎ倒されていた
そして、先の暴発によって所々では火災がおきかけてる
これ以上下手に暴れれば騒ぎが起きる
そう懸念した鉄也は

鉄也
「ダブルマジンガァァブレェェド！」

両足から2本の諸刃の剣を取り出す
そして内1本をZに向けて投げつける
Zはそれをキャッチして手に持つ
それを見てグレートは剣を両手で構える

甲児
「成る程・・・これで決着を着けようってか・・・良いぜ！望む所だぁぁぁ！」

甲児のZもマジンガーブレードを両手で構えて走り出す
グレートも同様であった

甲児
「てやあああああああああ！」
鉄也
「とわあああああああああ！」

2体の魔神の振るった剣が空中でぶつかり合う

その頃、なのはとフェイトは向き合っていた

なのは
「お話・・・出来ないの？」

フェイト
「話し会っても・・・何も分からない事だってある・・・それに」

フェイトは暗い顔のままなのはを睨みつける
そしてバルディッシュを向けてこう言い放つ

フェイト
「私は・・・甲児さんの為に負ける訳には行かないの」

なのは
「それは・・・私だって同じだよ！私だって鉄也さんの為に負けられない」

なのははそう言い放ちレイジングハートを構える

フェイト
「賭けて！お互いのジュエルシードを・・・そして、お互いの想いを」

そう言ってフェイトは猛然と突っ込んできた
バルディッシュから光の刃を形成し振り下ろす

なのは
「くうっ！」

なのははそれを咄嗟にレイジングハートで受け止める
そして、押し離し、その隙に照準を合わせる

レイジングハート
『アクセルシューター』
なのは
「シュゥゥウト！」

レイジングハートから桜色の光弾が機関砲の如く放たれる

フェイト
「はぁっ！」

フェイトはそれを飛行してかわす
そして、かわしながら距離を詰めて再びバルディッシュを振るう

なのは
「く・・ううう！」

ゼロ距離になった2人が互いにデバイスをくっつけながら睨みあう
暫しの沈黙の後、すぐに距離を開ける
そして、今度はお互いに遠距離から砲撃をする
黄色の閃光と桜色の閃光が互いに空中でぶつかり消滅する
お互いの魔力はほぼ互角
ならば、後は腕前の勝負となった

ユーノ
「なのは！今援護を『させないよ！』な！」

なのはを援護しようと向かおうとするユーノをアルフが阻む

アルフ
「悪いけど、あんたの相手は私だよフェレット」

ユーノ
「やはり・・・君は使い魔なのか？」

アルフ
「そうさ、私はあのフェイトの使い魔！あの子の為に私は戦う！親の元でぬくぬくと甘えて育ってきたあんな甘ちゃんなんかにフェイトは負けない！」

アルフはそう言い放ち猛然と突っ込んでくる

ユーノ
「くっ！」

咄嗟にユーノは結界を張り防ぐも、それはすぐに破られる

アルフ
「そんなちゃちな結界じゃ私は防げないよ！」

と言ってアルフは後ろ足でユーノを蹴り飛ばす

ユーノ
「がはっ！」

悲痛の声を上げてユーノは吹き飛ぶ
だが、すぐに体制を立て直す

アルフ
「へぇ、フェレットの割りには中々やるじゃないか！」
ユーノ
「何故だ！何故ジュエルシードが必要なんだ！あれは危険な物なんだぞ！」
アルフ
「そんなの私の知ったこっちゃないね。あたしのご主人様が必要って言ってんだから私はそれに従うだけさ」
ユーノ
「くっ！」

歯噛みしたユーノとアルフは再び空中でぶつかり合う

マジンガーブレードを構えた2体の魔神は互いに剣をぶつけ合っていた

甲児
「おうううううりゃあああああ！」

Zが横に剣を凪ぐ

鉄也
「むぅん！」

それをグレートが上から振り下ろした剣で払う
今度はそのままZの胸目掛けて剣を突き立てる

甲児
「くそぉっ！」

それを振り払う
そして両手で持って力任せに振り下ろす

鉄也
「ふん！」

グレートも剣を両手で持って防ぐ
衝撃で足が地面に沈む

甲児
「鉄也さん！思い出してくれ！本当にあんたは俺の事を忘れちまったのかよ！」
鉄也
「気安く名前を呼ぶな！お前に呼ばれる筋合いなどない！」
甲児
「クッ！鉄也さん！」

再び2体は距離を開ける
そして、グレートはZに向けて仁王立ちする

鉄也
「食らえ！ネェェェブルミサイィィル！」

グレートのヘソの部分からミサイルが放たれる

甲児
「なんのぉ！ドリルミサイィィル！」

をれを迎え撃つ為にZの肘からドリルミサイルが放たれる
2つのミサイルは互いに空中でぶつかり合い爆発する

甲児
「今だ！ルストハリケェェェェン！」

爆煙で視界を塞がれた隙を突きZが猛烈な風を浴びせる
だが、煙が晴れた時、其処には同様に風を放つグレートが居た

甲児
「なにぃ！」
鉄也
「貴様の戦法なぞお見通しだ！グレェェトタイフゥゥゥゥゥン！」

Zのルストハリケーンをかき消しグレートのグレートタイフーンが
Zを錐揉み上に上空に吹き飛ばす

甲児
「うわぁぁぁ！」

上空に放たれたZの真下にグレートは移動する

鉄也
「これでトドメだ！」

Zの落下地点に向けてグレートは剣を突き立てる
このままではZは串刺しだ

甲児

「なろぉ！百舌のはやにえは御免だぜ！来ぉぉい！ジェェェェットスクランダァァァ！」

甲児は叫んだ
すると、遥か上空から赤い翼が現れる

甲児
「スクランダァァァクロォォォス！」

Zはスクランダーと上空で十字にクロスする
そして悠々と空を飛ぶ

鉄也
「ちっ！スクランブルゥゥダァァァッシュ！」

鉄也も同様に叫ぶ
するとグレートの背中から折りたたみ式の翼「スクランブルダッシュ」が現れる
そしてグレートも同様に空に舞い上がる

鉄也
「ほぉ、どうやらZも飛べたんだな」
甲児
「ったりめぇだ！此処なら安心して戦えるってもんだぜ」
鉄也
「調子に乗るな！」

グレートとZが空中でぶつかり合おうとした時

ユーノ

「なのはぁぁ！」

突如、ユーノの声が響いた

鉄也
「何！」

鉄也はなのはの居た場所を見る

なのはの首筋にはバルディッシュの刃が掛けられていた
一瞬の隙を突き、フェイトが距離を詰めてバルディッシュを振るったのだ
なのはは動けないでいた
もし下手に動けば、その時は彼女の首が宙を舞う事になる
そして、レイジングハートからジュエルシードが姿を現した

なのは
「レイジングハート！どうして？」
フェイト
「ご主人思いなんだね」

そう呟いてフェイトはレイジングハートから現れたジュエルシードに手を伸ばす

アルフ
「フェイト！危ない！」
フェイト
「え？」

フェイトが振り向いた
其処には赤い何かがフェイト目掛けて飛んできたのだ

フェイト
「くううううううううう！」

咄嗟にバルディッシュを横に構えて防ぐも、凄まじい衝撃の余り吹き飛ぶ

鉄也
「大丈夫か？高町」
なのは
「て、鉄也さん！」

其処には、赤い放熱板「グレートブーメラン」を元の位置に戻す鉄也の姿があった

甲児
「鉄也さん！あんた自分が一体何したのか分かってるのか？」

其処へ甲児のZが降り立つ

鉄也
「言った筈だ！俺達の邪魔をするなら容赦はしないとな」
甲児
「て、てめえええええええええええ！」

その一言に完全に切れた甲児が猛然とブレードを振るうだが、それをグレートの一閃が振り払う

その拍子にZはブレードを手放してしまう
Zの持っていたブレードは放物線を描いてZの後方の地面に突き刺さる
そして、丸腰になったZに向けてグレートが剣を突き立てる

鉄也
「終わりだ！」
甲児
「くっ・・・鉄也さん」

甲児が苦悶の声を上げる
だが、それは鉄也には届かない
剣を振り上げて今、正にZに向けて振り下ろそうとした時、

フェイト
「サンダァァァレイジィィィィ！」

突如、グレートに雷光が襲い掛かった

鉄也
「ぐぅっ！」

その衝撃に鉄也はよろける
そして、甲児はそれを放つのが誰か分かった

甲児
「フェイト！」

甲児の視線の先には、傷だらけのフェイトがサンダーレイジーをグレートに放っていた

フェイト
「甲児さん！今の内に！」
甲児
「すまねぇ」

甲児は後ろに突き刺さっていた剣に向かう
グレートは未だに電撃を浴びて苦しんでいた

アルフ
「良いぞフェイト！そのまま黒漕げにしちゃえ！」

アルフが声援を送る
だが、その時鉄也の笑い声が帰って来た

鉄也
「フッ、これで黒漕げ？笑わせるな」
フェイト
「え？」
アルフ
「な！」
鉄也
「お前等に本当の電撃を教えてやるぜ」

そう言うとグレートが突如片腕を天に突き翳した
すると、その指に向かって一筋の稲妻が降り注ぐ
それを腕に溜め込み一気に放つ

鉄也
「必殺パワー！サンダァァブレェェク！」

グレートの放つ必殺技「サンダーブレーク」はフェイトのサンダーレイジーを弾き、真っ直ぐフェイトに向かって飛んでいく

フェイト
「ああ！」
アルフ
「フェイト！」

アルフは咄嗟にフェイトの前に出る
そしてグッと目を瞑る
・・・だが、一向に痛みが来ない
不思議に想い、目を開くと

甲児
「ぬうううううううあああああああああああああ！」
アルフ
「こ・・・甲児！」

何と其処にはグレートのサンダーブレークを一身に受けるZの姿があった
Zの体は激しいプラズマ光に包まれている
装甲の所々が焼けて変色していく

アルフ
「こ・・・甲児！・・・あんた一体何で？」
甲児
「へ・・・へへ・・・可愛い子ちゃんを・・・守るのは・・・男の・・・特権でぃ！」
アルフ

「な！何馬鹿な事言ってんのさ！それより早くどきなよ！このままじゃあんたが！」
甲児
「俺は良い！それよりフェイトかアルフ・・・どっちでも良い！グレートの・・・グレートの翼を攻撃するんだ！」
フェイト
「グレートの翼を？・・・何で？」
甲児
「そ・・・其処が・・・・グレートの・・・弱点なんだ・・・・・頼む・・・俺の意識が残ってる内に・・・」

甲児の声が徐々に掠れて来た
意識がそがれているのだ
それを見てフェイトが決心する

フェイト
「甲児さん！待ってて！」

フェイトは急ぎ飛行する
グレートはそんなフェイトには気づかず、サンダーブレークを打ち続ける
それが幸いしてか、フェイトがグレートの背後に回るのは容易であった

フェイト
「あそこを狙えば・・・バルディッシュ」
バルディッシュ
『イエス、サー』

バルディッシュがフェイトの声に答えて杖の穂先にエネルギーを溜

める
そして

フェイト
「サンダァァァスマッシャァァァ！」

一筋の雷光がグレートの背中、翼の収納部分に当たる
そして、それが命中した時、グレートの瞳から光が消えた

鉄也
「なに！？」

鉄也には意味が分からなかった
突然全機能が停止してしまったのだ
そのままグレートは大地に落下する

鉄也
「ぐおぉっ！」

余りの衝撃に鉄也はキャノピーに頭をぶつける
ヘルメットにはヒビが入り、額からは血が流れる

フェイト
「い・・・今のは・・・」
アルフ
「フェイト！今の内に！」
フェイト
「う・・・うん！」

グレートが動けない今の内にフェイトは２つのジュエルシードを封

印する
そして、Zの方へ向かう

フェイト
「甲児さん！大丈夫？」
甲児
「へへ！なぁに、この兜甲児様がこんなもんでくたばるかい！まだちょっと体が痺れるけど大丈夫だぜ」
フェイト
「良かった」

ホッとするフェイト
そして飛び去ろうとした時

なのは
「待って！」

それをなのはが呼び止める
フェイトは振り返る

なのは
「私、高町なのは・・・貴方は？」
フェイト
「・・・」

フェイトは答えようとはしない
だが、

甲児
「教えてやれよ。どうせ減るもんじゃねぇしよ」

フェイト
「甲児さん・・・フェイト・・・フェイト・テスタロッサ・・・それが、私の名前」

フェイトはなのはに向かって名乗る

なのは
「フェイトちゃん・・・また・・・会えるかなぁ？」
フェイト
「もう、会わない方が良い・・・次は・・・多分手加減出来ないから・・・」

フェイトはなのはに背中を向けてそう言うと
アルフと甲児と共に空に飛び去っていった

なのは
「フェイトちゃん・・・」
ユーノ
「一体・・・彼女達は何故ジュエルシードを集めるんだ・・・」
なのは
「あ！鉄也さん！」

ふと、なのはは大地に倒れるグレートを思い出し駆け寄る
グレートの巨体は目から輝きを失いそのまま地面に倒れていた

なのは
「鉄也さん！大丈夫？」
鉄也
「くっ・・・つぅ・・・ああ、なんとかな」

額の出血具合を見て鉄也がそう呟く
そして、なのはに申し訳なさそうな顔をする

鉄也
「すまない・・・俺があの時もっと早く駆けつけていれば・・・ジュエルシードを奪われずにすんだのに」
なのは
「ううん、鉄也さんのせいじゃないよ！」
鉄也
「高町・・・」
なのは
「それより、早く帰ろう・・・皆心配してそうだよ」
鉄也
「ああ・・・そうだな」

鉄也はグレートを魔方陣の中に仕舞うと大地に下りる

鉄也
「むぅっ！」

降りた瞬間、鉄也の視界は揺らいだ
恐らく落下の衝撃がまだ残っているのだろう
肩膝を突いて頭を振る

なのは
「だ・・・大丈夫ですか？」
鉄也
「心配ない・・・少し目眩がしただけだ・・・それより早く帰ろう」

そう言って鉄也はゆっくりと歩き出した

なのはとユーノもそれに続く
ふと、なのはは頭の中で先ほどの少女、フェイトを思い出していた
なのは
（フェイトちゃん・・・凄く悲しい目をしてた・・・何でだろう・・・）
なのはの脳裏には、悲しい顔をしているフェイトの顔が脳裏に焼きついていた

激突！マジンガー対マジンガー　終

次回予告

傷だらけになりながらもジュエルシードを回収したフェイトは母の待つところへ行った
だけど、その母親は突如フェイトに酷い仕打ちをしやがった
何するんだ！あんたはフェイトがどんな思いで集めたのか分からないのか？
フェイトを救おうと母とフェイトの間に入る甲児
その時、甲児は見た
フェイトの母に取り付く『悪意』に

次回
『地獄からの再会』

次回もこの小説に
テイィィィィクオォォォォォォォフ！

激突！マジンガー対マジンガー　後編（後書き）

書きわすれたので書いて置く

くろがね屋の温泉で

なのは
「さ、ユーノ君も一緒に入ろう」
ユーノ
「キュウウウウウ！」（えええええええええ！）

なのはに抱かれてユーノが女湯に入っていく

ユーノ
（て、鉄也さん！助けて下サアアアアアアアアイ）

ユーノは必死に鉄也に念話を送る
しかし、鉄也には届く筈も無い

鉄也
「さて、俺達も入るとするか」
恭也
「そうですね」

と言って二人は男湯に消えていった

ユーノ
（て、鉄也さあああああああああああああああああああん！）

ユーノは叫ぶ（念話でね）
だが、その声は聞こえる筈も無く

アリサ
「フフフ、さぁフェレットちゃん・・・綺麗に洗ってあげるからねぇ（ニヤニヤ」
すずか
「怖がらなくて良いんだよ」
忍
「さ、早く入ろう」
桃子
「そうね」
なのは
「わぁぁぁい！」

はしゃぎながら女湯に向かう女性一同
そんな中、ユーノは

ユーノ
（誰か助けてくださあああああああ

外伝４　ダイエット大作戦？？？（前書き）

女性と言えばダイエット
今回はそんなダイエットにまつわるお話である
まぁとんでもない話しになるのは当然だが（汗）

外伝４　ダイエット大作戦？？？

その日、甲児は特訓を終えて一息ついていた
ミッドチルダで販売されている週刊誌に目を通していた
因みに今甲児が見てるのはグラビア雑誌である（なのは達も出ている奴）

すると、特訓を終えたなのは達が来ていた

なのは
「それじゃ、今日の特訓はこれで終り、後は汗を流して上がりにしよ」
フェイト
「ふぅ・・・今日は少しハードだったね（汗」
はやて
「いやぁ、久しぶりに体を動かすのは気持ちの良いもんやなぁ」
ティアナ
「そう言えばはやてさんずっとデスクワークでしたからね」
ギンガ
「は～、お腹空いた～」

と、５人が話しながら甲児の横を通り過ぎた

甲児
（お！・・・なのはちゃん達はこれから風呂か・・・）

そう聞いた甲児は早速動こうとしたが

なのは

「甲児さん」

それを見透かしてたかのようになのはがこっちを向く

甲児
「ん？何か用か？」

なのは
「覗いたら・・・頭冷やさせますからね（ニヤッ」

甲児
「へェへェ」

なのはの脅しに甲児は軽く返事する
それに多少不満気な顔になるも気にせずなのは達は浴槽に向かう
だが、あんな脅しで怖がるような甲児では無い

甲児
（フフフ・・・今回はちゃんとカメラも持参したし・・・このチャンスを逃す手は無いってね）

そう言って甲児は懐から小型のデジカメを取り出す

さやか
「あら、甲児くん」

甲児
「あれ？どうしたのさやかさん」

甲児は急ぎデジカメを仕舞いさやかを見る
さやかもトレーニングウェアを着て汗を拭っている
その仕草はこれから何をするのか安易に予想出来た

さやか
「これからお風呂入ろうと思ってね」
甲児
「へ～、そうなの」（よっしゃぁ！さやかさんのヌードが見れる！）

心の中でガッツポーズを決める

さやか
「覗いちゃ駄目だからね！（ズビシ」
甲児
「わ・・・分かってるよさやかさん（汗」

指を指されて冷や汗を流す甲児に気を良くしたのかさやかも浴槽へ向かう
しかし、その後甲児は満面の笑みを浮かべる

甲児
（これは大チャンス！なのはちゃん達の上にさやかさんのヌードが拝めるのはそうねぇ事だしな）

そう言って今度こそデジカメを取り出す

スバル
「あ、甲児さん！」
ノーヴェ
「よう、馬鹿甲児！」
甲児
「あん？何だ、スバルにノーヴェ・・・2人して来るなんて珍しいな」

今度はスバルとノーヴェが来ていた
2人ともまだバリアジャケットを着たままだ

スバル
「ええ・・・さっきまでノーヴェと合体技の練習をしてたんですよ」
甲児
「合体技？」
ノーヴェ
「あたしとスバルで2人でディバインバスターを打つ、名づけて「ダブル・ディバインバスター」どうだ？カッコ良いだろう？」
甲児
「う～ん、まぁネーミングセンスは置いておいて・・・ってかノーヴェ、お前ディバインバスター撃てるのか？」
ノーヴェ
「おう、スバルに教わったからバッチシ撃てるぜ！」

親指を立てて自信ありげに言う
それを見て関心する甲児
すると

『キャアアア

「何だって！」

そう聞いた3人は真っ先に風呂場に向かった

甲児
「どうしたぁ！」

甲児が女湯の扉を蹴破る
すると、其処には正に『桃源郷』が広がっていた

なのは
「え！」
フェイト
「い！」
はやて
「あ！」
ティアナ
「うえぇ！」
ギンガ
「いぃ！」
さやか
「こ・・・甲児・・・くん・・・」
スバル・ノーヴェ
「あ・・・」
甲児
「え・・・・えぇと・・・」

余りの光景に甲児の思考は停止していた
そう、今甲児の面前に広がっているのは彼女達の一糸纏わぬ姿が広がっていた・・・・・

・・・・要するに『裸』である

突然の光景に甲児は本来撮る為に用意した筈のデジカメを使用するのをすっかり忘れていた
そして、

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ギンガ・さやか
「キャアアア

甲児
「ギャアアア

はやての許しを得て3人が恐る恐る顔を上げる
其処には、上げなければ良かったと思わせる光景が広がっていた
魔王のオーラを全開で出しているなのはを筆頭に5人の魔道士がバリアジャケットを身に纏い、デバイスを構えてコチラを睨んでおり、
さやかは腕をボキボキと鳴らしていた

なのは
「甲児さん・・・初めに言ったよねぇ・・・覗いたら『頭を冷やさせる』って」

目元が黒いなのはが甲児にそっと良い寄る

フェイト
「それなのに、あんなに大胆に覗きに来るなんて」
はやて
「正直うちら度肝を抜かれたわ」
ティアナ
「幾ら甲児さんでもやって良い事と悪い事があります」
ギンガ
「覚悟は良いですか？」
さやか
「甲児く～～～～ん（怒」

そう言いながら6人が甲児を睨む

甲児
「ま、待ってくれ！あれは事故だったんだ！突然何かの叫び声がして何かなと思ってきたんだよ！（汗」
ノーヴェ

「そ、そうそう！もしかしたら敵が侵入してきたかと思ってさぁ（汗」
スバル
「決して疚(やま)しい心があった訳では無いんです！何卒お慈悲をぉ（涙」
3人が必死に許しをこう
だが、
なのは
「ニャハハハ！だ～～め（ニッコリ」
その声を皮切りに5人の魔道士の一斉砲撃＋さやかの鉄拳が甲児に浴びせられた
因みにスバルとノーヴェは巻き添えである
スバル・ノーヴェ・甲児
「ンｖ；藍上ｈｇｗんｖじゃおｗ；ｈｂｇｗｖｎａｌ．．ｇｗｖｎｊｋｓおｄｈｖｗ０あおｖばおうｗｇＪｖんｗｎｖｊａｉｏｓｈｖｗあ９おｈｖなおじゅｗｖｈ」
声にならない叫び声を上げて3人は再び黒漕げになり爆発アフロヘアーとなった

＊＊＊

スバル（アフロ）
「そう言えば何でなのはさん達は叫んだんですか？」
ノーヴェ（アフロ）
「そうだよ！それあたしも気になったんだ」
甲児　（アフロ）
「何か理由でもあるのか？」

アフロヘアーが似合う3人がなのは達に聞く
それを聞かれ6人は「ギクゥ」っとなる

なのは
「にゃ、ニャハハ・・・な、何でも無いよ・・・只・・・ちょっとね」

と言ってウエスト周りを気にするなのは

フェイト
「私も・・・少し・・・」
はやて
「うちもや・・・」

こちらでは少し暗い顔になるフェイトとはやて

ティアナ
「やっぱり・・・普段の特訓が足りなかったからでしょうか（涙」
ギンガ
「やっぱり、この頃食べ過ぎたからかなぁ（涙」
さやか

「うう・・・きをつけてたのに（涙」

更にこちらでは涙を流し出すティアナとギンガとさやかが居た
それを見て

甲児　（アフロ）
「つまり・・・お前等『太った』の？」
6人
「ギクゥッ！」

甲児の問いに6人が揃って肩を震わせる
つまり図星である

スバル（アフロ）
「へ～、ティア太ったのぉ？でもそんなに変わってないから気にする事『ゴキィッ』あうぅ・・・」

言い終わる前にティアナの鉄拳を脳天に食らい気絶するスバル（アフロ）
それを見て甲児　（アフロ）とノーヴェ（アフロ）は青ざめる

なのは
「と、言う訳だから・・・これから私達6人はこれよりダイエットに入るの！」
フェイト
「うん！絶対痩せてみせる！」
はやて
「目指せ！あの時のスレンダーなボディライン！」
ティアナ
「痩せる・・・痩せてみせる！」

ギンガ
「痩せるぞおおおおおおおお！」
さやか
「見ててね甲児くん！私綺麗になって見せるから！」

6人は結束し闘志が燃え上がっていた

甲児　（アフロ）
「あ・・・そう・・・頑張ってね（汗」
ノーヴェ（アフロ）
「あたしらは邪魔だから・・・これで失礼するかなぁ（汗」

そう言ってノーヴェ（アフロ）は気絶してるスバル（アフロ）を抱えて甲児　（アフロ）とこの場を後にしようとしたが、その背後から突如数発の桜色の魔力弾が放たれるそれは甲児　（アフロ）とノーヴェ（アフロ）の頬を掠める掠めた頬が僅かにスースーした
2人は青ざめながら振り返った
其処にはデバイスをこちらに向けて構えているなのはが居た

甲児　（アフロ）
「あ・・・あのぉ・・・まだ何か？」
なのは
「手伝って・・・くれるよね？」
ノーヴェ（アフロ）
「ええと・・・あたしらは無関係なのでこれで・・・」
なのは・さやか
「手伝ってくれるよね（ギロリ」
甲児・ノーヴェ（アフロ）
「ハイ、喜ンデ（涙」

なのはの睨み（さやかのも）を受けて涙を流す甲児　（アフロ）とノーヴェ（アフロ）は軍人の敬礼のポーズを取りながら片言で答える

フェイト
「とにかく！これからは皆断食だね！」
はやて
「せや！それときっちり特訓をこなすんや！」
ティアナ
「なのはさん！これから毎日模擬戦やりましょう！」
なのは
「良いよ！一緒に頑張ろうね」
ギンガ
「ブリッツキャリバーを使わずに特訓すれば・・・痩せれるかも」
さやか
「とにかく減量じゃあああああああ！」

と、これまた闘志を燃え上がらせる６人
その６人に甲児　（アフロ）とノーヴェ（アフロ）は只黙って見ているしか出来なかった

＊＊＊

翌日

甲児
「ふぁ～～あぁ、今日も良い天気だぁ」
甲児が背伸びしながら特訓場に来ていた
其処には

スバル
「う・・・うう・・・」
ノーヴェ
「もう・・・だめ・・・だ・・・」

其処には虫の息のスバルとノーヴェが居た
それを見て

甲児
「ど、どうしたあああああああああ！」

と、叫びながら近づく甲児
すると、その周りにはエリオ、キャロ、ルーテシア、アギト、リインⅡ、ヴィータ、シグナム、ナンバーズ、ボス、ヌケ、ムチャの姿があった

甲児
「な、何じゃこりゃあああああああああああああ！」

と、甲児が叫んだ直後凄まじい爆発が起こった
甲児は爆発の起こった場所を見た
其処では

なのは
「はあああああああああああああああああああ！」
ティアナ
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

なのはとティアナがこれでもかと言う程激しい接戦を繰り広げていた
その衝撃でビルは砕け、床は抉れ、窓ガラスは割れる始末である
更にその横では

ギンガ
「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
フェイト
「はあああああああああああああああああああ！」
はやて
「痩せるんやあああああああああああああああ！」

と、これまた必死の顔になった3人が町の中を爆走していた
勿論走ってるのだ
因みにギンガはブリッツキャリバーを装備してない
更には

さやか
「ぬううおおおおおおおおあああああああああああ！」

さやかが何やら棒みたいな物を振り回して訓練用のガジェットを破壊していく
正にそれは地獄絵図のような光景であった

ディード
「ううう・・・・ううううう・・・」

その時、側に居たディードが目を覚ます
甲児はすぐさまディードの側に寄る

甲児
「ディード！一体何があったんだ！何でなのはちゃん達があんな事をしてるんだ？」
ディード
「わ・・・分かりません・・・只・・・もう・・・１０時間も・・・続けて・・・います・・・（ガクッ」

そう言ってディードは力尽きた（気絶しただけです）

甲児
「ま・・・マジですか（汗」

甲児は目の前で地獄絵図を量産している一行を見ていた
６人共地獄の鬼ですら逃げ出すような恐ろしい形相をしていた
それを見て、甲児は青ざめた

＊＊＊

ジェイル
「え？簡単に痩せられる装置を作れないか？だってぇ」

とりあえずこのままだと機動六課は壊滅するだろうと懸念した甲児とディードは早速スカリエッティ博士の元へ来ていた

甲児
「頼むよジェイル博士！このままだと機動六課は身内の手で壊滅させられちまうよ」
ディード
「それ以前に、なのはさん達が痩せる前に私達が骸骨になってしまいます！」
ジェイル
「そ・・・其処までなのかい？（汗」
ディード
「はい！今朝なんか・・・」

ディードが説明する

【回想】

それは朝の特訓を終えて食堂に来た時であった

スバル
「お腹空いた～～」
ノーヴェ
「腹減った～～～」

机に突っ伏してそう呟くスバルとノーヴェ

ディード
「ほら、早く取らないとなくなっちゃうよ」

スバル
「おぉっといけねぇや！」
ノーヴェ
「（何時の時代だよ）急げ！」

スバルとノーヴェは取り皿を持っておかずを取りに向かった
しかし、其処で出されたのは・・・何と『魚の骨のフライ』と『野菜の芯のサラダ』であった
それを見て

ノーヴェ
「な・・・」
スバル
「何・・・これ？（汗」

2人は目を点にして出されたおかずを見る
すると、食堂のおばちゃんが

「御免なさいねぇ、部隊長さんの指令で、フォワードメンバーに限り特別メニューでお願いって指令が来てねぇ、それで我慢してね」

と、説明した
それを聞いて

スバル・ノーヴェ
「のおおお

【回想　終り】

ディード
「と、言う訳なんですよ！ドクター」

ディードが涙目になって言う
それを聞いて流石のスカリエッティ博士も引き攣った顔になる

ジェイル
「た・・・確かに・・・それは行き過ぎだなぁ（汗」
甲児
「だろぉ！このままじゃ俺達が骸骨になっちまうよ！何とかしてくれ」
ジェイル
「うぅむ・・・と言ってもねぇ」

事実不可能であった
そんな短時間で痩せる装置を作れと言ったって出来ないのだ
科学にも限界がある
そんな時

十蔵
「そんな時はこのワシにまかせぃ！」

と、突如ジェイル博士の肩から十蔵が現れた

甲児
「お爺ちゃん！」
ディード
「何かあるんですか？」

十蔵
「おう！短時間で痩せられて効果も抜群・・・んでもって・・・ムフフ♪」

十蔵が何やらニヤけていた
その意味が分からず甲児とディードは首を傾げ、ジェイル博士は頭を抱えていた

＊＊＊

数日後、装置が完成したとの報告があり甲児はなのは達を十蔵の研究室に呼んだ

なのは
「本当なの！本当に短時間で痩せられるの？」
甲児
「ああ、お爺ちゃんが言ってるからそうだと思うぜ（多分」
フェイト
「やっと・・・やっとこれで痩せられるんだ（涙目」
はやて
「苦節数日間・・・ほんまに辛かったわ・・・でも、それが今日報われるんやなぁ（涙」
ティアナ
「あぁ、今までの苦労が走馬灯のように駆け巡っていく（涙」

ギンガ
「早く一杯食べたい（涙」
さやか
「我慢よギンガちゃん（涙」

６人共涙を流しているそれ程までに厳しい減量だったのだろう
聞いた話によると、６人は過酷なトレーニングの上に過剰な減量、
更にはサウナや健康グッズなどを試していたらしい
しかし、効果は余りでなかったようである

十蔵
「やぁやぁ、待たせたのぉ」

其処へ十蔵博士が手を振りながらやってきた
なのは
「それで、十蔵さん！その装置ってのは？」
十蔵
「おう！お見せしよう！これこそワシが開発した至極の傑作『マッサージマシーン』通称『あ～ん、もっと其処を揉んで～君１号』じゃあああああ！」
６人
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ネーミングセンスは相変わらずながら、どうにもその通称を聞いてると何故か『卑猥』な物を想像してしまう６人であった
しかし、その６人の目の前には何やら巨大で丸っこい物があった
分かりづらい読者方は原作ストライカーズで出てくる『ガジェット３型』を想像して欲しい
それに近い物である（多分）

そして、甲児は別の方に視線を送った
其処には

ジェイル
「んんんんんんんんん！んーーーーーーーーーーーー！」

其処には何故か縄で縛られて口も塞がれたジェイル博士が居た

甲児
「お・・・お爺ちゃん・・・何でジェイル博士があっちで・・・縛られてるの？」
十蔵
「深い意味は無い！あんまり気にすんな・・・さ、それよりさっさとその装置を起動させぃ」

十蔵が６人にそう促す
なのは達は一抹の不安があるも装置に近づく
そして、ボタンを押そうとした時、

ジェイル
「プハァッ！駄目だ！その装置を起動させてはいけない！」
なのは
「え？」

ジェイルが口を開いて叫んだ時には、もう手遅れであった
なのはの指は装置の起動ボタンを押していたのだ
すると、マッサージマシーン？の丸い球体が突如半分に割れる
そして、中から無数のコードが飛び出してきた
なのは

「えええええええええええええええええ！」
フェイト
「なのは・・・って、キャ！わ、私もおおおおお！」
はやて
「あああれえええええええええ！オ戯れをおおおおおおお！」
ティアナ
「いやあああああああああああ！何ですかこれはあああああああ！」
ギンガ
「いやあああああああああああああ！気持ち悪いいいい

「ほれほれ、こっから中の様子が見れるぞぉ」
甲児
「へぇ・・・どれどれ・・・・・」

甲児は取り付けられた覗き穴で中を覗いた
其処には・・・とりあえずとんでもない光景が広がっていた・・・
とだけ言っておく

６人
「キャアアア

「えっと・・・とりあえず命に別状はなさそうに見える」
フェイト
「た・・・確かに・・・命に別状は無いですけど・・・」
はやて
「な、何かうちら・・・女として大切な何かを失くしたみたいな気持ちや」
ティアナ
「・・・・・・・・・（無言で泣いてる」
ギンガ
「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い・・・・・・（以下百行省略」
さやか
「も・・・もう・・・ダイエットは・・・嫌・・・・・」

６人はすっかり懲りてしまった
その日以降、６人の無理なダイエットは終りを迎えたようであった
因みに言うと、十蔵博士の作ったマッサージマシーン『あ～ん、もっと其処を揉んで～君１号』はその後、なのは達とさやかの手により完全に破壊されたのは言うまでも無い事であったそうな

外伝４　ダイエット大作戦？？？（後書き）

今回はちょっとムフフなお話を想定して書きましたどうでしたか？
感想お待ちしてます
ドシドシ下さい

地獄からの再会（前書き）

今回、遂に黒幕が現れます

地獄からの再会

甲児
「うん・・・朝か・・・」

朝日が顔に当たり甲児は目を覚ました
昨日の夜すぐに帰ってきた甲児達は汗を流しそのまま寝てしまったのだ
そして、朝である

甲児
「さてと・・・さっさとこいつらの飯作るとする・・・」

起き上がろうとした甲児の右腕に何か妙な重みを感じた
重さからして人の重さであった
甲児は静かにその重さの正体を見た

フェイト
「ス～ス～」

其処には甲児の腕を枕代わりに寝てるフェイトが居た

甲児
「な・・・何でフェイトが・・・（汗」

仕方ないので左手で退かそうとしたが、今度は左手にも重みを感じた

甲児
「ま・・・まさか・・・」

大方予想はついていたが、甲児は振り向いて見た
其処にはフェイトと同様にアルフが甲児の腕を枕にして寝ていた
因みに狼形態でである

甲児
「あのぉ・・・どうすれば良いの？これ」

両腕を塞がれ静かに寝息を立てる2人を見て甲児は困り果てた
因みに2人が目を覚ましたのはそれから3時間後の事であった

＊＊＊

時は経ち、現在夜
夜の街でビルの上に甲児達は居た

甲児
「今回のジュエルシードは此処にあるんだな？」
フェイト
「うん、此処に反応がある」
甲児
「ビル街かぁ・・・」

甲児はビルの立ち並ぶ町並みを見た

とてもマジンガーを使う事は出来ないだろう
そんな事をすればビルをなぎ倒す事になる

甲児
「今回はマジンガーは空中でしか使えないなぁ・・・」

と、呟いていた
そんな甲児の横でフェイトは突如バルディッシュを構える

甲児
「あん？何するんだフェイト」
フェイト
「広域魔法を使ってジュエルシードを呼び出します」
アルフ
「ちょい待ち！」

フェイトが広域魔法を掛けようとしたのをアルフが止める

アルフ
「フェイト、此処は任せて」
フェイト
「大丈夫？それって結構疲れるよ」
アルフ
「平気さ、だって私はフェイトの使い魔だもん」

片目でウィンクしてアルフはそう言う
そして、下に魔法陣を敷き、広域魔法を掛ける
凄まじい衝撃が辺りを包む
と言っても外傷が出る程では無い
とりあえずこれでジュエルシードを取り出そうと言うのだろう

すると

アルフ
「あった！あそこ」
フェイト
「うん」

遥か下、地上の辺りにジュエルシードが見えた

甲児
「よっしゃぁ！んじゃ早速拾いに行こうぜ！」

と言って甲児はパイルダーに乗り込みジュエルシードのある場所へ
2人と一緒に向かう

一方、なのは達もその異変に気づいていた

ユーノ
「これは・・・広域魔法！」
なのは
「ユーノ君・・・それって」
鉄也
「奴等が近いって事だろうな」

鉄也が呟く

なのは
「やっぱり・・・フェイトちゃんなのかなぁ？」
鉄也

「他に誰が居る？」
なのは
「・・・・・・」

なのはは黙り込んだ
彼女もそう思っていたのだろう

ユーノ
「行こう！ジュエルシードは僕達で回収しなきゃならないんだ！
あれは危険な物んだよ」
なのは
「そうだね！ユーノ君の言うとおりだよ」
鉄也
「以前は遅れを取ったが、今回はそうはいかん・・・今度こそ決着
を着けるぞ・・・兜甲児！」

そう言ってなのは達も同様に光の柱に向かっていく
鉄也もグレートを呼びそれに続く

グレートの接近は甲児達も察した

アルフ
「やっぱぁ、あいつらまた来ちゃったよ」
フェイト
「急ごう！早くジュエルシードを回収しないと」
甲児
「だな、またグレートの相手は俺がする。だからフェイトはその間
にジュエルシードを回収するんだ」
フェイト

「気をつけてね」
甲児
「任せとけって」

甲児はそう言ってマジンガーを呼びグレートに向かう

鉄也
「兜甲児」
甲児
「鉄也さん！」
鉄也
「以前は魔道士との連携でやられたが、今回は遅れはとらん！」
甲児
「鉄也さん・・・こっちだって負ける訳にはいかねぇんだ！」

空中で2体の魔神がぶつかり合う
そして、地上ではなのはとユーノ、それにフェイトとアルフがぶつかり合う

ユーノ
「何故君達はジュエルシードを集めるんだ！あれは危険な物なんだぞ！」
アルフ
「前にも言ったけどさぁ、あたしは知んないよ！内のご主人様が欲しがってるんだし、あたしは使い魔としてそれに従ってるだけだしね」
ユーノ
「くっ・・・なら直接本人に問い正すまでだ！」

ユーノはそう言ってフェイトに向かおうとする

だが、それをアルフが阻む

アルフ
「おぉっと、内のご主人様の邪魔はさせないよ！」
ユーノ
「なら力付くでも通らせて貰うよ！」
アルフ
「フェレットが生意気言うんじゃないよ！」

額に青筋を浮かべてアルフが向かって来る
ユーノも結界魔法を駆使して立ち向かう

一方で、

なのは
「待って！私は貴方とお話したいだけなの！」
フェイト
「前にも言った筈だよ！話し合っても分かり合えない事があるって」

フェイトがそう言ってバルディッシュを振るう
なのははそれを僅差でかわす

なのは
「確かに、話し合いだけで分かり合えない事だってあるかもしれない・・・だけど、話し合わないと分からない事だってある筈だよ！」

攻撃的なフェイトにあくまで話し合いを要求するなのは

なのは
「私は・・・私はユーノ君の力になりたくてジュエルシードを集め

てるの！フェイトちゃんにだってきっと理由がある筈だよ！」
フェイト
「私は・・・」
アルフ
「フェイト！応えなくて良い！」

フェイトの元へアルフが駆け寄る
そして、なのはを吹き飛ばす

なのは
「キャァッ！」
ユーノ
「なのは！」
鉄也
「アイツ！」

鉄也はなのはの援護に戻ろうとする
だが、それを甲児が阻む

甲児
「行かせる訳にはいかないぜ！」
鉄也
「ちっ！邪魔をするな！ブレストバァァァン！」
甲児
「こっちにだって退けない理由があんだ！ブレストファイヤァァァ！」

2体の魔神の放つ熱線が暗い夜空を照らす

アルフ

「フェイト！早く封印を！」
フェイト
「うん！」
なのは
「フェイトちゃん！」
ユーノ
「なのは！急いで！」

なのはとフェイトが互いにジュエルシードの向かっていく
そして、

なのは
「ジュエルシード！」
フェイト
「封印！」

なのはのレイジング・ハートとフェイトのバルディッシュが同時に
ジュエルシードに触れる
凄まじいエネルギーが発生する
その衝撃で2人のデバイスにヒビが入る

なのは
「れ、レイジング・ハート！」
フェイト
「バルディッシュ！」

2人が驚愕の顔をする
そして、ジュエルシードを中心に光の柱が現れる
その柱に吹き飛ばされるなのはとフェイト
その間もジュエルシードは凄まじい光を発している

鉄也
「な、何だあの光は？」
甲児
「こりゃ何か不味い事が起きそうだな（汗」

甲児も鉄也もあの光に一抹の不安を寄せていた
そんな中、ユーノが青ざめる

ユーノ
「不味い！このままじゃ次元崩壊が起きてしまう！」
鉄也
「次元崩壊？なんだそれは」
甲児
「世界を隔てる壁が崩壊しちまう事だ！そんな事になったらこの世界はバラバラになっちまうぞ！」
鉄也
「何だと！」

甲児の説明に驚く鉄也
そんな中

フェイト
「くっ！」

フェイトはバルディッシュを投げ捨てジュエルシードの元へ駆け寄る
そして、両手でジュエルシードを掴み足元に魔方陣を展開する

フェイト
「止まれ！止まれ！止まれ！止まれ！」

念じるように呟くフェイト
だが、そんなフェイトの祈りも空しくジュエルシードは輝きを増す
フェイトのグローブが裂け鮮血が飛び散る

甲児
「アイツ！」

甲児は急ぎフェイトの元へ向かう

鉄也
「待て！何処へ行く！」
甲児
「悪いが勝負は後回しだ！アイツを何とかしないとお互いお陀仏だしな！」

鉄也の静止を振り切り甲児はフェイトの元へマジンガーを降ろす
そして、肩膝を着きキャノピーを開いてマジンガーから飛び降りてフェイトの元へ向かう

フェイト
「来ないで！甲児さん！」
甲児
「そうは行くかよ！待ってろ！」

甲児はすぐさまフェイトの元へ駆け寄り、フェイトの上からジュエルシードを掴む
激しい痛みと共に鮮血が飛び散る

甲児

「グワアアアアアアア！」
フェイト
「こ、甲児さん！」
甲児
「こん畜生！さっさと止まりやがれってんだよおおおおおお！」
フェイト
「クッ！止まれ！止まれ！止まれ！止まれえええええええええ！」

2人が叫ぶもジュエルシードはそれをあざ笑うかのように光を増す

鉄也
「チッ！」

鉄也は舌打ちしながら甲児達の元へグレートを降ろす

なのは
「鉄也さん！」

なのはもそれに続く

甲児
「て、鉄也さん！」
鉄也
「ったく、見ちゃ居らんないぜ！」

鉄也は愚痴りながらも甲児の上からジュエルシードを掴む

鉄也
「グウウウウウウ！」

顔が苦悶の色に染まる
鉄也の手も同様に鮮血が混じって赤くなっていく
そんな時、なのはも同様に辿り着く

フェイト
「君は・・・」
なのは
「私も一緒にやるよ！」

なのははフェイトの上から掴む

なのは
「ツッ・・・ウウウゥゥゥゥ」

予想以上の痛みが手に伝わる
その為か、なのはの目にはうっすらと涙が滲んでいた

フェイト
「もう良い！皆離れて！私一人で充分だから！」

皆の苦しむ姿など見たくない！
そんな想いからかフェイトが怒鳴る
だが、甲児達はそんなフェイトに笑って応える

甲児
「ば、バッキャロウ！こんなもん屁でもねぇぜ！」
鉄也
「お前は俺達の心配なんかより封印の方に集中しろ！」
なのは
「頑張って！フェイトちゃん！」

フェイト
「皆！・・・止まれ！止まれ！止まれ！止まれ！」
甲児
「うおおおおおおおおお！止まりやがれこんちくしょおおおおおおおおお！」
鉄也
「ぬうううううううう！止まれえええええええええ！」
なのは
「止まってえええええええええええええええええ！」

４人が必死になって祈る
その祈りが天に通じたのかジュエルシードの輝きが徐々に弱まっていく
そして、遂には完全に輝きが消え去ったのであった

４人
「は～～～」

とりあえず危機は去った為か４人はその場にへたり込む
其処へ、アルフとユーノが駆けつける

ユーノ
「なのは！鉄也さん！」
アルフ
「フェイト！甲児！大丈夫かい？」

心配する２人に４人は笑って応える

甲児
「へへ、言っただろう！『無茶は俺の専売特許』だってさ」

鉄也
「それに、こんなもん掠り傷にもならんさ」
フェイト
「やったよ・・・何とか封印出来たよ」
なのは
「あうう・・・少し痛かったけど・・・何とかなったよ」

４人共満面の笑みで返す（なのはは終始涙目であったが）
そんな時、鉄也が立ち上がる

鉄也
「高町、今回は引き上げだ」
なのは
「鉄也さん・・・」
鉄也
「お前も・・・レイジング・ハートもボロボロだろう？これ以上戦っても無意味だ」
なのは
「う・・・うん」

なのはは力なく頷いた
そして、立ち上がろうとするが、腰が抜けてしまったのか思うように立てないでいた

鉄也
「ったく、しょうがねぇなぁ」

仕方なく鉄也はなのはを抱える
しかし、それは抱っこではなく『おんぶ』であった

なのは
「ふぇっ！て、鉄也さん！」
鉄也
「黙ってろ、こっちだって腕が痛いんだ」
動揺するなのはを黙らせる鉄也

甲児
「鉄也さん」
鉄也
「何だ？」
甲児
「・・・サンキューな」
鉄也
「・・・・・・」
甲児
「まさかあそこで手を貸してくれるとは思わなかったぜ」
鉄也
「フッ・・・お前等があんまりにも危なっかしかったんでな・・つい手を貸しちまったぜ」

そう言ってフッと笑う鉄也
それに釣られて甲児もフッと笑う

鉄也
「どうやら、今回もそっちの勝ちみたいだな」
甲児
「ああ、そうだな」
鉄也
「だが、今度は負けん！絶対にお前等からジュエルシードを取り戻

して見せるからな」

鉄也がそう言って甲児達を睨む
その視線にフェイトは少し怯え、甲児はにらみ返す
だが、鉄也は突然視線を逸らす

鉄也
「だから・・・それまでには腕の傷を治しておけよな・・・」

そう言って鉄也はグレートに乗り、その場を後にする

甲児
「チェッ相変わらず素直じゃねぇなぁ、鉄也さんは」

甲児はそんな鉄也の去り際を見て苦笑いを浮かべた
そして、立ち上がってフェイトを見る

甲児
「立てるか？」
フェイト
「う・・・うん・・・」

フェイトはヨロヨロしながらも懸命に立とうとした
一瞬、手を貸してやろうかと思ったが、止めた
フェイトの自尊心を傷つけると思ったからだ
だが、立ち上がってからは流石に手を貸した
とても歩ける状態じゃなかったからだ
フラフラのフェイトをそっと抱き上げてパイルダーに向かう甲児

フェイト

「・・・こうやって抱っこされるの・・・二度目ですね／／／」
甲児
「お前は大人しくて楽だよ・・・（さやかさんだったら暴れるから疲れるからなぁ（汗」
フェイト
「え？何か言った？」
甲児
「なぁんにも！さっさと帰って飯にしようぜ」
フェイト
「う・・・うん！」

フェイトが今自分に出来る精一杯の声で元気良く答えた

＊＊＊

アルフ
「さてと、これで大丈夫だね」

ホテルに帰って甲児とフェイトはアルフに治療を受けた
幸いフェイトの傷は甲児達のお陰で大した傷にはならなかった
しかし、甲児はかなり酷く、その日1日は何も握れなくなってしまった
甲児

「参ったなぁ・・・今日の晩飯どうすっかなぁ（汗」
アルフ
「出前でも取る？」
甲児
「出前っつってもなぁ」

甲児は余り出前の料理は好きでは無かった
それなら自分で作った方が美味いからだ
しかし、こんな手では料理など無理である
どうした物かと悩んでいると

フェイト
「わ・・・私作ってみるね」
アルフ
「フェイトがぁ！」
フェイト
「むぅ・・・酷いよぉアルフ。私だって毎日甲児さんに料理教わってるんだよ！」

剥れながら言うフェイト
そんなフェイトを見て甲児は笑う

甲児
「そんじゃお願いするかね」
フェイト
「うん！任せて！」

フェイトが自信有り気に返す
実は、ここ毎日甲児に料理を教わっているのだ
そして、今日は初めての実戦である

フェイトは愛用のエプロンを身に纏い冷蔵庫を開ける
中には甲児が日々揃えてくれたのか様々な食材が入っている
正直、以前のフェイトなら目を回していただろう

フェイト
「でも、今は違うもん！・・・絶対にやりとげてみせるからね！」

リビングでのんびりしてる甲児に向かってフェイトは心で宣言した
その時のフェイトは凄まじい闘志を燃やしていたそうだ
それを見てアルフは

アルフ
「ふぇ、フェイトが燃えてる（汗」

と、思わず呟いたそうな

＊＊＊

暫くしてフェイトが料理をテーブルに置いてくれた
献立は味噌汁と味の開きと言った至ってシンプルな物であった
しかし・・・

甲児
「お！こりゃ美味い！腕を上げたなぁフェイト！」

アルフ
「本当だよ！最初の時は包丁だってまともに握れなかったあのフェイトがこんな料理を作れるようになるなんて・・・私感激の余り泣いちゃうよ（涙」
フェイト
「大袈裟だなぁアルフは・・・でも、有難う甲児さん／／／／」

フェイトは少し頬を染めて甲児に言った
甲児はそんなフェイトに笑って返す

＊＊＊

数日後、フェイトと甲児はホテルの屋上に来ていた

アルフ
「はぁ・・・本当に行くのぉフェイトォ」

何時にも増して乗り気じゃないアルフ
そんなアルフを不審に思う甲児
その横でフェイトが口を開く

フェイト
「仕方ないよ。そろそろ数も大分溜まって来たし、お母さんに届けないと心配するでしょ」

アルフ
「そうだけどさぁ」
フェイト
「アルフは私の使い魔でしょ？」
アルフ
「う！返答に困る発言をするぅ・・・」

流石にそれを言われてはグウの音も出ないアルフ
仕方なく従う事にした
只一人意味が分からない甲児は終始首を傾げていた

甲児
「なぁ、アルフは何でそんなに嫌がってるんだ？」
アルフ
「行けば分かるよ」
甲児
「ま、俺としてもフェイトのおっかさんには興味あるしな」

甲児はそう呟いた
と、言うのももし説得出来ればフェイトにあんな危なっかしい物を集めさせるのを止めさせられると思っていたからである

フェイト
「お土産も持ったし・・・準備ＯＫだね」

フェイトの手には手作りのケーキの入った箱が持たれていた
それは夕べ、甲児と２人で作ったケーキなのだ
最初フェイトはお店で売ってるケーキで良いと言っていたのだが、甲児曰く『手作りの方が喜ぶ』と言うので二人で作ったのだ
フェイトも初めてのケーキ作りにとても楽しんでいた

そして完成したケーキが今フェイトの手元に箱詰めされてあるのだ

フェイト
「さ、それじゃ行くよ」

フェイトは真ん中に立ち何やら呪文のような物を唱え出した
すると、彼女の足元に魔方陣が現れる
それはフェイトと、その付近に居たアルフと甲児も一緒に包んでいた
そして、魔方陣が輝き、３人は姿を消した

＊＊＊

甲児
「へぇ、此処にフェイトのおっかさんが居るのかぁ」

転移魔法で甲児はフェイトの母親の居る『時の庭園』に辿り着いていた
正直甲児もこの転移魔法には驚いていた
それは甲児が元の世界で研究していた『転移装置』と原理が同じだからだ
最も、フェイト曰く『そんなに遠くへは転移出来ない』との事から
転移には使用者の魔力が影響するのだろうと思えた

フェイト

「甲児さん、これからお母さんと話ししてくるから此処で待ってて」
甲児
「え？一緒に来ちゃ不味いのか？」

甲児が首を傾げる
そんな甲児にフェイトが指をくっつけながら応える

フェイト
「えっと・・・久しぶりにお母さんと2人っきりで話しがしたいなぁって・・・駄目かなぁ？」

フェイトが上目目線で尋ねる
こう言う頼み方に男は弱い物だ
勿論、甲児も例外では無い

甲児
「はぁ・・・分かったよ。行って来な」
フェイト
「有難う、甲児さん！」

嬉しそうにフェイトはそう言う
そして、アルフを連れて2人は時の庭園の中に入っていった

甲児
（何でアルフは一緒なんだ？）

ふと甲児はそう思った
が、其処を尋ねるのも野暮だろうと想い触れなかった

甲児

「しっかし暇だなぁ・・・これなら何か暇潰しでも持ってくれば良かったぜ」

何も無い庭園内で甲児は愚痴っていた
それから暫く甲児は一人で時間を持て余していた
だが、

甲児
「遅いなぁ・・・幾ら久しぶりの再会だかたって、待たせ過ぎじゃないのか？」

幾ら何でも遅すぎた
そう、甲児が此処で待たされてから既に1時間が経過しようとしていたのだ
しかしフェイトからまだ来て良いとは言われていない
だが、だからと言って馬鹿正直に待っている甲児では無い

甲児
「しょうがねぇな。ちょっくら覗いて来るか・・・まぁもし見つかって睨まれた時にゃぁ、『トイレ探してました』って言っておけば大丈夫だろう」

一人呟きながら甲児は庭園内を歩く
すると、目の前に大きな扉が現れた
そして、その横では

甲児
「ん？ありゃぁアルフじゃねぇか！」

其処には、扉の横で蹲り、耳を塞ぐアルフの姿があった

甲児は何か嫌な予感を感じアルフに駆け寄る

甲児
「アルフ！どうした？」

甲児はアルフに問い正す
アルフは甲児を見上げた
何かに怯えたような顔つきである
そして、ガツッと甲児の両肩を掴む

アルフ
「甲児！お願いだよ！フェイトを・・・フェイトを助けて！」
甲児
「フェイトが！・・・一体何があったんだ！」
アルフ
「あの扉の向こうに居る・・・もうあたし耐えられないよ！」

そう言ってアルフは涙目になる

甲児
「下がってろ！」

甲児は扉の前に立つ
そしてノブを回す
だが、ノブはビクともしない

甲児
「チッ、鍵が掛かってやがる！」

甲児は舌打ちする

そして、数歩下がり手を翳す

アルフ
「何するんだい？甲児」
甲児
「下がってろ・・・光子力ビィィィィム！」

甲児の翳した腕から黄色い閃光が走る
その閃光は目の前の扉を徐々に溶かしていく
そして、ある程度形を変えたところで

甲児
「オリャアアアアアアアアア！」

思い切り扉を蹴破った
そして、中に入った甲児の目に映ったのは

甲児
「な！・・・フェイトォォ！！」

其処にはボロボロのバリアジャケット姿のフェイトが鎖で両腕を拘束されて宙吊りにされていた
甲児はすぐに駆け寄りフェイトの鎖を外し抱きかかえる

甲児
「フェイト！おい！しっかりしろ！」
フェイト
「う・・・こ・・・こう・・じ・・・さん・・・」

虚ろな瞳でフェイトは甲児の名を呼ぶ

その背中には鞭で打たれたような傷跡が痛々しく残っていた

甲児
「ひでぇ・・・一体誰がこんな事を・・・ハッ！」

突如、甲児は何かの気配を感じた
そして横に飛びのく
その直後、鋭い槍の様な物が飛んできた
ゾッとした
もしあの時甲児が避けていなければ
・・・嫌、もし後数刻助けるのが遅かったら・・・恐らくフェイトの胸にはこの槍が深く突き刺さっていただろう
そう甲児が思っていた時、

???
「人の部屋に勝手に入ってきて貴方は一体何者なの？」

甲児
「何！」

甲児は声のした方を見た
其処には紫の髪をした女性が立っていた
恐らく、この女性がフェイトをこんな目に合わせていたのだろう

甲児
「何でフェイトをこんな目に合わせるんだ？」
???
「何でですって？この子はこの大魔道士『プレシア・テスタロッサ』の娘なのよ。それなのに、集めて来たジュエルシードはたったのこれだけ・・・だから躾をしていたのよ」

プレシアは冷めた目でそう告げた
そんなプレシアに甲児は怒りさえ覚えた

甲児
「その躾ってのは・・・実の娘に風穴を開ける事を言うのかよ?」

甲児はそう言って先ほど放たれた槍を掴んで見せる
だが、それを見てもプレシアはフンと鼻を鳴らす

プレシア
「役立たずが死んだって変わりは幾らでもいるわ」
甲児
「て・・・てめぇ!」

甲児は叫んだ
許せない
こんな奴を許す訳にはいかない
実の娘を道具扱いするような奴を甲児は許せなかった
彼の怒りがマグマの如く噴出し、髪は逆立ち、瞳は燃え上がっていた

アルフ
「フェイト!」

そんな時、心配になったアルフが駆けつける

甲児
「アルフ、フェイトを頼む」
アルフ
「な!フェイト!大丈夫?」
甲児

「心配ない・・・気絶してるだけだから」

そう言ってフェイトをアルフに預ける
すると、突如後ろに居たプレシアが笑い出した
とても狂ったような笑い声であった

甲児
「何が可笑しい！プレシア」
プレシア
「何が可笑しいかだと？決まってるだろう！こうも予定通りに事が運んで笑いが止まらんのさ！」
甲児
「な！プレシア・・・お前」

甲児は驚愕に包まれた
突如プレシアの口調が変わったのだ
嫌、それだけではない、声も変わっていた
そして、その声は甲児が何処かで聞いた事のある声であった
その声は

甲児
「てめぇ・・・まさか！・・・『獣魔将軍』か！」
プレシア（獣魔将軍）
「フフフ、ご名答だよ兜甲児！まさか貴様からこうして来てくれるとは思ってもいなかったよ」

プレシアの体に入っている獣魔将軍が狂ったように笑い出す

甲児
「何故だ！お前は俺と鉄也さんが倒した筈・・・何でてめぇが生き

てんだ！それも、どうしてフェイトのおっかさんの中に入ってるんだ！」
プレシア（獣魔将軍）
「フフフ、確かに俺は死んだ・・・そう、あの時お前と剣鉄也・・・嫌、グレートマジンガーの手によってなぁ」
アルフ
「え？グレートマジンガー・・・それって、あのなのはって言う魔道士と一緒に居る奴じゃ」
プレシア（獣魔将軍）
「ククク、そうだ・・・其処に居る兜甲児・・・そして剣鉄也の手によって俺は殺されたんだ」

プレシア（獣魔将軍）は憎しみの篭った目で甲児を睨む

甲児
「てめぇ、まさか地獄から這い出て来たって言うんじゃねぇだろうなぁ！」
プレシア（獣魔将軍）
「その通りだよ！俺はあの後地獄に叩き落された！しかし、俺の深い憎しみが俺にミケーネ7つの軍団の力を授けてくれたのだ！」
甲児
「な、何だと！」
プレシア（獣魔将軍）
「そして、俺はこの世界に蘇った。そしてこの女・・・プレシア・テスタロッサに目を着けたのさ」
アルフ
「そ、それじゃぁ」
プレシア（獣魔将軍）
「フフフフ、馬鹿な女だ！次元崩壊も俺がやらかしたのに、それを自分のせいだと思って勝手に苦しんでいるのだからなぁ・・・そし

て、実の娘に俺は呪いを掛けてやったのさ」
甲児
「の、呪いだと？」
プレシア（獣魔将軍）
「そう、目覚めぬ呪いだ！そうとも知らず其処に居る出来損ないは必死にジュエルシードを集めてくれて・・・ご苦労な事だ」
甲児
「ちょっと待て！実の娘って・・・まさか！」
プレシア（獣魔将軍）
「その通りさ、兜甲児・・・其処に居るフェイト・テスタロッサは、こいつの実の娘「アリシア・テスタロッサ」のクローンなのさ！」
アルフ
「そ・・・そんな！」

アルフは驚愕の真実を告げられて青ざめる

プレシア（獣魔将軍）
「フフフ、フェイトも馬鹿な娘だ！実の母は今この俺の操り人形だとも気づかず懸命に集めてくれるのだからなぁ」

そう言ってフェイトが持ってきたケーキの箱を手に取り、それを地面に落とす
そして、片足で無残にも踏み潰した

甲児
「て・・・てめえええええええええええええ！」

甲児は最早我慢の限界に達していた
許せない
こんな奴を許せる訳が無い

そんな想いが甲児の中に駆け巡っていた

アルフ
「ちょ、ちょっと待ってよ!それじゃ何であんたはジュエルシードを集めてるんだい?」
プレシア（獣魔将軍）
「何故だと?決まってるだろう!それは俺がミケーネに帰る為に使うのさ」
甲児
「何だと!」
プレシア（獣魔将軍）
「ククク、だが、只帰っても面白くない・・・其処で俺はとある計画を立てたのさ」
甲児
「計画だと!?」
プレシア（獣魔将軍）
「知ってるぞ、兜甲児・・・貴様が未来からやってきた事をなぁ」
甲児
「な、何でそれを?」
プレシア（獣魔将軍）
「決まってるだろう!お前の仲間、剣鉄也の記憶を奪ったのはこの俺だからだ」
甲児
「なにぃ!」

甲児は目を見開く

プレシア（獣魔将軍）
「本来ならあの場でトドメを刺そうと思ったのだが、意外としぶとかったのでなぁ、仕留め損ねてしまったのだよ・・・まぁ、そのお

陰でお前達マジンガー同士の戦いを見られて気分が良いのは不幸中の幸いと言った所かもなぁ」

獣魔将軍が満足そうに笑う

甲児
「てめぇ・・・てめぇが鉄也さんの事を・・・」

プレシア（獣魔将軍）
「フフフ、そして、俺のこの世界での目的・・・それは・・・

『高町なのは』そして『フェイト・テスタロッサ』の抹殺だ！」

アルフ
「そ・・・そんな！」

プレシア（獣魔将軍）
「こいつらは近い未来俺達の脅威となるからなぁ、だから力のついていない今の内に息の根を止めてやろうと思ったんだよ。まぁ俺なりの優しさと思ってくれたまえ」

甲児
「ざけんじゃねえええええええええええええええええ！」

甲児が叫び獣魔将軍を指差す

甲児
「やい！人の体を借りてないで出てきて戦いやがれ！この卑怯者！」

プレシア（獣魔将軍）
「フフフ・・・教えてやろう兜甲児・・・この俺のもう一つの目的をなぁ」

甲児
「もう一つの目的？そりゃ一体なんだ？」

プレシア（獣魔将軍）
「それは・・・貴様をこの場で殺す事だあああああああああ！」

そう言って持っていた杖から激しい稲妻を放つ

甲児
「あぶねぇ！」
アルフ
「わわっ！」

2人は咄嗟にかわす
それを見て獣魔将軍は舌打ちする

プレシア（獣魔将軍）
「ちっ、動きにくい体だ！魔力は相当な物があるが、それ以外がてんでだめだ！まぁ良い、貴様を殺す手段ならあるのだからなぁ」

そう言って獣魔将軍は突如アルフに向かって手を翳す
すると、2人の下に魔方陣が敷かれる

甲児
「な！アルフ！フェイト！」
アルフ
「う・・・動けない・・・一体・・・何？」
プレシア（獣魔将軍）
「クハハハ！それは金縛りの魔法よぉ！これでお前はもう動けない！さぁ・・・実の母に殺される事を幸せと思うが良いぃぃぃぃ！」

プレシア（獣魔将軍）の放った稲妻が真っ直ぐにフェイトとアルフに向けて飛んでいく

アルフ
「フェイト！」

アルフはフェイトを庇うかのように稲妻に背を向ける
だが、

甲児
「ぬうううううあああああああああああああああ！」

突如、甲児の声が響いた
アルフは振り向く
すると、動けないアルフとフェイトを庇うかのように甲児がプレシアの放つ電撃を浴びていたのだ

アルフ
「こ・・・甲児！」
甲児
「グワアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

甲児が悲痛の叫びを上げる
それを聞いてプレシア（獣魔将軍）が声高らかに笑う

プレシア（獣魔将軍）
「クハハハ！良いぞ！もっと叫べ！お前の悲鳴は最高だぁぁぁ！」

そう言って更に電撃を強める
甲児を更に強い光が包み込む

甲児

「ぐわあああああああああああああああああああああああああああああ！」
アルフ
「こ、甲児いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」
プレシア（獣魔将軍）
「クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

甲児とアルフの叫び声とプレシア（獣魔将軍）の笑い声が響き渡るだが、その時

プレシア（獣魔将軍）
「う・・・ゴフッ！」

突如電撃が止む、そしてプレシアは膝を突き、口から血を吐き出す

甲児
「な・・・何だ？」
アルフ
「甲児！大丈夫かい？」
甲児
「あ・・・ああ・・・何とかな・・・」

かなり弱った声で甲児は言う
そして、変化が起こったプレシア（獣魔将軍）を2人は見た
その先では、プレシア（獣魔将軍）が苦しんでいた

プレシア（獣魔将軍）
「お・・・・おのれぇ・・・・また・・・・貴様か・・・・」

突如苦しみ出した獣魔将軍がそう呟く

そして、ふと顔が下がる
甲児達は不審に思い、そのまま見ていた
すると

プレシア
「こ・・・うじ・・・・さん・・・・ア・・・・ルフ・・・・」
甲児
「な！あんた・・・まさか、プレシアさんか？」
アルフ
「え？」

甲児の声にアルフは驚き、プレシアを見る
その顔は、先ほどの様に狂ったような顔をしておらず、弱っては居るが優しそうな母の顔をしていた

プレシア
「私・・・・が・・・・こいつを・・・・抑えてますから・・・・・・
今の内に・・・・逃げて・・・・下さい・・・・」
甲児
「な！・・・それじゃあんたが！」
プレシア
「大丈夫・・・です・・・・こいつには・・・・今は実体が・・・・
・無いのです・・・・まだ・・・・私を殺しは・・・・しません・・・・それより・・・・早く！」

プレシアが叫ぶ
その間も激しく血を吐き出す
それを見て甲児は無言で頷く

甲児

「アルフ！フェイトを連れて今すぐ此処から逃げるぞ！」
アルフ
「甲児！・・・でも、」
甲児
「急げ！プレシアさんの気持ちを無駄にする気か？」
アルフ
「・・・分かった！」

アルフはグッタリしたフェイトを抱えて扉の外に出る
甲児もそれに続く
だが、扉を出た時点で甲児は振り返る

甲児
「プレシアさん・・・必ず・・・必ず、助けに来るからな！それまで、頑張ってくれよ！」

甲児の言葉にプレシアは力なく頷く
それを見て甲児は急ぎ時の庭園を後にした
そして、それを見送った後で、プレシアは意識を失った

＊＊＊

時の庭園から逃げ帰ってきた甲児達はすぐにフェイトの治療を行った
幸い、傷は深くなく、少し休めば大丈夫と言うそうだった

だが、甲児の胸中は曇っていた

甲児

「くそっ・・・まさか、あの獣魔将軍が絡んでるなんて・・・このままじゃ、本当に歴史が変わっちまう・・・俺一人じゃどうしようもねぇよ！クソォ！」

甲児は机に拳を叩きつける

其処から赤い雫が滴り落ちる

甲児は自分の弱さを呪った

そんな、甲児をアルフは心配そうに見つめるのであった

地獄からの再会　終

次回予告

くそぉ！よりにもよってとんでもねぇ奴が絡んでやがった

このままじゃなのはとフェイトが危ない！

そう思ってた矢先になのはの元に獣魔将軍の手の物が現れやがった

鉄也さん！力を貸してくれ！今こそあんたの力が必要なんだ！

次回『復活！ダブルマジンガー』

次回もこの小説に

テイィィィィィィィィクオォォォォォォォォォフ

過去編　2話　繋がる想い（前書き）

今回は何か恋愛っぽい話になると思います・・・多分（汗）

過去編　2話　繋がる想い

目の前には凄惨な光景が広がっていた
今まで栄華を極めていた首都クラナガンが紅蓮の炎に焼かれ、廃墟と化していた
そして、その周りには、多くの市民や魔道士達が無残な死体となって転がっていた
そして、その中には

???
「あ・・・・あぁ！」

その中には、見覚えのある者達が居た
血まみれになって倒れる新生機動六課の仲間達
そして、更にその先には・・・

両腕をへし折られ、その腕で串刺しにされて横たわるグレートマジンガー
両腕、首、胴体に鋭い切り傷を負い無数の槍が体を貫かれた姿のゲッタードラゴン
顔半分が噛み千切られたように無くなっており、更に胴体にも巨大な風穴が開けられて横たわっていたグレンダイザー
そして、下半身と頭部の無くなったマジンガーZ

そう、大切な仲間達が無残な姿で横たわっていたのだ

???
「み・・・皆！・・・・」

思わず手を伸ばす
だが、その時自分の手を見た
それは、良く知る自分の腕では無かった
機械的・・・嫌、機械と生物が融合したような体であった
５本の指には鋭い爪が生えており、その腕は何処かマジンガーに似ていた
だが、圧倒的に何かが違う
そう、マジンガーの腕は何処か温かみの感じる腕であった
だが、今自分の腕はむしろ、その逆であり・・・冷たさを感じられた
マジンガーの腕が神の腕だとするなら・・・今この腕はまるで『悪魔』を思わせていた

???

「そ・・・そんな・・・これが・・・私の・・・腕？」

思わずそう呟いた
そして、もう片方の腕を見た時、己が目を疑った
其処には、マジンガーＺの頭部が握られていた
片目のレンズが割れており、眼球がむき出しになっており、あちこちがボロボロになっていた
そして、パイルダーの所には・・・操縦者である『兜甲児』の・・・・彼の『骸』が横たわっていた

???

「こ・・・甲児・・・さん・・・」

そう呟いた
嫌、呟く事しか出来なかった
一体、誰がこんな事をしたのだろうか？
いや、それよりどうして自分の腕がこんな腕になってしまったのだ

ろうか・・・そして、何故自分の腕にマジンガーZの頭部が握られているのだろうか
その答えは・・・すぐに出た
それは、大地に積もった水面に映る自分の姿を見たからだ
それは、何時も見慣れた青い髪に白い鉢巻を巻いた「スバル・ナカジマ」の姿では無かった
縦に彫られた特徴的な口
蝙蝠のような羽
黒を基調とした機体
その姿は獣・・・嫌、正しく『悪魔』であった
そして、その体には、無数の返り血やオイルが染み付いていた

スバル
「う・・・あ・・・・・あぁぁぁ！」

これで確信となった
この惨劇を生み出した張本人は・・・・・『自分』だと言う事に
そう気づいた時、彼女の中に深い絶望が生まれた

スバル
（いやあああああああああああああああああああ！）
？？？

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

否定したかった
嘘であって欲しかった
だが、これは紛れも無い『現実』だったのだから・・・・・

＊＊＊

スバル
「ハッ！」

目を覚ますと、其処は見慣れない部屋であった
古い石造りの壁に木のタンス
どれも時代を感じさせる物ばかりであった
どうやら此処は自分の部屋では無いと言う事は理解出来た

スバル
「あ！」

ふと、スバルは自分の手を見た
それは見慣れた自分の手であった
それを見てホッとする

スバル
（はぁ・・・良かった・・・夢だったんだなぁ）

自分手を愛らしく撫でる
そして、心の中で何故あんな夢を見たのか疑問に思っていた
夢に出てきた自分のもう一つの姿
あれは、姿形こそ違えど、間違いなく『マジンガー』であった
だが、あの姿は『悪魔』であった

あんなマジンガーなどあって欲しくは無い
そう強くスバルは思えた

スバル
「そう言えば・・・何で私此処で寝てるんだろう?」

ふと、そう思った
確か此処に来てすぐに機械の巨人と戦闘を行い、それを倒したまでの記憶はある
そして・・・・・・

スバル
「ゼノン・・・初めてだったな・・・男の人に抱きかかえられるの／／／／／」

スバルの頬が赤く染まった
初めての感覚であった
今まで感じた事の無い感覚
これは一体どんな感覚なのだろうか
キュウと胸を締め付けられる感じ
少しでも気を抜くと穴が開きそうな程である
決して苦しい訳ではない
だが、何か胸に引っかかる思いがした

スバル
「きっと・・・その内治る・・・よね」

一人そう納得して起き上がろうとした時、スバルは思わず固まってしまった
何故なら

スバル
「ゼ・・・ゼノン！」

其処には、スバルの寝ていたベットにもたれ掛かるようにゼノンが寝ていた
目元には少し隈が掛かっていたのが見て取れた
恐らく、ずっと寝ずに看病してくれたのだろう
スバルとそう変わらない年にも関わらず良く出来た人間である

スバル
「有難う・・・ゼノン」

スバルは寝ているゼノンの頬に触れてそう呟いた

ゼノン
「う・・・うん・・・」

すると、それに反応したのかゼノンが起き出す

スバル
「あ、起こしちゃったね（汗」

ゼノン
「スバル！良かった・・・起きたんだね」

目の前で起きたスバルを見てゼノンがホッと安堵する
それを聞いてスバルは首を傾げた

ゼノン
「心配したんだよ。あの後君はまる1日寝てたんだから」

スバル
「え！そんなに？」

驚いた
まさか其処まで寝てしまったなんて
余程疲れていたのだろう
そう思えた

スバル
「ずっと・・・看ててくれたの？」
ゼノン
「・・・・うん」

ゼノンは静かに頷いた
少し頬が染まっている
だが、それは自分も同じであった
気がつくと、場が静まり返っていた
何故かお互い気不味い感じになっていた
流石に耐えられないと思ったスバルは話題を変えようと話しかけた

スバル
「そ、そう言えば・・・此処って・・・・」
ゼノン
「僕の部屋だよ」
スバル
「え！？」

スバルは驚く
それを見てゼノンは申し訳なさそうな顔をする

ゼノン
「ご・・・御免・・・寝心地悪かった?」
スバル
「う・・・ううん!そんな事無いよ!・・・でも、良いの?」
ゼノン
「え?何が?」
スバル
「だって・・・私ゼノンにとって赤の他人だよ。それなのにどうして自分の部屋に寝させようなんて思ったの?」
ゼノン
「御免・・・本当は別の部屋があったんだけど・・・昨日の襲撃で負傷者が多く出てしまってね・・・その負傷者を寝かしてるせいでベットの空きがなくなっちゃったんだ・・・それで・・・僕のを使わせたんだよ」

多少申し訳なさそうにゼノンが言った
そんなゼノンにスバルは笑顔で返した

スバル
「有難う・・・ゼノン」
ゼノン
「どう致しまして」

そう言い会ってお互い少し頬を染めた

＊＊＊

ザル
「お！出てきた」
バロン
「そうだな」

施設を出ると、外にはザルとバロンが居た
2人とも戦闘服を身に纏っている
それはゼノンも同じであった

ザル
「よぉ、どうだったんだいお二人さん。あれから仲が進展でもしたのかい？」
スバル・ゼノン
「え！？」

ザルの意地悪そうな問いに2人は渋る
そしてお互いに見合って少し頬を染める
それを見てザルが肩を上げる

ザル
（は～、こりゃご馳走様って奴だなぁ）

隣に居るバロンも少しニヤリとしている
どうやらお互い2人の顔の意味が理解出来たようであった
流石にこのままだとまたからかわれると思ったゼノンはすぐに話題を変える事にした

ゼノン
「そ、そう言えば・・・あの機械兵士はどうしたの？」
ザル
「あぁ、あれなら都の連中が持って行っちまったぜ」
スバル
「都？」

スバルは首を傾げた
この世界については知らない事が多すぎる
そもそもレジスタンスと言っておきながら何故3人しか居ないのだろうか
他にあの機械兵士と戦える力は無いのだろうか
この世界に『マジンガー』は無いのだろうか
そんな疑問があった

スバル
「ねぇ、その都って何？」
ゼノン
「機械兵士達の本拠地さ。僕達はそいつらの襲撃に日々怯える日々を送ってるんだ」
ザル
「あいつらには俺達の兵器は一切通用しなくてよぉ・・・唯一痛手を与えられるのがゼノンの『魔神の力』なのさ」
スバル
「魔神の力？」
バロン
「ゼノンは魔神様の加護を受けているんだ。だからあの力を使えるんだ」
ザル
「しっかし驚いたよなぁ。まさかゼノン以外にも魔神の力を使える

奴が居たなんてよぉ。しかもそれがこんなめんこいお穣ちゃんだとはねぇ」

と言いながらザルはスバルを見る
スバルは多少くすぐったい気持ちになり数歩下がる
その前にゼノンが立つ

ゼノン
「止せ、彼女が困ってる」
ザル
「おぉっと、こりゃ失礼」

流石にからかいすぎたかと少し反省した様子のザル

スバル
「ねぇ、何であの機械兵士は襲ってくるの？」
バロン
「分からん。奴等は突然現れたんだ。そして、我々の領土を次々と奪っていった。我等も反撃したが、まるで蟻と像だ。全く歯が立たない」
ゼノン
「僕も何度か奴等と戦って来たけど、あんな大きな機械兵士は始めてだよ。今までは大きくても僕達より2～3倍位しか無かったのに」

そう、今までゼノンが戦って来た機械兵士はせいぜい５m位の大きさであった
だが、先日現れたのは２０mの巨人であった
そして、スバルは予想出来た
恐らく、もっと強い機械兵士が居る事を

スバル
「それじゃ、どうしてレジスタンスなのに3人しか居ないの？」
ゼノン
「以前はもっと居たんだ」
ザル
「だけど、戦いで死んだり勝てないと判断して逃げ出して行っちまって・・・」
バロン
「結局・・・我等3人だけになってしまったのだ」

3人はそう言って暗い顔をする
スバルはバツの悪い顔になる

スバル
「ご・・・御免なさい！聞いちゃいけない事聞いちゃって・・・」
ゼノン
「嫌、スバルが悪い訳じゃないよ・・・それに、事実だし」

暗い顔をするスバルにゼノンはそう言って彼女を宥める
それを聞いて何時までも暗い顔をしているのも悪いのでスバルは話題を変えた

スバル
「それじゃ、最後に聞かせて！この世界には『マジンガー』は居ないの？」
ゼノン
「マジンガー！」

それを聞いて明らかにゼノンの顔色が変わった

スバル
「ゼノン！知ってるの？」
ゼノン
「・・・・・・・・・・」

スバルが問いただすもゼノンは応えない
其処に

ザル
「それって、ひょっとして『魔神様』じゃねぇのか？」
スバル
「魔神様？」
バロン
「この地には古くからの言い伝えがあるんだ。『選ばれし勇者、魔神の炎に身を投げ入れし時、魔神は目覚めこの世界を暗雲から救い出してくれる』と言うな」
スバル
「それって・・・」
ザル
「ま、簡単に言っちゃ『生贄』を寄越す変わりに世界を守ってやろうって事よ。おとぎ話さ。誰も信じちゃいないよ」

ザルはそう言う
だが、スバルはそうは思えなかった
もしかしたら、それはマジンガーなのだろう
きっと、あの時壁画で見たマジンガーが其処に居る筈だ
だが、問題は

スバル
「選ばれし・・・勇者・・・」

その単語が引っかかった
と言う事は誰でもマジンガーに乗れると言うのでは無いのだろう

ザル
「因みに言うとな、選ばれて無い奴や疚(やま)しい心のある奴が炎に飛び込むと、地獄の業火に一生その身を焼かれるんだぜ」
スバル
「そ・・・そうなんですか（汗」

そう聞かされ思わず身震いした
少しだが、自分が入ってみようと思っていたが、そんな事になるのならおいそれと入る訳にはいかない
そう思えたのだ

ゼノン
「まぁ、恐らく今日は機械兵士は来ないと思うから安心して良いよ」
スバル
「え?どうしてそう言いきれるの?」
ザル
「奴等には習慣があってさぁ、満月になる日にしか攻めてこないんだよ」
バロン
「今日は三日月だ・・・だから安心して良い」
スバル
「そっか・・・良かった」

そう聞いてホッとするスバル
するとザルがゼノンに良い寄る

ザル
「よぅ、折角なんだ、スバルに色々町を見せてやったらどうだ?ゼノン」
ゼノン
「え?」
バロン
「確かにな、彼女も知らない事が多くては辛いだろう・・・行って来い」
ゼノン
「で、でも・・・そうしたら此処は」
ザル
「何言ってんだよ!お前が一日居なくたって大丈夫だよ。ほら、さっさと行って来いっての」

ザルは手をヒラヒラさせてゼノンに言う
バロンも目線でそう言っていた
ゼノンは頭を掻きながらもスバルに近づく

ゼノン
「スバル・・・行きたい?」
スバル
「うん!」
ゼノン
「・・・分かった。ついて来て」

そう言ってゼノンはスバルを町に案内する事にした

ザル
「やれやれ、あのゼノンがねぇ」
バロン

「たまには良いだろう。あいつにも骨休めが必要だしな」
ザル
「俺には？」
バロン
「お前はしょっちゅう骨休めしてるだろうが」
ザル
「ありゃりゃ」

バロンに言われ肩をすくめるザル

＊＊＊

ゼノンに連れられてスバルは町に来ていた
ゼノンの部屋で察しもしたが、やはりどの町も作りが古い
レンガで固めた家、木の扉、石造りの道など、どれも古代の時代を思わせる作りであった
まぁ、４０００年も昔なのだから仕方ないと言えば仕方ないのだがしかし、この町で今スバルは管理局の制服姿である
ハッキリ言って場違いも良いところである
現に町行く人々に不審な注目を浴びている

スバル
「な・・・何か・・・私って此処だと変に見られるみたいだね（汗」
ゼノン

「そうだね・・・この近くに服を売ってる店があるから其処で君の服を買おうか？」
スバル
「え？そんな、悪いよ（汗」
ゼノン
「気にしないで。さ」

ゼノンはスバルの手を持って店に入っていく

スバル
「あ・・・あうあうあう・・・」

スバルはタジタジであった
と、言うのも男の人とこうして出歩いた事など無かったのでどう対応したら良いのか分からず出遅れてしまう始末なのであった

「らっしゃい」

店に入ると元気の良い店主の声が聞こえてきた
入り口の近くのカウンターに腰を下ろしていた
そして、ゼノンとスバルを見ると店主がニヤリとする

「何だいゼノン。隣の子・・・ひょっとして彼女かい？」
ゼノン
「え・・・そ、そんなんじゃ無いよ！只、この子に町を見せて上げたかっただけなんだ」
「ほほぉ・・・その割りには随分と仲の良い事だねぇ」

イジワルそうに見る店主にゼノンは少し困った顔になる
そんな光景をスバルは苦笑いを浮べながら見ていた

ゼノン
「と、とりあえず、彼女の服が欲しいだけど・・・ある？」
「勿論あるよ！丁度サイズも有るし・・・オ穣ちゃんにプレゼントするのかい？」
ゼノン
「えっと・・・そんな所かな／／／」
「はぁ・・・こりゃ脈ありのようだなぁ」

ゼノンの赤くなった顔を見て察した店主
そんなやり取りをスバルは只見ているだけであった

＊＊＊

スバル
「ど・・・どうかなぁ／／／」

スバルは頬を染めながら着替えた服を見せた
今彼女が身に纏っているのは古代ギリシャの普段着で『キトン』と呼ばれる薄い服である
どんな服かはネットで検索して下さい（決して説明がかったるい訳では無いですよ）
それを見たゼノンは

ゼノン
「うん・・・凄く似合ってるよ／／／」
頬を染めながらも似合ってると言った
それを聞いてスバルは更に顔を赤く染める
それを横で見ていた店主はふぅと溜息を吐いていた

＊＊＊

服屋を出てからも2人はぶらぶらと町を歩き回った
どうやら町の人間の殆どはゼノンの事を知っているらしく、会う度にゼノンに手を振ったり声を掛けたりしている
しかし、何故かゼノンがスバルを連れている事に驚いている人が多いと、言うより・・・ゼノンが女性を連れている事に驚いているようであった
中には「あの堅物のゼノンがねぇ」とか、「アイツも遂に色気に目覚めたか」とか言う輩も居た
どうやらゼノンはスバルに会うまでは女性に対してはかなり奥手だったようである

スバル
「ゼノンは私以外に女の子と仲良くした事無いの？」
ゼノン

「う～ん、無いなぁ・・・僕にはそんな時間が無かったから」
スバル
「？？？」

ゼノンの言った意味がスバルには良く分からなかった
只、それがゼノンの歩んできた道が決して平坦な道では無い事を物語っていると言う事だけは理解出来た

ゼノン
「そうだ、スバル・・・君に見せたい場所があるんだ」
スバル
「見せたい場所？一体何？」
ゼノン
「さっき話題になった魔神様の所だよ」
スバル
「魔神様・・・」
ゼノン
「興味・・・無い？」
スバル
「ううん！・・・見てみたい」
ゼノン
「良かった・・・案内するよ」

ゼノンはスバルを魔神様と呼ばれる石像のところに案内する
それは、巨大な崖の中にまるで自然に出来たような形の魔神を模した石像であった
そして、その手の部分には青く燃える炎が滾っていた

ゼノン
「これが、魔神様の像だよ」

スバル
「本当だ・・・マジンガーに良く似てる・・・それに、あの壁画にも・・・」

そう、確かにその石像はスバルが古代遺跡で描かれていた壁画で見たマジンガーに良く似ていたのだ
だとすれば、もしかしたら、このマジンガーを使えば元の時代に帰れるのではないのだろうか
そう思えた

スバル
（きっと・・・これで元の時代に帰れる・・・あ！）

其処でふとスバルは気づいた
元の時代に帰る
それは即ち・・・ゼノンと一生離れ離れになる事である
スバルにとってゼノンは４０００年前の人間なのだ
本来なら会う筈の無い人間・・・
だが、そんな人間同士がこうして出会ってしまった

ゼノン
「どうしたの？スバル」
スバル
「私・・・どうしたら良いんだろう・・・」
ゼノン
「え？」

スバルの心境の変化にゼノンは首を傾げていた

＊＊＊

ゼノンと町巡りを終えたスバルは、一人海辺で沈み行く夕焼けを見ていた

スバル
「私・・・どうしたいんだろう？」

一人深い溜息を吐いていた
それは、ゼノンの事である
本当なら、今すぐにでも元の時代に帰りたい
そう、最初はそう思っていた
だが、ゼノンと一緒に居てからは・・・変わった

ゼノンと一緒に居たい

そんな感情がスバルの中に芽生えたのだ
もし、元の時代に帰ったら、ゼノンと一生の別れになる
それは嫌だ
でも、元の時代の皆とも別れたくない
そんな葛藤がスバルを苦しめていた

スバル
「元の時代に帰ったら・・・ゼノンとはもう会えない・・・でも、この時代に残ったら・・・もう、皆とは会えない・・・どうしたら

良いの？」

スバルは一人夕日の下で蹲っていた
すると、其処にゼノンが歩み寄ってきた

ゼノン
「どうしたの？スバル」
スバル
「ゼノン・・・」
ゼノン
「さっきの魔神様の事？」
スバル
「うん・・・ゼノンは知ってるよね・・・私が今から４０００年先の未来から来た事」

スバルの問いにゼノンは黙って頷いた

ゼノン
「スバルは・・・元の時代に帰りたい？」
スバル
「正直・・・分かんない・・・初めは元の時代に帰りたいって思ってたんだけど・・・今は分からない・・・」
ゼノン
「どうして？」

ゼノンは聞く
すると、スバルはゆっくりと顔を上げてゼノンを見る

スバル
「君と・・・一緒に居たいから」

ゼノン
「え！」

スバルの答えにゼノンが驚く

スバル
「・・・嫌・・・かなぁ？」
ゼノン
「ううん・・・そんな事ないよ・・・僕も・・・スバルとずっと一緒に居たい」
スバル
「ゼノン・・・」

ゼノンの返答を聞いてスバルの顔が明るくなる

ゼノン
「でも、最終的な決断は君自身が行う事だ。・・・だけど、どんな答えであろうと、僕は君の力になるよ」
スバル
「ゼノン・・・・・有難う」

スバルは静かにそう返した
さっきまで沈んでいた顔が一気に明るくなる
それを見てゼノンも明るい顔をする

時を越えて繋がった想い
それは、結果的に2人に辛い運命を義務付けたのかもしれない
しかし、それが最終的にどんな運命になろうとしても・・・今、こうして2人で居られる時間を大切にしよう
そう、スバルは思った

繋がる想い　終

過去編　2話　繋がる想い（後書き）

作者
「どうだったでしょうか・・・自分恋愛小説は書いた事無いのでこんな話しか書けませんが精一杯書いたつもりです
感想などなどお待ちしております」

甲児
「そんな事あとがきで言う必要あるか？」

作者
「いやぁ、もしかしたら読者の中には感想があるのに出せないでいる人も居るかなぁと思ってね」

甲児
「成る程！」

復活！ダブルマジンガー　前編（前書き）

先の戦いから立ち直れていないなのはに危機が迫る！
そして、グレートマジンガー大ピンチ！
急げ、マジンガーZ！

復活！ダブルマジンガー　前編

此処は海鳴市にある喫茶店『翠屋』
読者の皆なら既に理解していると思うが、此処はなのはの両親が経営している店である
従業員はなのはの父の士郎と母の桃子、そして兄の恭也と姉の美由紀・・・そして

鉄也
「いらっしゃいませ」

臨時で鉄也が入っている

士郎
「うん、鉄也くんも大分接客が上手くなったね」
鉄也
「慣れない事なんで結構掛かったがな」

鉄也が苦笑いを浮かべる
因みに今鉄也の服装は士郎と同じジーパンと薄手のシャツにエプロンを付けている

恭也
「確かに、最初は客に対して睨みつけたりしてたからなぁ」
鉄也
「すまん（汗」

恭也の発言に鉄也がバツの悪い顔をする

美由紀
「まぁまぁ・・・そんなに鉄也さんを責めるのはよしなさいな」
恭也
「別に責めてる訳じゃないさ」

注意する美由紀に恭也は笑って返す
そう、鉄也は今喫茶店の手伝いをしてるのだ
と、言うのも朝夕は士郎と恭也と共に特訓を積んでいる
だが、鉄也が特訓に参加してから恭也が怪我をする機会が増えたのも事実なのだが
しかし、只特訓をするだけと言うのも何だと言う桃子の意見の元鉄也にも喫茶店の手伝いをさせようと言う事になったのだ
最初は鉄也も慣れてなかったらしく、注文を間違えるわ、客を睨みつけるわ、品物を落とすわでかなり苦労したようであったが、今ではすっかり板に着いている

鉄也
「・・・・・」

ふと、鉄也は上を見上げた
視線の先には今鉄也が住んでいる高町家があった

鉄也
（高町・・・まだ落ち込んでいるのか・・・）

＊＊＊

その頃、なのはは自室で傷ついたレイジング・ハートを見ていた
待機状態のレイジング・ハートにはヒビが入っておりとても痛々しい

なのは
「御免ね・・・レイジング・ハート・・・私がもっと上手く使えれ
ばこんなに傷つく事も無かったのに」
レイジング・ハート
『問題ありません・・・マスター』

暗い顔をするなのはにレイジング・ハートはそう返す
だが、一向になのはは暗い顔をしている

ユーノ
「なのは・・・あんまり自分を責めるのは良くないよ・・・それに、
あれは仕方なかった事だし」
なのは
「うん・・・」

ユーノも励ますも、なのはは未だに暗い顔をしていた

＊＊＊

甲児とフェイトとアルフは修復の終ったバルディッシュを見ていた

甲児
「しっかしデバイスって便利だなぁ・・・自己修復なんて能力があるなんてよぉ」

フェイト
「甲児さんのマジンガーには無いの？」

甲児
「無いなぁ・・・俺のマジンガーには自我はあるが事故修復は無いなぁ・・・だろ？Z」

Z
『確かに、俺には自我はあるが事故修復能力は無いなぁ』

甲児の腕にあるZグローブからZの声が発せられる

アルフ
「フ～ン、甲児のZって以外と不便なんだねぇ」

甲児
「ってか、普通自己修復能力があること事態すげぇぞ（汗」

フェイト
「とにかく、これでまたジュエルシードを集められるよ」

甲児
「そりゃ良かった・・・俺とマジンガーじゃジュエルシードを封印する事は出来ないからなぁ」

確かに甲児の言う通りである
甲児とマジンガーではロスト・ギアを蹴散らす事は出来ても封印する事は出来ないのだ

その為ジュエルシードの封印は専らフェイトの役割である

甲児
「だけど・・・また鉄也さん達が来たら・・・ヤバイかもなぁ」

フェイト
「うん・・・それに、あの魔道士(なのは)も力を付け始めてる・・・前の時みたいに簡単に片付けるのは難しくなってきた」

アルフ
「それにあのフェレットも厄介だよねぇ」

フェイトとアルフはそう言い合っていた中、甲児は暗い顔をしていた

甲児
（獣魔将軍が言っていた事・・・歴史を変えると言う事・・・まさか！）

もし、この時代でなのはやフェイトにもしもの事があったら、本来甲児の居る１０年後には一体どんな未来が出来てしまうのだろうかもし、この時代でなのはやフェイトが死亡してしまう事があったとしたら・・・
それは、未来が変わってしまう事を意味していた
それも、最悪の形で

甲児
（確か・・・機動六課を設立した中心人物は・・・なのはと、フェイトと、はやての３人だった筈・・・もしこの３人に何かあったら・・・１０年後、機動六課が設立しなくなる）

これで奴等の目的がはっきりした
連中は何らかの方法で未来を予見し、その未来を変えようと暗躍を

始めたのだ
だとしたら、最早なのはとフェイトで争っている場合では無い
そう、こうして2人で争っている事こそ、奴等にとっては好都合なのだろう
2人が互いに争い、そして、互いに潰しあうのであれば、未来が変わる
そうすれば未来のミッドチルダで脅威が一つ減る事になる
そして、もしこの世界で甲児、または鉄也のどちらかが死ぬ事があれば、その時はミッドチルダで暴れる機鋼獣を倒せる力は無くなってしまう

甲児
（くそぉ・・・本当ならこの事をフェイトに言いたいんだが、幼いフェイトにはまだ早い・・・それに、どうせ信じないだろうしなぁ）

今甲児が未来から来たと言う事を知ってるのはこの中ではアルフだけである
しかし、アルフはそんな事を信じて居なさそうな顔だし・・・かと言ってフェイトに言うのも難しい事である
何とかして鉄也さんの記憶を取り戻さなければならない
でなければ、本当に未来が変わってしまうのだから

＊＊＊

士郎
「お疲れ、鉄也くん」
鉄也
「ああ」

喫茶店の仕事を終えた鉄也は家路についていた
と、言うのも鉄也はバイトの様なシフトなのですぐ終るのだ
そして、家路についた鉄也をフェレットのユーノが出迎えた

ユーノ
「鉄也さん！道の途中でなのはに会いませんでしたか！」
鉄也
「いいや、一体何があったんだ？」
ユーノ
「それが・・・なのは、自分のせいでレイジング・ハートが傷ついてしまったと思ってるみたいで出て行っちゃったんです」
鉄也
「何！」

鉄也は驚いた
それもその筈
何故ならユーノの首には本来なのはが持っている筈のレイジング・ハートが掛けられていたのだから

鉄也
「くっ、ユーノ！高町が家を出てどの位経つ！」
ユーノ
「まだそんなに時間は経ってない筈です！」
鉄也
「急いで探すぞ！」

ユーノを肩に乗せ鉄也は来た道の逆を走り始める
鉄也
「馬鹿野朗！・・・一人で全部背負いこみやがって」
鉄也は今は居ないなのはにそう呟いた

＊＊＊

なのはは一人、公園のベンチに座っていた
とても暗い顔であった

なのは
「ユーノくんは、あの時私に素質があるって言ってくれたけど・・・
本当は私には素質なんて無いんじゃないのかなぁ」

なのはは未だに立ち直れずに居た
そんななのはを遥か別の世界から見下ろす存在が居た
時の庭園に居るプレシア・テスタロッサを支配している獣魔将軍であった

プレシア
「フフフ・・・どうやらあの白い魔道士はデバイスを持ってないよ

うだな・・・ならば今が好機！」

そう言って手に持っていた3つのジュエルシードを振り上げる
すると、ジュエルシードは輝きだし、3体の巨大な怪獣となった

？？？
『キシャアアアアアアアアアア！』
？？？
『ガオオオオオオオオオオオン！』
？？？
『グオオオオオオオオオオオオオオオ！』
プレシア
「行け！空魔獣グランゲ！結合獣ボング！光波獣ピクドロン！直ちに地上に赴きあの白き魔道士を抹殺してくるのだ！」
指令を受けて3体の怪獣は直ちに地上に向かった

プレシア
「クハハハ！此処であの白い魔道士を抹殺出来ればそれだけで俺の目的に近づくと言う物よ」

そう言って獣魔将軍は声高らかに笑った

＊＊＊

なのは
「はぁ・・・何時までも沈んでられないよね・・・ずっとこのままだと鉄也さんやユーノくんに笑われちゃうし」

一人ベンチから立ち上がってなのははそう宣言した

なのは
「うん、鉄也さんやユーノくんだって頑張ってるんだもん！私も頑張らないと！」

そう言って帰ろうとした時、突如、目の前に巨大な何かが降って来た
凄まじい振動と砂煙が舞って来た

なのは
「ふぇぇぇ！な、なにぃ！」

思わず目を瞑って手で顔を覆う
そして、目を開くと、其処には巨大な紫の怪獣が居た
手足がまるでクラゲの様であり、口が鮫のように牙が並んでいる
ギロリと大きな目がなのはを睨んでいた

？？？

『キシャアアアアアアアアアア！』

なのは
「え！・・・もしかして・・・私を狙ってる？・・・・」

なのはの予想は大当たりであった
怪獣が目から怪光線をなのはに向けて放つ

なのは
「ニャアアアア！」

咄嗟にそれを避ける
だが、避けきれずに爆風で吹き飛ばされる
全身砂埃が着くもそれを気にせずに立ち上がる

なのは
「こ・・・このままじゃ！・・・早くレイジング・ハートを」

と言ってなのははレイジング・ハートを使いセットアップしようとしたが・・・

なのは
「な、無い！・・・レイジング・ハートが・・・無い！」

本来ならなのはの首飾りとしてつけている筈のレイジング・ハートが其処には無かった
そう、家を出る時にそのまま置いて来てしまった事に今気づいたのだ

なのは
「ど・・・どうしよう・・・」

今なのはは無防備な状態になっているのだ
その上なのはは身体能力はお世辞にも良いとは言えない
そして目の前には巨大な怪物が居るのだ
正に万事休すであった
そんななのはに向かって怪物は巨大な腕を振り下ろしてきた
なのはは避けられないと思いその場に頭を抑えて蹲る

なのは
「も、もう駄目！」

其処へ

鉄也
「グレェェトブゥゥゥメラン！」

なのはへ迫った巨大な腕を赤いグレートブーメランが遮る
そして、なのはの後ろにグレートマジンガーが降り立つ

なのは
「て、鉄也さん！」
鉄也
「無事か！高町」

グレートマジンガーから鉄也の声が聞こえてきた

なのは
「は、はい・・・大丈夫です」
鉄也
「そうか・・・」

無事を確認した鉄也
だが、何処か不機嫌であった

なのは
「て、鉄也さん？」
鉄也
「馬鹿野朗！一人で背負い込みやがって！」

ユーノ
「なのは！」
なのは
「ユーノくん！」

グレートから俺いて来たユーノがなのはの肩に乗る

ユーノ
「なのは、コレ！」
なのは
「これは・・・レイジング・ハート」
ユーノ
「なのは！一人で何でも背負いこもうとしないで！君には僕達が着いてるんだ！だから僕達の事も頼って良いんだよ」
なのは
「ユーノくん・・・御免ね・・・私、一人で悩んじゃって・・・」

額に溜まった涙を拭いながら言う
そしてユーノからレイジング・ハートを受け取る

ユーノ
「さぁ、一緒に戦おう！」
なのは
「うん！・・・セェエェットアァァップ！」

レイジング・ハートを掲げて叫ぶ
そして、白い閃光がなのはを包み込み、閃光が晴れた時には、彼女を白いバリアジャケットが包んでいた

鉄也

「高町！行けるか？」
なのは
「はい、大丈夫です！」

鉄也に向かって頷く

鉄也
「よし、相手は一体だ！一気に片付けるぞ！」
なのは
「はい！」

グレートマジンガーとなのはが目の前の怪獣に向かって構える
その時、突如怪獣の周囲に二つの爆発が起きた

なのは
「な、何！」
ユーノ
「まさか・・・また！」
鉄也
「見ろ！」

砂煙が晴れると、其処には更に2体の怪獣が立っていた
戦闘機や戦艦や戦車が結合した怪獣
そして、黄色いバリアで包まれた怪獣が立っていた

なのは
「そんな・・・一度に3体も！」

なのはは驚愕の顔をしていた
しかし、鉄也は

鉄也
「何だ・・・俺はあの怪獣を知っている・・・何故だ?」

そう、鉄也は記憶の奥底であの3体の怪獣を知っていたのだ
だが、それが何なのかは思い出せないでいた
そして、その中であの黄色い怪獣が最も危険な敵だと言う事だけは分かっていた

鉄也
「高町!フェレット!気をつけろ!あの3体の中に居る黄色い奴は特に危険だ!注意しろ!」
なのは
「ど、どうして分かるんですか?」
鉄也
「何故かは分からん・・・だが、あの黄色い奴の攻撃にだけは気をつけろ!」

鉄也はそう言った
その直後、黄色い怪獣の口から光り輝く光線が放たれた

鉄也
「危ない!避けろ」
なのは
「ふぇぇ!」
ユーノ
「うわ!」

3人は咄嗟にかわす
そして、光輝く光線はその後方に居た車に命中する

しかし、光は車に当たっただけで何の変化も起こさなかった
なのは
「あ、あれ？」
ユーノ
「ひょっとして・・・只の威嚇攻撃なのか？」
2人は何ら変化の無い車を見てそう呟く
だが、その直後、車は内部から激しい爆発を起こす
凄まじい轟音と衝撃が伝わってきた
なのは
「えぇ！」
鉄也
「な、内部から・・・爆発しただと？」
その光景に鉄也は驚愕する
そう、あれは装甲やバリアを貫通し、内部に進入して最後には爆発すると言う恐ろしい物であったのだ
鉄也
「高町！気をつけろ、あの攻撃に当たったらお陀仏だぞ！」
なのは
「えぇ！な、何で？」
鉄也
「あの攻撃には装甲も障壁結界も通用しない！それを貫通して内部に入り込んで爆発するんだ！生身で食らえば木っ端微塵にされるぞ！」
なのは
「木っ端・・・微塵！！」

なのははそう言われて脳裏にあの光の矢が当たった時の自分を思い浮かべる
それに青ざめるなのは

鉄也
「とにかく！今はあの光の怪獣から片付けるぞ！グレェェトブゥゥメラン！」

グレートは黄色い怪獣に向けて胸のブーメランを投げる
放物線を描いてそれは黄色い怪獣に向かって飛んでいく
だが、それは怪獣を切り裂くどころか、弾かれてしまった
弾かれたブーメランがグレートの腕に戻ってくる

なのは
「えぇ！グレートブーメランが効いてない！」
ユーノ
「あの体は物理攻撃を弾く性質を持っているみたいだよ・・・」
鉄也
「ならビーム攻撃で溶かすまでだ！高町！」
なのは
「はい！」

なのはは頷き、黄色い怪獣の後方に回り込む
鉄也のグレートは反対に正面に躍り出る
黄色い怪獣はグレートに向けて光の矢を放つもそれを鉄也はヒラリとかわす

鉄也
「同時攻撃で行くぞ！ブレストバァァァン！」

なのは
「はい！ディバイィィィィンバスタァァァァ！」

２人の同時攻撃が黄色い怪獣に命中する
一見すると２人の攻撃に怪獣は押されたように見えた
だが、その怪獣はダメージを負うどころか、放たれるエネルギーを
逆に吸収して巨大化してしまったのだ

なのは
「そ、そんな！」
ユーノ
「逆効果だ！」
鉄也
「くそぉ！何か手がある筈なんだ・・・一体どうすればあの怪獣を
倒せるんだ」

一気に追い詰められる３人に３体の怪獣が迫る

＊＊＊

一方で、甲児達も３体の怪獣を確認した

フェイト
「あれって・・・」

アルフ
「うわぁ・・・あのなのはって奴とグレートが苦戦してるねぇ」
甲児
「こうしちゃ居られねぇぜ！早く助けに行かねぇと！」
アルフ
「ちょい待ち！本当に助けに行く気？」
甲児
「何だよ、アルフは助けたくねぇってのか？」
アルフ
「そりゃ・・・だってあいつは敵なんだよ！」
甲児
「まぁ、確かに敵かもしんねぇけどよぉ・・・俺にとっちゃどっちも掛け替えの無い仲間なんだよ！」
フェイト
「甲児さん」
甲児
「それになぁ！目の前で困ってる奴を見たらそれが誰であろうと助ける奴、それが俺なんだよ」

と言って甲児はパイルダーへ駆けて行った

アルフ
「あ、甲児！・・・はぁ、どうする？フェイト」

アルフはフェイトに聞く
それに対しフェイトは

フェイト
「助けよう」

と、言う

アルフ
「あ～らら、うちのフェイトも甲児に影響されちゃったのかねぇ？」
フェイト
「そうかも知れないかな？・・・それに、あの子には以前助けて貰った事があるし・・・」
アルフ
「あ！」

アルフはその一言で思い出した
そう、それは以前暴走したジュエルシードを甲児、鉄也、そしてなのはの3人が一緒に止めてくれたのだ

フェイト
「ジュエルシードは譲れないけど・・・だからって困ってる人を見捨てるなんて出来いよ！」
アルフ
「フェイト・・・しょうがないなぁ・・・あたしはフェイトの使い魔なんだから、フェイトが助けたいって言ったら助けるよ」
フェイト
「有難う、アルフ」
アルフ
「どういたしまして」

アルフとフェイトは互いに頷く

甲児
「話しは済んだか？」
フェイト

「うん！」
アルフ
「ばっちし！」
甲児
「ようし！んじゃぁ行くぜ！マジィィィィンゴォォォォォ！」

＊＊＊

鉄也のグレートはマジンガーブレードを片手に黄色い怪獣に挑むだが、グレートの剣は一向に黄色い怪獣にダメージを与え荒れないでいた
一方で、なのはは紫の怪獣を相手に苦戦を強いられていた
紫の怪獣の腕に生えた無数の腕が執拗になのはを狙う
更には目からは怪光線を発し、肩からは鎌を投げる等の多彩な攻撃を仕掛けてくる
ユーノも結合した怪獣を相手に同様に苦戦を強いられていた
両足のミサイルが誘導方式で飛んできたり、胸の戦車砲から放たれるビーム砲も脅威的であった
見ての通り戦力を分断されてしまっていたのだ
しかも、この世界のなのは達のデバイスには対機鋼獣用のカスタマイズは行われていない為機鋼獣に対して効果的な打撃を与えられないのだ
ジリジリと追い込まれる鉄也達
このままでは全滅も時間の問題であった

鉄也
「くっ・・・駄目だ、高町！フェレット！此処は俺が食い止めるからその内に2人だけでも逃げろ！」
なのは
「そ、そんな！鉄也さん一人だけを置いて逃げるなんて出来ませんよ！」
鉄也
「だが、もう奴等を倒す武器は殆ど残ってないんだ！このまま全員やられるよりはマシだ！」
なのは
「でも！」
鉄也
「言う事を聞け！」

渋るなのはに鉄也は怒声を上げる
それを聞いてなのはの肩が一瞬震える

ユーノ
「なのは、此処は鉄也さんの言う通りだよ」
なのは
「そんな！ユーノくん！」
ユーノ
「君にもしもの事があったらジュエルシードはどうするんだ！」
なのは
「でも・・・だからって、鉄也さんを見捨てるなんて・・・出来ないよ！」
ユーノ
「なのは・・・・・っ！危ない！なのは」
なのは

「え？きゃぁ！」

気がつくと、なのはは紫の怪獣の何本も生えた腕に捕らえられてしまった

なのは
「くぅっ！は、離してぇ！」

必死にもがくも、怪獣の怪力は凄まじく、振りほどく事は出来なかった

鉄也
「高町！」

鉄也は捕まったなのはを救おうと向かう
だが、そんなグレートの両耳に黄色い怪獣の両腕が掴む
そして、凄まじい電流が鉄也の身に降り注いだ

鉄也
「うぐわあああああああああああああああ！」

鉄也が悲痛の声を上げる
その光景を時の庭園から獣魔将軍が眺めていた

プレシア
「クハハハハ！良いぞ、ピクドロン、グランゲ、ボング！そいつらにトドメを刺せ！」

獣魔将軍は手を振り上げて3体の怪獣に命令する
その命を受けて3体は咆哮を上げる

そして、一気にトドメを刺そうと詰め寄る
その時、

甲児
「ドリルミサァァァイル！」

突如黄色い怪獣の背中に衝撃が走る
その拍子に怪獣の手はグレートを手放してしまう
そのままよろけて地面に片膝をつくグレート

鉄也
「う・・・い、今のは・・・」

鉄也は朦朧とする視線で空を見上げた
其処には、今の今まで戦って来た相手、兜甲児の操る「マジンガーZ」が居た

甲児
「大丈夫か?鉄也さん！」
鉄也
「甲児！・・・お前、何故?」
甲児
「固い事言いっこなしだぜ！困った時はお互い様ってな」

甲児は鼻を摩りながら言う

鉄也
「まさか・・・お前が来たって事は・・・」

その頃、なのはを捕まえていた腕が何か光の刃によって切断された

怪獣
『ギシャアアアアアアアアア！』
指を切られ悲痛の声を上げる怪獣
そして、自由になったなのはの隣には

フェイト
「大丈夫？」
なのは
「あ、フェイトちゃん！」
フェイト
「この前は有難う・・・そのお返しに来たよ」

フェイトはそう言ってなのはに微笑みかける
なのはも同様に微笑む
そして、ユーノの方には

アルフ
「てえええええええええええやあああああ！」

駆けつけたアルフの蹴りが結合した怪獣を吹き飛ばす

ユーノ
「き、君は！」
アルフ
「うちのご主人様の命令でね、今回は休戦と行こうやフェレット」
ユーノ
「は、はぁ・・・」

意味が分からず首を傾げる
今此処に、２人の魔道士と２体の魔神が揃ったのだった

復活！ダブルマジンガー　前編（後書き）

後編に続く

復活！ダブルマジンガー　後編（前書き）

遂に偉大な勇者が復活！
そして2体のマジンガーが悪の牙をへし折る！

行け！ダブルマジンガァァァァァ！

復活！ダブルマジンガー　後編

2体のマジンガーは3体の怪獣「グランゲ」「ボング」「ピクドロン」を見ていた

甲児
「鉄也さん！此処は協力して戦おう！」

鉄也
「俺に指図するな！」

甲児
「な、今そんな事言ってる場合かよ！」

予想外の返答に甲児は鉄也を睨む
今にも掴みかかって取っ組み合いが始まりそうな空気であった

鉄也
「大体何で来たんだ！俺は助けてくれなどと一言も言った覚えは無いぞ！」

甲児
「何だと！さっきまで悲痛の叫びを上げていた癖に！そんな事言える場合かよ！」

鉄也
「お前達の魂胆などお見通しだ！どうせ頃合を見計らってジュエルシードを奪うって魂胆なんだろう？」

甲児
「な、何だと！」

鉄也
「その為にわざわざ魔道士を連れてきたんだろう？」

そう言って鉄也はフェイトとアルフを睨む

フェイト
「え？」

甲児
「鉄也さん！あんた・・・」

鉄也
「何度も言っただろう！気安く俺の名を呼ぶな！」

甲児
「な！くそぉ！」

甲児の叫びは鉄也の心には届かず、結局バラバラの状態で戦う事になってしまった

甲児
「畜生！何で分かってくれねぇんだよ鉄也さん！」

苛立ちを現しながら甲児はボングに向かっていく

甲児
「この野朗！マジンガーの拳を食らいやがれ！ロケットパァァァンチ！」

マジンガーの拳がボングを吹き飛ばす
吹き飛ばされたボングはバラバラになってしまう

甲児
「どうだ！・・・なっ！」

甲児は驚愕した

バラバラになったボングが目の前でまた1体になってしまった

甲児
「こ、この野朗！積み木か？てめぇは！」

甲児が悪態をつく
ボングはそんなZに向かってボングのレーザー砲が放たれる
Zは両腕で防ぐもジュエルシードによりパワーアップしているボングのエネルギーにZは吹き飛ばされてしまう

甲児
「うわあああああああ！」
フェイト
「こ、甲児さん！」

フェイトが叫ぶ
その為僅かだが隙が出来てしまった
その隙を見逃すピクドロンでは無かった

ピクドロン
「キシャアアアアアアアアア！」

ピクドロンの進化したハサミ状の腕がフェイトに向かって振り下ろされる

アルフ
「危ない！フェイト！」
フェイト
「は！」

咄嗟にフェイトは防御魔法を掛ける
だが、ピクドロンの攻撃はその防御魔法を突き破ってフェイトを吹き飛ばす

フェイト
「きゃあああああああああああああ！」

吹き飛ばされるフェイトを後ろからアルフが受け止める

アルフ
「大丈夫？フェイト！」
フェイト
「う・・・うん・・・」

弱弱しくフェイトが頷く
相当な一撃だったのだろう
かなりの衝撃を受けたようである

ユーノ
「駄目だ、今のままバラバラで戦ってたら勝てない・・・」

ユーノは言う
その通りである
この3体はどれもジュエルシードの力によりパワーアップを果たしているのだ
その上、甲児と鉄也の2人は未だに連携して戦おうとはしない
その為2体の魔神の力は本領を発揮出来ないのである

鉄也
「くそっ！あんな奴等に遅れをとって居られるか！」

鉄也がマジンガーブレードを持ってグランゲに向かって斬り掛かる
だが、その腕ごとグランゲの腕がグレートに絡みつきそのまま持ち上げる
そして、目から怪光線をグレートの背中に放つ

鉄也
「ぐわあああああああああああああああああああああ！」

鉄也の体に激痛が走る
それは凄まじい程の痛みであった

なのは
「て、鉄也さぁぁぁん！」

なのはは叫ぶ
だが、そんな叫びも空しく鉄也は徐々に意識が薄れてしまった

＊＊＊

鉄也は只ひたすら走っていた

鉄也
「何故だ・・・何故俺は走っているんだ?」

鉄也には訳が分からなかった
何故自分は走っているのだろうか
まるで何かを求めているかのように
しかし、その先には一体何があるのだろうか
すると、走り続ける鉄也の目の前に一人の男が現れた
白衣を着た立派な髭を生やした男性である
しかし、その両腕は機械の腕であった

鉄也
「誰だ・・・誰なんだ？あんたは」

鉄也は目の前に居る男性を見て呟く
そんな鉄也に男性は答える

？？？

「鉄也くん・・・目を覚ますんだ」

鉄也
「な！・・・何故あんたは俺の名前を知ってるんだ？」
？？？

「鉄也君！・・・思い出すんだ！かつての戦いを・・・偉大な勇者の戦いを」

鉄也
「偉大な・・・勇者・・・うっ！な、なんだ・・・あ、頭が・・・」

突如、鉄也の頭に頭痛が響き渡る
そして、鉄也の頭の中に様々なビジョンが映し出された

鉄也
「こ・・・これは！」

其処には、今まで戦って来た戦いの記憶・・・そして、鉄也の持っていた記憶でもあった

鉄也
「これは・・・そうか！そうだったのか！・・・俺は・・・俺は・・・俺はあああああああああああああ！」

＊＊＊

鉄也
「うおおお

「ああ、すまなかったな甲児くん・・・今まで迷惑を掛けたみたいだな」

鉄也が申し訳なさそうに頭を下げる

なのは
「鉄也さん！記憶が戻ったんですね！」

鉄也
「心配かけたな、高町・・・だが、もう大丈夫だ！」

なのは
「良かった」

甲児
「鉄也さん！あの3体を知っているかい？」

甲児は目の前に居る3体の怪獣を指差した
それに鉄也が頷く

鉄也
「ああ、『空魔獣グランゲ』に『結合獣ボング』そして『光波獣ピクドロン』だ」

甲児
「へぇ、そんな名前だったのか」

甲児は改めて名前を聞き驚いた顔をする

鉄也
「甲児くん、あの中で一番厄介なのはピクドロンだ！まずはその周りの雑魚を片付けるぞ！」

甲児
「よっしゃぁ！んじゃ俺はあの積み木野朗をぶちのめしてやるぜ！」

鉄也
「フェイトは俺と組んでグランゲを、高町は甲児くんとボングを、
ユーノとアルフは俺達が倒し終えるまでバインドでピクドロンを抑
えておいてくれ！」
フェイト・なのは
「はい」
ユーノ
「分かりました！」
アルフ
「良いよ！」
甲児
「へっ！こうなったら上でふんぞり返ってる大将さんに見せてやろ
うぜ！俺達ダブルマジンガーの底力って奴をよぉ！」
鉄也
「ああ、そうだな・・・よし！行くぞ！」

鉄也の号令と共に一斉に散会する
それを追うかのようにボングはマジンガーZを
グランゲはグレートマジンガーを追う
そしてピクドロンは地上から光の矢を放って迎撃しようとするが

ユーノ
「させるか！」
アルフ
「悪いけど、足止めさせて貰うよ！」

ユーノとアルフが2人でバインドを張りピクドロンの動きを封じる

ピクドロン
『グギャアアアアアアアアアアアア！』

ピクドロンはバインドから逃れようと必死にもがく
その力は凄まじく、バインドを張っているユーノとアルフの顔に苦痛の顔が映る

ユーノ
「ま・・・負けるもんかぁぁぁ！」
アルフ
「こんのぉぉぉぉ！」

2人が歯を食いしばってバインドを張り続ける
その間にも、2体の魔神と2人の魔道士は戦いを始めた

鉄也
「お前には散々好き勝手された借りがあるからな！此処で返させて貰うぞ！マジンガァァブレェェド！」

グレートの足から2本の剣が現れる
それを両手で握りグランゲに向かって行く
グランゲも同様に両腕を振り翳してグレートに向かって行く

鉄也
「うおおおおおおおおおおおおおお！」

グレートマジンガーとグランゲが空中でぶつかり合い、次の瞬間にはお互い反対の位置に居た
そして、数刻2体が動かなかった
そして、先に動いたのはグランゲであった

グランゲ

『ギャアアアアアアアアアアアアア！』

グランゲの悲痛な叫びが木霊する
グランゲの両腕はグレートの剣により完全に切断されてしまったのだ
残った頭の腕でグレートを襲おうとしたが、

フェイト
「はあああああああああああああ！」

それをフェイトのバルディッシュが切断する
これにより腕を失ったグランゲは目から怪光線を放つ
だが、それをかわしグレートは2本の剣を投げつける
剣はぐランゲの腹と背中に突き刺さった

グランゲ
『ガアアアアアアアアアアアアアアアア！』

グランゲが悲痛の叫びを上げる
そのグランゲを挟むようにグレートとフェイトが陣取る

鉄也
「今だフェイト！奴に刺さってる剣を狙え！」
フェイト
「はい！」

フェイトは頷きバルディッシュにエネルギーを集中させる
グレートも同様に右手を天に翳す
その腕目掛けて稲妻が降り立ち、それを腕に集める

フェイト

「サンダァァァァスマッシャァァァァァ！」
鉄也
「サンダァァァァァブレェェェェェェぇク！」

2人の放つ稲妻がグランゲに突き刺さった剣を伝って全身を駆け巡る

グランゲ
『ギエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエガアアアアアアアアアアアア！』

高電圧の電撃を浴び断末魔の悲鳴を上げてグランゲは爆発した
後に残ったのはグランゲの残骸とその中にあったジュエルシードであった

鉄也
「フェイト。頼む」
フェイト
「ジュエルシード・・・封印！」

フェイトがグランゲの中から現れたジュエルシードをバルディッシュの中に封印する
これによりグランゲの残骸は塵となって消えた

鉄也
「後は頼むぜ、甲児くん」

鉄也がグランゲと戦ってる頃、甲児となのはは結合獣ボングと交戦していた

甲児

「今度こそてめぇを叩きのめしてやるぜ！アイアンカッタァァァ！」

マジンガーの腕が再びボングを吹き飛ばす
だが、バラバラにされたボングは再び一つになろうとしていた

甲児
「今だ！なのはちゃん！」
なのは
「はい！」

なのはは結合しようとするボングに向けてレイジング・ハートを構える

レイジング・ハート
『アクセルシューター』
なのは
「シュウウウウウウウウト！」

レイジング・ハートから放たれた桜色の光弾が的確にボングを撃ち抜く
破損しパーツが変形してしまったボングは一つになるもその形は非常に歪になってしまった
その為思うように動けない状態になっていた

甲児
「それ！トドメと行こうぜ！」
なのは
「はい！」

なのはがマジンガーの肩に乗りレイジング・ハートを構える

甲児
「食らえ！ブレストファイヤァァァァ！」
なのは
「ディバイィィィィンバスタァァァァ！」

マジンガーのブレストファイヤーとなのはのディバインバスターがボングに命中する
その同時攻撃に耐え切れずボングは原型を残さない程ドロドロになってしまった

甲児
「んじゃ、なのはちゃん！締めは頼むぜ」
なのは
「はい、ジュエルシード、封印！」

溶けたボングから現れたジュエルシードをなのははレイジング・ハートに封印する

甲児
「これで残るは！」
鉄也
「ピクドロン！奴だけだ！」

甲児達はピクドロンを睨む
ピクドロンはやっとユーノ達のバインドを引き千切った所であった

ユーノ
「くっ、すみません・・・これ以上は無理でした」

アルフ
「結構頑張ったんだけどねぇ（汗」
甲児
「なぁに、上出来よぉ！」
鉄也
「後は俺達に任せろ！」

ピクドロンの前にマジンガー達と2人の魔道士が降り立つ

なのは
「で、でも鉄也さん！どうやって倒すんですか？あのピクドロンには物理攻撃もビーム攻撃も通用しないんですよ！」
鉄也
「なぁに、そんな厄介な物は吹き飛ばしてしまえば良いのさ」
アルフ
「吹き飛ばす？一体どうやって」
鉄也
「甲児くん、Zのルストハリケーンとグレートのグレートタイフーンで奴のバリアを吹き飛ばすぞ」
甲児
「成る程！そりゃ良いぜ！よぉし」
鉄也
「俺が奴の正面に回る、甲児くんは奴の背面から仕掛けてくれ」
甲児
「オッケェ！任せてくれって！」

頷きマジンガーは颯爽と飛び上がりピクドロンの後方に回り込む
そして、グレートマジンガーが再びピクドロンの正面に回る

ピクドロン

『ギシャアアアアアアアアアア！』

ピクドロンが叫びを上げ、グレートマジンガーに向けて光の矢を放つ
それをグレートはヒラリとかわす

鉄也
「お前のその厄介なバリアを吹き飛ばしてやる！グレェェトタイフゥゥゥゥン！」

甲児
「俺も続くぜ！鉄也さん、ルストハリケェェェェン！」

2体の魔神から放たれる猛烈な風がピクドロンを包み込む
それは遥か上空に舞い上がり、ピクドロンの光の結界を上空に吹き飛ばしてしまった
そして、中から機械で作られたピクドロンの本体が現れた

なのは
「あ・・・あれが・・・」

フェイト
「ピクドロンの・・・本体・・・」

アルフ
「やりぃ、これでもうあの厄介な攻撃も行えないね！んじゃさっさと片付けて帰ろうよ！」

そう言ってアルフが猛然とピクドロンに殴りかかる
そのアルフに向かってピクドロンが角から電磁レーザーを放つ

アルフ
「うわわ！」

フェイト

「アルフ！」
鉄也
「危ない！グレェェトブゥゥメラン！」
アルフは咄嗟にレーザーをかわしその直後ピクドロンの角をグレートのブーメランが切り裂く
フェイト
「はあああああああああああ！」
角の無くなったピクドロンの頭部をフェイトのバルディッシュが切断する
頭部を失ったピクドロンはよろよろとする
なのは
「続いていきます！アクセルシューター！シュゥゥゥゥト！」
フェイトに続きなのはがアクセルシューターでピクドロンを蜂の巣にする
甲児
「よし、鉄也さん！トドメは一緒に行くぜ！」
鉄也
「応！」
蜂の巣にされ動けなくなったピクドロンに向かってマジンガーZとグレートマジンガーが陣取る
鉄也
「食らえ！」

甲児
「トドメだ！」
鉄也・甲児
「ダブルバァァァァニングファイヤァァァァァァ！」

マジンガーとグレートの同時に放つブレストファイヤーとブレストバーンがピクドロンに浴びせられる
ダブルマジンガーの一撃を受けてピクドロンが瓦礫の山と化すのにそう時間は掛からなかった

甲児
「やったぜぇ！」
鉄也
「ああ！」

甲児と鉄也は勝利した事を喜んでいた
だが、なのはとフェイト、そしてアルフとユーノは違っていた
何故か・・・それはピクドロンから現れた最後のジュエルシードであった

フェイト
「また前みたいには出来ないね・・・」
なのは
「うん・・・またレイジング・ハートやバルディッシュが傷つくかもしれないしね」

そう言ってお互いにデバイスを構える

甲児
「お、おいおい・・・まさか此処でやり合うってのかよ！」

鉄也
「不味いぞ！早く止めないと！」

甲児と鉄也が向かうも僅差の差で間に合わない
2人のデバイスが空中でぶつかり合う寸前、何かが割り込んだ

？？？

「其処までだ！ここでの戦闘は危険過ぎる、双方デバイスを収めるんだ！」
フェイト
「え？」
なのは
「あ！」

なのはとフェイトの間に黒いバリアジャケットを着込んだ少年が2人のデバイスを抑え込んでいた

クロノ
「時空管理局執務官「クロノ・ハラオウン」だ。詳しい事情を聞かせて貰いたい」

クロノは2人にそう言い聞かせた
その光景を下に居た甲児達も見ていた

甲児
「な・・・何者なんだ・・・あいつは！」
鉄也
「分からん・・・だが、時空管理局と言っていたぞ！」

そう、これが、甲児と鉄也がこの時代の時空管理局と始めてであっ

た時であった
そして、これを機に物語は終焉に向けて歩みを進めるのであった

復活！ダブルマジンガー　終

次回予告

ったく、一体なんだあのクロノってガキは！
いきなり現れて事情を聞かせろなんて何様だってんだ！ったく
ん？なんだ、其処に現れたあのキセルを持った女は？

次回『男の拳』

次回もこの小説にテイィィィィィィクオォォォォォォォォォフ
！

復活！ダブルマジンガー　後編（後書き）

注意：
終焉って言っても、無印編の事だからね
決して本編では無いよ

外伝5　対決！チンク対『奴』（前書き）

今回、遂にチンクが「奴」と戦う

・・・・・ところで、奴って誰？

外伝5　対決！チンク対『奴』

その日、地下施設の食堂の中でとあるメンバーが話し合っていた
ナンバーズのチンク、セイン、ウェンディ、ノーヴェ、オットー、
セッテ、ディード
そしてヴァイスとボスのメンバーである

チンク
「今回皆に集まって貰ったのは他でもない・・・「奴」が動き出した」

チンクの言う奴と言う言葉に皆が反応する

ノーヴェ
「ち、チンク姉！その奴ってのは・・・そんなにヤバイ奴なのか？」
チンク
「うむ・・・奴の為に私は今までどんな思いをしていたか・・・」

チンクは拳を握り締めて悔しそうな顔を浮かべる

ウェンディ
「そ、そんなにヤバイ奴なんスか？」
チンク
「その通りだ・・・その上、奴にはバックが居る・・・下手すれば、私達はあいつ等を敵に回す事になりかねん」
ヴァイス
（あいつ等・・・それってまさか時空管理局の事か？・・・だとしたら、奴等はもう管理局にまで侵入してるのか！）

ヴァイスは一人不安な顔をする

チンク
「だが、今更後には引けん！これは私自身のけじめでもあるんだ！」

チンクは自分の髪の毛を一本抜きそれを手に持っていたスティンガーに向けて吹き付ける
するとスティンガーに吹き付けられた髪が真っ二つに切れる
その時点で凄まじい切れ味だと予想出来る

チンク
「決戦だ！・・・あいつは何としてもこの手で倒す！・・・その為にお前達の力・・・私に貸して欲しい」

ノーヴェ
「勿論だぜ！チンク姉は私達の姉だ！その為に私達の力を思う存分使ってくれ！」

ウェンディ
「私も同じッス！チンク姉の為に私も力を貸すッス！」

セイン
「私も戦力になるか分からないけど、手伝わせて貰うよ」

オットー
「僕も力を貸します」

セッテ
「（コクッ）」

ディード
「私もやる！」

ヴァイス
「へへッ、女子だけに任しちゃおけねぇなぁ！俺も手を貸してやるぜ」

ボス

「うっしゃぁ！このボス様がその奴ってのをケチョンケチョンにしてやるわよぉ！」
チンク
「お前達・・・感謝する」

チンクは静かに頭を下げる
それを見て皆がニヤリと笑う

チンク
「集合は明日の朝、場所は追って指示する！頼むぞ！」
一同
「おう！」

そう言った後、チンクは下準備の為この場を後にした

ウェンディ
「ねぇノーヴェ」
ノーヴェ
「あん、何だ？」
ウェンディ
「奴って・・・誰ッスか？」
ヴァイス
「あ、それ俺も気になった！」
ボス
「俺も俺も！」
ノーヴェ
「知らんで盛り上がってたんかいおのれらあああああああああああああああああ！」

ノーヴェの盛大なツッコミが響き渡った

＊＊＊

翌日

此処はミッドチルダにある何処かの遊園地
その入り口に向かって急ぎ足で向かう存在が居た
ナンバーズの「ディエチ」である
そして、その入り口の方には

ディエチ
「弁慶さぁぁぁぁん」
弁慶
「よぉ！」

入り口には弁慶が居た
因みに、今回ディエチは何時ものナンバーズのスーツではなく、可愛げのある服を着ていた

ディエチ
「御免なさい・・・ひょっとして待ちました？」
弁慶
「いいや、俺も来て素振りしてたばかりだから大して待ってねぇぜ」
ディエチ

「良かった」

ホッとするディエチ
そしてお互いに笑い合う
そんな2人を遠くから眺める存在が居た
それは

チンク
「あの筋肉馬鹿め～～～、ディエチはなぁ、今日この日を楽しみにしてたばかりに何時もより2時間早く起きてしまったんだぞ！本来ならもっと長く寝ている筈だった物を・・・その2時間をどうしてくれるんだ？・・・その2時間を自分の命で償うのかぁ？」

チンクは立ち上がり、両手に10本のスティンガーを構える

チンク
「今この場でお前のどたまかち割ってやる！・・・おい、ノーヴェ！ちょっと下に四つんばいになって土台になってくれないか？」

ノーヴェ
「ちょっと待てえええええええええええええええい！奴って何？ディエチの彼氏ぃぃぃ？」

チンク
「シャラァァァァップ！私はあんな筋肉馬鹿をディエチの彼氏と認めた覚えは無いわあああああああああ！」

ノーヴェ
「私はあんたを今日から姉とは認めたくねぇよ！」

普段とは違うチンクに対し額に青筋を浮かべて怒鳴るノーヴェ
その光景にナンバーズとヴァイスとボスは以外そうな顔をしている

チンク
「昨日お前は言ったでは無いか！力を貸してくれると！」
ノーヴェ
「だからって仲間内で戦うなんて一言も聞いてねぇぞ！って事はあれか？後ろに居る奴等ってもしかして・・・「ゲッターチーム」の事か？」
チンク
「他に何がある？」
ノーヴェ
「あんた本当に大丈夫ううううううううううううううう！一辺ドクターに見て貰った方が良いぞ！頭とか！」

額に血管を浮かべてノーヴェは怒鳴る

チンク
「そう言うなノーヴェ」
ノーヴェ
「チンク姉」
チンク
「私はなぁ・・・只弁慶（あいつ）を抹殺したいだけなんだ！」
ノーヴェ
「尚悪いわあああああああああああああああああ！（怒）」

額に更に血管を浮かべて盛大にノーヴェが怒鳴る

チンク
「とにかく、私はあんな筋肉馬鹿にディエチを渡す事は出来ん！」
ノーヴェ
「ったく、最近のチンク姉はどうかしちまったよ・・・ヴァイスの旦那も何か言ってくれよ」

ヴァイス
「誰がヴァイスだ！」
ノーヴェ
「へ？」

底には、赤い全身タイツを着込んで葉巻を咥えて右手にサ○コガンを構えるヴァイスの姿があった

ヴァイス
「殺し屋、「スペースヴァイス」と呼べ！」
ノーヴェ
「あんた一体どうしたのおおおおおおおおおおお？」
スペースヴァイス
「弁慶の野朗～～～、こっちは万年彼女無しだってのに、アイツだけあんな可愛い彼女が出来るなんて不公平じゃねぇか！どう見ても俺の方が良い男なのによぉ！姉さん！此処は俺も加勢させて貰うぜ！」
チンク
「すまない！ヴァイス・・・嫌、「スペースヴァイス」」
ノーヴェ
「ったく・・・、おいボス、ウェンディ！お前等も何か言ってくれよ」
ボス
「誰がボスでぃ！」
ウェンディ
「誰がウェンディッスか？」
ノーヴェ
「へ？」

ノーヴェは振り向いた

そこにはタキシード姿の2人がスナイパーライフルを構えていた

ボス
「殺し屋「ザ・ボス」と呼べ！」
ウェンディ
「殺し屋「ウェンズデイ」と呼べッス！」
ノーヴェ
「あんた等もおおお

其処にはこれまた同じようにタキシード姿に身を包みスナイパーライフル・・・では無く、輪ゴムを構えるセインの姿があった
セインはノーヴェの視線に気づき振り向き

セイン
「殺し屋「００６」って呼んでね！」
ノーヴェ
「それ殺し屋じゃないからあああああああああああああああああああああ！」

セインもまた変わり果てていた

ノーヴェ
「それ多分どっかのエージェントだから！多分殺し屋じゃないから！そして、何でセインだけ輪ゴム？何でスナイパーライフルとか持ってないんだよ！」
００６
「何かその辺に落ちてたから」
ノーヴェ
「汚えなぁおい！」
セイン
「チンク姉！私も手伝うよ！」
チンク
「有り難い・・・お前達の力さえあれば奴を抹殺する事は容易い！皆、頼むぞ！」
スペースヴァイス、ザ・ボス、ウェンズデイ、００６、
「イエッサー！」

そう言って５人は遊園地に向かって入っていく

オットー
「・・・どうしよう？」
セッテ
「遊園地・・・遊びたい！」
ディード
「久々の遊園地・・・チンク姉はヴァイス達に任せて私達は遊ぼうか？」
ノーヴェ
「お前等・・・お前等はマイペースだなぁ（汗」

こちらではチンクの怒りについていけずとりあえずマイペースで行こうって事になっていた

ノーヴェ
「ったく、此処は私がしっかりしないといけないみたいだな！」

仕方なくノーヴェは一人チンク達を追いかけた
その後ろをオットー、セッテ、ディードが入っていく

＊＊＊

弁慶とディエチはメリーゴーランドに乗っていた

弁慶

「へ～、これがメリーゴーランドかぁ」
ディエチ
「弁慶さん、もしかして遊園地って始めてなの？」
弁慶
「ああ、今まで野球ばっかりやってたからよぉ」
ディエチ
「へ～」

横に並んで話し合う二人
その後ろでチンク、スペースヴァイス（ヴァイス）、ザ・ボス（ボス）、ウェンズデイ（ウェンディ）、００６（セイン）が馬に乗ってサ○コガンとライフル（輪ゴム）を構えて狙いを定めていた

チンク
「おのれぇ・・・奴めぇ考えたなぁ、此処では狙いが定められん」
スペースヴァイス
「ああ、それに何か酔って来た・・・凄い気持ち悪いし」
ザ・ボス
「畜生、一体何時になったら追いつくんだ！」
ノーヴェ
「追いつく訳ねぇだろうが！これメリーゴーランドだぞ！永遠に同じ場所をグルグル回り続けるわ！」

その後ろで馬車に乗ったノーヴェが怒鳴る

ウェンズデイ
「なんスかノーヴェ？参加したいんならそう言えばいいのに？」
ノーヴェ
「誰が参加するか！お前等が何か間違いを犯さないようにこうして見張ってるんだろうが！」

００６
「またまたぁ、ノーヴェはツンデレだなぁ（ニヤニヤ」
ノーヴェ
「ツンデレ言うなぁ！（激怒」

セイン（００６）に言われた事を猛烈に否定するノーヴェ

チンク
「駄目だ！此処では私のＩＳで仕留めるのは難しい」
スペースヴァイス
「姉御、なら場所を変えましょう！」
ザ・ボス
「グッドアイディア！」

そう言って降りた５人は
メリーゴーランドを降りた直後

チンク、スペースヴァイス、ザ・ボス、ウェンズデイ、００６
「うえ～～～～～～～～～」

大地に膝をついて吐きそうなポーズを取った

ノーヴェ
「そんなんなるなら初めからやるなよなお前等！」

その横でやれやれと言った口調をするノーヴェ

チンク
「な・・・何の・・・この程度で怯んでなる物かぁ・・・」
スペースヴァイス

「奴を倒す為ならこの命・・・惜しくは無い！」
ザ・ボス
「そうだわさ！」
ウェンズデイ
「そ・・・その通りッス！此処で倒れたたら・・・私達の今までの苦労が全て水泡に喫してしまうッス」
００６
「その通り！此処で倒れる訳にはいかない！」
ノーヴェ
「いやお前等さぁ・・・何気にカッコイイ台詞吐いてるけどやってる事は最低な事だからね」

そんな５人にノーヴェがやんわりと突っ込みを入れる

一方、別の場所では

暗黒寺
「あっち～な～、何で俺がこんなガキ臭いとこに居なきゃなんねぇんだよぉ」

ベンチに座って暗黒寺が手をヒラヒラさせていた
其処へ兎の着ぐるみが暗黒寺の隣に座る
そして頭の被り物を外す

暗黒寺
「よぉ、ギンガ。バイトご苦労さん」
ギンガ
「暗黒寺さん・・・サボってる暇があったらバイト手伝って下さいよ」

額に汗を大量に浮かべてギンガが言う

暗黒寺
「んなガキ臭い事できっかよぉ」
ギンガ
「酷い・・・・」

ギンガは涙目になる
因みに何故ギンガがバイトしているかと言うと、まぁ言ってしまえば小遣い稼ぎである

「コラァ！バイトぉ！何サボってるんだぁ！」
ギンガ
「あ、はい！すぐ行きます！」

そう言って被り物を被って現場に行く

暗黒寺
「頑張れよ～、俺の小遣いの為にな～」

何気に暗黒寺も酷い人であった

暗黒寺
「あ～あ、どっかに美人の可愛い子ちゃんが居ねぇかねぇ？」

暗黒寺はそう呟いた

一方、オットーとディードとセッテはと言うと

オットー

「う〜ん、これってこうやって遊ぶのかなぁ？」
ディード
「多分そうなんじゃないの？」

オットーとディードの2人は何故かコーヒーカップに乗ってそのハンドルをジッと見ていただけであった
何が楽しいのか分からない光景である
え？セッテはどうしたのか？って
セッテはと言うと

ギンガ
「ふぅ・・・何で私が暗黒寺さんの小遣い稼ぎを手伝わなきゃならないのかしら」

着ぐるみを着ながら愚痴を零すギンガ
そして木の前に来た時

セッテ
「・・・・・・・・・・」
ギンガ
「・・・・・・・・（汗」

ギンガは思わずフリーズした
それもその筈
今ギンガの目の前にはセッテが木に逆さになってぶら下がっていたのだ
それを見て思わずギンガが

ギンガ
「えっと・・・何してるの？」

と聞く、するとセッテは

セッテ
「ナマケモノ」

と返す
それを聞いて

ギンガ
「あ、そう・・・」

と納得する
するとセッテが口を開く

セッテ
「ナマケモノって凄いよね・・・ずっとこうしてぶら下がっていられるんだもん」

ギンガ
「そ・・・そうね（汗」

セッテ
「でも、それなのにどうしてナマケモノって言うんだろう?全然怠けてないのに?こうしてるだけで腕がプルプル言って今にも落ちそうなのに?不思議だなぁ」

ギンガ
「そ・・・そうね（汗」

セッテ
「そう言えばどうして消費税って上がるのかなぁ?最近は上がる傾向が強いよねぇ。一体どうしてなんだろうね?」

ギンガ

「さ・・・さぁねぇ（汗」
セッテ
「それに、どうしてこの作者は別に小説を書いてるんだろう?サイトを見てもこっちの方が更新が早いのに、それならこっちを優先して書けば良いのに、どうして未だに別の小説を掛け持ちで持ってるんだろう?どうして西遊記の孫悟空は猿なんだろう?どうして腿太郎は桃から生まれたんだろう?どうして浦島太郎は玉手箱を開けたらお爺さんになったんだろう?どうして太陽は暖かいんだろう?どうして月は日ごとに形を変えるんだろう?雲は何処で生まれるんだろう?地球ってそもそも・・・」
ギンガ
（助けてえええええええええええええええ（号泣）

と、セッテはギンガに質問攻めをお見舞いしていた
それにギンガは着ぐるみの中で号泣する

一方、こちらでは

さやか
「～♪」
甲児
「・・・・・（汗」

上機嫌なさやかと明らかに青ざめた甲児が居た
それもその筈
今甲児の両手には手錠が掛けられており、その首には頑丈な首輪がつけられていて、その先にあるチェーンはさやかが握っている

甲児
「あ・・・あのぉ・・・さやかさん・・・これは幾ら何でもやり過

ぎなのでは・・・（汗」
さやか
「あらそうかしら?甲児くんは可愛い子を見るとすぐデレデレするからこれくらいの躾は必要なのよ」
甲児
「だからって・・・幾ら何でもこんな格好でデートってのは無いのでは?」
さやか
「そもそも、甲児くんが夕べ私達のお風呂を除いたのが原因でしょうが!」
甲児
「しぃません（涙」

甲児は涙目で謝っていた
どうやらまた女湯を覗いたらしく、その罰を今受けていた

＊＊＊

その頃、チンク達は弁慶とディエチのデート（?）を邪魔しようとあれこれ策を張り巡らせるのだが・・・結局失敗に終った

ジェットコースターで怖がらせて涙目にしてやろうと思ったのだが、逆にチンク達が涙目になってしまうし

オバケ屋敷で迷子にしてやろうと画策したら、逆に迷子になってしまうし

レストランで超激辛タバスコを仕込んでやったらレストランのバイトが間違えてチンク達の方に来てしまい死の境を彷徨ってしまったし

射的屋で暴発させようとしたら巻き込まれて瀕死になるし（弁慶は平気だった）

等など・・・様々な悪戯や罠などを仕掛けてたのだが・・・結局失敗に終った

そして、弁慶とディエチはデート（？？）の仕上げにと観覧車に乗りに行った

スペースヴァイス

「不味いぞ姉さん！観覧車と言ったらデートの醍醐味！あそこは「チュー」する為に作られたような物だ！」

チンク

「ぬアアあああああああああにいいいいいいいいいいいい！」

それを聞いてチンクの顔色が変わった

ザ・ボス

「こうしちゃいられねぇ！このままじゃディエチちゃんのファーストキスがあの筋肉馬鹿に獲られちまうだわさ！」

ウェンズデイ

「そりゃ不味いッス！すぐに何とかしないと不味いッス！」

００６

「スペースヴァイスのヘリを使って上空から狙撃すれば良いんじゃないの？」

チンク
「グッドアイディア！早速頼む！スペースヴァイス」
スペースヴァイス
「おう！任せろ！」

そう言って5人はヘリへ向かっていった
その光景をノーヴェは見ていた
そして、ふと視線をデート（？？？）を楽しむディエチを見た

ノーヴェ
「デートか・・・」

ノーヴェには気になる相手が居た
だが、ノーヴェは元々こういうのは奥手な為どう対応したら良いか分からず大抵何時もその相手を見る度に・・・その相手を殴り倒してきた
だが、その相手はそんなノーヴェに何時も笑って接してくれた
そして、ある日、男性はこう言った

？？？
「お前、偶には笑ったらどうだ？もしかしたら笑ったお前って結構可愛いかもしんねぇしさ」

その一言はノーヴェの顔を赤く染めるには充分であった
しかし、其処でどう対応したら良いか分からず、結局ノーヴェはその相手を殴ってしまった
その為、ノーヴェは自分に正直なディエチを見て少し羨ましく思えた

ノーヴェ
「愛・・・かぁ・・・」

そうノーヴェは呟いた
そして、その腕にはガンナックルが付けられていた

＊＊＊

一方、観覧車の中では弁慶とディエチが外の眺めを楽しんでいた

弁慶
「へ～、良い眺めだなぁ」
ディエチ
「弁慶さんは何時もゲットマシンに乗って空を見てたんじゃないの？」
弁慶
「まぁ何時もマッハで飛行してるから風景を楽しむどころじゃねぇしよぉ」
ディエチ
「そ、そうなんだ／／／」

ふと、ディエチの顔が赤くなる
だが、弁慶はそれに気づかない
未だに風景を楽しんでいた
それが幸いしたのかディエチは弁慶に気づかれないように呼吸を整える

そして

ディエチ
「あ、あの・・・弁慶さん！」
弁慶
「ん？何だ？」
ディエチ
「あの・・・実は・・・今此処で・・・弁慶さんに言いたい事があるんです！」
弁慶
「何だ？改まって？」

弁慶は笑ってディエチの方を見る
こうして見つめられると胸の鼓動が高まるのを感じる
だが、己に叱咤激励したディエチは全てを出し切る思いで言う

ディエチ
「私・・・弁慶さんの事が・・・ｓｋ『待てえええええええええええええええい！』え？」

突如ディエチの言葉を遮って一機のヘリが現れた

チンク（変装）
『ゴルァアアアアアアア！この筋肉馬鹿！今すぐ其処から飛び降りろおおおおお！でなければ爆破する！』
ザ・ボス
『お前を打ち抜いてやるぜぃ！』
ウェンズデイ
『お星様にするッスよぉ！』
００６

『輪ゴムも当たると痛いよぉ！』
スペースヴァイス
『ミサイルをぶち込んだろうかい！？』

明らかに半切れの５人が武器を構えてこちらを睨んでる

ディエチ
「べ、弁慶さん！」
弁慶
「ディエチ！此処を動くなよ！」
ディエチ
「へ？」

そう言うと弁慶は観覧車の扉を開けて上によじ登った
そして、何処から取り出したのか金属性のバットを取り出す

弁慶
「よっしゃぁ！ドンと来い！」

腕を巻くってバットを構える

ノーヴェ
「やば！早く助けねぇと！」

ノーヴェはすぐさま地面に拳を突いて黄色いウィングロードを展開させる

チンク
「フッ、彼女を救う為自ら犠牲になるか・・・良い度胸だ！ならばその度胸に免じてこの場で爆殺してくれるわぁ！撃てぇ！」

チンクの号令と同時にスティンガー、スナイパーライフル、ミサイル、輪ゴムが弁慶に向けて放たれる

ディエチ
「弁慶さん！」

ディエチが叫ぶ
そんな中

弁慶
「おおおおおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああああ！」

怒声と共に放たれた物全てを跳ね返す
それは真っ直ぐにヘリに向かって来た

5人
「へ？」

キョトンとする5人
スペースヴァイスは急ぎ避けようとしたが、間に合わず全弾命中してしまいヘリは爆発してしまった

スペースヴァイス
「俺のヘリがあああああああああああああ（涙」
ザ・ボス
「畜生！憶えてろよおおおおおおおおおお（涙」
ウェンズデイ
「バイバイキ～～～ン！」

００６
「また明日あああああああああ！」
チンク
「おのれ・・・おのれえええええええええええ！車弁慶いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい（号泣」
そう口々に叫びながら5人は落下していった
それを見下ろす弁慶とディエチ
ディエチ
「・・・・一体、何だったんだろう・・・あの人達？」
弁慶
「さぁな・・・新手のショーとかじゃねぇのか？」
その下では爆発したヘリが炎上していた
そして、遠くから棒立ちのノーヴェが居た
ノーヴェ
「・・・・・・・・・・・・」
折角かっこ良く助けに行こうとしたのに無駄足に終った為思考回路が停止していたのだ
其処へ
甲児
「ありゃ？ノーヴェじゃねぇか」
ノーヴェ
「げっ！こ、甲児！」
其処には、さやかの拘束から逃れた甲児が居た

甲児
「へぇ、お前が遊園地に来るなんて珍しいな」
ノーヴェ
「わ、私だって遊ぶ時位あるさ！」
甲児
「へ～、もしかして・・・彼氏とか出来たのか？」
ノーヴェ
「ば・・・そ、そんな訳・・・・ねぇよ！」

否定はするも顔が赤い
それを見て甲児がニヤける

甲児
「ほほぉ！一体誰だ？誰なんだよぉ！教えろよぉ」
ノーヴェ
「うっせえええええええええええええええええええ！」
甲児
「あらぐわあああああああああああ！」

ノーヴェの思い切りのアッパーカット（ガンナックル付き）を食らい甲児は放物線を描いて地面に落ちる

甲児
「な・・・何で・・・今日はこんなに・・・・ついて・・・・ないんだ・・・・よ・・・・」

そう言って甲児は静かに息を引き取った（気絶しただけである）

余談だが、今回のヘリの騒ぎが直ちにウーノ等姉達に響き渡り、首

謀者であったチンクは厳罰として一週間のトイレ掃除を命じられた
そして、ギンガとセッテはと言うと

セッテ
「ところでどうして犬はワンって鳴くのかなぁ、ニャーでも可愛いのに、もしくはチュンチュンでも良いよね。後どうして時計は１２までしか無いんだろう、一日は２４時間なんだから２４ってつけば良いのに、後どうしてアニメは３０分って決まりがあるんだろう?、どうしてお腹が減るんだろう?どうして夏は暑くて冬は寒いんだろう?どうして・・・・・」
ギンガ
（いい加減帰らせて（涙）

未だにセッテに質問攻めにあっていた
因みにセッテの質問攻めから開放されたのは、およそ２４時間後であった

対決!チンク対『奴』　終

外伝5　対決！チンク対『奴』（後書き）

さてどうでしたか？今回の外伝は
少しアニメネタを盛り込んでいます
わかるかなぁ？

男の拳　前編（前書き）

どうも、更新遅れて申し訳ありませんでした
遂に登場した皆が待ってた（？）クロノ君
果たして彼はどう甲児達と関わっていくのだろうか？

男の拳　前編

甲児達の目の前に突如現れた3人目の魔道士「時空管理局執務官クロノ・ハラオウン」
彼の介入により2人の激突はどうにか避ける事が出来た
だが、未だになのはとフェイトの間には激しい火花が散っている
2人にとってクロノは予期せぬイレギュラーに他ならないのだ
2人は突然割り込んできたクロノを睨みつける
だが、当の本人はその視線を気にせずある方を見ていた
そう、彼が見ているのは先ほど3体の怪獣を倒したきっかけになった存在であり、全身を鋼鉄の体に身を包んだ巨人
鉄の城マジンガーZ
偉大な勇者グレートマジンガー・・・その2体である
クロノが噛み付くような視線で甲児達を見る
その視線に甲児は年不相応の威圧感を感じた
見た目はどう見ても10代前半の少年に見える
黒を基調とした重装備を思わせるバリアジャケットを身に纏い、両腕は機械のようなグローブを嵌めている
更には、先ほどのを見た通り、2人の突撃を防いだ所を見るに相当の力を持っていると安易に予想出来る
そんな年不相応な少年がこちらを睨んでいる
甲児達は動かないでいた
少年の目から「少しでも妙な動きをしたら撃ち抜くぞ」と言いたげな気迫を感じたからだ
何より、近くになのはやフェイトが居る以上下手な動きは出来ないでいたのだ

「貴方達は一体何者ですか?」

少年の口から当然とも思える言葉が帰ってきた
確かに、初めてマジンガーを見れば誰もがそう言いたくなるだろう
それには甲児達も納得していた
そして悩んでいた
果たしてどう説明したら良いのだろうか
目の前に居るのは本来居る世界では心強い味方となってくれた「機動六課」を束ねる「時空管理局」の執務官が目の前に居る
出来ればコンタクトを取りたい
しかし、今はロスト・ギアを操る異端者として見られている
下手に話しかければ即座に撃たれる事は明らかであった
かと言ってこのまま友好的に事が進むとも思えない
どうした物かと悩んでいた

「どうする？鉄也さん」

甲児は横に居たグレートマジンガーのパイロットである鉄也に聞いた
そしてその顔色を見た
鉄也は甲児の言葉に耳を傾けながらもこちらを睨みつけるクロノを見ていた
歴戦のプロと言われる鉄也ですらクロノから放たれる気迫に多少驚いてはいたのだ
本来ならこんな年の子供がそんな気迫を放てる筈が無いのが甲児達の世界では常識であったのだ

（あいつ・・・シローと同じ年みたいだしなぁ）

甲児は元の世界に残してきた弟シローを思い出した
良く見るとシローと同じ年に見える
そんな年の少年がこんな年不相応な気迫を放てるのに甲児も鉄也も以外そうな顔をしていた

しかし、当面の問題はこの状況をどうするかである
クロノは言ってしまえばかなり殺気立ってる状態である
そんな状態のクロノをいかにして宥めるのかが今の重要な課題でもあった

「さて・・・どう説明したら良いのやらなぁ・・・」

甲児は今の姿がクロノ達に見られないのを良い事に経ヘルメットを外して頭を掻いた
ボサボサの髪に汗が混じり少し掻いた手に不快感を覚えた
ある程度掻いた後またヘルメットを被る
そして意を決して甲児はパイルダー内にあるスイッチを押す
それは、パイルダーのキャノピーを開くスイッチである
スイッチを押した事によりその命令を受けてパイルダーのキャノピーがゆっくりと開く
突然キャノピーが開いた事にクロノは驚き手に持っていたデバイスを向ける
何か攻撃が起こると懸念したのであろう
だが、その予想は外れ、中からパイロットスーツを身に纏った甲児が居た
甲児はスクッと立ち上がり被っていたヘルメットを外す

「俺は兜甲児。そしてこいつは俺の相棒で鉄の城の異名を持つ「マジンガーZ」だ」
「兜甲児・・・そして、マジンガーZ」

クロノは発せられた言葉をゆっくりと呟いた
そしてマジンガーZの全身をゆっくりと見回す
だが、彼に敵意は内のだろうと判断したのかクロノは隣に居たグレートマジンガーに視線を移す

鉄也も同様にコンドルのキャノピーを開き立ち上がってヘルメットを外した

「俺は剣鉄也だ。そしてコイツはグレートマジンガー・・・それだけだ」

それ以上言う気は無いと言う鉄也の態度にクロノは多少不機嫌そうな顔をするも納得はした
それで何かと騒ぎを起こす程クロノも子供では無いと言う事なのだろう

「分かりました。両名ともこちらの指示に従って貰います・・・異論はありませんね？」

明らかに上から目線で問いかけるクロノ
その語源にいささか不快さを憶えるが、そんな事で一々いちゃもんをつけるのも何なのでとりあえずは黙っておく事にした
そして、クロノの意見に従う意思として2人はマジンガーの操縦席である小型機であるパイルダーとコンドルから分離して地上に降りる
そして2人はそのパイルダーとコンドルから降りて大地に立つ
そしてクロノの前に歩み寄る
クロノはそんな2人の前に降り立つ
同様になのはとフェイトも降り立つ

「さて、次は君たちだな」

今度はクロノの後ろに居たなのはとフェイトの方を向く
なのは達も同様にクロノを見る
先ほどの様に突き刺さるような視線こそしてないのだが、相変わら

ず威圧感を放ってる
その威圧感になのはとフェイトは少したじろぐ

「君達も僕と一緒に来て欲しい。言う通りにしてくれれば安全の保障はする」

クロノのその一言に甲児は心の何処かで安心した
フェイトがこのまま時空管理局に保護されれば彼女が獣魔将軍の魔手に晒される可能性が激減する事になる
結果、歴史は変わるかも知れないが最悪な変革は避けられる事になるだが、肝心のフェイトは乗り気では無かった
無理もないだろう
彼女は管理局から見れば犯罪者とみなされるのだ
果たしてフェイトが大人しくクロノの言う通り従ってくれるのかどうか
だが、甲児からしてみれば是非一緒に来て欲しかった
今フェイトが母プレシアの元へ戻るのは危険だ
それならばいっそ時空管理局の管理下に居た方が安全だ
もし彼女を管理局が何かしようとした時には自分が守れば大丈夫だそう甲児は思えた
また、その思いは彼女の使い魔でもあるアルフも同様であった
唯一この世界で甲児達の事を知っていて、尚且つプレシアの正体を知ってるアルフにとってもこの誘いは有り難かった
扱いは多少悪くなるかも知れないが最悪命を失う心配は無くなるだろう
そう思えた
だが、

（フッフッフ、時空管理局が現れたようだな）
（な！その声はプレシア・・・嫌、獣魔将軍）

突如アルフの脳裏に獣魔将軍の声が響いた
恐らく念話だろう
獣魔将軍がアルフにのみ念話をしているのだろう
その証拠に他の人には聞こえていないようだ
アルフは周りに気取られないように念話に耳を傾ける

（一体なんのつもりだい！私にだけ聞こえるように念話をする何て！）
（なに、簡単な事だ・・・フェイト・テスタロッサとジュエルシードと共にその場から逃げ出せ！）
（！！！・・・そんな要求をあたしが『はいそうですか』と言う通りにすると思うのかい？）

アルフは強気で返す
だが、獣魔将軍はフンと鼻を鳴らす
その態度に疑問を感じるアルフ
その自信の意味が次の言葉で分かる事になった

（もしこのままフェイトを時空管理局に引き渡すのなら・・・俺はフェイトの母プレシアと姉のアリシアを・・・殺す！）
（！！！）

言葉が無かった
そう、獣魔将軍には今フェイトの母と姉が言わば人質同然の扱いになっているのだ
そして、もしフェイトの母が死んでしまえば・・・恐らくフェイトは生きる気力を失ってしまうだろう
だが、今プレシアの元に戻るのは大変危険な事だ
どうすれば良い

アルフは必死に自問自答していた
不思議と彼女額には大量の冷や汗が流れていた
どうする・・・
どうすれば良い・・・
そんな考えだけがアルフの脳裏を過ぎっていた
そして、アルフは何かを決心したかの顔になった

フェイトは未だに渋った顔をしていた
もしこのまま時空管理局と言う組織に行けば母に会えなくなる
それどころか、今まで集めたジュエルシードを全て没収されてしまう事になる
そうなれば母の夢を果たせなくなってしまう
それは辛い事でもある
その為フェイトは渋った顔をしていた

「どうしよう・・・ユーノ君」

フェイトの隣では、なのはがフェレットのユーノと名乗る者と話しをしていた
こちらもアルフの意見を聞こうとした時、突如数発の魔力弾がクロノを襲う

「くっ！」

クロノは咄嗟に障壁を張り魔力弾を弾く
そして自分に向けて魔力弾を放って来た不届き者を見た
其処には、上空に飛んで魔力弾を放った体制を取っていたアルフが居た

「フェイト！急いでずらかるよ！」

「アルフ・・・うん！」

フェイトは咄嗟に判断して飛び上がる
そして上空に輝くジュエルシードに手を伸ばす

「させるか！」

それを邪魔しようとクロノはジュエルシードに向かうフェイトに向けて青く輝く魔力弾を放つ
魔力弾は真っ直ぐフェイトに向かって飛んでいく
だが、フェイトはそれに気づかず魔力弾に手を伸ばす

「危ねぇ！フェイトォォ！」

甲児は咄嗟に叫び、手に持っていたヘルメットを魔力弾に向けて投げつける
フェイトは甲児の声を聞いてふと後ろを振り向く
其処にはクロノの放った魔力弾が今にもフェイトに向かって飛んで来ていた
かわそうにも間に合わない
だが、そんな魔力弾に向かって甲児の投げつけたヘルメットが魔力弾とぶつかりあう

「きゃっ！」

その衝撃でフェイトは後方に吹き飛ばされてしまう

「フェイトォォ！」

吹き飛ばされたフェイトを庇うように後ろからアルフが抱きかかえる

気を失っては居るが特に外傷は無い
しかも彼女の手にはジュエルシードが握られていた
それを見て内心ホッとするアルフ
だが、余り長い出来そうも無いと思いアルフは直ちに飛び去る

「アルフ！」

甲児はアルフの名を呼ぶもアルフはそれを返さず飛び去っていく

（甲児・・・御免！）

心の中で謝罪しながらアルフは飛び去る
その背中を甲児達は見つめるしか出来なかった
何故アルフがあんな行動に出たのか
今フェイトを時空管理局に身柄を保護させる事こそ安全策だと言うのに
一体何故なのだろう

「何故邪魔をしたんだ！」

だが、今はそんな事を気にしてる場合ではない
それは、今目の前には甲児に向けて殺気とデバイスを向けているクロノが居るからだ
再び噛み付くような視線を送っている

「貴様は自分が何をしたのか分かっているのか？犯罪者に加担したんだぞ！」
「悪かったな・・・つい条件反射って奴でよぉ」

甲児は場を和ませる為か、それとも本心なのかそんな発言をした

その発言に納得出来ないのかクロノは首を傾げた

「あんたにとっちゃ犯罪者かも知れねぇが、こっちにとっちゃ大事な仲間だしよぉ」

「つまり、お前も犯罪者と言う事になるな？」

「・・・ま、あんたから見たらそうなるかもな」

肩を上げてニヤリとしながら甲児は言う

その言動には何処か余裕さえ感じられた

その態度にクロノは更に機嫌を悪くする

本来デバイスを向けられて良い気分になる人間など居ない

それの指す意味を知っているからだ

デバイスには『非殺傷設定』と言う物がある

それを使えば多少痛みこそあれど命を奪う事は無い

だが、その設定を解いてしまえば拳銃となんら変わらない物になる

先ほどの魔力弾でさえ設定はしていたのだろう

もし、していなければフェイトはあの程度ではすまなかった筈だ

そんなデバイスを向けられていると言うのに甲児はこの余裕の表情である

クロノにはその笑みの指す意味が理解できなかった

「何でそんな風に笑っていられる？僕が撃たないとでも思ってるのか？」

「いいや、そんな訳じゃねぇよ」

「じゃぁ何故？」

「お前・・・何であの時フェイトを撃った？」

「何で？・・・だと！」

甲児はクロノに聞いた

何故彼女の心配をするのだろうか

今クロノは甲児に向けてデバイスを構えていると言うのに甲児は自分の心配よりもフェイトの心配をしているのだ
それがクロノには理解し難い事でもあった
何故あの時撃った・・・答えは明白であった
彼女にジュエルシードを渡す訳にはいかない
あれは危険な物なのだ
だからこちらが回収しなければならない
その為に止むを得ないとは言え幼い彼女に向けて発砲してしまった
正直居た堪れない気持ちはある
だが、感情に流されてはいけない
そんな事になれば多くの人達が危険に晒されてしまう
それは執務官として望むべき事では無い
その意味を含めてクロノはこう言った

「執務官として当然の事をしたまでだ！彼女にジュエルシードを渡す訳にはいかない」
「執務官としてねぇ・・・お前、そんな生き方してて辛くないのか？」
「・・・・・」

甲児の疑問にクロノは答えを渋った
仕事とは言え女子供を撃つのは気持ちの良い物では無い
クロノとて機械では無いのだ
彼にも甲児達と同じ赤い血が流れている
怒りもすれば、悲しみもする何ら変わらない人間なのだ
だから彼は答えに渋ったのかも知れない

「ま、答えられないんなら良いけどよ。お前に良い事を教えてやるよ」
「良い事？」

首を傾げるクロノの前に甲児は歩み寄った
クロノは構えるが、すぐに構えを解いた
相手は丸腰の上拳すら握っていない
そんな人間に警戒する必要は無いだろうと思ったからだ
そんなクロノの前に立つと甲児は口を開く

「良いか、男はな、誰かを守る為に拳を振るうんだ・・・だから男の拳は重いんだ」
「誰かを・・・守る為に」
「お前の拳は重いか？」
「・・・・・」

クロノは自分の拳を見た
心なしか自分の拳が軽く見えた
何故だ・・・自分は執務官として多くの人命を守る為日々努力を重ねてきた
多くの犯罪者を捕らえてきたのだ
そんな自分の拳が何故か・・・・・『軽く』見えた

「今はまだ分からないだろうさ・・・だけど、何時かお前も分かる日が来る・・・その時どうするべきか・・・それは自分で決めな」
「・・・・・肝に銘じておきます」
「あ～らら、可愛げのねぇ奴（汗」

クロノの返答に甲児は苦笑いでそう答えた
横にいた鉄也もニヤリと笑っている
だが、なのは達には分からなかったのか頭に大量の『？』マークを浮かべている
まぁ仕方ないと言えば仕方ないのであろう

そう思えた

『話しは済んだかしら？』

クロノ達が話している場所
何もない空中に突如映像が映り出た
それに甲児達は一瞬驚く
だが、当たり前だがクロノは全く動じていない
それどころか映像に映り出た顔を見てふぅと溜息を吐く

「艦長・・・どうしましたか？」
『クロノ執務官・・・今すぐその人達を艦内に連れてきてくれないかしら？』
「この人達を・・・ですか？」

クロノは甲児達を見てそう言う
部外者を艦内に上げて良い物か
普通ならそんな事出来る訳が無い
そんな事をして艦内で暴れられれば厄介極まりない事である
その為艦内に上げる場合は彼らに重度のバインドを施す必要があった
だが、不思議とクロノは彼らにバインドは必要ないだろうと思えた
何故かは分からない・・・だが、そう思えたのだ
そう思ったクロノは

「分かりました・・・彼等を「アースラ」に案内します」

そう返事した

＊＊＊

フェイトを抱えてアルフは自分の古巣へと帰っていた
アルフの胸中は複雑な物があった
甲児達に黙ってこうして出てきてしまったのだから
本当なら事情を説明して納得した上で逃げたかった
だが、そうする事も出来ない状況なのだ
下手に説明して獣魔将軍の機嫌を逆撫でしてプレシアやアリシアにもしもの事があれば、それこそ本末転倒である
それだけは避けねばならない事でもあった
それでも、アルフの胸中は痛い物があった
今までフェイトの為に戦って来た甲児を裏切るような気がしたからだ
勿論甲児がそう思っていたのかは今は分からない
正直、何故あの時あんな行動にでたのかさえ今のアルフには分からないのであった
体が勝手に動いた
そう言ってしまえば説明がつくかもしれないだろう

「御免よ、フェイト・・・でも、今はこうするしか考えが浮ばなかったんだ」

アルフは未だ自分の腕の中で気を失っているフェイトを見てそう言った
フェイトにとって甲児は頼れる兄貴分のような人でもあった
そんなフェイトと甲児を離れさせる行為が彼女をどれだけ傷つけるのか
そう考えただけでアルフの胸に何かが突き刺さる思いがした
そして、プレシアとアリシアを人質にとった獣魔将軍に対する激し

い怒りがこみ上げてきた

（何時か・・・この借りは返すからね・・・覚えておきな）

アルフはぎゅっと歯をかみ締めながら心の中でそう呟いた

「あ・・・アルフ・・・」

「フェイトォ！気がついたんだねぇ？」

「うん・・・アルフ・・・甲児さんは？」

「・・・・・・」

フェイトの問いにアルフは答えられなかった

置いてきてしまった

そう言ってしまえば簡単に片付くだろう

だが、果たしてそう言ってフェイトが納得してくれるかどうかは正直微妙であった

もしかしたらフェイトが傷つくかも知れない

そう思えたからだ

だが、

「そっか・・・そうだよね。もうこれ以上甲児さんに頼る訳にはいかないからね」

「フェイト・・・御免」

「？？・・・何でアルフが謝る必要があるの？」

「だって・・・だってあの時あたしがあんな事しなきゃこんな事にはならなかったんだし」

アルフが非常に申し訳ない顔でそう言った

そんなアルフの頭を優しく撫でる

「アルフは何も悪くないよ」
「フェイト・・・」
「また、2人で集めよう・・・お母さんの為に」
「フェイト・・・・うん」

フェイトの言葉にアルフは力なく頷いた
今フェイトに真実を話す訳にはいかない
フェイトにはショックが大き過ぎるのだ
だが、何時か・・・・そう、何時かフェイトが真実を知る日が来るだろう
そうなった時、フェイトは正気で居られるか
それは、今のアルフには分からなかった

一方で、アースラ内部に連れてこられた甲児達は格納庫である物を見つけた

「あ、あれって！・・・「ゲットマシン」じゃねぇか！」

そう、マジンガーの横に3機のマシンが置かれた
赤、青、黄色と三色あるマシン
見覚えのある外見と色
それを見て真っ先の甲児と鉄也はそれがゲットマシンだと理解出来たと言う事は彼等も此処に来てるのだろうと推測出来た

「甲児くん！鉄也くん！」

その推測はこの一言で確信に変わった
2人に向かって手を振りながらやってくる青年が居た
青と緑を基調としたスーツに黄色いマフラーをつけた茶色の髪の青年

ゲッターチームのリーダーであり3機のゲットマシンが合体したロボット「ゲッタードラゴン」のパイロットである「流竜馬」である

「リョウくん！」
「君は此処に来ていたのか？」
「ああ、ある人に連れられて来たんだ」

3人はそう言って互いに再会を喜び合った
互いに肩を抱き合ったり小突きあったりしている
そんな3人の元へまた2人誰かがやってきた
見るからにニヒルそうに斜めに構えた青年と大柄で筋肉質な青年である

「隼人！それに弁慶も！」
「3人一緒に来ていたんだな」

甲児と鉄也は後からやってきた二人とも再会を喜び合った

「そう言うお前等は一緒じゃなかったのか？」
「ああ、俺達はちょっと訳ありって奴でさ」

甲児はそう言ってちらりと鉄也を見た
鉄也は少し申し訳なさそうな顔をしていた
どうやら記憶をなくしていた時の事は覚えているようであった
幾ら記憶を無くしていたとは言え甲児と、そしてマジンガーZと図らずも戦う羽目になってしまった事に負い目を感じているのだろう
甲児自身は大して気にしてはいないのだが鉄也の為にと余り深くは言わないでおいた

「あのぉ・・・皆さんは鉄也さんのお知り合いなんですか？」

「ああ、俺達は元居た世界で仲間だったんだ」
「と言っても今でも仲間だけどな」

弁慶は大きな口を開いて笑いながら言う
外見と同じでとても大らかな青年のようだ
その横で隼人はフッと笑っている

「そう言えばリョウくん達は初めから管理局に居たのかい？」
「嫌、俺達は最初くろがね屋と言う温泉宿で倒れていたのを其処の従業員の人達に拾われたんだ」
「くろがね屋・・・それって！」

なのはが思い出すように呟いた
そしてそれに鉄也、甲児、ユーノの３人も同様に思い出す
そう、それは初めて甲児と鉄也がマジンガー同士で戦った場所であったのだから

「其処で俺達は其処の女将の紹介を受けて此処に来たんだ」
「温泉宿の女将にぃ？」

竜馬の答えに甲児は首を傾げた
温泉宿の女将が何故この時空管理局と関わりがあるのだろうか
それは謎でもあった
何はともあれこうしてゲッターチームと合流出来たのは有り難い事でもあった

「でも何だか不思議ですねぇ、私達全員あの温泉宿に来ていたなんて」
「うん、偶然・・・なのかなぁ？」

ユーノは首を傾げながら言った
確かに皆温泉宿に一度は足を踏み入れた事になる
果たしてそれが偶然なのか・・・それとも必然なのかは今は分からないでいた
だが、今考え事をしている時間は無いだろう
その証拠に目の前に居るクロノが腕を組んでこちらを待っていた
余り待たせるのもあれだと思い先を急ぐ事にした
その時、

「素晴らしい！素晴らしいぞおぉぉ！あのマジンガーZにグレートマジンガーが居るでは無いか！これにワシの開発した兵器を組み込めば正に無敵になるじゃないかあああああああああああ！」
「な、なんだぁ！」

突如奇声にも似た声が聞こえたので甲児達は振り返った
其処にはまるで神を崇拝するかのようにマジンガーを眺める老人が映っていた
白衣を着ている剥げた老人であった
其処だけ見れば普通の老人だと思える
だが、その老人の頭には何とプラグらしき物が植え付けられていた
何かを繋ぐ為なのだろうが、一体何故自分の体にそんな物を取り付ける必要があったのだろうか疑問が尽きない
更にその顔は何処か歪になっており顎はしゃくれており兵器を見てまるでおもちゃを貰って喜んでいる子供のようにはしゃいでいた
一言で言ってしまえばとち狂った老人としか言い様が無いでいた
その老人が甲児達を見つける
すると老人は更に目を輝かせて甲児達に近づく

「おぉ！お主があのマジンガーZとグレートマジンガーのパイロットかぁ？」

と言って老人は鉄也と・・・何故かなのはを見ていた

「ふぇ！？」

なのはは老人に怯えた顔をしている
しかし老人はそんななのはをお構いなしに見つめる
まるで品定めでもするかのように舐めるように見ている
そんな視線で見られて気持ちの良い物では無い

「ほほ～、こんな小さな子供があんな物を扱えるのかぁ・・・どれ、ちとワシに顔を良くみせぃ！」

老人がゆっくりとなのはに手を伸ばす
老人の皺皺の手がなのはの顔に触れようとした刹那、なのはは悲鳴を上げながら鉄也の後ろに隠れた
鉄也は自分の後ろに隠れたなのはを見て（何故俺の後ろに隠れるんだ？）と言いたげな顔で見ていた
そんななのはを見て老人がちっと舌打ちしたように聞こえたのは気のせいだったのだろうか
このままだとなのはがマジンガーのパイロットと誤解されたままになってしまうので仕方なく甲児が名乗りをあげた

「俺がマジンガーのパイロットだよ、爺さん」
「ん、誰かと思ったら・・・お主もしかして十蔵の孫かぁ？」
「お爺ちゃんを知ってるのか？」

甲児が以外そうな顔で老人を見る
老人はそんな甲児を見て大口を開けて笑う

「知り合いも何もワシと十蔵は昔からの飲み仲間じゃったんじゃぞお！ワシの作った兵器と十蔵の作ったロボットを合わせれば無敵じゃあああああ！って言う話を何度もしとったんじゃぞぉ！」

これまたとち狂ったような声で老人は言う
甲児はそんな老人を見て苦笑いを浮かべており、鉄也は肩眉を上げて見ていた
そしてなのはは鉄也の後ろで老人をまるで化け物を見るような目で見ている
余程怖いのだろう
ユーノも初めて見る老人に驚いているのか毛を逆立てている
すると其処へ竜馬がやってきた

「敷島博士・・・余り俺達の仲間を怖がらせないで下さい」
「し、敷島博士ぇぇ！」

その名を聞いて甲児は驚愕した

「知ってるんですか？」
「敷島博士って言ったら俺達の世界で武器作りの天才と言われた科学者だぜ！」
「確か数年前に行方不明になったと聞いていたが・・・まさかこっちの世界に来ていたとは・・・」

どうやら敷島博士の名前は鉄也も知っていたらしくこの世界で博士に出会えた事に驚く

「彼は僕達の居た世界に突然現れたんです。本当なら確保している所なんですが・・・艦長の提案で此処のスタッフとして置いているんです」

横でクロノは説明する
しかし、その顔は何処か不満そうである

「いやぁ、この世界の奴等は皆『魔法』等と言う得たいの知れん物を扱いおってつまらんと思っておったんじゃがまさかこの世界でマジンガーやゲッターに出会えるとは長生きするもんじゃわあああああああああい！」

敷島博士は諸手を広げて喜ぶ
その笑い声を聞いてなのはの体がビクっと震える
このままだと話が進まなさそうなのでとりあえず敷島博士を無視して先を急ぐ事にした

格納庫を出た辺りでクロノはなのはとユーノを見る

「君たちもそろそろ展開を解いても大丈夫だよ」

と言っているクロノも既にバリアジャケットを解いており管理局の職員を思わせる制服を着ていた

「そうですね・・・そろそろ大丈夫でしょうし」
「へ？どう言う意味？」

ユーノの言う意味が分からず頭に「？」マークを浮かべるなのはの目の前で突如ユーノが閃光に包まれた
そして閃光は徐々に元のフェレットの形から人間の形になり、閃光が消えると其処には金髪の短い髪型をした少年が立っていた
人間に戻ったユーノがゆっくりとなのはを見る

「ふぅ・・・この姿で会うのは久しぶりだね」

ユーノはニッコリと微笑む
だが、なのはは目を丸くしていた
それは鉄也も同様であった
そんな2人を見てユーノは「あれ?」と言った顔をしていた

「ゆ・・・ユーノ君って・・・フェレットじゃなかったの?」
「え?初めて会った時ってこの姿じゃなかったっけ?」
「違うよぉ!最初からフェレットだったよぉ!」

なのはが手を大きく振ってそう言う
それを聞いてユーノが暫し考え込む
そしてアッとした顔になった

「そうだ!最初僕はフェレットだった!」

今この場で思い出したユーノであった
そして、そんなユーノに追い討ちをかけるように鉄也が呟く

「そう言えばユーノ・・・お前確か高町と一緒に女湯に入ってなかったか?」
「あ!」

鉄也に言われてユーノは思わずあの時の光景を思い出した
隣では真実に気づいたなのはが顔を真っ赤にしている
竜馬と弁慶は意味が分からず首を傾げており、隼人は理解していたのかフッと笑っている
そして、そんなユーノの肩にそっと誰かの手が置かれた
ユーノはゆっくりと振り返ると、其処には黒い笑みを浮かべた甲児

が居た

「ユーノ・・・てめぇ・・・何1人で美味しい思いしてんだ?」
「えぇ!そ、そんなぁ・・・僕は別にそんな気があった訳じゃ・・・」
「そんな気ってどんな気だぁ?」
「う!・・・」

甲児に即座に突っ返されて返答に困るユーノ
そんなユーノの襟首を持ち上げて目の前に持ってくる

「てめえええええええええええええ!何そんな美味し過ぎる事やってんだこらあああああああああ!」
「グエエエエエエエエエエエエエ!ご、ゴウジザン・・・グビ、グビガジマッデマズヨオオオオオオオオオオオオ!」
「うっせえええええええええ!人が女湯を覗く為にどんだけ命掛けになってるか!てめぇに分かるかあああああああああああ!俺が女湯を覗こうとして今まで何度死にそうになったか・・・てめぇに分かって溜まるかあああああああああああ!」

目から滝のように涙を流しながら甲児はユーノを前後に激しく揺らす
ガクンガクンとユーノの首が揺れる
経験のある人なら分かると思うが結構酔う
そのせいかユーノの顔は徐々に青ざめていく
そして瞳から生気が失われていきかなりやばい状態になっていた

「こ、甲児さん!もう止めて下さい!このままじゃユーノくんが・・・ユーノくんがあああああああああ!」

余程心配だったのだろう、涙目になりながらなのはが必死に甲児を

止めようとする
竜馬達もそれに加わって止めに入るが、甲児の手が止まる気配が一向にない
それどころか更に激しさを増していく
最早ユーノの命は風前の灯火と思えたその時

「いい加減にしろ！」

と言う鉄也の声と共に稲妻の如く鉄拳が甲児の脳天に叩きつけられた

「アヒャァ！」

変な叫び声を上げながら甲児はその場に倒れた
ユーノも同様に地面に倒れる
そしてかなり苦しそうに咽ていた
ソンナユーノになのはが近づく

「大丈夫？ユーノくん」
「だ・・・大丈夫・・・だよ・・・多分・・・」

物凄い青ざめた顔でユーノは言った
それを見てクロノはやれやれと言った顔をしていた

そんなこんなな事があったがなのは達はクロノに連れられてとある部屋に訪れた
部屋には沢山の盆栽が敷かれており、その前には1人の女性が茶を点てていた

「遅かったわね、クロノ」
「すみません艦長・・・その、色々ありまして（汗」

クロノが申し訳なさそうな顔で事情を説明する
すると艦長と呼ばれた女性はクスリと笑った

「あらあら、それじゃ其処で担がれてる人はそれが原因でそうなったのねぇ」

彼女の視線の先では鉄也がグッタリした甲児を肩で担いでいた
どうやら先の一撃が効き過ぎてしまったようで未だに目を覚まさないでいたのだ
とりあえず鉄也は肩を数回揺らして無理矢理甲児を起こす
目を覚ました甲児が「御免よ～、さやかさ～ん」と寝ぼけた事を言った時には部屋には笑い声が充満していた

「さてと、それじゃ自己紹介から始めましょうか。私はこのアースラの艦長を務めています「リンディ・ハラオウン」と言います」

リンディと名乗る女性の自己紹介を受けて甲児達も自己紹介をし返す
そして、甲児はとある事に気づく

「そう言やぁよぉ、ハラオウンってクロノと同じ苗字だよなぁ・・・ひょっとして艦長ってお前の姉ちゃんか？」
「いえ・・・母です」
「んなあああああああああああああああああにいいいいいいいいいいいいいい！」

甲児は正にカルチャーショックを受けた衝撃であった
目の前には甲児の世界でなら２０代前半と言っても充分通じるような美人艦長が居る
その美人艦長の子供がこんなムッツリで堅物でＫＹな可愛げの無い

奴なのかと正直疑いたくなる

「甲児さん・・・何気に酷い事思ってませんか？」
「ああ、お前があんな美人艦長の息子なのが信じられないと言った感じで見てる」
「何でそんな風に思うんですかあああああああああ！」
「ったり前だろうがあああああ！どう遺伝子操作したらリンディさんみたいな美人艦長からお前みたいなムッツリで堅物でＫＹな可愛げのないガキが出来上がるんだよおおおおおおおおおお！」
「大きなお世話です！それに僕は父親似なんですよ！」

お互いに額に青筋を浮かべて睨みあう
それこそ額が擦れあう位の距離で
その光景を見て鉄也は「またお灸を据えてやるか」と言いたげに拳を鳴らし始めており竜馬達はやれやれと呆れておりなのはとユーノはどうすれば良いのだろうとお互いを見ながら困った顔をしていたし、リンディ艦長に至っては「美人艦長」と言われたせいか凄く嬉しそうであった
そんなこんなな展開がおよそ３０分位続いた後、艦長から話しを告げられた

「単刀直入で言わせて貰います・・・あなた方はこの世界の人間ではありませんね」
「え？そうなんですか？」

真実を知らないなのはは鉄也を見てそう聞く
鉄也は無言で頷いた

「ああ、俺達は此処とは別の世界の地球からやってきたんだ」

甲児は遭えて未来から来たと言う事実は隠した
それが原因で何かの歴史が変わると厄介だと思ったからだ

「それでリンディさん・・・俺達に話しってのは・・・ジュエルシードの回収に協力して欲しいと言う事ですか？」
「そうです」

竜馬の問いにリンディが頷く

「貴方方の使うロボット・・・確か、マジンガーとゲッターと言ったかしら？私達魔道士でもあの巨大な機械の怪物相手では苦戦を強いられてしまうの・・・特にさっき貴方達が戦っていた3体の怪獣が相手だとね」
「確かにな・・・あいつらは俺達だけでも結構ヤバかったしな」
「ああ、高町達が居なかったら正直危なかったな」

甲児と鉄也は思い出すように言う
それを聞いて竜馬が険しい顔をする

「実は・・・その怪物の出現の原因でもある『ロスト・ギア』ジュエルシードは僕が原因で出てきてしまったんです」

ユーノが暗い顔で言う

「どういうこった？」
「あれは、僕が遺跡探索をしているときに偶然見つけてしまったんです。それが護送中に事故でこの世界にばらまかれてしまったんです」

ユーノが事の経緯を説明する

それを始めて聞いた甲児と竜馬達は驚く
だが、リンディは毅然としていた

「成る程ね、それで自分の力で回収しようとしたのね・・・それは偉いわ・・・でも、同時に無謀ね」
「・・・すみません」

リンディの言葉を聞いてユーノは更に俯く
そんな中

「あのぉ・・・その『ロスト・ギア』って何ですか？」

なのはが恐る恐る手を上げて聞く
それに対しクロノが説明しようとした時、

「俺達の居る世界以外で発達し過ぎたせいで滅んだ文明の遺産を総じてそう呼ぶみたいだぜ。使い方によっちゃ世界を滅ぼすどころか次元を滅茶苦茶にしちまうほどの物まであるみたいだしな」
「ふぇぇぇ。そんな恐ろしい物なんですかぁ」

なのはは説明を聞いて改めてロスト・ギア・・・そしてジュエルシードの恐ろしさを知る
だが、その説明をしたのは何と甲児であった

「な、何で貴方が知ってるんですか？」
「なぁに、ちょっとばかし興味が注がれたんでねぇ、ちょいと調べただけさ」

クロノの問いに甲児はニッと笑いながら言った
そして、視線を元のリンディに戻すと、彼女は思いがけない行動に

出ていた

「げっ！緑茶にミルクと砂糖を入れてるのか？（汗」

そう、甲児達の目の前でリンディは緑茶にミルクと砂糖を入れていたのだ
そしてそれを飲む
はっきり言ってとても真似出来る行為では無いのだが・・・

「ん？甲児くん達はやらないのか？」
「て、鉄也さん！！！」

何と鉄也がリンディと同じく緑茶にミルクと砂糖を入れていた
そして何の疑いもなくそれを飲む
だが、余り美味しくなかったのか渋い顔をする
どうやら味覚は人それぞれなのだろう

「て、鉄也さん・・・何でそんな無謀な事をするの？」
「これがこの世界での礼儀じゃないのか？」

鉄也はリンディの行った事がその世界での常識と思ってたらしい
その為それに会わせようとしたようだが

「すみません・・・それ、艦長の趣味なんです」

クロノが非常に申し訳なさそうに言う
それを聞いて甲児達は思いきりズッコケル

「み・・・味覚異常にも程があるぞ！」

ずっこけたままの甲児がそう呟いた
その光景に一同が騒然としていた
その空気を正すようにリンディが軽く咳払いをする

「甲児君達はともかく、貴方はもう危険な行為をしなくても大丈夫よ」

「え？」

「これからは僕達時空管理局が全権を持つ、君は元の生活に戻ると良い」

クロノがなのはにそう言う
だが、なのはは返答に困ったのか視線を泳がせる
そんななのはに甲児は助け舟を出す

「なのはちゃんだっけか？お前はどうしたいんだ？」

「甲児さん」

「お前はあの子を・・・フェイトと話したいんだろう？」

甲児は会話で今まで共に戦って来たフェイトを出した
その名前を聞いてなのははハッとした
そうだ、自分はあの子、フェイトともっと話しをしたい
そう思った

「だとしたら、もう答えは決まってるだろう」

甲児はニッとした
それを見てなのははうんと頷き、リンディの方を見る

「お願いですリンディさん！私達もジュエルシードの捜索に協力させて下さい！」

「待ってくれ！君は只の民間人だ！それを危険な目に合わせる訳には・・・」
「俺達も民間人だぜ」
「そ、それは・・・」

クロノが言おうとしたのを甲児が遮る
それにクロノが返答に困る
リンディもどうした物かと困っている
すると

「良いじゃないのさ。本人がそう言ってるんだし、誘いに乗ってやりなよ」

甲児達の後ろから声がした
声色からして女性の声だと思えた
甲児達は何者だと振り返る
其処には青い半被を着た着物姿の女性が煙管を片手に壁にもたれかかっていた

「翼さん！」

その女性を見て竜馬が女性の名前を言う
甲児達は竜馬を見る

「リョウくん・・・もしかして女将さんって」
「ああ、この人だ」

竜馬は甲児達を見て言う

「こうしてあんたらと会うのは初めてだねぇ。あたしはくろがね屋

の女将をやってる「錦織翼」だ。宜しく頼むよ」

翼は甲児達に簡単に自己紹介する
そんな中、リンディが不満そうな顔で翼に言い寄る

「翼・・・これは時空管理局の問題なのよ！貴方が口出しする問題じゃ」

「はん！何言ってんだい！どうせあんたの胸中じゃ上手い事自分の口からやるって言わせようって魂胆だったんだろう？」

「か、艦長！」

翼の発言にクロノは驚愕の視線を送る

「で、どうするんだい？あんたとしては願ったり叶ったりだろう？」

「フゥ・・・適わないわねぇ貴方には・・・」

リンディはやれやれと言った顔でそう言う
そしてなのはたちを見る

「分かりました。貴方達の協力に感謝します。これからは私達と共に行動してもらいます」

「は、はい！」

協力を承諾してもらいなのはは嬉しそうな顔をした

「良かったな、高町」

「有難う、鉄也さん！」

「おいおい、俺は蚊帳の外か？（汗」

「あ、御免なさい甲児さん（汗」

つい条件反射で鉄也を見てしまい甲児に向かって思わず謝るなのは
それを見て竜馬達は苦笑いを浮かべる

「だが、その前に高町は両親に一度話しをつけておかないとな」

鉄也が言う
それにはなのはも同意した
確かにこれから管理局と共にジュエルシードを集める事になる
下手したら数日家を開ける事になりかねない
そうなると両親は心配するだろう
それを懸念しての鉄也の言葉であった
それにはリンディも同意する

「そうですね。一同ご家族と話しをした上で、また公園に来てくださ
い」
「はい！」
「明日には貴方達のことを皆に紹介します。遅れないで下さいね」
「分かりました」
「あいよ」

クロノの言葉になのはは頷き甲児達も返事をした
ふと、甲児はフェイト達の事を考えた

（あいつら・・・2人だけで大丈夫かなぁ）

少し2人が心配になる甲児であった

男の拳　前編（後書き）

いやぁお待たせして申し訳ない

甲児
「何でこんなに時間掛かったんだよ」

単にネタが浮ばなかっただけ

甲児
「おいおい（汗」

まぁ、あと諸事情があったんだけどね

甲児
「そんな読者が返答に困るようなことを平然と言ってるんじゃねえええええええ！」

ドバキイイイイイイイ

あれえええええええええええええええ！

男の拳　後編（前書き）

クロノと知り合い、そして時空管理局と協力体制になった甲児達だが、甲児の胸中には一抹の不安が残っていた

男の拳　後編

翌日、甲児達はアースラ内にある会議室で局員達の前に集められた
アースラの局員達に甲児達を紹介する為だ
まずリンディが立ち上がって各自の紹介に映る

「こちらに居るのが結界魔道士と現地で協力をしてくれた魔道士の・・・」
「は、始めまして・・・ユーノ・スクライアです」
「た・・・高町なのはと言います・・・よ、宜しくお願いします」

2人とも何処かぎこちない感じで自己紹介する
そんな2人に何処か初々しさを感じ一同がニッコリと笑い返す
どうやら好印象で見られたようだ
それに納得してリンディは次の方に移る

「そして、こちらの方々が私達に協力して下さる例のロストギア『マジンガー』と『ゲッター』を操る方々で・・・」
「兜甲児です。宜しく」
「剣鉄也だ」
「流竜馬です。どうぞ宜しく」
「フッ、神隼人だ」
「車弁慶って言うぜ！宜しくな」

甲児達は局員達に挨拶をした
局員達は甲児達を見てざわついた
無理も無いだろう
何せマジンガーやゲッターなどと言った超大型のロスト・ギアを扱うのが自分達と同じ・・・それもまだ２０代に入ったばかりの若い

青年達なのだから
そんな局員達を見つつもリンディは口を開く

「これからは彼等と協力してジュエルシードの回収に当たります」
「宜しく頼むぜ！」

甲児は局員達にニッと笑って言う
一同は甲児が親しみ易い人なんだなぁと言う印象が感じられた
甲児は局員達を一通り見た後すぐ隣に居たクロノを見る

「なぁクロノ」
「何ですか？」
「お前この中に恋人とか居ねぇのかよ？」
「な、何故そんな事を聞くんですか？（汗」

明らかに動揺した口調で聞くクロノに甲児はニヤリとする

「ほほぅ、その様子だと居るんだなぁ？誰なんだよぉ？」
「い、居ませんよ！そんな人は！」
「あらぁ？エイミィとは恋仲じゃなかったっけぇ？」
「か、艦長！！」

横から口を挟んだリンディにクロノは目を丸くする
そしてそれを聞いた甲児がニヤリとする

「へぇ～、そのエイミィって誰だぁ？」
「はいは～い！私で～す」

名前を呼ばれた少女「エイミィ・リミエッタ」が手を振りながら甲児にアピールしていた

茶色のショートカットでリンディと同じ制服を着ていた
クロノより少し年上らしく大人っぽさが感じられた
エイミィを見た甲児がクロノの後ろ首に腕を回す
そしてそっと耳打ちする

「よぉよぉ、クロノさんよぉ・・・一体彼女と何処までいったんだぁ？」

「何処までって・・・一体なんですか？」

あくまで白を切る（わざとじゃない）クロノの襟首を思い切り掴んで持ち上げる
先ほどユーノにやったのと同じである

「惚けんじゃねぇ！デートとかしたのか？手とか繋いだのか？一緒に飯食ったりとかしたのか？もしかして・・・「チュー」とかしたのか？どうなんだよぉ！お兄さんに洗いざらい全部吐きやがれええええええええええええええええええええ！」

「イダダダだダダダアアアアアアア！は、離して下さいイイイイイイイ！締まってる！締まってるからアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

目を血走らせて甲児はクロノに良い寄る
そんな甲児とは対照的にクロノは顔を青ざめさせながらも必死に意識を保つ
そんなクロノに追い討ちを掛けるようにエイミィが呟く

「え～、そんなのもう・・・「チュー」以上の事もやっちゃってるよぉ♪」

勿論『嘘』である

だが、それを聞いた甲児の中で何かが切れる音がした

「てめえええええええ

「あちゃあああああああああああああああああああああ！」

灰を落とされた頭を必死に叩く
落とされた箇所からモクモクと煙が立ち昇っていた
恐らく発火したのだろう
その拍子に甲児はクロノを落とす
やっと新鮮な空気を吸えるようになり思いっきり吸い込みその為にかなり咽返るクロノ
そんな少年に翼が歩み寄る

「大丈夫かい？坊や」
「は、はい・・・助かりました」

涙目になってクロノは言う
相当苦しかったのだろう
それを見て翼はニヤリとする
そんなこんなな自己紹介がこの場で行われたのであった

＊＊＊

自己紹介を終えた甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶はアースラ内にある食堂に来ていた
幸いまだそんなに人が来てないのかガラガラである
これわ良い機会だと甲児達は集まり話をする

内容は今自分達が置かれている状況である

「すると甲児、お前はこの世界が過去だと言うのか？」

隼人が聞く
と言う隼人自身も薄々感づいてはいたのだ
幼いなのはにユーノ、それを見れば大体の見当はつく
だが、念の為に聞くのであった

「ああ、これは推測なんだが、恐らく此処は俺達の居た時代から約１０年位は昔だぜ」
「お、おいおい！そんな昔なのかよ！」

弁慶は目を丸くする
その問いに甲児は静かに頷く
付近に居たメンバーが重い顔をした
果たして元の時代に帰る方法はあるのだろうか
嫌、そもそも未来から来た自分達がこの世界の人間達に干渉して未来は平気なのだろうか？
そんな不安と疑問が脳裏を過ぎった

「実は・・・フェイトとも会ったんだ」
「フェイト君と？」
「そう言えば甲児くんは最初フェイトと一緒だったな？何かあったのか？」

鉄也の目から見てもフェイトのジュエルシードに対する執着は異常である
何が何でも集めようとしているのだ
それも、我が身を犠牲にしてでもである

それに対し甲児が口を開く

「実は・・・あいつは自分の母親の為に集めようとしてるんだ」
「フェイト君の母親？・・・それって一体・・・」
「大方、そいつが黒幕なんだろうよ」

隼人がそう言ってニヤリとする
だが、そんな隼人に甲児はかぶりを振る

「正確には違う」
「どういうこった？」
「フェイトのお袋さんには・・・あいつが・・・『獣魔将軍』が取り付いているんだ」
「な、何だと！」

それを聞いて鉄也が驚く
甲児はそれは当然の反応だと思った
ゲッターチームはその獣魔将軍とは会った事がないので何なのか首を傾げていた

「獣魔将軍と言えば、あの時俺達が倒した筈・・・それが何で！」

鉄也は思い出した
そう、それは甲児が始めてミケーネ七つの軍団と戦った時であった
当時Ｄｒ．ヘルとの戦いが終ったばかりでマジンガー自身も傷ついていた時に獣魔将軍率いる七つの軍団は襲い掛かってきたのだ
その力は圧倒的であり、傷ついていたとはいえ、鉄の城マジンガーＺを大破寸前まで追い詰めたのだ
そしてトドメの一撃にと獣魔将軍の放った斧がパイルダーを切り裂こうとした時、其処へ鉄也の操るグレートマジンガーが現れたのだ

グレートは圧倒的な力で七つの戦闘獣を壊滅させていき、遂には獣魔将軍1人となった

「お、おのれえええええええい！こうなればワシ自らが貴様を葬ってくれるわ！」

と言って獣魔将軍の足となっていた怪獣の口から猛烈な炎が噴出された

「グレェェトタイフゥゥゥン！」

だが、グレートはそれを自身の口から放った猛烈な風で跳ね返す
跳ね返された炎はそのまま銃魔将軍の体を焼き焦がした

「ぐわあああああああ！」
「マジンガーZ、後は任せたぜ」

落下してくる獣魔将軍の下には剣を突き立てたマジンガーZが立っていた
そして獣魔将軍の腹にZの持っていたマジンガーブレードが深く突き刺さる

「ぎゃあああああああああああああ！」

悲痛の叫びを上げて獣魔将軍は倒れる
その体からは紫色の血液が流れ出し未だに炎が燃え上がっていた

「トドメだ！ブレストバァァァン！」
「ブレストファイヤァァァ！」

トドメにダブルマジンガーの熱線を浴び銃魔将軍はこの世から姿を消したのであった

『おのれぃ！だがこの程度で我等七つの軍団はビクともせん！次は貴様と雌雄を決してくれるわ！』

暗黒大将軍がそうグレートに捨て台詞を吐いて消えた

「あの時、確かに俺と甲児くんで奴を倒した筈・・・それが何故？」

「あの野朗は・・地獄の其処から蘇ったんだ。そして大魔道士であったフェイトの母、「プレシア・テスタロッサ」に取り付いて元の世界を次元崩壊させて更にミケーネに帰る為にジュエルシードを集めているんだ」

「畜生！何て胸糞悪い野朗だ！」

弁慶が怒りを露にした顔でそう呟いた

それは周りに居る皆も同じであった

絶対に獣魔将軍の思い道理になどさせる訳にはいかない

何としても阻止して、フェイトの家族を救い出さなければ

皆の胸にはそんな思いが込められていた

「皆集まって何話してるの？」

其処へなのはとユーノ、そして翼がやってきていた

「あ、ああ・・・ちょっと世間話をな」

甲児が作り笑いで言う

その笑顔のせいか世間話が嘘だと言うのがバレバレであった

「ひょっとして・・・フェイトちゃんの事を話してたんですか？」
「・・・まぁな」

甲児はバツの悪い顔をして頭をボリボリと掻いた
そして口をへの字に曲げてどう説明したら良いかと言いたげな顔をする
やがて考えが纏まったのか軽く溜息をついて口を開く

「あいつ・・・何でも1人で背負い込もうとする奴でよぉ、側で見てやらねぇと無茶ばっかやるんだよ」
「まるで甲児くんだな」

横で鉄也が囁く
それを聞いて甲児が不満そうな顔をする

「ひでぇなぁ鉄也さんは、それに無茶は本来俺の専売特許なの！アイツがやるべき事じゃねぇよ！」

そう言って不貞腐れる

「甲児さん・・・」
「どした？」

なのはが口を開き話しかけたので甲児はなのはの方を見た

「私もね・・・小さい頃は1人だったんだ」
「・・・・・」

甲児達は先ほどのような馬鹿騒ぎをせず黙って聞いていた
なのはの話しによると、なのはの父士郎が仕事の最中に瀕死の重傷

を負ってしまい、母がその看病で付きっ切りになり、兄と姉は店の切り盛りで終始店に居た為なのはは結果的に1人で家に居る事が多くなってしまったと言うのだ
それを聞いて、甲児はふと鉄也の方を見た
鉄也は真剣な顔で話しを聞いていた
恐らく彼女の気持ちが分かるのだろう
鉄也も幼い頃は孤独であった
両親も家族も居らず、孤児として孤独な少年時代を送っていた
だが、そんな鉄也に父剣造は家族の温かさを教えてくれた
だからこそ今目の前に鉄也は居るのだ

（孤独・・・かぁ・・・考えて見りゃ、俺にはシローやお爺ちゃんが居たから孤独じゃなかったなぁ）

甲児はふと黙って考え込んでしまった

「甲児さん・・・鉄也さん・・・」

其処へなのはが話しかける

「ん？」
「何だ？」

2人はなのはの方を向く

「えっとね・・・一人ぼっちの子にしてあげるのは・・・『大丈夫？』って優しく言う事でも、心配してあげる事でもないと思うんだ」
「・・・・・」

2人は黙ってなのはの話しを聞く

「同じ気持ちを分け合う事・・・悲しい気持ちも寂しい気持ちも色んな気持ちを半分に分け合える事だと思うんです」
「ああ、そうかもな」
「そうだな・・・きっと、そうだろうよ」

なのはの出した答えに2人はそう言う
ゲッターチームも黙って話しを聞いていた
その横で、翼はフッと微笑んでいた

（ずっと一人ぼっち?そんな訳無いだろう・・・お前の事は、ずっとあたし等が影から見守っていたさ）

と言って翼は後ろを振り返った
其処には何処かで見たような5人組が座っていた

＊＊＊

森林地帯
なのは達魔道士と甲児達は管理局が見つけたジュエルシードの場所に来ていた
其処では巨大な不死鳥を模した怪物が居た

「バインド!」

ユーノが放つバインドで動きを封じられもがくように暴れる怪鳥

「この野朗！大人しくしやがれ！」

余りにも暴れるので甲児のマジンガーが後ろから押さえつける
それでも怪鳥は暴れ続けた

「ちっ！元気な鳥だぜ！焼き鳥にしたらさぞ美味いんじゃねぇの？」
「こ、甲児さん！そんな事出来ませんよ！」

甲児の冗談を真に受けたのかユーノが青ざめる
甲児は「冗談だよ」と笑いながら言った後、両手で怪鳥を持ち上げる

「そんなに元気なら好きなだけ暴れさせてやるぜ！但し・・・俺達が相手だけどなぁ！」

そう言って空中に放り投げる
其処にはブレードとトマホークを持って待ち構えていたグレートとゲッターが居た

「行くぞ！リョウくん」
「任せてくれ！鉄也くん！」

双方頷きあって交差するように怪鳥を切りつける
怪鳥は悲鳴にも似た叫びを上げると体から猛烈な炎を噴出して2体を吹き飛ばす

「何！」
「うおっ！」

余りの熱さに距離を開ける

その隙を突き怪鳥は逃げようとする

「リョウ！あのままじゃ逃げられる！此処は俺に任せろ！」

「頼むぞ！隼人」

そう言ってゲッターは3機のマシンに分離した
そして今度は青いライガー号を戦闘に合体する
細身のボディに片手が巨大な丸いアームになった地上戦用のゲッターライガーである

「お前に0．1秒の世界を見せてやるぜ！マッハスペシャル！」

ライガーの体が突如何体にも増えた
高速で移動する余りその残像が映るのだ
怪鳥は自分の周りを飛行する無数のライガーに戸惑う
その為一瞬回避のタイミングが遅れた
その隙を逃す隼人・・・そしてゲッターライガーではない
瞬時に懐に飛び込み腕を手からドリルに変形させて怪鳥に突き立てる

「コンマ2秒遅いぜ！」

捨て台詞と共に怪鳥のどてっ腹には巨大な風穴が開けられた
ゲッターライガーのドリルアームが深く突き刺さったのだ
怪鳥は断末魔の悲鳴を上げて口から赤い液体を放出した
そして数回痙攣しだす

「今だぜ！なのはちゃん！」

はやとは後方に待機していたなのはに視線を送る
なのはは既にジュエルシード封印に映る準備を終えていた

「ジュエルシード！封印！！」

レイジング・ハートを掲げてなのはが言う
すると怪鳥の姿は消え、元の青い石の姿に戻った
それをレイジング・ハートで回収する
これで此処一体の戦闘は終了したのだ

『お疲れ様！いやぁ流石だねぇ、私マジンガーとゲッターの戦いって始めて見たけど凄いわ！』

通信を送るエイミィが未だに興奮しっぱなしであった
その興奮の息吹がこちらまで聞こえてきたせいか甲児達は何処かくすぐったい気持ちになった
それを紛らわすかの様に甲児は鼻を擦る

「へん！俺とマジンガーZが居れば怖いもの無しだぜぇ！」
「ほぉう、ならさやかさんも平気なのか？」
「いぃ！そ、それは勘弁して下さい・・・」

鉄也の一言を聞いて甲児が青ざめる
やはりマジンガーに乗ったとしてもさやかは怖いらしい
そんな甲児達を見てなのはは口を抑えて笑っていた

＊＊＊

所変わって別の場所では、アルフとフェイトが既にジュエルシードの回収を終えた場所に来ていた
其処では、激しい戦闘が行われた形跡があり、それを見てフェイトはマジンガーが居た事を察知する

「やっぱり駄目だよフェイト。管理局から隠れながらジュエルシードを探すなんて無理なんだよ」

アルフは弱気になってそういう
それを聞いてフェイトも何処か暗い顔をする
そんなフェイトを見てアルフは更に暗い顔になる
本当なら此処で管理局の元へ行こうと言いたいところであった
しかし、そんなことをすればフェイトの母の命が危ないのだ
かと言って、このままではフェイトは無駄に魔力を消耗してしまう
そうなれば命の危険すら危ぶまれるのだ
恐らく、それが獣魔将軍の狙いなのだろうとアルフは思えた

（畜生・・・このままフェイトを見殺しになんて出来ないよ・・・どうすりゃ良いのさ）

アルフは1人心の中で愚痴っていた

＊＊＊

ジュエルシードの回収を終えた甲児となのは達は翼に召集を掛けられ再び食堂に集められた

食堂に駆けつけると、其処には翼の他に異様な井出達をした5人が居た
その中の1人をなのはが見つけて

「クロスさん！」

と、名前を呼んだ
名前を呼ばれたクロスは即座になのはの方を振り向く

「よぉ、また会ったなオ穣ちゃん」

クロスはニンマリして手を振る
十字の傷をつけた強面なのにも関わらず何処か親しみのある顔に見えた

「おんやぁ、クロスの旦那はもうなのはちゃんとはお知り合いだったんすかぁ？」
「そいつぁずりぃやぁ・・・あっしらにも紹介してくだせぇよぉぉ」
「・・・（コクリ」
「久しぶりだねぇなのはちゃん・・・ワシの事覚えちょるかぇ？」
「ええっと・・・ひょっとして・・・お菊姉さん？」

なのはが首を傾げながらそう言う
それを聞いてお菊と呼ばれた老婆は嬉しそうな顔をする

「ほぉ・・・おしめの頃にしか会ってないお菊姉さんを良く覚えてたねぇ」

まさかお菊姉さんの名前が出るとは思っておらず翼も驚きの顔を浮

かべる

「えっと・・・何となく憶えてただけなんです・・・どんな事してたかまでは憶えてなくて・・・」
「ホホホ、良いって事さね・・・それにしても本当に桃子ちゃんに似てて可愛いねぇ」
「ちげぇねぇや。こりゃきっと１０年後には偉い別嬪さんになってますぜぇこりゃぁ」
「そいつぁぁ良いやぁぁ。早く１０年経たねぇぇかねぇぇ」

茶色のサングラスを掛けた終始ニヤケ面の男が予測し、隣に居たメキシカン風の格好をした細身の男が喜びの声を上げた

「だ、誰だ？こいつら？」

甲児達はこの異様なメンバーを見て目を点にする

「紹介するよ。うちで働いてもらってる従業員の『安』、番頭の『クロス』、板前の『先生』、客の送迎をしてもらってる『ジャンゴ』、そして『お菊姉さん』さ」
「宜しく頼みます」
「いよ！頼むぜぃ」
「あっしらも手伝いやすぜぇぇ」
「・・・（コクリ」
「けんど力仕事は勘弁してくれよぉ・・・最近腰が痛くてねぇ」

５人がそう互いに自己紹介を済ます
それを甲児達が苦笑いを浮べながら見る
すると、突如艦内に警報が鳴り響いた

「何だ！」
「何かあったんじゃいのかぃ？」
「急いでブリッジに行こう！」

竜馬の言葉に従い一行はブリッジに向かう

ブリッジに着いた甲児達が見たのは、画面一杯に映る６つの巨大な竜巻の映像であり、その中心を飛び回るフェイトの映像であった

「な、何やってんだ！アイツは」

甲児は映像を見て驚愕の声を上げる

「一度に六つのジュエルシードを起動させたんです」
「な！」

クロノが返答し、それを聞いて甲児が驚きの声を上げる
無茶だ！幾ら何でもフェイト１人で六つのジュエルシードを封印なんて出来る筈が無い
只でさえ最近無茶ばかりして魔力が消耗しているのにこんな無茶な事をすればそれこそ命の危険に伴うのだ

「無謀です・・・あのままじゃ間違いなく・・・『自滅』します」
「そんな！」

なのはが驚愕の顔に染まる

「私、現場に行きます！」
「その必要は無い！放っておけば、あの子は自滅する・・・その後でジュエルシードを回収すれば良い」

「え！」
「何だと！」

余りにも非人道的な言葉になのはのみならず甲児達もクロノを睨むだが、クロノは引き下がらない

「わざわざこちらの力を消費する必要は無い・・・向こうが弱った所を纏めて確保すれば良い・・・すぐに捕獲の準備を！」
「了解」

クロノの指示を受けてオペレーターが準備を進める

「なのはさん・・・私達は常に最善の選択をしなきゃいけないの・・・残酷かもしれないけど・・・これが現実よ」

リンディが険しい口調でそう言った
モニターの向こうではフェイトが1人で必死になってジュエルシードと戦っていた
今にも倒れそうな程消耗していた

「てめぇ！」

甲児はクロノに掴みかかろうと手を伸ばすだが、すぐに止めた
何故か・・・それは、クロノのある箇所を見たからだ
それは・・・彼の両手であった

「クロノ・・・お前・・・」

クロノの両の手は強く握られていた

それも、血が滲み出る程に
現に今もクロノの手から数滴の赤い雫が滴り落ちているのだ
前にも言ったが、クロノは決して木の股から生まれた訳ではない
列記とした人の子なのだ
本当なら今すぐにでも飛んで行って助けに行きたい
そんな気持ちなのだろう
だが、彼は管理局の執務官である
勝手な行動はチームを危険に晒す事になる
止むを得ない行動なのだ
だが・・・どうしてもやり切れない思いが彼の胸に突き刺さって離れない
そんな葛藤が今のクロノの両手から流れる血なのだ

（こいつ・・・相変わらず不器用な奴だなぁ）

フゥと溜息を吐き甲児はクロノの横に立つ

「なぁクロノ」
「何ですか？」
「お前・・・もう少し自分に正直になれよ」
「！！！」

甲児に言われてクロノは一瞬驚きの顔を浮かべる
だが、すぐに元の平静な顔に戻る
そして甲児を睨む

「何を言っているんですか？僕は何時も正直です！」
「じゃぁその手は何だ？」
「こ・・・これは・・・」

クロノは咄嗟に自分の手を見た
自分の手は強く握ったせいで血で赤く染まっていた
それが自分に嘘をついた証拠となったのだ

「で・・・ですが！僕は管理局の執務官として当然の『違うだろ！』
え？」

クロノの言葉を遮って甲児が言う
そして肩膝を突いてクロノと目線を会わせる
真剣な目である

「お前は管理局の執務官か？・・・それともお抱えの魔道士か？・・
・違うだろ！お前は・・・・・お前は『男』だろ！」
「え・・・・・」
「良いか！もしこのままあの子を見殺しにしたら・・・お前は間違
いなく一生後悔するぞ！男ならそんな生き方するんじゃねぇ！自分
に正直に生きてみろ！」

甲児がクロノの両肩を掴んで叫ぶ
その言葉はクロノの心に深く突き刺さる言葉であった
そうだ！本当は彼女を・・・今モニターの向こうで戦ってる彼女を
助けたい
それが本当の自分の答え・・・ならば、どうすれば良い・・・どう
したら良い
クロノは少し俯いて暫し黙り込んだ

「確かに・・・僕は時空管理局執務官です・・・・」

クロノは静かに呟く
その言葉に甲児達は険しい顔をする

「ですが・・・それ以上に、僕は『男』だ！」

拳を握ってクロノは高らかに言った
その顔には最早一辺の迷いなど無かった
その言葉にリンディはおろかその場に居合わせた局員達も驚く

「く、クロノ・・・」
「艦長！たった今から一時僕は管理局執務官の地位を放棄します！
そして、今僕は・・・1人の魔道士『クロノ・ハラオウン』として、
現地に赴き、フェイト・テスタロッサの救助並びにジュエルシード
回収の任に尽きます！」
「クロノ！」
「クロノ君！」

クロノのその宣言にその場に居た局員達は驚き、なのは達は感激の
声を上げた
そして甲児は

「良く言ったぜ！クロノ！」

と言って思い切りクロノの背中を叩いた
余りに痛かったのか数回咽る

「へへ、てっきりお前には玉がついてねぇかと思ったが、しっかり
ついてるじゃねぇか！」
「ぼ・・・僕にだって熱い血は流れているんです！それに・・・き
っと誰かに影響されたからこうなったんですよ！」
「か～、可愛くねぇガキ！」
「可愛くなくて結構です！」

生意気にもそう言い返す
そしてお互い睨みあう
だが、数秒にらみ合った後、何故かお互い大声で笑いあった

「クロノ・・・お前、自分の拳を見てみろよ」
「え？自分の拳ですか？」

鉄也に言われ、そのままクロノは自分の拳を見た
以前はとても軽く見えた拳が・・・今、クロノにはとても大きく・・・そして『重く』見えた

「立派な男の拳になったじゃねぇか」
「そ、そうですか？」
「フッ、まだ青いが立派な男の拳だぜ」
「おう！後は経験を積みゃ立派な男になるぜ」
「頑張れよ、クロノ君」

鉄也に続き、隼人、弁慶、竜馬がそう言う
その言葉を胸にクロノは己の拳を強く握る
答えは出た！
後は実行に移すのみ！

「行きましょう！皆」
「「「おう！」」」
「うん！」

クロノの言葉になのは達は頷く
そして一斉にポータルに向かおうとした時

「クロノ」

ふと、リンディが呼び止めた
クロノは振り返る
すると其処には

「気をつけてね～」

と、ハンカチを振りながら言うリンディの姿があった
その姿に半ばあきれながらも

「い・・・行って来ます！」

と、高らかに宣言した
そして、一同の姿はポータルの中から瞬時に消え去った
その姿を見届けた後、リンディはフゥと溜息を吐く

「良かったんですか？行かせちゃって」

エイミィが呆れたように言う

「しょうがないでしょ・・・あの子見た目通りかなりの頑固者なんだから」

頬に手を当ててやれやれと言った感じに言う
そして、ふとリンディの脳裏にある人物の姿が思い描かれる

（本当・・・誰に似たのかしらねぇ・・・あの子）

その姿を思い描いた時、思わずリンディはクスリと微笑んだ

男の拳　終

次回予告

おっしゃぁ！さっさとフェイトを助けに行くぜぇ！
って言う感じに飛び出してみたら、何じゃありゃぁ！竜巻じゃなくて巨大な化け物になってるじゃねぇか！
ヘッ、まぁ良いや！竜巻だろうが化け物だろうが！全部纏めて相手してやるぜぇ！

次回『決戦、大海獣！！』

次回もこの小説に
テイィィィィィクオォォォォォォォフ

男の拳　後編（後書き）

どうでしたか？
今回ＫＹのクロノ君を自分なりに男に仕上げました
カッコよかったらかなぁ？
感想待ってまぁす！

決戦！大海獣！！　前編（前書き）

フェイトに迫る巨大な怪物
フェイト大ピンチ！！！

決戦！大海獣！！　前編

半ば独断でブリッジを飛び出してきた甲児達は共に戦うと決めたクロノと共にマジンガーの置かれている格納庫に来ていた
と、言うのも今回の戦いの舞台は海の上であり、生身で飛行出来るクロノやなのははともかく甲児達はマジンガーに乗らなければ話にならなかったのだ
と言う訳で甲児達はマジンガーの収められている格納庫に来る
すると其処には、まだ敷島博士がマジンガーを舐めるように眺めていた

「まだ居たのかよあの爺さんは（汗」

甲児はあえて小声にせずそのままの声で呟いた
それを本人に聞かれたとしても大して気にしないと思っていたからだ
だが、世の中には「地獄耳」と言う言葉が存在位なので油断は出来ない
だが、そんなナレーターの忠告も空しく敷島博士には聞こえていたらしく甲児達の方を振り向く

「おぉ！おぬし等此処に来たと言う事は出撃かぁ？だったらワシが開発した新兵器「有機生物抹殺砲」を持っていくと良い！これは生き物であれば何でも抹殺する事が出来るぞぉ！」
「いやいい・・・それに相手はジュエルシードだから有機生物じゃないから意味無いし」

敷島博士の提案をやんわりと拒否する甲児
鉄也達も流石にそんな物は金輪際使えないなぁと思っていた

「何じゃ？お主らワシの作った作品を使わないで行くつもりなんか？」
「えっとね・・・お爺ちゃん・・・私達はこれから友達を助けに行きたいの・・・お願いだから通してくれない？」
「うっさいわガキ！脳みそ弄繰り回されたくなかったら引っ込んどれぃ！」
「ヒィィッ！」

敷島博士に脅されて物凄く怯えるなのは
如何に未来の白い魔王と言えども敷島博士の異様な井出達と一風変わった脅し文句にはタジタジである
そしてそれは付近に居たユーノとクロノも同様であった
だが、甲児達はどうした物かと困った顔をしていた

「あのぉ敷島博士・・・博士の作品は何時か使わせて頂きますので・・・今回はどうか・・・」

竜馬は説得しようと必死に交渉する
甲児達はその後ろで竜馬が説得に成功するのを祈るしか出来なかった
下手に干渉すると本当に頭を弄くられてしまいそうだからだ

「若しくは体中を改造されちまうかもな」
「ふ・・・不吉な事を言わないで下さい（汗」

そんな話をしていたと同時に、竜馬の説得に応じた敷島博士が残念そうな顔をする

「仕方ないのぉ・・・ま、今回だけは多目に見てやるわぃ・・・そんかわし！次にはちゃんと使うんじゃぞぉ！でないと・・・お前等全員脳みそ弄くってやるからなぁ！」

そう言って敷島博士は不気味な笑い声を上げて何処かへ去っていった
去り際までも不気味であった
そんな敷島博士をまるで妖怪でも見るような目で甲児達は見送った

「と・・・とりあえず・・・急ぎましょうか・・・」

敷島博士に出鼻を挫かれたが、そんな一同をクロノが先導して先を急がせる
敷島博士の介入の為にかなり時間を浪費されてしまったがとにかく先を急がねば
と言う訳で一同は出撃を急いだ

＊＊＊

甲児達が出撃を急いでいた時、ブリッジの映像ではとんでもない事が起こっていた
何と、外で戦っていたフェイトとアルフの目の前で竜巻を起こしていた6つのジュエルシードが突如1箇所に集まりだしたのだ
巨大な6つの竜巻はやがて一つになるとその竜巻は瞬く間に形を変えていった
紫の体色に8本の竜の頭を持つ腕、そして何より醜悪な体を持つ巨大な怪獣になったのだ

「な！あれは一体・・・」
「分かりません！とても大きい・・・」

エイミィが思わず呟く
それもその筈である
目の前に現れた怪物の大きさは、それこそアースラよりも一回り大きかったのだ

＊＊＊

フェイトとアルフの前には巨大な怪獣が姿を現していた

「う・・・嘘でしょ・・・何でジュエルシードがあんな怪物になるの？」
「分からない・・・とにかく早く封印しなきゃ」
「あんなデカブツをぉ！無理だよ！早く逃げなきゃヤバイよ！」

アルフの目から見ても目の前に現れた怪物は余りにも強大であった
今のフェイトでは例え万全の状態でも相手に出来る者では無かった
あれならまだ竜巻の方が可愛げがあった

「でも、あのままにしては置けないよ！もしあの怪物があのまま町に行ったら大変な事になっちゃう！」

フェイトはアルフにそう言うとバルディッシュに光の刃を展開させて向かっていく

「ふぇ、フェイトォ！」

そんなフェイトを後ろからアルフが追う
このままフェイトを見殺しには出来ない
だが、このまま戦って果たして勝てるのかどうか・・・はっきり言って勝てる見込みはゼロだ
そんな無謀な戦いをフェイトは挑んだのだ

「はあああああああああ！」

フェイトは叫びながらバルディッシュを振るう
振るった光の刃が一匹の竜の首を狙う
竜の首に光の刃が当たり竜の首を半分傷つけた
傷つけた箇所から紫色の血が噴出す

「やった！」

一匹とは言え怪物に致命傷を与えた事にフェイトは喜びの声を上げるだが、その喜びはすぐに恐怖に変わる事になった
斬られた筈の箇所は物の数秒で再生しまるで何も無かったかの様な状態に戻ってしまったのだ

「そ、そんな！」

フェイトの顔は驚愕の色に染まる
その際に僅かに隙が生じてしまったのか、別の方から襲ってきた竜の首に全く気づかなかった

「キャァッ！」

竜の首の一撃がフェイトを吹き飛ばす

幸い噛み付かれる事は無かったが凄まじい衝撃の為体制を立て直すのに時間が掛かってしまった
そんなフェイトに向かって先ほどの竜の首が口を開いて襲い掛かるぎらついた無数の牙が唾液を含ませて今にもフェイトを噛み千切ろうと迫ってきていた

「フェイトォ！」

そんなフェイトを助けようとアルフが向かう
だが、そんなアルフを阻むかのように別の竜の首がアルフの前に立ちはだかる
雄たけびを上げてギラついた牙を見せる
その牙にもまた薄汚い唾液がこびりついていた
竜の首達はアルフを狂ったような目で睨みつける

「くっ、どけぇ！」

アルフは竜の首に自分の拳を叩きつける
拳は竜の首の眉間に突き刺さり、一瞬よろける
だが、そんな竜の首などお構い無しに他の竜の首が迫り来る
その攻撃は凄まじく、アルフも捌くのが精一杯であった

「こ、このままじゃ・・・フェイト！」
「あぁ・・・」

フェイトは恐怖していた
まともに体制を立て直せない状態で目の前には巨大な竜の首が大口を開けて迫ってきていた
竜の口から何やら生臭いような嗅ぐのも嫌な匂いがした
自分もまたあの匂いを放つ原因になるのだろうか

そう思うと体が竦んでしまって思うように動けないでいた
咄嗟にバルディッシュを前に構えて防御の体制を取る
そんな物で首を防げる筈が無い
大きさからしてフェイトなど一飲みに出来る程あるのだから
竜の首が正にフェイトを飲み込もうとした刹那、突如竜の首が目の前で彼方から飛んできた黒い何かによって切断されてしまった

「え！」

フェイトは思わず目を見開いた
その間も黒い何かともう一つ赤い何かが飛んできており、それらは怪物の腕となっていた竜の首を次々に切断していた
二つの黒い物体と赤い物体
それが何なのか分からないでいたが、フェイトは良く目を凝らして見て、黒い何かが一つなんなんか分かった
それは巨大な刃を付けた腕であった

「あれは・・・まさか！」

フェイトはその腕の持ち主が誰なのか瞬時に分かった
フェイトを影ながら何時も守ってくれた大きくて、強い鉄の魔神・・・
・その名は

「無事か？フェイト！」
「こ、甲児さん！」

歓喜の声が自然と口から出てきた
振り向いた先には、甲児の乗ったマジンガーZ、そしてグレートマジンガーとゲッタードラゴンが居た

「どうやら間に合ったみたいだな」
「ギリギリだったけどな」

飛ばした腕を戻して甲児は呟く
同じようにもう一つの黒い何かと赤い何かが戻ってきた
もう一つの黒い物はゲッタードラゴンが投げた諸刃の斧「ダブルトマホーク」であり、赤い物はグレートの胸の放熱板を投げた「グレートブーメラン」であった
それらを戻して3体の巨人達は怪物の前に躍り出た

「それにしても、まさかあのジュエルシードが『ドラゴノザウルス』になるとはなぁ」

竜馬は目の前に居る怪物を見て呟いた
その怪物の正体はかつて元の世界で倒した筈の古代恐竜であり、石油や重油を大量に摂取する事により突然変異を起こした怪獣「ドラゴノザウルス」であった
ドラゴノザウルスの厄介な点はその異常なまでの再生能力であり、例え竜の首を切り落としてもそこからまた再生してしまう程なのだ
現に今も切断した首が再生してしまっていた
しかもその再生スピードが以前とは比べ物にならない程速い
恐らくジュエルシードの影響なのだろう
それだけでもかなり厄介な相手なのに、奴の体はとても柔軟であり、ミサイルの爆発でダメージを与える事は出来ないのだ
更にその大きさは甲児達の乗っていた次元航行船アースラよりも一回り位大きいのだ
厄介な上に更に厄介なのが重なったような敵でもあった

「確かに魔道士では厳しい相手だな」

鉄也がドラゴノザウルスを見て呟く
そんなフェイトの元になのは達が駆けつける

「フェイトちゃん！大丈夫？」
「甲児さん達のお陰で間に合ったみたいだね」
「無事で良かった」

なのはに続きユーノとクロノもやってきた
フェイトはクロノを見て少し驚く

「え？君は・・・・」
「心配ない！今回の出撃は僕の独断での事で管理局は関係無いよ。だから今の僕も管理局執務官ではなく1人の魔道士として来た。今の僕に君を逮捕する権限はないから安心して良い」
「え・・・えぇと・・・」

フェイトにはクロノの言っている意味がさっぱり分からず首を傾げる
そんなクロノを見てアルフが口を開く

「へぇ、あんた管理局の魔道士の割りには結構良い所あるんだね」
「こりゃもうお前をＫＹとは言えないな」

横で甲児も笑っていた
それを見てクロノが微妙な顔をする

「これ・・・喜んで良いのかなぁ？」
「フッ、そう言う時は喜んどけよ。別にお前を貶してる訳じゃねぇんだからよ」

隼人がニヤリとしながら言う

「無駄話は其処までだ、まずはあのドラゴノザウルスをどうにかしないとな」

そんな一同を竜馬の一言が現実に引き戻した
そして一斉にドラゴノザウルスを見る
突然の乱入者の出現により奴の機嫌はかなり斜めになったのか目の前で暴れまくっている
かなり激しい暴れっぷりだ
甲児達から見ても明らかに激しい暴れっぷりである
はっきり言って手がつけられない状態だ
7つの首が海を荒らし巨大な口が大空で咆哮する

「どうしよう・・・あんな大きな怪物・・・」
「恐らく外から攻撃しても余り効き目が無いのは事実だろう」

クロノが言う

「じゃぁどうするのさぁ！」
「決まってるだろうアルフ！古今東西ああ言うデカブツを倒す方法は決まってるぜぇ」
「え？どうするんですか？」

ユーノの問いに鉄也が答える

「奴の腹の中に入って直接急所を叩く」
「で、でもどうやって中に入るんですか？」
「奴の腹を突き破って中に入るか・・・二つの穴から入るかのどちらかだな」

隼人が言う

「で、でもあんな大きい怪物なんですよ・・・何処にお腹があるか分からないんじゃないんですか？」

「そんなに悩む事は無いと思うぜ。なのはちゃん。生き物ってのは魚でも何でも背中には無い筈だからな」

「そうなんですか！」

弁慶の解説になのははは納得した

だが、其処にクロノが口を挟む

「だが、その方法は適切じゃないですね。あの再生能力です・・・突き破るには相当な魔力と時間が必要になる」

「だな・・・だとすると二つの穴から入る方法になるな」

隼人が言う

すると其処へ気になったのかフェイトが聞く

「あの・・・その「二つの穴」って何ですか？」

「「口の穴」か「尻(けつ)の穴」だよ」

「「えええええええええええええええええええええ！」」

甲児の一言になのはとフェイトは絶叫した

口は想像出来たが尻は予想出来なかった

正直あんな怪物の尻から入るなどは絶対に嫌である

それは化け物だからと言う理由では無く・・・とりあえず嫌なのだ

「えっと・・・口の穴から入るって事じゃ駄目ですか？」

「ならマジンガーに乗ってくれ！マジンガーなら奴の牙を食らったって大した痛手にはならないからな」

「分かりました」
なのはは頷く
「よし、そうと決まったらさっさと奴の腹の中にあるジュエルシードを封印しちまおうぜ！」
甲児が腕を鳴らして元気良く言うと、その隣でフェイトがクスリと笑った
「何だ？俺何か可笑しい事言ったか？」
「ううん・・・只、何だか甲児さんの声聞くの久しぶりだなぁって思ってね」
「そうか？」
甲児は首を傾げる
事実甲児がフェイトを分かれてから3日は経っていない位だしかしフェイトにとっては何週間も会っていない位の時間に感じられたようだ
その為こうして甲児と出会えたのはフェイトにはとても喜ばしい事であった
「お二人さんよぉ、のろけるのは構わないが今は目の前の奴を倒すのに集中しようぜ」
「えぇ？の、のろけるって・・・」
「おいおい、隼人よぉ・・・冗談にしても酷いぜぇ」
隼人の茶化す一言にフェイトは顔を赤く染めて甲児は苦笑いを浮かべる

「悪かったよ・・・それよりさっさと始めようぜ・・・奴さんもお待ちだしな」

隼人は親指でドラゴノザウルスを指差す
どうやらあちらもこちらを発見したようでこちらに狙いを定めていた

「よし！各自マジンガーとゲッターに乗り込んでくれ！奴の目を攻撃して口が開いた瞬間に中に入る！アルフとユーノは俺達が入った直後にバインドで奴の動きを封じてくれ」

鉄也の言葉に2人は頷く

「よし、行くぞ！」

鉄也の声を筆頭に一同がドラゴノザウルスに向かっていく
ドラゴノザウルスも向かってくるマジンガー達に気づき威嚇の動作を行う
巨大な口をガパァと開き無数の竜の首も一斉にこちらに向かって口を開く

「野朗！今から俺達病原菌がてめぇの腹ん中で暴れてやるからな！」
「こ、甲児さん！病原菌なんて私嫌だよぉ！」

パイルダーに乗っていたフェイトが甲児の呟いた言葉に抗議する
顔色からして凄く嫌そうな顔であった
それを見て甲児は指で顔をなぞりながら笑う

「んじゃ寄生虫の方が良いか？」
「もっと嫌あああああああああ！」

よりにもよってそんな風に言うかと言いたげな顔で叫んだ
そんなに嫌だったか?そう甲児は思えた
とまあ冗談はさておき甲児は操縦桿を握り締めて目の前に映るドラゴノザウルスを睨む

「その目ん玉にぶちこんでやるぜぇ!」

と言って甲児は操縦桿を操作する
それに答えてマジンガーの肘が開き、其処から先端がドリルになった小型ミサイルの「ドリルミサイル」が放たれ、その全てがドラゴノザウルスの目に当たる
如何に柔軟な体をしているドラゴノザウルスと言えども先端がドリル状になったミサイルを目に食らったら溜まった物では無く痛みの余りに悲痛の叫びを上げて口を大きく開く

「今だ!突っ込め!」

鉄也の合図を起にマジンガーとゲッターは一斉にドラゴノザウルスの口の中に消えていった
3機全て飲み込んだ後ドラゴノザウルスは口を閉じる
突然入り込んだ異物に驚き一瞬動きを止める
ユーノとアルフはその隙を見逃さず手から鎖状のバインドを放ちドラゴノザウルスの動きを封じる

『ギャオオオオオオオオオオオン』

バインドで動きを封じられたドラゴノザウルスが引き千切ろうともがき続ける
ユーノとアルフは必死に歯を食いしばりながらバインドを続ける

「くっ・・・な、何て力だ・・・腕が千切れそうだよ・・・」
「泣き言言ってないでバインドしな！フェイト達が消化されたらあんたのせいだからね！」

アルフがユーノを噛み付くような目で睨みながら言う
それを見てユーノは身震いした
勿論アルフの噛み付くような視線もそうなのだが、何よりもし自分のせいでなのはや鉄也達がとんでもない目に合う事など考えたくないそう思うと自然と腕に力が入ってきた

（なのは！気をつけてね）

ふと、ユーノは心の中でなのはの無事を祈った

＊＊＊

「こいつは・・・」

ドラゴノザウルスの内部に入った甲児達の目に飛び込んできた物は以外な光景であった
その光景とは何も無いだだっ広い空間であった
その上この空間の中は不思議な事に重力が全く感じられなかった
まるで無重力空間のようである

「おかしい・・・」
「どうしたんだ？鉄也さん」

「こいつの腹の中はこんな風じゃない！それに無重力何て有り得ないぞ」
（そうか、以前鉄也さんはこいつの腹の中に入った事があったっけ）

甲児はふと思い出した
それはドラゴノザウルスにボスがボロットごと飲み込まれた時であった
ボスを救出する為に自らドラゴノザウルスの腹の中に入った事があったのだ
その後聞かせて貰ったが、その中は大量の重油で満たされており、生身の人間がそれに入ったら数秒と保たずに骨ごと溶かされてしまうのだ
しかし、今の中には何も無いのだ
それどころかまるでこの空間は異空間を思わせたのだ

「まるで異次元ですね」

ゲッターから出てきたクロノが呟く
その顔は何処か青ざめていた
恐らくゲッターのスピードでかなり酔ったようだ

「大丈夫？クロノ君」
「だ・・・大丈夫だと思う・・・」

なのはの問いにフラフラになりながら答える
そんなクロノを見て隼人がフッと笑う

「お前さん中々丈夫だなぁ。普通の奴なら今頃内臓が潰れてグチャグチャになってる所だったぜ」
「そ、そうなんですか？（汗」

そう聞いて思わず青ざめるクロノ
半分冗談だと思いたかった
だが、隼人に続いて竜馬や弁慶も同様な顔をする事から冗談では無いのだろうと判断出来た

「皆！あれを見て！」

そんな時、フェイトがある方を指差す
其処にはドラゴノザウルスを作り出した６つのジュエルシードが浮んでいた
６つとも全て怪しい光を放っている

「やりぃ！早速お目当ての物を見つけられたな！」

甲児は指を鳴らして喜んだ
だが、すぐに顔を険しくした
明らかに様子がおかしいのだ
そう、まるでかつて次元崩壊を起こしそうになった時のような光を放っているのだ

「ね・・・ねぇ・・・あれって・・・ひょっとしてやばくないかなぁ？」
「冗談じゃねぇぞ！こんな所で次元崩壊なんか起こったら洒落になんねぇぞ！」

甲児の言う通りであった
たった一つでも４人がかりでやっと封印出来たのに、それが今度は６つ一辺に次元崩壊を起こそうとしているのだ
そうなったらこっちは一溜まりもない

そう思えた
だが、そんな一同を他所にジュエルシードが今まで見た事の無い反応を見せた
何と6つのジュエルシードが一箇所に集まり出したのだ
そして6つ全てが一つに重なり出した時、元の小さな石であったジュエルシードが突如姿を変えた
赤い色を基調とした巨体
背中に生えた大きな翼
腰に生えた二本の巨大な鎌
手足に生えた鋭利で巨大な爪
そして醜悪な顔
その怪物を見た途端甲児、鉄也、ゲッターチームは度肝を抜かれた

「まさか・・・今度はお前かよ」

と、甲児は呟いた
そう、彼らの前に現れたのは紛れも無く「ギルギルガン」であったのだ

決戦！大海獣！！　前編（後書き）

後半に続く

決戦！大海獣！！　後編（前書き）

ドラゴノザウルスの腹の中で遭遇したのはあのギルギルガンであった
マジンガー軍団と魔道士達対ギルギルガン
決戦のゴングは鳴り響いた！

決戦！大海獣！！　後編

甲児達の目の前にはかつて倒した筈の宇宙怪獣ギルギルガンが立ち
はだかっていた
奴はこちらを憎憎しげに見つめている
恐らく憶えているのだろう
かつて自分がマジンガーとゲッターに倒された事を
そしてその深い憎しみが今こうして形をなしているのだろう
少なくともギルギルガンを知っている者達はそう思えた

「けっ、勝手に人ん家に上がり込んで散々暴れた癖に恨みを抱くたぁふてぇ野朗だぜ！」

甲児が愚痴を零す
確かに甲児の言う通りでもあった
ギルギルガンはかつて凶悪宇宙人が地球を侵略する為に送り込んで来た宇宙怪獣なのだ
ギルギルガンにはこれの他に2形態が存在し、その最終形態が今目の前に居るギルギルガンなのだ
そのパワーは凄まじく、グレーとマジンガーとゲッターロボの2体が揃っても正直勝てた事が不思議な程であったのだから
しかも、今目の前に居るギルギルガンは6つのジュエルシードの影響により更にパワーアップを果たしている筈だ
そう予想出来た

「鉄也さん！奴の弱点とか知ってるか？」
「ああ、奴の腰に刺さってる鎌を使わせるんだ！そうすれば内部が露見する。その中から侵入すれば中は脆い、それに奴の中にはジュエルシードがある筈だ、そいつを封印すればこいつらを倒すのも容

易になる筈だ」
鉄也の言葉を聞いて皆が納得する
「そうと決まれば善は急げですね」
クロノの一言に皆が頷く
まず動き出したのはマジンガーZとグレートマジンガーであった
2体の魔神がギルギルガンの両端に立つ
「これでも食らえ！」
甲児がそう言ってマジンガーの腕を飛ばす
飛ばした腕はそのまま真っ直ぐギルギルガンに向かって放たれた
それをギルギルガンは片手で払いのける
そして払いのけた腕をマジンガーに向ける
すると向けた指先から黄色いレーザー砲が放たれた
「おわっ！」
咄嗟にそれをかわす
こいつ、此処が自分の腹の中だと言う自覚があるのか？
そう思えた、確かに此処はジュエルシードが作り上げたドラゴノザウルスの腹の中なのだ
そんな中で下手に武器を使えばそれこそ自分を傷つける事になるにも関わらずギルギルガンはそんな事をお構いなしに撃ってきたのだ
其処までして俺達を倒したいのかよ
心の中で甲児はそう呟いた
ギルギルガンは初弾をかわされた事に怒り今度は両腕を翳してレーザーを放とうとする

「俺を忘れて貰っちゃ困るぜ！」

その時、ギルギルガンの背後にグレートマジンガーが現れた
手には2本のマジンガーブレードが握られている
その2本のブレードをギルギルガンの目に深く突き刺す
悲鳴にも似た声を上げながらギルギルガンは苦しんだ
やがて簡単には抜けない程に剣を突き刺すとグレートはその場から離れた
一度に視界を奪われた事によりギルギルガンは暴走気味に暴れまくった
両手から激しくレーザーを放つも、狙いは滅茶苦茶な為余程の事でなければ当たる筈も無い攻撃であった

「今度は俺だ！」

両手にトマホークを持ったゲッタードラゴンは躍り出た
そしてそのトマホークをブーメラン宜しく投げたのだ
放物線を描いて投げられたトマホークはギルギルガンの１０本の指を切断していく
これで奴のレーザー攻撃は封じられた
指を切断したトマホークがそのまま放物線を描いてゲッターの手に戻っていく
指を切断したトマホークが光の反射を受けて輝く
一度に視界と武器を奪われたギルギルガンは両手で腰に刺さっていた鎌を抜き取る
ブチブチと嫌な音を立てて鎌が手に移る
そしてそれをゲッターの真似事のように投げつける
緑色の鎌が放物線を描いて向かってくる
だが、それはこちらにとっては願ったり叶ったりであった

「悪いが動きを封じさせて貰うよ！」

クロノはそう言って2本の鎌に青色のバインドを掛ける
2本の鎌はバインドの効果により空中で動きを止める
その隙にダブルマジンガーの放つ豪腕が鎌を粉々に打ち砕く

「今だ！2人とも！」
「開いた穴から中に入るんだ！」

甲児と竜馬の叫びに応じてなのはとフェイトが突っ込んで行く

「援護はしてやる！お前等は気にせず中に突っ込め！」
「「はい！」」

2人は頷く
甲児達はなのはとフェイトが侵入し易くする為に遭えてギルギルガンの目の前に立ち攻撃を開始する

「これでも食らえ！」

マジンガーの両の目が輝き、閃光が放たれる

「手を貸すぜ、甲児君！」

グレートが右手を上げる
その腕目掛けて稲妻が降り立つ
そしてそれを思い切り放つ

「リョウ！ヘマすんなよな！」

「任せろ！ハヤト！」

隼人の愚痴に返答しながら竜馬は操作をする
ゲッタードラゴンの額のランプが光り輝き桜色の閃光が放たれる
それらは全てギルギルガンの刺さっていた目に命中する
凄まじい激痛がギルギルガンの目から全身に響き渡る
それに答えて断末魔の悲鳴が響き渡る

「行くよ！フェイトちゃん」
「うん！」

ギルギルガンが苦しんでいる隙に二人が鎌のあった穴から入り込む
内部は複雑な機械だらけであった

「えっと・・・凄い機械ばっかり・・・」
「どうしよう・・・これ？（汗」

突然目の前に現れた光景に二人は度肝を抜かれる
そんな2人に対し甲児と鉄也は言う

「なぁに気にすんなって、構うこたぁねぇから思いっきりぶっ放してやれ！」
「ジュエルシードの回収は任せたぞ！」
「は・・・はい！」

2人の言葉を聞いてそれぞれデバイスを構える
そしてデバイスから魔力砲が放たれる
桜色の魔力砲と黄色の魔力砲がそれぞれギルギルガンの肩から出てきた
ギルギルガンの顔が苦悶に歪む

「へっ、中々粋な事やってくれるじゃねぇかあのお二人さん」
「俺達も負けてられないな」

2人の魔力砲を見て隼人がニヤリと微笑み弁慶が腕を目の前で合わせて呟く

「よっしゃぁ！2人とも遠慮するこたぁねぇ！徹底的にそいつの腹ん中掻き回しまくっちまえ！」

甲児が叫ぶ

「フッ、正に寄生虫だな」

そんな時に隼人がボソリと呟く
確かに、ギルギルガンからして見れば今入り込んだなのはとフェイトははっきり言って寄生虫に他ならないのだ
だが、もし今の発言を2人が聞いたらさぞ怒るだろう
そう甲児は思った

＊＊＊

なのはとフェイトはそれぞれの箇所から侵入してあちこちを破壊し続けていた
辺りは精密な機械だらけでそれこそ目が回りそうな気がした
だが、そんな事を気にしてられない

一刻も早くジュエルシードを探し出さなければ
そう思いなのははデバイスを構えて砲撃を続ける
だが、破壊しても破壊しても機械は再生していく
急がないと八方塞となってしまう
そんな時、目の前に青く輝く鉱石を発見する
それこそ正しくジュエルシードであった

「見つけた！」

発見出来た事にホッとするなのは
だが、目の前には6つある内の3つしか無かった
残りの3つは一体何処にあるのか
そう思っていると、念話でフェイトがなのはに語りかけた

（なのは！聞こえる？）
（フェイトちゃん！）

なのははフェイトの声を聞いて、その声色から何処か明るさが見えた

（こっちでジュエルシード見つけたよ・・・でも、3つしか無いの・・・）
（本当？こっちでも3つ見つけたよ！）
（え？そうなの！それじゃ6つ見つけたんだね！）

お互いに全てのジュエルシードを見つけられた事に安堵する
後は封印するだけだ

（フェイトちゃん！同時に封印しよう！）
（そうだね、でないとすぐに再生されちゃうし）

そう言って互いにデバイスをジュエルシードに向けて構える
デバイスの先端から閃光が収束されていく

（せーの・・・で行くよ）
（うん！）

なのはの提案にフェイトが頷く
そして、なのはが「せーの」と言ってデバイスを向ける

「ディバイィィィィィィィィン！」
「サンダァァァァァァァァァ！」

2人がデバイスを構えて魔力を収束させる
そして収束された魔力が最大になった時・・・同時に放った

「バスタアアアアアアアアアアア！」
「レイジイイイイイイイイイイイ！」

レイジング・ハートから桜色の閃光が
バルディッシュから黄色の閃光が
それぞれジュエルシード目掛けて放たれる
その閃光はギルギルガンの中から貫かれて左肩から桜色の閃光が
右肩から黄色い閃光が飛び出す
それを見て甲児達はなのはとフェイトがジュエルシードの封印に成功したと確信した

「やった！やりやがったぜあの二人！」
「フッ、流石だな」

甲児は歓喜の声を上げて鉄也は当然だなと思った声を出していた

実際にもエネルギー源でもあるジュエルシードを抜き取られた為にギルギルガンは苦しみ出している
そして、体中のあちこちが徐々に崩壊しだしていた
そんなギルギルガンの肩口からなのはとフェイトが飛び出してくる
2人とも魔力を消耗し過ぎたのか少し疲れた顔をしていた
そんな2人を逃すまいとギルギルガンは2本の尻尾を振り上げて2人に襲い掛かる

「させるか！」
「んなろおおおお！」

其処へ甲児と鉄也が押さえつける
なのはとフェイトが疲れた表情でマジンガー達を見る
そんななのは達に甲児と鉄也は賞賛の言葉を送る

「流石だぜ！フェイト。やれば出来るじゃねぇか！」
「フッ、良く頑張ったな、なのは」
「甲児さん・・・・うん！私頑張ったよ！」
「ニャハハ・・・少し疲れちゃったけどね（汗」

フェイトは甲児に褒められた満面の笑みで答え、なのはは少し苦笑いで答えた

「2人とも、お疲れ様」

そんな2人を労うかのようにクロノが言い寄った

「クロノ君！」
「でも、喜ぶのは後だよ、まずはこいつを片付けないと」

そう言ってクロノは崩壊を始めながらも暴れまわっているギルギルガンを見ていた

「よっしゃぁ！なのは達が頑張ったんだから次は俺達の出番だ！行くぜぇ！」

「僕も行きます！」

甲児達とクロノが一斉にギルギルガンに襲い掛かる

ギルギルガンはやたら滅法に腕を振り回す

全ての武器を封じられ視界も奪われたギルギルガンには最早こうするしか方法が無かったのだ

だが、そんな攻撃に当たる甲児達では無い

「そんな攻撃に当たる兜甲児様じゃねぇや！」

と言ってマジンガーは先ほどフェイトが入った穴に近づく

同様にクロノも近づく

「俺達はこっちだ！」

グレートマジンガーは先ほどなのはが入った穴に近づく

「リョウ！此処は俺に任せろ！」

「頼むぞ、隼人！」

ゲッターチームはライガーにチェンジしてグレートと同じ穴に近づく

「腹ん中スカスカになっちまって寂しいだろう？これでも食らいやがれ！」

「こっちもおまけで付けるよ。遠慮せずに全弾持っていけ！」

マジンガーの腹から放たれた「ミサイルパンチ」とクロノが放った十数発「スティンガーレイ」が穴に吸い込まれるように入っていく

「こっちもこれをくれてやる！」
「フッ、せいぜい死ぬ前に腹いっぱいにしてやるよ」

こちら側ではグレートの「ネーブルミサイル」とライガーの「ライガーミサイル」が同じように入り込んでいく
そして暫しの沈黙の後、ギルギルガンの体中から激しい爆発が起こる
穴の開いた箇所から爆風が飛び出す
既にギルギルガンには戦うだけの力は残っておらずヨロヨロとこちらを睨んでいる

「よし、トドメは一斉砲撃だ！行くぜ、皆！」

甲児の一声に皆が頷く

「ようし！」

頷いたのを見て甲児達はギルギルガンのまん前に立つ
そして、一斉に各々の必殺武器を放つ

「ブレストファイヤァァァァ！」
「ブレストバァァァァァン！」
「ゲッタァァビィィィィム！」
「ブレイズキャノン！シュゥゥト！」

放った必殺武器は全てギルギルガンの胸部に集中する
そしてその一撃は胸部を貫き遥か後方にあった壁を破壊する

破壊された壁から外の風景が見える

「よし！あそこから脱出するぞ！」

竜馬が指示をし、それに頷き一斉に穴に向かう
その遥か後方でギルギルガンが大爆発を起こしたのは甲児達がドラゴノザウルスの腹から脱出して間も無くの事であった

＊＊＊

アルフとユーノはドラゴノザウルスの腹から出てきたなのは達を見て歓喜の声を上げる

「フェイト！フェイトだ！やったぁぁぁ！流石あたしのご主人様♪」
「なのは・・・良かった」

アルフは諸手を上げて喜び、ユーノはホッと安堵する
そんな2人に3体の魔神と3人の魔道士は近づく

「お待たせ、ユーノ君」
「ジュエルシード・・・回収出来たよ」

なのはとフェイトが誇らしげに言う
しかし、その後ろではドラゴノザウルスが未だに暴れ巻くっていた

「何、アイツ・・・ジュエルシードを封印したってのにまだ暴れてるよ・・・しつこい奴」

「だったら二度と暴れられないように引導を渡してやろうぜ！」
「そうだね、可愛そうだけどこれ以上見てられないし」
「やろう！僕達が出来るのはその位だからね」

クロノは少し悲しげに言った
その意味は皆も理解した
元々ドラゴノザウルスは海底の奥深くで静かに暮らしていた恐竜なのだ
だが、人間達が海を汚したのが原因で凶暴化し、町を破壊し続けたのだ
言ってしまえばドラゴノザウルスは被害者なのだ
だが、だからと言ってこのまま放っておく事も出来ない
もしこのまま町に上陸したら多くの人達が傷つく事になる
そんな事などさせる訳にはいかない！
ならば、此処で眠らせるしかないのだ
そう決心すると一同は一斉にドラゴノザウルスの腹の下に回りこむ
構造上ドラゴノザウルスの下部は比較的攻撃し易い場所になるのだ

「悪かったな・・・今度生まれ変わる時はもっとマシな奴になれよ・・・ブレストファイヤァァァ！」

甲児が片手で謝罪の意思を示すとスイッチを押す
それに呼応してマジンガーが仁王立ちして胸の放熱板から熱線を放つ

「許せ、せめて二度と蘇らないように眠らせてやる・・・サンダァァァブレェェェク！」

鉄也がそう呟き操作する、それに答えるようにグレートが片手を上げて落ちて来た稲妻を受け止めそれを放つ

「あばよ、ドラゴノザウルス・・・俺達もこれ以上海を汚さないよう努力するよ・・・ゲッタァァァビィィィィム！」

竜馬が胸にそう誓いを立ててハンドルを握る
ゲッタードラゴンの額のランプから強力なゲッタービーム砲が放たれる

「御免ね・・・もし人間に生まれ変われたら一緒に遊ぼうね・・・ディバイィィィンバスタァァァァ！」

なのはが目に涙を浮べながらそう言った
そしてレイジング・ハートの先端から桜色の閃光を放つ

「さようなら、ドラゴノザウルス・・・サンダァァァァァレイジィィィィィィ！」

フェイトが一言そう言う
そしてバルディッシュから黄色い閃光を放つ

「君は被害者かも知れない・・・けど、僕達にはこうするしか出来ないんだ・・・だから、せめて眠ってくれ・・・安らかに・・・ブレイズキャノン！シュゥゥゥゥト！」

クロノが自分に言い聞かせるように言って青色の閃光を放つ
それらは全て同時にドラゴノザウルスの腹に突き刺さる
ドラゴノザウルスが苦悶の表情を浮かべる
更に激しく暴れまわる
それを押さえつけているアルフとユーノの顔が苦痛に歪む
甲児、鉄也、竜馬の顔にも同様に苦悶の表情が浮ぶ
そして、それはなのは達も同様であった

やがて、一斉砲撃によってドラゴノザウルスの腹が破れ、中が露見しだした
どうやら其処はドラゴノザウルスの心臓部だったらしく、脈動を打つ臓器が見えた
恐らく心臓だろう

「よし！トドメだ！ゲッタァァァァシャァァァァァァァァイン！」

竜馬の叫びと同時に竜馬、隼人、弁慶の3人は同時にペダルを踏み込む
目の前にあった3つのランプが点灯し、ドラゴンが白い閃光に包まれる
そして一旦放物線を描いてドラゴノザウルスの腹目掛けて突進する

「シャイイイイイイイイイイイイイイインスパアアア

フェイトとアルフはこれ以上の戦闘は無理と判断して立ち去ろうとしていた

「待ってくれ！」

そんな2人の背に向かってクロノが言葉を投げかける
フェイトはゆっくりとクロノの方を向く

「事情は分からないけど・・・これ以上単独でジュエルシードを集めるのは危険だ！・・・僕達の元へ・・・来てくれないか？」

クロノはフェイトを『連行』するのではなくあくまで『保護』する目的で優しく言葉を投げかけた
フェイトはその言葉に一瞬心が揺らいだ
だが、そんなフェイトの肩をアルフが抱える

「フェイト・・・行こう」
「アルフ・・・うん」

フェイトは力なく頷いた
アルフはそっとクロノを見る

「悪いね・・・こっちにも事情があるんだ・・・悪く思わないでね」

そう言い残して二人は飛び去って行った
そんな2人をクロノは只黙って見ていた

「良かったのか？クロノ」
「何がですか？」
「あいつらはお前にとっちゃ犯罪者なんだろう？捕まえなくて良か

ったのか？」

甲児はそう聞いたが、クロノは軽くニヤけついた

「さっきも言いましたけど、今の僕には執務官としての権限はありません・・・ですからこうして彼女を見逃したんです」

「相変わらず固っ苦しい奴だなぁ・・・もうちょっと柔らかく生きないと肩凝るぜぇ」

「大丈夫ですよ・・・もう慣れてますから」

クロノが軽口を軽口で返すと甲児は大声で笑った

クロノが軽口を叩いたのが余程可笑しかったのだろう

『上機嫌な所良いかしら？』

すると、突如一同の目の前にリンディ艦長の映った映像が出た

だが、何時もの優しい艦長の顔では無く、少し厳しそうな目をしていた

「艦長・・・」

『クロノ・ハラオウン執務官・・・貴方は自分のやった事を自覚してますね？』

「・・・はい」

リンディの問いにクロノは力なく頷いた

それを見てリンディは納得したのか軽く溜息をつく

そしてキッとクロノを睨む

『貴方が行った行為は非常に重大な事です・・・ですので帰ってきたらそれなりの処置をします』

「そ、そんな！」
「ちょっと待ってくれよ！艦長！クロノを誘ったのは俺だ！罰なら俺が受けるから「良いんです、甲児さ」クロノ・・・」
甲児の言葉をクロノが遮った
「今回の出動はあくまで僕個人での事です・・・それに、厳罰なら覚悟してます・・・艦長」
『そうですか・・・なら早く帰還しなさい』
「はい・・・」
クロノが敬礼するとリンディの顔の映った映像はプツンと途切れてしまった
「畜生！何でクロノが罰っせられなきゃならねぇんだよ！」
甲児が先ほどの言葉に未だ不満をもっていたのか愚痴っていた
「愚痴っても仕方ないですよ・・・とにかく帰りましょう」
「そうだな・・・此処に居ても仕方ないだろうし」
鉄也の言葉を皮切りに、一斉に帰路に着いた
だが、甲児は終始不満げな顔を浮かべていた
＊＊＊

どうにかジュエルシードを回収出来たフェイトはホテルの一室に戻っていた
かなり疲れたのかソファーで眠っている

「お疲れ様、フェイト」

アルフはそんなフェイトにそっと布団をかける
そしてばれないように大きく背伸びをする

「はぁ、流石に今回は応えたは・・・あたしも一眠りしようっと」

アルフはそう行って隣のソファーで横になった

「お休み・・・フェイト」

そう呟いてアルフは静かに目を閉じた

＊＊＊

アースラに帰還したクロノ達はブリッジに集められていた
そして、クロノはリンディ艦長の前に立たされていた
恐らく艦長から直々に罰が下るのだろう

（畜生、クロノは何も悪い事してねぇのに何で罰を受けなきゃならねぇんだよ！艦長も立派に頭が固いぜ）

甲児がリンディを睨みつけていた
その横ではなのはとユーノが心配そうに見つめている
更にその後ろでは鉄也、竜馬、隼人、弁慶、翼、くろがね屋5人衆が事の次第を見守っていた
皆が見守る中、リンディが口を開く

「クロノ・ハラオウン執務官・・・貴方は出撃する前に言いましたね・・・『一時執務官の地位を放棄する』・・・・と」
「はい・・・・確かに言いました」

リンディの厳しい問いにクロノは力なく頷く
オペレーター達やエイミィもあんな元気の無いクロノを見たのは初めてであった
何時もの自信は欠片も見えない
まるで親に叱られている子供であった
・・・あ、そう言えばこの2人は親子か！
等と言っているとリンディは重い口を開く

「では、クロノ・ハラオウン執務官では無く・・・私の息子、クロノに命じます・・・今日一日、貴方の執務官としての地位を剥奪します」
「え？」
「そ、それだけ？」

余りの以外な応えに一同は目を丸くした

「だから・・・今日一日は私の事を「母さん」って呼んでね♪」

突然態度を変えたリンディがニッコリ笑ってクロノに言う
クロノは未だに状況が把握出来ていないのか苦笑いを浮かべている

「あ・・・あのぉ・・・・艦長・・・これは『艦長じゃなくて母さん・・・でしょ？』は・・・はい・・・か、母さん」

リンディにツッコミを入れられ少し頬を染めながらそう呟いたすると

「クロノオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

大声で叫びながら甲児がクロノにヘッドロックを掛けた

「グワッ！こ、甲児さん！？・・・い・・・一体何ですか？」

「良かったじゃねぇかクロノ！お前のおっかさんは大した役者だぜぇ！」

と言って今度はクロノの頭を軽く握った手でグリグリするクロノの顔が徐々に痛みにより変わっていく

「いだだだ！は、離して下さい甲児さん！・・・かん・・・じゃなかった・・・母さんが見てますから！」

「固いなぁお前は。そう言わずに「ママ」とか言えば良いじゃねぇか？何なら今言ってみろよぉ、ホレ」

「ちょ、待って、止めてください！ぼ、僕は別にそんな風に言うつもりは無くて只・・・」

「ええい！聞き分けの無い奴はこうしてやるあああああああああ！」

と言って甲児の腕はクロノの脇の下に潜る

そして主室にくすぐりだした

経験のある人なら分かると思うがこれをやられるとかなりキツイ

「わはははははははっははははは！ご・・・ごうじさぁあああああああああああん！ちょ、やめて下さ・・・ってだあああああああああああああああああああああ！」
「オラオラ、止めて欲しかったらさっき言った「ママ」って言いやがれえええええええええええ！」

甲児の悪ふざけにより場がどっと笑い声で賑わった
クロノにとっては少し災難な日であったかも知れない

決戦！大海獣！！　　終

次回予告

アリサの家に行ったら其処には何とボロボロのアルフが居やがった！
一体どうしたんだ？
何！フェイトが明朝やってくるってぇ！
遂に獣魔将軍が最後の勝負に出やがったな！
頑張れなのは！
お前の思いをぶつけてやれ！

次回『伝わる想い、届かぬ想い』

次回もこの小説に
テイィィィィィィィクオォォォォォォォォォォフ！

決戦！大海獣！！　後編（後書き）

クロノ・・・最後の最後で災難な目にあったなぁ（汗）

伝わる想い！届かぬ想い！　前編（前書き）

今回遂に奴が動き出した

伝わる想い！届かぬ想い！　前編

日の出を知らせる朝日の光がホテルの中を照らす
アルフは自分の顔に降り注ぐ朝日の光を浴びて目を覚ました

「あ、あれ？・・・寝ちゃったのか・・・」

目を擦りながらアルフは起き上がる
ふと、自分に布団が被せられていた事に気づく
そう、それは自分がフェイトに被せた布団であった
何故？そう思いフェイトが寝ていたソファーを見た
其処は既にもぬけの空となっていた

「フェイト？・・・何処行ったのさぁ？」

誰も居ないホテルの中でアルフはフェイトの名を呼んだ
当然居る筈が無いので返事は帰って来なかった
首を傾げながら付近を見回すと、机の上に一枚の置手紙が置いてあった
アルフはそれを目の前に寄せて内容を読む
内容を全て読み終えた時、アルフは血の気が引いた顔になった

「ふぇ、フェイトォォォ！」

置手紙を放り投げてアルフはホテルを飛び出した
落ちた置手紙にはこう書いてあった

『アルフへ

黙って出てって御免なさい
何だか凄く疲れてたみたいだから寝かせてたんだ
これからお母さんの所にジュエルシードを届けに行って来ます
すぐ帰って来るから心配しないで留守番しててね

フェイト・テスタロッサより』

フェイト・・・何で行ったのさぁ
アルフはそう思った
今フェイトが母プレシアの元へ行くのは危険過ぎる行為だ
何故なら今プレシアは本物の母では無くその体を乗っ取っている獣魔将軍なのだから
そして獣魔将軍の目的は『フェイトの抹殺』なのだ
このままではフェイトは確実に殺されてしまう
アルフは急ぎ屋上へ向かった
扉を勢い良く開けて屋上に躍り出る
だが、一足遅かった
フェイトは既に転移した後であった
アルフは咄嗟に転移したであろう地点に近づき膝を付きそっと床をなぞる
微かに魔力反応が残っていた

「これを辿れば・・・あたしも行ける！」

そう思ったアルフは急ぎ転移魔法を発動させてフェイトの後を追った

アルフは転移を終えて時の庭園の入り口に立っていた
どうやら転移は成功したようだ
今まで1人で転移した事は無かったので正直不安だったがどうやら成功出来たようだった

「喜んでる場合じゃない・・・フェイト！」

アルフは急ぎフェイトが居るであろう部屋へ向かった
目の前にはかつて甲児がこじ開けた扉があった
アルフは形振(なりふ)り構わずに扉を蹴破る
バアンと音がして扉が豪快に開く

「フェイト！」

アルフは叫んだ
そしてアルフの目に映った物は・・・

「ふぇ、フェイトォォォ！」

アルフの目に映った物・・・それは以前より酷くボロボロになったジャケットを身に纏い、体中に鞭で打たれて血が滲み出ていた痛々しいフェイトの姿であった
アルフはすぐさまフェイトの拘束を解きそっと抱き寄せる

「フェイト・・・フェイト！返事しておくれよ！」

必死に揺さぶりながら名前を呼ぶ
フェイトはずっと苦悶の表情を浮かべたまま黙っていた
何と惨い事をするのだろう
アルフは今これ程まで怒った事が無いと言う程怒りに燃え上がっていた
そしてそっとフェイトを床に降ろすと数歩前に出て叫ぶ

「獣魔将軍！居るんだろ？出て来い！」

アルフは叫ぶ
広い部屋の中にアルフの叫びが反響して響き渡る
その声を聞いたのか暗いカーテンの向こうからプレシアが現れた

「騒々しい使い魔だ・・・やはり欠陥品だなお前は」
「五月蝿い！よくもあたしのフェイトをこんな目に遭わせてくれたね！」

アルフが今にも噛み付きそうな目でプレシア・・・嫌、獣魔将軍を睨む
だが、獣魔将軍は僅かににやけるだけで大して気にしていなかった

「フン、何を噛み付く目で見てるんだ？役立たずに躾をしただけでそんなに睨まれるなど心外だなぁ」
「黙れ！あんたが軽々しくフェイトに触るな！さっさとその体から出て行け！」
「そうはいかんなぁ・・・この女はかなりの魔力を持っている・・・中々使える女だ。だから俺が利用してやってるんだ。むしろ感謝して欲しいくらいだよ」
「この野朗おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

堪忍袋の緒が切れた
アルフは猛然と拳を握り締めて獣魔将軍に殴りかかる
獣魔将軍は大した動きはしなかった
只そっと片手を目の前に伸ばしただけである
そんな獣魔将軍に気にもせずにアルフは殴り掛かる
だが、アルフの拳は獣魔将軍の目の前で突如止まってしまった
嫌、何か見えない壁のような物で阻まれてしまったのだ

「な・・・何これ？」
「フン！」

獣魔将軍が伸ばしていた手に微かに力を込める
それだけであった
只それだけなのにアルフは壁の向こうにまで吹き飛ばされてしまった
壁に思い切り叩きつけられる
衝撃と轟音が響き渡る
壁が凹み周囲に亀裂が入る

「ガハッ！」

衝撃の余りアルフは口から赤い鮮血を吐きその場に倒れ込む
そんなアルフの前に獣魔将軍は立つ
倒れたアルフを見下ろして微笑んでいた
とても憎たらしい笑顔であった

「流石は大魔道士と呼ばれた女だ・・・中々の魔力を持っているな」
「き・・・貴様・・・」
「さて、お前のような役にも立たんゴミは処分してしまうに限るな」

獣魔将軍はそう言って杖を天に掲げる
掲げた杖の先から凄まじい稲妻が集まっていく
それは紫色の閃光を放っており、その威力は目の前に居るアルフにも充分んに伝わって来そうな程であった

「安心しろ・・・苦しまず一瞬で消し炭に変えてやる」

獣魔将軍が下卑た笑みを浮べながらそう言った
アルフはギュッと唇を噛んだ

このまま自分は終るのか？
フェイトに何も出来ないまま自分は消し炭となってしまうのか
そんなの嫌だ！
だが、体は言う事を聞かない
全く動こうとしない
それが溜まらなく悔しかった

（甲児・・・御免・・・約束・・・守れそうに・・・ないよ・・・）

ふと心の中で甲児と交わした約束を思い出した

『フェイトの事頼むぞ』

その時応えはしなかったが、心の中で「任せて」と言ったのだ
だが、結果がこれだ
結局自分はフェイトの力になれないまま死んでしまうのだろう
そう思えた
だが、

「ぐ・・・ぐぐぐぐぐ・・・」

突如獣魔将軍が苦しみだした
青ざめた顔で喉元を押さえている
先ほどまで集まっていた杖には先ほどの閃光は無くなっており、輝きも失せていた

「こ、これって・・・」

アルフの目の前で獣魔将軍はガクリと膝を付く
そして数刻苦しんだ後、顔だけ起こしてアルフを見る

「ア・・・・アルフ・・・」
「その声・・・プレシアなの？」

明らかに声と雰囲気が変わっていた
其処に居るのは確かにプレシア・テスタロッサである
プレシアは霞んだ声でアルフにこう言う

「アルフ・・・逃げなさい・・・貴方だけでも・・・」
「で、でも・・・フェイトが！」
「大丈夫・・・フェイトは殺させない・・・だから・・・貴方は逃げてこの事をあの人達に伝えなさい」

そう言ってプレシアは杖を頭上に掲げた
するとアルフの真下の床が突如無くなりアルフは時の庭園から落ちていった

「なっ！プレシア！」
「行きなさいアルフ・・・頼むわよ」

最後に笑顔を添えてプレシアは言う
その直後で開いた床は閉じた
すると、プレシアは突如床に向かって吐血した
肩が僅かに震える
非常に苦しいらしく肩で息をしている
だが、やがて振るえは収まりプレシアはそっと立ち上がる
だが、その顔は既にプレシアの顔では無く獣魔将軍の顔に戻っていた

「おのれ・・・何時も良い所で邪魔をしやがって・・・まぁ良い、
あんな雑魚1人居なくなったって構いはしないからな」

吐き捨てるように言ってプレシアは床に倒れたフェイトの元へ近づく

「起きろ！我が人形よ」

獣魔将軍がそう命じる
すると倒れていたフェイトはゆっくりと起き上がる
獣魔将軍の正面に立ちゆっくりと瞳を開ける
だが、その瞳はどよんと濁っており生気の欠片も感じられなかった

「良いか、お前の使命は残ったジュエルシードを全て集める事・・・・そして『高町なのは』の抹殺だ」
「ハイ・・・ゴ主人様・・・」

フェイトは生気の篭らない声でそう言った

「それが終ったらお前は用済みだ・・・俺にジュエルシードを渡した後・・・・・自分で自分の命を絶て！」
「・・・ハイ」

獣魔将軍の命令にフェイトは頷いた
そして床に落ちていたバルディッシュを拾いゆっくりとした足取りで部屋を出て行く

「ククククク・・・いよいよだ・・・いよいよ俺の念願が叶う時が来た・・・・ククククク・・・ハアアアアアッハッハッハッハ！」

誰も居なくなった部屋で獣魔将軍は1人狂ったように笑っていた

＊＊＊

一方で、なのはは地上に戻っていた
と言うのも何時までも家を空けていては両親が心配するだろうと言うリンディの提案である
其処で一度リンディも地上に降りて家族に事情を説明する事にしただが、その内容は上手い具合に嘘と本当が合わさったフィクションのようでノンフィクションな話しであった
そんな内容を隣でなのはは苦笑いを浮べながら見ていた

リンディとの説明が終った後、なのはは甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶、クロノを連れてすずかの家に行っていた
すずかとアリサに甲児達を紹介する為だ
クロノは最初は断ったのだが、甲児曰く『男なら女友達の2人～3人は作っておくもんだ！』と言う訳で無理矢理連れてこられてしまったのだ
因みに翼は「そんなガキ臭いとこ行きたくないよ」と言って断り、くろがね屋5人衆は顔が怖いのでお断りした

「それにしてもあんた何時の間にこんな大きい友達作ったのよ！」

アリサが疑問に思った事をなのはに投げかける
なのははどう応えれば良いのか対応に困っていた
その横で甲児達はすずかの家を見ていた

「しっかしでっけぇ家だなぁ・・・すずかって結構な金持ちなんだなぁ」

「フフン、凄いでしょぉ」

アリサは家を褒められて嬉しいのか鼻を鳴らして言った
そして無い胸を張って非常に誇らしげにしている

「無い胸ってのは余計よ！（怒」

すみません

「て言うか此処はお前の家じゃねぇだろうが」
「細かい事気にしてると将来剥げるわよ」
「ナヌッ！」

アリサの一言によろける甲児

「あのぉ・・・何で僕は此処なんですか？（汗」

ふと、クロノが恐る恐る手を上げた
クロノの隣にはアリサとすずかの2人が居た
俗に言う「両手に花」状態である
因みにそんな状態で座らせたのは他でもない甲児である

「羨ましいねぇ両手に花をはよぉ」
「あ・・・あのぉ・・・こう言う席順にしたのは甲児さんでは（汗」
「おやぁ？俺は知らんなぁ」

甲児はわざとっぽく呟く
因みにユーノはと言うと・・・また家の猫達に追い回されていた

「キュウウウ

ウウウ

だが、不思議とこけた音や御盆の落ちる音がしないでいた
不審に思ったなのは達が目をそっと開けて見ると

「やれやれ、とんだドジっ娘メイドが居たもんだぜ」

何とこけたメイドを片手で抱えてもう片方の手で御盆を支えている
隼人の姿があった

「は・・・隼人さん・・・凄い！」
「あんた・・・絶対人間じゃないでしょう！」

すずかは隼人の人間離れしたスピードに驚き、アリサは何気に失礼
な発言をした
そんな発言に隼人はフッと鼻を鳴らす

「何言ってんだ？お宅らも少し鍛えりゃこの位出来るようになるぜ」
「無理！絶対に無理！」

アリサは断言した
それにはその場に居た一同も頷いた
勿論ユーノも
・・・あ、ユーノが頷いている隙に一匹の猫がユーノに噛み付いて
きた

「ギュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウウウウウウウウウウウウウウウ！」

悲痛の叫びを上げながら涙を流すユーノ
ご愁傷様です

「ファリン！貴方また何かしでかしたの？」

すると今度は同じ紫色のショートカットでこれまたメイドと言える服装をした女性がやってきた
しかし、今度は大人びた背丈に体つきをした女性であった

「お！何だそっくりさんか？」

余りに似てるので弁慶がそう呟いた

「えっと・・・この人は『ノエル・K・エーアリヒカイト』それでこっちに居るのが妹の『ファリン・K・エーアリヒカイト』って言います」

家主のすずかが名前を教える
名前を教えられた二人はスカートの裾を少し上げて会釈をする
姉の方は様になってるのだが、妹の方は今ひとつであった

「メイド服かぁ・・・さやかさんが着たらきっと似合うだろうなぁ」

甲児はそう呟きながら頭の中でメイド服を着たさやかを想像した
すると甲児は頬を赤く染めて嬉しそうな顔をする

「甲児くん・・・少しは周りの目に気を配ったらどうだ？」
「へ？・・・あ！・・・・」

見ると、甲児を見てなのは達がドン引きしていた
甲児はバツの悪い顔で頭を掻いて笑って誤魔化した

「そう言えば、鉄也さん記憶が戻ったんですね」

「ああ、お陰様でな」
「へぇ、そうなんだ」

さっきなのはに鉄也の記憶が戻った事を知らされていた為すずかは手を叩いて喜び、アリサはふぅんと反応しただけであったするとアリサはある事に気づく

「そう言えばねぇ、今朝家に変な犬が居たんだよぉ」
「変な犬？」
「うん、何かオレンジ色の毛をしててね、そんで額に何か赤いポッチがあるの・・・怪我してたから今は檻の中で大人しくしてるよ」

アリサの説明を聞いて甲児達は何処かで見た姿を連想したそう、それは紛れも無くアルフの姿であった

「あ、アリサちゃん！すぐにアリサちゃんの家に行ける？」
「え？い、良いけど・・・そんなにその犬が見たいの？」
「おう！その珍しい犬ってのを是非拝んでみてぇなぁ！」

甲児が付け足すように呟くそれで気を良くしたのかアリサはＯＫして皆でアリサの家に行く事になった

＊＊＊

「やっぱり！アルフ！」

甲児は檻の中で包帯を巻かれて弱っている犬・・・もとい、狼を見てそう言った
其処に居たのは確かに狼形態をしたアルフであった

「へぇ、その子アルフって言うんだぁ・・・良い名前だねぇ」

アリサはそう言ってそっとアルフを撫でる
するとアルフはゆっくりと目を開く

「う・・・うう・・・」
「あ、目を覚ました！」

目覚めたアルフの目の前にはアリサとすずか、そしてなのはとクロノと甲児達であった
え？ユーノ？
ユーノなら今度は犬達に追い掛け回されていますよ

（な・・・なのは・・・）
（え？何？）

アルフは念話でなのはとクロノに話しかけた

（御免よ・・・フェイトの事・・・守れなかった・・・）
（アルフ・・・）
（一体何があったんだ？）

沈み込んで俯くアルフになのはは心配そうに見つめクロノは事情を聞こうとする
だが、念話が使えない甲児達はさっぱり状況が分からないでいた

そこで、甲児はアルフを檻から出そうと思った

「なぁアリサ、この犬外に出せないか？」
「ええ！逃げないかなぁ？」

甲児の提案にアリサは心配になる

「だ、大丈夫だよ！この犬・・・結構大人しそうだし、多分気に入ってるから逃げないと思うよ」

そんなアリサにクロノが言う
それを聞いてアリサもＯＫする

（ナイスだ！クロノ）
（はいはい（汗）

小声で呟き親指を立てる甲児にクロノはやれやれと言った顔をしていた
そして檻の鍵を開けてアルフを外に出す
するとアルフはヨロヨロと茂みに向かって歩き出した
それを追うように甲児達も続く
アリサ達も続こうと思ったのだが、すぐ後ろでユーノが犬に咥えられ大ピンチになっていたのでその救出にてんてこまいになってしまった

人気の無い林に着くとアルフはその場に座り込んだ
甲児達も同様に座り込む

「アルフ、教えてくれ！一体何があったんだ？フェイトはどうした

んだ？」
「甲児・・・御免・・・・あたし・・・フェイトを守れなかった・・・」

そう呟くアルフの目からは一筋の涙が零れ落ちた
その後、アルフはフェイトが1人時の庭園に行った事
そして獣魔将軍の手により更に酷い仕打ちを受けた事
そして、全ての黒幕がプレシアでは無く獣魔将軍である事
それを伝える為に1人逃げてきた事
を伝えた

「そんな事が・・・」
「御免よ、甲児・・・あの時あたしがしっかりしてればこんな事にはならなかったのに・・・」
「今更後悔しても遅いよ・・・それに、君がこうして来てくれたおかげでかなりの情報が取れたよ」

クロノは優しくアルフの肩に触れてそう言った
明らかにクロノは甲児達と知り合ってから変わった気がした
最早一端の男である
それは良いとして、どうやら獣魔将軍が最後の交戦に出たようだ

「恐らく・・・次はフェイトの奴・・・本気で来るぞ」
「え？どういう意味ですか？」
「恐らく奴の事だ・・・きっとフェイトを洗脳して寄越すに決まってる」
「そんな！・・・」

鉄也の一言になのはは凍りつく
クロノも居た堪れない顔になる

「恐らく次はきっとお前を本気で殺しに来る筈だ・・・」
「酷い・・・フェイトちゃんにそんな酷い事するなんて！」
なのはの目には涙が浮んでいた
「だけど、こりゃチャンスでもあるぜ！これを起にフェイトを保護出来るんだからなぁ」
「そうですね、これ以上あの子に危険な真似をさせる訳にはいきませんからね」
「お願いだよ皆！フェイトを・・・フェイトを助けてよ！」
アルフは哀願するかのように大地に顔を擦りつけた
そんなアルフを甲児が起こす
見ると、その場に居た皆が笑っていた
「心配すんなアルフ、フェイトは俺達が必ず助けてみせる！勿論プレシアさんもアリシアちゃんも一緒だ！」
「だからお前さんは安心して傷を治すのに専念しな」
「皆・・・有難う！」
アルフは我慢出来ずに涙を流す
そんなアルフを見て皆が苦笑いを浮かべる
「大袈裟だなぁ」
弁慶が呟く
「彼女は俺達にとっても大切な仲間だ、それを助けるのは当然の事さ」

「ああ、それに俺はボインちゃんが大好きだからな」
「はっ？」

隼人の意味不明な言葉にアルフは首を傾げる

「でも、どうやってフェイトちゃんと戦うの？」

なのはが最もな質問をした
それに甲児が応える

「なぁに、誰も居ない所で突っ立ってればあいつから来てくれるさ」
「サポートはしてやる・・・だけど、最終的に彼女を救うのは高町・・・お前だぞ」
「はい、今度こそフェイトちゃんとちゃんとお話したいですから」
なのははそう言ってギュッと両の拳を握り締めた

伝わる想い！届かぬ想い！　前編（後書き）

後編に続く

伝わる想い！届かぬ想い！　後編（前書き）

今回なのはとフェイトの最初で最後の激闘が始まる
そして、遂に訪れる最終決戦
甲児達は果たしてフェイトの母と姉を救えるのか？

伝わる想い！届かぬ想い！　後編

翌日の早朝
アースラ内ではオペレーター達が準備に忙しく動き回っていた
その後ろでリンディが険しい顔で見守っている
隣では翼が落ち着いた雰囲気を纏いながら煙管を吹いていた

「さて、来るかねぇあの穢ちゃんは？」
「恐らく来るわね・・・何しろあの子の狙いはジュエルシードとなのはちゃんだから」

翼の問いにリンディが答える
モニターの向こうには甲児達が搭乗したマジンガー達と空に浮んで待機しているなのはが居た

「そう言えばクロノはどうしたんだい？」

本来ならその場に居る筈のクロノが何処にも見当たらなかった
それに対しエイミィが答える

「何でも甲児さん達だけに任しておけないって言って現場に行っちゃいましたよ」

それを聞いて翼がニッと微笑む

「やれやれ・・・あの子も随分と変わったもんだねぇ」
「本当に・・・誰に似たのかしら？」

リンディのその一言に場がドッと笑みに包まれる

＊＊＊

海上ではなのはが既にバリアジャケットを展開して待っていた
その下では同じくマジンガーとゲッターが待機していた

「本当に来ますかね？」

Zの肩に乗っていたクロノが聞く
それに甲児が答える

「来るさ、獣魔将軍の狙いはジュエルシードを集める事となのはとフェイトの抹殺なんだ。これはまたとない好機だからな・・・これを利用しない手は無いだろう」
「確かに・・・そうですね」

もし自分の目的が同じなら迷わずその手で行くだろうとクロノは思った
だが、それは以前の自分であればの話だ
今の自分はそんな非道な手段は使わない
だからこそこんな手段を使う獣魔将軍が許せないのだ

そう考えていたクロノの手は硬く握られていた
すると、突如なのはの目の前が閃光に包まれる

「来たか！」

鉄也がそう呟く
その通りであった
閃光が晴れると、其処には同じくバリアジャケットに身を包んだフェイトが居た
だが、その目は今までのフェイトとは違っていた
瞳が濁っているのだ
まるで生気が感じられない
生きているのか死んでいるのか分からない状態であった

「高町・・・なのは・・・」
「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトの名を呼ぶ
だが、フェイトはそんななのはに向かってバルディッシュを構える

「高町・・・なのは・・・お前を・・・『殺す！』」
「フェイトちゃん！」

なのはは叫ぶ
だが、そんななのはにバルディッシュの光の刃が襲い掛かる

「くぅっ！」

バルディッシュの光の刃をレイジング・ハートで受け止める

「くっ、やはり洗脳されているのか！」

鉄也達はフェイトの濁った瞳を見て洗脳されていると言う事に気づいた

「なのは！今援護するぞ！」
甲児達が援護しようと飛び立つ
「邪魔は・・・させない」
フェイトはそう言って片手を振り上げる
すると突如上空から無数の戦闘獣が出現した
その数はおよそ３０体は居る
「畜生！準備は万端ってかよ！」
甲児は愚痴る
そしてすぐ様攻撃態勢に入る
「甲児さん！皆！！」
「高町！戦闘獣は俺達に任せろ！」
「君はフェイト君を助ける事に集中するんだ！」
甲児と竜馬はなのはにそう言うと近くに居た戦闘獣に向かう
「おらぁ！てめぇらの相手はこの俺とマジンガーＺがしてやるぜ！」
甲児の撃ち出した鉄拳が目の前に１体の戦闘獣を貫く
轟音と共に腕が放物線を描きそのままＺに戻っていく
「お前達に高町の邪魔はさせん！」
鉄也の持った２本のブレードが次々と戦闘獣を切り裂いていく

鮮血にも見えたオイルと部品が舞い散る

「お前達戦闘獣にも教えてやる！ゲッターの恐ろしさをなぁ！」

鉄也と同様に竜馬も両手に持った諸刃のトマホークで戦闘獣を切り裂いていく
そして遠くに居た敵にはトマホークを投げつけ更には額からビームを放ち貫いていく

「相手が機械なら容赦はしないぞ！」
「なのは・・・フェイトを頼むね」
「サポート出来ないけど、こいつらは任せて！」

クロノ、アルフ、ユーノの3人もまた戦闘獣を蹴散らしていく
マジンガー達とクロノ達魔道士達が戦闘獣と激闘を繰り広げる

甲児達が戦闘を繰り広げる間、なのはとフェイトの激しい戦いが展開されていた

「・・・・・」
「フェイトちゃん！」

なのはの叫びが木霊する
だが、フェイトは全く意に返さずデバイスと同じ色の魔弾を放つ
なのはも同様に魔弾を放つ
互いの魔弾が空中でぶつかり合う

「はあああああああああああああ！」
「たあああああああああああああ！」

その直後に2人がデバイスをぶつけ合う
凄まじい火花が舞い散る
その直後、魔力で出来た刃が振り下ろされる
それをバックステップでかわす
そして複数の桜色の魔力弾を放つ

「くっ！」

放たれた魔力弾を閃光の刃で切り裂く
そして、自分も同様に魔力弾を放つ

「レイジング・ハート！」

なのはが手を翳す
すると目の前に魔方陣が現れ、フェイトの放った魔力弾を弾く
弾かれた魔力弾が海に落ちて水しぶきを上げる

「高町・・・なのは！」

一旦距離を開けてフェイトはバルディッシュを構える
構えたバルディッシュの先端から凄まじい魔力が収束される
なのはの周囲に複数の魔方陣が展開される

「あれは！不味い」

アルフが目を見開いて叫ぶ

「どうしたんだ？」
「あれはフェイトの一番強い魔法だよ！このままじゃなのはが！」
「なのは！すぐサポートを！」

ユーノがサポートしようとするのを数体の戦闘獣が妨害する

「くっ！」

「援護する！ユーノ君」

「このぉ！邪魔すんな！」

ユーノを行かせようとクロノとアルフが挑む

「手を貸すぜ！ユーノ！」

「おらおらぁ！道を開けやがれ！」

「戦闘獣！俺達が相手だ！」

それと同様に甲児達も戦闘獣を相手に戦う

Zの鉄拳が、

グレートの剣が、

ゲッターのトマホークが、

クロノの魔力弾が、

アルフの拳が、

戦闘獣を打ち砕いて行く

だが、倒しても倒しても戦闘獣は限りなく現れる

まるでキリが無い

「な、なのはぁ！」

ユーノの視線の先ではフェイトが魔法の発射体制に入っていた

「クッ！」

咄嗟に回避しようとするなのはをフェイトのライトニングバインド

が両手足を拘束して防ぐ

「え！」

「死ね・・・高町・・・なのは」

そう呟いた後、フェイトの魔法が放たれる

「フォトンランサー・ファランクスシフト・・・ファイア！」

その掛け声と同時に展開した無数の魔力弾が一斉に拘束したなのはに襲い掛かる

凄まじい轟音と爆煙がなのはを包み込む

「なのはあああああああああ！」

「ま、間に合わなかった・・・」

「畜生おおおおおおおおおおお！」

ユーノは名前を叫び、クロノは目の前の現実を見て呟き、甲児は絶叫した

「フフ・・・フフフ・・・倒した・・・高町なのはを倒した・・・後はジュエルシードを回収すれば・・・・！！！」

にやけていたフェイトの顔が突如強張った顔になった

目の前にはほぼ無傷のなのはがレイジングハートをシューティングモードに変形させて構えていた

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね・・・今度はこっちの番だよ！」

レイジング・ハートを面前に突き出すように構える
そして先端に強力な魔力が集中すていく

「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション・・・全力全開！・・・スタァァァライトォォブレイカァァアアア

2人はなのはの放った膨大な一撃を見て驚きの声をあげる
やがて、なのはの放った一撃が晴れると、其処にはボロボロの姿になったフェイトが力なく落下していた

「フェイトちゃん！」

フェイトが海に落ちる寸前になのはがフェイトとバルディッシュを抱える

「う・・・うう・・・」

なのはに抱えられてフェイトが目を覚ます

「フェイトちゃん！正気に戻ったんだね！」
「なのは・・・私・・・」
「大丈夫・・・大丈夫だよ・・・」

虚ろな瞳になったフェイトをなのはが優しく微笑む
其処へ甲児達も駆け寄る

「フェイト！」
「こ・・・甲児さん・・・・皆・・・」
「良く1人で頑張ったな・・・偉いぞ」
「辛かったな・・・もう無理しなくて良いぞ」
「お疲れ、フェイト」
「良かったね、フェイト」
「無事で良かったよ」

皆がフェイトにそう言って微笑みかける

そんな皆を見て、フェイトの目にはうっすらと涙が滲んでいた
その時、

『来た！』

エイミィの叫びが一同に木霊した
甲児達は上空を見上げた
其処には一面黒い大空になり、其処から一筋の雷光がフェイトに放たれる

「あぶねぇ！」

咄嗟に甲児、鉄也、竜馬の3人がフェイトを庇うように立つ
3機に向かって雷光が当たる

「「「ぐあああああああああああああああ！」」」

3人の悲痛な叫びが響く

「み・・・皆！」

フェイトは自分を庇ってくれた甲児達を見て叫ぶ
だが、甲児達の防御を掻い潜って来た一筋の雷光がフェイトのバルディッシュに当たり、砕く
そして、中にあったジュエルシードを奪い上空に持ち去っていく

「くっ・・・獣魔将軍・・・てめえええええええええええええ！」

痛みに顔を歪めながらも甲児は上空を見上げて叫ぶ

『皆！時の庭園の場所を特定出来たよ！一旦戻って！』

エイミィの通信を聞いて甲児達は悔しい心を抑えつつも一旦帰還した

＊＊＊

時の庭園の一室では、集められたジュエルシードを手に獣魔将軍に憑依されたプレシアが微笑んでいた

「・・・数は足りないが転移するには充分だな・・・それに、これでもうこんな体ともおさらば出来ると言う物だ」

そう言ってジュエルシードを上空に掲げる

すると一斉にジュエルシードが輝きその光がプレシアを包み込む

突如、黒い影が沸き上がり、やがて実体化する

それは巨大なトカゲを足に猛獣、昆虫、超人、悪霊、鳥、竜、魚の集合体とも思える姿をした獣魔将軍が居た

「グハハハハハハハハ！ついに手にしたぞ！元の体を！俺の本来の体を・・・フフフフフ、ハアアアアアアアアハッハッハッハッハッ！」

不気味な笑みを浮かべる獣魔将軍の後ろでプレシアが力なく倒れていた

＊＊＊

「お疲れ様・・・皆」

アースラに帰還した一同をリンディが出迎えた
其処にはフェイトの姿もあった
局員の中にはフェイトを拘束しようとした者も居たが、クロノ曰く
「彼女には必要ない」と言う事でフェイトの拘束は施されていなかった

「貴方がフェイトちゃんね」
「・・・はい」

リンディの言葉にフェイトが頷く
そしてリンディは向こうの映像に目を移す

「事情は聞きました・・・貴方の家族は私達が救助します・・・だから安心してね」

フェイトにそう言ってリンディは映像に目を移す

「武装局員の皆さん、我々の目的はプレシア・テスタロッサ、並びにアリシア・テスタロッサの救助。そして獣魔将軍の逮捕です」
「はい！」

大勢の武装局員達は一斉に武装局員達が転送される

転送されて巨大な扉の前に立つ

「ここに獣魔将軍が居る筈だ」

「急ごう！これ以上奴の暴挙を許す訳にはいかない！」

一同が扉を破ろうとした時、突如壁から無数の戦闘獣が現れた

「な、何！」

＊＊＊

その光景は映像を見ていたリンディ達も見ていた

「しまった！全ては獣魔将軍の罠だったのか！」

クロノは思わず舌打ちした

全てお見通しだったと言う事なのか！

すると、突如映像が変わり、其処には元の体になった獣魔将軍が立っていた

「フフフ、時空管理局の皆様・・・貴重な素材を感謝するぞ」

「貴重な素材だと！」

鉄也がいぶかしげそうに聞く

「フフフ、こいつらは俺がミケーネに帰った際には忠実な兵士に改

造してやる・・・勿論、此処に居るプレシアとアリシアも同様になぁ」

と言って獣魔将軍は声高らかに笑った

「ひ・・・酷い！」

なのはが思わず呟く

フェイトは今まで母プレシアにこんな化け物が取り付いていた事に気づき絶望する

だが、そんな中獣魔将軍はとんでもない事をしでかしてしまった

そう、それは

・・・こいつらを完全に怒らせてしまった事だ

「許さねぇ・・・獣魔将軍・・・てめぇだけは絶対に許さねぇ！」

「待っていろ！今すぐ貴様をまた地獄の底に叩き落してやる！」

「俺達を怒らせた事を・・・たっぷりと後悔させてやるぞ！」

甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶らは怒りに満ちた顔でそう宣言した

伝わる想い！届かぬ想い！　終

次回予告

獣魔将軍
てめぇだけは絶対に許さねぇ！
てめぇのその醜い野望は、俺達が絶対に打ち砕いてやる

次回『大進撃！怒りのマジンガー軍団！』

次回もこの小説にテイィィィクオォォォォフ！

伝わる想い！届かぬ想い！　後編（後書き）

次回はマジンガー無双の予定です
迫り来る敵軍団を蹴散らすマジンガー達にご期待下さい

大進撃！怒りのマジンガー軍団！！（前書き）

今回マジンガーとあの人達が大暴れします

・・・ついでにあの人も？

大進撃！怒りのマジンガー軍団！！

獣魔将軍の言い放ったその一言は甲児達の怒りに油を注ぐには充分過ぎる物であった

「待ってやがれ！今すぐてめぇの元に行ってその面ぶん殴ってやるからな！」

甲児がモニターに映る獣魔将軍を指差すだが、獣魔将軍は鼻で笑っていた明らかに余裕の表情である

「フッフッフ、貴様等は此処には来れない・・・其処で指を咥えて見ているが良い」

「何だと！？」

獣魔将軍の言った意味が分からなかった

「た、大変！時の庭園の周囲に強力な結界が張られています！」

「何ですって！」

エイミィの言葉に皆が驚く

映像を時の庭園の外観に切り替える

確かに目視で確認出来る程の強力な結界が張られていた

「これじゃ転移も出来ませんし、侵入も出来ないですよ」

「くそ！奴が余裕なのはこの為だったのか！」

鉄也が愚痴る

目の前の映像では転送した局員達が突如現れた戦闘獣達にジリジリと追い詰められている映像であった
このままでは全滅も時間の問題であった
更に、悪い事は立て続けに起こる物である

「時の庭園より大多数の反応あり・・・戦闘獣です！」

オペレーターの悲鳴にも似た声が響き渡る
映像を切り替えると、時の庭園の壁から抜き出るように戦闘獣軍団が続々と姿を現していた
その数はざっと１００体・・・嫌、少なくても２００体は居る

「う・・・嘘でしょ！あんな数を相手にしなきゃならないの？」

エイミィの顔に半ば絶望の色が浮んでいた
外では戦闘獣軍団がアースラに向かって一斉に攻撃を開始した

「シールド展開！急いで！」

リンディが指示を送る
戦闘獣軍団の攻撃が当たる寸前で結界に守られる
だが、その際の衝撃は諸に艦内に響き渡った
凄まじい揺れがブリッジに襲い掛かる
その衝撃でなのはとフェイトは転んでしまい、甲児達は必死に壁にもたれかかる

「駄目です！シールド持ちません！」
「くっ・・・どうすれば・・・」

皆に半ば絶望の色が伺えた

だが、そんな中

「はん、何しけた面してんだぃお前達は？」
「翼！」

其処へ煙管を持った翼が余裕の表情で歩いてきた
翼は半ば絶望の色を顔に持つ一同を見て軽く溜息をつく

「ったく、情けないねぇ・・・こんな程度の事で負けを認めちまうのかい？お前達はさぁ」
「だ、だけど翼！時の庭園には転移出来ないのよ！中には武装局員達が今も取り残されているし・・・」
「武装局員？それってこいつらの事かい？」

そう言って翼はリンディの座っていたデスクのスイッチを押すと映像が切り替わり、其処には今にも転送されようとしている武装局員達が居た

「艦長！転送準備完了です！」
「いつでも行けますよ！艦長」

其処には先ほどと全く同じ武装局員達が息巻いていた
だが、それを見た翼を除く一同は度肝を抜かれた

「え？何であいつ等がまだ艦内に居るんだ？」
「だって・・・私さっき転送した筈なのに・・・」

リンディでさえも目を丸くしていた
そんな一同を見てニヤリと微笑みながら煙管を吸う
そして映像を先ほどの武装局員達に戻す

「さぁ皆の衆！今こそ出番だよぉ！」

翼は映像に向かって叫ぶ
すると

『へえええええええええい！』

と威勢の良い返事が帰ってきたかと思うと突如武装局員達は着ていた鎧を取り払ってしまった
そして、その中から薄い半被やさらし等・・・言ってしまえば古きよき「ヤクザ」や「チンピラ」が着てそうな服装を身に纏った者達が居た
そして、その中にはあのくろがね屋５人衆の姿があった

「いやぁ、やっとあの窮屈な鎧を取れると思うとスッキリしやすねぇ」
「さ～～～て、やっと回ってきた出番だ～～～、張り切って行くか～～～」
「・・・・・（コクッ」
「おいおい、あんま暴れすぎて床をぶち抜くなよ」
「やれやれ、年寄りにはちと答える仕事だねぇ」

といかにも余裕の表情を浮かべる一同それを見ていた戦闘獣軍団はおろかアースラに居た局員達も目が点になっていた
そして

「えええええええええええええええええええええええええええええええええ！」

ブリッジに居た一同が絶叫する
そりゃ驚くだろう
ついさっきまで武装局員だと思っていた者達が実は翼の懐刀だったとは思いもしなかったのだから

「驚いたかぃ？ガキ共」

なのは達を見て翼がしてやったりと言った顔をする
その間、映像の向こうではくろがね屋のメンバーが派手に暴れまわっていた

「おらおらぁ！噂の戦闘獣っちゅうのはこの程度かい！」
「もっと骨の有る野朗はいねぇのかよぉ！」
「気合入れねぇとこん中滅茶苦茶にしちまうぞぉ！」

くろがね屋のご一行が危ない口調をしながら持っていた武器を振るうだが、その武器はバズーカやミサイルなどは良いとしても、中には竹やりだったり、楊枝だったり、数珠だったりととんでもない武器を扱っているのが伺えた
特にくろがね屋5人衆の戦いが凄まじかった

「ほいさぁ！イタチの安さんお手製の炸裂弾を食らいやがれぇ！」

安が懐から数個の丸い玉を取り出して投げつける
その玉は戦闘獣に当たると凄まじい爆発を起こす
その爆発により戦闘獣はバラバラになってしまった

「ほ～～れほれ～～～、ぼやぼやしてると蜂の巣にし～～～ちまうぞ～～～～」

おどけた口調でジャンゴが両手に持ったガトリング砲を豪快に放つ
それは正にジャンゴの言った通り、彼の周囲に居た戦闘獣は蜂の巣
になってしまった

「・・・・・（コクッ」

無言のまま先生が持っていた刀で戦闘獣を次々細切れにしていく
その切り口は鮮やかの一言で片付けて良い物かと疑える物であった

「うおおおおおおらあああああああ！」

額に十字の傷を持ったクロスが片手で目の前の戦闘獣の頭を掴むと
そのままるで林檎を握りつぶすかの如くグシャグシャに潰してしまった
そしてもう片方の手で隣に居た戦闘獣のどてっぱらを貫く

「ほいほい、あんたら数は多くてもノロマだから楽だねぇ」

お菊姉さんは神速の速さで動き回りながら手に持っていた鋼線の糸を絡めて行く
やがて複数の戦闘獣が絡め取られて動きが取れなくなって必死にもがく

「五月蝿いねぇ・・・コレで大人しくなりな」

と言って一本の糸をチョンと捻る
すると絡め取られていた戦闘獣がバラバラになってしまった

「す・・・すげぇ・・・」

甲児達がくろがね屋ご一行の戦闘の光景を見て言える唯一の言葉であった
すると安がモニターに向かって叫ぶ

『何ボケッとしてるんだぃ旦那方！あっしらが暴れている間にさっさと厄介な結界をぶち壊してくんなぁ』
「え？ぶち壊す？」

安の言葉になのはが頭に？マークを浮かべる
だが、それを聞いて甲児達がニヤリとする

「行こうぜ！鉄也さん、リョウ君！」

甲児の言葉に皆が頷く
だが、其処へ

「ちょっと待てえええええええええええええい！」
「にゃあああああああああああああああああ！」
「きゃあああああああああああああああああ！」

其処へ大声を上げてやってきた敷島博士を見てなのはは勿論、フェイトは大声を上げて滝のように涙を流してなのはは鉄也の後ろに、フェイトは甲児の後ろに隠れた

（だから何で俺なんだ？）

鉄也は相変わらずそんな事を考えていた
そんな2人は置いといて敷島博士は続ける

「お前等！今度ワシの武器を使うって言っとったじゃろうがあああああああああ！じゃのにすっぽかしおってええええええええ！お前等・・・本当に脳みそ弄くったろうかあああああああああああ！」

額にこれでもかと言う程の青筋と血管を浮べながら怒鳴る
それに甲児達はドン引きしていた
だが、其処で甲児はある事に気づいた

「もしこのままの武器で戦ったら結構きついな」

確かに目の前に居る敵軍団を相手にしてたらエネルギーの殆どを使い果たしてしまうだろう
だったら此処は使うべきだろう

「敷島のおっちゃん！あんたの武器使わせてくんねぇか！」
「おぉ！そりゃ本当かぁ？ならちょっと待っておれぃ！」

軽快に返事をするとオリンピック選手並のジャンプをしてエイミィのすぐ隣にある空き席に座る
そしてすぐ側にあった2本のケーブルを取り出す

「セエエエエエットオオオオオオオオオン！」

大声で叫んで2本のケーブルを頭の部分にセットする
するとモニターが格納庫に変わって、何と格納庫中の壁と言う壁が反転して、其処にはバズーカやミサイルランチャー、アサルトライフルやガトリングガンなどの大型武器やそれこそ形状の分からない武器まであった
それこそ１００は下らない数である
それを見た一同は再び度肝を抜かれた

「い、何時の間にあんなに武器を作ったんですか！しかもあんな場所に隠しておくなんて！犯罪物ですよ！」

クロノが敷島博士に向かって指摘する
それに対し

「んぁ？暇だったから作っっとったらあんなになってしもうたんじゃ！」

「「「暇だからって作るなあああああああああああああああああああああ！」」」

鼻を穿りながら答える敷島博士にクロノ、エイミィ、リンディの３人は額に血管を浮かべて怒鳴りつける
なのは達は目を点にしており
甲児達は苦笑いを浮かべていた

「ホレッ！さっさと行って来んかぁ！んであんな雑魚戦闘獣なんぞ蹴散らして来い！」

「おうよ！行こうぜ！」

「「「おう！」」」

甲児達はブリッジを出ようと走った
そんな５人をなのは達が見る

「気をつけてね、皆」

「なぁに、あんな奴等全部蹴散らしてやるよ！」

「任せておけ！戦闘獣に負ける程俺達は落ちぶれちゃいないからな」

「結界は俺達が破る、だから君達は何時でも出れるように準備はしておいてくれ！」

甲児達はそう言って親指を立てて言う
そしてブリッジを出て行く

＊＊＊

くろがね屋の戦い振りは玉座に居た獣魔将軍も見ていた

「おのれぇ！まさかあの様な連中が紛れ込んでいたとは・・・だが、外に居るアースラが粉々になるのは時間の問題の筈・・・その後で奴等を滅ぼせば・・・・」

そう言い掛けた途端当たりに凄まじい轟音が響き渡る
凄まじい揺れが獣魔将軍を襲った

「な、何事だ！」

咄嗟に映像を外に移す
すると其処には

「な！あれは・・・マジンガー！それに、ゲッター！」

其処には2丁のガトリングガンを持ったゲッターロボ
そして大型バズーカを持ったマジンガーZ
更には巨大な光の剣を持ったグレートマジンガーが居た
そしてその足元には数十体の戦闘獣の残骸が転がっていた

「へへぇ、こりゃご機嫌じゃねぇか！」
「流石敷島博士だな！凄い武器だ」
「さて、覚悟は出来てるな・・・獣魔将軍！」

其処には怒りの形相になった甲児達が居た

「行くぞ！」

甲児の声を筆頭に3体の魔神が一斉に飛び出した

「リョウ！残弾を気にする必要はねぇぞ！」
「構わずぶっ放せ！」
「おう！ゲッタァァァマシンガン！食らえぇ！」

両手に持った小型ガトリングガンから放たれた弾丸が斜線上の戦闘獣を次々と蜂の巣にしていく
だが、その弾丸を掻い潜って来る敵も居た
そんな敵には

「とあぁぁぁぁ！」

グレートマジンガーが手に持っていた巨大な光の剣で一刀の元に切断していく
鉄也は戦闘獣を切り裂いた剣を見て感激していた

「流石敷島博士が作った剣だ！物凄い切れ味だなぁ」

鉄也の言う通りその剣の切れ味は相当な物だった
その武器こそフェイトのデバイス「バルディッシュ」を元に敷島博

士が作った武器「ライトニングマジンガーブレード」である

「おらおらぁ！邪魔する奴ぁ容赦しねぇぞ！」

Zが肩に担いでいた大型バズーカを連射する
放たれた弾丸は直線状に向かって飛び、敵の集団の元で大爆発を起こした
そして爆発の中で敵の残骸と思いし物がバラバラと落ちていった
凄まじい戦闘力と強力な武器を持った3体の魔神の戦い振りは相当な物であった

「おのれぇ・・・何と言う戦闘能力だ・・・流石はマジンガー」

獣魔将軍は改めてマジンガー達の強さを知った
内臓武器を使用してないとは言え戦闘獣を蹴散らすとは相当な物である
しかもたった3体のロボットのせいで２００体も居た戦闘獣が既に数える程となってしまったのだから

「おのれぇぇぇ・・・だが、いかに奴等が強大でもこの結界を破る事など出来はしまい」

獣魔将軍がそう言って微笑んだ

外では次々と迫り来る戦闘獣を蹴散らすマジンガー達が居た

「ちっ、弾切れか・・・博士！次の武器を下さい！」
「こっちも頼む」
「俺も頼まぁ！」
「おっしゃぁ！今ナイスな武器を送ってやるぞぉ！」

そう言ってゲッターには大型ボウガンが
グレートには巨大な杭を打ちつけるような大型銃が
Zには6連装のミサイルランチャーが転送された

「ウハハハハ！そいつはワシの作った物の中でも傑作物じゃぞぉ！
まずそのボウガンは一度敵の中に入ったら最後、そいつの中をグチャグチャにしてしまう物じゃ！」
「そ、そりゃ恐ろしい（汗」

額に冷や汗を流しながら竜馬はそれを放つ
放たれた矢は戦闘獣の中に入っていく
その後その戦闘獣の体中を縦横無尽に駆け巡り文字通りズタズタにしてしまった

「んでグレートに送ったのは弾数こそ少ないがその杭に貫けぬ装甲なんぞない代物じゃぁ！」
「ほぉ、そいつは頼もしい」

関心して鉄也は弾丸を放つ
放たれた杭は斜線上に居た敵を全て撃ち貫いてしまった
しかも、それでも一向に速度が落ちる気配が無くそのまま見えなくなるまで飛んで行った

「そして極めつけはその6連装ミサイルランチャーじゃ！そいつは翼ちゃんの強力の元作った超高性能光子力爆弾を内臓したミサイルじゃ！当たれば塵も残らんぞぉ！」
「なんちゅう物騒なもん作ったんだよあんたは！」

とんでもない物を掴まされたなと愚痴りながらも甲児は大型ミサイ

ルを放つ
それは敷島博士の言った通りであった
ミサイルは敵の真っ只中で大爆発を起こし白い閃光を放った
そして閃光が晴れると、其処には何も無かった
恐らく蒸発してしまったのだ
とんでもなく恐ろしい武器である

「ガッハッハッハ！まだまだ武器は山ほどあるぞぉ！どんどん使えぃ！」

頭にケーブルを繋いだ敷島博士がそれこそ上機嫌に言う
そんでもって両手を突き出したりして暴れまくっている
それを横で見ていたエイミィが涙目になって怖がっている
なのはやフェイトもそんな敷島博士を不気味がっていた
クロノやリンディは頭を抱えており、アルフとユーノは苦笑いを浮かべるしか出来なかった
下手に止めようとすればそれこそ脳みそを弄繰り回されるか変に改造されるだろうからだ
ハッキリ言って１０年後のなのは（白い魔王）より怖いと思えた

「く・・・クロノ君・・・あの武器・・・どうするの？」
「とりあえずあんな物騒な物をこの艦に置いてはおけないから早急に処分するｋ『んなあああああああああああああいいいいいいいいい！』いぃ！」

突如敷島博士がクロノの前に躍り出る
そして噛み付くような目で睨みつける

「貴様ぁ！ワシの傑作を処分じゃとぉ！一辺脳みそに６００万ｖの電圧を流したろうかぁ！こんガキャァ！」

「す・・・すみません（汗」

敷島博士の発する威圧感にクロノもタジタジであった
それを横目で見ていた翼はニヤリとしていた

＊＊＊

殆どの敵を片付けた甲児達は時の庭園を取り巻く結界に攻撃を掛けていた
手持ちの残った武器をありったけぶち込んでいたのだが、結界には傷一つつかない

「か～～～、何ちゅう固い結界だよ！こりゃこんなチャチな武器じゃ日が暮れちまうぜ」
『だアアアアッハッハッハ！そう来ると思って今お主らの元にワシの超最高傑作を送ったぞぉ！』
「マジか？気前良いじゃねぇか爺さん！」

甲児は嬉しそうに叫ぶ
すると面前の方から甲児達に向かって飛んでくるのが見えた
それは、見覚えの有る武器であった

「な！あれは・・・グレートブースター！」
「おいおい、あれって強化型ロケットパンチじゃねぇか！」
「隼人、あれはもしかして・・・「ゲッターレーザーキャノン」か？」

そう、それは元の世界で甲児達が使っていた武器であった

『安心せい！そいつらはワシが独自に改造を施した代物じゃ！威力は何十倍にもなっとるぞぉ！』

「へぇ、そいつは良いや！それであの結界をブチ破ってやるぜぇ！」

甲児は意気揚々と向かって来た強化型ロケットパンチを装着する

「ああ、これ以上アイツの好きにはさせん！ブゥゥスタァァァオォォン！」

怒りの顔をした鉄也がグレートと共にブースターを装着する

「獣魔将軍！貴様に味合わせてやる！俺達の怒りをなぁ！」

ゲッタードラゴンが飛んできたゲッターレーザーキャノンを手に取るそして3機全て時の庭園の一角を見る

「行くぜぇ！」

「食らえ！グレートブースター！」

「1発勝負だ！ゲッタァァァレェェェザァァァキャノォォォン！」

「このロケットパンチは一味違うぜぇ！食らえ！強力ロケットパァァァァンチ！」

グレートの放った水爆並の威力を誇るブースターがゲッターGのビーム砲を数倍に凝縮したビームキャノン砲が強度と威力を限界まで強化したZのロケットパンチが

時の庭園を取り巻く結界にぶち当たる

凄まじい火花と振動が庭園内を揺らす
そして結界に徐々に亀裂が入りだす
ピシッピシッとヒビが音を立てて広がっていく
そして、音を立てて結界は完全に砕けてしまった
まるで割れたガラス片のように結界が舞い散る
これで時の庭園を守る物は無くなったのだ

「よっしゃぁ！見たか獣魔将軍！俺達マジンガーの力を！」

甲児が腕を振り上げて叫ぶ
それを見ていた獣魔将軍が歯をギリギリと噛んで悔しそうな顔をする

＊＊＊

結界が無くなった事で庭園内への転送が可能になった
これを好機と見てリンディが立ち上がる

「直ちになのはさん達を現地に転送！そしてくろがね屋の皆さんを回収して！」
「了解！」
エイミィは言われた通りに計器を操作する

一方で戦闘獣達と戦っていたくろがね屋ご一行を白い閃光が包み込んだ

「何だよ！もう終りかよ？」

「全然暴れたりねぇぞこの野朗！」
「仕方ねぇ！帰ったら艦内で一杯やるか！」
「花札もあるぜぇ！」

と、明らかに余裕の口ぶりで帰還していくご一行
そしてその中には

「へ、頼みましたよ。旦那方」
「あっしら～～は此処までで さ～～～。後はよろ～～～って事で～～」
「・・・・・（コクッ」
「ヘマすんじゃねぇぞ」
「ま、頑張りんしゃいな」

そう一言言い残してくろがね屋５人衆も去っていった

＊＊＊

時の庭園の入り口に転送されたなのは達は巨大な扉を見た

「凄い・・・大きな扉」
「これって・・・前より大きくなってる？」
「そうだよねぇ・・・でも一体何でさぁ？」

明らかに以前よりも巨大化しているのが見て取れた
それが何故なのかは２人には分からなかった

「どうでも良いじゃねぇか！」
「あ、甲児さん！それに皆も！」

フェイト達のすぐ後ろに甲児達マジンガーが降り立つ
そしてパイルダーから甲児達は降りてなのは達の方に歩み寄る

「こうでかければ俺達マジンガーでも暴れられるってもんだぜ！」
「ああ、何の気兼ねも要らんな」
「これなら俺達でも戦える！」
「フッ、さて、化け物退治としゃれこむか」
「大暴れしてやるぜ！」

５人共気合は充分であった
その目には凄まじい闘志が燃え上がっていた
それを見たなのは達にも内なる闘志が燃えてきた感じがした

「甲児さん・・・」
「やろうぜ！皆！今度こそ獣魔将軍を叩きのめしてプレシアさんやアリシアちゃんを救い出すんだ！」

そう言って甲児が目の前に手を翳す

「うん！私も頑張る」

その上になのはの手が乗る

「奴は今度こそ二度と這い上がれない程の地獄の底に落としてやる！」
「俺達の怒りを奴に見せてやろう！」

「フッ、今日はやけにリーダー風が心地良いぜ」
「俺もやるぜ！」

鉄也、竜馬、隼人、弁慶の手が乗る

「僕もやります！これ以上奴の暴挙を許す訳にはいかない！」
「僕も手を貸すよ！」
「あたしもやるよぉ！」

クロノ、ユーノ、アルフの手が乗る

「今度こそ・・・母さん達を助ける！・・・そして、本当の気持ちを伝えたい！」

最後にフェイトの手が乗る
全員の手がこの場で重なった

「やるぜ！皆！」
「「「「「おう！」」」」」

全員一致団結して声を揃えて叫んだ！
今、此処に最終決戦の火蓋が切って落とされようとしていたのであった

大進撃！怒りのマジンガー軍団！！　終

次回予告

遂に此処まで来たぜ！
待ってろよ！獣魔将軍！
今からてめぇのその面に俺達の鉄拳を叩き込んでやるぜぇ！

次回『決戦！時の庭園』

次回もこの小説にテイィィィィィクオォォォォォォフ！

大進撃！怒りのマジンガー軍団！！（後書き）

緊急告知

発動する「闇の書」
無印編から実に６ヶ月経った世界でまた新たなる脅威が迫る

それに甲児達マジンガー軍団が挑む
更に新しい仲間も加わる

？？？「この美しい大地を汚させる訳にはいかない！僕も行くぞ！」
？？？「てめぇら纏めて全滅してやるぜ！ビルドアァァァップ！」
？？？「俺はデーモンハンターだぜ！デェェェビィィィィル！」

強大な敵に挑むマジンガー軍団と魔道士達
果たして人類に明日はあるのか？

新展開「ＡＳ編」近日公開！

お楽しみに！！

決戦！時の庭園！！　前編（前書き）

今回も前後編に分けます
多分長くなると思うので

決戦！時の庭園！！　前編

時の庭園に降り立った甲児達
早速扉を蹴破って中に入ろうとした一行を突如現れた戦闘獣達が遮る

「野朗！面倒だから叩きのめしてやる！」
「待って下さい！こんな奴等に無駄なエネルギーを使う必要は無いですよ」
「ほぉ、何か秘策でもあるのか？」

クロノの意味深な台詞に隼人が興味を持つ

「こうするんですよ」

そう言ってクロノは頭上にデバイスを掲げる
その先端から青い閃光が現れると、その閃光は猛スピードで戦闘獣軍団を撃ち貫いていく
そして、最後に密集していた地点に着弾すると爆発して多くの戦闘獣を破壊した

「す、凄い・・・クロノ君！」
「あの年で中々のコントロール捌きだ」

なのはと鉄也は只関心するだけであった
だが、この人はと言うと

「すげぇじゃねぇかクロノ！お前将来良いピッチャーになれるんじゃねぇの？」
「何で其処で野球ネタなんですか？」

「だとしたらもっと肩を鍛えねぇとなぁ」
「だから何で野球ネタなんですかあああああああああ！」

甲児と弁慶のボケなのかマジなのか分からない言葉が舞う
それを聞いてクロノは絶叫し、なのは達は苦笑いを浮かべていた
咄嗟にクロノは周りの空気を感じ取り軽く咳払いをする

「と、とにかく・・・この地理に詳しいのはフェイトとアルフの2人だから道案内は頼むよ」
「うん！」
「任せてよ！」

フェイトは強く頷いてアルフは胸を叩く

「頼むぜ！お前の犬の鼻が頼りだからよ」
「甲児・・・何度も言うけどあたしは犬じゃなくて「狼」だからね（ギロリ」

アルフが睨みつけるも甲児は大して気にしてない
恐らくこの戦いが終ったら甲児は齧られるだろう
・・・頭から

＊＊＊

入り口を蹴破って中に入ると、いたるところの床が抜けており、下の不気味な空間が丸見えであった

「皆気をつけて行くんだ！その黒い空間は虚数空間と言って、落ちたら全ての魔法がかき消されてしまうんだ」

クロノが走りながら説明する
それを聞いて魔道士組はぞっとした
見た所底が見えない
もし落ちよう物なら命の保障は無いだろう
ましてや魔法がかき消されると言う事は飛行魔法も使えなくなると言う事なのだから尚更気をつけねばならない

「だが、俺達には無関係のようだな」

竜馬が呟く
どうやら魔法を無効化するだけらしく、ゲッター線や光子力で動くマジンガーやゲッターには無縁の物らしく、その上を飛んでいても落ちる事は無かった

「だから落ちても安心しな！その時は俺達が拾ってやるからよ」
「うん、有難うね甲児さん」

フェイトがマジンガーを見ながら言った
すると道中で再び壁をすり抜けるかの様に戦闘獣が現れてきた

「流石に内部に入ると敵の攻撃が激しいな・・・予想はしてたけど」

内心笑いながらクロノは再びデバイスを構える
しかし、そんなクロノの前に甲児達が立つ

「おいおい、お前ばっか良いカッコしてないで俺達にも出番をくれ

よ」
「お前の方こそ魔力は温存しておけ！此処は俺に任せろ」
鉄也がそう言って数歩前に出る
そして胸の放熱板を手に持ちブーメランの如く投げる
高速で回転するブーメランは斜線上に居た戦闘獣を両断していく
だが、内数体がジャンプしてかわす
その位置では戻ってきても切り裂く事は出来ない
「何の！」
鉄也は咄嗟にグレートタイフーンを放つ
だが、それは戦闘獣にではなく、何とグレートブーメランにであった
何を血迷ったのか？そう思った戦闘獣達は一斉にグレートに襲い掛かる
だが、最後尾に居た戦闘獣が突如真っ二つになった
異変に気づいた残りの戦闘獣達が振り返る
其処には何と全く別の軌道に居たグレートブーメランが凄まじいスピードで迫って来ていたのだ
「凄い・・・今の風でブーメランの軌道を・・・」
「流石戦闘のプロだな」
クロノは正に神業とも言える光景に言葉が浮ばず、隼人は当然だなと言う感じに言った
当然戦闘獣にはこれを回避する事など出来ず全てブーメランの餌食となってしまった
戦闘獣を切り裂いたブーメランは悠然とグレートの手に戻る
そしてそれを元の位置に戻す

「凄いんですね、鉄也さんって」
「これ位軽いもんだ。お前だって何時か出来るようになるさ」
尊敬の眼差しで見るなのはに鉄也はフッと笑って答える

＊＊＊

一向はとある長い階段のある場所に差し掛かった

「此処から上に行けば動力炉に辿り着ける・・・そして、下には・・・アイツが居る」

アルフが言う
すると全員が一斉に下を見る
そう、下にはフェイトの家族と・・・そして『獣魔将軍』が居る
フェイトの家族を己が醜い野望の為に利用し、あまつさえなのはとフェイトを殺そうとした憎き敵
甲児はふと、プレシアの前で言った言葉を思い出した

『必ず助け出す！』

その言葉を甲児は胸の奥に刻み込んでいたのだ

「プレシアさん・・・今約束を果たすぜ」

そう呟いた甲児の手には自然と力が入っており操縦桿を強く握った

「さて、此処から3手に分かれよう」

クロノが提案する
それには皆も納得した

「まずは上に向かって動力炉を止める人、そして下に向かってプレシアとアリシアの救助、そして獣魔将軍の逮捕をする人・・・最後は」

最後の方を言おうとした時点でクロノは後ろを振り返った
其処には無数の戦闘獣が迫って来ていた

「此処で足止めする人だ」

そう言ってクロノはデバイスを構える
するとクロノの隣に鉄也のグレートが立つ
両手にはマジンガーブレードが握られていた

「ならば俺も此処で足止めしよう」
「鉄也さん」
「フッ、だが俺達2人では足止めと言わず全滅も容易だろうがな」

鉄也が自信ありげな顔でそう言う
それを見るとクロノにも不思議と笑みが浮んだ
確かにそう思えた
1人では恐らく無理だろうが、2人なら可能だろう
そう思えたのだ

「ならば俺達ゲッターチームは動力炉を止める！」
「私とユーノ君も行きます！」

続いて名乗りを上げたのは竜馬達であった
それに続いてなのはとユーノも前に出る

「それじゃ、俺とフェイトとアルフは下に向かうんだな」
「そうみたいだね」

甲児の言葉にフェイトは頷く
アルフは腕をボキボキと鳴らしていた
良く考えてみれば甲児、フェイト、アルフは少なからず獣魔将軍に因縁があったのだ
フェイトは母を利用され、甲児は獣魔将軍の一撃を受け、アルフは危うく殺されかけた
3人供獣魔将軍に対する怒りが最も強いメンバーであった

「それじゃ、皆！必ず生きて会おう！」

クロノが締めくくりにと言う
だが、それを聞いて甲児達が苦笑いを浮かべる

「おいおい、そんな物騒な言い様はねぇだろう？そう言う時は『終ったら皆でパーッとやろうぜ！』とか『腹いっぱい飯食いたい』とか言えよ！」
「だな、俺達が生きて帰るのは当たり前なんだ、そんな台詞は野暮ってもんだぜクロノ」
「そ、そうですか？（汗」

甲児と隼人の指摘を受けてクロノが頬を掻く

「ガハハハ！そうと決まったらさっさと片付けて飯にしようぜ！俺何か腹減っちまったみたいだしよぉ」
「ふぇぇぇ！もうお腹空いたんですかぁ？」
腹を摩りながら言う弁慶を見てなのはが驚くそれを見て皆が大笑いする

「さて、んじゃ行くか！」
「うん！」

大いに笑った所で甲児とフェイトとアルフの3人は下へ向かって進んだ

「俺達も行こう！」
「気をつけてね、鉄也さん。クロノ君」
「すぐ戻って来ますから」

そう言い残して竜馬達は上へ向かうそして残ったクロノと鉄也の前には多くの戦闘獣が立ちはだかっていた

「さて、此処から先へ行きたければ俺達を倒してからにしな」
「まぁ、無理だけどね」

そう言って二人は仁王立ちするその目には決意と熱い闘志が燃え滾っていた

＊＊＊

動力炉の付近の床を破ってゲッターが現れた
それに続いてなのは、ユーノも現れる
動力炉を見た一同は唖然とした
静かなのだ
此処は言わば心臓部の筈
普通なら多くの戦闘獣が居て警備をしている筈なのだがそれが全く居ないのだ

「おかしい・・・何故敵が居ないんだ？」
「皆鉄也のフロアに行っちまったんじゃねぇのか？」
「それは無いな、此処は言っちまえば時の庭園の心臓部だ。それを無防備にする奴はそうそう居ないぜ」
「それじゃ一体どうして？」

なのはが聞く
だが、竜馬達は首を傾げたままであった

「とにかく、敵が居ないんなら好都合ですね！早く炉心を封印しましょう」
「そうだな」

ユーノの言葉に竜馬達も動き出す
ゆっくりと動力炉に向かって歩を進める
だが、途中でドラゴンの足がピタリと止まった

「どうしたんですか？」

不審に思ったなのはがゲッターを見上げる
コクピットの中では竜馬が信じられないと言った顔をしていた
それは隼人、弁慶も同じであった

「まさか・・・そんな馬鹿な！」

竜馬が微かに声を出した
その声を聞き疑問を抱いたなのはが視線の先を見た

「え？あれって・・・」
「そんな・・・あれは・・・」

なのはとユーノは目を見開いた
その先に居たのは・・・紛れも無い・・・見間違えようの無い・・・
もう1体の「ゲッターロボG」であったのだ

＊＊＊

甲児とフェイトとアルフは下のフロアに向かって突き進んでいた
途中で現れる戦闘獣にはZの光子力ビームやロケットパンチで破壊していったりフェイトのバルディッシュで切り裂いたり、アルフの鉄拳で砕いたりして進んでいた
ふと、甲児はフェイトの方を見た

「フェイト・・・少し良いか？」

「何？」

フェイトは甲児の方を見た
とても重い顔をしていた
こんな顔をしている時の甲児は決まって何か重大な事を言う筈だ
そうフェイトは思えた
そして、甲児の言った事は正に衝撃であった

「フェイト・・・お前には黙ってたけど・・・お前は、実はアリシア・テスタロッサのクローンとして獣魔将軍に作られたんだ」
「え！」
「甲児！」

アルフは叫んだが、甲児はジッとアルフを見た
それは「少し黙っててくれ」と無言で言っていた
その視線を見てアルフは黙り込んだ

「フェイト・・・お前にはショックかもしれない・・・お前が人間じゃなく、アリシアって奴を元に作られたクローンなんだからな」
「・・・・・」

フェイトは黙って聞いていた
顔は重く沈み、目にはうっすらとだが光る雫（しずく）が零れていた

「だけど・・・俺は思う・・・お前はお前だってな」
「え？」
「お前がクローンだろうと何だろうと関係ない！お前はお前・・・フェイト・テスタロッサだ！・・・嫌か？」
「・・・嫌・・・じゃない！」

フェイトは強く答えた
それを見て甲児は微笑む
内心甲児はこう返答が帰ってくると思っていた
フェイトは強い子だ
恐らく真実を知っても自分を見失う事は無い
只、まだそれが成長途中であり傷つきやすい状態なだけなのだ
だから、もし躓いた時は俺達が手を差し伸べてやれば良い
そう思えた

「行こうぜ、お前のおっかさんと『お姉さん』を助けによ」
「え？お姉さん？」
「アリシアはお前の元になったんだろ？だったらお前より先に生まれるんだからお姉さんになるだろ？」
「あ、そっか！」

フェイトは其処で納得した

そうだ、アリシアは私のオリジナルではなく、私のたった一人のお姉さん
そして、プレシアはこの世に1人しか居ない、私の大切な『お母さん』
ずっと今まで、母さんの笑顔が見たくて無茶ばっかりやって、甲児さんやアルフには凄い迷惑を掛けていたな
それに、あのなのはって子や鉄也さんにも・・・
でも、皆そんな私に笑って力を貸してくれる
皆とても優しい・・・なのはも、ユーノも、クロノも、アルフも、鉄也さんも、竜馬さん達も、そして・・・甲児さんも
だから、私も頑張ろう！
例えこの先に待っているのが悲しい運命だとしても・・・甲児さんや皆と一緒ならきっと変えられる

ううん、変えて見せる！絶対に！！

フェイトは心に強く思った
そうこうしている内に甲児達は巨大な扉の前に来ていた
恐らく此処に獣魔将軍が居る筈だ

「奴の相手は俺がする、２人は救助を優先してくれ！」
「任せて！」
「お安い御用だよ！」

フェイトは頷きアルフはニッと笑って答える
そして、勢い良く扉を蹴破る

「来たぜ！獣魔将軍」

甲児は叫んだ
その視線の先には、文字通り獣魔将軍が居た
爬虫類の足、悪霊の左手、昆虫の腹、猛獣の頭、魚の尻尾、鳥の羽、超人の顔
文字通りミケーネ７つの軍団の力を併せ持つ不気味さを持った怪物が目の前に立っていた
大きさは約２ｍ位しかなくまだ回復しきっては居ない事を思わせていた

「フフフ、遂に此処まで来たか、兜甲児・・・そしてマジンガーＺよ」
「獣魔将軍！遂に年貢の納め時だぜ！覚悟しやがれ！」

Ｚが指差しながら叫ぶ
だが、獣魔将軍は未だに余裕の笑みを浮かべている

「フフフ、貴様が此処に来たのなら好都合だ！出でよ！戦闘獣グラトニオス！戦闘獣ビラニウス！」

持っていたトマホークを掲げて叫ぶ
するとZの前の床から2体の戦闘獣が現れた
紫色の機体色をしており胸には二つの奇妙な仮面がついており、両腕は鋭利なとんがりになっている
もう一体は魚のような顔と鱗を持った怪物であり、４本の足がついている

「こいつらは！」
「フン、そいつらは世界は違えど貴様を完膚なきまでに叩きのめした戦闘獣よ！今度はもう貴様を助ける者など来ない！此処で叩きのめしてくれるわ！」

衝撃であった
まさか別の世界に自分が居たとは
そして目の前に居る戦闘獣は自分に・・・鉄の城マジンガーZを叩きのめしたと言っているのだから
そんな2体の戦闘獣がマジンガーを睨んでいる
だが、それで引き下がる兜甲児では無い
そんな事を言われたらむしろ闘志が湧き上がってくるのが分かった

「ヘン、もしそうなら尚更この俺が叩き潰してやるぜ！行くぞ戦闘獣！別の世界の俺に代わって今度はこの俺がリターンマッチを挑んでやるぜ！」

決戦！時の庭園！！　前編（後書き）

ゲッタードラゴンとなのはの前に現れたもう一体のゲッタードラゴン
グレートとクロノの前に立ちはだかる戦闘獣軍団
マジンガーZとフェイトの前に立ちはだかる戦闘獣グラトニオスと
ビラニウス
どれも激闘の予感がする
果たして彼等はこの激闘を制する事が出来るのか？
続く

決戦！時の庭園！！　中篇1（前書き）

動力炉に向かったゲッターチームとなのは達の前に立ちはだかったのは
何ともう一体のゲッターロボであった

決戦！時の庭園！！　中篇1

「これは・・・どうなってんだ！」

竜馬は未だに信じられなかった
目の前には寸分変わり無いゲッタードラゴンが立っていたのだ
色、姿、形、大きさ等全てが酷似していたのだ
不審に思うゲッターチームに目の前のもう1体のゲッターが語りかける

「お気に召してくれたかな？これこそ獣魔将軍がお作り下さった『コピーゲッターロボ』だ」
「コピーゲッターだと！」
「そう・・・だが、俺達のパワーはジュエルシードの力により数倍に上がっている・・・勿論オリジナルの貴様等など到底追いつけない程のなぁ」

コピードラゴンは見下すように言う
それを聞いたゲッターチームは眉を顰める

「ならばお前達に見せてやる！本物のゲッターロボの力をなぁ！」
「見せて貰おうかあああああああ！」

2体のゲッターロボが激しくぶつかり合う
だが、吹き飛ばされたのはゲッタードラゴンであった

「「「ぐあああああ！」」」

3人の叫びが響く

コピードラゴンは平然とした構えを見せている

「フン、この程度なのかお前達の力は？」

「な、なんのぉ！」

空中で体制を建て直し額にエネルギーを集中させる

「食らえ！ゲッタァァビィィィム！」

ゲッタードラゴンの放ったゲッタービームはまっすぐコピードラゴンに向かっていく

「ふん、ならばこちらもゲッタービーム」

それを鸚鵡(おうむ)返しでコピーゲッターもゲッタービームを放つ

2体のゲッターが放ったビームが空中で激しくぶつかりあう

しかし、コピーゲッターの放ったビーム砲はゲッタードラゴンのビームを跳ね除け襲い掛かる

「うおっ！」

咄嗟にかわしたお陰で直撃は避けた物の、その先に当たった壁はまるで蒸発してしまった跡を残していた

それを見た一同はぞっとした

「何て威力だ！」

「奴の言った事はあながち嘘じゃなさそうだな」

「だが、負ける訳にはいかん！」

竜馬はそう言って操作する

今度は両肩から2本のトマホークを取り出して手に持つ

「今度は接近戦で勝負だ！」

「良いだろう！」

同じようにコピードラゴンも両手にトマホークを持つ

「うおおおおおおお！」

最初に切りかかったのはゲッタードラゴンであった
上空から真っ向唐竹割りの如くトマホークを振り下ろす

「ふん！」

それを下から突き上げるようにコピーゲッターがトマホークを振り上げる
お互いのトマホークが火花と閃光を散らす
音を立てて崩れる音がした
崩れたのは、ゲッタードラゴンのトマホークであった

「な！ゲッター合金のトマホークが」

ゲッタードラゴンの手には刃が無くなったダブルトマホークが握られていた

「不味いぜリョウ！あいつ相当のパワーを持っていやがる」

「ならスピードで勝負だ！リョウ、俺に代われ！」

「分かった！オォォプンゲェェェェット！」

ゲッタードラゴンが3機のゲットマシンに分散する

「無駄な事を」

それを鼻で笑うかのように言った後コピードラゴンも3機に分散する
計6機のゲットマシンが空中をマッハのスピードで飛び回る

「チェェェェンジライガァァァスイィィィィッチオォォォォォン！」

「チェンジライガー！」

6機のゲットマシンが再び1体のロボットになった
今度はお互い青い細身のゲッターライガーである

「お前に0，01秒の世界を見せてやる！マッハスペシャル！」

「見せて貰おうか！マッハスペシャル」

2体のゲッターライガーは高速で移動しながらぶつかりあった
余りに高速で動く為ライガーの後方には何体もの残像が映っていた
その残像同士も激しくぶつかりあう
凄まじい攻防であった
だが

「どうした？0，01秒の世界を見せてくれるんじゃ無かったのか？」

「くぅっ、まさかこの俺がスピード負けするとは」

そう、コピーライガーのスピードがゲッターライガーのスピードを上回っていたのだ
最初こそ同じ土俵で戦っていた物の相手はジュエルシードの力で数倍にパワーアップしたコピーゲッターである

性能の差は歴然であった

「コンマ3秒遅いぞ！」
「ぐおぉぉ！」

即座に背後に回ったコピーライガーがゲッターライガーに回し蹴りを放つ
それを食らいゲッターライガーは地面に叩きつけられる
凄まじい振動が襲い掛かる

「くそぉ！あいつスピードまで勝ってやがるぜ！」

隼人が他人事のように呟く

「なら今度は俺がやってやる！隼人、チェンジだ！」
「任せたぜ弁慶！オォォプンゲェェェット！」

またライガーから3機のマシンに分散する

「何に変形しても無駄だ！全ての性能を俺は上回っているのだ！オープンゲット！」

コピーライガーもまた3機の分散するまた6機のマシンが入り乱れて飛行する

「うおぉぉぉぉ！こりゃ難しいぞ！」
「弁慶！落ち着け！」
「相手に惑わされるな！お前は合体する事だけ考えろ！」
「お、おう・・・チェェェンジポセイドンスイィィィッチオォォォン！」

弁慶が叫びながら変形レバーを引く

「懲りない奴等だ！チェンジポセイドン」

６機がまた合体する
先に下りてきたのはゲッターポセイドンであった
コピーゲッターはそれよりコンマ数秒遅れて降り立ってきた

（！！！・・・遅い）

竜馬はある事に気づいた

「この野朗！これでも食らえ！ストロングミサイル！」

ゲッターポセイドンが背中に搭載されていた２本のミサイルを放つ

「そんな物食らう訳ないだろう！ゲッターサイクロン！」

コピーポセイドンが胸の装甲版を開く
顔の周りから巨大なファンが現れる
それが猛烈な風を起こす
その風はミサイルごとゲッターポセイドンを吹き飛ばして壁に叩きつける

「「「ぐぅぅぅ！」」」

衝撃に３人が苦悶の表情を浮かべる
コピーポセイドンはまるで勝ち誇ったかのような笑みを浮かべて地面に落ちたゲッターポセイドンを見る

「駄目だ！どの形態になってもパワーが上じゃ話しにならない」
「そ、それじゃ私達勝てないの？」

ユーノの言葉に不安になるなのは
目の前にはゲッターロボを凌駕するコピーゲッターロボがいるのだ
まさか、ゲッターがコピーに負ける
そんな不安が募っていた
だが、

「心配するななのはちゃん！俺達は負けない！」
「竜馬さん！」

竜馬の声が響く
視線の先ではゆっくりとゲッターポセイドンが起き上がる

「隼人、弁慶！今の見たな」
「おう、バッチリ見たぜ！」
「どうやら奴さん！肝心な部分を見落としていたらしいな」

竜馬の言葉に弁慶は大声で答え、隼人は涼しい顔で笑う

「勝算あり！もう一度ゲッタードラゴンに合体するぞ！」
「おう！オォォプンゲェェェット！」

ゲッターポセイドンが3機のマシンに分散する

「まだやるのか？ならば今度こそ叩き潰してやる！オープンゲット！」

コピーゲッターもまた3機に分散する
そして6機のマシンがまた空中を飛び回る

「貴様等もこれまでだ！チェンジドラゴン」

コピーライガー号とコピーポセイドン号が合体し胴体が出来上がった
そして最後にコピードラゴン号が頭部の形を成して合体しようとした時

「今だあああああああああああああああ！」

その間に割って入るかのように既に合体を終えたゲッタードラゴンが割って入ってきた

「な、なにいいいいいいいいいいいいい！」

勝負は一瞬で決まった
其処には合体を途中で遮られたコピードラゴン号を両手で支え、コピーライガー号とコピーポセイドン号の合体した状態を足で踏みつけるゲッタードラゴンの姿があった

「馬鹿な！一体何故！？」
「悪いな、俺達は目を瞑ってても合体出来るんだ」
「今度コピーゲッターで挑むんなら後コンマ2秒合体する速度を上げて来な」
「やっちまえリョウ！」

最早戦いは決まっていた
合体を封じられたコピードラゴンには反撃する能力など無く、コピードラゴン号はゲッタードラゴンの放ったゲッタービームで塵と化

し、コピーライガー号とコピーポセイドン号はダブルトマホークで
真上から真っ二つにされた

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」

コピーゲッターの断末魔の叫びが響き渡る
そして爆発が起こり、爆煙の中からゆっくりとゲッタードラゴンが
現れた

「やりましたね！竜馬さん！」
「ああ、俺達がコピーに負ける訳にはいかないからな」

目の前にやってきたなのはに竜馬は笑って答える

「おいおい、喜ぶのは良いがまだ俺達にはやる事が残ってるんだぜ」
「おっと、そうだったな」

隼人の言葉に気づき一同は目の前にある巨大な動力炉を見る
それは未だに稼動中であり、機械音が喧しく響き渡っていた

「よし！さっさとあれを破壊するぞ！なのはちゃん」
「はい！ディバイィィィィンバスタァァァァ！」
「ゲッタァァビィィィム！」

レイジング・ハートとゲッタードラゴンから放たれた2本の桜色の
閃光が真っ直ぐ動力炉に向かって行く
だが、それはあの分厚い結界によって弾かれてしまった

「そんな！」

「くっ、此処でもあの結界か・・・」

竜馬は舌打ちする
その厚さは実に時の庭園を覆っていた時の数倍はあったとても現存の武器で破るのは難しいのだ

「リョウ！シャインスパークは使えないのか？」

弁慶が聞く
だが、それを隼人が遮る

「無理だ、さっきのコピー野朗との戦闘でかなりのエネルギーを使っちまった・・・シャインスパークを撃つだけのエネルギーは残ってねぇ」
「お、おいおい！此処まで来たってのに此処で足止めかよ！何か手はねぇのかよ！」
「無茶言うな！外部からエネルギーを得られれば手はあるんだが・・・」
「外部から供給・・・それだ！」

隼人の言葉に竜馬が気づいた
そしてドラゴンはゆっくりとなのはの方を向く

「なのはちゃん！頼みがある」
「え？なんですか？」
「ゲッターに全力全開でスターライトブレイカーを撃ってくれ！」
「えええええええええええええええええええええええええ！」

突然何を言い出すのかと言う感じの顔でなのはは叫んだ

確かに驚くのも無理は無い
スターライトブレイカーは今のなのはの最強の技だ
まともに食らえばゲッターと言えども只では済まない

「そ、そんなの出来ませんよ！」
「頼む、今はこの手しか無いんだ！」

竜馬は真剣な顔で頼み込む
だが、なのはは渋っていた

「で・・・でも・・・」

そんななのはに竜馬は言う

「なのはちゃん・・・ゲッターを・・・俺達を信じてくれ！」
「竜馬さん・・・分かりました」

なのはは意を決して頷く
そしてゲッターとなのはは動力炉を見下ろすように陣取る
ゲッタードラゴンの後ろでなのはがレイジング・ハートを構えてチャージを始める
竜馬は外部通信のスイッチを切って軽く息を吐く

「隼人、弁慶・・・分かってるな・・・これは一発勝負だ！もし、もしコンマ1秒でもタイミングがずれたら・・・俺達は粉々だ」

竜馬は真剣な顔で言う
そんな竜馬に隼人と弁慶は笑って答える

「フッ、コンマ1秒のタイミングを合わせるなんざ朝飯前だぜ」

「遠慮は要らねぇよ！さっさとやっちまおうぜ！」
「ああ、行くぞ！」

そう言って再び外部通信のスイッチを入れる

「なのはちゃん！頼む」
「行きます！」

ドラゴンの後ろでは最大までエネルギーを溜めた状態のなのはが居た
その隣ではユーノが何時でも核を捕獲出来るように構えている

「全力全開・・・スタァァァライトォォォブレイカアアアアアアアアアア！」

なのはの全力全開の一撃がドラゴンに向けて放たれる
スターライトブレイカーがドラゴンを飲み込もうとした刹那

「今だ！ゲッタァァァシャァァァァイン！」

叫びと同時に3人がペダルを踏み込む
目の前のランプが一斉にともる
そしてドラゴンを白い閃光が包み込む
その閃光に吸い込まれるようにスターライトブレイカーが入っていく

「え？スターライトブレイカーを・・・吸収してる？」

その光景になのはは驚いていた
やがて全てを吸収し終えた時、ゲッタードラゴンを包んでいたのは
以前の白い閃光では無く、スターライトブレイカーと同じ桜色の閃
光が包んでいた

「成功だ！」
「やったぞリョウ！物凄いエネルギーだ！」
「いけるぜ！これならあれをブチ破れるぜ！」
「おう！行くぞおおおおおおおお！」

桜色の閃光を纏ったゲッタードラゴンが空中に舞い上がり、そして
反転して動力炉に向かって猛スピードで突っ込んで行く

「食らえ！スタァァァァァライトォォォォォォスパァァァァァァァァァク！」

纏っていた閃光を真っ直ぐに動力炉に向けて放つ
桜色の閃光は動力炉を包んでいた結界とぶつかり合う
だが、閃光はその結界をブチ破り、動力炉を包んでいく
桜色の閃光に包まれた動力炉は瞬く間に形を失い、その中から小さ
な結晶が姿を現した

「あれだ！フィンガーバインド！」

核を見つけたユーノは１０本の指から鋼線の如き細さのバインドを
放つ
そしてそのまま腕を振り上げると、其処にはジュエルシードに良く
似た形の鉱石が絡め取られていた

「やったぁ！」
「よし！後は封印するだけだ」
「なのは、お願い」

捕獲した核を手元に持ってきたユーノがそっとなのはに差し出す

それを頷いたなのはがそっとレイジングハートで触れる
核はレイジング・ハートに吸い込まれていき、そして封印された

「やりましたね、竜馬さん！」
「ああ、これで此処のエネルギー供給は断たれた筈だ！すぐに皆の下へ行こう！」
「うん！」

なのはとユーノは頷き先程ドラゴンがこじ開けた穴から降りていった

決戦！時の庭園！！　中篇1（後書き）

コピードラゴンを破ったゲッターチーム
その下に居るグレートマジンガー、クロノ、マジンガーZ、フェイト、アルフ達は一体どうなっているのか？
続く

解説６（前書き）

今回は出て来たコピーゲッターと新必殺技を解説します

解説6

コピーゲッターロボ

獣魔将軍が動力炉を守らせる為にジュエルシードを使用して作り上げたもう1体のゲッターロボ
性能、パワー、スピード、武器の威力など全てをオリジナルのゲッターロボを凌駕しており、ゲッタードラゴンを窮地に追い込んだ
しかし、合体スピードがコンマ数秒遅いと言う弱点を付かれゲッターロボ唯一の弱点である合体の最中を狙われ無防備な状態にされるその後、コピードラゴン号はゲッタービームで破壊され、コピーライガー号とコピーポセイドン号はダブルトマホークにより真っ二つにされた

スターライトスパーク

ゲッタードラゴンのシャインスパークとなのはのスターライトブレイカーを合体させた必殺技
なのはのスターライトブレイカーを吸収してそれを内部にあるゲッターエネルギーと融合させて放つ
大技である
威力からしてシャインスパークの実に数十倍は行く
だが、タイミングがシビアでありもしコンマ1秒でもタイミングがずれれば内部エネルギーの暴走と外部エネルギーの衝突によりゲッターは粉々になってしまう
正に一発勝負の大技でもあるのだ

解説6（後書き）

こんな感じです

決戦！時の庭園！！中篇２（前書き）

今回強敵の出現にマジンガー大ピンチ！
どうなる最終決戦？？

決戦！時の庭園！！中篇2

動力炉方面から凄まじい振動と轟音が響いた
そのすぐ下に居た鉄也とクロノの二人はその振動が何なのか理解出来た

「フッ、やはりあいつ等には簡単過ぎたみたいだな」
「そうみたいですね」

クロノも鉄也も動力炉の破壊は必ず成功すると確信していたのだ
だからこの振動が起こるのも当然と思っていたのだろう

「さて、だったらリョウ君達はすぐに降りてくる筈だな」
「そうですね・・・だったら」

言葉の途中で切り上げてクロノと鉄也はとある方を見た
其処には今にも襲い掛かろうとしている戦闘獣軍団が居た

「こいつらを片付けないいけませんね」
「フッ、お前も言うようになったな、クロノ」
「ええ、誰かさんのせいで・・・でしょうね」

クロノは自分の変化に薄笑いを浮かべる
鉄也も同様にフッと笑った

「なら、とっとと片付けるぞ！」
「はい！」

鉄也の言葉を皮切りに一人の魔道士と一体魔神が戦闘獣軍団に向か

って行く

「はあああああああ！」

クロノが持っていたデバイスから青い閃光の魔弾を放ち数体の戦闘獣を撃ち貫く
そのまま近くの戦闘獣に近づきその顔面を蹴り倒したり、鉄拳で殴り倒したりしていた

「やるなクロノ！俺も負けてられんな！」

横で鉄也がそう呟きながら両手に持っていたブレードで次々と戦闘獣を切り刻んでいく
更にはネーブルミサイルやグレートタイフーンで次々と撃破していく
数こそは勝っていた物の、相手は戦闘のプロ同士のコンビだ
並みの数では相手にならないのが現実であった

「ブレイズキャノン！シュート！」
「必殺パワー！サンダーブレーク！」

青と白の閃光が戦闘獣軍団を貫いていく
最初こそは壁の向こうが見えない程の数が居た筈なのに、今では数体しか残っていない

「どうやらこれならリョウ君達が来る前に片付きそうだな」
「そうですね」

そう言ってクロノが戦闘獣の頭部の上に立ち閃光を放つ
同様にグレートも両腕を飛ばして残りの戦闘獣を貫く
爆発と轟音がフロアを覆う

＊＊＊

そのフロアの最奥では一体の巨大な怪獣が鉄也達の戦い振りを見ていた
そして不気味な笑みを浮べながら自分の出番を今が遅しと待っていたのであった

鉄也達は既に戦闘獣軍団を全て蹴散らしてその場に待機していた

「片付きましたね」
「この程度の相手に俺達の相手が務まる筈が無いのは分かりきっていた事だったがな」

操縦桿から手を離し腕を組んで呟く鉄也
そしてグレートの肩の上に立って額の汗を拭うクロノが居た
二人共少し疲労こそはしていたが目だった損傷や手傷は負っていなかった
後は竜馬達が降りてくるのを待つだけであった

だが、そんな二人を突如謎の振動が襲う

「な、何だ！」
「この振動・・・近いぞ！」

振動の原因を鉄也達は探す

すると、突如目の前から巨大な怪獣が現れた
それは見覚えのある怪獣であった

「まさか・・・」
「此処でまたお前に会うとはな、ギルギルガン！」

そう、鉄也達の目の前には以前ドラゴノザウルスの体内で戦った宇宙怪獣ギルギルガンが居た

「鉄也さん！こいつはあの時の・・・」
「その様だな・・・つくづく獣魔将軍も手持ちが無くなったと見えるな」
「フフフ、大口を叩けるのもこれまでだ！」
「「！！！」」

突如ギルギルガンから発せられた言葉に二人は驚愕の顔をする
そして食い入るような目でギルギルガンを見る

「フフフ、そんなにこの俺が喋るのが珍しいか？今の俺はジュエルシードの力によって以前より力を増しているのだ！貴様等が幾ら束になった所で俺には勝てん！」

ギルギルガンが勝ち誇ったかのような顔で言う
それが鉄也の内なる闘志に火をつけた

「ならばそれが本当かどうか試してやろう！」

そう言うや否や持っていた剣をギルギルガン目掛けて投げつけた
剣はまっすぐにギルギルガンに向かって飛んでいく

「馬鹿め！」

ギルギルガンは片手で投げつけられた剣を払いのける
払いのけられた剣が宙をクルクルと舞う

「まだだ！」

払ったのとほぼ同時にもう片方の手に持っていた剣を投げつけた
だが、それも同じようにギルギルガンは片手で弾き飛ばす

「この程度か！グレートマジンガー！」

拍子抜けだと言いたげにギルギルガンはグレートマジンガーを見る
だが、その時変化に気づいた

「魔道士が居ない！」

そう、さっきまでグレートの隣に居た筈の魔道士が居ないのだ！
一体何処に・・・キョロキョロと辺りを探す
そしてつい先ほど弾き飛ばしたもう一本の剣を見た
剣がクルクルと回っている
その後方に、何とクロノが張り付いていたのだ

「何時の間に！」
「今だ！クロノ」
「はあああああああああ！」

雄たけびをあげながら剣から飛び上がったクロノの持っていたデバイスの先端から青く輝く閃光の剣が現れる

「ブレイズ・ブレエエエエエエエエエエエエエド！」

青白い閃光が剣を払いのけた腕を切り裂く
肩からザックリと持っていかれ、切断された腕から血飛沫（ちしぶき）の如くオイルが噴出す

「なにぃ！まさか先ほどの剣はこの囮だったと言うのか！」
「いや、違うぜ！」

上方からグレートの声がした
見上げると、上に払いのけた剣を掴むグレートの姿があった

「貰ったあああああああああああああああ！」

叫んで残った腕を切り裂く
こちらからもオイルが噴出す
一瞬にして両腕を切断されたギルギルガン
グレートとクロノは一旦距離を開ける

「どうだ！」

両腕を失い佇むギルギルガンに勝ち誇った顔で鉄也は言うだが、ギルギルガンは笑っていた

「馬鹿め！」

その刹那、切断された腕から突如同じ腕が生えてきたのだ
ギルギルガンは生えてきた腕を数回動かして動作を確認する

「何！」

「再生した！」

二人は驚いた
まさかギルギルガンにこんな能力があったとは
そんな二人の変化を楽しむかのようにギルギルガンは言う

「俺は貴様等が今まで戦って来た奴等の能力を持っているのだ！これはあのドラゴノザウルスの再生能力よ」
「何だと！」

厄介極まりない相手であった
只でさえ強いギルギルガンに再生能力が備わってしまうとは
だが、それだけでは無かった

「今度はこれを食らえ！」

突如ギルギルガンの目が光黄発色の閃光が走った

「危ない！」

咄嗟に二人はかわす
閃光は遥か後方の壁に溶け込んでいく
そして、数秒後に凄まじい爆発を起こした

「え？時間差で爆発した？」
「あれは・・・まさか！光の矢！」
「その通りだ！これは貴様が良く知っているピクドロンの能力よ！」

ギルギルガンは更に連続して光の矢を発射する
鉄也達はそれを必死になって回避していく

「鉄也さん！この光の矢と言うのは一体・・・」
「気をつけろクロノ！これに当たれば一巻の終わりだぞ！」

光の矢を知らないクロノに鉄也はそう言う
それにクロノは首を傾げた

「どうしてですか？」
「あれは装甲も防御魔法も関係無い！内部に入り込んで爆発するんだ！生身の人間が食らえば只じゃ済まないぞ！」

と言って胸の放熱板からブレストバーンを放つ
放たれた熱線はギルギルガンの顔に当たりそれを吹き飛ばす
恐らく頭部が弱点なのだろうと思っての一撃である
だが、

「悪いな・・・其処は弱点では無いのだよ」

と言いながらまた頭部が生えてきた

「くそ！奴は不死身なのか？」

鉄也が愚痴る

「クハハハハ！これでも食らえ！」

ギルギルガンが二人に向かって両腕を突き出す
するとそこから無数のミサイルが飛び出す
それこそミサイルの雨霰である
しかもこの狭い空間内では回避のしようが無かった

クロノは防御魔法を展開してグレートは両腕を交差してコクピットを防御した
凄まじい衝撃が二人を襲う

「ぐうううううううう！」
「うわあああああああああ！」

衝撃に二人が苦悶の声を上げる
爆煙が辺りを包み込む
そして爆煙が晴れると、其処からグレートとクロノが現れた
クロノのバリアジャケットは所々が擦り切れており、額から血が流れていた
グレートも体のあちこちに亀裂が入っており、キャノピーにヒビが入っていた
そして鉄也の額からは夥しい量の血が流れており、更には脇腹に鉄の破片が突き刺さっていた

「く・・・ぐうう！」

鉄也はその破片を抜こうと力を込める

「ぐおおおおおおおおおおおおお！」

思い切り引き抜いた箇所から激しい出血が出る
鉄也は出血する脇腹を抑える
そして計器を見る
所々破損はしているが何とか動ける
まだ戦える状態だ
確信して操縦桿を握る
出血のせいか目が霞む

だが、それを首を数回振って元に戻す
今俺は倒れている場合じゃないんだ！
さっさとコイツを片付けなければ

「フフフ、どうした？偉大な勇者とはこの程度だったのか？」

肩膝をついているグレートマジンガーに向かって吐き捨てるように言う

「な・・・舐めるなよ！この程度で倒される俺とグレートじゃないぞ！」

そう言って再び大地に両足を突き刺して立ち上がる

「それでこそマジンガーだ！なら死ねぃ！」

今度は猛然とギルギルガンが突っ込んできた
そのスピードは以前の数倍はいっており完全にグレートは出遅れてしまった

「ふん！」

ギルギルガンの振り上げた拳がグレートの腹にぶち当たる
衝撃の余りグレートの体がくの字に曲がる

「ガハッ！」

鉄也が口から吐血した
その衝撃のままグレートは天井に叩きつけられた

「鉄也さん！」
「人の事を心配してる場合か！」

そう言ってクロノには巨大な尻尾を振るってきた
咄嗟にデバイスで防御姿勢を取るもそれごと吹き飛ばされる

「グアッ！」

痛みの余り声を上げる
そしてそのまま壁に思い切り叩きつけられる
両者を砂煙が包み込む
その中でギルギルガンが雄たけびを上げる

「ガハハハハハハ！よもや偉大な勇者と歌われたグレートマジンガーがこの程度だったとはなぁ！拍子抜けだぞ！グハハハハ！」
「舐めるなあああああああああああ！」

鉄也の怒声が響く
それと同時に砂煙から剣を水平に構えたグレートが突進してきた

「ほう！まだ生きていたのか？」
「うおおおおおおおおおお！」

最早軽口を返す気も失せたらしく、そのまま突っ込んでいく
その剣はそのままギルギルガンの胸部を突き刺す
貫通して剣が背中を突き抜ける

「どうだ！」

流石にこれは効いただろうと思った・・・嫌、思いたかった

・・・だが

「甘いな」

そう言ってギルギルガンはグレートの頭部と右腕を掴む
そして凄まじい力で右腕を引き千切ったのだ
千切られた腕から機械の部品とオイルが吹き出る

「ぐわあああああああああああ！」

鉄也が悲痛の声を上げる

「死ね！グレートマジンガー！」

トドメにと頭部を掴んでいた腕に力を込める
ミシミシとコンドルが歪んでいく
その時、

「ゲッタァァァァビィィィィィム！」
「ディバイィィィンバスタァァァァァ！」

突如ギルギルガンに向かって二筋の桜色の閃光が襲い掛かる
その内の一つはグレートを掴んでいた腕を吹き飛ばす

「くっ！」

頭部への拘束が無くなった事でグレートは距離を開ける
だが、損傷が激しくなったのかその場で膝を下ろす
その隣に降り立ったのは・・・ゲッタードラゴンであった

「大丈夫か?鉄也くん」
「苦戦中みたいだな」
「俺達が来たからもう大丈夫だぜ!」

ゲッターチームがそう言う
すると鉄也はフッと笑う

「どうやら恥ずかしい所を見られちまったみたいだな」

鉄也としては苦戦している所を見られたのは少し気恥ずかしかったようだ
一方で、壁に叩きつけられたクロノの方になのはが駆け寄る

「大丈夫?クロノ君」
「ははは・・・なぁに、これ位大丈夫・・・ウッ!」

咄嗟に脇腹を押さえる
そして状態を確認する
やられた、アバラを何本か持っていかれた
良くてヒビ程度・・・最悪折れてる

「クロノ君!」
「大丈夫!ちょっと油断しただけだよ」

心配するなのはにクロノは笑って答える
そしてゆっくりと飛び上がる
此処で足止めを食らってる場合じゃない!
何としてもこいつを倒さなければ
そう誓って再び両腕でデバイスを構える

だが、内臓へのダメージは思っていた以上に酷いらしくその場で吐血をした

「ぐ・・・くそっ・・・こんな所で負けてたまるか！」

自分に叱咤激励して飛び上がる
なのはもその後を追う
ゲッタードラゴンが肩膝をついたグレートに肩を貸す
あちこちに亀裂が入っており、頭部は歪に歪んでおり右腕は千切られていた
満身創痍と言う言葉で片付けられそうな程の損傷だ

「気をつけろリョウ君！あのギルギルガンにはドラゴノザウルスとピクドロンの能力が備わっているぞ！」
「何だって！」

竜馬は驚く
その目の前には、無傷のギルギルガンが立っていた
嫌、先ほど腕は吹き飛ばしたのだ
また再生してしまったようだ

「よし、今度は俺が相手だ！」

そう言って両肩からトマホークを取り出して飛び掛る
そして上空で2本のトマホークを振り下ろす

「フン！」

だが、それをギルギルガンは切られる前にキャッチしてしまったのだ
上空で固定する形で固まるドラゴン

「な、何！」
「貴様等の戦い方などお見通しだ！」

そう言って再び閃光を放つ
光の矢だ
光の矢はドラゴンの右腕と左足に命中する

「しまった！」

咄嗟に距離を開けるも時既に遅し、ドラゴンの右腕と左足が爆発してしまい無くなってしまった

「うわっ！」

バランスを崩しそうになるのを飛び上がって防ぐドラゴン
だが、そんなドラゴンにギルギルガンのショルダータックルが襲い掛かる

「ぐぅっ！」

衝撃の余り意識が飛びかける
そんなドラゴンに畳み掛けるように尻尾の一撃が襲う
衝撃の為にドラゴンの装甲が凹んでいく
更に腰にあった鎌で首筋と脇腹に突き刺す
突き刺された箇所からオイルが噴出す

「竜馬さん！レイジング・ハート！」
『了解、マスター！』

なのはがギルギルガンに向かってディバインバスターを放つ
それはギルギルガンの翼を吹き飛ばす

「おのれ、小癪な！」

吹き飛ばされたギルギルガンは怒りの形相をなのはに向ける
その顔を見てなのはは凍りついてしまった錯覚に襲われる
そして腕のミサイルが襲い掛かる
だが、錯覚に見舞われていたなのはは動けない
それどころか防御魔法も張っていない
間も無く直撃と言った刹那

「なのはぁ！」

その前に躍り出るようにユーノが現れ防御魔法を展開する
だが、それは瞬く間に破られてしまい爆風がユーノを襲う

「うわあああああああああ！」
「ゆ、ユーノ君・・・きゃあああああああああ！」

同時になのはも吹き飛ばされる
二人は揃って床に叩きつけられる
舞い散る砂煙が二人を包み込む

「なのは！ユーノ！」

霞んだ声でクロノが叫ぶ
だが、返事は返って来ない
それに顔を歪めるクロノ
強い

余りにも強すぎる
クロノの前には激しく損傷したグレートとゲッターが居た
2体の魔神を蹴散らす程の強敵を前にここに居る一同の命は風前の灯火であった

「安心しろ！貴様等全員苦しまないように一瞬で殺してやる！」

そう言って空高く舞い上がるギルギルガン
恐らくトドメを刺すつもりなのだろう
だが、そんなギルギルガンを見て鉄也はフッと微笑む

「フッ、こんなもんで勝ったつもりなのか？俺を・・・俺達を舐めるな！」
「行くぞ！鉄也くん！」
「おう！」

それを追うようにグレートマジンガーとゲッタードラゴンが飛び上がる

「馬鹿め！自ら死に急ぐ事も無いだろうに」

哀れに思うような目で2体の魔神を見る

「お前に見せてやる！俺とグレートの底力をなぁ！マジンパワアアアアアアアアア！」

鉄也が叫んでリミッターを解除する
するとグレートの体から強烈なエネルギーが湧き上がる

「俺達の奥の手を見せてやる！ゲッタァァァァァァシャァァァァ

ァァァァイン！」

ドラゴンが諸手を上げて咆哮する
そんなゲッターを白い閃光が包み込む

「何！まだそんな力が残っていたのか？」
「リョウ君！俺が突き刺した箇所を狙うんだ！」
「オッケィ！行くぞ！」

ゲッタードラゴンは頷いて上空を舞い上がり、そして反転して襲い掛かる

「食らえ！出力全開！サンダァァァァァァァブラスタァァァァァァァ！」
「シャイイイイイイイイイイイイイインスパアアア

爆発した
轟音と爆煙が上空を彩る
その中から機械のパーツが降り注いでいた
その中には黒こげになったギルギルガンの指等があった

「や・・・やった・・・・のか？・・・・」

未だ確信は無い
もしかしたらまた再生するのかも知れない
そんな不安がクロノの中にはあった

「そうだ！なのは！ユーノ！」

クロノは床に吹き飛ばされた二人の元へ向かった
其処には未だに砂煙が舞っていた

「無事か？無事なら返事してくれ！」

クロノは砂煙が舞う場所に向かって大声で叫ぶ
すると

「い・・・いたた・・・」
「だ、大丈夫ですよ・・・」

其処から傷だらけのユーノに肩を貸すなのはが居た
ユーノの額と片腕から血が滴り落ちていた
なのはもバリアジャケットが所々擦り切れてはいるが目だった傷は無い
ユーノが咄嗟になのはを庇ったのだ

「有難う、ユーノ君」
「あはは・・・これ位軽いもんだよ・・・いてて！」

顔を歪めて脇腹を押さえる
恐らくクロノと同じ状態なのだろう

「無理をするからこうなるんだ」
「き・・・君には言われたくないよ」

軽口を叩くクロノをジッと睨むユーノ
そんな二人をなのはは只見てるしか出来なかった
その時、突如グレートとゲッターが上空から落ちて来た
衝撃と砂煙が舞い散る

「て、鉄也さん！」
「竜馬さん！大丈夫ですか？」

3人は動かなくなった2体に近づく
コクピットを見ると、鉄也も竜馬も激しく怪我を負ってはいるが意識はあった

「フッ、そう簡単にくたばる俺じゃねぇよ」
「ああ、俺達もどうにか無事だ」
「よ、良かった～～」

どうやら無事だったらしく、ホッとする

「だが、どうやら俺達は此処までらしい」
「ああ、エネルギーが底をついちまった・・・すまんが・・・こっから先は君達だけで行ってくれ」

「竜馬さん・・・・鉄也さん・・・分かりました！」

なのはは強く頷いた

それを見て二人はフッと微笑む

そんな彼等を残してなのは、ユーノ、クロノは下へ向かった

果たして、甲児とフェイトとアルフは無事だろうか？

そんな一抹の心配が今のなのは達を突き動かしていた

決戦！時の庭園！！中篇2（後書き）

強敵ギルギルガンを倒した一行
しかし全てのエネルギーを使い果たしグレートとゲッターは動かなくなってしまった
仕方なく2体の魔神を残してなのは達は下を目指した
その時、甲児達は・・・

続きは後編で！

解説7（前書き）

今回は強敵とオリジナル技について説明します

解説7

ギルギルガン（改）

ドラゴノザウルスの体内で戦ったギルギルガンを獣魔将軍がジュエルシードを使用して改造した怪獣
基本性能の向上の上、ドラゴノザウルスの再生能力とピクドロンの光の矢を持つ
尋常じゃない強さで鉄也達を追い詰めるもグレートとゲッターの捨て身の攻撃により相打ちの末破壊された

ブレイズブレイド

クロノオリジナルの魔法
「ブレイズキャノン」のエネルギーを発射せず固定させる事で剣状にした物
使用頻度は少ないがいざという時の威力は中々の物
初めての使用でギルギルガンの腕を切断すると言う快挙を成し遂げた

サンダーブラスター

グレートのオリジナル技であり最後の奥の手
グレートの中にある全エネルギーを変換して叩きつけるもの
威力はサンダーブレークのおよそ数倍にもなる
だが、全エネルギーを使用する為、事実上一回しか使えない

解説7（後書き）

以上です

決戦！時の庭園！！後編（前書き）

2体の戦闘獣に大苦戦
そして満身創痍のメンバー
果たしてどうなる？

決戦！時の庭園！！後編

甲児とマジンガーZは身構えていた
その前には2体の戦闘獣が居た
紫の色に胸に二つの奇妙な仮面を取り付け、両腕が尖った戦闘獣グラトニオス
魚のような口と鱗を持ち四本足で歩く戦闘獣ビラニウス
2体の戦闘獣がこちらを睨んでいた
甲児の脳裏にある言葉が過ぎる

『別の世界でマジンガーZを叩き潰した戦闘獣』

本当にマジンガーは負けたのか？
確かにあの時、甲児は獣魔将軍の率いる戦闘獣軍団に苦戦を強いられた
無数に居る戦闘獣軍団に超合金Zは砕け、溶け、あるいは裂けた
そこへ鉄也の操るグレートマジンガーの協力により甲児は獣魔将軍と戦闘獣軍団を倒す事が出来たのだ
だが、今此処に居る獣魔将軍の話しによると別の世界に居るマジンガーはこの2体の戦闘獣により完膚なきまでに倒されたと言う話に聞こえた
信じられなかった・・・信じたくなかった

「ええい！何を弱気になってるんだ！此処で俺が負ける訳にはいかねぇんだ！」

かぶりを振って弱気な考えを吹き飛ばす
そして2体の戦闘獣を見る
突如ビラニウスが纏っていた鱗を飛ばしてきた

黒の混じった緑色の鱗が無数にもマジンガーZに向かってくる
甲児はその鱗が本能的に危険な物だと察し咄嗟にかわす
かわされた鱗はその後方の壁に張り付く
まるで蛸の吸盤のように張り付いてしまったのだ
そして、その鱗を中心に壁一体が腐食しだしていった
その光景に甲児はギョッとなる

「何だ！壁が腐り出したぞ！」
「フフフ、ビラニウスの鱗はどんな材質でも腐らせてボロボロにしてしまうのだ！それは超合金Zも同じ事よ！」
「何だって！」

獣魔将軍の言葉に甲児は目を見開いた
だとしたら奴の鱗を食らう訳にはいかない
すると今度はグラトニオスが頭の角を振るわせ出した
一体どんな攻撃なんだ？
そう思っていると、突如甲児の体に激しい痛みが走った

「ぐあっ・・・音波攻撃か？」

甲児は理解した
あの角を震わされたらこっちは動きを封じられてしまう
何とかしなければ

「くそぉ！」

咄嗟に甲児は光子力ビームのスイッチを押した
マジンガーZの両目から閃光が放たれる
だが、グラトニオスもそれを返すかの如く胸に備わっていた二つの仮面から赤い閃光を放つ

それはマジンガーの光子力ビームを弾き返し吹き飛ばす

「うわあああああ！」

甲児は叫んだ
とんでもない奴だ
本来なら戦闘獣を相手にしても今のマジンガーなら充分に渡り合える筈だったのだ
だが、今の相手はジュエルシードで強化されているのだ
絶対に侮れる相手では無い事は理解出来た

「甲児さん！」

その戦いを近くで見ていたフェイトとアルフが心配そうな顔をしていた
そんな二人を甲児は見下ろす

「此処は俺に任せてお前は早くおっかさんを助けろ」

少し厳しめな口調で甲児は言う
フェイトはそれ以上何も言わず黙って頷いた
そして獣魔将軍の奥で倒れている母プレシアを見た

（母さん）

心の中でフェイトは呟いた
今までは獣魔将軍が憑依していた為母の本心を聞いていないだから聞いてみたい
母は・・・本当はどう思っているのか
自分の事をどう思っているのか

好きなのか・・・それとも・・・
聞きたい
母の口から直接聞きたい
だから今は何としても助けなければ
その思いがフェイトを突き動かした

「行くよ、アルフ！」
「あいよ！」

アルフは笑って答えた
アルフも同じであった
今までフェイトを傷つけてきたのは母プレシアでは無く目の前に居る獣魔将軍だったのだ
だが、もしプレシアの本心が獣魔将軍と同じであったとしたら・・・
きっとフェイトは深く傷つく筈だ
それを許して良い物なのか
咄嗟に暗い考えになった自分の頭を横に激しく振って考えを変える
今は何よりプレシアとアリシアを助ける事だけを考えよう
そう自分に言い聞かせた

「あたしが注意を引くからその隙にフェイトは二人を奴から遠ざけて！」
「うん、有難うアルフ」
「お安い御用だよ！」

ニッとフェイトに微笑みかけてアルフは言う
そして猛然と獣魔将軍に向かっていく

「フン、また出来損ないの貴様か？」
「こないだの借りを返しに来たよ！」

そう言って握っていた拳を思い切り突き出す
だが、その拳は獣魔将軍の目の前で見えない何かによって防がれてしまった

「これって、防御結界！？」
「フハハハハ！俺の体には奴の集めた９つのジュエルシード（フェイト）を埋め込んでいるのだ！その程度の魔力など効く筈が無いだろう！」

大笑いしながら言う
そして手に持っていた巨大なトマホークを横薙ぎに振るってきた

「クッ！」

咄嗟にジャンプしてかわす
だが、そんなアルフに人の形を模した腕が襲い掛かる
鋭い牙がアルフの肩口に突き刺さる
激しい痛みと鮮血が飛び散る

「くあああああああ！」

悲痛の叫びを上げるアルフ

「アルフ！」

フェイトは咄嗟にアルフの方を見る

「あ、あたしに構わないで・・・早く！」
「そんなの・・・そんなの出来ないよ！」

アルフの申し出を断ってフェイトは獣魔将軍に自身のデバイスから
生み出した光の刃を放つ

「はあああああああああああ！」
「馬鹿め！」

フェイトの放った光の刃は獣魔将軍の持っていたトマホークにより
防がれてしまった
そしてそのままフェイトを地面に叩きつける

「あうっ！」

衝撃の余りにフェイトはバルディッシュを手放してしまう
無防備になったフェイトに獣魔将軍のトマホークが突きつけられる

「ふぇ・・・フェイトォ！」

アルフは必死に自身に噛み付いた牙を剥がそうともがいていた
だが、もがけばもがく程その牙が深く食い込んでいく
その度にアルフの顔が苦悶に歪んでいく
そんなアルフになど目も暮れずに獣魔将軍はフェイトを見る

「フン、所詮は出来損ないのガラクタよ・・・お前はもう用済みだ
！死ねぃ！」

獣魔将軍がトドメを刺そうとトマホークを振り上げる

＊＊＊

甲児は2体の戦闘獣を相手に苦戦を強いられていた

「くそぉ！これでも食らえ！」

甲児は武器のスイッチを押す
するとマジンガーの口から強烈な酸を含んだ風が吹き付けられる
ルストハリケーンである
だが、その猛烈な風を食らっても2体は全く動じないでいた

「ルストハリケーンが効かない・・・ならこれならどうだ！」

意を決して右腕を飛ばす
ジェット噴射しながら肘から下の腕が飛んでいく
マジンガーZのロケットパンチだ
だが、グラトニオスがその腕に向かって先ほどZを吹き飛ばしたビーム砲を放つ
それを食らった腕が粉々に吹き飛んでしまった

「馬鹿な！マジンガーの腕が・・・」

甲児は驚愕の表情になった
まさかマジンガーの腕が破壊されるとは
信じられない事であった
その時、突如横面から無数の緑色の物体が飛んできた
ビラニウスの鱗である

「しまった！」

完全にグラトニオスに気を取られていた結果である
マジンガーZの体中にはビラニウスの鱗が無数にも張り付いてしまった
しかもその鱗を中心にZの体を構築していた合金「超合金Z」が腐食してしまったのだ

「超合金Zが・・・超合金Zが腐っていく・・・」

信じられない光景であった
ビラニウスの鱗を食らった箇所を中心に徐々に腐食が進んでいた
装甲は腐っていき脆くなってしまっていた

「くそぉ・・・俺は・・・俺はこんな所で負ける訳にはいかねぇんだ！」

自分自身にそう言い聞かせる
此処で負ければ今までの戦いが全て無駄になってしまう
上で戦っていた鉄也や竜馬、なのはやクロノやユーノ達の戦いも全て無駄にしてしまう事になるのだ
そんな事はさせる訳にはいかない
絶対にそんな事はさせない！

「負けられねぇんだ！」

そう言って胸の放熱板から熱線「ブレストファイヤー」を放つ
だが、それもまたグラトニオスの放ったビーム砲により弾き返されてしまう
その上グラトニオスのビーム砲はマジンガーの片方の放熱板を破壊する

その衝撃で再び吹き飛ばされるマジンガーZ
倒れた拍子にジェットスクランダーの片翼が折れてしまった

「畜生・・・何て強いんだ・・・俺が・・・マジンガーZが・・・
こんな奴等に負けるのか・・・」

甲児の額からは赤い雫が流れていた
生暖かい、血であった
どうやら戦闘の際に切ってしまったようだ
同時に頭に激しい痛みが起こる
視界が緩んできた
だが、それをかぶりを振って元に戻す
気絶なんかしてられない！こうしている間にもフェイト達が危険に晒されてしまうのだから
俺が倒れる訳にはいかない！
立つんだマジンガーZ
自身にそう言い聞かせて操縦桿を握る
ゆっくりとZが起き上がる
片腕を失い体中を腐食され放熱板を片方失いスクランダーも片翼が破損してしまったボロボロの状態である
だが、その目には未だ闘志が燃え上がっていた

「てめぇにだけは負けられねぇ！行くぞ！」

地響きを立てて目の前に戦闘獣に向かって駆け出すZ
ビラニウスが更に鱗を飛ばす

「うおおおおおおおおおお！」

咄嗟の判断だったのだろう

甲児はZの背中に装着されていたスクランダーを取り外し盾の様に
前に突き出した
ビラニウスの放った鱗は全てスクランダーが受けてくれた

「すまねぇスクランダー・・・お前をこんな風に使っちまってよぉ・
・・これでも食らえぇぇ！」

反撃にとビラニウス目掛けてスクランダーを投げつける
ジェット噴射をして最後の役目を果たそうと突っ込んでいく
だが、それはビラニウスの口から放たれたミサイルによって脆くも
崩れ去ってしまった
爆煙と轟音がスクランダーを包み込む
その中からスクランダーの破片がバラバラと落ちていく
無駄死にであった
畜生、折角皆が作ったスクランダーが・・・
甲児の中に無念の思いが募った
その隙を見逃すような戦闘獣では無かった
グラトニオスが鋭い腕を振り上げて突き出した
それに対し甲児の回避は完全に遅れてしまい胴体にグラトニオスの
腕が突き刺さってしまった
そしてそのまま上空でブンブンとマジンガーを振り回す

「うわあああああああああああ！」

甲児が悲鳴を上げる
上げながらも甲児はコクピット内で苦しそうにもがいていた
そんなマジンガーをそのまま地面に思い切り叩きつける
轟音と砂煙が舞う
グラトニオスが突き刺した腕を戻す
そのまま暫し静止する

砂煙が晴れると、其処には両目から光を失い壁にもたれかかるように力尽きたマジンガーZの姿があった

＊＊＊

獣魔将軍が正にフェイトに向かってトマホークを振り下ろそうとしたその突如であった

「フェイトちゃん！」

上空から天井を破ってやってきたなのはがレイジング・ハートを水平に構えてトマホークを受け止める

「な、なのは！」
「フェイトちゃん！今の内に早く」
「う、うん！」

フェイトはこの隙に咄嗟に距離を開けて離れに落ちていたバルディッシュを拾う
それを見てなのはも同様に一旦獣魔将軍から距離をあける
それからユーノとクロノもやってきた
二人共酷い怪我をしている
恐らく相当激しい戦闘があったのだろう
それに、もう一つ気になった事があった
それは、鉄也達が居ない事だ

「なのは！鉄也さん達は？」
「鉄也さんと竜馬さん達は上の階での戦いでエネルギーを使い果たしてしまったんだ。だから今は僕達だけで来たんだ」
「そうだったの！」

クロノの言葉にフェイトは納得した
そしてクロノはデバイスから青い閃光を放ってアルフに噛み付いていた腕を引き剥がす

「さ、サンキュー・・・」

弱った顔で肩口を押さえてアルフは言う
だが、肩口の出血はかなり酷かった
治療魔法を施したかったが、今はそんな事をしている場合では無かった

「フン、これで上に行く手間が省けたと言う物よ！貴様等纏めて始末してくれるわ！」

そう言うと獣魔将軍の足を担っていた巨大なトカゲの口から強烈な炎が噴出された
なのは達は一斉に散らばって回避する
なのは、フェイト、クロノの３人はかわし様に魔弾を放つ
魔弾の衝撃により砂煙が獣魔将軍を包む

「やったの？」

誰もがそう思えた
・・・だが、

「危ない！」

クロノが咄嗟に二人の前に陣取る
その直後砂煙の中から巨大なトマホークが飛んできた
トマホークはクロノのデバイスを破損させて更に肩口を深く切りつけた

「ぐぁっ！」

トマホークで切りつけられた箇所を押さえてクロノが呻く
そんなクロノに二人が駆け寄る

「く、クロノ君！」
「大丈夫？」
「くっ・・・油断した・・・」

出血により青ざめた顔で砂煙の向こうを見た
其処には全く無傷の獣魔将軍が立っていた

「フン、そんな豆鉄砲で俺を倒せると思っているのか？」

獣魔将軍が鼻で笑う

「「バインド！」」

そんな獣魔将軍をユーノとアルフがバインドで動きを封じる
だが、アルフは肩を損傷している為片手であった

「こ・・・これなら・・・動けないだろ！」
「なのは！今の内に」

「馬鹿め・・・」

獣魔将軍はバインド全てを一まとめにして掴む

「食らえぃ！」

そして手を中心に凄まじい電撃が伝わる

そのままユーノとアルフに凄まじい電撃が浴びせられる

「うわあああああああああああああ」

「くあああああああああああああ」

二人は悲鳴を上げる

途中でブチンとバインドが千切れる

その場所で二人は力なく倒れる

そんな二人の体から黒い煙が舞い上がる

「アルフ！」

「ユーノ君！」

なのはとフェイトが名を呼ぶも返事が無い

恐らく気を失ったのだろう

こちらではクロノも出血の余り意識がほぼ無い状態である

「グハハハハ！弱い、弱すぎるぞ！さぁ後はお前等二人を抹殺すれば俺の勝利だ！」

「そんな事無い！まだ甲児さんが居るよ！甲児さんなら絶対に貴方には負けないよ！」

フェイトが自信を持って言う

「それはあれの事か？」

獣魔将軍は顎で指す
二人はその方を見た
それは、２体の戦闘獣の手によりボロボロにされて力尽きたマジンガーＺの姿があった

「そ・・・そんな！」
「甲児さん・・・い・・・いやあああああああああああああ！」

なのはは信じられないと言った顔をしており、フェイトは絶叫した
信じられない
マジンガーＺが負けるなんて
信じたくなかった
だが、今目の前に佇んでいるのが現実なのだ
そう、マジンガーＺは負けたのだ
何時もどんな相手でも決して負ける事は無かったあのマジンガーが
常に皆の希望となってくれたあのマジンガーが

・・・負けた

その光景が二人を絶望に突き落とした
なのはもフェイトも信じられないと言った顔をしていた
特にフェイトに至っては瞳が濁っていた
相当のショックを受けたようだ

「フフフ、残すはお前達だけだ！死ねぃ！」

そう言ってトマホークを振り上げる
だが、その時突如十間将軍の背後から何者かが掴んできた

「な、何だ！」

異変に気づき、後ろを振り向いた
其処には、

「か、母さん！」

其処には先ほどまで倒れていたプレシアが獣魔将軍の髪を掴んでいた

「これ以上・・・貴方の好きにはさせないわ！」

そう言ってプレシアは獣魔将軍に向けて自分の魔法である電撃を浴びせた

「ぐおおおおおおおおあああああああああ！」

獣魔将軍は苦しんだ
流石は大魔道士であった
なのは達では傷一つ負わせる事が出来ない相手にダメージを与えているのだから

「貴方の中にあるジュエルシード・・・返して貰うわよ！」

そしてその背中に向かって自分の腕をめり込ませる
彼女の手にカチンと鉱石の反応があった

「これね！」

手を取り出すと、其処には一つのジュエルシードが握られていた
だが、其処までであった

「いい加減にしろ！」

と言って腕を伸ばしてプレシアの頭を掴み投げ飛ばす

「母さん！」
「プレシアさん！」

飛ばされたプレシアをフェイトとなのはが受け止める
そしてゆっくりと地面に降ろす

「ふぇ・・・フェイト・・・こ、これを・・・」

かなり弱った声でプレシアは腕を伸ばす
其処には血まみれの手に握られたジュエルシードがあった
フェイトはそのジュエルシードを見てハッとした

「これって・・・あの時の・・・」

そう、プレシアの手に握られていたジュエルシードこそ、かつてなのは、フェイト、そして甲児と鉄也の４人で封印したジュエルシードであった
フェイトはプレシアの手からジュエルシードを受け取る
そしてじっと見た

「フェイトちゃん・・・」
「なのは・・・ジュエルシードはその人の願いを具現化するって言

ってたよね？」
「うん・・・確かそうだよ」

フェイトの問いになのはは頷いた
するとフェイトはジュエルシードを見る

「どうするの？フェイトちゃん」
「これに・・・私の願いを込めてみる」
「え？」

なのはは首を傾げる
そんな中、フェイトはマジンガーの方を向いて立ち上がる

「お願いジュエルシード・・・甲児さんとマジンガーZにもう一度
戦う力を・・・立ち上がる力を上げて！」

ギュッと握り締めて願う様に言う
そしてカッと目を見開く

「お願い、ジュエルシード！いっけえええええええええええええ
！」

フェイトは渾身の力と願いを込めてジュエルシードをマジンガーZ
に向けて投げる
投げられたジュエルシードはフェイトの願いを聞き届けるかのよう
に高く高く舞い上がりマジンガーZの元へと飛んでいく
そして、吸い込まれるようにそのジュエルシードはマジンガーZの
額に入っていく

＊＊＊

「う・・うう・・・」

甲児は目を覚ました
そしてハッとした
何と、自分が気絶する前には完全に消え失せていた筈の格計器に再び火が灯ってきたのだ
そして何より甲児が驚いたのはエネルギーメーターであった
何とメーターは『F』を振り切ってそれより先を指していた
どんどんエネルギーが上昇していく
それこそ底が知れない程であった

「ど、どうなってんだ！」

訳が分からず甲児は呟く
すると、甲児の頭に声が響いてきた

（甲児さん！）
「この声！フェイトか！」
（甲児さん！立って！立ち上がって！）
「間違いない！これはフェイトの声だ！」

甲児は理解した
間違いない
今甲児の頭の中に響いているのはフェイトの声であった
フェイトの強い想いが甲児の中に響いてきたのだ

（甲児さん！立ち上がって！絶対に負けないで！）
「負けないで・・・か・・・」

その声を聞いて甲児はフッと笑う
思えば自分はあの2体の戦闘獣に敗れてこうなったのだ
既にマジンガーはボロボロの状態だ
最早戦える状態では無い筈だ
そう言って破壊された方の腕を見た
そして度肝を抜かれた

「な、何でだ！」

其処には破壊されて既に無い筈のマジンガーの腕があった
更には胸の放熱板も元に戻っていた
それどころか体中の傷と言う傷が全て綺麗に無くなっていたのだ
しかも、それだけでは無かった
何とマジンガーの体の色が変わっていたのだ
以前の黒い色から赤い色に変わっていた
それだけではない！
体中から力が湧き上がってきた
まるで炎のように燃え上がる感じだ
再び甲児の中に闘志が湧き上がってきた
此処までされて負けたらそれこそ兜甲児の名折れだ！
そう心の中で呟きながら操縦桿を握る
熱い
まるで燃え上がる鉄の棒を握っているかのようだ
それこそ長く握っていたら腕が焼けてしまいそうな程だ
だが、不思議と離す気にはならなかった
それどころか今の甲児にはこの熱さが非常に心地よかった

体中から溢れんばかりのエネルギーが湧き上がってくる

「うおおお

それどころか逆にビラニウスの鱗が熱で溶けて蒸発してしまったのだ
その光景に驚くビラニウス
勿論獣魔将軍も驚いていた

「馬鹿な！ビラニウスの鱗を溶かすとは・・・ええい！グラトニオス！お前の音波攻撃で兜甲児を殺せ！」

グラトニオスが再び頭の角を震わせて音波攻撃を掛ける
甲児の体に激痛が走った
だが、以前のようにのた打ち回っては居ない
それどころか更に硬く操縦桿を握る

「うるせえええええええええええええええええええええええええ！」

大声でそう叫ぶ
それに呼応してマジンガーの瞳が眩しく輝き咆哮を発した
その咆哮は音波を放っていたグラトニオスの角を全て叩き折り、更にはその装甲をボロボロにしてしまった

『グギャアアアアアアアアア』

立場が逆転してしまった
今度はグラトニオスとビラニウスが悲痛の叫びを上げる

「この野朗おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

勢いそのままで甲児の操るマジンガーZがビラニウスに襲い掛かる
そして両腕でガシッとビラニウスの頭部を掴み上げる
凄まじい蒸気が湧き上がる

そして徐々にビラニウスの頭部が溶け始めた

『ギャアアアアアアアアアアアアア』

ビラニウスが断末魔の悲鳴を上げる
苦し紛れにマジンガーに向かって鱗を飛ばすも全て張り付いた途端に熱で溶かされてしまった

「効かねぇって言っただろうが！この魚野朗がああああああああ！！！」

思い切り地面に叩きつける
そして今度は尻尾を持ってブンブンと振り回す
そのままの勢いで壁に向かって投げ飛ばす
ビラニウスは頭から壁に叩きつけられた
溶けて弱くなった頭部が壁に叩きつけられた事により完全にひしゃげてしまった
グラトニオスが再びマジンガーを串刺しにしようと今度は両腕を突き出していく
マジンガーはそんなグラトニオスに対し微動だにせず構える

「来やがれえええええええええええええ！」

甲児の怒声が響く
それに答えるかのようにグラトニオスが突っ込んできた
一瞬の静寂が襲う
側から見たらマジンガーの体をグラトニオスが貫いたようにも見えただが、

『ギャアアアアアアアアアアアアア』

悲痛の叫びを上げたのはグラトニオスであった
その先端はグシャグシャに潰れており、反対にマジンガーの体はビクともしていない
そんなグラトニオスの両腕を掴んで思い切り振り回す

「さっきのお返しだ！好きなだけ回りやがれえええええええええええええええ！」

以前のグラトニオス以上のスピードで振り回してそう叫ぶ
そしてビラニウスが突き刺さっていた方の壁に向けて投げ飛ばす
グラトニオスとビラニウスはお互いにぶつかりあって激しく損傷する
最早まともに動けない状態であった
体中はヒビと亀裂だらけになり腕は損傷してしまい火花が舞い散っていた

「てめぇらの最後は地獄の炎でバーベキューだ！ブレストォォォォファイヤアアアアアアアアアアアア！」

両腕を突き出してマジンガーの胸の放熱板から熱線が放たれる
だが、その威力は以前の数倍・・・嫌、数十倍は行くであろう程であった
マジンガーの放った熱線は2体を飲み込みそのまま壁をブチ破って時の庭園の一角を吹き飛ばした

「お・・・おのれぇぇ・・・こうなったら俺自ら叩き潰してやる！」

そう言って獣魔将軍はトマホークを頭上に振り翳した
すると稲妻が降り注ぎ獣魔将軍の姿が２０ｍの巨大な姿になった

「ガハハハ！たかが一個のジュエルシードを取り込んだ位で良い気になるなよ！こっちにはまだ八個のジュエルシードがあるのだ！死ねぇ！」

そう言って持っていたトマホークを思い切りマジンガーに向けて振り下ろす
だが、それをマジンガーZは片手で受け止めてしまった
その光景に驚愕する獣魔将軍

「な、なにぃ！」
「おい・・・こんなもんかよ獣魔将軍・・・なら・・・俺達の勝ちだあああああ！」

そう叫んで持っていたトマホークを握りつぶした

「ば・・・馬鹿な！」
「今までのお礼だ！たっぷり食らわせてやるぜ！おおおおおおおおりゃあああああああああああ！」

飛び上がりマジンガーの鉄拳が獣魔将軍の顔面に当たる
叩きつけられた顔面は歪に歪み数本の歯が抜け落ちた

「げぎゃあああああああああああ！」

悲痛な叫びを上げて吹き飛ぶ
だが、そんな事を甲児が許す筈が無い

「おっと、逃げんな！」

ガツッと尻尾を掴んでそのまま近くの壁に思い切り叩きつける

轟音と砂煙が舞う足を担っていたトカゲが痛みの余り叫び出す
そんな事など気にせず今度は床に叩きつける

「ぐぇぼおおおおおおおおおおおおお！」

口から吐血しながら叫ぶ
天に向かって吐いた血はそのまま獣魔将軍の顔に降り注いだ

「まだまだ！これも食らえええええええええ！」

今度は獣魔将軍に馬乗りの体制になって何度も顔面を殴りつける
その度に衝撃で地面に亀裂が走る
獣魔将軍の顔が徐々に歪な形になっていく

「や・・・やべろおおおお！やべでぐでえええええええええ！」
「うっせえええ！てめえがプレシアさんやアリシアちゃん、それにフェイトやアルフ達にしてきた事に比べたらまだ足りねぇ位だ！今からたっぷりとお返しさせてやるぜ！」

そう言って先ほどアルフに噛み付いた腕を掴む

「まずはアルフの分だ！！！」

そして力任せに引き千切った

「ぎゃあああああああああああああ！」

痛みの余り叫び出す獣魔将軍
マジンガーは持っていた腕をそのまま握りつぶした
グシャァと音を立てて腕が粉々になる

そして今度は足を担っていたトカゲの頭を掴み上げる

「次はプレシアさんとアリシアちゃんの分！！！」

そしてそのままトカゲの頭部を握り潰してしまった

『グギャアアアアアアアアアア！』

トカゲが断末魔の悲鳴を上げる

獣魔将軍もまた悲痛の叫びをあげたそんな獣魔将軍を甲児の乗ったマジンガーは頭上に持ち上げる

「最後はてめぇに弄ばれたフェイトの分だ！！！」

「な、何をする！止めろ・・・止めてくれえええええええええええ！」

「てめぇの面なんざ見たくねぇぜ！とっとと消え失せろおおおおおおおおおおおお！」

そう叫んで思い切り腕を左右に振った

それにより獣魔将軍は上半身と下半身で真っ二つに千切られてしまったのだ

「ぐあああああああああああああああああああああ」

断末魔の悲鳴を上げて獣魔将軍は事切れる

獣魔将軍を片付けてたマジンガーはゆっくりとした歩みでフェイト達に近づく

「こ・・・甲児さん・・・」

「へへ、やったぜ！フェイト」

甲児は親指を立てて自信有り気に言う
するとそっと腕を広げて置く
フェイトは先ほどの戦いを見て少し不安になった
ビラニウスの鱗を燃やし尽くした程の高熱を放った程の腕なのだ
触れれば自分も燃やされるのだろうと思えた

「大丈夫さ、触れてみな」

甲児は笑ってそう言う
その笑顔を見てフェイトは恐る恐る赤くなったマジンガーの手に触れる
するとその手は熱くは無く・・・むしろ温かかった
何処か安らぎの感じられる温かさであった

「温かい・・・それに・・・何だか凄く優しい感じがする」
「お前が俺にくれた力だ」
「え？」
「お前の想いをジュエルシードが答えてくれたんだ・・・それがそのまま俺の力になった・・・有難うな、フェイト」

甲児はニッコリと微笑む
そしてフェイトはすぐ隣に居た女性に視線を置く
其処には紫色の長髪をした女性が座っていた
プレシア・テスタロッサ
かつては母の為と思ってジュエルシードを集めてきた
だが、その母は獣魔将軍に操られていたに過ぎなかった
その為獣魔将軍がフェイトを殺す為に日々フェイトに酷い仕打ちをしてきたのだ
だが、フェイトは母プレシアの本心を知らない

もしかしたら、プレシア・テスタロッサもまた獣魔将軍と同じようにフェイトの事を使い捨ての駒と思っているのかも知れない
そんな思いがあった
でも、それでも本心を聞きたい
フェイトはそんな恐怖心を押し殺してプレシアに近づく

「か・・・母さん・・・」

フェイトがプレシアのそう呼ぶ
横で見ていたなのはと甲児は黙っていた
すると、プレシアはゆっくりとフェイトに向かって手を伸ばす
フェイトは咄嗟に目を瞑る
本能的にそうさせてしまったのだ
だが、フェイトを包んだのは痛みではなk、母の温もりであった

「え・・・」

そっと目を開く
それは、母プレシアがフェイトの事を優しく抱きしめていた

「か・・・母さん!」
「御免なさい・・・フェイト・・・私のせいで辛い目にあってしまって・・・本当に御免なさい・・・」

プレシアが涙を流しながらフェイトに向かってそう言った

「か・・・母さん・・・うぅ・・・」

フェイトの目からも熱い涙が流れていた
初めて知った母の本当の心

初めて聞いた母の本当の声
初めて感じた母の本当の温もり
それがフェイトの目から止め処なく涙が流れた
そして気がついたら母を強く抱き締めていた
それはプレシアも同じであった

「良かったね・・・フェイトちゃん」
「へへ、今日はやけに明かりが眩しいぜ」

なのはは目から流れる涙を必死に拭っており、甲児はそっと視線を背けた
その頬から一筋の雫が零れ落ちる
だが、その突如辺りが振動し始めた

「な、何！」

なのは達は辺りを見回す
すると、ボロボロになったクロノ、ユーノ、アルフがやって来た

「クロノ君！」
「皆！大変だ！時の庭園が崩壊を始めたんだ！早く脱出しないと！」

クロノが言う
それを聞いた皆が驚愕する

「そ、それって・・・もしかしてすこぉしヤバイんじゃない？」
「嫌、かなりヤバイ・・・早く脱出しないと」

クロノがそう言ってマジンガーを見る
だが、そこである事に気づいた

マジンガーの背中には紅の翼「ジェットスクランダー」が無かったのだ

「こ、甲児さん！ジェットスクランダーはどうしたんですか？」
「悪いが・・・壊れちまって今は飛べないんだ・・・お手上げだよ」

甲児は諸手を上げてお手上げのポーズを取った
いかにパワーアップしたマジンガーであっても空は飛べないのだ
このままでは時の庭園と運命を共にするだけであった
その時、突如辺りに亀裂が走った

「やばい！此処も長くは保たないぞ！」
「皆マジンガーの元に集まってくれ！」

マジンガーの腕がそっと地面に降ろされる
それに皆が飛び乗る

「待って！お姉ちゃんがまだあそこに！」

フェイトが部屋の奥を指差した
其処には培養カプセルの中で眠っているアリシアの姿があった
だが、その周囲の床が崩れ出した

「不味い！」

急いで駆けるマジンガー
だが、そんなマジンガーの足元の床が崩れ出した

「しまった！」

チッと舌打ちした
咄嗟に手を伸ばすが間に合わない
崩れ落ちた足場からマジンガーとなのは達が虚数空間に落ちていく
それはアリシアも同じであった

「そ、そんな！」
「此処まで来て！」
「ちっくしょおおおおおおおおおおおお！」

甲児が叫ぶ
このまま重力に従って落ちるだけであった
だが、不思議と落下の感覚は無かった

「な、何だ？」

不審に思って上を見上げると、其処には本来居る筈の無い物が居た

「て、鉄也さん！」

なのはは名前を呼ぶ
それを聞いて鉄也は微笑む

「フッ、どうやら間に合ったな」

マジンガーを抱えて鉄也がそう言う
その先では、アリシアの入った培養カプセルを手に持つゲッタードラゴンの姿があった

「竜馬さん！皆無事だったんですね！」
「ああ、お陰様でな」

竜馬がフッと微笑む
その笑みを見て一同にも笑みが浮ぶ

「フェイト・・・この人達が貴方の仲間なの？」
「うん！そうだよ母さん」

グレートマジンガーとゲッタードラゴンを見てプレシアが聞く
それにフェイトが嬉しそうに答える

「それよりさっさと離れよう！このまま居ると時の庭園と運命を共にする事になるからな」
「うへ！そりゃ勘弁だぜ！」

甲児が眉を顰める
そしてドラゴンとグレートは急いで下から庭園を離れた

＊＊＊

アースラの映像では崩れる時の庭園が映し出されていた

「皆！早く脱出して！」

エイミィが必死に叫ぶ
だが、未だに応答が無い

「こりゃぁ！こんなとこでくたばったら地獄に行ってお前等の脳みそ弄くったるぞぉ！」

エイミィの通信機を毟り取って敷島博士が叫ぶ
その後ろでは翼が険しい顔で見届けておりリンディが祈るように手を合わせていた
その時

『こちらゲッターチーム！作戦は成功した！直ちに帰還する！』

通信機越しに聞こえるのは聞き覚えのある・・・そして一番聞きたかった声であった

『皆無事だぜ！勿論プレシアさんもアリシアちゃんも無事だぜ！』
「か・・・艦長！！やりました！作戦は成功です！皆無事です！」
「そう・・・良かった・・・」

リンディはそれを聞いてホッとする
映像の向こうでは2体のマジンガーとゲッタードラゴンが居た
そして、その腕にはなのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノ、プレシア、アリシアが乗っていた

「やったね！フェイトちゃん」
「なのは・・・皆・・・有難う」

フェイトは皆に向かって微笑んだ
その笑顔は、今まで見たどの笑顔よりも綺麗で可愛かった
そう甲児は思えた
やがて、一同がアースラの甲板に降り立つ
そしてそっと手を下ろしてなのは達をそっと降ろす

そのマジンガー達に向かってアースラのクルーが駆けつける
その中にはリンディやエイミィ、それに敷島博士も居た

「クロノ！」

エイミィはボロボロの状態になったクロノを見た
肩からの出血が激しく、かなり弱っては居るが何とか無事であった
ユーノとアルフもボロボロであったがどうにか無事である
なのはとフェイトもバリアジャケットこそボロボロだが何とか無事であった
プレシアも今まで獣魔将軍の意思に逆らっていた為か衰弱はしていたが、どうにか無事であった
アリシアも未だ眠ったままであったが無事である
そして、甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶は皆無事であった

「でも、どうして鉄也さん達は来れたんですか？確かエネルギー切れだった筈・・・それにマジンガーだって」

なのはの目の前には先ほどまでの損傷は微塵も無くまるで新品同様の状態のグレートとゲッターが居た

「それはなぁ」

鉄也は話した

＊＊＊

それはマジンガーがジュエルシードの力でパワーアップを果たした時であった
その丁度真上のフロアでは破損したグレートとゲッターが横たわっていた

「どうだ?リョウ君、機体は動くか?」
「駄目だ、エネルギーも底を付いて動きそうにないな」

竜馬は計器を見た
計器では既にエネルギーは『E』を指しており、ゲッターの瞳には輝きが無かった
それはグレートも同様であった
改良されたギルギルガンとの戦いにより全エネルギーを使い果たしてしまいしかも損傷も激しい為最早動く事すら出来なかったのだ

「やれやれ・・・此処まで来てこれで終わりとはな」
「フッ・・・ちと様にならんな」

隼人がフッと笑う
だが、その時突如下から凄まじい光が発せられた

「な、何だ!この光は?」
「見ろ!エネルギーが!」

竜馬は計器を見た
メーターは『E』からどんどん上がっていっており遂には『F』を超えて更に上昇していた
そして、機体にも変化が訪れていた
何と、破損した箇所が徐々に復元していたのだ

「こ・・・これは・・・」
「やれやれ、どうやら俺達は勝利の女神に好かれてるみたいだな」
隼人がクールな台詞を言う
「よし！俺達も行くぞ！」
鉄也が操縦桿を握る
操縦桿からは熱い感情が伝わってきた
その熱い感情が鉄也を、そして竜馬、隼人、弁慶に力を与えてくれた

＊＊＊

「と、言う訳だったのさ」
鉄也は其処で説明を区切った
「つまり、俺の放った光が鉄也さん達の機体に当たった事で機体が直ったってんだな？」
「そう言う事になるな」
甲児の推測に竜馬が答える
「まさに奇跡ね」

プレシアが呟く

「そうだね、甲児さん達が奇跡を起こしたんだよ」

「へへ、何か照れちまうなぁ」

甲児は鼻を擦ってそう言った

だが、その時、

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

突如後ろから咆哮が聞こえた

一同が振り返る

すると、崩壊を始めた筈の時の庭園が変形しだしていたのだ

それは、時の庭園を取り込んでそれを自分の体に変換した獣魔将軍であった

時の庭園を取り込んだ為かそれと同じ大きさを誇っていた

『グハハハハハ！こうなったらこの力で貴様等を皆殺しにしてやるううううううううう！』

獣魔将軍が咆哮する

だが、その思考は既に崩壊したらしく既に精神が崩壊してしまったようだ

「ジュエルシードを取り込んだせいで精神が乗っ取られたのね」

プレシアがそう推測した

その突如ガクリと膝を落とす

そんなプレシアにリンディが肩を貸す

「すぐに救護班を！」
「は、はい！」

エイミィがすぐに向かう

「へっ、相変わらず懲りねぇ野朗だなぁ！」
「フッ、最後の対決を飾るには相応しい相手だと言う訳だな」

甲児がウンザリした顔で呟き、鉄也が笑いながら言う

「行こう！これで最後にするんだ！」
「さて、化け物狩りの本番と行くか」
「やったろうじゃねぇか！」

竜馬の声を皮切りに隼人、弁慶も意気揚々と機体に乗り込む

「私も行きます！」
「私も！」

其処になのはとフェイトが名乗りを上げた

「ふぇ・・・フェイト・・・」

霞んだ声でプレシアが言う

「心配しないで、母さん・・・全部終らせて来るから」
「リンディさん・・・ユーノ君達の事・・・お願いしますね」
「分かりました・・・気をつけてね」

リンディが皆にそう言う

そして手を翳してそっと呟く
すると足元に魔方陣が展開される
そしてそれは巨大な魔方陣となって辺りを包み込む

「これでこの空間内でなら魔法が自由に使えるわ！頑張りなさい」
「「はい！」」

二人は強く頷く
そして振り返る
其処には既に戦闘態勢になったマジンガー達が居た

「行こうぜ！とっとと決着をつけて皆でパーッと騒ごうぜ！」

甲児の言葉になのはとフェイトはうんと頷いた
それを見て甲児達は笑顔になる
そして巨大化した獣魔将軍を見る

『グオオオ

決戦！時の庭園！！　終

次回予告

今度こそ決着をつけてやる！
覚悟しやがれ！獣魔将軍！！

次回『決着！勝利のＦＤＳ』

次回もこの小説にテイィィィィィィィィィクオォォォォォォォォォォォフ！

決戦！時の庭園！！後編（後書き）

遂に決着！
悪の獣魔将軍に正義と怒りの鉄拳を叩き込め！！

無印編終幕　　決着！勝利のＦＤＳ（前書き）

今回で無印編は終りです

無印編終幕　　決着！勝利のＦＤＳ

アースラの目の前には時の庭園を、そしてジュエルシードを取り込んだ獣魔将軍が居た

「下ははやｙはｈｊフィｖんヴぁをんｌｋ；ｖんヴぉｖの@ｖんじゃいそｖんヴぁｖにお」

だが、その精神は既に崩壊しているらしく言語の理解は不可能であった

甲児が耳障りそうな顔をして言う

「けっ！意味不明な言葉を喋りやがって！鬱陶しいんだよ！」

「だが、確かに大きさは桁外れだな」

「ああ、流石に時の庭園を取り込んだだけの事はあるな」

竜馬達は改めて獣魔将軍の大きさを見た

それはゲッタードラゴンの（身長５０ｍ）実に数十倍はある

その巨体で暴れられたらそれこそ次元崩壊しそうな勢いである

「だが、機体の大きさで勝負が決まる訳が無い！大事なのは皆のチームワークだ！」

「フッ、リョウの言う通りだな。それに此処であんな奴に負けるのは俺も嫌だからな」

「ああ、今度こそ徹底的に叩き潰してやろうぜ！」

ゲッターチームの気合の篭った言葉が飛び交う

「私達も頑張ろう！フェイトちゃん」
「うん！」

なのはとフェイトも互いに頷き合ってそう言う

「うっしゃぁ！行くぜぇ皆！」

甲児の怒声と共にマジンガーZから眩い閃光が放たれる
その閃光はグレートマジンガー、ゲッタードラゴンを飲み込んでいく
そして、閃光が晴れると其処には真っ赤に燃え上がる3体の魔神が居た
3機共真っ赤に燃え上がるようであった

「気合十分！行くぜぇえええええええ！」

甲児の声を皮切りに一斉に獣魔将軍に向かう
マジンガーは飛べない為魔方陣に降り立つ

「ぎゃあああああああああはｈっはｈし、ししししししねねねねねえええええええええ！」

狂った声で獣魔将軍の足を担っていた巨大なトカゲから猛烈な炎が噴出された
まるで真っ赤に燃えるマグマであった
それ程までに強力に見えた
だが、

「食らうか！ブレストォォォファイヤァァァアアアアアアアアアアアアアア！」

マジンガーは逃げずその場で仁王立ちして胸の放熱板から真っ赤な熱線を放った
それらは互いにぶつかり合い激しいプラズマ光を放つ
力は五分であった

「下はアアアあああああはっははあっはっはっはははっはあああああ」
「うおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああああああ！」

マジンガーの足元が僅かに歪む
甲児の顔が徐々に苦悶に歪んでいく

「手を貸すぜ！甲児くん！サンダァァァァブレエエエエエエエエエエエク！」
「食らえ獣魔将軍！ゲッタァァァァビイイイイイイイイイイイイム！」

そんな獣魔将軍に左右からグレートマジンガーとゲッタードラゴンが同時攻撃する
左右からの攻撃は防ぐ手立てが無くそのまま直撃してしまう

「ぐぎゃあああああああああああああああああああああああ！」

獣魔将軍が苦悶に歪んだ声を上げる
両腕がバラバラに吹き飛ばされる

「やったか！」

マジンガーの隣に立ち両腕を失った獣魔将軍を見る

「げえええええええあああああああああああああ」

だが、千切れた箇所からまるで生えてくるかのように腕が再生したのだ

「そんな！」

「再生した！」

その光景になのは、フェイトは驚く

「チッ、伊達にジュエルシード八個を取り込んだって訳じゃ無いみたいだな」

鉄也が舌打ちする

「へん！だったら奴が再生する前にそれ以上の攻撃を叩き込んじまえば良い話じゃねぇか！」

「ええ！そ、そんな攻撃があるんですか？」

「ある！俺達全員の力を一つに合わせるんだ！」

「私達全員の力を・・・一つに」

言ってる意味が分からずなのはとフェイトは首を傾げるだが、甲児、鉄也、隼人、弁慶は理解したようだった

「おっ！って事はいよいよ『あれ』をやるか？」

「ああ、奴を倒すには『あれ』しかないな」

「やろうぜ！『あれ』を」

「『あれ？』」

「『あれ』って何ですか？」
「決まってるぜ！『ＦＤＳ』だ！」

甲児はそう一言言う
それを聞いて二人は何となくだが理解した
そして全員がお互いを見合う

「やるぜ！皆！」
「ああ、これで決めてやる！」
「終りにしよう！俺達の手で」
「フッ、そろそろ化け物狩りも飽きたところだ、決着をつけようぜ」
「腹減ったからよぉ、さっさと片付けて飯にしようぜ！」
「頑張ろうね！」
「うん！」

全員気合十分に答える
その目にはギラギラと闘志が燃え上がっていた

「よっしゃぁ！そんじゃ皆行くぜ！」
”おう！”

皆がそう言い合って一斉に散らばる

「死ね氏ねしねしねしねににんヴぁお@にあｗんｖなおいｗんヴぉいわあ」

完全に狂った獣魔将軍が手に持っていた巨大なトマホークを振るう

「食らうか！ダブルトマホオオオオオオク！」

ゲッタードラゴンが両肩から取り出した2本のトマホークで獣魔将軍のトマホークを切断する

「まずは俺達からだ！ゲッタァァァァビィィィィム！」

先手としてゲッタードラゴンの額から桜色のビーム砲が放たれる

「続けていくぞ！ブレストバァァァァン！」

続いてグレートマジンガーの胸の放熱板から熱線が放たれる

「同時に攻撃しよう！」

「うん！」

なのはとフェイトが同じ箇所にデバイスを構える

「全力全開！スタァァァァライトォォォォ」

「フォトンランサー・ファランクスシフト」

二人のデバイスの先端に強大な魔力が収束される

「ブレイカァァァァ！」

「ファイァァァァァ！」

同時に黄色い閃光と桜色の閃光が放たれる

「これも持っていけ！マジンパワーフルパワー！ブレストォォォォォファイヤァァァァ！」

そして最後にマジンガーZの全開の一撃が放たれる

それらは全て獣魔将軍に放たれる

「げぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」

悲痛の声を上げる
体が徐々に崩壊していく
だが、崩壊した箇所がすぐに再生していく

「ば・・・ばかかかかかk！おおおおお俺ははは不死身だだだだだだだ」
「グダグダうっせえんだよ！今からそのてめぇを塵に変えてやるぜ！」

”うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！”

3体の魔神と2人の魔道士から放たれる閃光が更に大きく、更に強くなった
全員がフルパワーで放っているのだ
それこそ、今にも暴発しそうな勢いである

「フッ、奴が塵と化すか、俺達の機体が空中分解するのが先か・・・こりゃ微妙な勝負だな」
「俺達皆の力はどんな奴にも負けはしない！」
「そうだ！俺達は負けるつもりはこれっぽっちも無い」

隼人がフッと笑いながら言うのを竜馬と鉄也が否定する

「皆の全力全開で！今度こそ倒そうね！」
「うん！絶対に負けない！」

デバイスに徐々にヒビが入ってきた
それでも二人は決して力を緩めない
なのはとフェイトの目は太陽の様に燃えていた

「俺達の全力全開を受けてみやがれえええええええええええええええ！」

甲児が腹の底から叫ぶ
そして、全員が一斉に叫ぶ
その名は・・・

『ＦＤＳ！』（ファイナルダイナミックスペシャル）

全員が魂の声で叫ぶ
そしてその魂の一撃は獣魔将軍の体を焼いていく
再生をするも間に合わない

「がやあああああああああああ！再生が・・・させいがまにあわわんわあああああああああああ！」

獣魔将軍の体はあと頭部を残して全てが塵となってしまった

「いやだいやさいやｓだ＾いでぃおｈヴぁんひあ@いう！おおおおお俺はおれはおｄｈらおえはｎみみみミケーネに帰っててえってｔってえてだだだｓ大将軍になんあななななんなるんだあああああ」

「てめぇの御託は聞き飽きたぜ！迷い言は地獄でいえええええええ

断末魔が聞こえる
それが最後の悲鳴であった
それを最後に獣魔将軍の体は全てが塵と化してしまった
全てが消えてなくなったあと、弧を描いてロケットパンチがZの腕に戻ってきた
それを装着するZ
それを見た一同が確信した
戦いが終ったのだと
自分達が勝利したのだと

「やった・・・やったんだよ！私達」
「うん・・・・うん！」
「やったぜえええええええええええええええええ！」

甲児の叫びと同時にアースラ内に大歓声が響き渡った

「ギャハハハハハ！やりおったわあ奴等！」
「やりましたね！艦長！」
「そうね・・・」

そう言って肩の力を抜きシートに深く腰を下ろす
そんなリンディの肩に翼がそっと手を置く

「やれやれ、結局あんたもかなり力んでたみたいだねぇ？」
「ははは、流石にあんな物を見せられたらね」

苦笑いを浮かべてリンディは言う
その先のモニターには、アースラに甲板に集まる魔神達と魔道士達が居た
すると、マジンガーの額から取り込んだジュエルシードが姿を現す

「やっぱり、取っちゃうんですか？」
「ああ、こいつを使って戦ってた時、何度か心を持っていかれそうになったからな・・・悪いけどこんな危険な力は当分使わないよ」
そう言ってジェルシードを手に取りそっと差し出す
その手には、何時の間にか残り八個のジュエルシードも乗っていた
「え？何で9個あるんですか？」
「あの時咄嗟に奴の体から奪ったんだよ」
「す・・・素早い（汗」
なのはが額に汗を浮かべて言う
それを聞いて辺りに大笑いの声が響き渡った
＊＊＊
獣魔将軍との激闘から数日が経った
甲児達は今とある一室を窓越しに見ていた
そして、その向こうにはリンディとクロノ、それと向かい合うようにプレシアとフェイトが座っていた
「大丈夫かなぁ？あの二人」
「分からんなぁ・・・操られていたとは言え、あの二人は今回の事件の首謀者のような物だからな」

不安になる甲児に鉄也の一言は更に不安を煽った
そう、今回の事件の首謀者は獣魔将軍なのだが、その肉体はプレシアを使っていた為、管理局はプレシアこそが黒幕と思っていたのだ
その為、裁判に二人は掛けられる事になったのだ
今、その事に関する詳しい話をクロノとリンディから説明されている

（・・・これぱっかはどうする事も出来ないんだな・・・）

流石に裁判沙汰になってしまってはマジンガーでもどうする事も出来ない
その為今は少しでも二人の罪状が軽く済むのを祈るしか無かった

部屋の中では重苦しい空気の中、４人が座っていた

「事情は聞いています・・・ですが、例えどんな理由があろうと今回の首謀者である事に変わりはありませんので・・・」
「ええ、分かっています」

リンディの言葉にプレシアは重く頷いた
そんな母を心配そうにフェイトが見つめる

「それでは、この書類を確認して下さい」

片腕を包帯でガチガチに固められたクロノがそっと書類を差し出す
プレシアはそれを受け取り書類に目を通す
そしてギョッとした

「ちょっと、これは一体・・・」
「間違いは無いと思いますよ」

クロノは平然とそう言った
だが、プレシアはその書類を見て口を開く

「な、何で私達が『善意の協力の元ジュエルシードの回収に協力した』と言う事になってるの？」
「ええ、あなた方の協力のお陰で幾分か早く事件が解決出来ましたからね。本当に感謝していますよ」

笑みを浮かべてクロノが言う

「で、でも・・・それじゃ武装局員を攻撃した事や次元崩壊はどう説明するの？」
「あの局員はくろがね屋の人達だったのでこちらには何の損害はありません。それに次元崩壊は偶発的な事故なので裁くに裁けませんよ」
「だからって・・・そんなの証拠を見たらすぐに・・・」
「時の庭園は粉々になってしまいましたからね。証拠は殆どありませんよ」
「あ！」

其処でプレシアは思い出した
そう、一番の証拠物件であった時の庭園はマジンガー達の手により完全に破壊されてしまったのだ
今では塵も残っていない

「いずれにしても、証拠不十分で罪は問われませんね、そこに書いてある書類の通り、多少の保護観察はあるでしょうがあなた方は『無罪』です」
「く・・・クロノ君・・・」

フェイトの目に僅かに涙が浮ぶ
その時

「クロノおおお

「なのは・・・」
「良かったね、フェイトちゃん」
「ああ、無罪になってあたしホッとしたよぉ」
「うん、良かったね」

3人共テスタロッサ親子が無罪になったのが本当に嬉しかったのか
笑顔になってる
それに釣られてフェイトも笑顔になる
プレシアはそんなフェイトを見て優しく微笑む

かくして、裁判ではそのクロノがでっちあげた証拠文により数日間
の保護観察はあった物の、基本的にテスタロッサ親子は無罪が確定
したのであった

＊＊＊

それから更に数日後・・・

時刻は夜、此処はくろがね屋の宴会場
マイクを片手に安が語っていた

「え～、本日はお日柄も良く、テスタロッサ親子の無罪が確定した
記念・・・更にクロノ君が男になった記念を称して皆でジャンジャ
ン騒ごうと思いまあああああああす！」
「本日は此処くろがね屋にようこそ起こし下さいました・・・本日
はどうぞごゆるりと・・・何て堅苦しい挨拶は無しだ！お前等今

日は好きなだけ騒ぎ巻くって呑み巻くって食い巻くっていきやがれ！」

翼の言葉を皮切りに全員が一斉に料理に群がる

「ちょ、ちょっと待って下さい！何で僕も入ってるんですか？（汗」
「かてぇ事言うなってクロノ！折角なんだから今日は思い切り騒ぎまくれぃ！」
「は・・・はぁ（汗」

因みに裁判でっちあげた証拠文は一部の管理局上層部は怒りを露にしており、クロノを降格、もしくは懲戒免職にしようとさえ言っていたのだが、其処へ甲児達の脅しがあったので事実上出世が見送られただけに済んだのであった
それもあって今は全員で騒ぎまくっていた
中には管理局の局員の他にくろがね屋の一同も居た

「あらほらえっさっさ～♪ほらほらえっさっさ～♪」

くろがね屋の1人が突如全裸になり裸踊りを始める
それを見て女性陣は皆目を覆い、甲児は「飯が不味くなるわあああああ！」と言って飛び蹴りを放つ

「さぁさぁ、本日は先生の大技をご覧になってもらいましょうか！」

と言って料理服を身に纏った先生の前には活きの良い鯛が暴れていた
それを目にも留まらぬ速さで捌き骨だけにしてしまった
それだけでも凄いのだが、今度はそれを水槽に落とす
すると何と骨だけになった鯛が悠々と泳いでいたのだ
それを見たなのは達は

「えええええええええええええええええええええええええええええええ！」

と大声を上げて驚いた

「こ、これって・・・貴方も魔法を使うの？」

「いやいや、先生に掛かればこんなの朝飯前なんすよプレシアさん」

目を見開いて驚くプレシアに安はそう言う

「ん？そういえばアリシアちゃんはどうしたんだ？」

甲児は視線をめぐらす

「ああ、彼女ならもうすぐ来る筈ｄ『竜馬さあああああああああああ！』どわあああああああああああ！」

説明する竜馬に突如黄色い何かが飛び込んできた

突然の事だったので対処出来ずそのままぶっ飛ぶ竜馬

「りょ、リョウ君！大丈夫か？」

「あいててて・・・一体何だ？」

竜馬はぶつけた頭を摩りながら身を起こす

すると其処にはフェイトと瓜二つの少女が居た

「え？ふぇ・・・フェイト・・・か？」

「違うよ、私はアリシアだよ」

「な、何いいいい

いいいいいい！」

それには流石の甲児も驚いた
と言うより何故竜馬に抱きつくのか

「だって、竜馬さんは私の事を身の危険も顧みず助けてくれた命の恩人さんなんだもん！だから一生ついていきまあああす！」
「え？え？えええええええええええ！」

大胆な告白に竜馬は驚く
それを横で隼人がニッと笑っていた

「リョウ、こりゃ将来嫁さんの心配は無さそうだな」
「ガハハハハ！良かったじゃねぇかリョウ」
（って言ってる弁慶も確か彼女（ディエチ）が居たじゃねぇか（汗））

横で囃し立てる二人を見て甲児が呟く
と、まぁそんなこんなで宴会は阿鼻叫喚の大宴会となった

なのはとフェイトは並んで料理を食べている
其処でふとなのはが口を開いた

「フェイトちゃん・・・私ね・・・ずっとフェイトちゃんい言いたかった事があるんだ」
「何？」
「私ね・・・フェイトちゃんとお友達になりたいの！」
「え・・・」

なのはの一言にフェイトは戸惑った

「嫌？」
「ううん・・・そうじゃないの・・・只、私・・・どうすれば友達になれるのか分からなくて・・・」
「簡単だよ・・・名前を呼んで」
なのはが笑顔でそう言う
フェイトは少し頬を染めながらなのはの顔をジッと見て
「な・・・なのは・・・」
「うん！」
なのははニッコリ笑った
それを見てフェイトの顔にも笑みが浮ぶ
こうして晴れて二人は友達になれたのであった
そんな光景を遠くからアルフが滝のように涙を流して見ていた
「おやおや、どうしたんだい？お穣ちゃん」
お菊姉さんが聞きながらハンカチを手渡す
「グスっ・・・ヒック・・・だってさぁ・・・あのなのはって子さぁ・・・凄い良い子なんだよぉ・・・もう涙が止まらないよぉ・・・」
ハンカチで涙を拭っても拭っても後からあふれ出てくる涙を必死にアルフはふき取った
目が真っ赤である
そんなアルフにお菊姉さんは頭を撫でた
「しかし、クロノはこんな事をして平気なのかい？」

ユーノが聞く
その横でクロノは必死に怪我した腕で箸と格闘していた
何とかギブスは取れたのだが未だに自由に動かすには時間が掛かるらしく上手く扱えないでいた

「な・・・何が・・・だい？・・・この・・・おっと・・・う・・・」

質問に質問で返しながらも必死に芋を取ろうと躍起になっている
目がマジだ
そんなクロノに苦笑いを浮かべながらユーノは言う

「今回の証拠文の事だよ・・・あれ、どう見ても君のでっちあげだろう？そんな事をして管理局から睨まれないのかい？」
「勿論睨まれるさ・・・只、以前甲児さんが言ってたのを思い出してね」

クロノは思い出すように天井を見上げる
ユーノも釣られて天井を見る
天井は古き良き木製の板が敷き詰められていた

「男なら、後悔するような生き方はするな・・・てね」
「アハハ、甲児さんらしいね」

確かに甲児ならそう言うだろうと思いユーノは思い切り笑った
クロノも薄笑いを浮かべる

「や～～れやれ～～こうも騒がしいと耳がつ～ぶれちま～わ～・・・いっちょ黙らせるかぃ？」

何時の間にかクロノの隣に居たジャンゴが懐から大型ガトリング砲
を取り出した
それを見てクロノとユーノは青ざめた
そして体を張って止めに入る

「ま、待って下さい！」
「そんな事したら大変な事になりますから！」
「ちっ、しょうがね～な～」

ぶつぶつ言いながらジャンゴは武器を仕舞う
そしてまた料理に向かった
それを見て二人はホッとする

こちらでは鉄也とクロスが互いにお猪口で酒を飲んでいた

「ほぉ、あんたには娘さんが居るのかい？」
「ああ、と言っても血は繋がってないんだがな・・・早く帰ってやりたい物だ」

鉄也は少し寂しそうな顔でクッと酒を煽る
ほろ苦い味が喉を通って胃に流れている感じが心地よかった
ふと外を眺める
外では満面の満月が輝いていた
ふと、その満月にヴィヴィオの顔が浮ぶ

（今頃あいつ・・・寂しがってるかな）

ふと、何時の間にか自分が父親らしい発言をしたのを知って鉄也は笑った

そして再び酒を注いで流し込む

一方で、こちらでは安とくろがね屋の一行と管理局のエイミィが花札をやっている

「ほい！また私の勝ち！」
「げぇっ！また負けた！」
「流石管理局の姉ちゃんは強いねぇ」

エイミィは得意げになっている
その目の前では、褌一丁になった安とくろがね屋の一行が居たどうやら花札で負かしてエイミィを脱がしてやろうと言う魂胆だったらしいのだが逆に脱がされてしまったようである
エイミィ強し

はたまたこっちではリンディと翼が飲み明かしていた

「それにしても、突然管理局を離れた貴方が、まさか温泉宿をやってるなんてね」
「はん、あんなトコに居たらこっちの頭が可笑しくなっちまうさ・・・それにコッチの方が楽で良いしね」

翼はそう言って酒を流し込む
リンディもフッと笑いながら同様に酒を飲む

こんな感じで宴は益々ヒートアップしていった
するとここ一番で騒ぎを起こす男が居た
それは勿論こいつである

「うっしゃぁ！んじゃ早速カラオケ大会と行こうぜ！」

”おおおお

「えっと・・・それじゃ私歌いたい！」
そう言って手を上げたのは・・・何とフェイトであった
「おっ！歌うか？そんじゃほれ」
甲児は持っていたマイクを手渡す
そして壇上に立ち機械を操作する
すると何処か聞き覚えのあるイントロが流れてきた
「あり？このイントロ・・・まさか・・・」
そのイントロを聞いて甲児は何の曲か分かった
何とフェイトが歌っているのはあの「マジンガーZ」であった
以外と言えば以外と思える読者の方々も多いのでは無いか？
しかし、これがまた大好評！
プレシアも初めて娘の唄を聴いて喜んでいた
甲児は自分の歌を歌っているので何処かこそばゆい感じがした
そして遂に最後の所に差し掛かり
気がつくとフェイトは熱気が入り手を握って拳を作っていた
最後は大声で決める
そしてペコリと一礼する
すると辺りから物凄い大歓声が響き渡った
「良いぞ穣ちゃん！」
「中々上手いじゃねぇか！」
「惚れたぜぃ！」
くろがね屋の人達がそう言いながら手を叩く
フェイトは何だか恥ずかしくなり頬を染めながら壇上を降りた

そして、いの一番に甲児の元へ行く

「ど・・・どうだった？甲児さん」
「すげぇじゃねぇか！何時覚えたんだ？」
「えっと・・・保護観察の間・・・ずっと暇だったから・・・下手だったかな？」
「そんな事ねぇよ！結構良い線いってたぜ！自信を持っても大丈夫だよ」

甲児に褒められてフェイトは明るい顔になる
しかし、フェイトの歌が着火剤になったのか、この二人が動き出す

「三番！高町なのは！歌います」

と言ってなのはが曲を入れる
すると流れてきた曲は・・・
何と「グレートマジンガー」の曲であった
それを聞いて鉄也は思い切りずっこける
だが、会場は更に盛り上がった

「ほぅ、あの子も中々上手いじゃねぇか」
「そ・・・そうだな・・・（汗」

まさか自分の曲を歌うとは思っていなかった為思い切り面を食らった鉄也であった
やがて曲を歌い終りこれまた丁寧に頭を下げる
すると今度はアリシアが壇上に上がる

「４番！アリシア・テスタロッサ！歌いま～す♪」

フェイトとは違い滅茶苦茶明るい感じにアリシアが言う
何だか正反対の姉妹である
そしてアリシアが歌った曲は・・・勿論
そう、「ゲッターロボ」であった
それを聞いて今度は竜馬がずっこけた

「フッ、どうやら本当にリョウが気に入っちまったみたいだなアリシアの奴」
「よっ、この色男！」

ずっこけた竜馬に隼人と弁慶がこれまた囃し立てる
とまぁそんな感じで宴会は滅茶苦茶な盛り上がりを見せた
そして、それから暫くして

「やっぱり帰っちゃうの？甲児さん達は・・・」

フェイト達は甲児達を見ていた
甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶は外に来ていた
其処にはそれぞれの機体がある

「ああ、と言っても帰るのはお前の居る未来だけどな」
「心配しなさんな。少しの間お別れするだけだ・・・またすぐ会えるさ」
「そうだよね・・・また未来で会えるんだもんね！」

それを聞いたフェイト達の顔が明るくなる

「貴方達には感謝してもしきれないわ・・・本当に有難う」

プレシアがそう言って頭を下げた

だが、甲児達は笑っている

「良いって事よ！家族仲良くやれよ！」
「鉄也さんも気をつけてね」
「ああ、高町も頑張れよ」
「うん！」

鉄也の言葉になのはは力強く頷く

「竜馬さん！私大きくなったら絶対に竜馬さんを振り向かせられるような女性になるからね！」
「ああ、頑張れよ（汗」

相変わらず積極的なアリシアに竜馬はタジタジであった
それを見て隼人と弁慶が笑っている

「甲児さん・・・貴方には沢山の事を教わりました・・・この事は一生忘れません」
「ハハハ・・・未来じゃお前が年上だからな、そん時は酒でも飲もうぜ」
「そしたら僕は貴方を逮捕しますよ」
「うへぇ、おっかねぇ（汗」

クロノがジロッと睨んだので甲児は少し引っ込んだ
そして、そのままユーノを見る

「ユーノ！頑張れよ」
「はい！これからも皆をサポートします」
「ば～か、ちげぇよ」
「え？」

甲児がそっとユーノの耳元に近寄る
そして

（頑張ってなのはちゃんを落とせよ）
「いぃ！」

その一言でユーノの顔はトマトのように真っ赤になった
それを見た甲児がカカカと笑う
すると、そんな甲児達を眩い光が包み込む

「それじゃ皆！また未来でな」
「なのは！フェイト！アリシア！今度会う時までには良い女になってろよ！」
「元気でな」
「フッ、さようならは言わないぜ」
「またな」

そう言い残して眩い閃光が視界を塞ぐ
そして閃光が晴れると、其処には何も居なくなってしまった
それを見て少し寂しくなったが、また会えると言う言葉を信じて笑顔になった

（またね・・・皆）

なのは達は夜空に輝く月を見上げてそう呟いた

無印編　完

次回予告

さぁてこれでやっと１０年後に帰れるぞぉ
・・・って、何じゃこりゃ！まだなのはがちっこいぞ！
え？もう一つの事件がある！
よっしゃぁ！それも俺達が解決してやるぜ！
って、あれはまさか！

次回、Ａｓ編始動『始まりは唐突に？』

次回もこの小説にテイィィィィィィクオォォォォォォォォフ

無印編終幕　　決着！勝利のＦＤＳ（後書き）

つ、疲れた～～～
でもどうにか無印編が終ったぞ～～～
次は遂にＡｓ編に突入じゃあああああい！
早く書かないとネタがパンクしてしまううううううう！（汗）

集計発表！（前書き）

無印編終了を記念して以前収集していたアンケートの結果を発表します

集計発表！

どうも！
「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」を読んでいる読者の皆様
作者のｓｉｂｕｇａｋｉです
いやぁこの小説も結構進んで作者も嬉しい限りです
そんで今回は以前読者の皆様に質問していた「クロス・ユニゾン」
ネタと「食べたい物」についてアンケートをとりました
其処で、無印編の終了を機にアンケートを終了して発表しようと思
います

いやぁ、今回のアンケートで様々な意見が入ってきました
作者感激です！
有り難い有り難い

ってな訳で前回言った通り、「ダイナミックスペシャル」「甲児の
手料理」「鉄也の野戦料理」の内どれか一票に票を入れて一番票の
低かった物を其処に居る「ティアナ・ランスター」氏に食べて貰お
うと言う企画でした

ティアナ
「いやあああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

あぁうるせぇなぁ・・・
さて騒音を撒き散らしているいけない子は放って置いて、そんじゃ
集計結果に入って行きましょう

結果発表

第一位

ダイナミックスペシャル　４票

第二位

甲児の手料理、鉄也の野戦料理　２票

あり？二位が並んじまったよ・・・

ティアナ
「え？って事は？」

しょうがねぇなぁ・・・かぶっちまったからこの二つは無しだな

ティアナ
「ホッ・・・」

んじゃ・・・変わりに第四に用意しておいた「シャマルの手料理」でも食ってもらおうか

シャマル
「さぁティアナ・・・全部食べてね♪」

ティアナ
「いやあああああああ

シャマル
「さぁ、皆も召し上がれ♪」
リリカル組み
「いやあああああああ

さて！ほんじゃ気を取り直して次のコーナーに行くぞ！

題して「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」人気キャラランキング！

これは読者の方々が好きなキャラクターに投票すると言う極めてありきたりなコーナーです
え？パクリだ？
良いんだよ！作者も一度やってみたかったんだしよ！

ってな訳で簡単なルールを説明します

・投票は１人２票まで

・同じキャラクターの重複は不可

・投票するのは「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」に出てる物であれば何でもＯＫ

・投票はその作者の書いているキャラクターでもＯＫです（但し、キャラクターの場合は１票のみ）

とまぁこんな物です

期限は１０月２０日まで

どしどしお願いします！

ではでは

集計発表！（後書き）

沢山来るかなぁ（わくわく）

甲児
「お前・・・あんな事して平気かよ？（汗」

へ？何が？

甲児
「ティアナちゃんにあんな事して・・・ティアナファンが怒るぞ（汗」

大丈夫だ！他の作者にはもっと酷い仕打ちをしてる人もいるから

甲児
「そういう問題じゃねえええええええええええええええええ！」

過去編　3話　迫り来る危機！（前書き）

今回あの二人が出ます
そして、あの二人が喧嘩します

過去編　3話　迫り来る危機！

朝日が昇り、夜の闇が終り再び明るい朝がやってきた
時間はまだ5時を回ったばかりであり、この時間で起きて歩き回る者はそうそう居ない
しかし、そんな中、少女と少年の叫び声と木々の乾いた音が響き渡っていた
声のした方を見てみると、青い髪をした2人の男女が木で出来た長い棒を持って稽古をしていた
棒の長さは槍と同じ長さであった
スバルとゼノンの2人であった
スバルはバリアジャケットを展開しているが、リボルバーナックルとマッハキャリバーを装備していない
ゼノンは戦闘服を身に纏っていた

「はあああああああああ！」
「うおおおおおおおおお！」

2人が叫びながら持っていた棒を振るう
2人の棒の切っ先が互いにぶつかり合い乾いた音が辺りに響き渡る
それから間髪入れずに今度はスバルが横薙ぎに棒を振るう
それをゼノンが縦に棒を構えて防ぐ
防いだ拍子に弾いてスバルを吹き飛ばす

「うっ！」

思わず吹き飛ばされたスバルはバランスを崩す
その隙を突いてゼノンが攻撃に棒を振り上げる
バランスを崩していた為防御する事もかわす事も出来ずスバルの持

っていた棒は弾き飛ばされてしまい遥か後方まで飛び地面に突き刺さる
丸腰になったスバルの喉元にゼノンは自分の棒をつきたてる

「はい、僕の勝ち」

ゼノンはそう言って構えを解き棒を地面に突き立てた

「ま・・・また負けた～（涙」

涙目になったスバルは呟いた
そんなスバルを見てゼノンは苦笑いを浮かべる

「でもたった1ヶ月で此処まで腕を上げるなんて凄いよ。スバルには棒術の才能があるのかもね」
「そうかなぁ？・・・私は只ゼノンに棒術を教わるのが楽しいからやってるだけなんだけどね」

スバルがこの世界に来てから早2ヶ月が経っていた
その間も機械の巨人の進行は続いていたが、その度にゼノン達とスバルの活躍で撃退していったのだ
特にスバルの協力は大きく、彼女が居たお陰で機械の巨人を退けるどころか撃破する事が出来たのだ
しかし、喜ばしい事だけでは無かった
この世界に来たのが原因なのか、それとも転移の際の事故なのか原因は分からないが、その為にスバルの中にある筈のリンカーコアに異常が発せられ彼女の魔力が軒並みに低下してしまったのだ
その為以前の様にリボルバーナックルとマッハキャリバーだけで戦うのは厳しくなってしまったのだ
其処でゼノンが何か武器を使えるようにしようと言う事で彼女に棒

術を教えているのだ
本来ならスバルには自分と同じ槍術を教えようと思ったのだが、スバルが刃物は扱いたくないと言う理由の為ゼノンが槍を扱う以前にまで使っていた棒術を教えていたのだ
スバルも棒術なら良いとゼノンの教授を受ける事になったのであった
因みに本人はかなり嬉しそうであった

「ゼノン！もう一回やろう！」
「良いよ！君の気が済むまで何度でもやろうよ！」

そう言ってお互いに再び棒を構える
そして再びぶつかり合う
そんな2人の稽古風景を遠くからザルとバロンが眺めていた

「良くやるねぇあの2人」
「ああ、あのゼノンがあんな熱心に教えるなんてなぁ」

ザルとバロンが2人の稽古を見るのは実はこれで３０日目なのだ
その間も2人は飽きもせず稽古を続けていたのだ
ゼノンはスバルに教えるのが楽しいらしく、またスバルもゼノンから教わるのを楽しんでいた
それが相まって稽古が1ヶ月も続いたのだろう
2人は此処1ヶ月毎日同時間に稽古を行っていたのだ

「たあああああああああ！」

スバルが勝負を決めようと棒を頭上で回転させながらゼノンに飛び込んでいく

ガツン！

だが、回し過ぎたのか頭上で回していた棒が手を滑らせて頭に当たる
「イダッ！」と声を上げてスバルはよろける

「え？」

そして、そのままスバルはゼノンの下へ倒れ込む
ゼノンを下にして2人は倒れてしまった

「う～～」
「いたた・・・大丈夫？スバル」
「う・・・うん・・・」

ゼノンの問いにスバルは頷く
そして起き上がろうとした時・・・2人は固まった
何故なら

「ゼ・・・ゼノン！／／／／」
「何・・・あ！／／／／」

ゼノンは今自分の手が何処にあるのかこの時初めて知った
ゼノンの両手は今、スバルの胸に触れていたのであった

「うわぁ！ご、御免」

ゼノンは慌てて離れる
スバルも慌てて起き上がる
二人共顔が真っ赤であった
そしてゼノンは立ちながら
スバルは膝立ちのままぼ～っとしてしまった

それを見ていた二人は溜息を吐く

「やれやれ、こりゃ今日はお開きだな」

「あぁ、ああなっちまったゼノンは暫くは頭の中が真っ白だからな」

楽しい時間が過ぎたと思いザルとバロンは二人に飯にしようと声を掛けた

それに二人は黙って頷く

どうやらまだ赤面しっぱなしらしい

本当に初心な二人である

＊＊＊

朝の稽古を終えて４人は食事を囲んでいた

スバルが此処の食事には大分慣れてきた

前にあるのは固いパンに具の無いスープ

そして奇妙な味と形をした肉であった

パンとスープは食べるのに何の問題は無かったが、問題は肉であった

味も形も今まで食べた事の無い物だったので不思議に思えたのだ

だが、世の中には「住めば都」と言う言葉もある通り慣れてしまえば何の問題も無い

今では平気な顔をして肉を食べていた

「そう言えば、この肉って何の肉なの？」

スバルはフォークで突き刺した肉を見て聞いた

それを見てゼノンが答える

「ああ、それは『ガジロン』の肉だよ」

「ガジロン？」

聞いた事の無い名前であった

少なくとも自分の居た時代では決して聞かない名前である

一体どんな生き物なのだろうか

そう思いながらスバルは肉を頬張った

相変わらず奇妙な食感がする

肉質は柔らかいのだが、所々が何故か筋っぽいのだ

「ガジロンって・・・どんな生き物なの？」

「え～っとね、目が大きくて、手が６本あって、一番上が鎌みたいで羽が生えてて大きさがバロンより頭一つ分位大きいよ」

「そ、そんなに！」

スバルは驚いた

バロンの身長がおよそ１８９ｃｍである

それより大きいと言う事は少なくとも２ｍはあると言う話になる

そんな大きな生き物が居るとは

しかも外見の特徴を聞いた時点で恐らく大人しい生き物では無いと思えた

そんな恐ろしい生き物をこうして仕留められるなんてやはりゼノン達は強いなと思えた

同時に、スバルの中にそのガジロンに対する興味が沸いてきた

「ねぇ、私もそのガジロンっての見てみたいんだけど・・・良い？」

「え？別に良いけど・・・どうかな？」

ゼノンは隣で肉を食べているバロンとザルを見た
二人は別に断るような顔をしていない

「そうだな、今は産卵の時期じゃないからガジロンも基本的に大人しい筈だし・・・良いんじゃないのか？」
「確かに、今ならガジロンもそんなに暴れる心配は無さそうだしな」
「それじゃ良いかい？」

ゼノンの問いに二人は無言で頷いた
それを見てスバルの顔が明るくなる

「それじゃ！」
「うん、明日にでも行こうか！」
「やったーー！」

スバルはまるで遊園地に連れて行って貰える事が決まった子供のようにはしゃぎ回った
それを見て3人は微笑ましく見る

「だから、今日の稽古はこれでお仕舞い。明日に疲れが残っちゃったら駄目だから、今日はゆっくりして、明日朝早くに行こうね」
「うん！」
「やれやれ、んじゃさっさと飯食っちまおうぜ」

そう言って再び一同は食事に手を伸ばす
話しばかりしてた為にロクに食べてなかったのでスバルは急いで食事を詰め込む
その速度はかなり速かった

「しっかしスバルは良く食うなぁ・・・ま、ゼノンも同じだけどさ」

ザルは横目でチラリと見た
其処ではスバル程急いではいないがかなりの量を食べるゼノンが居た
肉を固いパンで挟んでアングリと口を開いてかぶりつく
口一杯にパンの香りと肉汁があふれ出して美味かった
どうやら此処ではスバルとゼノンが良く食べるらしい
その光景を見てザルとバロンは笑っていた

＊＊＊

部屋一面が石造りの部屋であった
天井はかなりの高さがあり上が見えない程である
広さもかなりあり、人間が住むには広すぎる大きさであった
その壁には数本の蝋燭が明かりとして灯っているだけであった
そして床には赤いじゅうたんが敷き詰められていた
そして、そのじゅうたんの上に置かれた豪華なソファーの上で一組の男女が座っていた
そして、その二人の前で1人の兵士が肩膝を付いていた

「それは本当なのか？」

ソファーに座っていた鎧を着た男が聞く
それに兵士が頷く

「はい！間違いありません！我等が神々の兵士を破る存在が現れました！」

下を向きながら兵士がそう言う
それを聞いて男が眉を顰める
だが、横に居た赤いドレスを着た女は妖艶に笑っていた

「それは頼もしい・・・此処最近骨の無い奴ばかり相手にしてて丁度退屈してた所なのよねぇ・・・そいつ・・・どんな奴だった？」

女は誘うような口調で兵士に尋ねる
指を器用に動かして明らかに兵士を誘うような動作をする
それを見て兵士が頬を染めるがすぐに下を向いて話す

「は、はい！青い髪をした少女です・・・年はまだ１０を半ば行った辺りかと・・・」

兵士の説明を聞いて女はがっかりした顔になった

「なんだ、まだガキ・・・それも女なのねぇ・・・それじゃ興味無いわ」

そう言って側に置かれたブドウを一粒取って口に運ぶ

「おいおい、夫の前で堂々と浮気とは感心出来ないなぁ」

男は笑いながら言う
それを聞いて女はケラケラと笑う

「あら？気に障ったかしら？私としてはそれが男なら死ぬまで虐めてやろうと思ったのだけどねぇ・・・」
「フフ、相変わらずお前は恐ろしい考えを思いつくなぁ」

男はそう言って女の顎を摩る

「で、何時動く？」

女が聞く
それを聞いて男がニヤリとする

「明日だな・・・そろそろあの方達がお越しになる頃だ・・・その前にこの星の人間共を皆殺しにするのだ！そうすれば我等も神の体が貰える筈だ」

男は凶悪そうな顔でそう言う
それを聞いた兵士が青ざめる

「そ、そんな！ご命令ではこの星の人間の数が増えすぎないように調節するだけとの筈です！全滅の命令は入ってはおりません！」

兵士の言葉を聞いた男と女は殺気の篭った目で兵士を睨む
その視線を受けて兵士は背筋の凍る思いがした
顔が徐々に青ざめていく
男と女は殺気の篭った顔のまま立ち上がると兵士の下へ歩み寄る
一歩一歩、ゆっくりと歩を進める
まるで死刑宣告を迫られる錯覚に兵士は襲われた

「う・・・うわあああああああ！」

兵士は踵を返して逃げ出した
腰が抜けたのか四つんばいである
その格好で速度が上がる筈も無い

そんな兵士を男が捕まえるのは容易であった
兵士の兜を掴み上げて自分の体に近づける

「此処では俺が司令官だ！その俺が全滅と言ったのだ！それに背くとどうなるか・・・お前に教えてやろう」

邪悪な笑みを浮かべて男が言う
すると、掴んでいた兵士の前に女が歩み寄る
女はそっと兵士の頬に手を添える
白く美しい手が兵士の肌を触れる
そんな女のルビーのような美しい瞳が兵士を見る
兵士はそんな女に見取られてしまった
だが、それが最後の光景であった
次の瞬間、腹に凄まじい痛みが走った
何かを刺された痛みである
兵士の目が大きく見開かれる

「か・・・け・・・・・こ・・・・」

声にならない叫びを上げてそのまま床に倒れた
兵士の周りを赤い液体が濡らしていく
そんな兵士を蹴飛ばして男と女は元のソファーに戻っていく

「フフフ、相変わらずお前は美しい・・・だが、それに見とれて良いのはこの世に俺だけだ」
「フフ、そうよ・・・貴方以外の男が私に見とれたら・・・その瞬間死ぬ事になるわ」

女は更に邪悪な笑みを浮かべて男を見る
男もまた邪悪な笑みを浮かべる

そして、そっと唇を近づける
お互いの口に互いの熱が伝わってきた

『お楽しみのようだな！トリスタン、イゾルデ』
「「はっ！」」

突如声がしたのでパッと距離を開ける
そして声がした方を見た
其処には２０ｍはあるであろう巨大な機械の怪物が居た
太い腕と足
強固な胴体
そして、肩には2本の長い首が
真ん中の頭には2本の鎌が取り付いていた

「ゆ、勇者ガラダブラ！」

男が名前を呼ぶ

『どうやら我等機械の兵士を倒す奴が現れたようだな・・・そいつは以前の奴か？』
「嫌、どうやら人間のようだ」

ガラダブラの問いにトリスタンがかぶりを振る
すると、ガラダブラが明らかに不満げな顔をする

『人間にだと！情けない・・・我等神の兵士が人間如きに負けるなどとは・・・』
「勇者ガラダブラよ・・・どうだろう？我等と共に人間共を滅ぼさないか？」

トリスタンがガラダブラに持ち寄る
するとガラダブラが興味深そうな顔をする

『ほほぅ、面白そうだなぁ・・・丁度人間共を皆殺しにしたかったところだ・・・その誘いを乗ってやろう！で、何時動くのだ？』
「フフフ、明日よ・・・明日に忌々しいレジスタンスが守る町を壊滅させましょう」

イゾルデが妖艶に笑いながら言う
それにガラダブラが頷く

『よかろう！フッフッフ、明日が楽しみだ』
「そう、全ては明日！」
「我等の悲願を成就させる為に！」

そう言って部屋の中に3人の笑い声が響き渡った

＊＊＊

時は経ち、今は夜
スバルは近くにあった温泉に1人浸かっていた
一応体には布を巻いてある
まぁ、この小説は一応健全な内容を目指しているから余りやり過ぎな内容は勘弁と言う訳でそうしてもらっているのだ
一瞬想像した読者の皆様・・・サーセン！

さて、そろそろ話しを戻すとしよう
温泉に浸かっていたスバルは至福のひと時を味わっていた

「はふ～、良い気持ちだな～」

目を細めて口を横にした「3」のようにして言っていた
今は1人なのでいっそ泳いでみようかと思っていた
すると、入り口の方から誰かが入ってくるのが聞こえた

「ん？誰だろう・・・」

スバルの居る位置と入り口の間には巨大な岩がある為、迂回しないと誰が来たのか見えないのだ
スバルは急いで入り口付近に行った
すると、其処には腰に布を巻いたゼノンとザルとバロンの3人が居た

（えぇ！ゼ・・・ゼノン！）

スバルは思わず隠れた
頬が真っ赤になる
初めてゼノンのセミヌードを見たのだ
年の割りには鍛えられた体つき
決して細身では無く、かと言ってマッチョでもない
いわば無駄の無い鍛え方をした体つきであった
そして、その体には大小様々な傷があった
その傷がゼノンが今まで歩んできた道が決して平坦な物では無いと思えるには十分な物であった
しかし、それはスバルの頬を染めるには十分な物であった
今でもスバルの顔は誰から見ても分かる程真っ赤である

「ど・・・どうしよう・・・ゼノン・・・私に気づいてないよ・・・きっと・・・」

このままだときっとゼノンと鉢合わせしてしまうかも知れない
そう思ったスバルは急いでゼノンから離れた
岩を壁にしてじっとゼノン達の出方を伺う
どうやらゼノン達はそれ程奥まで行く気は無いらしくその場で腰を下ろした
とりあえずホッとするスバル
すると、3人は何か話しだす
スバルは聞き耳を立ててみた

ザルとバロンを中心にしてゼノンは重い顔をしていた
それは、二人も同じであった

「それは・・・本心なのか?ゼノン」

バロンがまず最初に口を開く
とても威厳の篭った声であった
その声にゼノンは静かに頷く

「うん・・・やっぱり、スバルには元の時代に戻って欲しいんだ」
「おいおい、お前スバルの事あんなに気に掛けてたのに何でだ?」

ザルが肩を上げて聞く

「・・・やっぱり、スバルはこの時代にいちゃいけないんだよ・・・彼女は本当は自分の居る時代に帰るべきなんだ」

ゼノンがそう言う

（そんな・・・そんなのって・・・ないよ・・・）

スバルにはショックであった
ゼノンがあんな事を言うなんて
あの時自分に優しく言ってくれた事

『どんな答えであろうと、僕は君の力になるよ』

「あの言葉は・・・嘘だったの？」

スバルの目には何時の間にか涙が流れていた
その間も話しは続いた

「ゼノン・・・お前、まさか・・・」
「・・・僕は・・・スバルを元居た時代に返そうと思う・・・」

バロンの問いにゼノンが重く語る
だが、其処でザルが口を挟む

「だが、あれを使えばお前は・・・」
「覚悟は出来てるよ・・・それに・・・これが彼女の為なんだ・・・」

ゼノンは更に沈んだ顔で言う
それに二人は黙って聞いていた

「・・・酷いよ」
「え？」

突如後ろから声がした
振り返ると、其処にはスバルが居た
本来なら赤面物なのだが、ゼノンは別の意味で面を食らっていた
泣いていたのだ
スバルの目からはそれこそ止め処なく涙が流れていた

「ゼノン・・・あの時・・・私に言った事って・・・嘘だったの？」
「スバル・・・僕は・・」
「本当は私と一緒に居たくなかったんだね？」
「違う！そうじゃないんだ！・・・只僕は・・・」

ゼノンが首を振って否定し、真実を話そうとしても、今のスバルには聞こえなかった

「ゼノンの・・・ゼノンの馬鹿あああああああ！」

そう一言言い残してスバルは走り去って行った

「あ！スバル」

そんなスバルの後を追おうとゼノンが立ち上がるだが、

「うっ！」

突如、胸の激痛がゼノンを襲った
そして、肩に彫られた刺青が怪しく光る

「「ゼノン！」」

痛みに蹲ったゼノンにバロンとザルが駆け寄る
ゼノンの顔中には止め処なく汗が流れており、痛みで顔が歪んでいく

「だ・・・大丈夫・・・だよ・・・また・・・何時もの・・・奴だからさ・・・」
「やはり・・・お前・・・」

ゼノンの痛みを察したのかバロンが肩を貸す

「ったく、お前は無理し過ぎだ！少しは自分を労われ」
「・・・御免・・・父さん」

ゼノンはそう一言言った
その横でザルも肩を貸す

「俺達はお前の事を本当の子・・・ま、俺にとっちゃ兄弟か・・・そう思ってきたんだからよ」
「に・・・兄さん・・・」
「だが、お前ももう大人だ！自分の生きたい生き方をしてみろ」

バロンは流石年上と言った感じの発言をした
それを聞いたゼノンの顔は真剣な顔になる
何時の間にか発作は消えていた
刺青の光も無い
そっと二人に降ろして貰いゼノンは前にでる

「行って来るよ、父さん、兄さん！」

そう言い残してゼノンは走り去った

「やれやれ・・・手の掛かる息子だ・・・・」
「どうする父さん・・・俺達も行くかい？」
「他人の色恋沙汰に首を突っ込むのは野暮ってもんだが・・・少し気になるな」
「やっぱり父さんもか！・・・実は俺もだ」

そう言って二人はニッと笑いあった

＊＊＊

スバルは桐だった崖の上に座っていた
以前ゼノンに貰った『キトン』を着ていた
だが、その顔は何処か沈んでいた

「私・・・ゼノンに酷い事・・・言っちゃったなぁ・・・」

後悔していたのだ
あの時自分が言ってしまった事を

『ゼノンの・・・ゼノンの馬鹿あああああ！』

頭の中で今でも鮮明に蘇る言葉であった
思い出して見ればゼノンはスバルの為に言ったのだ
それをスバルは誤解してしまった
あの時ちゃんと話しを聞けば良かった

そうすればあんな酷い事言わずに済んだ筈だったのに
そんな思いがスバルの心を締め付けた

（私・・・嫌われちゃったかなぁ・・・）

淀んだ目で遥か地平線の向こうを見つめる
地平線の向こうから朝を告げる太陽が徐々に昇り始めた
一体どの位居たのだろう
結局一睡もせずにずっと海を見ていたようだ
スバルはそっと目の辺りを摩る
幸い隈は出来てないようだ
そんな顔をゼノンには見せられない
スッと立ち上がる

「謝ろう・・・嫌われたって良い・・・とにかく、さっきの事を謝らないと」

そう言って帰ろうとした時、突如目の前の海が持ち上がった

「な、何！」

驚き振り返る
すると、持ち上がった海が弾け、中から巨大な怪物が現れた
鋼の巨体に肩に取り付けられた2本の首
そして真ん中の顔には2本の鎌が
更には胸には巨大な切り傷がついていた
その怪物は・・・スバルは知っていた
そう、それは甲児達と始めて会った時に出会った敵である
その名は・・・

「機鋼獣・・・ガラダブラ！」

スバルは名前を呼んだ

『それは違うなぁ・・・そのお方の名前は「勇者ガラダブラ」だ』

「だ、誰！？」

後ろから声がした

振り返ると、其処には一組の男女が居た

男は女の肩を掴んでいかにも仲良さそうにしている

だが、その二人の顔にスバルは見覚えがあった

「あ・・・貴方は・・・シュラ！」

「シュラ？誰だそれは・・・私の名前はトリスタン」

「そして私はイゾルデ・・・宜しくねぇん、可愛いお穣ちゃん」

トリスタンは声高らかに名前を言い、イゾルデは妖艶に言う

スバルは思わず身構えた

「な、何の用ですか？」

「フフ、なぁに・・・我等の手駒を倒した奴の顔を見ようと思ってなぁ・・・しかし、それ程の豪傑がまさかこんな子供だとはな・・・正直拍子抜けだな」

「え？・・・しゃ、喋った！」

驚きであった

何と勇者ガラダブラと言われた機械の怪物が言葉を発したのだ

それに驚き目を見開くスバル

だが、ガラダブラは以外そうな顔をしていた

「我等神々の兵士が喋るのは当たり前だ！さて・・・大人しく我等と共に来て貰おうか？」

ガラダブラはそう言って手を伸ばすだが、

「クッ、マッハキャリバー！」

『了解！』

スバルは首に掛けてた青いペンダントを握って叫ぶそして空高く飛び上がり後ろに降りるその時には、以前のキトンでは無く、白いバリアジャケットを身に纏っていた

「ほぅ、それが貴様の戦闘服か？」

「あら、顔だけじゃなくて服も中々ねぇ」

「貴方達の思い通りには行きません！此処で倒す！」

そう言ってスバルはリボルバーナックルを構えるだが、ガラダブラはにやけていた

「そんなボロボロの武器でこの私を倒そうと言うのか？」

「う・・・」

スバルは自分の右腕に装備されたデバイス「リボルバーナックル」を見たリボルバーナックルには今までの戦いの影響なのか所々ヒビが入っておりまともな状態では無かったそして、それは甲児が作ってくれた「マッハキャリバー」も同じであった

この世界ではデバイスの修理やメンテは不可能なのだ
その為ずっと稼動しっぱなしだった為機械にガタが来てしまったのだ

「それでも・・・それでも！私は戦う！絶対に・・・貴方達には負けない！」

そう言ってスバルはグッと身構えた
転移の際か・・・それともこの世界に来たせいなのか
スバルのリンカーコアに異常が発せられ、徐々に魔力が低下していく
その上デバイスはボロボロの状態

果たして、突如現れた強敵にスバルはどう立ち向かう？

スバル編　迫り来る危機！　終

過去編　3話　迫り来る危機！（後書き）

どうも、作者です
いやぁスバル編は本当なら無印編で終らせる筈だったんですけど本編を急ぎ過ぎたせいで此処までずれ込んでしまいました
とりあえず本編と併合して書いていきます
そんじゃまた

Ａｓ編開幕　始まりは唐突に？　前編（前書き）

遂にＡｓ編に突入！
そして今回あいつらが現れる

Ａｓ編開幕　始まりは唐突に？　前編

なのは達魔道士達と甲児達鉄の巨人達の戦いを皆は「ジュエルシード事件」と呼んでいた
そのジュエルシード事件から実に３ヶ月が経過したある日・・・再び異変は起こった

海鳴市　某所　八神家

家の中には１人の少女が居た
彼女は一人ぼっちであった
幼くして両親を失くし、今は親戚の仕送りでどうにか生活をしている
「八神はやて」それが彼女の名前であった

「はぁ・・・何か退屈やなぁ・・・いっそ空から誰か降って来てくれへんかなぁ」

溜息混じりに夢物語を語るはやて
そんな事が実際に起こったら溜まった物では無いのは事実である
だが、それは「現実」の話しであって此処ではあるのだ
そう、今から起こる事のように
はやては今ベランダで星空を眺めていた
車椅子でどうやって上ったかは・・・とりあえず聞かないで欲しい

「さて・・・部屋に戻って本でも読むかなぁ・・・」

踵を返して部屋に戻ろうとした正にその時
突如上空が発光した

「な、何や？」

突然の閃光に驚いたはやて
そして振り返ると、何と空から1人の青年が振ってきてそのままはやての隣に落ちたのだ

「うわっ！ほ・・・ホンマに落ちて来おった！」

まさか自分の言った事が現実になるとは思いもしなかった
しかし今はそんな事を言ってる場合じゃない
とりあえず恐る恐る青年に近づく
茶色の髪をしており、俗に言う「カウボーイ」の様な服を身に纏っている
顔にそっと触れたが温かかった
どうやら生きているようだったのでホッとする

「もしもし・・・起きてぇな兄ちゃん！」

はやては車椅子から降りて膝立ちで青年に近づいて背中を揺らす
数回揺らした辺りで青年は気がついたのか目の辺りが揺れる

「う・・・うう・・・」

そしてうっすらと目を開く
目を開いた青年は此処が何処なのか辺りをキョロキョロしだす

「お！気がついたみたいやね」
「君は・・・・「はやてちゃん」かい？」
「え？何でうちの名前知ってんの？」

何故見ず知らずの青年が自分の名前を知っているのか疑問に思った
其処で青年はアッとした顔をした
そして数回頭を掻くと口を開く

「すまない・・・知り合いに似てた物でついね・・・」
「へぇ、うちに似てるなんて相当な美人なんやねぇ」
「ま・・・まぁ、そうかな（汗」

青年は調子の良いはやてを見て苦笑いを浮かべる
はやてはそんな笑いを見てニッコリと笑う

「うちは八神はやてって言うんや。兄ちゃんは何て言うん？」
「僕は宇門大介って言うよ。宜しく」
「宜しくな・・・ところで兄ちゃん・・・帰るトコあるん？」
「・・・・・」

言葉が無かった
そう、この世界は言ってしまえば過去なのだ
だから当然此処に機動六課などある筈も無くそれでは帰る場所も無いのは当然であった
その為返答に困る大介
するとはやてが

「良かったら家に住まへん？丁度だだっ広い家に1人きりで寂しかったとこやし」
「良いのかい？僕みたいな見ず知らずの人間を止めても？」
「ええねんええねん。人間人情を無くしたらあかんやろ？それに兄ちゃん良い人そうやし大丈夫や！うちが保障したる！」

そう言ってはやてが自信まんまんに親指を立てて言う

それを見て大介はフッと笑う

「それじゃ、お言葉に甘える事にするよ」
「よろしゅうな・・・それから、兄ちゃんの事「大介兄ちゃん」って呼んでもええ?」
「ああ、構わないよ」

大介はニッコリと笑った
それにはやてもニッコリと笑い返す
こうして、八神家にお邪魔する事になった大介
時のずれが生じた事件であった
だが、それが後に「闇の書事件」と呼ばれるとんでもない事件の幕開けになるとは・・・この時大介は気づいていなかったのであった

＊＊＊

それから更に3ヶ月後
時空管理局航行艦アースラ
その食堂ではクロノ・ハラオウン執務官とユーノ・スクライア、更にフェイト・テスタロッサとその姉のアリシア・テスタロッサが居た

「と、言う訳なんだよ・・・分かった?アリシア」
「む〜〜〜、全然分かんない」

アリシアが口を膨らませて机に突っ伏する
それを見てクロノが頭を抱える

「参ったなぁ、フェイトはすぐに憶えるのにアリシアは中々憶えないんだよなぁ」
「しょうがないじゃん！私こんな難しいの憶えるの無理だよ！」
「そんな事無いよお姉ちゃん！お姉ちゃんならきっと覚えられるよ」
「わ～い、フェイトは優しいな～、流石私の自慢の妹ね～」

と言って主室にフェイトに抱きつくアリシア
それに頬を真っ赤に染めるフェイト
それを見てクロノとユーノは頭を抱える

「あ、アリシア・・・これは初歩的な魔法だからすぐに覚えられるからもっと真剣にやろうよ・・・ねっ」
「うっさい！スケベフェレット」
「んな！何その仇名」

何か嫌な事を思い出しそうになる仇名を呼ばれてユーノは青ざめたクロノはそれが何なのか理解しており、フェイトは知らない為首を傾げる
そんなフェイトの為にアリシアが説明に入る

「ユーノったらねぇ、フェレット姿なのを良い事になのはと『わああああああああああ！と、とりあえず勉強しようよ！』チッ！」

良い所で会話を打ち切ったユーノに舌打ちするアリシア
とんでもない姉である
因みにフェイトはこの半年間の間に嘱託魔道士に合格しており今は管理局お抱えの魔道士としてクロノと一緒に活動している
それはアリシアも同じなのだが、アリシアは暫く寝ていた為か念入

りに勉強や特訓をする事になった

「大体私は遠くから魔弾を撃つ戦い方は性に合わないんだよねぇ」
「でも多少は使えないときついと思うよ」
「ぶ～、クロノがそう言うなら仕方ないけどさぁ・・・」

頬を膨らませてアリシアは言う
そしてまた教本に目を通す

「ヤッホー、皆やってるねぇ」
「あ、アルフ！」
「オッス！アルフ！元気？」

アルフが手を振ってやってきた
それにフェイトとアリシアが見る

「アハハ・・・また魔弾の勉強？」
「む～、私は接近戦の方が得意なんだけどねぇ」

アリシアがそう呟く

「ま、多少は使えた方が良いよ・・・プレシアみたいな大魔道士になる為にさ」
「そう言えばお母さんは今管理局の科学班に所属したんだよね」
「うん、今は色々な研究をしてるらしいよ」
「流石お母さん！頭良いねぇ」
「って、君もそのお母さんの娘なんだから頑張りなよ（汗」
「うっさいスケベフェレット！今度フェレット焼きにして食べちゃうよ」
「僕・・・ひょっとして嫌われたの？（涙」

予想以上の酷い反応にユーノは涙を流す
そんなユーノの肩を叩いて慰めるクロノ
安心しろユーノ
お前は嫌われてない
只遊ばれてるだけだ
とまぁ比較的平和なアースラ内であった

＊＊＊

その頃、海鳴市某所の八神家では
大介に車椅子を押して貰っていたはやてが電話の留守録を確認する
内容は病院からであり、専属のナースが誕生日祝いの言葉を送ってくれたのだ
それを聞いてニッコリ笑うはやて

「良かったね、はやてちゃん」
「うん！うちメッチャ嬉しいわぁ！今年は何か良い事が多いしなぁ」

はやては凄く嬉しそうに言う
それに大介も笑顔になる

「良かったね、はやてちゃん。さ、もう部屋に戻るとしようか」

そう言って大介ははやてを部屋に連れて行く
そして部屋についた大介ははやてを抱えてベットに寝かす

「それじゃおやすみ」
「おやすみな、大介兄ちゃん」

大介はベットで横になったはやてを見て安心して部屋を出る

「う～ん、寝るにもまだ早いなぁ・・・そだ、今読みかけの本があったから少し読もうっと」

はやては側に置いてあった読みかけの本を取り出すとスタンドの明かりを点けて読み始める
本当なら少し読んだら寝ようと思ったのだが、気がつくともう夜中の１２時を回っていた

「うわ、もうこんな時間かぁ・・・はよ寝んと」

そう言って明かりを消そうとした時
突如後ろから閃光が発せられた

「な、何や！」

はやては振り返った
其処には今まで読んだ事の無い本が光っていた
本には厳重に鎖が施されていた為はやて自身も中身を知らない
その本が光っており、更には浮んでいるのだ
本の輝きは更に増し、そして施されていた鎖を引き千切りバラバラとページが捲られる
そして、本の中から４つの光の玉が現れて地面に落ちた
その光はそれぞれ形を成し、見知らぬ四人の男女になった

一方、大介は下の階でこの世界の情報を整理していた
と、言うのもこの世界の新聞やニュースを見て今がどの辺なのかと言うのを確認していたのであった

「ニュースや新聞の年月からすると・・・恐らく此処は１０年前の世界・・・しかし、甲児くん達は一体何処に・・・早く合流しないとなぁ」

そう言って深く溜息をつく
すると上の階から物凄い音が響いた
それは先ほどの本が光る音である

「上・・・まさか！はやてちゃん！」

はやてに危険が迫っていると思い急いで部屋に向かった

「はやてちゃん！だいじょう・・・ぶ？」

部屋の扉を開けて中を見た
すると、其処にはシグナム達とベットの上で気絶するはやての姿があった

「し・・・シグナムさん・・・それに皆も・・・一体どうして」
「む！何故貴様は我々の名を知っているのだ！」

シグナムは見知らぬ男が自分の名を知っていた事に眉を顰める

「てめぇ、一体何者だ？事と次第によっちゃ容赦しねぇぞ」
「ヴィータちゃん・・・そうか・・・此処は過去だから皆僕を知ら

ないのは当然なのか」
「待てヴィータ・・・何か訳有りみたいだな」

今にも殴りかかろうとするヴィータに薄着の青年が止めに入る

「君は、ザフィーラだね・・・そして、其処にいるのが・・・シャマルさんだね」
「・・・やはり何か訳があるみたいだな」
「ああ、見知らぬ男が何故私達の名を知っているのか」
「話を聞かせて貰っても良いかしら？」
「構わない・・・だけど、此処じゃ不味い、一度下に下りよう」

大介はそう言って気絶してるはやてをとりあえず寝かせて部屋を出たそして下の階に集まって話しをした

「僕は宇門大介・・・信じられないと思うけど、僕は今から１０年後の未来から来たんだ」
「なっ！未来からだと？」
「おい！嘘をつくならもっとマシな嘘をつけよ！」
「これが嘘をついてる目に見えるかい？」

大介は自分の目をヴィータに見せた
その目は真剣そのものであった

「確かに・・・嘘をつく目では無いな」

大介の目を見てザフィーラがそう言った
それにはヴィータも納得する

「では、貴方はどうして過去に来たのですか？」

「残念だけどそれは分からないんだ・・・気がついたら過去に来ていたんだ」
「おいおい、そんな理由ってありかよ？」
ヴィータが眉を顰める
だが、事実ならしょうがない話しである
「今度はこっちが質問して良いかい？君達の目的は一体・・・」
「我等の目的は闇の書の完成だ」
「その為にこれから魔力反応を持つ物から蒐集をしなければならない」
「闇の書？」
大介は首を傾げた
そんな大介にシャマルが部屋から持ってきた分厚い本を見せる
それを見て大介は驚愕した
「これは・・・夜天の書！」
「へぇ、そう言う呼び方もあるんだな」
「しかし、何故魔力を蒐集しなければならないんだい？」
「魔力を集めねば・・・はやてが死ぬ事になる」
「何だって！」
シグナムの一言に大介は強張った顔をする
まさか、夜天の書にそんな恐ろしい機能があったとは
だが、１０年後に出会ったはやては何の苦労も無く夜天の書を扱っていた
一体何があるのか？
その時、大介は此処に来る前に壁画で見た絵を思い出した

（まさか・・・あの冥府の王と関係があるのか？）

大介の中に一抹の不安が募った
もしかしたら、その冥府の王が蘇るのかも知れない
だとしたらとんでもない事が起こるかも知れない
だが、とりあえずそれ以上は大介も言わないでおいた
この世界が本当に過去なら下手に未来の事を話すのは止した方が良かったからだ

「これから我等四人は魔力の蒐集を行う」
「しかし、その間主はやての身が心配なんだ・・・其処で大介・・・君にはやての護衛を任せたいのだが」
「ああ、構わないよ」

ザフィーラの提案に大介は快く引き受けてくれた

「大介兄ちゃん・・・」
「あ！はやてちゃん！起きたのかい？」

気がつくと、車椅子に座ったはやてが部屋に来ていた

「主はやて・・・先ほどは驚かせて申し訳ない」
「ええねん！うちにとっては家族が増えたみたいでメッチャ嬉しいしな、皆家でゆっくりしてったらええ」
「は、はぁ・・・（汗」

余りに場違いな言葉にヴォルケンリッターの四人は浮いた顔をする

（シグナムさん・・・さっきの話しは・・・）
（とりあえず主はやてには黙っておこう・・・余り心配は掛けたく

ないからな）
（分かりました・・・僕も言わないでおきます）
（頼む）

シグナムと大介は小さな声で耳打ちした

＊＊＊

それから数日が経った日、夜の海鳴町
その上空を浮いている二人の人影があった

「本当に此処に居るのか？」
「ああ、此処最近馬鹿でかい魔力を感知したんだ・・・恐らくあれを蒐集したらきっと２０ページは埋まると思うんだよな」

ヴィータは赤いバリアジャケットを身に纏って手にはハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」が握られていた
隣に居たザフィーラは人型ではなく狼形態になっていた

「では、手分けして探そう、書はお前に預ける」
「ああ、分かった」

そう言い合ってお互いに分かれた

「さて、んじゃ探すとするか」

ヴィータはグラーフアイゼンを翳すとその足元になのは達とは違った魔法陣が展開された
その魔方陣の中では魔力を持つ物意外は全て除外されてしまった

「見つけた！」

そして、その中で大きな魔力反応を感知した
ヴィータはそのまま地面に降り立つ

「さて、早速夜天の書の餌になって貰うか」

そう言いながら魔力反応のある場所に向かう
だが、その時ヴィータはある物を発見する

「な、何でだ！」

それは、ヴィータの真下をバイクに乗った青年が走っていたのだ
可笑しい
確かに封鎖領域を放った筈だ
なのにその中をバイクに乗った青年が走っているのだ

「訳分かんねぇけど、とりあえず襲ってみるか」

ヴィータはバイクに乗った青年に襲い掛かった

「うおおおおおおおおおお！」

ヴィータは猛然とバイクに乗った青年にグラーフアイゼンを振るったが、
だが、

「おぉっと！」

青年はそれをいとも簡単にかわしてしまった
軽快にジャンプしてヴィータの遥か後方に着地する

「おいおい、子供が夜中にそんな物騒なもん振り回すとは感心出来ねぇなぁ・・・親にどんな教育受けたんだぁ？」
「何だと？」

額に青筋を浮かべてヴィータが睨む
そして青年を見た
茶色のボサボサした髪型に特徴的なまつげをした顔立ち
そして黄色いシャツにはアルファベットで赤く「A」と書かれていた

「てめぇ・・・てめぇも魔道士か？」
「おい、人の事聞く前にまずてめぇから名乗るって教わらなかったのか？本当に出来の悪いガキだなぁお前」

ブチッ

ヴィータの中で何かが切れる音がした
彼女はこの背丈の為子供扱いされる事が多い
それは彼女自身最も嫌う事だ
だからそんな事を言った者はこうなる

「うおおおりゃあああああああ！」
「うわっと！」

ヴィータが横薙ぎにグラーフアイゼンを振るった
だが、それを青年は軽々とかわす

バイクごとバク宙返りした後、青年はバイクから降りて腕をボキボキと鳴らす

「やれやれ、躾がなってねぇガキだぜ・・・こりゃお仕置きが必要だなぁ」

「うるせぇ！私はガキじゃねぇ！私には「鉄槌の騎士ヴィータ」って立派な名前があるんだ！」

「ほほぅ、良く名前が言えましたねぇ。偉い偉い」

明らかにからかうかのように拍手をする青年にヴィータは完全に怒った

「もうてめぇが魔道士だとかそんなの関係ねぇ！てめぇはこの場でぶちのめす！」

「へぇへぇ、後１０年位したら遊んでやるよ。だから今日は早く家に帰ってママに絵本でも読んで貰えよ、お穣ちゃん」

ブチブチブチ

「ぶっ潰す！」

完全に切れたヴィータの一撃が青年の前を掠める

その足元にグラーフアイゼンが深くめり込み巨大な亀裂が走る

普通の人間なら青ざめてしまう程だ

「次は当てる」

ヴィータは噛み付くような視線で青年を睨む

だが、青年は青ざめるどころかニヤリとしていた

「へぇ、中々力あるじゃん、お前・・・なら当てて見ろよ」

そう言って青年がクイクイと手招きしてくる
明らかに誘っているのだ
ならば、その誘いに乗ってやろう
そう思いヴィータはアイゼンを振るう

「うおおおおおおおおおおお！」

ブゥン！

振るったアイゼンが空を切る
凄まじい轟音が響き渡った
だが、

「ひゅぅ～、怖い怖い、当たったら怪我しちまうぜぇ♪」

青年はまるで小石でも避けるかの様な感覚で軽々と避けている
それがまたヴィータの癪に障った

「てめぇ！良い加減にしやがれえええええええええええ！」

切れたヴィータが更に素早く振るう
縦に横に、それこそ流れるように振りまくる
だが、何故か青年には当たらない
それどころか掠りもしないのだ

「ほれほれ、どうしたどうした？鬼さんこちら！手の鳴る方へ～ってか♪」

完全に遊ばれていた
ヴィータ自身もそう思えた
ヴィータは少し息切れ気味なのに対し、青年は涼しい顔をしている
まるで大人と子供である
そんな時、

「ムッ！」

青年が何かを感じ取ったのか明後日の方角を向く

「な、何だ？」

ヴィータも何かを感じ取った
とても邪悪な気だ
魔道士やそんな類の者ではない
もっとヤバイ者だ

「ちっ、やっぱり奴等も来てたのか」

舌打ちすると青年はバイクに跨る

「お、おいてめぇ！」
「悪いな穣ちゃん！また今度遊んでやるよ」

そう言って青年はバイクのエンジンを掛ける
ふと何かを思い出したのか振り返る

「そう言えば名乗ってなかったな・・・俺は「不動明」だ。覚えておきな」

そう言って明は走り去って行った

「不動・・・明・・・」

ヴィータは走り去る明の後ろ姿を見つめて呟いていた

Ａｓ編開幕　始まりは唐突に？　前編（後書き）

どうも！
ついにあの不動明が出ました！
って事はなのはの所には奴等が・・・
急げ明！手遅れになる前に！

始まりは唐突に！　後編（前書き）

今回は久しぶりにあのロボットが現れる！

始まりは唐突に！　後編

その頃、なのはは1人町の中を走っていた
先ほど封鎖領域を放った魔道士を見つける為である

「レイジングハート！さっきの魔道士は今どの辺に居る？」
『Ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｖｉｃｉｎｉｔｙ　ｓｏｏｎ．　Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ（すぐ近くです！マスター）』

なのはの問いにレイジングハートが答える
それになのはは頷く
とにかく、急いで封鎖領域を放つ魔道士を見つけなければ
そう思っていた矢先であった

『Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ．　Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｂａｃｋ．（マスター！後ろです！）』
「え？」

レイジングハートの何時もとは異様に雰囲気の違う声になのはは本能的に前に滑り込むように回避した
その直後、凄まじい衝撃と轟音が床を叩いた

「きゃっ！」

地面に倒れ込んだなのはが振り返る
すると、其処には信じられない光景が飛び込んできたのだ
『女』が居たのだ
だが、普通の女では無い
その大きさは成人女性の実に約１０倍近くの大きさを誇っており、

顔には鳥のような大きな翼を生やしていた
そして漆黒の体にまるで服のような蜜柑色の体毛が胸から股辺りを包んでおり、両手足は鳥の鉤爪のように鋭く尖っていた

「ホホホホホ！この私の一撃をかわすとは・・・只の人間じゃないようだな」

女は声高らかに笑った
その顔は月に照らされて何処か美しささえ見て取れた
だが、同時に何処か不気味な雰囲気さえも感じられた
その為なのはは思わず身震いした
恐怖である
今まで戦って来たロストギアとは明らかに違う
言うなれば・・・今目の前に居るのは地獄から這い出た『悪魔』を彷彿とさせるのだ

「あ・・・貴方は何者なんですか？」

なのはは今出せるだけの精一杯の声で聞いた
それに女は鼻を鳴らして答える

「フン、人間に答える名前など持っては居ないが、冥土の土産に教えてやろう。我が名は『妖獣シレーヌ』空を舞う美しきデーモンよ」
「で、デーモン？」

聞き覚えの無い単語になのはは首を傾げる
しかし、今目の前に居る者が敵である事は確かであった
その証拠にシレーヌと呼ばれる女からは絶えず殺気が伺えた
それは幼いなのはでも分かる程であった

「小娘よ！今宵の私の餌になるのを光栄に思うが良い！」
「冗談じゃありません！レイジングハート！」

なのはは首に掛けてあったレイジングハートを手に取りそっと目を瞑る
すると眩い閃光が彼女を包み込む
そして次の瞬間には、なのはは白いバリアジャケットに身を包み、手には具現化したレイジングハートが握られていた
なのははバリアジャケットを展開すると一旦空に舞い上がる
ある程度舞い上がった後、なのははデバイスをシレーヌに向けて構える

「いきなり襲ってきていきなりご飯になれなんて！そんなの身勝手過ぎます！」

なのははシレーヌに向けてデバイスを構えて言う
だが、その時なのはは恐ろしい物を目にしてしまった
それは、豹変するシレーヌである

「おのれ・・・この大空を飛んで良いのはこの私だけだ！それなのに貴様のような人間が空を飛ぶなど・・・許せん！貴様は最も醜く切り刻んで殺してやる！」

恐ろしい事を口走るシレーヌ
その時、シレーヌの口は耳まで裂け、鋭い牙が幾つもギラついて見えた
そして目は血走り獣の目の如く尖った
先ほどの美しい女性の顔から一辺して恐ろしい狩人（ハンター）の顔つきになったのだ
その顔を見て背筋が凍る物を感じるなのは

だが、シレーヌはなのはに怯える時間すら与えてはくれない

「死ねぇ！」

突如飛び掛り鋭い爪の付いた腕を振り下ろしてくる
咄嗟になのはは手を翳し防御魔法を展開する
展開された魔方陣とシレーヌの腕がぶつかり合い、激しく火花を散らす
なのはの顔に苦悶の表情が浮ぶ
想像以上の力がシレーヌの腕から込められてくるのだ
そして、その力によりなのはは吹き飛ばされてしまう

「きゃぁっ！」

何とか地面に激突する寸前に体制を立て直せたは良いが、明らかに恐ろしい力を持っている事は火を見るより明らかであった

（この人・・・凄く強い・・・私に勝てるの？）

なのはの脳裏にその言葉が過ぎる
だが、すぐにかぶりを振ってそんな弱い言葉を否定する
今此処で自分があれを倒さなければもっと多くの被害が出てしまう
今この世界には甲児達は居ないのだ
だからその分自分が頑張らなければならない
そう思って日々辛い訓練を自分に課してきたのだ

「絶対に・・・負けられない！」

決心を固めた表情で強くデバイスを握り締めて構える
そしてその先端から桜色の魔弾を数発放つ

その内の1発はシレーヌを目指した

「馬鹿め！この程度の攻撃など私には通用せぬわ！」

シレーヌはそう言って片手で魔弾を弾き飛ばす
そしてすぐさまなのはに襲い掛かろうとした時、背後から近づく何かに気づき振り返った
其処には残りの魔弾が猛スピードで迫ってきていた

「何ぃ！」

完全に予想外であった
その為何発かは弾き返せたが、最後の1発はかわす事が出来ず顔に直撃してしまう
紫色の鮮血が飛び散る

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

奇声を上げてシレーヌが片目を抑える
抑えた片目からはドクドクと血が流れる
恐らく先ほどの魔弾で損傷したのだろう
そのまま振り返って魔弾を放ったなのはを見た
その形相にはこれまで以上の殺気が込められていた
その形相になのはは完全に怯える

「おのれ・・・おのれぇ！良くも私のこの美しい顔に傷をつけてくれたな！もう許さん！貴様の手足を切断して胴体をバラバラにしてその顔はズタズタに引き裂いて殺してやる！」

怒りの形相のままシレーヌは襲い掛かった

殺気に押されてなのはは完全に出遅れてしまった
咄嗟に防御魔法を張るもそれはシレーヌの拳によりいとも簡単に破られてしまった
ガラスの割れる音を発しながら結界が砕け散る

「そ、そんな！」

驚愕するなのは
そんななのはにシレーヌの拳が突き刺さる
凄まじい衝撃が伝わってきた
咄嗟にレイジングハートを縦に構えて防ぐが、そのまま吹き飛ばされる

「きゃあああああ！」

防いだレイジングハートには亀裂が入りかなりの痛手を負ってしまった
たった一撃でこれほどまでの痛手を与えるとは
このままでは勝てない
そう思っていた時、なのはをシレーヌの腕が捕まえる

「フハハハハ！やっと捕まえたぞ！」
「くっ・・・くうぅぅぅ！」

シレーヌがなのはを掴んでいた腕に力を込める
ギリギリと音を立てて体を締め付けられた
痛みの余りなのはは悲痛の声を上げる
その声を聞いてシレーヌはにやける

「痛いか？だが貴様が私に与えた痛みはこの程度では無い！これか

らそれをたっぷりと教えてやる！」

そう言うとなのはを掴んだ腕を勢い良くビルの中にねじ込ませる
ガラスとコンクリートの砕ける音と砂煙が舞い散る
その轟音のせいでなのはの悲鳴は聞こえなかった
そして、そのままもうスピードで横に飛行する
なのはを掴んでいた腕は次々とビルに直撃する
その度に轟音と砂煙、そしてガラス片が舞い散る
その中で、なのはの悲痛の声とシレーヌの笑い声が響き渡る
やがて、ある程度まで飛行した所でシレーヌは腕を戻す
其処には、散々ビルに叩き付けられて、額からは血を流しボロボロのなのはが居た
気を失っているのか意識が無い
そんななのはを見てシレーヌは狂気に満ちた笑みを浮かべる

「フッフッフ、さぁ、今度はこの私の目を奪った罰として、貴様の片目をくり貫いてやる」

そう言ってなのはの顔に目掛けてシレーヌの鉤爪が迫る
だが、その時

ブオォォォン！

突如バイクのエンジン音が響いてきた
そしてシレーヌの前に一台のバイクが現れた

「な、何！」

シレーヌは驚愕した
低空飛行しているとは言え今シレーヌが居るのはビル一個分の高さ

である
それなのにバイクが此処までの高さまで舞い上がる等不可能であったにも関わらずバイクは目の前に居たのだ
そして、そのバイクは勢いそのままにシレーヌの残った目に体当たりする
ギャリギャリと音を立ててシレーヌの顔を踏みつける

「ギャアアアアアアア！」

シレーヌの顔を激痛が襲うそしてなのはを離し両手で顔を覆う
気を失ったなのははそのまま重力に従い下へ落下していく
そんななのはの元へバイクに乗った青年がバイクごとビルを蹴って飛び上がりハンドルから片手を離してなのはを受け止める
そのまま街灯にタイヤを押し付けてウィリーの要領で下へ滑走して大地に降り立つ
恐ろしいバイクテクニックだ

「う・・・うぁ・・・」

青年の腕の中でなのはは目覚めた
なのはは自分を助けてくれた青年を見た
茶色のボサボサの髪型に特徴的な睫毛をした顔立ち
そして黄色い半そでシャツには赤い文字で「A」と書かれていた

「よぅ、最近のガキは夜遊びが好きらしいな」

青年は軽口を叩いてなのはを見る

「えっと・・・貴方が助けてくれたんですか？」
「ああ、そうだぜ」

青年はニッと笑う

「えっと・・・その・・・・あ、有難う御座います！危ない所を助けて頂いて・・・」

「へぇ、さっきのガキとは違って礼儀正しいじゃねぇか。感心感心」

そう言って青年はなのはを降ろす

丁度その時、シレーヌが顔から手を離す

その顔にはバイクのタイヤの跡がくっきりと写っていた

「お、おのれぇ！おのれぇ！よくも私のこの美しい顔を踏みつけてくれたなあああああああ！」

シレーヌがこれまで以上に険しい顔で二人を睨む

だが、青年はフッと笑っていた

「てめぇの顔が美しいだぁ？頭可笑しいんじゃねぇの？一辺鏡見てお色直しして来いよ・・・このブス！」

「き・・・貴様あああああああああああああああああああああ！」

読者の方々は決して女性の顔を見て「ブス」等と言ってはいけません

それは人として最低の行為ですので

決して言わないで下さいね

等と言っている暇など無く怒り狂ったシレーヌが襲い掛かろうとするなのははフラフラな足取りで立ち上がりデバイスを構える

足に魔力を展開して飛び上がろうとするが、損傷が激しいせいか上手く飛べない

そんななのはを見て青年が肩を上げる

「おいおい、そんな怪我じゃ無理だろう?休んでろよ」
「い、いえ・・・私が戦わないと・・・だから・・・お兄さんは逃げて下さい!・・・此処は私が食い止めますから!」

そう言ってデバイスを構えるもその姿に先ほどの力強さは感じられない
とても弱弱しい
そんななのはを見て青年はやれやれと言った顔をする

「おいおい、大の男がお前みたいなガキに助けられたら恥ずかしくて大手を振るって町を歩けねぇじゃねぇか!」
「で・・・でも、相手はあんなに強いんです!普通の人間じゃ勝てませんよ!」

なのはは言う
だが、其処で青年はニヤリとする

「安心しな、俺も普通の人間じゃねぇからよ」
「え?」

青年の言った言葉が理解出来ずなのはは首を傾げる
すると青年は数歩前に出る

「俺のバイク・・・ちょっと見っててくれよな」
「え?な、何をするんですか?」
「こうするのさ!」

すると青年は腹の辺りで両腕を交差させてその後、ゆっくりと手を天に伸ばす、そして

「デエエエエエエエエエエビイイイイイイイイイイイル！」

と、叫ぶ
すると青年に向かって一筋の雷光が降り注ぐ
その雷光を受けると、青年は瞬く間に緑色の巨人になった

「え？えええええええええええええええええええええええ！」

その光景になのはは驚いた
まさか目の前に居た青年が突如巨大な人になったのだから
そんななのはに振り返った巨人がニヤリとした

「驚いたかい？穣ちゃん。これが俺のもう一つの姿・・・その名は『デビルマン』だ」
「デビル・・・マン・・・」

なのははそう言ってデビルマンを見た
その姿はデーモンの一種だとは思えたのだが、何処か安心感が持てた
他のデーモンとはまた違う感じである
まるで、人間の心を持ったデーモンの様であった
そんなデビルマンがシレーヌと向き合う

「久しぶりだなぁ、シレーヌ！どうやって生き返ったかは聞かねぇよ・・・どうせまた俺が地獄に叩き落してやるんだからな」
「ほざけ！今度は貴様を逆に地獄に叩き落してくれるわ！」
「やれるもんならやってみやがれ！」

そう言ってデビルマンが地を蹴る
ズシンズシンと振動が伝わる
そして勢いそのままにデビルマンの拳が振られる
それはシレーヌも同様であった
シレーヌの鳥の足を模した腕が硬く握られてそのままデビルマンに向かって振られる
互いの拳がぶつかりあい凄まじい衝撃が辺りを震わせる
衝撃波が辺りのビルの窓ガラスを割る
その後、二人は一旦距離を開ける
するとシレーヌは上空に舞い上がった

「逃すか！デビルウィィィング！」

デビルマンが背中から真っ赤に輝く翼を生やす
そしてそのまま大空に舞い上がる
2体のデーモンは遥か上空で激しくぶつかりあった

「きえええええええ！」

シレーヌが狂気に満ちた顔で爪を振るう
だが、それをデビルマンが片手で払いのける

「デビルチョップ！」

お返しにともう片方の手で手刀を作りシレーヌを叩く

「ぐえっ！」

悲痛の声を上げてシレーヌが錐揉み上に落下する
だが、すぐに体制を立て直す

そしてまたデビルマンの元へ駆け寄る

「きしゃあああああああああ！」

「うおっ！」

そのままの速度でシレーヌは爪を振るった
デビルマンの胸に衝撃が走った
次の瞬間、シレーヌはデビルマンの前に立っていた
その手は紫の血で塗れていた
デビルマンの血である
見ると、デビルマンの胸は数本の切り傷があった
其処から血が流れる
シレーヌは手についたデビルマンの血を舐め取る

「ククク！今度こそ貴様をズタズタに切り刻んでやる」

そして狂った笑みを浮かべてデビルマンを睨む
だが、デビルマンは一向に余裕の笑みを崩さない

「ハンッ、これで勝った気になってるのか？其処までおめでたい頭になってるとは同情するぜ」

「何！」

「こんなかすり傷幾らつけたって俺を倒すのは無理なんだよ！」

そう言って今度はデビルマンが向かって来た
そしてそのまま殴り、蹴りと連続攻撃をお見舞いした

「おらおらおら！」

「ぐえええええええええええ！」

顔に、腹に、背中に、胸に、腕に、足に、
デビルマンの重い一撃が当たる
その度にシレーヌの顔に苦悶の表情が浮ぶ
殴り合いでは分が悪いと思ったシレーヌは一旦距離を開ける
すると頭に生えた2本の触角の間から閃光が迸る(ほとばし)

「これで死ね！デビルマン！」

2本の触覚から黄色い雷が放たれた
それは真っ直ぐデビルマンに向かって飛んでいく

「そっちがそう来るならこっちはこうだ！デビルビィィィム！」

デビルマンが腕を目の前で交差させる
するとデビルマンの羽から赤い熱光線が放たれる
シレーヌとデビルマンの放った光線が互いに空中でぶつかり合い激しい閃光を放つ

押し負けたのはシレーヌであった

「ぎゃあああああああああ！」

どうやら先ほどのなのはとの戦いで激しく損傷したせいか思うように力が出なかったようだ
このままでは勝てないと判断したシレーヌが踵を返し飛び去る

「逃すか！」

それを追ってデビルマンも飛び出す
二人のデーモンはやがて空高く舞い上がり・・・見えなくなった

＊＊＊

デビルマンの戦いを見ていたなのはは言葉が無かった
凄まじいの一言だったのだ
あれがデーモン・・・
もしあんな恐ろしい敵がこの先出てきたら・・・自分に勝てるのだろうか
なのはの中に一抹の不安が過ぎった
その時、

「此処に居たんだな」
「え？」

振り返ると、其処には赤いバリアジャケットを身に纏い、ハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」を構えたヴィータが居た
ヴィータはギロリとした形相でなのはを睨んだ
なのはは一瞬たじろぐ
今なのははかなり負傷している時である
そんな時に敵の攻撃に合うのははっきり言って分が悪い
そんななのはにヴィータはデバイスを構える

「悪く思うなよ・・・お前の魔力を頂く」

そう言ってゆっくりと歩み寄る
その時、突如なのはとヴィータの前に閃光が放たれた

「な、何だ！」

ヴィータは思わず下がり閃光が晴れるのを待った
すると、其処には黒いバリアジャケットを身に纏い金色の髪をした
少女が居た
その少女をなのはは知っていた

「ふぇ、フェイトちゃん！」
「遅くなって御免ね、なのは」

フェイトは後ろに居たなのはにそう言って微笑む
そしてヴィータに向かってデバイスを構える

「お前・・・そいつの仲間か？」
「友達だよ！」

ヴィータの問いにフェイトが答える

「なのは！大丈夫？」

その後、なのはの横から声がした
振り返ると、其処には同じく金髪のショートの髪型をした少年が居た

「ユーノ君！」
「なのは・・・酷い怪我だよ！」
「ううん、これはあの子がやったんじゃないの！」
「え？どういう事？」

なのはの言葉にフェイトも首を傾げる

そして疑う目でフェイトはヴィータを見る

「貴方は一体何者なんですか？」
「何で赤の他人に教えなくちゃならねぇんだよ！あたしは只お前等の魔力を頂ければそれで良いんだしよ」
「そんな事は・・・」

フェイトが強張った顔でデバイスを構える
ヴィータも同様にデバイスを構える
正に一触即発の空気が漂う時、

「フェイトちゃん！危ない！」
「え？」

突如なのはの声がした
そしてハッと上を見上げた
其処には一本の巨大な斧が振って来たのだ

「くっ！」
「おわっ！」

フェイトとヴィータは咄嗟に後ろに飛びのき回避する
その間に斧は落下して、大地を割る
フェイトはその斧を見た
斧を使う者はフェイトの脳裏に一体浮んだ
だが、目の前に振ってきた斧を見た時、その予感は吹き飛んだ
斧の形状が違うのだ
目の前にあるのは片刃の斧で形状も少し小さい
一体誰が投げたのかと上を見上げると、上空には1体のロボットが居た

赤いマントを靡かせて赤、白、黄色の三色の機体色をした巨大なロボットであった

「げ・・・ゲッターロボ！」

フェイトはその名を口にする
だが、少し違う
フェイト達の知っていたゲッターロボに比べると大きさも一回り小さい
そして、何よりフェイト達の知っているゲッターロボなら斧を投げる前に何かしら言葉を掛ける筈だ
それが全く無く投げてきたのだ
恐らく違うと予想できた

「おい！あれもお前等の仲間なのか？」
「分からない・・・あれは一体」

ヴィーターの言葉に否定の返答をして空を見上げた
空では謎のゲッターロボがフェイト達を見下ろしていた
ふと、ゲッターはなのはとユーノの方を見る
すると、肩からもう一本の斧を取り出してそのまま投げつけて来た

「なのは！下がって！」

咄嗟にユーノはなのはの前に出て防御結界を張る
その直後、巨大なトマホークが結界に当たる
衝撃で結界にヒビが入るもどうにか止める事が出来た
止められた斧はそのまま地面に落ちる
どうにか防げたと思いフゥと息を吐く
だが、その直後謎のゲッターロボは大地に降り立つ

轟音と衝撃を撒き散らして大地に足をつくゲッターロボ
その姿には何故か不気味ささえ感じられた

（一体どうして？どうしてこのゲッターにはこんな不気味な気配がするの？）

フェイトはバルディッシュを構えてゲッターを睨むそんなフェイトをゲッターは横目で睨む
すると猛然と拳を突き出して来た
肘に付いていた鋸状の刃「ゲッターレザー」が襲い掛かる

「くっ！」

咄嗟にバルディッシュを縦に構えて防ぐ
だが、衝撃の余りにフェイトは吹き飛ばされる

「この野朗おおおおおおおおおおお！」

後ろからヴィータがグラーフアイゼンを振り上げて襲い掛かる
ゲッターは振り返る
だが、回避は間に合わない
直撃！そうヴィータは思った
だが、次の瞬間、ゲッターはその場から姿を消した

「なっ！」

その光景に驚くヴィータ
何処だと探す、すると上空には3機のゲットマシンに分離したゲッターロボが居た
そして今度は白い細身のロボットになる

両手がアームとドリルになっている地上戦闘用と思わせる機体である
白いゲッターロボはそのままヴィータに向かってドリルをミサイル
のように放つ

「当たるか！」

ヴィータはそれをかわす
だが、それはゲッターには予想出来た事であった
ヴィータが回避した直後、腕からドリルを生やしそれを高速回転さ
せて猛烈な風を放つ
ドリルストームだ
攻撃を回避した直後を狙われた為完全に出遅れたヴィータはドリル
ストームに捕まり錐揉み状に舞い上がる

「うわあああああああああああああ！」

竜巻の中でグルグルと周りそのまま悲鳴を上げる
その時、ゲッターに衝撃が走る
振り返ると、ボロボロになったレイジングハートを構えるなのはが
居た
ゲッターは邪険な目でなのはを睨む
一方で、落下するヴィータをフェイトが抱きかかえる

「大丈夫？」
「けっ！お前に助けられる程あたしは落ちぶれちゃいねぇよ！」

とりあえず其処まで軽口が叩けるのなら大丈夫だろうと安心したフ
ェイト
そしてヴィータを離し二人してゲッターを睨んだ

「このままバラバラに戦っても多分あいつには勝てねぇ・・・おい
お前・・・手を貸せ」
「うん！」

フェイトとヴィータがそれぞれデバイスを構えてゲッターを睨む
突如現れた謎のゲッターロボ
果たして魔道士達はこの局面をどう切り抜ける？
そして、甲児達は何時来るのか？

始まりは唐突に　終

次回予告

おいおい、こっちもかなり大変な事になっちまったなぁ
こうなったらこっちでも俺達が暴れ巻くってやるぜ！
って、あいつは誰だ？

次回『ビルドアップ！鋼鉄ジーグ』

次回もこの小説に
テイィィィィィィクオォォォォォォォォフ！

始まりは唐突に！　後編（後書き）

甲児達がやってくるのはもう少し先です

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　前編（前書き）

今回ついに作者が一番出したかったキャラが登場します

甲児「へぇ、そうなんだ」

それはそうと、今この小説では人気ランキングなる物をやってます！

甲児「マジか！それってひょっとして俺にも入るって事か？」

まぁ活躍次第かな？ってな訳で、読者の皆さん！ドシドシ応募してください！

応募してくれた方々には何と、ボスジング・ハートをプレゼント

甲児「おい！それって宴会でボスがやってた奴じゃねぇか！まだ引っ張ってるのかよ作者！」

詳しくは本編の「大騒ぎ！宴会大騒動」をご覧下さいってな訳で「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」

？？？「始まるぜぃ！」

甲児「だ、誰だてめぇ！」

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　前編

甲児達が１０年前で戦っている時、１０年後のとある場所では
「Ｄｒ．ヘル！大変です」
とある研究室で機鋼兵が慌てた顔でＤｒ．ヘルの研究室に入る
それに眉を動かすＤｒ．ヘルが居た
「何じゃ騒々しい・・・研究の邪魔じゃろうが！」
「い、一大事です！格納庫に保管してあった旧ゲッターロボが忽然と姿を消したのです！」
「何！それは本当か？」
Ｄｒ．ヘルの問いに兵士は首を縦に振って答える
それを見た時、Ｄｒ．ヘルの顔には驚愕の顔、と言うより満面の笑みが浮んだ
「フ・・・フハハ・・・フハハハハハハハハ！やったぞ！実験は成功だ！あれは正しく本物のゲッターロボとなったのだ！」
「は？と、言いますと？」
兵士には訳が分からず首を傾げる
「フン、ゲッター等所詮は実験材料よ！居なくなればむしろ好都合！むしろワシの今の目的はこれよ！」
そう言って手元にあった計器を操作する
すると後ろのパネルが開き、その中には巨大なカプセルが置かれていた
その中には、緑色の液体に浮ぶ人間の上半身が浮んでいた
「こ・・・これは！」
「フフフ、さよう！もう間も無く完成する！ワシの最高傑作がなぁ！」
Ｄｒ．ヘルは狂気に満ちた顔でカプセルの中に浮ぶ上半身を見た
その上半身は未だ眠ったままであった
「フフフ・・・ゲッターロボの中には奴等と同じ者を入れておいた

！それが反応して移動したのだろう！だとすればコイツも同じく動く筈・・・楽しみじゃわい」
そう言って研究室に響き渡る程の声でＤｒ．ヘルは笑った

＊＊＊

なのは、フェイト、ユーノ、ヴィータの四人が突如現れた謎のゲッターロボ戦っていた時、別の場所では・・・
「はぁぁぁぁ！」
ビル街の路地裏で１人の女性が立っていた
ピンク色の長い髪を後ろに束ねた俗に言うポニーテールをした女性であり、髪と同じ色のバリアジャケットを纏っている
そして手には剣型デバイス「レヴァンティン」が握られている
ヴォルケンリッターの１人、「烈火の将　シグナム」である
そして彼女の周囲には異様な井出達をした集団が転がっていた
白い色をした言ってしまえば大和時代の兵士を思わせる服に銅の剣、そして両端に団子状に束ねた髪型と言う異様な格好であった
それだけならまだ良いのだが、問題はその顔であった
まるで何かの化け物を思わせるような顔であった
それが何なのか倒したシグナム自身も分からずに居た
（一体・・・こいつらは何者なんだ？此処最近出没する奴等と似ているが・・・まさか主はやてを狙う一派では）
内心不安がるシグナム
すると

≪シグナム、聞こえるか？≫
ふと彼女の脳裏に男の声が聞こえた
念話である
シグナムも同様に念話で返す
≪どうした？ザフィーラ≫
明らかに何かあったかの様な声色だったのでシグナムは聞いた
するとザフィーラは答える
≪ヴィータが巨大な機械の化け物と交戦している、かなり苦戦している様だ≫
≪ヴィータが？分かった、すぐに向かう≫
シグナムはそう言って念話を切る
「今はこいつらの詮索は後回しだな・・・急がねば」
シグナムは倒れた謎の兵士を一瞥した後飛び去ろうとした
その時、彼女の視界の端で突然眩い閃光が放たれた
「何だ！」
シグナムは閃光が放たれた箇所を見た
やがて、閃光が晴れると、其処には１人の少年が倒れていた
シグナムは急ぎその少年の下へ駆け寄る
「おい！大丈夫か？しっかりしろ！おい！」
倒れた少年を数回揺さぶって起こす
起こしながらシグナムは少年を見た
茶色の髪をし、黒を基調としたジャケットを身に纏っており、胸には何かのロボットを現すマークがついていた
「う・・・い・・・ちち・・・」
やがて、少年は目を覚ます
それを見てどうやら息があると安心するシグナム
すると少年はシグナムを・・・と、言うよりシグナムのある部分を見る
すると
「うおおお

ああい！」
「ぬぁっ！」
突然叫んだと思うと少年はシグナムの胸に顔を突っ込みそのまま両手でガシッと胸を鷲掴みしたのだ
突然の事に反応が出遅れるシグナム
その間少年は
「ぬおおおおおおおお！この感触・・・んでもってこのでかさ・・・く～～～溜まらん！やっと柳生さんのおっぱいが俺の手にぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
歓喜の声を上げながら少年は見上げる
すると其処には
「・・・・・」
其処には殺気に満ちた顔をしたシグナムが居た
それを見て
「あん？誰だ？・・・お前？」

ブチッ！

それを聞いたシグナムの中で何かが切れた
そして、
「切り裂け！レヴァンティン！（激怒）」
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
シグナムの放ったレヴァンティンは少年に命中する
少年は黒焦げになって絶叫する
そしてそのまま少年は倒れる
だが、
「ってぇなぁ！いきなりそんな物騒なもん振るうんじゃねぇよ！怪我したらどうすんだよ！」
何と少年は何事も無かったかのように起き上がる
それを見てシグナムは驚愕する

「馬鹿な!非殺傷設定をしているとはいえ・・・私のレヴァンティンを受けて何事も無かったかの様に立ち上がるとは・・・」
シグナムには初めてであった
非殺傷設定をしているとは言え普通の人間がレヴァンティンを受けたら多少の怪我はする筈である
もしそうでなくても気を失う筈だ
だが、目の前の少年はまるで無傷であった
しかも結構不機嫌そうに少年はシグナムを睨む
「ったくよぉ、気がついたら訳分かんねぇとこに居るしよぉ、いきなりボインな姉ちゃんには変な剣でぶっ叩かれるし、今日はついてねぇぜ」
「お前・・・まさか次元漂流者か?」
「あ?じ・・・じげ・・・何だ?」
少年には理解出来ない単語だったらしく頭に?マークを浮かべる
それにシグナムは溜息をつく
「つまり・・・言ってしまえば迷子の様な物だ」
「あぁ?迷子ぉ!良く分かんねぇなぁ・・・んな事より此処は何処だよ!ビルドベースは何処にあるんだ?」
少年は辺りをキョロキョロしだす
「ビルドベース?何だそれは」
「って、おいおい・・・お前、ビルドベースを知らねぇのか?って事はお前日本人じゃねぇだろう!」
「嫌、そんな施設の名前など聞いた事は無いぞ」
シグナムの言葉に少年は訳が分からず難しい顔になる
「はぁ・・・んじゃぁよぉ、此処は何処なんだ?」
「此処は「海鳴市」だが」
「海鳴ぃ?んな地名聞いた事無ぇぞ?」
聞いた事の無い地名に少年は更に難しい顔になる
だが、すぐに元の顔に戻る
「んまぁ良いや、とりあえず腹減ったなぁ・・・なぁあんた、何か

食い物持ってねぇか？」
「あんたじゃない！私はシグナムだ！憶えておけ少年」
「少年じゃねぇ！俺は「草薙剣児」だ！憶えておけ！」
剣児とシグナムは互いに自己紹介（？）を済ませる
すると其処へ青い体毛をした生き物が現れる
「シグナム！どうした？」
「うおわぁ！何だ？犬っころが喋ったぞ！どうなってんだ？」
突如犬のような姿をした生き物が口を開いたのに剣児は驚愕の表情になる
「犬じゃない！俺は「盾の守護獣ザフィーラ」だ」
「ざ・・ざふぃ？・・・だぁもう面倒臭ぇ！もう犬っころで良いだろうが！」
「良くない！」
剣児の提案を一蹴する
だが、一向に剣児は聞き入れない
「とにかく、今は急いでヴィータの元へ向かうぞ」
「ああ・・・すまんがザフィーラ・・剣児（そいつ）を運んでくれないか？」
「？？？別に構わんが・・・」
シグナムの言葉に首を傾げるがとりあえず深く詮索はせずに了解する
「よし！では行くぞ！」
「分かった」
そう言ってシグナムとザフィーラは飛び上がる
ザフィーラは剣児のジャケットの襟首を咥えて飛び上がる
「ってコラァ犬っころ！人を荷物みたいに扱うんじゃねぇ！どうせならシグナムさんに抱えて欲しいぜ！」
「贅沢言うな！運んでやってるだけでも有難いと思え！（怒」
明らかに不機嫌なシグナムは怒気を交えながらそう言った
（何かあったのか？シグナム（汗）
剣児を咥えながらザフィーラは思った

すると、突如背中に剣児が乗る
「イ、何時の間に！」
「へへぇ、こりゃ中々乗り心地良いぜぇ！頼むぜ、犬っころ」
「だから犬っころじゃない！ザフィーラだと言ってるだろう！」
「うっせぇ！グダグダ言ってねぇださっさと行けってんだよ！」
ザフィーラの背中を叩いて剣児はそう言う
それを見てザフィーラは深く溜息を吐く
（何なんだ？コイツは・・・）
つくづく剣児が何者なのか分からなくなるザフィーラであった

＊＊＊

一方、シグナム達とは別方向からヴィータの元へシャマルは向かっていた
「あのヴィータちゃんが苦戦するなんて・・・その機械の怪物って一体・・・」
シャマルは先ほど念話で聞いた機械の怪物・・・そしてヴィータの苦戦の報を受けていた
それに一抹の不安を胸に現場に急いでいた
その時、
「え！」
突如シャマルの上空に閃光が放たれた
そして、閃光が晴れると、其処には巨大な戦闘機らしきものが降って来た
そう・・・シャマルの真上に・・・
「えええええええええええええええええ！」

驚くシャマルだが、すぐに防御魔法を展開させて戦闘機を抑えるそしてゆっくりと地上に降ろす
額は冷や汗等も合わせて汗まみれになっていた
「い・・・一体何これ？」
シャマルは今まで見た事の無い巨大な戦闘機を見て眉を顰めていたすると、巨大な戦闘機のコクピットと思えるハッチが開くすると中から黒い長髪の少女が現れた
「いたた・・・此処は一体・・・」
少女は頭を抑えて呟いていた
「えっと・・・大丈夫ですか？」
シャマルは現れた少女に聞いたそれに少女は頷く
「えっと・・・すみません、此処は何処ですか？」
「此処ですか？此処は海鳴市ですが」
「海鳴！聞いた事無い地名ねぇ・・・それじゃ、ビルドベースは知ってますか？」
「ビルドベース？御免なさい・・・そんな施設は聞いた事ないですね」
それを聞いた少女は半ば暗い顔をするしかし、すぐに驚愕の顔になる
「あああああああああああああああああ！剣児が居ない！あの馬鹿何処行ったあああああああああああああああ！」
「えぇ？ば・・・馬鹿？・・・剣児？・・・一体誰ですか？」
「あぁ、御免なさい・・・私の知り合いなんですが・・・あの馬鹿剣児・・・一体何処ほつき歩いてんだか・・・今度見つけたらたっぷりお仕置きしておかないと（怒怒怒」
少女の額には大量の血管が浮んでいたそれを見てシャマルは青ざめる
「えっと・・・私これから行かなきゃならない場所があるんですけど・・・出来ればご一緒出来ますか？」

「ええ！こちらからもお願いします」
シャマルの提案に少女は承諾した
「私、シャマルと言います。貴方は？」
「私は「珠城つばき」って言います宜しくお願いします」
二人は互いに自己紹介を済ます
つばきはすぐにビックシューターを起動させる
「シャマルさん！後ろに乗って下さい！すぐに向かいますから」
「いえ、私は”飛べますから”平気ですよ」
「そうなんですか・・・・へ？飛べる！？」
シャマルのその一言につばきは己の耳を疑う
そして、目の前でふわりと飛び上がったシャマルを見て今度は己の目を疑った
「えええええええええええええええええええ！ななな、何で空を飛べるのおおおおおおおおお！」
つばきはシャマルを指差して目を丸くした
それにシャマルは少し困った顔になる
「えっと・・・これは魔法の力でして・・・」
「ま、魔法ぅぅぅ！え？何それ？ひょっとして此処ってファンタジーの世界ぃぃ！どうなってんの？」
辺りをキョロキョロしてパニック状態になるつばき
そんなつばきを必死に宥めるシャマル
宥められたつばきはどうにか平静を取り戻しビックシューターを浮かす
「それじゃつばきさん。私についてきて下さい」
「分かりました！ビックシューター！ＧＯ！」
シャマルの後に続きビックシューターが飛び立つ

＊＊＊

遥か上空ではデビルマンが逃げるシレーヌを追っていた
「待て！何処まで逃げる気だ！シレーヌ」
「くっ！おのれぇデビルマンめぇ！」
負傷した片目を抑えながら憎憎しげにデビルマンを睨むシレーヌ
その時、二人の間に黒い稲妻が落ちる
「ぎゃぁっ！」
「うおっ！」
咄嗟にデビルマンは後ろに飛びのく
すると、シレーヌの後ろに巨大な戦艦が現れた
土器を模した形の戦艦であり、側面からは8匹の竜の顔が飛び出していた
「な、何だあれは？」
デビルマンは驚愕の目で見ていた
しかし、シレーヌは
「おぉ！やっと来たのか！」
歓喜の顔でそれを見た
すると、甲板から3人の男が現れる
1人は立派な髪と髭を蓄えた男であり
もう1人は半分が鋼鉄の鎧で出来ており
最後の男は最早人間とは呼べる状態では無い者であった
「壬魔使！阿磨疎！壱鬼馬！」
シレーヌが名を呼ぶ
すると壱鬼馬と呼ばれた男が口を開く
「シレーヌよ！他の者も集まっている、すぐに妃魅禍様の元へ向かうぞ」
「ふっ、分かった」
頷いたシレーヌは巨大な戦艦に乗り込む

「ま、待て！シレーヌ」
デビルマンはそれを追おうとしたが、リュウが放つ炎で邪魔されてこれ以上進めないでいた
「フン、デビルマンと言ったな、案ずるな！すぐに我等邪魔大王国とデーモン軍団がこの世界を死と暗黒の世界に変えてやる！」
「楽しみに待っているが良い！」
「ゲヒャ～～ヒャヒャヒャ！それまで震えてるが良い！ヒャ～ヒャヒャヒャ！」
そう言い残して戦艦は忽然と姿を消した
「邪魔大・・・王国・・・一体何だ？それは」
デビルマンは1人美しく月の出ている上空に取り残されていた

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　前編（後書き）

続く

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　後編（前書き）

今回オリジナルデバイスが登場します
・・・多分（汗）

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　後編

シグナムとザフィーラは草薙剣児を
シャマルは珠城つばきを連れて一路ヴィータの居る地点を目指した
ふと、シャマルはビックシューターを操縦するつばきを見る
（そう言えば・・・つばきちゃんの声って、はやてちゃんに似てるわねぇ）
そう思っていた
「どうかしましたか？」
視線に気づいたつばきがシャマルを見る
「え？えぇと・・・知り合いに声が似てたからつい・・・ね」
「へぇ・・・私と声が同じ人が居るんですかぁ・・・会って見たいなぁ」
余程自分と同じ声なのが良かったのだろう
つばきは自分と同じ声をする人に興味を持った
「ま、今は何としてもあの馬鹿剣児を見つけないと・・・あいつ絶対何かやらかすし」
つばきは頭を抱える仕草をしていた

＊＊＊

「ヘェックシ！」
その頃、ザフィーラの上では剣児が盛大なくしゃみをしていた
「何だ？風邪か？」
「いや、誰かが俺の事を褒めてたのかもなぁ」

剣児が鼻高らかに答える
「それは無いだろう」
だが、それをシグナムが否定する
「あぁ？何でだよぉ！」
「お前を褒める輩の顔が思い浮かばんからだ」
「ひ・・・ひでぇ・・・」
シグナムの一言は以外にも剣児にはクリティカルであった
「だあああああああ！にしても腹減ったぞおおおおお！もう犬っころの尻尾で良いや！おい、お前の尻尾寄越せ！焼いて食うから！」
「ふざけるな！そんなの出来る訳無いだろう！（汗」
いきなり何を言い出すのかと冷や汗を流すザフィーラ
だが、剣児は
「尻尾が駄目ならてめぇを食ってやるぅぅ！」
と言っていきなりザフィーラの首元に噛み付く
「ぎゃあああああああああああああああああああ！」
相当痛かったのだろう
悲痛の声を上げる
「ざ、ザフィーラアアアアアアアアアアアア！」
いきなり何をしだすのかと言った目でシグナムが止めに入る
だが、剣児の目はマジであった
「は、離せえええええええええええええ！俺は食い物じゃないぞおおおおおおおお！」
「うっせえええええええええ！犬っころの分際で喋りやがってええええええええええ！てめぇ犬じゃなければ何だあああああああ！」
「だから俺は盾の守護獣だって・・・ギャアアアアアアアアアアアアア！」
更に強く噛み付いてきたので先ほど以上の声で叫ぶ
たまらなくなったザフィーラは狼形態から人間形態に戻る

筋肉質な男性の姿であった
それを見た剣児は
「げえええええええええええええ！男じゃねぇか！食う気失せちまったじゃねぇか！気持ち悪ぃ！」
剣児は吐く仕草をする
「シグナム・・・俺は泣いて良いのか？この場合（涙」
「そうだな・・・私には良く分からんが泣いて良いんじゃ無いのか？」
涙目になるザフィーラの肩をそっと触れてそう言う

＊＊＊

なのは、フェイト、ユーノ、そしてヴィータの四人は巨大な機械の怪物を前にしていた
「あの野朗！とんでもねぇパワーを持ってやがる！」
「でも、どうしてゲッターロボが敵に・・・」
ボロボロになったヴィータ達とは対照的にゲッターロボはほぼ無傷であった
両手には小振りだが鋭い切れ味を誇るトマホークが握られており、それで四人を睨む
「お願い！レイジングハート！」
『Ｃｏｎｓｅｎｔ．』
なのはがそう言ってレイジングハートを構える
桜色の閃光が収束する
「ディバイィィィン、バスタァァァ！」

収束された魔力砲がゲッターを狙う
その時、ゲッターの持っていたトマホークが突如緑色の光を放つ
その光を纏ったトマホークはなのはの放ったディバインバスターを
真っ二つに切り裂いた
切り裂かれたディバインバスターはゲッターロボの遥か後方で爆発
する
「そ、そんな！」
「ディバインバスターを・・・切り裂くなんて！」
なのはとユーノは驚く
「ならこれはどうだあああああああ！」
後ろからヴィータがグラーフアイゼンを構える
形を変えたアイゼンの後方からジェット噴射される
そしてその勢いのまま振り下ろす
「ラケェェテン！ハンマァァァ！」
ヴィータは叫び振り下ろす
だが、ゲッターは避ける仕草を全く見せないでいた
「自信ありってか？ならそのままブッ潰れろおおおおおおお！」
避けないゲッターに多少不満げになったヴィータがそのまま振り下
ろす
だが、そのラケーテンハンマーをゲッターは片手で防いでしまった
防いだ手から激しい火花が散る
そしてそのまま握りつけた
「こ、コイツ・・・」
決め技をいとも簡単に防がれた事にヴィータは苦虫を噛むような顔
をする
ゲッターの鋭い視線がヴィータを睨む
そしてトマホークを振り上げた時、突如背後から雷光が襲いかかった
雷光を受けてゲッターは仰け反る
その際に掴んでいたハンマーを放してしまう
「アイツ・・・」

ヴィータは雷光を放った相手を見る
其処にはバルディッシュを構えたフェイトが居た
ゲッターはフェイトを睨む
「サンダーレイジが効かない・・・」
大してダメージを受けてないゲッターにフェイトは驚きの表情を浮かべる
ゲッターは戦いを邪魔された事により怒りの表情を浮かべる
そして肩からトマホークを取り出し投げつける
「くっ！」
フェイトはまず一本のトマホークを弾く
凄まじい衝撃と火花が飛び散る
手が引き千切られる感じがした
（つ・・・強い・・・やっぱりパワーじゃ勝てない！）
そう呟きフェイトはバルディッシュを見た
真ん中から亀裂が入っている
先ほどのトマホークで亀裂が入ったのだ
そして2本目のトマホークを弾いた時、
フェイトのバルディッシュが音を立てて真っ二つに折れてしまった
「ば、バルディッシュ！」
折れたバルディッシュを見て驚愕する
「フェイトちゃん！」
突如、なのはの声が響いた
「え？」
「フェイト！避けて！」
「は！」
ユーノの叫びに何かが起ころうとしてるのか分かった
ゲッターの胸に丸いレンズが開き、其処から膨大なエネルギーが集まっていく
その技はフェイト達が最も理解している技であった
「げ・・・ゲッター・・・ビーム！」

フェイトは呟いた
そして、それは無情にも放たれた
桜色の膨大なエネルギー砲が真っ直ぐフェイトに向かって放たれる
「フェイトちゃん！避けて！！」
「駄目だ！さっきの衝撃でロクに動けないんだ！」
「くっ！」
まともに動けないフェイトに向けて閃光が放たれる
避けれないと判断したフェイトは咄嗟に腕を交差して防ぎの体制に入る
その時、突如前に何者かが入る
「え？」
フェイトの前に現れた人物は持っていたデバイスでゲッタービームを両断した
今度はゲッタービームがフェイトの後方で爆発する
「げ・・・ゲッタービームを・・・叩き斬るなんて・・・一体誰が・・・」
ユーノがそう言っていると
「情けないなぁ、だからあんたはスケベフェレットなんだよ」
「ぬぁっ！その仇名を呼ぶのは！」
ユーノはその呼び名をした事によりそいつが何者なのか思い出した
それは、フェイトと同じ顔に髪をしており、バリアジャケットも何処か似ていた
只違うのはデバイスがフェイトのバルディッシュに比べて一回り大きい
「お・・・お姉ちゃん！」
「ヤッホー！お姉ちゃんの登場だよぉ！」
フェイトの姉、アリシアはフェイトに向かってブイサインを決める
それを見てフェイトは苦笑いを浮かべる
そして、突如ゲッターロボをオレンジ色のバインドが動きを封じる
動きを封じられたゲッターは必死にもがく

だが、中々バインドは解けない
「皆お待たせ！」
「すまない！遅くなった」
「アルフさん！クロノ君！」
今度はなのはの元へアルフとクロノが駆けつける
アルフは未だにゲッターにバインドを掛けている
「アリシアのデバイスの調整に時間を食ってしまってね・・・でも、お陰でアリシアも戦えるようにはなったよ」
「クロノ君！アリシアちゃんのデバイスって・・・」
なのははアリシアのデバイスを見た
「さぁて、そんじゃ初のお披露目と行くよぉ！バルディッシュ！」
『Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ』
アリシアの言葉にバルディッシュＭＫ－？は答える
すると、杖の先端から光の刃が現れた
其処まではフェイトのバルディッシュと同じであったが、形状はフェイトのような『鎌』ではなく、巨大な両刃の『斧』であった
「お・・・斧？」
「彼女の希望でね、何でも竜馬さんみたいにトマホークを扱いたいって言うんでそう作ったんだ・・・そのせいで調整に手間取ったんだけどね」
「な・・・何て強引な・・・（汗」
余りに強引な事に流石のなのはとユーノも冷や汗を流す
その先ではバルディッシュＭＫ－？を構えたフェイトがゲッターを睨んでいた
「この偽者ゲッター！よくも私の可愛い妹を虐めたわねぇ！お返しは１０倍返しが基本なんだから！」
フェイトとは違いハイテンションで巨大なトマホークを振り上げるだが、光の斧が振り下ろされる寸前、ゲッターは再び３機のマシンに分離してしまいバインドから逃れた
「ちっ！オープンゲットまであるなんて！」

アルフは舌打ちした
これでゲッターは自由の身になった
そして上空で再びゲッター1になると肩からトマホークを取り出し
アリシアに向かって切り付ける
「パワーで私に勝てると思わない方が良いよおおおおおおお！」
思い切り叫びながら斧を振るう
スピードこそフェイトより劣る物のパワーは遥かに上を行くアリシ
アの斧とゲッターのトマホークが空中で交差する
激しい閃光と火花が飛び散る
だが、その時突如ゲッターを謎の衝撃が襲った
衝撃に襲われたゲッターは完全に予想外であった為地面に激突する
其処には、レヴァンティンを振るった体制になっているシグナムが
居た
「苦戦中か？ヴィータ」
「うっせぇ！この後でやっつけるつもりだったんだよ！」
シグナムに言われて多少ふてくされてヴィータは言う
「何だ？そのペチャパイのガキンチョは？」
ザフィーラの上に乗っていた剣児がヴィータを見て言った
ヴィータは噛み付くような目で剣児を睨む
「シグナム・・・何だそいつは？」
「・・・気にするな・・・只の次元漂流者だ」
「次元漂流者？」
ヴィータは首を傾げる
だが、剣児はどうやらその次元漂流者と言う言葉の意味が分からな
いらしく不満げな顔をする
「おい！俺はその次元なんちゃらじゃねぇ！ちゃんと草薙剣児って
立派な名前があるんだ！憶えとけクソガキ！」
「何だとこのヤロオオオオオオオオ！」
「やんのか？ゴラアアアアアアアア！」
ザフィーラの上に乗った剣児とヴィータが睨みあう

「おい、頼むから俺の上でもめないでくれないか（汗」
上で暴れられているザフィーラには溜まった物ではない
その時ヴィータが突如グラーフアイゼンを構える
その仕草にザフィーラは青ざめる
「ぶっ潰す！」
「ま、待て！ヴィータ！下には俺が居るって・・ぎゃあああああああああああああああああ！」
ヴィータは下に居たザフィーラごと剣児をビルの屋上に叩き落す
「ヴィータ・・・下にザフィーラが居たんだぞ」
「あ！！」
やっと自分の犯した事に気づいたのか目を丸くするヴィータ
その下では目を螺旋状に回すザフィーラを持ち上げる剣児が居た
「この暴力女ぁぁ！怪我したらどうすんだボケエエエエエエエエエエエエ！」
なんと無傷であった
それにヴィータは更に目を丸くする
「な、何であいつあたしのグラーフアイゼンを食らって無傷なんだ？」
「分からん、さっき私もレヴァンティンで切ったが無傷だった」
「ま、マジか！」
その事に驚くヴィータ
下では
「無視すんじゃねぇえええええ！必殺ぅぅぅ！犬っころミサアアアアアアアアアアイル！」
「だから俺は犬っころじゃない！ザフィーラだって言って・・ぎゃあああああああああああああああ！」
再びザフィーラは絶叫した
物凄い勢いでザフィーラは投げつけられたのだ
「許せ！ザフィーラ」
ヴィータは片手で謝罪の意思を示すと目の前に防御結界を敷く

それに直撃したザフィーラが鼻っ柱を抑えて蹲る
かなり痛そうだ
「だ・・・大丈夫か？ザフィーラ（汗」
「あ・・・ああ・・・なんとかな（涙」
涙目になって答えるザフィーラ
「んなろおおおおお！よくもあたしらの仲間を！」
ヴィータは剣児を見て怒りの意思を表す
「ヴィータ・・・お前もあの時俺の事殴っただろう（怒」
頭にはヴィータに殴られた際に出来たタンコブをつけたザフィーラ
がヴィータを睨む
だが、ヴィータはとりあえずスルーした
「へへ～ん、悔しかったらこっちまでこ～い！」
剣児は明らかに挑発の意思であかんべーをする
それに怒ったヴィータがアイゼンを構えて飛び掛ろうとした時
「この馬鹿剣児いいいいいいい！」
と言う叫び声と共に剣児に向かって一台の巨大なバイクが降ってきた
それは真っ直ぐ剣児を踏み潰す
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」
剣児はこれでもかと言う程の悲鳴を上げる
ついでにザフィーラも巻き込まれる
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」
あ、これはザフィーラの悲鳴ね
そんな中、剣児が巨大なバイクの下から這い出て来る
「てて・・・何でこんなバイクが・・・って！こりゃ「雷鋼馬」じゃねぇか！こんなもん投げつけるのって・・・まさか！」
頭の中に一つの答えが浮んだ
そして剣児は上を見上げる
其処にはシャマルとビックシューターが居た

「皆さん！遅くなりました」
「シャマル！今の声・・・まさか！」
「お、おいおい・・・あのでっかい乗り物の中にはやてが乗ってるのか？」
シグナムとヴィータは先ほどの叫び声が主であるはやての声と同じなのでもしかしたらはやてが乗っているのかと思い驚愕していた
そんな二人をシャマルは苦笑いを浮べながら落ち着かせる
「ち、違いますよ！声は同じようですけど違う人が乗ってますから」
それを聞いて二人はホッとする
そんな中、ビックシューターがビルの屋上付近で停泊すると、ハッチが開き、中から現れたのは
「げぇ！つ、つばき！何でお前も居るんだ！」
「剣児を1人にしたら何しでかすか分からないでしょ！それより何シャマルさんの知り合いの人達にひどい事してんのよ！」
「は？シャマルさん？・・・それってあの金髪の姉ちゃんの事か？」
剣児はつつばきと同様に現れた女性を見た
シグナム程では無いが彼女もなかなかの美形であり、そして美乳であった
「でへへへ・・・これまた可愛い子ちゃんが来たなぁ・・・しかも中々のボインじゃねぇか！く～～～、溜まんねぇ！」
剣児が鼻の下を伸ばしていた
それを見たつばきは激怒の顔になり
「このエロ剣児いいいいいいいいい！」
と言って剣児の顔面に思い切りドロップキックを決める
「げぼおおおおおおおおおおおお！」
それを食らった剣児は盛大にぶっ飛んでいく
その様に唖然とするシグナム達
そんな剣児をフンと鼻を鳴らして無視して戻ろうとした時、雷鋼馬の下でグッタリしているザフィーラを見つける
因みに狼形態である

「大変！ワンちゃんが下敷きになってる！すぐ助けないと」
つばきは巨大なバイクである雷鋼馬を片手で持ち上げてザフィーラを助ける
「ワンちゃん！大丈夫？」
つばきは心配そうにザフィーラを見つめる
するとザフィーラは目を覚ます
「う・・・酷い目にあった・・・」
と、ザフィーラは呟いた
つばきはザフィーラが喋る事など知らないでいた
当然つばきの反応は・・・
「きゃあああああああああああ！い、犬が喋ったあああああああああああ！化け物おおおおおおおおおおおお！」
「ち、違う！俺は犬じゃなくて狼ってぎゃあああああああああああああああああ！」
ザフィーラの弁解も空しく顔面に鉄拳を食らい再び吹き飛ばされるザフィーラ
ひょっとして、今日は彼にとって厄日だったのだろう
そんな一同に先ほど吹っ飛ばされたゲッターロボが襲い掛かる
「はぁっ！」
シグナムは持っていたレヴァンティンでゲッターのトマホークを弾くだが、衝撃の余り腕が痺れた
「くっ、図体だけが大きい訳では無いらしいな」
苦悶の表情を浮べながら呟く
すると蹴り飛ばされた剣児が起き上がる
「あんにゃろう！俺のシグナムさんが傷物になったらどうすんだ？」
何とも場違いな事を呟きながら剣児は雷鋼馬に跨る
「つばき！パーツはあるか？」
「全然大丈夫！何時でもビルドアップ出来るよ！剣児」
「うっしゃぁ！」
剣児は意気揚々と雷鋼馬のエンジンを掛けてビルの屋上から飛び降

りる
「えぇ！け、剣児さん！一体何を」
その光景にシャマルが驚く
すると背後に居たビックシューターから
「ジーグパーツ、セットアップ！シュゥゥゥゥト」
つばきの叫びと共にビックシューターから腕、肘、足、腰、膝、腿、
肩、胸等ロボットの体の一部らしき物が飛び出した
それは真っ直ぐ剣児の乗った雷鋼馬に向かっていく
すると雷鋼馬から雷らしきものが放たれてパーツを包み込む
「ビルド！アアアアアアアアアアアップ！」
剣児が両の拳を合わせて叫ぶ
すると激しい稲妻が発し、雷鋼馬が変形し、人の顔になった
そして、バラバラになったパーツが合体し、一体のロボットになる
その名は・・・
「鋼鉄！ジイイイイイイイイイイイイイグ！」
天に向かって諸手を上げて咆哮した
そう、それこそが銅鐸の力で合体するマグネットロボット「鋼鉄ジーグ」なのだ
「な、何じゃありゃぁ！」
「分からん・・・あれは一体？」
ヴィータとシグナムは突然現れたジーグに驚く
「つばきちゃん！あのじーぐって一体・・・」
「大丈夫ですシャマルさん。あの鋼鉄ジーグは私達の味方です！」
つばきはシャマルにそう言った
その眼下では、鋼鉄ジーグがゲッターロボを見ていた
「さっきはよくも俺のシグナムさんに物騒なもん投げつけてくれたなぁ！俺の「おっぱい」に手ぇ出すんじゃねえええええええええ！」
と言って豪快にゲッターの顔面を殴りつける
殴られたゲッターはそのまま地面に倒れ込む

一方で、先ほどの剣児の叫びを聞いていたシグナムは
「お前の物じゃ無いわあああああああああああああああ！」
と、顔を赤らめて絶叫していた
そしてつばきはと言うと
「あのエロ剣児ぃぃぃぃぃ！後でたっぷり脂を絞ってやるんだから（激怒」
額に幾つもの血管を浮かべて剣児・・・ジーグを睨んでいた
そんなつばきを見てシャマルとヴィータは青ざめる

＊＊＊

「オラオラ！さっきまでの威勢はどうしたんだよぉ！」
一方下ではジーグがかなり優勢であった
自分より数倍大きいゲッターを殴る、蹴る、投げ飛ばすなどしている
「これでトドメだ！ナックルゥゥゥゥゥ」
ジーグが両手を合わせて構える
「ボンバアアアアアアアアアアア！」
すると合わされた両の拳が凄まじいスピードで飛び立つ
それは真っ直ぐにゲッターの腹を直撃する
貫通はしなかったがその場で錐揉み状に回転して倒れる
ナックルボンバーは放物線を描いてそのままジーグの腕に戻ってきた
「へん、何だ！てんで雑魚じゃねぇか・・・こりゃさっさと片付けて飯に出来そうだぜ♪」
剣児が喜びの顔になる
そしてトドメを刺そうと猛然と駆け寄る

その時、

「どわあああああああああああああああああああ！」

「あん？何だ！」

突如上空から男の悲鳴が響き渡った

剣児は上を向くと、其処には未来に帰った筈のマジンガー達が降ってきたのだ

しかもジーグの真上に

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

突然の事だったので完全に避けるタイミングを逃したジーグはマジンガー達の下敷きになってしまった

「っててて～、此処は元の世界か？」

マジンガーZに乗っていた兜甲児が頭を抑えながら周りを見た

そしてシグナム達を見つける

「お！シグナムじゃねぇか！って事は此処は元の世界だな！オーイ！シグナムー！」

甲児はシグナムの名を呼んで手を振るだが、

「貴様！何で私の名を知っている？」

「へ！ど、どうなってんだ？」

正に予想外の出来事であった

元の世界に戻った筈なのに其処に居るシグナム達は自分の事を知らないようなのだ

そんな時、

「てめぇらいい加減降りやがれえええええええええ！」

下に居たジーグがマジンガー達を吹き飛ばす

「どわぁ！」

吹き飛ばされたマジンガーは地面に倒れる

その拍子に鉄也達も目を覚ます

「く・・・此処は・・・元の世界か？」

「嫌、どうやら違うみたいだぞ」
辺りを見回して隼人が言う
そう、此処はミッドチルダでは無く海鳴市だったのだ
「おい、見ろよ！あそこにいるのってヴィータ達じゃ無いのか？」
弁慶が指差す
その先には確かにヴィータ達が居た
「本当だな・・・だが、様子が少しおかしいぞ」
竜馬は何やら異様な気を感じた
明らかに歓迎の気では無い
むしろ突然やってきたイレギュラーを見るような目だ
「お、おい！また変なロボットが降ってきたぞ！」
「つばきちゃん！あのロボット達も味方なの？」
「御免なさい！あんなのは見た事ないわ」
シャマルの問いにつばきはかぶりを降った
すると
「甲児さん！」
なのは達がマジンガーの元へ近づく
「な、なのはぁ！まだちっこい・・・って事は此処はまだ過去なのか！」
「ど、どうやらそうらしいな」
竜馬がそう呟いていると
「竜馬さあああああああああああああああん！」
「うお！」
突如、ゲッタードラゴンの風防にアリシアが近づいた
それに驚く竜馬
そんな竜馬を他所にアリシアは続ける
「竜馬さん！わざわざ私に会いに来てくれたのねぇ！そんなに私に会いたかったなんて・・・嬉しいいいいいいいいいいいい！」
どうやら何か勘違いしたらしく勝手に舞い上がっているアリシア
そんなアリシアに竜馬は困った顔をした

すると隼人が
「フッ、リョウ相変わらずモテモテじゃねぇか」
と、囃す
「お、おい隼人・・・」
竜馬は少し困った顔で頬を掻く
すると
「ん?あ、あいつは!」
甲児は後ろを指差した
鉄也達は後ろを振り返る
すると其処には突如現れたマジンガー達を見つめるゲッターが居た
「あ、あれは・・・旧ゲッター!何故此処に!」
竜馬は驚く
だが、そんな竜馬達を他所に旧ゲッターは肩からトマホークを取り出して切りつけようとする
「くっ、ダブルトマホォォォク!」
ドラゴンは迎え撃つ為に肩からトマホークを取り出して横に凪ぐ
2体のゲッターのトマホークが空中で激しくぶつかり合う
すると、旧ゲッターから何やら言葉が入ってくる
「ナ・・・・ゼ・・・・」
「???・・・何だ?」
「ナ・・・・ゼ・・・・ウ・マ・レ・タ・・・・」
「何故、生まれた?・・・だと!」
それは確かにそう言っていた
「ナ・・ゼ・・・オ・・レ・・タ・・チ・・ハ・・ウ・・マ・・レ・・タ・・ン・・ダ・・」
そう呟いていた
するとその突如、旧ゲッターは3機のマシンに分離して空高く飛び去ってしまった
「野朗!待ちやがれ」
甲児が飛び去ったゲットマシンに腕を放とうとした時、

「俺を無視するんじゃねえええええええええええ！」
「どわぁ！」
後ろに居たジーグに蹴りを食らって前のめりに倒れる
「な、何しやがる！」
起き上がってマジンガーは自分を蹴り飛ばしたジーグを見た
「うっせぇ！人の事をクッションにしておきながら無視するたぁ良い度胸してるじゃねぇか！この鋼鉄ジーグが叩きのめしてやるよ！」
「上等じゃねぇか！鋼鉄だが製鉄だか知らねぇが俺とマジンガーZに喧嘩売った事を後悔させてやるぜ！」
マジンガーとジーグは互いに睨み合う
だが、その時
「甲児くん！見ろ！」
「鉄也さん！？・・・な！」
甲児は鉄也が指差す方を見た
すると、其処にはなのはの腕には腕が生えており、その腕には光り輝く結晶が握られていた
「あれって・・・まさか！リンカーコアか？」
「あの腕・・・まさか！」
竜馬はその腕が誰の腕なのか内心予想できた
そして振り返ると、其処には魔方陣の中に腕を入れているシャマルの姿があった
「何故だ！何でこんな事をするんだ！シャマルさん！」
竜馬は叫ぶ
だが、シャマルは軽く頭を下げると、取り出したリンカーコアを持っていた書物に入れる
「おいリョウ！あれって・・・夜天の書じゃねぇのか？」
「ああ、だが何故それをシャマルさんが持ってるんだ？」
「何かが一体どうなってんだ？」
訳が分からなかった
何故ヴォルケンリッターがなのは達に敵対しているのか

何故はやてが持っている筈の夜天の書をシャマルが持っているのかとにかくこの世界に対する情報が少な過ぎた
「皆！リンカーコアの回収は済んだから撤退しましょう！」
「そうだな・・・ザフィーラ！動けるか？」
「ああ・・・酷い目にあった・・・」
フラフラになったザフィーラが言う
「つばきちゃん！貴方達も一緒に来てください！」
「分かりました！ほら、剣児！帰るわよ！」
つばきは剣児に言う
だが、剣児は不満げな顔をする
「なんでだよぉ！これからこのブリキのオモチャ野朗を叩きのめすとこなのにょう！」
「うっさい！鉄拳制裁を食らいたくなかったら言う通りにしなさい！」
「へ～～い」
不満な顔をしながらも従う事にした剣児
「お前・・・名前は何だ？」
「俺は兜甲児・・・そしてこいつはマジンガーZだ」
「俺は草薙剣児・・・こいつは鋼鉄ジーグだ！今度会ったら決着をつけてやるから覚悟しておけよ！」
「へん、そりゃこっちの台詞だぜ！」
お互いに睨みあうとフンと視線を逸らす
そしてジーグはビルドアウトしてパーツがバラバラになる
そしてバラバラになったパーツは全てビックシューターに回収されて雷鋼馬も乗り込む
ビックシューターとヴォルケンリッターの一同は忽ち見えなくなってしまった
「おい！なのはは無事なのか？」
「大丈夫、リンカーコアが少し抜かれただけだ・・・命に別状は無いよ」

「そ、そうか」
クロノの言葉にホッとする甲児達
だが、此処がまだ過去の世界だと言う事を知った為に甲児達の不安は更に募る事となるのであった

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ　終

次回予告

剣児
あぁ？蒐集を手伝えだとぉ！
やだよ、面倒臭いしよぉ
なぁにぃ！手伝ってくれたらシグナムさんのおっぱいを！
おっしゃぁ！この俺と鋼鉄ジーグに任しておけってんだ！

次回「新たなる力」

次回もこの小説にビルドアアアアアアアップ

・・・じゃなかった！テイィィィィクオォォォォフ

甲児
俺の出番とるんじゃねえええええええええ

ビルドアップ！鋼鉄ジーグ！！　後編（後書き）

次回はあのシーン
そして剣児と甲児がぶつかり合う
互いの大切な物を掛けて

・・・多分（汗）

設定8（前書き）

今回は原作では出番の無い「アリシア・テスタロッサ」とオリジナルキャラクターである「ゼノン」について話しておきます

設定8

アリシア・テスタロッサ

フェイトのオリジナルと呼べる存在でありプレシアの実子
原作では事故で死亡してしまったが、今作では地獄の底から蘇った
獣魔将軍の手により目覚めぬ呪いを掛けられ培養カプセルの中に閉じ込められていた
しかし、時の庭園での戦いの折り虚数空間に落ちそうになったのを流竜馬の操るゲッタードラゴンに救われ、更に獣魔将軍を倒した事により目を覚ます
目覚めた後は自分を命掛け（？）で救ってくれた竜馬に心酔しており、将来を共に過ごすと豪語している
フェイトとは異なりかなりのハイテンションな上前向きな性格
加えて少し悪戯好きな面もあり、以前甲児にユーノのフェレット事件「女湯に入った事」を聞いた事を起にユーノの事を決まって「スケベフェレット」と命名している
人造生命体であるフェイトを実の妹のように思っており常に大事にしている
その為彼女を傷つける輩には鉄拳で答える
フェイト程魔力のコントロールは上手くないがそれを補って余りあるパワーで戦う
フェイトがスピードとテクニックで相手を翻弄するならアリシアはパワーで敵を叩き潰す戦い方が基本となっている
外見は殆ど同じでありパッと見では見分けが付かない
現に竜馬もくろがね屋の際に抱きつかれた時一瞬フェイトと勘違いした程
「ジュエルシード事件」解決後は、クロノの指導の元嘱託魔道士として管理局で活動している

因みに未だに魔力弾のコントロールは下手である

ＣＶ：水樹奈々

バルディッシュＭＫ－？

プレシア・テスタロッサを中心に時空管理局が調整したバルディッシュの後期型
本来ならフェイトと全くの同型となる筈だったのだが、アリシアの提案で光の刃の形を『鎌』では無く『斧』の形となった
またタイプもスピード重視の前期型とは異なり完璧にパワー型となった
その為魔力のスピードなどは落ちる物の、パワーと耐久性は郡を抜く程に仕上がった
ただし、かなりのクセがある上にアリシア用に作られている為彼女以外だと全く扱えない
殆どじゃじゃ馬並に仕上がっている
形状はフェイトのバルディッシュを一回り大型にした感じである
だが、光の斧を展開すると所謂「真・ゲッターロボ」が使うトマホークランサーの様な形になる
ベルカ式カードリッジシステムは内臓されていないが、それでも旧ゲッターロボのトマホークを受け止める程のパワーを誇る

普段の待機状態はフェイトのバルディッシュとほぼ同じ形態である

トマホークフォーム
バルディッシュＭＫ－？の形態
普段アリシアが使用するのはこの形態
先端に巨大な光の両刃の斧を出現させ、それを力一杯振り回す

フェイトの振りよりも弱冠遅いが威力は倍以上

ブラストフォーム
バルディッシュＭＫ－？の遠距離形態
遠距離戦の際にはこの形態になる
先端に鋭い避雷針のような物が現れ、其処に魔力を集中させて放つ
グレートマジンガーのサンダーブレークを参考に作った形態である
だが、アリシア自身が遠距離戦を余り好まない為この形態になる事は少ない

ゼノン

ＣＶ：関智一
４０００年前のミッドチルダでスバルが最初に出会った少年
機械の兵士達に挑むレジスタンスのリーダーを勤めている

生真面目であるがやる時はやると言った感じの性格をしている
ただし、かなりの初心であり、ちょっとした事ですぐ動揺する（女性の裸を見たら多分卒倒する筈）

槍の他に棍を使える為スバルに棍を教え込んだ

本人は魔法は使えないが変わりに「魔神の力」と呼ばれる力を使える
何処から見ても至って普通の少年だが、何処か謎めいた部分がある
それについては後に語るとしておきます

顔立ちや髪の色、更には瞳の色までスバルに良く似ている
戦い方は槍を用いた戦法が主であるが、徒手空拳もかなりの物であり、スバルから教わったシューティングアーツも使える（何時教わ

ったかは後に話します）

服装は古代ギリシャで着ていた薄着の服装と戦闘服の2種類

設定8（後書き）

こんな感じです

外伝６　十蔵の珍発明　ケース１　若返りの方法（前書き）

今回もこの人が滅茶苦茶やらかします

本当にいい加減にして欲しいですなぁ（汗）

外伝６　十蔵の珍発明　ケース１　若返りの方法

此処はジェイル博士（剣造）が作った地下施設のとある一室

その一室の中で異様な笑みを浮かべる者が居た

「遂に・・・遂に完成したぞ！やはりワシは天才科学者じゃったんじゃ！これを使えば・・・ワシの目的は達成される！」

そう、言わずも知れた兜十蔵博士その人であった

博士はとある完成した物の前で声高らかに笑っていた

「ほほぉ、遂に完成したんやなぁ？」

「私達の血と、汗と涙と青春の結晶が！」

その後ろから二人の女性が歩み寄った

１人は機動六課部隊長の八神はやて

もう１人はナンバーズのクアットロ

その二人の方を向いて十蔵はニヤリとする

「明日の朝、実験を開始する」

真剣な眼差しで二人を見る

すると二人もそれに頷く

「いよいよ、十ちゃんの発明が見れる時が来たんやなぁ」

「あぁ、早く十ちゃんの発明が見たいわぁ～♪」

「クックック！待っておれぃ、間も無く・・・間も無くワシの発明が歴史を塗り替えるのじゃあああああああああああああ！」

と、メッチャ大声で十蔵博士が笑う

パチッ

「またやってるんですか?貴方方は（汗」
ふと、部屋の明かりが点けられた
3人は後ろを見る

すると、其処には明かりをつけたジェイル博士が呆れた顔でいた
「発明も結構ですが、もう少し時間を考えて下さい・・・今何時だと思ってるんですか?」
ジェイルが部屋の時計を指差す
現在夜中の3時
良い子ならとっくに夢の中の時間である
悪い子は・・・まぁ多分寝てないだろう

「ぶ~、分かっとるわい!今丁度寝るトコじゃったんじゃよ!」
「はぁ・・・とにかく程ほどにして下さいよ」
溜息をつきながらジェイル博士は部屋を後にした
だが、この時博士は気づかなかった
その後姿を3人が凶悪な笑みで見ていた事を

＊＊＊

翌日
「見ろジェイル君!これこそワシとはやてちゃんとクアちゃんの血と汗と涙と青春の結晶!名づけて『若返り光線銃』別名『あぁ、人生をやり直したいな』銃じゃあああああああ!」
（また訳の分からん代物を・・・この人は（汗）
と、朝いきなり部屋に現れた十蔵とはやてとクアットロに叩き起こ

されて変な銃を見せ付けられた
「それで・・・一体何がしたいんですか?」
「なぁに、ちぃっとばかしお主に実験台にN『それじゃ私はこれで!』ぬぁっ!逃げられた」
十蔵の言葉を聞き終える事も無くジェイル博士は一目散に部屋を出て行った
だが、これで諦める兜十蔵ではない
「フフフ、このワシから逃れられると思っているのか!地下施設内に居る全ガジェット達に告ぐ!直ちにジェイル・スカリエッティ博士を捕獲せよ!!」
十蔵が声を上げる
すると突如待機していたガジェット全機が一斉に動き出した

標的は勿論
「どわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!」
そう、ジェイル博士であった
今、彼の後ろを大量のガジェットが追いかけてきている
「お、お父さあああああああああああああああああああああああああああああああああん!何勝手に人が作ったガジェットを改造してるんだあああああああああああああああああああ!」
大声で叫びながら必死に逃げるジェイル博士
だが、疲れ知らずのガジェット達から逃れる事など出来る筈も無く、遂には追いつかれてしまい

ドカドカドカドカ

「ぐぼはあああああああああああああああああ!」
次々とジェイル博士の上に積みあがってしまった
これでもう身動きが取れない

其処へ、
「フッハッハッハ！観念せい！剣造！」
銃を持った十蔵がこれまた恐ろしい笑みを浮べながらやってきた
「お・・・お父さん・・・其処までしますか？・・・普通・・・」
「ワシ普通じゃないもん！ってな訳で・・・さっさと実験台に・・・
」
十蔵がジェイルに向けて銃口を突きつけてトリガーを引こうとした
その時
「あ、十蔵さんにジェイルさん、何してるんですか？」
「「へ？」」
ふと、二人は声のした方を向いた
そして、その瞬間に十蔵はトリガーを引いてしまった
「あ！」
十蔵はハッとしたが、既に時遅し、銃口から眩い閃光が放たれた
因みに、斜線上に居たのは
「ニャアアア

「本当よ！あの子が小さくなった姿・・・想像しただけでもう虐めたくなっちゃう～」
明らかに危険過ぎる二人

すると、煙が晴れていき、中には
「・・・・・」
何と、外見で察するに１０歳位の年になったスバルが居た
それを見た二人は
「「か、可愛いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」」
と、絶叫した
恐らく、この中にギンガが居たら間違いなく流血沙汰になる事間違いなしである
「おぉ！実験は成功じゃ！今のスバルちゃんは恐らくすんごく大人しい子の筈じゃぞぉ！何せ１０歳位の頃は大人しかったってギンガちゃんから聞いたからのぉ」
何時の間に聞いたんだ？この爺は

とまぁそんな疑問はさておき、試しに1体のガジェットを近づけるガジェットが幼いスバルにコードを伸ばす
すると

ガシッ

「・・・・・（汗」
「え？」
スバルはガジェットから伸びたコードを掴む
そして
「えい！」
と言って思い切り壁に叩きつけた

壁は音を立てて粉砕し、ガジェットは当然粉々に砕け散った
その光景を見た3人は唖然としていた
だが、そんな3人を無視してスバルはあたりに居たガジェットを使って遊びまくる
「ニャハハハハ！わ～～い、ボールだあああああああ！」
と言ってガジェットを掴んでは壁に思い切り投げつけて破壊したり、地面にぶつけ巻くって破壊したり、両手で挟みこんで潰したり、けり壊したりととにかく壊しまくっていた

「ちょ、ちょっとおおおおおおおおおおお！何あれ？全然大人しくないやん！むしろ凶暴化しとるやん！」
はやてが青ざめながら暴走(あそんでる)スバルを指差した
それを見て十蔵は一つの結論に辿り着く
「恐らく・・・この銃で若返ったが為に身体能力、ならびに性格がとんでもない事になったようじゃのぉ」
「じ・・・十蔵博士・・・それで、その銃の効果は何時切れるんですか？」
「う～～～ん、多分一日」
「十蔵博士えええええええ

それを見た3人は
「て、撤退！これは戦略的撤退じゃあああああああああああああ！」
「「にゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」」
下敷きになったジェイル博士を置いて一目散に逃げ出した
「えぇ！ちょっ、私は？」
青ざめて叫ぶも、誰も耳を貸さない
そして恐る恐る前を見ると
「お兄さんみ～っけ！タアアアアアアアアアッチ！」
と言って本人は軽く触れたつもりなのだろうが、
ドバキャアアアアアアアアアアアアアアア！
「あらぶわあああああああああああああああああああああああああ！」
そう、本人からすれば巨大な鉄球を食らったような感じの痛みに襲われ、そのまま遥か上空に吹き飛ばされてしまった
「あ！お兄さん居なくなっちゃった！・・・ま、いっか！さっきのお姉ちゃん達とお爺ちゃんを見つけよ～っと」
そう言ってスキップしながら3人を追いかけるスバル
どうやら完全にはやて達はターゲットにされたようである

＊＊＊

「はぁ・・・はぁ・・・流石に此処まで来れば・・・追って来ない

わよね・・・あの子も（スバル）・・・」
肩で息をしながらクアットロが言っていた
因みに今居る場所はシャーリーが用意した訓練空間である

今その場所でヴォルケンリッターの三人となのはとティアナが自主練をしている
「それにしてもスバルの奴遅いわねぇ・・・ちょっとお手洗い行くだけでどれだけ時間食ってるのよ」
額に青筋を浮かべて相方のティアナが愚痴っていた
「ニャハハ、大丈夫だよティアナ、後でたっぷりとＯＨＡＮＡＳＩするから♪」
「そ、そうですか・・・（心なしかなのはさんがメッチャ怖いのは何故？」
なのはは満面の笑みで言うが、何故かティアナはそんな笑顔が物凄く怖かった

「だが、確かに遅いな・・・何かあったのか？」
「おいおいシグナム・・・考え過ぎじゃないか？此処は地下施設だぞ！敵が入ってくる危険性は無いだろう」
「確かに、もしそうなら真っ先に警報が鳴るはずだ」
シグナムの意見をヴィータとザフィーラが否定する
シグナムは顎に手を当てて考え込む
「では一体何故・・・・・ハッ！ま、まさか！！」
シグナムは途端に顔を真っ赤に染める
それにヴィータとザフィーラは首を傾げる
「ど、どうしたんだ？シグナム」
「まさか・・・アイツ・・・今度はスバルを狙って！」
「アイツ？・・・アイツって・・・誰だ？」
「決まってるだろうザフィーラ！アイツと言ったらあの憎き兜甲児しか居ないだろう！」

シグナムが目に血管を浮かべて言う
それを見て青ざめるザフィーラ
「な・・・何でアイツを憎むんだ?シグナム」
「あぁ、ザフィーラは知らないんだな。アイツなぁ、以前訓練の時、後ろから思い切りシグナムの胸を触ったんだよ」
「ま、マジか!?」
驚いて目を見開くザフィーラにヴィータは頷く
その横でシグナムは黒いオーラを出していた
「お・・・おのれえええええ!兜甲児めえええええ!私だけでは飽き足らず・・・今度はスバルを標的にしたのかあああああ!」
手をワキワキと震わせてシグナムは呟いていた
一体彼女の脳内ではどんな映像が映っているのか?
不安に青ざめる二人であった

一方、その頃の兜甲児はと言うと・・・

何処かの一室
その中で部屋を暗くしてテレビを見ていた
はい、其処の読者の方々!
如何わしい考えをした時点で廊下に立ってなさい!(何処だよ?)
今甲児達が見てるのは
『お前のせいで・・・呪ってやる~、呪い殺してやる~~~~~!』
「「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ」」
「わ、私は怖くないからな!おおおおおおお前等!へへへへへ部屋の温度ささささ下げ過ぎじゃじゃじゃじゃじゃないのかかかかかか?」
この言葉で分かる通り、さやか、ウェンディ、ノーヴェの3人に囲まれて甲児はホラー映画を鑑賞していた

普通なら天国だろう
だが、甲児はと言うと
「す・・・すんません・・・ノーヴェさん・・・・・首・・・・首に思いっきり入ってますから・・・・やばい・・・死ぬ・・・・死ぬぅぅぅぅぅぅ！」
因みに今どんな状況かと言うと、
さやかは甲児の右腕に
ウェンディは左腕に
そしてノーヴェは甲児の首にしがみ付いていた
しかもノーヴェの場合はほぼ完璧に決まっていた（チョークが）
そして、映画のクライマックスシーンにて
『死ねエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！』
「「「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ（大号泣）」」」
3人揃って滝のように涙を流して絶叫する

バキバキバキバキバキ

「ぎゃあああ！」
甲児もまた同じように叫び声を上げた
そして、その後甲児は生死の境を彷徨ったと言う

さて、話しを特訓会場に戻そう
訓練をしているメンバーを見つけたクアットロはホッとする
（良かった・・・あの輪に入ればきっと巻き込まれる事は無いわね）
そう思ってなのは達に近づこうとした時、突如クアットロのすぐ脇のビルの壁が叩き壊された
「ヒィィィッ！な、何？」
涙目になって煙が上がっている壁を見る

すると、中から出てきたのは
「アハハ！眼鏡のお姉ちゃんみ～つけた！」
破壊神（スバル）であった
「いいいいいいいいいやあああああああああああああああああ！」
破壊神（スバル）を見たクアットロは真っ先になのは達の元へ駆け込んだ
それに気づくなのは達
「あ、あれ？あれって・・・クアットロさんじゃないですか！」
「本当だ！どうしたんだろう？」
なのはとティアナは涙目になって迫ってくるクアットロを見た
「た・・・助けてえええええええええ！こ、殺される・・・・破壊神に殺されるうううううううううううう！」
涙目で救いを求めるクアットロ
明らかにヤバイ
きっと何か危険な者に追われているのだろう
そう思えた
すると
「眼鏡のお姉ちゃんタアアアアアアアアアアッチ！」

ドバキャアアアアアアアアアアアア！

「あああああああああああああれえええええええええええええええええ！」
突如後ろから現れた１０歳位の女の子に思いっきりぶっ飛ばされるクアットロ
そのまま彼女は遥か遠くの高く聳え立つビルの壁に叩きつけられた
「な、何なの・・・今の？」
咄嗟の出来事であった故に事態が飲み込めず青ざめるなのは
すると、ティアナがクアットロを吹き飛ばした犯人を見て絶句した
「ま、まさか・・・あんた、スバル？」

「うん、私スバルだよ！お姉ちゃん達も遊んでくれるの？」
目を一杯に開いたスバルがなのは達に聞いた
普通なら「可愛いいいいいいいい！」と絶叫してしまう感じなのだが、今しがた起こった事態を見た為にそう言えなかった
「な・・・なのはさん・・・どうします？」
「どうするって・・・ね、ねぇ・・・お姉ちゃん達は今忙しいから後で遊んで・・・」
なのははやんわりと断ろうとスバルに言おうとしたが、その時スバルはすぐ後ろにあった巨大なビルを片手でヒョイと持ち上げていた
「じゃぁ、今度は石合戦やろう！」
（（それ石じゃないからあああああああああああああああああああああああ！））
既に石の領域を超えてる物になのは達は心の底からツッコミを入れた
「いっくよおおおおおおおおおおお！」
そんな二人になど気にも留めずにスバルは巨大なビルを勢い良く投げつける
「ニャアアアアアアアアア！でぃ、ディバインバスタアアアアアア！」
「く、クロスファイヤアアアアアア！シュウウウウウウウウウト！」
咄嗟に二人は魔力砲を放った
ビルは二人の砲撃を受けて粉々に吹き飛んだ
だが、それを見ていたスバルは不機嫌そうな顔をした
「お姉ちゃん達ズル～イ！ちゃんと石を拾わないと反則なんだよぉ！」
少し不機嫌になったスバルは今度は一度に２０個ものビルを投げつけて来た
「「いやあああああああああああああああああああああああああ！」」
流石にそんなもの捌ける筈が無いので一目散に逃げ出す二人

逃げるが勝ちである
だが、
「逃げるなんてずる～い！それならこっちだって～」
と言って腕をブンブン回すと思い切り地面に拳を叩きつけた
凄まじい轟音が響き渡った
そしてその拳を周辺に亀裂が入りその亀裂は真っ直ぐになのはとティアナに向かって行く
そして、その亀裂はそのままガパァっと開き巨大な崖となった
「え？きゃあああああああああああああ！」
その崖に最初の犠牲者となったティアナはそのまま崖に落ちる
「ティアナちゃん！」
咄嗟に落ちそうになったティアナを助けようと手を伸ばすが

ガシッ

「つっかまえった♪」
「え？」
何と、掴んだのはティアナではなくスバルであった
それを見て青ざめるなのは
そしてそのまま・・・
「えい！」

ブン！

「ニャアアア

その頃、騒ぎを聞きつけてシグナム達が降り立つが、其処は酷い光景であった
「お、おい・・・一体誰がこんな亀裂を入れたんだ?」
「分からん・・・恐らく相当な力を持つ者でなければ無理だ」
3人がそれぞれ見合っていると
「ヤッホオオオオオオオオオオオオ!」
「「「え?」」」
ふと、声がした方を見る
すると其処には、青い髪をした少女が物凄い両の砂煙を撒き散らしながら走ってきているのだ
それを見た3人は
「「「何じゃありゃあああああああああああああああああああああああ!」」」
と、叫ぶ
だが、そんな叫びを上げている内に
「ワンちゃんだあああああああああああああ!」
と言って狼形態のザフィーラを掴み上げると
「うわあああ!モフモフのフサフサだ~~、犬って良いなぁ~」
と言って喜んでいるのは良いが、今ザフィーラにやってるのははっきり言う

『鯖折り』である

当然それを食らってるザフィーラは
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ!」
バキバキバキバキバキバキ
背骨が徐々に崩壊していく音を聞きながら絶叫していた

必死に逃れようともがいているが常人離れした怪力の為離れない
って言うか最早人間の力じゃない
そしてそのままザフィーラの背中はくの字に曲がる
「ガハッ！」
そのままザフィーラは口から大量の泡を吹き出して意識を手放した
「ざ、ザフィーラあああああああああああああああああ！」
ヴィータは意識を失ったザフィーラに向かって叫ぶ
「ワンちゃん動かなくなっちゃった？・・・次はお姉ちゃん達ね！」
と言って破壊神（スバル）は目を怪しく光らせる
その視線を見て二人は真っ青になる
そして、それから数時間後、二人はボロクソの状態で発見される二人であった

＊＊＊

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・こ、此処まで来ればもう安心やろう！・・・・」
肩で息をしているはやてはふと広場を見た
其処にはとても恐ろしい物が映っていた
「おのれ～～、憎き車弁慶め～～～～～！次こそは必ず息の音を止めてくれるわ～～～～～（怒怒怒怒怒怒怒」
額に大量の青筋を浮かべたチンクが壁に弁慶の写真を立てて其処に大量のスティンガーを突き刺していた
その隣では
「今度こそ・・・今度こそ剣鉄也に勝つ！」

トーレがサンドバックを叩いていた
因みに壁には同じく鉄也の写真が貼られていた
ふと、チンクはトーレを見る
（トーレ姉・・・あんなに張り切って・・・其処まで兄上の事を憎んでいられるのか？だが、一体なぜ？）
そして、トーレもまたチンクを見る
（チンクの奴・・・あんなに熱心に特訓をして・・・まさか、弁慶に好意を持ったのか？）
と、お互いに勘違いをしていた
「と、とりあえずこの場はそっと行こうっと」
見てはいけない場所を見た気がしたはやてはそそくさとその場を後にした
そして、別の広場に出ていると
「よし！ヴィヴィオ、ラスト1本だ！」
「うん！パパ！」
ヴィヴィオが頷くと猛スピードで駆け出す
そして鉄也の横を通り過ぎると持っていたストップウォッチを切る
そして結果を見る
「どう？鉄也パパ？」
聞いてきたヴィヴィオに鉄也はニッと微笑む
「良くやったぞヴィヴィオ！以前より2秒タイムが縮んだぞ」
「ヤッター！」
結果を聞いてヴィヴィオが嬉しそうに飛び上がる
「よし、これで５００Ｍダッシュは終りだ、次は組み手６０本をやって今日は終りだ」
「うん！頑張る！！」
気合を入れてヴィヴィオは頷く
そして鉄也と一緒に広場を出て行った
それを見ていたはやては
（って、鉄也さん！５歳児に何やってるんやあああああああああ

あああああああああああああ！）
明らかに5歳児にやるトレーニングじゃない事に心の中で突っ込むと
すると
「関西弁のお姉ちゃん見～つけた～！」
「ハッ！」
後ろから声が聞こえたので振り返った
すると・・・其処には破壊神（スバル）が居た
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！」
広場内にはやての絶叫が響き渡ったと言う

＊＊＊

十蔵博士は1人逃げていた
通路の中では十蔵が1人必死になって逃げていた
「やばいぞ～～！こうなったら甲児とユニゾンしなくてはいかんぞお！」
1人ブツブツ呟いていると
「お爺ちゃんみ～～つけた～～」
「ハッ！」
後ろから一番聞きたくない声が聞こえてきた
振り返ると、其処にはガラクタになったガジェット4型を持ち上げて迫ってくる破壊神（スバル）が居た
「ヒエエエエエエエエエエエ！こ、こうなったら・・・ガジェット軍団！足止め宜しく！」
十蔵が叫ぶと、その周囲から大量のガジェット軍団が現れた

そしてそれが一斉に破壊神（スバル）に迫るが・・・
「やっほーーーい！戦闘ゴッコだあああああああああああ！」
と言って次々とガジェットを破壊していく
「な、何て奴だ！奴は化け物か？」
何処か懐かしい言葉を発して逃げる
しかし、そんな十蔵に何かのパーツが飛んでくる
十蔵の頬に妙な涼しさを感じた
触れると赤い血が流れていた
振り返ると、破壊神（スバル）が次々とガジェットを投げてきた
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」
ガジェットの残骸に下敷きにされて十蔵は生き埋めになってしまった
そして、残骸の中からペラペラになった十蔵が這い出てきた
「ペラペラ～～・・・わ、ワシこんな紙ッぺらになってしもうたわ～～」
そしてそのまま十蔵は風に乗って何処かへ飛んでいってしまった
それを見届けたスバルは
「チェッつまんないの・・・他行こうっと」
と言ってこの後様々な箇所に行って散々暴れまくったスバルは翌日の朝９時頃に元に戻れたと言う
因みに本人はその時の事を殆ど憶えていないと供述していたが、そんな事は謝罪の理由になどならず、元凶であった十蔵、はやて、クアットロ共々１週間格納庫の掃除を命じられるのであった

場所は変わって、此処は十蔵が研究を行うところ
其処には先ほどの騒動の元となった銃が置かれていた
そしてそれを手に取ったのは・・・ナンバーズのドゥーエであった
そして、その隣にはウーノも居た

「ふ～ん、これを使えばウーノ姉さまも若返れた利して♪」
「ドゥーエ・・・それって私が老けてるって意味なの？（怒」
額に青筋を浮かべて聞くウーノにドゥーエは笑いながら否定した
「じゃぁちょっと実験でも・・・」

カチッ

「え？・・・お、押しちゃったの？」
「うん！しかも広域型に」
「ドゥウウウウウウウウウウエエエ

外伝６　十蔵の珍発明　ケース１　若返りの方法（後書き）

今回は流石に疲れた（汗）

新たなる力　前編（前書き）

６ヶ月ぶりの再会
だが、それは喜ばしい再会とは言えなかった

新たなる力　前編

甲児達は一路アースラに帰還した
そして、この世界が最初甲児達が来た時からおよそ半年経った世界だと言う事を知らされた
「つまり、俺達はほんの半年分しか戻って来てないって事なのか」
結論じみた事を甲児は言った
今甲児達はアースラのブリッジに居る
その中には甲児の他に竜馬、隼人、弁慶、クロノ、リンディ、アルフがいる
「それで、なのはは大丈夫なのか？」
「幸いリンカーコアが抜かれただけだから命に別状は無いけど・・・暫く戦闘は無理ね」
リンディが簡潔に答える
「今、鉄也さん、ユーノ君、フェイトちゃん、アリシアちゃんが見てるけど・・・完全復帰には暫く時間が掛かりそうだね」
横に居たエイミィが口を挟む
それに皆重苦しい顔をした
「それにしても・・・あの謎のゲッターは一体・・・」
「あれは・・・旧ゲッターロボだ」
「旧ゲッターロボ？」
クロノはそう言った竜馬の顔を見た
竜馬は何処か暗い顔をしていた
無理も無い
あの旧ゲッターにはとても悲しい思い出があるのだ
そう、かつて竜馬達が旧ゲッターロボで戦っていた時、３号機であるベアー号に乗っていたのは竜馬達のクラスメイトである「巴武蔵」であった
だが、武蔵は自分の命を犠牲にして恐竜帝国を滅亡に導いた

彼の犠牲の元で人類は恐竜帝国に勝利出来たのだ
その後、旧ゲッターロボは早乙女研究所所員、そして共に戦った甲児達の目の前で武蔵の弔いの意として燃やされたのだ
本来ならある筈の無いロボット
それが今竜馬達の前に敵として現れたのだ
しかも、あの旧ゲッターロボは竜馬達に謎の語りをしてきた

『何故・・・生まれてきた』

「ゲッター・・・お前は迷っているのか？俺達に答えを求めて苦しんでいるのか？」
竜馬は１人そう呟いていた

＊＊＊

なのはが目を覚ましたとき、目の前には一面白い天井が映って来た
「こ・・・此処は・・・」
明らかに先ほどの場所とは異なるのでむくりと起き上がる
「なのは！気がついたんだね！」
「ユーノ君・・・それに・・・」
なのはの視線の先にはユーノの他にフェイト、アリシア、鉄也が居た
「なのは・・・大丈夫？」
「ホントに心配したんだよぉ！」
フェイトが目に涙を浮かべており、アリシアはホッとしている
「体に異常は無いか？高町」

鉄也に聞かれてなのははは腕等を軽く動かす
それほど苦痛にはならない
恐らく身体能力に変化は無いのだろう
「うん、大丈夫！」
なのははは心配かけまいと笑顔で答える
すると、そんななのはの居る病室に甲児達がやってくる
「よ、久しぶりだな」
「はい、・・・あれ？でも皆さんはそう言えば未来に帰ったんじゃ無かったんですか？」
なのはが首を傾げる
それに竜馬が答える
「理由は分からないんだが結局俺達はこの世界に飛ばされてしまったんだ」
「フッ、どうやら俺達はまだこの世界で何かをやらなきゃならんらしいな」
隼人は軽く笑いながら言う
「にしても、なのは・・・お前のレイジングハートをあんなにボロボロにしたのはあのハンマー女か？」
甲児が聞くと、なのははかぶりを降った
「違います、あの子の前に私はとても怖い敵と戦ってたんです」
そう言ってなのははは自分の両腕を押さえて震えだした
「怖い敵？それって一体・・・」
「頭に鳥のような羽を生やした・・・とても大きな女の人です・・・」
「な！それって・・・まさか！」
敵の特徴を聞いて甲児の脳裏に一体の敵が思い浮かんだ
「心当たりがあるんですか？甲児さん」
クロノが聞く
すると甲児が頷く
「恐らく・・・そいつは『妖獣シレーヌ』だ」

「何だい?その妖獣ってのは?」
アルフが首を傾げる
「奴等は自分の事をデーモン一族って呼んでる・・・早い話が悪魔だ」
「あ・・・悪魔・・・」
フェイトは不安になった
悪魔はお話の存在だとばかり思っていたからだ
それが現実で現れ、しかもなのはを傷つけたのだから
ふと、フェイトはなのはを見た
彼女の体の所々は包帯で巻かれている
先のシレーヌの戦いで負傷したのだ
「だけど、どうやってシレーヌを巻いたんだ?まさかやっつけたのか?」
「ううん、突然現れたお兄さんに助けられたの」
「お兄さん?それって誰だ?」
甲児はその男性の特徴を聞いた
「えっと・・・茶色のボサボサの髪で尖った目つきしてて・・・あ!あとシャツにアルファベットの『A』って書かれていました」
「それって・・・間違いない!『不動明』だ!」
「知り合いなの?甲児さん」
アリシアが聞く
「ああ、あいつは俺達の居た世界の中までまたの名を『デビルマン』って言うんだ」
「デビルマン?・・・その人もデーモンなんですか?」
ユーノは聞く
甲児は頷く
「明はデーモンの中で最強と言われるデーモン『アモン』と合体したんだ。だけど自分の精神を乗っ取られずに逆にその力を手にしたんだ。それからあいつはデビルマンとしてデーモンと戦っているんだ」

「でも、どうして甲児さんが明さんを知ってるんですか？」
「アイツとは以前一緒に戦った事があるからな」
甲児は懐かしむように言う
そして窓の外に浮ぶ光景を見ていた
（まさかこの世界でアイツと会うとはな・・・）
甲児と明は後にも先にもあの時以降一回も会ってない
勿論連絡も取れていないのだ
その為久しぶりの仲間との再会を甲児は少し嬉しく思った

＊＊＊

地上　八神家

戦闘を終えたシグナム達は剣児とつばきを連れて家の前に来ていた
但し、ビックシューターは付近の広場に隠してある
あんな物を置いておいたら大騒ぎになるからだ
そこでシャマルの魔法で見えないようにしておいたのだ
これなら万が一盗まれる心配も無い
そうして一向は家の玄関の前に来ていた
すると、一人でに扉が開く
開いた扉からは車椅子に乗った少女とそれを後ろから押している青年が居た
「皆、お帰り」
少女が満面の笑みでそう答えた
その声を聞いたとき、剣児は驚いた
「あり？あの穣ちゃんの声、何かつばきに似てねぇか？」

「あ！そう言えば！そっくり」
隣に居たつばきも驚いていた
そしてそれを聞いていた少女も驚く
「ほんまや！うちと同じ声なんて、何か他人とは思えへんなぁ・・・
あ、うち「八神はやて」言うんや。宜しゅうな」
「私、珠城つばきって言います。宜しくねはやてちゃん」
「俺、草薙剣児！んな事よりよぉ！何か食いモンねぇか？腹へって
死にそうなんだよ」
剣児は腹を摩りながら言う
それを見てはやてがクスリと笑う
「丁度ええよ！今大介兄ちゃんと一緒にご飯の準備が終ったとこやし」
「大介？それってはやての後ろに居るそのあんちゃんの事か？」
剣児はそう言って後ろに入る青年を見た
「僕は宇門大介と言います。宜しく」
「野朗の名前は覚えねぇ主義なんだけどよぉ、とりあえず憶えておいてやるよ！んな事より飯だ飯！」
剣児がそう言って上がりこもうとした時
「この馬鹿剣児！！」
と言ってつばきの踵落としが剣児の脳天に炸裂した
「ぐぇぼぉ！」
剣児は苦痛の声を上げて地面に倒れる
その光景を見てシグナム達は驚く
「見事な踵落としだ」
狼形態のザフィーラが感心していた
そんな中、剣児がむくりと起きてつばきの方を見る
「ぬぁにすんだよつばき！」
「あんた何人様の家に勝手に上がり込もうとしてるのよ！少しは遠慮ってもんを知りなさいよ！」
「良いじゃねぇか！家主だって入れっていってんだからよぉ！」

「だからってそうすんなり入って良いもんじゃ無いでしょう！」
お互いに口喧嘩を始める
しかも声が何気にでかい
とりあえずこのままだと近所迷惑になりかねないのでシャマル達は
剣児とつばきを急ぎ中に入れた
因みに剣児とつばきは未だに口論を続けていた

＊＊＊

「とりあえず・・・二人のデバイスは今の所ボロボロの状態だね」
デバイスルームでは修理中のレイジングハートとバルディッシュが
あった
二つとも待機状態でありながらボロボロになっている辺り相当なダ
メージが予想できた
「となると・・・今の所動ける魔道士は僕とアリシア位なものか」
クロノは顎に手をやって呟く
「なぁに！この私に任せておけばデーモンだろうと偽ゲッターだろ
うと一刀両断にしちゃうよ！」
「自信満々なのは結構なんだが、それならもう少し魔力コントロー
ルを上手くなってから言ってくれないか？」
「ギクゥッ！一番言われたくない事を言いおったなお主（汗」
額から汗を流しながらアリシアは呟いた
どうやらアリシアは魔力のコントロールが下手らしい
「で、でもあの時はアリシアちゃんのバルディッシュがゲッターロ
ボのトマホークを受け止めてたよ？」
「アリシアは元々格闘戦の素質はフェイト以上に高いんだ・・・け

ど、その変わり遠距離戦闘はからっきしで、目視出来る距離でも豪快に外す事があるんだ」
そう言ってクロノは後ろを向いて後頭部に張られた巨大な絆創膏を見せた
「クロノ、何じゃそりゃ？」
「以前アリシアの特訓に付き合ってたら思いっきり外されて直撃しました・・・未だに痛みが残るんです」
「おい、大丈夫なのか？それ」
「多分・・・」
クロノは言うが恐らくかなり痛いのだろう
其処をグッと我慢する所がクロノらしいと言えばらしい者であった
「そう言えば、あの時のハンマー娘や刀を持った奴の魔方陣・・・何だかフェイト達とは違ってたねぇ・・・一体何なのかなぁ？」
アルフがふと呟いた
確かにヴィータ達の魔方陣はなのは達とは異質であった
言ってしまえば根本的に違うのだ
「あれは恐らく古代ベルカ式の魔方陣ね」
すると後ろから声がした
振り返ると、其処には管理局の制服を身に纏ったプレシアが居た
「プレシアさん！」
「久しぶりね、甲児くん・・・それに皆も」
プレシアは微笑みながら言った
半年振りの再会ではあるが随分顔色も良くなっていたようだ
「古代ベルカ式か・・・こりゃちょっと厄介だな」
甲児は元の世界でベルカ式とミッド式について簡単にだが教わっていた
その為今の問題が何なのかは分かっていたのだ
「とりあえず、修理はしてみるけど、このまま普通に修理してもまた負けちゃうのがオチだと思うんだよね」
計器を操作しながらエイミィが愚痴っていた

確かにその通りだ
このまま元に戻してもまたやられては元も子もない
どうすれば良いか
「ならよぉ、レイジングハートとバルディッシュにカードリッジシステムを取り付けたらどうだ？」
甲児が閃いたかのように言う
だが、その提案に皆が驚く
「それは無理だよ！甲児さん！あれは結構謎めいた部分も多いし危険がおおいんだよ！専門的な知識を持つ人が居ないととても取り付けられないよ」
エイミィが言う
だが、甲児はフッと笑っていた
「心配すんな！カードリッジシステムのいろはなら俺の頭ン中に入ってるよ」
「えぇ！本当なの甲児？」
アルフが驚いた顔で聞く
そんなアルフに甲児は頷く
「これでも元居た世界じゃデバイスを作った位なんだぜ！まかしとけ！」
甲児が自信満々に答える
そんな一同を傷ついたレイジングハートとバルディッシュが見ていた

＊＊＊

「くは～～！食った食った～～～」
その頃、八神家では夕食を終えて片しに入っていた

剣児は自分の座っていた椅子の上で満足げに腹を摩っている
「ちょっと剣児！食べたんなら手伝いなさいよ！」
流しでははやて、大介と共に食器を片付けながらつばきが怒鳴っていた
「あ～、めんどいから後頼むわ・・・にしてもはやて、お前飯上手いな～、これなら将来良い嫁さんになるんじゃねぇの」
剣児が言うとはやてがとても嬉しそうな顔をする
「フフ、おおきに！そしたら剣児兄ちゃんうちを嫁に貰ってくれるん？」
「ん～・・・シグナムさん並みのボインになったら考えてやるよ」
そう言って剣児はシグナムを見た
シグナムは何か異様な視線を感じ寒気を感じた
「このエロ剣児いいいいいいいいいいいい！」
「ぎゃあああああああああああああああ！」
そんな剣児につばきのとび蹴りが突き刺さる
頬に蹴りを食らいそのまま吹き飛ばされる
壁にベタリと張り付いてそのまますると落ちていく
「て・・・てぇなぁ・・・何すんだよつばきぃ！」
顔を真っ赤にして剣児が起き上がる
それは先ほどつばきに壁に叩きつけられたためだ
だが、つばきはそんな剣児を無視して洗物に戻る
すっかり置いてけぼりにされた剣児は何処か宙ぶらりんな感じがした
そんな時、シグナムがそっと剣児の肩に手を置く
「草薙剣児・・・少し話しがある」
「あん？何だ」
「此処では話しづらい・・・ベランダに来い」
そう言ってシグナムはベランダに出て行った
「ベランダ？・・・何でまた・・・ま、まさか！」
剣児は脳内で胸を寄せて迫ってくるシグナムを想像した
勿論薄着の水着姿であった

何故水着なのかは・・・それは剣児に聞いてくれ
そんな想像をした剣児の顔は鼻がめっちゃ延び巻くって頬が赤くなっていた
「デへへ・・・こりゃ行かないと不味いよなぁ・・・」
涎を拭きながらベランダに出ると、其処にはシグナムの他に、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが居た
それを見て剣児はがっくりと肩を落とす
「あぁ・・・そうだよな・・・薄々そうだと感じてたよ・・・なのに一抹の期待を抱いた俺が馬鹿だったよ（涙」
「何の事だ（汗」
意味不明な事を口走る剣児にシグナムは呆れるだが、とりあえずワザトっぽく大きな咳払いをすると、本題に入った
「草薙剣児・・・我等と共に闇の書の蒐集に協力してくれ」
シグナムは真剣な眼差しで言った
勿論、他の3名も同様であった
だが、剣児は
「やだよ」
即答であった
「何でだよ!あたしらが悪党だから協力出来ねぇって言うのか?」
ヴィータが額に青筋を浮かべて聞く
それに対する剣児の答えは
「んなもん、面倒臭ぇからやだよ」
と言う回答であった
それを聞いた4人はこれまたドリフ並に盛大にずっこけた
「お・・・お前・・・只単に面倒臭いから協力したくないって・・・言いたいのか?」
「他にどんな理由があんだよ?」
剣児の対応に流石のザフィーラも呆れる
「ま、とにかく面倒事はパス!俺こっちに来てからすっげぇナイーブなんだよ!だからわりぃな」

と言って部屋に戻ろうとした時、其処にははやてが居た
「は・・・はやて・・・」
「話しは聞いとったよ」
はやてがニッコリして言う
それに申し訳なさそうな顔になるヴォルケンリッターの４人
剣児は未だに面倒臭そうな顔をしている
すると、はやてがチョイチョイと指を動かす
「な、何だ?はやて」
「剣児兄ちゃん。ちょい耳貸してぇな」
「???」
疑問に思ったが、とりあえず耳を貸す事にした
するとはやては剣児にだけ聞こえるように言う
そして言い終わると、これまた剣児の鼻の下が延びた
そして、
「うっしゃあああああああああああああああああああ!この草薙剣児様に任せろおおおおおおおおお!募集でも徴収でも何でもやってやるぜえええええええええ!」
突如やる気を出した剣児にシグナム達は度肝を抜かれる
「剣児君、それを言うなら『蒐集』だよ」
後ろから手を拭きながら大介がやってくる
「こまけぇことは気にすんな!ようシグナムさんよぉ!この俺と鋼鉄ジーグでその蒐集ってのを手伝ってやるよ!」
親指を立てて剣児が言う
その目は今まで以上に活き活きとしていた
（一体・・・何があったんだ?（汗）
突然の変わりようにシグナムは驚きの余り目を丸くしていた
とにもかくにも、これでシグナム達は鋼鉄ジーグと言う心強い味方を得たのであった
（ウヘヘ～、成功したら～～後が楽しみだぜ～～～）
そんな中、剣児は一人空を見上げていた

鼻の下を伸ばしまくったまま

新たなる力　前編（後書き）

後編は、鋼鉄ジーグ対マジンガーZ
互いの大切な物を賭けての一大決戦！！
の、様な気がする（汗）

新たなる力　後編（前書き）

遂になのはとフェイトのデバイスが復活する・・・・かも

新たなる力　後編

その日、時空管理局のとある一室に皆は集められた
目の前にはリンディ艦長が立っている
それを見るように、アースラの局員達、そして甲児、鉄也、竜馬、隼人、弁慶、なのは、フェイト、アリシア、ユーノ、アルフ、クロノ、プレシアが居た
「さっきも言っての通り、今アースラは緊急メンテナンス中でロクに稼動出来ない状態です。其処で、我々は緊急対策本部を設置する事を決定しました」
リンディが簡潔に述べる
現在アースラは度重なる稼動により限界が来てしまい只今オーバーホール中なのだ
その為このままでは確実に一手遅れてしまう為それなら地上に居れば早く対応出来るじゃん！と言う結論の元そう言う案が出されたのだ
「因みに本部の場所は・・・なのはさんの家のすぐ隣です！」
「ほ、本当ですか！」
それを聞いたなのはが嬉しそうな顔をした
それに続いてフェイトも嬉しそうな顔になる
それを見て局員達、そして甲児達もフッと笑みを浮かべる
「成る程ねぇ・・・けど、それじゃ人手が足りないんじゃないのかい？」
「翼！」
また何時現れたのか
入り口の壁に背を預けながら翼が言っていた
本当に神出鬼没とはこの事である
「家の若い衆で良けりゃ貸すけど？」
「でも、良いの？くろがね屋を放っておいても？」
リンディは申し訳なさそうに聞く

それに翼はフッと笑う
「なぁに、此処の所の妙な騒ぎのせいでパタリと客足が途絶えちまってねぇ・・・今は閑古鳥が鳴いてる始末さ。丁度あいつらも暇を持て余してたんだ。力仕事なら任してくれって連中揃いさね」
「そうなの・・・それじゃお言葉に甘えさせて貰うわね」
そう言ってリンディも笑い返す
「って、事は・・・お母さんも一緒に来てくれるの？」
「ええ、まだ本調子じゃないけどサポート位なら出来るわ」
「やったぁ！頑張ろうね！お母さん！フェイト！」
アリシアが諸手を上げて喜ぶ
そしてそのまま高くジャンプする
降り立つ先は勿論
「竜馬さあああああああああああああん！」
「うおっ！」
そう、竜馬の所であった
飛び上がって竜馬に抱きつくアリシア
竜馬自身どうすれば良いのか迷ってしまう
そんな竜馬を隣で隼人と弁慶が面白そうに見ており鉄也はフッと笑い、甲児に至っては必死に笑いを堪えていた

それからの作業はとても早かった
緊急対策本部で必要な物だけを運んでなのはの家の隣に建設された所に転送した
なのは、フェイト、アリシアは早速その本部に上がり込んで二階から外を眺めていた
「ほら見て！あそこが私の家だよ！」
「へぇ、なのはの家って喫茶店やってるんだぁ・・・後で食べに行こうよ」
「うん、私も行ってみたい」
どうやらフェイトとアリシアは翠屋に興味を持ったようである

それになのははニッコリと微笑む
一方でその下では
「お久しぶりですなぁ、旦那方」
今ではすっかり顔なじみとなったくろがね屋五人衆と甲児達が荷物運びをしていた
「元気そうだな安」
「へへ、元気だけがあっしの取り得ですからねぃ、ささ、キバっていきやしょうか！」
「おう！」
そう言って甲児は持っていたタンスを運ぶ
その周りでは
「てめぇら！久々の仕事だ！気合入れやがれぃ！」
”おぉぉぉぉ！”
屈強な男達がそれこそ軽がると家具や備品などを運んでいく
それも常人が普通に持つ物の数倍の量である
「相変わらずくろがね屋の人達は常人離れしてるなぁ・・・どうやったらあんなに一辺に持てるんだ？（汗」
1人軽い家具を運びながらクロノは呟いた
「なぁに、お宅らとは歩んで来た道が違うだけさ」
1人冷蔵庫を片手で抱えながらクロスが言う
それを見てクロノは青ざめた
（一体どんな道を歩んで来たんだ（汗）
そうしていると、甲児は部屋の一角に居る2匹の小動物を見た
1人はフェレットであったが、もう1人はオレンジ色の子犬であった
「もしかして・・・アルフか？」
甲児がオレンジ色の犬を指差して言う
それにアルフが胸を張って言う
「新形態！子犬フォーム！！・・・フェイトやアリシアの友達の前だとこの方が怖がられないしね」
アルフがそう言うと甲児はポンと肩に手を置く

「アルフ・・・何があったか知らねぇけど・・・頑張れよ（涙」
甲児の目からはうっすらと同情の涙が流れていた
「ちょっと何?その哀れみの視線を止めてくれない!何か悲しくなってくるから・・・ってか、何でそんな同情の視線を送るの?」
「気にすんな!どう言った経緯でお前が自分の事を狼から「子犬」って言うようになったかは問わない!・・・今度飲みに行くか?」
明らかに勘違いをしている甲児にアルフはうっすらとだが殺意が沸いて来た
「こ、甲児さん・・・甲児さんはまだ未成年の筈じゃないですか?幾ら何でもお酒は不味いですよ」
横に居たクロノが止めに入る、だがそれで止まる甲児では無い
「良いんだよクロノ、どうせ後一年したら俺二十歳になるんだし前祝って事でさぁ」
何とも調子の良い男である
「それはいかんなぁ、甲児くん」
「げぇっ!て、鉄也さん!」
甲児は振り向くと、両手に結構重そうな家具を担いだ鉄也が居たしかもかなり険しい顔で・・・
「甲児くん、良い若い者が酒を嗜(たしな)むのはまだ早いぞ、後一年我慢しろ。そもそも俺達には何時スクランブルが掛かるかと言う緊張感を持って節度ある生活を心がけないといけないんだぞ!それに酒は良薬とは言うが飲みすぎれば毒になるんだ。大体君はどうして（クドクド」
「ヒ～～～ン!クロノ～～～、助けてくれ～～～」
涙目になった甲児が必死にクロノに助けを求めるが、クロノは片手で謝罪の意を表しその場を後にした
他の場所ではゲッターチームが家具を運んでいる
だが、竜馬の顔が浮かない
「どうした?リョウ・・・昨日の旧ゲッターの事を考えてたのか?」
「ああ、あの時ゲッターが言った言葉が今も引っかかっててな」

隼人の問いに竜馬は答える
「お前の考えすぎじゃないのか?リョウ」
「だと・・・良いんだがな」
弁慶にフッと笑い無理矢理顔を明るくした
今は暗く沈んでいる場合じゃない
こうしている内にももっと危険な何かが動き出そうとしているかもしれないのだ
「や～～れやれ～～、相変わらず重い荷物だ～～な～～～・・・いっそ撃ち抜いたら軽くなるかもなぁ～～」
と言って隣に居たジャンゴが突如両手に大型ガトリング砲を構えるそれを見たゲッターチームは青ざめる
「そ、それは不味いですよジャンゴさん!」
「おいおい、そんな事したらこの建物一角が吹っ飛んじまうよ」
「それは勘弁してくれ」
必死に宥められてジャンゴは渋々武器を仕舞う
それからくろがね屋のご一行のお陰で引越しは僅か２０分で終了してしまった

＊＊＊

八神家では家主のはやてが車椅子に乗りながら部屋を出ていた
まだ朝日が差し込む時間である
起きている人は恐らくはやて以外居ないと本人は思っていた
すると、外で水をやる音が聞こえた
何だろうと思い外の窓を開けると、大介が花に水をやっていた
「おや?起こしちゃったかい?」

頭だけ振り返って大介が尋ねる
するとはやてはかぶりを降る
「ううん、うちは何時もこの時間に起きるんや、けど大介兄ちゃん早起きやねぇ。何でそんなに早く起きるん？」
「僕は昔牧場で働いていた事があるんだ。この時間でも遅い位だよ」
爽やかな笑顔で大介は言う
それを見てはやては納得する
「あれ？二人ともももう起きたの？」
「あ、つばきちゃん」
振り返ると既に着替えていたつばきが居た
「つばきちゃんも早起きやねぇ？」
「家神社やってるから朝早いんだ」
つばきはニッコリ笑って言う
「へぇ、二人とも凄いんやなぁ・・・ところで剣児兄ちゃんは？」
「ああ・・・あの馬鹿剣児なら・・・」
そう言ってつばきは上を見上げた

その上では廊下に布団を敷いた状態で剣児が鼾(いびき)をかいていた
「ムニャムニャ・・・シグナムしゃ～～ん・・・シャマルしゃ～～ん・・・デヘヘ・・・」
一体どんな夢を見てるのだろうか？
それは剣児にしか分からない

それからはやては料理を作り、つばきは机のセッティングをして、大介は布団を干していた
そうこうしているとソファーで寝ていたシグナムとザフィーラが起きだす
「おはよう。シグナム、ザフィーラ」
「あ、おはよう御座います」
「そんなとこで寝たら風邪引くよぉ」

と行ってはやてはおぼんに乗せたホットミルクをシグナムに渡す
「あ、有難う御座います」
すると部屋の扉を開けてシャマルが慌てて入ってきた
「すみません！寝坊しました（汗」
「おはよう、シャマル」
慌てて来たシャマルにはやてはニッコリと微笑む
「おふぁよう・・・」
目を擦りながらヴィータがやってきた
かなり眠そうだ
「もう、ヴィータちゃんそんな起きたばかりの格好で、顔を洗って来なさい」
「う～～ん、ミルク飲んでから」
「はい、熱いから気をつけてね」
「お、おう・・・」
大介からホットミルクを貰って机に座ってゆっくりとそれを飲む
シグナムははやてから貰ったホットミルクを見る
（温かいな・・・）
そう思っていたシグナムの顔は僅かに柔らかい顔になった
「にしても剣児兄ちゃんは遅いなぁ・・・もう朝ごはん出来てまうでぇ？」
そう、今この八神家でまだ起きていないのは剣児だけである
するとつばきが腕をボキボキと鳴らしながら部屋を出る
そして、
「起きろおおおおおおおおおおおおお！この馬鹿剣児いいいい

それから暫くして拳に血糊（ちのり）をつけたつばきと顔中ボコボコになった剣児が来た
「おはよう、剣児兄ちゃん」
「お・・・おう・・・」
笑顔で言うはやてに剣児は片手を上げて返す
そして同様に剣児にホットミルクを渡す
「お！サンキュー」
何時の間にか顔が元に戻った剣児は渡されたホットミルクを一気に煽る
読者の方々は熱い物を一気に口に中に入れたらどうなるか想像つくだろうか？
答えはこれである
「あちいいいいいいいいいいいいいいいい！」
顔を真っ赤にして叫ぶ剣児
そして空になったコップをそっと置いてその場で転げまわった
それを見て一同がフッと笑う
（ええなぁ、家族が居るって・・・何かとっても楽しいわぁ・・・ずっとこのまま皆と一緒にいたいなぁ）
料理を作りながらはやてはそう思っていた

＊＊＊

時刻は午前、日にちは平日
と言う事は当然なのはは学校に行っていた
そして、其処であるサプライズが起こっていた
「皆さん、今日は新しい友達を紹介します」

そう言って先生が入って下さいと言う
すると扉を開けて二人の少女が入って来た
それ位なら誰も驚かないのだが、その二人は顔から髪型までそっくりだったのだ
「海外から転校してきた双子の姉妹です、それじゃ自己紹介をして」
「は、はい・・・えっと・・・フェイト・テスタロッサです・・・宜しくお願いします！」
「ヤッホー！私はお姉ちゃんのアリシア・テスタロッサだよぉ！宜しくね！（ブイ」
フェイトは少々はにかんでペコリと会釈して、アリシアは元気良くブイサインを決める
それを見てなのはは苦笑いを浮かべる
（ニャハハ・・・相変わらずアリシアちゃんは元気だなぁ（汗）
だが、サプライズはこれだけでは無かった
「実は先生は私情で暫く学校をお休みします。それで臨時の先生が皆さんに変わりに勉強を教えてくれます」
するとまた扉が開かれる
其処からスーツを着こなしてネクタイを締めた青年がやってきた
そして青年は黒板に自分の名前を書く
「どうも、始めまして・・・僕は兜甲児。短い間ですが一緒に勉強していきましょう」
と言って甲児は笑って言う
それを見て生徒達は拍手で出迎える
因みに、なのはは額を思い切り机にぶつける
（な・・・何で甲児さんが・・・）
何故かと言うともしなのは達にデーモンが襲い掛かってきたら不味いのでその護衛である
それから授業が終った後、生徒達はフェイトとアリシアに質問攻めをしていた
「ねぇねぇ、前の学校はどんなのだったの？」

「日本語上手だねぇ！何処で習ったの？」
「二人は双子なの？凄いそっくりだよ」
「ワイワイガヤガヤ」
二人を囲んで生徒達が質問をしまくっていた
その光景を教室の端っこで甲児が微笑ましく眺めていた
もしこれがフェイト１人だったら捌けなかっただろうが、今は隣にアリシアが居た
そのアリシアはと言うと
「それはもう、聞くも涙語るも涙と言う凄い波乱万丈な話しがあったのですよお客さん！」
と、明らかに作り話を話していた
（アイツ・・・一体何処でそんなホラ話を仕入れて来たんだ（汗）
甲児が苦笑いを浮かべて見ていた

＊＊＊

一方、こちら緊急本部ではクロノ、エイミィ、プレシア、鉄也、ゲッターチームが映像を見ていた
そこには一冊の本が映し出されていた
「彼らの目的は魔力を蒐集してこの闇の書を完成させる事にあると思われます」
操作をしながらエイミィが言う
それを見て鉄也達の顔が険しくなる
「あの時鉄也さん達が戦った相手は闇の書が作った擬似人格だと思われます」
「つまり、本当の人間じゃないって事なのかい？」

アルフの問いにエイミィは頷く
「それで、今の所被害は管理局の魔道士だけなの？」
プレシアが問いかけるのに対し、かぶりを振って操作する
すると、其処には大型生物を思わせる映像が映し出された
「奴等は魔力のある大型ロストロギアを片っ端から襲って魔力を蒐集しています」
「正に形振り構わずだな」
竜馬が呟く
（なぁ、リョウ）
（何だ？弁慶）
弁慶が竜馬に耳打ちする
（あれって・・・どう見ても夜天の書だよな）
（ああ、そうしか見えないな）
（じゃぁよぉ、あれの持ち主ははやてなんじゃねぇのか？）
（恐らくそうなるな）
竜馬が頷いたのを見て弁慶は眉を動かす
（おかしくねぇか？あのはやてちゃんがそんな事を命じる筈がねぇだろう！）
弁慶の言う通りであった
未来で出会ったはやてはそんな事を命じるような子では無いと言うのは竜馬達には分かっていたのだ
ならば一体何故シグナム達はそんな事をするのか？
（何もはやてが黒幕とは限んねぇだろう。本人の知らない所であいつらが勝手に動いてるって事もあるんじゃねぇのか？）
其処へ隼人が語りかける
益々謎が深まっていた
（やはり、本人に直接聞くしかないか・・・・）
そう思いながら目の前に映る夜天の書を見つめた竜馬
「一つ良いか？」
其処へ鉄也が質問を投げかけた

「その闇の書が完成したらどうなるんだ？」
「完成した闇の書は持ち主に絶大な力を与える・・・・けど、それは制御出来ないとても危険な力なんだ」
「まるで歩く爆弾だな」
クロノの回答を聞いて鉄也はバツの悪い顔をする
「何としても闇の書が完成する前に首謀者を逮捕しないと・・・ところで、なのはとフェイトのデバイスの修理状況はどうなってますか？」
クロノは今は甲児が居ないので共に作業をしているプレシアに聞いた
「甲児君の協力のお陰で9割方終ってるわ・・・後は甲児君と最終点検をすればすぐにでも出せるわ」
「そうか・・・なら俺は高町の特訓に付き合うとするか」
鉄也がそう言って重い腰を上げた
「なら俺達はゲットマシンで偵察をしてくるとするよ」
ゲッターチームも立ち上がる
「偵察でしたら僕も『お前は残れ』・・・どうしてですか？」
クロノが問いかける
そう言ったのは鉄也であった
「奴等は魔力の持ってる奴等を狙う。お前が出たんじゃ良い的だ。それに指揮官がほいほいと外に出るのは不味いだろう」
「お前さんは黙って俺達に指示を頼むぜ」
隼人がフッと笑って言う
それにクロノも納得したのか頷く
そうして鉄也はユーノと共になのはのリハビリに付き合い、ゲッターチームはゲットマシンで周囲の偵察を行う事になった

＊＊＊

一方、別の世界では
「ダイナマイトォォキイイイイイイイイイイイック！」
鋼鉄ジーグの飛び蹴りが大型ロストロギアを蹴り飛ばす
巨大な岩石を纏った亀のようなロストロギアである
蹴りを食らったロストロギアはすぐに体制を立て直してジーグに威嚇の叫びを上げる
「けっ！図体だけでかくて大した奴じゃねぇぜ！これならすぐに叩きのめせるな」
剣児が鼻を擦って呟く
「調子に乗るなよ剣児！それと分かってると思うが殺すなよ！殺すと蒐集できなくなるからよ」
「わぁってるよ！お前は黙って蒐集の準備してろっての」
通信モニターに映ったヴィータに口煩そうな顔で答える
外では遥か上空からヴィータとザフィーラが見ていた
「それにしても、さっきまでやるき出してなかった剣児が突然どうしたんだ？」
「俺にも分からん・・・だが、あの時主はやてが何か剣児に呟いたみたいだが・・・一体なんだったのだろうか？」
「まぁ、何でも良いさ。アイツが居ればこっちも蒐集がやりやすくなるしな」
そう呟きながら二人は遥か下でロストロギアと戦うジーグを見ていた
「ギシャアアアアアアアアアアアア！」
ロストロギアが口から火炎球を吐き出す
だが、ジーグはそれをジャンプしてかわす
「はん！おせぇぜ！」
そしてロストロギアのまん前に降り立つ
そして手首を掴むと肩から腕ごと取り外してそれで殴りつける
「おらぁ！ジィィグクラッシャァァァ！」

ジーグの大きな肩がロストロギアの頭部に直撃する
凄まじい衝撃と轟音が響き渡り思わずロストロギアは仰け反る
その隙を付き腕を元に戻して両手を構える
「必殺！猛烈！地獄張り手えええええええええええええ！」
相撲の張り手の要領で張り手をお見舞いする
だが、その張り手の手数は凄まじい物であった
無数の手がロストロギアに襲い掛かる
腕の短い亀型の為ガードする事も出来ずに諸に食らう
ダメージが蓄積した為か千鳥足になりふらふらしだす
するとジーグはそんなロストロギアの頭を掴むように立ち開いた手を空高く掲げる
すると、掌に無数のトゲが生えてくる
「くらえぇぇ！ジィィィィグオカンビンタアアアアアアアアアアアアア！」
見た目は只のビンタだが、その一撃は恐ろしい物であった
それを食らったロストロギアの顔にジーグの手とトゲの跡がクッキリと残っていたのだ
そしてそのまま放物線を描いて飛んでいく
しかし、それを許すような剣児ではなかった
「おぉっと！これでトドメだ！」
そう言ってジーグは大きく両腕を開く
すると胸の装甲が開き其処から緑色の稲妻が放たれる
それは吹き飛んでいたロストロギアを捕まえてゆっくりとジーグの方へ引き寄せていく
やがてジーグに密着した時、その脇腹にジーグは自分の腕を押し付けて鯖折りの要領で力一杯締め上げる
「ジィィィィグブリイイイイイイイイイカアアアアアアアアアアアアア！」
メキメキとロストロギアの体に亀裂が入っていく
ロストロギアが苦痛の顔に歪んでいく

「其処までだ！剣児」
これ以上やると確実に絞め殺してしまいそうなのでヴィータが止めに入った
剣児はそれを聞いて技を切り上げてロストロギアを離すとロストロギアはそのままジーグの前に倒れる
そして意識を手放してしまった
「おっしゃぁ！んじゃちゃっちゃと蒐集してくれよペチャパイハンマー娘」
ブチッ
「まずてめぇをぶっ潰す！」
額に青筋を浮かべたヴィータがグラーフアイゼンを構えてジーグに襲い掛かる
「どわあああああああああああ！ま、待て待て！マズ蒐集を先にやれってぇの！」
追いかけてくるヴィータに剣児は必死に言うそれに気づいたヴィータが舌打ちしながら蒐集を行うそれにフゥと溜息を吐いた直後、今度は別方向からジーグの腕が飛んできた
全くの予想外だったのでそれを食らいジーグは倒れる
「い・・・いでぇ・・・何すんだよ！つばき」
腕を飛ばしてきた犯人は検討が突いていたそれは上空を旋回するビックシューターであったそして、それを操縦つばきその人が剣児に向かってジーグパーツを射出したのだ
「この馬鹿剣児！何ヴィータちゃんに変な仇名つけてるのよ！」
「だってしょうがねぇだろう！本当にペチャパイハンマー娘なんだからよぉ」
「あんま酷い事言うとマッハドリル飛ばすわよ（怒」
「すんませんでしたあああああああああああああ！」
ジーグはその場で土下座体制をした

余程今飛ばされるのはヤバイのだろう
そうこうしているとヴィータがロストロギアから小さく光る物体を取り出す
恐らくあれがリンカーコアなのだろう
それを闇の書に入れる
すると闇の書の数ページ分が埋まる
「んだよぉ、デカイ図体の割りにはそんなもんしかないのかよ」
何時の間にか雷鋼馬に戻して剣児が側に寄ってため息を吐く
「しょうがないわよ、この調子で私達が頑張ればきっとはやてちゃんも良くなるって」
つばきが剣児にそう言う
だが、剣児は未だに不満そうな顔だ
そんな二人の前にヴィータとザフィーラが降り立つ
「ご苦労だったな、剣児」
「お前が居てくれたお陰で随分蒐集が楽になったぜ」
「良いって事よ！これもあれの為だからな（デレ～」
「「あれ？」」
剣児の言葉にヴィータとザフィーラは首を傾げており、つばきは何処か暗い顔をしていた
「にしてもよぉ、一体後何ページあるんだ？」
「まだ半分も行ってないと思う」
「げぇっ、まだそんなにあんのかよ！この分厚い本」
剣児が嫌そうな顔をしながら闇の書に手を触れる
すると、触れた手が突如眩い閃光を放つ
「どわあああああああああああああああ！な、何じゃぁぁ！」
「け、剣児！どうしたの？一体何したの？」
「おおおおおお俺が知るかあああああああああああああああ！」
つばきが問いかけるも剣児は驚きっぱなしであった
すると、やがて閃光が消え剣児の手は本から離れた

「は～、びっくらこいたぁ」
「い・・・今のは一体・・・」
「分からん・・・ヴィータ！闇の書はどうなってる」
「お、おう・・・って、何じゃこりゃ！」
ヴィータは驚いた
何と、剣児が触れただけで闇の書の実に６０ページが埋まっていたのだ
「うぉっ、マジか？俺が触れただけでこんなにページが埋まっちまったぞ！どうなってんだ？」
「分からん・・・しかし、もしかしたらあの時他に現れた奴等も触れさせればどうにかなるんじゃねぇのか？」
「うむ、そうかも知れんな」
「どうでも良いけどよぉ、腹減ったしそろそろ帰ろうぜぇ」
剣児が腹を摩って言う
その腹からはひっきり無しに腹の虫が鳴っていた
それを見て３人は溜息を吐く

＊＊＊

病室を出てきたなのはを一同が出迎えた
「なのは、どうだった？」
「うん、バッチリ完治したよ」
なのはが元気良く答える
それを見てフェイトはホッとする
「これも鉄也さんがリハビリに付き合ってくれたお陰だよ」
「いや、俺は只アドバイスしただけに過ぎないさ、本当の立役者は

ユーノだろう」
「え?僕ですか?」
鉄也の言葉にユーノは踊ろく
「へぇ、お前結構やるじゃん」
「本当だねぇ、スケベフェレットの癖に」
「アリシアちゃん・・・いい加減にしてくれない?僕もう泣きたくなってきたよ（涙」
涙目になるユーノをなのはが必死に慰める
「しかし丁度良かった、こっちもデバイスの改良が終了した所なんだ」
「え?本当ですか?」
「あったぼうよ!この俺に掛かればちょちょいのパーだったぜ」
胸を張って甲児が言う
「確かに、殆ど甲児さんがやっちゃったみたいな物だったもんね」
「私達はそのサポート位だったし」
エイミィとプレシアが言う
「甲児さんって凄い頭良いですよね」
「何処の学校を出たの?甲児さんって」
アリシアが聞く
「自慢じゃねぇけど俺はＭＩＴを卒業したんだ」
「ＭＩＴ?」
「なのはちゃん、あれだよ!野球で使うミットの事だよ」
「全然違うぞアリシア（汗」
アリシアの当然とも言えるボケに鉄也がやんわりと突っ込む
そんな中、エイミィが驚いた顔をする
「え?甲児さんって「マサチューセッツ工科大学」を卒業したの?」
「マサチュー?何ですか?それ」
どうやらなのはは知らないらしく頭に?マークを大量に浮かべている
それはフェイトとアリシアも同様であった
「マサチューセッツ工科大学ってのは理数系の梁山泊と呼ばれる程

で今まで何十人ものノーベル賞受賞者を出したって言う・・・要するに物凄く頭の良い人が行く学校って言った方が早いね」
それを聞いたなのは、フェイト、アリシアは目を丸くしていた
「甲児さんすご～い！そんなに頭良かったんだ！パッと見たら馬鹿っぽく見えたのに」
「お前にだけは言われたくねぇよアリシア」
「ニャハハ・・・でも、これでまた私達も戦えるね」
「うん」
横で笑いながらなのはとフェイトが互いを見合う
それを微笑ましく見つめる一同
すると、
「ギャ～～ッハッハッハッハ！そんなもんよりこのワシの分子破壊砲を使えば良いじゃろうがあああああ！」
「にゃあああああああ

「ばっかもん！ワシャちょっといかれたお爺ちゃんじゃないわい！かなりいかれたお爺ちゃんじゃ！」
「て、訂正すんのは其処かい！」
甲児がズビシとツッコミを入れる
すると、突如辺りに警報が鳴り響く
「まさか、あいつらが出たのか？」
「行こうぜ、皆」

＊＊＊

ブリッジにやってきた甲児達をクロノとリンディが見つける
「クロノ！今の警報は何だ？」
「甲児さんの思ってるとおりです、また例の奴等です」
「あいつらが！」
甲児は映像を見た
其処には町の上空で管理局の武装局員を蹴散らしていくヴィータとザフィーラの姿があった
そして、その下には鋼鉄ジーグが居る
「あいつら・・・行こうぜ！皆」
甲児がなのは達にそう言う
「待って下さい！別の方角に謎の勢力が海鳴市を目指して進行しています！かなりの勢力です」
「何だって！」
鉄也は驚愕の顔をした
もしそうなら何とかしなければ海鳴市は火の海になってしまう
「俺がその勢力を抑える！甲児君と高町達は奴等を抑えてくれ！」

「任せておけ！」
「分かりました」
甲児達は頷いた
そして、鉄也は甲児に近づく
「くれぐれも・・・未来の事は黙っておいた方が良いな」
「ああ、時期が来たら話すとしよう」
小声で言い合ってお互い頷く
そして一同は転送ポートにのってブリッジから姿を消す

＊＊＊

その頃、はやては大介と共に今夜のおかずを探していた
「今夜はお鍋にしようね、大介兄ちゃん」
「そうだね、きっと皆喜ぶよ」
車椅子を押しながら大介はそう言う
会計を終えて店を出ると、外では僅かに雪が降っていた
はやては思わず手に息を吹きかける
「ヴィータ達・・・きっと寒がってるだろうなぁ」
外に行ってるヴィータ達を心配するはやて
そして急いで家に戻る
「さ、皆が帰って来る前にちゃちゃっとご飯の準備をせにゃあかんなぁ」
「そうだね」
家に戻り、大介とはやては慣れた手つきで買って来た食材を鍋に入れやすい大きさに切っていく
「そう言えばはやてちゃんは今夜すずかちゃんの家に行くんだった

よね？」
「うん、そうやで、図書館でこの間知りおうてな、そんで今夜遊びに行くんや。多分そろそろ迎えに来ると思うけんど」
そう言っていると家のインターホンが鳴り響く
「お！来たかな？」
はやてが心躍りながら玄関の扉を開ける
「こんばんわ、はやてちゃん、お迎えに来たよ」
扉を開けると、其処には予想通りすずかが居た
そして、その後ろには胴の長い高級そうな車が止まっていた
「随分大きな車だねぇ（汗」
「すずかちゃんの家ってごっついお金持ちらしいんやでぇ」
「成る程ね」
大介は納得した
「あの・・・はやてちゃん、そのお兄さんは？」
「ああ、この人は宇門大介って言って家でお世話になってる気の良いお兄さんなんや」
「そうなんだ・・・始めまして、月村すずかと言います。はやてちゃんとは以前図書館で会ったんですよ」
「僕は宇門大介だよ。こちらこそよろしく」
そう言って大介とすずかは握手をしようとした
その時、突如上空を巨大な影が横切った
「うわぁ・・・でっかいロボットやなぁ」
「ああ、本当だ！」
影の正体を一同は見た
それは鋼鉄の鎧に身を包んだ巨人であった
その名は
「あれは・・・グレートマジンガー！」
「知っとるんか？大介兄ちゃん」
「え？あ、あぁ・・・少しね」
「ふぅん・・・ま、いっか。それよか早く行こうやすずかちゃん」

「うん！」
「気をつけてね」
車に乗り込むはやてを大介は手を振って見送る
やがて車はそのまま道なりに進んでいき、ついには完全に大介の視界から消えてしまった
「・・・さて、」
大介は家の鍵を掛けて外に出る
「グレートマジンガーが居たと言う事は、恐らく乗っているのは鉄也くんだろう・・・だとしたらきっと皆この世界に居る筈・・・よし」
意を決した大介はジャンプして家の屋根の上に飛び乗る
「デュゥゥゥゥゥクフリィィィィィィド！」
そして天を仰いで叫ぶすると彼の姿はカウボーイ風の姿から赤と黒の戦闘服に変わった
更に大介は天を見上げる
「来い！グレンダイザー！」
そして叫ぶ
すると虚空の彼方から巨大な円盤がやってくる
それこそ大介・・・又の名をデューク・フリードの愛機
ＵＦＯロボグレンダイザーであった

＊＊＊

その頃、シグナムとシャマルは目の前にある封鎖結界を見ていた
「あの中にヴィータ達が居るな」
「そうなるわね」

シグナムの言葉にシャマルが返す
「シャマルは外から結界の解除をしてくれ、私は中に入る」
「気をつけてね」
「任せよ、行くぞ！レヴァンティン」
『了解、マスター』
刀剣型デバイス、レヴァンティンを構えてシグナムは飛び上がる
その封鎖結界の中ではヴィータとザフィーラが武装局員達に囲まれていた
「囲まれたか・・・」
「だけどこいつらは雑魚だ、ちゃらいよ」
舌打ちするザフィーラにヴィータが言う
だが、ふと向かってくると思っていた武装局員達がとつじょ距離を開け出した
一体何の真似だと思うと、上に違和感を感じ見上げた
其処には既に無数の魔力で作られた刃を展開させているクロノの姿があった
「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！」
杖を振り下ろしたと同時に無数の魔力の刃が降り注ぐ
ザフィーラはヴィータの前に立ち防御結界を張る
「野朗！そんなもんこれで撃ち落してやるぁ！」
と言って下に居たジーグが胸部装甲を展開させて稲妻を放つ
その稲妻は魔力の刃を捕らえると軌道を変えて地面に叩き落す
「な、軌道を変えた！」
「けっ！この俺を倒したかったらつばきの鉄拳並の一撃を食らわせやがれ！」
「それどういう意味よ剣児！（怒」
その上を旋回していたつばきが叫ぶ
「やいガキ！そんな上で突っ立ってないで俺と勝負しやがれ！」
ジーグに乗った剣児がクロノを指差す
だが、その時

「ならその勝負、俺が受けてやるぜ！」
「何！」
剣児は声のした方を見た
それは上空に転送されたマジンガーZが降り立ったのだ
轟音と砂煙を舞い上げてマジンガーは立つ
「また会ったな、草薙剣児」
「へ、やっぱてめぇとじゃねぇと張り合いがねぇぜ、兜甲児」
兜甲児と草薙剣児
マジンガーZと鋼鉄ジーグ
2体の巨人が互いに睨みあう
その付近のビルではなのはとフェイトとアリシアが少々遅れて到着していた
「なのは！フェイト！」
「御免ね、遅くなっちゃって」
「さぁて、ジャンジャン行きましょうか！」
3人はそう言ってそれぞれの待機中のデバイスを持ち天に掲げる
「「「セェェェット・アァァップ！」」」
3人は叫ぶと眩い閃光が包み込む
やがて閃光が晴れると其処には新しいバリアジャケットとデバイスを持ったなのはとフェイトが居た
「レイジングハート・エクセリオン！」
「バルディッシュ・アサルト！」
「ぶ～、良いなぁ二人とも～、私もカードリッジ入れて欲しいな～」
パワーアップした二人を少し羨ましそうに眺めるアリシアに二人は苦笑いを浮かべる
「おい、あいつらのデバイス・・・あれって」
「ああ、カードリッジシステムだな」
「あいつら・・・何時の間にあたしらのシステムを盗んだんだ？」
「俺が作ったんだよ」
ヴィータの疑問を降り払うかのように甲児が言う

「はぁ！てめぇが作ったのか？」
剣児が驚きの顔で聞く
「おうよ！すげぇだろう！」
「へ、どうやら馬鹿じゃねぇらしいな」
「そりゃどうも」
剣児の貶し言葉に甲児は笑顔で答える
なのはとフェイトはヴィータとザフィーラを見る
「私達は戦いに来たんじゃない」
「話しだけでも聞いて！」
「でないとタンコブをつけるよ」
明らかにアリシアの言葉は逆効果であった
そんな中、ヴィータが口を開く
「あのさぁ、ベルカのことわざでこんなのがあるんだよ『和平の使者は槍を持たない』ってな」
その言葉の意味が分からず3人は首を傾げる
「話し合いに来た奴等が武器を持って来る訳ねぇんだよ！バーカ」
「へぇ、そういう意味があったんだ」
その意味に素直に納得するなのは
だが、
「なぁ、それってことわざなのか？」
率直な疑問を甲児が投げつける
「正確にはことわざじゃない、小話のオチだ」
「う、ウッセェ！良いじゃねぇか同じ意味なんだしよぉ」
ザフィーラに言われてヴィータが少しバツの悪い顔をする
「ぷぅ！何だお前！自身満々な顔で言ってそんなオチなの？ヤベッ！腹がマジいてぇ！」
「剣児・・・てめぇ・・・後でぶっ潰す（怒怒怒怒怒」
下で腹を抱えて笑っている剣児にヴィータはこれでもない程の殺意を沸かせる
そんな時、上空からシグナムが降りてきた

「助っ人に来た」
「来たか、シグナム」
ヴィータとザフィーラはシグナムを見る
そして一斉になのは達を見る
「なのは、私はあのシグナムって人と戦うね」
「うん、それじゃ私はヴィータちゃんと」
「んじゃ、私はあの犬っころと戦うかなぁ」
「お姉ちゃん・・・あの人はザフィーラって言うらしいよ（汗」
「良いじゃん犬っころで」
やんわりと突っ込むフェイトに真顔でアリシアは言う
「悪いんだけどアリシア、あのザフィーラの相手は私にさせてくれない」
「アルフさん！」
アリシアの肩をそっと押してアルフが前に出る
「え？何？ひょっとして発情期？」
「そんな訳ない！只何となくアイツはこの手で叩きのめさないと気が済まないの」
「え～～、それじゃ私は何すれば良いのぉ？」
1人弾かれたアリシアが不満そうな顔になる
「それじゃアリシアはユーノの護衛をしてくれ、それでユーノは内側から結界を死守して欲しい」
「分かった」
「しょうがないなぁ、そんじゃ行くよ、スケベフェレット」
「いい加減名前で呼んでくれない？（涙」
お互いに話しを終えて一同は散らばる
その下では今にも殴りあいになりそうな雰囲気のマジンガーとジーグが居た
「俺とてめぇのどっちが強いか此処で白黒つけてやる」
「望む所だ！てめぇをぶちのめして・・・俺は！シグナムさんのオッパイを触るもんねぇ～♪」

「な、何いいいい

「主はやてえええええええええええええええええ！私を売ったのかあああああああああああああああああああ！」
シグナムが天に向かって叫んだ
それを見てフェイトが同情の目を送る
「あのエロ剣児～～～～、後で地獄に叩き落としてやるぅぅぅぅぅ」
つばきに至っては正に悪魔そのもののような顔をしていた
だが、今の剣児にはそんな事などお構いなしであった
「と、言う訳だ！オッパイの為にてめぇをこの場で叩き潰す！」
ジーグがマジンガーを指差す
「ふ、ふざけんじゃねえええええええええええええええええ！」
それに対し甲児が額に青筋を浮かべて怒鳴る
物凄く怒っているのだ
緊迫した戦いの空気をそんな風に叩き折られたのを怒っているのだろう
そうフェイトは思った
だが、甲児の怒りの理由は全く別であった
「この野朗！何1人だけ美味しい思いしようとしてるんだ！俺だってなぁ・・・俺だってシグナムさんの胸（ボイン）を触りたいわあああああああああああああああ！」
甲児が血の涙を流して叫ぶ
それを聞いたなのは達は思い切りズッコケル
だが、それを聞いていた剣児はフフンと鼻を鳴らす
「残念だったな甲児！シグナムさんのオッパイはもう俺の物だ！てめぇは其処で指を咥えて見てやがれ！」
「おい！何時私の胸がお前の物になったんだ！」
横でシグナムが叫ぶが二人はスルー
「ざけんな！シグナムさんの胸（ボイン）は皆の物！つまり俺の物でもあるんだ！」
「何だその訳の分からん理屈は！第一誰の物でも無いぞ私の胸は！」

顔を真っ赤にして叫ぶもやっぱり二人はスルー
「こうなったら俺とお前、勝った方がシグナムさんの「オッパイ触り権」を手に入れるって事だな！」
「上等だぜ！てめぇにシグナムさんの胸（ボイン）は渡さねぇ！」
「いや、お前等もっと大事な理由があるだろう！そんな下らない理由で戦うな！」
目から熱い何かが零れそうになるのを必死に堪えてシグナムは言うだが、やっぱり二人はスルー
そして、
「「シグナムさんの胸（オッパイ）は俺の物だあああああああああああああああああああああ！」」
と大声で叫びながらマジンガーとジーグの拳が激しくぶつかり合う
「誰の物でも無いわあああああああああああああああああああああああああああああ！（号泣」
最早シグナムは二人にとって勝利の商品に祭り上げられてしまったその事にシグナムは激しく涙を流す
そんな中、フェイトは自分の胸を触れて、シグナムを恨めしそうに見つめる
「甲児さんって・・・胸の大きい人が好きなのかなぁ（汗」
遭えて言わないで置くが、今この時フェイトはシグナムに対して殺意が沸いたと言っている
かくして、なのは対ヴィータ、フェイト対シグナム、アルフ対ザフィーラ、マジンガーZ対鋼鉄ジーグ
と言う異種格闘技戦が展開された

新たなる力　　終

次回予告

野朗！絶対てめぇには負けねぇ！
てめぇを倒してこの手に栄光を掴んで見せるぜ！

次回「突然の乱入者！？」

次回もこの小説に『ビルドアアアアアアアアアアップ！』
って、剣児この野朗！何一番の見せ場を取りやがるんだ今畜生おお
おおおおおおおお！（激怒）

新たなる力　後編（後書き）

何とも下らない理由で戦う事になったマジンガーとジーグ
史上最強のスケベ対決
果たして勝つのは？
そして、多分剣児は朝日を拝む事は難しいだろう

過去編　4話　過去と敗北（前書き）

今回スバルを襲ったあの事件と、それからスバルを救ってくれた人物の話しがあります
そして、今回スバルはボロクソにされます
スバルファンの方々・・・すんません（土下座）

過去編　4話　過去と敗北

ゼノンは1人スバルが行きそうな場所を片っ端から探していた
夜の街中、海岸、魔神様の像の前等、以前スバルと共に来た場所を探していた
だが、何処に行ってもスバルの姿は見当たらなかった

「スバル・・・一体何処に行ったんだ?」

ゼノンの中に徐々に焦りの感情が浮んで来た
図らずも彼女を傷つけてしまった
そんな罪悪感がゼノンを苦しめているのだ
きっと、スバルは凄く傷ついただろう
あの時、スバルが居る事に自分が気づいていれば・・・嫌、今はそんな考えを起こすのは止そう
今自分がすべき事はスバルに会って謝る事だ
そうと決まれば急いで彼女を探さなければ
今宵は別に満月では無い
空には半分写った「半月」が空を照らしていた
機械の兵士は襲ってこない
彼等は彼等のルールがあり、何時も満月の時にしか現れないのだ
その為対策も練り易い
だが、それでも被害をゼロには出来ない
少なからず犠牲は出てしまうのだ
それがゼノンには辛かった
だが、スバルと共に戦うようになってから被害をほぼゼロにする事が出来た
何故なら彼女は機械の兵士を倒せる唯一の存在なのだ
だが、ゼノンは決してスバルの力が目当てで謝ろうとしているので

はない
彼女の中にある「誰かを救いたい」と言う心を感じ取り、それに共鳴したのだ
ふと、ゼノンの右肩に付けられていた刺青が異様に光り出した
ゼノンはその右肩を抑えながら膝を付く
顔は激痛に苦しむ顔になっていた

「ま・・・また・・・・これか・・・」

ゼノンは呟いた
この所頻繁に起こっている
この刺青は父曰く生まれた時から付いていたと言う
だが、ゼノンは知っていた
自分が本当の息子では無い事に
そしてゼノンは知っていた
自分が何者なのか・・・と、言う事を

「急ごう・・・」

フラフラした足取りの足に喝を入れて再び駆け出す
すると、遥か前方で巨大な機械の怪物が現れた

「あれは・・・まさか！」

ゼノンは戦慄した
それは以前ゼノンが戦いお互い深手を負ってそのまま決着が着かなかった相手でもあるのだ
そして、その怪物の周囲に青い閃光が見えた
それはゼノンも見覚えのある光であった

「まさか・・・スバル！」

そう思ったゼノンは先ほど以上に早く駆け出した

「駄目だ！スバル・・・戦っちゃ駄目だ！君じゃ・・・・君じゃ奴には勝てない！」

ゼノンが大声で叫びながら駆ける

間に合って欲しい

頼む、時間よ止まってくれ！

スバルを・・・スバルを殺さないでくれ！

＊＊＊

スバルの目の前では以前ミッドチルダで戦った機鋼獣ガラダブラが立っていた

だが、それが放つ威圧感はそれ以上であった

そして、何よりそのガラダブラは言葉を発したのだ

と言う事はこの敵は知能を有している事になる

「トリスタン、イゾルデ、お前達は下がっていろ！こいつとはこの俺と一対一でやりたい」

「フッ、良いだろう」

「期待してるわよん♪」

ガラダブラの要求を受けて二人は側に置いてあった浮遊する円盤に乗り上空に舞い上がった
邪魔者が居なくなった事で改めてガラダブラはスバルを見る

「娘よ、名は何と言う？」
「スバル・・・スバル・ナカジマです！」
「スバルか・・・良い名だ・・・覚えておこう」
「ど・・・どうも（汗」

明らかに何処か時代錯誤を感じられる発言にスバルは戸惑う
そんなスバルにガラダブラが指を指す

「光栄に思うが良い！貴様の目の前に居るのはこの偉大な勇者！「ガラダブラ」様なのだからなぁ！」
「偉大な勇者！？そんなの私は既に知ってるよ！」
「何？」
「私の知ってる偉大な勇者はお前みたいに弱い者虐めするような卑怯者じゃなかった！弱い人達を守る本当の勇者の様な人だったよ！」

スバルはまるで食い下がるかのような目でガラダブラを睨む
その発言にガラダブラは大声で笑った

「これは傑作だ！お前の知ってる偉大な勇者は弱い者を助けて英雄気取りをしているのか・・・舐めるな！」

途端に怒りの形相になったかと思うとガラダブラの拳が振り下ろされてきた
唸りを上げてまるで巨大な隕石が降ってくるかのような光景であった

「うわっと！」

こんな物を食らえば幾らバリアジャケットを身に纏っているとは言え一溜まりもない
そう思ったスバルは咄嗟に後ろに飛びのいた
そして、右手に装備されて居るリボルバーナックルに魔力を集めて稼動させる

「リボルバァァシュゥゥウト！」

集めた魔力を拳に集中させて放つ
それは青い閃光になってガラダブラの腕に当たる
だが、

「フン！」

ガラダブラはまるで蚊を叩き落とすかのように軽々とそれを弾き飛ばしてしまった
飛ばされた閃光はそのまま海に落ちて微かに水飛沫を上げる

「そんな・・・全然効いてないなんて・・・」

スバルの顔に驚きの色が浮ぶ
まさか其処まで自分の魔力が低下しているのだろうか
そう思っていると、再びガラダブラの拳が飛んできた
今度は真っ直ぐに振りぬかれた拳だ

「くっ・・・はぁぁ！」

スバルは咄嗟に上空にジャンプしてかわそうとする

だが、そんなスバルを何かが押さえつけるかのような感覚に襲われる

（嘘・・・デバイスが・・・重い・・・）

今まで紙切れか枝のような重さだったデバイスが突如鉄柱並の重さにまでなった感覚に襲われた
リボルバーナックルを装備した腕に至っては肘から下を動かす事すら出来ない
そんなスバルにガラダブラの拳が命中する

「くあああああああああああああ！」

叫びを上げてスバルが吹き飛ばされる
バリアジャケットの防御機能も殆ど役に立ってない
まるで只の薄っぺらい衣服だ
吹き飛ばされたスバルはそのまま数回バウンドした後うつ伏せで大地に倒れる
倒れた際に、スバルの頭の辺りからうっすらと血が流れる

「く・・・うぅぅ・・・」

スバルはゆっくりと倒れた体を起こす
たった一撃でかなりの痛手を受けてしまった
体の節々が悲鳴を上げている
マッハキャリバーをつけた両足とリボルバーナックルをつけた右腕がまるで言う事を効かない
それはまるで自分の体では無いような感じであった
それでも必死になって立ち上がる
額から流れる血が彼女の顔を汚す
頭に巻いていてた鉢巻の一部が血で赤く染まる

バリアジャケットも所々が擦り切れたり裂けたりしてボロボロの状態である

「フン、他愛ない・・・これが我等機械の兵士を葬ってきた戦士だと言うのか？・・・まるで歯ごたえが無い、これでは赤子の手を捻るより簡単だな」

ガラダブラはそんなスバルをあざ笑うかのように言う
それを聞いていたスバルは悔しさの余り唇を噛む
その拍子に口から血が流れる
それを動く左腕で拭い去ると再び構える
デバイスを装備した箇所が酷く重く感じるが決して動かせない程重くない
まだ動くなら動くまで戦うまで！
それが今のスバルの気持ちであった

「恐らく、今の状態じゃウィングロードも使えない・・・だったら！」

意を決したスバルは猛然とガラダブラに向かって駆け出した
鉛のように思いマッハキャリバーが大地に沈み込みスバルの足を殺していく
だが、それでも歯を食いしばって全力で大地を駆ける

「フン、遂に覚悟を決めたか！ならば！！」

ガラダブラは頭部に取り付けた鎌を取り外してそれでスバルに向かって切りつける
胴体から真っ二つにしようと横薙ぎに振るう
それは、スバルにとっては待ってましたと言うべき展開であった

「てえええええやあああああ！」

その場で両足を踏ん張って飛べるだけ飛び上がる
飛び上がった足の下を鎌が通り過ぎる
後数センチ高さが足りなかったら足首から下が持っていかれていた
筈だ
スバルは振り終わったガラダブラの腕に着地する
そしてそのまま頭部目指して腕を伝って走っていく

「ムッ、小癪な！」

そんなスバルを追い払おうと残っていた手でスバルに迫る
だが、スバルはこれをかわす
そして残る力を全て振り絞る思いで思い切り飛び上がる
それはガラダブラの顔面の真正面に来ていた

「私の残ってる魔力・・・全てこの一撃に賭ける！一撃ィィィ必倒ウゥゥゥゥ」

スバルが翳す左手の前に魔方陣が展開される
そして後ろに構えていたリボルバーナックルに青い閃光が集まっていく
そして、それを魔方陣に向けて放つ
それは青い閃光となってガラダブラに襲い掛かる

「ディバイィィィィィィン、バスタアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

スバルの叫びと爆発はほぼ同時であった

ガラダブラの頭部はスバルの放ったディバインバスターに呑まれ、
黒煙が覆い隠していた

「や・・・やった・・・」

残っていた力を振り絞って出した為スバルは意識を失う一歩手前状態であった
後はこのまま自由落下で海に落ちるだけである
だが、その時

「これで勝ったつもりか？・・・だとしたら、甘いな」
「え！？」

突如前方から声が聞こえた
そして、黒煙の中から煙を突き破って巨大な腕が現れたのだ
巨大な腕は力を失くし全く動けない状態のスバルを捉える

「あぐっ！」

完全に油断していた
この一撃で倒せる・・・もしくは深手を負わせられると思っていたからだ
だが、煙が晴れてくると、其処には全く無傷のガラダブラが居た
スバルの顔に絶望の色が浮ぶ
もう彼女に戦う力も無ければガラダブラの腕から逃れるだけの力も残っていないのだ

「フン！散々期待させておいてこの程度か・・・だが、あいつらからは生かして連れて来いといわれているのでな、命だけは助けてやるが五体満足では済まさんぞ」

そう言うとガラダブラの腕の力が強まっていく
メキメキとスバルの体が悲鳴を上げていく

「く・・・うあああああああああああああああああ！」

スバルが天を見上げて叫ぶ
腕の中ではリボルバーナックルに亀裂が入り、遂には砕けて腕から落ちてしまった
それはマッハキャリバーも同じであり、度重なる戦闘と今回の無理により限界を超えてしまい亀裂が大きくなり、砕けて落ちてしまった

「り・・・リボルバー・・・ナックル・・・・マッハ・・・キャリバー・・・」

スバルは自分の体から落ちていく二つのデバイスを見つめて呟く
その時、今度は更に腕の力が加わっていく

「うわあああああああああああああああああ！」
「自分の武器の心配をするとは、随分余裕なのだなぁ・・・ならばその余裕が二度と出来なくなるまで痛めつけてやるまでよ！」

そう言うとガラダブラはスバルを掴んでいた腕を思い切り地面に叩きつける
轟音と共に腕の周囲を猛烈な砂煙が襲う
その中では、スバルの悲鳴はかき消されてしまい全く聞こえてこなかった
そして、そのまま数メートルだろうか、地面に突き刺したままの腕を横に動かす
そして地面から抜き出すと、今度は切りだった崖にその腕を叩きつ

ける

「あぐ・・・・かはぁっ！」

叩きつけられた衝撃でスバルは口から血を吐き出す
そして、そのまま更に腕の力が強まっていく
今度は体中がメキメキと軋む音を立てていく
最早今のスバルには声を上げる事も出来ない状態であった
そして、薄れ行く意識の中でスバルは考えていた

（ティア・・・なのはさん・・・皆・・・私・・・頑張ったけど・・・やっぱり弱いままだったよ・・・・・私・・・あの人みたいに強くなりたかったのに・・・）

スバルは思い出した
かつて、自分を助けてくれた1人の男の事を

＊＊＊

それは、今から4年前の事であった
スバルは姉のギンガと共に父ゲンヤの居る陸戦部隊に遊びに行く途中の空港で火災に巻き込まれてしまったのだ
その火災の中で、スバルは1人逸れてしまい必死に父と姉を探していた

「お父さん・・・お姉ちゃん・・・何処？」

泣きながらも必死に炎の中を歩く
体のあちこちは炎の影響なのか所々煤こげていた
顔も黒く汚れており熱さと煙の煙たさが少女を更に苦しめていた
そんな時、突如目の前の壁が爆発してスバルは吹き飛ばされる

「きゃあああああああああああ！」

スバルは巨大な石像の前に倒れた

「うう・・・痛いよぉ・・・・嫌だよぉ・・・・帰りたいよぉ・・・」

恐怖と苦しさが限界に達し、スバルはその場で座り込んで泣き出してしまった
そんな時に、悪い事は重なって起こる物なのだろう
後ろにあった巨大な石像が限界を超えてスバルの居る方に倒れてきたのだ

「ヒッ！」

もう駄目だ・・・自分はもう死ぬのだ
幼いながらもそう思いスバルは頭を抱えて死を覚悟した
その時、

「うおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああ！」

突如男の叫びと共に凄まじい轟音が響いた

「え？」

驚きスバルは見上げた
其処には、柔道をやる際に着るであろうボロボロの胴着の上に黒羽織りを着て、背中には〇で囲まれた「竜」と書かれた文字を背負った大柄の男が今にもスバルを押し潰そうとしていた巨大な石像を蹴り壊してしまったのだ
その男は石像を蹴り壊した後地面に降り立つ
すると、

「いって～～～！やっぱ足は不味かったか～～」

と言って石像を蹴った足に必死に息を吹きかけていた
どうやら熱かったようだ
そして、熱が引くと男はスバルの方に歩み寄る

「おいガキ、大丈夫か？」
「お・・・叔父さん誰？」
「あぁ！叔父さんだぁ！」

スバルにそう言われた男は突如眉を顰めるとスバルの襟首を掴んで眼前まで持って来た
それにスバルは完全に怯える

「よぉく見ろ！俺はこう見えてもまだ３０だ！叔父さんじゃねぇ！」
「お兄さん」って言え！」
「は・・・はい・・・お・j・・・・お兄さん」

涙目になりながらもスバルは必死にそう言う
すると男は満足したのか笑顔になる

「よし、良い子だ！んじゃさっさとこっから出るか・・・此処じゃ熱くて適わんしな」

額の汗を拭って男は言う
だが、スバルは回りを見た
周りは明らかに火の海に囲まれている
恐らく出口など無い
なのにこの男の自信は何処からやってくるのだろうか

「お、お兄さん・・・何処から出るの？何処も火で通れないよ！」
「ヘン！そんなの決まってるだろう！横が駄目なら上から出りゃ良いんだよ」
「え？・・・上から！」

その発言にスバルは驚いた
天井と言ったってどう見ても並みの人間が飛んで届く距離では無い
普通の人間が飛んだってまず届かないだろう
なのに男は上から出ると言ったのだ

「おいガキ、しっかり捕まってろよ！」
「う、うん！」

スバルは必死に男の羽織りを掴んでしがみ付いた
それを見た男が数回軽くジャンプをすると、膝を思い切り曲げて

「おおおおおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああああ！」

と雄たけびを上げて飛び上がったのだ
その速さは凄まじく、まるで弾道ミサイルにしがみ付いている錯覚

さえ起こった
そして、そのまま男は天井を蹴り破った
瓦礫が舞い散り、その中から男とスバルは外に出た
スバルは男にしがみついたまま空を見上げた
空には満天の星空が広がっていた
それを見たスバルは不思議と目に涙が浮んだ
そして、下を見た
そしたら、今度は目一杯青ざめた
何と、下は大地が遥か下にあるのだ
ぱっと見て６０m位はある
普通の人間が落ちたらまず即死である

「お・・・お兄さん！お、落ちちゃうよぉ！」
「あぁ、うるせぇガキだなぁ・・・大丈夫だってこれ位の高さから落ちたって死にゃしねぇよ！」
「で、でも・・・でもでも」
「黙ってろ！舌噛むぞ！」

騒ぎ立てるスバルを黙らせて男は大地に降り立つ
轟音が響き男の足の周囲数メートルの巨大なクレーターが出来上がった
スバルはこれ程まで人間が頑丈に出来ているとは思えないと思った
そして、男を見ると、男の目にはうっすらと涙が滲んでいた

「い・・・いてぇ・・・やっぱり、ちと高すぎたか？」

どうやら痛かったらしい
そして痛む足を必死に振りながら火災現場から離れるとその場にスバルを下ろす

「これで大丈夫だろう?後は此処に居る連中に任せれば大丈夫だな」

そう言って男は立ち上がる
すると、スバルは突如泣き出してしまった
それを見た男が面倒臭そうに頭を掻く

「んだよ?折角助かったのに嬉しくないのか?」
「お兄さんって・・・強いんだね」
「は?」
「私・・・弱くて・・・ずっと・・・泣いてばかりだから・・・うぅ・・・・」

そう言ってスバルは大粒の涙を流す
それを見た男は溜息をつくとその場に片膝をついてスバルの頭を撫でる

「おいガキ、本当に強い奴ってのはなぁ・・・腕っ節が強い奴じゃねぇ、自分の弱さを知ってる奴を言うんだ」
「自分の・・・弱さを?」
「ああ、お前は自分の弱さを知ってる・・・だからお前は弱くねぇ!シャンと胸を張れ!それじゃ何時まで経っても泣き虫のベソガキのままだぞ」
「お兄さん・・・・うん!」

スバルは涙を拭って立ち上がる
それを見て男はニッと笑って立ち上がる

「もし、本当に強くなりたかったら、俺を尋ねな・・・そん時はみっちりしごいてやるよ」
「うん、有難うお兄さん・・・私ね、スバル・ナカジマって言うの・

・・お兄さんは？」
「あん、俺か？・・・俺は「流　竜馬」ってんだ！覚えときな！」
それが、あの時スバルを助けてくれたもう一人の流竜馬との出会いであった

＊＊＊

スバルの脳裏にあの時の思い出が浮ぶ

（竜馬さん・・・御免なさい・・・私・・・やっぱり弱いまま・・・だった・・・）

スバルの目の前に今まで知り合って来た多くの人達の姿が浮んでくる
機動六課のメンバー、ナンバーズ、異世界から来た甲児達、そして・・・

（ゼノン・・・）

最後にスバルの目に映ったのはこの世界に来て初めて出会った少年であり、自分にとても優しくしてくれて、そして、初めて「恋」と言う感情を抱いた人物であった

（ゼノン・・・・御免ね・・・謝れなくて・・・・本当に・・・・ごめん・・・ね・・・）

その思いを最後にスバルの意識はプツリと途切れてしまった

過去編　4話　過去と敗北（後書き）

いやぁ、相変わらずスバルは大変な目にあってるなぁ

スバル
「ねぇ、作者さんは私の事嫌いなの？」

それは違うなぁ、作者は好きなキャラにはとことん茨（いばら）の道を歩んで欲しいだけだよ。そうする事で益々そのキャラが輝くからねぇ

スバル
「って事は・・・この先私もっと苦労するの？」

おう！滅茶苦茶苦労するぞ！

スバル
「あうぅ・・・・（涙」

突然の乱入者！　前編（前書き）

激闘開始！

突然の乱入者！　前編

太平洋上の海域を低空飛行しながらゲットマシンが日本を目指していた
彼等は日本より外の国を偵察していたのだ
そんな時、日本に奴等が現れたと言う報せを聞き急ぎ戻って来ていたのだ
「急ぐぞ！隼人、弁慶」
先頭を飛行していたドラゴン号に乗った竜馬が言う
それに後ろに居た隼人と弁慶が一言返事して答える
そして、３人の前に日本の土地が見えて来た
間に合ってくれ、祈るようにそう思いながら竜馬はペダルを強く踏み込む
それに呼応してゲットマシンのスピードが上がる
だが、そんな３機のゲットマシンを上空から迎撃する物が居た
「何！」
「うお！」
「何だ！」
上空から突如攻撃された為３機は一斉に散らばる
そして、上空から攻撃してきた者を見た
それは、赤と白と黄色の三色に分かれた旧ゲットマシンであった
「ちっ、またお前達か！」
竜馬がウンザリした顔で言う
すると、そんな竜馬達にゲットマシンが語りかけてきた
『何故・・・俺達ハ生マレテ来タ・・・』
「またそれか！いい加減にしろ！」
苛立ちを感じ竜馬は怒鳴る
すると、目の前にあるモニターから映像が現れ、其処に映し出されたのは

「な、俺達だと！」
そう、其処に映っていたのは紛れも無く竜馬と隼人であった
だが、今映っている二人の目には生気が欠片も感じられない
まるで死人だ
そして、ベアー号に映し出された人物は
「む・・・武蔵！」
竜馬は呟いた
黄色い工事用を思わせるヘルメットに小型のゴーグル
剣道で使う胴の防具にマントを羽織り、背中にはダンビラを背負っていた
そして忘れもしないあの顔
それは間違いなくかつて共に戦った仲間「巴武蔵」であった
だが、その武蔵も同様に死人の様な目をしていた
「なんてこった・・・薄気味悪いぜ」
「リョウ！隼人、あいつは一体なんだ？」
弁慶が怒鳴る
「分からん、だが明らかに敵である事は確かだ！」
隼人が薄気味悪がりながら言う
『何故・・・オ前ガ居ルノダ・・・』
『何故・・・何故・・・』
『オ前達ハ・・・感情ガアルノダ・・・』
旧ゲットマシンに乗った竜馬、隼人、武蔵が死んだ目のまま言う
そして、３機のマシンは合体して赤いロボット「ゲッター１」になった
「くっ！行くぞ！隼人、弁慶！」
「「おう！」」
「チェェェェェンジ・ドラゴォォォン！」
竜馬が叫びチェンジレバーを押す
すると上からドラゴン、ライガー、ポセイドンの順に３機のゲットマシンが１体のロボット「ゲッタードラゴン」になった

「お前達が誰だかは知らないが向かって来るなら戦うまでだ！」
と言って竜馬は両肩から諸刃のトマホークを取り出す
それに反応して旧ゲッター1も同じように片刃のトマホークを取り出す
旧ゲッターとゲッタードラゴンが互いに海上で睨みあう
「けどよぉ、相手は旧ゲッターなんだろう？俺達ゲッタードラゴンに勝てる訳無いだろう！」
「弁慶！油断するな！相手は俺達自身なんだ！油断したらあの時のコピーゲッターのようになるぞ！」
隼人の言葉を聞き弁慶が青ざめる
そして弁慶の脳裏にあの時のコピーゲッターとの戦いが映し出される
「油断は出来ない・・・行くぞ！二人とも」
そう言って竜馬はトマホークを持って旧ゲッターに立ち向かう
旧ゲッターもトマホークを持って飛び掛る
2体のゲッターのトマホークが互いに空中でぶつかりあい閃光が舞い散る

＊＊＊

海鳴市に迫っていた大群・・・それはミマシとアマソの駆る邪魔大王国の軍勢であった
「なぁミマシぃ、何でこんな何も無い土地を攻撃するんだ？こんなとこ攻撃したって何も無いだろう？」
「フフフ、分かっていないなぁアマソ！この土地にはヒミカ様の求める力があるのだ！それを手に入れればこの世界はヒミカ様の物となるのだ」

「なぁ、そのヒミカ様の求める力って何だ？」
「詳しくは分からん、だが名前は確か「夜天の書」と言っていたぞ」
ミマシの言葉にアマソは頷く
「俺達はその持ち主から夜天の書を奪いそれをヒミカ様に謙譲するのだ」
「おお！ならばさっさとこんな土地ぶっ壊してそのヤッホウの書を奪おうぜ！」
「馬鹿！ヤッホウじゃなくて「夜天の書」だって言ってるだろうが！」
アマソのボケにミマシが突っ込む
「行けぃ！ハニワ幻神共！こんな町なんぞ瓦礫の山に変えてしまえぃ！」
ミマシが腕を振り上げて叫ぶ
「そうは行くか！」
そんなハニワ幻神達に突如雷光が襲い掛かる
「な、何だ！」
「今の雷って・・・もしかしてヒミカ様のか？」
「んな訳あるか！ヒミカ様が自分の作ったハニワ幻神をぶっ壊すと思うか？」
「そ、そりゃそうだ！んじゃ誰だ？」
ミマシとアマソは突如雷光を放った存在を見上げた
其処には夜の月の光に照らされて1体の黒い魔神が空に浮んでいた
「な、何だアイツは！」
「何処のどいつだか知らんが、お前達のその悪行！このグレートマジンガーが許さん！」
グレートがミマシとアマソを指差して言う
「何ぃ！俺様を指差して良いのはヒミカ様だけなんだぞぉ！それをてめぇ！ぶっ殺してやる！行けぃ！ハニワ幻神」
「あ、コラ！勝手に命令するな！」
ミマシを他所にアマソが命令すると、一斉にハニワ幻神が襲い掛かる

「フッ、数を頼りにした人海戦術か・・・そんな初歩的な戦法で俺を倒せると思うな！」
怒鳴りつけて鉄也がハニワ幻神の中に切り込む
「ダブルマジンガーブレェェド！」
グレートの両足から諸刃の剣を二本取り出し、それを掴み次々とハニワ幻神を切り倒していく
切られたハニワ幻神が上空からバラバラと残骸となって海に落ちていく
「な、何だあの野朗！中々強いじゃねぇか！」
「けっ、野朗！こうなったら行けぃ！ハニワ幻神メズラよ！」
ミマシが名を呼ぶと、突如虚空から巨大な馬のハニワ幻神がやってきた
それは猛スピードでグレートに向かってくる
「むっ！」
グレートもそれに気づき迎撃にと腹からネーブルミサイルを数発放つ
「ガオオオオオオオオオン！」
だが、メズラはネーブルミサイルを物ともせずグレートに体当たりを当てる
「グハッ！」
かなりの衝撃がコクピット内に居る鉄也に響く
衝撃で鉄也の頭が前後にグラングランと揺れる
そしてそのまま大地に落下する
「ギャハハハハ！見たかぁ！ハニワ幻神メズラの力をぉ！」
「おいアマソ！メズラを操ってるのは俺だ！勝手に自分の手柄にするな！」
「うるせぇ！てめぇだけ良いカッコさせる訳にはいかねぇんだよ！」
どうやら二人はかなり仲が悪いらしく終始アマソとミマシは互いに睨みあう
そんな中、落ちたグレートを追ってメズラは大地に降り立つ
その大きさはグレートと同等であった

「くっ、他のハニワ幻神に比べて中々力があるみたいだな・・・これは油断出来そうにないな」
そう言って鉄也は口から流れた血を拭ってメズラを睨む
鉄也のグレートとメズラが夜の街中で睨みあう

＊＊＊

甲児と剣児・・・マジンガーZと鋼鉄ジーグは激しく拳をぶつけあっていた
「うおおおおおおおおおおおおおおお！」
「どりゃあああああああああああああああ！」
2体の巨大なロボットが激しく拳をぶつけ合う
その光景は凄まじいの一言であった
だが、そのパイロット達の語りはと言うと・・・
「てめぇにオッパイは渡さねぇ！」
「そりゃコッチの台詞だあああああ！」
と言って今度はお互いの蹴りが火花を散らす
それからすぐにお互い距離を開ける
するとジーグは目の前で両手を合わせて構える
「食らえ！ナックルゥゥゥゥゥ・ボンバアアアアアアアアアアア！」
クロスした両拳がマジンガーに向かって飛んでいく
「ニャロウ！それは俺の十八番だろうが！ならこっちも！ロケットパアアアアンチ！」
それを迎え撃つようにマジンガーの両腕が飛んでいく
右腕はナックルボンバーとぶつかり合い弾け飛び上空に飛んで行く

そして今度は左腕とぶつかり合う
轟音と火花が舞い散り、そのままお互いはじけ飛び、そのまま目標に当たる
「ぐはっ！」
「げぇっ！」
お互いに鶏の首を握りつぶした声を上げて大地に倒れる
砂煙と轟音が舞い散る
だが、2体は何事も無かったように立ち上がり飛ばした腕を戻す
「やるじゃねぇか！兜甲児！！」
「てめぇこそな！草薙剣児！！」
お互いを褒めあう二人
その時の顔は共に笑っていた
只見ている分ならカッコイイシーンなのだが、如何せんパイロットの会話が場の空気を盛り下げる
その光景を見ていたシグナムは何処か複雑な感情に襲われていた
「だから何で私が賭けの対象になるんだ（涙」
そう、今二人が戦ってる理由は「勝った方がシグナムの胸を触る」と言うはっきり言って下らない理由で戦っていたのだ
それなのに目の前での戦いは凄まじいの一言であった
互いに力は互角！
技も互角であった
後はお互いの魂と度胸の差であった
「甲児さん！頑張って！」
「剣児！負けたら承知しねぇぞ！」
そんな二人の会話等聞こえていないのだろうかなのはとヴィータは声援を送っている
「お前等・・・今の剣児達の会話を聞いたら絶対軽蔑するぞ」
シグナムは呟くように言う
すると、すぐ隣から凄まじい殺気を感じた

「殺気！一体何処から・・・・」
殺気のした方を見た
それは、バルディッシュをハーケンフォームにして構えるフェイトであった
だが、目元が重く沈んでいる
「シグナム・・・甲児さんをたぶらかさないで下さい」
ボソリとそう呟いた
「ちょ、ちょっと待て！別に私はあいつをたぶらかした覚えは無いぞ！只アイツが勝手に・・・」
「問答無用！！」
額に青筋を浮かべてそのまま突っ込んできた
それをシグナムがレヴァンティンで受け止める
「くぅっ・・・話しを聞く気は無いと言う事か・・・」
明らかに目の前のフェイトは自分を「捕まえる」のでは無く「叩き潰す」のが目的のようであった
となれば手心を加えたら間違いなくこちらがやられる
覚悟を決めたシグナムがレヴァンティンを鞘から抜いて構える
「ならば、こちらも全力で行かせて貰う」
内心やっとシリアスな戦いに打ち込めると思ったシグナムであっただが、
「何で貴方はそんなに胸が大きいんですかあああああああああああ！（怒」
「お前もかあああああああああああああああああああああああ！（叫」
結局、此処でも胸で弄られる悲しい運命を持ったシグナムであった
視点を変えると、ヴィータとなのはが今度はにらみ合っていた
「前は一緒に戦ったけど・・・今回は敵同士だね」
「ああ、悪く思うな・・・これも闇の書の完成の為なんだ・・・邪魔するなら容赦しねぇ・・・この場でぶっ潰す！」

グラーフアイゼンを目の前に構えてヴィータは言う
なのはも同様にレイジングハートを構える
「じゃぁ、私が勝ったら・・・お話聞かせてね」
「てめぇが私に勝てたらな・・・行くぞ！」
ヴィータとなのはが互いにぶつかり合う
激しい火花が舞い散る
「くう・・・うぅぅぅ」
「この・・以前より強くなってるじゃねぇか！」
怒声の篭った声でなのはを弾き飛ばす
そして懐から数個の丸い弾を取り出し、それに魔力を込めてアイゼンで弾き飛ばす
飛ばされた魔力弾は一斉になのはの元へ向かっていく
だが、なのはは避けようとしない
それどころか、レイジングハートから無数の魔力弾が放たれた
「行って！アクセルシューター！」
なのはが放つ
その数はヴィータが放った魔力弾の倍はあった
「馬鹿かアイツ！あんな数を操りきれる訳ねぇだろうが！」
ヴィータが鼻で笑う
だが、それは訂正せねばならないだろう
何故ならなのはが放った魔力弾は全て彼女の思い通りに動きヴィータが放った魔力弾を全て撃ち落したのだ
「な、なにぃ！」
ヴィータは驚愕した
自分でさえあれだけの量の魔力弾を操るのはほぼ不可能なのだ
それをなのははあの若さでやってのけたのだから驚くのは無理は無い
「いっけえええええええ！」
なのはがレイジングハートを掲げて叫ぶ
すると周りに散っていたアクセルシューターが一斉にヴィータに向かっていく

「クッ！」
咄嗟にヴィータは自分を守るように赤い結界を張る
そんな結界に向かってアクセルシューターが一斉に襲い掛かる

町の下ではアルフとザフィーラが互いに拳をぶつけあっていた
「あんたも闇の書の主の使い間なのかい？」
「ベルカでは我等を使い魔とは言わん！主の盾「守護獣」だ！」
「似たようなもんだろうがあああああああ！！」
叫んでアルフは拳を繰り出す
それを鸚鵡(おうむ)返しの要領で拳を突き出す
ぶつかり合った拳が火花を散らし轟音が町に響き渡る

別の箇所ではユーノが結界の維持に力を注いでいた
その横でアリシアは退屈そうな顔をしていた
「ぶぅ・・・暇だよぉ・・・私も戦いたいよぉスケベフェレットォォ！」
「いい加減名前で呼んでって・・・それに君の使命は警護なんだからね」
「うっさい！もし私の可愛い妹(フェイト)やなのはにもしもの事があったらタンコブじゃ済まさないからね」
「何で僕なの（涙」
結界を維持しながらユーノは激しく涙を流していた

＊＊＊

海上ではゲッター同士の激しいぶつかり合いが起こっていた

「とあぁっ！」
ドラゴンの持っていたトマホークが旧ゲッターに降りかかる
だが、それを旧ゲッターが持っていたトマホークがぶつかり合う
凄まじい火花を散らす
ドラゴンは腕に力を込めて旧ゲッターを吹き飛ばそうとする
だが、吹き飛ばされたのはドラゴンであった
「な、なにぃ！」
吹き飛ばされた竜馬は驚愕の顔になった
本来なら有り得ない事だ
ゲッター線増幅炉のお陰で旧ゲッターの１０倍以上のパワーを持ったドラゴンがパワー負けしてしまうとは
「ならこれでどうだ！ゲッタァァァビイイイイイイイイイイム！」
ドラゴンの額から桜色の閃光が放たれる
それに対し旧ゲッターは胸のレンズから同じく桜色の閃光を放つ
放たれた閃光同士が空中でぶつかり合いプラズマ光を発する
最初は互角であったが、徐々にドラゴンが押され始めてきた
「くっ・・・まさかゲッタービームの威力ですら押し負けると言うのか！」
竜馬は苦虫を噛み潰す顔をしていた
そんな竜馬達に旧ゲッターは語りかける
『ナゼ・・・オレタチ・・・ハ・・・』
その声は何処か苦しそうであった
すると、旧ゲッターは自らの腹を引き裂いた
裂かれた腹からオイルが流れる
そして、裂いた腹に腕を入れて、中から緑色に輝く物体を取り出した
それは、ゲッターチームなら誰でも知ってる「ゲッター線炉心」であった
しかし、輝きの色が異常であった
強すぎるのだ！

実にドラゴンの何十倍も輝いていたのだ
そして、その炉心を掲げると握りつぶそうとする
「ま、不味いぞリョウ！あんな物を此処で握りつぶされたら・・・
海鳴市（このまち）は壊滅する！」
「お、おい！どうするんだよ！」
「くっ・・・こうなったら・・・やるしかない！」
意を決した竜馬はマッハウィングを展開して旧ゲッターに掴みかかる
そしてそのまま上空に飛び上がる
「こうなったら・・・せめて被害が出ないように少しでも高く飛ぶんだ！」
旧ゲッターを抱えたドラゴンは最高速度で大気圏を越えてグングンと高度を上げていた
『ナゼ・・・オマエハ・・・・エラバレタ・・・ンダ・・・』
旧ゲッターの竜馬がそう呟くと、持っていた炉心を握りつぶした
そして、凄まじい閃光が旧ゲッターとドラゴンを包み込んだ

突然の乱入者！　前編（後書き）

続く

突然の乱入者！　後編（前書き）

今回謎の仮面が現れる
そして、夜天の書には隠された別の機能があった・・・みたい？

突然の乱入者！　後編

本部内では、先ほどのゲッターの戦いの一部始終が映し出されていた
「エイミィ！ゲッタードラゴンの反応は？」
「だ・・・駄目です！完全にロストしてます！・・・破片も見当たりません！」
涙目になってエイミィが叫ぶ
それを聞いたリンディの顔に絶望の色が浮んだ
目の前には漆黒の宇宙空間が映し出されていた
其処は、つい数分前まで2体のゲッターロボが映し出されたのだ
だが、突如旧ゲッターが持っていた炉心を握りつぶした事により激しい閃光が2体を包み込み、閃光が晴れた時には其処に2体は居なかった
残骸があれば理由は分かるのだが、其処には残骸どころか破片一つ落ちていなかった
まるで初めから其処に何もなかったかのように
「一体・・・今の爆発は・・・」
リンディの隣でプレシアが呟いた
今まで見た事の内光であった
ゲッター線の輝き・・・それにしては余りにも強すぎる
もしあんな閃光の中に人間が居たら、一瞬の内に蒸発してしまうと、言う事は・・・ゲッターチームは・・・もう
「とにかく、今はこの事は伏せておいて！エイミィ、付近に飛ばされてないか入念にチェックを」
「りょ、了解！」
慌てる仕草でエイミィはキーボードを操作する
（お願い・・・無事でいて・・・）
祈るようにリンディは手を重ねて目を瞑った

＊＊＊

一方、海鳴市方面ではグレートマジンガーがハニワ幻神メズラと激闘を繰り広げていた
「このぉ！」
グレートが腕を突き出す。突き出した腕が猛スピードでメズラ目掛けて飛んでいく。だが、メズラはそれをサイドステップでかわす。そしてそのまま横からグレートに体当たりを当てる
「ぐっ！」
体当たりを食らったグレートがそのまま横に倒れる。幸い食らった箇所に目立った損傷はない。だがこのままくらい続ければ先にパイロット自身がまいってしまう
「くそぉ！」
操縦桿を握りグレートを起こす。口から流れる血を手の甲で拭ってメズラを睨む。メズラは最初馬形態だったのが、突如二歩足の人間形態に変化した
「ちっ、まだ隠し玉があったとはな」
舌打ちを含ませて鉄也は呟く
メズラは腕になった足を振り上げて猛然と襲い掛かる。グレートも迎え撃つかのように拳をぶつける
火花と轟音が響く。だが、衝撃で吹き飛んだのはグレートであった。パワーに差があったのだ
「ぐっ、まさかグレートがパワーで負けるとは・・・」
鉄也が苦悶の表情になる。恐らくこのハニワ幻神はかなり強い。油

断してたら恐らくやられるのはこちらだ
「だが、パワーだけが戦いを制すると思うな！」
倒れた機体を起こして鉄也は言う。そして腰の発射口から数発のネーブルミサイルを放つ
メズラはそれを両手を使って払いのける
払いのけた突如、メズラの胸部に向かって一筋の剣が投げられた。
グレートの投げたマジンガーブレードだ。投げつけられたマジンガーブレードはメズラの胸部を貫く
「グギャアアアアアアアアアアアア！」
胸部を貫かれたメズラが悲痛の叫びを上げる。その姿はとても痛々しかった
「時間は掛けん！これでトドメだ！」
グレートがそう言って上空に腕を上げて雷を呼ぶ。空から放たれた雷光はグレートの指に集まり、収束する。サンダーブレークだ
「食らえ！」
グレートの放ったサンダーブレークはメズラの胸に刺さった剣に当たる。凄まじい閃光がメズラを覆い潰す。そしてそのままメズラに刺さった剣を中心に雷光が集まりメズラは粉々に砕け散ってしまった
「どうだ！後はお前らだけだ！」
鉄也のグレートが上空に居るミマシとアマソに指を指す。その姿を見て二人は怒りの顔になる
「あの野朗！メズラを倒した位で良い気になりやがって！」
「どうするミマシぃ・・・もう手持ちのハニワ幻神無いぜぇ」
アマソが言う。もう幻魔要塞の周りにはハニワ幻神が一体もいなかった
「次はお前らだ！覚悟しろ！」
グレートが最後に残った幻魔要塞に向かって飛び掛る。そして拳を振り上げてたたきつけようとした。その時、突如衝撃が襲い掛かった
「ぐあっ」
衝撃の余り鉄也は声をだす。そしてそのまま大地に落下する。砂煙

と轟音が辺りに響く。一体何が起こったんだ?鉄也は自分に衝撃を与えた犯人を捜した。その時、突如グレートに青いバインドが掛けられる
「な!バインド・・・馬鹿な!マジンガーにバインドを掛けられる奴が居ると言うのか?」
有り得ない話である。マジンガークラスの大きさの相手にバインドをかけるには相当な魔力が必要だ。実際問題大魔力を誇るなのはやフェイトですらマジンガーにバインドを掛けるのは難しい。仮に掛けられたとしても力任せに破られるのがオチだ。だが、このバインドは幾ら力を込めても全く微動だにしなかった。それどころか徐々にグレートを締め上げてきたのだ
「ぐぅ・・・こんな強いバインドを掛けられる奴が・・・居るのか?・・・」
犯人を捜して鉄也は周りを見回した。すると、上空に白い仮面を被った男が浮んでいた。その男の床には魔方陣が敷かれている所を見るに奴がグレートにバインドを掛けている事に間違いはなかった
「お、おい・・・何だアイツは・・・」
「ミマシぃ!アイツお前の仲間かぁ?」
どうやらミマシとアマソも知らない存在らしく仮面の男に疑いの眼差しを向ける。すると仮面の男はミマシ達の方を向く
「行け、今は1人でも多く手駒が欲しい・・・此処は俺に任せてお前らは戦力を整えろ」
仮面の男は言った。ミマシとアマソは互いを見合う
「どうする?ミマシぃ」
「どうするもこうするも決まってるだろう!こうなったら逃げるが勝ちだ!さっさとずらかれ」
ミマシは部下に指示を送り前線から避難を開始した
「ま、待て!」
バインドを張られたままグレートは立ち上がる。そんなグレートの前に仮面の男が現れる

「お前の相手は俺だ」
そう言って仮面の男はグレートの顔に蹴りを放つ。蹴られたグレートは後方に弾き飛ばされる
「ぐおっ！」
そのままグレートは大地に倒れる。倒れたグレートに向かって仮面の男が手を翳す
「さて、噂の偉大な勇者・・・どれだけ保つか実験させて貰おうか」
仮面の男が翳した手を徐々に握り始める。するとグレートに掛けられたバインドが徐々に締まりだした。グレートの装甲に亀裂は入る
「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお！」
鉄也が悲痛の叫びを上げる
「フハハハハハ！どうやらこの時代の魔神はこの程度の力しか無いのだな！ならばそのままガラクタにしてやろう！」
そう言って仮面の男が手を握りつぶそうとした時、
「むっ！」
仮面の男はふと別の方向を見た。すると其処には巨大な半月刀が飛んできた。仮面の男はバックステップで回避する
「鉄也くん！無事か？」
「その・・・声は！」
鉄也は上空を見た。其処にはスペイザーから分離したグレンダイザーが降り立っていた
「動かないで！バインドを断つから」
グレンダイザーはダブルハーケンを持ってグレートを拘束していたバインドを断ち切った。拘束を断ち切られた事によりグレートは立ち上がる
「すまない、大介君、助かった」
「鉄也君・・・あの仮面の男は一体何者何だ」
「俺にも分からん・・・だが、敵であるのは確かだ」
グレートとダイザーは仮面の男を見る。仮面の男は突然の乱入者に不機嫌な顔をする

「邪魔が入ったか・・・まぁいい・・・後は任せるとしよう」
そう言うと仮面の男は突如霧の様に消え去ってしまった
「逃げられたか・・・くっ！」
「鉄也君！」
グレートはその場で肩膝を付く。そんなグレートにダイザーは肩を貸す
「鉄也君・・・やはり君も来ていたのか」
「大介君・・・君は今・・・やはり彼女の元に居るのか？」
鉄也の問いに大介は頷く
「僕は今、はやてちゃんの元に居る・・・そして、シグナムさん達が蒐集をしているには・・・訳があるんだ」
「訳・・・聞かせてくれるか？大介君」

＊＊＊

「うわぁ、すずかちゃんとこの猫って皆良い子なんやなぁ」
その頃、はやては友達のすずかの家で猫と戯れていた
「御免ね、はやてちゃん、突然呼び出しちゃったりしちゃって・・・予定とか無かった？」
「平気やで、家はちゃんとご飯の用意は済ましてるからいざって時は皆勝手に食ってくれると思とるし」
「そうなんだ」
そんなたわいない会話をしながら二人は今の時を楽しんでいた
だが、そんな二人を見下ろす異形の者が居た。それは、屋根の上に

居た
「ヒッヒッヒッヒ・・・あれが夜天の書の主か・・・まだガキだな」
その姿は原型をとどめて居らず、体中には無数の目があった
「あんなガキ、この「妖獣グモ」様が一撃の元に殺してやる」
そう言ってグモは自分の体から鋭利に尖った刃物を生成する。そして、それを放とうとした時
「若い女の子のプライベートを覗くとは、デーモンでもエチケットは守るもんだぜ」
「何！」
突如後ろから声がしたのにグモは驚いた。気づかなかった。まさか此処まで接近を許してしまうとは。そう思って振り返ると、其処には人間状態の明が居た
「貴様・・・不動明！」
「どう言う理由でその子を狙うかは聞かねぇが、てめぇらの好き勝手にはさせねぇよ！」
明はそう言うと額から光線を放った。グモは体を分離させて光線をかわし、飛行形態になってその場から離れる。だが、それを明が見逃す筈が無い
「今度こそてめぇらの目的を教えてもらうぞ！デェェビイイイイイイル！」
明は叫びデビルマンに変身する。そして背中からデビルウィングを生やしてグモを追いかける
「グゲゲ・・・相変わらずしつこい奴だぜ」
「言っただろう！俺はデーモンハンターだぜ！てめぇらを皆殺しにするのが俺の使命なんだ！分かったらさっさと覚悟を決めやがれ！」
デビルマンはベルトからデビルカッターを放つ。だが、グモはそれをかわす
「ゲゲ、冗談じゃねぇや！折角蘇ったってのにまた殺されて溜まるかってんだ！」
「やはりな、教えろ！お前らを蘇らせたのは誰だ！」

デビルマンが問う。だが、グモは未だに逃走を続ける。それに業を煮やしたデビルマンが翼からデビルビームを放つ。デビルビームを食らったグモは半分に分離してしまう
「ゲギャァ！」
「さぁ、いい加減お前らを蘇らせた奴の名を言え！」
デビルマンが弱ったグモを捕まえようとした時、突如雷光がデビルマンを襲う
「ぐわっ！」
雷光はデビルマンを貫きそのまま大地に叩きつけられる。ズシンと衝撃が響き渡りデビルマンが落下した周囲に小さなクレーターが出来た
「ガハッ・・・な・・・何だ・・・この力は・・・」
口から血を吐いてデビルマンは空を見上げる。すると、其処には長い杖を持った妖艶な魔道士が居た
「ホホホホホ、わらわの雷を食らってまだ息があるとは・・・中々見上げた者よのぉ」
魔道士はそう言って声高らかに笑う。デビルマンはフラフラした足取りで起き上がる
「て・・・てめぇ・・・一体何者だ！」
胸を抑えながらデビルマンが魔道士を睨む。それに対し魔道士が妖艶に笑いながら答える
「フフフ、冥土の土産に教えてやるわ、我が名は邪魔大王国女帝ヒミカ・・・こいつらデーモンを蘇らせたのはこの私なのだ」
「なん・・・だと・・・」
薄れ行く意識の中でデビルマンは答える
「今宵はこれ位で去るとしよう・・・だが、次に現れる時は・・・容赦はせんぞぉ・・・不動明・・・嫌、デビルマンよ」
そう言うとヒミカは霧の如く消え去った
「ま・・・待て・・・ぐぅ・・・」
追いかけようとするが、デビルマンの体に痛みが走る。胸から止め

処なく出血していた。肩膝を付き、変身が解かれ、デビルマンから不動明に戻ってしまった
「ちく・・・しょう・・・」
一言そう言って不動明は意識を失いその場に倒れた

＊＊＊

結界内では未だにマジンガーZと鋼鉄ジーグの激しい戦いが繰り広げられていた
「の野朗！いい加減くたばりやがれ！」
ジーグがZに向かって飛び蹴りを放つ。それをZが両腕を使って足を掴む
「おりゃぁ！」
そのままZはジーグをビル街に投げ飛ばす。本来ならそんな事は出来ないが今は封鎖結界の中なので好きに暴れられるのだ。投げ飛ばされたジーグの箇所に煙が舞い散る
「ならこれならどうだ！マグネットロオオオプ！」
立ち上がったジーグの胸から6本の光のロープが放たれる。それはZの首、両腕、胴に絡みつく
「何！」
「どおおおおおおおりゃあああああああ！」
そのままロープを掴んでZを持ち上げるとさっきと同じようにマジンガーをビル街に投げ飛ばす。今度はZが砂煙を舞い散らせる

「へへ、もうくたばっただろう？」
倒したと思ったジーグ。だが、ロープを戻そうとした時、そのロープを何かが引っ張るのを感じた。そして、砂煙が晴れると、其処にはマグネットロープを掴んでいたマジンガーが居た
「にゃろう！パワーなら負けねぇぞおおおお！」
「上等だ！根競べで勝負だあああああああ！」
同様にジーグもロープを掴んで引っ張る。お互いが引っ張り合う。ロープがギリギリと音を立ててピンと張り合ってる
兜甲児と草薙剣児・・・マジンガーZと鋼鉄ジーグ・・・魔神と鋼鉄神の意地と意地のぶつかり合いが展開していた

フェイトとシグナムが互いのデバイスを用いて互角の戦いを演じていた。シグナムがレヴァンティンを振るえばフェイトがバルディッシュをふるってそれを防ぐ
「はあああああああああああああ！」
「たあああああああああああああ！」
逆にフェイトがバルディッシュで攻撃すると、シグナムがレヴァンティンでそれを防ぐ。側から見れば互角の凄まじい戦いなのだが、二人の話している言葉がミスマッチしていた。何を話していたかと言うと
「シグナム！甲児さんをたぶらかすのなら容赦はしない！」
「おい！何時私があのドスケベで変なもみあげをした単細胞をたぶらかしたんだ！」

ブチッ

「甲児さんの・・・悪口を言うなあああああああああああああ！」
額にこれでもかと青筋を浮かべたフェイトがバルディッシュのハーケンセイバーを構えて突撃してきた。その速度は以前の倍以上であ

った。それにシグナムは驚く
（何故だ・・・テスタロッサが突然力を増して来たのは一体・・・
まさか、人間は「恋」をすると強くなるのか？・・・それとも、あ
の兜甲児は私達を強くする何かを持ってると言うのか？）
シグナムはフェイトと戦いながらもマジンガーに乗っている甲児を
見た
甲児は今マジンガーに乗ってジーグと激しい攻防を行っていた
理由はどうであれ、あの鋼鉄ジーグと互角に渡り合えるのを見るに
マジンガーZは相当な力を持っていると予測出来る
だが、やはりあの理由はどうにかして欲しい物だ
そうシグナムは思えた
（あれさえ無ければ尊敬出来るのだがなぁ・・・（汗）

ヴィータとなのはは互いの魔力弾を放ち合っていた
「てめぇ！カードリッジを組み込んだだけで魔力コントロール出来
るなんて・・・一体どんな裏技使ったんだよぉ！」
「私1人の力じゃない！甲児さんや鉄也さん達が力を貸してくれた
から・・・だから私はコントロール出来るの！」
なのはは自信を持って言った
そしてレイジングハートから6発の魔力弾を放つ
それを迎え撃つかのようにヴィータも6発の魔力弾を放つ
互いに撃った魔力弾は空中でぶつかり合う
ぶつかり合った魔力弾が激しい閃光と轟音を放つ
「何でだろうな・・・こんな出会い方してなかったら・・・きっと
話が会う良い奴だったんだろうな」
「でも、今からでも間に合うよ」
魔力弾を打ちながらもなのはは必死にヴィータに説得を試みる
だが、ヴィータは
「だけど、こっちにだって退けない理由があるんだ！」
そう言ってヴィータはグラーフアイゼンを振り上げてなのはに襲い

掛かる
なのははそれをレイジングハートで受け止める
「邪魔するなら・・・容赦しねぇ！」
「それじゃ、絶対に勝って話しを聞かせて貰うからね！」
一旦二人が距離を離すと再び魔力弾を放ちあう
その力は互角であった。それは、互いの想いも同じであった

アルフとザフィーラは低空飛行しながら激しい攻防を繰り返していた
「うおおおおおおおおおお！」
「ぐうぅっ！」
アルフの鉄拳をザフィーラは腕をクロスして防ぐ
そのままチラリと戦況を見た
（ジーグも、ヴィータとシグナムも苦戦中か・・・これは急がないと不味いな）
一目で戦況が不利と判断したザフィーラは結界の外にいるシャマルに念話を送る
≪シャマル！そちらで封鎖結界を敗れるか？≫
≪駄目、ヴィータちゃんかシグナムクラスの魔力じゃなきゃ敗れない≫
シャマルは返す
彼女の前には分厚い封鎖結界が立ち塞がっていた
本来治療や補助が主なシャマルにはとても敗れそうも無い厚さである
≪仕方ない・・・闇の書の力を使え≫
≪でも、そんな事をしたら！ページが・・・ハッ！≫
≪シャマル・・・どうした！シャマル！≫
突如シャマルの念話が途切れた事に疑問を抱きザフィーラは叫ぶ
だが、シャマルは返せなかった
何故なら、後ろからクロノが自身のデバイスの切っ先をシャマルの後ろ首に近づけていたからだ
「余りこんな事はしたくないんだが・・・大人しくすれば危害は加

えない・・・詳しい事情を聞かせてくれないか？」
クロノがシャマルに投降を勧めるように言う
こうなってしまっては、最早シャマルには打つ手が無い
バインドや攻撃もワンテンポクロノより遅れてしまうのだ
自分が動こうとする前にクロノの砲撃がシャマルを襲うだろう
シャマルがそう思って諦めた時、突如何かが空を切った
「がはっ！」
そして、後ろでデバイスを構えていたクロノを蹴り飛ばしてしまったのだ
「え？」
振り返ると、其処には白い仮面を付けた男が居た
「使え」
「え？」
「仲間が居なくなっては蒐集出来ないだろう・・・失ったページはまた集めれば良い」
仮面の男はそう言ってクロノの方に向かった
時間を稼ぐと言うのだろう
それを見たシャマルが封鎖結界の方を向く

＊＊＊

≪皆聞いて！今から闇の書の力を使うから安全な場所に避難して！≫
シャマルがシグナム達に念話で伝える
「あれを使うのか・・・剣児！」

「あぁ？何だシグナムさん！」
シグナムはジーグを見た
ジーグは今ロープを切り離してマジンガーと腕で組み合って力比べをしていた
「今から闇の書を使う！安全な場所に避難しろ！」
「はぁ？闇の書を使うだってぇ！おい、そうなったらページはどうなるんだよ！」
「多少は減るが仕方ない・・・今は脱出が先だ！」
「冗談じゃねぇ！俺の苦労を水の泡にして溜まるか！」
そう言ってジーグは両足を振り上げてZを蹴り飛ばす
「げほっ！」
蹴り飛ばされた甲児が悲痛の声を上げて吹き飛ぶ
晴れて自由になった剣児は上空に居るビックシューターを見る
「つばき！マッハドリルだ！」
「え？マッハドリル？何で」
「つべこべ言ってんじゃねぇ！さっさと出せ！」
「わ、分かったわよ！」
何を焦っているのだろう
そう思いながらつばきはマッハドリルの射出準備を行う
「シグナム！シャマルさんに闇の書の使用はもう少し待ってくれるように言ってくれ！」
「何、どうするつもりだ！」
「まぁ任しておけって！」
親指を突き出して剣児は言う
すると、ジーグの後方にビックシューターが下降してきた
「行くよ！剣児・・・マッハドリルセットアップ！・・・シュウウウウウウウト！」
つばきがレバーを操作して、ビックシューターから巨大な2本のドリルが放たれた
それをジーグが両腕を外してドッキングする

「な、何だあれは？」
「巨大な・・・ドリル・・・」
それを見ていたシグナムとフェイトは驚く
そしてそのままジーグは封鎖結界に向かう
「必殺、ドリルアタアアアアアアアアアアック！」
両腕に装着されたドリルを高速回転させて結界に突っ込んでいく
結界とドリルの切っ先がぶつかり合い、激しく火花を散らす

ピシッ

ドリルの当たっている箇所を中心に結界に徐々にヒビが入る
そして、それは瞬く間に広がり、やがて音を立てて結界を砕いてしまった
「うっしゃあああああああああああああああああああ！」
剣児が腕を振り上げて歓喜の声を上げる
「す・・・凄い・・・あの結界を破るなんて・・・これがジーグの強さ・・・」
シャマルが驚きの目で見る
それは、なのは達も同じであった

「何て無茶苦茶な方法で破るんだ！」
ユーノが驚愕の顔で見ていた
魔法結界を張っていたとしてもまさかあんな方法で破るとは思えなかったのだ
「こらぁスケベフェレット！何やってんのよ！ちゃんと守ってなさいよ！」
「僕もちゃんとやってたんだよ！それと、いい加減名前で呼んでよ！」
涙目でユーノは叫ぶ

「どうやら勝負は先送りになったな」
「シグナム！」
結界が破られた事によりシグナムはフェイトとの戦いを一旦切り上げる
だが、フェイトはそれを追おうとする
が、その時エイミィからの衝撃的通信を聞いたせいで、全員が固まってしまった

「甲児！次は絶対決着をつけてやるからな！」
「上等だ！首を洗って待ってやがれ！」
甲児と剣児がそう言い合う
ジーグはそう言った後、踵を返して戦場から離れた
「畜生！空さえ飛べれば追いかけられるってのによぉ！」
甲児は歯噛みしていた
そんな時、
『甲児さん！聞こえますか？』
「エイミィちゃんか？一体どうしたんだ！」

＊＊＊

鉄也と大介は機体に乗って話しを聞いていた
「それじゃ、あの夜天の書がある限り、はやては近い内に死んでしまうと言うのか？」

「そうなんだ・・・だが、それを防ぐ手立てがある」
「それが・・・魔力の蒐集か？」
「嫌、違う！」
大介の言葉に鉄也は眉を顰める
「どういう事だ？」
「実は、以前僕は夜天の書に触れた事があったんだ」

【回想】

それは剣児が夜天の書に触れて異変を感じた後であった
「にしても変だよなぁ、何で剣児が触れただけでページが６０ページも埋まるんだろうな？」
ヴィータが夜天の書を見て呟いていた
「それは我々にも分からん、一体この夜天の書にはどんな機能が備わっているんだろうか？」
ザフィーラは夜天の書を見て呟いていた
この夜天の書には未だに謎が多い部分が存在している
それは守護騎士であるヴォルケンリッター達にも分からない物であった
「それで、剣児には何か異常は無かったのか？」
「それがよぉ、アイツあの後「腹減った～」って言っていきなりザフィーラの尻尾に齧りついたんだぜぇ」
「ああ、あの時は死ぬ程痛かったぞ」
ザフィーラはそう言って自分の尻を見せる
其処には巨大な歯型が刻まれていた
恐らく剣児の歯型だろう
すると、大介がやってくる
「皆・・・大丈夫かい？」
「ああ、剣児に噛まれた跡以外は大丈夫だ」

「噛まれた？」
大介は首を傾げた
そしてザフィーラは大介にまた尻を見せた
それを見て大介は納得した
「だ、大丈夫かい？ザフィーラ」
「大丈夫じゃない・・・かなり痛いぞ」
「そ、そうなんだ・・・」
額に汗を垂らして苦笑いを浮かべる
そして、大介は夜天の書を見る
「なぁ、大介」
「ん？なんだい、ヴィータちゃん」
「ちょっと、この夜天の書に触れてみてくれないか？」
「・・・分かった」
ヴィータの問いに頷き大介はそっと夜天の書に触れる
夜天の書に大介の手がそっと乗せられる
すると、凄まじい閃光が放たれ辺りを照らす
「こ・・・この反応は！」
「おい、これって・・・あの時と同じじゃねぇか！」
ザフィーラとヴィータはその光景に剣児の時を重ねていた
そして、光が晴れると、其処には何も変わっていない大介とページ数が増した夜天の書があった
「だ、大介！何とも無いか？」
「あ、ああ・・・僕は何とも無い・・・けど・・・一体何故？」
大介は何故自分や剣児に夜天の書が反応するのか疑問を抱いていた

【回想終】
「そんな事があったのか」
大介の話しを聞いて鉄也が驚きの声を上げた

「ああ、恐らくあの夜天の書には、以前僕達が見た壁画の他に、もう一つ何か強大な物が隠されていると思うんだ・・・そして、それを起動させるには、僕達魔神を操る者が触れるのが条件のようなんだ」
「成る程な・・・で、それをシグナム達に言うのか？」
「そうだね、一刻も早くこんな不毛な戦いを終らせたいし・・・そっちも上手く話してくれないか？」
「ああ、任せておけ」
鉄也は頷いた
「それじゃ、僕は一旦はやてちゃんの家に戻るよ、あんまり開け過ぎると彼女が心配しちゃうからね」
「ああ、お互い気を付けないとな」
「それじゃ・・・ダイザージャンプ！」
大介の乗ったグレンダイザーが空高く舞い上がる
そして上空を飛行していたスペイザーと合わさる
「スペイザークロォォス！」
スペイザーとクロスしたダイザーが高度を上げてグレートから遠ざかっていった
（夜天の書・・・恐らく、俺達が思っている以上に厄介な物なのだろうな・・・）
鉄也が顎に手をやって考え込んでいた
その時、
『鉄也さん！聞こえますか！』
「エイミィか？どうした、そんなに慌てて？」
突如通信が入ったのだが、エイミィの慌てように鉄也は首を傾げる
『落ち着いて聞いてください・・・実は・・・』

＊＊＊

剣児達は帰路に向かっていた
因みに剣児は既にジーグパーツを片付けており雷鋼馬もビックシューターの中に格納してある
「草薙剣児・・・」
「おう、何だ?シグナムさん」
「お前にまだ・・・話してなかったな・・・何故我々が夜天の書の蒐集をするのかを」
「そういや聞いてなかったなぁ・・・何でだ?」
「夜天の書が、もし魔力を蒐集されなかった場合、主の魔力を奪う・・・そして、最終的に主の・・・命を奪う!」
「な!何だそりゃ!」
剣児の顔が驚愕の色に染まる
恐らく知らなかったのだろう
そして初めて事実を知った時剣児は自分の拳を壁に叩きつけた
「け、剣児?」
「畜生・・・そんな辛い事があったのかよ・・・なのに俺は・・・ふざけ半分で戦ってたってのか・・・くそぉ!」
剣児は叫んで再び拳を叩きつける
叩き付けた拳から血が流れる
「シグナムさん・・・俺も蒐集を手伝うぜ!」
「剣児・・・お前・・・」
「夜天だか何だか知らねぇが、そんなのではやての命を奪うなんざさせねぇ!俺が絶対守ってやる!」
剣児が腕を目の前で叩きつけて言った
これを起に草薙剣児はロストロギア専門で蒐集を行う事を皆に宣言した

＊＊＊

「そんな・・・嘘だよねぇ・・・エイミィさん!嘘だって言ってよぉ!」

アリシアがエイミィの肩を掴んで言った

「アリシアちゃん・・・辛いかも知れないけど・・・事実なんだよ」

エイミィが暗い顔で言う

周りに居た甲児達も同様に信じられないと言った顔をしていた

「嘘だろう・・・ゲッターロボが・・・竜馬達がやられるなんて・・・マジなのかよ!」

そう、先ほどエイミィから通信があった内容は、「ゲッターロボが消滅した」との報告であった

それを聞いた甲児達はすっ飛んで戻ってきたのだ

「これが、先ほどの映像です」

そう言って映し出されたのは、ゲッタードラゴンが旧ゲッターを抱えて宇宙に上がり、そして凄まじい閃光がゲッターを包み込む光景が映っていた

そして、閃光が晴れると、其処には何も残っては居なかった

「これが・・・つい先ほど映し出された映像です」

「そんな・・・りょ・・・竜馬さん・・・」

「嘘だろう・・・リョウ君・・・」

一同が信じられないと言った顔になった

だが、これが現実なのだ

ゲッターロボが・・・この世界から完全に消え去ったと言うのだ

ゲッタードラゴンが居なくなった事により戦力は大きく減少する事
になったのは事実である
今まで以上に厳しい戦いが予想出来るのは容易であった

突然の乱入者　　終

次回予告

甲児
ゲッターチームを失った俺達に休む時間何てない
今度は本局の武装局員が廃棄された地下鉄で動き回るシグナムたち
を見つけた
だが、其処には別の強大な敵が潜んでいた
上等だ！どんな奴だろうと俺達が叩き潰してやる
だけど、そいつの体には・・・

次回「兄と妹」

次回もこの小説にテイィィィィクオォォォォォォォフ！

突然の乱入者！　後編（後書き）

果たして夜天の書に隠された別のシステムとは一体・・・

長編外伝　もしＤＹＮＡＭＩＣの博士が原作の博士と出会ったら？（前書き）

何か急に書きたくなったので書く事にしました

長編外伝　もしＤＹＮＡＭＩＣの博士が原作の博士と出会ったら？

今回も今回で兜十蔵が何やらおかしい発明をしていた
そして、その隣では何時もの様にジェイル・スカリエッティ博士（兜剣造）が椅子に括りつけられていた
「いよっしゃぁ！遂に完成したぞぃ！」
「それで・・・また私が実験台ですか？お父さん（涙」
椅子に縛られたジェイル博士が涙して聞く
「ＯＨ、ＹＥＳ！安心して逝って来い！」
親指を立てて満面の笑みで叫ぶ十蔵
「安心して行けるかあああああああああ！。ってか何気に漢字が違ってるぞおおおおおおおおおお！」
滝のように涙を流して叫ぶ
さて、気になる今回の発明品はと言うと、何やら巨大なメーザー砲を思わせる兵器であった
「因みに・・・何ですか？それは・・・（汗」
「フフフ、良く聞いてくれた！これこそワシが開発した「テレポート装置」じゃあああああああああああ！」
十蔵がこれまたマッドっぽく叫ぶ
それを聞いてジェイル博士は少しホッとする
（どうやら少しはマトモな発明なようだな）
内心少し安心していた
何時ものように姿を変えたり原子分解させるようなとんでもない発明では無い事なので安心していた
すると、突如ジェイル博士の肩に十蔵が乗る
「うっしゃぁ！んじゃ早速女湯にテレポートするぞぃ！」
「って、！結局その為に使うんかいいい

そんな博士の事などアウトオブ眼中な感じでスイッチを押す
すると目の前の装置が起動し、眩しい閃光が二人を包み込んだ

＊＊＊

此処は何処かの研究室
その一室で1人の科学者が不気味な笑みを浮かべていた
「フフフ、遂に手に入れたぞ！聖王のマテリアルを・・・これであとはマテリアルにレリックを埋め込めば・・・私の野望は完成する！見ておれ、愚かな人間共よ！この世界を混乱と絶望に彩ってくれるわ！」
紫の髪をして白衣を着こなした科学者「ジェイル・スカリエッティ」が声高らかに笑った
その時、突如彼の上空に閃光が起こった
「む？何だ」
異変に気づき上を向いたスカリエッティ博士。その先には
「「どわあああああああああああああああああああ！」」
「な、なにぃ！・・・あれは、私だとぉ！」
突然上空から自分そっくりな人間が降ってきた事に驚いたジェイル。
そんな彼に落ちて来た二人はぶつかった

ズシーーーン

大きな音を立てて3人はぶつかった

「いてて・・・何処じゃ此処は？」
「お・・・お父さん・・・また変な発明をぉ・・・」
フラフラとした足取りで十蔵と剣造は起き上がった
「き・・・君達は一体何者だ！どうやって此処に入ってきた！」
頭にタンコブを作ったジェイル博士が二人を指差す。そんなジェイルを見た十蔵は
「あん？何じゃ剣造、そのタンコブは？」
「け、剣造？私はジェイル・スカリエッティと言う名前がある！そんな名前では無い！」
「お父さん、剣造は私です（汗」
そう言って互いが言い会う、そして互いを見合うすると
「「な、何で私が二人居るんだあああああああああああああああああああああああ！」」
と、絶叫してしまった

今回は此処まで

長編外伝　もしＤＹＮＡＭＩＣの博士が原作の博士と出会ったら？（後書き）

この先どうしよう（汗）

過去編　5話　決断・・・そして、伝説の幕開け（前書き）

今回ゼノンの正体が明らかになる
そして、蘇るは神の魔神

過去編　5話　決断・・・そして、伝説の幕開け

勇者ガラダブラは拍子抜けした顔をしていた
今まで数多くの神々の兵士を葬ってきた憎き敵がこの程度の力しか持って無かったからだ

「フン、どうやら俺が出るまでも無かったようだな・・・このような脆弱な小娘にやられるとは、今までの神々の兵士が弱すぎたのだろう」

そう言ってガラダブラは鼻で笑った
その腕にはデバイスを破壊され、バリアジャケットも体も傷つきボロボロになり意識を失ったスバルが居た
このままトドメを刺しても良かったのだが、トリスタンとイゾルデに生かしたまま連れて来いと言われているのでとりあえずこのままにしておく事にした
それにしても

「奴等も物好きなものだ・・・こんな小娘の何処に使い道があるのか？到底理解出来んな」
「それはそうだろう」
「む！」

上方から声が聞こえた
見上げると上方からトリスタンとイゾルデが降下してきた
トリスタンは腕を組んでにやけており、イゾルデは妖艶な笑みを浮かべていた

「流石は勇者ガラダブラ・・・多くの神々の兵士を倒した忌々しい

奴をこうもあっさり倒してしまうとは・・・」
「フン、今までの奴等が弱すぎただけだ」

ガラダブラはそう言うと手を開く
意識の無いスバルはその腕の中で倒れた
そんなスバルの両手と足を紫色のバインドが拘束してそのままイゾルデの方に連れて行く
丁度両腕を水平に開かれ、十字架に磔にされたような格好のままスバルは宙を浮ぶ

「しかし、お前も中々いけすかない事を考え付くものだな、イゾルデ・・・その娘を使ってゼノンをおびき寄せるとは」
「フフフ、ゼノンにとってこの娘は特別な存在・・・もしその娘が死ぬような事があればきっと奴はまたあの姿になる筈・・・それにしても」

イゾルデはそっとスバルの顎に触れ顔を上げてじっと見る

「可愛げのある顔ねぇ・・・食べちゃいたいわぁ♪」
「おいおい、夫のいる前でそんな事を言うか？同姓が相手では焼く事も出来んでは無いか」
「フン、のろけおって」

その光景をガラダブラが見て笑っていた
イゾルデが舌なめずりしたままスバルの頬に触れていた
その時、突如雷光がイゾルデに向かって来た

「むっ！」

イゾルデは手を翳して雷光を防ぐ

雷光を放ったのは、崖の上に居た槍を持ったゼノンであった
「おやおや、やっと王子(ナイト)様の登場か！」
「待ちくたびれたわぁん♪」
やっと本命の登場というのに二人は歓喜の声を上げる
ゼノンは怒りの篭った目でボロボロの状態の上拘束されたスバルを見た
それはゼノンの怒りを更に掻き立てた
「お前達・・・スバルを傷つけたのか・・・」
「だとしたら・・・どうする？」
「許さない・・・お前らだけは・・・絶対にゆるさないぞ！！」
ゼノンが怒り再び雷光を放つ
だが、ガラダブラはそれを片手に持っていた鎌で弾く
「どうした？俺を傷つけたかつてのお前はこの程度では無かったぞ。ゼノン・・・・嫌、ゴッドマジンガーよ！！」
ガラダブラは声を上げてゼノンを睨む
ゼノンは不満そうな顔をする
「その名はもう捨てた！今の僕は人の体を得たんだ！！もう僕は「魔神戦士」じゃない！」
「その代わりに力を失った・・・と、言う訳か」
そう言ってガラダブラはゼノンを見る
「情けないな、ゴッドマジンガーよ・・・かつて神の魔神と呼ばれ

たお前は今は脆弱な人間になってしまうとはな・・・これでは俺が出てきた意味が無くなってしまったな」

「ガラダブラ・・・僕を・・・人間を・・・舐めるなあああああああああ！！！」

怒りの雄たけびを上げてゼノンは槍を構えて飛び掛る
その槍に雷光が纏われ、そのままガラダブラに切り掛かる
だが、それをガラダブラの鎌が防ぐ
火花と轟音が響く
だが、吹き飛ばされたのはゼノンであった

「ぐぅっ！」

「やれやれ、何と歯ごたえの無い・・・俺はお前に出会えると思って心躍らせていたと言うのにそのお前がこの程度だとは・・・これ以上俺を泣かせないで欲しい物だ」

ガラダブラはそう言って両肩にあった2本の首が一斉にゼノンの方を向く
するとそれからレーザーが放たれる
ゼノンは一発目はかわすも時間差で放たれたもう一撃を直撃してしまう

「がはっ！」

直撃したゼノンを激痛と衝撃が襲う
そしてそのまま大地に叩きつけられる
砂煙が舞い散り、ゼノンの周囲には小さなクレーターが出来ていた

「く・・・くそぉ・・・」

片膝をつき槍を杖代わりにして立つゼノン
その片腕からは夥しい量の血が流れており、額からも出血していた
反対に、ガラダブラは無傷であった

「ふぅ・・・最早お前には用など無いな・・・俺は勇者ガラダブラ！雑魚を倒す趣味は無いが、此処でお前を生かしておいても後々面倒なだけだ！・・・死ね！！」

ガラダブラがトドメを刺そうと鎌を振り上げる

「ゼノン！」

ガラダブラの鎌がゼノンに向かって振り下ろされた刹那、突如ゼノンを庇うかのように現れたザルがゼノンを突き飛ばす

「に、兄さん！」

ゼノンが叫んだ
だが、その直後、ザルの体にはガラダブラの巨大な鎌が突き刺さっていた

「ぐわあああああああああああああああ！」
「に、兄さあああああああああああああん！」

ガラダブラの鎌の切っ先がザルの体を深く突き刺す
突き刺さった箇所から止め処なく血が流れる
激痛の余りザルは吐血した

「フン、邪魔をしおって」

片眉を上げたような発言をしてガラダブラは鎌を抜く
ザルはそのまま大地に倒れた

「兄さん!!しっかりして!」

ゼノンは虫の息となったザルの元へ駆け寄る
そしてそっと自分の側に抱える

「よ・・・よぉ・・・どう・・・したんだ?・・・・・お前・・・ボロ・・・ボロ・・・じゃねぇ・・・か?・・・・」
「喋らないで!すぐ手当てしないと」
「む・・・無駄・・・だ・・・俺の体・・・・なんだぜ・・・俺が一番・・・良く知ってる・・・よ・・・」
「そ・・・そんな・・・」

どうする事も出来ない
それはゼノンにも分かっていた
ザルの体には大きな切り傷があった
其処から流れる血は既に致死量を越えていた
もう手の施しようは無い
それでも、ゼノンは諦めたくなかった
彼は、たった一人の兄なのだ
救いたい
助けたい

だが、それは叶わなかった

「へへ・・・何・・・しけた面・・・してんだよ・・・おい・・・」
「へ?・・・しけた面って・・・」

ゼノンがそう言うと、突如ザルはゼノンの胸倉を掴んだ
そしてギロッと睨みつける

「馬鹿・・・野郎！・・・穣ちゃんを・・・助けるんじゃ・・・ねぇのかよ！！・・・お前が・・・好きになった・・・女なんだろう？・・・・」

「に・・・兄さん・・・・」

ザルは死の間際ですら、自分の事より弟のゼノンの事を・・・そして、スバルの事を気に掛けていたのだ
そんなザルにゼノンは涙するしか出来なかった

「良いか・・・穣ちゃんを泣かせたら・・・・承知しねぇからな！・・・お前が・・・穣ちゃんを・・・スバルを・・・守ってやれ！・・・良いな？」

「・・・兄さん・・・分かったよ・・・約束する！・・・絶対、絶対僕がスバルを守って見せる！！」

ガシッと胸倉を掴んでいた手をゼノンは両腕で掴む
その腕は徐々に冷たくなるのを感じていた

「へ・・・へ・・・それで・・・・こそ・・・俺の・・・お・・・とうと・・・だ・・・・・ぜ・・・・・・・」

そう言い残した後・・・ザルの手がまるで糸の切れた人形のようにダラリと大地に落ちた

「兄さん・・・・兄さん！・・・にいいい

ん！」

ゼノンは動かなくなったザルに向かって腹の限り叫んだ
止め処なく涙が溢れる
血は繋がって無くても、彼をゼノンは兄と思っていた
どんな時も彼はゼノンを支えてくれた
少し斜めに構えた所もあったが、一番にゼノンを心配してくれた頼もしき兄貴だったのだ
その兄が・・・今、眠った
二度と目覚めぬ眠りについたのだ

「おぉおぉ、泣かせるねぇ、身を投げ出してお前のような役立たずを庇うとは・・・つくづく人間とは愚かな生き物だ」

それを見ていたガラダブラがザルを貶(けな)すように言う
そんなガラダブラをゼノンは睨む

「・・・うな」
「ん？」
「・・・言うな」
「何だ？」
「言うな！」
「何！」
「兄さんを侮辱するような事は・・・言うなあああああああああああああああああああ！！！！！」

ゼノンが叫ぶ、そして瞳の色を緑色から血の様に燃える色に変える
その顔はまるで悪魔のようであった
その形相のままゼノンはガラダブラに向かっていく

「うおおお

そして槍を構えて突き刺そうとした
が、

「遅い！」

それよりも早くトリスタンの剣がゼノンの胸を貫いた
鮮血が貫通した箇所から吹き出る
吹き出た鮮血がトリスタンの体と剣を汚す

「ト・・・・トリスタン・・・・・貴様ァァ・・・・・」
「ゼノン・・・娘を助けたければ魔神になれ！でなければあの娘は救えないぞ」

そう言ってトリスタンは剣に突き刺さったゼノンを足蹴に蹴り飛ばす
剣から離れたゼノンはそのまま重力に従い落下する
その間も、ゼノンは憎しみの篭った目でトリスタンを睨んでいた
トリスタンはそんなゼノンをニヤリとした目で見ていた
そして、衝撃と轟音がゼノンの意識を断ち切った

「さて、もう用は無い・・・都に引き上げるとするか」
「フフ、そうねぇ」

そう言うとトリスタンとイゾルデはスバルを連れて霧の如く消え去ってしまった
ガラダブラもまた深い海の中に沈んでいく
戦闘が終った場所は静寂だけが残っていた

＊＊＊

「・・・ン」
「・・・・・」
「・・・ノン」
「・・んん・・」
「ゼノン！」
「は！」

自分を呼ぶ声でゼノンは目覚めた
どれだけ眠っていたのだろう
気がつくと、辺りは夜の闇が覆っていた
隣には、父バロンが居た

「と・・・父さん・・・」
「ゼノン・・・無事で良かった・・・グッ！」

無事を確認出来たバロンは右肩を抑えた
見ると、右腕の肘から下が無い
切断されたかのような切り口であった

「と、父さん！その腕は・・・ウッ！！」
「無理するな！お前の傷の方が重傷だ！生きてるだけでも奇跡な物だからな」

傷口を押さえるゼノンにバロンは優しく手を乗せる

「父さん・・・・兄さんが・・・兄さんが・・・」
「分かってる・・・何時かはこうなると思っていた・・・」
「一体・・・一体何があったの？」

ゼノンが涙目でバロンに聞く
良く見ると、目だった傷があるのは腕だけでは無かった
バロンの左目は潰れており、体中にも大小様々な傷口があった
其処から流れる血がとても痛々しかった
それでも、バロンは口を開く

「お前が穣ちゃんを追ってすぐだった、突然神々の兵士が町を襲ったんだ・・・何時もは1体だけだったのが、２０体は居た・・・俺達は死に物狂いで戦ったが・・・俺一人が生き残るのがやっとだった・・・」
「そんな！それじゃぁ、町は・・・皆は？」

目を震わせるゼノンにバロンは黙って指を指す
ゼノンは指差された方を見た
そして目を見開いた
その目に映ったのは、紅蓮の炎に焼かれ焦土の地獄と化した町であった
今まで自分達が必死に守ってきた町が、廃墟と化していたのだ
その中では、未だに逃げ惑い苦しむ人々がいる
そんな人々をあざ笑うかのように神々の兵士達が蹂躙している
踏み潰し、握りつぶし、炎の中に投げ込んだり、角柱に突き刺したりしてまるで子供が虫を遊ぶかの様に逃げ惑う人々を殺していた
人々の悲鳴が此処まで聞こえて来る気がした

「そ・・・そんな・・・・ま・・・・町が・・・・・僕達が守ってきた・・・町が・・・・」

「ゼノン・・・」
「う・・・うあああ・・・・うおおお

夜の町を紅蓮の炎が彩る
その中を人々が逃げ惑う
それをあざ笑うかのように機械の怪物が破壊を続ける
燃え盛る建物をなぎ倒し、逃げ惑う人々を踏み潰す
辺りには建物の焦げた匂いと死んだ人の血と肉の匂いが支配していた
つい数日前まで活気と笑いで満ち溢れていた町が、今では悲鳴と死と絶望が町を覆っていた
その光景が此処からは良く見えた

「・・・まさか、また此処に来るなんてね」

ゼノンはフッと笑った
彼が居るのは、かつてスバルと共に来た魔神様の像であった
足元には蒼い炎が燃え上がっていた
まるで、ゼノンを誘うかのようにその炎は風に揺られながら踊っていた

「ゴッドマジンガー・・・僕は大切な人を傷つけ・・・そして、守ろうとした物すら守れなかった愚かな弱者だ・・・だけど、だけど僕は・・・彼女を・・・スバルを助けたいんだ!彼女は僕に色々教えてくれた!だから、今度は僕が彼女を助けるんだ!だから頼む・・・もう一度僕に力を・・・魔神の力を貸してくれ!!!」

そう言ってゼノンは崖の上から蒼い炎に向かって飛び降りた

「今こそ、蘇れ!ゴォォォォォォッドォォォ・マジンガアアアアアアアアアアアア!!!!」

叫びと共に、ゼノンの体は蒼い炎に飲み込まれた

すると、蒼い炎はやがて治まり、変わりに魔神様の目に光が灯る

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！』

咆哮と共に辺りに振動が起こり、魔神様の岩が崩れる
すると、中から現れたのは、黒と白の機体色に赤い巨大な放熱板
大きな肩と腕に、全身が先鋭的なフォルムをしていた
その顔はグレートに似ていたが、大きさは一回り大きく、より鋭い眼光をしていた
そして、胸には魔神の象徴である「Z」の文字が刻まれていた
その魔神がゆっくりと立ち上がる

『ゴォォォォォッド、フェザアアアアアアアア！！！』

魔神が両腕を面前まで持っていき、そのまま振り下ろす
するとそれと同時に魔神の背中には巨大な羽が生えた
白く、鳥のような羽であった
その羽が羽ばたき、魔神をゆっくりと空に誘う

『待っててスバル！必ず助ける・・・行くぞぉ！！！』

ゼノンはそう叫び、それと共に蘇った魔神「ゴッドマジンガー」は
漆黒の空に舞い上がる
今、４０００年前のミッドチルダにもう一つの魔神伝説が幕を開けた

続く

過去編　5話　決断・・・そして、伝説の幕開け（後書き）

機体解説

ゴッドマジンガー

全長：３８ｍ
体重：２５０ｔ

形状はゲーム「スーパーロボット大戦Ｆ」に出てきた「マジンカイザー」に良く似ているが、性能は全く違う
主な性能は次回明らかに

主な武装

光子力ビーム
ゴッドスマッシャーパンチ
トライハリケーン
冷凍ビーム
ゴッドファイヤー
ゴッドマジンガーブレード
ゴッドフェザー

オリジナルマジンガーです

兄と妹　前編（前書き）

竜馬達が居なくなった
このことは少なからず甲児達に打撃を与えていた
その頃彼等は？

兄と妹　前編

目を覚ますと、其処には何も無かった
人も、物も、景色さえも、其処には無かった
只漆黒の闇だけがその空間を支配していたのだ
そんな空間の中、竜馬は目を覚ました
「こ・・・ここは・・・」
うっすらと重い目蓋を開き竜馬は呟いた
目を数回瞬かせる
重くなった頭を正常に戻す為に軽く横に顔を振る
そして改めて目の前を見て竜馬は驚いた
「ここは・・・何処だ?確か俺達は・・・」
竜馬は思い出した
あの時、旧ゲッターと戦っていた時、竜馬達は旧ゲッターから海鳴市を守る為に大気圏外まで飛行して・・・それで
「は、そうだ!隼人!!弁慶!!!」
竜馬は周りを見回して叫ぶ
「う・・・いてて・・・」
「う～～、頭いて～」
すると、近くで唸る声が聞こえた
隼人と弁慶の声であった
どうやら近くに居たようだ
それを聞いて竜馬はホッとした
「二人とも、無事か?」
「あ、ああ・・・何とかな」
「にしてもよぉ・・・ここは何処だ?」
目を覚ました隼人と弁慶が先ほどの竜馬と同じく辺りを見回した
辺りには何もない
それこそ、重力も存在しないのだ

まるで漆黒の宇宙空間を漂っている感覚である
だが、酸素はあるらしく普通に呼吸は出来る
「俺達は、確かあの時・・・」
「ああ、そうだ！あの時旧ゲッターの暴走を見てそれから海鳴市を守る為に・・・って、それじゃ此処は死んだ人間が行く世界のなのか？」
弁慶が１人で驚きながら言う
「フッ、さしづめ「地獄の一丁目」って所か、もう少ししたら鬼達が俺達を地獄にご招待・・・ってか？」
こんな状況下でも隼人は落ち着いていた
いや、諦めていたと言った方が良いのか？
竜馬もこんな状況下ではどうする事も出来ない為半ば諦めていた
そんな時であった、突如、３人の前に謎の発光体が現れたのは
『おいおい、何情けない事言ってるんだ？お前ら』
「な！その声は・・・」
「む、武蔵！」
そう、発光体から発せられた声は、紛れも無く「巴武蔵」の声であった

＊＊＊

「とりあえず、今は安静にしておいた方が良いね」
病室の外でエイミィが甲児達に言った
ゲッターチームが消失したと報告をした後、アリシアが倒れてしま

ったのだ
余程ゲッターチームが居なくなったのがショックだったのだろう
無理も無いなと甲児は内心思っていた
「それで、今アリシアちゃんはどうしてる？」
「今、フェイトちゃんとプレシアさんが付きっ切りで看病してる、だから次はフェイトちゃんも出撃は見合わせだね」
「その方が良いな」
鉄也が頷いた
それに甲児が眉を上げる
「珍しいな、何時も鉄也さんだったら「そんな事で倒れるなんて軟弱な奴だ」って貶すはずなのに」
「フッ、どうやら娘を持った事で俺も丸くなったんだろうよ」
鉄也は自分でもそうなのだろうと自分で自分を笑っていた
だが、状況は最悪である
ゲッターチームが居なくなり、アリシアは倒れ、フェイトは出撃を見合わせる
明らかに戦力ダウンである
これで今戦えるのは、なのは、クロノ、アルフ、ユーノ、そしてダブルマジンガーとなってしまった
次にヴォルケンリッターが現れた際に、果たして止められるかどうか・・・一同に不安が募った
「此処に居たのか？」
そんな甲児達の下にクロノがやってきた
「く、クロノくん・・・」
「君達に合わせた人が居る・・・ついてきてくれないか？」
クロノがそう言ってなのは、ユーノ、甲児、鉄也を導く

フェイトとプレシアは寝込んだアリシアを見ていた
「お母さん・・・お姉ちゃんは大丈夫なの？」

「とりあえず・・・今は安静ね、熱は引いたけどまだ意識を取り戻さないから・・・」
不安になるフェイトに少しでも安心させようとプレシアが言う
だが、そんなプレシア自身も不安なのだ
もしこのままアリシアが目を覚まさなかったら
そんな事が二人の頭の中にあったのだ
「お姉ちゃん・・・きっと竜馬さんは無事だよ・・・だから、お姉ちゃんも元気だして・・・」
少しでも元気付けようとフェイトはアリシアの頬に触れてそう呟く
そんなフェイトの肩にプレシアがそっと手を乗せる
「フェイト・・・」

＊＊＊

「グレアム提督、お連れしました」
部屋を開いたクロノが言葉を発する
「ご苦労、わざわざお呼びして悪かったね、皆」
白髪の髪と髭を生やした老人が座っていた
服装からしてかなりの上の地位の人間だと理解出来た
「誰だ？この爺さんは」
「彼はギル・グレアム提督、僕の執務官研修の際にお世話になった、言うなれば恩師みたいな物・・・かな？」
「へぇ、そうなんだ」

なのはは納得した
「まぁ、立ち話もなんだろう、皆其処に座りなさい」
グレアムは甲児達を目の前の椅子に座らせる
「始めまして、と言った方が良いね。私はグレアム、今は顧問官を務めているよ」
「僕は兜甲児と言います」
「剣鉄也だ」
「えっと・・・高町なのはと言います」
「ユーノ・スクライアです」
一同が自己紹介を交わす
「話しは聞かせて貰ったよ・・・友達の事は残念だったね」
グレアムは重い顔でそう言った
それはゲッターロボの事だ
「知ってたんですか？」
「先ほどクロノに聞かせてもらったよ」
グレアムはそう言った
それを聞いた甲児と鉄也は暗い顔をしていた
あの時、もし自分達が掛け付けられたら・・・と思うと今でも後悔の念が二人を締め付けていた
「気持ちは分かるが、余り思いつめない方が良い、それは必ず隙となって身に降りかかる事になるぞ」
「そうだな・・・俺とした事が・・・」
気がつくと自分がナイーブになってしまった事に鉄也は眉を顰めるそしてグレアムはなのはに視線を移す
「そういえば、なのはちゃんは地上で偶然魔法と出会ったそうだね？」
「は、はい！」
「そうか・・・其処も私と同じだね」
「え？」
「どう言う事ですか？」

なのはとユーノは首を傾げる
「実は私も元々地上出身でな、偶然傷ついた魔道士を介抱した事がきっかけで魔法と出会ったんだ」
「そうだったんですか！」
なのはは言う
ふと、甲児はグレアムの纏う雰囲気を見た
外観は気の良い老人だったのだが、何処か何かを隠しているようだった
（何だ・・・あの老人から何処か悲しみを感じるのは・・・）
甲児はその老人から何処か悲しげな感情を感じ取った
それを感じ取ったグレアムはふとなのはとユーノに視線を移す
「なのはちゃん、ユーノ君、すまないが此処に居る二人と話をさせてくれるかい？」
「あ、はい！分かりました」
「それじゃ、僕達は外へ行きます」
そう言って二人は外へ出た
二人が外へ出たのを確認した後、グレアムは甲児達に視線を移す
「一つ確認させて欲しい・・・君達は本当に未来から来たのかい？」
「「！！！」」
グレアムの言葉に甲児と鉄也は驚愕した
「知っていたんですか？」
「すまないとは思ったが・・・色々と調べさせて貰ったよ」
「そうか」
鉄也は納得した
「それで、一つ聞かせて欲しい・・・君達はあの闇の書について何か知ってるかい？」
グレアムの口から出てきたのは闇の書・・・もとい夜天の書の事であった
何故グレアム提督が夜天の書の事を知っていたのか？甲児は首を傾げていたが、ふと鉄也が口を開く

「恐らく、あれにはリンカーコアと呼ばれる魔力の他に集めている物がある」
「・・・それは？」
「俺達の「魂」だ」
「な、何だって！！」
その言葉に甲児が目を見開く
そして立ち上がろうとしたのを鉄也が手を制して座らせる
「正確には魂を集めるのではなく、俺達の魂を感じ取って何らかの封印を解く鍵になる・・・と言った事なのだろうな」
「鉄也さん！何処でそれを？」
「大介君に聞いたんだ」
「大介君に！？」
驚きであった
まさか大介もこの世界に来ていたとは
「それで、君達はそれをどうするつもりなんだい？」
「恐らく、俺達の魂を集めるからには、それは俺達に何らかの力となると俺は予測する・・・だが、今の様にリンカーコアを集める行為は、きっと何か危険な物を呼び覚ます可能性がある」
「・・・・その通りだ」
「「！！！」」
突如、グレアムが重い顔をした
両手を合わせてまるで後悔の念になった顔立ちであった
「実は、私は以前あれの護送をしていた事があったんだ・・・だが、あれから現れたのは・・・正しく『悪魔』だった」
「悪魔・・・」
「それは・・・まさか！」
鉄也と甲児はふと、壁画に書き記されていた絵を思い出した
それこそ正に悪魔であった
そして夜天の書が関わっているとしたら・・・恐らくその絵の怪物の事だろう

「グレアムさんは、その怪物に会った事があるんですか？」
「うむ・・・奴は自分の事をこう名乗っていた」
重い顔を上げてグレアムは言う

「冥王・・・ハーデス・・・」

兄と妹　前編（後書き）

続く

兄と妹　中篇1（前書き）

更新速度を速めるため小出しで行くつもりです
どうもサーセン

兄と妹　中篇1

戦艦内を無数の血管の様な物が侵食しだしてきた
武装局員達が魔法攻撃を試みるも、それすらもその血管のような物は吸収し増殖を続けた
「駄目だ！これ以上は保たない！撤退だ」
局員の1人が叫ぶ
すると局員達は一斉に撤退を始める
その後も血管の様な物は侵食を続ける
場所は変わって、此処は戦艦のメインブリッジ
その中に1人の青年が居た
彼の名は「クライド・ハラオウン」苗字から察する通り、クロノの父である
彼の服は所々黒く焦げており額から血が流れていた
「どうやら・・・全員無事に脱出出来たみたい・・・だな」
モニターを見てそう言った後、クライドは通信スイッチを押す

『こちらクライド・ハラオウンです！グレアム提督！聞こえますか？』
「クライド！避難した局員は回収した！すぐに脱出するんだ！」
艦の指揮を執っていたグレアムが叫ぶ
だが、クライドはかぶりを降る
『もう無理です、この艦の制御は既に乗っ取られました・・・もうこの部屋から出る事も出来ません・・・それよりお願いです、夜天の書が・・・奴が、「冥王ハーデス」が完全に復活する前にそちらの「アルカンシェル」でこの艦を撃沈して下さい』

予想外の発言にグレアムは目を見開く
そんな事をすれば当然クライドの命は無い
そんな事は上司であるグレアムはしたくなかったのだ
「馬鹿な！そんな事をすれば君はどうなる？すぐに救助部隊を送る！其処で待ってるんだ！」
『構いません！自分１人の命で多くの命が助かるのなら・・・お願いです！早く』
クライドが叫ぶ
すると後ろのハッチが徐々に歪み始める
何者かが侵入しようとしているのだ
『くっ、もう此処まで来たのか！』
クライドが振り返りデバイスを起動させる
そして、ハッチをブチ破って現れたのは、正しく『悪魔』を思わせる姿であった
巨大な角を生やし、顔には四つの目があり、腹にも顔がある
それこそ、夜天の書に封じ込められていた暗黒の神、冥王ハーデスであった

その悪魔の様な形相をした異形がクライドを見つける
「ほほぅ、まだこんな所に人間が居たのか？」
「私はこの艦の艦長なんでな、局員達を脱出させるのが先決なんだ！」
「その為に自分が取り残されたと？・・・哀れだな」
異形は鼻で笑う
クライドはデバイスを異形に向ける
「哀れで結構だ！貴様は再び夜天の書に戻って貰うぞ！」
「それは出来んな、ワシはもうあんな狭い場所には戻りたくないのだ」
「ならば力付くで封じ込めるまで！」

クライドはそう言うとデバイスを構えて呪文を唱える
彼の足元に魔方陣が展開される
「凍て尽くせ！デュランダル！」
クライドがデバイスの切っ先を床に叩きつける
すると其処から白き結晶となって異形に向かって行った
白き結晶は瞬く間に異形を包み巨大な氷の塊となる
クライドはその場で肩膝をつき肩で息をしていた
かなりの魔力を消費したのだろう
展開していたバリアジャケットもボロボロである
だが、凍らされた異形はニヤリと笑っていた
そして

ガシャアアアアアアアアアン

音を立てて異形は自分を凍らせていたデュランダルを砕く
「ガ～ハハハハ！この程度でこの冥王ハーデスを凍らせるとでも思ったのか？愚か者め！」
「ぐっ、やはり俺の魔力では駄目なのか？」
苦しそうな顔でクライドは異形を見る
「貴様に地獄の業火の味を味合わせてやるわぁ！！」
そう言うと異形の口から灼熱の炎が吹き放たれた
それは正に地獄の業火を思わせた
クライドは咄嗟に防御結界を張った
だが、灼熱の炎は結界を一瞬でブチ破り、クライドを包み込む
「ぐわあああああああああああああああああ！！！」
クライドの悲鳴がブリッジに響く
炎の中でクライドであった黒い影が苦しそうに蠢く
「ガハハハハ！苦しいだろう？どうだ、地獄の炎の火加減は？そのまま地獄へ落ちるが良い！」
ハーデスが鼻で笑い踵を返して去ろうとした時、

「嫌、一人では落ちんぞ！」
「何！」
ハーデスが振り返ると、炎を纏ったクライドが突っ込んできた
クライドは自分の体をハーデスに密着させて動きを封じる
「提督！今です！！早くアルカンシェルを！！！」
「貴様！自分を犠牲にしてワシを封印すると言うのか？」
「お願いです！提督！撃ってくれえエエエエエエエエエエエエエエエエ！」
クライドが叫ぶ、だが
「小賢しい！」
ハーデスはそう言ってクライドの片腕を腹の牙で噛み砕く
鮮血が舞い散り、クライドが吹き飛ぶ
彼の腕が千切れた
「うわあああああああああああああああああ！」
千切れた腕を押さえてクライドがまた悲鳴を上げる
そんなクライドにハーデスは歩み寄る
「恐ろしい男よ！お前のような男がもしワシと同等の力を持っていたと思うとぞっとする・・・今此処で息の根を止めてくれる」
ハーデスが巨大な腕を振り上げてクライドに狙いを定める
だが、その時前方に閃光が発せられた
「む、何だこの光は？」
ハーデスは前を見た
其処にはグレアムの乗った戦艦が「アルカンシェル」を放った直後であった
「て・・・提督・・・有難う・・・御座います・・・」
クライドは最後の最後で自分の願いを聞き届けてくれた事に感謝して笑顔になる
「お・・・・おのれえええええええええええええええええええええええ！」
ハーデスは悔しさの余り叫ぶ

そして、閃光が二人を包んだ

グレアムの面前でクライドの乗っていた戦艦が光に包まれるのが見えた

「クライド・・・本当に、これで良かったのか？・・・」

グレアムは未だに自分の下した決定を悔やんでいた

本当に助けられなかったのか？

もし、あの時有無を言わさず救助隊を派遣していれば、もしかしたらクライドを助けられたのかも知れない

だが、全てが今となっては後の祭りとなってしまった

今、グレアムの前には残骸となった戦艦と・・・無傷の状態の「夜天の書」があった

＊＊＊

「これが・・・私が夜天の書と関わった事件だ」

グレアムが重い顔になって話し終える

それを聞いていた甲児と鉄也が驚愕の顔になる

「し・・・知らなかった・・・まさか、あの夜天の書にそんな過去があったなんて」

「だが、何故それを俺達に教えるんだ？」

鉄也が疑問を投げかける

すると、グレアムが鉄也達を見る
「最早、こうするしかないんだ・・・頼む、貴方がたの力で夜天の書を破壊してくれ！あの書は次の標的にと・・・彼女「八神はやて」を選んだ」
グレアムがモニターを操作する、其処にははやてと夜天の書が描かれていた
「今ヴォルケンリッターと名乗る４人が行っている魔力の蒐集はハーデスに力を与えているような物だ！このままではまたあの悲劇が繰り返されてしまう」
「でもよぉ、下手にぶち壊す事も出来ないんだろう？」
「あ・・・あぁ・・・あれは危険を感じると別の主の元へ転移してしまう性質を持っている・・・だから、我々は下手に手出しできなかったんだ」
「だが、手はある」
口を挟むかのように鉄也が言う
それに甲児が驚く
「本当かい？鉄也さん」
「ああ、さっき大介君の話しを覚えてないのか？」
「あ、そうか！」
甲児はポンと手を叩いた
剣児と大介が触れた途端夜天の書が発光した事を
「我々も可能な限り手助けをする・・・もうこれ以上あの悲劇は繰り返したくない」
「任せてくれよグレアムさん！そんなド悪党にはやてちゃんは殺らせねぇよ！」
「俺達マジンガーが絶対にそいつを倒す！必ず」
甲児と鉄也の言葉を聞いてグレアムの顔にも少しだが、安堵の表情が浮んだ

＊＊＊

「う・・・いてぇ・・・」
明は目を覚ました
目覚めると、其処は冷たいアスファルトではなく、温かいベットの中であった
そして屋根があり様々な家具がある
どうやら家の中のようだ
しかし一体誰なのだろうか？
見ず知らずの男を介抱するような物好きでも居たのだろうか？
そう思って起き上がると、明は自分の体を見た
「どうやら、俺を助けた奴はこういうのが上手いらしいな」
明の体には怪我した箇所を覆うかのように包帯が巻かれていた
しかもかなり上手い
恐らく場慣れした医者か誰かが手当てしてくれたのだろう
どちらにしても凍死すると言う危険性は無かったようだ
今は１２月
外は雪が降り始めていた
そんな中怪我したまま倒れていたら流石の明でも風邪は引くだろう
そう思っていると
「あ、もう起きたん？」
車椅子に乗ったはやてが御盆に何かを持ってやってきた
「お前が俺の手当てをしてくれたのか？」
「そやで！ビックリしたでぇ、何せ帰ろう思たら目の前に血まみれで倒れてるんやからなぁ」

「はは、そりゃ確かに驚くよな」
そう聞いて明が苦笑する
すると、明の腹から空腹の報せと思わせる腹の音が聞こえた
「あ！丁度良かったわ！今兄ちゃんの為におかゆ作って来たんよ！これ食べて早く元気になってな」
「お！サンキュー・・・おぉ！こりゃウメェ！！！」
明は早速はやてから貰ったお粥を一口食べて舌鼓を打つ
はやての料理はヴィータ曰く「ギガ美味！」らしいのだ
「良かったわぁ、兄ちゃん元気みたいやな、それなら後数日寝てれば大丈夫やろう！」
「おいおい、こんな傷半日あれば治るさ！俺の体は頑丈だからな」
そう言って明は包帯を解く
「ちょ、何するん！折角巻いたのに！」
「まぁ黙ってみてな」
明はそう言って黙々と包帯を解く
すると、先ほどまであった生々しい傷が既に完全に塞がれており、瘡蓋（かさぶた）になりかけていた
「ホンマや！もう治り始めとる！兄ちゃん凄いなぁ」
「へへ、すげぇだろう！それからよぉ、俺は不動明ってんだ。何時までも兄ちゃん呼ばわりじゃかっこ悪いからそう呼んでくれ」
「おおきに、うちは八神はやてや！宜しゅうな」
（八神はやて！・・・って事は、こいつが夜天の書の主って事なのか？こりゃまた随分な奴のとこにお邪魔しちまったぜ）
明は偶然にも夜天の書と関わってしまった事を知りバツの悪い顔をする

兄と妹　中篇1（後書き）

次回はあの双子が登場する・・・かも？

兄と妹　中篇2（前書き）

何か原作と違う展開になってる（汗）

兄と妹　中篇2

どれ位経ったのだろうか
アリシアは目を覚ました
起きると頭が少しボウっとした
額に触れると僅かに熱い
恐らく熱を出していたのだろうか
そう思ってアリシアは部屋を見渡す
簡素で普通と言う言葉がしっくり来る部屋であった
ベットと机と虚数空間が見える窓がある位の部屋である
「そっか・・・あの後、私・・・」
アリシアは思い出した
それは自分の目の前のモニターでゲッターロボが・・・竜馬の乗ったゲッターが光に包まれて、そのまま姿を消してしまった場面であった
その場面を見た直後、アリシアは意識を失い倒れてしまったのだ
それから誰かに担がれて部屋に運ばれたのは覚えがある
我ながら情けない物だと思えた
仮にもフェイトの姉なのにこうも自分は弱いんだなぁ
そうアリシアは思った
「あ、お姉ちゃん」
部屋の扉を開いてフェイトとプレシアがやってきた
「もう大丈夫なの？アリシア」
「フェイト、母さん・・・心配かけて御免ね・・・でも、何時までも寝てられないしね」
アリシアは元気を現すようにベットから飛び起きる
まだ地に足がついていない感覚があったがそれでも動けない程ではない
「無理しちゃ駄目よアリシア・・・貴方はまだ病み上がりなんだか

ら」
「心配しないで母さん。こんな事で寝込んでたら竜馬さんに笑われちゃうもん」
「お姉ちゃん・・・」
笑顔で答えるアリシアが何処か無理してるとフェイトは思えた

＊＊＊

甲児と鉄也はクロノに連れられてとある場所に向かっていた
「一体誰と会うんだ？クロノ」
「簡単に言うと・・・僕のお師匠さんだよ」
「へぇ、クロノにお師匠さんが居たんだ」
隣に居たユーノが驚く
それを聞いてクロノが不機嫌そうな顔をする
「君は僕を化け物みたいに見るのかい？」
「嫌、お前は只の堅物だ」
「甲児さんは黙ってて下さい」
後ろからからかう甲児にクロノは溜息混じりに返す
そして部屋に入ると、其処には猫耳と尻尾を生やした双子と思える使い魔が居た
「わぁお！クロ助！久しぶりぃ！」
双子の使い魔の1人のロッテがいきなり前に躍り出るとクロノを自分の胸元に押し込む
「うわっ！こら離せ！リーゼも黙ってないで何とかしてくれ！」

クロノはもう1人の使い魔のリーゼに助けを求める
だが、リーゼはニンマリとしている
「クロノと会うのも久しぶりなんだし再会を喜びなさいな」
と言って踵を返す
「そ・・・そんな・・・」
クロノは引き攣った顔で空しく手を泳がせる
するとロッテがニヤリとする
「それに満更じゃない顔してる癖にぃ！相変わらずのムッツリ君はこうしてやるぅ！」
と言ってロッテはクロノを押し倒して甲児達の目の前であ～んな事やこ～んな事をしまくった
「ぎゃあああああああああ！止めろ！離せ！誰か、誰か助けてえええええええええええええ！」
この時クロノは年甲斐も無く叫んだ
だが、誰も助けない
やがてロッテが満足してクロノから離れる
「な・・・何で僕のお師匠はあんな奴なんだ（汗」
肩で息をしながらクロノが起き上がる
「おい、クロノ」
「へ？」
すると、後ろから甲児が呼ぶ
振り返ると何故か甲児が黒い笑みを浮かべていた
「結構お楽しみだったじゃねぇか？この「ラッキースケベ」め」
「ぬぁっ！な、何ですか！そのラッキースケベって！」
顔を赤くしてクロノは問う
すると甲児はクロノの頭を自分の脇に挟んで締め上げる
「惚けんじゃねぇ！ロッテちゃんとあ～んな事やこ～んな事した癖に！えぇ？エイミィちゃんだけじゃ物足りなくなって遂に自分の師匠に手ぇ出したのか？このすけこまし野郎が！」
「いだだだだ！な、何の話ですかあああああああああ！僕はロッ

テに何もしてってぎゃあああああああああああああ！！！」
弁解しようとしたクロノは更にキツク締め上げられてしまい弁解出来ず仕舞いであった
「いい加減にしろ、甲児くん」
流石にふざけ過ぎたのか鉄也が甲児に拳骨をする
頭にはタンコブが出来上がる
「い・・・いてぇ・・・すまねぇ鉄也さん・・・（涙」
涙目になった甲児が言う

＊＊＊

此処は荒廃した地下鉄の一角
其処には水没した地下鉄乗り場があった
その周りには、とても凄惨な光景が映っていた
辺りに散らばっているのは、管理局武装局員の腕、足、内臓等、どれも直視出来る物ではなかった
そして、その奥で息絶えた局員を貪り食っている者が居た
その姿は亀に似ていた
だが、一つ亀とは明らかに違う物があった
それは『甲羅』だ
その甲羅には無数の人の顔が出ていた
その顔が皆苦痛と悲しみの声を上げている
そして、その甲羅にまた一つ新しい顔が浮かび上がった
「カッカッカ・・・また新しい顔が増えたな・・・もっと美しくしよう・・・私の自慢の甲羅を・・・」

甲羅に浮かび上がった人の顔を見て亀の姿をした異形は嬉しそうに微笑んだ

＊＊＊

「それで、二人にユーノの手伝いをして欲しいんだ」
事情を説明したクロノがユーノを紹介する
すると、ロッテが猫目になる
「食って良い？」
と、まるでおねだりするかの様にクロノに聞く
それを聞いてユーノが青ざめる
恐らく彼のフェレット変身能力を猫的直感で感じ取ったのだろう
「調べ物が終ったら好きにして構わない」
「おいいいいいいいいいいいいいい！それどう言う意味だあああああああああああ！」
ユーノが額に青筋を浮かべて怒鳴る
「なぁ、手伝いって何するんだ？」
甲児が問いかける
それにクロノが答える
「彼はスクライア一族らしいからね、彼に『無限書庫』で夜天の書について調べて欲しいんだ」
「成る程な・・・で、その無限書庫って何だ？」
「今からその場所に案内するよ」
そう言ってクロノは立ち上がる

また移動か・・・と内心愚痴る甲児であった

＊＊＊

どうにか傷が完治した明はリビングでソファーに座っていた
（さて、これからどうした物か・・・俺としてはデーモンを倒せりゃ構わねぇんだけどよぉ）
と、内心思っていた
すると、其処へ大介と剣児がやってくる
「やぁ、君とは初めて会うね。僕は宇門大介と言う」
「俺は草薙剣児だ！憶えとけよ」
「へいへい、俺は不動明だ・・・早速だが、お前ら夜天の書について何処まで知ってる？」
明が真剣な顔になって問う
「んなもん俺が知る訳ねぇだろう！」
「正直僕も同じだよ。夜天の書については知らない部分が多すぎる」
大介と剣児はお手上げの仕草をしていた
それを聞いて明が溜息をつく
「やれやれ・・・しょうがねぇなぁ・・・じゃ教えてやるよ・・・夜天の書について・・・」

＊＊＊

此処は謎の空間
その中でイキマ、ミマシ、アマソの3人は肩膝をついていた
そして、その前にはヒミカが立っていた
「間も無く封印は解かれる・・・だが、まだ力が足りない・・・それに、奴らも真相に感づき始めた頃だろう」
「と、申しますと・・・奴等があの夜天の書に封印されている力に感づくとおっしゃるのですか？」
イキマが問いかけるとそれにヒミカは頷く
「お、おいおい！そりゃ不味いんじゃねぇの？」
「当たり前だろう！あれが解かれたらかなり不味いぞ！何しろあれは・・・」
ミマシが喋っていると、その間を割って仮面の男が現れた
「やれやれ、邪魔大王国の将軍が三人も揃っていながら情けない」
「何！」
「貴様ぁ！俺達を侮辱するのか？」
「俺達を侮辱して良いのはヒミカ様だけだぞ！お前が侮辱するなってんだ！」
仮面の男にイキマ、ミマシ、アマソの三人が敵意をむき出しにして睨む
だが、仮面の男は意に返さない
「やめい！」
そんな三人を静めるかのようにヒミカが怒鳴る
すると三人は黙り込んだ
「貴様が其処まで言うからには何か秘策があるのか？」
ヒミカが問うと仮面の男は一枚の紙を飛ばす

ヒミカはそれを受け取って見る
それは場所が記された地図であった
「ヴォルケンリッターの奴らは其処に向かう」
「何故そう言える？」
「其処に『餌』を撒いたからだ！奴らはその餌に群がってやってくる・・・其処を一網打尽にして夜天の書を奪え・・・お前達三人が居れば容易い作業であろう」
そう言って仮面の男は三人を見下すように見る
三人には言葉が無かった
何しろこの男のお陰でどうにかあのグレートマジンガーから逃げられたのだ
頭が上がらないとはこの事であった
「良かろう！ならばお前達は早速其処に向かい奴らが弱った隙を狙って夜天の書を奪え！良いな？」
「「「ハッ！」」」
ヒミカの言葉に三人は声を揃えて答えた

兄と妹　中篇2（後書き）

続く

兄と妹　中篇3（前書き）

今回オリジナルキャラが出ます

兄と妹　中篇3

「へ～、これが無限書庫か～」
甲児達は一面本だらけの空間に居た
言ってしまえば、あるのは本、本、本本本本と、きりがない程であった
「す・・・凄い量だね（汗」
「う・・・うん（汗」
「こんな量一生あっても読みきれないよぉ（汗」
なのはとフェイトは余りの本の量に冷や汗をながし、アリシアは正にお手上げ状態であった
「私も始めて見たけど・・・こんなにあるなんて始めて知ったわ」
プレシアも驚いていた
「んで、この中からお目当ての情報を探すってのか？日が暮れるどころじゃ済まねぇだろう！」
「だからあたしらが手伝いに来たんだよ」
其処でロッテが胸を張る
そんなロッテにリーゼがチョップを当てる
「調子に乗らないの」
「テヘッ」
「何か頼りないなぁ（汗」
甲児が思わず本音をぶつける
だが、無限書庫・・・見れば見るほど見た事が無い本ばかりであった
甲児としては是非腰を据えて読んで見たいと思えた
「しゃぁねぇなぁ、俺達も手伝ってやるよ」
「え？良いんですか？甲児さん」
「ああ、丁度俺も読んでみたかったしよぉ」
そんな理由だろうな
そうユーノは思えた

「ならば俺も手伝おう」
「あ、それなら私も手伝うよユーノ君！」
「えっと・・・私も手伝うよ！」
「え～、じゃぁフェイトがやるなら私も手伝うか～」
鉄也、なのは、フェイトが意気揚々と参加してくれた
だが、アリシアは乗り気じゃなかったが
「それじゃ私とロッテ達は少しでも夜天の書に関する書物を集めましょう」
「そうですね」
「よっしゃぁ！頑張るぞぉ！」
プレシア、リーゼ、ロッテは資料集めに行った
「すまないが僕は仕事を残してるからこれで失礼するよ」
「何だよクロノ、お前付き合い悪いなぁ」
「僕だって暇じゃないんです！偶に来ますよ」
そう言ってクロノは無限書庫を出た
「やれやれ・・・んじゃ、さっさと調べちまうか」
早速甲児の元に来た本を開いて甲児は中を見た
隣ではユーノが魔方陣を展開して一度に沢山の本を読んでいる
だが、他のメンバーはそんな器用な事など出来る筈は無く、一枚一枚手探りで見ていく事になった
「こりゃ・・・思った以上に時間が掛かりそうだなぁ（汗」
内心甲児はそう思った

＊＊＊

無限書庫を出たクロノはブリッジに向かっていた
すると
「よぉ、久しぶりだな、クロノ」
「ん、その声は」
クロノはその声に聞き覚えがあった
そして、思わず口元が緩む
ああ、アイツか
そう思いながら振り返った
すると其処に居たのは予想通りであった
クロノより高い背を持つ青年であり髪型はリーゼントと一風代わった髪型をしている
そしてクロノと同じ執務官の服を着ている
「久しぶりですね、ジョニー執務官」
「止せよ、俺とお前の仲だろう？昔通りジョニーで構わねぇよ」
そう言って二人は握手をかわし久しぶりの再会を喜んだ
「こうして会うのは執務官の試験の時以来だな」
「ははは、あの時はジョニーに世話になったからな」
「ま、お前は頭は良かったが変わりに実技がからっきしだったからな」
「五月蝿い」
ジョニーの皮肉に少し眉を顰めるも決して怒ってる訳では無い
これもジョニーの人柄なのだ
彼はクロノとは違い何処か斜めに構えている
そして良く人をからかうのが好きな奴であり試験の時も良くクロノはからかわれた物であった
それが今はお互い執務官として忙しく各地を駆け回っている
「それで、今回は何の用で此処に来たんだい？」
「聞いてないのか？グレアム提督の要請でこっちに来たんだぜ」
「提督が？」

クロノの問いにジョニーは頷いた
「何でもお前の担当してる区域はとんでもないって言うじゃねぇか？２０ｍを越す巨大ロストロギアに悪魔の力を持った化け物に土偶の化け物まで出てくる始末だって聞いたぜ」
「ジョニー、土偶じゃなくてハニワだ」
「似たようなもんだろう！」
ジョニーは薄笑いを浮かべながら言う
すると、ジョニーの後ろから丁度なのはと同じ位の年齢の少女がやってくる
「・・・ひょっとして・・・レアンヌちゃんかい？」
「お久しぶりです、クロノ執務官。以前は兄が粗相な事をしてしまい申し訳ありません」
焦げ茶の色の髪を両端で束ねたツインテールの少女レアンヌはその場でペコリと頭を下げる
それを見てジョニーはバツの悪い顔をする
「おいおい、それじゃどっちが年上か分からねぇじゃねぇか」
「はははは」
クロノは苦笑いを浮かべた
久しぶりだ
やはりジョニーは凄い奴だ
こんな時にジョークなんて言える筈がない
だが、ジョニーは例えどんなに危険な任務につこうと決して笑顔を絶やさないでいた
それが彼の人柄となり多くの信望を集めていたのだ
正直クロノも彼のようになりたいと思っていた

＊＊＊

無限書庫では甲児達が必死に書を漁っていた
「う～～ん、これもロクな情報が無いなぁ（汗」
だが、甲児の所に送られてくる情報はそれこそ大した情報の載ってない書物ばかりであった
あるとすれば夜天の書を祭っていた部族の話であったり、滅びた文明であったりと具体的な情報がある書物は無いでいた
やれやれ、こりゃ一筋縄じゃいかないなぁ
そう思い甲児は回りを見た
鉄也は黙々と書物に目を走らせている
流石戦闘のプロである
文句一つ言わずに書物に目を通している
だが、他の方ではと言うと
「う～～～～、頭痛い～～～」
アリシアが頭から煙を出していた
「あ・・・あたしも限界・・・」
その隣でアルフも同様に頭から煙を出していた
「「ＺＺＺＺＺ」」
その隣ではなのはとフェイトが本を枕に寝息を立てていた
この所激戦続きで疲れていたのだろう
甲児達は放っておく事にした
「！！！・・・これは！」
そんな時、ユーノが声を上げる
「どうした？」
「この書物・・・このページだけ字が違うんです！！」
ユーノはそう言って甲児に書物を渡す

甲児は指定されたページを見る
其処は確かにミッドチルダ特有の文字ではなかった
それどころか、そこに書かれていた文字は甲児にとって見覚えのある字であった
「こ・・・これは・・・『ギリシャ文字』・・・それに・・・この書き方は!!!」
甲児は驚いていた
そう、其処に書かれていた文字の書き方が似ていたのだ
甲児の・・・・・死んだ『母』の字に
そして、其処にはこう書かれていた

『暗黒の化身が蘇りし時、魔神に選ばれし者が封印を解き、神の翼は再び羽ばたく』と、

「神の翼?・・・一体なんだそれは?」
訳が分からなかった
何故この書物に書かれている字は死んだ甲児の母の字なのだろうか
そして、神の翼とは一体何なのだろうか?
それは今の甲児には理解出来なかった

兄と妹　中篇3（後書き）

続く

外伝7　博士の過去（前書き）

突然書きたくなったので書きます
興味があったら読んで下さい

外伝7　博士の過去

「いやぁ、今日も良い研究をしたぞい」
「そ・・・そう・・・ですか？・・・」
今日も今日とで良い汗を掻いたと言った顔をする十蔵と黒焦げになって地面に横たわるジェイル博士が居た
因みにどんな実験をしたのだろうか？
それは十蔵の口からあかされた
「うむ、今日の「人間の脳に直接ニトロをぶち込めばどうなるか」と言う実験は危険なので止める事にするぞぉ」
等ととても危険な事を口走る十蔵
あんたユニゾンになってからぶっ壊れたよなぁマジで（汗）
「は・・・初めから・・・分かってた事・・・でしょうが・・・」
震える声でジェイル博士は言った
だが、其処で十蔵はチッチッチと指を鳴らした
「甘いぞぉ剣造！何事も挑戦せねばならんじゃろうが！」
「そ・・・そうですか・・・」
「ってな訳でワシはもう寝るから後始末は頼むぞい」
「は・・・はぁ・・・」
そう言って十蔵は部屋を出て行った
散らかった部屋をそのままにして
その後、ジェイル博士はゆっくりと起き上がった
体中は真っ黒に漕げており頭は勿論爆発アフロヘアーになってる
「全く・・・お父さんのムチャ振りにも困った物だ・・・」
ブツブツ言いながらジェイル博士は掃除を始める
何気に真面目だなこの人

それから実に３０分経った頃
さっきまで破片と煤（すす）だらけだった部屋は綺麗になっていた

「やれやれ、やっと終ったか」
ふぅと溜息を吐くジェイル博士
その時、彼の体に突如激痛が走る
その激痛は電流のように背中から全身に渡って伝わっていく
「ぐっ・・・ま、また・・・これか・・・」
あの時からだ
あの時からこの痛みと戦い続けている
だが、この事は誰にも言っていない
心配させたくないからだ
只1人、この痛みを知ってる者が居る
それは
「ドクター！」
異変に気づき部屋に来たルーテシアが苦しむジェイル博士を発見する
顔は汗ばみ息も荒い
「る・・・ルーテシアか・・・」
「ドクター・・・やっぱり・・・痛むの？」
心配そうにルーテシアが聞く
それに対しジェイル博士はフッと笑う
「何、何時もの発作さ、大した事じゃない・・・暫くすれば収まる・・・」
「・・・御免なさいドクター・・・私のせいで苦しむ事になって・・・」
目に涙を浮かべてルーテシアは顔を暗くする
そんなルーテシアにジェイル博士はそっと頭を撫でる
「謝るのは私の方だ・・・私は君との約束を・・・守れなかったのだからな・・・」
その時、ジェイル博士は思い出していた
事の発端であるあの頃を・・・

＊＊＊

それは、まだ剣造が健在の頃であった
ミケーネの総攻撃が始まり、科学要塞研究所は大破し、グレートも鉄也が負傷して絶体絶命の窮地に立たされていた
「グハハハハ！これまでよ！それ、グレートマジンガーをこの「無敵要塞デモニカ」で踏み潰してしまえぃ！！！」
頭部に上半身の老人を乗せた「地獄大元帥」が命じる
その命を受けてデモニカが一直線に倒れていたグレートに迫る
「ぐ・・・・ぐぅ・・・」
負傷した鉄也にはそれを回避する手立ては無く再び意識を失ってしまった
「鉄也、今助けるぞ！！」
剣造は所員達を地下施設に非難させると、研究所のメインブリッジを浮上させる
そして、それをそのままデモニカに体当たりさせたのだ
「ぐわあああああああああああああああああああああああああ！！」
爆発と衝撃が剣造を襲う
それは剣造の命を奪うには十分過ぎる物であった

やがて、甲児の乗ったマジンガーZが瓦礫を退け、甲児がそっと剣造を抱きかかえる
「お父さん！しっかりしてくれ！！」

「こ・・・甲児か・・・」
既に息も絶え絶えであり、明らかに手の施し様が無い事は甲児にも分かっていた
「お父さん!すぐに手当てを・・・」
「嫌、良い・・・私はもう助からん・・・それより、甲児!・・・お前達で・・・ミケーネに決着を・・・つけるんだ・・・」
「お父さん・・・・分かったよ!俺が奴らを叩き潰してやる!!」
「それでこそ・・・私の・・・息・・・・子・・・・・だ・・・・・・」
そう言い終わった後、剣造の機械で出来た腕がダラリと落ちる
「お・・・お父さん・・・・お父さあああああああああああああああああああああああああん!!!!」
甲児が叫ぶ
だが、その叫びに剣造が答える事は無かった

＊＊＊

「こ・・・此処は・・・」
目を覚ますと、剣造は不思議な空間に居た
目の前がまるで居空間のように歪んだ背景があったのだ
そして、体に重力が感じられない
まるで無重力のようだ
「一体・・・何処なんだ?」
剣造は辺りを見回した

だが、其処には自分以外なにも居なかった
当然だろう
自分は死んだのだから
「だとすると・・・此処は死者の世界・・・と、言う所か・・・さて、この後私はどうなるのか？」
ふと、自分は呟いた
世間が言うなら死者は死んだ後天国か地獄に行く
だが、自分は鉄也の心を傷つけてしまった
例え天国に行けたとしても、剣造はかぶりを振るだろう
自分に天国に行く資格は無い
それなら、喜んで地獄に落ちよう
そう思っていた

『相変わらずね・・・剣造さん』

「！！！・・・その声は！！」
剣造は目を見張った
聞き覚えのある女性の声
間違いない
かつて自分が一生の内に愛したたった1人の女性
そして、甲児とシローを生んだ母にして、剣造の妻の声
その声の主は剣造の目の前に影だけだがうっすらと現れた
「・・・・君なのか？」
『貴方は昔からそう・・・何でも背おい込もうとする・・・そんな所を私は好きになったのかも知れないわね』
「・・そうだったね・・・私も・・・私も君の元へ行けるのかい？」
『それは無理よ』
「そうか・・・」
少し残念に思えた
仕方ない事だ

罪人が罪を償うのは当然の事だ
そう思っていた剣造を驚かすように影は語る
『貴方は・・・まだ死んでは居ないわ』
「な！どういう事だ！」
『此処とは違う世界に、貴方の魂を必要とする肉体があるの・・・
貴方はその肉体を得るのよ』
「肉体を得る？馬鹿な！そんな事が出来る筈が無い！」
『それは貴方が死んだ事が無いからよ・・・死んだ人間は別の世界
で別の肉体を得て其処で新しい人生を歩むのよ』
「・・・・・・」
開いた口が塞がらないとはこの事であった
生命の世界の理について自分は余りにも無知であった
何と自分は物事を知らなかったか、そう思えた
「ならば・・・教えてくれ！君は今何処に居るんだ？一体誰になっ
たんだ！」
『私は・・・転生しては居ないわ』
「何故・・・何故なんだ！」
『何時かまた会いましょう・・・剣造さん』
そう言い残すと女性の影はフッと蝋燭の火を消すように消え去って
しまった
「ま、待ってくれ！何故だ！何故君は転生出来ないんだ！！何故顔
を見せてくれないんだ！！答えてくれえええええええええええ
えええええええええええええええ！！！」
剣造は叫んだ
だが、返事は返って来なかった
それどころか、周りの景色が徐々に暗くなっていき、それに連なっ
て剣造の意識は無くなっていった

＊＊＊

（こ・・・此処は・・・）
目を覚ますと、私は奇妙なカプセルの中で目を覚ました
カプセルには何やら液体のような物が充満していた
だが、苦しくはない。口には酸素を供給する為のボンベが付けられており、それのお陰で呼吸に支障は無かった
（此処は・・・何処だ？・・・私は・・・一体何故此処に？）
そう思いふと、私は自分の体を見た
そして、目を見開いた
何と、人間の体をしていたのだ
おかしい。何故なら剣造は１０数年前のマジンガーの事故で胸から下は全て機械になっていた筈だ
それが今の体はまるで人間その物であった
体つきからして成人男性の体であった
そして、ふとカプセルに映る自分の顔を見た
（これが・・・転生した私なのか？）
其処には黄色い瞳に紫の髪をした細身の青年の顔が映っていた
『ナンバー０２５、覚醒を確認・・・これよりスリープ装置を解除します』
機械的なアナウンスが聞こえたかと思うと、突如自分の入っていたカプセルが開き、中で充満していた液体が床を濡らした
私は重力に従い床に足を着く
そして必要無くなったボンベを口元から外す
「私は・・・転生出来たと言うのか？」
もし、そうなら此処は一体何処なのだろうか？

今私が居る部屋は高い天井に一面白い壁が張り巡らされていた
見るからに何処かの研究室の様だ
すると、目の前の扉から1人の男・・・嫌、女・・・嫌、まさか！
男と女が一つの体で共生している？どうなってるんだ
訳が分からない。一体どうなってるんだ？頭が痛かった
すると、目の前の男女が私に語りかけた
「目覚めた気分はどうかね？ジェイル・スカリエッティ君」
「ジェイル・スカリエッティ？それが私の名前なのか？」
「ふぅむ、どうやら思考は正常のようだな・・・ではさっさと服を着てついてこい」
「服だと？・・・む！」
私はふと自分の体を見て気がついた
今の私は何も身に着けていなかった
要するに『裸』だったのだ
「何時までもその姿では風邪を引いてしまうだろう？表に貴様用の服を用意したからさっさと仕度しろ！貴様にやらせたい仕事は山ほどある」
そう言って男女は出て行った
仕事？一体何の仕事だ？そもそも何故男女が居るんだ？
分からん・・・私は夢でも見ているのか？
私はふと自分の頬を抓ってみた
痛みがした。どうやら夢では無いようだ
そうと決まれば何時までも裸と言う訳にはいかない
とりあえず私はあの男女の後を追うように外に出た

＊＊＊

外には研究者が着るような服装があった
簡素なズボンとワイシャツ、それと白衣であった
私はそれを身に着けて男女の待つ通路へとやってきた
「ふむ、服のサイズは合っているようだな」
「違和感は無い・・・それで、私は今から何をすれば良い？」
「まぁそう焦るな・・・今からこの施設の中を歩く。貴様はその後について歩きながら自分の体を慣らしておけ」
「・・・分かった」
気の無い返事に眉が動いたが、その男女はそれ以上何も言う事は無かった
だが、一つ忘れたかのように振り返る
「そうだ、何時までも私の名前が分からないのは困るだろう。私は「シュラ」だ。憶えておけ」
「・・・憶えておこう」
そう言ってそのまま私はシュラの後に続いた

見れば見る程奇怪な施設であった
辺りには奇妙な兵器や巨大なロボット等が組み上げ途中で浮んでいた
その周りを分厚い鎧を纏った兵士達が組み上げている
「驚いたか？あれこそ我らのミッドチルダ侵略の切り札となる「機鋼獣」だ！」
「ミッドチルダ？・・・機鋼獣？・・・何だそれは？」
「ええい、一々説明するのは面倒だ！後は自分で調べろ」
シュラは私の説明を区切った
どうやら頭はそれ程良くないらしい

そのまま黙って歩いていくと、ふと目に留まった物があった
それは私が目覚めたのと良く似たカプセルが１２個有った
そして、その中には年齢層がバラバラな少女達が眠っていたのだ
「この子達は？」
「あいつらか？フン、あいつらは「ロストナンバーズ」だ」
「ロストナンバーズ？」
「簡単に言えば「失敗作」だ・・・要するに出来損ないの事だ」
シュラは鼻を鳴らす
だが、私は眉を顰めた
「何処も異常は見られないが・・・何処が失敗なんだ？」
「感情コントロールが出来ないのだ！我々に必要なのは冷血な兵士だ！奴らはそれにはなれない！故に失敗作なのだ・・・まぁ近い内に処分する手筈だはな」
「・・・・・」
私は何も答えなかった
もしこのまま放って置けば、彼女達は世界を知らぬままゴミの様に殺されてしまうのだ
そんな事を許せるのか？
嫌、決して許せる筈が無い
そう思った私は
「一つ良いか？」
「何だ？」
「彼女達を私の助手として働かせる事は構わないか？」
「クハハハ、物好きだなぁ貴様も・・・良いだろう、どうせ放って置いても後でケドラの餌にするだけだったしな・・・まぁどうせ役立たずの集まりだ」
そう言うとシュラは踵を返した
私もその後に続いた

「此処が貴様の部屋だ」

そう言って私の前にある扉を指差した
私はノブを回して中に入った
其処には簡素な部屋・・・そして、其処にある窓の向こうには巨大な格納庫があった
「貴様は今日から此処で寝泊りしながら新しい兵器の増産に励んでもらいたい。我々は一切口出しせんから好きにするが良い」
そう言ってシュラは部屋を出て行った
私は部屋に1人取り残される形となった
「さて、これからどうした物か・・・」
私は部屋にあったベットに腰を降ろして状況の整理を行った
考えただけでも頭が痛くなる事ばかりである
そもそもミッドチルダとは一体何処なのだろうか
分からない事が多すぎる
そう思っていると、丁度待っていたかの如く私を程よい睡魔が襲いかかってきた
「むぅ・・・これ以上考え事をしてても無駄か・・・とにかく今は寝るとしよう」
そう決めて私は布団の上で横になりそっと目を閉じた

＊＊＊

翌日、私はあのロストナンバーズの待つ場所に向かっていた
すると、そのフロア内には1人の少女が居た
紫の髪をした背の小さな少女であった

「君は一体誰だい？」
「・・・・・」
私はとりあえず怖がらせないように気を使って優しく聞いた
すると少女は驚いた顔をした
「・・・お兄さんは違うの？」
「？？？どういう事だい？」
「お兄さんは此処に居る人達とは違う・・・他の人達は怖い・・・
でも、お兄さんは違う・・・とても優しい人みたいに感じる」
「そうかい？おっと、自己紹介をしてなかったね・・・私はジェイル・スカリエッティと言うらしい・・・君は？」
「ルーテシア・・・ルーテシア・アルビーノと言います」
「そうか・・・良い名前だね」
「ねぇ、お兄さん・・・あのお姉さん達・・・本当に殺しちゃうの？」
ルーテシアが悲しげな瞳で私に聞いた
その目は、彼女達を助けて欲しいと哀願する目であった
「お願い・・・あの人達を殺さないで！あの人達はルーテシアみたいに生きてるんだよ！だから殺さないで！お願い」
小さい体を必死に使って私の白衣にしがみ付いてそう叫ぶ
そんな彼女に私はそっと頭を撫でてこう言った
「大丈夫だ・・・あの子達は殺させはしない・・・お兄さんは彼女達を起こしに来たんだ」
「ホント！？」
ルーテシアの目が輝く
それに私は頷く
そして、私とルーテシアは「ウーノ」と書かれていたカプセルの前に立った
私はカプセルのスリープ装置を解除して彼女を起こす
中の液体が流れ落ち、やがてカプセルが開くと、中で眠っていた女性は目を覚ます

「私を目覚めさせたのは・・・貴方ですか？」
「そ・・・そうだ・・・」
思わず私は視線を逸らした
それに女性とルーテシアは首を傾げる
私の頬はうっすらとだが赤くなっていた
確かにそうである
いかに赤の他人とは言え、目の前には若い女性が『裸』で立っていたのだ
「と・・・とりあえず、何か身に着ける物は無いのか？」
「ご心配無く」
『Ｉｎｓｔａｌｌａｔｉｏｎ』
突如、彼女の目が輝くと、機械の音声で「装着」と言う言葉が放たれた
すると彼女の体には蒼いスーツが覆った
「これで問題は無い筈ですが？」
「そ、そうだな・・・」
未だ少し問題は有る様だが、とりあえず裸よりは幾分はましである
「それでは、他の子達も起こす事は出来るのかい？」
「いえ、まだ「チンク」までの子達しか目覚めさせる事は出来ません・・・他の子達は完成途中で破棄されてしまい未完成です」
「酷い話だ」
私は思わず呟いた
すると、女性は首を傾げた
「何故そんな事を言うのです？我々は失敗作なのです。破棄されて当然です」
「それは違う！君達は生まれ方は違ったとは言えこうしてこの世に生を受けた人間に他ならないんだ！！」
「・・・良く分かりません」
女性は首を傾げたままであった
私は仕方ないなと溜息をつく

「とと、そう言えば自己紹介をしてなかったね」
「存じております、我等が主のジェイル・スカリエッティ博士にルーテシアお嬢様ですね」
女性が私とルーテシアの名を呼ぶ
それに私は驚く
「どうしてそれを？」
「貴方が装置を操作する際に貴方の指紋を通して情報がインプットされたのです。それで、我々はどうすれば良いのでしょう？」
「とりあえず、今目を覚ませる子達を起こそう」
「分かりました」
女性は頷くと行動を起こす
「ちょっと待ってくれ、君の名前は何と言うんだ？」
ふと、私は聞き忘れたので聞く事にした
すると女性は振り返る
「私に名前などありません・・・それでも呼ぶと言うのでしたらどうぞ「ウーノ」とお呼び下さい」
「ウーノか・・・分かった」
私は頷いた
これこそが、後にナンバーズと呼ばれる女性達との出会いであった

程なくして、残りのメンバーであるドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンクが目覚めた
「今目覚められるのはこれで全員です」
起こしたメンバーを紹介しながらウーノが言った
それを聞いて私は頷いた
「一つ聞かせてくれないかしら？何故私達を起こしたの？」
「その通りだ、我々は失敗作と烙印を押された身だ。それを何故起こす必要があるのだ？」
ドゥーエとトーレが聞く
それに私は答える

「以前ウーノに言ったと思うが、君達は生まれ方が違うだけで立派な人間と変わり無いんだ」
「良く分かりません」
「我々にはその様な機能は備わっておりません・・・どうすれば良いのでしょうか？」
クアットロとチンクが頭を抱える
無理も無い、
彼女達は言ってしまえば生まれたばかりの赤ん坊なのだ
生まれたばかりの赤ん坊に補助無しで立てと言ってるような物だ
そんな事出来る筈は無い
それと同じなのだ。だとすれば私が彼女達を導いてやらねばならないのだろう
「君達に一つ言っておく事がある。君達は失敗作でもなければ、私の所有物でも無い。言ってしまえば君達は私の「娘」とでも思ってくれ」
「娘・・・ですか？」
ウーノがふと呟く
それに他のメンバーも動揺しだす
恐らく初めての感覚なのだろう
今までの物達のような事を言わないのに度肝を抜かれたようだ
「それで、娘とはどの様な事をすれば良いのでしょうか？」
「まずは君達のしたい事をしてみるんだ。それからだよ」
私がそう言うと彼女達はお互いに話し合う
恐らく少しパニックを起こしているのだろう
無理も無いか
そう思いながら私は気長に彼女達に教えていこうと思った

＊＊＊

ロストナンバーズの5人を起こして数日が経った
彼女達は順調に感情が芽生えて来たのが分かった
しかし、見てみると皆バラバラである
例えば、ウーノは冷静なのだが、ドゥーエは何処か斜めに構えた癖があり、トーレは少し短気であったり、クアットロは少々茶目っ気があり、チンクは少々引っ込み思案のようである
てんでバラバラな性格の集まりであった
そんな彼女達を見ながら、私は作ろうと思ってるロボットの設計図を書いていた
幸い此処には製作に必要な物資も設備も整っている為それ程苦労する事は無かった
すると
「見てドクター！私こんな物を作ったんですよぉ♪」
そう言ってクアットロが空中に浮んでいる浮遊物を指差した
「ほぉ、あれは一体何だい？」
「あれは「ガジェット」と言うのよ！私の思い通りに動くとっても素敵な私の傑作なのぉ♪」
クアットロはとても嬉しそうに言う
それを見て私もフッと笑う
「ほぉ、そりゃ凄い」
私は率直な感想を述べる
するとクアットロは飛び上がるように喜んだ
子供の成長は早い
つい数日前までまるで機械のようであったのが今ではまるで人間その物であった

そして、視点を移すと
「はぁぁぁ！」
「てやぁぁ！」
トーレとチンクがそれぞれ模擬戦を行っていた
トーレが両手と両足から輝く翼の様な物を展開させており、チンクは両手に小振りのダガーナイフを持って一斉に投げつける
どうやら二人は戦闘がメインのようだ
「ふむ・・・二人共、ＩＳに頼るのは良いが頼りすぎるのは駄目だ。もっと自分の肉体を使って戦うんだ」
「はい、ドクター」
「分かりました！ドクター」
二人は返事する
しまった！つい昔の癖が出てしまった
こうして目の前で模擬戦をしている二人を見ると、思わず鉄也との特訓の日々を思い出してしまう
あの頃もこうして鉄也に戦い方を教えていた物だ
そう思うと何処か懐かしい
そう思っていると、ふと私の背後に鋭い爪がつきたてられた
「ふふふ、ドクター・・・油断してると後ろからザックリですよぉ」
「む、ドゥーエか・・・それは怖いな。肝に銘じておこう」
内心ドキリとはしたが、これはドゥーエなりのスキンシップなのだ
彼女は少し斜めに構えており、こうした感じで私に関わってくる
まぁ初めは何度か切られそうになったが今はどうにか慣れた物だ
「こらドゥーエ！ドクターに武器を向けてはいけないと何度言ったら分かるの！」
「あらいけない！お姉さまに見つかっちゃったわぁ」
額に青筋を浮かべるウーノを見てドゥーエはテヘッとした顔をしながら脱兎の如く逃げ出す
そんなドゥーエを見てウーノは溜息をつく
「大変そうだな、ウーノ」

「いえ、妹達の指導は姉として当然ですから」
「ははは、頼もしい限りだよ」
私は軽く笑う
そして、再び設計図の作成に取り掛かる
だが、此処で良く陥る事に嵌ってしまった
それは、ネタ切れである
「むぅ・・・どうもアイディアが浮ばんな・・・少し施設をぶらついてくる・・・ウーノ、妹達を頼むよ」
「はい、ドクター」
ウーノは答える
私はそれを聞いて部屋を出る
とりあえず、ルーテシアの元へ行って見るか
そう思うと足が勝手にその先へ向かう
だが、その時ふと足が止まる
なぜかというと、目の前をルーテシアが歩いていたからだ
「あれは・・・どうしたんだ?」
私はふと疑問を感じ後を追った
そして、見ると、そこには1人の女性がカプセルの中で眠っていた
「母さん・・・待っててね・・・絶対に起こしてあげるから」
ルーテシアはまるで話しかけるようにカプセルに語る
「それは君の母さんかい?」
「あ、ドクター」
「すまない・・・途中で見かけてね」
「そうなんですか・・・」
事情を聞いてルーテシアは母の入ったカプセルを見る
「彼女は・・・何故眠っているんだい?」
「母さん・・・あの人達の実験のせいで目を覚まさないの」
「なっ!」
それを聞いた私は目を見開いた
その間もルーテシアは続ける

「あの人達は、今作ってる機械の怪物を使って、この世界に住んでる人達をみんな殺すって言ってるの」
「そ、それは本当なのか？」
「うん・・・お母さんはその実験に使われたの・・・」
ルーテシアはそう言って悲しそうな顔をする
本当なら泣きたいのだろう
だが、それを彼女は押し殺しているのだ
そんなルーテシアの前に私は肩膝を付く
「無理はしなくて良い」
「ど、ドクター？」
「泣きたい時は思い切り泣くと良い・・・でないと、心が潰れてしまう」
「ど・・・ドクタァ・・・う・・・・・うううう・・・・」
ルーテシアは私の胸に蹲るように顔を埋めて静かに肩を震わせた
そんなルーテシアに気づかれないように私はカプセルに映る自分の顔をみた
其処には、怒りで豹変した私の顔があった

＊＊＊

その日を境に、私はある計画を立てた
それは、私が作り上げた苦心のロボットでこの施設を破壊する事だ
だが、決して向こうに悟られてはならない
私はあらかじめこの部屋にあるカメラの位置を全て把握し、あたか

も機鋼獣を製造していると見せかけてその間を縫って反抗の機を狙っていた
そして、決行の日は実に一ヶ月先となった

「諸君、準備は出来てるな?」
「ぬかりはありません!ドクター」
「いつでもいけまぁす!」
私は自分が建造した移動要塞「スカイホエール」の最終チェックを行っていた
此処でぬかりがあってはそれこそ水の泡である
「よし、私は作戦通りシュラに新兵器のお披露目としてくる・・・お前達はその間に目覚めていない他のメンバーを運び込んでいつでも飛び立てる準備をしておくんだ」
「分かりました」
ウーノは返事をする
私は頷いてブリッジを出た
時は来た
奴らの思い通りには決してさせん!
これ以上、ルーテシアのように涙を流す子を増やさぬ為に、この世に生まれようとする悪の芽は叩き潰す

「流石スカリエッティ博士だ!もう完成したと言うのか?」
「ああ、これからその実戦テストを行う」
そう言う私の横には一台のバイクが置かれていた
他には何も無い
「おい、まさかそのバイクだけでは無いだろうな?」
「馬鹿を言え!そんなわけないだろう」
そう言って私はバイクに跨りエンジンを掛ける
そして、息を深く吸い、目を開いて叫ぶ

『マジィィィンゴォォォォ！』

すると、背後から巨大な機械の巨人が現れた
全長は１６ｍ位あり、所どころがマジンガーＺに似ていた
だが、所々が違う
これこそ、私がこの世界で作り出した「エネルガーＺ」なのだ
「さて、動いてくれよ。パイルダー」
私は話しかけるようにバイク型のパイルダーにそっと呟く
そしてグリップを握り大きくターンしてエネルガーの背後に回る
すると、背中にあった台がパイルダーを導くように下がってくる
「パイルダァァァオオオオオオオオン！」
そして、パイルダーがエネルガーの頭部とドッキングする
「エネルガアアアアアアアアア、ゼエエエエエエエエエエット！！！」
叫びと共にエネルガーが咆哮する
成功だ！エネルガーは私の思い通りに動く
「おぉ！素晴らしいぞスカリエッティ博士！これで我々のミッドチルダ征服も容易になったと言う物よ」
シュラが大いに上機嫌で笑う
だが、
「悪いがそれは無理だな」
「何！それはどういう事だ？」
「何故なら・・・今から私がお前達の野望を打ち砕くからだ！」
そういうと突如エネルガーの目から閃光が放たれた
光子力ビームだ
光子力ビームは付近の壁を融解させて爆発させる
ある程度光子力ビームを放つと発射を止めて今度は腕を突き出す
「ロケットパァァンチ！」
今度はその腕がロケットの如く飛び立つ

飛び立った腕は壁や天井を突き破って破壊する
「おおおおおおおおお！な、何をするスカリエッティ博士！貴様
血迷ったのか！！」
「私は至って正常だよ！だからこそお前達を許さないのだよ」
そう言ってエネルガーは外に飛び出す
「い、いかん！何とかせよ！今出せる機鋼獣は無いのか！」
シュラが近くに居た機鋼兵に怒鳴る散らす
その間、エネルガーは

「光子力ビィィィム！！」
エネルガーの放った閃光が建造途中であった機鋼獣を切断し破壊する
エネルガーの暴れ振りは凄まじい物であった
まだ製作途中であった機鋼獣は次々と破壊されていく
そして、破壊していく中で、私は探し物をしていた
「ルーテシア！何処だ！！」
そう、ルーテシアを探していたのだ
彼女をこれ以上此処に置いていくわけにはいかない
すると、炎の中を彷徨うルーテシアが居た
口元を手で押さえて苦しそうにしている
「ルーテシア！」
私はエネルガーの肩膝を下ろしパイルダーから降りる
「ルーテシア！無事だったのか？」
「ドクター！お母さんが・・・お母さんが連れて行かれちゃう」
「何！」
「あの人達・・・お母さんを別の実験に使うって言って何処かへ連
れて行っちゃったの！」
「分かった！必ず助け出す・・・だから今は・・・」
言葉の途中で私はふと上を見た
見ると、ルーテシアの真上から一本の大きなガラスの破片が降って
きたのだ

「危ない！」
咄嗟に私は彼女を庇うように振ってくる破片に背を向ける
グサリと嫌な音が響く
恐らくガラスの破片が深く突き刺さったのだ
「グアァッ！」
私は悲痛の声を上げる
「ど、ドクター！！！」
ルーテシアはそんな私に叫ぶ
「だ、大丈夫だ・・・それより、早くエネルガーに乗るんだ！」
私はそう言って背中に突き刺さった破片を抜き取る
抜いた背中から血が吹き出る
激痛の余り意識を失いそうになる
だが、此処で倒れ訳にはいかない
崩れそうになる体に喝を入れて私はパイルダーに乗り込む
そして破壊を進めながらルーテシアの母を捜す
そして、とある部屋に入り込む
其処には、ナンバーズのように作られた戦闘機人達がクラゲのような怪物の餌として食われている光景であった
「ルーテシア！見るな！！」
余りにも凄惨な光景であった為、咄嗟に私はルーテシアの視界を塞ぐ
声こそ聞こえないが皆悲痛の顔を浮べながらその怪物「ケドラ」に食われていく
私は操縦桿を握る手に力を込める
「許さん・・・許さんぞぉぉ！！！お前達だけは生かしてはおかん！この場で滅びろ！！ブレストォォファイヤアアアアア！」
エネルガーの胸の放熱板から熱線が放たれた
その熱線はその場に居た全てのケドラを炭に変えていく
そして、変えたあと残っていたのは焦げた部屋だけであった
「がはぁっ！」
その直後、私は口から大量の血を吐き出した

先ほどの傷が今の私には致命傷なのだろう
「ドクター！」
「だ、大丈夫だ・・・この程度で死にはしない・・・それより・・・」
それよりなんとしてもルーテシアの母を助けなければ
そう思って踵を返す
「そうはさせんぞ！」
その時、シュラの声が聞こえた
目の前には小さな円盤に乗ったシュラと機鋼獣ガラダブラが居た
「フフフ、こいつだけは完成していたのだ！行けぃ！裏切り者を殺せ！！！」
シュラが命じるとガラダブラが向かってくる
大きさはガラダブラの方が2倍近く大きかった
その上、このエネルガーは急ピッチで作った為未完成な部分が多かった
正直勝てるかどうか分からない
その上今こちらにはルーテシアが居る上に自分は負傷しているのだ
最悪な状態であった
「くっ・・・やむをえんか・・・」
覚悟を決めた私は一気に距離を詰めてガラダブラを鯖折りのように掴む
「むっ！何をする気だ！」
「すまんな、エネルガー・・・お前をこんな使い方をしてしまって・・・」
辛い気持ちを抑えながら私は装置を操作する
そして、エネルガーからパイルダーを分離させる
そしてそのまま反転させて一気に2体から離れた
「おのれ！逃すな！なんとしても奴を殺せ！」
シュラが命じる
ガラダブラはその命を受けてめから無数のニードルガンを放つ

私は咄嗟にルーテシアを前に移しスピードを上げる
そしてジグザグに走りながらニードルガンをかわす
すると、エネルガーから猛烈な光が発せられる
「ま、まさか!これは・・・自爆する気だったのか!!!」
シュラがそれに気づき青ざめる
だが、時既に遅しであった
シュラの面前を閃光が包むその光景をルーテシアは見ていた
「す・・・凄い・・・あれなら大丈夫だよね・・・ドクター」
ルーテシアはそう言う
だが、その直後ルーテシアにもたれかかるように私は倒れてしまった
「え?ドクター・・・どうしたの?ドクター・・・・はっ!」
その時、ルーテシアはハッとした
私の背中には数本のニードルが突き刺さっていたのだ
それが原因で私は意識を失い、コントロールを失ったパイルダーは
そのまま壁に激突してしまい大破
私とルーテシアは投げ出されてしまった
「うぅっ!」
咄嗟に・・・それともその時意識があったかは定かでは無いが、
あの時私はルーテシアを腕の中に抱えて衝撃から守った
「ドクター!ドクター!!返事して!!ドクタアアアアアアアアアアアアアア!!!!」
ルーテシアは必死に私の体をゆする
だが、重傷を負い意識を失った私には答える気力などなくそのままであった
「ドクター!」
「無事ですか?ドクター」
其処へ帰りが遅いと思って駆けつけてきたトーレとチンクが負傷した私とルーテシアを発見する
「ど、ドクター!」
「くっ、チンク!!お前は彼女を・・・私はドクターを運ぶ」

「は、はい！」
チンクは頷き急いでルーテシアを抱える
トーレは私の腕を肩に回して急ぎその場を後にする

＊＊＊

その後の事は分からない
話しによると、私はその後1ヶ月間は生死の境を彷徨っていたようである
そして、それから4年後、私は息子達と出会うのであった

外伝7　博士の過去（後書き）

結構カッコイイ博士を書きたくて書いてみましたどうだったでしょうか？感想待ってます

兄と妹　中篇４（前書き）

今回ヴィータの弱点が明らかに

兄と妹　中篇４

「それは本当か？シャマル」

シグナムの声が部屋内に響いた
周りにはシャマルの他にヴィータとザフィーラが居る
今この場に剣児、つばき、大介、はやての姿は無い
彼等は今はやての友人に紹介を受けているのだ

「間違い無いわ・・・此処にある廃墟になった地下鉄内に膨大な魔力反応を感知したの！量からして・・・闇の書のざっと３０ページ分にはなる筈」
「そりゃ良いぜ！早く行って蒐集しようぜ！」

ヴィータが居ても立っても居られなくなり立ち上がる
だが、そんなヴィータをザフィーラが止める

「まて、この事を大介達に話さなくて良いのか？」
「彼等の協力を得られないのは痛いが、致し方ない・・・今あいつらは主はやてのご友人と話している最中だ。下手に刺激すれば主はやてが悲しむ」

シグナムの言う事も最もであった
それを聞いたザフィーラも決心を固める

「ならば、動くか？」
「ああ、早いに越した事は無い、何としても書を完成させて主はやてに掛けられた呪いを解かねばならないからな」

シグナムも立ち上がる

「その蒐集はあたしに任せてくれ！狭い場所なら小回りの効くあたしの方が有利だしな」

「そうね、今回私達はバックアップに回るわ」

ヴィータとシャマルもそう言って立ち上がる

「行くぞ！！」

そう言うや否や、四人の姿はその場から消え去った

＊＊＊

「すずかちゃん、紹介するな！この人等が今家でお世話しとる人等なんや」

その頃、はやては行き着けの図書館で大介達と一緒にすずかに会っていた

「は、始めまして・・・月村すずかと申します・・・えと、大介さんとは以前お会いしましたよね」

「勿論だよ。あの時は大した挨拶が出来なかったね」

大介はそう言って優しく微笑む

「でもよぉ、何で俺達が図書館にこなきゃならねぇんだ？俺読書苦手なんだよなぁ」

横では剣児がぶつくさ言っていた
そんな剣児の尻をつばきが抓る

「いでぇっ！」
「馬鹿、少しははやてちゃんの気を使ってあげなさいよ！」
「わ・・・悪ぃ・・・（汗」

思わず涙目になる剣児

「あ～あ～、見ちゃいらんないねぇ、女の尻に敷かれるなんてよぉ」
「何だとてめぇ！」

その光景を笑っていた明に剣児は睨みつける

「あわわ、け、喧嘩しないで下さいよぉ！」
「こら！二人とも喧嘩は止めぃ！」

すずかとはやてが割って入ったお陰でどうにか二人は納まった

「でも、はやてちゃんの家って賑やかだねぇ」
「いやぁ、最近は喧しくて寂しがってる暇すら無いわぁ」

はやてはニッコリ笑って言う
その後も二人は互いに何気ない会話を楽しんでいた
やがて、時が経ち家路に着こうとしていた

＊＊＊

甲児は一人図書館に来ていた

「ふ～、無限書庫も良いけど此処の図書館も中々品揃えが良いなぁ」

甲児の手元には数冊の分厚い本が持たれていた
そのどれも難しい内容のタイトルばかりである

「さて、帰って読むとするか」

そう思って停めてあったバイクに向かおうとした時、ふと甲児はある場所を見た
其処には

「ありゃ？あれって・・・もしかして」

其処には大介に車椅子を押されているはやてと剣児達の姿があった

「おおおおおおおい！大介さあああああああああああん！」
「ん！あれは・・・」

大介達は声のした方を振り返った

すると、其処には手を振りながらやってくる甲児が居た

「甲児君！君なのかい？」
「やっぱり大介君か！」

甲児と大介は互いに硬い握手を交わす

「お！大介君の知り合いなん？」
「ん？・・・（はやて！・・・って事は近くにシグナムさん達が居るのか？」

甲児は黙ったまま回りを見回した
だが、周りから視線は感じられない
すると、

「よう、久しぶりだな甲児」
「お前、明か！久しぶりだなぁ！元気だったか？」
「当たり前だろう！この俺がそう簡単にくたばると思ったのか？」

明がフッと笑う
それに甲児も笑い返す
そんな時

「おい、俺は無視か？てめぇ」

剣児が甲児に対しメンチを切る

「あぁ、悪かったな・・・んで、お前誰だ？」
「人に名前聞く前に自分から名乗れってんだよ」
「何だとてめぇ・・・」

剣児と甲児が互いに睨みあう
二人の目から激しい火花が飛び散る

「ほら馬鹿剣児！さっさと帰るわよ！」

つばきはいがみ合う剣児の首根っこを引っ掴んで持ち上げる

「ば、馬鹿野郎！俺は猫じゃねぇんだぞ！降ろせつばきいいい

「だ～、腹減ったぜ～」

剣児が玄関に靴を投げ出して呟く

「剣児、ちゃんと靴並べなさいよ！」
「んなの面倒だからやってられねぇよ」
「もう！」

ブツブツ言いながらも剣児の靴を直すつばき
その前に剣児に鉄拳制裁を行ったのは言うまでも無い

「だ、大丈夫かい？剣児くん（汗」
「分かっててやるんだからなぁお前は」

それを見ていた大介と明が呆れる
すると

「あれ？シグナム達居らへんやん！」

部屋の方からはやての声が聞こえた
それを聞いて大介達は「まさか」と思い急いで部屋に来た
其処にははやての言った通りもぬけの殻となっていた

「あいつら・・・」

明はバツの悪い顔をする

「どうする？」
「急ぐぞ！恐らくそう遠くに行ってない筈だ！大介は此処ではやて

を守っててくれ」
「分かった！」
そう言うと明と剣児達はシグナム達を追って外に出た

＊＊＊

「おかしいと思わないか？」
「だな・・・どうもきな臭いな」
クロノとジョニーはそれぞれ地下施設から映し出される映像を見て呟く
「どう見てもこんな廃墟になった地下鉄にこれ程の強力な魔力反応が出るのはおかしいだろう」
「だとすると・・・これは罠って危険性が高いね」
横に居たロッテが呟く
「となると、ヴォルケンリッターはこの情報に乗って向かったのでしょうか？」
リーゼの問いにジョニーは重い顔をする

「だとしたら不味いなぁ・・・連中の狙いは「夜天の書」だ。それに此処では狭すぎる為に一人ずつしか入れないだろう・・・罠に追い込むには絶好の場所だな」
「すぐに僕が向かいます」

クロノがそう言って転送の準備を進めるだが、

「待ちな、そう言うのは俺の役目だぞ」

クロノの肩を掴んでジョニーが言う

「ジョニー・・・」
「それによぉ、お前の魔法は広域型が殆どだろう?そんなのあんな狭い場所でぶっ放したらそれこそおじゃんだ!それにお前は此処の指揮官って役目があるだろうが!だからお前は此処でふんぞり返って俺に指示を送ってくれよ」
「ジョニー・・・有難う」

クロノは軽く頭を下げた

「頼むぜ、若大将」

笑顔でそう言ってジョニーは転送装置に入り姿を消した

＊＊＊

その頃、ヴィータは1人薄暗い荒廃した地下鉄を歩いていた

「・・・・・」

ヴィータはグラーフアイゼンを持つ手が震えていた

「は・・・はやては命の危険に晒されてるんだ・・・それに比べたら・・・こんなの・・・こんなの・・・」

ヴィータは自分に言い聞かせる

「怖くねえぞ・・・怖くねえぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

と、大声で叫ぶ
その時、突如付近の瓦礫が崩れる

「ヒィッ！！！」

その音を聞いてヴィータは震える
だが、音の正体が瓦礫だと分かり地団駄を踏む

「ち、畜生！脅かしやがってぇぇ！」

怒ったヴィータはアイゼンを壁にぶつける
どうやらヴィータはオバケが苦手の様だ
その時

「やれやれ、噂のヴォルケンリッターの女子はオバケが苦手のようだなぁ」
「ギャアアア

り・これはお前等をおびき出す為の罠だって事だよ！分かったか？
お穣ちゃん？」
「う・・・・」

ぐうの音も出なかった
まさに此処にいる執務官の言うとおりであった
自分達はまんまと騙されたのだ
しかも逃げようにも道は分からないし、目の前に居る執務官は明らかに強い、まともに歯向かえば勝ち目が無いのは事実であった

「さてと、そんじゃさっさと帰るとするか・・・ん？」

ヴィータを連れ帰ろうとした時、彼女の後ろにあった水溜りに異変を感じた
何も生き物が居ないにも関わらず其処から水泡が出ていたのだ
そして、その水泡を見てジョニーは咄嗟に危険を感じた

「危ねぇ！退けガキ！」

ジョニーは咄嗟にヴィータを横にどかす
突然そうされたのでヴィータは思わず尻餅をつく

「いてぇ！な、何しやがるんだ・・・・な！」

ヴィータはジョニーを見た時、思わず目を見開く

「ぐわあああああああああああああああああああああああああ！！！」

其処には、ジョニーの頚動脈に噛み付く異形の顔があった

「カッカッカ、中々見上げた奴だ女を救う為に自らを犠牲にするとはなぁ」

異形はジョニーの血を啜りながら笑う

「ぐぅ・・・き、貴様ぁぁ・・・」

「て、てめぇ!!今助けるぞ!!!」

「来るな!」

ヴィータが助けに来ようとしたのをジョニーは止める

「此処は俺が食い止める!だからお前はすぐに此処を出ろ!ここはこいつのテリトリーだ!此処を出ないとお前もこいつの甲羅の一部になるぞ!」

「甲羅の・・・一部?」

ヴィータは疑問に思い異形の甲羅を見た

其処には、無数の人の顔が甲羅に張り付いており、苦痛に歪んだ顔をしていた

「う・・・うわあああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

ヴィータはその甲羅を見て思わず悲鳴を上げた

恐怖であった

ベルカの騎士として今まで戦って来たが、これ程までの恐怖を感じたのは生まれて初めてであった

「逃げろ!早く・・・逃げろおおおおおおおおおおおおおおお!」

ジョニーは掠れた声で叫ぶ
ヴィータは崩れた腰を必死に立て直す
そして、苦しむジョニーを見る

「お前・・・何であたしを助けてくれるんだよ?」
「へ・・・へへ・・・俺には妹が居てなぁ・・・丁度お前と同じ年位だからよぉ、つい助けちまった訳さ・・・モタモタしてねぇでさっさと逃げやがれ!」
「くっ・・・すまねぇ!!!」

ヴィータは踵を返し、額を拭って走り去った

「カッカッカ、ますます見上げた男だ・・・お前はこの私の甲羅に相応しい男だなぁ～」
「へ、そうかい・・・だがな・・・そう簡単に俺を・・・食えると思うなよ!」

そう言ってジョニーは自分の持っていた剣状のデバイスのあるスイッチを押す
するとデバイスが赤い色を発する

『Ｓｅｌｆ－ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ｄｅｖｉｃｅ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎ.』

機械的な音声が聞こえると、突如デバイスから高エネルギーが発せられた

「なっ!貴様・・・まさか!」
「すまないな・・・レアンヌ・・・お前を1人にしちまうな・・・

クロノ・・・後は頼むぜ・・・」

ジョニーがそう言い終わった直後、激しい閃光と爆発が二人を包み込んだ

兄と妹　中篇４（後書き）

続く

多分次で終り

兄と妹　後編（前書き）

ジョニーの運命は！！！

兄と妹　後編

甲児は本部に帰還した際に皆の慌てように疑問を感じていた
何かあったのか？そう思えたのだ
敵襲にしては慌てようが尋常じゃない
特にクロノに至っては真っ青になっていた
横に居たリーゼとロッテも信じられないと言った顔をしていた
皆一体どうしたんだ？

「何かあったのか？」

甲児は手っ取り早く付近の局員に話しかけた
その局員も顔を真っ青にしており口をパクパクさせている
駄目だ、他の人は・・・って、皆同じだった
どの局員も真っ青になっている
これでは話しを聞くことも出来ない

「ど、どうしたんですか？」
「一体何の騒ぎですか？」

さっきまで無限書庫で寝息をかいていたなのは達が異変に気づきやってきた
そのなのは達も局員の青ざめた顔を見て只ならぬ事だと思っていた

「どうしよう？甲児さん・・・」
「しゃぁねぇ、俺達だけでも行くぞ・・・ところで、鉄也さんとアリシアちゃん達は？」
「えっと・・・鉄也さん達は・・・」

その頃、鉄也達は

「むぅ・・・中々見つからんなぁ・・・」

1人山積みにされた本と格闘していた
そしてアリシアとアルフはと言うと

「「あうううううう・・・・」」

頭から猛烈に煙を出してダウンしていた
3人供無限書庫で必死に情報を探していたのだ
その光景を見てユーノが苦笑いを浮かべる

「と、言う訳なの！」
「私達はお腹が空いたからご飯を食べに出た時に騒がしいなと思って来たの」
「な・・・成る程なぁ（汗」

甲児は半ば納得した気になった
確かに、鉄也は一度熱が入ると中々止めない性質なのだ
こないだもプラモを作っていたが、丸一日そのままの姿勢で作り続けていた（１００体分位）
今の鉄也は梃子でも動かないだろう

「うっし、それじゃ俺達だけで行くぞ！」
「うん！」
「はい！」

仕方なく甲児はなのはとフェイトを連れて転送ポートに乗り現場に向かった

＊＊＊

その頃、ビックシューターもヴィータ達が向かったと思われる現場に向かっていた

「ったく、あの馬鹿共が！」

後部座席に座っていた明が愚痴る

「急げつばき！でねぇとあいつらが不味いぞ！」

「分かってるわよ！これでも最高速なんだから！」

剣児が剣幕を飛ばすのを返すつばき

そんな感じでビックシューターは現場へ向かう

そうしている時、ヴォルケンリッター達はと言うと

「おかしい、何時まで待ってもヴィータから定期連絡が来ない」

一向にヴィータから連絡が来ない事にシグナム達は疑問を感じていた

「何かあったのか？」
「そんな！すぐに助けに行かないと」
「待て！」

心配になるシャマルをシグナムが止める
見ると、入り口の方からヴィータが出てきたのだ

「ヴィータ！」
「無事だったのか？」

一同はヴィータの元へ来る

「うう・・・ち・・・畜生・・・」

シグナムはヴィータの変化に気づいた
泣いていたのだ
あの強気なヴィータが涙を流すのは余程の事だ
一体何があったのか
そう聞こうとした時、突如背後から振動が起こった

「何だ！！」
「アイツ・・・まだ生きてたってのかよぉ！！！」
「どう言う事？ヴィータちゃん」
「とにかく、今は一旦引くぞ」

ザフィーラの言葉を受けて一同は一斉に上空に避難する
すると、地下鉄を破壊して、その中から巨大化したジンメンが現れた

「カッカッカッカ、驚いたよ・・・まさかあんな大胆な事をするとは思いもしなかったからなぁ」

そう言ってるジンメンの体には傷一つついていなかった

「て・・・てめぇ！何で・・・何で居るんだよ！」
「カッカッカ、どうしたんだ？お前からは恐怖が感じられるぞぉ？
素晴らしいなぁ、我等デーモンにとって憎しみと恐れは誇りだぁ！
もっと俺を恐れてくれ！もっと俺を怖がってくれぇ！」

そう言ってジンメンは背後を向く
そしてシグナム達に自分の甲羅を見せる
其処には、今まで自分が葬ってきた管理局局員達の顔が張り付いていた
そのどの顔も苦痛に歪んでいた

「な・・・何だと・・・」
「ひ・・酷い・・・」
「ぐ・・・惨い事を・・・」

その光景にシグナム、シャマル、ザフィーラは顔を強張らせる

「カッカッカ、お気に召したかな？私の美しい甲羅は？」

自分の甲羅を誇らしげにジンメンは言う

「ヴィータちゃん！」
「シグナム！」

其処へ、なのはとフェイト、そして甲児とマジンガーZがやって来た

「って、何だあの化け物は！！」

甲児は目の前に居る巨大なジンメンを見てそう言った
そして、そのジンメンの甲羅に映る顔を見て3人は絶句した

「な!!!あれは・・・」
「い・・・いやあああああああああああああああああああ!」
「きゃあああああああああああああああああああああ!」

ジンメンの甲羅を見てなのはとフェイトは絶叫した
その声を聞いてジンメンはなお嬉しそうな顔をする

「カッカッカ!聞こえるぞ!俺の甲羅を見て悲鳴を上げる声が・・・何とも心地良い響きだ・・・もっとこの俺の甲羅を見てくれ!」
「て・・・てめぇ・・・あの時の・・・あの時の執務官はどうしたんだ?」

ヴィータが不快感を抑えながら聞く

「あぁ、アイツかぁ・・・アイツならほら・・・丁度真ん中の辺りに居るぞぉ♪」

そう言って指差す先には、ジンメンにより取り込まれたジョニーの顔があった

＊＊＊

本部内では、ジンメンに取り込まれたジョニーの顔がアップで映し出されていた

「な・・・・ジョニー・・・・」

「嘘・・・そんな！！」

クロノは目元を震わせて、エイミィは口元を押さえていた

そして、

「に・・・兄さん・・・いやあああああああ

「カッカッカ・・・どうだ?美しいだろう?お前等も俺の甲羅に加えてやる!」
「ふざけんな!そんなのお断りだ!」

そう言って甲児はマジンガーに命令を送る
その命を受けてマジンガーは目から光子力ビームを放つ
ジンメンはそれを背中で受ける
受けた箇所の顔がはじけ飛び、肉片が飛び散る
そして、その横に居た顔が叫ぶ

「ぎゃあああああああああああああああああ!」
「人殺しいいいいいいいいいいいいいいいい!」
「この、悪魔あああああああああああああああ!」

「う・・・」

甲児は思わず攻撃の手を止めた
出来ない、攻撃出来ないのだ
何故なら・・・何故なら

「カッカッカ、お前は酷い奴だなぁ・・・こいつらはこうして俺の甲羅に張り付いているとは言え自分の意識を持っているのだぞぉ!それをお前は殺したんだ・・・お前は俺達以上の悪魔だなぁ・・・カッカッカ♪」

ジンメンは上機嫌に笑う

「何をほざく!貴様だって大勢の人を殺したんじゃ無いか!」

シグナムが言う

だが、ジンメンはかぶりを振る

「それは違う・・・俺は殺してない。俺は「食った」だけだ！生き物が食うのは自然の摂理なんだぞ！お前達人間のように己の欲求の為に殺しはしない・・・俺は言わば自然の摂理に従ってこいつらを食っただけなんだ・・・あぁ、何て俺は偉いんだろう♪」

「て・・・てめえええええええええええ！そのために・・・その為にあいつを食ったって言うのかよおおおおおおおおおおおおお！」

ヴィータは涙して叫んだ

「お・・・穣・・・・ちゃん・・・」

「お・・・お前・・・」

ジョニーがヴィータに向けて言葉を放った

「た・・・頼む・・・・お・・・俺を・・・俺を・・・・・・・・・・・・殺して・・・・・・・くれ・・・・・・」

ジョニーがヴィータに頼んだ事・・・それは自分の人生に終止符を撃つ事であった

このままジンメンの甲羅の一部として生きていく位ならいっそ死んだ方がマシと言った事なのだ

だが、ヴィータには出来なかった

「出来ねぇ・・・・そんなの・・・あたしには・・・・あたしには出来ねえよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「頼む・・・・・俺を・・・」

「言うな！言わないでくれえええええええええええええええええええええ

えええええええ！」

ヴィータが耳を押さえて叫ぶ
それを聞いてジンメンが鼻で笑う

「カッカッカ、情けないなぁ・・・それでもベルカの騎士かね？殺す事が出来ないのなら・・・俺が殺してやろう！」

ジンメンは耳を押さえて目を瞑っていたヴィータに向かって腕を伸ばす
５本の指には鋭い爪が伸びていた
それで引き裂かれれば人間ならば一溜まりもない

「ヴぃ、ヴィータちゃん！！」

なのはは叫ぶ
だが、ヴィータには届かない
今正にヴィータにジンメンの腕が届きそうになった刹那

「ナックルゥゥゥボンバアアアアアアアアア！！！」

ジンメンの腕をジーグのナックルボンバーが吹き飛ばす

「じ・・・ジーグ！」
「どうやら間に合ったみてぇだな！」
「け・・・剣児・・・」

ヴィータは涙目になって剣児を見た

「馬鹿野郎！てめぇら皆馬鹿野郎じゃねぇか！」

剣児が眉間に青筋を浮かべて怒鳴る
それにシグナム達は返す言葉が無かった

「アイツを心配してるのはお前等だけじゃねぇんだ！俺だってアイツの事を心配なんだよ！それに言ったじゃねぇか！俺も手伝うってよぉ！」
「シグナムさん・・・私達が頼りないのはわかります！でも、貴方達の主を思う気持ちは負けてないと思うんです！」

剣児に続きつばきも叫ぶ

「やはりてめぇか・・・ジンメン」

ビックシューターから降りた明はジンメンを見た

「カッカッカ、お前はアモン・・・嫌、デビルマンだな！」
「そうだ！貴様等デーモンを皆殺しにする為にこの世に生まれた悪魔・・・デビルマンだ！」

そう言って明はデビルマンに変身する
その姿は瞬く間にマジンガーと同じ大きさになった

「デビルマン」
「マジンガーZ・・・事情は後で話してやる！まずはコイツを片付けるんだ！」
「ああ、容赦しねぇ！」

マジンガーとデビルマンは互いにジンメンに向かって構える

「おい！俺を忘れるんじゃねぇ！」

其処に鋼鉄ジーグも加わる

だが、

『止めてえええええええええええええええええええ！兄さんを殺さないでえええええええええええええええ！』

「な！」

「この声は・・」

「レ・・・・レアン・・・ヌ・・・」

そう、甲児達の通信機から聞こえてきたのは妹、レアンヌの泣き叫ぶ声であった

それを聞いた途端甲児達は攻撃が出来なくなってしまった

いかに強大な力を持っていたとしても彼等は脆弱な人間なのだ

決して悪魔にはなれないのだ

それが彼等に隙を与えてしまう

「グハッ！」

突如デビルマンが吹き飛ばされる

肩から血を流していた

ジンメンの延びた腕がデビルマンの肩口を切り裂いたのだ

「デビルマン！野郎！！」

甲児がジンメンに向かって狙いを定める

だが、その視線に向かってジンメンは自分の甲羅を向ける

其処に映る無数の顔が甲児に攻撃の手を止めさせる

その隙にまたジンメンの腕がZの腹に突き刺さる

「ぐあっや、野郎！！」

マジンガーの腹に深く突き刺さった腕を必死に引き抜く
抜いた腹からオイルが流れる

「畜生！スピン・ストォォ・・・」
「おっとぉ！良いのかぁ♪」

そう言ってジンメンは甲羅を向ける

「ぐっ・・・」

甲羅を向けられては攻撃出来ない為剣児は攻撃の手を止める
するとまたジンメンの腕が伸びて今度はジーグの左腕を引き千切る

「ぐあああああああああああああああああああ！」

腕を千切られた衝撃でジーグは倒れる

「剣児！く・・レヴァンティン！」

シグナムはレヴァンティンを構えて突っ込んでいく
だが、其処でまた甲羅を向けられてしまい、其処に張り付いていた
顔が一斉にこちらを向く

「こ、殺さないでくれえええええええええ！」
「死にたくないいいいいいいいいいいい！」
「助けてくれえええええええええええええ！」

「う・・・」

それを見たシグナムは手を止める
攻撃出来ないのだ
シグナムはかつてはやてに誓いを立てた
それは決して人を殺さない事
その為例え死人であってもシグナムには手を掛けられないのだ

「カッカッカ、ベルカの騎士も甘くなったな！死ね！！！」

ジンメンは今度は長い舌を槍のように伸ばしてきた
シグナムは咄嗟にかわすも突如軌道を変えた舌により脇腹を掠める
するとジュゥと音を立てて掠った箇所に煙が上がる

「ぐあああああああああああああああああああ！」

苦悶の顔になって掠った箇所を押さえる

「カッカッカ、俺の唾液は全ての物を溶かす溶解液だ！掠っただけでもかなりの傷になるぞぉ」

ジンメンは勝ち誇った顔で言う
甲児達は苦虫を噛み潰した顔をしていた
そんな甲児達を助けたいと思うなのは達であったが、ジンメンの甲羅に対する恐怖と人を殺すと言う経験した事のない感覚を感じてしまうと言う恐怖に動けなくなっていたのだ

＊＊＊

甲児達の苦戦の映像は本部にも映っていた

「こ・・・甲児さん！」

クロノは呟く

その横では、レアンヌが決意を固めた顔をしていた

そして、通信機を取ると

＊＊＊

『なのはさん・・・聞こえますか？』

「この声は・・・レアンヌちゃん！」

なのはに向かって通信を送る

『お願いします・・・兄を・・・兄を・・・楽にしてあげて・・・下さい・・・』

「え？でも・・・私じゃ・・・」

『なのは・・・僕からも頼む・・・』

「クロノ君！」

レアンヌに続きクロノが答える

『今奴を一撃で倒せるのは恐らく君のスターライトブレイカーしかない・・・頼む・・・ジョニーを楽にしてやってくれ！』

クロノはなのはに頭を下げた

それを見たなのはは決心した

「カッカッカ、そろそろトドメを刺してやろうか！」

ジンメンはトドメを刺そうと負傷した甲児達に歩み寄る

その時、数発の魔力弾が放たれる

内の二発でジンメンの腕を吹き飛ばした

「な、何だ！」

ジンメンは魔力弾の放たれた場所を見た

其処にはなのはが全てのカードリッジをロードして魔方陣を展開していた

「な！貴様・・・分かってるのか？そんな事をすれば甲羅に居る奴らは死ぬんだぞ！」

「知ってるよ・・・だから・・・私が眠らせてあげるの」

なのはは重い声で答える

それを聞いたジンメンは慌てる

「き、貴様は・・・貴様は悪魔だ！俺達デーモン以上の悪魔だ！分かってるのか？お前は人殺しをするんだぞ！！」
「・・・悪魔でも良いよ・・・誰かを守る為なら・・・私は・・・喜んで悪魔になる！！」

そう言ったなのはの額からは止め処なく涙が溢れていた

「全力全開・・・スタァァァライトォォォブレイカアアアアアアアアアアア！！！」

レイジングハートから超ド級の魔力砲が放たれた
それをかわす時間はジンメンには無く、まともに食らってしまった

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」
（あばよ・・・ダチ公・・・レアンヌ・・・）

ジョニーはそう言い残し、光の中に消え去った
やがて、光が消えると、其処には頭部だけになったジンメンが居た

「ぐうううううううう！し・・・死にたくない・・・死にたくない・・・もっと生きるんだ！もっと生きて人間を食うんだ！」

頭部だけになってもしぶとく動くジンメン
その頭上にギガントシュラークを構えたヴィータが居た

「てめぇ・・・」
「ま、待ってくれ！そ、そうだ！俺の魔力を蒐集しろ！そうすれば３０ページは埋まるぞ！な？どうだ！良いだろう？」
「要らねぇよ！」

「へ？」
「てめぇの薄汚ぇ魔力なんざ要らねぇって言ってんだよおおお

皆が同じようにもがく
その時、大地に落ちた夜天の書を拾う者が居た
白い仮面を被った二人の男であった

「あ！あの人は・・・」
「知ってるのか？シャマル！」
「え、ええ・・・」

シャマルは知っていた
それは以前自分を助けてくれた者であった
仮面の男達はヴォルケンリッターを見る

「ご苦労だったな・・・これで我々の目的も一歩近づく」
「だが、お前達の存在は邪魔なだけだ・・・せめてハーデス様の力になれ！」

そう言って仮面の男が４人に向かって手を翳す
その時、

「はあああああああああああああああああ！」
「とおおおおおおりゃあああああああ！」

突如上空から声が響いた
二人はジャンプして飛びのく
その直後、アリシアとグレートマジンガーが降り立つ

「お待たせ！」
「済まない！遅くなった！！」

二人は謝罪する

二人の男は互いを見合う

「どうやら、邪魔が入ったな」

「その様だ・・・ここは帰還する方が懸命か」

そう言うと仮面の男達は夜天の書ごとその場所から消え去ってしまった

「ま、待ちやがれえええええええええええええ！ち、畜生おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ヴィータは悔しさの余り大地を叩いた

夜天の書が奪われてしまったのだ

次回予告

仮面の奴らが本格的に動き出しやがった！

俺達はヴォルケンリッターの人等と協力して奴らを倒す事にしただけど、あいつらかなり強い！

このままじゃやられちまう！

その時、虚空から現れた白い虎

アレは一体？

次回『友の遺産』

次回もこの小説にテイイイイイイイイイクオオオオオオオオオオフ！！！

兄と妹　後編（後書き）

疲れてたせいかあんまり上手くかけた気がしない
最近ネタ切れっぽい・・・（汗）

過去編　6話　悪夢（前書き）

激闘が始まる
果たしてゼノンはスバルを救えるのか？

過去編　6話　悪夢

トリスタンとイゾルデは都の元居た部屋に戻っていた
二人はまた巨大なソファーの上に座っていたのだ
そして、目の前の球体には魔神となったゼノン・・・いや、ゴッドマジンガーが居た

「フフフ、やっとその姿になったようだなぁ、それでなければ倒し甲斐が無いと言った物よ」

トリスタンが笑みを浮かべる

「そうねぇん♪あいつには散々煮え湯を飲まされてきたのだから・・・今回はあいつにも煮え湯を飲まさせてやりましょう♪」

イゾルデがそう言ってトリスタンに寄り添う
そんなイゾルデの肩をトリスタンが持つ

＊＊＊

其処は何も無い空間であった
只漆黒の闇が覆う
そんな中、スバルは逃げていた

何から逃げていたかは自分にも分からない
只、あれから逃げなければならないと本能が察していたのだ

【ナゼ・・・ニゲル？】

すると、背後から声と共に黒い姿の魔神が現れた
それはかつてスバルが夢に見たおぞましい姿のマジンガーと同じであった

「嫌・・・嫌だ・・・・嫌だ嫌だ嫌だ！！」

【ナゼ・・・コバム？・・・オマエハ・・・オレノ・・・】

「うわあああああああああああああああ！来るなあああああああああああああああ！！！」

スバルは大声で叫んだ
逃げたい、逃げ出したい！そんな気持ちが今のスバルを支配していた
今のスバルはバリアジャケットこそ身に着けているが、デバイスは破壊されてしまい自分の足で走っている

【ニガサン・・・オマエハ・・・コノオレノモクテキ二・・・・ヒツヨウナ・・・『パーツ』ナノダカラナァ】

そう言った直後、マジンガーから無数の黒い腕が伸びてきた
その腕は前を逃げていたスバルの両手両足を掴み上げる

「いやあああああああああああああああああああああああああ！は、離して！離してえええええええええええええええ！！！」

スバルは必死に逃れようともがく
だが、腕は次々とスバルに襲い掛かる
その内の一つがスバルの胸を貫通した
だが、痛みは感じない
只、黒い感情がスバルの中に流れ込んで来たのだ

【オモイダセ！オレトトモニアユンデキタスバラシキ『ハカイトサツリク』ノヒビヲ・・・】

そう言ってるマジンガーは不気味に笑ってるように見えた
その顔が更にスバルの中に恐怖心を掻き立てる

「いやあああああああああああああああ！やめて！あんな記憶・・・あんな記憶を思い出したくないいいいいいいいいいい！助けて！助けて！ティア！ノーヴェ！なのはさん！甲児さん！ゼノオオオオオオオオオオオオオオオン！！」

スバルは叫ぶ
だが、その叫びは漆黒の闇に消え去っていく
次々と襲い掛かる腕はスバルの身に着けていたバリアジャケットを引き裂き、何も纏わなくなった彼女に群がっていく
次々とスバルの体に黒い腕が入り込んでくる
その度にスバルの心は黒い闇に押しつぶされそうになっていた
やがて、スバルの左腕にはゼノンと同じ刺青が現れる
そして、彼女の髪と瞳の色が徐々に血のように赤い色に代わっていく
だが、その間スバルを襲っていたのは底知れぬ恐怖と計り知れない激痛であった

「うあああああああああああああああ

！！」

スバルは激痛の余り悲鳴を上げた
その悲鳴を見たマジンガーが特徴的な口を歪に曲げて笑みを作る
すると大きく口を開ける
その中には底知れぬ闇と悪意が渦巻いていた

【サァ・・・モドッテコイ・・・・オレノ『ハンシン』・・・オレノ『マジンセンシ』ヨ】

そう言ってマジンガーはスバルを一口の元に飲み込んでしまった

＊＊＊

「わあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

やがて、スバルは目覚めた
額には大量の汗をかいている
息も荒い、だが、どうやら夢だったのだと思いホッとする
しかし、それはすぐに変わる
見ると今スバルは小さなカプセルの中に閉じ込められていた
中には奇妙な液体が充満しており、その中で自分は浮んでいた
服装はボロボロのバリアジャケットのままであった

「目を覚ましたようだな」

其処へ悲鳴を聞きつけたかの様にトリスタンとイゾルデがやってきた

「随分怖い夢を見てたのねぇん♪相当うなされてたわよぉ♪」

イゾルデがトリスタンに寄り添うようにして言う

（貴方達は・・・うっ！！）

スバルは歩み寄ろうとしたがそれを体の激痛が許さないで居た

「クハハハハ、無理はしない方が良いぞ！何せ勇者ガラダブラとまともに戦ってお前の体は崩壊寸前なのだからなぁ」

「ククク、お前は我等が兵士達の大事な生贄だからねぇ・・・せめて死ぬ前までは大人しくしてなさい！」

（そんな・・・そんなの！）

スバルは体の痛みを者ともせずカプセルに殴りかかる

カプセルはスバルの拳を受けて歪な発光をする

それを見たトリスタンが上機嫌に眉を動かす

「フフフ、何と生きの良い娘だ！益々生贄としてこれ程の逸材は無い・・・だが、少し大人しくして貰おうか」

そう言ってトリスタンは装置を操作する

するとスバルの頭に取り付けられていたパッチに微弱の電流が流れる

それを浴びたスバルに猛烈な睡魔が襲い掛かった

「折角だ、また例の悪夢でも見ていろ」
そう言って二人は部屋を出て行った

（い・・・嫌だ・・・寝たくない・・・眠りたくない・・・・・・また
あの悪夢を・・・・あの恐ろしい夢を見たくない・・・あんな・・・
・恐ろしい・・・・・ゆ・・・・め・・・・・・）

そう言った所でスバルの意識は断ち切られてしまった

＊＊＊

其処は巨大な噴火口であった
其処にトリスタンとイゾルデ、そして勇者ガラダブラと無数の神々
の兵士が居た
そして、火山の中には十字架に縛られたスバルが居た
まだ意識は戻ってないらしく目を瞑ったままだ

「フフフ、これで良い・・・後はあの方達の到着を待つばかり・・・
・・むっ！」

笑みを浮かべていた二人の上空に八つの光が降り立った
それは巨大な機械の巨人であった
周りにはそれぞれ「鳥」「昆虫」「魚」「獣」「超人」「爬虫類」

「悪霊」をモチーフにした巨人達が立っていた
そして、その間に立つのはそれより頭一つ分大きく巨大な剣を携えた凶悪な顔を持つ巨人であった

「これはこれは・・・暗黒大将軍！お待ちしておりました！！」
「七大将軍方も御代わりないようで」

七大将軍と暗黒大将軍を見た一同はその場で肩膝を付いた

「挨拶は良い、それより・・・贄の用意は出来たのか？」
「はい、ご覧下さい」

暗黒大将軍は言われるがままに十字架に掛けられたスバルを見る
このまま居れば後３０分もしない内にスバルは溶岩の中に落ちる事になる

「あの娘の御霊を我等が主「ハーデス様」に捧げる準備は整っております」
「あの溶岩の中でもがき苦しんだ末に死んでいく苦痛の魂・・・ハーデス様にはさぞ美味なご馳走で御座いましょう」
「全くその通りだ！これでこの世界も我等ミケーネの物となるのだな・・・」

そう言うと暗黒大将軍は大声で笑った
それに釣られて７大将軍も声高らかに笑った

「そんな事させるかあああああああああああああああああああああ！」

その時、上空から声が響いた

見ると、ゴッドマジンガーが上空から降り立ってきたのだ

「来たか！ゴッドマジンガー！」

勇者ガラダブラが両手に鎌を持つ
その前にゴッドマジンガーが降り立つ

「退け！お前らに構ってる暇は無いんだ！！」
「そうはいかん！あの娘は大事な生贄だ！！貴様にやる訳にはいかん！お前は此処で死ねえええええええええええええええ！！！」

勇者ガラダブラが鎌を振るう
だが、次の瞬間、宙を舞っていたのはガラダブラの腕であった

「ぐぎゃあああああああああああああああああ！俺の・・・・俺の腕があああああああああああああああ！！！」

ガラダブラは千切れた腕を抑えて叫んだ
そんなガラダブラの頭部をゴッドマジンガーは両腕で掴む

「お前はスバルを傷つけた・・・お前だけは・・・お前だけはこの手で殺す！！！」

そう言ってゴッドマジンガーは腕に力を込めてガラダブラの頭部を握りつぶす
握りつぶされた体が僅かに痙攣する
そんなガラダブラを捨て去り、ゴッドマジンガーは火山内に飛び込む

「馬鹿め！いかに貴様と言えども赤く燃える海の中に入れば只では

済む筈があるまい」
トリスタンはそう言って邪悪な笑みを浮かべた

＊＊＊

「スバルウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！」
ゴッドマジンガーはスバルの名を叫んで火山に降り立つ
超高温のマグマがゴッドマジンガーの体を燃やしていく
だが、そんな事気にしていられない
ゴッドマジンガーは目の前で拘束されていたスバルを手元に引き寄せると彼女の拘束を解き放つ
拘束を解かれたスバルは力なくゴッドマジンガーの腕の中に倒れる
傷からして明らかに瀕死の重傷だと言うのが見て取れた

「スバル・・・御免よ・・・僕のせいでこんな傷だらけにしてしまって・・・」

ゼノンはそう言うとスバルを自分の胸に取り付けられた「Z」と書かれた球体の前に置いた
するとその球体は光を発しスバルを中に引き寄せる

「スバル・・・君は絶対元の時代に戻して見せる！だから今は眠っ

て・・・僕は・・・あいつらだけは絶対に許さない！！！」

そう言ってゼノンは上空を見上げる

＊＊＊

火口に居たトリスタン達は早くゴッドマジンガーが溶岩で溶けるのを心待ちにしていた

だが、ゴッドマジンガーは一向に溶ける気配を見せない

「どうなってる！何故奴は溶けないんだ！！」

「そんな馬鹿な！奴は赤く燃える海に耐えると言うの！！」

その姿に二人は恐怖した

その刹那

「ゴオオオオオオオオオオッドスマッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンチ！！」

轟音と共に火口から唸りを上げる2本の腕が飛び出した

2本脳では周りに居た神々の兵士を次々と粉砕していく

まるで紙切れのようであった

唸りを上げて、竜巻を作る2本の腕の為に殆どの神々の兵士は壊滅してしまったのだ

そして、火口をブチ破ってゴッドマジンガーが現れた

「ご・・・ゴッドマジンガー・・・」

トリスタンは驚愕の顔でその名を呼んだ
ゴッドマジンガーは怒りの篭った形相で彼等を睨む

「お前達の為に・・・大勢の人が死んだんだ・・・絶対にお前達だけは許さない!!」

「ほう、どう許さないか見せて貰おう!お前達、久方振りの強敵だ!思う存分戦を楽しめ!」

暗黒大将軍がそう言うと後ろに居た7大将軍は一斉に飛び掛って来た

ゴッドマジンガーは拳を振るう

「うおおお

アンゴラスの額の触覚から閃光が放たれた
それはゴッドマジンガーを包み込んだ

「うわあああああああああああああああああああああああ！！！」

ゼノンは悲鳴を上げる
だが、それで終わりではない

「今度の相手はこの超人将軍ユリシーザーだ！！」

電撃が止んだ後、ユリシーザーの華麗な連激がゴッドマジンガーを吹き飛ばす

「ぐうぅっ！！」

苦痛の顔にゼノンは歪む
だが、そのお陰で糸の拘束から逃れる事は出来た
しかしその後ろには

「この猛獣将軍ライガーンの牙を受けてみよ」

背後からゴッドマジンガーの両腕を掴んだライガーンが己の牙を肩に突き刺す
牙は深くゴッドマジンガーの体に突き刺さり噴水のようにオイルが溢れる

「ぐわあああああああああああああああああああああ！！！っく、は、離せえええええええええええええ！」

咄嗟に拘束を外しライガーンの頭部を持って投げ飛ばす
投げ飛ばされたライガーンはそのまま宙を回り大地に着地する
すると今度は上空から凄まじいスピードでやってきたのは

「グハハハハ！この怪鳥将軍バーダラーの爪を受けてみよおおおおお！」

と言ってバーダラーは爪を突き立てる
突き立てられた爪により火花を散らし装甲に傷が出来た

「ハハハ、このスピードについて来れまい！これでトドメだぁ！」

トドメを刺そうと両腕を伸ばしてバーダラーがやってくる
しかし、その頭部をゴッドマジンガーが両腕で掴む

「何時までもお前達にやられっぱなしだと思うな！光子力ビイイイイイイイイイイイイム！！！」

ゴッドマジンガーの目が輝き閃光がバーダラーを焼き払う

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」

焼き払われたバーダラーはそのまま地面と同化した

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そして勢いそのままユリシーザーの元へ向かう

「おのれ！死ねぃ！」

ユリシーザーは頭部に付けられていた炎を持って投げつける
投げられた炎はゴッドマジンガーの顔を掠める
それだけであった

「食らえ！トライハリケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエン！！」

ゴッドマジンガーの口から猛烈な突風が発せられた
それはユリシーザーを包み込み数秒で塵に変えてしまった

「おのれぇ！猪口才な奴よぉ！！」

再びライガーンが牙を突きたてようと飛び掛ってきた
だが、そのライガーンのもう一つの顔がある腹にゴッドマジンガーの拳が突き刺さる

「ゲハァッ！」
「僕はお前達には負けない！滅びされ！」

そう言ってライガーンを火口に放り投げる
火口からライガーンの悲鳴が響き渡った

一気にバーダラー、ユリシーザー、ライガーンの三体が倒されてしまった
残ったスカラベス、アンゴラス、ハーディアス、ドレイドウはゴッドマジンガーを見る

「おのれぃ、こうなれば一斉に行け」

ドレイドウが命じる
それに呼応して3体の将軍が飛び掛る
スカラベスが左側に回り自分の腕を突き刺し
アンゴラスが右側から牙を突きたて
ハーディアスが肩口に巨大な鎌を切りつける

「ぐぅ・・・・」

ゼノンが苦痛の声を上げる

「グハハハハハ！死ねぃ！」

そして、残ったドレイドウがゴッドマジンガーの頭部を掴み握りつぶそうとする

「ぐ・・・やっと・・・集まってくれたな」

「何！」

コノ時、ドレイドウは初めて自分は迂闊であったと思った
だが、時既に遅し、ゴッドマジンガーは突如発光を放った

「お前達皆吹き飛べ！ゴオオオオオオオオオオッドスパアアア

「ぼ・・・僕は・・・僕は強くない・・・誰も守れなかった・・・
只の弱い存在だ！」

そう言ったゴッドマジンガーの目の前に一振りの剣が現れた

「だけど・・・だけど僕は彼女を守って見せる！絶対にスバルをお
前達の野望には使わせない！」
「フン、見上げた物よ！たかが女1人の為に命を投げ出すと言うの
だからなぁ！」

そう言って暗黒大将軍が剣を振り下ろす
それをゴッドマジンガーが持っていた剣で払う

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

お返しにと剣を横に凪ぐ

「むん！」

それを暗黒大将軍は剣を盾にして弾く
2体の戦いは凄まじい物であった
剣同士がぶつかり合うたびに大地は割れ、
剣を振るえば空気は避け
その火花は辺りを火の海に変えていく
正に神々の決戦であった

「グハハハハ！素晴らしいぞ！これ程の強者に出会えた事を神に感
謝しなくてはなぁ」
「次で勝負だ！行くぞおおおおおおおおおお！」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

2体がトドメとばかりに突っ込んで行き、剣を突き刺す
暗黒大将軍の剣はゴッドマジンガーの脇腹を貫き
ゴッドマジンガーの剣は暗黒大将軍の腹にあった顔を貫いた

「ぐぅっ・・・」
「ふ・・・ふふふ・・・見事だ・・・ゴッドマジンガー・・・・・嫌、魔神戦士ゼノンよ・・・だが、今の貴様では我等が主・・・ハーデス様には勝てん・・・・己が無力を呪うが良い！」

そう言い残して暗黒大将軍は炎に包まれてしまった

「ぐ・・・ぼ・・・・僕は・・・誰にも・・・・・負けない！」

突き刺さった剣を抜いてゴッドマジンガーは言った
その時、突如黒い雷光が上空から落下してきた

「な、何！」

一瞬激しい閃光が視界を奪う
そして、閃光が晴れると、其処には・・・冥王ハーデスが居た
大きさはざっと２００ｍはある
そんな巨大な冥王がゴッドマジンガーを睨む

「ガアアアアアアアアアッハッハッハ！ワシの手駒を倒す者が居ると言うから来てみれば、このような雑魚であったか！まぁ余興にはなろう！このハーデス様に出会った不幸を地獄の其処で後悔するが良い」

不気味な笑みを浮かべてハーデスが言った

それを見たゴッドマジンガーの両腕が硬く握られた
今、神の魔神と冥王の戦いが幕を開ける

過去編　6話　悪夢（後書き）

次回でスバル編は終わります

やっとだよ（汗）

友の遺産　前編（前書き）

原作とは違う展開ですが・・・どうか勘弁して下さい

友の遺産　前編

信じられない事態が起こった
突如現れた仮面の二人組みの手により夜天の書が奪われてしまったのだ
夜天の書が奪われてしまった事により最早ヴォルケンリッターを逮捕しても意味が無くなってしまったのだ
仕方なく一同は４人をアースラに招きいれる事を決めた
このままで居るよりも少しでもお互いの情報を整理した方が良いそう思った為だ

「でもよぉ、何であいつらは夜天の書を奪うんだ？」

真っ先に意見を述べたのはヴィータであった
それになのは達が首を傾げる

「どうして疑問に思うの？」
「ああ、お前らは知らねぇんだよな・・・夜天の書はな、その力を使えるのは所有者に選ばれた主だけなんだよ。だから奪ったってその力が使える訳ねぇんだ」
「そうなんだ」

フェイトは納得したのか頷く
だが、それで益々疑問が浮かび上がった
何故夜天の書を奪う必要があるのだろうか？

「何も力が目的って訳じゃ無いだろう？」

其処へ鉄也が会話に入る

「どう言う事だ？」
「恐らく、奴らは夜天の書に封印されている冥王ハーデスを蘇らせるのが目的なのだろう」
「冥王ハーデスだと！もしそうならとんでもない話だぞ！」

シグナムが驚愕の顔になる

「だな、あの時壁画で見たけど・・・あいつ相当な力を持ってやがる・・・果たして俺たちで勝てるかどうかも怪しいぜ」
「そ、そうなの？」

甲児が珍しく弱気な発言をしたのになのはが不安の顔になった

「ケッ、何弱気になってんだよてめぇら！要するにその瞑想ハデッスが出てくる前にその仮面野郎をぶちのめして夜天の書を取り返せば良い話だろう？」
「剣児・・・物事はそう単純な物じゃないんだ！第一奴らが次に何処に現れるか検討もつかないんだぞ！」

息巻く剣児をザフィーラが宥める

「奴らの来る場所なら大概予想がつくだろう？」
「あ、翼さん！」

一体どうやって現れるのか、気がつくとすぐ後ろには翼が煙管を吹かしていた

「だ、誰だ？こいつ」
「はん、最近のガキは礼儀ってもんを知らないのかい？なっちゃな

いねぇ」
「な・・・んだとぉ！」

怒ったヴィータがアイゼンを振り上げて襲い掛かる
だが、翼はそのアイゼンをまるで小物のように軽くポンと押す
するとヴィータはその場でバランスを崩してこけてしまう

「何やってんだ？お前」

明が余りにも滑稽な光景だったのでニヤリとしながら聞いていた
ヴィータは顔を真っ赤にしている

「う、うるせぇ！ちょっとバランスを崩しただけだよ！！」

顔を真っ赤にして怒鳴る
だが、甲児は不審に思った

（俺にはバランスを崩したようには見えない・・・あの時、翼さんが触れた途端ヴィータがこけたような気がした・・・一体翼さんは何者なんだ！！）

甲児の中に翼に対する疑問が浮んだ
何時も自分達より一枚上手に物事を行うし、今回だってヴィータを軽く跳ね飛ばしてしまう事が出来るのだから
只の人間では無いとは思えるが・・・一体何者なんだ？

「それより、これからどうするの？」
「分からん・・・夜天の書を奪われてしまった以上、騎士である我々にはもう役目が無い」

シグナムが暗い顔で言っていた
すると、剣児が突然起き上がって

ムニッ

「なっ！」
「け、剣児／／／」

一同（特に女性陣・・・翼以外）は顔を赤くした
何故なら剣児は今堂々とシグナムの胸を触っていたのだから

「ったく、脳みそまで胸に行っちまったのか？お前らにはご主人様を守るって大層な目的があるだろうが！」
「あ！」

剣児の言葉にシグナム達はハッとした
そうだ、何故こんな大事な事を忘れていたのだろうか
自分達が魔力を集めていたのはそもそも主はやてを守る事が目的だったのだ
それが何時の間にか目的が分からなくなってしまったのだろう

「・・・すまない、剣児・・・・礼を言う」
「なぁに、良いって事よ」
「だが・・・何時まで触ってるんだ？（怒」

シグナムは言った
見ると剣児の手がまるでスッポンのようにシグナムの胸に張り付いていた

「いやぁ、どさくさに紛れてシグナムさんのオッパイを触れてラッ

キーってな感じでさぁ（ニヤニヤ」

と、先ほどのクールなシーン台無しな発言をした
それに

ブチッ

周りで何かが切れた音がした

「切り裂け！レヴァンティン！！！（怒怒怒怒怒」
「こぉぉぉの馬鹿剣児いいいい

「ああ、恐らく奴らが次に狙うのは恐らく主はやての筈だ」
「このまま家に置いておいたんじゃきっと危ないわ・・・かと言って、此処じゃ落ち着かないだろうし・・・どうしよう」
シャマルが頬に手を当てて悩む
だが、翼は微笑んでいた
「心配しなさんな、手は打ってあるさ」
翼の言う手に一同は首を傾げていた

＊＊＊

それから次の日、ヴォルケンリッター一同ははやてが心配するといけないので戻る事にした
夜天の書に関してはとりあえず隠しておく事にしておき、なるべくはやてに心配させないようにした
そして、その一向が訪れた場所は
「ようこそ！八神家ご一行さま！本日は我が「くろがね屋」に来て頂き有難う御座います」
従業員の安がはやてに挨拶を交わす
それを見たはやては物凄い喜んでいた

が、後ろの一同は唖然としていた

（おい、これはどういう事だ？）

（俺が知るか！俺だって翼さんの頭の中は分かんねぇんだからよぉ）

シグナムと甲児は互いに耳打ちする

「いやぁ、それにしてもうちって何てラッキーなんやろうなぁ！偶々福引やったら「ご家族限定1週間くろがね屋タダ拳」が貰えるなんてなぁ♪」

はやては上機嫌であった

そう、時空管理局、アースラに続いて安全な場所

それは此処「くろがね屋」であった

一見すると普通の温泉宿だが、一皮剥けば其処には数々の武器や兵器や装置が目白押しなのだ

翼は福引を使ってはやてをくろがね屋に置く作戦を立てたのだ

それには流石のリンディも脱帽であった

「まさかこんな手があったとはねぇ・・・相変わらず貴方は頭が切れるわねぇ」

「はん、四六時中甘ったるい茶を飲んでるから頭ン中までたるくなっちまったんだろうさね。それより、あんたらはちゃんと金払って貰うよ」

翼は八神家以外のメンバーを指差して言った

それを聞いて

「金取るんかいいい

と、その場に居た甲児、鉄也、なのは、フェイト、アリシア、ユーノ、クロノ、リンディ、エイミィ、ロッテ、リーゼはツッコミを入れた

＊＊＊

此処は邪魔大王国の本拠地
其処には女王ヒミカと3人の下僕が居た
そして、ヒミカの前には先ほどの二人の仮面の男達が立っていた

「ジンメンは失ったが夜天の書は手に入った・・・よしとするか」
「流石じゃな、おぬし等二人に掛かれば夜天の書の奪取など朝飯前であったか？」
「ああ、お前の持っている使えない愚図に任せていては日が暮れてしまうからな」

そう言って二人は後ろに居た3人を見た
イキマ、アマソ、ミマシは言葉が無かった

「全く、そろいも揃ってあの程度の奴らを葬れないとは・・・それでも邪魔大王国の将軍か？」
「まぁ良いじゃないか。こうして夜天の書は手に入ったんだ・・・後は我等が主が飢えないように栄養を送るだけだ」

「だが、どうするつもりなんじゃ？」
「なぁに、奴らのように回りくどい事などしないで直接奪えば良いのだ。あいつらはリンカーコアだけを抜き取っていたが、本体ごと取り込めばかなりのページが稼げるからな」

二人の仮面はそう言って互いを見合って肩を震わせる
恐らく笑っているのだ

「フッ、よかろう、お前達もこいつらについていき！魔力の蒐集をして来い！」
「「「ハッ！」」」

ヒミカの命を受け3人が頭を下げる

＊＊＊

『駄目だ・・・このままでは・・・奴には勝てない』

「グルルルル・・・・」

其処には一匹の虎が眠っていた
そして、その隣には銀色の長髪をした青年がそっと虎を撫でていた

『行ってくれ・・・俺の友の下へ・・・今日から、そいつがお前の

主だ』

「ガオオオ

友の遺産　前編（後書き）

続く

友の遺産　中篇（前書き）

今回はギャグがメインかも？

友の遺産　中篇

此処は海鳴市某所にある温泉宿「くろがね屋」
此処は普段は活気で賑わい多くの宿泊客がいるのだが、最近デーモンの出没のせいで客足がめっきり途絶えてしまったのだ
その為今この温泉宿を利用しているのは八神家ご一行とアースラ局員達である
だが、八神家は福引で宿泊など利用料は全てタダなのだが、アースラ局員は勿論払う羽目になった
幸いなのは、フェイト、アリシアは同行したリンディ、プレシアが出すので問題は無く、エイミィ、ロッテ、リーゼも自身のポケットマネーでどうにか出来た
だが、この世界で無一文の甲児と鉄也は・・・・・

ゴシゴシゴシゴシ

此処はくろがね屋の男湯
其処でくろがね屋の「く」と書かれた羽織を羽織った甲児、クロノ、ユーノが3人で風呂をデッキブラシで磨いていた

「畜生！何で俺がこんな事しなけりゃならないんだよぉ！」
「文句言ってないでやって下さい甲児さん！この後廊下と便所の掃除もあるんですよ！」
「何で僕まで・・・」

3人がそれぞれ愚痴りながら掃除していた
因みに何故クロノとユーノが居るのかと言うと、
クロノは双子師匠曰く「これも修行じゃ」と言う事でクロノだけはカンパ無しの上ポケットマネーも凍結されてしまい無一文にされてこうなっていた
そんでユーノは「人手が足りないから来い！」と言う訳で無限書庫に居たのを無理矢理引きずり出されたのだ
その頃、鉄也は庭を某天才ギャグアニメに出てくるレが三つつく叔父さん並のスピードで掃いていた
しかもかなりキレイに・・・

「鉄也さん・・・何時の間にそんなスキルを身に着けたんだ？（汗」

甲児が鉄也の変わりように唖然としていた
すると、扉が開き、其処から腰にタオルを巻いた剣児、大介、明、ザフィーラがやってきた

「よぉ、やってるかタダ働き一同！」

剣児がからかうのを目的に手を上げて言う
それを甲児が「うるせえ」の一言で一蹴する

「おい、甲児！折角だから背中流してくれ！」

剣児が椅子に座りこれでもかと背中を見せる

「けっ、誰がやるか！」
「いいのか？俺は客だぜぃ？」
「ぐ・・・畜生！！！」

愚痴りながら甲児は剣児の背中を流した
剣児はご満悦であった
その横で大介、明、ザフィーラはそれぞれ体を洗う

「やれやれ、甲児も災難だなぁ」
「ははは、そうだね」
「とりあえず、此処に居れば主も安心だろう」

そう言いながらザフィーラは石鹸を取る
だが、

ツルン

石鹸はザフィーラの手を逃れて床に落ちる
手に取ろうとしたがまた

ツルン

またザフィーラの手を逃れて滑っていく

「おい、待て！」

逃げる石鹸を追うザフィーラ
その時、突如石鹸がその場に止まる
読者の中には浴槽で走り回った経験がある人は居るだろうか？
分かると思うが浴槽は酷く滑りやすい
その為減速が上手く出来ないのだ
そしてそのままザフィーラは自分の足で石鹸を踏んでしまい

ツルン
ゴチイイイイイイイイイイイン！！！

「ガハァッ！」

思い切り後頭部を打つ
ザフィーラはその場で暫く頭を抑えて震えていたと言う
その光景を見て大介は苦笑いを浮かべ明は笑っていた
そんな時、隣の湯でなにやら活気づいているのが聞こえた
それに剣児と甲児は反応した

「おい、確かあの壁の向こうは・・・」
「ああ、あそこは女湯だ・・・」

女湯
その言葉を聞いた甲児と剣児は互いを見合う
そして、ニンマリとする

「剣児さんよぉ・・・ひょっとして考えてるのは同じかぁ（ニヤニヤ」
「ああ、恐らくそうだろうよ（ニヤニヤ」

お互い妙にニヤニヤしながら言う
そのニヤニヤを見たクロノが一抹の不安を感じる

「ちょっと待って下さい！二人とも何をする気ですか？」
「そんなの決まってるだろう！」
「覗くんだよ！」
「えええええええええええええええええええええええ

ええええええええええ！」

それを聞いたクロノが絶叫した

「さぁ、いざ行こう」

「我等の桃源郷へぇ」

甲児と剣児は互いに肩を抱き合いながら壁の向こうへ行く

目指すは女湯

そして桃源郷である

「ちょ、ちょっと待って下さい！貴方達はなのはやフェイト達が入ってるのを見ると言うんですか？」

「何言ってんだ！俺はガキには興味ねぇよ！俺の目当てはシグナムさん、シャマルさん、それに奥様一同だ！」

因みに奥様一同とはプレシアとリンディである

「って、母さんを見るつもりなんですか？」

「へへ、お前のおっかさんすっげぇ美人だからなぁ・・・・きっとナイスバディに間違いない！」

「そうはさせるか！執務官としてそんな事は絶対に許さない！セットアッ・・・」

「「させるかあああああああああああああ！」」

クロノがデバイスを取ってセットアップする前に甲児と剣児が飛びかかりデバイスを奪い剣児は何処から取り出したのか太いロープを取り出してクロノを雁字搦めに縛る

「な、何するんですか！」

「決まってるだろう！お前を男にしてやるよ！」
「はぁ？」
「男なら覗きの一回や二回やって当然だろう！」

甲児が胸を張って言う

「何言ってんですか！覗きは犯罪ですよ！！」
「大丈夫大丈夫。ばれなきゃ犯罪になんないし」
「そりゃ屁理屈じゃあああああああああああああああああああああ！！！」

クロノは大声で叫ぶも二人は全く聞く耳持たずであった
そして、剣児と甲児はロープで縛ったクロノを担いで壁を登っていく
それを見ていたユーノは無視して床を磨いており、大介と明は湯船に浸かっており、ザフィーラは未だに気絶していた
そして

「いざ行かん！」
「桃源郷へぇ！」

と言って二人が顔を出すと

「悪かったな・・・桃源郷じゃなくて」
「てめぇらのやる事はお見通しなんだよ！」
「「・・・・・・・・・・・・」」

其処にはバリアジャケットを身に纏い各々のデバイスを持ったシグナムとヴィータが居た
へ？他の人？
そんなの居ませんよ

今女湯にはこの二人しか居ませんよ

「え？何で分かったの？」
「あれだけ大声で叫んでれば誰でも分かるわ！」
「他の奴らは一度脱衣所に非難してもらったからな・・・さて」

シグナムとヴィータは剣児と甲児を睨む
明らかに殺る気満々である
そう思った二人は

「一時撤退じゃあああああああ」
「同感じゃあああああああああ！」

と言ってクロノをその場に放り投げて一目散に逃げ出す

「逃すか！バインド！！」

ブンッ！

「グエッ！」
「ガハッ！」

二人の足には桜色のバインドが施されてそれが原因で思い切りこけた
そして、その頭上に二人が降り立つ

「貴様等・・・」
「覚悟は良いな」

二人共滅茶苦茶カードリッジをロードしてる
もうマガジン一個分位ロードした筈である

そして、足元に特大な魔方陣が敷かれる
それを見た二人は青ざめた

「お前ら・・・少し・・・嫌、かなり・・・」
「頭冷やせ！」

その後、男湯に剣児と甲児の悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない
事実である

＊＊＊

ゴシゴシゴシゴシ
ガシガシガシガシ

此処はくろがね屋の便所
其処には爆発アフロヘアーになり顔中包帯でギチギチに固められた甲児と剣児が二人仲良く掃除をしていた
因みに剣児も羽織を羽織っている
先ほどの覗きが原因で「お前もタダ働きしろ！」と言われて結局剣児もタダ働きする羽目になったのだ

「畜生・・・何であいつらは勘が良いんだよぉ」
「もう少しで見れるトコだったのによぉ」

未だに反省の色が無いらしくブツブツと愚痴る
すると、二人の羽織りの中に入っていた携帯電話が鳴る
実はこれ非常事態の際に持ってろといわれて持っていた通信端末である
二人はそれを手に取り受話ボタンを押す
すると

『奴らが動き出した！すぐ地下室に来な』

と翼の声がした

「ラッキー！これで便所掃除せずに済むぜ！」
「それに仮面の野郎は俺もぶちのめしたかったんだ！思いっきりやってやるぜ！」

二人は腕を鳴らしながら行く

＊＊＊

地下室に辿り着くと、其処には巨大なモニターに映し出される二人の仮面の男と大量のハニワ幻神であった

「あいつら付近の大型ロストロギアを襲っては本体ごと夜天の書に

取り込んでやがるのさ」
「えげつねぇ事しやがるぜ！」
映像を見て剣児が呟く
「場所はそれぞれ別世界に行ってるねぇ」
「では私は砂漠へ向かうか」
「なら私も行きます」
シグナムとフェイトが進言する
「んじゃ俺も行くか」
其処へ剣児が立ち上がる
「剣児！あんたまたぁ」
つばきが剣児がまた色気で言い出したのかと思い胸倉を掴む
「馬鹿、ちげぇよ！俺は飛べねぇから砂漠しか行く場所がねぇんだよ！」
「あ、そういえばそうか」
それにつばきは納得した
「んじゃ俺も同じだな。スクランダーが無いからマジンガーは飛べないし」
甲児も砂漠に行く事になった

「それじゃ私と・・・えぇと、高町なんとかは森林地帯だな」
「なぁっ！・・・なのはだよ！な・の・は！！」
未だに名前を覚えてもらえないのになのはは少し怒った
「それじゃそっちには俺たちが行こう」
鉄也と大介が名乗り出た
「そんじゃ残るこの海地帯は・・・あたしとザフィーラと」
「それなら私も行くよ！」
「俺も行こう」
海地帯にはアルフ、ザフィーラ、明、アリシアが行く事になった
「皆、気をつけてくれ！敵は恐らく何か企んでるに決まってる」
クロノがそう言う
それに甲児達がニッと笑う
「安心しな！あんな奴らに負ける程俺たちは落ちぶれちゃいねぇよ」
そう言って一同は出撃の準備に取り掛かった

友の遺産　中篇（後書き）

次回こそはバトルになる予感

友の遺産　中篇2（前書き）

大ピンチ！
そして現れる相棒

友の遺産　中篇2

此処は砂漠地帯
其処には例の二人、アマソとミマシが居た

「なぁミマシィ、何で俺達はこんなとこで待ち伏せしなきゃなんねぇんだ？」
「馬鹿野郎！決まってるだろう、此処でこうして暴れておけばその内鋼鉄ジーグがやって来るんだ！そうしたらそいつらをぶちのめして積年の恨みを晴らしてやるのよ」
「あ、成る程ぉお前頭良いなぁ」
「お前が頭悪いだけだ！」

感心するアマソに呆れるミマシ
すると其処へ

「うらぁ！鋼鉄ジーグ参上！！出てきやがれ仮面野郎！！！」

転送してきた剣児達が現れる
剣児は拳を振り上げて叫ぶ

「剣児、そうやって叫んだら出てくる物も出てこなくなるぞ」

そんな剣児にシグナムがツッコミを入れる
それに五月蝿そうに頷く
その時、突如地中から数匹の巨大なロストロギアが姿を現した

「うお！何だてめぇら、この草薙剣児様に喧嘩売ろうってのか？」
「上等じゃねぇか！邪魔するなら容赦しねぇぞ！」

「剣児、調子に乗っちゃ駄目よ！」
甲児と剣児が互いにロストロギアに殴りかかる
「ちょ、ちょっと待って二人とも！野生のロストロギアを殺しちゃ駄目だよ！」
「心配するな。あれは夜天の書が作り出した人形に過ぎない」
「そ、そうなんですか」
シグナムの返答に納得するフェイト
そんな二人の周りにも大型ロストロギアは現れた
「ちっ、片付けるぞ！！テスタロッサ」
「はい、シグナム！！」
二人は互いにうなずき合いロストロギアに切りかかる

＊＊＊

一方、こちらではなのは、ヴィータ、鉄也、大介の４人の前には２体のデーモンが居た
「フフフ、久しぶりだなぁ、小娘！」
「ゲゲゲ、この妖獣グモ様の餌になりに来たようだな」

2体は声を揃えて笑う

「けっ、またデーモンかよ！もうお前らの相手はしたくなかったんだがなぁ」

「私もだよ！ヴィータちゃん」

「だが、出てきたのなら叩き潰すしかない」

「そうだね、皆、気をつけて行こう！」

4人は2体のデーモンに向かっていった

＊＊＊

こちらでは海上方面

其処には無数のハニワ幻神を操るイキマの姿があった

「フフフ、さぁ来い！誰でも相手になってやろう」

イキマが腕を組んで声高らかにそう言った

其処にアルフ、ザフィーラ、アリシア、デビルマンが現れる

「うわ～、こっちは数が多いねぇ」

「だが、所詮は烏合の衆だ！頭を潰せば終わる」

「そりゃ簡単で良いぜ！」
「よぉし、そうと決まったらさっさと片付けようよ！！」

アルフとザフィーラは拳を握り締めて
アリシアはバルディッシュＭＫ－？を持って
デビルマンはデビルウィングを展開させて敵陣に突っ込んでいく

＊＊＊

場所は戻って砂漠地帯
其処では４人がロストロギアと激しい戦いを行っていた

「うおおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああ！」

剣児の乗ったジーグが自身より巨大なロストロギアを地中から引きずり出して投げ飛ばした
そのロストロギアにマジンガーの拳が貫く
貫かれたロストロギアは砂のように崩れ去ってしまった

「ちっ、倒しても倒してもキリがねぇぜ！」
「全くだ！てんで数が減らねぇよ！」

ジーグとマジンガーは互いに背中を合わせて呟いた
その周りには５体のロストロギアが囲んでいた

5体のロストロギアはマジンガー達を囲んだ事により勝利を確信していたのだろうニヤけた顔をしていた
その顔が甲児と剣児には癪に障った

「野郎！だったら纏めて片付けてやる！！！」

そう言うとジーグの胸の装甲版が開き其処から無数の電流が流れた
それを浴びたロストロギア達は宙に舞い上がる
そして一箇所に集められた
ミシミシと言って鱗にヒビが入っていく

「くたばれ！マグネットプレッシャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

そしてそのまま空中でロストロギアを圧殺してしまったのだ

「やるじゃねぇか剣児！」
「ったりめぇだろ！この程度の相手に遅れを取る草薙剣児様じゃねぇ！」

賞賛を送る甲児に剣児がそう返す
だが、その後もロストロギアは数を増す

「ちっ、まだ来るのかよ！」
「へ、今度は俺だ！」

今度はマジンガーがロストロギア達の前に立ちふさがった
ロストロギアは一斉にマジンガーに体当たりを当てる
だが、それをマジンガーが受け止める

「うおぉぉぉぉ！マジィィィィィィンパワアアアアアアアアア！！」

マジンガーの両目が激しく光る
そしてそのままロストロギア達を天高く持ち上げてしまった

「うおおおおおおおおおりゃあああああああああああ！」

そしてそのまま前方へ投げ飛ばす
それとほぼ同時にマジンガーの胸の放熱板が熱を持っていく

「纏めて溶けやがれ！！ブレストファイヤアアアアアアアアアア！！！！」

マジンガーの放熱板から赤い熱線が放たれる
それを浴びたロストロギアは全てドロドロに溶けてしまった

「へ、馬鹿力はあるじゃねぇか！」
「なぁに、こん位軽いもんよ！」

甲児は鼻を鳴らす
その頃、シグナムとフェイトは互いのデバイスでロストロギアを切り払っていた

「はあああああああああああああああああ！」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

二人が雄たけびを上げてロストロギアを切り払う
だが、切り払われた後から後からロストロギアは沸いて出てきた

「ちっ、キリが無いな」
「このままじゃ、こちらの魔力が先に尽きてしまいますね」

二人は愚痴った
そして、シグナムはカードリッジを再装填しようと懐からカードリッジを取り出す
だが、その隙をついてすぐ背後から現れたロストロギアの放った触手に捕まってしまう

「し、しまった!!」
「シグナム!!」

フェイトはシグナムを救うべくバルディッシュを構えて飛び上がろうとした・・・その刹那
フェイトの胸に突如腕が現れた
そして、その腕にはフェイトのリンカーコアが握られていた

「え・・・あ・・・」
「ほほぉ・・・これは上等なリンカーコアだな」

フェイトの後ろには例の仮面の男が立っていた
声色からしてニヤけている

「フェイトォォ!」
「野郎!」

甲児と剣児が二人の救出に向かおうとするが、其処へ突如爆風が襲った

「ぐぁっ!」

「がはっ！」

爆風を放ったのは巨大化したミマシとアマソであった

「ゲへへへ、久しぶりだなぁ、鋼鉄ジーグ！」

「お前らに邪魔はさせねぇぜぃ！！」

巨大化したミマシとアマソがにやける

「てめぇ等、邪魔するんじゃねぇ！」

剣児が叫ぶ

そして鋼鉄ジーグが拳を握って殴りかかるもアマソにの手により軽く返されてしまった

「がはっ！」

「ギャハハハ！どうしたジーグ！以前の時の方が余程力があったぞ」

アマソが目をギョロ付かせて笑う

「剣児！」

「おっと、お前の相手はこの俺だぁ！」

甲児のマジンガーZに巨大化したミマシが襲い掛かる

2体は互いに腕を掴み合う

だが、マジンガーは徐々に押されていく

「くそぉ・・・マジンガーが力負けするなんて・・・何て馬鹿力なんだ！！」

「ゲハハハ！全てはヒミカさまの為！あの二人には夜天の書の餌に

なって貰うぞ！」

ミマシが下卑た笑みを浮かべるとそのままマジンガーZを遥か上空に投げ飛ばしてしまった

「どわあああああああああああああああああああああ！」

そのまま地面に落ちるZ
凄まじい衝撃が甲児に襲い掛かる

「ぐはぁっ！！」

衝撃の余り声を上げる
体中に鉄球を食らった様な感じであった

「ち・・・畜生・・・何て・・・馬鹿力だ・・・」

衝撃の余り頭がクラクラする
体中が痺れる感覚がする
それでも操縦桿を握って立ち上がる
だが、足元がふらつく

「ガハハハ、どうした？噂のマジンガーはこの程度だったのか？」

ミマシはマジンガーを鼻で笑う

「剣児！」

上空をビックシューターで旋回していたつばきが叫ぶ

「つばき！頼む！！お前がシグナムさん達を助けてくれ！」
「任せて！」

承諾したつばきはすぐさまビックシューターを向かわせる
だが、そのビックシューターの真下からロストロギアが現れて体当たりを当てる

「きゃあああああああああああああ！！」

ビックシューターの後部エンジンから黒煙が上がりそのまま砂漠に墜落する

「つ、つばきいいい

なのはの砲撃とヴィータの鉄槌がシレーヌに襲い掛かる
だが、それをシレーヌは手を翳しただけで防いでしまった

「そ、そんな！」
「何だ？あんな力があるのか？あの野郎」
「ホホホホホ！流石は冥王のお力は素晴らしいわぁ！体中から力がわいてくる！」

シレーヌが口を耳元まで裂けて笑う
その顔は正に悪魔であった

「ならばこれならどうだ！サンダァァブレエエエク！！」
「スペェェスサンダアアアアアアア！」

グレートとダイザーの雷撃が襲い掛かる
だが、それをグモが弾いてしまった

「ヒャヒャヒャ！お前らも夜天の書の生贄になれぃ！」
「悪いが御免被る！」
「お前達の好きにはさせないぞ！」

遠距離戦が駄目なら接近戦でやるしかない
そう思ったグレートは両手にマジンガーブレードを、ダイザーは肩から半月状の刀を取り出し上空で連結させてダブルハーケンを持ったそしてそれで同時に2体のデーモンに切りかかる
だが、それもまた軽くあしらわれてしまった

「何！」
「くっ！」

二人は思わず歯噛みした
そんな二人にシレーヌは電撃を浴びせ、グモは怪光線を放つ

「「うわあああああああああああああああ！」」

鉄也と大介は叫びそのまま錐揉み上に森に落下する
落下した際に衝撃と砂煙が舞い鳥達は住処を侵され逃げ出していく
その中からグレートとダイザーは立ち上がる

「くそっ、まるで攻撃が通らない」
「厄介な相手だぜ！」

鉄也が舌打ちした
その間もなのはとヴィータが魔力弾を放っているが焼け石に水である
やはりあの2体には何か謎めいた力が備わっているとしか思えなかった
そんな時、突如上空を飛んでいたなのはとヴィータを青色のバインドが捉える

「くうっ！」
「こ、これは！」

そのバインドには見覚えがあった
それを放った者は二人の前に現れていた
やはり仮面の男であった

「ふむ、お前達の魔力は中々の魅力があるな・・・有り難く頂くとしよう」

仮面の男がそう言うと、彼の手元から突如夜天の書が現れた

「さて、ではお前達から蒐集させて貰おうか・・・その肉体ごとな！」

仮面の男がそう言って片手を翳す

「させるか！」

それを邪魔するようにグレートとダイザーが腕を飛ばす
そのお陰で後ろに下がる

「ちっ、邪魔が入ったか」

仮面の男は舌打ちをする

「ホホホ、邪魔な奴らの相手は我々がしてやろう」
「ヒヒヒ、お前はさっさとそいつらを食わしてやれよな！」

そう言ってシレーヌとグモがグレートとダイザーに襲い掛かる

＊＊＊

海上で戦っていたアルフ、ザフィーラ、明、アリシアは何処か不安を抱いていた

「どうもおかしいな」

明が呟く

「どう言う事？」

アリシアが聞く

「敵の数は多いが大した力が無い・・・もしやこれは囮なのでは」

「それじゃ、今別の場所に言ってるなのはやフェイト達が危ないんじゃないの？」

アルフが言う

「となると不味いなぁ、よし、俺がなのは達の救援に向かう」

「んじゃあたしは妹達（フェイト）の所に行くよ」

「頼む」

「此処はあたし等に任せてよ！」

アルフとザフィーラの言葉を聞いて明とアリシアは各々の場所に向かう

「む、どうやら気づいたようだな」

イキマは現場を去る二人を見て呟く

「だが、今更行った所で既に遅しよ」

イキマはそう言って残ったアルフとザフィーラにハニワ幻神を向ける

「さて、守護獣さん、後ろは頼むよ」
「任せろ！」

アルフとザフィーラは互いに背中を預けるように陣取る
そんな二人にハニワ幻神が襲い掛かる

「おおおお

「テ・・・テスタロッサ・・・」

シグナムは見る
だが、シグナムは未だに拘束から逃れられないでいた

「さて、夜天の書が無い以上肉体を頂く事は出来ないな・・・ではリンカーコアだけでも頂くとするか」

仮面の男はそう言うとシグナムに向かって手を翳す
だが、その時・・・

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!』

突如天を切り裂く咆哮が響いた

「こ、この叫びは!!」

剣児はその叫びの正体が理解出来た
そして、その叫びの正体はすぐ様降り立ってきた
その姿は白き虎・・・正しく「白虎(びゃっこ)」であった

「あれは・・・バルバ・・・バルバなのか?」

剣児は目の前の白虎を見る
白虎は剣児の方を見る、そして

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!』

咆哮した

その姿は、剣児に「しっかりしろ！」と言っているかのように吠えていた

「バルバ・・・お前を送ってきたのは・・・やはり、鏡なのか？」

剣児の問いにバルバは頷く
それを見た瞬間、剣児の目には涙が流れていた

「鏡・・・お前は死んでも俺達の事を見てたんだな・・・きっと、お前の事だ・・・今の俺を見て鼻で笑ってるんだろう？」

そう言って剣児のジーグは立ち上がる

「見せてやるよ！俺の生き様を・・・俺の戦いをなあああああああああああああああああ！！！」

剣児は叫ぶ
するとジーグの額に光り輝く銅鐸の模様が浮ぶ
その光の波長を浴びると、辺りに居た無数のロストロギアが突然砂となって消え去ってしまった

「む！この光は！！」

仮面の男は眉を顰めた

「行くぜ！バルバ！！」
『ガオオオオオオオオオオオオオオオン！！』

剣児とバルバは咆哮した
今此処に再び鋼鉄ジーグとバルバが同じ大地に立ったのだ

友の遺産　中篇2（後書き）

続く

友の遺産　後編（前書き）

反撃開始！！

友の遺産　後編

何だ今の光は？
甲児の第一感想がそれであった
突如ジーグの体から発せられた緑色の光
それを浴びたロストロギアは全て消滅してしまった
今此処に居るのはアマソとミマシ、そして仮面の男である

「だけどどうやら形勢は覆ったみたいだな・・・そうと決まったらおちおち寝てられないぜ」

甲児は自分の顔を叩き気合を入れなおして立ち上がる
そのまま歩を進め剣児とバルバの横に立つ
それを剣児は見た

「何だ？ミマシにほん投げられて延びてるかと思ったぜ」
「馬鹿言うな！この兜甲児様があんなもんでくたばるかよ！」

お互いに言い合う
だが、その後二人には笑みが浮んだ

「うっしゃぁ！んじゃ行くぜ、甲児！バルバ！」
「あいよぉ！今度こそあの仮面野郎に一発お見舞いしてやるぜ！」
『ガオオオオオオオオオオオン！！』

剣児の言葉に甲児は答えバルバは咆哮した

「ちっ、ミマシ、アマソ！早く奴らを片付けろ！！」

仮面の男が命令する
その時、

「はあああああああああああああああああああ！」
「ぐっ！」

上空からシグナムがレヴァンティンを振るって来た
それを結界を張り受け止める
先ほどジーグが放った光によりロストロギアは消滅しシグナムは晴れて自由になれたのだ

「小賢しい！」

結界を張っていた腕を思い切り横に払う
その拍子にシグナムは後ろに飛ばされる
しかし、これはシグナムにとって計算の内であった
飛ばされた先には倒れたフェイトが居た
シグナムはそれを地面に落ちると同時に抱え込み距離を開ける

「テスタロッサ、無事か？返事しろ！」

シグナムは呼びかける
だが、フェイトはぐったりしたまま答えない

「フン、まぁ良い、どの道お前ら全員ハーデス様の餌にするつもりなのだ！多少傷物でも構いはしまい！」

そう言うと仮面の男の手から野球ボール位の光が現れる
それを水平に伸ばしていくと、硬質な剣に変わった
それを持って振るう

ブンと金切音を立てる

「剣か・・・この私に剣で挑むとはな・・・」

シグナムは一度フェイトをその場に下ろすと、レヴァンティンを構える

「この私に剣で挑んだ浅はかさを思い知らせてやる！」

「出来るのか？貴様に」

「当然だ！」

シグナムは叫んでレヴァンティンを振るった

それを仮面の男は剣で受ける

受けた剣同士が激しく火花を散らす

バルバとジークは再びアマソとぶつかり合った

「おらおらおらおらあああああああああ！」

だが、今度はジークが優勢であった

ジークの地獄張り手にアマソは防戦一方となったのだ

「けぇぇ！調子に乗りやがって！これでも食らえ！！」

アマソがそう言って背中の結晶を一斉に飛ばしてきた

「うおっ！」

衝撃と爆風が剣児を襲う
だが、これで怯む剣児ではない

「にゃろう！こうなったらバルバ！あれ行くぞ！！」
『ガオオオオオオオオオオオン！！』

ジーグとバルバが互いに空に舞い上がった

「ビルド・オフ！！」

剣児が叫ぶとジーグの下半身が外れ、バルバの背中に連結用のパーツが浮かび上がる

「ビルドォォォアアアアアアップ！！」

再び両の拳をぶつけて叫ぶ
するとジーグの下半身の変わりにバルバがドッキングしジーグとバルバは一体となった

「バルバ・ジイイイイイイイイイイイイイイグ！！」
「ウオ！合体したのか？・・・ってか、それってまんまゴーゴン大公じゃねぇか！」
「何訳の分かんねぇ事言ってんだ！調子狂うじゃねぇか！！」

剣児が額に青筋を浮かべて怒鳴る
それに甲児がバツの悪い顔をする

「悪い悪い・・・んじゃいっちょやるか！」
「へっ、足引っ張るんじゃねぇぞ甲児！」

「てめぇこそな！」

マジンガーとジーグが再び走り出す
2体の巨人が一歩一歩大地を踏みしめる度に砂がめり込み足跡がクッキリと残る

「おのれぇ！鋼鉄ジーグ」
「此処で貴様との因縁を断ち切ってやる！」

アマソとミマシも同様に向かっていく

「バルバ！ランサーを寄越せ！！」

剣児がバルバの持っていたランサーを受け取ると空中で互いを連結させて手に持つ
アマソも自身の体で生成した槍を持ち襲い掛かる

「死ねぇ！ジーグウウウウウウウ！」
「死ぬのはてめえだ！もう一辺地獄に落ちやがれえええええええええええええ！」

叫びと共に渾身の一振りが炸裂する
それは槍ごとアマソを両断した

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！お・・・・俺・・・・まだ・・・・ヒミカ様とあんな事や・・・・こんな事・・・・してないのに・・・・・・ぢぐじょおおお

「安心しなアマソ！ヒミカもすぐてめぇの行く「地獄」に送ってやるぜ！バルバストオオオオオオオオオオオオオム！！！」

バルバの口からマグネ砲が放たれた
その威力はジーグのスピンストームより遥かに強力である

「ぎゃあああああああ

甲児が叫び、飛び上がる
ミマシもそれを迎え撃つかのように拳を突き出していく
互いの拳がぶつかり合う
だが、先に砕けたのはミマシの拳であった

「な、何いいいいいいいいいいいいい！！」

自分の拳が砕けた事に驚くミマシ
そんなミマシの頭を掴み上げるマジンガー

「この人体模型野郎！！よくも俺のマジンガーを傷物にしやがったな！これでも食らいやがれえええええええええええ！」

そう言ってミマシを遥か上空に投げ飛ばす
そしてそれとほぼ同時に腕を高速で回転させる

「食らえ！大車輪ロケットパアアアアアアアアアアンチ！！」

回転の力で威力を底上げした鉄拳が放たれる
それはミマシの体を貫き天に昇っていった

「ぐえええええええええええええええ！ひ・・・ヒミカ様あああああああああああああああああああああ！！！」

ミマシは咆哮した後爆発の中に消えた

「ちっ、使えん奴らだ・・・」

仮面の男が呟く
その間もシグナムは切りかかる

「はあああああああああああああああ！」
雄たけびと共にレヴァンティンが振るわれる
それを受け止める
「調子に乗るな！」
仮面の男が剣を弾いてそのままの勢いで蹴りを放つ
シグナムはそれを片手で払いのける
そして、あべこべに仮面の男の脇腹に回し蹴りを放つ
「ぐっ！貴様・・・」
「ベルカの騎士・・・烈火の将シグナム！舐めて掛かれば火傷では済まんぞ！」
「ほざけえええええええええええええええ！」
仮面の男は叫ぶと大地に剣を突き刺した
すると巨大な魔方陣が展開される
すると、剣児、甲児、シグナムの３人は突如体の自由が利かなくなる
「ぐあっ！」
「な、何だこれ！」
「畜生・・・てめぇ何しやがった！！」
３人はその場に座り込んだ
それを見て仮面の男が笑う
「ククク、この魔方陣の中では思うようには動けないのだ！・・・
さて」

仮面の男はそのまま動けないシグナムの方に向かう

「さっきは良くもほざいてくれたな・・・これはお返しだ！」

そう言って仮面の男はシグナムの顔に蹴りを放つ

「がはっ」

蹴りを食らったシグナムはそのまま吹き飛ぶ
口からは鮮血が滲み出た

「て、てめぇ！シグナムさんの顔を蹴るんじゃねぇ！傷物になったらどうすんだ！」

剣児が叫び体を動かそうとする
が、腕が思うように動かない

「無駄だ！この結界の中では動けるのは私だけだ！お前らは其処で指を咥えてみてるが良い！」

仮面の男はそういうとシグナムの後ろ髪を掴んで持ち上げる

「ぐっ！」

「こいつがボロ雑巾のようになるのをなぁ！」

仮面の男が髪を掴んでいた手から電撃を放つ
電撃の痛みがシグナムの全身に走る

「ぐあああああああああああああああああああああああ

あ！」

悲痛の声を上げるシグナム
やがて、電撃が止むとその体から煙が出ていた

「さて、これ以上遊んでも時間の無駄だ！さっさと貴様のリンカーコアを頂くとするか」

動かなくなったシグナムに向かってゆっくりと仮面の男が手を伸ばすだが、

「ふざけんじゃねえええええええええええええええええええええええ！」

其処へ甲児の叫びが木霊した
その叫びの主を見た時、仮面の男は驚愕した
何と、先ほどまで地面に倒れていたマジンガーが大地に立っているのだ

「ば、馬鹿な・・・この結界の中ではまともに動く事すら出来ない筈・・・なのにどうして！」
「ゴチャゴチャぬかしてるんじゃねぇ！それ以上フェイトやシグナムさんに手を出すってんなら俺がてめぇに引導を渡してやる！」

マジンガーが仮面の男を指差す
その姿は地獄の鬼、または悪鬼を思わせた
その姿に仮面の男は一瞬だが怯えてしまい、その拍子にシグナムを離してしまう
更にその直後

「とりゃあああああああああああああああああああああああああ！」
「何！」
今度は上空からバルディッシュＭＫ－？を構えたアリシアが飛んできて仮面の男に振り下ろす
咄嗟にバックステップするも、胸の辺りに大きな切り傷を負ってしまう
「ぐぅっ・・・油断した」
傷口を押さえて愚痴る
そんな仮面の男に向かって光の斧を向ける
「よくも私の可愛い妹を傷物にしてくれたわね！覚悟は出来てる？」
今のアリシアは妹を傷つけられた怒りに燃えていた
状況は最悪であった
結界の効果が無くなり周りにはアリシアとマジンガーＺと鋼鉄ジーグが居た
「ちっ、ここらが潮時か・・・」
そう呟くと仮面の男は地面に向かって魔力弾を放つ
すると砂煙が舞い上がり仮面の男を覆い隠す
「うわっ！ぺっぺっ！」
「どわ！くそぉ！」
「ぐぇっ、目眩ましよ！」

3人は急いで砂煙を払う
だが、其処には誰も居らず、倒れたシグナムとフェイトが居た

「つばき・・・おい、つばき！」
「う・・・うん・・・あ、剣児！」

戦闘が終り、剣児は真っ先につばきをビックシューターから出して
呼びかけた
それに応じてつばきは目を覚ます

「ったく、脅かすなよな！」
「ご、御免・・・剣児」
「ま、無事ならよかったぜ・・・さてと」

剣児は後ろを向いた
其処にはアリシアと甲児が二人を見ていた

「う・・・ううう・・・」
「此処は・・痛っ・・・」
「二人とも、大丈夫？」
「無理すんなよ」

ゆっくりと起き上がるシグナムとフェイトに甲児とアリシアが言う

「そうだ！甲児、あいつは・・・仮面の男はどうした？」
「悪い・・・逃げられちまった」

甲児はバツの悪い顔で言う
それを聞いてシグナムが「そうか」と納得する
すると其処に剣児が近づく

「大丈夫か？シグナムさん」
「ああ、この程度で参る程ヤワじゃないからな」
「いやぁ良かったぜ！シグナムさんにもしもの事があったらもうシグナムさんのオッパイ触れないからなぁ」

剣児は笑って言う
しかし、その時前方と後方から殺気を感じ取った

「け～～ん～～じ～～」
「草薙剣児・・・貴様やはり一度三途の川を渡ってくるか？」

前方ではレヴァンティンを構えたシグナムが
後方では拳をボキボキと鳴らすつばきの姿があった
正に前門の虎、後門の狼であった

「え？何か俺・・・物凄くヤバイ雰囲気？」

今になって事の重大さに気づく剣児
そして二人が今正に襲いかかろうとしたその時

「ガウ」
「「「ん？」」」

一同は声のした方を向いた
其処には何と、子猫サイズになったバルバが居た
しかも尻尾をブンブン振ってる

「な、何だこりゃ！チッコイバルバぁ？」
「わぁ、可愛い♪」

つばきは思わず頬を染める
フェイトとアリシアも同様であった

「な、なぁ・・・これって、あれだよなぁ・・・さっきのバルバ・・・だよなぁ」
「あ、ああ・・・でも、何でこんなにチッコイんだ？」

甲児と剣児の前には小さくなったバルバが尻尾を振って見ていた

「へぇ、お前チッコクなれたんだなぁ・・・うっし！そんじゃ今から俺がお前のボスだからお前に名前をつけてやる！」
「ガウッ！」
「でかい時は「バルバ」だから今のお前は小さいから「パルパ」だ！」

ガブウウウウウウ！！

「いでえええええええええええええええええええええええええええ！！」

どうやらその名前が気に入らなかったらしくパルパは剣児の尻に思い切り噛み付いた

＊＊＊

鉄也と大介はパワーアップしたシレーヌとグモに苦戦を強いられていた
二人に攻撃は通用せず、その攻撃は確実にグレートとダイザーを弱らせていた
だが、其処へ

「デビルビィィィム！！」

駆けつけたデビルマンが援護を行う
それに一旦距離を開けるシレーヌとグモ

「苦戦中か？」
「まぁな」
「助かったよ」

救援に駆けつけたデビルマンをグレートとダイザーは見る

「大介くん！此処は俺とデビルマンが食い止めるから君は仮面の男を頼む」
「任せてくれ！スペイザァァァクロオオス！」

ダイザーは飛び上がり上空を旋回していたすペイザーとドッキングする
そしてそのまま上空に居た仮面の男に向かっていく

「ちっ、もう来たのか・・・イキマの奴め」

愚痴りながらもダイザーに向かって数発の魔力弾を放つ
だが、それを尽くかわすダイザー

「これ以上好きにはやらせんぞ！スペェェェスサンダアアアアアア！！」

ダイザーの顔にある2本の角から雷が集まりそれを仮面の男に向けて放つ
仮面の男はそれを片手で防ぐ
だが、威力があるせいか仮面で顔は見えないが明らかに辛そうな仕草をする

「ぐっ・・・こうなったら、夜天の書で貴様等を！」
「させるかぁ！」
「なに！」

声がした方を向いた時には既に遅しであった
グラーフアイゼンを振りかぶったヴィータの一撃により仮面の男は吹き飛ばされる
その拍子に夜天の書を手放してしまう

「高町なんとか！頼む」
「だからなのはだってばぁ！！」

文句を言いつつもなのはは急ぎ夜天の書に向かう

「おのれ！」

仮面の男はすぐに踵を返して夜天の書に向かおうとする・・・が

「させるか！ダブルハァァケン！！」

ダイザーのダブルハーケンが襲い掛かる
それを結界で防ぐも、今度はヴィータの放った魔力弾の直撃を受けてしまう

「ぐぅっ・・・仕方ない・・・此処は退くしかないか・・・」

口惜しそうに呟くと仮面の男は煙を撒くように消え去った
それと同時になのはは夜天の書を確保する

「やったよ！ヴィータちゃん！」
「おっしゃぁ！！！」

ヴィータは諸手を上げて喜ぶ
すると、夜天の書から赤い閃光が放たれ、それはデーモンの2体に当たった

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああち、力が抜けて行くううううううううううううううう！！！」
「ぐえええええええええええええええええええええええええど、どうなってんだあああああああああああああああああ！！！」

閃光を浴びたシレーヌとグモは苦しみ出した

「今がチャンスだ！鉄也」
「おう！」

頷きマジンガーブレードを取り出す
そして

「うおおおおおおおおおおお！」
「ひいいいいいいいいいいい！！！」

逃げ腰になるシレーヌの心臓を刺し貫いた
シレーヌの背中に突き刺したマジンガーブレードが貫通する

「ぐえあああああああああああああああああああああああああ！！」
「滅びろ！デーモン！！！うおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

そのまま刺した剣を上に引き抜く
その結果シレーヌは縦に真っ二つになってしまった

「流石にこのまま死体を残すと高町が怖がるかも知れないからな！
跡形も無く消えろ！ブレストバアアアアアアアアアアアン！！！」

グレートの熱線がシレーヌを焼き尽くす
悲鳴を上げる間も無かった
ほんの数秒
たったその時間でシレーヌは炭となって空に降り注いだのだ

「おのれぇ！こうなったらデビルマン貴様を道連れに死んでやる！」

グモが向かってくる

「生憎だがてめぇらと心中する気はさらさらねぇぜ！デビルカッタアアアアアア！！」

デビルマンから放たれた無数の光の刃がグモを切り裂く
夜天の書の効果が無くなりグモには再生能力が失われてしまったのだ

「とどめだ！デビルアロオオオオオオオオオオ！！」

トドメにデビルマンの額の角から電撃が浴びせられた
それを食らったグモは塵となり消え去った

「どうやら此処は大丈夫みたいだな」
「だったら急ごう！海上でアルフとザフィーラが二人だけで戦ってるんだ」
「え？アルフさんが！！」
「こうしちゃいられねぇ！ザフィーラを見捨てるなんて出来ねぇよ！」
「当然だ！すぐに救援に向かうぞ！！」

グレート達は急ぎ海上に向かっていった

＊＊＊

その頃、海上ではアルフとザフィーラがハニワ幻神達と激しい交戦を行っていた

「でやあああああああああああああ！！」

群がるハニワ幻神をアルフは蹴り飛ばす
しかし、その顔は明らかに疲労の色が伺えた
肩で息をしており額にも汗が滲み出ている

「くぅっ・・・これじゃキリが無いっての！！」

愚痴りながらも戦闘を続ける
だが、そんなアルフの後方に居たハニワ幻神が数発の光弾を放つ

「やばっ！」

完全に後手に回ってしまった
結界を張るのも回避するのも間に合わない
覚悟を決めて両手を交差してガードの姿勢を取る
だが、その前にザフィーラが立ち、光弾を防ぐ

「ちょっと、あんた・・・大丈夫かい？」
「気にするな、この程度でどうにかなる程ヤワには出来てない」

そう言って自分の腕に突き刺さった光弾を振り払う
その様は何処か頼もしかった

「ふぅん、あんた結構良い奴なんだねぇ、惚れちゃったかもよ♪」
「な、冗談を言ってる場合じゃないだろう！！！」

「あたしは冗談じゃないけど」
「／／／／／」

ザフィーラは頬を赤く染めてポリポリと掻く
そんな二人の周りを再びハニワ幻神が覆い囲む

「ま、今は惚気てる場合じゃないって訳だね」
「そうだな」

二人は構えを作る
その時、天空から降り注いだ雷光が回りに居たハニワ幻神を焼き払う

「な、何だ！！」

イキマは驚く
其処へ救援に来たグレート、ダイザー、デビルマン、なのは、ヴィータがやってきた

「遅くなった！」
「そんな事無いよぉ！もうちょっと遅くても良かった位だしさぁ」

謝罪する鉄也にアルフは上機嫌に答える

「えぇと・・・何か良い事あったの？アルフさん」
「う～ん、まぁなのはが大人になったら分かる話しだよ」

アルフがシレッと言う
その横ではザフィーラが頬を赤く染めていた

「ザフィーラ・・・何かあったのか？」

「・・・何でも無い」

聞いてきたヴィータにザフィーラは答える
それに首を傾げるヴィータ

「どうでも良いが、まずは目の前の奴を片付けないといけないな」

其処へ鉄也の一言が現実に引き戻す
目の前にはまだかなりの数のハニワ幻神が居る

「ふん、増援が来たところで数はまだこちらが上よ！一気に叩き潰してやる」
「そうは問屋が卸さねぇぞイキマ！！」
「な、この声は！！」

すると、今度はバルバジーグ、ビックシューター、フェイト、アリシア、シグナムがやってきた

「シグナム！」
「こちらは片付けた！後はコイツだけだ！」

シグナムが目線でイキマを指す

「あれ？そういえば甲児は？」
「ああ、マジンガーは飛べないから先に帰って貰ったぜ。居ても邪魔だしな」
「け、剣児・・・邪魔って」

今この場所に甲児が居ないのを良い事に剣児は好き放題言う
それに一同ははぁと溜息を吐く

「おのれぃ！こうなれば鋼鉄ジーグ！貴様を葬ってくれるわ！」
「へ、良いぜ！てめぇには鏡の借りを返さねえとならねぇからなぁ！鏡の変わりに俺がてめぇをぶちのめしてやる」
『ガオオオオオオオオオオオオオン』

剣児とバルバが咆哮する
そう、かつて邪魔大王国との戦いの際、剣児の親友でありライバルでもあった「美角　鏡」の命を奪ったのは「イキマ」だったのだ
つまり剣児にとってイキマは仇同然の相手なのだ

「お前ら！手を出すなよ。あいつは俺とバルバで叩きのめす！」
「フッ、良いだろう！」
「言って来い、剣児！！」
「必ず仇を討つんだよ」
「頑張れ！剣児さん」
「負けたら三枚に卸すぞ」

全員から激励を受けてバルバジーグは飛び込む
イキマもそれに反応して自身を巨大化させて剣を抜く

「うおおおおおおおおおりゃあああああああああああああああああ！！！！」
「ぬあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ジーグのランサーとイキマの剣が互いにぶつかり合い火花を散らす
そのまま鍔迫り合いが始まる
力と力のぶつかりあいである
それを制したのはジーグであった

「おうううりゃあああああああああ！」
「ぬぅ！！」

イキマは咄嗟に距離を開ける
それを一跳びで縮めて再度切りつける
再び火花が散る
今度は鍔迫り合いはせずそのままの位置で激しく剣を切りあう
剣とランサーがぶつかる度に火花と轟音が起こり衝撃が手元に襲い掛かる
だが、二人の攻撃の手は緩むどころか益々増して行った

「死ねぃ！鋼鉄ジイイイイイイイイイイイイグウウウウウウウウウウウウ」
「地獄に落ちやがれえええええ！イキマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

互いの武器が交差し合う
イキマの剣はジーグの左胸を深く刺し
ジーグのランサーはイキマの心臓を刺し貫いた

「ごばぁっ！！」

イキマの口から鮮血が飛び散る
そして、手元から剣が滑り落ちた

「み・・・見事だ・・・流石は・・・鋼鉄・・・ジーグ・・・」
「イキマ、ミマシとアマソももう地獄に行った・・・後でヒミカも送ってやる」

そう言ってランサーに刺さっていたイキマを抜くと、そのままイキマは海上に落ちて消えた

「鏡・・・仇は討ったぜ・・・お袋と一緒に仲良く眠ってくれ」

剣児は戦いが終った海上で呟いていた

＊＊＊

「なにいいいいいいいいいい！！アルフとザフィーラが出来たああああああああああ！！」

くろがね屋に戻った剣児は早速甲児に報告した
それを聞いて甲児が目を見開く

「ま、マジ？あの堅物のザフィーラがぁ？」
「ああ、何か知らねぇけどあの二人出来たみたいだぜ」
「へ～、こりゃ面白いなぁ・・・後でからかいに行くか」
「だな♪」

二人はこれまた不吉な笑みを浮かべる
その時

「剣児、甲児さん！大変！！はやてちゃんが」
「なに！」
「どうしたんだ？つばき！！」

血相を変えてやってきたつばきの一言に甲児と剣児は戦慄を覚えた

友の遺産　　終

次回予告

夜天の書に封印されているハーデスにより徐々にその体を蝕まれていくはやて
もう一刻の猶予も無い！早く神の翼の封印を解かないと
しかし、それを待っていたかのようにまた仮面の奴らが襲い掛かる
更に、仮面の男の狂気の一撃が甲児を襲う

次回「蘇る邪神！兜甲児、夜天の空に死す！？」

次回もこの小説に、テイィィィィィィクオオオオオオオオオオオオオオフ

友の遺産　後編（後書き）

パルパ

今回のオリジナル要素
巨大だったバルバが子猫サイズになったので剣児がそう名づけた
しかし、本人は余り気に入ってない様子である
姿はバルバがそのまま小さくなったような物
鳴き声は『ガウッ』だけ

過去編　最終話　神の眠る日（前書き）

やっと過去編が終わります
結構長かった（汗）

過去編　最終話　神の眠る日

ゴッドマジンガーの前には冥王ハーデスが立っていた
黒く禍々しいその巨体を持った不気味な笑みがゴッドマジンガーを見ていた

「グハハハハ！あの暗黒大将軍を倒すとは大した奴だな、久しぶりにワシが腕を振るえると言う物よ」
「お前が・・・お前が元凶だったのか！」

ゴッドマジンガーがハーデスを睨む
それに対しハーデスが鼻で笑う

「だとしたら・・・どうすると言うのだ？」
「許さない・・・お前のせいで・・・お前のせいで多くの人が・・・兄さんが死んだんだ・・・そして・・・スバルが傷ついた・・・僕はお前を絶対に許さない！！此処でお前を倒す！！！」

ゴッドマジンガーは持っていた剣を両手で握り締めて切りかかる
諸手を上げて剣を振り上げて跳躍する

「うおおお

らんわ！！」

ハーデスは溜息混じりに呟きながらもゴッドマジンガーの剣をまるで木の枝を折るかのように根元からへし折ってしまった
そして反撃にとゴッドマジンガーの胸部に自身の拳を叩きつける

「ガハァッ！」

凄まじい衝撃が襲い掛かる
胸部の装甲が破損し、胸の右放熱板が砕ける
そしてそのまま数十メートル先まで吹き飛ばされて地面に叩きつけられる
たった一撃でこれ程の威力であった

「やれやれ・・・まさかこの程度で終りでは無いだろう？これでもかなり手加減したんだぞ？」

殴った方の拳を握りながらハーデスは呟く
その顔は非常に残念そうであった

「ま・・・まだだぁ！」

拳を地面に叩きつけてゴッドマジンガーは立ち上がる
そして、胸の左側の放熱板に熱が篭る

「これならどうだ！ゴォォォッドファイヤアアア

ハーデスはゴッドファイヤーをまるで涼しい顔で受ける

「な・・・ゴッドファイヤーが・・・効かない！！」

「グハハハハ、中々心地よい炎ではないか！だが、その程度でワシの体を焼き払う事は出来んぞぉ！」

「グッ！」

ゼノンは舌打ちする

すると、ハーデスの口からマグマの如く炎が噴出す

「貴様に味合わせてやる！地獄の業火をなぁぁぁ！！！」

そして思い切り炎を放射する

それはゴッドマジンガーを丸ごと包み込んでしまった

「うわあああああああああああああああああああああああああ！！！」

地獄の業火を浴びたゼノンが苦痛の声を上げる

ゴッドマジンガーの装甲の各所がドロドロに溶け始める

このまま浴び続ければかなりやばい事になる

そう感じたゴッドマジンガーは上空に跳びあがる

「ほぅ、まだそんな元気があるんだなぁ！」

跳び上がったゴッドマジンガーを見てハーデスはにやける

「例え適わなくても僕は諦めない！それを彼女は教えてくれたんだ！ゴォォォッドスマッシャアアアアアアアパアアアアアアアアアンチ！！」

腕が高速回転して放たれる
それは真っ直ぐにハーデスに向けて放たれる
しかし、その腕をハーデスは自分の牙で挟み込み、そのまま噛み砕いてしまった

「フン、中々酔狂な事を教えてくれる娘だなぁ・・・ならばワシも教えてやろう！「世の中には勝てない相手も居る」と言う事をなぁ！」

そう言ってハーデスは手を大きく開く
その手の爪が長く鋭く延びる
そしてそれでゴッドマジンガーの腹を刺し貫いた

「グ・・・ア・・・アア・・・・」

刺された箇所から火花とオイルが流れ出る
残った腕が痙攣を起こす
ハーデスはそのままゴッドマジンガーを大地に叩きつける
そして片腕を失った肩に先ほどの腕を貫通させて思いきり引き千切る

「うわあああああああああああああああああああああ！！！」

ゼノンから上がる悲痛の声
千切られた箇所から部品とオイルが流れ出る

「フハハハハ！！どうやらこの程度のようだなぁ・・・さて、そろそろ飽きた事だし終らせてやるか」

ハーデスはゴッドマジンガーの頭部を掴み持ち上げる
ミシミシと音を立ててゴッドマジンガーの頭部に徐々に亀裂が入る
その時のハーデスの顔は不気味な程ニヤけていたと言う

＊＊＊

ハーデスとゴッドマジンガーの戦いを遠くからトリスタンとイゾルデが眺めていた

「フフフ、あの魔神が倒されるのは時間の問題だな」
「そうねぇ♪後はこの世界の人間を皆殺しにすれば私達は神の体を得られえるのねぇ♪」
「そうはさせんぞ！」

二人は声のした方を見た
其処には片腕を失いボロボロの状態のバロンが居た

「おやおや、お父様が此処に何の用ですかなぁ？」
「今更貴方1人ではどうしようも無いんじゃないの？」
「確かに今の私にはお前達を倒す力は無い・・・だが、封じる事は出来る」

そう言ってバロンは持っていた書物を見せる
それを見た二人が驚愕する

「そ、その書物は・・・」
「まさか！夜天の書・・・だが、何故！！」
「フッ、我等が一族に代々伝わる代物でなぁ、本来の使い方とは違うが・・・お前達を封じる事ならこれなら可能だ！」
バロンはニヤける
「お、おのれえええええええええええええええ！！！」
「させるかあああああああああああああああ！！！」
トリスタンとイゾルデは跳びかかる
「夜天の書よ！我が命を捧げる。だから奴を・・・冥王ハーデスをこの書に封じてくれ！」
バロンは夜天の書を上空に投げる
すると書がパラパラと捲られていき、真ん中まで行った辺りで激しく発光しだす
その光を浴びるとトリスタンとイゾルデは書物に吸い込まれていった
「ぐあああああああああああああああああああああ！！！」
「おのれえええええええええ！！！人間があああああああああ！！！！」
最後の叫びを上げながらトリスタンとイゾルデが吸い込まれて行く
そして、そのままその力がハーデスに届く
「ムッ、この力は・・・まさか！夜天の書！！！・・・だが、何故」

ハーデスの視線の先には起動した夜天の書があった

「ば、馬鹿な!!!何故夜天の書が此処にいいい

＊＊＊

十数年前
ゴッドマジンガーは時空を超えて此処ミッドガルドへ来ていた
其処に映っていたのは、今の時代を懸命に生き抜いている人間達であった

「綺麗だ・・・やはり生きてる人達は皆輝いている・・・僕には無い光だ・・・」

ゴッドマジンガーは目を輝かせて眼下の人間達を見ていた
そしてそのまま崖下に降り立つ
すると機体を其処に座らせる

「僕にはあんな美しい光は出せない・・・でも、願わくば・・・あんな光を間近で見てみたい・・・」

そう言うとゴッドマジンガーの瞳が消える
そして徐々にその体が岩の様に変化していく
やがて全てが岩となった時、額からうっすらとした光の珠が降り立つ
その光の珠が大地に降りると、光が消え、中から1人の赤ん坊が横になっていた

「む?こんな所に赤ん坊が!!」

其処を偶々通りかかったバロンがやってきた
バロンは横になっていた赤ん坊を抱きかかえる
すると赤ん坊は大きな声で泣き始める

「おぉおぉ、これは元気な赤ん坊だ!よしよし・・・お前に名前を付けねばな・・・む!」

バロンは崖下に出来た魔神の像を見た

「おぉ!これは立派な像だなぁ・・・まるで神を思わせるな・・・よし、お前の名前は「ゼノン」だ!」

ゼノン
それは、この時代で「神」を意味する言葉であった

＊＊＊

「僕は・・・貴方の息子では無い上に・・・人間じゃないんだよ!それなのに・・・」
「何言ってんだ・・・例えお前が誰であろうと・・・お前は・・・俺の息子だ・・・」
「と・・・父さん・・・」

残った腕を硬く握り締めてゼノンは言う
マジンガーになった為出なかったが、もしこの時人間であったらきっとゼノンの目には涙が滲んでいた筈である

「ゼノン・・・お前は自由に生きろ・・・これからは・・・お前の人生だ・・・」
「父さん・・・・・分かった！僕は・・・僕に正直に・・・生きるよ・・・」
「それでこそ・・・オレノ・・・・息子・・・・・・・・・・・だ・・・・・」

そう言い終わった後、バロンはゆっくりと目を閉じた

「父さん・・・・グゥッ！！」

父を見送った後、体中から走る激痛に体が崩れる

「ぐぅ・・・・僕も・・・限界か・・・だ・・・だったら・・・・せめて・・・」

ゴッドマジンガーは何かを決心したかのように歩き出す
其処はかつて自分が魔神の体を捨て去った崖下であった
ゴッドマジンガーは其処に腰を下ろす
すると、その体はみるみる内に石化していった

＊＊＊

スバルは光り輝く球体の中で膝を抱えて眠っていた
そんなスバルに精神体になったゼノンが近づく

『スバル・・・御免ね・・・もう僕には君を元居た時代に戻せなくなってしまったんだ』

ゼノンは深く謝罪した
その中ではボロボロの体で眠っているスバルが居た

『それに・・・このままじゃ君ももう長くは保たない・・・だから、僕の体を君に上げるよ』

そう言うとスバルの眠っていた球体が光り輝く

『僕は肉体を失うけど・・・僕の魂は君の中でずっと・・・君を守るよ』

そう言うと、ゼノンは吸い込まれるように光輝く球体の中に入っていく

『共に眠ろう、スバル・・・君の居た時代まで』

過去編　最終話　神の眠る日（後書き）

今回で過去編は終わりです
結構無理があったかなぁ？（汗）

蘇る邪神！兜甲児、夜天の空に死す！？（前書き）

遂に動き出す悪魔
そして蘇るは冥府の王

蘇る邪神！兜甲児、夜天の空に死す！？

此処は邪魔大王国の本拠
其処にはヒミカと二人の仮面の男が立っていた

「我等はイキマ、ミマシ、アマソを失い更には夜天の書まで奪われてしまう始末では無いか！」
「まさかあいつらの中に「魔神の魂」を持つ者が居たとは・・・誤算であった」

1人の仮面の男が愚痴る

「全くだ、あのまま野放しにしていてはいずれ封印が解かれてしまう。早いうちに手を打たねばならないな」

仮面の男は不気味な視線を光らせた

＊＊＊

その頃、はやてはくろがね屋から病院に移っていた
先生がはやての診査を行う

「今の所は健康そのものね・・・でも、大事をとって入院しましょ

う」
「そうでっか」

意気消沈するはやて
そんなはやてを慰めようと必死に試行錯誤するヴォルケンリッター達
シグナム達は戦闘の後シャマルに念話ではやての容態が急変したと
知らせを受けて急ぎ病院に駆けつけたのだ
その時ははやては笑顔で見ていたのでホッとしたのだが、先生から
告げられた結果を聞いた際に、皆の顔が険しくなっていた

（やはり、徐々にだが主の体が蝕まれている・・・急がなければ取
り返しのつかない事になる）

一同の脳裏にはそんな考えが過ぎっていた
そのせいか皆暗い顔をする

「皆どないしたんや？そないな暗い顔せんでも、うちはすぐ良くな
るから！安心しぃや！」

はやてが皆を元気付ける
本来ならそれは自分達がすべき事なのだ
結局、我々は主におんぶに抱っこ状態なのかも知れない
そう、シグナムは思った

「あ、そう言えばなのはちゃんやフェイトちゃん達は来るん？」
「え、ええっと・・・それは・・・」

シャマルが返答に渋る
その時、病院の外で物凄い音が響いた
何かを倒したような音であった

ガシャァァン！パリィィィン！

その音に一同は驚く

「な、何だ？」

咄嗟にシグナム達ははやてを守るように陣取る

だが、その後に声が聞こえて来た

声色からして男の声である

「てめぇ！何しやがるんだ！折角のプレゼントが台無しになっちまうじゃねぇか！」

「うっせぇ！良いじゃねぇか！腹減ってるんだからよぉ！」

「先生も剣児さんも落ち着いて下さい！」

「ちょっと！此処は病院なんだから静かにしなさいよ！」

「あわわ、皆静かにしてよぉ」

「甲児さんも剣児さんも落ち着いて！」

「いい加減にしろ！お前ら」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」

「ガウガウ！！」

「剣児！少しは黙りなさい！！」

「良いぞもっとやれ～」

と、ガヤガヤ騒がしい声が徐々に近づいてきた

そして、扉を開けると

「はやてちゃん！大丈夫？」

「よ、見舞いに来たぜ」

「はい、一足先に私達からサプライズプレゼント！」

と、アリサとすずか、それになのは、フェイト、アリシア、甲児、鉄也、剣児、つばき、大介、明、パルパが居た
皆それぞれ何かを持っている（パルパは咥えている）

「うわぁ、皆有難うな」
「はやてちゃん、具合はどう？」

すずかが心配そうに聞く

「全然平気やで、もうすぐにでも退院しても大丈夫な位や！」

はやては両腕でガッツポーズを決めて言う

「でも、余り無理しちゃ駄目だよはやてちゃん」
「おおきにな、大介さん」
「ん？何ではやての奴大介の事「兄ちゃん」から「さん」付けになったんだ？」

其処に剣児が疑問を持つ
だが、深く考えず剣児は自分の包みを渡す

「俺のは結構考えたんだぜ！」
「ほんまに？何やろう♪」

箱を開けると、中から出てきたのは安っぽいキーホルダーであった

「ぷっ、何だよ剣児それはよぉ」
「うっせぇ！これしか良いのが無かったんだからしょうがねぇじゃねぇか！」

「あ、そうかい！」

甲児はとりあえず其処で切り上げる
その後も皆から色々なプレゼントを貰う
そして最後に

「ガウ」

パルパがはやてのベットに飛び乗る

「うわっ、何やこの猫、ごっつ可愛いやん」
「ああ、そいつはパルパって言ってナリはそんなだけど立派な虎だぜ」

そう言って剣児はパルパを指差す
すると

ガブッ

「いでえええええええええええええええええ！！！」

パルパは自分を指差していた剣児の指に噛み付く
剣児はパルパを引き剥がそうと振り回すも、パルパはまるでスッポンのように離れない
その光景を見て皆が笑う

（テスタロッサ）
（え？シグナム！）

すると、皆に聞こえないようにする為かシグナムがフェイトに念話

で話しかける

（礼を言う。お前達のお陰で主が笑顔になった）
（そんな、私だけじゃないよ・・・此処に居る皆のお陰だよ）

フェイトはそう言ってみんなを見る
見舞いに来た一同ははやてと楽しい会話をしていた
ヴィータはなのはを見ていた

「???、どうしたの？ヴィータちゃん」
「お前・・・本当は良い奴なんだな」
「へ？」
「こらヴィータ！駄目やろ！そないな事言ったら、そんな子はこうやで」

はやてがお仕置きとばかりにヴィータの鼻を摘まむ
そんな感じで楽しいひと時が過ぎていった

＊＊＊

やがて、時は過ぎ、辺りは月が照らす夜になった
ビルの屋上で一同は集まっていた

其処にはヴォルケンリッター達と甲児達が集まっていた

「はやての症状は刻一刻と深刻な物になり始めている」

「そのようだな」

鉄也が頷く

「だったらよぉ、さっさと封印を解いちまおうぜ！」

「だな、後それに触れてないのは俺と・・・甲児くんだけか？」

「そうなるな」

そういうと、まずは鉄也が夜天の書に近づく

そしてそっと触れる

すると触れた箇所から眩い光が放たれそれは皆の視界を塞ぐには充分であった

やがて、光が収まると、其処には更に多くのページが埋まった夜天の書があった

「次は甲児くんだ」

「おう」

頷いて甲児が近づく

だが、そんな甲児を突如青色のバインドが動きを封じる

「な、なに！」

「甲児さん！」

「甲児くん！」

皆が甲児に近づこうとした時、そんな一同にもバインドが掛かる

「ぐっ！」
「こ、これは！」
「あの野郎」

一同は上を見上げた
すると、其処にはやはり仮面の男が二人居た

「やれやれ、危ない所だったな」
「本当だな、もう少しで封印が解かれる所だった」

仮面の男達は安心したかのような声を出す

「てめぇ！何しやがるんだ！解きやがれ」

剣児が暴れる
だが、仮面の男は鼻にも掛けない

「お前達は其処で指を咥えてみてるが良い、我等の主が蘇る瞬間をなぁ」

そう言って再び仮面の男の手元に夜天の書が納まる
そして、床下に魔方陣を展開する
すると、その中心にはやてが現れる

「な、はやて！」
「主！！」
「はやてちゃん！！」

「み、皆！どないしたんや？んで、何でうち此処におるん？」

突然場所が変わった事に驚き辺りをキョロキョロさせるはやて
すると、そんなはやてを丸い球体のような結界が覆う
そしてそのまま仮面の男の手元に行く

「だ、誰やあんた！」
「フフフ、八神はやて。お前は今から我等が主「冥王ハーデス」様復活の為の生贄となって貰う」
「光栄に思いたまえ！それは君にとっては名誉な事なのだよ」
「な、何やそれ！うちをどないするつもりなんや？」

はやてが涙目になって聞く

「なぁに、簡単な事だ・・・「死ね」ば良いのさ」
「い・・・イヤや！うちはまだ死にとうない！」
「フフフ、往生際の悪い奴だなぁ！まぁ良い、それよりもまずはやるべき事がある」

もう1人の仮面の男はクイと手を動かす
すると真下に居た甲児は突如宙に浮ぶ

「うおわあああああああああああ！！！」
「甲児くん！」

皆が叫ぶ

「て、てめぇ！一体俺をどうするつもりだ！」
「お前は最も危険な男だ」
「我等の主を唯一倒す事の出来る男・・・魔神の魂を持つ男・・・お前を生かしておく訳にはいかない」

「だったら・・・どうするつもりなんだよ！」
「こうするのさ」

そう言った刹那、甲児は腹部に激痛を感じた
見ると、自分の腹を仮面の男の手が貫通していたのだ
仮面の男の手が貫通して甲児の背中から抜き出る

「こ・・・甲児くん！！」
「い、いやあああああああああああああああああああああああああ！！！」
「甲児いいいい

のだ」
「最早この仮面も必要ないな」

そう言って二人は同時に仮面を外した
其処にはかつて、４０００年前のミッドチルダで暗躍したトリスタンとイゾルデの姿があった

「お前等は！シュラ！！」
「ふん、この時代でもそんな事を言うのだな！あの時の青髪の小娘もそう言っていたな」
「青髪？・・・まさか！それはスバルの事か？」
「あらぁん、知っていたのかしらぁ♪」
「当然だ！彼女は僕達の仲間だ！」

大介は答える

「フ、だったら安心しろ！奴は今頃神の魔神と共に眠りに付いた頃だろうよ！」
「ま、貴方達も眠りに付くんだけどね・・・但し、永遠にねぇ」

トリスタンとイゾルデはそう言ってバインドを施した鉄也達に向かってくる
その刹那、トリスタンに向かって何者かの蹴りが放たれる

「なに！」

思わず飛びのく
其処には蹴りを放ったと思われるロッテの姿があった

「お・・・遅かった・・・の？」

思わずロッテは呟いた
其処には既に主であるはやての姿も甲児の姿も無かった
更にその横にリーゼとクロノ、そしてユーノとアルフもやってくる

「皆！今バインドを解くわね！」

リーゼがなのは達に掛かっていたバインドを解除する
それにより自由になった魔道士達は跳びあがる

「てめぇ、よくもはやてを・・・ぜってぇゆるさねぇ！！」
「覚悟しろ！」

怒りに燃える魔道士達

＊＊＊

甲児はうっすらと目蓋を開けた

「あ・・・あれ？俺は、死んだんじゃ？・・・って、此処は！」

其処は見覚えのある部屋であった
そう、かつて甲児が幼い頃住んでいた家であった

そして、隣で寝ていたのは

「し、シロー！・・・でも、小さい・・・なんでだ？」

そう、今目の前に居るシローはまだ1歳になったばかりの赤ん坊であった
そして、自分の手を見た
其処には、まるで5～6歳位の大きさの手があった

「ど、どうなってんだ！何で俺縮んでんだ？」

何がどうなってるのか分からない状況であった
目の前にはかつて自分が住んでいた家
そして隣には赤ん坊のシロー、そして縮んだ自分
頭が痛くなる思いであった
すると、扉を誰かが開けて入ってくる
その人は

「あら？やっと起きたの？甲児」
「か・・・母さん！」

そう、甲児が幼い頃に死別した筈の母「兜　翼」であった
そして更に人が入ってくる

「やっと起きたか？寝坊助」
「ガハハ、寝る子は育つとは良く言うが、昼過ぎまで寝取るのはちと不味いのぉ甲児」
「お、お父さん！それに・・・お爺ちゃん！一体どうなってんだ？」
「まだ寝ぼけてるのね？早く顔を洗って頭をシャキッとさせて来なさい」

「あ・・・う、うん」

母に言われて思わず頷く甲児
そして1人風呂場にある洗面台の水を出して顔を洗う
その際に甲児は自分の今の姿を鏡で見た
明らかに自分は縮んでいた

「どうなってんだ?まさか、此処は過去なのか?」

甲児は一人そう思っていた
何故、何で俺は過去に来てしまったんだ?
一体どうして・・・しかもこれはまだ家族全員が揃っている頃の記憶だ
甲児にとって、一番楽しかった頃の思い出

「・・・家族・・・か」

甲児は一人呟いていた

＊＊＊

なのは達魔道士組は空中でトリスタンとイゾルデとぶつかりあって

いた
なのはとヴィータが魔力弾を放てばそれを二人は片手で払いのけ
シグナムとフェイトとアリシアが接近戦に持ち込めばそれをかわし
アルフ、ザフィーラ、ユーノ、リーゼのバインドを尽く打ち破り
クロノの遠距離魔法やロッテの徒手空拳も二人にはまるで歯が立たなかった

「どうした？未来の魔道士とはこの程度の力しか無いのか？」
「これでは退屈で死んでしまいそうだわぁん♪」

二人はまるで余裕であった
そう、まるで飯事でもしているかのようである
それとは対照的になのは達は肩で息をしていた

「くそっ、仮面をつけてた時とは比べ物にならねぇ強さだ」
「あいつら・・・今まで遊んでいたと言うのか・・・」

肩で息をするヴィータとシグナムが言う
それを聞いた一同が眉を顰める
これが奴らの本気・・・嫌、もしかしたらこれも本気では無いのかも知れない
そんな不安が募っていた
視線の先では二人が余裕の表情でこちらを見ていた
明らかに余力を残している
力の差は歴然でもあった
そんな時、二人が何か話しだす

「トリスタン、そろそろ・・・」
「うむ、もう充分楽しんだだろう・・・」

そう言ってお互いが頷き合う
すると先ほどとは打って変わって攻勢に出る二人
まずトリスタンの蹴りがザフィーラを吹き飛ばす

「ぐぅっ！」
「ザフィーラ！」
「余所見は駄目よぉん♪」

アルフの背後に回ったイゾルデが腕から魔力弾を放ってアルフを叩き落す

「かはっ！」
「てめえええええええええええええ！」
「たあああああああああああああ！」

ヴィータとアリシアがそれぞれデバイスを構えて向かってくる
だが、それをトリスタンは片手で制する

「ふん！」

そして一回転して二人を投げ飛ばす

「だあああああああああああああ！」
「きゃあああああああああああああ！」

投げ飛ばされた二人は下のビルに直撃する

「クロノ！」
「ストラグルバインド！！」

リーゼとクロノがバインドをかける
だが、例にもよってまたいとも簡単に引き千切られる

「クロノ！リーゼさん！」
「加勢します」

それにユーノとシャマルも加わる
４人のバインドにより完全に動きを封じられるトリスタンとイゾルデ

「ちっ」

二人は逃れようと必死にもがく
そんな二人の間になのはが立つ

「貴方達を・・・私は絶対許さない！！ディバイィィィィィンバスタアアアアアアアアアア！！！」

レイジングハートから極太の魔力砲が放たれる
それはトリスタンの右半身を、そしてイゾルデの左半身を黒く焼き焦がす

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」」

体の半身を焼かれた二人が絶叫する

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
「はあああああああああああああああああああああああああああ！」

そして、トドメにシグナムがトリスタンを

フェイトがイゾルデを縦に一刀両断する

「これで・・・私達の・・・」

「勝ちだ！」

二人は互いに下がって言う

だが、トリスタンとイゾルデからは不気味な笑みが浮んだ

「クックック、馬鹿め！我等が主、ハーデス様を復活させる最後の鍵は・・・「我等の死」なのだ」

「お前達は自ら我等の主を蘇らせる為の手伝いをしてくれた事になったのだ！感謝するぞ！」

二人の言った事は正に衝撃の事実であった

そして、それを聞いたフェイトとシグナムは青ざめた

そんな中、二人の体に徐々に縦に亀裂は走る

「「さぁ、今こそお目覚め下さい！冥王・・・ハーデス様あああああああああああああああああああああああああ！！！！！」」

そう言った直後、二人は真っ二つになって海に消えていった

その直後、夜天の書が赤く発光し、勝手にページが捲れて行く

ある程度ページを捲ると、そこからドス黒い雷が放たれ、天に向かう

その後海上に落下し禍々しい閃光を放つ

なのは達は思わず目を手で覆う

そして、覆いを外した時、正直見なければ良かったと後悔した

其処には、まるで地獄の王がそのまま目の前に現れたかのような姿であった

黒く、禍々しいオーラを放ち、その姿は４０００年前と何一つ変わっておらず、只大きさは一回り大きくなっている

恐らく３００ｍはある

「ダアアアアアアアアアアアアッハッハッハ！遂に蘇ったぞおおおおおおおお！愚かな人間共め！よくもこのワシを封じてくれた物よ！貴様等はこのワシが皆殺しにしてくれるわあああああああああああああああああああああ！！！」

ハーデスが口を大きく開いて宣言する
何と巨大なのだろうか
その姿を見た途端、なのは達の心の一つの結論が出た
それは「逃げろ」である
逃げなければならない
あんな化け物に勝てる筈が無い
戦えば間違いなく死が待っている
そう思わせるには充分な相手であったのだ
だが、それを許す程ハーデスもお人よしではない

「さて、目障りな人間共を片付けるとするか・・・出でよ！妖獣「シャドウ」」

ハーデスが自身の纏っていたオーラから数百体の黒きデーモン達を呼び出した
その姿はまるで西洋に出てくる悪魔そのものであった
黒き体に大きな翼を生やし鋭い爪と牙を持ち顔には2本の巨大な角と不気味な赤い瞳を持ったデーモンが今目の前に数百体現れたのだ
そして、それが一斉に海鳴市を目指す

「いかん！奴らの目的は海鳴市を壊滅させる事だ！」
「そ、そんな！！」

シグナムの言葉に皆が驚く

「畜生！はやての故郷をあんな化け物に蹂躙させるかよぉ！」

「当然だ！皆！行こう！」

クロノの声に呼応して皆がシャドウの迎撃に向かう

「俺達も行くぞ！」

鉄也が拳を握って言う

それに皆が頷く

「よし、マジィィィィンゴオオオオオオオオ！」

「ダイザァァァァゴオオオオオオオオオ！」

「デエエエエエエエビイイイイイイイル！」

「つばき！ビックシューターを呼べ！」

「ガウアアアアアアアアアアアア！！」

鉄也と大介は魔神を呼び明は己の姿を変える為叫ぶ

・・・だが、

「な、グレートが来ない！！」

「こっちもだ！」

「くっ、変身も出来ないのか？」

「おい、ビックシューターは来ねぇのかよ！」

「駄目！何度呼びかけても来ない」

「ガウッ！！？」

衝撃であった
まさか魔神が来ないのであった
これでは鉄也達は只の人間である
ハーデスやシャドウと戦うなど不可能である
その時、剣児は眼下にあるものを見つける

「お、おい！あれって・・・すずか達じゃねぇのか？」
「え？」

鉄也達は剣児が指差す方を見た
其処には確かにアリサとすずかが遠く離れた海上にいるハーデスを見ていた
其処に数体のシャドウが近づく

「不味い！」
「すぐに助けに行くぞ！」

一同は急ぎ二人の元へ向かった

その頃、アリサとすずかは突然回りの一がいなくなった事と、海上にハーデスが現れた事に驚いていた

「ちょ、ちょっと！何よあれ！」
「わ、分からない・・・一体あれって・・・」

すずかとアリサが不安がっていた
其処へシャドウがやってくる

「ギシャアアアアアアアアアア！！」

「え?な、何よあれ!」
「あ・・・悪魔・・・」

二人は咄嗟に踵を返して逃げようとする
だが、そんな二人の周りを既にシャドウが取り囲んでいた

「グルルルルルルル」

シャドウ達が口から唾液のような液体をたらす
それが大地に落ちるとアスファルトを溶かしていく
その様に二人は怯える
二人共完全に青ざめてしまった

「ギシャアアアアアアアアアアア!!!」

一体のシャドウが号令を掛けるかの如く叫ぶと一斉にシャドウ達が
二人に襲い掛かった

「「きゃあああああああああああああああああああ!!!」」

万事休すと思い二人はその場にしゃがみこみ頭を抱える
其処へ、

「おおおおおおおおりゃあああああああああああああ!!!」

飛び込むように剣児が跳び蹴りを当てる
それに続き鉄也、大介、明もシャドウを蹴り飛ばす

「大丈夫かい?君達」
「え?あんた達は・・・あの時の」

「へ、若い穣ちゃんを襲うたぁスケベなデーモンだぜ！この俺がその性根を叩き直してやる」
「例えマジンガーに乗れないからと言って舐めるなよ！」
鉄也達は二人を守る為奮闘した

一方、なのは達も襲い来るシャドウ達と必死に戦っていたが、戦況は悪かった

「はあああああああああああああああ！！」
シグナムがレヴァンティンでシャドウの一体を斬る
肩から斜めに袈裟切りであった
だが、その傷口はみるみる内に塞がっていく
まるでダメージが与えられないのだ

「くっ！全く効いてないのか！」
思わず呟く

「ならブッ潰れちまえええええええええええ！」
ヴィータがアイゼンを振り上げてシャドウを叩き潰した
だが、潰されても粕が集まりまた再生する

「くそ！こいつらゴキブリより性質が悪いぜ！」

「だったら！ディバイィィィンバスタアアアアア！」

それなら焼き払えばどうだ！
そう思ったなのはがディバインバスターを放つ
ディバインバスターを受けたシャドウはそれこそ原子レベルにまで粉々になった
だが、それは粉々になったに過ぎず、それもまたすぐに集まり再生した

「そんな！」
「くっ、キリが無い」

何時の間にかなのは達の周りには何十体のシャドウが集まっていた
その戦いの光景をハーデスは遠くから見ていた

「ほほぅ・・・あ奴らは中々粘るのぉ・・・それに、魔力と言ったか？中々美味であった・・・また頂くとするか」

そう言うとハーデスは片手を上げる
その手の平から青く輝く炎が吹き上がる
それはやがて小さな炎となってなのは達の下へ向かっていく

「え？」

一同は自分達の方へ向かってくる蒼い炎を見つけた
その炎は初めは野球ボール位の大きさしか無かったにも関わらず突如形を変えて長いひも状になった
そして、それはなのは達魔道士全員の体を拘束する

「し、しまった！」
「ぐぅっ！」

「くっ、は、離れない！」

その拘束はかなり強く、普段なら物の数秒で外せるのが全く外せないのだ

「ダアアアアアアアアアアッハッハッハ！丁度小腹が空いていたのだ！お前らの魔力を頂くぞ！」

そう言うとハーデスが口を大きく開けて息を吸い込んだ
それに呼応し、拘束していたバインドから魔力が徐々に奪われていく

『うあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！』

全員が叫びを上げる
皆苦痛の顔になっていく

「ち・・・力が・・・」
「ぬ・・抜けて・・いく」
「くっ・・奴め・・・私達の魔力を・・」
「う、奪ってる・・んだ・・・」

やがて魔道士全員が大地に落下する
ある程度魔力を奪い終わるとそのバインドは音を立てて消え去っただが、今のなのは達に立ち上がる力は殆ど残っていない

「ゲフゥ、もう食えんわぃ！さて、そろそろトドメを刺せぃ！シャドウよ」

命令を受けたシャドウは一斉に一箇所に集まっていく

そして、５０ｍにはなる巨大な姿となって倒れたなのは達を見下ろした
まるで勝利を確信したかのように巨大化したシャドウはにやける
それを見ていたハーデス
しかし、ふとハーデスは上空を見上げる
「どうやら鼠が空の上にいるようだな」

＊＊＊

ハーデスの視線の先には軌道上に待機していたアースラがあった
アースラのブリッジの映像には魔力を吸い取られ動けなくなったなのは達と生身で苦戦する鉄也達が映し出されていた

「どうやら、あの空間には特殊な結界で覆われているらしくてマジンガーが呼べないみたいなんです！」
「エイミィ！あの結界をどうにか除去出来ない？」
「無理です！色んな手を試してますが、全部ＮＧ食らってます」
「えええええええええええい！じれったいのおおおおおおおおお！このワシが開発に協力したアルカンシェルでぶっ飛ばせば良いではないかぁ！」

隣に居た敷島博士がジダンだを踏む

「いや、そんな事したらクロノ達も吹っ飛ぶし（汗」

エイミィが汗を流して言う

「リンディ艦長、私が現場に行くわ」

プレシアが言う

「プレシアさん！体の方は大丈夫なの？」

「娘達の危機にそんな悠長な事を言ってられないわ！それより早く転送準備を」

『そうはさせんぞ！』

「な！」

その時、突如ハーデスの顔が画面一杯に浮かび上がった

それを間近で見たエイミィは度肝を抜かれる

『人間の分際でワシを見下ろしおって！今から貴様等に罰を与えてやる！』

そう言うと突如アースラに警報が鳴り響いた

「い、一体何があったの？」

「た、大変です！システムが乗っ取られました！アルカンシェルが起動してます」

「な、何ですって！」

リンディはパネルを操作する
すると、確かにそのパネルにはアルカンシェル発射のタイマーがカウントされていた
時間からしておよそ３０分である
しかも、ハーデスの言う罰はこれだけでは無かった

「か、艦長！アルカンシェルの発射とこのアースラの自爆が連動してます！」

エイミィはそう言ってパネルを呼び出す
其処には同時に自爆のカウントも取られていた
時間はアルカンシェルの発射とほぼ同じであった

「え、エイミィ！局員達の脱出をさせて！」
「駄目です！全くコントロールを受け付けません！私達は・・・・
完全に閉じ込められました」

エイミィがダンとキーボードを叩く
最早手の施し様が無いのだ

「ええい！こうなったらワシが直接乗り込んで奪い返してやるわい！セットアップ！」

敷島博士がケーブルを取り出して頭に繋ぐ
だが、其処へ突如電流が流れた

「ぢｗ－ゥｇｊ０位ｗ後；ｈなうわハウを得ｒ；ｇはｓんづいおあういｇｖｈｗ０ａｅｈｗａ」

声にならない叫びを上げた後敷島博士は黒い煙を吐き出してその場に倒れた

「くっ・・・最悪の状況ね」

リンディは今置かれた状況に思わず呟いた

＊＊＊

竜馬達は武蔵と名乗る光の球体と話していた

「リョウ、俺は今なぁ。遥か未来で戦ってるんだ」

「み、未来でだと！」

竜馬は勿論、隼人も弁慶も驚いていた

「それでな、悪いんだが、お前らのゲッタードラゴンを俺にくれないか？」

「な、何でだ？」

「今俺の居る世界でどうしてもゲッタードラゴンが必要なんだ！」

「待て！それじゃ俺達はどうなる？ゲッターが無ければ戦えないぞ

！」

隼人が言う
正にその通りである
今ゲッターが無くなれば竜馬達に戦う力が無くなってしまう事になるのだ

「先輩！まさか俺達にこのまま死ねって言うんじゃないでしょうね？」
「馬鹿言うんじゃねぇ！ダチ公にそんな酷い事言うかよ！心配するな！変わりになる奴を持ってきたよ」

そう言うと竜馬達の前には巨大な1体のゲッターが居た
顔こそは旧ゲッターに似ていたが、巨大な肩、太い足、そして鋭利に尖った腕のブレード等、あらゆる箇所が違っていた

「武蔵！これは一体？」
「こいつにはまだ名前は無い・・・遭えて言うなら『真なるゲッターロボ』だ」
「真なる・・・ゲッター・・・ロボ」

竜馬は目の前に立つゲッターロボを見てそう言った

蘇る邪神！兜甲児、夜天の空に死す！？　　終り

次回予告

マジンガーが呼べず、なのは達は魔力を奪われ絶体絶命の窮地に立たされる
しかし、其処へ遥か時を越えてやって来た友が送った「真なるゲッターロボ」が現れる
そして、次元を超えて現れるは悪を砕く神の拳

次回「真なるゲッターロボ、そして神の拳」

次回もこの小説に、テイィィィィィィィクオオオオオオオオオオオフ！

蘇る邪神！兜甲児、夜天の空に死す！？（後書き）

次回はいよいよ神の拳とゲッターロボが登場！

真なるゲッターロボ、そして神の拳　前編（前書き）

遂に登場、ゲッターチーム
そして遂に登場！真なるゲッターロボ

真なるゲッターロボ、そして神の拳　前編

目を覚ますと、其処は操縦席の中であった
目の前には二本のレバーと明かりのついたモニターがあった
モニターから外の風景が映る
暗い星の海に白き大地、そして目の前には母なる大地「地球」が映っていた
恐らく此処は月なのだろう
そう思い竜馬は通信パネルを起動させる

「隼人、弁慶、無事か？」
「おう！こっちは大丈夫だぜ」
「しかし、こりゃ一体どうなってんだ？俺達は確か」

隼人は以前自分達が体験した現象を言った
そう、以前自分達の乗っていたゲッタードラゴンは旧ゲッターの自爆に巻き込まれてしまった筈
それなのに自分達は全くの無傷だったのだ
信じられない状況であった
そして何より彼等が驚いたのは

「オイ！リョウ・・・こいつぁ」
「どうした？」

竜馬は驚きの顔になる隼人を見る
そして、月のある一面から映る自分達が乗っていた機体を見る
それは、以前武蔵と出会った時に貰ったゲッターと全く同じであった

「これは・・・真なる・・・ゲッターロボ！！！」

其処には武蔵の言っていた真なるゲッターロボが居た

「って事は、あの時の夢は正夢だったんだなぁ」

弁慶は大声で言う
それに竜馬と隼人は頷く

「武蔵・・・お前は未来で戦ってるのか?そして、何故ドラゴンが必要だったんだ?」
「リョウ、今は問いかけても返してくれるような奴は此処には居ないぜ」

1人呟く竜馬に隼人が答える
それよりにと言いたげに隼人が地球を顎で指す

「どうも俺には今地球がやばい状況になってる気がしてならねぇんだ」
「ヤバイ?それって一体なんだよ?」
「さぁな、只言える事は俺達はこんな所で油を売ってる場合じゃないって事くらいだろうな」

弁慶の問いに早とはニヤリと笑って返す
それに竜馬も頷く

「その通りだ!今俺達の来るのを皆が待ってるかもしれない!急ぐぞ!」

そう言って竜馬は操縦桿を握る
すると、操縦桿からはゲッターの鼓動と思わしき物が伝わってきた

何だと?まさか、このゲッターは生きてるのか?
嫌、今深く詮索するのは止すとしよう
今はとにかく急いで地球に戻る事だけが目的なのだ

「ところでよぉ、こいつの名前どうすんだ?」
「確か、武蔵は「真なるゲッターロボ」って言ってたよなぁ」
「真なるゲッターロボ・・・真・ゲッターロボ!」

竜馬は命名した
そうだ、お前は今日から真・ゲッターロボだ!
そうと決まれば決断は早い方が良い

「行くぞ!真・ゲッターロボ!!」

竜馬は叫びゲッターを動かす
ゲッターは竜馬の命令に従い体を真空の宇宙に持っていく
そのスピードは凄まじく、ドラゴンの比では無かった

「「「ぐうううううううううう!!!」」」

いかにドラゴンの操縦になれた三人でもこの真・ゲッターロボの操縦には手を焼く事となった

「ちっ、こいつぁとんでもないじゃじゃ馬だぜ!」
「うおぉぉぉ!体がバラバラになっちまうぜぇ!」
「ぐぅぅ・・・これじゃ・・・これじゃ地球に着く前に俺達の体がもたん」

3人供苦悶の表情を浮かべていた
そんな時であった

彼等の脳裏に何者かが語りかけて来た

【ゲッターを信じろ】

「何！」

【ゲッターを信じるんだ！】

「だ、誰だ？」

「おいおい、まさか幽霊じゃねぇだろうなぁ？」

【ゲッターは力で動かすんじゃない・・・ゲッターは心で動かすんだ】

「心で・・・ゲッターを動かす・・・そうか！そうだったな！」

1人竜馬は納得する
するとふっと目を閉じて何かに集中しだす
すると今まで自分に掛かっていた圧力が嘘のように消え去り、体が楽になった
思わず自分の手を数回握ったり開いたりした
間違いない、このゲッターは生きてるんだ
だから俺達の心に答えてくれるんだ
そう思えた

「隼人！弁慶！ゲッターを信じるんだ！力じゃなくて、心で動かすんだ！！」

「力じゃなくて・・・心で・・・だと？」

「何だか分からねぇけど・・・やるだけやってみるか！！」

竜馬の言葉に従うように隼人と弁慶も操縦桿を握り目を閉じる
すると竜馬と同じ現象が起こった
先ほどまで自分達に掛かっていた圧力が嘘のように無くなっていったのだ
これなら動かせる
これなら、真・ゲッターを自在に動かせる

「よし！行くぞ！ゲッタァァァバトルウィィィィング！！」

ゲッターの背中には蝙蝠の羽を思わせる2本の翼が生えた
そして、それを羽ばたかせて物凄いスピードで地球を目指すのであった

＊＊＊

その頃、アースラでは大パニックが起こっていた
アルカンシェルは起動し、それと同時に自爆装置が起動してしまったのだ
エイミィは未だに無駄と分かっておきながらも必死に操作を行う
リンディとプレシアも同様に計器を操作して暴走を止めようとしているが、焼け石に水であった

「駄目です！どうやっても操縦権を奪う事が出来ません！！」
「こっちも駄目だわ！向こうの方が一枚も二枚も上手だわ！」

プレシアが言う
目の前には未だに英語で「アラート」と書かれていた
その時、エイミィがアースラ付近を超高速で通過する何かの存在をレーダーで探知した

「え？嘘！何コレ・・・」
「どうしたの？エイミィ」
「い・・・今さっき巨大なロボットか何かが近くを通ったのですが・・・有り得ない速度なんです！こんなスピード出せる筈が無いんです！」

青ざめた顔でエイミィが言う
それに眉を上げるリンディ

「エイミィ、そのロボットの映像出せる？」
「やってみます！」

エイミィは再びキーボードに向き合う
そして慣れた手つきでボードを操作して、外を通過した一体のロボットの静止画が映し出された
其処には、赤い顔に2本の角、そして大きな肩に鋭いブレード、そして蝙蝠のような羽を生やしたロボットが居た
それを見て一同は思わず呟いた

『ゲッターロボ！！』

＊＊＊

なのは達の前には集合して巨大化した妖獣シャドウが居た
シャドウは鋭い爪をガチガチと鳴らして全く抵抗出来ないなのは達を眺める
その眼下でなのは達は足を震わせながらも必死に立ち上がろうとするだが、腰半分まで立った辺りで再び足が折れて地面に倒れる事の繰り返しであった

「だ・・・駄目・・・・魔力が無くて・・・立てない・・・」
「こ・・・・甲児さんの・・・仇を討てない・・・なんて・・・」
「む・・・無念だ・・・・・」

その場に倒れた皆が悔しそうな顔を浮かべる
そんな一同を見てニヤリとしたシャドウが腕を振り上げる
そして、僅かに指を動かした後、一気にそれを振り下ろす
万事休す！
そう思いなのは達は思わず目を瞑った
だが、その刹那であった
突如上空から音速ジェット機が真横を通過したかのような音を立てると同時に凄まじい振動が彼女達を襲った
何事だろうと思いなのは達はそっと目を開いた
すると、其処には真っ二つになって横たわるシャドウと、シャドウの血液で汚れたブレードを片手に持つ巨大なロボットが立っていたえ？あれって・・・まさか！
信じられなかった
姿こそは今まで見た事は無い形であったが、それを一目見た時点で

そのロボットが何者なのかすぐに理解出来た
それは、以前旧ゲッターと共に心中する形で姿を眩ませたなのは達
にとって心強いもう1人の味方
ゲッターロボであったのだ

「あれって・・・ゲッターロボ？」
「でも、あんなゲッター見た事無いよ」

フェイトが首を傾げる
もしかしたらあれもハーデスの生み出した敵なのか？
だが、その疑問をゲッターに乗っていた者の声がかき消した

「皆、無事かい？」
「そ、その声は！！」
「竜馬さん！！」
「無事だったんですね！！」

竜馬達を知っている者達の顔が一気に明るくなる
それに真ゲッターは頷いた

「ああ、俺達はそう簡単にくたばる程やわじゃないからな！」

竜馬は笑って答える
すると、そんな真ゲッターロボに妖獣シャドウが群がってくる

「ちっ！鬱陶しい奴らだ！」

振り返って竜馬は舌打ちを打つ
そして空高く舞い上がるとそれに釣られてシャドウ達も舞い上がっていく

やがて雲と同じ高度まで上がるとゲッターは上昇を止めた
するとそんな真ゲッターに向かってシャドウが襲い掛かる

「一気に片付けるぞ！ゲッタァァァトマホォォォォォォォォォク！！」

竜馬が叫ぶと真ゲッターの肩から柄の長くなったゲッタードラゴンのより2倍以上の大きさを誇る巨大な斧が現れる
それを手に持ち力一杯横に振るう
そのたった一撃に周りに居たシャドウは全て真っ二つに両断されて薄汚い花火を上げる事になった
それでもシャドウはまだまだ群がってくる

「邪魔するな！トマホォォォォクブウウウウウウウウウウウメラン！！」

持っていたトマホークをブーメランよろしく投げる
回転する斧は斜線上に居たシャドウの群れを次々と蹴散らしていく
そして、ある程度蹴散らしていった後再び真ゲッターの腕に戻ってきた

「リョウ！あれを見ろ！」
「ん？」

竜馬はふと隼人が指す場所を見た
其処には遥か上空にまるで人間の心臓の様な不気味な物体が浮んでいた

「何だあれは？」
「さぁな、だがあれが俺達にとって厄介な物だってのは分かる事だ

な」

「ああ、だったらやる事は一つだ！！」

真ゲッターは上空に浮んでいた物体に向かって飛行する
するとそれを守るようにシャドウが群がる

「へ、どうやら奴さん方にとっちゃ余程大事な物らしいな」
「ああ、だがその程度で俺達とこの真ゲッターを止められると思うな！！」

＊＊＊

「す・・・凄い」

なのは達は上空で展開される真ゲッターの戦い振りに驚いていた
すると、其処へシャドウ達を殴り倒してきながら鉄也達がやってきた

「高町！テスタロッサ！無事か？」
「皆！怪我は無いかい？」
「生きてるなら返事しやがれ！！」
「あのねぇ（汗」

剣児の言葉につばきが汗を流して突っ込む
そして、その中には先ほど助けたアリサとすずかが居た

「え？な、なのは！！」
「フェイトちゃんに、アリシアちゃんも・・・一体どうして？」
「え・・・えぇと・・・その・・・」
「こ・・これには・・・その・・・」

目を見開いたアリサとすずかに返答に困るなのはとフェイト
するとそんな彼女達にシャドウが群がってくる

「ちっ！どうやら無駄話はしてられんな！」
「そうだね！皆、動けるかい？」

アリサとすずかを守るように陣取りながら大介が聞く
すると、皆がゆっくりと立ち上がる

「ああ、何とか戦う事は出来るな」
「けど、流石にまだでかい魔法は使えないな」

シグナムはレヴァンティンを構えて、ヴィータは腕を握ったりして
答える
どうやらまだ本調子ではないらしい
そんな一同にシャドウが向かってくる
だが、

「や～～れやれ～～、や～っと俺達の出番～～だぜ～～ぃ」

やけに間延びした台詞の後に目の前に居たシャドウ達が全て蜂の巣
状態になってしまった

その台詞、そしてこの手口
それを見てなのは達は誰がやったのか分かった
そして振り向く

「よぉ、元気か～～お前ら～～」
「ジャンゴさん！」

其処にはメキシカンな服を着て両脇にガトリング砲を携えた「マグナムZ」こと荒野のジャンゴが居た
すると、その少し先で爆発音が響いた

「いやあああっはあああああああ！このイタチの安さんの癇癪球の威力はどうでぃ！」

其処には色の薄いサングラスを掛けたイタチの安が居た
それに続いて顔に十字傷を付けた巨漢が数体のシャドウを握りつぶした

「この黒子野郎！こちらに居るのは俺達の大事な客人なんだ！手ぇ出したら叩き潰してやるぞ！！」

クロスがそう言ってシャドウ達をグシャグシャに握りつぶす
気がつくとクロスの手にはビー球位の大きさにされたシャドウの亡骸があった
そして、そんなクロスの後ろから脱兎の如く二つの影が現れた
1人は着物を着た老婆であり、もう1人は口元を赤い布で隠して腰に刀を挿した男であった

「先生！大事な客人を傷つける奴らは頼みますよ」
「・・・・・（コクッ」

老婆こと「お菊姉さん」の言葉を聞いて「先生」は頷いた
すると二人はそのまま群がるシャドウの元へ突進していく
先生は目にも留まらぬ速さでの抜刀術でシャドウを一気に切り刻んでいき、お菊姉さんは懐から取り出した超合金Zの糸を伸ばしてシャドウ達を絡めとり、そしてバラバラに切断してしまった

「す・・・凄い！」
「い・・・一体誰なのよあんた達は」

アリサとすずかは突然現れたクロス達を見た
すると、其処に煙管を片手に持った女性がやってくる

「こいつらはくろがね屋５人衆さね」
「くろがね屋・・・」
「・・・５人衆」

女将こと「錦織翼」の言葉を聞くアリサとすずかは首をかしげた
すると、そんな翼に向かってシャドウが襲い掛かる
だが、翼は懐から丸い球体を取り出すと頭上に掲げる
その球体からは薄い膜状の結界が張られアリサとすずかと翼を守るように展開する
シャドウ達がその結果に爪を立てるも全く歯が立たない

「安心しな！この結果の中に居れば安全だよ」

不安がるアリサとすずかに翼が言う

「でも、翼さん！甲児さんが・・・甲児さんが・・・」

フェイトが涙目になって翼に言う
だが、翼はフッと笑う

「心配しなさんなフェイト。あの男がそう簡単にくたばる筈無いだろう」
「え？」
「今は信じて待ちな・・・その内ひょっこり出てくるさ」

翼はニィッと笑って言う
その笑みの意味がフェイトには良く分からなかった

＊＊＊

その頃、真ゲッターは上空に浮ぶ謎の物体を目指していた
だが、目の前には無数のシャドウが居る
全員を相手にしていたら時間の無駄である

「リョウ！此処は俺に任せろ！！」
「よし！頼むぞ！！オォォプン、ゲェェェット！！！」

竜馬がレバーを操作して叫ぶ
するとゲッターは赤、白、黄色の三色のゲットマシンになる
すると、今度は白、黄色、赤の順番に並ぶ

「チェェェンジ・真・ゲッタァァァ2！スイィィッチオオオオオオン！！」

隼人の叫びと同時に3機のマシンは一体のロボットになった
細身のボディに両手がドリルと鉤爪状の者になり背中に大型ロケットを背負った真ゲッター2となった

「一気に行くぞ！真・ゲッタービジョン！！」

真ゲッター2がロケット噴射をし亜高速にまで加速する
それにより錯覚で真ゲッター2が何体も見えるようになるのだ
そして、そのまま腕のドリルを回転させる

「ゲッタァァドリル！」

回転させたドリルを前に突き出して突進する
すると斜線上に居たシャドウ達はまるでミンチのようにバラバラになっていく
その勢いのままゲッター2は謎の物体に突進する
だが、ドリルが届く前に物体を守るように結界がしかれていた
結界とドリルがぶつかり合い激しく火花を散らす

「野郎、生意気にバリアとは生簀かねぇ野郎だぜ！だったら何度でもたたきつけてやるよ」

そう言うと突如真ゲッター2はその周りを高速で飛行しだす
そして飛行しながらドリルをたたきつけていく
その光景はまるで何体ものゲッターが連続して結界を攻撃しているようにも見えた

その連撃により徐々に結界に亀裂が入っていく

「おい、隼人！次は俺に任せてくれ！」
「フッ、手加減するなよ弁慶・・・オォォォプンゲェェェット！！」

再び3機のゲットマシンに分離する

「チェンジ！真ゲッター3！スイィィッチオォォォン」

そして物体の遥か後方で3機のマシンがまた一体のロボットになった
太い腕に肩には2門のミサイル発射管があり、足の変わりに巨大なキャタピラをした「真ゲッター3」が其処にはいた

「これでも食らえ！ミサイル全段発射！！」

真ゲッター3が腰から下を半回転させて面前に持ってくる
すると巨大なキャタピラの上部装甲が開き、そこから雨霰（あめあられ）の如くミサイルが降り注いだ
そのミサイルの雨は全て結界を纏った謎の物体に命中していく
凄まじい轟音と爆音が当たりを包む
そして、結界が音を立てて弾けて割れる

「よっしゃ！リョウ、トドメは任せたぜ！オォォォプンゲエエエエエット」

また3機のマシンに分かれて今度は物体の近くにまで飛行する

「チェェェェェェェェェンジ！真ゲッタアアアアアアアア１！！スイィィィィィィッチオオオオオオオオオン！！！」

3機のマシンは再び最初の時のゲッター1となった
そして腹の部分にあったレンズが開き、其処にエネルギーが収束する

「食らえ!ゲッタァァァァビイイイイイイイイイイイイイイイム!!!」

竜馬の叫びと共に真ゲッター1の腹から収束されたゲッタービーム
砲が謎の物体を包み込む
そしてそのまま海上に叩き付けて暫くビームを浴びせ続ける
するとそれからほんの数秒で物体は激しい爆発を起こした
爆煙が上がる頃には真ゲッターは既に避難を終えておりその強さが
伺えた

＊＊＊

ゲッターの戦い振りは下から見ていた鉄也達を驚かすには充分であった

「凄いな、あれが新しいゲッターロボの力なのか」
「そうみたいだね・・・でも、リョウ君たちはあれを使いこなしてる」

大介が言う
すると、自分達の体に今まであった妙な違和感が消え去るのを感じた

「これは！」
「もしかしたら！いけるんじゃないのかい？」
「そうかもな！」

同じように剣児と明も感じていた
そして四人は集まりそれぞれ魔神を呼ぶ

「マジイイイイイイイインゴオオオオオオオオ！！」
「ダイザアアアアアアゴオオオオオオオオオオ！！」
「鋼鉄ジイイイイイイイイイイグ！！」
「デエエエエエエエエビイイイイイイイイイル！！」

４人は叫ぶ
すると、それに呼応してグレートマジンガー、グレンダイザー、鋼鉄ジーグ、デビルマン、バルバが現れる

「よし、これなら力は互角だ！」
「行くぞ！」

そう言って向かおうとする
その時、エイミィから通信が入る

『皆、大変なの！実はアースラのシステムがジャックされちゃって、アルカンシェルが起動しちゃったの！』
「な、何だって！！」

アルカンシェルとの言葉を聞いてクロノが大声を上げる

「ちょっと、それってマジ？」
「だとしたら・・・システムを奪い返せないの？」

ロッテとリーゼが聞く
だが、それに対しエイミィがかぶりを振る

『駄目、どうやってもシステムを奪い返せないの！それに、アルカンシェル発射とほぼ同時にアースラの自爆もセットされちゃって！私達もうこの艦から退艦する事も出来ないの』
「そ、そんな！」

その言葉を聞きその場に居合わせた全員が青ざめた
その後エイミィからアルカンシェルの発射は後２０分だと告げられた

真なるゲッターロボ、そして神の拳　前編（後書き）

後編ははやてと甲児メインです

隼人
「ところで、何で真ゲッター2の回避が「真ゲッタービジョン」になってんだ?」

実はあれは間違いではなく後半の複線のつもりで書いたのだ

竜馬
「またろくでもない事を考えたんだなこの作者は（汗」

ヒントは武蔵に渡したゲッタードラゴンだ

弁慶
「え?あれって渡してそれで終りじゃないのか?」

んな訳ねぇだろうが!ちゃんと先の事も考えてあるわぃ!
んじゃ、お楽しみに

真なるゲッターロボ、そして神の拳　後編（前書き）

今回はあのキャラクターがあの姿で登場！！
って・・・マジ？

真なるゲッターロボ、そして神の拳　後編

（主はやて・・・起きて下さい・・・主はやて・・・）
「ん・・・ね・・・眠い・・・・って、んな事言ってる場合とちゃうやん！！！」

はっとしてはやては起きた
そして、ある事に気づいた

「あり？うち、立てる？何でや？」

そう、今はやては車椅子無しで2本の足で立っているのだ
それに疑問を感じるはやて
試しに数回足踏みをするも特に違和感を感じなかった
まるで最初から歩けていたかの様に
しかし何故？
そう思っていると、はやての目の前に1人の女性が現れた
銀色の長い髪に赤い瞳をした美しい女性である

「やっと目覚めましたね、主はやて」
「えっと・・・貴方は誰ですか？」

はやては恐る恐る尋ねる
それに女性は答える

「私は、夜天の書のシステムです、冥王ハーデスが夜天の書から抜け出した為にこうして復帰する事が出来ました」
「そ、そっかぁ・・・って、そうや！甲児兄ちゃんは？甲児兄ちゃんはどうなったん？」

はやては辺りをキョロキョロしだす
辺りには不気味な色の空間が漂っていた
余り長く見ていたくない光景である
すると、女性がそっとはやてを誘う
その先には仰向けになったまま目を開けない甲児の姿があった

「こ、甲児兄ちゃん！」
「彼は今、深き眠りの中に居ます」
「な、なぁ夜天の書さん！甲児兄ちゃんを起こしてぇな！」

はやてが哀願するも、女性は首を横に振る

「残念ですが・・・私にはそんな力はありません・・・目を覚ますには、甲児さん自身がそう望むしかありません」
「そ、そんなぁ・・・」

はやては涙目になって目を覚まさない甲児を見る
すると、女性は甲児の前に正座してそっと甲児の頭を自分の足に乗せる
所謂「膝枕」である
そして、そっと甲児の額に手を置く

「何してるん？」
「私には彼を起こす力はありません、ですが、何とかできる限りの事をしようと思います」

そう言って女性は目を閉じる
すると女性の手から柔らかい光が発せられる
そして、それから数秒たつと、女性は目を開いた

「今、彼は家族と共に居る夢を見ています」
「甲児兄ちゃんの・・・家族？」
「はい、彼にとっては最も幸福な夢・・・恐らく、彼は・・・」

女性は暗い顔をする
そして、目を覚まさぬ甲児をじっと、只見詰めることしか出来なかった

＊＊＊＊

幼い甲児は家族と共にテーブルに座り食事を楽しんでいた

「美味い！母さんの料理ってこんなに美味かったんだなぁ！」
「何言ってるのよ！毎日食べてるじゃないの！変な甲児ねぇ」

久しぶりに食べた母の料理に舌鼓を打つ甲児に母はクスリと笑う
その横で剣造と十蔵も同じように笑う
それを見て甲児の頬がうっすらと赤くなる
すると、ベットで寝ていたシローが大声で泣き出す

「あら？シローもお腹が空いたのかしら？」

母はそっと席を立ちシローの元に向かう

その後姿を甲児はじっと見詰めていた

「何じゃ甲児？お主もお母さんのオッパイが恋しくなったんかぁ？」
「え？ち、違うよおじいちゃん」

十蔵のからかいに甲児は慌てて手を振る
それを見て十蔵が笑う

「ガハハハハ！しかし剣造もやるのぉ、あんな美人な奥さんを貰ったんじゃからのぉ」
「からかわないで下さいよおとうさん」

今度は剣造をからかって遊ぶ十蔵
それに参ったなと言った顔をする剣造
その光景を甲児は見ていた

（これが・・・俺の家族か・・・忘れてたな・・・）

甲児は長らく忘れていた家族との団欒を楽しんだ

やがて、食事を終えた甲児達は外に出た
何時までも家の中に居ては体に悪いとの十蔵の提案である
甲児は父剣造に肩車して貰い、母はシローを乳母車に乗せて、その後ろをゆっくりと十蔵が歩く
そして、一向が辿り着いたのは綺麗な花畑であった

「か～～～、やっぱ良いのぉ外は」
「そうですね」

十蔵と剣造は二人して花畑で横になる
その光景を母と甲児が笑って見ていた
ふと、甲児は思った
このままこの世界に居て良いのだろうか？
何しろ、甲児の母も、父も、祖父もこの世には既に居ない存在なのだ
だが、今こうして母を、父を、祖父を感じる
まるで現実のようだ
だが、何処か違う
何故かは分からないが、何処か現実とは違う気がする
そう思った甲児はふと、母を見る

「ねぇ、母さん」
「ん？どうしたの、甲児」
「これって・・・・・夢・・・なのかなぁ？」
「・・・そうだよ」

甲児の問いに母は隠す事も騙す事もせず率直に答えた
それに甲児はそうかと言った顔をした
すると、母は甲児の頭にそっと手を乗せる

「甲児・・・ずっとこの世界に居て良いんだよ。お前はずっと会いたかったんだろう？私や剣造さん・・・それにお爺ちゃんに」

母は優しく答える
そうだ、俺はずっと母に、父、お爺ちゃんに会いたかったんだ
そして、それが夢とはいえ今現実になった
ずっと此処に居て良い
それは甲児自身もそう願った
だが

「御免・・・母さん」
「甲児？」

甲児はスッと立ち上がる
幼い体のせいか立ち上がってもまだ母には頭が届かない
そんな体のまま甲児は振り返る

「俺、行かないと・・・元の世界で皆が待ってるんだ」
「・・・そうかい・・・なら仕方ないねぇ」

そういうと、突如周りの空間が砕け散り、後は漆黒の闇が残った
その中で甲児は母と二人っきりになった

「流石は私の子だよ。私はお前に辛くなったら夢の中に逃げるなんて教えてないからねぇ」
「へへ、そりゃそうだよ！俺はそんな弱虫じゃないからさ！」

幼い甲児は鼻を鳴らす
すると、彼を光が包み徐々にその光の大きさが増していく
そして、光が晴れると、其処には元の１９歳の甲児が居た

「暫く見ない内に良い男になったね。昔の剣造さんそっくりだよ」
「そうかい？」

甲児は照れ臭そうに頭を掻く
そんな甲児を母は笑いながら見る

「甲児、目を覚ましたら夜天の書のシステムに会いな、そいつがお前を元の世界へ導いてくれる筈だよ」

そう言い終わると母は眩しい光に包まれる
そしてその光は霧のように消えて行った
それを甲児は少し寂しそうに見つめた

「また会えてよかったよ・・・母さん」

甲児は去っていく光に向かってそう言う
すると、甲児の居た空間が眩い光に包まれていく
その光は、何処か暖かく、そして安らげる光であった

＊＊＊

「う・・・うぅ・・・」

やがて、甲児は目を覚ました
目を覚ますと、其処には銀色の髪をした美しい女性とはやてが居た

「はやて・・・それに・・・リイン？」

そう、その女性は１０年後の世界ではやてと共に居たユニゾンデバイスである「リインフォースツヴァイ」こと「リイン」に良く似ていたのだ

「やっと、目覚めましたね。甲児さん」

「何で俺の名前を・・・・ん？」

ふと、甲児は自分の後頭部が何処に当てられているのか気づいた
それは、夜天の書の膝の上であった
つまり、今甲児は夜天の書の女性に「膝枕」されていると言う事なのだ

「不快でしたか？」
「いやぁ、あんたみたいな美人な人に膝枕されてるなんて・・・道理で寝心地が良かった訳だぜ♪」

甲児は嬉しそうに言う
それに女性は少し頬を染める
どうやら美人と言われたのは初めてらしい
すると、そんな女性の顔を甲児は面白そうに見る

「へぇ、はにかんだ顔も中々可愛いな」
「え？」
「なら今度は笑った顔が見てみたいねぇ・・・とと、そんな事言ってる場合じゃねぇや！」

はっとして甲児は起きる
そして周りを見る
周りには一向に不気味な風景が彩っていた

「やれやれ、目を覚ましてもこれじゃ何処が出口だか分からないなぁ」
「ほんまやなぁ」

甲児とはやては参ったなと言った顔をしていた

その時、ふと甲児ははやてを見て驚いた

「あり?はやて!お前足治ったのか?」
「ん?よう分からんけど何か夜天の書で封印しとったハーデスって言うのがいなくなったお陰でうち歩けるようになったみたいなんや」
「へぇ、そうなのかぁ」

甲児はそう言ってはやての頭を撫でる

「良かったな、はやて」
「うん、有難うな甲児兄ちゃん♪」

はやては嬉しそうに答える
すると、

『楽しい会話の所良いか?』

と、上空から待機状態のデバイスが降りてきた
形はクロノのデバイスと良く似ていた

「あり?何でこんな所にデバイスがあるんだ?」

甲児は目の前に降りてきたデバイスを見る
すると、デバイスが反応する

『何だ?グレアム提督から話しを聞いて無かったのか?俺はデュランダル・・・ってのはデバイスの名前だな。俺は「クライド・ハラオウン」と言う』
「へぇ、・・・って、ちょっとまて!クライド?クライドって確か死んだ筈じゃぁ!!」

甲児は目の前に居るデバイスに向かって言った
その通りなのだ
以前グレアム提督の話しを聞いた事があり、その時確かにクライドは死んだと聞かされたのだ
それが一体何故此処に・・・しかもデバイスになって居るのか？

『それは其処に居る夜天の書がやってくれたんだ』
「え？マジ」

甲児は振り返って女性を見た
それに女性は申し訳無さそうな顔をした

「申し訳有りません。クライドさん・・・私の力が及ばなかったばかりに貴方の肉体を失わせる事になってしまって」

夜天の書が謝罪する
それに甲児とはやては首を傾げる

「どゆ事？」
「説明しましょう・・・あの時、一時的にですがハーデスは封印から逃れました。しかしそれをクライド様が命掛けで封じたのです。其処で私は彼を救おうとしたのですが・・・私の力及ばず、結局彼の魂をデバイスに移して此処夜天の書に匿う事しか出来ませんでした」

夜天の書が語りながら暗い顔をする
それにクライドが笑いながら言う

『なぁに、あんたのお陰でこうしてデバイスとして生きていられて

るんだ。むしろ感謝してるよ・・・それに、これならリンディのお茶を飲む事も無いしな（汗』
「あ、やっぱあんたもあれ苦手なんだ」
甲児は其処に反応した
『当たり前だろう！あんなの飲めるのはリンディ位だぞ！俺が何時も何時も体に障るから止めろって言ってるのに一行に止めないからよぉ（汗』
どうやら同じように苦労していたらしい
それに甲児が苦笑いを浮かべる
（どうやらリンディさんの味覚は相当な物らしいな）
と、甲児は思った
『さてと、それで此処からどうやって出るんだ？』
クライドが女性に問う
それを遮るかのように甲児が前に出る
「ちょっと待ってくれ！何時までもあんたの名前が無いんじゃ不便じゃ無いのか？」
「あぁ、確かにそりゃそうや！うちもウッカリしとったわ！」
はやてがポンと手を打つ
するとはやては女性の前に立つ
「何時までも夜天の書やったらかわいそうやしなぁ、それに内は管

理者や！今から貴方にピッタリな
名前を付けるから待っててな」

そう言ってはやては夜天の書の女性の頬にそっと手を添える
その足元には白い魔方陣が展開される
はやてはそっと目を閉じて静かに呟く

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る
　強く支えるもの、幸福の追い風、祝福のエール。リインフォース」

祝福のエール・・・リインフォースか・・・結構洒落た名前を考えるじゃねぇか
そう甲児は心の中で呟いた
やがて、魔方陣が消えると、夜天の書改め、リインフォースは甲児の方を向いた

「甲児さん、今私達はハーデスの体内に居ます・・・ハーデスは外側からは強力な結界を有していて魔力でも物理エネルギーでもダメージを与えるのは不可能です・・・ですが、内側からなら、恐らく決定打を与える事が可能の筈です」
「成る程な、ところで此処ではマジンガーは呼べるのか？」

甲児は最もな質問を聞いた
例え手段はあったとしてもまずはマジンガーが無くては話しにならない
それにリインフォースが頷く

「それは問題ありません。甲児さんはマジンガーとその「Zグローブ」で繋がっています。何処ででも魔神を呼ぶ事が可能です」

「へぇ、そいつはいいぜ！！」

指を鳴らした甲児は早速マジンガーを読んでみる事にした

「マジィィィンゴオオオオオオ！！！」

腹の底から魔神を呼ぶ合言葉を叫んだ

すると目の前から巨大な魔方陣が現れ、其処から甲児の愛機でもあり、鉄の城の異名を持つ鋼鉄の巨人「マジンガーZ」が現れた

『でかいなぁ、これがマジンガーかぁ・・・』

マジンガーを始めて見たクライドは驚きの声を上げる

「んで、この後どうするんだ？まさかそのまま食い破るって訳じゃねぇんだろう？」

まさかとは思うがそんな方法な筈は無いと思い一応聞いた

それを聞いたリインフォースがかぶりを振る

「心配要りません、こうして貴方が私の目の前に現れました・・・いよいよ夜天の書に眠っている本来の封印を解く時が来たのです」

「本来の封印？それって一体何なんだ？」

「本来夜天の書とは、貴方のお母様が貴方にこれを届ける為に「アルハザード」で作った物だったのです。そして、私やヴォルケンリッターはその護衛の為に作られました」

「ほ、ホンマに！！？」

「マジかよ！」

正に度肝を抜かれるとはこの事であった

死んだと思っていた母がまさか夜天の書を作った張本人だったとはしかし、母がそれほどまでして守ろうとした物とは一体何なのか？

「それは貴方が既にご存知のはずです」
「俺が知ってる？」
「はい、マジンガーに乗り、名前を呼んで下さい。そうすれば封印は解かれます」
「よし！なんだか分かんねぇけど此処まで来て尻込みする訳にはいかねぇからな！こうなったら毒を食らわば皿までだ！」

甲児はそう言ってマジンガーの操縦席であるパイルダーに乗り込んだ

「はやて、リインフォース、クライドさん！あんたらも乗りな」
「おおきに、甲児兄ちゃん」
「分かりました」
『俺はスペース取らないから楽で良いな』

はやてを抱えてリインフォースとクライドが乗り込む
全員が乗り込んだのを確認しおえた甲児は視線をまん前に向けた
前には夜天の書が浮んでいる

「主はやて、プロテクト解除の指示をお願いします」
「任せてぇな！・・・『夜天の主、八神はやてが命じる。夜天の書に封じられし古の力よ・・・今こそその眠りを解き我等に力を与え給え！』」

はやてが言うと、夜天の書が眩い発光を発し出す

「甲児さん！今こそ貴方の声でその力の名を呼んでください」
「名前って・・・何て言えば良いんだ？」

「貴方も既に知ってるはずです、輝くZの名の下に、全てを原子に打ち砕く神の翼」

リインフォースの言葉を聞き、甲児の頭に一つの名前が浮んだ
甲児はそれに全身全霊を込めて叫ぶ
その力の名は

「ゴォォォォォッドスクランダアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

甲児は叫んだ
喉が千切れ、腹が破裂する思いがする程に
それでも甲児は叫ぶ
その力の名を
甲児の母が残した力の名を
すると、夜天の書に変化が現れる

【Ｐｒｏｔｅｃｔｉｎｇ ｒｅｌｅａｓｅ［Ｇｏｄｄｏｓｕｋｕｒａｎｄａ－］．Ｉｔ ｓｔａｒｔｓ．】
（プロテクト解除
ゴッドスクランダー！起動します）

機械的音声が夜天の書から発せられる
すると突然ページが捲られていき、書の中から光り輝く巨大な腕が飛び出した
その腕はマジンガーの数倍は有り、今正にマジンガーを握りつぶそうと向かって来た

「な、何だありゃぁ！」

「つ、潰される～～」
「恐れないで下さい！あれこそ貴方のお母様が残した力なのです」
驚く甲児とはやてを落ち着かせるようにリインフォースが言う
そして、そのまま巨大な光の腕はマジンガーを包み込むとそのまま弧を描いて不気味な背景の壁に向かっていく

＊＊＊

その頃外ではなのは達魔道士と鉄也達マジンガーが苦戦を強いられていた

「アクセルシューター！シュゥゥゥト！」
「ブレストバアアアアアン！！」
「サンダァァァバスタアアアア！！！」
「ゲッタァァァビイイイイイム！！」
「紫電一閃！！」
「スピンストオオオオオオム！！」
「ラケェェェテンハンマアアアアアアア！」
「スペェェェスサンダアアアアア！！」
「デビルビイイイイイイイム！！」

それぞれの技をハーデスに当てる
だが、その尽くがハーデスの張った結界の前に弾かれていく

「ガアアアアアアアッハッハッハ！いい加減諦めたらどうだ？
貴様等の力などこのワシに通用せんのだよ！」

ハーデスが声高らかに笑う
だが、それでもなのは達はデバイスを強く握って構える
まだ魔力が完全に回復しきった訳ではない
それでも立ち向かわなければならないのだ
その間もハーデスの体からは続々と妖獣シャドウが生み出されていった

「やばいぜリョウ！このままだと時間が無くなっちまうぞ！」
「くそっ、あの結界さえどうにか出来れば良いんだが」

竜馬が愚痴る
流石の真ゲッターでもあの結界を破るのは至難の業なのだ

「グハハハハ！このまま時が経つのを待ってても良いのだが、それだと退屈だ！どれ、まずは貴様等の住む町を廃墟に変えてやろうでは無いか！」

と言ってハーデスが大きく息を吸い込む
その口からメラメラと炎があふれ出す

「不味い！アイツ海鳴市を火の海にする気だ！」
「やめてえええええええええ！」

なのはが叫ぶ

だが、そんな叫びも空しく炎が放たれようとした
その刹那であった

「グ・・・グオォォ・・・な、何だ・・・これは・・・」

突如、ハーデスが苦しみ出したのだ
しかも体の周囲からは眩い光があふれ出ていた

「な、何？」
「あの光・・・なぁ、シグナム！あれって」

ヴィータはシグナム達に聞いた

「ああ、あの光・・・遠い昔に見た気がする」
「何だか・・・とても懐かしい輝きだわ」
「我等は・・・あの光を守る為に戦っていたのかも知れないな」

ヴォルケンリッターの皆の中にうっすらと残る記憶
それはあの光を守ると言う使命であった
そして、その輝きは増して行き、仕舞いにはハーデスの腹を突き破って出てきたのだ

「グワアアアアアアアアアアアアアア！な、何だこれはあああああああああああああああ！！！」

ハーデスは、そしてなのは達は見た
飛び出した光の正体を
それは・・・光り輝く巨大な腕であった
巨大な腕は宙を舞い上空を我が物顔で跳びまわっていたシャドウ達を次々と飲み込んでいく

そして、そのまま巨大な腕は空高く舞い上がり上空を覆っていた暗雲を切り裂いていく

「オオオオオオオオオプウウウウウウウンウィイイイイイイイング！！！」

暗雲を切り裂いた直後、光が払われ、其処には黒き巨大な翼を身に付けた鉄の巨人が居た
強く、雄雄しく、そして神々しいその巨人を人々はこう言う

『マジンガーZ！！』

昇った太陽の光に照らされて黒い巨体が輝く
その頭部にあるパイルダーが開くと、其処にははやてとリインフォース、そして兜甲児が居た
甲児は立ち上がり、ヘルメットを外してハーデスを指差す

「やい！冥王ハーデス！！てめぇの面をぶん殴る為に帰って来たぜぇぇ！！！」

真なるゲッターロボ、そして神の拳　　終

次回予告

遂に復活したマジンガーZ
だが、時間は刻一刻と迫っていく
しかもハーデスは次元の門と呼ばれる物を開き其処から新たなる敵を呼び出した
だが、その中には甲児達にとって心強い味方もやってきた
いよいよハーデスとの決着の時も近い

次回「大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！」

次回もこの小説にテイィィィィィクオオオオオオオオフ！！

真なるゲッターロボ、そして神の拳　後編（後書き）

次回でハーデスとの決着！
乞うご期待下さい

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　前編（前書き）

今回頼れるあいつが登場
そして間も無くＡｓ編も終了・・・長かった（汗）

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　前編

甲児は声高らかに宣言した
その発言はハーデスを怒らせるには充分過ぎる物であった
ハーデスの額には無数の青筋が立ち怒りの形相になった

「このワシをぶん殴るだと？脆弱な人間風情が生意気な事を言うなぁぁぁ！！！」

ハーデスは怒りの雄たけびを上げ、口から地獄の業火を巻き上げた
放たれた炎は真っ直ぐに甲児とマジンガーZに向かっていく
しかし、そんな中マジンガーZは微動だにしない
一瞬諦めたのかとハーデスは思ったが、すぐにその考えは撤廃された
何とマジンガーZの胸の放熱板が熱を持ち赤く光り出したのだ
そしてマジンガーはそのまま両腕を上空に突き上げて胸を張り出す

「ブレストォォファイヤアアアアアアアアア！！！」

甲児が叫ぶ
それと同時に放熱板から赤い熱線が放たれた
マジンガーZ最強の武器ブレストファイヤーである
そのブレストファイヤーはハーデスの放った業火を押しのけてハーデスに向かっていく

「おのれぃ、猪口才な！！」

ハーデスは腕を振り上げて結界を張る
その結果にブレストファイヤーが当たる
弾かれた熱線が近くの海に落下して蒸発する

だが、その威力は想像以上であり、ハーデスの張った結界には亀裂が入りだした

「な、なにぃ！」

驚愕するハーデス
そしてそれから間も無くして結界はまるでガラスを割ったような音を立てて砕けていき、そのまま熱線はハーデスに当たる
凄まじい熱がハーデスの体を焼く
衝撃の余りに後ろに吹き飛ばされる

「ぐおおおお！ば、馬鹿な！！人間の作ったガラクタ如きにこのワシが倒れるだとぉ！！」

倒れたハーデスは驚愕していた
有りえない事であった
自分は冥府の王にして暗黒の神、冥王ハーデスなのだ
その冥王ハーデスが人間の作ったロボット如きに地に体を付くとは信じられなかった
驚愕の余り一時的に思考が停止するハーデス
その周りでは暗雲を切り裂かれ朝日が差し込んだ事により妖獣シャドウ達が突如苦しみ出した
体から蒸気を出して徐々に解け始めたのだ
シャドウは闇の中でのみ生きられるデーモン
それ故太陽等の光には弱くその中では1分と生きられないのだ
その為シャドウ達は正にあっと言う間に全て溶けて消え去ってしまった
最早此処にはハーデスしか居ない
甲児は一旦鉄也達の居る場所に降り立った
すると其処に一同が集まる

「おい甲児！随分と遅かったじゃねぇか？何してたんだよ？」

剣児がからかうように聞く
それを聞いて甲児が嬉しそうに鼻を摩る

「いやぁ、美人のお姉さんの膝枕が余りにも気持ちよかったもんだからつい寝過ごしちまったよ」

「美人のお姉さん？」

フェイトが首を傾げた
一体誰？はやてでは無理だし・・・だとしたら一体
そう思っていたフェイトはふと、パイルダーに居る人影に気づく
パイルダーには甲児とはやての他にもう1人銀髪の美しい女性が居た
赤い瞳をしており黒を基調とした薄い服装のせいかスタイルが出まくりなのだ
恐らく胸の大きさはシグナムと同等かも知れない
フェイトの中に嫉妬に似た感情が芽生えてきた

（やっぱり・・・甲児さんは胸の大きな人が好きなんだなぁ）

自分の胸を摩りながらフェイトは思った
その姿になのはは苦笑いを浮かべる

「主はやて！」
「は、はやてぇ！！」
「はやてちゃん！」
「主！！」

ヴォルケンリッターの四人はパイルダーに乗っていたはやてに集まる

特にヴィータに至っては嬉しさの余り滝のように涙を流して抱きついていた
そんなヴィータの頭を優しくはやては撫でる
その姿はまるで母親その物であった

「皆、心配かけて御免な」
「いえ、主が無事なら我等はそれだけでも嬉しく思います」

謝罪するはやてにシグナム達はかぶりを振る
それ程までにはやてが戻ってきた事が嬉しかったのだ
そして、はやては視線を変えてリインフォースを見る

「皆、紹介するな。この子はリインフォースって言って影ながらうちを守ってくれた5人目のヴォルケンリッターや」
「始めまして皆さん。私がリインフォースです」

リインフォースが軽く会釈をする
それを見てヴォルケンリッターの四人はまるで度肝を抜かれたような顔をする
それは仕方ない事である
突然5人目のヴォルケンリッターと言われたのだから驚かない方が普通じゃない
そんな中、この男は違う反応を見せた

「てめぇ甲児！お前そんな美人な姉ちゃんに膝枕して貰ってたのか？」

そう、剣児である
剣児にして見れば彼女が五人目のヴォルケンリッターだとかそう言う理由はどうでも良く、それよりも甲児がリインフォースに膝枕し

て貰った事の方が重大でもあった
そうして言う剣児の後ろでつばきが黒い顔をしていた
今にもマッハドリルが飛び出しそうな勢いである
しかしそうするとはやて達も危ないので止める事にした

「おっと、そうだ！クロノ、居るか？」
「僕なら此処に居ますよ甲児さん」

クロノが甲児の前に立つ
それを見た甲児は浮んでいたデバイスをそっとクロノに向かって放り投げる
クロノはその待機状態のデバイスを受け取る

「お前に会いたいって奴だよ」
「え？僕に・・・」

クロノはじっとデバイスを見る
するとデバイスから青い光が発せられる

『暫く見ない間に随分と背が伸びたな。クロノ』
「その声！まさか、父さん！？」

クロノは目を見開いた
仕方ない事である
まさか自分が幼い頃に死別した筈の父とこの様な形で再会する事になろうとは
だが、それはクロノにとっては嬉しい事実であった
自分にとって憧れの父
その父とこうして会話を交わす事が出来たのだから

『リンディは元気か？』
「はい、母さんなら元気ですよ。相変わらずお茶に砂糖とミルクを入れてますけど」
『アイツ・・・・いい加減それを直せって言ったのにまだやってるのか（汗』

デバイス状態のクライドは呆れた声を上げる
それを聞いてクロノは思わず微笑んだ
そうか、自分の父はこんな人だったんだな
そう実感出来た

「感動の再会の所悪いが、そろそろ本題に移らないか？」

それを区切るように鉄也が横から言葉を投げかける
それを聞いてクロノもハッとする
だが、事情を知らない甲児は首を傾げる

「一体何があるんだ？鉄也さん」
「実は今、上空に居るアースラのシステムが乗っ取られてしまってな。その上アルカンシェルの発射とアースラの自爆が連動して起こってるんだ・・・時間からして後１０分しかない」
「げぇ、マジかよ！」

鉄也の言葉に甲児がギョッとする

「なぁ甲児兄ちゃん、そのアルカンシェルって何？」
「アースラの最終兵器だよ。威力からして此処ら一体を吹き飛ばすには充分な威力を持ってる」

クロノが説明する

それを聞いた一同は正に肝を冷やす思いであった

「って、それじゃ私達の住んでる町も吹き飛んじゃうの？」
「そんなのやだよ」
「私だって大反対だよぉ！」
「うちもや！！」

なのは、フェイト、アリシア、はやての四人は声を上げて否定を宣言する
それにはクロノも同じ意見であった

「僕だってそれは嫌だ、だけど後１０分で果たしてあの冥王ハーデスを倒せるのかどうか・・・」

クロノは暗い顔をする
そんなクロノに甲児はデコピンをする
クロノは「つっ」と声を上げて額を押さえる
その先では甲児は笑っていた

「１０分？なら余裕じゃねぇか！此処に居る皆であいつをボコればおつりが出るぜ」

甲児は自身満々に答える
それに周りに居たダイナミックチームも同じであった

「そうだな」
「俺達皆の力を合わせれば倒せない敵など居ないな」
「なんでぇ余裕じゃねぇか」
「僕達全員が力を合わせれば可能だよ」
「敵さんも不幸だねぇ。まさか相手が俺達なんだからよぉ」

ハーデスの前にはマジンガーZ、グレートマジンガー、グレンダイザー、真ゲッターロボ、デビルマン、鋼鉄ジーグが集まっていた
その姿は圧巻であった
たった一体でも戦況を覆す程のパワーを持った力を持つ魔神が一堂に集まったのだ
朝日に照らされてその巨体が輝く
それこそ正に希望の象徴であった
魔道士達には今程彼等魔神が頼もしく見えた事は無かった

「わしを倒すだと？生意気な事を・・・たかが一撃を与えた程度で調子に乗るな人間があああああああああああああ！！！」

ハーデスが叫ぶと頭上に湾曲した空間を出現させた
其処から無数の稲妻が発せられ、中から何やら不気味な物が姿を現す

「出でよ！こやつ等に倒されし者達よ！そしてワシと一つになって奴らを倒そうではないか」

ハーデスが言う
すると湾曲した空間からはギルギルガン、ピクドロン、ドラゴノザウルス、シレーヌ、グモ、ジンメン、イキマ、ミマシ、アマソら全てが集まった塊が落ちて来た
その姿は醜悪以外の何者でも無かった
思わず視線を背けたくなる姿であった
だが、それ以上の光景が目の前で起こっていた
何とハーデスがその塊を食ってるのだ
鋭い牙を突き立てる度に血飛沫が舞い上がり肉片が飛び散る
それを気にせずハーデスは肉片を食い終わる
その口の周りには血と肉片がこびり付いていた

「ぐおおお

剣児はその名を呼んで空を見上げた
空にはもう一隻のビックシューターが飛行していた
だが、形が弱冠違う
こちらの方が丸みを帯びた形になっていたのだ
そして、そのビックシューターの頭上には1人の男が立っていた
黄色を基調とした上下の服にグローブを嵌めており顔には傷がある
青年である
その青年は突如ビックシューターから飛び降りた
その光景になのは達は絶句した
まさか此処で飛び降り自殺を？
そう思った矢先、青年は両の拳を合わせる

「チェンジサイボオオオオオオオオオオオグ！！」

雄たけびを上げた宙を稲妻が覆う
その時間はほんの数秒であった
しかし、その間に宙の体は人外の体「サイボーグ宙」となったのだ
サイボーグ宙が後方を飛行するビックシューターを見る

「ミッチー！ジーグパーツを頼む」
「ＯＫよ、宙さん！」

ビックシューターに乗っていた７０過ぎだと思われる女性「珠城美和」が相槌をうつ

「ジーグパーツ、セットアップ！シュート！」

慣れた手つきで一連の動作を行う
するとビックシューターから胴、腕、足、腿、肘等体のパーツが飛来してくる

それらが真っ直ぐにサイボーグ宙に向かってくる

「鋼鉄ジィィィィグ！！」

サイボーグ宙は叫び膝を抱える
するとその体が形を変えて巨大な頭になる
その頭に引かれるように全てのパーツが合体し、一体の巨人となる
すると、頭部に目に黒い瞳が移り合体が完了したのを告げた

「ビルドォォォ！アアアアアアアアアアアップ！！！」

両腕を突き上げて咆哮する
此処に今もう一体の鋼鉄ジーグが現れたのだ

「って、何で御婆ちゃんと宙さんが来てるの？」

当然の如くつばきがツッコミを入れる
それに美和が答える

「突然貴方達が現場から居なくなったのを気にして調査してたら目の前に突然巨大な次元ホールが現れてね・・・試しに入ってみたら」
「ドンピシャだったって訳だ」

最後にジーグが答える
それを聞いて剣児が「成る程」と手を叩いて納得した

「ええ！そんな説明で良いの？」
「な、何か・・・聞いてると物凄く危ない事をしたみたいなんだけど（汗」

其処へなのはとフェイトの常識人がツッコミを入れる
そりゃそうだろう
ダイナミック陣の話しはなのは達の世界では尋常じゃない話なのだ
しかし、それを言ったら彼等はこう言う筈である

「死ななかったから大丈夫だ」

と、
それを聞かされたら最早なのは達に返す言葉は無かった
もう頷くしかない
それがダイナミックチームの現実なのだ

「さてと、心強い味方が現れた所で」

甲児が無理矢理話しを引き戻す
それに釣られて一同が巨大化したハーデスを見る
ハーデスからは更に禍々しいオーラが漂っていた
それこそ、最初の時以上である

「時間からしてざっと残り8分位」
「ちぃとばかしヤバイか？」
「ちょ、ちょっとじゃないよ！かなりヤバイよぉ（涙」

余裕をかましてる甲児と剣児になのはが泣きに入る

「なぁに、なのはちゃん！こんな時は何時もの決め台詞を言ってくれよ」
「え？何時もの？何時ものって・・・『少し、頭冷やそうか？』の事？」

確かにそれは決め台詞だがそれを貴方が言うのは今からおよそ１０年後の事だ
それを聞いたマジンガー達は思い切りずっこけた

「ち、ちげぇよ！そうじゃなくて！別の決め台詞だよ！」
「別の・・・あ！そうか！！」

やっと分かったのかポンと手を叩く
そしてレイジングハートを構えて皆に言う

「皆、全力全開で行くよ！！」
「「「「「応！」」」」」

なのはのその一言に全員が気合の篭った返事をした
絶望的状況にあるにも関わらず彼等の目はむしろ輝いていた
信じているからだ！自分達が必ず勝つと言う事を

「リインフォース。うちの杖と甲冑を頼むわ」
「分かりました。主はやて」

はやての命を受けてリインフォースははやてにデバイスとバリアジャケットを授ける
装着したはやてはバイルダーから跳び上がって皆と同じ空に上がる

「さぁて、浮かれすぎた王様にきっつ～いお灸を据えたろうか！」
「お！いいねぇそれ！なら俺はそいつに地獄の鬼すら逃げ出す拳骨をくれてやるよ」

はやての悪乗りに乗る剣児
それを聞いて皆の顔に笑みが浮ぶ

『クロノ、デュランダルの使用はお前に任せる！サポート位しか出来んが思いっきり暴れて来い！』
「分かったよ、父さん！」

デバイス化した父にクロノが答える

「よし、では行くぞ」

ザフィーラが拳を目の前で叩き付けて言う

「ちょい待ち、ザフィーラ」
「ん？」

すると後ろに居たアルフがザフィーラを呼び止めた
振り返るザフィーラ

「忘れ物だよ」
「忘れ物？一体何！！」

話しの途中でザフィーラの口が塞がれた
ザフィーラの口にアルフの口が当てられる

要するに「チュー」である

それを終えるとアルフがビシッとザフィーラを指差す

「あたしを残して勝手に逝く事は許さないからね！」
「あ・・・ああ・・・善処する／／／／／」
「宜しい」

今ザフィーラが出せる精一杯の言葉を聞いて納得したのかアルフも
持ち場に着く
ザフィーラは未だに顔が茹蛸のように真っ赤であった
するとその周りを甲児、剣児、はやてがニヤニヤした顔で囲む

「な、何だ！」
「とっつぁんよぉ、やるじゃねぇか。アルフのファーストキスを貰
うなんてよぉ」
「いよ、この色男！憎いねぇコン畜生」
「おめでとうザフィーラ！主のうちも祝福させて貰うでぇ」
「／／／

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　前編（後書き）

次回決着！

緊急予告

１０年後に戻ってきた甲児達は遂に元凶である機鋼帝国との最終決戦が始まろうとしていた
しかし、機鋼帝国は機鋼獣を上回る更に強力な「合成獣」そして、最強にして、最悪の「マジンガー」を蘇らせたのだ

？？？
「お爺ちゃんの夢の為に！兜甲児、お前を倒す！！」

？？？
「お前はイレギュラーなんだ！だから僕がこの手で倒す！！」

？？？
「見せてやるぜ！新生ゲッターチームの力をなぁ
チェェェンジゲッタァァァ號！」

そして、現れるは未来よりやってきたかつての友

？？？

「助けに来たぜ！ダチ公！」

最終章「ＤＹＮＡＭＩＣ編」

近日公開！

遂に完結！！

勝つのは機鋼獣か？

それともマジンガーか？

お楽しみに

2010

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　後編（前書き）

遂に決着！
戦闘の際には真マ○ンガーのＯＰ１か２
もしくはなのはＡｓの挿入歌でも口ずさんで読んで下さい
きっと燃えるので
ですがやりすぎに注意！
でないと多分燃え尽きる可能性が高いので

ってな訳で・・・

『今回の話には熱血成分や燃え上がる表現が含まれています。
読む場合はご自身の体に注意して、テレビから離れて部屋を明るくしてＣＤプレーヤーを掛けながらご覧下さい』

甲児
「・・・なにこれ（汗」

2011

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　後編

ハーデスは腹の奥が煮えくり返る思いであった
何故なら、今まで自分を見てきた人間達は震え上がりその場で許しを乞うか直ちに己が命を絶って来たのだ
だが、今目の前に居る人間達は違う
あろう事か自分に挑もうと言うのだ
それが気に入らなかった
こいつらはこのワシに戦って勝つつもりで居るのだろうか？
だとしたら、飛んだ思いあがりである
そんな事をこのハーデスが許す筈が無い
その思いがハーデスの煮えくり返る思いとなって現れたのだ

「生意気な人間共め！こうなれば思い知らせてくれるわ！このワシの力をなぁ！！！」

ハーデスの怒声が響く
その声は地を割り海を震わせ空を切り裂く程であった
だが、それで引き下がる甲児達では無い

「だったらてめぇに教えてやるぜ！俺達の怒りを！そして・・・人間の底力をなあああああああああああ！！！」

甲児の叫びを皮切りに一斉に皆がハーデスに向かっていく
ハーデスは背中から無数のトゲを生やしてそれを飛ばしていく
まるで雨の如くであった
それを防ぐ手立てはマズない
其処には蜂の巣になった奴らが横たわっている筈だ
そう思っていた

2012

しかし、

「そんなちんけな技で俺達を倒せると思ってたのかよ？」

其処には全く無傷のマジンガー達が居た
何と奴らは防御魔法も結界も使用せず己の体一つで防いでしまったのだ
なんて奴らだ
ハーデスは眉を上げた
まさかこのハーデスがあの程度のロボットに恐怖していると言うのか？
否、断じて有りえない
思えばあのマジンガーなどはかつて４０００年前に戦った魔神と良く似ている
だが、あの時の魔神は大した強さを持ってなかった
まるで赤子を捻るかの如く簡単に倒せた
では何故、目の前に居るこのマジンガーは倒せないのだ
その答えは明白であった
そう、そのマジンガーＺのパイロット「兜甲児」のせいなのだ
奴は誰よりもマジンガーを強くする
奴が乗ればマジンガーは神をも悪魔をも超える存在になるのだ
では、もしその兜甲児が「神をも超え、悪魔をも倒す究極の魔神」に乗ったらどうなると言うのだろうか？
そう考えた時、ハーデスは恐怖した
その時、恐らくこの男に勝てる存在はこの世には居ない
倒さなければ、今この場でこの男を殺さなければ危険過ぎる
あのトリスタンですら恐れた男
その男にハーデスすら恐怖したのだ

「おのれ・・・おのれおのれおのれおのれえええええええええええ

えええええええええええええええええ！！！
このワシが恐怖を感じるだと？馬鹿な！感じるのは貴様の方だああ
あああああああああああああああああああ！！！」

ハーデスが巨大な拳を振り上げてそのまま振り下ろす
標的は勿論マジンガーZ
此処で殺すんだ
そうすれば後は雑魚しか居ない
雑魚の掃除だけになる
だが、今は何としてもこの背筋を襲う恐怖を取り払わなければならない
その為にこの拳でマジンガーを叩き潰すのだ
マジンガーにハーデスの拳が当たる
思わず顔がニヤける
勝った、これで後は振り切ればマジンガーは粉々になる
そうなれば最早このワシの勝ちなのだ
そう思って振り切ろうとした時、異変は起こった
振り切れないのだ
まるで目の前にある巨大な岩に殴りかかってるかのようにビクともしない
その原因は、やはりあの魔神であった

「へ、でかい図体の割りには華奢な拳じゃねぇか！」

またこの声である
まだ生きてるのか？この男は

「俺を倒したきゃさやかさんやノーヴェ以上の鉄拳を持ってきやがれえええええええええええええええ！！！」

甲児は叫んだ
それとほぼ同時にマジンガーはハーデスの腕に己の拳を叩きつけた
その叩きつけた箇所を中心にしてハーデスの腕に亀裂が走りやがて
音を立ててハーデスの腕は肩まで砕け散ってしまった

「ぐおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああ
あああああああああああ！！！」

ハーデスの絶叫が木霊する
砕けた腕を押さえて苦しむ冥王
その面前には神の翼を付けた巨人が居た
こいつ・・・不死身なのか？
何故死なない？
何故倒れない？
何故朽ち果てないのだ？
何故だ？何故だ！！

「お・・・おのれえええええええええええええええええええええ
えええ！！！」

ハーデスは背中から巨大な羽を生やす
此処に居ては不利だ！
一旦上空に避難して体制を立て直さなければ
そう思い跳びあがろうとした直後であった

「チェェェンバインド！！」
「ストラグル・バインド！」

突如ハーデスの体をオレンジと緑色の鎖状のバインドと青い輪状の
バインドが絡め取る

アルフとユーノとリーゼが放ったバインドだ
そして上空に逃げようとするハーデスを海上に叩きつけた

「完全に動きを止める！鋼のくびき」

その後に白い線が更に上乗せされる
これによりハーデスは完全に動きを封じられてしまった

「おのれえええええええ！小賢しい真似をしおってえええええええええええ！」

ハーデスは腕を突き上げて鎖を引き千切ろうとする
動きを封じていたユーノ、アルフ、ザフィーラ、リーゼの４人の顔に苦悶の表情が伺える
だが、それでも腕に力を込めて必死にハーデスの動きを封じる

「よし、そんじゃ今からてめぇに俺達の一撃を加えてやるぜ！」
「で、でも甲児さん！私達のデバイスじゃハーデスに効かないんじゃないかなぁ？」

不安になったなのはが聞く
それに甲児がチッチッチと舌を鳴らす

「へん、この兜甲児様が只カードリッジを組み込んだだけだと思ったのか？ちゃんとお前らの奥の手を用意してあるぜ！」
「奥の手？」
「ああ、その名もフルドライブだ！デバイスに言って起動させてみな！」
「わかった！」

なのはとフェイトは言われるがままに己のデバイスのフルドライブを起動させる
するとレイジングハートとバルディッシュの形状が変化する
なのはのデバイスは超距離砲撃用に特化した形になり
フェイトのデバイスは巨大な剣状になった

「なのはのは「エクセリオンモード」、んでフェイトのは「ザンバーモード」だ！どっちも俺の自信作だぜ！」
「有難う、甲児さん！」
「これなら・・・これならきっと行けるよ！」

二人の顔が明るくなる

「うっしゃぁ！そうと決まったらさっさとあのデカブツをぶちのめして飯にしようぜ！」

剣児が腕を鳴らす
すると前にヴィータがやってくる

「最初は私が行かせて貰うぞ！」
「へん、ヘマすんなよヴィータ」
「するかよ！」

お互いにニヤッと笑いながら言い合う
するとヴィータはなのはの隣に降りる

「ちゃんと合わせろよ！高町なのは」
「ヴィータちゃんもね（初めて名前呼んで貰ったなぁ」

内心感激しながらも相槌を打つなのは

ヴィータはそんななのはの内心など気づかずにグラーフアイゼンを振り上げる

「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーフアイゼン」

カードリッジがロードされ、薬莢が飛び散る
するとアイゼンが巨大なハンマーになった
大きさは先ほどのアイゼンの実に数十倍はある

「轟天爆砕！！
ギガントォォォォシュラアアアアアアアアアアアアアク！！！」

それをそのままハーデスに向けて振り下ろす
振り下ろされたアイゼンはそのままハーデスの顔面に直撃する
グシャァと鈍い音を立ててハーデスの顔が変形する
そしてそのままハーデスを海面に叩きつけた

「ぐ・・・このワシを・・・・このワシを舐めるなあああああああああああああああ！！！」

起き上がったハーデスが咆哮する
その先には・・・

「高町なのはと、レイジングハートエクセリオン！行きます！！」

足元に桜色の魔方陣を展開し、カードリッジをロードして発射体制に入っていたなのはが居た
レイジングハートの先端に桜色の魔力が収束される

「エクセリオンバスター・・・ブレイクゥゥゥ・シュウウウウウウウウウウウウウウウウウウト！！！」

桜色の閃光がハーデスに直撃する
直撃した箇所が焼け焦げる感触がした
ハーデスの顔に苦痛の色が浮かび上がる
そして口からドス黒い血を吐き出す

「アリシアちゃん！行くぞ！！」
「いつでもＯＫだよ！竜馬さん！！」

それに続いてハーデスの横に真ゲッターとバルディッシュＭＫ－？を構えたアリシアが居た

「ゲッタァァァァァトマホオオオオオオオオオオオオオク！！！」

真ゲッターの肩から勢い良く現れたトマホークを構える

「バルディッシュ！ファイナルトマホークモード起動！！」
『Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　Ｔｏｍａｈａｗｋ　ｍｏｄｅ　ｓｔａｒｔｓ．　（了解！ファイナルトマホークモード起動します！！）』

アリシアの持っていたバルディッシュＭＫ－？から機械的音声が流れる
すると光の斧が更に巨大になりその大きさは先ほどのヴィータのギガントシュラークとほぼ同じクラスになった
それを肩に担ぐように持つ
そしてゲッターとアリシアが同時に切りかかる

「ダイナミック！！」
「ダブル！！」
「「インパクトオオオオオオオオ！！！」」

二つの巨大なトマホークがハーデスに十字の傷をつける
其処から血飛沫の如く黒い液体が噴出される
ハーデスが更に苦痛の声を上げる
その次にシグナムとフェイトが降り立った

「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン！
刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

シグナムがレヴァンティンを掲げ柄に鞘を合わせる
すると剣の形から弓の形になる
其処に現れた光の弦を引き絞り狙いを定める
既に光る矢が番えられていた

「駆けよ！隼！！！」

矢は真っ直ぐハーデスに向かって飛んでいく
そして眉間に突き刺さった矢は閃光を放ち爆発を起こした

「げあああああああああああああああああああ！！！」

ハーデスの額は半分が吹き飛ばされて中身が露出していた
かなり気持ち悪い光景であった
だが、それを気にせずフェイトが続ける

「フェイト・テスタロッサ！バルディッシュザンバー・・・行きます！！！」

フェイトが足元に魔方陣を展開させて構える
その横にグレートマジンガーとグレンダイザーが降り立つ

「鉄也さん！大介さん！行きますよ！」
「何時でも良いよ！フェイトちゃん！」
「俺達の連携！受けきれる物なら受けきってみろ！」

それに合わせてグレートとダイザーの頭上に雷光が降り注ぐ
それをグレートは両腕で受け止め、ダイザーは頭の角で受け止める

「トリプル！」
「ライトニング！！」
「バスタアアアアアアアアアアアア！！！」

2体の魔神とフェイトと同時に雷光を放つ
それはハーデスを包み込み焼き焦がす
正に圧巻であった

「おのれ・・・おのれ小癪なあああああああああああ！！」

再び咆哮し、また背中からトゲを生やして発射しようとする

「させるか！デビルカッタアアアアアアアア！！！」

其処へデビルマンの放ったデビルカッターがそのトゲを切断する

「俺に合わせてくれよ！」
「任せろ！剣児」

ダブルジーグが頷く
そしてハーデスに向かって両腕を掲げて構える

「「ダブル・スピンストオオオオオオオオオオオム！！」」

2体のジーグから放たれたマグネ砲がハーデスに当たる
その一撃はハーデスの鎧を砕き肉片を撒き散らす

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお！！まだだ！この程度でワシが死ぬ筈が無いいいいいいいいいいいいいいい！！！」

咆哮したハーデスの腹に巨大な口が現れる
そして其処から無数の光の粒子を放とうとする

「盾の守護獣、ザフィーラ！攻撃など・・・撃たせん！！！」

ザフィーラが白い魔方陣を展開させる
するとハーデスの足元から白い柱が現れ串刺しにする
その一撃により粒子のチャージが中断されてしまった

「彼方に来たれ、宿木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け」
「刃を撃て・・・血に染めよ」

はやてとリインフォースが同時に魔方陣を展開させる
ハーデスの頭上に七つの白い光が現れ、リインフォースの周囲には赤い剣状の魔法が展開される

「石化の槍、ミストルティン！！！」
「穿て…ブラッディ・ダガー！！！」

はやての放った光の槍はハーデスを突き刺し石化させ、その後にリインフォースの放った赤き魔力刃が深く突き刺さる

「ぐおおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああ！！！」

石化した箇所から更に禍々しい肉体を露出させてハーデスは唸り声を上げる
その姿は正にこの世の物とは思えない醜悪な姿であった

「ちっ、まだ生きてるのかよ！いい加減しぶといぜ！」
『皆急いで！後1分だよ！！！』

エイミィの悲鳴に似た声が響く

「しゃぁねぇ！こうなったら奥の手行くぞ！」
「おっしゃぁ！」
「おう！」
「分かった！」
「あれだな！」
「やろうよ！」
「うん！」
「そうだな」

甲児の提案にダイナミックチームとなのは、フェイトは頷くだが、はやてとヴォルケンリッター達はそれが何なのか分からず首を傾げる

「なぁなぁ、奥の手って何？」
「勿論！」

「『ＦＤＳ』だよ」
「ＦＤＳ？」

意味が分からず首を傾げるはやて

「要するに私達の全力全開の一撃を撃ち込むんだよ」
「なぁんだ！そうならそうと言ってくれれば良いのに」

納得したのかはやてが頷く

「クロノ！まずは頼むぜ！」
「任せて下さい！」
『行くぞ！クロノ』

父の形見であるデュランダルを構えてクロノが降り立つ
その足元に魔方陣が展開される

「悠久なる凍土、凍てつく柩の地にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノが詠唱する
そしてカッと目を開く

「凍てつけ！！！デュランダル！！！！」

クロノがデュランダルを振るった
すると海面が凍りつきハーデスは氷の牢獄に閉じ込められた

「よし！次は僕が行くぞ！」

大介ことデューク・フリードが乗ったグレンダイザーがハーデスの

前に降り立つ
そして、胸の放熱板に七色の光が灯る

「反重力ストオオオオオオオオオオム！！」

ダイザーの胸から七色の光線が放たれる
それを浴びたハーデスは重力を無視して上空に舞い上がる
相手に反重力光線を浴びせるグレンダイザーの必殺技の一つである

「甲児くん！鉄也くん！」

放ちながら大介が叫ぶ

「良し来たぁ！」
「食らえ！！」
「「ダブルバァァァァニングファイヤアアアアアアアアアアア！！！」」

ダブルマジンガーの放った熱線がハーデスを襲う

「剣児！俺の銅鐸を使え！」

ビルドオフし、元の人間状態になった宙が自分の胸から銅鐸を取り出して剣児に与える
それをジーグの額で受け取ったジーグが緑色の発光を発する

「おっしゃあああああ！来い！バルバアアアアアア！！」
『ガオオオオオオオオオオオオオオオン！！！』

剣児の声を聞いてバルバが向かってくる

「ビルドォォォ・アアアアアアアアアアアアップ！！！」

剣児が叫び鋼鉄ジーグとバルバが一つになった
其処には白い体に虎の口を胸につけた正しく「鋼鉄神」が居た

「鋼鉄神・ジイイイイイイイイイイイイイイイイイイグ！！！」

両手を挙げて咆哮する
そして上空に持ち上げられたハーデスに向かって虎の口と両肩の発射口を開く

「食らいやがれ！トリプルルトオオオオオオオオオオオオオオオオオム！！！」

鋼鉄神ジーグから放たれた3本のマグネ砲が更にハーデスに襲い掛かる

「隼人、弁慶！分かってるな？」
「おう！何時でも良いぞ、リョウ！」
「遠慮しないで派手にブチかましてやれ！」
「ようし！！」

ハーデスと同じ高度に上がって来た真ゲッターが両腕を構えて中央に巨大なエネルギー体を作る
それはゲッター線の塊であった
大きさは徐々に膨れ上がっていき、やがて真ゲッター以上の大きさになった

「貴様にも味合わせてやる・・・ゲッターの恐ろしさをなぁ！！
ストナァァァァ・サァァァァァン・シャアアア

ロッテが言う
すると全員が同じ場所を見た
それは

「甲児くん！トドメは任せたぞ！」
「取りはくれてやるんだ！ビシッと決めて来い！」
「へマすんなよ！甲児」
「頼むぞ、甲児くん！」
「ハーデスにトドメを」
「頑張って下さい！甲児さん」
「信じてます！」
「うちらの分も奴に叩き込んでぇな」
「やっちゃえ！甲児さん！」

皆の声援を甲児は一身に受ける

「おう！任しておけ！！！」

腕を振って叫び、そのままハーデスをマジンガーZは追う

＊＊＊

その頃、大気圏を越えたところでハーデスはニヤけていた

「ガハ・・・ガハハハハハハ！馬鹿共め！あの程度でワシが死ぬと思ったのか？このまま再生して奴等を叩きのめしてやる！」

ハーデスが笑っていた
しかし、そんなハーデスに猛スピードで迫る物体があった
それは、

「な、あれは・・・マジンガーＺ！！」

そう、それは神の翼「ゴッドスクランダー」を身に着けたマジンガーＺがこちらに迫って来たのだ

『残り１０秒！！！』

エイミィの叫びがパイルダー内に響く

「その前に奴を叩きのめす！チェンジ、ゴォォォッドスクランダアアアアアアアア！！！」

甲児の叫びに呼応し、マジンガーは変形し、何と巨大な腕となったのだ
そして黄金を纏って更に速度を上げる

『９！！』

「く、来るなあああああああああああ！来るなあああああああああああ！！」

ハーデスは苦し紛れに口から炎を巻き上げる

『8！！』

だが、黄金を纏った腕はそれを物ともせずハーデスに向かっていく

『7！！』

「食らえ！ハーデス！！
『輝くZの名の下に、全てを、原子に打ち砕けえええええええええええええええええええ！！！』」

甲児が叫ぶ
そして更に速度を増しハーデス目前まで迫る
そして叫ぶ
その拳の名を
神々しく輝く神の拳

『6！！』

その名は

「ビイイイイイイイイイイクバアアアアアアアアアアン・パアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンチ！！！」

叫びと同時に神の拳がハーデスに当たる
凄まじいエネルギーがハーデスの体を伝って伝わる

「ゲエエエエエエエエエエエエギャあああああああああああああ

あああぐあああああああああああああああ！！！」

ハーデスが断末魔の叫びを上げる
だが、まだ砕けない

『5！！』

「や、止めろおおおおおおおお！助けてくれえええええええええ！ヒミカ、ヒミカはどうしたあああああああああああ！！！」

ハーデスは助けを求めるように叫ぶ
だが、ハーデスの声にヒミカは答えない

『4！！』

「うおおおおおおお

『1！！』

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」

「俺達の・・・勝ちだあああああああああああああああああああああああああ！！！」

マジンガーのビックバンパンチはハーデスを粉々に打ち砕き遥か後方を旋回して元のマジンガーの姿になる

「時間は！」

甲児はふと付近に居たアースラを見る

どうやらアースラにはアルカンシェル発射もアースラの自爆も無さそうであった

「エイミィ！時間はどうだったんだ？」

心配になった甲児がエイミィに聞く

モニターの先では魂が抜けかけたエイミィが居た

だが、甲児の声でハッとなって起き上がったエイミィがタイマーを見る

『の・・・残りコンマ1秒・・・本当にギリギリでした（汗』

正に後ほんのコンマ1秒遅れていたら大惨事であった

だが、終わりよければ全て良し

甲児は声高らかに笑った

だが、そんな甲児の視線の先に突如赤く燃え上がる炎が湧き上がる

その炎は何処か人の顔を模していた

「おのれ、マジンガーめ・・・おのれ、兜甲児！ワシは何時か必ず蘇る！ミケーネ七つの軍団を引き連れて・・・闇の帝王となってなぁ！それまで首を洗って待っておれぃ！！！」

そう言い残して炎は消え去った

「けっ！来るなら来やがれ！何時でも相手になってやるぜ！！」

消え去った空間に向かって甲児は叫んだ

＊＊＊

「甲児さん・・・間に合ったのかなぁ？」

心配そうに上空を見つめるフェイト

「さっき連絡があったよ。アースラは無事だ！甲児さんはやったんだよ」

「そ・・・それじゃ・・・私達・・・・・」

「勝った・・・勝ったのか？」

なのは達リリカル組は未だに信じられないと言った顔をしていた
だが、鉄也達ダイナミック組は当然だと言う顔をしていた
すると、その上空からマジンガーZが降りてきた

「皆！やったぜぃ！この俺とマジンガーは不死身だぜぃ！！！」

そう言って甲児は自信有り気な顔をする
かくして、後に呼ばれる『冥王ハーデス事件』は無事に幕を閉じたのであった

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　　終

次回予告

遂にハーデスを倒した俺達
これでやっと帰れるな
でもその前に一騒ぎするか♪

次回『Ａｓ編完結　さらば友よ、また未来で会おう』

次回もこの小説に
テイィィィィィィクオオオオオオオオオオオオフ

大決戦！悪を打ち砕く神の鉄拳！！！　後編（後書き）

次回でＡｓ編も終了
最後は皆で馬鹿騒ぎだ！！！

Ａｓ編完結　さらば友よ、また未来で会おう（前書き）

今回でＡｓ編は終了です
しかし、悪意はまだ根付いていた

Ａｓ編完結　さらば友よ、また未来で会おう

ハーデスの壮絶な最後は此処、邪魔大王国に居るヒミカにも見られていた

「ククク・・・ハーデスよ。見事な最期だったぞ」

薄ら笑いを浮かべてヒミカが言う
その顔は何処と無く不気味であった

「後はわらわに任せておけ・・・近い未来我等は必ず蘇る、その時こそ・・・お主の出番じゃぞ」

ヒミカは岩で封印されている男性と思わしき物にそっと寄り添う
その顔は何処か赤くなっていた
赤い皮膚に、ライオンのような鬣、そして首に巻いた龍と鬼のような角を生やしていた男性が今は岩の中で眠っていた

「早く目を覚ませ・・・わらわの愛しき・・・『竜魔帝王』よ」

＊＊＊

所変わって、此処は相も変わらずくろがね屋の宴会会場
其処では甲児達は勿論、八神家ご一行やアースラ局員達、更にはアリサにすずか、猫姉妹にグレアム提督をお招きしてある宴会が開かれていた
その宴会とは

「「「「八神はやて様！ご退院おめでとう御座います！！！」」」」

強面のくろがね屋ご一行がはやてに対して会釈をしてそう言う
それを聞いたはやては何処かくすぐったい思いをしていた

「皆有難うなぁ♪」

はやては上機嫌であった
だが、横に居たシャマルは青ざめていた

（えええええええええええ！な、何？此処ってひょっとしてヤクザの溜まり場なの？危ない！そんなところにはやてちゃんを置いてはおけないわぁ！！！）

青ざめた顔でそんな事を考えてるシャマルさん
どうにか理由を付けて此処から抜け出そうと視線を動かすと其処には

「てめぇ！そりゃ俺の肉だろうが（怒」
「うるせぇ！こいつは俺が先に目をつけた肉だ！離しやがれ！！（怒」
「二人とも違うぞ！こいつは私の肉だ（怒」

甲児、剣児、ヴィータの3人が七面鳥の丸焼きを取り合っていた

甲児が頭を、剣児が右足を、ヴィータが左足を掴んで引っ張り合ってる
引っ張られてる七面鳥がありえないほど延びている
はっきり言って不毛な戦いである
溜息をついてシグナムの方に相談しようと視線を動かすと

「はぁ！」
「・・・（コクッ」

シグナムと先生が壇上で激しい接戦を演じていた
因みにシグナムはレヴァンティンを構えてバリアジャケット装着済みであり、先生も真剣を装備していた

「早い・・・何と言う太刀筋だ！流石は先生だな」
「・・・・・（コクッ」

賞賛するシグナムに先生は頷くだけであった
しかし側から見てるとかなり危ない
いい加減止めて欲しいと言う気がする
そんな感じで宴会場はとんでも無い事になっていた
フェイトとなのははリインフォースと何やら楽しそうな（？）会話をしており
アルフはザフィーラの腕に抱きついておりそれにザフィーラは顔を赤く染めており
クロノはリンディとデバイス化したクライドと話していたり
竜馬は相変わらずアリシアに懐かれていたり
それを面白そうに隼人と弁慶が見ていたりと、かなり凄い展開になっていた

＊＊＊

「そう言えばよぉ、グレアムのとっつぁんはこれからどうするんだ？」

鶏肉を齧りながら剣児が聞く

「うむ、実は今回で管理局を辞めようと思っていてね」

「な、ちょっと待ってくれよ！」

それを聞いた甲児がダンと机を叩く

「何で辞めるんだ！あんた何も悪い事してないじゃねぇか！それなのに何で・・・」

「まぁ落ち着いてよ甲児」

大声で意見をぶつける甲児にロッテが止めに入る

「お父様も実は今回の一件が片付いたら引退する予定だったのよ」

「正直昔のように行かなくなってね・・・これを起に田舎に帰って隠居しようと思っているんだ」

「へぇ、そうなのかぁ」

余り興味無さそうに剣児が呟く

「ま、グレアムさんがそう言うんなら俺たちは何も言う事は無いな」

それなら仕方ないと甲児も納得する

一方、こちらでは

『リンディ、お前相変わらずお茶に砂糖とミルクを入れてるのか（汗』

「あら?良いじゃない、私好きなんだから♪」

デバイス化したクライドが相変わらずお茶に砂糖とミルクを入れてるリンディにツッコミを入れていた

『いや、だから体に障るから止めろって言ってるだろう?』

「大丈夫よ。健康診断では問題無かったし」

『そう言う問題じゃ無いんだが・・・まぁ、お前が良いのなら良いか（汗』

最早何を言っても無駄だろうと思いクライドは諦める

それを横で見ていたクロノが苦笑いを浮かべる

（父さんも苦労してたんだなぁ（汗）

そう思っていた

その時、クライドは今度はクロノの前に来る

『ところでクロノ。お前エイミィちゃんとは何処まで行ったんだ?』

「ブウウウウウウウウウウウウウウ!!」

突然何を言い出すのか
そのせいで飲んでいた茶を吐き出してしまった
斜線上には鉄也が居りお茶まみれになる

「おい（怒」

少し怒った感じで言うも、今のクロノにはそれに答えてる暇が無い

「な、なんですかいきなり！」
『惚けんな！お前が彼女と良い仲だってのはリンディから聞いてるぞ！それで何処までやったんだ？デートはしたのか？一緒に飯食ったのか？もしかして・・・「チュー」とかしちゃったのか？どうなんだ！父さんに洗いざらい全部吐け！！』

何甲児さんと同じ事言ってんだこの親父は
そうクロノが思えた
しかし其処へ悪ノリしたエイミィがやってきて

「え～、そんなのチュー以上の事もやっちゃってますよぉ♪」

と、言う
それを聞いたクライドの額（デバイスね）に青筋が浮ぶ
そして

『クロノオオオ

『貴様！幾ら仲が良いからってそんな事は不味いだろうが！最近の出来ちゃった結婚をお前もやる気かあああああ！って、父さんも同じだったか！』

と、言いながら雨霰の如く魔力弾を降らせる
その斜線上には勿論

「んぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

我等がラッキースケベことクロノ君が居た
魔力弾が止むと其処には黒こげになり爆発アフロヘアーになったクロノが居た

「ひ・・・酷いや・・・父さん・・・」

掠れた声でクロノは言う
だが、父は全く取り合おうとはしないでいた
むしろ悪びれた様子も無い

そしてその隣では

「そうなの、二人とも好きな人が出来たのね」
「うん、そうだよ母さん♪」
「わ・・・私も／／／」

フェイトとアリシアが嬉しそうに母プレシアに報告する
それを聞いてプレシアが嬉しそうな顔になる

「頑張ってね。母さん応援してるから」
「「うん♪」」

二人は声を揃えて頷いた
しかし、これが後に甲児の元に大いなる修羅場となって降り注ぐ事になるとは・・・今この場に居る甲児は全く気づかないで居た

「なぁなぁ大介さん。この料理どう？美味い？」
「うん、美味しいよ・・・ひょっとしてはやてちゃんが作ったのかい？」
「え、分かる？やっぱ大介さんは凄いなぁ♪」

はやては大介と楽しそうに会話をしていた
しかもほのかに頬が赤い

「なぁ、シグナム・・・もしかしてはやての奴・・・」
「うむ、どうやら主はやては大介に対して何処か特別な感情を抱いているようだ・・・何せ最初に主が出会ったのが大介だったからな」

甲児の問いにシグナムが答える
それを聞いて甲児は成る程なぁと納得する

「それにしてもなのは・・・あんた何時の間にこんな大きな人達と友達になったのよ」
「ふぇ？何時って言われても・・・」

アリサにズビシと指を指されて返答に困るなのは

「なのはちゃんの周りって結構年の離れた人達が集まるんだね」
「す・・・すずかちゃん・・・それって遠まわしに私が同年代の友

達が出来ないって言ってるような者だよ（涙」
なのはが半泣きで言う
すると

「皆さん、追加の料理を持ってきましたよ♪」
「遠慮せずジャンジャン食ってくれ」

と、なのはの父である桃子と士郎が御盆一杯に料理を持ってきた
その後に続いて

「この後も沢山あるからねぇ」
「ああ、気にせず沢山食ってくれ」

姉の美由樹と兄の恭也も料理を運んでやってきた
すると怒涛の勢いで甲児と剣児が料理に群がる
しかし、

「おっと、この料理は俺のだぜ」

と言って二人が狙ってた料理を横から明が掠め取る

「明てめぇ！」
「返せ！それは俺の料理だぞ！！！」
「へへん、悔しかったら取り返してみな！！！」

狭い宴会会場で3人はドンチャン暴れまくっていた
そんなこんなで宴会は大パニックになっていた

＊＊＊

やがて宴会も大体終り、会場では騒ぎまくっていた皆が今は静かに寝に入っていた
そんな中、甲児と翼は外に居た

「女将・・・あんたに一つ聞きたい事があるんだ」
「何だい改まって？」
「俺は夜天の書に取り込まれた時、母親を見た・・・あんたとそっくりだった」
「・・・・・」つばさは黙っていた
「教えてくれ！あんたは一体何者なんだ？」

甲児が顔を強張らせて聞く
それに翼がフッと笑う

「プロジェクトフェイト・・・知ってるだろう？」
「あぁ・・・フェイトを作ったプロジェクトだろう？」
「実はねぇ・・・あたしはあんたの母親「兜　翼」のクローンさね」
「な、何だって！！！」

翼の言葉に甲児は驚いた

「そのプロジェクトフェイトだって、あんたの母親が私を作る為に立ち上げたプロジェクトだったのさ・・・それを何処ぞの馬鹿が悪用しちまったのさ」
「それで生まれたのが・・・フェイトとエリオだったのか」
甲児は今寝息を立てているフェイトと未来に居るエリオを思い出した
「でも、何であんたを作る必要があったんだ？」
「決まってるだろう。お前を導く為だよ」
「俺を？」
「あんたのお袋はねぇ、お前が過去に来る事を予見して、あたしと、そして「夜天の書」と「ゴッドスクランダー」を作ったのさ」
「だけど、まだ気になるのがある！あの時リインフォースは「アルハザード」で作ったって言った！何で母さんはアルハザードに行けたんだ？」
「フッ、そう言う話はあたしじゃなくて親父にでも聞きな」
翼はそう言うと懐から煙管を取り出して一服吸う
その言葉に甲児は首を傾げていた
「ちょ、ちょっと待ってくれ！お父さんはもう死んでるんだ！あっちの世界に居る筈無いだろう！」
「はん、目を凝らして良く見てみな！案外近くに居るよ」
「近くに・・・」
「さ、今はもう寝な。明日は未来に帰るんだろう？」
「あ、ああ・・・そうだな」
頷くと甲児は部屋に戻って横になった
そんな甲児を見て翼はニヤリと微笑む

（あんたしか居ないんだよ・・・あの悪魔の魔神を倒せるのは・・・
そして、翼が作った「あれ」を動かせるのもね）

1人翼は心にそう思いながら再び煙管を吹かす

＊＊＊

翌日、マジンガー達の前にフェイト達が集まっていた

「それじゃ、一時のお別れだな」
「甲児さん・・・」フェイトは悲しそうな顔をする
「なぁに、どうせ未来で会えるんだからよぉ。楽しみに待ってろよ」
「うん！」
「じゃぁな、元気でやれよ」
「さて、んじゃ俺達も未来に行くんだな」
「ガウッ！」
「やっと帰れるんだね」
「そうだな」

鉄也、剣児、大介、竜馬の一同はやっと未来に帰れる事を喜んでいたが、

「残念だが俺達は此処でお別れだ」
「俺もだ」

宙と明が言う

「え？何でだよ」
「俺達は次元の門を使って此処に来たんだ。だからお前達のように未来に帰る事は出来ないんだ」
「そうしけた面するなよ！何かあったらすぐに駆けつけてやるからよ」

心配そうな顔をする甲児達を宙と明が宥める
そうだ、これも今生の別れでは無いのだ
きっと何時か会える
そう思えば楽になれるだろう

「甲児、未来に帰ってもしあたしに会えたら、全てを話してやるよ」
「ああ、楽しみに待ってるよ」
「竜馬さん！私きっと竜馬さんを振り向かせられる位の綺麗な女になるからね♪」
「ああ、頑張るんだよ」

元気に叫ぶアリシアに竜馬は笑う

「フッ、どうやら大分慣れたみたいだな」
「そうみたいだな」

横で見ていた隼人と弁慶が笑う

「行こうか、皆」

大介の言葉を皮切りに皆がそれぞれの魔神に乗り込む
今、彼女達の目の前には鉄の巨人達が立っていた

マジンガーZ，グレートマジンガー，真ゲッターロボ，鋼鉄ジーグ，
グレンダイザー，

もし、彼等魔神が来なければ、きっと悲しい運命が彼女達に降り注
いでいただろう
魔神は人の運命すら変える力を持っているのだ
そう思っていると、５体の魔神を光が包み込む
遂に未来に帰る時が来たのだ

「それじゃ皆、１０年後で会おうな」

甲児がそう言ったのを最後にマジンガー達はその場から姿を消した
今度こそ暫くのお別れである
少し寂しい気持ちもあった
だが、１０年なんてあっという間だろう
そう彼女達は思えた
そんな彼女達を青い空は何時までも見つめていたのであった

＊＊＊

此処は深い海底
其処では体の半分を失ったトリスタンとイゾルデが海底に沈んでいた

『クックック、４千年・・・短イナ・・・』

その亡骸を見つめるように巨大な影が立っていた
その姿は何処か魔神を思わせたが、それから漂うオーラは正しく悪魔その物であった

『後１０年・・・１０年待テバ丁度１万年カ・・・時期的ニハ丁度良イカモナ』

そう呟くと巨大な影はトリスタンとイゾルデの亡骸を拾う

『セイゼイ暇潰シノ道具ニデモナッテモラウカ』

そう言っていた陰は不気味な笑みを浮かべていた
その影こそが、後にミッドチルダに滅びの風を呼ぶ災いになるとは・・・この時はまだ誰も予想だにしていなかった

さらば友よ、また未来で会おう

次回予告

甲児
やっと未来に帰ってこれた俺たち。
だけどそんな俺達に早速任務が訪れた
なにぃ！暴走列車の中にとてつもなくやばいロストロギアが積まれてるだってぇ！
上等だ！俺達に任せとけってんだ！
意気揚々と向かった俺達
だが、その前に現れたのは・・・
まさか！マジンガーＺ！！

次回『ＤＹＮＡＭＩＣ編開幕　暴走列車を止めろ！！』

次回もこの小説に
テイィィィィィィィィクオオオオオオオオオオオオフ！！！

Ａｓ編完結　さらば友よ、また未来で会おう（後書き）

次回は遂に最終章突入

その名は

『ＤＹＮＡＭＩＣ編』

乞うご期待下さい

人気ランキング　結果発表

第1回

甲児
「人気ランキング結果発表～～～」

作者
「と、言う訳で始まりました第一回人気ランキング結果発表で～～す」

甲児
「おい、それよりさぁ、何で俺と作者しか居ないんだ？」

作者
「ああ、それはこれから結果を言ってその度に出て来ると言う方針を採ったんだよ」

甲児
「へぇ、そうなのか」

作者
「でもその前にゲストをお招きしてあるぞ」

甲児
「へ？ゲスト？！誰だ？」

作者
「まずは「黒神」さんと彼が書いてる小説「『リリカル銀魂ＳＴｒ

ｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌」の主人公の「坂田銀時」と最早この小説のメインヒロインと言っても過言では無い「スバル・ナカジマ」さんにお越し頂きました」

黒神
「どうも！黒神でぇす！」

銀時
「うぃ～っす、どうもぉ坂田銀時でぇす。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまぁす」

スバル
「えっと・・・す、スバル・ナカジマです・・・宜しく・・・お願いします／／／」

黒神は人気ゲーム『ブレイブルー』の『ラ〇ナ』のコスプレをしており、スバルに至っては『ノ〇ル』のコスプレをしていた

甲児
「へぇ、そっちのスバルも結構可愛いんだな」

スバル
「へ？か、可愛い・・・あうぅぅ／／／」

甲児に可愛いと言われて思わず赤面するスバル

甲児
「あり？俺なんか変な事言ったか？」

銀時

「お宅、意外と鈍感なんだな」

甲児
「そうか？・・・それより銀さんだっけ？あんた向こうじゃハーレム状態でモテモテらしいな。よ、この色男♪」

銀時
「茶化さないでくんない。銀さんこう見えて結構デリケートで出来てるんだよ。もうガラスのハートなんだよ！ってか、そう言ってる甲児も結構モテモテじゃないの？もうハーレムじゃないの？羨ましいよぉコンチクショー」

黒神
「へぇ、そっちだと甲児くんもハーレム状態なんだねぇ」

作者
「はい、まぁこの小説は黒神さんの小説があってこそですからねぇ」

黒神
「な、なんかそう言われると照れるなぁ／／／」

スバル
「あのぉ・・・そろそろ発表しません？」

コスプレをしたスバルが少し恥ずかしそうに言う

作者
「あぁ、ちょっと待ってくれ、まだゲストを呼んでるんだ」

銀時

「はぁ？まだ居るの？お宅も好きだねぇ」

呆れる銀時

作者
「まぁ良いじゃん、んじゃ纏めて呼ぶぞぉ！作者の「天使」さんと「ジャン」さん。そして天使さんの書いてる「太陽の勇者ファイバードＳｔｒｉｋｉｅＳ」の主人公の「火鳥勇太郎」さん。続いては「勇者指令ダグオンＡｓ」の主人公の「南力」さんでぇす」

天使・ジャン
「どうも」

勇太郎
「いやぁ、始めまして。それにしても此処結構賑やかですねぇ。一体何のパーティーが始まるんですか？」

銀時
「何？この人天然？」

甲児
「ああ、今から人気ランキングを発表するんだよ」

力
「へぇ、ってか久しぶりだなぁ甲児」

甲児
「おう、元気にしてたか？力」

銀時

「え？何？二人とも知り合いなの？」

勇太郎
「あれですね！夕日の似合う丘の上で二人して殴りあった仲なんですねきっと」

天使
「いや、そうじゃないから（汗」

ジャン
「あ、それ良いかも！」

作者
「うむ、今度やってみるか」

甲児
「って、おいおい（汗」

力
「ちょ、マジ？俺強いよぉ！骨の2，3本は覚悟してもらわないと大変な事になるよぉ」

スバル
「あのぉ・・・そろそろランキングをぉ・・・」

勇太郎
「あれ？スバルちゃんの着てる服どうしたの？とても似合ってるよ」

力
「おお、本当だ！うちの邪神にももうちょっと其処のスバルみたい

な色気があればなぁ（呆」

甲児
「お前・・・後ではやてに殺されるぞ（汗」

と、こんな具合に楽しく会話してますがとりあえず始めます

一同
「第１回　「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」人気キャラランキング　結果発表！！！」

作者
「今回は第１回と言う事なので少し多目の２０位ランキングになりました」

黒神
「って、多いなぁ！大丈夫かよ（汗」

作者
「ま、なんとかなるっしょ」

銀時
「ほぉ、ポジティブだねぇこっちの作者は。うちの作者も見習って欲しいもんだよ」

黒神
「ほっとけ！」

作者
「ほんじゃまずは第２０位から」

第２０位
『ＫＹから男、男からラッキースケベ』クロノ・ハラオウン

クロノ
「ど、どうも・・・ってか！何ですかこのキャッチフレーズは！！」

自分のキャッチフレーズが嫌ならしく抗議するクロノ

黒神
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！」

作者
「おわっ！どうしたんだ黒神さん！！」

銀時
「あぁ、そう言えばうちの作者はクロノが大嫌いだったんだ」

黒神
「何であのＫＹがランキングに入ってんだゴラアアアアアアアアア！今すぐ退場しろやゴラアアアアアアアアア！！！」

クロノ
「えええええええええええええええええ！ちょ、どうなってるんですかこれ？」

甲児
「おいおい、このままだとヤバクないか？」

勇太郎
「任せて下さい、こんな事もあろうかとテレビで予習してきました」
そう言うと勇太郎は黒神の背後に近づいて思い切り首にチョップをかます
だが威力が有りすぎて首がありえない方向に曲がってしまう

力
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおい！やばいから！マジヤバイからあああああああああ！」

天使
「何やっちゃってんの勇太郎！すぐに戻さないと」

ジャン
「ってか、蘇生！早く蘇生して！」

スバル
「あわわわわ！黒神さん大丈夫ですかぁ？」

銀時
「やばいよマジやばいよ！どれ位やばいかって言うとマジやばいよこれ！」

甲児
「おいおい！折角の晴れ舞台で殺人事件なんか起こさないでくれよ（汗）」

一同がパニック寸前になる

勇太郎
「任せてください」

再び勇太郎が出る
すると曲がった首をグキッと無理矢理戻した

黒神
「あぁ、死ぬかと思った」

クロノ
「えええええええええええええええええええええええええええええええええええ！！！！！」

驚愕の光景に驚く一同

作者
「えっと・・・それじゃぼちぼち行かせて貰うぞ・・・ってか、この調子だと時間が掛かるから次から2人纏めて言うぞ」

第１９位
『悪魔の体に人の心を宿した男』不動明

第１８位
『熱血で不死身でドスケベな鋼鉄野郎』草薙剣児

明
「やれやれ、やっと俺の出番かよ」

剣児
「って言うかよぉ、これ動きにくいんだけどどうにかなんねぇのか

？」

明と剣児はそれぞれ黒いタキシードを着ていた

黒神
「なんか知らない顔がゾロゾロ出てきたなぁ」

銀時
「作者は知らないんなら動画見るなりしたらどうだ？」

黒神
「いや、結構時間無いし」

作者
「気持ちは分かるよ黒神さん」

剣児
「おい、俺達の事は無視かよ・・・ん？」

スバル
「え？」

剣児はコスプレしたスバルを見る
そして

剣児
「うひょぉ！美人ちゃん発見！それにボインだぜぃ！」

と言って目をハート型にして跳びかかる
その姿に恐怖したスバルが

スバル
「いやあああああああああ！ティルヴィングエア！」

ティルヴィングエア
『Ｉｔ ｉｓ ．．ｍａｇｇｏｔ．．［ｇａａ；］ ｉｎ ｔｈｅ ｄａｕｇｈｔｅｒ ｉｎ ｔｈｅ ｈｏｕｓｅ．（家の娘に近づくんじゃねぇ蛆虫がぁ！）』

ティルヴィングエアを構えてスバルが剣児を思いっきり引っ叩く

剣児
「グハッ！」

ティルヴィングエアで殴られた剣児はそのまま後方に吹っ飛ぶだが、すぐに起き上がる

剣児
「ってぇなぁ！怪我したらどうするんだよ！」

銀時
「って、そっちのキャラってみんなあんな感じなのか？」

明
「まぁな、大概の奴らはなのはのＳＬＢを食らったってピンピンしてるぞ」

黒神
「化け物だらけだなぁ（汗」

改めてダイナミックチームの頑丈さに驚く一同

勇太郎
「凄いんですね剣児さんって」

剣児
「あったぼうよ！あんなのでくたばる俺じゃねぇぜ！」

力
「スケベ根性は相変わらずなんだなお前」

剣児
「うるせぇ！」

ジャン
「何時かつばきに殺されるぞ（汗」

スバル
「それより・・・さっきのティルヴィングエア・・・かなり性格が変わってたんだけど（汗」

甲児
「確かにそうだな・・・まぁ気にしててもしょうがねぇな、そんじゃ次行くぞ」

第１７位
『ツンデレでツッコミ』ノーヴェ

第１６位

『心優しくて力持ち・・・んで彼女ゲットした幸せ者』車弁慶

ノーヴェ
「おい！誰がツンデレだ！今すぐ改名しろ！」

額に青筋を浮かべて怒鳴るノーヴェ
だが断る

ノーヴェ
「一辺くたばれえええええええええええ！」

と言って何故か作者を殴る

作者
「グバッ！」

甲児
「あ～あ、大丈夫か？作者」

作者
「あ・・・ああ・・・しかしノーヴェのドレス姿も中々だなぁ」

甲児
「お！言われて見れば確かに結構イカスなぁ」

ノーヴェ
「な・・・ば・・・馬鹿野郎！好きで着た訳じゃねぇんだぞ！」

甲児にドレス姿を見られたのが余程恥ずかしかったのか顔を赤く染めてそっぽを向く

銀時
「おいおい、ひょっとしてノーヴェの奴甲児の事が・・・」

ノーヴェ
「それを言うんじゃねえええええええええええええ！！！」

銀時
「あらぐばぁ！」

言葉の途中でノーヴェにぶっ飛ばされる我等が銀時

弁慶
「だっはっは、元気だなぁ皆」

サイズの大きなタキシードを着た弁慶が大声で笑っていた

銀時
「大きなお世話だよったく・・・にしてもこっちだとディエチの奴弁慶に惚れてるんだなぁ」

黒神
「え？マジ？どうやったらあんな筋肉馬鹿に惚れるんだ？」

作者
「あぁ、それならこれを見てくれ」

そう言ってＤＹＮＡＭＩＣの「大騒ぎ！宴会大騒動」を見せた

黒神

「成る程、それなら惚れても納得できるな」

銀時
「つうかこの弁慶って化け物か？鉄パイプでガジェットを一撃粉砕するなんてよぉ」

甲児
「木刀でぶっ飛ばすお前に言われたくねぇよ（汗」

力
「俺なら素手でもぶっ壊せるぜ」

勇太郎
「私もだね」

甲児
「此処は化け物屋敷かよ（汗」

ノーヴェ
「って、甲児だって機鋼獣を素手で倒したじゃねぇか」

一同
「なにいいい

ノーヴェ
「これ見て思い出せ」

そう言ってＤＹＮＡＭＩＣの「鉄の魔神」を見せた
それを見て一同が納得する

甲児
「と、とりあえずランキングを続けるぞ」

第１５位
『心優しき天然っ娘』ディエチ

第１４位
『宇宙の王者』宇門大介

ディエチ
「ど、どうも／／／」

大介
「やぁ、始めまして」

ドレス姿のディエチが顔を赤く染めており、タキシード姿の大介が
眩しい笑顔で手を振る

銀時
「へぇ、今度はまともな奴だなぁ」

明
「おい、それってどう言う意味だ（怒」

剣児
「それじゃまるで（怒」

甲児
「俺たちがまともじゃないみたいじゃねぇか（怒」

銀時の言葉を聞いたダイナミックの3人が怒りの表情を浮かべる

ディエチ
「弁慶さん・・・どうかなぁ／／／」

ディエチが赤面しながら自分のドレス姿を見せる

弁慶
「おっ、綺麗だなぁ。似合ってるぜ」

ディエチ
「うん、有難う／／／」

トマト並に顔を赤くしたディエチが嬉しそうに言う

銀時
「何？この甘ったるい空気・・・おいノーヴェ！あの弁慶っての殴り倒して来いよ！うちじゃ山崎を殴り倒してるんだからよぉ」

ノーヴェ
「無茶言うな！戦闘ヘリを鉄パイプ一本で撃ち落す怪力野郎なんだぞ！逆に畳まれちまうよ！（汗」

銀時

「マジで此処は化け物屋敷なのか（汗」

改めて此処は化け物揃いだなぁと思う銀時であった

甲児
「さぁて、じゃんじゃん行こうか」

第１３位
『熱血リーダー』流竜馬

第１２位
『将来の夢は戦闘のプロ』剣ヴィヴィオ

竜馬
「どうも始めまして」

ヴィヴィオ
「始めまして！ヴィヴィオです」

これまたおめかしした竜馬とヴィヴィオが現れた

銀時
「え？ヴィヴィオの苗字って・・・まさかヴィヴィオの親父ってあの戦闘のプロ？大丈夫なの？」

ヴィヴィオ
「大丈夫だよ！ヴィヴィオ毎日パパとトレーニングしてるもん」

勇太郎
「へぇ、偉いねぇ」

力
「ところで・・・内容はどんなの？」

ヴィヴィオ
「これ」

と言ってヴィヴィオは普段やってるトレーニング内容の書かれた紙を見せた
それを見たゲスト陣一同（勇太郎以外）は青ざめた

スバル
「て、鉄也さん・・・５歳児になんて過酷なトレーニングをしてるんですか（汗」

銀時
「こりゃぁもう修行じゃねぇ、苦行だよ・・・間違ってもあんな親の元じゃ子供グレるぞ（汗」

甲児
「そ、そりゃやばいなぁ・・・んじゃ気を取り直して次行くぞ」

第１１位
『偉大な勇者』剣鉄也

第１０位
『恋する乙女は強し』アリシア・テスタロッサ

鉄也
「やれやれ、こんな所で油を売ってる場合じゃないと思うんだがな

ぁ俺は」

アリシア
「相変わらず硬いなぁ鉄っつぁんは！それじゃヴィヴィオに愛想つかされちゃうよぉ」

鉄也
「そ、そうなのか？（汗」

アリシアの言葉にギョッとなる鉄也

銀時
「出た、鬼パパ」

黒神
「史上最強のスパルタ親父」

天使
「其処まで言いますか（汗」

ジャン
「良いんじゃないの。事実なんだし」

口々に酷い事を口走るゲスト陣一同
そんな時、

アリシア
「竜馬さあああああああああああああああああああああん！！」

竜馬
「どわぁ！！」

アリシアが目の前に居た竜馬にダイブする
その拍子に前のめりに倒れる竜馬

アリシア
「あぁ、竜馬さんとこうして抱き合えるなんて・・・幸せ～～♪」

銀時
「おいおい、此処じゃアリシアは生きてるんだねぇ・・・にしても
何で此処の連中はあんな暑苦しい連中が好きになるんだろうねぇ」

甲児
「俺としては何でそっちの連中があんたに好意を寄せるのか疑問で
仕方ないよ・・・っと、時間も押してるしドンドン行くぞ」

第９位
『国家権力の下僕』ギンガ・ナカジマ

第８位
『コスプレ大好き』ディード

ギンガ
「何で私が国家権力の下僕になってるんですかあああああああああ
あああああああああ（涙」

涙を流して叫ぶギンガ
そして

ディード
「おのれぃ、にっくきマジンガーZめぇぇ」

何故かあしゅら男爵のコスプレ（顔も）をしたディードが居た

勇太郎
「へぇ、ディードちゃんのメイク綺麗だねぇ、今度私もやってみようかなぁ」

天使
「止めろおおおおおおおおおおおおおおおお！絶対似合わないから！」

力
「ってか、あれ自分でやったの？」

銀時
「だとしたらマジで凄いなアイツ」

甲児
「アイツ結構器用だからなぁ・・・さて、んじゃ次行くぞ」

第7位
『ボケサーファー』ウェンディ

第6位
『夜天の魔道士』八神はやて

ウェンディ
「ヤッホー！登場だよぉ！」

はやて
「大介さん！うちのドレス姿どうや？綺麗か？」

これまた元気な二人が現れた

銀時
「おいおい、向こうじゃズラに惚れてるってのにこっちではあの大介ってのに惚れてるんだなぁ」

黒神
「全く、節操の無い事だなぁ」

作者
「いや、多分使い方違いと思うけど（汗」

甲児
「お～い、時間無いからちゃっちゃと行くぞぉ」

第５位
『原作では悪人、こっちでは苦労人』ジェイル・スカリエッティ

第４位
『不屈のエース・オブ・エース』高町なのは

ジェイル
「む、どうやら此処で間違い無さそうだね」

なのは
「はぁ・・・ユーノ君が居ないのが残念だなぁ」

白いタキシードを着たジェイル博士とドレス姿のなのはが入って着た

銀時
「おいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！あの変態科学者が上位にランクインしてるってどう言う事おおおおおおおおおおおお？」

驚く銀時

勇太郎
「そうですか？ドクターは良い人ですよ」

スバル
「それは火鳥さんの所のジェイルさんでしょう？」

黒神
「んで、何でジェイルさんがこんなに上位ランクに居るの？」

作者
「多分原因はこれだろう」

と言ってＤＹＮＡＭＩＣの「外伝７　博士の過去」を見せた
それを見た銀時と黒神さんは

黒神＆銀時
「ハアアア

ジェイル
「そ、そうかい？／／／」

褒められて少し恥ずかしそうになるジェイル博士
なのは
「ねぇ銀さん、そっちの私ってやっぱりユーノ君一筋なの？」

銀時
「え？・・・えぇと・・・ま、まぁ・・・そうかなぁ・・・（汗」

遭えてなのはから視線を逸らす

銀時
（言えねえええええええええええええ！こっちのなのはが俺に惚れてるなんて口が裂けても言えねえええええええええええええええ）

顔を強張らせて心で呟く

甲児
「んじゃ残り少ないランキング行くぞぉ」

第3位
『閃光の死神』フェイト・テスタロッサ

フェイト
「ど、どうかなぁ・・・甲児さん」

これまたドレス姿になったフェイトが顔を染めて甲児を見る

銀時
「へぇ、こっちだとお前に惚れてるんだなぁ」

甲児
「まぁな。けどそっちだとあんたに惚れてるのか？」

銀時
「まぁな、けど今だと他にも沢山の奴に好かれてるから結構大変だぜ」

フェイト
「え？それって一夫多妻制なんですか？それって酷いですよ銀時さん」

銀時
「おいいいいいいいいいい！何気に傷つくんですけど！止めてくんない！俺結構ガラスのハートなんだけどぉ」

涙目になる銀時

甲児
「さて、んじゃ第2位の発表だなぁ」

第2位
『神の魔神に愛されし少女』スバル・ナカジマ

スバル
「えっと・・・来ました」

これまたドレス姿のスバルがやってきた

スバル（銀）
「へぇ、此処だとオリジナルキャラに好かれてるんだねぇ」

スバル（ダ）
「あ、こんにちは・・・ねぇ、あっちだと私その格好なの？」

スバル（銀）
「違うからね！これはあくまで作者達の思惑のせいだからね！」

銀時
「ってかスバルが二人居るってのがややこしいなぁ（汗」

スバル（銀）
「ねぇねぇ、キャッチフレーズのあれって何？」

作者
「詳しくはＤＹＮＡＭＩＣのスバル編を見てくれ」

甲児
「さり気に宣伝してるよ・・・んじゃ栄光の第１位だな」

第１位
『鋼鉄の快男児！エース・オブ・マジンガー』兜甲児

甲児
「おっしゃあああああああああああああああ！俺１位だあああああああああああああああ！」

諸手でガッツポーズを決める甲児

銀時
「へぇ、そりゃおめでとうさんで」

勇太郎
「おめでとう、甲児くん」

力
「良かったじゃねぇか」

天使
「いやぁおめでとう」

ジャン
「あぁめでたいめでたい」

黒神
「良かったなぁ」

甲児
「な、何か投槍じゃなくね（涙」

涙する甲児
とまぁ、そんな甲児は放って置いて
結果発表です

人気ランキング

第１位　兜甲児
第２位　スバル・ナカジマ
第３位　フェイト・テスタロッサ
第４位　高町なのは
第５位　ジェイル・スカリエッティ（兜剣造）
第６位　八神はやて
第７位　ウェンディ
第８位　ディード
第９位　ギンガ・ナカジマ
第１０位　アリシア・テスタロッサ
第１１位　剣鉄也
第１２位　剣ヴィヴィオ
第１３位　流竜馬
第１４位　宇門大介
第１５位　ディエチ
第１６位　車弁慶
第１７位　ノーヴェ
第１８位　草薙剣児
第１９位　不動明

第２０位　クロノ・ハラオウン

以上です

暴走列車を止めろ　前編（前書き）

いよいよ未来に帰って来た甲児達
これから最終章の始まりだぁ

暴走列車を止めろ　前編

甲児達は奇妙な空間の中を落ちていた
それも急降下のまっさかさまな位の速度である

”どわあああああああああああああああああ”

その場に居た全員が叫ぶ

「お、おい！これどうなるんだよ俺達」
「俺が知るか！ってかこのまま落ちたら確実に死ぬんじゃね？」
「大丈夫でしょ？剣児なら」
「とにかく、早く帰らないとな」
「そうだね」
「しかし、今はそれよりも・・・」

”落ちるうううううううううううううううう”

一同が叫ぶ
そんな一同をあざ笑うかのように甲児達は真っ直ぐに落ちて行った

＊＊＊

次の瞬間、甲児達は開いた空間から見事に落下した

「「「「「ぐえっ！」」」」」

甲児を一番下にして一同が落ちる

「ってて、何処だよ此処？」

剣児が辺りを見回す
其処は甲児達にとって見慣れた場所であった

「此処は・・・地下基地の格納庫か！」

鉄也が言う
その証拠に目の前には甲児達のマジンガーが収められていた

「どうやら無事に元の時代に帰ってこれたみたいだね」

ホッとする大介

「み、皆！あれを見てくれ」

竜馬が指差す
其処には以前遺跡で見た石化した魔神の像が立っていた

「え？あれがどうしたんですか？」
「あれのせいで俺達は転移してしまったんだ」

鉄也が付け足すように言う

「てめぇら・・・何時まで乗っかってる気だあああああああああ！！」

一番下に居た甲児が叫ぶ
それを聞いて皆が一斉にどく
すると、騒ぎを聞きつけてドタドタと誰かがやってきた

「あ、甲児さん！」
「ん？誰だあの金髪の姉ちゃん」
「よ、フェイト！元気そうだな」
「はぁ！ふぇ、フェイトぉ！」

甲児達の前には成長したフェイト達が居た
しかし、剣児は９歳のフェイトしか見た事が無いので驚きっぱなしであった

「うわぁ、フェイトちゃんもなのはちゃんも１０年経って凄い綺麗になってる」
「あぁ、つばきより美人だったりしてな」
「それどういう意味？」

つばきが問いかけながら片手で剣児の頭を持ってます
ミシミシ剣児の頭が悲鳴を上げてるのですがとりあえずスルー

「甲児・・・やっと会えましたね」
「お前・・・もしかしてリインフォースか？」

甲児の顔を嬉しそうに眺めるのは銀髪の女性リインフォースであった

「お宅は１０年経ってのに全く変わってないんだな」
「私やヴォルケンリッターは年は取りません。ですから姿は変わらないのです」
「世の中の女性が聞いたら羨ましがるぜきっと」

隼人がフッと笑う
すると其処へ

「竜馬さあああああああああああああああああああああああん！！」
「グハァッ！」

突如物凄い力が竜馬にぶつかった
余りのパワーの為吐血する竜馬
その正体は誰もが分かっていた

「あぁ、竜馬さんの肌の感触・・・１０年振りだわぁ・・・」

正にこの世の至福と言わんばかりの顔で竜馬にハグしてるのは勿論フェイトの姉のアリシアであった
因みにアリシアも１０年経ってかなり綺麗になってる
胸も大きくなったせいかそれを押し付けられてる竜馬の顔は真っ赤である

「お、お姉ちゃん・・・竜馬さんがやばいよ（汗」

吐血した竜馬を気遣ってフェイトが言葉を投げかける
だがアリシアは離す気配が一向にない

「甲児くん」

そんな甲児の元に声を掛ける女性が居た
その女性は甲児が一番知っている女性であった

「さやかさん！」
「甲児くん、三日振りね」
「三日ぶり？半年じゃないのか？」
「いいえ、甲児くん達が遺跡で姿を消したのは丁度三日前よ！」
「そうなのか・・・」

さやかの言葉に嘘偽りはないと理解したのか甲児は納得する
すると

「どりゃあああああああああああああああああ！」
「甲児さんッスうううううううううううう！」
「会いたかったよおおおおおおおおおおおお！」

と、ノーヴェ、セイン、ウェンディの三人が突如甲児に飛びかかってきた
しかもノーヴェはガンナックルで甲児の顔面を殴る始末で

「どわあああああああああああああああああ！！！」

これまた甲児は悲鳴を上げる

「ちょっとあんた達！甲児さんに何やってんのよ！」

額に青筋を浮かべてティアナが怒鳴る

「何言ってんスか！甲児さんは私の事が好きなんスよ！」
「違うよ！私だよ！」
「ちょっと待ちなさい！私を差し置いて何言ってるの？」
「甲児は私の事の方が好きに決まってます！」
「いいえ、絶対私の事です！」

フェイト、リインフォース、ティアナ、ウェンディ、セインが互いに睨み合いながら火花を散らす
その光景は修羅場の一言であった

「お前ら・・・何であんな奴の事が好きなんだ？私には理解出来ねぇなぁ」

ノーヴェはそんなフェイト達に向かって吐き捨てるように言う

「ふぅん、そんじゃ何でノーヴェはそんなとこに居るッスか？」
「い、いや・・・それはあれだよ！お前らが何か間違いを犯さないように監視する為にだなぁ・・・」
「はいはい、ノーヴェは相変わらずツンデレだねぇ」
「ツンデレ言うなあああああああああああ！！！」

結局ノーヴェも甲児争奪戦に参加する羽目になった
しかし、その元凶である甲児は

「いやぁ、おれってもしかしてモテモテ？参ったねぇ」

とても嬉しそうな顔をしていた

「兜の野郎・・・1人だけ七股なんざしやがって・・・」
「許さねぇだわさ・・・アイツ何時かぬっ殺してやるだわさ！」

その遥か後方でヴァイスとボスの二人が殺気の篭った目で見ていた
しかし、其処で甲児はある事に気づいた

「あれ？そう言えばスバルはどうしたんだ？」

甲児が気づいた事
それは皆が居ると言うのにその中にスバルの姿が無い事であった

「実はスバルだけまだ行方が分からないんだよ」
「はぁ！マジか？」

甲児は驚く
何故自分達が戻って来れてスバルは戻ってきてないのだろうか
それよりも一番に気になったのが

「って言うか、何で遺跡にあったあの石像が此処にあるんだ？」
「あれはユーノ君がきっとアレに何かヒントがあるって言って持ってきたんだよ」
「へぇ、あれに何かあるのか？」

甲児は石像の足にそっと触れる
すると突如石像の頭部ハッチが開く気配がした

「ん？上が何か開いたなぁ」

全員が開いた石像の頭部を見に行く
すると、其処には巨大な繭が一つ頭部の中にあった

「何だ？これ・・・」

疑問に思った甲児と剣児は繭を破って中を見る
すると、最初に目に飛び込んできたのは青い髪であった
青いショートの髪をして、眠るようにその中に居たスバルであった
だが、一つ違う事があった
それは、彼女は今何も身に着けていないのであった
言うなれば・・・『裸』であったのだ

ドグシャァ

「「どわあああああああああああああ！！」」

そんな甲児と剣児をさやかとつばきが蹴り落とす
二人はそのまま頭から地面に落下する

「ってて、何すんだつばき！」
「さやかさん！ひでぇよ！」

二人とも頭にタンコブをつけて怒っていた

「うっさい！これはあんた達が見る物じゃないの！」
「男は黙って外行きなさい！」

シッシと手をヒラヒラさせる
だが、それで引き下がる程素直な二人じゃない

「そういわれると」
「余計に気になる」

甲児と剣児は是が非でも繭の中を見ようと石像をよじ登った

だが、

「バインド！」
「「どわっ！」」

空気を読んだのかなのはの放ったバインドが二人の動きを封じる

「なのはさん！とにかく此処に居る男性人をとりあえず牢屋にでもぶち込んでおいて下さい」
「任せて！」

そう言うとその場に居たダイナミックチームと六課男性人は皆全て連行されていった

「さて、それじゃ早く運び出しましょう」
「うん、でも何でスバルちゃんがこの石像の中に居たんだろう？」

さやかは1人疑問に思うのであった

暴走列車を止めろ　前編（後書き）

続く

暴走列車を止めろ　中篇（前書き）

今回で遂にジェイル博士の正体がばれます
そして本当の黒幕が明らかに

暴走列車を止めろ　中篇

甲児達はさやか達の手により牢屋の中にぶち込まれていた
理由は前編でも述べたので其処を参照にして欲しい
んで、甲児達はと言うと、とりあえず未来の仲間達と再会を喜び合っていた

「よぉボス。相変わらずブサイクな顔してんな」
「るっせぇよ兜！てめぇだけハーレム満喫しやがって（怒」

ヘラヘラ笑う甲児にボスが怒声をぶちまける

「全くだ！この俺ですら彼女居ないってのに何でお前はこの世界の女性達にもてるんだ！」

同様にヴァイスも怒っていた
それに甲児は「なんでだろうね～」と意地悪く答える
それに殴りかかろうとする二人、だがその前に

「相変わらずのようだな。甲児くん」
「ジェイル博士」

そんな甲児に苦笑いを浮かべるジェイル博士が居た
甲児は一瞬だが、その笑みに何処か懐かしさを感じた
もしかして、あの時翼さんが行ってた父親って・・・まさかな
一瞬の思惑を否定する甲児
すると

「やれやれ、お主も隅に置けんのぉ。あんなにも可愛い子ちゃんに

もておって」

羨ましそうに十蔵が呟いた

「へへ、良いだろうおじいちゃん」

自慢げに鼻をならす

「しかし、何で俺達も同じように牢屋にぶちこまれるんだ？」

「そうだね」

「仕方ないんじゃないかい？」

牢屋の壁にもたれかかるように鉄也と竜馬と大介が言った

「皆さんはあの時何処へ行ってたんですか？」

同様に牢屋にぶちこまれたエリオが聞く

「フッ、俺達は過去に行ってたのさ」

「か、過去ですか！！！」

「まぁな、多分１０年位前じゃねぇかなぁ」

弁慶が大体の年代を呟く

「ま、俺達も其処で出会ったんだけどよ」

寝そべっていた剣児が言う

とにもかくにもこうして皆は元の世界の住人と会話を楽しんでいたのであった

「でもよぉ、何でスバルだけあの石像の中に居たんだ？」
其処で甲児が最もな疑問を投げつけた
「確かに、妙だなぁ・・・彼女だけは転移方法が違っていたね」
大介は言う
そう、読者の方々は覚えているだろうか？
甲児達は突如白い球体に閉じ込められて転移したが、スバルは石像に吸い込まれるように転移してしまったのだ
「石像に触れたからっと言うのも疑問になるな」
「それじゃ一体何故？」
一同が疑問の声を上げる
「ちょっと良いかい？」
その疑問を断ち切るかのようにジェイル博士が手を上げる
「その事について何だが、少し彼女とそのお姉さんのギンガ君について調べさせて貰った事があるんだ」
「ギンガにも？一体なんですか？」
「うむ・・・実は・・・」

＊＊＊

目を覚ますと、一面白い天井が移ってきた
そして鼻を刺すようなアルコールの匂いに此処が医務室だとすぐに察する事が出来た

「うぅ・・・此処は？」

ゆっくりと体を起こしてスバルは周りを見回した
どうやら此処は元の時代のようだ
その証拠に付近には４０００年前にはお目に掛かれない機材などが置かれている
そしてその機械から延びるコード類が自分の体に取り付けられているのに気づいた

「うわっ、道理で痛いと思ったら・・・」

思わずコードを引き千切ろうと思ったが止めた
そんな事をしたら医務室の先生に怒られるからだ
ふと、スバルは自分の体を見た
以前勇者ガラダブラに瀕死の重傷を負わされた傷が残っているかどうか確かめる為である
だが、自身の体にはそれらしき傷跡は残っていなかった
ホッとするスバル
だが、左腕を見た途端その思いは打ち消された

「こ・・・これって！！」

其処には以前夢で見たのと同じ柄の刺青が左腕一面に彫られていたのだ
何処か悪魔を思わせる不気味な刺青である
その刺青を抑えてスバルは青ざめる

「それじゃ・・・あれって・・・夢じゃ・・・ない・・・の？」

スバルの脳裏にあの時の夢の光景が鮮明に蘇る
巨大な悪魔のような姿をした魔神
甲児達の乗ったマジンガーZとは全く異なる不気味なマジンガー
そのマジンガーが自分の事を「ハンシン」そして「マジンセンシ」と呼んでいた
だが、一体何故？
スバルは自分の正体を知っていた

「そうだ・・・私は・・・」

＊＊＊

「何だって！スバルとギンガは人間じゃない！」

此処は戻って甲児達の居る牢屋内

其処で甲児達はジェイル博士から告げられる真実に驚く
言い忘れたが、牢屋の隅では暗黒寺が不機嫌そうに眠ってる
恐らく彼も見つかってぶちこまれたのだろう

話しを戻そう
ジェイル博士の口から告げられた真実に一同が騒然とした

「『タイプゼロ』戦闘機人のプロトタイプの事をこう読んでいる」
「って事は、スバルもギンガもウーノちゃん達と同じ戦闘機人だって事だわさか？」

ボスが結論じみた事を言うと、更にジェイル博士はかぶりを振る

「正確に言うと違う・・・実は・・・タイプゼロはこの世界では「ギンガ」1人だけなんだ」
「何！」

その言葉に驚く
話しによると、タイプゼロファーストとして生み出されたギンガはその時偶々その施設を襲撃した母「クイント・ナカジマ」により保護されたと言うのだ
そして、其処にはもう1人赤ん坊が眠っていた
それが「スバル」だったと言うそうだ
しかし、調べてみると、タイプゼロの中に「スバル」の名前は一つも挙がらないのであった
何処を探してもタイプゼロは「ギンガ」1人しか居ないのだ

「そりゃどういう意味だよ！」
「私もまだ全てが分かったと言う訳ではない・・・だが、恐らく彼女は・・・」

結論を言おうとしたジェイル博士の言葉を突如怒ったサイレンがかき消した

「何だ？」

「また機鋼獣が暴れ出したってのか？」

一同が立ち上がる

「へん、上等じゃねぇか！この世界にマジンガーが居るって事を奴らに嫌って言う程思い知らせてやるぜ！」

甲児は自分の拳をぶつけて言う

＊＊＊

どうにか牢屋から出てきた甲児達はブリッジに集まった

「おいおい、さっきの警報は何だ？」

「護送中の列車がジャックされたみたいなんです・・・犯人は恐らく機鋼獣です」

ウーノが言う

目の前の映像にはジャックされた列車とそれを守るように取り囲む

機鋼獣、更には百鬼ロボやベガ獣も居た

「あいつら、遂に本腰入れてきたって奴かよ！」

「どうやらそのようだな」

鉄也が眉を顰める

「ん？あれは！」

ふと、ジェイル博士は列車の車窓を見た

其処には遠くからで見えないが何かが張り付いているのが見えた

「クアットロ、列車の最前列の映像をアップにしてくれ」

「了解でぇす♪」

軽快に返事をしたクアットロが列車の映像を写す

すると、其処には一つ目をして牙を生やしたクラゲのような生き物が数体張り付いていた

それを見たジェイル博士は顔を強張らせる

「ば、馬鹿な！何故あれがあるんだ！」

ダンと机を叩く

「な、何だ？博士はあれを知ってるのか？」

甲児が聞く

『その通りだ！』

その声と同時にブリッジの映像全てが一つの映像に移り変わった
其処には巨大な水槽に浮ぶ巨大な脳が浮んでいた
それを見た六課メンバーは青ざめる

「その声は！あの時の！」

甲児はその声に聞き覚えがあった
それは機鋼騎士と戦った時にその機鋼騎士達に罰を与えた張本人の声であった

『久しぶりだなぁ。十蔵・・・そして、剣造！！』

「なっ！！」

甲児はその言葉を聞いて目を見開いた
剣造？馬鹿な、此処の何処に父さんが居るんだ？
辺りを探す
それは鉄也も同様であった
そんな中、ジェイル博士が険しい顔をする

「まさか貴方とこんな所で出会うとは思いもしませんでしたよ・・・お爺さん」
「元気そうじゃなぁ・・・このクソ親父」

ジェイル博士が敬語を含めながらも睨みつけるように画面を見て十蔵が吐き捨てるように言う

『フン、ワシは野望を成就するまでは死にはせん！じゃが貴様等のお陰でワシは肉体を失ってしまったんじゃ！絶対に許さんぞ』

憎しみの篭った声が映像から発せられる

「それはこっちの台詞だ！貴様のお陰で・・・貴様の歪んだ野望の為に一体どれだけの人が犠牲になったと思ってるんだ！」

『ほう、そう言えばそうであったなぁ・・・確かその中に貴様の妻・・・確か名前は「翼」であったかな？それも居た筈だなぁ』

「貴様・・・」

「ちょ、ちょい待ち！あんた一体何者なんや！なしてこないな迂闊な手を使うんや！」

はやてが目の前の映像に指摘する

その通りだ、映像を逆探知すればその映像が何処から発信されているかすぐに足がつく筈だ

それを知ってて何故このような事をするのか

それをはやては問いかけた

その問いに映像の主はせせら笑う

『フフフ、来たければ来るが良い。だが、貴様等に待っているのは死だけだがなぁ』

映像の主は自信の篭った声で言う

すると、映像がスクロールして脳のあった位置より上に行く

すると其処には一体の巨大な魔神が立っていた

黒い鎧に鋭い爪を持った腕、

そして長い尻尾を持ちその顔は悪魔その物であった

大きさは真ゲッターロボとほぼ同じであったが、その威圧感は相当な物であった

「あれは・・・まさか！」

「あのクソ親父・・・まさか完成させたと言うのか？」

『その通り・・・これこそワシの最高傑作・・・最強の魔神「デビルマジンガー」よ』
「デビル・・・マジンガー・・・・」
映像に映し出される凶悪な魔神を一同は吸い込まれるように見ていた
『デビルマジンガーのパワーは貴様等が一番良く知っているだろう？なぁ、十蔵・・・そして、剣造』
「ぐっ・・・貴様・・・」
『今回は顔見せのつもりだ、だが・・・いずれ貴様等を血と肉の塊にしてやる・・・楽しみに待っているが良い』
その後下卑た笑い声が響き渡り、ブツンと映像が途切れた
その後、ジェイル博士が机に両手を叩きつける
「ジェイル博士・・・まさか・・・あんた・・・」
「・・・・そうだ、私の本当の名前は・・・「兜剣造」だ」
「・・・・・」
ジェイル博士の告白にその場に居た皆は驚く
「それじゃ、あの時移っていたあの映像の人は誰なんですか？」
「何だか、十蔵さんと知り合いみたいでしたけど」
なのはとフェイトが問う
「あれはなぁ・・・ワシの親父でロボット工学の神と言われた男・・・その名を『兜原蔵』と言う。ワシのクソ親父じゃよ」
「お爺ちゃんのお父さん」
「原蔵の腕前はそれこそ神業であった・・・じゃが、奴の胸に持っ

ていた野心はとても大きかった・・・それを防ぐ為にワシ等は原蔵を打ち倒した・・・じゃが、その奴がこの世界で生きておったとは」

十蔵が何時もより重い顔で言う

「それじゃ、あの機鋼獣を作ったのも・・・」

「ああ、奴じゃ！あいつなら魔法対策を考えるなんぞ朝飯前じゃろう・・・」

「十蔵博士・・・教えて欲しい・・・奴が写したあの『デビルマジンガー』とは一体なんだ？」

シグナムが問う

「それには私が答えよう」

「お父さん」

間を割って入るようにジェイル博士・・・もとい、剣造が出てくる

「デビルマジンガー・・・あれは正しく悪魔だ・・・あれは・・・マジンガーZより前に作られた悪魔のマジンガーなんだ」

「な、何だって！」

驚愕であった

まさかマジンガーZより前に作られたマジンガーがあったとはそしてこの後語られる事は正に驚愕の事実であった

「デビルマジンガーは危険領域まで増幅した光子力エネルギーを搭載しているだけでなく、精神増幅装置も搭載してある。それは人の精神に作用してパワーを上げる装置だ。そしてデビルマジンガーに搭載されているのは、負の精神発生装置・・・つまり、「憎しみ、

悲しみ、怒り、妬み」などの負の感情をエネルギーに変える事が出来る装置だ。だが、その力は余りにも危険過ぎる代物なんだ。使い方を間違えれば星その物を破壊しかねない程の・・・最強にして・・・最悪のマジンガーだ」

「じゃからワシと剣造・・・そしてお前のおっかさんの翼と共同してわし等はこれを作り上げた」

十蔵は目の前の装置を動かしてある映像を映し出す

其処には石化した魔神の像があった

「その名を・・・『ゴッドマジンガー』デビルマジンガーと対抗出来る唯一のマジンガー・・・これには正の精神増幅装置を内臓してある・・・じゃが、これは不安定な装置でなぁ。出力はデビルマジンガーには遠く及ばない代物じゃった」

十蔵が口惜しそうに言う

「どうしてだい？」

「知っての通り、人の感情には少なからず邪念がある。それを打ち倒して戦うのはそれこそ至難の業なんだ。人が邪念を振り払うのは恐らく不可能だからね」

剣造が言う

「それじゃ・・・私達はあのデビルマジンガーには勝てないというんですか？」

「その通りだ」

なのはの問いに即答で答えた

「あれには君達の魔法攻撃はおろか、マジンガーの攻撃は全て効かない・・・奴の装甲は「超合金ニューＺγ」を使用しているからね」
「超合金ニューＺγ？」
「超合金ニューＺのおよそ数十倍の強度を誇る装甲だ・・・そして、デビルマジンガーには恐らく攻撃を無効化する結界を有している筈・・・強すぎるんだ」

剣造は頭を抱える

「へん、やりもしないで敗北を認めるほど俺は腑抜けじゃないぜお父さん」
「甲児！」

沈黙を破ったのは甲児であった

「俺もです所長！貴方が俺に仕込んでくれたのはこの為の筈！なのにこんな所で尻込みしてられませんよ」
「向こうが名指しで喧嘩売って来たんだぜ！それに乗らなきゃこの草薙剣児様の名が廃るってもんだぜ！」
「この星を守る為に僕達は負けませんよ」
「俺達みんなの力を合わせれば倒せない敵はありません！」

ダイナミックチームが声を揃えて言う

「私も同じです！フェイトちゃんやはやてちゃん達と機動六課を設立したのはもう二度と誰も悲しい涙を流さない為なんです」
「それに、悪魔だけじゃ甲児さんのマジンガーには勝てませんよ」
「せやな、何せこっちには「魔神」が居るしな」
「フッ、騎士として此処で背を向ける訳にはいかんしな」
「売られた喧嘩は買うのがあたしだぜ！」

機動六課のメンバーも同様の意見であった

「お前達・・・だが、」

「其処までじゃ剣造」

口を開こうとする剣造を十蔵が止める

「こいつらが一度言った事を引っ込めんのはお主が一番良く知っとろうが」

「・・・・・分かりました」

諦めたかのように剣造は頷いた

「うっしゃぁ！そうと決まったらさっさとあの暴走列車を止めようぜ！」

”おう！”

甲児の言葉に皆が腕を振り上げて賛成する

そして皆一斉にブリッジを後にした

残ったのは剣造と十蔵だけであった

「剣造・・・」

「分かってます・・・あのデビルマジンガーに対抗する為にはゴッドマジンガーしか居ない・・・だが、あれを動かせるのはこの世に居ない・・・あれを動かした翼ですら・・・」

剣造は顔を手で覆った

その時、背後のモニターに突如映像が映し出された

「こ、これは！！」

それは、甲児が持ってきた「ゴッドスクランダー」そしてユーノが持って来た「ゴッドマジンガー」のデータがクロスして映し出された一枚の設計図であった
其処には一体の魔神が映っていた
形はゴッドマジンガーに似ていたが、性能やその他装甲、武装、エネルギー等が一新されていた
そして、其処には製作者の名前と魔神の名前が刻まれていた

製作者「兜　翼」
機体名「マジンカイザー」

それを見た剣造の目には滝のように涙が流れていた
そして机に体を落とす

「つ・・・翼・・・君は私達にこれを残す為に・・・その為に・・・うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

誰も居ないブリッジに兜剣造の声が響き渡っていた

＊＊＊

「皆さん！出撃ですか？」
「あり？スバル！」

格納庫に向かっていた甲児達の前にスバルが来ていた
既に病院服から制服に着替えていた

「スバル、あんた体の方は大丈夫なの？」
「勿論！元気百倍だよぉ！」

腕をブンブン回してティアナに言う
それからしてそれなりに元気なのだろうと察する事が出来た

「フッ、なら宛にさせて貰おうぞ」
「任せてください鉄也さん！」

フッと笑う鉄也に笑い返す
そして皆一斉にスカイホエールに乗り込む
だが、この時誰も気づく事は無かった
スバルの左腕に刻まれた刺青が黒く輝いていた事に

暴走列車を止めろ　中篇（後書き）

続く

設定8（前書き）

今回は黒幕と二体の魔陣について触り程度ですが紹介します

設定8

兜　原蔵

十蔵の父でロボット工学の神と言われた天才的な科学者
しかし、その内に秘めた野望は危険な物であり、学会から追放される
その後1人研究室に篭り悪魔のマジンガー「デビルママジンガー」
を完成させる
しかしそれを察知した十蔵、剣造、翼の三人が作った「ゴッドマジンガー」と共に行方不明となる
外見は両目を持った十蔵のような顔立ち
性格は非常に残忍で凶悪、己の野望の為なら家族ですら利用しようとする
戦闘機人を作り上げたのもこの男
つまりタイプゼロの生みの親とも言える
どうして脳だけになったかは未だに不明

デビルマジンガー

兜　原蔵が製作した悪魔のマジンガー
装甲は超合金ニューZの数十倍の強度を誇る「超合金ニューZγ」
を使用
エネルギーは「暴走寸前の光子力エネルギー」に加え「精神増幅装置」を内臓している
その為無限とも言える出力を持つ
これがどれ程の強さを持っているかは今は不明ではあるが強敵である事は確かである

ゴッドマジンガー

兜十蔵、兜剣造、兜翼の三名が作り上げた対デビルマジンガー用のマジンガー
装甲、エネルギーはデビルマジンガーとほぼ同じであるが「精神増幅装置」は不完全であり出力には難がある
その上操縦者を選ぶらしく現在動かせる者は居ない
何故ゴッドマジンガーが４０００年前のミッドチルダに居たかは今はまだ謎である

暴走列車を止めろ　中篇2（前書き）

今回は甲児メインです

暴走列車を止めろ　中篇2

甲児は今パイルダーの中に居た
既にパイルダーはマジンガーとドッキングをしており、いつでも戦闘可能の体制をとっている
だが、甲児の胸中は複雑であった
原因は先ほどの映像である
機鋼帝国の主でありこの戦いの黒幕である男・・・『兜原蔵』

甲児の曽祖父であり、ロボット工学の神と言われた男
だが、その男が機鋼帝国を・・・そして機鋼獣を作り上げた
言うなればあの男1人の為にこの世界は混乱の渦に巻き込まれたのだ
嫌、あの男1人のせいではない、もしかすれば、兜一族のせいでこの戦いは起こってしまったと言っても過言では無いだろう
甲児は一人そんな思いに打ちのめされそうになっていた

「俺が決着を付けないとな」

甲児は一人そう呟いていた
そう思っていると、突如目の前のハッチが開く
どうやら現場に到着したようだ
流石スカイホエールだ
現存するどの次元航行船よりも航行速度は速い
現場へ到着したのは地下施設を飛び出してから約5分と経っていないだが、甲児は微動だにしなかった
今甲児は心此処にあらずであった
原因は先ほどの考えであった

『もしかしたら今回の戦いの発端は兜家にあるのかも知れない』

そんな思いが甲児の胸を締め付けていた

「おい、甲児！」
「！！！！！」

ふと、後ろから聞こえる声を聞いて我に帰る
聞こえて来たのは剣児の声であった

「早くしろ！後ろがつっかえてるんだからよぉ」
「わ、悪い…」

甲児はそう一言言ってハッチから飛び降りた
今ゴッドスクランダーは装着してない
未来に帰ってきてからはやてにリミッターとして封印して貰ったのだ
あれは確かに強いが危険過ぎる力だ
出来れば使わずに済ましたい所である
そう思いながらもマジンガーは地面に着地した
轟音と振動が辺りに響く
それに続いてダイザー、ジーグが降り立つ

「地上は任せるぞ」
「空の敵は任せてくれ」

上空にはグレートと真ゲッターが居た
この2体はリミッターなしでも飛べる為空中専門となった
グレートはスクランブルダッシュと言う伸縮自在の翼を有しており、
真ゲッター1は元々空中専用のロボットだ
彼等は空中でこそ真価を発揮する魔神なのだ

『甲児さん！聞こえる？』

通信機からはやての声が聞こえた
それと少し遅れてモニターに顔が映る
どうやらはやてはスカイホエール内に居るようだ

「ああ、聞こえるぜ」

それに甲児は返す
それを頷いて確認するとはやてが話を続ける

『今回の甲児さん達の任務は占領された列車の周囲に居る機鋼獣の掃討をお願いしたいんや。その間にフォワード部隊が侵入して暴走を停止させて中の積荷を回収するんで』

「ああ、任しておけ」

甲児は親指を立てて答える
今は悩んでいる暇は無い
目の前に居る機鋼獣を片付けるのが今の仕事だ

「ヘン、機鋼獣共にこの草薙剣児様と鋼鉄ジーグの強さを思い知らせてやるぜ！」

「調子に乗ってると怪我するわよ剣児！」

隣では鋼鉄ジーグに乗った剣児が意気揚々と腕を鳴らしておりそれを上空を旋回するビックシューターのパイロットであるつばきが嗜(たしな)める
甲児は少し剣児が羨ましく思えた
自分も剣児位の年の頃はあんな風に何も考えずガムシャラに突っ込んで行った物であった

それが今はどうだろう
何時の間にか１９になり、体つきも大人びていた
が、それとは対照的にかつてあった何かを失くしたような気分であった
何かが無くなった
そう、かつてはあったが今は無い何か・・・

「俺ももうガキじゃないって事か・・・」

ふと自分で呟いた言葉にフッと笑みを浮かべる
何爺臭い事を言ってるのだろうか？
何時もの俺らしくない
そう思えた

「どうしたの？甲児くん」

そんな甲児を心配したのか隣でミネルバＸに乗ったさやかがそっと囁く
その視線は甲児を心配しているようであった
思えばさやかとは長い付き合いでもあった
初めてマジンガーに乗った時、甲児はロクに動かす事が出来ず何度も転んでいた
そんな甲児を鼻で笑いながらも操縦方法を教えてくれたのがさやかだったのだ
甲児にとってさやかは操縦の先輩でもあり掛け替えのないパートナーでもある
だが、異性として見るのはまだ早い物であった
未だにさやかとは喧嘩友達より先に行けてないでいた
勿論そのままの関係で終るつもりかと言えば微妙な所だ
互いに心を開けばお互いに受け入れてしまいかもしれない

しかし、今の俺にその資格があるのだろうか
ある科学者が言った

『兜家は呪われている』

正にその通りかも知れない
甲児に関わった者達の中には命を落とした者も居る
その度に甲児は悔やんだ
何故神にも悪魔にもなれる力を持っていながら人一人の命を救えないのか
何故死の運命を変えてやれないのか
そう何度も自分に問い詰めていた時さえあった
果たして、今の俺にさやかを幸せに出来るのだろうか
嫌、もしかしたらさやかを不幸にしてしまうのかも知れない
そんなジレンマが甲児の脳裏を駆け巡っていた

「なに湿気た面してんだよ兜ぉ」
「ボス！」

そんな甲児に声を掛けて来たのはボスであった
かつては甲児にライバル心を燃やす不良であった
甲児とは何度も衝突した事もあり、その中には本気の殴り合いもあった
だが、それを越えて今は信頼出来る仲間となったのだ
そんなボスがニンマリした顔で甲児に迫った

「何時ものお前らしくねぇじゃねぇか！もしかしてあれか？フェイトちゃん達に惚れられて誰を取るか悩んでるのか？このモテ男が！（怒）」

ボスの額に青筋が浮ぶ
どうやら嫉妬心から生まれる一言であったようだ
そんなボスの顔を見るとふと笑いがこみ上げてくる
甲児は必死に笑いを堪えようとしたが…駄目であった
気がつけば甲児は腹の底から笑っていた
口を大きく開けてパイルダー内に響き渡る位に
だが、それを見ていたボスは不満げな顔をしていた

「何を笑ってんだよぉ兜ぉ！」

ボスが不満げに言う
そりゃそうだ
いきなり目の前で笑われたら大概の者は不満な顔をする筈だ
それを察したのか甲児が咄嗟に笑いを止める

「悪かったよ、お前を見てると悩んでる俺が馬鹿馬鹿しく思えてな」

涙目になった甲児がそう答える
確かにその通りだ
ボスを見てると悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてきた

「何だ？お前悩みとかあるのか？そんな風には見えねぇけどなぁ」

後ろから剣児が言う
はっきり言って失礼な物言いだ
それに甲児は一言「うるせぇ」と返した

「無駄話は其処までにしよう。そろそろ見えてくるよ」

そんな一同を大介の一言が引きとめた

見ると、目の前には暴走した列車とそれを守るように多数の機鋼獣
や円盤獣、更には百鬼ロボまで居る

「上等だぜ！この戦いの原因が俺の一族にあるのなら、俺がこの戦
いを終らせてやる！」

目の前で腕を叩きつけて甲児が言う
そうだ、悩む前に行動する
これが甲児だ
グダグダ悩んでても答えが出てくる筈が無い
それならいっその事前に進んだ方が良い
一見無茶に見えるだろうがそれで答えが見えてくる事もあるのだ
甲児達は迫り来る敵ロボット軍団に飛び込んだ
今再びこの世界で戦う事を甲児はこの場で肌で感じ取った
そして操縦桿を硬く握る
ふと、甲児の口から声が上がった

「てめぇらに教えてやる！俺達『魔神』の力をなぁ！！」

暴走列車を止めろ　中篇2（後書き）

次回戦闘になるかな？

暴走列車を止めろ　中篇3（前書き）

今回初のオリジナル敵ロボット登場
そしてあの男が出る・・・って、誰？

暴走列車を止めろ　中篇3

上空には数十機と言う程の機械の怪物が空を飛んでいた
そして、その目指す先には2体の魔神と、三人の魔道士が居た
真ゲッターロボ、グレートマジンガー、ビューナス、なのは、フェイト、アリシアのメンバーである
なのは達魔道士は各々のデバイスを構えており真ゲッターはトマホークを両手に持ち、グレートもマジンガーブレードを二本手に持っている

「俺達は雑魚の掃除と行くか」

鉄也が呟くように言う
それに一同が頷く
確かにマジンガーとゲッター、それに最強の魔道士達からすれば目の前の数は少ない位である
しかしだからと言って油断する程こいつらは甘くない
むしろ何かあるだろうと気を引き締めなければならない

「よし、行くぞ！」

次に叫んだのは竜馬であった
それを皮切りに一斉に敵に向かっていく
最初に敵を撃破したのはゲッターであった
持っていたトマホークをブーメランよろしく投げ飛ばしたのだ
巨大なトマホークが円を描きながら空中を高速で飛行するのだ
回避するのは至難の業である
そのまま放物線を描いてトマホークはゲッターの手元に戻る
その隙を突き一斉にゲッターに襲い掛かる

しかし其処で隙を見せる程彼等も甘くない
次には桜色と黄色の魔力弾が一斉に降り注ぎ敵を打ち抜いていく
上空に居たなのはとフェイトの同時攻撃である
二人が同時に放った魔力弾に巻き込まれた敵の残骸が大地に降り注ぐ
それに続き今度はグレートが敵陣に切り込んだ
二本のブレードを巧みに操り戦う様は正に鬼神その物である
それはアリシアも同じであった
ゲッターを模して作ったバルディッシュＭＫ－？を軽々と振るい敵
を両断していく
普通の人間ならまず扱うのは難しいデバイスだがそれをアリシアは
軽々と振るうのだ
そしてその後方から援護するようにビューナスの一斉砲撃が浴びせ
られる
従ってこのメンバーで雑魚の掃討はそう時間の掛かる物では無かった
物の数分で上空の敵が殲滅されるのは皆の目からも明らかであった

「大体片付けたみたいだね」

なのはが呟く
それに皆が頷く
もう見渡す限り敵らしい敵は居なかった

「よし、すぐに地上の部隊と合流するぞ」

鉄也がそう言い地上に降りようとした時

「待て！まだ反応がある」

呼び止めたのは隼人であった
見ると隼人の目の前にあるレーダーには七つの機影があった

まだ七機敵が居たのか
しかし一体何故
見える敵は全て倒した筈なのに
不審に思っていると雲を隠れ蓑にしていた七つの機影が姿を現した
それを見た時、一同は凍りつく思いになった

「あれは・・・まさか！」
「そんな！」

鉄也とジュンは信じられないと言った顔をしていた
そう、其処に居たのは本来居ない筈の敵なのだ
それはかつて鉄也が倒した筈の敵にして鉄也の宿敵でもある七つの軍団

「ミケーネ七代将軍！！」

＊＊＊

地上でもその戦い振りは圧巻であった

マジンガーの剛拳が敵を撃ちぬき
ジーグの蹴りが貫き
ダイザーのハーケンが切り裂き
ミネルバとボスも敵を次々と敵を蹴散らしていく

「ジャンジャジャ～ン！このボスボロット様が機鋼獣なんざ蹴散らしてやるぜぃ！見ててねぇんなのはちゃん！フェイトちゃん！」

上空に居るなのは達にエールを送る
それに夢中になってたのか敵が一斉にボスに襲い掛かる
しかしそれを四本の腕が蹴散らしていく
マジンガーとミネルバの放ったロケットパンチである

「ボス！惚気るのは後回しにしやがれ！」
「そうよ！少しは緊張感を持ちなさいよ！！」

甲児とさやかの怒声が響く
だが、それで懲りるボスじゃない
ボスは「悪ぃ悪ぃ」と頭を掻きながらもまた敵の攻撃に向き直る
それに二人は溜息を吐く

「おらおら！次の相手はどいつだぁ！」

剣児の乗ったジーグが次々と敵を殴る、蹴る、投げ飛ばしていく
格闘戦に特化したジーグと様々な格闘技を身に着けた剣児の相性は抜群であった
大きさはマジンガーより一回り小さいジーグだがそれに秘めた戦闘力は計り知れない物である
それにジーグには心強い相方も居た

「剣児！無茶しちゃ駄目よ！」

そう言うのは上空を低空で飛行しながら磁力砲で敵を撃ちぬくビックシューターである

乗っているのは剣児の幼馴染のつばき、剣児が背中を預けられる頼れる仲間である
そしてもう1人が

「ガオォォォォォォォォン」

鋭い咆哮と共に敵を噛み砕く巨大な白い虎
名をバルバ。今は無き友である鏡の残した遺産であり剣児の相棒でもある
バルバとジーグとビックシューターが互いに持ちつ持たれつの距離を保ちながら敵を撃破していく
また、こちらでも敵を倒す魔神は居た

「フリード星の守護神に遠慮は要らないぞ！」

そう、フリード星で作られし守護神にして宇宙の王者「グレンダイザー」である
宇宙合金グレンに身を包み光量子エネルギーを動力源とした強力なスーパーロボットである
そしてダイザーの手には半月状の武器「ダブルハーケン」が握られていた
それを回転させながら向かってくる敵を切り裂いていく
それで遠くに居る敵には腕を変形させて放つスクリュークラッシャーパンチや額から放つスペースサンダーで倒していく
地上でも空中と同じく敵が全滅するのは物の数分と掛からなかった

「ねぇ、何か変だと思わない？」
「何が？」

言葉を放ったのはさやかであった

「だって、敵の数、明らかに少なすぎよ」
「確かに、僕達の強さを知っておきながらこの数は少なすぎだね」

大介も現状を不審に思う
その通りだ
奴らと戦うのはこれが始めてな訳がない
だとすれば敵は自分達の強さを知っているはずなのだ
なのにこれだけの数しか出さないのは何故なのだろうか

「大方敵さんも兵力が無くなったんじゃねぇの？」
「それとも俺達の強さにビビッちまったりしてな」

剣児とボスが上機嫌に言う
だが、それはないだろう
まず兵力が無くなるのならこうしておおっぴらに出す筈が無い
それに敵がビビるとも考え難い
だとしたら何故

「考えてもしょうがないさ。今は列車の周囲を確保しようぜ」
「そうですね。ほら剣児行くわよ」
「へいへい」

甲児が頭の考えを振り払うように言ってつばきが剣児の尻を叩くように促す
それに剣児が面倒臭そうに頷く
列車の周囲は既に確保されており、その上空にはフォワードメンバーを乗せたヘリが向かっていた
流石にこんな低空飛行をあの巨大なスカイホエールで行うのは無理なので現場移動はヴァイスの操るヘリで行う事になったのだ

「頼むぜ、オ稜ちゃん達！」

ヘリを操縦しながらヴァイスが待機していたメンバーに言い聞かせる
其処にはスバル、ティアナ、エリオ、キャロと言ったお馴染みのメンバーに加えてノーヴェ、セッテ、ディード、ルーテシアの姿もあった
因みに残りのメンバーはスカイホエールの甲板に乗りスカイホエールを襲う敵の迎撃に当たっている
今回の任務は侵入なので余り大火力の武器は使用出来ないのだそれに余り大所帯で行くのも作業の困難化を招く原因になるのでこのメンバーで行く事になった

「スバルとノーヴェとディードは私と一緒に操縦席へ行ってコントロールを奪い返す事！エリオ、キャロ、セッテ、ルーテシアは後部に向かってロストロギアの確保！良いわね」
”はい！”
「おう！」

ティアナの立てた作戦に皆が頷く
それを確認すると皆一斉に列車に降り立つ
するとその上空を小さな光が降り立つ

「何かあったらあたしも手を貸してやるからな」

其処に居たのはリインと同じユニゾンであるアギトであった
現状でユニゾン出来る者こそ居ないがアギトでも援護は出来る
リインはヘリに残りメンバーに指示を送る事になった

「それじゃ、作戦開始！」

ティアナが言うと皆一斉に動いた
流石鉄也やなのは達に仕込まれただけあって動きは早い
すぐに床の壁を破壊して中に入っていく

だが、この時まだ皆は気づいていなかった
それがＤｒ．ヘルの考えた『作戦』の手の内だと言う事を

操縦席を占拠していた謎の寄生体の目が怪しく光る
するとその脳裏に声が響く

≪さぁ、今こそ目を覚ませ！合成獣ルラーンよ≫

声の主はＤｒ．ヘルであった
それを聞くと寄生体である「ケドラ」は一斉に管を伸ばしていく
それは瞬く間に侵食していく
その速さは凄まじい物であった

＊＊＊

外から列車を見ていた甲児達は列車の変化に気づいた

「な、何だ？」

見ると列車が徐々に形を変えていたのだ
両サイドからは巨大な腕が生え、先頭車両には巨大な口が現れ、其処には無数の牙が生えていた
その姿は蛇を連想させた

『ギシャアアアアアアアアアアアア！！』

怪物に変身した列車が甲児達に向かって咆哮する
それに思わず構えを取る一同
そんな一同に列車の怪物が口から熱線を放った

「おわっ」

咄嗟に回避する
熱線が地面に直撃したかと思うとその地点は深く抉れていた
見ただけで鳥肌の立つ威力である
まともに食らえば只では済まないのは事実だ

「野朗！」

ジーグは腕を構えて発射の態勢に入った
ナックルボンバーである

「待て、今中にはティアナ達が居るんだ！下手に攻撃したらあいつらが危ないだろう！」
「そ、そうか！」

甲児に悟られて思わず腕を解く
そう、今あの怪物の中には侵入したフォワードメンバーが居るのだ
下手に攻撃したら彼女達が危険だ

図らずも人質を取られたような物だ
迂闊に攻撃出来ないのだから
そんな甲児と剣児に怪物の振るう尻尾の一撃が襲い掛かる

「グハッ」
「グェッ」

声を上げて吹き飛ばされるマジンガーとジーグ
幸い装甲にダメージは無いが威力はそれなりにある
余り調子ずかせるのは不味い
かと言って列車本体を狙うのも危険である
だとしたらどうすれば良いか

「まずは腕を狙うんだ！」

甲児が言う
そう、それなら比較的安全な箇所を狙えば良い
となれば狙えるのは腕だ
両腕を破壊してしまえば後は押さえつけるなりなんなり出来る筈である
そうと決まれば膳は急げである
皆一斉に怪物の両腕を狙う

「「光子力ビーム」」
「ジーグビーム」
「ダイザービーム」
「磁力砲発射！」

全機の一斉砲撃が怪物の両腕を吹き飛ばす
爆煙と共に怪物の両腕が四方八方に吹き飛ばされる

怪物の咆哮が木霊する

「よっしゃぁ！案外大した奴じゃねぇな！」

腕を破壊した事により気を良くした剣児が鼻を鳴らす
だが、其処で異変に気づいた

「待て！奴の腕を見ろ」

大介が指差す
見ると破壊した箇所から徐々に腕が生えてきていたのだ
しかもその速度は速く瞬く間に元通りになってしまった

「ま、マジかよ！」
「野朗！再生能力まであんのかよ！」

剣児は驚愕の顔になり甲児は思わず舌打ちした
正に厄介な相手であった

＊＊＊

上空でマジンガー達の戦い振りを見学する物が居た
Ｄｒ．ヘルである
Ｄｒ．ヘルは自身の作った合成獣の性能に満足そうな顔をしていた

「性能は発揮しているようだな・・・結構結構」

顔は険しいが上機嫌であるのが伺えた
その証拠にＤｒ．ヘルの顔には不気味な笑みが浮んでいた
すると、その後ろに人影が現れた

「お爺ちゃん」
「む？どうした？」

Ｄｒ．ヘルは振り向かずその声に答える
声色からして十代後半の男性である
青年は続けた

「そろそろ俺も出て良いかい？お爺ちゃんの目の仇って奴を見てみたいんだ」
「フッフッフ、彼奴等の戦いを見て血が騒いだのか？良いだろう。お前の実戦経験にも持って来いの場だ！存分に腕を振るって来い」
「分かったよ、お爺ちゃん」

Ｄｒ．ヘルの許しを得た青年は踵を返す
その青年の視線の先には一体の黒き巨人が居た
黒いう腕に赤い放熱板、そして特徴的な顔
其処に立っていたのは紛れも無く

『マジンガーZ』であった

暴走列車を止めろ　中篇3（後書き）

次回はマジンガーZ対マジンガーZ？？？

暴走列車を止めろ　後編（前書き）

マジンガーZ対マジンガーZ

勝者はどっち？

暴走列車を止めろ　後編

突如変異した列車の怪物に地上は苦戦を強いられていた
それこそＤｒ．ヘルが作り上げた機鋼獣を越える怪物
『合成獣』なのだ
合成獣はケドラを媒介としてあらゆる物を取り込みそのまま怪物にしてしまうのだ
今回のように列車に寄生したケドラが列車を怪物にしてしまったのだ
また、この合成獣には更に厄介な点が存在する
それがコレである

「ナックルゥゥゥゥボンバァァァ！！！」

ジーグの放ったナックルボンバーが合成獣ルラーンの片腕を吹き飛ばす
だが、物の数秒でその腕は再生してしまった
その光景に剣児は舌打ちをする
そう、これがその厄介な点であるのだ
合成獣はその中心となっているケドラを倒さない限り何度でも再生するのだ
ケドラさえ生きていれば例えボディを塵に変えられてもすぐに再生してしまう
また、ケドラは無機物のみならず有機物にも寄生が可能なのである
その為今Ｄｒ．ヘルは人間用にと小型ケドラを開発中である
正に強敵の出現であった
しかも、今甲児達はこの合成獣にまともに戦えない状態にあったのだ
何故なら・・・あの合成獣ルラーンの中には潜入したフォワードメンバーが居る
下手に攻撃を当てれば中に危険が生じてしまうのだ

その為今狙える場所と言えばルラーンの腕位であった

「中と連絡を取れないの？」

ミネルバXに乗っていたさやかが尋ねる
だが、帰ってきたのは当然と言える言葉であった

「駄目です！あの怪物の中で妨害電波らしき物が張られているみたいなんです」
「ちっ、用意周到じゃねぇか！」

甲児は敵の周到さに関心の言葉を投げる
これで下手に手出しできなくなってしまったのだった

＊＊＊

その頃、列車の中を走っていたフォワードメンバーは列車の異変に驚いていた
何故なら列車が突如蛇行したり持ち上がったりしているのだから当然中は溜まった物じゃない
因みに操縦席を目指していたティアナ、スバル、ノーヴェ、ディード達はと言うと

”何これえええええええええええええええええええ！！！”

床を掴みながら叫んでいた
無理もない、今床と言ったが、実際は壁なのだ
ルラーンが体を起こした事によりさっきまで走っていた床が突如壁になってしまい床が見えなくなってしまったのだ
今四人とも足をブランブランさせながら必死に捕まっている

「どうなってんだよこれ！何で列車が蛇行運転して持ち上がったりするんだよ！（怒」

額に青筋を浮かべてノーヴェが怒鳴る
しかし、その問いに答えられる者がこの中に居る筈が無いのは事実であり

「そんなの知らないよぉ！」
「私に聞かないで！」
「落ちるーーーー！」

皆それぞれ必死であった
かれこれ３０分位このままである
このままだと床と呼ばれる場所にまっさかさまである
その時ふとノーヴェは思いついた

「そうだ！スバルのウィングロードとあたしのエアライナーなら使えるんじゃね？」
「ナイスノーヴェ！」

名案を出したノーヴェに拍手喝采を送りとりあえずそれを出す事にした

「行くよ！ウィングロード！」
「こっちも！エアライナー！」
お互い叫んで魔法で作られた道を出そうとしたが……出なかった
「「なんでえええええええええええええええええええ！！！」」
大声で叫ぶ二人
何故か魔法が反応しなかったのだ
「もしかして・・・この中じゃ魔法使えないんじゃないの？」
ディードが冷静に言う
それを聞いた3人は青ざめた
「そ・・・それじゃ私達って・・・ずっとこのまま？」
ティアナが結論じみた事を言う
すると一斉に青ざめる
”誰か助けてえええええええええええええええええ！！！”
そして一斉に叫ぶ
だが、それで助けが来る筈が無いのは事実であって

＊＊＊

その頃、エリオ、キャロ、ルーテシア、セッテの四人とアギトは後部デッキに向かっていた
幸い此処はそんなに影響は無かったのか移動は楽であった
列車内にも敵らしいものは見あたらず比較的簡単に最後尾まで到達出来た
しかし、其処に居たのは一つ目をして鋭い牙を生やしたクラゲのような異形であった

「これは・・・ケドラ？」
「知ってるの？ルーテシアさん」

エリオの問いにルーテシアが頷く
彼女が言うには、このケドラはまだ自分が機動六課と出会う前にドクターこと兜剣造が作ったエネルガーZで全て破壊したのだと言う
その為今此処にあるのはおかしいのだ
しかも、本来ケドラにはこのような能力は備わっていない筈なのだ
それなのに何故？
ルーテシアに疑問が浮ぶ

「今は詮索は後回しにした方が得策だと思いますよ」

セッテが自身の得物を構えて言う
それを聞いてエリオも同様に構える
その後ろでキャロとルーテシア、そしてアギトが援護体制に入る
ケドラは特に迎撃してくる様子も追い払おうとする仕草もしていな

かった
どうやら列車の操縦で手が一杯なのだろう
そう読んだエリオはストラーダを構えてその穂先をケドラに向かって放つ
だが、その刹那・・・

『そうはさせん！！』

その声と共に一本の槍がエリオのストラーダを弾いた
形はアフリカの部族が使う木彫りの棒に石を磨耗して作った槍の穂先に儀式用の装飾を施した明らかに簡素な槍であった
しかし、そんな簡素な槍でエリオのストラーダを防いだのだ
そして、その持ち主もまたアフリカの部族を思わせる褐色の肌をした隈髭を蓄えた男性であった
だが、その目は瞳が宿っておらず、明らかに視力が無い事を悟らせていた
しかしそれでも正確にエリオのストラーダを防ぐ所を見るに彼に視力は大して必要ないのだと言う事が伺えた

「貴方は？」

エリオは問うた
当然だ。もし民間人が紛れ込んでいたら救助しなければならない
だが、明らかに民間人とは思えない
まずエリオの一突きを防いだ時点で怪しさが募った
仮にもなのは達上級魔道士の上に鉄也など歴戦の勇士達から直々に手解きを受けているのだ
今の彼等は魔法を使わなくても機鋼獣と互角に戦える程に成長している
その一撃を防いだのだ

当然民間人にそのような事など不可能である
だとすればもう一つの可能性が浮んだ
それは、彼が『敵』であると言う事だ

「我が名はピグマン…我が主の命により此処を死守する！何人たりともこれには近づけさせん」

槍を構えて褐色の肌の男『ピグマン子爵』は断言した
その構えからかなりの使い手だと理解出来た
だが、此処で尻込みは出来ない
早く列車を止めなければきっと大惨事になってしまう
それだけは防ぎたいのだ

「エリオ！私も援護するよ」
「有難う御座います…でも、どうやらもう1人居るみたいですよ」

エリオはピグマンのすぐ隣の奥に目をやる
すると其処から男性の笑い声が聞こえてきた

「流石だな…この我輩の気配に気づくとは」

笑い声を上げながら一人の男が現れた
赤紫の立派な軍服を着こなして手足には黒の革のブーツにグローブを嵌めており胸には数々の武勲を称える勲章が付けられており腰には立派なサーベルが挿してあった
歴戦の軍人を思わせる風貌であった
只一つ違ったのは・・・その男の頭は男の腕に持たれていたのだ

”！！！！！！！！”

をれを見たエリオは勿論の事、キャロやルーテシアにアギト、果てはセッテまでもが青ざめた
当然だ。正に「生首」と呼べる状態の人物が立っていたのだから

「フハハハ、これは美しいお嬢様方を怖がらせてしまったかな?申し訳ない。我輩の名前は「ブロッケン伯爵」此処に居るピグマンと同じく貴様等を足止めする為主の命を受けた者だ」

あくまで紳士的に自己紹介をする
だが、その風貌ではその紳士的な態度も霞んでしまうものだ
エリオとセッテは青ざめた顔になりながらも得物を構える手に力が篭っていた
だが、その構えを見てピグマンは鼻で笑う

「力むのは結構だが、それでは達人同士の戦いで足元を救われるぞ少年」
「え?…は、はい!!!」

思わず返事を返してしまった
其処に隙が生まれてしまったのだろう
一瞬の内に距離を詰められてしまい槍の腹で溝を叩かれる
激しい痛みと圧力がエリオに襲い掛かってきた

「グゥッ!!!」

痛みの余り声を上げる
そのままの勢いで壁に叩きつけられる
たった一撃でこれほどの威力があるのは正直驚きであった
口の中一杯に鉄の味がした
恐らく出血したのだろう

口の中を切ったのか、あるいは吐血したのかは定かでは無いが油断出来ない相手である事だけは確かであった

「エリオ！！」

セッテが吹き飛ばされたエリオを見る
其処へブロッケンが跳びかかる

「余所見はいかんよお嬢さん」
「は！」

声に気づいて振り返った時にはもう遅かった
軍服を纏った体から放たれる蹴りは戦闘機人であるセッテを軽々と吹き飛ばした
叩きつけられた壁が抉れていく
それ程までの威力なのだ

「クッ・・・」

しかしセッテは苦悶の色を浮かべるもすぐに臨戦態勢をとる
それはエリオも同じであった
口から出ていた血を手の甲で拭い去りストラーダを構えなおして再びピグマンに向かっていく
その後ろではキャロ、ルーテシアが補助を行いアギトが魔力弾で援護する

＊＊＊

上空では鉄也達の前に七体の将軍が立っていた

怪鳥将軍バーダラー
昆虫将軍スカラベス
怪魚将軍アンゴラス
猛獣将軍ライガーン
超人将軍ユリシーザ
悪霊将軍ハーディアス
妖爬虫将軍ドレイドウ

この七体が居たのだ

「久しぶりだな。白き魔道士よ」

その中に居たドレイドウがある一点を見た
その視線の先に居たのは白き魔道士「なのは」であった
その言葉に疑問を感じた鉄也と竜馬の二名はなのはを見る
そのなのははドレイドウを見て青ざめていた
まるでかつてのトラウマが蘇ったかのように
必死にレイジングハートを構えているがその手元は震えている

「なのは、大丈夫？」

そんななのはにフェイトがそっと言い寄る

それを聞いて少し安心感が取れたのか少しだが元の顔色に戻る
それを見た鉄也達は再び七代将軍達に向き直る
一体何故こいつらは蘇ったのだろうか
確かにこいつらはかつて鉄也の居た世界で倒した筈なのだ
それが今此処に七体勢ぞろいしているのだ
しかもあの時の戦いと寸分違わない姿であったのだ
ミケーネ帝国
鉄也がかつてグレートに乗り死闘を繰り広げた相手
その帝王である「闇の帝王」と決着は果たせなかった物のミケーネの総本部は甲児のマジンガーZと共に壊滅させた筈だ
当然七代将軍も全て破壊した筈なのだ
それが一体何故
考える鉄也の胸中に一抹の不安が過ぎった
まさか・・・闇の帝王がこの世界に居る？
だとすれば間違いなくミケーネは強敵になる
今でこそ機鋼獣やベガ星連合軍に百鬼帝国、更には邪魔大王国もあると言うのに其処に更にミケーネ帝国があるとなるとかなり厳しいだが、泣き言は言ってられない
どんなに敵が多くてもそれを叩き潰せば良いのだから

「今更お前達が何故蘇ったかなど聞く気は無い！蘇ったのなら再び貴様等を地獄の底に叩き落してやる」

鉄也のグレートマジンガーが七代将軍を指差す
その言葉を浴びた将軍達は鼻で笑った

「ほざけ！次に地獄に落ちるのは貴様等人間共よ！だがその前に、剣鉄也！貴様だけは我等の手で殺してやる」

将軍達の目には鉄也に対する憎しみで一杯であった

無理も無い
あの時鉄也さえ居なければ彼等の野望は成就していたのだから
それほどまでに彼等に取って鉄也は憎むべき存在なのだ
その憎しみの視線を一身に浴びていた鉄也はフッと微笑んだ

「上等だ！俺もお前らの顔なんざ見たく無いんでな・・・此処でけりをつけてやる」

そう言っていた鉄也の乗るグレートには既に二本のマジンガーブレードが握られていた
戦闘準備は出来た、最早言葉は不要、後は倒すか倒されるかのみ
その隣にゲッターとなのは、フェイト、アリシアも集まる

「1人で良いカッコさせはしないよ鉄也くん」

竜馬が微笑みながら言う

「私達も一緒に戦います」

なのはがまだ少し青ざめた顔をしていたがそれでもこんな言葉を投げかけた
度胸は据わっているようだ
それにフェイト、アリシアも同じく頷いて答える
それを聞いた鉄也はフッと笑う

「足を引っ張るのだけは勘弁してくれよ」

多少皮肉がかった言葉を投げかける
それを最後に一同は将軍達に向かった
将軍達も一斉に向かって来た

「うおおお

オットーとディエチはそれぞれ砲撃戦に特化していたので遠距離から狙い打つ
これで弁慶さんの心も射抜けたら良いのに
とディエチが呟いたのは聞かなかった事にして欲しい
暗黒寺は兜博士が作った特注品の弾丸を使用して機鋼獣と渡り合っていく

「ちっ、割りに会わねぇ仕事だぜ！」

自慢の帽子を風で吹き飛ばされないように片手で押さえながら愚痴る
その後ろにギンガが下がってきた

「無駄口叩いてないで仕事して下さい暗黒寺さん！」
「へいへい、相変わらず俺の下僕は五月蝿いねぇ」
「誰が下僕ですか（怒」

やっぱりこの言葉は嫌いならしく額に青筋を浮かべて怒鳴る
だが、そんなギンガはふと地上が不安になった
普段なら常に妹のスバルから思念通話がする筈なのに全然来ないのだ
それどころかこちらから念話を行っても届かないでいた
それに只ならぬ不安を感じたギンガは行動に出る

「ウェンディ！こっちに来て！」
「何スか？ギンガッチ」

ライディングボードに乗り波乗りよろしく上空を跳びまわりながら
戦闘を行っていたウェンディがギンガの方にやってくる

「スバル達と念話が出来ないの。多分何かトラブルに巻き込まれたんだと思うの。すぐに私を地上の列車に連れてって！」

「スバルッチがヤバイッスか?後ろに乗って下さいッス!でも飛ばすから落ちないで下さいッスよ!」
「大丈夫よ」

一言そう言ってボードに飛び乗ると二人は真っ直ぐに地上に向かった

「おい!監視役が俺を放って行って良いのかよ!?」

降りて行ったギンガに暗黒寺が怒鳴るも後の祭りであった
それを見た暗黒寺が舌打ちする

「まぁまぁ、そんなにカリカリしなくても良いんじゃない?これくらいの奴らなら姉さん達が蹴散らしてくれるし」

後ろからディープダイバーで現れたセインが暗黒寺の肩を軽く叩くしかしそんな暗黒寺の顔は何処か暗かった

「そうじゃねぇんだよ。何か嫌な予感がしてならねぇんだ・・・俺の勘は昔から良く当たるからよぉ」
「おっかない話しだねぇ・・・(汗」

それを聞いたセインが少し青ざめる

(無理すんなよギンガ・・・お前は俺の大事な『パシリ』なんだからよぉ)

＊＊＊

地上では甲児達が合成獣ルラーンを相手にしていた
ルラーンの装甲は列車が元になっている成果それ程硬くなく魔神であれば簡単に砕ける程の強度しかない
だが、その異常なまでの再生能力がある上に中に仲間が居るので思うように攻勢に出られないのだ
その間もルラーンは口から熱線を吐いたり尻尾を振り回したりと中に居る仲間の事などお構いなしに暴れ狂う
このままではこちらの被害が甚大な物になってしまう
意を決した甲児のマジンガーが腕を構える

「しゃぁねぇ、こうなったらあいつ等が操縦車両に居ない事を祈るしかねぇぜ！」

通信も念話も使えず体内にレーダーも通さない状態で最早勘便りで腕を飛ばす
唸りを上げてその腕はルラーンに向かっていく
そのままルラーンの頭を吹き……飛ばさなかった

何故なら、突如上空から飛んできたもう一つの腕がマジンガーの腕を跳ね除けたのだ

「なにぃ！」

突如現れた謎の腕に驚く甲児そのまま上空を見上げる
すると其処には上空から落ちてきた一体の巨人が居た
その巨人を見た時、全員が己の目を疑った

何故なら其処に居たのは黒い腕に赤い放熱板、そして特徴的な顔
間違いない、今目の前に居るのは鉄の城にして無敵の魔神
『マジンガーZ』であったのだ

「はりゃりゃぁ！どうなってんだ？何でマジンガーが二体いるんだ？」

その光景にボスが当然の如く声を上げる
それに呼応してボロットの目も大きく見開かれる

「へん、どうせＤｒ．ヘルが作った偽者だろう？そんなのこの俺が叩き潰してやるぜ！」

甲児が戻ってきた腕を振り上げて宣言する

「上等じゃねぇか！やれるもんならやってみやがれ！」

すると突如現れたマジンガーZが甲児を指差して叫んだ
その声は何と兜甲児とそっくりどころか『兜甲児』その物であったのだ

「ちっ、俺までコピーかよ！とことん趣味が悪いなＤｒ．ヘルの奴」

こんな物を作るのはＤｒ．ヘルしか居ないと判断した甲児がわざと聞こえる位の声で言った
するとその言葉にもう1人の甲児が反応する

「馬鹿野朗！お爺ちゃんの悪口を言うんじゃねぇ！！！」
「な、なにぃ！！！」

以外な言葉が帰ってきた
何と目の前に居る甲児はＤｒ．ヘルの事をお爺ちゃんと呼んだのだ
信じられないと言った思いであった
そんな一同の上空に突如四角いモニターが現れる
そのモニターに現れたのは・・・Ｄｒ．ヘルであった

「フフフ、お気に召したかな？兜甲児」
「Ｄｒ．ヘル！こりゃ一体どういう事だ！俺を作るなんざ趣味の悪い事しやがって！！！」

甲児からしてみれば不気味であった
何故なら姿形から声までそっくりな自分がいるのだから
それを聞いていたＤｒ．ヘルは笑みを浮かべる

「決まっているだろう。お前のその力を使わせて貰ったのだよ」
「何？どういう事だ！」

甲児が叫ぶ中、Ｄｒ．ヘルが暫し目を閉じてゆっくりと開く
そして、Ｄｒ．ヘルの口から何故作ったか語られた

「ワシはお前が欲しかった。
底知れぬ力、卓越した勇気、底知れぬ行動力……貴様は自覚して居ないが貴様は我等が持っていない物を全て持っていたのだ」
「ケッ、薄気味悪い事言いやがって！お陰で鳥肌が立っちまったじゃねぇか！」
「そうだな・・・貴様はワシの物になるのはまずない・・・だからワシは作ったのだ！ワシの・・・ワシだけの『兜甲児』をそれが此処に居るもう１人の兜甲児・・・その名も『ｋ－１』だ！」

Ｄｒ．ヘルが諸手を上げて叫ぶ

「ｋ－１？それってテレビでやってるキックボクシングのあれだわさか？」

「ボス、少し黙って為さい（汗」

当然の如くボケをかますボスにさやかがシレッとツッコミを入れる

「どっちにしたって敵なのに変わりはねぇんだ！だったら叩き潰すだけだ！」

甲児は自身の中でそう結論ずけてもう一体のマジンガーＺに向かって走る

それに呼応するかのようにもう一体のマジンガーも走る

二体の魔神が地響きを立てて大地を走る

ズシンズシンと一歩踏みしめる度に地面には巨大な足跡が出来上がり付近の木々は揺れ動く

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」

双方が叫びながら拳を突き出す

突き出された拳が上空で交差する

激しい閃光と轟音が響き渡る

そのまますかさず二撃目、三撃目と攻撃を加えていく

だが、そのどれもが空中で互いにぶつかりあう為か致命傷にはならない

拳で殴り合っていてはらちが開かないと判断したのか互いに距離を開ける

「ならこれでどうだ！光子力ビィィィィィム！！！」

「舐めるな！光子力ビィィィィム！！！」

二体のマジンガーが黄色い閃光を目から放つ
それもまた激しくぶつかりあい空中で眩いプラズマ光を発光させる

「野朗！ブレストファイヤァァァァ！！！」
「ブレストォォォファイヤァァァ！！！」

今度は胸の放熱板から赤い熱線を放つ
しかしこれもまた同時に放った為か空中でぶつかりあうだけで終った

「ちっ…こうなったら！」

甲児はモニターのスイッチを押した
すると其処にはやての顔が映る

「甲児さん、どないしたん？」
「はやてちゃん、ゴッドスクランダーの使用許可をくれ！」
「ど、どうしたん？そないにやばい相手なん？」

はやてが驚いた顔になる
それもそうだ
ゴッドスクランダーはあの冥王ハーデスを倒した超兵器なのだ
使い方を間違えれば大惨事どころの騒ぎではない
その為余程の事が無い限り使用は控えているのだ
それを使用させて欲しいと甲児自身の口から言われたのだ
それにはやては頷く

「分かった。甲児さんの判断に偽りが無いと信じてるからな、ほな許可をしたで」

「サンキュー！よし、来い！ゴォォォォォォッドスクランダアアアアアアア！！！」

甲児は叫ぶ
すると上空から赤と黒の翼「ゴッドスクランダー」が降下してきた

「お爺ちゃん！俺も」
「うむ、良いぞＫ－１よ」

Ｋ－１の言葉にＤｒ．ヘルは頷く

「よし、来い！デビルスクランダアアアアアアア！！！」

Ｋ－１は甲児と同じように叫ぶ
すると上空から色違いの翼が現れた
全体的に黒がメインであった
そして巨大な二本の指は先が尖っており何処か悪魔的な印象が見受けられた
ゴッドスクランダーとデビルスクランダーを装着した二体の魔神が空高く舞い上がる

「「オォォォォォォォォォォプンウィィィィング！！！」」

猛烈な竜巻を巻き上げて空に舞い上がった後、それを弾き飛ばして姿を現す
２体のマジンガーが空に対峙していた

「行くぞ！」
「来い！」

２体の魔神がそれぞれ姿を変えていく
それは瞬く間に魔神の姿から巨大な腕へと姿を変えていく
甲児のマジンガーは黄金に輝き、Ｋ－１のマジンガーは赤い色に輝いていく
そのまま放物線を描いて互いに猛スピードで飛行する

「「ビィィィィィィィックバアアアアアアアアアアアアアンパアアアアアアアアアアアアアンチ！！！！！」」

２体の魔神の拳が空中でぶつかり合う
激しい轟音と衝撃、更には閃光が放たれる
それだけでも凄まじいエネルギーであった
そして爆煙が２体を包み込む

「こ、甲児くん！」

さやかが叫ぶ
そんな中、煙の中から落下する機影があった
それは甲児のマジンガーであった
機体のあちこちが酷く損傷しておりゴッドスクランダーも片翼が破損していた
そしてそのまま地面にまっさかさまに落下してしまったのだ

「どうだ！これがこの俺！『兜甲児』の力だ！」

そんな甲児を見下ろしてデビルスクランダーを装着したマジンガーＺに乗ったＫ－１が声高らかに叫んだ
しかし、その言葉に甲児が答える事は無かった

「甲児！」
「甲児くん！」
「兜ォォ！」

皆が呼ぶ中、兜甲児は重い目蓋を閉じたままであった
そして、それと同じように、マジンガーZの目から輝きが……消え
失せたのだった

暴走列車を止めろ　　終

次回予告

畜生！まさか俺とマジンガーが負けるなんて！
しかも列車の中じゃ更にヤバイ事になってるみたいだし…

って、スバルが二人ぃ？

次回『覚醒！魔神戦士』

次回もこの小説にテイィィィィィクオォォォォォォォフ！！！

暴走列車を止めろ　後編（後書き）

次回更にやばいことに・・・・って、大丈夫か？俺

外伝8　つばきの糸（前書き）

今回酔仙さんのネタが余りにも面白かったので少し真似してみました

外伝8　つばきの糸

「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」からおよそ数百年後
その世界にはかつて世界を救った英雄もその英雄達と共に戦った魔法少女達も既にこの世には居なかった
では何処にいるかと言うと・・・天国であった
そう、甲児達は既に天寿を全うして天界に来ていたのだった
因みに甲児は今天界の大学で講師をしている

「へぇ、お前らも天国に来たのか」

甲児の視線の先にははやてやヴォルケンリッター達が居た

「うむ、どうやら我等も天国行きが決まったようでな」
「良かったじゃねぇか」

シグナムの一言に賞賛を送る

「そう言えば鉄也達はどうしたんだ？」
「鉄也さんならヴィヴィオと一緒に戦神になって日頃修行をしているよ」
「流石は鉄也だな」

当然と言わんばかりにシグナムが言う

「リョウ君は天界でアリシアさんと道場を開いてて、隼人はゲッター線研究に没頭してて弁慶はディエチをマネージャーにして野球チームのコーチをして、大介さんは牧場を開いてて、んで・・・剣児は・・・」

甲児はふと視線を泳がす
其処には井戸を見るつばきが居た

「ん、あれはつばきじゃないのか？」

シグナム達はつばきの見る井戸付近に近づいた

「何を見てるんだ？つばき」

シグナムがつばきに聞く

「あ、シグナムさん・・・実は・・・」

つばきがそっと井戸の底を指す
其処に映っていたのは薄暗い空間
そう、『地獄』であった
そしてその地獄で展開されていた光景は

「おらあああああああああああああああ！！！」

「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

「うらあああああああああああああああ！！！」

「ぐぎゃあああああああああああああああ！！！」

「どっせりゃあああああああああああああい！！！」

「ひいいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

其処で展開されているのは地獄の無数の鬼達を蹴散らす1人の人間の姿があった
彼の名は『草薙剣児』
かつて地球とミッドチルダを救った英雄であり、本来なら天国直行の筈だったのだが、持ち前のスケベ癖が災いしてしまい、よりにもよって神様の奥様にセクハラ紛いの行為を働いた罪で神様の怒りを買い地獄に叩き落されたのだ
しかし本人にとっては地獄の鬼と毎日喧嘩三昧なので大して退屈せずに済んでむしろ楽しいらしい
しかも地獄なので特に空腹する事も無ければ疲れる事も無いので地獄の鬼達に取っては自分達が地獄であった

「なんか・・・剣児一人だけ地獄行きなのが少し可愛そうになっちゃって」

つばきはそう思えた
例えスケベであってもつばきにとっては幼馴染であり大切な存在なのだ
そんな剣児一人だけ地獄に行ったと言うのがつばきには心残りだったのだ

「それでしたら、私のクラールヴィントで引き上げてみますか？」
「え？良いんですか？シャマルさん！」
「ええ、剣児くんにははやてちゃんがお世話になりましたし。そのささやかなお礼です」

と言ってシャマルは地獄の穴にクラールヴィントを垂らす
その頃地獄では

「どうしたどうした！もう終りか鬼共！！！」

剣児は倒れた鬼を足蹴にして叫んでいた
しかも片手には鬼の持っていた金棒を持って軽がると振り回している
その下では鬼達がタワーばりにつまれていた
そんな時、剣児の目の前に細い糸みたいな物が垂れてきた

「ん？なんじゃこりゃ？」
「剣児！それを伝って天国に来なよぉ」
「お！ありゃつばきじゃねぇか！」

剣児は遥か上空で手を振るつばきを見た
それを見た剣児がクラールヴィントを掴んで上に上がっていく
それを見た鬼達は口々に

助かった！やっと鬼が消えた！これでまた元通りだ！万歳！つばき様万歳！これで俺達に光が戻った！

等と剣児が居なくなったのを心底喜んでいた
しかし、そんなクラールヴィントを伝って地獄の住人達も這い上がってきていた

「俺達も天国に連れてってくれ～」

剣児の後を追うように糸を伝っていく
只でさえ細い糸なのだ
このままでは千切れてしまう
しかし剣児は別に気にして居なかった

「ま、別に切れてもそしたらまた地獄で鬼共を相手に喧嘩三昧だし

な」

そう、剣児にしてみれば天国でも地獄でもどちらでも良かったのだ
天国でハーレム三昧もまた良いし、地獄で鬼達相手に喧嘩三昧も悪くなかった
そう思いながら昇っていると不思議と細い糸は切れなかった
不思議であった
こんな細い糸に一体どれ程の力が備わって居るのだろうか
そんなこんなでようやく天国の入り口にまで差し掛かった時

「剣児く～～～ん」
「あん？」

突如、艶かしい声が響いたので剣児は振り返った
すると、其処には地獄の魔王が居た
しかし、姿はシグナムそっくりであり、シグナムの髪と同じ色のビキニを着てこれまた悩殺ポーズで剣児を誘っていた
それを見た剣児は

「うっひょおおおおおおおお！こりゃたまらんぜぃ！地獄万歳！！！！！」

と叫んで糸を手放して自ら地の池に落ちていったのだ
すると糸は音を立てて千切れてしまったのだ
元々剣児の為に作った糸の為剣児が落ちてしまえば意味が無い為千切れてしまうのだ
そしてそのまま剣児が落ちてくるのを鬼達は見ていた

わあああああ！来るなあああああああ！何で戻ってきたんだよ！早く天国行けよ！頼む、来ないでくれ！いやぁぁ！また地獄の始まり

だぁぁぁ！

と、嘆きわめいていた
しかしそんな嘆きも空しく剣児は降り立ち再び鬼達を殴りまくる
その剣児の姿はとても清清しい程であった

だが、天国に1人凄まじいドス黒いオーラを出す存在がいた
そう、つばきである

「剣児の大馬鹿野郎おおおおおおおおおおおお！！！」

と言ってつばきは何処から出したのか縄のロープをブンブン回して
カウボーイのように投げる
投げられた縄はジャストミートで剣児の首に絡みつきそのまま引き
上げていく

「ぐえええええ！や、止めろつばきいいいいいいいいいい！俺はまだ魔王のオッパイ触ってないんだぞおおおおおおおおおお！！！」
「うっさい！馬鹿剣児！さっさと上がって来い」

そのままつばきは剣児を天国まで手繰り寄せていった
そんなつばきを鬼達はお釈迦様のように見ていたと言う

＊＊＊

天国に来た剣児に降りかかったのは・・・正に『地獄』であった

「もう嫌だあああああああ！勉強なんかしたくねえええええええええええ！！」

「何言ってんの！これも全部あんたの為なんだからねぇ」

机に齧りつけられた剣児が泣き言を言うがつばきが許さない

そう、剣児にとって学校のある天国は正に地獄であった

逆に美人な魔王が居て鬼達と毎日喧嘩三昧出来る地獄こそ天国であった

天国と地獄の価値観はひとそれぞれらしい

余談だが、剣児が去ってから地獄は元通り活気を取り戻したと言う

外伝8　つばきの糸（後書き）

その後、剣児は毎日地獄の日々を送った後、つばきと共に転生したそうである

覚醒！魔神戦士　前編（前書き）

遂に現れたもう1人のスバル
そしてその口から語られる衝撃の事実???

覚醒！魔神戦士　前編

信じられない光景が其処にはあった
マジンガーZの必殺技「ビックバンパンチ」が破られてしまったのだ
上空にはそのビックバンパンチを破ったとされるもう一体のマジンガーZが浮んでいた
その翼には悪魔を思わせる色合いをした翼「デビルスクランダー」が付けられていた

「思い知ったか！これが俺『兜甲児』の力だ！」

大地に降り立ってもう1人の兜甲児「K－1」が倒れたマジンガーを指差して叫ぶ
その光景は地上に居たメンバー・・・そして六課全員に衝撃を与えた
信じられない、そう言った考えが一同に浮んでいた
あのマジンガーがまさか偽者に負けるなど・・・そう思っていたのだ

「フハハハ、貴様等はK－1が只の偽者だと思っているのか？」
「何？どういう事だ！」

大介はモニターに浮んだDr．ヘルを睨む

「そいつは正真正銘兜甲児だ！そう、外見から中身まで、全てこのワシが手塩に掛けて育て上げた最高傑作なのだ！流石は翼だ！奴の考案した「プロジェクトFATE」参考にさせて貰ったぞ」
「プロジェクトFATEだぁ？何訳の分かんねぇ事言ってんだてめぇは！」

額に青筋を浮かべて剣児が怒鳴る

だが、そんな一同を見てＤｒ．ヘルが鼻を鳴らす

「良いのかな？ワシだけに気を取られていて」

「何！」

Ｄｒ．ヘルの言葉を聞いて大介達はハッとした
見るとルラーンの尻尾が既に迫って着ていた
咄嗟に大介のダイザーとジーグは防御の体制を取る
が、余りのパワーに全員が吹き飛ばされてしまう

『ギシャアアアアアアアアアアアア！！！』

ルラーンは咆哮する
その咆哮は天を裂く程であった

だが、その上空からルラーンに迫る人影があった

「ドンピシャ！良い位置ッスよ！」

「有難う、ウェンディ」

そう、スカイホエールから降下してきたギンガとウェンディである

「ＩＳ、発動！！」

ギンガは自身のＩＳを起動させる
するとリボルバーナックルが高速回転を始める
そのままボードを飛び降りてルラーンの頭部に降り立つ

「振動破砕！！」

拳を叩きつける
するとルラーンの全身に稲妻が走るような衝撃が走った
機体の内部にダメージを与えるＩＳ、機械で出来た敵には非常に有効な攻撃方法であった
それを受けたルラーンは一時的に機能が麻痺したのかその場に倒れる

＊＊＊

その頃、ルラーンが倒れた事によりスバル達は立つ事が出来た

「今の衝撃・・・きっとギン姉だよ！」
「マジか？すげぇなお前の姉ちゃん」

自慢げに話すスバルに驚くノーヴェ
あんな物を直接食らえば只では済まないなと内心思っていた

「無駄口は後！それより早く操縦席に向かうわよ！」

そんな一同にティアナが言葉を掛ける
外では激しい戦闘が行われているようである
急がないとかなりやばそうだ

「しかしお前の姉ちゃんってすげぇＩＳ持ってるんだなぁ。そんじ

ゃお前はどんなＩＳ持ってんだ？」

ギンガのＩＳに興味を持ったノーヴェがスバルに聞く

「あ、私にはＩＳ無いんだ」

「え？無い！」

スバルの返答に後ろに居たディードが驚く

「そんなに驚く事なの？」

「私ら戦闘機人でＩＳを持ってないなんておかしいぞ！本当に無いのか？」

「うん、何でか知らないけど私にだけＩＳって無いんだ」

ノーヴェの問いにお手上げと言った仕草をするスバル

どうやら嘘では無いようだ

そんな会話をしていると一同は列車の操縦席に辿り着く

其処には操縦席全てに寄生している不気味な生物の姿があった

「うわぁっ、なんじゃこりゃ！気持ち悪ぃ！！」

率直な感想を言うノーヴェ

その顔はまるで不気味な物を見たような顔であった

「とにかく、今はこいつを破壊するのが先よ」

「同感！こんな不気味な物見ていたくないしね」

ティアナとディードがそれぞれ得物を構える

それに頷きスバルとノーヴェも各々のナックルを握り締める

「一斉砲撃！撃てえええええええええええ！！！」

ティアナの号令を皮切りにそれぞれ攻撃を仕掛ける
四人の攻撃を受けたケドラから煙が湧き上がる
そして、煙が晴れた所には半壊になりボロボロになったケドラが操縦席からボトリと落ちていた

「うっしゃぁ！これで操縦は取り戻したな！！！」
「と言っても・・・これじゃ動かせないわね（汗」

ティアナの目の前では寄生されていたせいかズタボロになった操縦桿があった
これではとても動かすのは無理である
それを見た四人がそれぞれ溜息をつく

「しょうがない、一先ずエリオ達と合流しましょ」
「賛成！」

一同が踵を返してエリオ達の所に向かおうとした
だが、その時後ろに居たケドラが最後の力を振り絞って立ち上がり跳びかかる
その先には

「す、スバル！！！避けろ」
「へ？」

咄嗟にノーヴェが叫ぶ
だが、本人は何事なのか理解しておらずそのまま振り返る
其処には大口を開けたケドラがおり、そのままスバルの首筋に鋭い牙をつきたてる

「アグッ！！」

激しい痛みと鮮血が飛び散る
必死にスバルは引き剥がそうとする
だが、その時彼女の頭の中に何かが流れ込んできた

【目を覚ませ…魔神の戦士よ】
「え？」
【今こそ覚醒の時……目覚めよ魔神戦士！！！】

それはケドラから発せられていた言葉であった
それを聞いた刹那、スバルの左腕の刺青が突如赤く輝く

「野朗！いい加減離れやがれ！」

ノーヴェがケドラを殴り飛ばす
ケドラはそのまま操縦桿にたたきつけられて煙を巻き上げた
スバルはその場で膝をつく

「スバル！大丈夫？」
「おい、生きてるか？」

三人がスバルに近づく
スバルの首筋にはケドラが噛み付いたと思われる傷跡が痛々しく残っていた
ティアナはスバルの前に立ち顔を見るがその顔にはまるで生気が篭っていない
瞳は濁り焦点が定まっていない

「スバル！！返事しなさいスバル！！！」

そんなスバルの肩を掴み必死に揺らす
だが、その時スバルの左腕が激しい閃光を放つ
その直後スバルの瞳が元に戻るが

「うわあああああああああああああああああああああああああああ！！！」

突如大声で叫び出す
その顔は苦痛に歪んでいた

「スバル！！！」
「い、痛い・・・腕が・・・腕が痛い・・・うわあああああああああああああああ！！！」

発光する左腕を押さえる
だが、発光は益々強くなる一方であった
やがて発光が部屋を包み込むとシュンと素早い何かがスバルの中から現れた
それから少しして発行が収まる
だが、其処にいたのは全身ボロボロになりリボルバーナックルとマッハキャリバーを失ったスバルであった
そして、その目の前には信じられない光景があった
何と、其処には赤い髪に赤い瞳をして色違いのバリアジャケットを纏いリボルバーナックルとマッハキャリバーを装備したもう1人の「スバル」が居たのだ

「は～、やっと出られた♪」

腕をグルグル回しながらもう一人のスバルは呟く
そして振り返りティアナ達を見る
スバルの白と青のツートンカラーのバリアジャケットとは異なり、
目の前に居るもう1人のスバルは黒と赤のダークな印象のツートンカラーであった
そして何より恐ろしく感じたのはそのスバルの放つ気迫であった
明らかに殺気が篭っている
しかも本人はとても不気味な笑みを浮かべている

「な、何でスバルが二人居るんだ?」

ノーヴェは信じられないと言った顔をしていた

「あれ?其処に居るのはもしかして僕かい?」
「えっと・・・君は?」
「僕は「スバル」だよ。見て分かんない?」

明らかに自分こそがスバルだと言いたげにおおっぴらに言う

「どうなってるの?一体何がどうなってるのよ」

最早ティアナは頭が痛かった
その時、操縦席のガラスを破ってギンガが入ってきた

「スバル!だいじょう・・・ぶ?」

入ってきたギンガは目の前に映った二人のスバルに目を大きく見開く

「あ、また誰か来た」

赤い髪のスバルは振り返りギンガを見る
その目は明らかにウザそうな目つきであった
ギンガはスバル達の方を見た
すると其処には左腕から激しく出血しボロボロのスバルが居た

「す、スバル！！！」

ギンガがスバルに近づこうとする

「僕の横を素通りできると思ってるの？」
「は！」

咄嗟にギンガは防御結界を張った
だが、それをいとも簡単に破ってギンガに鉄拳を浴びせる

「くぁっ！！」

拳が当たる直前腕をクロスしてガードするもその衝撃は凄まじくギンガは壁に叩きつけられる
叩きつけられた壁が後ろにめり込んでいく
それだけでもかなりの力だと思えた

「ギン姉！！」

スバルが叫ぶ
めり込んだ壁の中から額から血を流すギンガの姿が出て来た

「くっ・・・強い」

只の一撃で分かった

明らかにこいつは異常なまでに強い
そう思えたのだ
だが、目の前の赤髪のスバルは非常に退屈そうだ

「つまんないなぁ・・・何かどいつもこいつも弱そうだなぁ・・・」
「な、て、てめえええええええ！！！」

そう言われて一番に反応したのはノーヴェであった
自身のガンナックルを起動させて殴りかかる
だが、それを赤い髪のスバルは人差し指一本で止めてしまった

「な・・・にぃ！」
「ほら、弱いじゃん」

ニィッと笑みを浮べながら言うとノーヴェの腹に蹴りを入れる

「ガハッ」

ノーヴェもまた吹き跳び壁に叩きつけられる

「あのさぁ、君達みたいな出来損ないが僕達「魔神戦士」に勝てると思ってるの？」

赤い髪のスバルが腰に手を当てて呆れた顔で言っていた

「お・・・教えてよ！その魔神戦士って・・・一体何なの？」

掠れた声でスバルが聞く
かなり苦しそうだ

「あぁ、御免御免、そう言えば君の体から出る際に君のデバイスとリンカーコアを頂いてたのをすっかり忘れてたよ・・・そっか、君達は僕達魔神戦士が何なのか知らないんだね。良いよ、教えてあげるよ」

赤い髪のスバルはニンマリと笑いながら言う

「魔神戦士ってのはね・・・自我を持ったマジンガーが作った擬似人格なのさ」

「ま、マジンガーが作った・・・擬似人格？」

「まぁ言っちゃえば人間の姿をしたマジンガーってところかな？」

顎に手をやって赤い髪のスバルが言う

「ゴッドマジンガーとデビルマジンガー・・・今の所魔神戦士が作れるのはこの二体の魔神だけだね」

「そ、それじゃ私はゴッドマジンガーから作られた魔神戦士なの？」

「いいや違うよ」

スバルの結論に赤い髪のスバルはかぶりを振る

そして、その口から言われたのは衝撃的な発言であった

「僕も君も『デビルマジンガー』から作られた魔神戦士なのさ」

覚醒！魔神戦士　中篇（前書き）

今回あの男が登場

覚醒！魔神戦士　中篇

上空では鉄也達がミケーネ七代将軍と激闘を繰り広げていた

「死ね！剣鉄也」
「貴様を今度こそ地獄に叩き落してやる」

怪魚将軍アンゴラスと昆虫将軍スカラベスが猛然とグレートに襲い掛かる

「来い！今度こそ完膚なきまでに叩き潰してやる！！！」

鉄也の乗ったグレートの目が光り輝く
それは鉄也の闘志がグレートに伝わった証であった
その隣では真ゲッターロボが猛獣将軍ライガーンと超人将軍ユリシーザと激闘を繰り広げていた

「ゲッターよ！貴様も我等を苦しめた忌々しいロボットよ」
「貴様もこの世界の魔道士達と同じように地獄に送ってやろう」

ライガーンとユリシーザがニヤリと微笑みながら言う

「そうは行くか！この世界は俺達が守って見せる！お前達には絶対に渡さん」

真ゲッターが巨大なトマホークを手に2体の将軍達に向かっていく
グレートが両手にマジンガーブレードを構えて将軍達に切りかかる

「甘いわ」

スカラベスは自慢の角でその剣を押さえつける
その隙にアンゴラスが口から灼熱の炎を吐き出す

「グハッ」

炎を体全体で浴びた鉄也が悲痛の声を上げる

「グハハハ！死ね剣鉄也！！！」

アンゴラスとスカラベスの顔に笑みが浮ぶ

「ビューナスミサイル」

だが、そんなアンゴラスにビューナスAの放ったミサイルが当たる
衝撃と爆発で思わず仰け反る
だが、大したダメージにはなっていない

「おのれ！」

憎たらしそうにビューナスを見ると長い舌を出しそれをビューナスの首に巻きつける
巻きついた首からジュゥと音が立ち煙が立ち昇る
ビューナスの首が徐々に溶けているのだ

「フハハハ！俺様の唾液には溶解液がしみこんでいるのだ！どんな装甲でもたちどころに溶かしてしまうぞ」

「ジュン！」

鉄也が叫び持っていた剣を投げる

投げられた剣はそのままアンゴラスの舌を切断する
拘束から逃れたビューナスは首に巻きついた舌を振り解く
だが、その首は装甲が溶け落ち、機械部分が露出していた

「ジュン、大丈夫か？」
「ええ、まだ戦えるわ」
「そうか」

それを聞いてホッとする鉄也
そして向き直る
其処には更に憎しみの篭った顔でグレートとビューナスを見つめる
二大将軍が居た

「おのれ、剣鉄也！貴様さえ居なければ今頃地上は我等ミケーネの物となっていた筈なのだ」
「フッ、何かと思えば負け惜しみか？ミケーネの将軍の名が泣くぞ」

二大将軍に対し小馬鹿にしたような発言をする鉄也
それに怒らない将軍達ではない

「貴様！その減らず口を二度と聞けなくしてやる！！！」

スカラベスとアンゴラスがそれぞれグレートに向かっていく
だが、それが狙い目であった
突如、アンゴラスとスカラベスの視界をグレートの黒い手が覆い隠す

「これだけ接近すればかわせまい！食らえ！！サンダァァブレエエエエエエエエク！！！」

グレートの耳に雷が舞い降りそれを伝って腕に行く

それはそのまま二体の将軍に直撃した

「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」」

将軍達は悲鳴を上げながら顔を押さえる
押さえている箇所からプスプスと煙が立ち昇る

「お前達を生かしておく程俺は落ちぶれちゃ居ない！此処でけりをつけるぞ！」

トドメを刺そうと再びブレードを構えたグレートが向かっていく
だが、その目の前に突如黒い影が現れた

「なに！」

鉄也は驚いた
だが、それだけであった
気がつけばグレートは遥か下の大地にたたきつけられていた

「グハッ！」

衝撃の余り吐血する鉄也
恐らく内臓にもダメージが行った筈だ
霞む視界で自分を叩き落した存在を見る
それは、先ほど映し出された悪魔の魔神「デビルマジンガー」であった

ゲッターは空を跳びながらトマホークを振るう

「ウオオオオオオオオ！！！」

竜馬の叫びと共にゲッターがトマホークを振り下ろす
だが、それをライガーンが白羽取りの要領で掴んでしまった

「なにぃ！」

驚愕の表情になる竜馬
そのすぐ脇に現れたユリシーザはゲッターを蹴り飛ばす

「ガハッ」

声を上げて吹き飛ぶゲッターロボ
その眼前ではライガーンとユリシーザがほくそえんでいた

「ククク、この程度か？ゲッターロボ」
「まるで赤子の手を捻るかのように弱いな」
「クッ」

その言われように竜馬は例えようの無い悔しさを覚えた
どうする、どうすれば勝てる
今のままでは真ゲッターでも厳しい
そう思った時、ふと竜馬は真ゲッターの出力メーターを見た
真ゲッターの出力は現在安全性を考慮して５０％をキープしている
竜馬は出力調整レバーに手を掛ける

「隼人、弁慶・・・これは一種の賭けだが、真ゲッターの出力を今から１０％だけ引き上げる」
「何！正気かリョウ？」

「おいおい、大丈夫なのか？」

竜馬の提案に隼人と弁慶は不安になる
５０％の出力であれだけの戦闘がこなせるのだ
たかが１０％と言えどもそれで自分達が無事だと言う保障は何処にもない
正に命掛けの作戦でもあった

「今はこれしかない！行くぞ」

そう言って竜馬はレバーを動かし出力を１０％だけ引き上げた
すると、真ゲッターの体を緑色のオーラが包み込む
ゲッターエネルギーがあふれ出ているのだ
その溢れ出たエネルギーは操縦席に居た竜馬達も感じ取っていた
凄まじいエネルギーが
たった１０％上げただけでこれ程のエネルギーになるとは
これなら行けるかも知れない
そう思い真ゲッターを動かす
だが、それに応えたゲッターの動きは予想を反していた
まるで不規則な跳び方をするのだ
それはまるで一昔前に流行ったＵＦＯと同じ動きであった
しかもそのスピードは以前のゲッターとは比べ物にならない程のスピードであった
当然、中に居る竜馬達も只では済まなかった

「「「ぐあああああああああああああああああああああ！！！」」」

押し寄せる衝撃とＧの嵐に声を上げる三人
視界が徐々に見えなくなっていく

操縦桿を掴んでいる腕が重い
骨が軋んでいく
それでも竜馬達は操縦を続けた

「ゲ・・・ゲッタァァァトマホォォォォク」

掠れた声で竜馬は叫ぶ
ゲッターはそれに応えて肩から一本のトマホークを取り出す
するとトマホークにゲッターエネルギーが映りこみ緑色に輝く巨大なトマホークになった
それを思い切り振るう

「「ゲギャアアアアアアアアアアア！！！」」

振るったトマホークが二体の将軍に命中する
幸い直撃こそしなかった物のかなりの痛手を被った事となった
これ以上の戦闘は無理と判断した将軍達は戦線から離脱した
だが、それは真ゲッターも同じであった

「グハァッ」

竜馬は突如吐血した
吐いた血がコンソールを汚していく
そのまま真ゲッターは糸の切れた人形のように大地に落ちる

なのはは妖爬虫将軍ドレイドウと対峙していた

「久しぶりだな、白き魔道士よ、体の傷はもう癒えたのかなぁ？」
「ウ・・・」

ドレイドウの不気味な笑みを受けてなのははは青ざめる
彼女の脳裏に白き雪世界の中で血まみれになって横たわる自分がフラッシュバックで映し出される
レイジングハートを持つ手が震える
だが、其処でなのははかぶりを振ってそのフラッシュバックを振り払う
そして数発の魔力弾を放つ

「私はもう負けない！もう二度と負ける訳にはいかないの！！！」

自分に言い聞かせるように叫び魔力弾をコントロールする
数発の魔力弾は導かれるようにドレイドウに向かっていく
だが、それをまるで予見していたかのようにドレイドウはヒラリとかわし口から放った火炎で魔力弾を掻き消した

「どうした？八年前のお前の方がまだ幾分か戦い甲斐があったぞ？」
「ぐっ・・・」

悔しそうに歯を食い縛るなのは
それとは逆にドレイドウはニヤけていた

「この野朗おおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
「ムッ、」

其処へヴィータがアイゼンをギガントシュラークに変えて殴りかかった
ドレイドウはそれを片手で受け止めようとするだが、余りのパワーの為に少し後ろに下がってしまった

「大丈夫か？なのは」

「ヴィータちゃん！」

なのはを気遣うようにヴィータが側に降りる

「心配すんな！お前のトラウマはあたしが打ち砕いてやる」

「有難うヴィータちゃん、でも気をつけてね」

「あたしは『鉄槌の騎士』だぞ！あんなトカゲ野朗に負けるかよ」

アイゼンを肩で担いで得意げに言う

「2対1か・・・良いだろう、ハンデには丁度良い事だ」

ヴィータが加わった事にドレイドウはニヤリとする

「調子に乗るなよトカゲ野朗！いつかの借りを此処で返してやる」

アイゼンを構えてヴィータが突っ込んでいく

それを援護するかのようになのはが後方からアクセルシューターを発射する

「小賢しい！この程度の攻撃など！」

ドレイドウは鋭い爪で放たれたアクセルシューターを切り払うだが、この時気づいていなかった

自分の後方に一発の魔力弾が回り込んでいたことに

回り込んだ魔力弾はドレイドウの背後に命中し爆発した

「な、何！」

完全に油断していたドレイドウは舌打ちする

其処へ

「ぶち抜けエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

ヴィータのラケーテンハンマーが炸裂する

「ぐっ、まだ完全では無い故か体が思うように動かんわい」

直撃した箇所を押さえてドレイドウが呟く

「待て！まだケリはついてねぇぞ！」

「フハハハ、そう急くな、いずれ貴様等を地獄に招待してやろう」

そう言ってドレイドウは飛び去ってしまった

「野朗！」

ヴィータはアイゼンを強く握り締めた

フェイトは怪鳥将軍バーダラーと激闘を繰り広げていた

本来フェイトはスピード重視の戦い方をするが、目の前に居るバーダラーはそれ以上に速い

目で捉えるだけでもかなり厳しい状況なのだ

そんな状況で戦うのだから溜まった物ではない

「フン、そんな物か？人間！」

「くぅっ・・・は、速い・・・今のままじゃ追いつけないか・・・」

そう呟くと意を決したかのようにふっと息を吐く

「待て、テスタロッサ」
そんなフェイトの肩をシグナムが叩いた
「シグナム！」
「今手の内を見せるのは不味い・・・それにあのフォームは諸刃の剣だ、下手すれば命の保障は無い・・・それより私も加勢する」
「有難う、シグナム」
「なに、私はお前の副隊長だからな。副隊長が隊長を守るのは当然だろう？」

シグナムがフェイトに半ば意地悪く微笑みかける
それを見てフェイトが返答に困る
毎度の事だがそう言われると何時も返答に困る
別にそれが嫌と言う訳では無いのだが

「フン、何人来ようとこの怪鳥将軍バーダラーを倒せる筈が無いだろう！」
「ほざいたな！その口を二度と聞けないようにしてやろう」

バーダラーに向かってシグナムがレヴァンティンを構える
バーダラーはシグナムとフェイトに向かって鋭い爪を振り上げる
だが、それをシグナムのレヴァンティンとフェイトのバルディッシュが防ぐ
防いだデバイスと爪から激しい火花が舞い散る

「クカカカ！脆弱な人間が何時まで保つかな？」
「それは貴様にそのまま返すとしよう、レヴァンティン！！！」

シグナムの言葉を受けてレヴァンティンのカードリッジがロードさ

れ、刀身が燃え上がっていく

「紫電一閃！！！」

燃え上がる刀身はバーダラーの腕を切り裂いていった
それを受けたバーダラーが苦痛の顔を浮かべる

「ちっ、まさか人間如きにこれ程の力が・・・やはりまだ調整不足と言ったところか」

不可解な事を呟きながらバーダラーは飛び去っていった

「そうだ、！甲児さんは！！！」

フェイトはふと甲児を探した

「テスタロッサ、此処は私が引き受ける。お前は兜を探せ」
「有難う、シグナム」

頷いてフェイトはすぐさま地上に向かった

アリシアは悪霊将軍ハーディアスと対峙していた

「フェイトと被るからその武器止めなさい！」
「ふざけるな！これはワシの武器だ！そのフェイトと言う娘こそ武器を変えればよかろうが！」

ブチッ

ハーディアスのその一言がアリシアの中の何かを切断した

「骸骨の癖にうちのフェイトの悪口言ったわね・・・（怒」
「な、そ、それがどうしたと言うのだ？」

口では威張って見せてるつもりだが明らかに動揺している
それもその筈だ
今のアリシアはあの白い魔王すら凌ぐ程のオーラを纏っていたのだから

「バルディッシュ、最初から全開で行くよ」
『Ｉｔ ｉｓ ｃｏｎｓｅｎｔ．Ｍａｓｔｅｒ』

機械音声が響くとバルディッシュの形が光り輝く巨大な斧になった
それはフェイトより数倍大きい

「覚悟しろ骸骨ううううううううううう！！！」

アリシアがファイナルトマホークフォームになったバルディッシュＭＫ－？を振り回しながら迫り来る

「うおおおおおおおおおおおおおおお！何でこいつはこんなに馬鹿力があるんだあああああああああああ！！！」

ハーディアスはこの時初めてアリシアと対峙した事を後悔した
なぜならアリシアの放った一撃でハーディアスの鎌は両断されてしまったのだから

「さぁ、念仏でも唱える？時間は5秒だけ上げるよ」

黒く沈んだ顔でアリシアは呟く

明らかに怖い
だが、そんなアリシアの視界に大地に落下するゲッターが映った
それを見たアリシアは咄嗟にゲッターの下へ向かった

「りょ、竜馬さあああああああああん！！」

叫び声が響く
当然ハーディアスは無視である

「よ、良く分からんがとにかく今の内に離脱だ！」

これぞ好機とハーディアスはその場を後にする

＊＊＊

後部デッキではエリオとピグマン子爵が激しい死闘を演じていた

「ほぅ、その若さで其処までの腕を持つとは中々の物だ。しかし！」

ピグマンが思い切り槍を振るう
それに辺りエリオが吹き飛ぶ

「ぐぅっ！」

今度は壁に当たる前に地面に足を踏みしめて堪える

「ぐっ、キャロ！お願い」
「はい！」

キャロは頷き手に嵌めていたデバイス「ケリュケイオン」から光が放たれる
その光はエリオを包み込み彼の中に力が漲ってきた
拳を数回握ったり話したりして確認を取る
それを終えるとうんと頷きストラーダを構える

「これは面妖な、どうやら後ろの娘は力を与える能力をお持ちのようだ」

ピグマン子爵は後ろで援護をしていたキャロを興味深そうに見る
しかし、その視線の前にエリオが立ちふさがる

「キャロを怖がらせないで下さい」
「ほぉ、それは済まない事をした・・・ならば二度と怖がらないようにしてさしあげよう」

そう言ってピグマンは槍を構える
遠まわしに殺すと言っているような物だ
そんな事は絶対にさせない
エリオは今度こそ打ち勝つつもりで突撃する

「うおおお

ピグマンはエリオの放ったストラーダの穂先に自身の穂先をぶつける
凄まじい火花が舞い散る
だが、エリオのストラーダに徐々に亀裂が走る
そして、バリンと音が響くと同時にストラーダが粉々になってしまったのだ

「す、ストラーダ！！！」

エリオは驚愕した

「貰った！！！」

その隙を突き、ピグマンの放った槍の一撃がエリオの脇腹に突き刺さる
刺さった箇所から鮮血が飛び散る

「ガハァッ！！！」
「え、エリオ君！！！」

キャロの目に涙が浮ぶ
その視線の先では刺さったエリオごと槍を持ち上げていたピグマンの姿があった

「これは失礼した、一撃で心の蔵を貫こうとしたのだが狙いが狂ってしまったな」

苦悶の顔に歪むエリオに対し謝罪の意を示すピグマン
だが、その顔は何処か微笑んでいた

「エリオ！」

隣に居たセッテが叫ぶ
だが、その直後、彼女の右肩に細身のサーベルが突き刺さる
ブロッケンの放ったサーベルである

「グハハハ、我輩を相手に余所見をするなと言ったばかりでは無いか！」
「クッ、」

刺さった右肩から赤い鮮血が滴り落ちる
顔が苦痛に歪んでいく
それとは対照的にブロッケンは下卑た笑みを浮かべている
正にその時であった

「うるせぇぞ！人が折角気持ちよく寝てるってのに何ギャーギャー騒いでんだ？てめぇら」

キャロとルーテシアの後ろから男の声が響いて来た
すると、その男が姿を現した
２ｍはあろう巨体
ボロボロの胴着の上に黒の羽織りを羽織っており、背中には「竜」と一文字書かれていた
そして長い髪を後ろに束ねた髪型をした巨漢であった

「き、貴様！何者だ！！！」

ブロッケンが男を指差して聞く
すると男はこう応えた

「あん？俺は『流竜馬』だ！！！」

覚醒！魔神戦士　中篇（後書き）

続く

覚醒！魔神戦士　後編（前書き）

激闘は更なる激闘を呼ぶ・・・・なんつって

覚醒！魔神戦士　後編

「どう言う事？スバルがデビルマジンガーから作られたって言うのは？」

ティアナがボロボロのスバルを抱えながら目の前に居るもう1人のスバルに聞いた
それにもう1人のスバルはフッと微笑む
だが、その笑みからも何処か不気味さを感じ取れた

「作られたって言うより、僕達は偶発的に生まれた存在なんだよ」
「偶発的？」
「つまり、デビルマジンガーが作る気など無かったのに生まれてしまった存在・・・それが僕だって事」

自身を指差しながら言う
つまりスバルは事故で生まれたと言う事なのだろうか

「そもそも僕の半身であるデビルマジンガーはマジンガーZの生みの親である兜十蔵の父「兜原蔵」が己の野望を叶える為に作った。
でもそれを防ぐ為に十蔵、剣造、そして翼の三人がゴッドマジンガーを作った・・・其処までは知ってるね？」

もう1人のスバルの問いに頷く
それを見て話しを続ける

「あの後僕とゴッドマジンガーは互いに激しくぶつかりあったんだ。
だけどその際の衝撃で次元干渉が起こってしまい僕達は飛ばされた。
そう、遥か昔・・・約1万年前の失われた都「アルハザード」へね」

「あ、アルハザード！！！」

その言葉に皆は驚愕した
アルハザード
ミッドチルダより優れた技術を持つといわれる都市であるが、既にその都は遥か昔に起こった次元崩壊で消滅したと聞かされているだが、もう1人のスバルの口から告げられたのは正に衝撃の事実であった

「アルハザードを崩壊させたのは、僕とゴッドマジンガーなんだよ」
「な、何だって！？」

その言葉にノーヴェは信じられないと言った顔をするディードやギンガもそれを聞いた時には度肝を抜かれた顔をしていた

「僕とゴッドマジンガーは次元干渉の波を漂っていた内に自我に芽生えてね、お互い干渉波の中で激しい戦いを繰り返していたのさ。でも結局決着が着かずそのままアルハザードに来て其処でも激しい戦いが繰り返されたって訳。まぁそのせいでアルハザードが崩壊したのは事実だけどね」

信じられなかった
まさか甲児の世界に文明一つを易々と滅ぼせる程の力が作れたなんてそんな力、此処ミッドチルダでも製造は無理である
それ程までにデビルマジンガーとゴッドマジンガーは強力な魔神なのだろう
だが、其処でもう1人のスバルは暗い顔をした

「だけどあの時ゴッドマジンガーが捨て身の攻撃を行ったせいでデビルマジンガーは深手を負い深い闇の中に消え去った。だけど種を

落とした・・・それが僕なのさ」

自身を指差しながら言った

「何処でも構わない、其処で成長して、少しでも多くの力を蓄えるのが目的だったんだけど、其処で事故が起こったんだ・・・それが其処でボロボロになってる奴だよ」

憎憎しげにボロボロの状態のスバルを見る

「何の因果か分からないけど僕の中でお前が生まれて僕の体を乗っ取ってしまった・・・お陰で目的が狂ってしまったんだよ。力を蓄える事が出来なかったしね・・・でも、デビルマジンガーも自身で供給はしてるみたいだから問題は無いけど・・・僕としては許せないな」

そう言うと装着していたリボルバーナックルを起動させる

顔色が突如悪魔のような形相に変わった

「お前はイレギュラーなんだよ!だから僕の手で抹殺する!」

「そんな事はさせない!」

ティアナがクロスミラージュを構える

それを見たスバルが肩眉を上げる

「何でそいつを庇うんだい?そいつは君達の敵が作った出来損ないなんだよ?」

「五月蝿い!あんたにとっては出来損ないかも知れないけど、私達にとっては大切な仲間なのよ!それを侮辱したり破壊しようとする奴には、全力で迎え撃つ」

「ティ・・・ティア・・・」

弱弱しい声を発しながらスバルはティアナを見た
力を殆ど奪われてしまい立つ事もまともに出来ない状態の自分を守ろうと皆がスバルの前に立つ

「こいつは私にとっちゃ妹みたいなもんだからな！姉として守んないとならねぇんだよ！」
「お姉さんじゃないの？」

ディードが聞く
だが、それにノーヴェがかぶりを振る

「有り得ねぇ！絶対私の方が姉だ！こんなノホホンとした奴が私の姉なんて絶対認めないからな！まぁギンガが姉貴なのは認めるけど」
「あはは（汗」

意外と好評化なのに喜んで良いのか困るギンガも前に出る
それを見たスバルは面白くない顔をしていた

「分からないなぁ。前にも言ったけど君達じゃ僕に勝てないんだよ？出来損ないの屑に脆弱な人間・・・それが僕「魔神」に勝てると思ってるの？」
「うっせぇ！そんなのやってみなけりゃ分かんねぇだろうが！！！」
「分かるよ」

言葉と同時に一瞬で距離を詰めて目の前に現れる
すると横薙ぎに蹴りを放ち皆を吹き飛ばす

「アグッ！！」

「グァッ！！」
「ガハッ！！」
「ウグッ！！」

吹き飛ばされたティアナ達は壁に激突する
凄まじい衝撃が体全体に伝わる
そのまま地面に倒れこむ

「どうだい？魔神の力は・・・これでも２０％に抑えてあるんだよ？」

肩を上げてまるで「いい加減諦めたら？」と言いたげな顔で倒れたティアナ達を見下ろす

「お生憎様ね、私は諦めが悪いのよ」

フラフラな状態でもティアナが立ち上がる
それに呼応して他の三人も立ち上がる

「それは、兜甲児の影響かな？」
「そうかもね、もしあの時甲児さんに出会ってなければ、こんな風にはならなかったわ・・・きっと、もっと突っ張ってて、周りの意見を聞かず独断で走ってたかも知れない・・・でも、そんな私に道を示してくれたのが甲児さんだった」

ティアナの脳裏に甲児と戦った時の記憶が蘇る
兄の死に悲しみ、兄を侮辱した者達に自分のように怒り、それに苦しむ自分に優しく接してくれた甲児
そんな甲児が居るからこそ、今の自分が居ると確信を持てた

「そうか・・・それじゃ何で僕達が兜甲児を欲しがるか教えてあげようか」

スバルは言う
何故機鋼帝国は兜甲児を欲するのかを

「それはねぇ、甲児って奴の中にある「魔神の魂」が必要なのさ・・・デビルマジンガーを完全に扱う為にね」

「魔神の・・・魂？」

「あの男はマジンガーに・・・魔神に選ばれた存在なんだよ。奴には強い魔神の魂がある、でなければ今までの戦いで生き残れる筈が無いだろう？」

スバルはさも当たり前の如くに言う
そう、機鋼帝国が甲児を狙っていたのはデビルマジンガーの起動の際に使う為・・・分かりやすく言えば「乾電池」にする為だったのだ

「そんなのって・・・原蔵さんにとっては甲児さんはひい孫じゃないの！何でそんな事に使えるの？」

信じられないと言った顔でティアナが聞く
だが、其処でも赤い髪のスバルは笑っていた

「ひい孫だからこそ使えるんだよ。自分が作った息子が作ったんだからそれは彼の所有物なんだろ？それをどう使おうと勝手じゃないか」

「違う！命はそんな風に使って良い物じゃない！例えどんな経緯で生まれてきた者にでも命は等しく一つしか無い！それを誰かが勝手に使って良いなんて保障は何処にも無い筈よ！」

「言いたい事はそれだけかい？」

「え？」

突如スバルの雰囲気が変わったかと思うと、猛然と駆け出しリボルバーナックルを繰り出してきた
咄嗟に両腕をクロスして防御結界を張る
だが、それを意図も容易く破り去りそのままティアナに一撃を当てる

「くぁっ！！！」

衝撃に声を上げる
そのままの勢いで床に叩きつけられたのだ
体中の骨が軋む音がする
幸い骨は折れてないが衝撃で暫く立てない
そしてそのままスバルは他のメンバーを睨む

「野朗！」
「はぁぁぁ！」

ノーヴェ、ギンガ、ディードの三人が一斉に飛び掛る
リボルバーナックル、ガンナックル、ツインブレイズを起動させて
赤い髪のスバルに迫る
だが、当のスバルに全く避ける意思は無かった
それどころか余裕の表情で立ったままであった
それは何故か、理由はすぐに分かった
衝撃音と共に三人の前に見えたのは青い障壁であった。それはそれぞれの一撃を完全に防ぎ遮断したのだ
その奥でスバルが笑い声を上げていた

「無理無理、お前らじゃ破れる訳ないっての・・・いい加減うざったいから・・・くたばれよ！！！」

そう言い放つと起動させたリボルバーナックルを大地に叩きつける
するとギンガ、ノーヴェ、ディード達それぞれの真下に魔方陣が展開されて振動波が浴びせられる

「「「くあああああああああああああああああああああああああ!!!」」」

その振動波を浴びた三人がボロボロの状態になって倒れる

「振動破砕・・・お前ら屑には致命的になる攻撃だね。まぁこんなの大した武器じゃないけど」

そう、スバルが放ったのはギンガのＩＳ「振動破砕」だったのだ
内部に振動を与えて機械に致命傷を与える能力である
その為戦闘機人である彼女達には正に致命傷になったのだ
幸い意識こそはあったが皆体中の機能がやられたのか立てないでいたギンガもバリアジャケットを破損してしまい片腕からは機械のコードなどが見えていた

「さて・・・」

動けない事を確認すると即座に前に出る
その先には動けないスバルが居た
何とか壁伝いに必死に立とうとしていたが、そんなスバルをもう１人のスバルは下卑た笑いを浮かべて見ていた

「無様だね。もうまともに立てる力も無いんだ？」

もう1人のスバルは足払いを放ちスバルを倒す
「あぐっ」と悲痛の声をあげながらも倒れた状態から必死に立とうとしていた
が、そんなスバルの髪を無造作に掴み上げる

「ほらほら、立てるものなら立って見ろよ？立てればね」

そう言い放ちスバルを思い切り壁に叩きつける
叩きつけられたスバルの口から赤い鮮血が吐き出される
その血が赤い髪のスバルの顔を汚す
赤い髪のスバルはそれを手の甲で軽く拭うとその手でスバルの首を掴みまた壁に叩きつける

「出来損ないの分際で赤い血なんか出すなんて生意気だねぇ。そんな奴は此処でトドメを刺してあげるよ」

そう言うと彼女のリボルバーナックルが突如変化していた
人間のようか形をしていたリボルバーナックルが突如所々尖り、まるで悪魔の腕のように巨大で禍々しい腕となったのだ
その腕でどうするのかはすぐに理解出来た

「でも只普通に殺したんじゃ僕の気が治まらないから少し嬲っていくか♪」

そう言うと変化した腕でまずスバルの右肩を貫いた
貫かれた右肩から鮮血が噴水の如く舞い散る

「うあああああああああああああああああああああああああ！！！」

肩を中心に激痛が走る
スバルの目が一杯に見開かれて其処に僅かに涙が浮ぶ
そして悲痛の声で叫ぶ
それを聞いて赤い髪のスバルが嬉しそうな顔をする

「クハハハハ！良い声で鳴くんだねぇ♪そらそらぁ、もっと声を上げてみろよ」

そのまま両足、右腕、左肩を同じように刺し貫く
両足は既に力を入れられずダランとなっていた
両腕も動かせずまるで糸の切れた人形のようになっていた

「もう終り？じゃぁもう良いや、さようなら」

そう言ってトドメにスバルの胸を貫く

「いやあああああああああああああああ！！！スバルウウウウウウウウウウウウウウ！！！！」

列車内にギンガの悲鳴が木霊する
そんな皆の前でスバルの顔は力を失くしそのまま傾いた
それを見た赤い髪のスバルはパッとスバルを手放した
そのままズルズルと床に倒れる
貫いた指は鮮血で濡れていた。それを口元に持っていくとついていた血を舌で舐める

「フゥ、まぁこんなもんかな？さて次は・・・」

動かなくなったスバルを見て、次に向き直ったのはボロボロの状態のギンガ達であった

「お前達は僕の姿を見たんだ・・・死んでも文句は言えないよ♪」

そう言うと再びリボルバーナックル・・・嫌、「デビルナックル」を起動させる

恐らく先ほどギンガ達を瀕死の状態に追い込んだ振動破砕を使うつもりなのだろう

今もう一度食らえば間違いなくギンガ達は終りだ

その時、

「い・・・いい加減にしなさいよ！」

そんなギンガの前にティアナが立った

まだ足元がふらついている。先のダメージが残っているのだ

それでも両足で立ってクロスミラージュを赤い髪のスバルに向ける

それを見た赤髪のスバルは不気味な笑みを浮かべた

「屑でも倒せない僕を君みたいな人間が倒せると思ってるの？」

「思ってないわよ！だけどねぇ、友達を其処まで傷つけられて黙ってる程、人間出来ちゃ居ないの！」

そう言い放ってトリガーを引く

それに呼応して銃口からオレンジ色の魔弾が数発放たれた

赤髪のスバルは面倒臭そうに目の前に障壁を展開させる。これで防げると思っていたからだ

だが、その予想を反してティアナの放った魔弾は障壁を貫通してスバルの頬を掠める

「な！！！！」

それにスバルは驚いた顔をした
掠めた頬に僅かに赤い血が滲み出てきた
それを手の甲で拭うとティアナをにらみつけた

「まさかね・・・お前もそれを持ってるなんてね」
「それ？一体何の事？」
「惚けても無駄さ。お前もあの男と同じように「魔神の魂」を持ってるって事なのさ」

スバルの言葉にティアナは驚愕した
まさか自分に甲児と同じ魔神の魂を持ってるなんて
だが、すぐに考えを切り替える。言い換えれば、今この場でまともにこのスバルと戦えるのは自分だけなのだ
ギンガやノーヴェ、ディードは先の振動破砕でまともに動ける筈は無いし、スバルは早く手当てしないと手遅れになる可能性がある
そう考えた時、ティアナの足は勝手に前に出た

「つまり、今この場で貴方とまともに戦えるのは私だけって事ね？」
「自惚れるなよ人間が！たかが掠めたくらいで僕と対等になったつもりか？人間が魔神に勝てる筈無いだろうがあああああああ！！！！」

明らかにその声には怒りが篭っていた
恐らく自分の体を傷つけられたのを知って頭に血が上ったのだろう
まるで猪の如くティアナに向かっていく
ティアナはそれを向かえ撃つかのように連続して魔弾を放つ
赤髪のスバルはそれを掠めながらも距離を一気に詰めていき・・・
腕を振り上げる

「はぁっ！」

だが、其処でティアナは遭えて懐に入り込んだ
狭い通路の中でしかも巨大な腕なのだ。ゼロ距離でその腕の威力は半減してしまう

「こう近づかれたらその馬鹿でかい腕は震えないわね？」
「舐めるな！お前なんて左腕だけで充分だ！」

憎憎しげな目で左腕に力を込めて思い切りティアナの腹を殴りつける
一瞬苦悶の表情を浮かべるもすぐにまた赤髪のスバルを睨む

「こんな物なの？これならスバルの方がもっと痛かったわ！」
「な、僕があんなイレギュラーに劣るって言うのか？」
「だったら見せてあげるわ！これが本当の拳よ！」

クロスミラージュを仕舞い硬く握った拳を思い切り赤髪のスバルの頬に叩きつける
凄まじい衝撃が伝わりそのまま後方に倒れる
そんなスバルにティアナがホールドアップよろしくクロスミラージュを構えた
少しでも妙な動きをすれば頭を撃ち抜けるように

「チェックメイトね」
「・・・・・どうかな？」
「え？」

明らかに形勢はこちらにあると言うのに赤髪のスバルは余裕の表情を浮かべていた
何故？それはすぐに分かった
突如天井を何か強大な力がブチ破るのが聞き取れた

「あ、やっと来た」
「な！」

咄嗟にティアナは空を見上げた
其処には黒く禍々しい体をした悪魔のような魔神「デビルマジンガー」が居た

「遅かったじゃん！」

皮肉がかった一言を言い放つと突如跳びあがりデビルマジンガーの肩に乗る

「ま、待ちなさい！」

ティアナがそれを撃ち落そうと魔弾を放つ
だが、それをデビルマジンガーは片手で制する
その腕の向こうで赤髪のスバルは笑って言った

「ティアナって言ったね？お前には借りが出来たね。何時かこの借りは纏めて返させて貰うよ」

そう言い放つとティアナの視線から姿を消した
標的を失ったティアナはこれ以上銃口を構えてても仕方ないと思い銃を降ろす

「は！スバル！！！」

ふとティアナは壁にもたれかかるように動かなくなったスバルに駆け寄る

そして肩を掴んで必死に揺らす

「スバル！スバル！！返事しなさいよ！スバル！！！」

ティアナが必死に呼びかける。だが、そんな思いも空しくスバルは応える事は無かった

＊＊＊

「流・・・竜馬！」

エリオの目の前に現れた大男がそう言った
まるで狂犬のような目つきをした男だった
竜馬は眠そうに欠伸をすると目の前に居たピグマンとブロッケンを睨む

「ったく、てめぇら良い年してガキ虐めて楽しいのかよ？よほど寂しい性格してんだなお前ら」
「な！貴様・・・人間の分際で我輩を侮辱しおって！」
「誰であろうと邪魔をするのであれば容赦はせんぞ！！！」

明らかに乱入者である竜馬に狙いを定めると二人は一斉に自身の得物をつきたてる
だが、竜馬は微動だにせずそれを片手で受け止める

それに二人は驚愕の顔を浮かべる

「どうした？押すなり引くなりして見ろよ？そうすりゃ腕位落とせるかも知れないぜ？」

二ヤリとした顔で竜馬は言う
望み通りにしてやろうと刃を引こうとしたとき、竜馬は動いた

「但し、俺はそうさせないけどな」

そう言うとまずはピグマンの腹に蹴りを入れる
衝撃の余りピグマンの体がくの字に曲がり後方に吹き飛ぶ
その後隣に居たブロッケンに裏拳を当てて壁に叩きつける

「ぐっ・・・こいつ、人間か？」
「ま、まるで化け物ではないか！」
「けっ、何言ってやがる！てめぇらの方がよっぽど化け物じゃねぇか！」

吐き捨てるように竜馬は言う
圧倒的であった
エリオやセッテが苦戦した二人をこの男は意図も簡単に蹴散らしてしまったのだ

「さて、てめぇらは俺の安眠を妨害したんだ！覚悟は出来てるだろうな？」

腕をボキボキと鳴らしながら竜馬は二人に近づく
だが、その時突如天井を突き破り巨大な腕が現れた

「む、来たか！」

ピグマンとブロッケンはその腕が何者なのか理解していた
そして、外に出ると其処にはやはり予想していた物が居た

「二人共、さっさと引き上げるよ」
「デビルマジンガーか！」
「あい分かった」

ピグマンとブロッケンは差し出されたデビルマジンガーの腕に乗る

「待ちやがれ！」

その後を追って竜馬が電車の屋根に飛び乗る

「流竜馬！この次こそ貴様を八つ裂きにしてやる！」

捨て台詞を残してデビルマジンガーは飛び去っていく
飛べない竜馬ではどうする事も出来なかった

「ちっ、まぁいい、どうせ来るってんなら何時でも相手になってやる」

腕を振り上げて竜馬は言った

＊＊＊

破損したマジンガーZの上空にもう一体のマジンガーZが居た
大地には片翼を失い煙が立ち込めるゴッドスクランダーと瞳の光を失ったマジンガーZが倒れていた

「トドメだ！兜甲児！そしてマジンガーZ！！！」

K－1はトドメとばかりにマジンガーZに向かっていく

「甲児くん！」
「野朗！」

大介と剣児はK－1を止めようと向かう
だが、それを突如地面から現れた数体の機鋼獣が阻む

「くっ！邪魔だ！」
「どきやがれ！！」

即座に機鋼獣を蹴散らす
だが、そのせいで距離的にはほぼ絶望的であった
もう既にマジンガーZの拳が兜甲児の居るパイルダーのキャノピーを目指す

「駄目エエエエエエエエエエエエエ！！」

だが、其処へソニックムーブで移動してきたフェイトが立ちはだかる

バルディッシュを水平に構えてマジンガーの拳に耐えようとしていた
勿論それで防げる筈がない
まともに食らえばフェイトの体は四散してしまうのは目に見えていた
だが、それでも彼女は立つ
甲児を死なせたくないからだ
覚悟を決めて目を瞑る・・・だが、何時まで経っても衝撃は来なかった
目を開けてみると、其処には既に拳を押さえていたマジンガーZが居た

「や～めた。幾らお爺ちゃんの為とは言っても可愛い子ちゃんは殴れないぜ」
「え？」
「それに俺は女子供は殴らない主義なんでなぁ・・・」

そう言い放つとマジンガーZは高度を上げる

「運が良かったな、兜甲児！だけど次に会った時はお前を完膚無きまでに叩きのめしてやるから覚悟しやがれ！」

動かないマジンガーを指差してK－1が言う
そう言い終わるとマジンガーは上空に待機していたグールへと戻っていく

「何だろう・・・あの人・・・私と似てる気がする」

フェイトはふと、K－1が自分と同じ雰囲気を放っている事を思っていた

＊＊＊

その後、皆で列車の中を探索したが、結局目的のロストロギア「レリック」は奪われていた後であった
そして損害も大きかった
マジンガーZは中破し、特にゴッドスクランダーの傷が大きかった
また、デビルマジンガーの一撃を受けたグレートマジンガーの被害も大きく、修理には時間が掛かるとの事であった
そして、スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアル・兜甲児、ゲッターチームの六人はそれぞれ重傷を負っておりすぐに医療班に運ばれるのであった
現代に戻ってきた甲児達に待っていたのは、新たな強敵と、更なる激闘のゴングであった

覚醒！魔神戦士　終

次回予告

甲児

「くそぅ！このまま負けて終われるか！絶対にアイツに勝ってやる！こうなったら特訓だ！
え？フォワードメンバーに新しいデバイスを作る？そんでもってミッドチルダ製のゲッターロボ？
何がどうなってんだ？」

次回『蘇る力』

次回もこの小説にテイィィィィクオォォォォォォォフ！！！！

覚醒！魔神戦士　後編（後書き）

タイトル変えました
サーセン

蘇る力　前編（前書き）

前回の戦いでボロボロになったメンバー
しかし内なる闘志は消える事は無かった

蘇る力　前編

此処は薄暗い研究室の一角
その中には白い髭を生やし青い肌をした筋肉質の老人が立っていた
Ｄｒ．ヘルその人である
そして、その前には顔から体つき、性格まで全て兜甲児そっくりに作られた少年「Ｋ－１」が居た

「何故あの時トドメを刺さなかった？Ｋ－１」

Ｄｒ．ヘルはＫ－１に問いただした
しかしその声は決して怒っていたり罰を与えようとしている声ではなく、只疑問に思ったので聞いただけであった
それにＫ－１はこう応えた

「幾らお爺ちゃんの命令とは言え、可愛い子ちゃんを傷つける事は俺には出来ないしよ。それにあんな奴何時でも倒せるから良いかってお思ってさ」
「フフフ、そう言う事か」

理由を聞いたＤｒ．ヘルは笑った
だが、その顔はとても上機嫌であった
理由は明白である
もし本物の兜甲児ならそうするからだ
益々Ｋ－１が兜甲児その者になってきたのだ
かつて幾度となく挑み敗れ去ってきた憎き相手「兜甲児」
その男が今目の前に自分をお爺ちゃんと呼び慕う力強い存在となったのだ
これほど嬉しい事は無いのだ

そしてそのＫ－１があの兜甲児とマジンガーＺを真正面から破ったのだ
これは正に大成功と呼べる事である
そして嬉しい事は更に起こった

「Ｄｒ．ヘル」
「む？ブロッケンにピグマンか」

振り返ると、其処には四角いケースを持ってピグマンとブロッケンが歩み寄ってきた

「例の物はこちらに御座います」
「そうか」

頷きＤｒ．ヘルはケースを開けた
すると中には赤く輝く結晶体が置かれていた

「フッフッフ、これで良い、フハハハハハハ！！！」

薄暗い研究室の中でＤｒ．ヘルは高らかに笑っていた

＊＊＊

戦闘を終えた鉄也達はすぐにマジンガーの状態を見ていた

先の暴走列車事件から早一週間が経っていた
だが、状況は最悪であった
マジンガーZの損傷は思っていた以上に激しく現在急ピッチで修理している物のまだ完全とは言えない状態である
更に酷いのがゴッドスクランダーであった
背中の二本の指の内一本が完全に破損しており片翼も折れている
その上各種機能もボロボロにされておりこちらもかなりやばい状態であった
グレートマジンガーも突如現れたデビルマジンガーの攻撃により中破しておりこちらも修理中である
真ゲッターは破損こそしていなかった物のパイロットがそれぞれ重傷を負っており稼動不可状態であった
実質動けたのはグレンダイザーと鋼鉄ジーグのみだったのだが、此処一週間に起こった度重なる連戦により遂に限界が来てしまい今オーバーホール中なのだ

「今攻め込まれたらかなり不味いな」

手摺にもたれかかるようにしながら鉄也がマジンガーを見ていた

「そうですね」

その隣に居たなのはも暗い顔をしていた
暴走列車事件での損害はマジンガーだけでは無かった
隊員達も負傷してしまったのだ
ノーヴェ、ディード、セッテ、ギンガの四人は戦闘で負傷し今は動けるようになった物の全快までにはまだ少し時間が掛かる
甲児とエリオの方は未だに体にギプスを巻いての生活である
しかし一番重傷なのがスバルだった
両手両足の神経を切られた上に胸部への一刺しである

後数ミリ右にずれていたら命は無かったと言う
だが、それでも重傷なのには変わらず、未だに意識が戻らない状態が続いている
ゲッターチームの方は内臓へのダメージが酷く竜馬に至ってはコクピット中が血で汚れている程であったそうだ
今は三人ともリハビリをしており、復帰は時間の問題でもあった
それからも分かるとおりかなりボロボロの状態だったのだ
やはり戦力アップが欲しい所であった

「そう言えば甲児くん達はどうしてるんだ？」
「あぁ、甲児さん達だったら」

＊＊＊

甲児とエリオ達は医務室に居た
ベットには1人の少女が眠っていた
全身に巻かれた包帯がとても痛々しく映った
その包帯は顔全体まで覆われており、包帯の隙間から青い髪が覗かせられた
口には呼吸用のチューブが差し込まれており呼吸は出来ても会話は出来ない状態である
今こうして寝かされているのが瀕死の重傷を負った「スバル」であった

「スバル・・・」

呼吸こそすれ微動だにしないスバルを見てティアナが小さく呟く
周りに居たフォワードメンバーや甲児は重い顔をしていた
目の前に居たティアナは椅子に座ってじっと動かないで居た
嫌、彼女の肩が微かに震えているのが見えた
それを見た甲児が声を掛けようと思ったが止めた
今はそっとしておこうと思ったからだ
隣に居たエリオ達の肩をそっと叩いて部屋を出る

「ティアナ・・・」

後ろを振り返り沈み込んだティアナを見て甲児はそのまま部屋を後にした
今部屋には物言わぬスバルとティアナの二人だけである

「スバル・・・御免ね・・・もっと早く助けに行けたら・・・こんな目に合わずにすんだのに・・・」

自身の手をギュッと握り締めた
その手の甲に数滴の雫が滴り落ちる
それはティアナの瞳から零れた涙であった
悔しい・・・あの時もそうだった
兄が死んだ時だって、自分に力があれば兄を死なせる事は無かった筈
そして、スバルの時だって、もっと自分に力があればスバルをこんな辛い目に合わせる事も無かった筈なのだ
自分の無力さが恨めしかった
もっと強くなりたい・・・大切な仲間を、これ以上悲しい思いに沈ませない為に

「・・・スバル、あんたの分まで頑張るから・・・早く戻って来なさいよね」

瞳に滲んだ涙を腕で無造作に拭い立ち上がる
そして少し皮肉がかった言葉を言うと、そのまま部屋を後にした

＊＊＊

デバイスルームでは破損したフォワードメンバーのデバイスの調整を行っていた

「シャーリー、直るかなぁ？」

フェイトが心配そうに聞く
だが、それにシャーリーが難しい顔をしていた

「難しいですね、ティアナさんのデバイスは甲児さんが作った物ですから何とも言えないし、エリオくんのはそもそも原型が留まらない程バラバラになってますからそれを一から修復するとなるとかなり時間が掛かっちゃいますよ」

「クアットロさんや剣造さんに頼むのは駄目かなぁ？」

「難しいですね。二人ともマジンガーの修理で手一杯ですし、甲児さんは後で来てくれるって言ってますけど・・・此処まで破損が酷いともう修理するより新しく作り変えた方が早いですね」

シャーリーが結論を述べる
つまり使い慣れた形から全く別の形にさせると言う事なのだ
しかし使い慣れない武器では自ずと隙が生まれる
あの時のような強敵が相手ではまずそれは致命的になる
下手すれば命の保障は無い

「シャーリー、その件については一度皆と相談してからで・・・」
「いいえ、今すぐお願いします！」
「え？」

フェイトの言葉を遮り扉の向こうから声が響いた
振り返ると、スバルを欠いたフォワードメンバーと甲児が居た

「皆、どうして此処に？」
「すみません、聞き耳を立てるような真似をしてしまって・・・でも、今以上に強くなれるのならお願いします！」
「僕もお願いします！」
「私も！」
「だ、そうだぜ」

後ろに居た甲児が言う
フェイトは三人の顔を見た
皆真剣な顔だ
それほどまでにあの時の戦いの結果が悔しかったのだ

「でも皆分かってるの？そうしたら以前のような使い方じゃなくなるんだよ。」
「恐らく、出力その他でパワーアップできるけど、その変わり凄く扱い辛い代物になる可能性があるんだよ」

フェイトとシャーリーが危険性を考慮して言う
だが、それで考えを変える者は居なかった

「それでも構いません！」
「扱い辛い物なら扱えるようになるまでです！」
「お願いします！」

三人の答えに変わりは無かった
そんな三人に困った顔をする二人

「話しは聞いたよ」
「なのは」

すると先ほどティアナ達が入ってきた入り口からなのは、鉄也、そしてヴォルケンリッターやナンバーズのメンバーも入ってきた

「み、皆さん」
「ったく、水臭ぇぞてめぇら！強くなりたいのはお前らだけじゃねぇんだぞ！」
「私だって悔しいって言う気持ちはあるよ！」

ノーヴェとディードが言う
二人は先の戦いでもう1人のスバルが繰り出した振動破砕を食らい重傷を負ってしまったのだが、今ではどうにか完治はしたようであった

「私も・・・強くなりたい」
「・・・（コクッ」

ルーテシアとセッテも同意権であった
ピグマンとブロッケンの戦いで自分の無力さを思い知ったのだ

「フェイトちゃん、こうなっちゃったティアナ達は止められないよ」
「こいつらは筋金入りの頑固者だからな」

なのはと鉄也がフッと笑う
それを見たシャーリーが観念した顔をした

「分かったわ、其処まで言われて『駄目です』なんていえないもんね、今はまだフォワードメンバーのしか弄くれないけど、今からデバイスのパワーアップ作業を行うわね」
「「「あ、有難う御座います！」」」

シャーリーの承諾を受けてティアナ達の顔が明るくなる

「さて、そうとなったらこれからお前達は特訓をしないとな」

後ろに居た鉄也が腕を鳴らす

「覚悟は出来てるだろうと思うが今一度言っておくぞ・・・今からやる特訓は今までやってきたのとは違う、はっきり言って高町のように生易しい物にはしない。中途半端な覚悟で来れば『死ぬ』事もある。今から考え直す奴はこの場から立ち去れ」

鉄也が真剣な顔で言う
それは鉄也なりの最後通告であった
死にたくないなら今すぐ出て行け
言い方はキツイが、それは鉄也なりに皆を思っての事だったのだ
だが、それで部屋を出て行く物など1人も居なかった

それどころか皆の目は燃え上がるような闘志でぎらついていたのだ

「どうやら全員承諾みたいだな」
「フッ、流石は機動六課のメンバーだな」

予想はしていたが改めて見ると笑みが零れる
それを見ていた甲児の中にも再び闘志が漲ってきた

「よっしゃぁ！俺も特訓してパワーアップするぞ！」

拳を突き上げて叫ぶ

「なら俺達が手伝うよ」
「りょ、リョウ君！」

すると今度はゲッターチームがやってきた

「リョウ君、リハビリは終ったのか？」
「特訓くらいなら大丈夫さ。それに皆がこうして燃えてるってのに俺達だけ寝てる訳には行かないしね」

竜馬はフッと笑う
それは隣に居た隼人、弁慶も同じであった
すると、通路を走る音が響いた
そして

「竜馬さあああああああ

声と共にアリシアが猛烈な勢いで竜馬に抱きついて来た
その拍子に倒れる竜馬
これぱっかりは予想外だったようだ
そのまま遥か通路の向こうまで吹き飛んでいくアリシアと竜馬
はっきり言ってアリシアは初めて会った頃より遥かにパワーアップしている
デバイスには未だにカードリッジを内臓していないが、もしあれで内臓してたらどれ程強くなるのか正直言って不安だった

＊＊＊

それとほぼ同時期、此処は人里離れた森の中であった
そんな中で竜馬ともう1人の男が座っていた
目の前では焚き火がされており赤い炎が風に揺られていた

「悪いな、お前の探していた物は取られちまったよ」
「そうか」

竜馬の言葉を聞いて茶色の髪をした青年は残念そうな顔をした
あの戦いの後竜馬はエリオ達の誘いを断って列車を降りていたのだ
その後かねてより集合場所に指定していた場所でこうして合流していたのだった

「そっちの方はどうだ？」
「駄目だ、未だに手がかりが掴めない・・・一体何処に」
「心配するのもまぁ分かるぜ、何せお前の部下なんだろ？」
「あぁ・・・」

男はそう言うと額に組んだ両腕をくっつけた
竜馬は釣ってきた魚を齧りながら見ていた
するとふと口を開く

「実はよぉ、俺には嫁と息子が居たんだよ」
「ほぉ・・・それは初耳だな」
「まぁな、だけど息子の顔を見る前に俺は『真ゲッター』に乗り込んでそのまま帰れなくなっちまった」

竜馬の話しを聞いて気まずくなったのか青年は黙り込む

「けど、後悔はしてねぇぜ、俺とあいつらのお陰でガキが元気に育つんだからよぉ」

そう言って竜馬は空を見上げた
空には満天の星空が浮んでいる
手を伸ばせばつかめるのでは無いかと思えるほどに
そうしていると青年は立ち上がる

「行くのか？」
「あぁ、こうしている間に奴等はまた動き出すかも知れないからな・・・世話になった・・・流竜馬」
「おめぇも気をつけろよ、ゼスト」

片手で手を振りながら竜馬は青年「ゼスト・グランガイツ」を見送

った

蘇る力　前編（後書き）

次回猛特訓開始！！！

蘇る力　中篇（前書き）

特訓開始！

蘇る力　中篇

此処は普段メンバーが訓練で使用するフィールドである
其処では六課メンバーが必死に特訓に励んでいた
だが、その内容は尋常では無かった

「どうした？もう音を上げたのか？」

訓練用の木刀を片手に持った鉄也が言う
目の前にはティアナとエリオがそれぞれ木刀を構えていた
新型デバイスは刀をイメージした形になるのでそれを扱う為の特訓である
そんな中、ティアナとエリオはそれぞれ肩で息をしており、明らかに苦しそうであった
無理も無い
何故なら魔法を使わず己の力だけで鉄也に挑めと言う内容なのだから
只でさえ鉄也は生身でも戦闘機人を倒す程の実力を持っているにも関わらずそれを相手に魔法を使わずに戦うのだからそれこそ至難の業である
だが、新型デバイスを扱う為にはどうしても避けては通れない壁である
何故なら、新型デバイスはそれ程までに扱いが難しい代物となってしまうからだ
それでも二人は立ち上がった
何故ならそれが自分達が選んだ道なのだから
エリオはもっと強くなりたい為に
ティアナは相棒の為に
それぞれの思いを胸に二人は剣を構える
そして再び鉄也に向かっていく

「「はあああああああああああああああああ！！！」」

別の場所ではキャロとルーテシアがそれぞれ特訓を行っていた
二人は後方支援の為魔力弾のコントロールをなのはから仕込まれていた
今二人の周囲にはそれぞれ自身の作った魔力弾が１０発ずつ浮んでいる
それを自在にコントロールする訓練をしているのだ
キャロとルーテシアも先の戦いで只見ているだけの自分が嫌だったのだ
その為少しでも皆の力になりたいとそう思う彼女達の思いを受けてなのはが指導を施していたのだ
だが、１発でもコントロールするには精神力を使用すると言うのにそれを１０発もコントロールするのだから精神的疲労は相当な物だ
それでも二人は特訓を続ける
この特訓が必ず身を結ぶ事を信じて

「頑張ろう！ルーテシアさん」
「うん！」

互いに励ましあって特訓に励む
ナンバーズやヴォルケンリッターも互いに同様であった
そちらにはジュンやさやか、剣児に大介も混じっての模擬戦を行っていた
特にノーヴェ、ディード、セッテ、ギンガの四人の気合の入りようは凄まじい物でありその気迫が遠くからでも伝わる感じであった

「うおおおおおおおおおおおおおお！」
「おりゃあああああああああああああ！」

ノーヴェと剣児がそれぞれ取っ組み合いばりの殴り合いを展開する
それもかなり互角の戦いである
最初はノーヴェも驚いたが甲児達と同じ異世界の住人なら可能だろうと大して気に留めなかった
剣児は幾多の武術を極めており喧嘩も強い
だが、そんな剣児にも只の1人勝てなかった男が居た
それが鏡なのだ
剣児のライバルでもあり親友であった男である
しかしその正体は外宇宙からやってきた異星人であり、そして剣児の母の弟でもあった
鏡は剣児とつばきを救う為一人邪魔大王国のアマソとイキマに戦いを挑み、アマソを葬るも背後からイキマの凶刃に倒れその生涯を閉じた
だが、その友の強い思いが剣児の元へバルバを遣わせたのだ
バルバは今は剣児を主と認めており剣児にとっては友の遺産でもあった
が、今はバルバでは無く剣児が名づけた名前で「パルパ」と呼ばれている
理由は小さいからだ
しかし本人は気に入らないらしく剣児がそう呼ぶ度に噛み付いてくる
同様に大介も訓練用の双剣を構えて訓練に参加している
大介自身も先の戦いで苦渋の思いを胸に抱えており、それを取り払う為に必死に特訓に励んでいるのだ
そして、我等が兜甲児はと言うと

＊＊＊

「うわあああああああああああああああああああああああああ！！！」

とある部屋内に甲児の悲鳴が木霊していた
今甲児が乗っているのはかつて竜馬達が使用していたゲットマシン訓練装置を兜十蔵、そして息子の剣造博士が改造した装置である
回転速度、スピード全てが従来の何倍にも増幅されている
勿論体に掛かる耐圧もかなりの物になる
普通の人間ならまず意識を失っている筈である
しかし甲児は気を失わなかった
彼の持つ強靭な肉体と精神がそれを許さなかったのだ
だが、返って気を失った方が楽と言うのも現状であった

「よし、一旦区切るよ甲児くん」

装置を操作していたのは竜馬であった
こういったトレーニングには経験者のゲッターチームが適任である
そう判断した上での事である
装置から出てきた甲児は酷く青い顔をしていた
そして竜馬達の元へ戻るとその場で四つんばいになる

「弁慶！」

それが何を意味していたのかすぐに察した竜馬は弁慶にバケツを持ってくるように言った
そして弁慶が持ってきたバケツに甲児は顔を埋める

バケツの中からは余り長く聞きたくない音が響いた
やがて音が止むと甲児は立ち上がるも未だにフラフラな状態である

「どうする？もう止めるか？」

甲児の体を察してか、はたまた最後通告なのかは分からないが竜馬はそう告げた
だが、それに対し甲児はかぶりを振る

「ば、馬鹿言うんじゃねぇ！・・・皆が必死になってるってのに・・・俺だけが先に・・・ギブアップ出来る訳・・・ねぇだろうが！」

途切れ途切れで声を出すのも苦しそうだが、その目には変わらず闘志が漲っていた
それを見た竜馬はニヤリとする
予想通りだと言った顔だ

「フッ、なら特訓を再開するか」
「おう！何回でも来やがれ！！！」

拳を握り締めて甲児は再び装置の中に入っていく

「良いか甲児くん！今度はさっきよりも早く行くぞ」
『了解！』

モニターの向こうで甲児が親指を立ててＯＫサインを出す
それを見た竜馬が装置を操作する
すると装置がグルグルと回り出す
最初はゆっくりとしたペースであったが、すぐに先ほどと同じ・・・
嫌、それ以上の速度になった

その速度はマジンガーZの必殺技「ビックバンパンチ」と同じ速度である
其処へ、更に装置がグルグルと回転しだしたのだ

「ぐぅぅぅぅ！」

甲児が悲痛の声を上げる
だが、それでも必死に操縦桿にしがみ付く
耐圧と振動で歯がガチガチと鳴りシートに徐々に体が沈んでいく
それでも目の前をしっかりと見ていた

「ねぇ竜馬さん、これって一体何の特訓なの？」

隣に居たアリシアが聞く
それに竜馬は目線はモニターを見ながら答える

「特訓さ、新必殺技のね」
「新必殺技？」
「ああ、恐らくあの時のマジンガーが放ったビックバンパンチは恐らく威力はほぼ同じ、多分僅差のズレで勝敗が決したと思うんだ」

竜馬は推測した
それにアリシアが「そうなんだ」と頷く

「其処で甲児が俺達に提案してきたのがこれだ」

隼人がモニターを写す
其処には回転しながら敵に突っ込んで行くビックバンパンチが映っていた

「ええ！こ、こんな技出せるの？あれだけのスピードですら充分危ないってのに」
「確かに、普通の人間がこれをやったら間違いなく内臓を潰して圧死するのがオチだな・・・だけど、これは甲児くん自身の決定なんだ」
「俺達はその先輩として出来る限りのアドバイスをしてやるだけさ」
そう言って隼人がモニターを消す
目の前では甲児の乗った装置が激しく回転していた
（絶対・・・絶対アイツに勝ってやる・・・今度こそ・・・今度こそ・・・）
操縦桿を握り締めていた甲児の脳裏にはそんな思いが張り巡らされていた

＊＊＊

丁度その頃、デバイスルームではシャーリーがシャマルと一緒に新型デバイスの最終調整を行っていた
「シャマルさん、そっちの方はどうですか？」
「もうすぐ終るよ。シャーリーの方は？」

「甲児さんが考案したシステムのお陰で案外簡単に行きましたね。
流石なのはさんとフェイトさんのデバイスにカードリッジシステム
を内臓した第一人者なだけありますよ」

そう、今の世でカードリッジシステムが確立したのは全て１０年前
に甲児がなのはとフェイトのデバイスにカードリッジシステムを内
臓した事から始まったのだ
その為管理局ではその技術を元に改良を進めた
そのお陰で本来よりも早くカードリッジシステムが普及したのだ
そして、今彼女達の前には２本の剣型デバイスがカプセルの中に入
っていた
一つは巨大なリボルバー型の銃に剣が合わさったような銀色の諸刃
の剣であり
もう一つは身の丈以上の大きさを誇る巨大な片刃の大太刀であった

「このデバイスに名前は決まってるんですか？」
「う～ん、まだ決まってないけど候補は本人達から上がってるよ」
「え？どんな名前なんです？」

シャーリーが食い下がった
それにシャマルが軽く溜息を吐いて言う

「”バスターミラージュ”に”ザンクーガ”よ」

蘇る力　中篇（後書き）

次回パワーアップしたメンバーが活躍する・・・かも？

蘇る力　後編（前書き）

今回まさかの展開に・・・って、大丈夫か？（汗）

蘇る力　後編

その日、隼人はとある場所に向かっていた
それは巨大な施設であった
そして巨大な入り口を入ると一人の男性が出迎えてくれた
陸士の制服を見に纏い白髪の少し年を食った男性である

「どうも、ゲンヤ・ナカジマ三佐」
「あんたが神隼人一等空尉か・・・思ったより若いな」

そう言って隼人とゲンヤは互いに握手を交わす
言っていなかったが、此処ミッドチルダでは甲児達は管理局所属として扱われている
何時までも異世界の住人に守られてるようでは面子が立たないからだだが、知っての通り甲児達は生身でも常人以上に強い
其処で何時だったか管理局は本局の魔道士１００人を使い模擬戦を行った事がある
結果は魔道士側の惨敗に終った
甲児達は魔法を殆ど使わないと言うのにその強さは異常を通り越しており全く歯が立たなかったのだ
管理局は甲児達異世界の住人達に魔道士ランクとしてAランクを与え、更に階級として全員に一等空位クラスの階級を与えた
しかし管理局の対応は変わっておらず相変わらず一銭も入って来ないだが甲児達はそれに対し特に気にも留めて居ないでいた
それもそうだ。甲児は決して金儲けの為にマジンガーに乗っているのではない
元の世界でもボランティアとしてマジンガーに乗っていたのでこういった経緯には慣れっこである
そして、今回隼人が1人この施設に来たのには訳があった

「いよいよ完成するんだな」
「ええ、あなた方管理局の技術があったからこそここまで短期間に完成にこぎつけたんですよ」

通路を話しながら歩く隼人とゲンヤ
そして格納庫に辿り着いた二人の目の前に映ったのは全長約２５ｍの巨大なロボットであった

「これが・・・ミッドチルダ製のゲッターロボ」
「ええ、まだ名前はありませんけど列記としたゲッターロボです」
「動力源はゲッター線を使ってるのか？」

ゲンヤの問いに隼人はかぶりを振る

「いいえ、今はプラズマエネルギーを使用しています、ですがいずれはこれもゲッター線で動かそうと思っていますが」

隼人がゲンヤに説明していた
現状でゲッターエネルギーを使うのはかなり危険な為今はプラズマエネルギーを使用している
それでもゲッターの名を持つ為か戦闘力はたかい水準を行っている
今目の前に居るのは青を基調としたガッチリした手足を持つゲッターである
背中に二本のソーサーを取り付けているがこれは陸専用であり飛行は別形態で行う

「ナカジマ三佐！！」
「おぉ、来たか」

男性の声でゲンヤを呼んだ
見ると其処には紫色の髪で甲児に良く似た髪型をした青年と黒い角刈りの青年、そして赤い髪型の女性が居た

「ナカジマ三佐、こいつらが？」
「ああ、俺の指揮する陸士１０８部隊の中であんたと剣一等空尉が出した課題をクリアした三名だ」

そう言って顎で三名を指す
指された三人は隼人に敬礼をする

「初めまして、神隼人一等空尉！自分は陸士１０８部隊所属の「一文字　號」二等陸士です」
「同じく、「橘　翔」二等陸士です」
「自分は「大道　凱」二等陸士です」

三名がそれぞれ自己紹介をする
隼人はマジマジと三人を見る
三人とも目が輝いていた
それもそうだ、何故ならこの三人はゲッターロボに乗れると聞いて隼人と鉄也の出した課題をクリアした強物（つわもの）なのだから

「他の奴等はすぐに音を上げやがったがこいつらだけは最後までやり通した奴等だ」
「ほぅ・・・そいつは頼もしい」
「いやぁ、正直あの課題は地獄でしたよ」

號は頭を掻きながら言う
すると隼人はフッと笑う

「あれが地獄？何言ってんだ。本当の地獄はこれから見せるんだよ」
「げぇっ、ま、マジっすか？」

隼人の脅しに仰け反る號
それを見て笑みを浮かべる一同
そんな一同を無言で見下ろすゲッターロボ
ふと、號はある事に気づいた

「そう言えばこのゲッターロボには名前は無いんですか？」
「ああ、まだ無い。なんならお前等が付けても構わんぞ」
「よし、それなら今日からお前は『ゲッターロボ號』だ！」

號が宣言する
しかしそれに凱が意を唱える

「お、おいおい號！それじゃお前の名前しか無いじゃないか？」

隣に居た凱が言う

「ならお前の形態の時はお前の名前を付ければいいだろう？」
「そうか！それなら良いな」
「じゃぁ僕もそうするかな」

凱と翔も納得する

「よし、それなら陸戦形態を『ゲッターロボ號』空中形態を『ゲッターロボ翔』水中形態を『ゲッターロボ凱』と認定呼称するとしよう」
「「「はい！」」」

隼人の言葉を聞き三人が敬礼する

「早速だが、お前等はこれから機動六課に転属して貰う。其処で先輩達にたっぷりしごかれて来い」

「了解です！」

「フッ、覚悟しておけ。向こうに着いたら俺達が出した最初の課題が天国のように思える程の特訓が待ってるからな」

「りょ、了解です・・・」

隼人がフッと笑いながら言ったのを見て三人は少し青ざめた

かくして機動六課にもう一つのゲッターロボが加わった

名前は「ゲッターロボ號」

神隼人が設計し、ミッドチルダの科学技術により作られたミッドチルダ製のゲッターロボなのだ

＊＊＊

時空管理局の本部に侵入していたドゥーエは自身のＩＳを使用して最高評議会の中に潜入していた

其処でドゥーエは信じられない光景を目の当たりにした

其処には３つのカプセルに人と同じ大きさの脳が入れられていた

「まさか最高評議会の連中が脳みそだけとはね」

三つの脳を見てドゥーエが呟く
その時、突如彼女の背後に殺気を感じた
咄嗟に飛びのく
するとその直後風切音が響く
凄まじい速さで剣を振るわれたのだ
もしほんの数刻避けるのが遅かったら胴体が真っ二つになっていた筈である
ドゥーエは自身に振るってきた輩を見る

「我等の主に気安く近づくのは困るなぁ」

其処には立派に髭を生やした武人を思わせる男が立っていた
だが、その肌は紫色で人間と言うより何処か爬虫類を思わせる肌を持っていた

「あらあら、もしかして此処に居るのって貴方のご主人様？」
「いかにも、其処に居られるお方こそ我等の王、恐竜帝国帝王「ゴール」様なるもの。そして私は恐竜帝国将軍のバットよ」

剣を構えてバット将軍が言う
どうやら最悪の場面に遭遇してしまったのだなとドゥーエは心の中で思う
すると他の二つももしかしたらドゥーエは嫌な予感がした
そしてそれは嫌な形で的中した

「ほほぅ、やはり此処に居たのですな？」
「フン、管理局本部と言うのも案外侵入し易い物であったな」

其処には頭に二本の角を持ち軍服を纏った男と、鎧を見に纏いその

胸に老人の顔をつけた武人が居た

「お待たせしました！ブライ大帝」
「我等ミケーネ帝国がお迎えに上がりました！冥王ハーデス・・・
いや、闇の帝王よ」

その場に跪き男達はそう告げる
何と言う事だろうか
管理局の最高評議会の正体はかつて甲児達の世界を侵略しようと暗躍した各地底帝国の皇帝の脳を使用していたと言う事なのだから
だが、それを聞いて腑に落ちないのがあった

「何故今の今まで動こうとしなかったの？貴方達の力なら管理局を自在に操れるというのに？」

余裕の表情を浮かべているが内心焦っているドゥーエが聞く
それに三人の脳が答える

「フム、気になるのも無理は無かろう、だがこれも仕方のない事なのでな。我等を蘇らせてくれたお方のご命令で迂闊には動けなかったのだよ」
「しかし今かのお方より命が下った、今こそ我等三大帝国が立ち上がり、この地上・・・ミッドチルダなる世界を我等の楽園に変えてくれるわ！」

三大皇帝は声高らかに宣言する

「あら？私がそんな事許すと思って？」

ドゥーエは自身の固有武装を構えてそっと告げる

だが、三皇帝はあくまで毅然としていた

「ほほぅ、大した自信だなぁ・・・この状況でまだそんな戯言をほざけるとは」

そんあドゥーエの前にバット、ヒドラー、そして暗黒大将軍が立ちはだかる

「フム、どうやら貴様は人間では無いらしいな。グラー博士が見たらさぞ喜ぶだろう」

「お生憎様！貴方みたいな叔父様に付いて行く気はさらさら無いわ」

そう言ってドゥーエは高く舞い上がる

三人の武人には目も暮れない

目標はあくまで三皇帝

今此処でこいつらを始末しなければ後で不味い事になる

今なら自分でも破壊出来る

そう思い三皇帝の眠るカプセルに向かって攻撃を繰り出す

だが、その時突如背後に衝撃が走った

後頭部に強い一撃を当てられたのだ

「カハッ！」

微かに声を上げてその場に倒れる

そして、その後ろには剣の柄を持った暗黒大将軍が立っていた

「生意気な小娘め！貴様如きが我等が王に触れる事など出来る筈が無いだろうが！」

フッと笑うと暗黒大将軍は刀を抜く

ドゥーエは意識はある物の体の自由が効かなかった
先の一撃で上手くやられたようだ

「貴様は我等が王に傷をつけようとした、その罪は己の命を持って償うが良い」

そう言って剣を振り上げる
だが、

「待ちやがれぇ！」

突如上空から男の声が響いた
そして強い衝撃が暗黒大将軍を吹き飛ばす
強烈な力で蹴りを入れられたのだ
その証拠に顔にはクッキリと足の痣がついていた

「おのれ、何奴！」

踏みとどまって暗黒大将軍が言う
すると、其処には胴着と羽織りを見に纏った流竜馬が立っていた

「貴様！流竜馬！」

「久しぶりだなバット将軍、そしてヒドラー元帥！どうやって生き返ったかなんざ聞く気はねぇ！だがな、俺の目の黒い内は勝手な真似はさせねぇぜ」

指を指して宣言する
だが、将軍達は笑っていた
まるで竜馬が来るのを初めから予見していたかのように

「馬鹿な奴だ、我等が貴様の襲来を予見していなかったと思っているのか？」
「何？」
「貴様の抹殺も予定に入っているのだ！流竜馬！」

そう言うと突如竜馬の周りに丸い球体の様な物体が現れる
大きさは竜馬より頭一つ分位大きい
そして其処には巨大なアームと無数のコードが出ていた

「こいつらは！」
「それはガジェットと言う者でなぁ、中々使い勝手の良い物よ」
「ちっ！」

咄嗟にガジェットの攻撃をかわす
そして後方に飛び退き、倒れていたドゥーエを肩に担いで侵入してきた穴から出る

「覚えてやがれ！必ずこの借りは返してやる！」

あれだけの数のガジェットを叩き潰す事など竜馬にしては造作も無いだが、何か嫌な予感が竜馬の脳に伝わってきたのだ
まるで早くこの場から離れろと言わんばかりに
そう気づいた竜馬は口惜しい思いを胸に一度退く事にした
それを見て勝ち誇ったような顔をする将軍達

「フフフ、命拾いしたな、流竜馬」
「惜しかったな、後数秒この空間に居れば確実に奴の命を奪えたと言う物を」

ヒドラーが言ったその直後、部屋中に無数のレーザーが降り注がれた

そのレーザーは空間に居たガジェットを全て貫き破壊した
だが、将軍達、そして三皇帝は特殊な結界に守られている為ダメージは無い
もしあのまま此処で戦っていたら竜馬と言えども蜂の巣であった

「まぁ良い、どうせ奴はもうゲッターに乗れぬのだ・・・捨て置け」
「それより、わし等の肉体はあるのか？」
「ご安心下さい！帝王方の肉体は既にご用意させて頂いております」

ヒドラーが丁寧に頭を下げる
それを聞いて上機嫌になる三皇帝

「いよいよだ、いよいよ我等の悲願が成就されるのだ・・・フフフ、フハ～～ッハッハッハッハ」

三皇帝の笑い声が何時までも部屋中に響き渡っていた

＊＊＊

一方、此処は機動六課、並びにダイナミックチームが居る地下施設
其処では剣造がマジンガー達の整備を行っていた
しかし、今は険しい顔をしていた
そして、その視線の先にはヴィヴィオが居た
ヴィヴィオは真剣な顔で剣造を見ていた

「ヴィヴィオ・・・それは本気で言ってるのか？」
「勿論だよお爺ちゃん！」

真剣な顔をする剣造にヴィヴィオが言う
ヴィヴィオもまた真剣な顔であった

「お爺ちゃん！私も鉄也パパ達と一緒に戦いたい！もうパパ達が傷つくのを見たくないよ！」

ヴィヴィオは言った
そして、その後ヴィヴィオから信じられない言葉が発せられた

「お願いお爺ちゃん！私を・・・私を『聖王』にして！」

蘇る力　　終

次回予告

あの三大地底勢力が復活しやがった
だけど俺達は未だ傷の癒えない状態
かなりの大ピンチ
その時、ミッドチルダを救う為に作られたもう一つのゲッターロボが遂に動き出す

次回『出撃！その名は『ゲッターロボ』』

次回もこの小説にテイィィィィィィィクオォォォ

蘇る力　後編（後書き）

結構無理あったかな（汗）

出撃！その名は『ゲッターロボ』　前編

剣造はヴィヴィオの発言を聞いた
聖王。そう、ヴィヴィオはかつてこの世に居た「聖王」のクローンなのだ
その為、ヴィヴィオは聖王の力が使える。だが、それは同時に危険も孕んでいた
もし聖王の力が暴走すればそれこそ取り返しのつかない事になる。
その上ヴィヴィオにも危険が及ぶ可能性がある。そんな辛い運命を剣造は彼女に課す訳にはいかなかった
こんな年端もいかぬ少女・・・ましてや今は自分にとって孫娘のような存在なのだ。そんな子にその様な思い宿命を背負わせる訳にはいかない
それが剣造の答えだった

「残念だが・・・それは無理だ。ヴィヴィオ」
「どうして？どうしてなのお爺ちゃん！」
「危険過ぎる・・・そんな事をしてもし力が暴走したら取り返しのつかない事になりかねん」

剣造が暗い声で言う
それは紛れも無い事実であった。確かに聖王の力が備われば確実に強力な戦力となるだろう。しかし、そんな事をさせる訳にはいかない。ヴィヴィオはまだ１０年も生きてない子供なのだ。そんな子供に戦いを経験させたくない。鉄也とて剣造が引き取ったのは９歳の頃だ。今ヴィヴィオは５歳。鉄也が日々鍛え上げているとは言えそれは護身術程度である。実戦ではまるで役に立たない。それで良いのかもしれない。子供が銃を持つなど有り得ないのだ。

「ヴィヴィオ。お前にもしものことがあったら誰が悲しむと思うんだ？」
「悲しむ？・・・誰が悲しむの？」
ヴィヴィオの肩を掴んで剣造は真剣な顔で言う。それにヴィヴィオは首を傾げる。未だに良く分からないようだ
「ヴィヴィオ、お前が傷つけば鉄也が悲しむんだぞ。鉄也はお前のような子供達に明るい未来を作る為に戦ってるんだ！そのお前が傷つけば鉄也は何の為に戦い、傷ついたか分からなくなってしまうじゃないか！」
「じゃぁ・・・じゃぁヴィヴィオはどうすれば良いの？もう皆が傷だらけになるのは見てられないよ！」
目に一杯の涙を浮かべてヴィヴィオは言う。それほど辛い思いを抱いているのだ。その気持ちを汲み取った剣造がそっと言う。その顔は正に祖父のような顔つきであった
「お前は鉄也の前で力一杯笑ってやるんだ。お前達子供の笑顔を見れば鉄也達はきっと立ち上がれる。彼等はお前達の笑顔を守る為に戦っているんだ」
「お爺ちゃん・・・分かった！ヴィヴィオ鉄也パパの所に行ってくる！」
目に浮んだ涙を乱暴に拭い去り、ヴィヴィオは駆け足で部屋を出た。その後姿を剣造は見ていた。出来る事なら聖王の力も・・・魔神皇帝の力も使いたくなかった
魔神皇帝とは剣造の妻である「兜　翼」が残した設計図に描かれていたマジンガーである。それを見た時初めは作ろうと思っていたが見ている内に恐ろしい事実に気づいた。何と、動力源にあの光子力

エネルギーの他にロストロギアに認定されている「ジュエルシード」と「レリック」を使用しているのだ。それだけでも分かる通り魔神皇帝の力は非常に危険過ぎるのだ。下手をすればこのミッドチルダと呼ばれる世界が次元世界から消滅する恐れガある。それ程までの力を秘めていたのだ。だが、今は状況が状況である。デビルマジンガーが姿を現した今、悠長な事を言ってはいられない。あの悪魔の魔神に勝てるのはゴッドマジンガー、もしくはこの魔神皇帝しか居ないのだから。

「だが、あれを操るには『魔神の魂』を持つ者でなければ駄目だ・・・そして、それを持つ者は・・・甲児・・・私はお前にまた辛い運命を強いらなければならないのか？」

剣造は顔を手で覆った。自分の手で自分の息子に辛い運命を与える。父親としてこれ程辛い事は無い。出来る事なら自分が魔神皇帝に乗れれば良かったのに・・・苦渋の思いで歯を食いしばった。何故自分は肝心な時に無力なのだ。息子達が苦しんでいるという時に自分が出来る事と言えば魔神の修理程度である。せめて、せめてこの体が完全であれば何の問題も無い物を。

「ぐ・・・ぐぅぅ」

ふと、剣造は胸を抑えた。またあの時の発作だ。機鋼帝国の本拠地「機鋼城」の機能を９０％以上麻痺させた際に負った傷のせいで今の自分はマジンガーの操縦に耐えられない体になってしまったのだ。今の自分にはマジンガーは作れても乗る事は出来ない。何ともどかしい気持ちであった。すまない。甲児、鉄也・・・私は無力だ。１人モニターの前で悔しさに顔を歪める。私はどうすれば良い？魔神皇帝を作るしか無いのか？あんな危険な代物を。世界を滅ぼす悪魔になり得ない魔神を。破壊の化身を。出来ない！剣造には出来な

かった。だが、作らなければミッドチルダは機鋼帝国により滅ぼされる
退くも地獄、進むも地獄・・・ならば、喜んで前に進もう。もうこの場で足踏みする気も、目の前の現実から逃げ出す気も無い。こうなればやるしか無い。絶対に完成させて見せる。翼が残した最強にして最後のマジンガー。魔神皇帝・・・またの名を『マジンカイザー』

＊＊＊

薄暗い研究室の一角。其処に奴、「Ｄｒ．ヘル」は居た
その隣には例にもよって彼が作った兜甲児のクローン「Ｋ－１」が居た
二人の前には透明なカプセルの中に赤い結晶石「レリック」が収められていた
今これを研究して量産しようと企んでいるのである。もしそれが成功すれば合成獣は更に強くなる。先の戦いで分かった通り合成獣は予定通りの性能を発揮している。後はそれに更なる改良を加えてより強い合成獣を作るだけである。そうなれば最早マジンガー等恐れるに足らないのだ。

「フフフ、これが量産され合成獣に組み込めた暁には、最早マジンガーどもも敵では無いわ！そうなればこの世界は我等の物になったも同然・・・クックック・・・ハァァッハッハッハ！！！」

「楽しそうだね。お爺ちゃん」
「フフフ、Ｋ－１よ、まだお前には分からんだろうな。だがお前もいずれ分かる日が来る。そういずれな」

Ｄｒ．ヘルはにやける。だが、Ｋ－１は今心此処にあらずであった。今Ｋ－１の脳裏には一つの事しかなかった
あの時、兜甲児とそのマジンガーＺを庇うように現れた金髪の女性・・・アイツからは俺と同じ雰囲気がした。まさか、あいつもまたクローンなのか？だが、何故アイツは兜甲児を庇う？兜甲児、そして時空管理局こそ諸悪の根源。彼奴等を倒さなければミッドチルダに未来は無い。そう教わったのだ。それなのに何故あいつは・・・

「どうした？Ｋ－１」
「ん？あ、何でも無いよ。おじいちゃん」

咄嗟にかぶりを振るＫ－１。そうだな、今はそんな事を気にしてる場合じゃないな。それよりも今はマジンガーを倒す事を優先的に考えないとな。
そう自分に言い聞かせた。

「そう言えば聞いたかい？お爺ちゃん。三大皇帝の脳を回収したらしいよ。」
「ほぅ。ならばこちろも急がねばならないなぁ」

含みのある声で呟くとＤｒ．ヘルはとあるスイッチを押す。するとレリックのすぐ隣の壁が無くなり、其処に二つの巨大なカプセルが浮んでいた。其処には2体の怪物が浮んでいた。一人は全身トカゲの鱗に似た皮膚を持っており何処か恐竜をイメージさせる外見であった。そしてもう1人は頭に二本の巨大な角を生やしライオンのような鬣をした鬼のような外見であった。これこそ帝王ゴール、そし

てブライ大帝の体であった。だが、この体にはまだ脳が無い。これから運ばれてくる脳を移植すれば完了するのだ。
やれやれ、また忙しくなるな。折角レリックを調べる時間が取れたと言うのに残念だ。
そう思いながらも嬉しそうな顔をするＤｒ．ヘルであった

＊＊＊

Ｄｒ．ヘルが上機嫌になる一方で、機鋼獣指揮将軍であるシュラの顔には焦りが募っていた
度重なるマジンガーとの戦いによる敗北。そして更にはＤｒ．ヘルが作った合成獣やＫ－１が戦果を上げた事によりシュラの立場が徐々に危うくなっていたのだ。このままでは機鋼獣指揮将軍の地位すら剥奪されかねない。何とかしなければならない。そう思っていた

「フッ、こうなれば玉砕も已む無しか・・・」

そう言ってシュラは目の前にある巨大な要塞「飛行要塞グール」を見ていた
そして、近くに居た機鋼兵を見て命令を下す

「今すぐ全ての機鋼獣をグールに搭載しろ！」
「そんな、シュラ様！機鋼王の命令を受けなくて宜しいのですか？」

機鋼獣を使用しての出撃には機鋼王の許可が必要なのだ。許可なしに出撃すれば厳罰が待っている。だが、そんな事などシュラには関係なかった。どの道このままでは今の地位を奪われかねない。ならばその前に魔神を一体でも道連れに出来れば・・・そう思っていたのだ

「フッフッフ、見ておれ憎きマジンガー共・・・今度こそ・・・今度こそ貴様等を地獄に叩き落してやる」

シュラは静かに笑い声を浮かべていた

＊＊＊

場所は変わり、此処はデビルマジンガーを収めている空間であった。そしてそのデビルマジンガーの肩にはスバルに瀕死の重傷を負わせた張本人であるもう1人のスバルが座っていた

今、もう1人のスバルの心境は複雑であった。何故ミッドチルダ出身の人間に「魔神の魂」が宿るのであろうか?疑問であった。そもそも魔神の魂は魔神を操る者にしか備わらない筈である。なのにあの魔道士には魔神の魂が備わっていた。一体何故?

まぁ良い、どうせ後で皆片付ければ済むだけの話である

そう言いながら自身のデバイス「デビルナックル」を見た。それは元はスバルが使っていたアームドデバイス「リボルバーナックル」を変異させた形態である。その姿は以前の形を大きく異なっており、

指先は鋭く尖っており、黒く刺々しい印象を与える。簡単に言ってしまえば悪魔の腕を連想させられるようであった。そんな恐ろしい腕が今もう1人のスバルの腕に嵌められているのだ。

「あの時・・・僅かに急所がずれちゃった・・・・チェッ、殺す気で行ったんだけどなぁ」

一言愚痴る。それは初めて自分が表舞台に出た際の事だ。偶然生まれた産物であり、イレギュラーである存在「スバル・ナカジマ」奴を始末する為に放った一撃の筈だった。だが、何故かその一撃は彼女の心の臓を貫く事は無く、それより僅か数ミリずれてしまった。その為奴は死んでは居ない。まぁ動けないのに変わりは無いが。しかし何故だろうか?あの時確かに確実に狙っていた筈なのに。手元が狂った?嫌、そんな筈は無い。狙いは完璧であった筈だ。だが、何故か勝手に手元が狂ってしまったのだ。

「まぁ良いか。仕留め損なったのなら今度は確実に仕留めれば良いだけだしね。」

そう言ってもう1人のスバルは不気味な笑みを浮かべる。その笑みの先には悪魔の魔神「デビルマジンガー」が立っていた。

「君も早く暴れたいんだろう?僕もだよ。さっさと暴れてあの世界を死と混沌と地獄の世界に変えたいね」

嬉しそうな顔で恐ろしい事を呟くスバル。果たしてそれは彼女の本心なのだろうか?それは彼女自身にも分からない。

出撃！その名は『ゲッターロボ』　前編（後書き）

続く

出撃、その名は『ゲッターロボ』　中篇（前書き）

今回やっと意識を取り戻したスバル
しかし、彼女に迫る運命は残酷な物であった

「ほ、本当ですか！」

場所は何時もの訓練場であった。そして声を出したのはティアナであった。その声を出す原因を作ったのはシャマルであった

「ええ、今さっきスバルが目を覚ましたわ」

「スバル・・・」

それを聞いたティアナは目に涙を浮かべていた。良かった。無事だったのね・・・スバル。ティアナの胸には相棒が無事に目を覚ましたのを知って安堵したのであった

「早く行ってやれよ」

隣に居た甲児がティアナに言った。それを聞いてティアナは頷いて即座に部屋を後にする。その後姿を見て甲児がホッとする。最近ティアナはスバルが負傷してから少し落ち込んでいたので心配していたのだ

だが、スバルが今こうして目を覚ました事で安堵したのだろう。

「だが、怪我の方はどうなんだ？」

甲児はシャマルに聞いた

確かに目を覚ましたとは言ったが実際にはどうだったのだろうか

「幸い後遺症は無いみたいですけどまだ本調子ではないですね・・・暫くは安静のままね」

シャマルは言う。それを聞いて甲児はそうかと頷いた。まぁ今は安静なのは仕方ないだろう。あれだけのダメージを受けて意識を戻せただけでも奇跡に近いのだから

「だが、問題は山積みだな」

ふと、隣に居た鉄也が呟く。そうだ、スバルは意識こそ戻ったがデバイス、そしてリンカーコアを奪われてしまった状態なのだ。従って今彼女に戦う力は備わっていない。身体能力は高い方だがそれだけで戦えるのは甲児達位である。ミッドチルダの人間がそんな事を出来る筈が無いのだ。やはり魔法に頼りすぎたのが原因なのだろう。それに比べて甲児達は魔力を持たない変わりに常人離れした身体能力と魔神の魂がある

「それに、エリオとティアナのデバイスも問題だなぁ」

そう、前回の戦いでティアナのクロスミラージュは大破してしまい、エリオのストラーダに至っては粉砕してしまったのだ。今急ピッチで新型デバイスの製造を行っているが果たして間に合うかどうか

「その辺ならご心配なくぅ♪たった今完成しましたよぉ♪」

「お、その声はクアちゃんか・・・ぁ!!!」

甲児は声のした方を向いて度肝を抜かれた

「あらぁ、どうしましたのぉ甲児さんったら変な声出してぇ?」

「え?え?く・・・クアちゃん・・・だよなぁ?」

甲児は恐る恐るクアットロと名乗る少女を指差した

今彼女は眼鏡を掛けておらず髪も下ろしてある。しかし、それだけなのに普段より美人に見えるのだ

「おいおい、何だよ変な声出して・・・・って、誰？」

丁度その時叫び声に気づいた剣児が近づき、同じようにクアットロの変化に気づく
それにクアットロはニヤリと笑い剣児を見る

「あらぁ、お久しぶりですねぇ剣児さん♪」
「え？誰？オタク？」
「剣児・・・あいつクアちゃんだってよ」
「え？マジ！！！！すっげぇ美人じゃん！」

そう、剣児ですら目を疑う程の可愛い子ちゃんが居たのだ
剣児と甲児は互いに肩を掴みあって皆から少し離れる
そしてお互いに耳打ちする

（おい、あれって本当にクアちゃんなのか？）
（俺が知るか！ってか、マジで美人だぞ！）
（だよなぁ・・・一体どうやったらあんな可愛い顔を隠していけるんだ？）
（さぁ）

お互い失礼なのかそうでないのか微妙な会話をしていた
それを聞いていた鉄也は額に手を当てて溜息をつく

「それよりクアットロさん！僕達のデバイス完成したんですか？」
「モチのロンよぉん♪もう自信作と言って良い位の作品よぉん♪」

クアットロはそれこそ胸を張って言う
余程自信があるのだろう。そんな感じがありありと見て取れた。それを見たエリオの顔もパッと明るくなる。これでまた僕も皆と一緒に戦える。そう思えたのだ

「でもぉ、扱いがストラーダの時以上に難しくなってるから大変なのよねぇ～」
「大丈夫ですよ！それなら使いこなせば良いんですから」

クアットロの問題をエリオが拳を握り締めて言い張る。どうやら問題は無さそうだ。

「だったら俺達も手を貸してやらないとな」

後ろに居た鉄也と竜馬がフッと笑いながら言う。それにエリオがお願いしますと一礼した

＊＊＊

ティアナは病室に居た。目の前には全身を白い包帯で巻いており片目を覆われていたスバルが居る。患者服の合間から覗かせる包帯がとても痛々しく映った

「あ・・・ティア・・・」

まだ目覚めたばかりの為かろれつも余り良く回っておらず、視線も定まっていない。それでも折角見舞いに来てくれた友人の為に必死になって起きようとする。

「無理しなくて良いわよ」
「でも・・・」
「良いから寝て為さい」

無理矢理起きようとするスバルの肩を掴んでそっと寝かす。目が覚めたとは言えまだ安静の状態なのだ。余り無理はさせたくない

「全く、とにかくあんたが目を覚まして良かったわ」
「ねぇティア・・・私・・・どれ位眠ってたの？」
「・・・大体1週間位よ・・・ずっと昏睡状態だったんだから」

そう言った直後、ティアナの目から一筋の雫が零れ落ちる。余程心配だったのだろう。それを見たスバルが申し訳無さそうな顔をする

「御免ね、ティア・・・私が弱いばっかりに・・・ティアを心配させちゃって」
「馬鹿ねぇ・・・あんたに心配されるほど私は落ちぶれちゃ居ないわよ」
「え～、それ酷いよぉ」

ティアナの悪態を聞いて思わず泣きそうになるスバル。それを見てティアナは思わずフッと笑う。やはり何時ものスバルだ。以前はこうしてからかっていたっけ。そう思い出していた

「まぁとにかく、今あんたはデバイスもリンカーコアも無いんだか

ら暫くは怪我を治すのに集中しなさい」
「あ・・・そうか・・・」

そこでスバルは思い出した。今自分はデバイスを持ってないのだ。
あの時自分の体から現れたもう一人のスバルにデバイスもリンカーコアも奪われてしまったのだ。幸いバリアジャケットの展開は出来るみたいだがそれだけである。今ではウィングロードも展開出来ないのだ。
今自分は皆の力になれない。そう思うとスバルは暗い顔をした。だが、暗い顔の理由はそれだけでは無かった。あの時もう1人のスバルが行った言葉

【お前はデビルマジンガーが作った魔神戦士なんだよ】

私は・・・此処に居て良いのだろうか？
スバルの胸中にそんな思いが膨らんでいた。自分はあの機鋼帝国が作り上げた最強最悪の魔神が作り上げた魔神戦士なのだ。いずれはあのもう1人のスバルのように皆に危害を加えてしまうかもしれない。そんな思いがあった。
それに、あの時見た夢もスバルを苦しめている要員であった。燃え上がる首都、その中で倒れる仲間、砕け散り光を失った魔神、そして・・・その中立っている異形の姿になった自分。
何時かそんな事が現実になるのでは無いか・・・そんな心配があったそう考えているとスバルの顔はどんどん俯いて暗くなっていく。それを横で見ていたティアナは眉を顰める。そしてスバルに向けて中指を折り曲げて近づける。要するにデコピンの体制である

「スバル、こっち向きなさい」
「え？」

ティアナに言われるがままにスバルは振り返る。するとバチンと良い音が響く。ティアナがスバルの額にデコピンを仕掛けたのだ。その拍子に額を押さえるスバル。かなり痛そうだ

「ったく、何馬鹿な事考えてるのよ。あんたが沈んでたらこっちまで沈んじゃうじゃない！」

「ご・・・御免・・・ティア」

涙目になって謝罪する。だが、明らかに元気が無い。以前なら此処で笑みを浮かべて冗談とかを言う筈なのにそれが全く無いのだ、まるですっかり萎れてしまった花である。今のスバルにはかつての元気がかけらも感じられない。それ程までに今のスバルは苦しんでいるのだ

なのに自分はスバルの苦しみを分かち合える事すら出来ない。悔しい。陸士学校の頃からの付き合いだと言うのにこんな時に力になれないなんて。スバルに見えないようにギュッと自身の拳を握り締める。そんなティアナの脳裏に、ふと陸士学校の時に知り合っていた三人を思い出した。そう言えばあいつらとは陸士学校以来会っていない。聞いた話によるとギンガの居る１０８部隊に配属されたと聞いたが自分とスバルは卒業してすぐに機動六課に配属になったので会う機会が無かったのだ。今頃あいつ等は何しているのだろうかふと、そんな考えがティアナの中を駆け巡った。馬鹿みたい。今時そんな事を思い出すなんて。どうかしてるのはもしかしたら私かもね。そう思えた

「スバル、お腹空いたでしょ？何か摘まめる物取って来るわね」

「うん、有難うティア」

礼を言うスバルに「だから寝て為さいよ」と釘を刺して置き、部屋を退出する。そんなティアナを見送るスバル。すると突如口を手で

覆い苦しそうに咳をする。

「ゲホッ・・・グッ」

咳が収まり手を離すと、抑えていた手にはベッタリと赤い血が染み付いていた。更に胸を巨大な何かに突き刺される激痛に見舞われる

「ウグ・・・グア・・・アァァァァ・・・」

霞んだ声で苦しそうに声を上げるスバル。余りの痛みに意識が跳びそうになる。血の付いた手で自身の胸を押さえ、もう一方の手でシーツを破る勢いで掴む。その顔には激痛に歪む苦しそうな顔があった。目を一杯に開き歯を食い縛って痛みに必死に耐えていた。やがて痛みが引くと、まるで糸の切れた人形のようにベットに倒れる。

「一体・・・今のは・・・」

苦しみが治まり荒い息をしたスバルが呟く
だが、その呼吸はとても苦しそうであった

＊＊＊

スバルの痛みはもう一方のスバルにも同様に襲い掛かってきていた。同じように胸を抑え苦しみ。吐血した。

「ぐ・・・やはり・・・二つの体になってしまったから体に負担が掛かったんだね・・・」

口元から流れる血を手の甲で乱暴に拭い去りながらそう呟いた。だとしたらもう時間は余り無いだろう。早い内にケリをつけねばならない。

「急がないとね・・・でないと、僕の命が無くなっちゃうし・・・」

そう言ってもう1人のスバルは何も言わず佇む悪の魔神「デビルマジンガー」を見つめた

＊＊＊

ティアナが軽い食事を取りに食堂を訪れた。其処でティアナは懐かしい顔を見た。紫の髪に活発そうな顔立ちをした青年である

「あれ？あんた、もしかして號！」

「お！ティアナじゃん！元気そうだな」

青年號はかつての学友に手を振って答える。するとそれに反応して隣に居た二人もティアナを見る

「翔！それに凱も一緒だったのね！」
「元気そうねティア」
「ハハハ、そうか！ティアナはあの後機動六課に配属が決まったんだっけなぁ」

翔は懐かしむようにティアナの名を呼び、凱は大きな声で笑った
本当に懐かしいメンバーだ。最後に会ったのは陸士学校卒業の日以来である。お互い忙しく中々会う機会が無かったし連絡も思うように取れなかった為に懐かしさがこみ上げて来たのだ

「にしても何であんた達が来てるのよ！確かあんたら陸士１０８部隊所属の筈でしょ？」
「あぁ、実はなぁ・・・」

號が説明しようとした。だが、それを突如鳴り響いた警報が遮る。
部屋全体を赤い警告色の光が照らし出す

「どうやらお話は敵さんを片付けてからになりそうだな」
「そうね・・・って、あんたらじゃ機鋼獣に勝てないわよ！」

ティアナの言うとおりである。現存する魔道士では機鋼獣に勝てる見込みはほぼ０（ゼロ）なのだ。しかも號達は余り魔力値は高くない。良くて以前のティアナと同じかそれ以下だ。今の地位に居られるのは彼等の身体能力の高さが成せる技とも言える。そんなティアナの心配を他所に號達はニヤリとする。

「おいおい、何で俺達が此処に召集されたか分からないのか？」
「え？どういう事？」
「見せてやるよ！ミッドチルダで作られた俺達魔道士達の切り札『ゲッターロボ號』を！」

出撃、その名は『ゲッターロボ』　中篇（後書き）

次回、いよいよゲッターロボ始動！

出撃、その名は『ゲッターロボ』　後編（前書き）

遂に出撃、その名はゲッターロボ號

出撃、その名は『ゲッターロボ』　後編

「ゲッターロボ號？」

號の口から放たれたその名前にティアナは首を傾げた
聞いた事が無い名前だ。最初に出会ったゲッターロボは全長５０メートルはある巨大なロボット「ゲッターロボG」であった。それぞれゲッタードラゴン、ゲッターライガー、ゲッターポセイドンに変形出来る特徴を持っていた
それから甲児達が遺跡の調査で行方不明になった後に戻って来た際に見たのはまるで一新したゲッターロボであった。名を「真ゲッターロボ」である。それぞれ真ゲッター１、真ゲッター２、真ゲッター３に変形出来るのだ。
だが、今號から聞かされたゲッターロボなど聞いた事は無い。それに先ほど聞いた「ミッドチルダで作られたゲッターロボ」と言っていた。まさか！ミッドチルダであれだけの質量兵器を製造出来る技術はある筈が無い。となると誰かが設計して作ったとなる。だが一体誰が？現状でそんな事が出来る人物と言えば此処に居る十蔵博士と剣造博士位である。だが、あの二人にはゲッターは専門外の筈、では誰が？

「ねぇ、一体誰が設計したの？」
「神隼人一等空尉さ！知ってるだろう？」
「神！まさか隼人さんが設計したの？」

驚きであった。まさかゲッターチームの隼人が設計したとは。そんな事は初耳であった。それもその筈である。実はゲッターロボ號は兼ねてより隼人が元の世界で設計をしていたゲッターロボなのだ。
だが、完成前に転移装置の実験に立ち会った為もとの世界で完成さ

せる事は出来なかったのだ。其処でミッドチルダに来てから残りの設計を行い遂に完成にまで漕ぎ付けられたのだ。

「でも神さん何時の間に作っていたんだろう？」
「何でも合間を縫って作ってたって言ってたぜ」
「知らなかった」

思わず顔をひくつかせてそう言う。本当に知らなかったのだ

「って事は今そのゲッターロボが・・・」
「勿論！何時でも出れる状態だぜ」

號は指を立てて自信有り気に答える
その顔はとても頼もしそうにも見えた

「ま、小手並拝見とさせて貰いましょうかね」
「うわ、上から目線かよ！！！」

生意気そうに言うティアナに號は引き攣った顔をする

「お喋りはお仕舞いにしてさっさと出撃しようぜ號」
「あいよ」

凱の言葉に號は元気良く答えて駆け出す

「それじゃティアナ、積る話しはまた後でね」
「えぇ、翔も気をつけてね」

翔はティアナにそう一言言って號の後に続いた
凱もまた「それじゃ」と一言言い残して去って行った

変わらないなぁ・・・そう心の中でティアナは思った

＊＊＊

「来たか」

格納庫には隼人が待っていた
だが、その姿は何時ものパイロットスーツでは無く白い白衣を身に纏った科学者のような服装であった

「隼人さん！その格好は？」
「今回出撃するのはお前達だけだ。残念だが他のメンバーの修理が終了してない上に新型デバイスはまだ実戦で使える保障は無いんだ」
「い、いきなりですか・・・」

突然言われた事実に號は眉を吊り上げた
だが、隼人はフッと笑う

「どうした？この程度で怯んでいたらゲッターロボになど乗れないぞ。これから先お前等にはもっと過酷な道のりが待っているんだ」
「そ、そうですよね・・・よっしゃぁ！此処で尻込みしてたらティアナやスバルに笑われちまうぜ！行こうぜ、翔、凱！」
「ええ、分かったわ」
「そうだな、やろう！」

號の言葉に翔と凱も頷く

「さて、お前達・・・此処に来る前に俺が渡した物は持ってるな？」
「はい、勿論です」
「これですね」
「肌身離さず持ってますよ」

そう言って三人は腰のホルスターからカセット状の物を取り出す
それには真ん中に「G」と書かれていた

「良いか、それはゲッターの起動キーだけじゃない。このミッドチルダを守る平和の鍵だ。それを手にした時からお前達は此処にある「ゲッターロボ」のパイロットに選ばれたんだ。その自覚を持って戦いに望め！良いな？」
「「「はい！」」」

はやとの言葉に三人が敬礼をして答える
その目は闘志で燃え上がっていた
それを見た隼人が頷く

「よし、ゲッターロボ発進！！」

＊＊＊

その頃、ミッドチルダの町では巨大なトカゲの化け物が暴れまわっていた
かつて地上を我が物にしようと襲ってきた怪物
恐竜に機械を埋め込んだサイボーグ怪獣「メカザウルス」である

「行けぃ！メカザウルスバド、ザイ、ズー！三大メカザウルスの力を愚かな人間達に見せてやれ」

町の中で一際高いビルの上でバット将軍が声高らかに命令を下す
それを聞いたメカザウルス達が咆哮を上げて付近のビルを吹き飛ばす
口から熱線を吐きミサイルを打ち出し強靭な尻尾で大地を抉る
管理局の魔道士達も事態の収拾に乗り出しては居るがメカザウルスには魔法攻撃が通用せず苦戦を強いられる
すると其処へ三機の巨大な戦闘機が飛来してきた
青、赤、緑の三色に分かれた戦闘機「ゲットマシン」である

「翔、凱、見ろよ！でかいトカゲが居るぞ！」
「酷い・・・町があんなに滅茶苦茶に・・・」
「くそぉ、メカザウルスめ」

メカザウルスに破壊された町を見て翔が思わず口元を手で覆い、凱が悔しそうに拳を握り締める

「やるぞ！これ以上あいつらの好き勝手にさせる訳にはいかねぇ！」
「そうだね。僕達の力を・・・ゲッターの力をメカザウルス達に教えてやろうよ」
「自分もやるぞ」

満場一致であった
それを聞いて號は頷く
そして腰に挿してあったカセットキー「Gフラッシャー」を持つ

「フルパワー・チャージイン！セェェットアァァップ！！！」

號ガ叫ぶ
それと同時に三人はGフラッシャーを挿入口に差し込む
それに呼応して計器の各所が輝く
起動した証である
それを見た號は息を大きく吸い目を見開く

「チェェェェンジゲッタァァァァァ號！！！」

三機のゲットマシンが空中で合体する
すると其処には青い機体色をした巨人が立っていた
大きさは２５ｍと従来のゲッターに比べると小柄である
が、其処から放たれる気迫は今までのゲッターに劣らない程である

「な、何だあれは？新しいゲッターロボか？」

バット将軍は突如現れたゲッターロボに驚く

「良く聞けメカザウルス！これは地上とミッドチルダの努力と技術の結晶が生み出した新たなゲッターロボ！その名も「ゲッターロボ號」だ！」

目の前に居る三大メカザウルスを指差しながら號が言った
それを聞いたバット将軍が眉を顰めた

「ゲッターロボ號だと？ふざけた名前の奴だ！そんなガラクタさっさと片付けてしまえぃ！」

バット将軍の言葉に反応してメカザウルスが襲い掛かる

「今まで町を壊してくれた礼だ！たっぷり食らいやがれ！ナックルボンバー！」

ゲッターロボの両の拳がジェット噴射を噴かせて飛び出す
弾道ミサイル並とも思われる速度で飛行した腕はそのままメカザウルスザイの巨体を吹き飛ばす
横倒しに倒れたザイがジタバタと足をばたつかせる
トリケラトプスをモチーフに作られた為か足が短く自力では思うように立てないのだ

「お次はこいつだ！ブゥゥメランソォォォォサアアアア！！」

拳を戻すと背中に取り付けてあった二本のファンを手に持つ
するとそのファンの周辺に鋭い刃物が浮き出る
それをザイ目掛けて投げつける
投げつけられた二本のソーサーはザイを何の苦労も無くズタズタに切り裂いた
切り裂かれたザイは断末魔の悲鳴を上げて爆発する
その光景に残っていたバドとズーが驚く

「號、次は僕にやらせて！」
「おう！空中の敵は任せたぜ！チェンジゲッターアウト！」

號が叫ぶ

するとゲッターロボ號が閃光に包まれていき、閃光が晴れた時には
再び三機のマシンになっていた

「行くわよ！チェンジゲッター翔！！」

翔が叫ぶ
そして今度は赤い戦闘機を筆頭に三機が合体する
赤い機体色に女性を思わせる細身のボディ合成の機体であった
合体した翔は悠々と空に舞い上がる
それを追うようにバドも上昇する

「空中でならこっちの物よ！ブラストボンバー！！！」

ゲッターロボ翔の胸に取り付けられたミサイルが放たれてバドを爆
煙に包み込む
その中から傷ついたバドが現れる

「これでトドメよ！トルネードアタック！！」

傷ついたバドにトドメと右腕に取り付けられていた巨大なドリルを
回転させて突っ込んでいく
その様は一瞬であった
正に一瞬の内にバドの体には巨大な風穴が開きゲッター翔の後方で
爆発した
残るは地上でミサイルを放っているズーだけである

「翔！あいつは俺にやらせてくれ」
「ＯＫよ凱！」

凱の申し出に翔が快く受けて再び三機に分かれる

「チェンジゲッター凱！！」

凱の叫びに呼応して今度は緑の戦闘機が先頭になり合体する
力強い巨大な腕とキャタピラを有したゲッターロボ凱である
ゲッターロボ凱はズーの目の前に降り立つ
そして2体はその場で腕を掴みあい押し合いになった

「パワーでこのゲッター凱に勝てると思うな！うおおおりゃあああああ」

雄たけびを上げてゲッター凱がズーを持ち上げて投げ飛ばす

「トドメだ！ブレストビィィィム！！！」

ゲッター凱の胸に取り付けられていた赤い放熱板から同じ色の熱線が放たれる
それは投げ飛ばされたズーに直撃し瞬く間にズーをどろどろに溶かしてしまった

「おぉ、何と言う事だ！前回の戦いでゲッターは出撃出来ないと聞いていたのに、あの様な新しいゲッターロボが完成しているとは・・・ええぃ今回は引き上げだ！」

マントを翻してバット将軍はその場から立ち去る
一方、地上では三大メカザウルスを葬った新しいゲッターロボに町の人々が歓喜の声を上げていた

「へへ、こうして町の人から喜ばれると鼻が高いぜ」

気を良くした號が鼻を擦る

「調子に乗ってたら駄目だぞ號。自分達はまだ先輩達から見れば新米のペーペーなんだからな」

「へいへい、相変わらず凱さんはお堅いお方で」

「まぁ良いじゃない。こうして私達の初任務は成功したんだから」

ゲッターロボの中ではそんな会話が飛び交っていた

それから少し遅れて甲児達を乗せたスカイホエールが到着する

「すげぇなぁ、あの三代メカザウルスを倒しちまったよ」

「本当ねぇ」

甲児とさやかは驚きの声を上げていた

「やれやれ、どうにか使い物にはなるみたいだな・・・だが、まだまだ甘いな」

「え？そうでしたか？」

ゲッターロボ號の戦い振りに不満の声を上げる隼人

その横ではエリオが首を傾げていた

「ああ、合体のスピードがコンマ2秒遅い。あれじゃ落としてくれと言っているような物だ」

「こ、コンマ2秒って・・・細かすぎません？」

其処まで言うかと言いたげな顔でなのはが聞いた

だが、其処ではやとがフッと笑う

「甘いなのはちゃん。俺達ゲッターの最大の弱点は合体の最中な

んだ。其処を狙われたら一巻の終わりなんでな。コンマ2秒の遅さでも死に直結する事がある」
「き、厳しいですね」
「フッ、さて、帰ったらあいつ等には今以上の地獄を思い知らせてやるか」

そう言って隼人はフッと微笑んでいた
その眼下では未だにゲッターロボが町の人々に手を振っているのであった

出撃、その名は『ゲッターロボ』　終

次回予告

さて、次回はゲッターロボ號と真ゲッターロボの模擬戦だなぁって、リョウ達何本気になってんだ?
え?ゲッターロボの最大の弱点を補う為の特訓だぁ!
気持ちは分かるけどやりすぎるなよなぁ

次回「激突!ゲッター対ゲッター」

次回もこの小説にテイィィィィクオォォォォォォフ!!

出撃、その名は『ゲッターロボ』　後編（後書き）

次回はゲッター対決

外伝9　なのはとユーノをくっつけちゃおう大作戦（前書き）

今回甲児達が暴走します

外伝9　なのはとユーノをくっつけちゃおう大作戦

その日、甲児は無限書庫に来ていた
一つは無限書庫にある書物を読むためである
そしてもう一つの目的が

「久しぶりだなユーノ」
「あ、お久しぶりですね。甲児さん」

そう、此処無限書庫の所長を務めている「ユーノ・スクライア」に会うためである
ユーノと甲児はかつて１０年前の戦いで共に戦った仲でありお互いに面識があった
その為普通なら厳重なパスが必要な無限書庫も甲児は難なく入れたのだ
早速甲児は手ごろな書物を手元に持ってきて読み漁る
その横でユーノはいそいそと作業を進めていた
その時、ふと甲児は思った

「ところでユーノ。お前あの後なのはちゃんとは何処まで行ったんだ？」

その一言を聞いた途端ユーノは思い切り前のめりに倒れて持っていた書物をばら撒かせる
そして落とした眼鏡を急いで探して掛ける
明らかに動揺しまくりである

「い、いきなりなんですか？甲児さん！」
「惚けたって無駄だぜ！どうなんだよ？なのはちゃんとは良い仲ま

で行ったのか？」

ニヤニヤしながらユーノを問い詰める
しかし帰ってきた言葉は以外な物であった

「えっと・・・僕もなのはも忙しいんで中々会えないんですよ」
「え？それじゃ何？お前等あれからなぁんにもしてないの？」
「え、えぇ・・・」
「デートも？」
「はい」
「食事も？」
「はい」
「もしかして・・・チューも？」
「は、はい／／／／／／」

頬を赤らめて答えるユーノ
それを見た甲児の額に青筋が浮ぶ
そして

「この馬鹿野朗うううううううううう！」

と叫んで思い切りユーノを殴り飛ばす
殴られたユーノはそのまま背後の書物に突っ込んで行きぶつかった箇所の本が散らばる

「な、何するんですか甲児さん！」
「うっせぇ！てめぇそれでも男か？良い年してデートに誘わないなんざ肝っ玉のねぇ奴のする事だぞ！」
「そ、そんな事言ってもお互い時間が取れない物ですし」

ガツッ

言葉の途中でユーノは自身の襟首を思い切り捕まれる
そして甲児の目の前に持って来られた
その顔は明らかに不機嫌であった

「ユーノ・スクライア・・・今からてめぇを強制連行する」
「えええええええええええええええええ！な、何でですか？」
「うっせぇ！てめぇみたいなナヨナヨ野朗を男に改造してやる」

そう言ってユーノの言葉も空しく甲児によって連行されて行ったユーノであった

＊＊＊

「と、言う訳で今から『第1回なのはとユーノをくっつけちゃおう大作戦』を決行する！」

此処はとある部屋
其処では甲児が壇上に立ち宣言し、その周りにはユーノを中心に剣児、ティアナ、セイン、クアットロ、ウェンディ、ボス、ヴァイス、はやてのメンバーが居た

「あのぉ・・・何ですかこの集まりは？」
「決まってるだろう！何時までも受けのてめぇを男にしてやるんだよ」

壇上に立っていた甲児がビシッとユーノを指差す

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！何でそんな勝手に・・・」
「良いかユーノ！なのはちゃんはなぁ、お前の事を待ってるんだよ！顔では平然を装っているけど、心ではお前が積極的に来るのをずっと待ってるんだよ！」
「その通りだぞユーノ！てめぇ何時までも手を出さねぇんなら俺が貰っちまうぞ！」
「お前にはつばきが居るだろうが！ってか黙ってろこの馬鹿剣児」
「んだとこの馬鹿甲児！」

そう言ってお互いに取っ組み合いの喧嘩に発展してしまった
そんな二人を置いておいて次に壇上に上がったのはクアットロであった

「良いですかユーノさん・・・このままの関係がずっと続くと、いずれなのはさんは貴方を見限って他の男の人の元に行っちゃう可能性がありますよぉ」
「えぇ！で、でも・・・それでなのはが幸せなら僕はそれで・・・」
「光子力ビーム！！」
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

何処から出したのか甲児が光子力ビームをユーノに向けて放つ
それを浴びたユーノが黒こげになった

「甘いぞユーノ！想像してみろ！お前の前に見知らぬ男と腕を組んだなのはちゃんが居てそして『私この人と結婚する事になったの』って言ってる場面を！」
「ば・・・場面？」

ユーノの脳裏には甲児の言われた通りの場面が連想された
其処には顔が分からない為モザイクが掛かった男と親しげに腕を組んで歩いてくるなのはの姿があった
そしてなのははユーノに向かってこう言い放った

「私達ずっとお友達でいようね。ユーノ君」

その一言は正に男にとっては処刑宣告でもあった
それを聞いたユーノは奈落の底に落ちていく気持ちになっていた

「うわあああああああああああああああああああああああああ！」

大声で叫び頭を抱えるユーノ
それを見て面白そうに笑うクアットロが居たがとりあえず無視しておく
そんなこんなでユーノを男にする特訓が始まった

「まず第一にデート選びだ！おいユーノ。お前ならなのはちゃんを何処に連れて行く」

再び壇上に立った甲児がユーノを指差す
それを受けたユーのがうーんと考え込んだ末の答えが

「プラネタリウムとかですかね」

「ロケットパアアアアアアアアンチ！！！」
「のぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」

今度はまた何処から出したのか聞きたくなるような感じで甲児がロケットパンチを繰り出しそれを直撃したユーノが再び吹き飛ぶ

「アホか！何が悲しくてプラネタリウムなんぞ行かなきゃならんのじゃ！星をバックに正座して語ろうってか！地味過ぎるわ！」

額に青筋を浮かべて甲児が怒鳴る

「っつぅ訳でユーノは頭が固すぎる！そこで柔軟な諸君にどんな場所が良いか聞きたい！」

と周りにネタをフル
すると一斉に手が上がった

「んじゃまずティアナ」

まずは軽いジャブと言いたげにティアナを指名した

「やっぱり定番と行ったら海でしょう！」
「お、良いねぇ！なのはちゃんの水着姿とか拝めるし、んじゃ次」
「ゲーセンとかどう？」
「う～ん、今一だなぁ」
「高級レストランとか」
「雰囲気は良いが大人すぎるだろう」
「山」
「疲れるわ！」

「虚数空間」
「殺す気か！」
「時の庭園」
「俺が塵に変えちまったよ！」
「動物園」
「ガキ臭いなぁ」
「遊園地」
「う～ん微妙」

とか色々意見が出されたが、まぁ最後は本人に決めてもらおうって事で次に移った

「ユーノ！まずはこれを見ろ」

と言って黒板に張られたのは甲児が愛読している週間グラビア雑誌の見開きを拡大コピーした一枚であった
因みに映っているのは水着を着たなのはである

「お前これを見てどう思う」
「えぇ？えぇ～と・・・楽しそうだなぁ・・・と」
「サンダーブレーク！！」
「うぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」

これまた何処から出したのか問いたくなるような感じでサンダーブレークを放たれる
それを食らったユーノはこれまたこんがりとなった

「大馬鹿野朗！普通水着姿の彼女を見たら「似合ってるよ」とか「綺麗だね」とか言うもんだろうが！何だよ楽しそうだなぁってのは、

お前の脳みそを一辺見てみたいわ！」

これまた額に青筋を浮かべた甲児が怒鳴る

「甲児くぅん、ユーノ君は元々初心だからいきなりそれはハードル高すぎるんじゃなぁい？」

「そうッスよ！ユーノの旦那じゃそれが限界ッスよ」

「そうそう」

等とクアットロ、ウェンディ、セインの三名が言う

「いやぁにしてもユーノも頑張らないと取られちまうんじゃねぇの？」

「そうそう、要らないなら俺が貰っちゃうわさ」

「いやぁ、ボスじゃ不釣合いやろう」

その横に居たヴァイス、ボス、はやても言う

お前等少しは気を使えよ

既にユーノの体力はゼロだぞ

「ったく、しょうがねぇなぁ・・・そんじゃ今から全員でユーノに特訓を仕込むぞ」

甲児の言葉に皆が「お～～」と拳を振り上げた

そして、それからユーノにとって大変な一日が始まった

脆い吊橋の上でバンジージャンプをしたり、熊と素手で格闘したり、ジェットコースターを２４時間乗り続けたり、鮫の居るプールを泳いだり、猛獣の居る檻の中で一日過ごしたり、逆立ちしてラーメン食べたり、大気圏ギリギリからパラシュートダイビングをしたり、

等など凄まじい特訓が行われていた
その地獄の特訓のせいでユーノはボロボロになって倒れていた

「さて、次は何やる？」

そんなユーノを尻目に甲児達は楽しそうに話し合っていた
しかし、そんな彼等にも地獄はやってきた

「何やってるの？甲児君達」
「え？何ってユーノを鍛え上げるってぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」

甲児達は肝を潰された思いであった
それもその筈である
何故なら目の前にはマジ切れ寸前のなのはが立っていたのだから

「皆してユーノ君を虐めて・・・少し・・・頭冷やそうか？」
「退避！退避いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

甲児の言葉を皮切りに皆一斉に逃げ出す
しかし

「ブラスター３！スタァァァライトォォブレイカアアアアアアアアアア！！！」

怒りのなのはの一撃が放たれる

『ぎゃあああ！！！』

それを受けた甲児達が真っ黒こげになって倒れる
そんな甲児達は無視してなのははユーノの元へ行った

「ユーノ君！大丈夫？」
「う、うん・・・大丈夫だよなのは」
「あぁ、良かった・・・ユーノ君にもしもの事があったら・・・私・・・」
「え？」

思わず本音を出すなのはに驚くユーノ
どうやらこの二人に余計な介入は寿命を縮めるだけらしい
そう思う甲児達であった

外伝9　なのはとユーノをくっつけちゃおう大作戦（後書き）

人の恋路に横槍を入れるのは注意しようね

激突！ゲッター対ゲッター　前編（前書き）

今回やっと新デバイスが登場します

激突！ゲッター対ゲッター　前編

戦闘を終えた號達はスカイホエール内に帰還していた

「どうだ！見たかティアナ！俺達の実力を」

戻ってきてそうそう號は得意げな顔をしていた

「何言ってるの！そもそもあんたの実力じゃなくてゲッターロボのお陰でしょうが」

そんな號にティアナが厳しい言葉を投げかける
それを言われては返しの言葉が無いと萎(しお)れてしまう號

「でも思ったけどよぉ、凱ってリョウ君と声似てないか？」

「あ、そう言えば私もそう思った」

甲児の言葉にアリシアが反応する
やはり竜馬が好きなだけに反応も大きいみたいだ

「そんなに自分の声は似てますか？」

「ああ、似てるなぁ」

「今こうして目の前で話し合っていたってどっちが話してるか分かり辛いからなぁ」

凱と竜馬の問いに隼人が答える

「でもそれ言ったらノーヴェやクアちゃんの声ってスバルに似てるよなぁ」

「今更な事言うな甲児くん」

本当に今更であった

「他にも似てる奴って居るよなぁ」

「フェイトちゃんとアリシアちゃんが同じなのはまぁそうだとしても」

「エリオとチンクが似てるのって以外だよなぁ」

「そうですか？」

「そんなに僕達って似てます？」

エリオとチンクがそれぞれ首を傾げる

「それを言ったらつばきちゃんとはやてちゃんって声似てるわよねぇ」

「ああ、初めて声聞いた時には驚いたぜ」

剣児が頷く

「まぁ声が同じなのって結構居るんだなぁ」

「あぁ、以外と多いな」

「でも以外なのって言ったら鉄にぃが甲児さん達より一つ上ってのが以外ッスねぇ」

「どう言う意味だ？」

ウェンディの言葉に鉄也が首を傾げる

「だって鉄にぃって結構の老け顔じゃないッスか。どう見ても２０代後半にしか見えないッスよぉ」

「う！結構気にしてたんだがなぁ」

どうやら自分の顔は結構気にしていたらしいようだ
そしてウェンディに突っ込まれて軽いショックを受ける
体は強靭でも心はガラスのハートらしい

「あらあら、鉄也しっかりしなさい」
「そうだよ鉄也パパ」

落ち込む鉄也にジュンとヴィヴィオが慰める

「でも凄いですね。まさかミッドチルダと地球の技術が集結してあんなロボットが完成するなんて凄いですぅ」
「あぁ、それにはあたしも凄いと思うよ」

リインとアギトがゲッターロボ號を見て本音を言う
確かにミッドチルダでは魔法技術が発達しているが前にも言った通りマジンガーのようなロボットを作る技術は遅れているのだ
だが、科学技術は発展しているので設計図さえあれば製造はそれ程苦労はしなかった
だからこそゲッターロボ號の完成が思ったよりも早くできたのだ

「しかしあのゲッターロボはエネルギーが違う気がするのだがあれは一体何で動かされているんだ？」
「トーレ姉には分かるんですか？」
「あ、私もそう思いました」

トーレがゲッターのエネルギーが違う事に気づきその問いを聞いてオットーが驚きディエチが同意した

「ああ、あれはプラズマ駆動を使用しているんだ。だからゲッター

線ほどエネルギーは無いが比較的安全ではあるぞ」
「え?それってゲッター線は危険だって事なのか?」
「まぁな、使い方を間違えると下手したら星ひとつ吹き飛ばす恐れがある物だからな」
「真ゲッターでさえもまだゲッターエネルギーを全て使っているとは言い切れないからな」

隼人がエネルギーについて言う
確かにゲッター線は未だ未知の部分が多い
それこそ人類の科学者が全て勢ぞろいしても解明するには何世紀も掛かる程だと言われている
だが、早乙女博士はそれを解明しエネルギーに変換し宇宙開発用ロボットとして当初はゲッターロボを作った
だが、恐竜帝国の進撃に際し急遽戦闘用に改造したのだ
その後、元ゲッターチームの一員である巴武蔵の死によって恐竜帝国は滅び、次なる強敵の戦いに備えてゲッター線増幅装置を開発し、従来のゲッターの１０倍のパワーを誇る新たなるゲッターロボ「ゲッターロボG」を作り新しく入った新メンバー車弁慶と共に百鬼帝国を滅ぼしたのだ
しかし謎が多いのは今使っている真ゲッターである
それは突如竜馬達の前に現れた旧ゲッターの自爆に巻き込まれて異空間に飛ばされた際に武蔵と出会いゲッターロボGと引き換えに受け取ったのだ
現在隼人と剣造達と共に真ゲッターの解明をしているが殆どがブラックボックスで包まれている為解明が遅れている始末だったのだ

「だがやはり謎なのはあのゴッドマジンガーだな」
「そうなのかい?お父さん」
「どう言う意味です?所長」

剣造の言葉に甲児と鉄也が問う

「うむ、あのゴッドマジンガーもデビルマジンガーも元は私達の居た世界で作られたマジンガーなんだ。それが時空転移したとは聞いたがまさかこの世界に来ていたのは驚かされたよ」

「ま、確かになぁ。あれにはワシも度肝を抜かれたわい」

剣造の肩に乗るようにしていた十蔵が呟く

そうだ、元は兜十蔵の父でありロボット工学の神と言われた男「兜原蔵」がデビルマジンガーを作った事から始まったのだ

そしてそれを阻止する為に剣造は父十蔵、そして妻の翼と共にデビルマジンガーと同等の力を持つと言われるマジンガー「ゴッドマジンガー」が作られたのだ

だが、製作が急であったのと精神増幅装置が不完全であったのが災いしゴッドマジンガーは事実上未完成であったのだ

その2体が激しくぶつかりあった結果時空転移が起こってしまいデビルマジンガーとゴッドマジンガー、そしてそれに乗っていた原蔵と翼は異世界に飛ばされてしまった

また、それが元で剣造は重傷を負い父十蔵は片目を失った

十蔵は剣造を生かす為にサイボーグに改造し、十蔵は2代目マジンガーとしてマジンガーZを

剣造はミケーネ帝国に対抗する為にグレートマジンガーを作った

そして今、剣造の元には妻翼の残した最後にして最強のマジンガー「マジンカイザー」の設計図がある

だが、剣造は未だにそれを作る事を躊躇っていた

それはそのマジンガーが危険過ぎるからだ

性能を見ただけでも震えが止まらなかった

下手をすればそれこそ星一つ破壊出来る力を有しているからだ

もし力の使い方を誤ればミッドチルダは死の星になってしまう

それだけは避けたかった

だから剣造は出来る事ならマジンカイザーは作りたくなかった
もう翼の二の舞は作りたくないのだ
剣造の胸中はそんな思いで一杯であった

「そう言えばよぉスバルはどうしたんだ?折角懐かしい顔が来たってのに」

號は辺りを見回して言う
それを聞いた皆が暗い顔をする

「そう言えば居ないわね?何時もなら五月蝿い位元気な声で来る筈なのに?」
「飯の食いすぎで倒れたのか?」
「まさかぁ?アイツが倒れる程って言ったら相当な量だぜ」

凱の言葉に號が肩を上げる

「やれやれ、そう言やぁお前等まだ聞いてなかったんだっけなぁ」

暗黒寺が面倒臭そうに頭を掻く

「まだ?何がですか?」
「スバルは前回の戦いで負傷したのよ。今多分まだ医務室に居ると思うけど」
「え?それ本当ですか?ギンガさん」

凱が目を見開く

「こうしちゃ居られないぜ!早く戻ろうぜ」
「無茶言わないでよ!これでも全速力で戻ってる最中なんだから」

號が無茶言うのにクアットロが肩を上げる
今現在スカイホエールは最大船速で地下基地に向かっているのだ
それには仕方ないなと號は手を目の前に叩き付けて目を瞑った

＊＊＊

「失敗したようだなバット将軍よ」
「は、申し訳ありません帝王ゴール様」

バット将軍は方膝を着いて跪いた
その目の前には巨大なカプセルの中に巨大な脳が浮んでいた
この脳こそかつてゲッターチームと雌雄を決した恐竜帝国帝王ゴールなのだ
元居た世界で武蔵の死と引き換えにその命を散らしたゴールであったが、管理局の上層部がゴールを利用しようと密かに回収したのだ
それはブライ大帝、そして闇の帝王も同じであった
だが、飼い犬に手を噛まれるとはこの事であった
利用しようとしていたのが逆に利用されていたのだ

「レジアスは最後までわし等の尻尾を掴もうとしていたが所詮人間よ。彼奴には全て掴む事は叶わなかったようだな」

「はい、それに管理局の殆どは百鬼帝国が抑えてあります。直にあのマジンガー達も動きを封じられるかと思われますぞ」

ゴールの隣には髭を生やした小柄な老人が立っていた
科学者でありメカザウルスを製造する事を仕事にしているガリレイ博士である

「百鬼帝国のグラー博士とは何かと馬が会うのでなぁ、今度ゆっくり話がしてみたいわい」
「ふむ、それならワシもあのヒドラー元帥と話をしてみたい物だ。あの男もまた将軍の器を持つ者だからな」
「しかし問題はあの新しいゲッターロボよ。何時の間に完成させていたのだろうか？」
「なぁに、幾ら新しいゲッターを作ったそうだが合体スピードが弱冠遅い。恐らく乗っているのは素人であろう」

バット将軍が言う
それを聞いたガリレイとゴールが微笑む

「ふむ、となれば仕留めるのは容易い事だろうな」
「はい、合体が遅いのはゲッターにとっては致命的です。其処を突けば新しいゲッターと言えども容易い物だろう」

それを言った途端部屋内に三人の笑い声が響き渡った

＊＊＊

「あ、號！それに皆も久しぶりだね」

無事に帰ってきた號達はすぐさまスバルの居る病室に来ていた
其処では全身を包帯で巻かれており片目を塞がれたスバルがベットで寝ていた
そんなスバルを見て號達ゲッターチームは目を見開いた

「スバル！お前その怪我はどうしたんだよ！？」
「えへへ、ちょっとヘマしちゃってね」
「ちょっとって・・・ちょっとじゃないわよ！大怪我じゃない！一体どうしたのよ」

翔は驚いていた

「自分でも分かるよ！一体どんな相手でそんな大怪我を負うんだい？巨大なロストロギアとでも戦ったのかい？」

凱が聞く

「皆、悪いけどスバルもまだ怪我が癒えてないからあんまり質問攻めは止めてくれない」
「えぇ、私は大丈夫だよぉティア」
「何言ってるの！一週間生死の境を彷徨っていた重傷人が何言ってんの」
「な、生死を彷徨っていた！」
「其処まで酷かったなんて」

それには號と凱も驚く

「ええ、何せ運ばれてきたスバルを見た時にはエリオは真っ青になってキャロは大泣きしちゃったもんね」

ティアナの言う通りであった
初め此処に運ばれてきた際のスバルを見た時にはエリオは真っ青な顔になりキャロは大粒の涙を流して泣いてしまったのであった
何しろ幾ら話し掛けても揺さぶっても反応一つ示さなかった為本当に死んでいるのでは無いかと思えた程だったからだ
しかし今こうしてどうにか意識を取り戻して無事に回復しだしているのだ
シャマルの話では後1週間もすれば復帰出来るそうだ
しかしそれまでは絶対安静とされている
その為スバルは退屈な日々を送っている
勿論出来る限りのトレーニングは行っている
が、今まで行ってきた内容に比べると微々たる物だ
このままの日々が続けば退屈の余りバターになってしまいそうだ
そう思えた

「さ、面会はこれ位にして私達はこれから特訓をしましょう」
「え?って事はもう完成したんですね」
「そう、私達の新しいデバイスが完成したみたいよ」
「うわぁ楽しみだなぁ」

エリオは嬉しそうに答える
これでまた戦える
そう思うと嬉しさがこみ上げてきたのだ

「あ、特訓するの?それじゃ私も・・・」

「何言ってるの！怪我人は大人しくしてなさい！」
「え～、ぶ～！」

頬を膨らませて不満そうにするスバル
しかしそんなスバルは無視して部屋を出ようとする
號達もとりあえずそれに続く

「そう言えば隼人さんが言ってたなぁ」
「何を？」
「俺達ゲッターチームの特訓をするって」
「へぇ、あの竜馬さん達に直々に仕込んでもらえるなんて感激だなぁ」

號は嬉しそうに呟く

「んじゃ早速行きますか」
「元気ねぇ號は」
「そうねぇ、まるでスバルが二人居るみたいよ」
「あら、それは疲れるわね」

ティアナの言葉に翔は笑みを浮かべる

「うげぇ、酷いぜ二人とも」
「そうだよぉ、そんなに私と居ると疲れる？」
「ええ、かなり疲れるわね」
「「あうぅぅ」」

正に慈悲の言葉も無かった
そんな厳しい二人の言葉にスバルと號はしおしおと萎れてしまう
そんな二人を見てエリオは苦笑いを浮かべる

「さ、モタモタしてないで早く行きましょう」
「そ、そうだね」
「はぁ・・・何か酷いな二人とも」
「そ、それじゃスバルさんお大事に」
「う～～」

明らかに號とスバルは意気消沈していた
それ程までに先ほどの言葉は二人の胸に突き刺さったようだ

＊＊＊

「来たか」
「遅いぞお前等」

特訓場に来た號達に隼人は言った

「すいません」

それに號達も謝罪の意を示す

「さて、それじゃ號くん達は竜馬さん達と模擬戦を行うから、私達

は私達の特訓をしましょう」
「なのはさん、って事は私達のデバイス完成したんですね」
「ええ、後は試運転をするだけだよ」

なのはが言う
そしてティアナとエリオの二人にそれぞれ待機状態のデバイスを渡す
形は以前と何ら変わりは無かった

「待機状態に変わりは無いんですね」
「流石に其処までは弄ってる時間無かったみたいだから」
「でも外見や威力は大きく変わってるみたいだよ」
「へぇ、なのはさん。これ起動させてみて良いですか？」

エリオの目が早速輝いていた
まるで新しいオモチャを貰った子供のようである

「そうだね。準備万端みたいだし起動させてみて」
「名前はティアナのは「バスターミラージュ」そしてエリオのは「ザンクーガ」だよ」

隣に居たフェイトが言う

「キャロのは外見の変化は無いけど内面的には大きくパワーアップさせてるよ」
「その分扱いが難しくなってるから注意してね」
「「「はい」」」

注意を促したフェイトに三人が大きな声で返事をする

「ゲッターチームはこれから俺達と模擬戦を行うから直ちに機体に

搭乗して貰うぞ」
「はい・・・って、竜馬さんが相手って事はもしかして真ゲッターと戦うんですか？」

そう思った號は青ざめた
無理も無い話だ
真ゲッターの凄さは既にミッドチルダ全域にも知れ渡っている
特に闇の書事件の際に現れた真ゲッターは正に鬼神の如き強さであり魔法ランクSはあろう妖獣シャドウを容易く撃破していく様など魔道士であれば背筋を凍らされる思いであった
それは號達も同じであり真ゲッターが模擬戦の相手だと知った際には顔面蒼白していた
そんな號達を見て竜馬は笑う

「心配しなくて良いよ。真ゲッターの出力は３０％にまで落とすから能力的にはゲッター號より少し劣る位になるさ」
「って、３０％で互角ですか！」

ゲッターロボ號は真ゲッターには足元にも及ばない事に正直少し落胆する號

「まぁ仕方無いさ。まだゲッター號にはゲッター線を積んでないからそこで差が出てしまいのさ」
「つくづくゲッター線って凄いですねぇ」

凱は改めてゲッター線の凄さに驚きの顔をする

「さぁ無駄口は其処までにして早速模擬戦を始めるとしよう」

竜馬は手を叩いて皆に指示を送る

それに呼応するようにティアナ達も訓練場に向かう

「それじゃ早速起動させて見ますか」

「ええ、そうですね」

頷いて三人はデバイスを起動させる

キャロのデバイスは外見に変化は無かったがそのデバイスから伝わる力は相当な物になっていた

また、外見が大きく変わっていたのはティアナとエリオのデバイスであった

まずティアナのデバイスは従来の小型拳銃型からリボルバー型の拳銃と剣が合わさった形、簡単に言うと銃剣に似た形状であった

大きさは丁度両手で持てる剣の大きさであった

遠距離戦闘も近距離戦闘もこなせる様に改良を行った形状なのだ

エリオのは身の丈以上はある大太刀であった

しかしその太刀の身の厚さは相当な物であり従来の太刀の数倍は身が厚かった

逆刃の部分にはのこぎりに似た刃が付けられており其処でもかなりの威力誇っているのが見て取れた

以前エリオが使っていたストラーダは槍状だったのに対しこちらは大太刀と明らかにフルモデルチェンジが施されていた

エリオとティアナのデバイスのどちらからも作った者の熱意や想いが伝わってくる感じであった

そして何よりもこうしてデバイスを握っているだけで力が湧き上がる感じになってきたのだ

「凄い・・・こんな凄いデバイスになるなんて」

「思い切り形状が変わってますね」

それにはエリオとティアナの二人は驚きが隠せなかった

「能力もパワーアップしてるけどその変わり扱い辛さも向上してるから使い方には充分注意してね」
「それと、今回の訓練ではなのはの他にヴィータとシグナムも加わってくれるよ」
「え？副隊長達もですか？」

フェイトの言葉にエリオは驚いた

「ああ、事態は急を要するからな。我々も出来る限り手伝おうと思ってな」
「だから今回は徹底的にやるから覚悟を決めろよな」

そう言ってるシグナムとヴィータの二人は既にデバイスとバリアジャケットを展開していた
なのは、フェイトも同様である

「3対4で不利かも知れないけどティアナ達ならきっと覆せるよ」
「けど、油断してるとぶっ倒すから気を引き締めて行けよ」
「「「はい！」」」

ヴィータの言葉に三人は大きく返事した
そして、ティアナとエリオの二人も早速バリアジャケットを展開したしかしその姿は明らかに変わっていたのであった
まずティアナのバリアジャケットはF〇？の「ス〇ール」と同じ形のバリアジャケットになっており
エリオはス〇ロ〇に出てくる「フォ〇カ」と同じ形のバリアジャケットになっていた

「な、何かこのバリアジャケットって・・・・」

「作者の趣味が出てますね」

うっさいよ其処の二人

そんな感じで新しいデバイスとバリアジャケットを手に入れたフォワードメンバーは早速隊長陣と模擬戦を行う事になった

そしてそれは上空に居るゲッターチームも同じ事でもあった

激突！ゲッター対ゲッター　前編（後書き）

今回新デバイスについて軽く紹介します

ティアナの新デバイス

「バスターミラージュ」

形状はF〇？に出てきたガンブレードとほぼ同じ
銃撃も斬撃もこなせる万能武器である
また以前ティアナが使っていた幻術も使用可能である
来るべき決戦に向けて元のクロスミラージュを分解して改良した形態が、その分魔力コントロールが難しく暴発し易くなった為扱いが難しい代物でもある

エリオのデバイス

「ザンクーガ」

名前の由来は以前も触れたとおりあるスーパーロボットから取ったそして武器の外見は「マジ〇カ〇ザーS〇L」に出てくる「牙斬刀」と同じ形状をしていた
当然性能も同じであり柄部は伸縮自在であり従来の槍の扱い方も可能である
威力が増大した代償として振り回しに隙が出来てしまいまた重さも増している為扱うのにかなりの熟練が必要になった
以前の使用していた魔法も使用可能になってはいるがやはり魔力コントロールに難があり扱いが難しい

激突！ゲッター対ゲッター　後編（前書き）

特訓です

激突！ゲッター対ゲッター　後編

「それじゃ今から訓練を始めるぞ」
「あのぉ、竜馬さん・・・さっき渡されたこのアイマスクは一体なんですか？」

號達の手には分厚いアイマスクが握られていた
それこそ被れば視界はゼロになる位の厚さである

「決まってるだろう。今からそれを付けて合体するんだよ」
「「「えええええええええええええええええええ！！！」」」

隼人の言葉に號、翔、凱の三人は声を上げる

「む、無理ですよ！目隠しして合体するなんて絶対無理ですよ！」
「そう思えるか？」

號の言葉に竜馬がフッと笑って見せた
そして、あろう事か竜馬、隼人、弁慶の三人は號達の目の前で堂々と会いマスクを被ったのだ
しかしそれでも三人は操縦桿を握る手を離さないでいた
それどころか目隠ししたまま悠々と空に舞い上がっていったのだ

「隼人、弁慶、いけるか？」
「誰に言ってるんだ？」
「余裕だぜ」

竜馬の問いに隼人と弁慶はフッと笑って言った

そして三機の真ゲットマシンが一列に並ぶ・・・そして

「チェンジ！真・ゲッター１！スイッチＯＮ！」

竜馬が叫びと共に三機のゲットマシンが一体のロボットになった
ゲッター１である
その合体スピードは僅かコンマ２秒であった
凄まじいスピードである
しかも目隠ししてそのスピードである
しかし、当の竜馬は少し不満気であった

「おい弁慶！合体のタイミングが少し遅かったぞ」
「いやぁ悪い悪い。ちっとばかし手元が狂っちまったよ」
「しっかりしろよ弁慶。後輩達が見てるんだぜ」

どうやら弁慶が少しミスをしたらしい
その為予定していた時間より僅かに遅かったらしい

「って、あんなに早く合体したってのにあれで不満なんですか？」
「あぁ、あれじゃ遅い位だな」

號の問いに隼人が答える
それを聞いた三人が青ざめる
人間技じゃない
そうさえ思えたのであった

「さぁ、今度はお前達の番だ」
「アイマスクを装着して合体するのを忘れるなよ」
「は、はい・・・」

いきなりの無茶振りに少し怯み気味の號であった
しかし言われた通りに三人はアイマスクを装着する
視界一杯が暗闇に覆われる
最早何処にどのボタンがあるか手探りで探すしか無くなってしまった
そのせいか三機のゲットマシンは空中をフラフラ飛行している

「おいおい、何だよあの飛行は」
「しょうがないさ隼人。いきなり目隠しして合体しろって言うんだから無理もないさ」
「俺何か目隠ししてなくても合体出来なかったしな」

竜馬達は號達のフラフラした飛行を見てふと懐かしさがこみ上げてきた

「くそ・・・目の前が真っ暗で何処を飛んでるかさっぱり分からない」
「號、凱、何処に居るの？」
「じ、自分にもさっぱり分からない！」

どうにか操縦桿を握ってはいる物のお互いの位置が特定出来ず未だに苦戦している

「一体・・・一体どうやって竜馬さん達は目隠しして合体したんだ？」
『それはお互いを信頼しているからだよ號』
「竜馬さん！」
『合体に必要なのは腕前でも性能でもない。お互いのチームワークなんだ。仲間を信頼していれば例え視界を封じられていても合体出来るんだ』
「チームワーク・・・分かりました！竜馬さん」

通信モニターに映し出された竜馬に號は答える
だが、目隠ししている為顔は見れなかったが號には今竜馬がどんな顔をしているのかハッキリと脳裏に映っていた

「翔、凱、俺にお前達の命を預けてくれ！」
「良いわ」
「自分の命・・・お前に預けるぞ、號！」

三人が互いに通信機で言い合う
そして三機のゲットマシンが遂に一列に並んだのだ
それを何も使わずに感じ取った

「分かる・・・分かるぞ！計器を見なくてもそう感じ取れる・・・これがチームワークの成せる技なんだな」
『その通りだ！合体のスピードを上げる方法は熟練じゃない。お互いを信じあうチームワークなんだ』

竜馬が言う
それこそが竜馬達の合体の速さの秘訣だったのだ

「よし、行くぞ！チェンジゲッター號！！！」

號の叫びと共に三機のゲットマシンが一体のロボット「ゲッターロボ號」になれたのであった

「出来た！目隠ししてでも出来た！」
「良くやったぞお前達」

竜馬が號達を賞賛する

それを聞いて少し恥ずかしそうな顔をする三人

「へへ、これで竜馬さん達の特訓は完了ですね」
「何言ってるんだ？本当の特訓はこれからやるんだぞ」
「へ？」
「目隠しを取れ！今から本格的な模擬戦を行うぞ」
「は、はい」
「はいじゃない！『ラジャー』もしくは『了解』だ！」
「は・・・ら、ラジャー！！」

完全に竜馬のペースに巻き込まれる號達であった
そして特訓は地上でも行われていた

「はあああああああああああああ」
「おりゃあああああああああああ」

シグナムとヴィータが遠慮なく得物を振り回す
それに対しエリオは苦戦を強いられていた

「くっ、ストラーダとは勝手が違うから扱い辛い・・・」

そう、以前のストラーダは槍状であったのに対しザンクーガは大太刀なのだ
その為運用方法がまるで違うのだ
その為以前のように戦うとまるで使い辛いのだ
だが、それはエリオ自身が決めた事である
多少の苦戦は覚悟していた
柄を握り締めて思い切り振り上げる

「くっ」

シグナムはそれをレヴァンティンで受け止める
想像以上の衝撃が伝わってきた
ザンクーガの威力もあるがエリオ自身の成長も見受けられる
だが、まだ甘い

「相手はシグナム1人じゃねぇぞ」

脇からグラーフアイゼンを携えたヴィータがやってきた
アイゼンは的確にエリオの脇腹を狙う
しかしそれは突如横からの攻撃に阻まれる

「フリード」
「きゅく～」

キャロとフリードの攻撃である
エリオが前衛を担当し、キャロが後衛を行うのだ
これでお互いの死角をカバーし合うのである

「流石に息はあってるな」
「あれでザンクーガを使いこなせていたら正直あたしらでも危ないな」

その通りだ
今はまだエリオが自身のデバイスに扱いに慣れていない為に苦戦しているような物だがあれでもし使い慣れたらきっと苦戦したのはシグナムとヴィータである
だが、それでも二人には騎士としての意地がある
そう簡単に勝ちを譲る気は無いのだ

「ならばこちらも本気で行かせて貰うぞ」
「えぇぇ！今までのが本気じゃなかったんですか？」
「あんなので本気な訳ないだろうが！はやてから許可はとってあるからリミッターを解除して思い切りやらせて貰うぜ」

そう言って二人はリミッターを解除する
すると凄まじい魔力が二人から溢れてきた
これが副隊長の実力なのだろう
反対にエリオは半ば及び腰になっていた
そんなエリオにシグナムは怒鳴りつける

「何を逃げ腰になってる！お前の憧れる騎士とはその程度の物なのか？」
「く、行きます！」
「来い！」

覚悟を決めザンクーガを構える
それに答えるようにシグナムとヴィータも構える
キャロは後ろでエリオの援護を行っていた

（まだ試してないけどやってみるかな）

ふとエリオは心の中で呟いた
そして開いていた手を空に掲げる

「雷よ我が手に降り注げ！！」

と声高らかに叫ぶ
するとさっきまで晴れていた空が一気に黒く曇りだし雷鳴が鳴り響き掲げていたエリオの手に一筋の雷光が降り注ぐ

それを手に集める
凄まじいエネルギーが集まっていく
少しでも気を抜けば手が吹き飛びそうな程である
その為エリオの顔が苦痛に歪んでいく
それを見たシグナムとヴィータは驚いた顔になった

「ヴィータ！」
「おう！」

シグナムとヴィータは覚悟を決めて自身のデバイスのカードリッジをロードする
足元にベルカ式の魔方陣が展開する

「紫電一閃！」
「ケートリヒシュラーク！」

二人の決め技がエリオに襲い掛かる
そしてエリオもまた技を繰り出した

「サンダーブレーク！！」

手に集めた稲妻を一気に放つ
それが互いにぶつかり合った
激しい光と衝撃が放たれる
力はほぼ互角であった
だが、未だこの技を使いこなせていない為かエリオが先に吹き飛んでしまった

「うわあああああ！」
「エリオくん」

吹き飛んだエリオにキャロが駆けつける

「まだ技の練りが足りないな」

「しかし良くそんな技を思いついたなエリオ」

「え、えぇ・・・鉄也さんの技を見て独学で考えたんです」

「って言うよりまるまるパクリじゃねぇか！」

「あうぅぅ」

ヴィータの一言を聞いて返す言葉が無かった

一方で、こちらでは

「シュート」

「はあああああああああああ！」

なのはとフェイトがティアナと戦っていた

ティアナの使用デバイスバスターミラージュは来るべき日に備えて射撃船と接近戦を行えるように作られているのだ

しかしティアナ自身がまだ接近戦に不慣れな上に新デバイスの慣らしが終っていない為に、そして何より相手が管理局のエースなのも相まって苦戦は必須であった

「くっ、やっぱりエース格が相手だと辛いわね」

思わずそう呟く

しかし、気づいてみればそんなエース格を相手に苦戦はする物の戦っている事に気づく

以前の自分なら一瞬の内に倒されていた筈である

日頃の厳しい特訓が今生かされているのだろう

なのはの放つ魔弾を切り払いフェイトの斬撃をデバイスの刃で受け

止めて返す
受け身を取りながらも巧みに反撃を行うティアナ
魔弾を切り払ったと同時に自身も魔弾を放ったり斬撃をかわしざまにこちらも斬撃をお見舞いしていたりしていた

「なんか、ティアナ強くなったね」
「うん、気のせいか少し逞しくなったしね」

なのはとフェイトが呟く

「日頃からなのはや鉄也さん達がトレーニングしていたお陰だね」
「特に鉄也さんの特訓って凄すぎるもんね」

なのはが思い出すように言う
その通りであり鉄也の出す特訓は凄まじいの一言なのだ
その上なのはの特訓も相まって厳しさは以前より遥かに増しているのだ
しかし、それにフォワードメンバーはついてきた
そのお陰で今の強さが出てきたのだ

「フェイトちゃん、此処は」
「うん、砲撃で決めよう！」

なのはとフェイトが互いに頷き合ってデバイスを構える
そしてカードリッジをロードして足元に魔方陣を展開させる

「あの構えは！」
「ティアナ！最後は砲撃で決めるよ」
「出来る？」
「勿論です！」

なのはとフェイトの言葉にティアナは強く頷く
それに呼応して自身もカードリッジをロードして魔方陣を展開させる
ティアナの周りに無数の魔力弾が現れる
大きさは以前と変わっていなかったが輝きが増していた
まるで太陽の輝きに見えた
そんな輝きを放つ魔力弾が２０発以上もティアナの周りを浮んでいた
お互いを見合う
そしてお互いチャージを終えた
そこで放つ

「スタァァァァライトォォォォブレイカアアアアアアアア」
「フォトンランサー・ファランクスシフト！ファイヤアアアアアアア！」
「クロスバスタァァァァ！シュウウウウウウウウウト！！」

なのはとフェイト、そしてティアナの砲撃が互いにぶつかり合う
ティアナの放った魔砲はその魔力弾の一発一発が全てなのはのディバインバスターに匹敵する威力であった
恐らくそれを使いこなせていれば撃ち負けていたのはなのはとフェイトであっただろう
だが、ティアナはまだ自身の増大した魔力やその魔砲を使いこなせていなかった為撃ち負けてしまう

「キャァァァ！」

撃ち負けたティアナがそのまま大地に叩きつけられる
そんなティアナになのはとフェイトが駆けつける

「大丈夫？ティアナ」

「は、はい・・・何とか」
「でも凄いよティアナ。私達の砲撃に互角どころかもう少ししたら私達が負けてたかもしれないもん」
「そ、そうですか／／／」

思わず頬を赤らめる
どうやら嬉しかったようだ
しかしその一撃はティアナの中にある魔力を殆ど使ってしまう為今のティアナはまともに動けない状態でもあった

＊＊＊

地上でフォワードメンバーが戦っている時、別の場所ではゲッター同士の戦いが展開されていた

「うおおおおおおお」

ゲッター號が真ゲッターに対し殴りかかる
だが、その一撃を掴み取りそのまま柔道の要領で天高く投げ飛ばしてしまう

「甘いぞ！そんなへっぴり腰の一撃じゃ俺には当てられんぞ」

竜馬の叱咤が飛び交う
地面に叩きつけられたゲッター號が起き上がり再び構える

「つ、つえぇ・・・まるでゲッターを自分の手足みたいに扱ってるよ」
「俺達にとっちゃゲッターは自分の体を動かすのと何ら変わりないからな」
「す、凄すぎですよ」

竜馬の言葉に翔達は驚きの声を上げる
だが、そんな號達に休む間も与える事なく真ゲッターの猛攻が開始される

「はぁ、とぉ！」
「うおわぁ！」

真ゲッターの連撃にゲッター號はかわし、防ぎ、捌くの防戦一方であった
そんなゲッター號の片腕と胸部装甲を掴み背負い投げの要領で再び投げ飛ばす

「どわあああああああああああああ」

雄たけびを上げて再び地面に叩きつけられるゲッター號
既に機体の各所は泥まみれであった
それとは対照的に真ゲッターは綺麗そのものである

「どうした？もう降参か？」
「な、なんのぉ！まだまだぁ！」

竜馬の問いに號が立ち上がりながら答える
そして再び構える
今度はお互いに駆け出した
ズシンズシンと大地を踏みしめる度に当たりに振動が伝わっていく
そしてお互いに拳を握り締めて殴りかかる
互いの拳が空中でぶつかりあって激しい衝撃波が伝わってくる
それを左右数回行っていく
その後今度は蹴りを当てる
しかし放たれた蹴りを互いに腕で防ぐ
格闘戦ではお互いほぼ互角であった
やはり伊達に隼人の課した課題をクリアした三名では無いようである
だが、まだ実戦経験においては竜馬達には遠く及ばないでいた

「まだ詰めが甘い！！」

と言ってゲッター號の足を払い除け浮かび上がった號の両肩を掴んで巴投げの要領でまた空高く放り投げてしまった

「げほっ！」

また大地に叩きつけられたゲッター號
砂煙を巻き上げてゲッター號を覆い隠す
その光景を遠くから見つめていたのはシャマルとザフィーラ、そしてヴィヴィオであった

「リョウくんも張り切ってるわねぇ」
「あぁ、何時も以上に活き活きしているな」

シャマルとザフィーラにも竜馬が元気なのは見て取れた
そしてそれは地上で訓練をしているなのは達も同様であった

皆先の戦いの傷跡を見せぬような勢いであった
そしてその遥か遠くでは

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

甲児が肩で息をしていた
そしてその甲児が乗っているマジンガーZには神の翼「ゴッドスクランダー」が取り付けられていた
修理が終ったのだ
そしてその上空には偉大な勇者グレートマジンガーが浮んでいた

「どうした甲児くん!それでお仕舞いか?」
「な、なんのぉ!もう一回頼むぜ鉄也さん」

甲児のマジンガーが立ち上がる
そして再び飛び上がり機体を変形させる
ビックバンパンチである
変形した状態で放物線を描きそのまま目標に向かっていく
その目標を一直線状に捉えた所でマジンガーZに動きが見られた

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!」

何とビックバンパンチ状態のマジンガーが高速に回転しだしたのだ
その様はまるで巨大な竜巻であった
そのままの勢いで目標に向かっていく
だが、その衝撃は甲児自身に想像以上の負荷を与えた

「ぐううおおおおおおおお!!」

衝撃の余り視界が歪む

そのせいで狙いがずれてしまい目標であるターゲットの隣の岩山にぶつかってしまう
ぶつかった岩山は大きく抉れてしまいまるで災害にでもあったかのような威力であった
だが、当たらなければ意味が無い

「ど、どうだった・・・鉄也さん」
「駄目だ！目標から遠くずれている！これでは使い物にならんぞ」
「くぅぅ、この技は威力は強いけどその分俺自身に掛かる負担は大き過ぎるからなぁ」

甲児が呟く
そう、今甲児が行っているのはビックバンパンチの新しい技なのだ
その威力は凄まじいのだがその分パイロットである甲児自身に掛かる負荷は大きく下手すれば気を失う事になりかねない
その上狙いを定めるのが非常に難しくそれを自分の物にするにはまず常人では無理であった
しかし使いこなさなければならない
でなければ自分のコピーであるもう1人の兜甲児「K－1」には決して勝てないのだ

「鉄也さん！もう一回だ！」
「よし、今度は俺をターゲットにしろ！」
「って、大丈夫かよ鉄也さん！」

その発言に甲児は驚いた
そりゃそうだ。ビックバンパンチの一撃を食らえばグレートと言えども只では済まない

「俺の心配をするう位なら当てられるようになれ」

「言ったなぁ！それなら必ず当ててやる！」
「よし、その勢いで来い！」

鉄也に言われて気合を入れた甲児は再び空に舞い上がる

「うわぁ、鉄也パパやっぱり特訓してる時凄い活き活きしてるなぁ」
「さ、流石鉄也さんねぇ・・・まるでシグナムみたいね」
「ああ、あそこまで特訓好きな奴はそう居ないだろう」
「まぁ、鉄也にとっては特訓する事こそが生甲斐だからね」

隣に居たジュンが言う

「でも怪我しないで欲しいわねぇ」

心配そうにさやかが呟く
しかしそこでふと気づく

「あら？そう言えば大介さんは？」
「あぁ、宇門なら主はやてと共に次元反応があった場所を調査しに行ったぞ」
「え？何ではやてちゃんが一緒に？」
「さぁ？主が一緒に行きたいと言ってたのでな」

シャマルの問いにザフィーラが答える
それを聞いてシャマルが額に手を当てて溜息を漏らす

＊＊＊

その頃、大介ははやてを乗せてグレンダイザーで次元反応のあった場所に向かっていた

「すまないねはやてちゃん。余り乗り心地は良くないだろう？」
「ううん、そんな事あらへんよ。中々ダイザーも乗り心地ええし・・・まぁあの時は驚いたけどな」
「ああ、すまなかったね。僕もうっかり教えるのを忘れてたよ」

大介が言う教え忘れたと言うのはグレンダイザーに取り付けられた自動防御装置の事である
グレンダイザーはフリード王家の人間にしか扱えない為その証を持つ者以外が近づくと自動的に排除しようとするのだ
現にはやてもダイザーに乗り込もうとした時にその様な目にあったのだ
その為ダイザーに乗るには一旦防御装置を切る必要があるのだ

「それにしても次元反応とは一体何があったんだろう？」
「さぁなぁ、もしかしてまた大介さんとこの人達やったりしてな」
「ははは、そうだと良いね・・・ん？」

ふと、大介は目の前を飛行する物体を発見した
数は三機
そのどれもが大介にとって見覚えのある機影であった

「あ、あれは！」
「知ってるん？大介さん」
「ああ、あれは間違いない！あれは地球製のスペイザーだ！」

そう、大介の目の前に居たのは本来大介達の世界に居る筈の機体
「マリンスペイザー」「ドリルスペイザー」「ダブルスペイザー」
の三機であった

激突！ゲッター対ゲッター　終

次回予告

パワーアップの為に特訓に励む俺達
だが、其処へ再び奴等が襲ってきやがった
その上もう1人のスバルの牙が負傷して傷の癒えないスバルに迫る
その時、神の魔神が残した龍が目覚める

次回『龍の目覚め』

次回もこの小説にテイィィィクオォォォォォフ

激突！ゲッター対ゲッター　後編（後書き）

次回いよいよスバルの新デバイスが登場します

龍の目覚め　前編

その日、スバルは訓練場で1人素振りをしていた
彼女の手には長い棒の様な物が握られており凄まじい勢いで連撃を人形に浴びせる
その動きは中国武術を思わせる動きであった

「はあああああああああああああああ！」

その動きはまるで流れるようであり無理なく、そして隙なく打ち付ける
やがてトドメと言わんばかりに最後の一撃を人形の頭部に浴びせる
木の乾いた音が響き渡り一瞬の静寂が起こった
やがてスバルは棒を数回手元で回すと地面に突きたてて息を整え出した
額にはうっすらとだが汗が滲んでいる
相当な練習をこなしていたのだろう
だが、当の本人は何処か不満気であった

（今の戦法・・・ゼノンが見たら何て言うだろうなぁ）

スバルの脳裏にかつて出会った一人の少年が映った
名はゼノン
４０００年前のミッドチルダで出会ったスバルに良く似た少年である
この棒術も元はゼノンに教わった物を自分なりに物にした物なのだ
だが、ある日ゼノンから聞かされた事実を知った際に彼に対し酷い事を言ってしまった
その後結局謝る事も出来ずそのまま元の世界に帰ってしまったのだ

「ゼノン・・・きっと怒ってるよね」

謝る事が出来なかった
そんな罪悪感がスバルの心を支配していた
出来る事ならもう一度会いたい
だが、それは叶わない願いなのだ
もう諦めるしかない
そうさえ思えた
しかし、叶うならもう一度会いたい
それが彼女の願いであった

遠くから地下施設を見下ろす者が居た
赤い髪に黒と赤のバリアジャケットを身に纏い右腕には悪魔の腕のようなデバイスを嵌めている少女であった
そしてその顔はスバルその者であった

「クックック、此処に居たんだね、機鋼帝国の目は誤魔化せても僕の目は誤魔化せないよ」

そう言って木の上に立っていたもう1人のスバルの目が赤く輝く

「僕を感じ取れるだろう?何故ならお前はもう1人の僕なんだから」

「は！」

スバルの脳裏に強力な思念波が伝わってきた

『やぁ、久しぶりだねぇ』

「お前は！」

『怪我の具合はどうだい？もう完治したのかなぁ？』

さも意地悪くそう聞く声をスバルは知っていた

あの列車事件の際に自身に瀕死の傷を負わせたもう1人のスバルである

「何の用？」

『おやおや冷たいねぇ。同じ人間なんだからもう少し優しく会話しようよ』

「私はお前を同じ人間だと思った事は無いよ！」

『違うなぁ、僕とお前は兄弟どころか同一人物なんだよ。同じ父の元に生まれた魔神戦士なんだからさぁ』

「私の父はゲンヤ・ナカジマ！母はクイント・ナカジマ！あんな悪魔の娘じゃない！」

『自惚れては困るなぁ。僕達はあのお方の娘じゃなくて『所有物』なんだよ』

念話を送る声の主がクックックと笑う声が聞こえた

それを聞いてスバルの顔が強張る

「用は何？まさかそんな近くまで来て挨拶だけって訳じゃないんでしょう？」

『察しが良いねぇ。僕もそろそろお前と決着を付けたいんだよ。君

も知ってるだろう?自分の体の事を』
「・・・知ってる」
『なら話が早い、出てきなよ。僕達の喧嘩に他人は巻き込めないだろう?』
「・・・分かった」
『良い返事だね。すぐ其処で待ってるよ』

それを言った後、ブツンと念話が途切れてしまった
スバルは何処か寂しい顔をしていた

「これで・・・皆とお別れかな」

1人そう呟くスバル
それは自身の「死」を意味している言葉でもあった

＊＊＊

「ふぅ、まだ実用には程遠いなぁ」
「惜しい線まで行ったんだがな」

通路では甲児と鉄也がお互いの特訓の反省を述べながら歩いていた
内容は分かりきっている事だが新必殺技の特訓である
しかし相変わらず成果は上がっておらず苦戦を強いられている
このままでは実用化は当分先である

「急がないとな」
「ああ、敵も待ってはくれないしな」

そう、何時までも敵が大人しくしている筈が無い
きっとＤｒ．ヘルの事だ
何時か攻め込んでくるに決まってる
それは既に二人は経験済みなのだ
そんな会話をしていると、通路の曲がり角辺りで甲児は急いで走っていた誰かにぶつかってしまう

「わっ！」
「きゃっ！」

ぶつかった拍子に甲児と走っていた人物は倒れてしまう

「いてて・・・大丈夫か？」
「ええ、だ、大丈夫です」

二人は起き上がって互いを見た
走ってきた人物はティアナであった

「どうしたんだよティアナ？そんなに慌てて」
「甲児さん！スバルを見ませんでした？」
「スバル？いや見て無いけど」
「何かあったのか？」

鉄也が問うとティアナは腰のポケットから一枚の紙を取り出した
其処には多少殴り書きだが文字が書かれていた

「これが、これがスバルの机に置いてあって」
「どんな内容だ？」

鉄也はティアナから紙を受け取り目で読んでいく
甲児も同様に読む
そして二人は目を見開く

「おい！これ「遺書」じゃねぇか！」
「やっぱり・・・あの馬鹿！まだ怪我だって治りきってないって言うのに」

ティアナは苦い顔をした

「ティアナ！この手紙を見つけたのはどれ位前だ？」
「今から３０分前です」
「急いで探そう！まだ遠くに行って無い筈だ」
「ったく、こんな時に大介さんはまだ帰って来ないのかよ」

甲児は愚痴る

その頃、大介とはやての前には三台のスペイザーがあった
その姿は見紛う事は無い、地球で宇門博士が作った地球製のスペイザーなのだ
そして、そのスペイザーから聞こえてきた声を聞いてまた大介は驚いた

「兄さん！やっぱり兄さんよ」

「大介さん！良かった」
「その声は！ひかるさん、それにマリア！」

大介は驚いた
三台の内二台のスペイザーに乗っているのは1人は大介ことデューク・フリードの妹であるグレース・マリア・フリード
そしてもう1人は宇門大介の頃に働いていた牧場の娘で大介の心の支えになってくれた女性で名を牧場ひかるである
だが、其処で疑問が生じた
ではダブルスペイザーには誰が乗っているんだ
ベガ星連合軍との戦いの際には甲児が乗っていた
だが、甲児は今此処でマジンガーに乗って戦っている
では一体誰が

「教えてくれ、ダブルスペイザーには誰が乗っているんだ？」
「それは私です」

と言って大介の目の前の通信モニターに顔が映った
白と赤のスーツに黄色いマフラーを掛けた女性である
そしてその顔は大介も見た事がある顔であった

「君は・・・」
「私は早乙女ミチルと言います。驚かせてすみません。貴方が宇門大介さんですね」
「ああ、そうだよ」

大介は軽く頷く

「兄さん、どうやってこの世界に来たの？」
「地球の弓教授に座標を貰って転移してきたんだ。そう言うマリア

たちこそ一体どうやって此処に来たんだ?」
「転移装置よ」
「なに!」
「甲児くん達が転移した後弓教授が各研究所に連絡を入れて急ピッチで完成させたの。でもまだ未完成だったらしくて転移できたのは私達だけなの」
「そうだったのか」
「なぁ、大介さん。この人等大介さんの知り合いなんか?」
「ん?あぁ、そうだよ。僕が地球に居た頃にお世話になった人達なんだ。名前は・・・」

話の途中でその腰を折るかのように突如上空から数発のビーム攻撃が放たれた
一同はかろうじてそれをかわす
大介達は上空を見上げる
すると其処には一隻のマザーバーンと大量の円盤獣にベガ獣が居た

「見つけたぞグレンダイザー」
「その声は!ガンダル!生きていたのか?」
「ワシは死なん!デューク・フリード!貴様を地獄に叩き落すまでわしは死なんぞ!」
「良いだろう!それなら今度こそ二度と這い上がれない程深い地獄の其処に叩き落してやる」

大介はそう言い放った
その時の大介の顔は憎しみに満ち溢れていた
故郷を攻撃され、多くの家族や仲間を殺してきた憎き敵「ベガ星連合軍」それが今こうして蘇って目の前に居るのだ
大介に許せる筈が無い
絶対許さない

そんな思いがあった

「悪魔・・・悪魔め！僕はお前達を絶対に許さない」
「大介さん！うちも戦うわ！」
「気をつけるんだよはやてちゃん！奴等は手強いよ」
「分かってる。任してぇな」

ニコッと笑ってはやては勢い良くスペイザーから飛び出すと騎士甲冑を身に纏う
大介もスペイザーのまま円盤部隊に向かっていった

「僕はお前達悪魔を絶対に許さない！覚悟しろ」

龍の目覚め　中篇（前書き）

衝撃の連続

龍の目覚め　中篇

『・・・めずらしいな、主が此処に来るとはな』

『本当だね』

青い髪をした少年はそう呟いた
彼の前には蒼く輝く鱗を見に纏った巨大な『龍』である
長い体はとぐろを巻いており遥か上空で少年を食い入るように龍は見下ろしていた

『主がわざわざワシのところに足を運ぶのだ、何か訳でもあったのだろう？』

『君に頼みたい事があるんだ』

『おうおう、主がワシに頼みごとだと？明日は槍でも降ってきそうじゃのう』

少年に頼まれた為か龍は声高らかに笑った
そして笑い終わるとギロリと少年を睨みつける

『で、ワシに何をさせるつもりじゃ？』

『彼女の力になって欲しいんだ』

『彼女？主は何時の間に色恋沙汰に目覚めたのじゃ？ワシの記憶では主は色気に全く疎（うと）かった記憶しか無いのじゃがなぁ』

『そんなんじゃないんだ・・・彼女は僕に似てるんだ』

『似てる？』

少年の言葉に龍が首を傾げる

『そうだ、彼女は似てる・・・僕と顔も・・・髪の色も・・・そして運命も・・・』

『ふん、酔狂じゃのぅ、たかが人間の小娘１人に何故ワシが手を貸さねばならん？第一そのような娘など後１００年待てばまた現れよう』

『もう・・・嫌なんだ。大好きな人が死んでいくのは・・・もう終りにしたいんだ！』

少年は強く言う
その言葉を聞いて龍も真剣な顔になる
だが、やがて大きな溜息を吐く

『良かろう、久しぶりに酔狂な事をするのもまた一興と言う物よのぉ』

『有難う』

『じゃが、もしその娘にワシの求めるほどの力が無い場合は・・・ワシはその娘を食らうが・・・構わんか？』

『・・・駄目・・・って言っても君は聞かないよね？』

『無論じゃ、ワシは其処までお人よしじゃないぞ』

『分かった・・・だからお願いだ!彼女を・・・スバルを助けてくれ!』

少年は頭を下げる
それこそ地面にぶつかる程だ

『馬鹿者が!ワシを倒した主が早々頭を下げるでない!ワシが小さく見えてしまうではないか!』

呆れた声で龍は言うとそのまま天高く舞い上がった
それは正に天を泳ぐように飛ぶ龍である

『では、行って来るとしようかのぉ・・・後で主にはたっぷりと礼をしてもらうからなぁ・・・ゼノン』

龍は去り際に眼下に居た少年「ゼノン」に向かってそう言い放ち漆黒大空に消えていった

(スバル・・・今は僕は君に逢えないし、君を守る事が出来ない・・・だから、代わりに彼を送るよ。ちょっと変わり者だけど根は良い奴だからさ・・・だから・・・絶対に死んじゃ駄目だよスバル!)

ゼノンは強くそう思っていた

＊＊＊

此処は地下施設からかなり離れた平原
其処にスバルは1人歩いていた
服はバリアジャケットを身につけているが防御能力はほぼ皆無に等しい
そして手には実戦用の鉄の棒が持たれていた

「やぁ、来たね？」

スバルの目の前にある一本の木の上に赤い髪をしたスバルが笑いながら座っていた
そして、その後ろには巨大にして邪悪な風貌をした魔神「デビルマジンガー」が立っていた

「……」
「あぁ、心配しなくて良いよ、こいつには手出しするなって言ってあるからさ」

心配するスバルにもう1人のスバルが言う
それを言い終わると跳躍して木の上から降りる
そして自身のデバイスを展開させる
相も変わらず悪魔の如く禍々しい姿をしていた

「今日こそ・・・私の力と、そのデバイスを返して貰うよ」
「無理だね、今の君じゃ僕には勝てない！断言するよ」

睨みつけるように言ったスバルに対し赤い髪のスバルは鼻で笑って

言ってのけた

「それに君は僕を相手にそんな棒で挑む気かい？良く言うよね、「勇気と無謀は紙一重」って」

「だから何？」

「お前のやってる事は無謀だって事だよ」

そう言い終わると同時に一気に距離を詰めて手に装備された鋭い爪を振るう

しかしその一撃をスバルは身を翻してかわす

そしてかわしざまに持っていた棒の一撃を与える

「ぐっ！」

スバルの放った棒の一撃を左手で受ける

激しい痛みが手に伝わる

「へぇ、何時の間に棒術なんか身につけたのさ？」

「遠い知り合いに教わったの！」

スバルはそう断言した

それを聞いて赤い髪のスバルはニヤリとする

「ふぅん、そうかい・・・だけど僕を倒すにはまだ力が足りないんじゃないの！！」

と言って勢い良く爪を振り上げた

その一撃で棒は真っ二つに切断されてしまいスバル自身も肩から血を盛大に噴出した

「ぐぅっ！」

噴出す傷口を片手で押さえる
抑えた手から止め処なく血が流れる
それを見てさも楽しそうな顔をするもう1人のスバルが居た

「クハハ、痛いかい？でも安心しなよ。もうすぐそんな痛みも感じなくしてあげるからさ」

そう言ってトドメと言わんばかりに爪を振り上げた
だが、その爪に向かって衝撃が走った

「ん？」

見ると其処には魔弾を当てられた跡が残っており煙を噴出していた

「スバル！」
「ティア！それに甲児さんに鉄也さんも！」

其処にはティアナに甲児と鉄也の操るダブルマジンガーが出ていた

「スバル、この馬鹿！」

ティアナは会うやいきなりスバルの頬に平手打ちを当てる
当てられた頬が赤く染まる

「な、何するの？ティア」
「あんた私に相談も無しに勝手な事してんじゃないわよ！遺書なんか残して気分悪いわよ」
「えぇ！あれ只の置手紙だよぉ」

何か誤解されたようなので必死に弁解するスバル

「じゃぁその紙についてる濡れた跡は何だ?」

甲児が気になったので指摘した

「あぁ、それは書いてる途中で寝ちゃって・・・それで」

「つまり涎(よだれ)か?」

鉄也が聞いたのにスバルが黙って頷く

それを聞いた三人が思い切りずっこけそうになる

「あんたねぇ・・・置手紙を置くならもっとちゃんと内容を考えて書きなさいよ!何よこの「さようなら」って?」

「え?だってその後にただいまって言う為だよ」

「お前文法が間違えまくりだぞ」

流石の甲児も其処にはツッコミを入れざるを得なかった

「あのさぁ、折角の楽しみを邪魔しないでくれる?」

其処へいかにも不機嫌そうな顔をした赤い髪のスバルがそう言った

片足で何度も地面を叩いて腕を組んで口を尖らせて甲児達を見ている

「お前がもう1人のスバルって奴か?」

「確かにそっくりだな」

「そう言えばあんたらと会うのはこれが初めてだったね?」

赤髪のスバルがダブルマジンガーを見てそう呟く

「教えろ！何故お前はスバルを狙うんだ？」
「決まってるじゃん、そうしないと僕達は『死ぬ』からだよ」
赤い髪のスバルから衝撃的な発言がなされた
「ど、どう言う意味よ！」
「これはゲームなんだよ。僕の主がそう決めたね」
「主だと？」
「目の前に居るじゃん」
そう言って自身の主である「デビルマジンガー」を指差す
「僕の主が命じたのさ。お互いに殺し会え。さもないと二人揃って死ぬ事になる。ってね」
「そんな・・・そんな事あんたは平気で出来るの？」
「出来るよ！だってその為に僕は生み出されたんだもん」
ティアナの言葉にさも当たり前の如く答える
「てめぇ・・・それでも人間かよ？」
「馬鹿じゃないの？僕もそいつも人間じゃないよ。「物」なんだよ！主の所有物なんだよ。主が死ねって言えば僕は喜んで死ねるよ」
「狂ってやがる」
甲児は悪態をつく
その通りだ
人が人を思い通りにして良い道理など何処にも無いのだ
しかしそれを目の前に居る赤い髪のスバルはあっさりと認めてしまったのだ

「素晴らしいゲームだと思わないかい？主が作った人形同士がお互いの命を賭けて殺しあう・・・これ以上のゲームは何処にも無いんじゃない？あんたらも賭けてみる？今なら其処に居る出来損ないが大穴だよ！まぁ大損するけどね」
「ざけんな！命を賭け事になんか出来るかよ！」
「それにそんな残酷な事出来る訳ないでしょ！」
「残酷？それはお前等人間だって同じじゃないの？」

赤い髪のスバルは甲児達を指差して言った

「ど、どう言う意味よ？」
「お前等人間は一体今までどれだけの生き物を絶滅させてきた？」
「そ、それは・・・」
「どれだけの海を汚してきた？」
「う・・・」
「どれだけの森を焼いてきた？」
「・・・」
「どれだけの空を汚してきた？」
「どれだけの自然を壊してきた？」
「どれだけ星を傷つけてきた？」

ズケズケと言う
それに甲児達は答える事が出来なかった

「自分達は酷い事してる癖にこんな時だけ善人面する。人間って勝手だねぇ。そんなお前達に僕達のゲームを咎める権利なんて無いよ」
「だ、だけど・・・だけど人間には・・・」
「お喋りは此処までだよ」

ティアナの言葉を途中で区切り、赤髪のスバルは手で合図を送る
するとデビルマジンガーがゆっくりとダブルマジンガーの元へ歩み出す

「君達の相手は主がしてくれるってさ♪良かったね」
「気をつけろ甲児くん。こいつかなり手強いぞ！」
「あぁ、さっきから俺の背中がビンビン言ってるぜ！「こいつはヤバイ」ってな」
「あぁ、そうだな」
「ティアナ、俺達はこいつとやりあうからお前はスバルを安全な場所に連れて行け」
「はい！」

頷いてティアナがスバルの元へ向かうだが、

「邪魔はさせないよ～だ」

舌を出して赤い髪のスバルが地面から青白い薄い結界を張ったそれは丁度自分と傷ついたスバルを覆って展開されていたのだ

「こ、これは！」
「これで邪魔者は居なくなったね。其処で見物してなよ。楽しい殺戮ゲームをさ♪」

不気味な笑みを浮かべてもう1人のスバルは言った

＊＊＊

その頃、別の場所ではグレンダイザーとはやてと三つのスペイザーがベガ星連合軍と激闘を繰り広げていた

「うおおおおおおおお！」

特にその中でのグレンダイザーの戦いは鬼神の如きであった
次々と迫り来る円盤獣を蹴散らしていく

「流石だなデューク・フリード」
「ガンダル！次は貴様の番だ！」

指をガンダルの乗っていると思われるマザーバーンに向けて言い放つだが、それに対しガンダルは余裕であった

「フッ、だがその前にコイツと戦って貰おうか」
「何！」

それは突如グレンダイザーの前に現れた
それは細部こそ違うがグレンダイザーに良く似たロボットであった
違いと言えば両手の甲にはトゲがついており何処か凶悪な雰囲気を映し出していた

「これこそ我等ベガ星連合軍の科学力の全てをつぎ込んで作り上げたスーパーロボット「ベガダイザー」よ」
「何やあれ？要するにグレンダイザーのパチモンっちゅう訳か？」

はやてがベガダイザーを見て呟く
すると今度は大介が高笑いを浮かべる

「語るに落ちたなガンダル！そんな偽者でこのグレンダイザーが倒せる筈が無いだろう！」
「クックック、ならば今から映し出す映像を見てまだ言えるかな？」

不気味な笑みを浮かべたガンダルが手元の装置を動かす
すると大介の元に映像が映し出される
それはベガダイザーのコクピットの映像であった
そして、其処に乗っていたのは思いもしなかった人物であった

「ま、まさか！・・・そんな！」

それは本来この世に居る筈の無い人物であった
その人物はかつて大介がデューク・フリードであった頃に愛した女性であった
その女性の名は

「・・・ルビーナ」

龍の目覚め　中篇（後書き）

次回はやばい展開かも知れませんよ

龍の目覚め　後編（前書き）

遂にスバルの新デバイスが登場します

龍の目覚め　後編

甲児と鉄也は目の前に佇む巨大な魔神を見ていた
黒のボディに所々尖った形の装甲を纏っている
しかし、装甲の所々にある血管のような継ぎ目が脈を打っているのが見えた
まるであの魔神その者が生きているかのようである
その巨大な魔神「デビルマジンガー」はまるで獲物を狩る狩人のような目でマジンガーZとグレートマジンガーを見ていた

「あいつにとっちゃ俺達は獲物のようだな」
「冗談じゃねぇぜ！」

鉄也の呟きに甲児が毒づいた

「俺達を獲物扱いするなんざ生意気な奴だぜ！」
「フッ、それには賛同するな」

甲児の言葉に鉄也は同感であった

「この俺をそう簡単に狩れると思わない事だな」
「そりゃ俺も同じだぜ！」

二人は早くもやる気満々であった
知っているからだ
この魔神がかつて甲児の父であり鉄也の恩師である兜剣造の祖父である兜原蔵が作り上げた悪魔の魔神である事を
この魔神をミッドチルダに野放しにしてはならない
なんとしてもこの場で破壊しなければならないのだ

だが、デビルマジンガーの力は未だに戦った事が無い為未知数だ
鉄也のグレートでさえ弾き飛ばされただけであり実質戦った訳では無い
それでも其処から放たれる威圧感だけで相当の力を持ってると言う事は察する事が出来た

「けっ、さっきから俺の腕が震えてやがる！」
「珍しいな、甲児君がそんな風になるなんて」
「なぁに、只の武者震いさ」
「それでこそ甲児君だ」

自身の震えを遭えてそう思わせた
そうでなければ認めてしまうからだ
自分があの魔神に恐怖していると言う事に
それだけは認めたくなかった
相手が魔神ならこっちも魔神
勝負は五分の筈
絶対に勝ち目が無いわけでは無い
ならば何を怯える必要があるのか

「行くぜ鉄也さん！」
「任せろ！」

二人はそう言い会って一斉にデビルマジンガーに向かっていく
デビルマジンガーも雄たけびを上げながらダブルマジンガーに向かっていく

「まずは俺だぁ！」

最初に攻撃をしたのはマジンガーZであった

硬く握り締めた拳をデビルマジンガーの顔面に向けて放つ
金属同士がぶつかり合う音がし火花が舞い散る
Zの拳がデビルの顔面を殴ったのだ
だが、それでもデビルは一向に引き下がらない
それどころか全く効いた感じを示さない

「ならこれはどうだ！」

すると今度は殴った拳の肘辺りがジェット噴射を上げて飛び出す
ロケットパンチである
顔面に向かってロケットパンチが飛び出す
流石にそれには数歩引き下がるデビル
だがそれだけであった
すぐに体制を建て直し今度は硬く握り締めたデビルの拳がZの胸部を襲う
物凄い衝撃がパイルダー全体に響き渡る

「ぐおっ！」

それには甲児も声を上げた
それ程の衝撃だったのだ

「畜生！何て奴だ、たった一撃でこれだけのダメージを食らうなんてよぉ！」

甲児は殴られたZの胸部を見た
其処にはクッキリとデビルの手の跡が残っていた
その気になればそれを突き抜けてZを破壊する事も可能なようだ
甲児の脳裏に戦慄が走る
下手に動けば一撃で破壊される

油断は出来ない相手だ
そう思えた

「甲児君、退いてくれ！」
「鉄也さん！」

ふと、後ろから声がした
其処で甲児は咄嗟に横に退く
するとその直後に猛スピードで腕が飛んできた
今度は弾丸の用に螺旋を描きながら飛んで着ている
ドリルプレッシャーパンチだ
これもまたデビルの顔面を捉える
顔面を捉えたグレートの腕はそのままデビルを殴り空に舞い上がる
殴られたデビルはまた数歩下がるがすぐにまた体制を立て直す
その間はもう腕がグレートに戻っていた

「まさか無傷とはな」

鉄也はデビルの姿を見て舌打ちした
デビルはZとグレートの二段攻撃を受けたと言うのに全く答えた感じを見せていないのだ
それどころかまるで今もまだ本気を出していないと言いたげな感じである

「鉄也さん！此処は一気に」
「だな、時間は掛けてられない」

甲児と鉄也は互いにうなずき合うとそのまま二体の魔神は天に向かって両腕を突き上げる
そして胸の赤い放熱板に光が灯っていく

「食らえ！ブレストファイヤー！」
「ブレストバーン！」

2体の魔神の熱線がそのままデビルに向かっていく
だが、其処で初めてデビルが動き出した
腕を両端に広げて胸を突き出すような体制を取る
するとデビルの胸にあった巨大な赤い放熱板が急速に熱を持ち其処から熱線んを放った
その威力はZとグレートの熱線を跳ね除ける程であった

「うわ！」
「くっ！」

デビルの熱線はそのままZとグレートに向かって来た
それを咄嗟に回避した
回避した地面はドロドロに溶ける等せず瞬く間に蒸発してしまった
その光景にゾッとする甲児

「あんなの食らったらマジンガーでもヤバイぜ」
「だな、アイツの攻撃は何も食らっちゃ不味いぜ」

鉄也も其処で理解した
あの魔神の攻撃を食らっては駄目だと

＊＊＊

もう一人のスバルの張った結界の外ではティアナが必死に結界を破ろうとしていた

「くっ、このぉ！」

自身のデバイスを必死に結界に押し当てる
だが、結界はビクともせずかすり傷すら入らない

「なら、これはどう！」

それならばと自身の周りにオレンジ色に輝く魔力弾を形勢する
そしてそれを結界に向けて放つ
爆発とその際に出来た煙が結界を覆い隠す
ティアナは自身の手で視界を防ぎながら僅かに覗ける隙間から結界を見る
だが、結界には傷一つついていなかった
それに愕然とするティアナ
新型デバイスになって魔力も向上したと言うのにそれでも破れない程の強度なのだ
となれば残るはあれしかない

「正直まだ実戦じゃ使った事ないから不安なんだけど・・・」

一人呟きながらもデバイスを構える

「これの発射には結構チャージに時間が掛かる・・・それまで無事でいなさいよスバル！」

ティアナは魔力のチャージを行いながらも結界の中に閉じ込められたスバルを気遣っていた
そんな中、結界の中では二人のスバルが互いに睨み合っていた

「懲りないね、あの娘も、絶対に破れないって言ってるのにまだやってるよ」
「ティアなら絶対破るよ」
「随分あの娘の肩を持つね」
「私は信じてるもん！ティアなら絶対に出来るって」

スバルは強い目つきで睨みつける
それを見てもう一人のスバルは面白くない顔をしていた

「そうかい、まぁ・・・あの娘がこれを破る前に僕が君を殺すのが早いと思うけどね」

そう言うや否や一瞬で距離を詰める
そして鋭い爪を振り上げてスバル目掛けて振るう

「そうは・・・いかない！」

しかしそれをスバルは掴み取り背負い投げの要領で空高く投げ飛ばした
投げ飛ばされたもう一人のスバルは空中で姿勢を正して地面に降り立つ
肩眉が上がる
不愉快な気分なのだろう

「気に入らないなぁ、どうして君はそんな顔をするの？」

「私はまだ諦めてないからだよ！」
「それは・・・君の中に「ゼノン」が居るからかい？」
「！！！・・・どうしてそれを知ってるの？」
「忘れたの？僕は君なんだよ」

それを聞いてスバルはハッとした
そうだ、目の前に居るのは言ってしまえばもう一人の自分なのだ
性格は違っていても考えている事や思考は大体同じなのだ
すると、突如もう一人のスバルは暗い顔になった

「何で・・・・・・だよ」
「え？」
「何で・・・・ゼノンは僕じゃなくてお前に何か入り込んだんだよ！」
「・・・・・」
「何で僕じゃないんだ！僕の方が強い、僕の中に入った方が絶対ゼノンの為になる！なのに何でお前なんだ！何で僕じゃないんだ！」

腹から叫ぶ
そんなもう一人のスバルの目から一筋の雫が流れた
涙であった
まさか、自分がゼノンの事を想っているのと同じように目の前に居るもう一人のスバルもまたゼノンの事を想っていたのだろう

「ひょっとして・・・君もゼノンの事を・・・」
「五月蝿い！お前に僕の気持ちを分かって溜まるか！」

自身の気持ちを隠すかのように叫び力一杯殴りつける
それを両腕でガードしたものの威力の余り後方に吹き飛ぶ
そして結界に背中がぶつかる

衝撃が体全体に伝わる

「ぐぅっ！」

苦痛で顔が歪む
口の中に金臭さが出てくる
恐らく血の味だろう
痛みの為に体が思うように動かない
だが、そんな時にももう一人のスバルは突っ込んできた

「うおおおおおおおおおお！」

額には未だに涙を浮かべている
しかし、そのまま両の拳を硬く握って殴りつけていく
スバルはそれを両腕をクロスして防いでいく
そんなスバルになど気にもせず只ひたすらにもう一人のスバルは殴り続けていく
殴り続けた腕に血が滲んでいた
やがてスバルの姿が衝撃の為に吹き出た砂煙で覆い隠されていく
やがて、もう一人のスバルは殴るのを止め数歩引き下がる
興奮していたのか息が荒れていた
肩が震えており、涙は何時の間にか乾いていた

「分かったかい、ゼノン！こんな愚図よりも僕の中に入った方が良かっただろう？それなら死ぬ事も無かった筈だ！」

天に向かって叫ぶ
まるで其処にゼノンが見ていると思っているかの如くであった
だが、其処でふと視線を戻す
其処にはボロボロになりながらも立っているスバルの姿があった

「何で・・・何でお前は立っているんだよ！」
「私は・・・生きて・・・何時かゼノンに謝らなきゃならないんだよ！あの時・・・私はゼノンに酷い事を言っちゃった・・・それから一目もゼノンに会わずにお別れしちゃった・・・でも、何時かきっと会える気がする！だからそれまで私は死ぬ訳にはいかないんだよ！」
「黙れ！お前だって分かってる筈だ！もう長く生きられないって事を・・・僕もお前ももう長くないって事位分かってる筈だろう！」
「知ってるよ・・・だから、その日が来るまで精一杯生きなきゃならないんだよ！絶対に立ち止まったり弱音をはいてられないんだよ！」
「生意気言うなあああああああああああああ！」

口を大きく開いて叫ぶ
そしてまたデビルナックルを硬く握り締めて向かってくる
スバルは咄嗟に近くに落ちてた真っ二つに折れた棒を持つ
そしてそれを十字にクロスして防ぐ

「バカか？そんな棒きれで僕の拳を防げる筈が無いだろう！」
「やってみなきゃ分からないよ！それに、これはゼノンが私に教えてくれた物だから・・・絶対に捨てられないんだよ！」

攻撃を防ぎながらもスバルは叫ぶ
その時、上空に一筋の雷光が降り注いだ
その雷光は真っ直ぐ硬い結界に降って来た

「何！」
「稲妻？」

ふと、スバルはグレートのサンダーブレークかと思えた
だが、違った
色が違うのだ
雷光の色は青い稲妻であった
そしてその雷光は結界を摺り抜けてスバルの元に降って来た

「ぐぅっ、な、何が起こったんだ?」

閃光の余り視界を塞ぐもう一人のスバル
そんな中、スバルは真っ白な閃光の中に居た

「え?此処何処?私どうなっちゃったの?」

辺りをキョロキョロして半ばパニック状態になるスバル

『やれやれ、噂する程の娘だから肝ッ玉のすわっとるだろうと思っとったらとんだガキじゃのぅ』

「だ、誰?」

スバルは声のした方を見た
其処には自身の何十倍もの大きさを誇る青い鱗をした巨大な龍であった

「え?りゅ、龍・・・何で龍がこんな所に?」
『しゃんとせぃ!これから主はワシの主になるんじゃぞ!それではワシが恥ずかしいわぃ』
「は、はい・・・」

龍に怒られてスバルはシャキッとした

『ふむ、面はまだまだじゃが魂は良い物をもっとる。こりゃ厄介ごとを頼まれた甲斐があったと言う物じゃのう』
「あのぉ・・・貴方は？」
『見て分からんか？ワシは主達の言う龍じゃ・・・もっともワシの姿を見るのは人間達は５０００年振りじゃがのぉ』
「ご、５０００年！」

余りの驚愕な数字に驚くスバル
と言う事はこの龍は相当長生きしている事になる

「えっと・・・何で私が貴方の主になるんですか？」
『ある者に頼まれてなぁ・・・仕方なくじゃよ、ふむ・・・主のもっとるその棒・・・ワシが宿るには丁度良いのぉ』

龍はスバルの持っていた折れた棒を見た
真ん中からポッキリと折れている為に武器としての機能はしてないが、龍はその棒が気に入ったようである

『主よ、その棒にワシが乗り移っても構わぬか？』
「え？別に良いですけど」
『ならば遠慮なく』

そう言うと龍は頭からスバルの持っていた棒に吸い込まれるように入っていく
すると棒の形が変わり、元の黒い棒は青い光沢を放ち龍の模様が描かれた長い棍に変わっていた

「こ、これは・・・」
『主は棒術が得意じゃろう？じゃからワシが少しばかり手を加えさせて貰ったぞ』

「そ、そうなんですか？」
『そうじゃ』
「えっと・・・それじゃこれからはコレ何て呼べば良いんですか？」

スバルは一番の疑問を聞いた
確かにこれはもう立派な武器である
それを何時までも棒と呼んでる訳いはいかない
そう言う事なのだ

『名前など主が自由に考えればよかろう』
「そっか・・・じゃぁ、リュウコン」
『リュウコン？なぜじゃ？』
「龍の魂にこれの武器が棍だからそれを合わせてリュウコン」
『安直な名前じゃのう。主はもしかしてバカか？』
「うぅ、酷い・・・」

リュウコンに言われて思わず涙ぐむスバル
それを見てリュウコンが溜息を吐く

『シャキッとせんか！主は今日からワシの主なのじゃぞ！』
「そっか・・・そうだよね」

何時までも泣いていられない
そう思ったスバルはリュウコンを握り締めて軽く振り回してみる
不思議な感覚だ
体が自然に動くのだ
まるで昔から棒を操っていたかのようである

『さて、それじゃそろそろ外の敵も待っている事じゃろう、一発主の力を見せ付けてやれぃ』

「うん！」

リュウコンの言葉にスバルは強く頷いた

＊＊＊

「一体何がどうなってる？」

もう一人のスバルは愚痴っていた

目の前には激しい閃光を放つ存在があり、その中に恐らくスバルが居る

邪魔をしやがって

そんな思いがもう一人のスバルの中を駆け巡っていた

すると、やがて閃光が晴れる

閃光が晴れると、其処にはスバルが立っていた

だが、様子が違う

それは彼女の姿と持っている物であった

まずバリアジャケットが変わっていたのだ

両肩には大きな肩当が掛けられており

胸部は薄いながらも列記とした鎧を纏っており

全体が何処か古代中国の鎧を彷彿とさせる感じであった

そしてその鎧とスバルが持っている棒にはそれぞれ龍の模様が描かれていた

「リュウコン・・・行くよ！」
『ワシの心配など要らん、遠慮なくやれぃ』

スバルがそう言ってリュウコンを軽く振るって構える
その動作は洗練されており一部の隙も無かった
その動きを見てもう一人のスバルが驚愕の顔になる

「何だ・・・何だそれは？」
「これ？これはね・・・私の新しい仲間の「リュウコン」って言うんだよ」

スバルはそう言い放つ
今、此処にゼノンが遣わした蒼き龍が目覚めたのだった

龍の目覚め　　終

次回予告

甲児
「スバルに新しいデバイスが出来たみだいだ！
これで形勢逆転・・・と思いきや、これは全て機鋼帝国の筋書きだった
その隙に乗じて奴等はミッドチルダ全域に出没しやがった
にゃろう！そうは問屋が卸すか！俺達が全部叩きのめしてやるぜ！

だけど、その中で俺達はかつてない脅威にさらされる事になる」

次回『舞い降りた「絶望」』

次回もこの小説にテイィィィィィィクオォォォォォォォォォフ！

龍の目覚め　後編（後書き）

次回もヤバイ雰囲気出しまくりです

舞い降りる絶望　前編（前書き）

久々の投稿です
しかし未だに燃え尽き症候群が抜けきっておらずちょっとグダグダな気がする
でも熱血ＭＡＸで書いて行きます

舞い降りる絶望　前編

甲児達がデビルマジンガーと戦っているのとほぼ同時期、こちらでも動きはあった

「大変です！ミッドチルダ全域で機鋼獣と合成獣が大勢出現して暴れまわってます！」

正面のモニターでは世界中の各都市に出現した機鋼獣と合成獣が暴れまわっている映像であった
勿論管理局の魔道士達も応戦してはいるが機鋼獣や合成獣には全く歯が立たず防戦一方となり追い詰められていた
このままでは全滅も時間の問題であった

「うぬぬ・・・あのクソ親父め、遂に行動を起こしおったな！」

モニターの前に立った十蔵が渋い顔をしていた

「これ以上被害を広げる訳にはいかない！厳しいかもしれないが各自分散して各都市に散って機鋼獣並びに合成獣を相当して来るんだ」
「しかしドクター、そうなればこちらの防衛はどうするんですか？」
「心配ない、この地下施設は今の所敵に発見されていない。それに早々此処が落とされる事はない」
「でも一応護衛は必要じゃないのか？」

心配になったヴィータが聞いた
それには他のメンバーも頷いていた

「俺達スーパーロボット部隊は単独でも充分戦えます」

「だな、あの合成獣には借りがあるんだ！この手でぶちのめさねぇと気が済まねぇ」
「剣児・・・あんたは相変わらず血の気が多いわねぇ」
いきり立つ剣児につばきが呆れた顔になる
「俺様も大活躍出来る場面に来ただわさぁ！」
「でも私達のロボットだと少し不安ねぇ」
「だったら私達は三人で動けば良いわ」
さやか、ボス、ジュンの三名は連携して動く事にした
「ならば私がドクターとヴィヴィオの護衛に回るとしよう」
「チンク姉！大丈夫ッスか？」
「見くびるな、伊達にドクターから『チンク』の名を貰った覚えは無いぞ」
心配になるウェンディにチンクは笑って見せた
「そんなに不安なら私も護衛に回るわ」
そう言ってギンガも地下施設の護衛に回る事になった
「となると我等魔道士や戦闘機人達は連携して動いた方がよさそうだな」
「そうですね」
「しかし、こんな時に兜達はまだ帰って来ないのか？」
「それにはやてちゃんや大介さんも帰って来てませんよ」
シグナムとシャマルが今は居ない甲児達について愚痴っていた

「居ない奴について話してても意味は無いだろう」
「ああ、トーレ姉の言うとおりだな、甲児達が居なくたってあたしらだけでもやってやるぜ！」
「俺達ゲッターチームも出れるぞ」
「勿論新生ゲッターチームも健在だぜ！」

竜馬と號は言う
それでも各地に散らばって戦う場合戦力不足は否めない状況でもある

「管理局から応援は頼めないんですか？」
「難しいなぁ・・・それに管理局の魔道士じゃ機鋼獣や合成獣には太刀打ち出来そうにないし」

オットーの問いに重い顔をしたなのはが答える

「要するに事実上あれと戦えるのは私達だけなんですね」
「厳しいがそうなるな・・・私達ナンバーズはドクターに対機鋼獣用に改良されてるし機動六課のデバイスも機鋼獣と対等に戦えるように改良されてるが、他の奴等のでは機鋼獣の結界を破るのは無理だろう」

ザフィーラもそれには答える

「念のため各地にガジェット部隊を飛ばしたが・・・機鋼獣が相手では焼け石に水だろう・・・」

剣造が難しい顔でそう言う
一応ガジェットの中には戦闘用に改良した型もあるのだが、それでも機鋼獣や合成獣と戦うには力不足であった

結果的に戦力を分散する事になる

「それで剣造さん、今奴等が暴れてるのは具体的に何処なんですか？」

「主立って暴れてるのはこの地点だ」

そう言って剣造がモニターを写すと

首都クラナガン、地上本部、聖王教会、そして機動六課隊舎であった

「え？何で機動六課隊舎に？」

フェイトはふと自分達のねぐらであった機動六課隊舎を見た

其処は以前機鋼獣の攻撃を受けて破壊された後、ガジェット達の手により復興作業が行われていた場所であった

その為今のあそこに戦略的価値は無いに等しい

しかし其処に一体の反応があったのだ

「何かあるな・・・恐らくは罠か・・・あるいは」

「こちらを誘ってると？」

「そう考えるのが妥当だろう」

「・・・私が行きます」

「フェイト？」

皆が一斉にフェイトの方を見る

「多分・・・あれは甲児さんを破ったもう一体のマジンガーだと思えます」

「何でそれが分かるんだ？」

「何となくです・・・でも、きっとそうに違いありません！」

フェイトは断言した
「それなら私も行くわ」
「さやかさん」
「一人じゃ大変でしょ。私もそんなに強い訳じゃないけどフェイトちゃんのサポート位なら出来るわ」
フェイトに向かってニコッと微笑むさやか
そんなさやかを見てフェイトも微笑み返す
「よし、ならばテスタロッサと弓の二人は其処に向かってくれ」
「「はい」」
「ウーノとクアットロはスカイホエールで上空から皆の援護を頼む」
「分かりました」
「お任せよん」
「それから、今動けるメンバーを確認したい」
剣造は改めて今動けるメンバーを見た
機動六課メンバーでは
なのは、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、エリオ、キャロ、アリシア、リインフォース
ダイナミックメンバーでは
ゲッターチーム、新生ゲッターチーム、剣児、つばき、ジュン、ボスナンバーズではウーノ、クアットロ、チンク以外全員が動けた
「これだけ見ると結構居るみたいですけど？」
「それでも機鋼獣が相手ではかなり厳しい物がある」
「一応私とクアットロが上空からサポートするけど全員に行き渡るのは厳しいわ」
「万能戦艦でも限界があるのよねぇ」

「私は此処で皆のサポートに回る。可能な限りガジェットは出すが残りはあまり多くない。頼みは君達だ」

剣造の言葉に皆が頷く

「剣造さん、リインとアギトはどうすれば良いんですかぁ？」
「リインはヴィータと、アギトはシグナムとコンビを組んでくれ。確か二人はユニゾン出来た筈だったね」

剣造が言う
確かにその通りである
二人はユニゾンの相性が良い為可能なのだ

「しかしそれを聞くと最近クロスユニゾンしとらんのぉ」
「仕方ありませんよ、あれはお父さんが居ないと出来ない物ですし色々と欠点が多い。余り無闇には使えませんからね」
「むむぅ・・・歯がゆいのぉ」

苦虫を噛んだ顔になる十蔵である

「首都クラナガンはトーレを筆頭にセイン、セッテ、オットー、ザフィーラ、シャマル、ジュンに行ってもらう」
『了解』

選別されたメンバーは了解した

「次に地上本部はなのはを筆頭にヴィータ、エリオ、キャロ、ディード、ルーテシア、剣児、つばきに行ってもらう」
「分かりました」
「へへ、腕が鳴るぜ」

なのはは頷き剣児は腕をならす

「最後に聖王教会はシグナムを筆頭にアリシア、セイン、ノーヴェ、ウェンディ、ディエチ、ボス、リインフォースに行ってもらう」

「善処する」

シグナムが頷く

「それで博士、俺と號達はどの部隊に行くんですか？」

「うむ、ゲッターチームには・・・む！」

剣造が振り分けようとした時、外で甲児達を追っていたガジェットが映像を写す

それを見た時、剣造の顔が凍りついた

其処には、ダブルマジンガーが黒い魔神デビルマジンガーと戦っている映像であった

「あれは！甲児くんに鉄也くん」

「それにあれって」

「デビルマジンガー」

剣造が名前を言う

それを聞いた一同に戦慄が走る

「ゲッターチームは至急甲児達の救援に向かってくれ！デビルマジンガーを相手にマジンガーでは勝ち目がない」

「おいおい、そんなに強いのか？あのデビルマジンガーってのは」

弁慶が疑問に思ったので聞いた

それに剣造は頷いた

「あれは正しく悪魔の魔神だ・・・甲児達が太刀打ち出来る相手じゃない」

「自分でも分かります。あの機体から放たれる威圧感は此処まで来るみたいですよ」

凱がデビルマジンガーを見て背筋の凍る思いを訴える

「ちょっと待ってくれ！あそこに見えるの・・・ティアナじゃねぇか！」

それはマジンガー達が戦っている地点より少し離れた所であった
其処ではティアナが必死にバスターミラージュで結界を破ろうとしていた
だが、結界はビクともしない

「グズグズしてられないな。こうなったら動くべきだろう」

「隼人の言うとおりだ。一人じゃ勝ち目がないなら俺達の力を合わせれば良い」

「行きましょう！竜馬さん」

號は居ても立っても居られない状況であるのを目の前で作った握りこぶしで見せた
それに竜馬は頷く

「よし、それじゃ頼むぞ」

剣造の言葉に皆が頷きその場を後にした

「チンク、ヴィヴィオは今何処に居る？」
「今は恐らく自室で寝ている筈です」
「そうか」
「どうかなさいましたか？」
「嫌・・・年だろうな、この年になると孫が心配になる」

剣造は一人含み笑いを浮かべて額を押さえる
それを察したのかチンクも笑みを浮かべる

「では私が護衛につきましょうか？」
「頼む、あの子はまだ子供だ。戦場を経験させたくない」
「分かりました」

頷いたチンクはヴィヴィオの居る部屋へ向かった
それを確認し終わると剣造は再びモニターに目をやった

「兜原蔵・・・お前の好きにはさせん・・・兜の性を持つ者としてお前の野望は必ず叩きのめしてみせる」
「そうじゃな、ワシもあんなクソ親父の野望をかなえさせたくないしのぉ」

剣造の肩に乗っていた十蔵がそう呟く

＊＊＊

その頃、甲児と鉄也のダブルマジンガーはデビルマジンガーと熾烈な戦いをしていた

「野朗！これでも食らいやがれ」
「こっちも食らえ！」

Zとグレートは同時に熱線を放つ
ダブルバーニングファイヤーである
しかしそれを食らってもデビルマジンガーは涼しい顔をしていた
それどころか、デビルマジンガーから放たれた熱線は2体のマジンガーの熱線を跳ね返して襲い掛かってきた

「おわっ！」
「むっ！」

咄嗟に回避した為に直撃は避けた物の、当たった地点は蒸発していた
まともに食らえば一溜まりも無い威力だ
思わず固唾を呑む甲児
その時であった

「甲児くん、鉄也くん！」
「リョウくん！」
「號！」

それは救援に来たゲッターチームであった
それぞれ合体し真ゲッター1、そしてゲッター號になった

「二人共聞いてくれ。今各地で機鋼獣と合成獣が暴れているんだ」
「何だって！」

「それで、さやかさんとフェイトさんが機動六課隊舎に向かってます」
「さやかさんが・・・って待ってくれ、あそこはまだ復旧が終ってないだろう?何で敵が攻める必要があるんだ?」
「俺にも分からない・・・只、博士が言うには罠の可能性がると言っていた」
「くっ!」

それを聞いた甲児が辛い顔をした
出来る事なら今すぐ飛んで行きたい
だがそうなるとデビルマジンガーはどうする
只でさえ強い相手なのだ
それなのに自分が抜けてしまって平気なのだろうか
そう思えていた
そんな時であった

「行って下さい甲児さん」
「ティアナ、お前・・・」
「こっちは大丈夫です。ですから早く」
「だけど・・・」

ティアナの言葉にまだ渋る甲児

「行って来い、甲児くん」
「鉄也さん!」
「俺達がこいつをどうにかする。だから君は早く行くんだ」
「けど」
「大丈夫ですよ!何せ無敵のグレートに真ゲッターがついてるんです。絶対に負けませんよ」
「お前ら・・・有難うよ!」

甲児はそう言い残して飛び立った
その姿を鉄也達は見送る
だがすぐに視線を元に戻す

「さぁ、お前の相手は俺達がしてやる」
「来い！デビルマジンガー」

グレート、真ゲッター、ゲッター號がデビルマジンガーを睨んだ
その下では結界の中で覚醒したスバルが居た

「まさか龍の力が備わるとはね」
「これでお互い互角になったかな？」
「見くびるなよ、例え竜の力を身につけたからって僕にお前が勝てる筈が無いだろう！」
「やってみないとわかんないよ！」
「戯言をぉ！」

もう一人のスバルが怒りの形相になりスバルに襲い掛かる
しかしそれを持っていた棍で受け止める
そして払い除ける
以前よりパワーが上がっている

「ちっ、厄介な奴だ！」
「行くよ、リュウコン」
『応！』

スバルがリュウコンを見てそう言った後、一気に距離を詰める
そして鋭い一撃を放つ
それをもう一人のスバルはかわす

かわされた後放った一撃は地面を抉る
その当たった箇所を中心に結界の中一杯にクレーターが出来上がった

「す・・・凄い力・・・これ私に扱いきれるのかなぁ？」

思わずその力に不安を感じるスバル
だがそんなスバルにリュウコンが叱咤する

『馬鹿者！主の力はそんなもんか？それではゼノンの奴に笑われるぞ』

「・・・そうだよね！」

ゼノンの名前を聞いて硬くリュウコンを握り締める
此処で弱音は吐いてられない
そう思ったスバルは再びリュウコンを振るう
それをデビルナックルが受け止める

「何時までも調子に乗るんじゃない！」
「うおおおおおおおおおおおおお！」

棍と拳が激しい火花を散らす
そして、結界の外ではティアナがデバイスの穂先でエネルギーを集中させていた

「なのはさんと一緒に練習したのだけど・・・実戦はこれが始めてね・・・上手く出来れば良いけど」

一抹の不安を胸に魔力を集中させる
そして放つ

「スタァァァライトォォォブレイカアアアアアアアア！！！」

＊＊＊

その頃、フェイトとさやかは機動六課隊舎に辿り着いていたフェイトとさやかは目の前に立つ一体の魔神を見たそして其処に佇む青年を見た

「あれって・・・甲児くん！」
「違うよさやかさん・・・あれ甲児くんに似てるけど・・・あれは私と同じように生み出された存在」
「どう言う事？」
「私は・・・姉のアリシアのクローンなんです」
「え？」

さやかは驚愕した

「私は甲児さんのお母さんが立ち上げたプロジェクト「プロジェクトF」を悪用した獣魔将軍によって生み出された存在なんです・・・そして、それは彼も同じ」
「あの人も・・・」
「さやかさん・・・少し彼と話をしても良いですか？」
「う、うん・・・」

今のさやかは頷くしか出来なかった
そんなさやかの前にフェイトが降り立つ
その前には甲児に良く似た青年が立っていた

「やっぱり来たな」
「こうして会うのは初めてだね」
「だな・・・へぇ、戦いの時は気づかなかったけど・・・あんた結構綺麗だな」

目の前に居る甲児に良く似た青年Ｋ－１はフェイトをマジマジと見つめる
余りにも無防備であった
それこそ拘束しようとすれば簡単に出来そうである
だが、フェイトはそうしようとは思い立たなかった
何故かは分からない
しかし、あのＫ－１の無邪気な顔を見ると何処か敵とは思えなくなってしまったのだ
それはフェイトの優しさ故であろう

「一つ・・・聞いて良い？」
「？？？・・・何だ」
「どうしてあの時・・・甲児さんにトドメを刺さなかったの？」
「何だ、あの時の事か・・・」

面倒臭そうにＫ－１は頭を掻き毟る
するとじっとフェイトの方を見る

「お前も分かるだろう」
「・・・うん、君も私と同じプロジェクトＦの産物だって事は・・・

」
「なら答えは出たも同然だ。俺はあいつ、兜甲児と同じなのさ」
「どう言う事？」

答えが見えてこない
その為聞き返した
するとＫ－１はフゥと溜息を吐く

「つまりだ、俺はアイツと思考が同じなのさ。だから俺は例え敵でも女は殴らない。男だったら当然だろう？」
「だから・・・あの時お爺ちゃんの命令を無視したの？」
「あぁ、それにケリをつけようと思えば何時でも付けられるからな」

Ｋ－１はそう言ってニヤリと微笑む
フェイトは聞きながらもバルディッシュを決して手放さなかった
何時襲い掛かってきても対応できるようにである
これは彼女が執務官になってからずっとである
この職になってからと言うもの危険な任務が多かった
それこそ一歩間違えれば死に繋がる任務が主であったのだ
その為常に緊張感を持っていなければならない
しかし目の前のＫ－１は酷く落ち着いている
今でも自身の愛機であるマジンガーに背中を預けて空を眺めている
このまま眠りに入りそうな位でもあった

「ねぇ、何でそんなに気を緩めて居られるの？」
「ずっと張りっぱなしじゃ疲れるだろう？」
「今目の前に居るのは貴方の敵なんだよ？それでも緩めていられる？」
「ああ、あんたは優しいからな。別に俺が動かなけりゃ斬り付けて来ないんだろう？」

その一言にフェイトは驚いた
正に考え居ていた通りであった
もしもＫ－１が襲い掛かってきたらすぐにでも切り倒せるように準備はしていたのだ
しかしそれをいとも容易く見破られていた
となれば対応も出来る
そうと分かるとフッとフェイトも緊張感を緩めた
これ以上張ってても恐らく無駄だろう
彼の方が一枚上手なのだ

「そう言えば、お前も俺と同じプロジェクトＦの産物なんだよな」
「うん・・・私は母さんにとりついた獣魔将軍の手で産み出されたの」
「そっか・・・お前、今でも悔いてるんじゃねぇの？自分が生まれなきゃ良かったってさ」
「・・・・・そうかも知れない」

Ｋ－１の言葉に正直に答えられず曖昧な返答になってしまった
それを聞いたＫ－１がこれまた盛大に溜息を吐く

「馬鹿だなぁ、どんな理由があったってお前が生まれたのには何か理由があるだろう？少なくても俺はそう思ってるぜ」
「強いんだね、君は」
「そうか？元々俺はこんなだぜ」
「あ、そうか」

フェイトは納得した
そう言えばＫ－１は甲児を元に作られたのだ
となれば中身も甲児と同じ筈だ

甲児も余り深くは考えこまない性格だ
その上他人の為に平気で自分が傷つくのも構わないと思っている
そんな風な感じなのだ
目の前に居るＫ－１と言うのは

「そう言えば、君は何でＫ－１って言うの？」
「それが俺の名前だからだよ」
「それが名前？」
「あぁ、ずっとお爺ちゃんが俺の事そう呼んでんだ」
「何だか・・・変な名前だね」

フェイトが苦笑いを浮べながら言う
最早フェイトの目にはＫ－１が敵とは思えなかった
それはＫ－１も同じであった
フェイトの言葉を聞いてＫ－１が頬を掻く

「そうは言ってもよぉ・・・俺にはこれしか名前無いんだよなぁ・・・なんならさぁ、お前が何か名前考えてくれよ」
「え、私が？」
「あぁ、俺もあんたが作った名前なら納得出来るし」

Ｋ－１が笑って答える
それを聞いたフェイトは顎に手をやって少し考え込んだ
そして浮んだ名前は

「それじゃ『甲一』ってのはどうかな？」
「甲一？」
「うん、多分そのＫ－１ってのは甲児さんのイニシャルから取ったと思うんだ。それで最後の１だから甲一・・・安直だったかなぁ？」
「嫌、気に入った！今日から俺は甲一だ！サンキューなフェイト」

「う、うん・・・」

甲一がニッコリと微笑むのを見て思わずフェイトは頬を染める
一体どうしたと言うのだろうか
今まではそんな風にはならなかったのに
まるで甲児を好きになった時のようである
まさかと思い再び甲一を見るが余り長く見ていられなくなり俯いてしまう

「どうした？具合でも悪いのか？」

心配になった甲一がフェイトの顔を覗き込む
するとそれに驚いたのかフェイトが慌てて下がる
顔は真っ赤だ
しかし突然慌てて下がったせいか思いっきり転んでしまった

「いたた・・・」
「アハハ、お前って案外ドジなんだな。ほら」

甲一がそっと手を差し出す
フェイトはそれに何の迷いも無く掴み、立ち上がる

「あ、有難う」

多少恥じらいながらもフェイトは甲一に礼を言う
その顔を見た途端甲一も顔を少し染める
そして気恥ずかしそうに頬を掻きながら

「お、おう」

と返事した

＊＊＊

「あ～らら、これってもしかした私邪魔かなぁ？」

自身のロボットからフェイトと甲一を見ていたさやかは半ば恥ずかしいようなくすぐったいような感じになった
最初は敵なのかと思っていたがどうやらあれは脈ありな顔である
確かに敵同士が恋に落ちるのは良くある話だが、それを目の前でやられるとまるでドラマを見てるみたいであった

「フェイトちゃん・・・上手く行くと良いなぁ」

さやかはフェイトの恋が上手く行くように心からそう思った
その時であった
突如ミネルバＸの周りの地面から数体の機鋼獣が現れた

「待ち伏せ！」

完全に後手に回ってしまったさやかのミネルバは対応しようとするも瞬く間に数体の機鋼獣に取り押さえられてしまった

「さやかさん！」

フェイトが異変に気づいて急ぎ救援に向かおうとした
だが、そんなフェイトの体を細い鋼線が絡め取る

「ぐっ・・・こ、これは・・・」
「ご苦労だったな。Ｋ－１」
「お前ら・・・ガミア！何で此処に？」

其処には数体のガミアが自身の髪でフェイトの動きを封じていた
切断機能は作動させていないようだが、それでもガミアの髪は鋼鉄製の為引き千切る事が出来ない
それで動きを封じられたフェイトの顔が苦痛に歪む

「フェイト・テスタロッサ・・・機動六課ライトニング隊長にして、プロジェクトＦにより生み出された存在」
「我等が主、機鋼王様がお前を御所望だ」
「共に来て貰おうか」

ガミアの顔がニヤける
だが、それとは対照的にフェイトは恨めしそうにガミアを睨む

「だ、誰が貴方達の元へなんて・・・」
「そうか・・・ならば仕方ない」
「主の命では生きたまま連れ帰るのが任務だが・・・」
「抵抗するようなら死体にしても構わないと言う命令だ」
「死ね」

そう言ってガミアが徐々に髪を引っ張っていく
それにより体中を締め付けられる痛みが走る
フェイトの顔に更に苦悶の表情が浮び出す

鋼線が体に食い込み僅かに血が滲み出していく
だが、
「いい加減にしろ！」
それを後ろに居た甲一がガミアの鋼線を引き千切った
それにより自由になったフェイトが後ろに倒れそうになる
それを甲一がそっと抱きかかえる
「何の真似だＫ－１？」
「決まってるだろう！これ以上こいつの苦しむ顔なんざ見たくねぇんだよ！」
「貴様、我等が主の命に逆らうと言うのか？」
甲一の前に居た三体のガミアの目が輝き髪が逆立ち出す
それに対し甲一がニヤリとする
「悪ぃな、幾ら主の命だろうとお爺ちゃんの命だろうと、惚れた女を「ハイ、そうですか」ってな風に渡せないんだよ」
「え！」
甲一の口から告げられた言葉にフェイトは胸に何かが突き刺さる思いがした
心臓の高鳴りが激しくなっていく
顔がトマトの様に真っ赤になっていくのが分かる
「そうか・・・ならば、貴様を殺す」
「我々としても貴様は気に入らなかったんだ」
「丁度良い、Ｄｒ．ヘルには戦闘中に死亡と報告だけしておく事にしよう」

三体のガミアが互いにそう言い会うと髪を甲一に向かって靡(なび)かせる

「はん、舐めるなよ！俺がお前らみたいなアンドロイド如きに倒されると思ってるのか？」

「女を抱えて戦えるのか？」

「ハンデには丁度良いぜ」

「馬鹿め！」

そう言ってガミアが髪を一斉に甲一に向けて放つ

「遅い！」

だが、それよりも早く甲一はフェイトを抱えたままガミアとの距離を詰める

それにガミア達は驚く

確かにガミアの髪は鋼鉄製でありその威力は凄まじい

しかしその攻撃方法は鞭のようであり、つまりかわされると僅かな間無防備になってしまうのだ

「馬鹿はてめぇだ！」

そう言った直後、目の前のガミアの胴体に穴が開いた

甲一の腕が刺さったのだ

そしてガミアの目から輝きが失せるのを確認すると腕を抜き取り蹴り飛ばす

「おのれ！」

丁度前後に位置したガミアは一斉に髪を放つ

「フェイト、ちょっと乱暴するぞ！」
「え？乱暴って一体・・・キャ！」

僅かにフェイトが声を上げた
無理もない
いきなり遥か上空に投げ飛ばされたのだから
甲一は晴れて自由になった両腕で手近なガミアの頭部を掴み後ろに
居たガミアの髪を防いだ
それにより受けに使ったガミアはズタズタに引き裂かれた

「ちっ、次は外さん」
「馬鹿、俺を倒したかったら一発で仕留めるつもりで来い」

甲一は言葉を放つのとほぼ同時に距離を詰めてガミアの頭部を掴み
そのまま握りつぶしてしまった
頭部を失ったガミアは力なくその場に倒れる

「ヘン、俺を倒したかったらもうちっと数を揃えやがれ」

手を叩きながら甲一が余裕の声を上げる

「す、凄い・・・でも・・・何で」

その上空からゆっくりと降下してきたフェイトが甲一に尋ねた

「何で味方を裏切るような事をしたの？」
「しょうがねぇじゃん。俺があの時ああしなかったらお前今頃バラ
バラになってたんだぜ」
「でも・・・私達は敵なのに」

「さっきも言っただろう。惚れた女は渡さないって」
「え？」
「俺はお前に惚れたの。悪いか？」

甲一がフェイトの目をじっと見つめて答える
フェイトは真っ赤になりながらも首を横に振った
その時であった

「アイアンカッタァァァ！」

聞き覚えのある声と共に上空から二本の腕が飛んできた
それは腕の部分に鋭い刃が付けられていた
そしてそれがミネルバを拘束していた機鋼獣を全て切り刻んでしまった
それにより自由になったミネルバが空を見上げる

「甲児くん！」
「さやかさん！フェイト！無事か？」

甲児が声を上げながら高度を落として着地した
そしてZの膝を落としてそのままパイルダーから地面に降り立つ
其処で甲児は始めて甲一を見た

「お前がK－1か？」
「今は違う」
「何？」
「今の俺は甲一だ。フェイトが付けてくれたんだ」
「どう言う事だ？」

さっぱり事情が分からない甲児が首を傾げていた

だが、分からないのであれば後で本人に聞けば良い
そう思いその話題は置いておく事にした

「にしても・・・本当に俺にそっくりだなぁ」
「当たり前だろう。俺はお前を元に作られたんだからよぉ」

甲児はヘルメットを取って甲一を見た
まるでドッペルゲンガーであった
顔つきから髪型、特徴的なモミアゲまで全てそっくりなのだ

「さて、お前が来たんだ」
「そうか」
「やるか？」
「おう！」

甲児と甲一は互いにそう言いあった
間に居たフェイトは何が何だか分からなかった

「え？甲児さん、甲一くん、一体何するの？」
「決まってるだろう！フェイト」
「ああ、此処で会ったのも何かの縁だ。あの時のケリを今こそ付けようぜ」

互いが睨みあう
その目からは火花が散っているようである

「ちょ、ちょっと待って！何で二人が戦う必要があるの？」

その二人の間にフェイトが割って入った
出来る事なら戦わないで欲しい

それがフェイトの心の声であった
だが、運命はフェイトの願いを聞き入れる事は無かった

「悪ぃなフェイト。俺も甲一も決着をつけたいんだよ」
「あぁ、お爺ちゃんの夢とか機鋼帝国の野望とかはどうでも良い。只、お前と決着が付けたいんだ」
「止めて！・・・て、言っても聞かない？」
「「ああ」」

フェイトの言葉に二人は声を揃えて言う
それを聞いてフェイトが俯く
それに少し甲一は悲しそうな顔をしたがすぐに元に戻った

「決着はどうつける？」
「あの時と同じだ」
「お互いの魔神で戦うんだな？」
「ああ、それで良い」
「乗った！」

それに納得した甲一が後ろに止めてあったジェットパイルダーに乗り込む
甲児もジャンプしてパイルダーに乗り込む
２体の魔神の目が輝き命の火が灯る
そして二体同時に天に向かって咆哮する

『よぉ、いよいよアイツと決着をつけるんだな？』
「おう！あの時は負けちまったからなぁ、その借りを今から返してやる！」

語りかけたＺに甲児が答える

そしてゆっくりと2体のZが上空に舞い上がる
戦いの邪魔が来ないようにである
そしてお互い一定の高度に達した時、その場で一旦停止した

「それじゃ、始めるか」
「その前に一つ聞かせろ」
「何だ？」
「お前・・・フェイトに惚れたな？」

甲児は笑みを浮べながら聞く
それに甲一は迷う事なく

「ああ、惚れた」

と答えた
それを聞いて甲児は成る程なと、納得した

「アイツを泣かせるなよ。アイツ良い子だけど、何処か涙脆いからよぉ」
「へ、頼まれたって泣かせねぇよ！」
「それを聞いて安心したぜ」
「だからって手加減すんなよ！」
「誰がするかよ！」

そう言ったのと同時に2体の魔神が空中で激突する

舞い降りる絶望　中篇1（前書き）

多分今回は滅茶苦茶長くなると思います

舞い降りる絶望　中篇1

「うおおおおおおおおおおおおお！」
「おりゃあああああああああああ！」

機動六課隊舎で二体の魔神が互いに拳を交えていた
ぶつかりあった拳が火花を散らし轟音を奏でる
そしてその後二体の頭が互いにぶつかり合う
キャノピー同士が激しくぶつかり合い僅かなヒビが入りだす
それでもパイロットである甲児と甲一は互いに睨み合っていた
二人共激しく睨み合っていた
しかし其処には憎しみなどは微塵も無かった
そして二人の間には敵味方など無かった
只男と男の勝負であった
お互いに拳を交えてお互いに認め合ったからこそ出来る事なのだ

「やるじゃねぇか！Ｋ－１・・・じゃなかったな・・・甲一」
「てめぇもな。甲児」

突如二人は笑顔になった
強敵同士のぶつかり合いで生まれる喜びであろうか
激しくぶつかりながらも何故か二人は野原でじゃれあっている感じであった
だが、側から見ればその戦い振りは目を見張る物である
ある時は拳がコクピットスレスレで飛び交い
ある時は丸太のような足が唸りを上げて飛び交う正に一瞬の気の緩みが命取りになる戦いである
並の者であれば肝を潰し青ざめて失神する物であろう
だが二人は違った

お互いに一歩も引かずに戦っていたのだ

「ならこれならどうだ！」

甲児のZは一旦距離を置く
そして腕を構えて放つ
ロケットパンチである

「甘い！」

同じように甲一のZも放つ
互いに放ったロケットパンチがぶつかり合い弾け飛んだ
甲児は顔を顰めながら戻ってくるロケットパンチを見た
やはり実力は同じ
ならば後はお互いの技量による物なのだろうが生憎相手は自分自身と言っても過言でも無い
まるで鏡に映っている自分と戦っている様な感じであった
そしてそれは甲一も同じであった
やはりこの様な戦い方では拉致が開かないのは必須であった

「やっぱこんなんじゃ拉致が開かないな」
「だな、だったら一気にケリつけるか！」
「同感だ！」

甲児と甲一がお互いにニヤリとする
すると突如二体は上空に高速で飛び上がり空中を旋回する
そして魔神の目が輝き姿が魔神の姿から巨大な腕となる
そのまま黄金に輝き硬く握り締める

「やっぱお前とはこれでケリをつけねぇとなぁ」

「同感だぜ！覚悟しやがれ！」

甲児と甲一が互いに叫びぶつかり合おうとしていた

甲児と甲一の戦い振りは下に居たさやかとフェイトの二人も見ていた
フェイトは半ば不安そうに見ていた
そしてそれはさやかも同感であった

「フェイトちゃん、大丈夫？」
「さやかさん・・・私どうしたら良いんだろう」
「何が？」

フェイトはさやかに問うた後俯いてしまった
さやかはそんなフェイトの仕草を見て察した

「もしかしてフェイトちゃん、甲一くんに惚れられちゃったのが迷惑だったの？」
「そ、そんな事は・・・無い・・・けど」

フェイトは必死に顔を隠した
だが、顔の端が赤くなっている事に気づいた
さやかも年頃の乙女である
フェイトの気持ちを察する事など容易い事である
恐らくフェイトもまた甲一に惚れてしまったのだろう
同じプロジェクトFから生まれたからでは無い
お互いに心から惹かれあった為であろう
以前も確かこのような事があった
それはまだ甲児とさやかが１６の頃であった
兜博士の残した設計図をＤｒ．ヘルが奪い組み立てたロボット「ミネルバＸ」

今でこそさやかの乗機となっているが元は人工知能を搭載したロボットであった
だが、それを設計図どおりに設計した為にミネルバXにはある回路が組み込まれた
それはマジンガーZを防衛する回路である
そしてそれはある時、ミネルバに恋と言う感情を芽生えさせたのだ
ミネルバはそれこそ人間の女性の如くマジンガーを愛した
だが、その思いは実る事は無かった
機械獣の攻撃により破損した回路がミネルバを悪魔にしてしまったのだ
そしてミネルバは最後に涙しながらマジンガーの腕の中で静かに眠りに付いた
それを見たマジンガーの目からは涙の如く冷却オイルが流れ落ちたまるでマジンガーがミネルバの死を嘆くように

さやかは思い出していた
悲しき思い出を
そしてその思いを胸にフェイトに話しかけた

「フェイトちゃん、大丈夫よ。甲児くんも甲一くんもきっと貴方を悲しませたりはしないわ」
「で、でも・・・二人共あんなに激しく戦ってて・・・」
「大丈夫よ。あんなの二人にとってはじゃれあってるような物なんだしね」
「そ、そうなんですか？・・・」

心配になるフェイトを他所にさやかは安心しきっていた
まるでこの勝負の勝敗が分かっているかの語り口であった

「甲児くんは何時だってそうだったわ・・・どんな状況でも絶対に

仲間を悲しませるような事はしないようにしてた・・・でも何時も無茶ばかりするからこっちはヒヤヒヤしてたけどね」

笑みを浮べながらさやかは言う
フェイトはそれを黙って聞いていた

「でも、どんな時でも戦いが終った時は笑顔で帰って来るのよ」

其処でさやかはニッコリと微笑む
それを見たフェイトは再び俯いてしまった

「さやかさんには適わないなぁ」
「どうして？」
「だって・・・さやかさんは其処まで甲児さんを信じきっているんですね」
「そりゃぁねぇ、何せ結構長いし」

呆れた顔でさやかは言う
そしてまた上空を見た
其処では二体の魔神が今こそぶつかり合おうとしていた
フェイトにはその姿がとてもじゃれあっているようには見えなかった
まるで死力を尽くして戦っているようである

「フフフ、フェイトちゃんは案外心配性だねぇ。大丈夫よ、顔は見えないけど私には分かるのよ。今あの二人は笑顔で戦っているのが見えるわ」
「甲児さんと甲一くんが・・・笑顔で？」
「まるで兄弟喧嘩ね」
「兄弟・・・喧嘩・・・」

それを聞いたフェイトもまた上空を見上げた
そして手を強く合わせる
願わくは二人共無事に帰って来る事を

金色に輝いた二体の魔神が激しくぶつかりあった
火花を散らしてぶつかりあった後に激しく弾けとんだ
グルグル回って反対方向に飛んでいく
それでもすぐに体制を立て直して飛び上がる

「へぇ、前はこの一撃で撃ち落されたのに、これに耐えるなんざやるじゃねぇか」
「へ！俺だって何時までも同じな訳じゃねぇぞ」

そう言い会う甲児と甲一の顔は相も変わらず笑顔であった
そして再びぶつかり合おうとしていた

「こうなったらぶっつけ本番だがやるっきゃねぇな」

決意した甲児はビックバンパンチに更に回転を加えだした
その動きはまるで大車輪であった
これこそ、甲児が長い時間を掛けて編み出した新必殺技である

「これぞ名づけて！「大車輪ビックバンパンチ」だぁ！」

甲児は叫ぶ
だが、それを見た甲一はニヤリとした

「阿呆！それを俺が思いつかないと思ったのか！」

そう言うと何と甲一の乗ったマジンガーも同様に回転を始めたのであった

「何！」

「忘れたのか？俺はお前なんだぜ！お前の思いつく戦法なんざお見通しなんだよ！」

回転した巨大な腕が互いにぶつかりあった
激しい火花を散らし空中でぶつかり合う
だが、甲児の乗ったZから嫌な音が響き出した
装甲にヒビが入りだしたのだ
恐らく長時間ビックバンパンチを放ったのとこの技の無理がたたった為に装甲が保たなくなってきたのだ

「この勝負・・・どうやらまた俺の勝ちみたいだな」

「舐めるんじゃねぇ！俺を誰だと思ってやがる！俺は・・・兜甲児だあああああああああああ！」

甲児の叫びと共にマジンガーは唸りを上げて一気に地面に向かって突き切った
その一撃は凄まじく甲一のマジンガーがつけていたデビルスクランダーを粉々に打ち砕いてしまったのだ

「馬鹿な・・・俺が・・・負けたのか・・・」

甲一は未だに信じられなかった
そんな甲一は徐々に高度を落として地面に向かっていく
しかし、それを甲児の乗ったマジンガーが飛び上がり僅差で抱え込み地面に降ろした

「何の真似だ？」
「お前だって勝ったらこうするつもりだったんだろう」

甲児はニッと笑って言った
それを見た甲一は諦めたのかフッと微笑んだ

「負けたよ・・・俺の完全な負けだ・・・お前には適わねぇや」
「甲一」
「俺は今までお爺ちゃんの為に生きてきた・・・だけど、あの時お前とぶつかって、フェイトに出会ってから変わったんだ・・・自分の為に生きるのも悪くないなってな」
「へへ、フェイトの事・・・頼むぜ」
「当たり前だろう！それより、今後お前フェイトに近づくなよな」
「な、それどういう意味だよ！」

途端に甲児と甲一は睨みあう

「決まってるだろう！お前が近づいたらお前の馬鹿がフェイトに移るだろうが！」
「てめぇ！お前は俺のクローンだろうが！だったらお前も馬鹿じゃねぇか！」
「お生憎様、教養はお爺ちゃんにたんまり仕込まれたから大丈夫さ」
「なら俺だってＮＡＳＡを出た身だ！頭は問題じゃねぇ！」
「頭じゃねぇ！お前の精神だよ！何時もスケベな事考えやがって・・・この助平」
「んだとぉ！」
「やるかぁ！」

キャノピーを開いて互いににらみ合いを始める
それを見たフェイトは呆れてしまいさやかは頭を抱えていた

舞い降りる絶望　中篇1（後書き）

結構途中ですが此処で区切ります

サーセン

舞い降りる絶望　中篇2

その頃、上空ではデューク・フリードがグレンダイザーに良く似たロボットを見ていた
ベガダイザー。そう言う名前のようだ
そのロボットが今こうしてグレダイザーを見ていた
敵であれば倒す。ましてそれが憎きベガ星連合軍のロボットであれば尚更だ
だが、今デュークはそれを躊躇っていた
何故か・・・それは、今ベガダイザーに乗っている者の為であった

「本当に君なのか？ルビーナ」

デュークは名を呼んだ
かつてまだフリード星とベガ星が争う前の事、デューク・フリードとベガ大王の娘ルビーナは互いに相思相愛の関係になり愛し合った仲であった
だが、ベガ大王が突如フリード星を攻撃した為にその愛は断たれたかに思えた。だが、ルビーナは離れても尚デュークの事を思い続けたのだ
そして彼にフリード星が蘇りつつある事を告げる
だが、その直後ルビーナはデュークを庇って若い命を散らしたのだ

『お願いデューク・・・もしフリード星で、ルビー色の花が咲いたら・・・それに私の名をつけて』
『ああ・・・約束する・・・だから死ぬな！ルビーナ！』
『あぁ・・・デューク・・・出来る事なら・・・ずっと・・・こうしていたい・・・』

そう言ってそっと寄り添うようにルビーナは息を引き取った
それを見たデュークの目には熱い涙が零れた

『ル・・・ルビーナ・・・もしも・・・もしも僕達が武器の無い時代に生まれていれば・・・愛し合えたと言うのに・・・うおおお

「来ないならこちらから行くぞ！ボルトクラッシャーパンチ！」
「く！スクリュークラッシャーパンチ！」

互いの拳が空中でぶつかりあう
その後直ぐに弾き飛ばされ元の位置に戻っていく

「ルビーナ！正気に戻ってくれ！」
「五月蝿い！死ねデューク・フリード」

憎しみの篭った顔でルビーナは操縦桿を動かす
それに呼応してベガダイザーはグレンダイザーを殴り飛ばす

「ぐぅっ！」

顔を殴られたグレンダイザーが大きく仰け反る
それに間髪入れずに今度はグレンの腹に蹴りを当てる
グレンの体がくの字に曲がる

「どうした？反撃しろグレンダイザー」
「止めてくれ！僕は君とは戦いたくないんだ！」
「ならば・・・死ね！」

吐き捨てるようにルビーナが言うと両肩からグレンダイザーと良く似た半月状の武器を取り出す
その形状はダブルハーケンと酷似していた

「くっ、ダブルハーケン！」

デュークは叫び両肩からハーケンを取り出し一つにあわせる

「死ね！デューク・フリード」
「ルビーナ！思い出してくれ。かつて君は争いを嫌い花を愛し、平和を慈しむ優しい女性だった筈だ！君が戦っちゃいけないんだ！」
「何を余迷い言を！その続きは地獄で言え！」

そう言い放ってベガダイザーが大きくハーケンを振り上げる
そして其処から凄まじい勢いで振り下ろしてきた
それをグレンはハーケンを横にして防ぐ

「ルビーナ・・・頼む！止めてくれ」
「五月蝿い！死ねデューク・フリード」

ベガダイザーの握るハーケンに更に力が込められる
徐々にグレンが押され出した
しかしその時であった

「大介さん！」

はやてが叫ぶ
それと同時に彼女の放った魔弾がベガダイザーを吹き飛ばした

「大介さん！」
「兄さん！」

それに続きひかるとマリアも近づいてくる

「おのれ、貴様等の相手はこのワシだ！」

そんな三機のスペイザーにガンダルの操るベガ獣グラグラが現れた
竜のような巨大な顔に大きな手足、胸には電磁砲を放つ大きなトゲ

が生えた屈強な姿であった

「貴様等にはかつて煮え湯を飲まされた！今度は貴様等に同じ思いをさせてやるぞ！」
「上等じゃない！また同じ思いをさせてやるわよ！」

ガンダルに対しマリアが言い放った
だがそれは返ってガンダルの怒りに火を注ぐ結果となった

「ひかるさん、ミチルさん！此処は私達でやりましょ」
「ええ、分かったわ」
「頑張りましょう」

ダブルスペイザー、ドリルスペイザー、マリンスペイザーの三機がグラグラに迫っていく
それをガンダルの操るグラグラが迎え撃った

その頃、グレンダイザーとはやてはベガダイザーと対峙していた

「大介さん！あれには誰が乗ってるんや？」
「あれに乗っているのはルビーナ・・・かつて、僕が愛した女性だ」
「え？大介さんが・・・」

はやては驚きベガダイザーを見た
ベガダイザーはハーケンを構えながらグレンダイザーと邪魔をしたはやてを睨んでいた

「何でや！何で愛し合った仲の二人が戦わなきゃならんのや！」
「黙れ！何を血迷った事を言うんだ！私は父の敵を愛した覚えなどない！」

「ルビーナ・・・思い出してくれ！僕達は・・・」
「油断したなデューク！」

デュークが話していた際に出来た隙を突きベガダイザーが胸から七色の熱線を放った
反重力ストームだ
それを浴びたグレンダイザーは重力に逆らうように上空に舞い上がるその為バランスを崩してしまい無防備状態となってしまった

「トドメだ！死ねぇ！」

其処へベガダイザーの頭の角に電撃が集まるそして放つ。その要領はグレンダイザーのスペースサンダーと同じであった

「くっ・・・ルビーナ」

直撃を食らい朦朧とする意識の中デュークは叫ぶだが、無情にも電撃はグレンに向かって来た
咄嗟に両腕をクロスして少しでも威力を軽減しようとしただが一向に電撃は来ない
疑問に思い腕をのける
其処には防御結界を張り電撃からグレンダイザーを守っているはやての姿があった

「は、はやてちゃん！」
「大介さん、諦めたらあかん！どんな時でも最後の最後までやり通すんや！」

はやてが大介を見てそう言う

徐々にはやての張った結界に亀裂が入りだしてきた
結界が電撃の威力に耐えられないのだ

「無茶だ！早く逃げるんだはやてちゃん！」
「こ・・・この位何ともない！あの時大介さんや剣児兄ちゃん・・
・それにヴォルケンリッターの皆が必死になっていた時に比べたら
大した事無いんや！」

結界の亀裂が更に大きくなる
そして嫌な音がしたと同時に結界は音を立てて崩れてしまった
しかしはやては大の字になって体を張って電撃を浴びた
バリアジャケットが所どころ破れていき体各所が焼けどに似た傷を
負っていく

「くぅぅ・・・うあああああああああああ！」
「はやてちゃん！」

デュークが叫ぶ
やがて電撃が止むと、体から黒い煙を上げるはやての姿があった
バリアジャケットはボロボロであり意識も混沌としていた
しかしそれでもはやてはそっとデュークの方を向いた

「だ・・・大介さ・・ん・・・頑張って・・・・・な・・・」

そう言い残した後はやては意識を失い急速に落下していった

「はやてちゃん！スペイザー」

グレンダイザーがスペイザーの名を叫ぶ
すると上空を旋回していたスペイザーが落下するはやてを受け止める

それに安堵するデューク
そして直ぐにベガダイザーの方を向いた

「ルビーナ・・・もう君は昔の君では無いのだな」
「やっとその気になったか?デューク・フリード」
「ああ、僕は今決心した・・・この手で君を倒す」

決心を言ってグレンダイザーはハーケンを思い切り振るう
ベガダイザーがそれを同じハーケンで受ける
だが、その直後グレンの蹴りがベガダイザーを吹き飛ばす
それから間髪入れずにグレンの拳がベガの頭に降り注ぐ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!」
「ぐっ」

デュークが咆哮する
それに対しルビーナが苦しい顔になる
反撃にハーケンを振るおうとした
しかしそれより早くグレンのハーケンがベガダイザーの右腕を切断した
其処にはハーケンが握られていた
これによりベガダイザーは無防備な状態となったのだ

「これで・・・終りだあああああああああああああ!」

ハーケンを振り上げて思い切り真上から振り下ろす
だが、ベガダイザーの頭上でハーケンが止まった
此処に来てまたデュークの中に戸惑いが生まれたのだ
出来ない
かつて愛した女性をこの手に掛けるなど出来ない

そう言っていたのだ
その時であった

「で・・・デューク・・・デューク！」
「る、ルビーナ！君なのかい？」

其処に聞こえたのはかつてデュークが愛した優しいルビーナの声であった

「デューク・・・あぁ・・・こうしてまた会えるなんて」
「ルビーナ・・・すぐに助ける！」
「それは出来ないわ。私は今ベガダイザーと一心同体の状態なの」
「な、何だって！」

ルビーナの言葉にデュークは驚愕した
そしてその後ルビーナが放ったのは思いもしない言葉であった

「お願いデューク、貴方の手で私を殺して」
「な、何故だ！」
「今はこうして私が自分の意思で押さえ込んでいるけれど、もう長くはもたないわ。お願い・・・最後は貴方の手で天に昇りたいの」
「で・・・出来ない！僕には出来ないよ」
「お願いデューク・・・私はもう本当はこの世に居ない人間なの。貴方が本当に私を愛しているのなら・・・貴方の手で私を・・・」
「ルビーナ・・・・うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

デュークは咆哮し一気にベガダイザーを横一文字に両断した
胴体が真っ二つになるベガダイザー
そして、グレンダイザーの頭にある二本の角に電撃が集まっていく

「ルビーナ・・・君との約束、フリード星にルビー色の花が咲いた・・・それに僕は君の名をつけたよ・・・だから、おやすみルビーナ・・・スペエエエエエエエエエスサンダアアアアアアアア！！！」

ルビーナにかつての約束を果たした事を告げた後、グレンダイザーの顔から電撃が放たれた
それを浴びたベガダイザーは白熱に発光した

『有難う・・・デューク』

そう言い残しルビーナの乗ったベガダイザーはミッドチルダ上空で爆発し残骸となった
黒い爆煙の中からはベガダイザーの残骸が降り注いでいた

「ルビーナ・・・・うおおお

此処は機鋼帝国の玉座の間
其処では巨大な脳である兜原蔵が戦いの光景を見ていた

『くくく、頃合だな』

そう言うと辺りに赤い警報ランプが点灯しだす
そして回りの壁が突如開き、中から現れたのはそれこそ数百・・・いや、数千、数万とも取れる数の「デビルマジンガー」の軍団であった

『行け、デビルマジンガー軍団よ！奴等を血祭りに上げて来い』

原蔵が言う
それに呼応して全てのデビルマジンガーが咆哮した
まるでこの世の終りを祝うかのように

舞い降りる絶望　中篇３（前書き）

遂に降り立つ絶望

舞い降りる絶望　中篇3

甲児と甲一の戦いに決着がつき、大介がルビーナと悲しい別れを終えた丁度その頃
首都クラナガンの方では既に粗方の機鋼獣を殲滅し終える所まで来ていた

「セッテ！私に続け！」
「了解」

気合の入ったトーレの声に機械的な口調のセッテが返す
だが別に意味は無くセッテの口調は言ってしまえば癖である
本心では甲児達と同じ熱い心が芽生えていた
それも全ては異世界から来た者達のお陰だ
もし彼らに出会わなければきっとナンバーズは廃棄処分されケドラの餌となっていた筈である
それを思いトーレはつくづく自分達の父的存在の剣造、そして兄的存在の鉄也に感謝した
自分達を人間として育ててくれたからだ

「はあああああああああああああああああ！」
「切り裂け！」

トーレの手足に展開された固有武装「インパルスブレード」、そしてセッテの固有武装「ブーメランブレード」が次々と機鋼獣と合成獣を切り裂いていく

「ＩＳ起動、レイストーム」
「クラールヴィント、お願いね」

「貫け！」

シャマルが放った細いバインドが機鋼獣や合成獣の動きを封じ、その隙にザフィーラの放った氷の刃が貫きオットーのレイストームが焼き払う

「これ以上貴方達の好きにはさせないわ！光子力ミサイル！」

ビューナスＡに乗ったジュンがそう叫び、ビューナスの胸に取り付けられたミサイルが火を噴く
彼女達の戦いにより次々と機鋼獣達は残骸になっていく

「す・・・凄い、あの機鋼獣を圧倒してる」

彼女達の戦いを地上で管理局の魔道士達は見ていた
正に圧倒的であった
自分達が全く歯が立たない相手に敢然と挑み圧倒しているのだ
元々ナンバーズ達は剣造の計らいで固有武装に対機鋼獣用の改良が施されてある
そしてそれはシャマルやザフィーラも同じであった
そしてビューナスは元々が質量兵器な為、そして動力源が光子力の為に機鋼獣には有効であったのだ
だが、何故魔道士の攻撃は機鋼獣には全く通じないのか
それは今まで説明を省いてきたのだが今話そう
機鋼獣の体内には巨大な結界を発生させる装置・・・通称『ＡＭＦ』が内臓されている
勿論それは剣造の作ったガジェットにも搭載されているが規模が違った
ガジェットは大きくても３ｍがやっと。それに対して機鋼獣は大きいのでは５０ｍはある

それだけにＡＭＦの規模も大型化したのだ
今やＳ級魔道士の魔力でも機鋼獣のＡＭＦを破るのは困難であった
しかしそのＡＭＦには唯一の弱点があった
それが超合金Ｚ、そして光子力である
と、言うが元を正せば実はＡＭＦはこの二つの元になったジャパニウムが発する粒子、その名も『Ｚ粒子』には極度に弱いのだ
そのＺ粒子を散布されるとＡＭＦは機能を妨害され威力を発揮出来なくなってしまうのだ
そしてその機能は機動六課全てのデバイスに付加された。その為こうして機鋼獣のＡＭＦを破れるのだ

「どうやら片付いたみたいだな」
「ですね」

上空から戦闘の終った町を見た
破壊こそされている物のまだ修復可能レベルである
どうにか間に合った
ホッとする一同である

「どうやら大惨事にだけはならなかったみたいだな」
「そうね」
「さ、早く皆の所へ行きましょう」

安堵する一同にジュンが言葉を送る
それに皆も頷く

「そうだな。ウーノ姉さま。こちらは片付きました・・・次は何処へ向かえば良いですか？」

トーレは早速戦闘の終了の報告と同時に次なる場所への指示を仰ご

うと通信を送った
だが、其処に帰って来るのはウーノの声では無く砂嵐を思わせる雑音であった
それに不審に思ったトーレが眉を動かす

「どうしたんですか？ウーノ姉さま」
「おかしい。スカイホエールと連絡がつなかい」

トーレの言った言葉にセッテは驚く

「通信妨害？」
「それは有り得ない。スカイホエールは万能戦艦だ。どんな状況でも通信が出来るように設計されている筈・・・それが何故？」

不審に思う一同
だがその時、彼女達の脳裏にある事が浮んだ
万能戦艦スカイホエールの通信を妨害出来る唯一の人物
それはこの機鋼獣を操る機鋼帝国の首領であり剣造の祖父の兜原蔵であった
奴ならその様な芸当も可能な筈である
そう思えたのであった

「それって・・・」
「スカイホエールが危険だって事か？」
「不味い！あれにはそれ程武装は取り付けられてない！狙われたら終りだぞ」
「すぐに行きましょう」

ジュンが皆に言う
そしてその場を後にしようとした直後であった

「な、何だあれは！」

地上に居た局員が天を指差す
それを見て一同が天を見上げた
其処には信じがたい光景が映し出されていた

「あ、あれは・・・」
「で、デビルマジンガー！」

そう、空一杯に現れたのは数え切れない程のデビルマジンガーであった
そして、その中には機鋼帝国の所有している飛行要塞グールがあった

「ガッハッハッハ、貴様等の命運もこれまでよ！」
「主がおつくりになったこのデビルマジンガー軍団の前に屍を晒すが良い」
「あいつ！」

セッテは怒りの篭った目でグールの上に立つ二人を見た
以前暴走列車でセッテとエリオに手傷を負わせた張本人
「ブロッケン伯爵」と「ピグマン子爵」であった

「行けぃ、デビルマジンガー軍団よ！」
「愚かな物共の町を瓦礫の山に変えてしまえぃ」

二人が命じるとそれに呼応してデビルマジンガーが一斉に襲い掛かってきた

「くっ、迎撃！」

トーレが叫ぶ
それに呼応して皆一斉に攻撃を開始する
だが、それは無駄な努力であった
彼女達の攻撃はデビルマジンガーには全く通じずかすり傷一つ負う事は無かった

「ハッハッハ、究極のマジンガーであるデビルマジンガーにそんな豆鉄砲が通じるか！それ、吹き飛ばせ！『デビルタイフーン』」

ブロッケンの叫びと同時に全てのデビルマジンガーが漆黒の風を放った
それはまるで台風である
しかもそれが数百・・・嫌、それ以上の数で押し寄せてきたのだ

「く・・・うおおわあああああああああ！」
「きゃあああああああああああああ！」
「ぐおわあああああああああああああ！」

デビルタイフーンを受けたメンバーは皆空を切り切り舞い上がった
後凄まじい勢いで地面に叩きつけられた
一瞬、そう呼ぶに相応しい時間であった
砂煙が晴れると、其処には傷つき倒れるメンバーとビューナスの姿があった
特にビューナスの損傷は酷く
両手両足が無くなりビューナススクランダーは翼が折れクインスターのキャノピーは完全に割れていた
そう、一撃でトーレ達をデビルマジンガーは戦闘不能に追い込んでしまったのだ

「そ・・・そんな・・・」
「あ、圧倒的過ぎる」
その光景を目の当たりにした局員達の脳裏には一つの言葉しか浮ばなかった
『絶望』
正にそう言うに相応しい光景であった

「ガッハッハッハ、思い知ったか愚かな人間ドモよ！今回はこれで引き上げだ！」

ブロッケンが命じると一斉にデビルマジンガー軍団が引き上げていった

＊＊＊

時を同じくして、此処は地上本部
其処でもまた機鋼獣が攻撃を行っていたが

「おらおらぁ！雑魚は引っ込んでろ！」

雄たけびを上げながら剣児の操る鋼鉄ジーグが次々に機鋼獣、そし

て合成獣を蹴散らしていく

「こら剣児！一人で突っ走ったら危ないじゃない！」
「うっせぇ！チマチマしたのは苦手なんだよ！」

上空から怒鳴るつばきに剣児が言い返した
その下では残骸になった機鋼獣をジーグの足で踏みつけていた
また、激闘は他でも続いていた

「今までよりも数が多い・・・けど」

なのはがレイジングハートを構え無数の魔力弾を放つ
それを受けた機鋼獣達には巨大な風穴が開き爆発した

「負けられない！」
「おう！あたしだってこいつらに負けてられないからな」

その後ろではグラーフアイゼンを構えたヴィータが居た
そしてそれを巨大な大槌に変える

「ぶっ潰せ！ギガントシュラァァァク！」

巨大な鉄槌の一撃は眼前の敵を全てなぎ払うには充分であった

「行くよ、ザンクーガ」
「エリオ、私も続きます」

巨大化したフリードに跨りながら巨大な大太刀型デバイス「ザンクーガ」を操り敵を両断していくエリオ
その威力は明らかにストラーダを凌駕していた

が、同時に自身に掛かる負担も大きく余り無茶に振るうと先に体が参ってしまうのだ
その為連続で切り払うのは今のエリオでは無理があった
其処で一撃で払い損ねた敵をディードが蹴散らしているのだ
連携である

「貫け！サンダァァァブレエエエク！」

エリオがザンクーガを天に掲げて雷光を受ける
そしてそれを目の前に放つと数本の稲妻が迸り機鋼獣達を貫いていく
その隙を突くように上空に居た機鋼獣が無数のミサイルを放つ

「させない！」

しかしそれを同じくフリードに乗っていたルーテシアとキャロが共に結界を張る
二人で協力して張った為その強度はかなりの物であった

「有難う、キャロ、ルーテシア」
「気をつけてねエリオくん」
「無理しちゃ駄目だよ」

エリオに向かって二人が揃って言う
それを見てエリオは何故か頬を染めた
それが何故なのかディードは理解していた
どうにか敵の総数が減らせる事が出来た
其処でなのはは剣児に言った

「剣児さん！此処は私達に任せて中にいる人達の救援に行って下さい」

「はぁ？何で俺なんだよ？」
「あたしらじゃあんな狭いところじゃ充分に戦えないんだよ。それにお前なら機鋼兵位楽勝だろう？」
「当たり前だ！しゃぁねぇなぁ、わぁったよ」

半ば面倒臭そうになりながらも剣児は鋼鉄ジーグの合体を解き雷鋼馬となって地上本部内に入っていった
内部に入った剣児は先に言われた事を思い出していた

「えぇっと・・・確か此処に居る奴で・・・名前はレジアスだっけか？そいつの護衛だっけか？面倒くせぇなぁ」

ブチブチ文句を言いながらも剣児は地上本部の局員達が集まっている箇所にやってきた
因みに雷鋼馬のままである

「おい、生きてるかてめぇら」

剣児は皆に言った
しかし局員達は皆度肝を抜かれた
何しろいきなりバイクで入ってきたのだからだ
その為皆声が出ない状態であった
そんな一同は無視して剣児は辺りを見回す

「おい、この中にレジアスって奴は居るか？」
「ちゅ・・・中将ならまだこちらには来てません」
「何だよ！一体何処で油売ってんだ？しゃぁねぇなぁ」

ヘルメットの上から頭を掻く仕草をしながら剣児は再び雷鋼馬を走らす

目的は勿論レジアスを探すのである

「どうせけむくじゃらのオッサンなんだろうなぁ・・・ヤダなぁ、どうせならボインな姉ちゃんなら良いんだけどさぁ」

頬を染めて鼻の下を伸ばしながら剣児が呟いた
すると目の前に数体の機鋼兵に襲われそうになっていた女性局員を見つけた
女性局員は小型拳銃型デバイスを発砲するが機鋼兵には全く通じておらず無駄な努力であった

「其処の女！退けぇ！」
「え？」

突如後ろから声が聞こえ振り返る
すると其処には雷鋼馬を駆る剣児の姿があった
女性は咄嗟に横に飛び退いた
その直後に雷鋼馬は目の前に居た機鋼兵を蹴散らしていく
その後は降りて残っていた機鋼兵を殴り倒していく

「おらおらぁ！てめぇらの相手はこの草薙剣児様がやってやらぁ！」

声を張り上げながら次々と機鋼兵を殴り倒していく
やがて周囲に機鋼兵を倒し終えると剣児は手を叩きながら女性の元へ歩み寄った

「あんた、大丈夫か？」
「ええ・・・助かりました」

女性はスカートの裾に付いた埃を手で払いながら言った

しかし女性を見た途端剣児の鼻が伸びる

（おほぉ、キツそうな顔だけど美人だなぁ・・・おまけにスタイル良いし・・・もしかしてこの人がレジアスか？）

そう思った剣児が女性に聞いた

「なぁ、あんたがレジアスってのか？」

「いえ、レジアスは私の父です。私はオーリス・ゲイズと申します」

「はぁ？娘ぇ！んじゃ親父は一体・・・」

『何処に？』と言おうとした直後であった

後ろの壁の一角が突如轟音を上げて崩れ、中から出てきたのは

「どおおおおおおおおおりゃあああああああああああ！」

雄たけびを上げて大柄な局員が機鋼兵を投げ飛ばした

投げ飛ばされた機鋼兵はそのまま外へ放り出される

それを見た剣児が驚く

「な、何だあの爺さん？」

「あのぉ・・・あのお方がレジアス・ゲイズ中将ですけど」

「え、マジ？」

嫌な予感が的中した気持ちであった

よりにもよってこんな爺が俺の護衛対象なのかよ

内心そう呟いていた

するとレジアスはゆっくりとオーリスの方を向く

するとさっきまでの鬼気迫る顔から一変して、滅茶苦茶緩んだ顔になる

そして

「オーリスちゅわ～ん、無事だったんだなぁ～、心配したんだよ～」

諸手を広げて迫るおっさん

そんなおっさんに対しオーリスは顔面に蹴りを当てる

「中将、何度も言いますがその呼び方は止めてください」

「ナイス蹴り」

オーリスの蹴りを見て横に居た剣児が思わずそう呟いた

しかしレジアスは全く効いて居ないらしく

「うむ、流石ワシの娘だ。中々良い蹴りを持ってるじゃないか」

決めポーズをしながら呟くレジアス

しかし鼻からは蹴られたせいか鼻血が垂れている

「お～いおっさーん、鼻血出てるぞ～」

剣児が言い加える

すると剣児の存在に気づいたレジアスが剣児を睨みつける

「何じゃ貴様！まさか・・・オーリスの彼氏？いかん！いかんぞオーリス！こんなプレイボーイみたいな奴を彼氏になぞパパは絶対認めません」

「黙れ親馬鹿」

必死な顔つきになるレジアスにオーリスが静かにそう言う

そしてオーリスは二人にとりあえず事情を説明した

決して説明が面倒だからでは無いのであしからず

「ほぅ、つまりお前がワシの護衛なのか？何か頼り無さそうだなぁ」
「ならてめぇの体で試してやろうか？腐れ爺」
「面白い、やるかクソガキ」

お互い啖呵を切って拳を鳴らしあう
明らかにやる気満々だ

「ちょ、ちょっと二人共！今はそんな事してる場合じゃないでしょう！」

そんな二人の間にオーリスが割って入る
その時、壁を破って更に多くの機鋼兵が侵入してきた
しかしそれを見ても二人は全く動じなかった
それどころか二人揃ってニヤリとする

「おい爺さん。張り切りすぎて入れ歯失くすなよな」
「誰に言ってる！お前こそ転んで泣きべそかくなよクソガキ」
「言ってくれるじゃねぇか！とりあえず・・・まずはこいつらをぶちのめすのが先だな」
「そうだな」

そう言って二人は猛然と機鋼兵に向かっていった
当然その後は機鋼兵の残骸が散らばるだけであったのは事実であり

＊＊＊

剣児が中に侵入した機鋼兵を蹴散らしている間、なのは達は既に外に居た機鋼獣を粗方片付け終わっていた

「後は剣児さんが来るのを待つだけだね」
「そうだな・・・ま、アイツなら問題ないだろうよ」

ヴィータは以前闇の書事件で共に戦った為剣児の実力は知っていたのだ
その為あの剣児が機鋼兵如きに倒されるとは思えなかったのだ
そう思っていると突如上空に巨大な戦艦が降り立ってきた
スカイホエールかと思ったが、それは違っていた
其処にあったのは八方に巨大な竜が現れる不気味な戦艦であった
そしてその上には一人の巨大な男が立っていた
燃え盛るような獅子を思わせる鬣をしておりその視線はまるで獣の如くであった
そしてその鍛えられた体には無数の竜の刺青が彫られていた
その顔はまるで鬼その者であった
だが百鬼帝国の者とは違った
全員がそれを見る

「ほぅ、あれがヒミカを退けた人間ドモか？とても強そうには見えんがなぁ」

男が顎を摩りながら呟いた

「てめぇ、一体何者だ！」

アイゼンを差し向けてヴィータが聞いた
それに男がニヤケながら答える
「俺の名は「竜魔帝王」邪魔大王国の真の支配者よ」

＊＊＊

「へ、ざっとこんなもんよ」
「ま、軽いもんだな」
その頃、剣児とレジアスは互い手を叩いていた
その眼前には残骸になった機鋼兵が転がっていた
全てこの二人が蹴散らしてしまったのだ
「貴方達・・・ホントに人間なんですか？」
オーリスが思わずそう呟く
すると振り返ったレジアスが満面の笑みを浮かべる
「勿論じゃろぉ？ワシはお前の愛しいパパじゃぞぉ」
「黙れ変態親父」
満面の笑みを浮かべるレジアスにオーリスは言い放った

その時、突如雷鋼馬から通信を知らせるシグナルが発せられた

「あん？何だ？」

剣児は雷鋼馬に近づき通信機を取る

「あいよ、どした？」

『剣児！すぐに来て！皆が危ないの！お願いすぐに『ブツン』』

「おい、つばき！どうした？つばき！」

剣児が叫ぶ

明らかに何かあったのだ

そう察した剣児はすぐさま雷鋼馬に跨りエンジンに火を付ける

「悪いな爺さん！喧嘩はまた今度だ」

「おう、それまで死ぬなよクソガキ」

「てめぇもなクソ爺」

お互いそう言い合いながら別れた

＊＊＊

やがて剣児が外に出ると其処には既にボロボロになったメンバーが居た

「ど、どうなってやがるんだ？」

正に目を疑う光景であった
なのは達の前には一人の大柄な男が立っていた
そう、竜魔帝王である

「む、貴様が鋼鉄ジーグか？」
「てめぇ、なにもんだ！」
「俺の名は竜魔帝王！ヒミカの頼みで貴様を地獄に叩き落しにきてやったのだ」
「上等じゃねぇか！その喧嘩買ってやるぜ！」

剣児はそう言って再びジーグに合体する
すると竜魔帝王も自身を巨大化させる

「竜魔帝王だかなんだか知らねぇがてめぇはこの草薙剣児様がぶちのめしてやるぜぇ！」

おたけびを上げながらジーグの鉄拳が飛び交う
だが、それを竜魔帝王は涼しい顔で受け止めた

「何？」
「何だ？こんなもんか、つまらんなぁ」

そう呟いてポイとジーグを放り投げる
そのまま地面に叩きつけられた

「ゲハァッ！」

声を上げる剣児
一気にむせ返る
それでも涙目になりながらも立ち上がった

「どうした?噂の鋼鉄ジーグはこの程度の力しか無いのか?それではつまらないぞ」
「舐めるんじゃねぇ!本当の勝負はこれからだあああああああああ!」

剣児はひたすらに連続で攻撃を浴びせた
だが、その全てが竜魔帝王に簡単に弾かれてしまったのだ
そして

「ぬるいわ!」

その一言とほぼ同時に竜魔帝王の豪腕がジーグに浴びせられた

「グアッ!」

その一撃を受けてジーグが吹き飛ぶ
装甲が一撃でひしゃげてしまったのだ
もう胸のブリーカーは使い物にならなかった

「野郎・・・だったらこれでも食らえ!スピンストォォォォォム!」

ジーグの腹部にあった発射口から電磁砲のスピンストームが発射された
だが、

「甘いわ！地獄の炎で焼き死ね」

竜魔帝王の口から地獄の業火を思わせる炎が噴出された
それはスピンストームを弾き飛ばしジーグを焼く

「うわあああああああああああああああああ！」
「剣児！」

つばきが叫ぶ
そんなつばきの前でジーグはボロボロの状態になってしまった
全く歯が立たなかった
ボロボロのなのは達もそうである
先に戦いを挑んだが見事に返り討ちにあったのだ
皆辛うじて意識はある状態ではある
そしてビックシューターも既に損傷が激しく飛び立つ事が出来ない状態でもあった
そんな一同を見て竜魔帝王が鼻を鳴らす

「フン、どんな奴かと思えばつまらん。この程度では遊びにもならんわ」
「て・・・てめぇ・・・」

ボロボロになりながらも剣児が竜魔帝王を睨む
だが、竜魔帝王はそんなジーグを無視して跳び上がった
其処にである

「ガオオオオオオオオオオオオオオオン！」

そんな竜魔帝王に向かって白き虎バルバが飛び掛った
鋭い牙は真っ直ぐに竜魔帝王を目指していた

だが、その牙が突き刺さる事は無かった
噛み付く寸前に竜魔帝王が掴んだのだ

「フッフッフ、中々威勢が良いなお前、だがそんなもんじゃこの俺は倒せん！」

そう言って物凄い勢いでバルバを地面に叩きつけた
凄まじい量の砂煙が舞い上がる
それが晴れると、其処には目の輝きを失ったバルバが横たわっていた

「ガッハッハッハ、全くつまらん戦だったわい、まぁ命は助けろと言う命令だからな。命ばかりは助けてやるわい」

そう言って竜間帝王は飛び去っていった
其処には紛れも無い事実が存在していた

それは

『敗北』そして『絶望』である

舞い降りる絶望　中篇3（後書き）

今度はその毒牙が彼らの元に・・・

舞い降りる絶望　中篇４

首都クラナガンに続き地上本部にて機動六課は機鋼帝国の放った戦力に大敗を喫してしまった
また、それは此処聖王教会でもまた同じであった
「おかしい・・・何故敵は此処まで的確に動けるんだ」
迫り来る敵を切り払いながらシグナムは呟いた
余りにも敵が先手を打ちすぎるのだ
偶然にしては出来すぎだ
余り疑いたくないが内部に内通者がいる可能性が高い気がする
もしそうだとしたらこうして戦力を分散したのは敵に塩を送るような物だ
何故なら敵の戦力は圧倒的に多いのだから
それに加えて管理局の援軍は全く期待出来ない
八方塞りの四面楚歌状態と言った感じだ
「どうすんだよシグナム」
シグナムとユニゾンしたアギトが語りかける
「止むを得ん、聖王教会に残っている人達を非難させて撤退するほかない」
「逃げるのかよ？」
「此処でむざむざやられたいのか？もしそうなれば住民達に待つのは本当の絶望だぞ」
「！！！」
シグナムの一言でアギトは察した
そう、自分達は倒れる訳にはいかないのだ
管理局が機鋼帝国に対抗出来ない以上奴等とまともに戦えるのは自分達機動六課しかないのだ
しかしそれが此処で倒れる事があれば民衆はたちまち絶望に支配されてしまう

それを懸念したのだ
「すまねぇ・・・あんたも辛かったんだよな」
「いや、私も少しきつく言いすぎた・・・許せ」
お互いに謝罪する
だがそんな二人の回りを先ほど以上の敵が取り囲む
「まずはこいつらを蹴散らして皆と合流するぞ」
「おう！」
そう言ってシグナムは猛然と敵の中に切り込む
大きさは何倍もあるにも関わらずシグナムの一撃は敵を一撃で切り裂いた
逆に敵は小さな目標を仕留めるのに四苦八苦していた
簡単に言えば一メートル先のハエを撃ち落すような感覚だ
そのような芸当が人工知能の搭載された機鋼獣に出来る筈も無く次々と残骸になって降り注いでいた
「どうやらここら一体の雑魚は片付いたみたいだな」
「だな、さっさと皆と合流しようぜ」
「ああ・・・む！」
皆の元に行こうとしたシグナムが突如動きを止めた
それにアギトが「どうした？」と聞いたがアギトもまた気づいた
何者かがシグナムを見ていたのだ
とてつもなく大きく、そして巨大な何かが
それは爆煙の中から現れた
紫の鎧に漆黒のマントを羽織り胴には武人のような顔が付けられた怪物であった
大きさはシグナムより一回り大きい位しかないがそれから放たれる威圧感は相当な物であった
「お前は？」
「流石は機動六課だな、俺の放った機鋼獣軍団をこうも簡単に退かせるとは」
「質問に答えろ！お前は誰だ？」

シグナムが声を強張らせる
そうしなければ自分があれの放つ気迫に飲まれてしまうからだ
それに対し目の前の怪物は笑った
「これは失礼をしたな。俺の名は「暗黒大将軍」貴様の名は知っている。ヴォルケンリッターの一人、シグナムだな?」
「私の名を覚えて貰うとは光栄だな・・・それで、何の用だ?」
「何、この俺と勝負して貰いたいと思ってな」
そう呟き暗黒大将軍は腰に挿してあった巨大な剣を抜き放った
両方に刃のある諸刃の剣であるがその剣から伝わってくるのは悪しきオーラであった
一体その剣でどれ程の人をあやめてきたのだろうか
思わず身震いした
「して、どうする?」
「良いだろう。受ける」
シグナムはレヴァンティンを構えた
仮にも騎士である
敵の方から申し出てきた以上背中を向ける事はシグナムのプライドが許さなかった
互いに剣を構えたまま微動だにしない
嫌、動けなかったのだ
少しでも隙を見せれば次の瞬間腕の一本が飛ぶ
そう思えたからだ
だが、何時までもこうしている訳にはいかない
早く皆の救援に行かねばならないのだ
なるべく早く勝負を決しなければならない
そう思い最初に動いたのはシグナムであった
一気に跳躍して距離を詰める
そしてレヴァンティンを振るう
「青いな」
だが、それを暗黒大将軍は涼しい顔で受ける

剣と剣が激しくぶつかり合い火花を散らす
一撃目で駄目なら二撃目をぶつけるまで
レヴァンティンの軌道を変えて今度は真上から振り下ろす感じで振るった
しかしそれとは逆に暗黒大将軍は真下から振り上げた
再び金属音と激しい火花が舞い散る
それからはお互い接戦であった
激しい火花と金属音が辺りに響き渡る
二人は互いに一歩も退かずにぶつかりあう
しかしそこで暗黒大将軍がニヤリとした
「何とも嬉しい事よ、この世界にも腕の立つ武人が居たのだな」
「私は武人ではない。騎士だ」
「それは失礼したな。ならば騎士シグナムよ、俺の刀の錆になるのを光栄に思え」
「お断りだ！私はまだ死ぬ訳にはいかないのだ」
シグナムが咆哮して一気に距離を離す
そしてレヴァンティンのカードリッジを起動させて刀身に炎を纏わせる
勝負に出る気か！
そう思った暗黒大将軍もまた剣に禍々しいオーラを纏わせた
そして構える
次の瞬間
「はあああああああああああ！」
「ぬおおおおおおおおおおお！」
二人が咆哮し己の全身全霊の一撃を振るった
閃光
まさにそう呼ぶに相応しい現象が起こった
一瞬眩い閃光が起こり辺りを照らす
そしてそれが晴れた時、勝負は決していた
暗黒大将軍の剣はシグナムの左胸に突き刺さっており、シグナムの

レヴァンティンは暗黒大将軍の胴体にある武人の顔を貫いていた
「ふ・・・ふふふ・・・まさかこの暗黒大将軍が二度に渡り敗北するとはな・・・だが、悔いは無い・・・嬉しく思うぞ、異世界の騎士よ」
暗黒大将軍はそう言い残して大地に向かって落下しそして爆発して果てた
だが、シグナムもまた無事では無かった
最早高度を維持していられなくなりそのまま大地に落下する
落下した大地の周囲を赤い血が染め上げる
「おい、シグナム！しっかりしやがれ」
「だ・・・大丈夫だ・・・この・・・位・・・只の・・・掠り・・・傷だ・・・」
アギトの言葉にそう返すシグナムだが貫かれた左胸からは止め処なく血が流れていた
そしてそれはシグナムの意識を刈り取るには充分過ぎる物でもあった
「おい、シグナム！起きろよ！さっきあたしに言ったのは嘘だったのかよ！起きろよ！シグナム！！起きろおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
爆炎と爆音が響く聖王教会の中でアギトの叫びが響き渡っていた

別の場所では残りのメンバーが聖王教会の人達を避難させていた
「急いで下さいッス！此処は私達が絶対に死守するッスから」
人達の陣頭に立ち避難指示を送るのはウェンディである
残りのメンバーは避難経路の確保とその護衛である
「さぁジャンジャン掛かってきやがれ！」
自身が築き上げた機鋼獣の骸の上に足を置いてノーヴェが声高らか

に叫ぶ
その回りを機鋼獣達が取り囲んでいた
しかしその刹那一筋の閃光が周囲の機鋼獣を焼き払った
「ディエチ！」
「無茶は駄目だよノーヴェ」
ノーヴェのすぐ後ろにはイノーメスカノンを持ったディエチが居た
そしてその直ぐ隣にはセイン、アリシア、リインフォースも居た
「一人で良いカッコするのはずるいんじゃない？」
「そうそう、お姉ちゃんの分も残しておいて欲しいなぁ」
「無理したらドクターが泣いてしまいますよ」
「わ・・・悪い」
皆に心配を掛けてしまった事にノーヴェは心から謝罪した
そしてそのメンバーで迫り来る敵を片付けていった
だが、聖王教会は既に炎に包まれていた
消火は間に合わない
今は可能な限り人々を脱出させるのが先決である
「ジャンジャジャ～ン！此処はこのボスボロット様に任せろぃ！」
そんな一同の前にスクラップの塊・・・もといボスボロットが現れた
「おいボス！お前邪魔だから出てくんな！」
「そんな釣れない事言うなよノーヴェちゃん！こんな奴等俺様が捻り倒してやるってよぉ」
ボロットが意気揚々に腕をグルグル回していく
それに溜息をつきながらもノーヴェ達は続く
皆必死に戦い抜いた
絶対にこれ以上敵を通してはならない
その後ろには戦闘力の無い人達が避難しているのだ
意地でも通さない気持ちであった
しかし
「ほほぅ、流石は機動六課だな」
「誰だ！」

一同が声のした方を向いた
其処には信じ難い光景があった
それは空一面黒い物が覆っていたのだ
虫の大群とも思えたがそれはすぐに訂正された
何故か、目が殺気立っているのだ
そして異様な程大きい何かが空を覆っている
そしてそれはすぐに何なのか分かった
「ま・・・マジンガー」
そう、地下基地で甲児達が戦っていたあのデビルマジンガーであった
しかもそれが空を覆い尽くす程の数で押し寄せてきていたのだ
そして、大地には声を発した主が居た
「て、てめぇ・・・ゴーゴン大公!」
ボスは名前を呼んだ
その男は上半身は古代ローマ帝国の武人を思わせる服装を着ていた
が下半身は獰猛な虎そのものであった
そして手には小振りの鞭が握られている
名前を呼ばれたゴーゴン大公はニヤリとした
「フン、何かと思えばスクラップロボットか?そんな物であのデビ
ルマジンガー軍団に勝てるかな?やれい!」
ゴーゴンが号令を掛ける
すると上空に居たデビルマジンガーの胸部が一斉に発光しだした
それを見たアリシアはゾッとした
そして振り返り皆に叫ぶ
「皆急いで此処から離れて!早く!」
そう叫ぶも間に合わない
次の瞬間大地を悪魔の炎が包み込んだ
閃光と爆発が聖王教会を包み込む
それが晴れた時、其処には只瓦礫の山しか残っていなかった
「ガハハハハ!これで良い、これでもう我等を邪魔する物はいなく
なった・・・だが、恐らく奴等は生きてる事だろうが、これで奴等

の胸中は絶望で彩られた事だろうて」
声高らかに笑いながらゴーゴンはデビルマジンガーの手にのり悠々と去っていく
そしてそれは上空にいたデビルマジンガー軍団も同じであった

＊＊＊

窮地に陥っていたのは地上だけでは無かった
此処上空ではスカイホエールを取り囲むように敵が居たしかも只の敵では無い
そう、ミケーネ七代将軍であった
「貴様等の作戦などお見通しよ」
「鼠がちょろちょろしおって」
「これで沈めい」
七代将軍が一斉にスカイホエールに攻撃を開始する
その一撃は装甲を貫通し羽をへし折り砲台を破壊する
「ぐ・・・反撃は出来ないの？」
「無理ね・・・残念だけどお手上げよお姉さま・・・」
流石のクアットロも諦めモードであった
そうなのだ
敵は知っていたのだ
スカイホエールには多くの武装は施されて居ない事に
そしてそれがマジンガー達の生命線である事に
スカイホエールが沈めばマジンガー達はエネルギーの補給が断たれ

て持久戦に持ち込まれれば不利になる
それを知っていたのだ
しかしそれを知っているのは一部の人間のみである
一体何故
だが、それを考える余裕はもう何処にも無かった
スカイホエールはそのまま海岸に向かって落下した
幸い爆発はしなかったもののもう鯨は二度と空へは舞い上がれなかった
「これで良い」
「我等の目的は民衆の希望をへし折る事」
「後は彼奴等を倒せば良い」
「もうすぐ我等の祈願が成就する」
不気味な笑みを浮べながら七代将軍は引き上げて行った

＊＊＊

此処地下基地でも地上の苦戦は見て取れた
そのどれもが大敗を喫し、大損害を被っていたのだ
「なんて事だ！」
剣造はモニターに拳を叩きつけた
叩きつけた拳から血が滴り落ちる
だがそれも気にならない程剣造は悔しがっていた
何故作戦が敵に漏れたのだ
考えられる事は一つしかない

『内通者』
だが、それは考えられない
ナンバーズは全て剣造を慕っている
裏切り行為など考えられない
それは機動六課のメンバーも同じである
ましてや甲児達は論外である
ヴィヴィオにはまず無理であった
だとしたら一体誰がこのような事を
そう思っていた時であった
「随分とお困りのようだなぁ剣造」
「その声は・・・シュラ！」
剣造は振り返った
其処には半分男、そして半分女の化け物が居た
そしてその後ろから大勢の機鋼兵が現れる
「兜剣造・・・貴様さえ居なければ我々の計画は成功したのだ」
「それは残念だったな・・・それでどうする？私を殺すか？」
「いや、貴様には一緒に来て貰う」
「残念だがそれは出来ない」
そう言って剣造は左手を突き出す
すると手首が音を立てて外れ、其処から銃口が現れる
そして銃口が火を噴き回りに居た機鋼兵を吹き飛ばした
シュラは間一髪身をかがめてかわす
そしてシュラは剣造の体に気づいた
「貴様・・・まさか体を・・・」
「その通りだ、どの道あの傷では私は助からなかったのでな、この際またこの体を改造したのさ、但し、今度は武装もしてあるがな」
そう言うと今度は右手を突き出す
すると肘が音を立てて外れせり上がり其処から煙幕を放った
「ぐぅ・・・おのれ、剣造」
シュラは必死にそれを払いのける

が、その時其処に剣造は居なかった
「ちっ、逃げたか・・・だが、逃さんぞ剣造」
シュラは不気味に微笑んだ
その頃剣造はある場所を目指して走っていた
それはヴィヴィオを匿っている部屋である
此処にシュラが来たと言う事はおそらく敵は彼女を狙う筈である
「剣造！こりゃどう言う事じゃ？」
剣造の肩から十蔵が現れた
流石の十蔵も焦っている
「私もさっぱりですよ。何せいきなり敵が現れたのですからね」
「チンクちゃんやギンガちゃんはどうしてるんじゃ？」
「念のためにヴィヴィオの側に置いてます。いざと言うときは彼女達だけでも逃げられるようにね」
「流石じゃな」
息子の手際のよさに十蔵も頷く
そして、目の前にヴィヴィオを匿っていた扉があった
剣造は扉のロックを解除して中に入る
「お爺ちゃんどうしたの？」
「三人とも、今すぐ此処を離れるぞ」
「ドクター、一体どうしたんですか？」
「敵が入ってきた。今すぐ此処を離れなければ危険だ」
「分かりました。では私とチンクが時間を稼ぎます。その間に剣造さんはヴィヴィオちゃんを連れて外へ」
「すまない」
剣造は頷く
そして怯えるヴィヴィオを抱え上げて部屋を出る
すると通路からは夥しい数の機鋼兵が押し寄せていた
「狭い通路ならこれで一網打尽だ」
チンクが自身の固有武装であるスティンガーを投げる
そしてＩＳを起動させるとそのスティンガーを中心に激しい爆発が

起こった
それにより機鋼兵は全て倒されてしまった
「此処は任せて下さい」
「博士とヴィヴィオちゃんは早く」
「すまない」
剣造は一言そう言ってこの場を足早に去った
その後も続々と機鋼兵が押し寄せてくるもそれを全て返り討ちにしていく
ある程度敵を蹴散らした後、二人は構えを解く
「これだけ叩けば十分ね」
「そうですね。急いでドクターの元へ急ぎましょう」
二人はそう言って剣造の走っていた道を走った
しかしその時であった
二人の間を突如突風が突き抜ける
それに疑問を感じた二人であったがやがてそれが只の突風ではない事に気づいた
しかしその時には既に時遅しであった
二人の体中は鋭利な刃物で切られたかのように傷だらけになってしまった
「な、こ・・・これは・・・」
「く・・・・うぅ・・・」
動けなくなった二人は目の前に立つ者を見た
それはシュラであった
そう、あの風を作ったのも二人に重傷を負わせたのも全てこのシュラであったのだ
そしてシュラは二人に歩み寄ると不気味な笑みを浮かべてこう言った
「ご苦労だったな、チンク」
「な、ど・・・どういう事だ?」
「貴様がこいつらの所在や作戦を教えてくれたのだ」
「ば、馬鹿な・・・何をデタラメを言ってるんだ!」

「ククク・・・知らないのも無理はないな、何しろそれを仕込んだのはお前が目覚める前だったからな」
シュラの言葉にチンクは眉を顰めた
だが、その時シュラから発せられた言葉は衝撃であった
「お前の右目には俺が兼ねてから仕込んでいたカメラアイが内臓されていたのさ、お前は生きながらにして我等の貴重な情報源になっていたのさ、感謝するぞ」
「そ・・・そんな・・・・私が・・・・私のせいで・・・・」
「ち・・・チンク・・・」
チンクの顔は徐々に青ざめていった
しかし、そんな余裕などシュラが与えてくれる筈も無かった
再び風が舞う
その時チンクの右目に激痛が走った
その刃の一撃は彼女の右目に当たったのだ
「ぐあああああああああああああああ!」
チンクは目を押さえる
ギンガはそんな事をしたシュラを射抜くように睨んだが、シュラは気にも留めない
ヨロヨロになりながらも立ち上がろうとするギンガ
しかしその時シュラの回し蹴りがギンガを直撃する
「かはぁっ!」
その一撃はギンガの意識を削るには充分であった
「振動破砕・・・貴様等ガラクタだけが使えると思ったのか?」
そう、先の一撃にはギンガのＩＳ振動破砕が備わっていたのだ
二人はその場で意識を失い倒れてしまった
そんな二人に興味を示さずシュラは歩いた
「ククク、剣造、この基地はもはやこのシュラの手の内、何処へも逃げられん」
シュラが不気味に笑う
その頃剣造は地下基地をひたすら走っていた

「お爺ちゃん、お姉ちゃん達は大丈夫なの？」
「大丈夫だ、彼女達は強い。絶対に負けたりしないさ」
怯えるヴィヴィオに剣造は優しく言った
だが、その時剣造の足を何かが捉えた
見ると床が変形してるのだ
そしてその床が姿を現した
それは一体のデーモンであった
「ゲハハハハハ！シュラの言った通りだな、此処に居れば貴様等が来ると」
そう言ってデーモンの妖獣グモは自身の触手を伸ばしてヴィヴィオを捉える
「いやあああああああ！お爺ちゃん」
「ヴィヴィオ！」
剣造がヴィヴィオを捉えている触手に向かって再び内臓拳銃を放とうとした時であった
一瞬、正に一瞬であった
その際に剣造の腕は宙を舞っていた
切断されたのだ
切断された箇所から血が吹き出る
妖獣グモが切り裂いたのだ
「ぐあああああああああ！」
「ゲハハハハハ、馬鹿め！」
そう言い放った直後であった
グモの触手が剣造の胸部を刺し貫いたのであった
「ぐ・・・が・・・あ・・・」
剣造の目が一杯に開かれる
声が出せず辛うじて出せたのが先の言葉だ
それを見たヴィヴィオが目に一杯に涙を浮かべて叫ぶ
「いやあああああああああああ！おじいちゃあああああああああああん！」

「剣造！おいしっかりせんか！」
肩から現れた十蔵が剣造に刺さった触手を抜こうと必死になっている
しかしそんな十蔵を剣造は掴む
「お・・・お父さん・・・せめてお父さんだけでも逃げて下さい・・・」
「馬鹿もん！息子を放って逃げる親が居るか！」
「データを・・・トップシークレットのデータを・・・」
「な、何！」
「パスワードは・・・あいつが知ってます・・・頼みます」
そう言うと思い切り十蔵を近くにあった廃棄ダクトに放り投げた
「け、けんぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおう！」
ダクトの中から十蔵の声が響く
「頼みます・・・お父さん・・・・・」
そう言うと剣造は静かに意識を手放した

舞い降りる絶望　後編（前書き）

最大の絶望が襲い掛かります

舞い降りる絶望　後編

鉄也達の前には一体の黒い魔神が立っていた
デビルマジンガー
兜原蔵が作り出した悪魔の魔神である
それが今鉄也達の前に立ちはだかっていた
鉄也の隣には二体のゲッターロボが居る
竜馬達の操る真ゲッターロボ
そして號達の操るゲッターロボ號である
三対一の状況である
しかしそれでも相手がデビルマジンガーでは心もとない気にもなるが、弱音は吐いていられない
それに鉄也はそんな事を言う人間ではない
どんな相手にでも勇敢に挑む
それが剣鉄也と言う人物なのだ
「行くぞ！」
最初に声を掛けたのは鉄也であった
それを皮切りに三機が一斉に飛び掛った
それを迎え撃つかのようにデビルマジンガーも諸手を上げて飛び上がる
グレートの持っていたマジンガーブレードとデビルマジンガーの鋭い腕がぶつかり合い火花を散らす
金属音を奏でながらぶつかり合った二体はそのまま離れる
それから間髪入れずに今度は真ゲッターロボのトマホークがやってきた
それもまたデビルマジンガーの腕にぶつかりマジンガーブレードと同じ結末を迎えた
そしてまた離れる
最後にはゲッターロボ號の鉄拳が振り込んで来た

デビルマジンガーはそれを片手で払い除けるが其処から練撃が襲い来る
右を捌けば左が来る
左を捌けば右が来る
両腕を捌くと今度は足が来ると連続で攻撃が襲い掛かってきたのだ
號はゲッターの中では小柄だがそれでもパワーはドラゴンとほぼ同等である
だが、エネルギーはゲッター線ではなくプラズマ駆動と言うエネルギーを使用している為其処で差が出てしまうのは事実ではある
「くそ、これならどうだ！」
號が叫び操縦桿を動かす
するとゲッター號が一気に飛び退く
すると背中に背負われたファンから雷撃が起こりそれをぶつける
マグフォースサンダー
ゲッター號の武器の一つである
だが、それをデビルマジンガーは避ける事などせずそのままの状態で受ける
勿論マグフォースサンダーは直撃した
が、デビルマジンガーの装甲には傷一つついていないのだ
「ならこれはどうだ！」
其処へ付け加えるようにグレートがサンダーブレークを放った
二体の雷撃が襲い掛かる
流石にそれを食らうとデビルマジンガーも仰け反ってしまった
「今だ！これも食らえ！」
其処へ更に真ゲッターロボのゲッタービームが放たれた
それらを食らいデビルマジンガーは地面に叩きつけられた
しかし何事も無かったかのように立ち上がるのである
「くそ、全く効いてないのかよ！」
「何て奴だ！」
號と鉄也が呟く

あれだけの攻撃なら少なくとも装甲に傷位はついているであろうと思っていた
だが、目の前のデビルマジンガーにはそれこそ傷一つ負ってはいなかったのだ

＊＊＊

その頃、結界内では二人のスバルが激闘に決着を付ける寸前辺りまで来ていた
二人共肩で息をしている
相当体力を消耗したのだ
赤い髪のスバルは自身の装備したデビルナックルを左手で抱えるようにに持っており、青い髪のスバルもまたリュウコンを杖代わりにして立っていた
それでも二人の目はまだギラついていた
お互い次の一撃で勝負を決める気なのだ
「どうやら・・・お互い次が最後になりそうだね」
「そうだな・・・これでお前とお別れと思うと不思議と寂しくなってくるよ」
赤い髪のスバルがそう言ってフッと笑みを浮かべる
するとスバルは優しく微笑んだ
「やっぱり、君はデビルマジンガーの玩具なんかじゃないよ」

「何！」
「だって、君には心があるじゃない。そうやって笑えたり、怒ったり、人を愛したり出来るじゃない」
「馬鹿言うな！何時僕が人を愛したって言うんだ！」
赤い髪のスバルはまるで余迷い言を聞かされているような気分になり首を横に振った
だがスバルは続けた
「私には分かる。君はあの時わざと私の急所をずらした。あの時は何故かわからなかったけど今は分かる。私の中には君の愛した「ゼノン」が居るからだ」
「黙れ！お前に何が分かる。僕はゼノンに見捨てられたんだ！」
「見捨ててなんか居ない！ゼノンは今でも君の事を思っているんだよ」
「黙れ！黙れ黙れ黙れ！僕はデビルマジンガーが作った玩具だ！主の命令で僕は死ぬのだって怖くない！」
「それは違う！君は人の心を持ったもう一人の私だよ！」
スバルがそう言って自身の胸に手を置く
赤い髪のスバルがそれを見る
「君にもある筈だよ。胸に手を置くと心の鼓動が聞こえる筈。それが生きてる証なんだよ！命は誰にだって一つしかない。それを他の誰かが玩具にしちゃ駄目なんだよ」
「そ・・・それは・・・」
赤い髪のスバルも同じように自身の胸に手を置く
するとその手を伝って心臓の鼓動が聞こえてきた
これが生きてると言う証なのだろうか
自分は生きて良いのだろうか
デビルマジンガーより生み出され只その玩具としてその命を終らせようと思っていた自分
だが、今になってその自分に迷いが生まれた
生きたい

生きていたい
そんな思いが募ってきたのだ
だが、
「だけど・・・だけどこの勝負だけは逃げる訳にはいかないんだ！
構えろ！もう一人の僕！」
「そうだね、私も君を縛り付けてる鎖を断ち切るよ！」
そう言い会って互いに構えを取る
二人の間には風の音さえも消え去っていた
とても静かであった
そんな静かな時間が僅かの間であったが過ぎていた
しかしそんな僅かな時間でも二人にはとても長い時間に思えた
まるで一秒が数分のようにも思えた
勿論それは錯覚である
しかし二人には間違いなくそう思えたのだ
そして、その沈黙は間も無く破られるのであった
「うおおおおおおおおおおおおお！」
「はあああああああああああああ！」
二人が雄たけびを上げながら駆け出す
デビルナックルが唸りを上げ、リュウコンが空を切る
お互いがお互いの間合いに入った時、二人は同時に勝負に出た
閃光
正にそう呼ぶに相応しい現象であった
二人を一瞬の閃光が包み込んだ
それは武器のぶつかった際に起こった閃光
そしてもう一つは

「スタァァァライトォォブレイカァァァァ！」
それはティアナの放った魔砲であった
結界を破る為に半ばやぶれかぶれではあったがこの日の為にティアナはなのはと特訓し、今始めて実戦で使用したのだ

そしてその一撃が回りを取り囲んでいた結界を破壊し閃光が放たれたのだ
「スバル！」
結界を破りティアナが駆け寄る
そして、彼女の目の前には既に勝負が決していた
赤い髪のスバルの放ったデビルナックルの一撃はスバルの右頬を掠めており、スバルの放ったリュウコンの一撃は赤い髪のスバルの急所を捉えていた
だが、直撃はしていない、寸前で止めていたのだ
「何で・・・何で止めたんだ？」
「君は願った・・・生きたいと・・・だから、私は君の命を奪わなかった・・・それだけだよ」
「・・・・・・」
赤い髪のスバルは何も言わなかった
否、何も言えなかったのだ
全て彼女はお見通しであった、それでこうして自分の命を救ったのだ
勝てる筈が無かった。自分如きが彼女に勝てる筈が無かったのだ
そう確信するとフッと自身の力が抜ける感じがした
振るっていた腕がダランとその場に崩れるように落ちる
すると、グレート達と戦っていたデビルマジンガーにも変化が起こった
突如構えを解きその場に立ち尽くしたのだ
瞳からは以前の殺気は感じられず戦意も失われていた
その変化に鉄也達は驚く
一体何が起こったのか
だが、これで脅威は去った事だけは分かった
そして、下の方では赤い髪のスバルがスバルを見ていた
「負けたよ・・・やっぱり君は凄いよ・・・ゼノンが恋焦がれる訳だよ」
「でも・・・私はあの時・・・ゼノンに酷い事を言っちゃった・・・

きっと怒ってる」
「怒ってるかどうかは本人に聞けば良いじゃない」
「ゼノンは・・・どう思ってるのかなぁ？」
「僕は知ってるよ」
「え？」
赤い髪のスバルは微笑みながらそう言う
それを聞いたスバルは目を見開く
「それで・・・ゼノンは何て言ってたの？」
「それはね・・・」
赤い髪のスバルが答えを言おうとした時であった
ズン・・・
鈍い音がした
それも、とても嫌な音である
スバルは目の前を見た
それは、赤い髪のスバルの胸には黒い何かが貫通していた
間違いなく心臓の位置である
貫通した箇所から血が溢れんばかりに流れている
そして、それが抜き取られると赤い髪のスバルはその場に崩れるように倒れる
スバルは咄嗟にそれを抱きかかえる
「しっかりして！」
「ハハ・・・どうやら・・・僕の主が僕は必要ないって・・・決めたみたいだよ・・・」
「そんな事ない！君は生きてて良いんだよ！」
スバルの視界が潤む
彼女の目には大粒の涙が浮んでいた
それを赤い髪のスバルが震える指でそっとふき取る
「泣いてたら・・・ゼノンに会えないよ・・・ゼノンは・・・君の笑顔が好きだったし・・・」
「でも・・・でも・・・」

「手を・・・手を出して」
赤い髪のスバルは最後の力を振り絞りながら手を持ち上げる
スバルはその手をしっかりと掴む
掴んだ手からは徐々に温もりが無くなり出しているのが分かった
「なんてことない・・・元々一つだったのが二つになった・・・それがまた一つになるだけ・・・」
「それじゃ・・・君はどうなるの？」
「僕は・・・君の中で生きる・・・だからお別れじゃないよ・・・寂しくない・・・だから泣かないで・・・最後位・・・笑顔を見せてよ」
「・・・うん・・・うん・・・」
スバルは震えながらも自分が今出せる笑顔を見せる
それを見た赤い髪のスバルもニッと微笑む
すると彼女の体が徐々に光に変わっていった
光の粒子になり辺りに散った
そして散った粒子はそのままスバルの元に集まっていく
体にかつての力が戻っていくのが分かった
魔力だ
自分の魔力が今戻ってくるのが分かった
だが、その代わりに大事な友達を失った
折角心が繋がったのに
お互い本当の心で語り合えたのに
その別れは余りにも悲惨であった
「うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」
スバルは叫んだ
目には涙が止め処なく溢れる
それでも叫んだ
声がかれる程に
それがもう一人の自分への最後の手向けになるのであればと願いな

がら
スバルは泣いた
大声で泣いた
それを只黙って見つめるティアナ、そしてグレートマジンガーと二体のゲッターロボ
その時であった、突如上空から数体の機影が降り立った
降り立った機影の姿はデビルマジンガーそのものであった
しかもそれが五体も現れたのだ
「何！」
「デビルマジンガーが五体もだと！」
それには鉄也達も驚かされた
そして更に驚きの光景があった
それは突如現れた五体のデビルマジンガーが動かなくなったデビルマジンガーに襲い掛かったのだ
既に動かなくなったデビルに対し自身の持っていた鋭い爪を振り上げて装甲を引き裂き腕を引き千切り内臓を抉り出す
その様は正に獣、嫌悪魔の所業に他ならなかった
そして、デビルマジンガー達の顔に変化が起こった
マジンガーの口に当たる部分にある縦にラインの入った部分が突如二つに割れて鋭い牙になった
巨大な口が其処にあったのだ
そしてその口の中に先ほど引き千切ったデビルマジンガーの残骸を放り込む
食べているのだ
奴等は自分自身を食べているのだ
腕を引き千切りその腕を鋭い牙で噛み砕く
足も、装甲も、内臓も全て五体のデビルマジンガーの胃袋に消えていく
そして残った頭部はその中のリーダー格と思わしきマジンガーが持ち上げそのまま噛み砕いてしまった

正に地獄の光景であった
先ほどまでグレート達を苦しめていたデビルマジンガーが今では影も形も無いのだ
その代わり五体のデビルマジンガーが其処にはあった
以前よりも更に醜悪で凶悪な姿になり
体各所は機械のようなごつごつした作りでは無い
むしろ言ってしまえば筋肉のように発達していた
そしてそれらが脈動しているのだ
まさか、こいつら生きているのか？
そうさえ思えた
すると、その五体のマジンガーが突如襲い掛かって来た
勿論グレート達も迎撃を行う
マジンガーブレードを目の前に居た一体のデビルに向けて振り下ろす
だが、それをデビルは巨大な口で挟むと何の苦労も無くへし折ってしまった
バキンと音を立ててマジンガーブレードが根元から折れる
その直後であった
ズシンと鈍い音が響く
見ればグレートの腹にはデビルの太い腕が突き刺さっていた
その箇所から大量のオイルが溢れ出る
「鉄也くん」
それを救おうと真ゲッターが駆け寄る
しかしそんな真ゲッターに三体のデビルが襲い掛かった
「邪魔をするな！」
竜馬が叫びゲッターの肩からトマホークを取り出して振るう
しかしそれもマジンガーブレードと同じ運命を辿った
鋭い爪で引き裂かれそのまま口の中に放り込まれたのだ
そしてその隙を突き両サイドからデビルがゲッターを押さえつけ鋭い牙を首筋に突き立てる
装甲に牙がめり込み其処からオイルが溢れ出る

ゲッターのエネルギーがドンドンデビルに吸い取られてるのが見て取れた
「くっ、こいつら・・・ゲッターのエネルギーを食ってるのか！」
「リョウ、このままじゃさっきのデビルの二の舞になっちまうぞ！」
「おい、どうすんだよ！」
隼人と弁慶に言われ竜馬は決断を迫られた
號がそんな真ゲッターの救援に向かおうとする
だが、そんな號を残っていた一体のデビルが立ちはだかり巨大な爪を振るってきた
「うお！」
その一撃はゲッター號の装甲を易々と破ってしまう程である
「気をつけろ號！あんなの食らったら一溜まりもないぞ！」
「分かってる！くそぉ、けどこのままじゃ」
號が舌打ちする
下に居たスバルとティアナも救援に向かおうとした
だが、其処へ以前地下基地を襲撃したデーモンが立ちはだかった
「このぉ！邪魔するなあああああああ！」
「退けえええええええええええええ！」
二人がデーモンを切り払う
だが、後から後からデーモンは沸いて出てきた
正に八方塞がりの状態であった
そんあ時、竜馬はある決断をする
「隼人、弁慶・・・危険だが、真ゲッターの出力を１００％にするぞ」
「ほ、本気か？リョウ」
「下手したら俺達もゲッターに取り込まれるぞ」
「危険は承知の上だ！最早こうなったらやるしかない！二人の命、俺に預けてくれ！」
竜馬はモニター越しにそう言う
其処まで言われれば嫌とは言えないのがこの二人である

「しょうがねぇな」
「やったれ竜馬！」
「有難う、隼人、弁慶」
竜馬は静かに頭を下げた
そして出力レバーに手を掛ける
「真ゲッターロボ、エネルギーフルパワー！」
竜馬が叫びレバー一杯にまで引き上げる
すると真ゲッターが突如緑色の発光を放つ
真ゲッターから溢れんばかりのゲッターエネルギーが放出されたのだ
「「「うおおお

「おう！見せてやるぞ！真ゲッターの奥の手をな・・・ゲッタアアアアアアアアシャアアアアアアアアアアアイン！」
竜馬が叫ぶ
すると真ゲッターの姿が明らかになり眩い発光を放った
それを見た五体のデビルが一斉に真ゲッターに飛び掛る
だが、飛び掛った瞬間デビルの腕が消滅した
分解されたとも言える
するとそのまま真ゲッターは上空に飛び上がりそして舞い降りてきた
「食らえ！真・シャイイイイイイイイイインスパアアアアアアアアアアアアアク！」
勢いそのままに真ゲッターが五体のデビルの元に飛び込んだ
激しい閃光と衝撃が辺りを包む
それはグレートやゲッター號、更にはスバルやティアナを吹き飛ばすには充分であった
眩い閃光、激しい衝撃、耳を劈く轟音
それらが合わさり意識を奪う勢いであった
やがて全てが収まった時、其処にあったのはそれは悲惨な光景であった
出力を臨界まで上げたツケが回ったのか真ゲッターは手足が無く胴体だけの状態で横たわっていた
そしてグレートは胴体に風穴が開いておりゲッター號は装甲がひしゃげてしまっていた
スバルとティアナも爆心地に居た為にかなりのダメージを負ってしまった
だが、その代償として五体のデビルを葬る事が出来た
嫌、此処までして五体のデビルしか葬れなかったと言った方が正しいのかも知れない
敵の戦力は圧倒的なのだ

＊＊＊

その頃、上空ではルビーナの乗ったベガ・ダイザーを討ち取ったグレンが今度はガンダルの乗るグラグラを睨んだ
「ガンダル、お前達だけは絶対に許さない！僕の命に替えても貴様を打つ！」
「デューク・フリードめ！我等が主ベガ大王の為貴様をこの場で叩きのめしてやる！」
ガンダルもデュークに対してそう言った
最早彼は不退転の覚悟なのだろう
それをデュークも察した
だからこそデュークも退けない
男として、そして何より自分を信じて逝ったルビーナの為にも
「此処で決着を付ける！ダブルハーケン！」
ダイザーの両肩から半月状の刃が現れる
それを頭上で連結させて構える
グラグラもまた爪を伸ばし牙を合わせて火花を散らしている
「死ね、デューク・フリード！」
「悪魔め！覚悟ぉ！！」
二体が空中でぶつかりあった
お互いが密着した状態になる
その時、グラグラの背中から何かが突き出てきた
ダイザーのハーケンである
ダイザーのハーケンがグラグラの背中を突き抜けて出て来たのだ
グラグラの口からオイルが吹き出てきた

体を電流が走る
もうグラグラももたないのだろう
「終りだ！ガンダル！」
「確かに・・・俺はもう死ぬ・・・だがデューク・フリード！それは貴様も一緒だ！」
「何！」
デュークが言葉の意味を理解した時は遅かった
グラグラが腕を伸ばしてダイザーを抱え込むようにしたのだ
その際に両の爪がダイザーの背中に深くめり込んでいく
「ぐあぁ！ガンダル・・・一体何をするつもりだ！」
「フフフ、このままマザーバーンにツッコンデ諸とも自爆してやる！俺は死ぬが貴様も只では済まん」
「くっ、僕はまだ死ぬ訳にはいかないんだ！」
「往生際が悪いぞデューク・フリード！さぁ、共に死ネェ！」
加速するグラグラがダイザーを抱えてマザーバーンに突っ込んでいく
「兄さん！早く振りほどいて！」
「駄目だ・・・振りほどけない」
「大介さん！」
「大介くん！」
スペイザーに乗っていたマリア達が見ていた
三機は必死にマザーバーンに攻撃を掛ける
だが、それでも撃破は出来なかった
そしてそのままダイザーを抱えたグラグラはマザーバーンに突っ込んで行き、やがて眩い閃光がマザーバーンを包み込んだ
そして聞こえてきたのは耳を劈くほどの爆音であった
「に・・・兄さあああああああああああああん！」
「大介さあああああああああああああああん！」
ひかるとマリアが叫ぶ
するとそんな爆煙の中から落下する巨大な物体があった
グレンダイザーであった

体中の損傷がかなり酷くこのまま地面に落ちればまず助からない状態であった
しかし、それをひかるの乗るマリンスペイザーが救った
背中にドッキングして飛行したのだ
「ひかるさん、兄さんは？」
「駄目、何度呼びかけても答えてくれない・・・もしかしたら」
「そんな弱気じゃ駄目よ！きっと兄さんは生きてるわ」
「そうね・・・御免なさい」
弱気になった自分を叱りながらひかるは言った
とにかく、これ以上此処に留まる必要は無い事が分かった
しかし今、彼女達に行くあてなど何処にも無かったのだ
その時、突如彼女達に通信が開かれた
その通信を送った人物とは・・・

＊＊＊

原蔵が放ったデビルマジンガー軍団は此処機動六課隊舎にも現れていた
「あれは・・・デビルマジンガー！・・・それもあんなに」
それは信じられない光景であった
空には9体のデビルマジンガーが飛び回っていたのだ
どれもが不気味に輝く瞳でこちらを睨んでいた

「甲児くん！」
「さやかさん、フェイト、お前らは下がってろ！」
「でも」
「お前らじゃ相手にならねぇ！此処は俺と甲児で相手をする！」
甲児と甲一がさやかとフェイトにそう言った
彼女達を危険な目にあわせたくないのだ
そう思っての言葉である
すると9体のデビルマジンガーが一斉にダブルマジンガーの元へ降り立った
どれもが不気味で凶悪な顔をしている
「野郎！」
甲児は手近なデビルにマジンガーの鉄拳を当てた
グシャァと嫌な音を立てる
だが、その音を立てたのはデビルではなくZの腕であった
殴ったZの腕がひしゃげ潰れてしまったのだ
「クソ！超合金Zがまるで紙細工だ！」
信じられなかった、超合金Zがひしゃげるなど今まであったであろうか
それも殴ったにも関わらず殴った自身の腕が潰れてしまったのだからその時、殴られたデビルが突如腕を振るった
正に一瞬であった
その一瞬の間にZの片腕は肩ごと切り裂かれてしまったのだ
「ぐあ」
甲児は声を上げる
切り裂かれた肩からオイルが流れ出ていた
そしてデビルの腕には千切り取ったであろうZの腕があった
「この野郎！」
甲児は怒りの入り混じった顔になりボタンを押す
Zの両目が輝き白熱の光線を放つ
光子力ビームだ

しかしそれを食らってもデビルの体には焦げ目一つつきはしない
まるで歯が立たないのだ
それは甲一のマジンガーも同じであった
「んなろぉ！」
甲一のZが腕を飛ばす
ロケット噴射を噴出してデビルの顔面に向かって飛ぶ
しかしその一撃もデビルの前にはかすり傷すら作れない結果となった
そのまま放物線を描きながら地面に突き刺さる腕
食らったデビルは天に向かって咆哮した
まるでマジンガーZの余りの弱さを嘆くかのように
「それならこれを食らえぇ！」
甲一のZが天に向かって両腕を突き上げる
すると胸に付けられた赤い放熱板から赤熱の熱線が放射された
ブレストファイヤーである
だが、その一撃もデビルの前には大した一撃にはならないでいた
デビルは甲一のZの前に歩み寄るとその巨大な腕を振り上げて顔面を殴りつける
Zの顔面は歪な形に歪みそのまま地面に倒れる
キャノピーのガラスは砕け散り甲一は衝撃に打ちのめされる
「ぐあ」
甲一の額から熱い何かが流れた
それは血であった
衝撃で額が切れたのだろう
意識が朦朧としだしていた
先の甲児との戦いで殆どの力を使い切ってしまった為に満足に動けないのだ
それを甲児は察していた
そして
「ゴッドスクランダー、オフ！」
Zの背中に装着されていたゴッドスクランダーを外し甲一のZに装

着させた
「フェイト、さやかさん！甲一を連れて離れてくれ！」
「こ、甲児さん！」
「一体何をするつもりなの！」
「決まってるだろう！マジンガーの光子力エンジンを臨界にさせればこいつらを道連れに出来るさ」
甲児の言った戦法
それは正に自爆である
だが、それをすれば甲児も死ぬ事になる
「嫌よ、甲児くん！死なないで！」
「さやかさん！分かってくれ、これしか手はねぇんだよ！」
『そうはいかんなぁ』
「何！」
突如上空から声が響いた
すると何処から現れたのかもう一体のデビルマジンガーがミネルバの後ろに現れる
さやかも気づき振り返った
だが、その時には遅かった
デビルの太い腕がミネルバの頭部を掴み上げそのまま胴体と頭部を切断してしまったのだ
「さやかさぁん！」
甲児が叫ぶ
ミネルバの頭部
すなわちコクピットは今デビルの腕にあるのだ
『ククク、兜甲児よ。さぞ悔しいだろう？』
「てめぇ、Ｄｒ．ヘル！」
其処から聞こえたのは確かにあのＤｒ．ヘルであった
『兜甲児よ、弓さやかの命が惜しくばじっとしていろ！妙な真似をすればこの女の命は無いぞ』
そう言ってデビルがミネルバの頭部を握る力を強める

徐々にミネルバの頭部が歪に歪んでいく
さやかから返事は無い
此処からでは見えないが恐らく気絶しているのだろう
「止めろ！言うとおりにする！だからさやかさんには手を出すな！」
『ククク、懸命な判断だな』
Ｄｒ．ヘルはニヤリとする
そして戦意を失ったＺの回りに９体のデビルマジンガーが集まる
「止めてくれお爺ちゃん！」
『Ｋ－１よ、何故お前はワシに逆らうのだ？』
「お爺ちゃん！これがあんたの望んだ夢なのか？あんたの夢はこんな人殺しの夢だったのか？」
『その通りよ！ワシの夢はワシを死に追いやった人類を滅ぼす事だ！』
「違う！おじいちゃんは俺には優しかった！あの時の優しさを思い出してくれ！」
甲一はＤｒ．ヘルに止めるように説得する
だが、それを見てＤｒ．ヘルの目つきが代わった
『何故だ・・・何故お前はワシに逆らうようになったのだ！・・・まさか』
次の瞬間、Ｄｒ．ヘルの乗り移ったデビルがフェイトを睨んだ
『その女か？その女がお前を迷わせたのか！その女がああああああ！』
Ｄｒ．ヘルの乗り移ったデビルが怒りの咆哮を上げる
すると突如フェイトに向かってその豪腕を振り上げてきた
しかしそれを甲一のＺが盾になり防ぐ
「グハッ！」
「甲一くん！」
『何故だＫ－１！何故お前はワシの言う事に背きその女を庇う！』
「お爺ちゃん！例えあんたでもフェイトを傷つけるなら・・・俺はあんたを倒す！」

『やはり・・・貴様もまた失敗作であったか・・・ならば死ねぃ！』
「うおおお

「Z、お前」
そう、そんな甲児にZが話しかけたのだ
「甲児、俺はお前を死なせる訳にはいかねぇんだ」
「馬鹿野郎！俺達は一心同体だろう？俺がお前を見捨てられる訳ねえじゃねぇか！」
「一心同体ねぇ・・・それは俺じゃなくて本当のZに言ってやれよ」
「本当のZ？どう言う事だ？」
「知りたかったら・・・生き延びやがれ」
そう言うとマジンガーは一人でに動き出した
残った腕を頭部にあるパイルダーに向かって動かし、最後の力を振り絞ってパイルダーを引き抜いた
無理矢理引き抜かれた為にバチバチと火花が舞い散る
「何するんだ！止めろZ」
「あばよ・・・兄弟」
Zはそう最後に言い残すとパイルダーを遥か上空へと放り投げた
「二人共、あの馬鹿を頼む！」
「止めろ！ゼットオオオオオオオオオオオオオオ！」
「くっ・・・すまねぇ」
「御免・・・なさい！」
叫ぶ甲児を抱えて甲一のZとフェイトはその場を後にする
しかしデビル達はそんな甲一達になど目も暮れず一目散に甲児のZ、操縦者を失い動かなくなったZに群がった
腕を引き千切り足を切り裂き内臓を抉り出しそれを食らっている
「てめぇら、まとめて吹き飛びやがれ！」
Zがそう言った瞬間、激しい爆発が起こった
光子力の爆発であった
それは機動六課隊舎をほぼ全壊の状態にまで追いやる程の威力であった
にも関わらず、其処にはほぼ無傷のデビル達が立っていた
『ククク、甲児め・・・命拾いしたな・・・だが、これでこの世界

の希望は費えた。これでこの世界は我等の物よ』
そう言ってＤｒ．ヘルは声高らかに笑った
そのデビルの腕にはさやかの乗ったミネルバの頭部が今でも握られていたのだ
機鋼帝国の最終兵器
その名は「デビルマジンガー軍団」
その驚異的な力の前に機動六課は・・・そしてダイナミックチームは敗れ去ってしまったのであった

舞い降りる絶望　　終り

次回予告

甲児
「機鋼帝国の最終兵器の前に俺達は敗れちまった。そしてヴィヴィオや父さんも攫われ、俺はＺを失っちまう
畜生、どうすりゃ良いんだ！
だけど、あの時言ってた本当のＺってのは一体
そして、管理局も逃げ腰になった俺達の元に最高の助っ人が現れてくれた」

次回『発動、オペレーション「ダイナミックウォーズ」』

次回もこの小説にテイィィィィィィクオォォォォォォォフ

舞い降りる絶望　後編（後書き）

次回はいよいよ最終決戦の開幕です

外伝１０　甲児　ｉｎ　ダグオンの世界へ！？（前書き）

今回はあのジャンさんの人気小説とコラボです
でも・・・結構滅茶苦茶になるかも（汗）

外伝１０　甲児　ｉｎ　ダグオンの世界へ！？

「何だい？お爺ちゃん」
「おう、甲児！良い所に来たわい！」
その日、甲児は祖父兜十蔵に呼ばれて彼の研究室に来ていた
其処にはこれまた意味不明な巨大な何というか・・・とりあえず凄い発明品が出来上がっていた
「すげぇ・・・お爺ちゃんこれ何だい？」
「ヌハハ、これはワシの発明したテレポート装置じゃ」
「テレポート装置？」
「その通り、まぁ原理はお前も分かっとるじゃろう？」
「あぁ、しかし凄いなぁお爺ちゃんは・・・んで、何で俺呼んだの？」
「勿論、お前にこれのテストを手伝って貰いたいんじゃ」
「マジ！やるやる！手伝うぜおじいちゃん」
甲児は十蔵の手伝いに問答無用でＯＫサインを出した
それを見て十蔵も満面の笑みを浮かべる
「うっしゃぁ、それじゃ早速そのシートに座ってくれぃ」
「あいよ！」
甲児は十蔵の言葉通りに装置のシートに座る
すると十蔵は何やら装置を操作する
すると装置がスパークしだし激しい閃光が甲児の視界を奪った
「どわぁ！前が見えねぇ！一体何だ？」
「慌てるなぃ甲児！これも計算の内じゃ！」
騒ぐ甲児にそう言って十蔵は尚も操作を続ける
すると更に閃光は激しくなりやがて甲児の視界は真っ白になった
それと同時に何か浮遊感にも似た感じに襲われる
「うお、これがテレポートなのか？初めてだぜ・・・って、何処行くんだ俺？聞いとけば良かった」

甲児が顔を掻きながら呟いていた
その頃装置の方では
「あ、転送先をインプットするの忘れてた」
十蔵さんのボケが炸裂していたのでした

＊＊＊

甲児が次に見たのは青い空と白い雲と眩しい太陽であった
「お、どうやらテレポートは成功したみたいだな」
甲児は呟く
そしてそのまま視線を変えると、その下には一面小さくなった町が見えた
嫌、小さくなった町ではなく、小さく見えた町であった
つまり、甲児は今町の上空に居たのであった
当然そのまま甲児は
「どわあああああああああああああああああああ！」
声を上げて落下するのであった
丁度その頃、その下では
「はぁ・・・はぁ・・・どうにか巻いたみたいだな」
下では一人の少年が息を切らしていた
丁度そんな少年の真上に
「どけどけどけえええええええええええええええ！」
「へ？」
少年は真上を見た

すると其処には真っ直ぐに自分に向かって落下してくる甲児が居た
当然回避など出来る筈も無く、そのまま二人は頭からぶつかってその場で倒れた
「いてて・・・」「あたた・・・」
二人が頭を抑えながら立ち上がる
「わ、悪ぃ・・・大丈夫か？」
「あ、あぁ・・・ってか、何であんた空から降って来たんだ？」
「ああ、それはだなぁ」
甲児が少年に説明しようとした時であった
「見つけたの！」
「もう逃さない！」
少年に向かってそう叫ぶ二人の少女達が居た
それは甲児自身も見覚えのある二人であった
「あり？なのはにフェイトじゃん！どうしたんだ二人共」
甲児が見覚えのある二人に手を振る
しかし、そんな二人の対応はと言うと
「「誰？」」
二人して首を傾げていた
「あり？俺の事覚えてないのか？俺だよ、兜こうｊ・・・」
自分の名前を言おうとする寸前甲児の頬を何かが高速で通り過ぎた
未だにその痛みが残る
そして後ろを振り返ると床にその弾痕が残っていた
「貴方が誰かなんてどうでも良いの！貴方はその悪魔と一緒に居るって事は」
「その悪魔と繋がりがある・・・って事だね」
「はぁ！あ、悪魔？・・・お前、悪魔って・・・デーモンと合体でもしてんの？」
「嫌、そういう訳じゃなくてさぁ・・・」
少年が説明に困っている中、早速なのはが連続で魔弾を発射する
「どわぁ！」「危ね！」

二人は咄嗟にそれを避ける
避けた直後の道路にはその弾痕がクッキリと残っている
「チッ、」
「なのは、惜しい」
其処には明らかに悔しそうな顔をする二人が居た
「おいいいいいいいいいい！何だよあの二人、明らかに殺気むき出しじゃん！」
「とにかくあんたこっち来い！このままじゃ俺達お陀仏だぜ」
「うへぇ、そりゃ勘弁だぜぇ！」
そう言うや否や甲児と少年は一目散に走り出した
「逃さないよ！」
「ニャハハ～、二人纏めて消し去ってあげるの～」
そんな二人を二人の魔王が不気味な笑みを浮べながら追い掛ける
ハッキリ言ってかなり怖い
「ったく、一体どうなってんだ！・・・あ、そうだ！俺は兜甲児だ。こんな状況だけど宜しくな」
「俺は南力って言うんだ。こっちこそこんな状況だけど宜しく・・・ってか、何であんた空から降って来たんだ？」
「ああ、それはだなぁ・・・」
甲児が説明しようとした矢先、再びなのはの放つ桜色の魔弾の雨が降り注いだ
「ギャアアアアアアアアア！」
「ヒエエエエエエエエエエエエ！」
二人は悲鳴を上げながら逃げ惑う
不思議と魔弾は一発も当たらない
それは二人がマッハスペシャルを起動させてる訳・・・では無いのであしからず
「もぉう！動かないでよぉ、当たらないじゃない！」
「なのは、頑張って！もう少しであの悪魔達を抹殺出来る筈よ！」
口々に恐ろしい事を呟くなのはとフェイトに甲児は青ざめる

「ど、どうなってんだ?俺の知ってるなのはやフェイトじゃねぇのか?・・・ってか何でこんなにあの二人怖いんだ?まるでさやかさんみたいに怖いぜ」
「へぇ、そっちにはそんなに怖い子居るのか?」
「まぁな、にしてもお前一体何したんだよ?あの二人があそこまで怒るの相当だぞ?」
「俺も知らないんスよ・・・何かいきなり襲ってきたし」
「けどお前の事悪魔って言ってるぜ?お前何かしでかしたんじゃねぇの?」
「そうは言ってもなぁ・・・全然心当たりが無いのは事実なんスよぉ」
一体どう言う事だろうか?
あの二人が理由も無く人を襲う筈が無いのは事実である
ならば一体何故こんな事をあの二人がするのだろうか
それが疑問であった
しかしその疑問を探す暇など今の甲児にはありはしないのだ
何故なら
「待つなのぉ!」
「二人共その場に直りなさい!」
二人の魔王が間近まで迫っているのだから
「だあああああああああ!ちきしょう!もう逃げるのは止めだ!こうなったら正面から向かってやる!」
甲児が逃げるのを止めて二人の前に仁王立ちした
「ちょっと、あんた一体何するんだ?」
「此処は俺に任せな!その隙にお前は少しでも遠くへ逃げろ!」
「チェッ、見ず知らずの俺にそこまでしてくれるあんたをこんなとこで見殺しには出来ないって!」
甲児を見て力もまた逃げるのを止めて構えた
それを見たのか二人は地上に降り立つ
「やっと覚悟を決めたんだね?」

「あぁ、なのは、フェイト・・・幾らお前らでもちょっとおふざけが過ぎるぜ！ちょいとお灸を据えてやるよ」
甲児が腕をボキボキと鳴らしながら二人を見る
その目には熱い闘志がギラついていた
「な、何？この人の目・・・凄い熱い物を感じる・・・」
「何だろう・・・この人を怒らせちゃ駄目な気がしてきた・・・」
甲児の視線を見た途端なのはとフェイトは不安になってきた
「それじゃ、私はあの悪魔を倒すね、なのは」
「あぁ！フェイトちゃんずるい！」
どうやらフェイトは力に逃げたようである
そう言う事はなのははあの見知らぬ青年（甲児）を相手にしなければならない事になるのだ
「よし、んじゃ力はあのフェイトを頼むぜ」
「合点だ甲児さん！」
甲児の声に力は頷く
そして四人はぶつかりあった
「悪魔、覚悟ーーーー！」
フェイトのバルディッシュザンバーが振り下ろされる
しかしそれを力が白刃取り宜しく掴む
するとフェイトはお約束の如く「ちっ」と舌を鳴らす
「今鳴らしたよね！チッて鳴らしたよね！明らかに危ないだろぉ！」
力が叫ぶもそれを無視してフェイトが更に一撃をお見舞いしていく
しかしそれを力は華麗に白刃取りしていく
こちらでは
「ニャハハ、あの悪魔に味方する人は誰でも許さないなのぉ」
「って、幾らなんでも少しは手加減してくれよなのはぁ」
ブチ
「私を呼び捨てして良いのはユーノくんだけなのぉ！」

どうやらなのはを呼び捨てしたのが不味かったらしい
なのはの収束した魔法が甲児に向けて放たれる
「ちっ、Z頼む！」
『しゃぁねぇなぁ』
甲児が言うと突如甲児の両腕にZと書かれた白いグローブが嵌められる
そしてそれを前に翳すと目の前に白い結界が現れる
そしてそれはなのはの放つ魔砲を弾いたのだ
「何？今の！」
「いててぇ・・・やっぱ光子力バリアはまだ慣れてないせいかムズイぜ」
手を振るって甲児は言う
だが、すぐに両の拳を握り締める
「さぁて、そんじゃ今度はこっちから行くぜぇ！」
腕を振り絞って甲児が言う
そしてなのはに向かって指を指差すとその先から白熱の光線が放たれる
「キャッ！危ない！」
なのはは辛うじてそれをかわす
「今のって何？」
「何だ？やっぱ此処じゃ光子力ビームも無いのか？」
「光子力？甲児さん、それ何だ？」
「今は無理だ！後で教えてやるよ」
背中越しに甲児と力は言い会う
そんな二人の元になのはとフェイトが挟み込むように降り立つ
「さぁ、追い詰めたよ！」
「ニャハハ、念仏は唱え終わったぁ？」
二人がデバイスに魔力を収束させる
このままでは二人の最大魔力の餌食となるだろう
しかしそれでも甲児と力は落ち着いていた

「おい、力、あの手で行こうぜ」
「あの手ッスね！合点」
甲児と力は何かを理解しあったのか頷きあった
すると二人の最大魔砲が放たれる
その直後であった
「今だ！飛べ！」
「おりゃぁ！」
甲児と力は今自分の飛べる限りの力で真上に飛んだ
当然そのまま魔砲はお互いの放った物の元へ飛んでいく
つまり、フェイトの放った魔砲はなのはへ
そして、なのはの放った魔砲はフェイトへ飛んでいったのだ
その結果は当然
「「ニャアアアアアアアアアアアアアアアア！」」
そう、自滅であった
凄まじい爆煙が立ち篭る中甲児と力は着地した
そしてお互いを見合う
「やったな力！」
「いやぁ甲児さんのお陰ッスよ！」
そう言ってお互いが硬く握手した・・・正にその時であった
「こんのボケがぁ！」
「ゴファ！」
「ゲボォ！」
突如現れた邪神（はやて）の手により力と甲児は吹き飛ばされた
因みに甲児は完全に巻き添えである
「この馬鹿力！またご近所に迷惑掛けよってからにぃ！」
「ちょ、ちょっと待てはやてちゃん！こいつに罪はねぇんだよ！」
「そんなの関係・・・って、誰？あんた」
はやてもまた甲児を見てキョトンとしていた
（はぁ・・・どうやらマジで此処俺の居る世界とは違うんだなぁ）
つくづくそう思う甲児であった

外伝１０　甲児　ｉｎ　ダグオンの世界へ！？（後書き）

このネタ続けられるなぁ

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その1（前書き）

連続投稿って案外キツイなぁ

甲児

「弱音吐くな！」

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その1

巨大なモニター一杯にデビルマジンガーがダイナミックチーム、そして機動六課を蹴散らす光景が映っていた
そして、それを楽しそうに眺める存在が居た
其処には巨大なカプセルに浮んだ人の何倍もある人の脳を思わせる姿をしていた
そして脳だけの姿の奴が微笑む
『クハハハ、素晴らしい光景では無いか！流石ワシの作った最高傑作じゃのぉ・・・そうは思わんか？剣造』
脳だけの存在『兜原蔵』が呟く
その先には椅子に手足を固定されたボロボロの状態で片腕が無い状態の剣造が其処には居た
「・・・・・」
剣造は只黙り込んでいた
何も語らず、只じっと変わり果てた姿の祖父を睨んでいた
『そう睨むな剣造。ワシもお前をこんな風にしたくないんだ。だから教えてくれ』
其処まではとても優しい口調であった
だが、其処から声が一辺した
『本物のZは何処だ！』
原蔵が突如強張った声でそう尋ねる
だが、それを聞かれた剣造が突如笑い出した
「本物のZ？Zならもう貴方が破壊しただろう？もうこの世にZは無い」
剣造が笑いながら言う
すると突如剣造が固定されていた椅子に高圧電流が流れる
「ぐあああああああああ！」
その電流を浴び剣造は悲痛の声を上げる

『いい加減にしてくれないか？ワシも人の子だ。こうして孫をいたぶるのは心が痛むんだ。だから早く答えてくれないか？本物のZの在り処を？』
脳だけになった原蔵が剣造を睨むように尋ねる
それでも剣造は頑としてそれを答える事はしなかった
『まぁ良い、其処まで答えたくないのならそれも良いだろう。どうせこの世界はもうじき滅ぶのだからなぁ・・・このワシの『デビルマジンガー軍団』の手によって』
原蔵がそう言って嬉しそうに笑う
それを剣造は歯噛みして見ているしか出来なかった

＊＊＊

「う・・・うぅ～ん・・・」
目蓋が重い
まるで錘を乗せているようであった
それでもどうにかはやては目蓋を開いた
見ると一面に広がったのは見覚えのある病室・・・ではなく、何処か落ち着きのある純和風な作りの部屋であった
そんな部屋の中ではやては布団に寝かされていたのだ
「あれ？・・・此処何処や」
「おやおや、やっとお目覚めかい？」
「え？」

声がした
何処か聞き覚えのある声であった
そう、それもかなり昔に聞いた声である
その声のした方を向いた
其処には背中に大きく「く」と書かれた羽織を羽織っており手には高そうな煙管を持った女将が居た
そして、その女将をはやては知っていた
「つ・・・翼さん！」
「ほぉ、１０年前に会ったって言うのに良く私の事覚えていてくれたねぇ」
「え？って事は此処は地球なんですか？」
「いんや、此処はあんたらの言うミッドチルダさ」
「えぇ！じゃぁこの建物は一体？」
はやては回りを見回した
どう見ても地球にあった温泉宿「くろがね屋」であった
しかしそれがミッドチルダにあると言うのか？
そう思っていると女将である翼が告げた
「此処は『くろがね屋　ミッドチルダ出張所』だよ」
「な・・・なんですとぉ！」
はやては驚きの声を上げた
話しを聞いてみると、どうやらあの「冥王ハーデス事件」以降客足が余り良く無かったので半ば博打的に此処ミッドチルダに同じように温泉宿を構えたのであった
するとそれが大当たりして大盛況
今ではここまで大きな温泉宿にまで発展していたのである
「って事は・・・皆もおるんですか？」
「あぁ、もう皆広間に集まってるよ」
翼がそう言って煙管を吹かす
はやてはそれを聞いて早速起き上がる
だが、その直後によろけて転んでしまうのである

「おいおい、さっきまで瀕死だった奴がそんなに慌てて起きれる訳ないだろう?もっと落ち着きなよ」
「そ・・・そうは言ってられないんです。今私らが頑張らないと・・・この世界は機鋼帝国に乗っ取られてまうんや」
翼の言葉を突っ返すかのようにはやてが言う
それを聞いて翼が溜息を漏らす
すると煙管を口に咥えて軽く二回手を叩く
するとふすまを開けてこれまた見慣れた人が現れた
「へぇい、お呼びでやんすか?女将さん」
「や、安さん!安さんもおったんですか?」
「こりゃはやてちゃんお久しぶりですねぇ。ささ、車椅子を用意しやしたんで早く行きやしょう」
と言ってくろがね屋の従業員である安は車椅子を持ってやってきたのだ
「その体じゃロクに歩き回るのだって無理だろう?今はこれに乗っときな」
「は・・・はい」
翼の言葉にはやては力なく頷くのであった

安が押す車椅子に乗ったはやてはそのまま皆の待つ広間にやってきた
其処には確かに全員居た
だが、皆かなり負傷している
その証拠に服の間から怪我を治療した跡と思わしき包帯の跡が痛々しく見えた
そして、そんなボロボロの一同がはやてを見つける
「はやて!」

「やっと目を覚ましたのか？」
「ハハハ、皆待たせてすまんなぁ」
多少砕けた感じではやては言う
それで少しは場が和むかと思ったがそれは徒労であった
皆すぐに思い詰めた顔になった
聞いた話によれば各地で機動六課は機鋼帝国の放ったデビルマジンガーにより惨敗したのだ
それも圧倒的な力で
その証拠に此処に居る殆どのメンバーが負傷こそすれ欠けてないのだ
その気になれば皆殺しも出来た筈である
しかしそれを遭えてしなかったのは恐らく理由があるのだろう
「多分、俺達をわざと生かして絶望を味合わせるつもりなんだろうな」
竜馬がそう言った
正にその通りであろう
圧倒的な力の差を見せつけ機動六課だけでなくミッドチルダに住む人々に絶望を植え付けたのだ
現に管理局の上層部は機鋼帝国の圧倒的な力の前に及び腰になり殆どが逃げ出そうとしているのだ
「しかし、あの時提督が助けに来なかったらあのままスカイホエールと運命を共にしていた所だったわ」
ウーノが呟く
彼女も無傷ではなく顔などに傷を持っていた
それでもメンバーの中では比較的軽い怪我である
「クロノが？それって一体どういう事や？」
「あの時、私達の操縦していたスカイホエールに七代将軍が襲い掛かりあっと言う間に撃墜されてしまったの。でもそんな時提督が壁を破って助けに来てくれたお陰で今こうして生きてるのよ」
「あの時クロノが来なかったら私達今頃海の藻屑になってたわよぉ」
クアットロも同じように呟く

彼女もまた同じように負傷していた
「嫌、僕も正直間に合ってホッとしてたよ」
其処には黒い制服を着た黒髪の青年が立っていた
「クロノ提督！お久しぶりです」
「はやて、此処は管理局じゃないから昔どおりで良いよ」
「そうでっか？ほならクロノ、お久しぶりやな」
「すまない、救援が遅れてしまって」
クロノは申し訳なさそうな顔をしていた
「それを言ったら僕もそうだよ」
「ユーノ！ユーノも居ったんか？」
其処には金髪で眼鏡を掛けた青年が居た
かつてジュエルシード事件やハーデス事件で共に戦った仲間である
ユーノ・スクライアである
今は無限書庫で働いているがどうやら駆けつけてきてくれたようである
「だが、これでカリムの予言が当たってしまったな」
「ですね」
クロノが思い詰めた表情になりユーノもそれに頷く
「カリムもこっちに来てるんか？」
「あぁ、聖王教会はデビルマジンガーの手によって崩壊してしまったからね、カリムやシャッハ、それにヴェロッサも来てるよ」
「ゲッ、あの遊び人も来てるんか？」
「随分な言い方だねはやて」
声がした方を振り返った
其処には緑の長髪をした甘いマスクの青年が居た
「ロッサ、いやぁ今のは言葉のあやって奴や」
「ま、それで良いよ。それより・・・大変な事になったね」
「ロッサ、騎士カリムの予言ってどんなんやったんや？」
「それは私の口から言わせて貰います」
噂をすればであった

其処には騎士と言うよりは修道女と言えるような服装をした金髪の長い髪をした女性とその付き人を思わせる赤のショートカットのこれまた同じ修道女を思わせる服装をした女性が居た
カリム・グラシアにシャッハ・ヌエラの二人である
「それで、その予言ってのはどんなのだったんや？」
「それは皆さんを呼んでご説明しましょう」
カリムがそう言って皆を自分の方に集めた

「つまり、あんたの予言だとどんな結果が出たんだ？」
集まった中に居た鉄也が聞いた
それにカリムは頷き予言の結果を述べる
『虚空の彼方より出でしは破壊の魔神の群れ　空を割り、海を焼き、地を裂き、人々に恐怖と死と絶望を与える』
「間違いない、そりゃデビルマジンガーだ！」
竜馬が言った
恐らく予言に出た破壊の魔神はデビルマジンガーで間違いないだろう
「騎士カリム、その先の予言は無いのか？」
「そうだぜ、それじゃ死刑宣告じゃねぇか！」
クロノと剣児が聞いた
するとカリムが続きを言う
『人々が未来に絶望し、悪に屈するならば、天を裂いて王の魔神が現れ破壊の魔神に永久の眠りを与えん』
「王の魔神？何だそりゃ？」
「ゴッドマジンガーじゃないのか？」
「嫌、それなら神の魔神って言うだろう？それに天を裂くってのがどうも引っかかる」

隼人が顎に手を当てて呟く
それにその場に居たほぼ全員が悩むのである
「何にしてもまずは俺達の魔神達だよなぁ」
「あぁ、先の戦いでかなり損傷が激しい」
竜馬が暗い顔になる
先の戦いでマジンガー軍団は殆どがかなりの傷を負ってしまったのだ
特に甲児のZはもうこの世に無いと来ている
その為かこの中で本来熱血火の玉と言える存在の甲児が沈み込んでいた
「甲児・・・」
マリアがそっと甲児の顔を覗き込む
それでも甲児は暗いままであった
今まで共に戦って来たマジンガーが自分の目の前でバラバラにされた上自爆したのだ
ショックが無いと言えば嘘になるのは事実である
しかし、それ以上に甲児にショックを与えたのは敵にさやかが捕らえられたからだ
あのＤｒ．ヘルのことだ。もしかしたらさやかを機鋼獣のパーツに組み込んでしまうのでは
嫌、もっと酷い事をしでかすのでは
そう考えただけでも甲児は居ても立ってもいられなくなってしまった
「くそぉ！俺が弱いばっかりに・・・」
「何を思いつめてんだいお前は」
そんな甲児に向かって翼が言った
明らかに呆れ果てた感じである
「あんただって分かるだろう！俺のマジンガーが自爆して跡形も無く吹き飛んだんだぞ！」
「お前のマジンガー？はん、甲児・・・お前本当にあれをお前のマジンガーだと思ってたのかい？」
「な！どうしてそれを！」

驚くしかなかった
あの時Zが言った事を目の前に居る翼が言っていたのだ
「翼さん、甲児さんの乗っていたZは違うんですか？」
不思議に思ったフェイトが尋ねる
それには機動六課一同も興味を示す
そんな中、翼が煙管を吹かして説明に入る
「よぉく考えな。どうして一緒に転移してきたマジンガーの中でZだけが言葉を発せれるか？」
「あ！そう言えば」
「グレートもゲッターも喋らないよなぁ」
「グレンもジーグもッスよ！」
一同はこの時ハッキリと分かった
そう、この世界に来たお陰でマジンガーの転送は出来るが甲児のZ以外は制限を付けられると呼べないと言うペナルティーが付くのだ
だが、甲児だけは何処でも呼ぶ事が出来る
その上あのZは会話が出来たのだ
そう、あのZには意思があった
他のロボットには無い事である
「それって、つまりどういう事なんだ？」
「あれはなぁ、お前のお爺さんが作ったコピーマジンガーなんだよ」
「お爺ちゃんが？」
「やれやれ、ばらしちまったのか」
すると突如甲児の肩から十蔵が現れた
初めて十蔵を見た面子はその余りの顔つきに思わずたじろぐ
だが十蔵は大して気にしてなかった
「どう言う事だよお爺ちゃん！」
「まぁあれじゃ、お前のZはな、実はお前より数日早く此処に辿り着いたんじゃ」
「えぇ！そうなのか！」
「それで、それをあたしが見つけて秘密裏に隠したのさ」

「でも、どうして隠す必要があったんですか？」
なのはが聞いた
それに翼は答える
「ったく、このロボットがご法度の世界でマジンガーなんかが出た日にゃその場で解体されちまうだろう？そうなっちゃ不味いから隠したんだよ」
「あ！」
長い間マジンガーと共に戦って来たせいですっかり忘れていた事であった
そうだ、本来マジンガーは質量兵器なのだ
その為もし見つけたら破壊もしくは処分しなければならない
それを恐れた翼が秘密裏にZを隠したのだ
「そ、それじゃZは今何処にあるんだ？」
「今はまだ出せないね」
「何で？」
「その時期じゃないからだよ・・・時期が来たらZの方からお前の元に行くよ」
意味不明な言葉を発した翼に一同は首を傾げた
「まぁ、今は機鋼帝国も多分動かないだろうし・・・暫くは傷ついた羽を休める事に専念しな」
「そ、そんな事やってられねぇよ！すぐにでも奴等の本拠地に殴りこみに・・・」
言葉の途中で甲児は口を閉じた
彼の目の前には燃え滾る煙管の先端が向けられたのだから
「寝言言ってんじゃないよ！あのデビルマジンガーに生身で挑むってのかい？それこそ自殺行為だろうが！」
「だ・・・だけど！」
「それに・・・奴等はさやか達には手を出さないさ・・・何せ奴等の狙いは・・・人類の抹殺だからね」
「人類の・・・抹殺！」

驚愕であった
機鋼帝国の本当の目的はこの星に住む人類を滅ぼす事だったのだ
それならあのデビルマジンガーがあれば容易い事である
「それじゃ、どうしてさやかさんを攫ったんだ？」
「恐らく、お前をおびき出す為だろうさ。敵はきっとお前に恨みを持つ奴だね・・・案外心当たりあるんじゃないのかい？」
「う～ん、有りすぎて分からん」
甲児がマジメな顔でそう言った為にその場に居た殆どの者がズッコケタ
翼もそれには呆れていたのか眉を引く付かせている
「ったく、オリジナルの息子だけに情けないよ」
「わ、悪い・・・」
バツの悪い顔で甲児はそう言った

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その2（前書き）

今回過去に出てきたあの人が出ます

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その2

それから数日の間は静かに時が流れた
その間、マジンガー達の修復はほぼ終り、メンバーの傷も完治とまでは行かない者のどうにか動ける位にまでは回復した
しかし、体の傷は癒えても心の傷は癒えないでいた
メンバーの殆どが未だに沈み込んだままである
無理も無い話しである
無敵を誇ったマジンガー軍団は機鋼帝国のデビルマジンガー軍団の前に敗れ去り、管理局の殆どは逃げ腰になっている
正直自分達も逃げ出したいと言うのが本音であった
だが、そんな事をすれば今度こそミッドチルダの終りである
そんな思いが皆の中にあった
そんな時であった、一同を翼が呼んだのは

「どうだい？あんた達、少しは気が晴れたかい？」
煙管を吹かしながら呟く翼に返答する物は誰一人居なかった
それを見て翼は当然だなと内心思いながら煙を吐く
「ったく、一回負けた位で何しょげてんだい？」
「そうは言いますけど・・・これからどうすれば良いんですか？管理局は殆ど逃げ腰になっちゃってるし、それに・・・私達があの敵に勝てるかどうか・・・」
「戦力も圧倒的に少ないですし・・・このままじゃ勝ち目が無いのと同じですよ」
珍しく弱気になっていたのはなのはとフェイトである

だが、それを聞いて翼が鼻で笑った
「ハン、あんな腰抜け連中を当てにしてたら何回この世界が滅んでも足りないよ。それにねぇ、戦力ならこっちだってちゃあんと用意してんだよ」
「はぁ？そりゃどういう意味だよ？」
眉を顰めて甲一が聞く
すると突如窓に居たキャロが大声を上げた
何か恐ろしい物を見た声であった
その声を聞いて一同が一斉に窓の外を見る
すると其処に居たのは
「ヘッヘェ！此処がくろがね屋かぁ！」
「オラオラァ！道開けねぇとどたまかち割るぞゴラァ」
「腕が鈍ってしょうがねぇや！早く暴れてぇぜ！」
其処に居たのは幾千万とも言える数の恐ろしい顔つきの人達であった
明らかに普通の人ではない
顔には鋭い刃物で切ったような切り傷を持ち数々の違法武装などを所持しており顔つきもいかにもな者達ばかりである
「な、何スかあれ？」
「お、おいおい・・・あいつらこっちに来てるぞ！」
ウェンディとノーヴェが引き気味に言う
するとその隣に居たフェイトが青ざめていた
「あ・・・あれって・・・」
「どうした？フェイト」
甲一が尋ねる
するとフェイトの口から出たのは思いもよらない言葉であった
「あれ・・・全員広域次元犯罪者達だよ・・・」
『え！』
フェイトの言葉に魔道士達は一斉に度肝を抜かれる思いがした
だが甲児達は別に気にしてなかった
恐らくこいつらが来たって事は翼が呼んだのだろう

そう思えたからだ
「さぁて、そんじゃあんたらも下行くよ」
「えええ！私達も行くんですか？」
「何言ってんだい？これから一緒に戦う連中と顔合わせしないでどうするんだい？」
翼が呆れた顔でなのは達に言う
だが、それを聞いたなのは達は一瞬視界が真っ白になる思いがした
「って、あの次元犯罪者達と一緒に戦うんですか？」
「ハン、教本どおりに型の嵌った管理局のボンクラ共よりは使える筈だよ。それよりさっさと行くよ」
そう言って翼は皆に手招きした
「やれやれ、相変わらず派手な事する人だなぁ・・・んじゃ俺達も降りようぜ」
「フッ、こうなったら毒を食らわば皿までだな」
「上等じゃねぇか！」
ダイナミックメンバーは意気揚々と下に降りて行った
しかし魔道士メンバーは明らかに魂の抜ける思いのまま降りた
下手したら顔面に質量兵器を打ち込まれる危険性もあるのだ
何しろ散々広域次元犯罪者と認定して追い回したのだから

降りると其処にはズラリと次元犯罪者達が勢ぞろいしていた
皆かなり目つきが悪い
今にも手に持っている質量兵器を撃ってきそうだ
それを見た皆は勿論青ざめていた
得にフェイトに至っては生きた心地がしないのが本音である
何しろ中にはしつこく追い回したり魔砲をぶっ放した者も居るのだ

恨みを持っているかもしれない・・・って言うか確実に持ってる筈である
なのは、はやても同様でありヴォルケンリッター達も同じであり流石のシグナムも青ざめていた
フォワードメンバーに至っては皆涙目になっている
そしてナンバーズもその圧倒的な威圧感に押されっぱなしである
カリム、ヴェロッサやシャッハもそれには血の気が引く思いがしたが、ユーノとクロノは不思議と平然としていた
まぁこの人ならやりかねないと腹を括っていたのだろう
甲児と知り合ってから肝が据わった二人である
そしてダイナミックメンバーは勿論平然としていた
甲児や鉄也、ゲッターチーム等はおろか、あのボス達でさえ大して驚いていないのだから
肝のでかさが尋常ではないと正直に思えた
すると其処で翼が大手を広げる
「よぉく来たねぇ皆の衆、歓迎するよ」
翼がそう言う
普通ならその場で蜂の巣にされそうな雰囲気であるだが、
『お久しぶりでございやす！女将さん！』
『あっしら一同！女将さんの為なら地獄の一丁目までお供いたしやす！』
突然次元犯罪者一同が片膝をついて古き良きヤクザっぽい真似をしてそう言った
それには皆一時思考が停止しかけた
それを見て翼が笑う
「ハハハ、驚いたかい？こいつらは皆あたしの顔見知りさ」
「か、顔見知り！！！翼さんって次元犯罪者とも繋がってたんですか？」
「ハン、単なる客だよ・・・家は基本来る者は拒まずでやってんだ。

金さえ払えば重鎮だろうが犯罪者だろうが客と同じ扱いをするのさ」
そう言って再び煙管を吹かす
この時皆が思った
翼さんの肝っ玉はミッドチルダ1である・・・と

＊＊＊

それからくろがね屋では次元犯罪者達を招いての宴会が開かれていた
これから死闘に赴く為に皆で語り合おうと言う翼の計らいだったのだ
「しっかしおれっちを追い回していたのがこんな美人さんだったとはなぁ」
「おうおう、俺なんざ真近で見た事あるぜぃ！」
「俺なんざ砲撃食らった事あるぜ」
フェイトに追い回されていた犯罪者達は別にフェイトに恨みを持っていた訳ではなく寧ろフェイトに追われていた事を誇りのように語り合っていた
それを聞いて当の本人であるフェイトは何処か気まずい雰囲気になっていた
「うぅ・・・居辛い・・・」
辺りを見回せば皆犯罪者だらけである
本来ならその場でしょっぴくのだが、そんな事すれば何されるか分かった物じゃない
だからフェイトは青ざめていたのだ
「どうしたフェイト？顔色悪いぞ」

そんなフェイトの気を使ってか甲一が側に寄る
するとフェイトは藁にもすがる思いで甲一の腕にしがみ付く
「あん？何だお前・・・寒いのか？」
甲一は訳が分からずそう呟く
すると回りから囃し立てる声が上がった
「いよ、ご両人！」
「お似合いだぜコンチクショー！」
「くぅぅ、美人執務官を落とすたぁ憎いねぇ小僧！」
回りから囃し立てられ甲一は少し気恥ずかしい思いになり頬を赤く染めた
当然甲一でそうなのだからフェイトは顔がトマトのように真っ赤である
当然騒いでいるのは次元犯罪者達だけではない
こちらではと言うと
「うおりゃぁぁぁ！」
「ぐおっ！」
剣児が犯罪者相手に腕相撲で勝った
勝利した剣児は勝った腕を振り上げて得意げな顔をする
「うっしゃぁ！次の相手はどいつだぁ！」
剣児が大声を上げて回りを見る
すると
「どうれ、そんじゃ一丁揉んで貰おうかねぇ」
そう言って上がってきたのはご存知顔に十文字の傷を持つスキンヘッドのクロスである
顔は怖いが根は良い人でもある
それを見て剣児がにやける
「良いぜ、叩きのめしてやる」
そう言って剣児とクロスが互いに腕をつかみ合う
「さぁさ、世紀の大決戦！どっちが勝つか張った張ったぁ！」
「大穴か堅実な狙いか賭けるのはお前ら次第だぜ～」

隣では安とジャンゴが賭けに入っていた
剣児が勝つかクロスが勝つか賭けをしていたのだ
当然これには皆が乗りまくる
最初は皆怖い顔だったので引き気味だったが一度腹を割って話し合えば皆良い奴なのだ
その証拠に
「いよっしゃぁ！そんじゃもう一曲行くかぁ！」
「おうッス！」
ステージと思われる場所では犯罪者の男とウェンディがデュエット宜しく唄を歌っていた
しかしお世辞にも上手いとは言い難い出来ではあるがそれでも皆楽しんでいた
他にもノーヴェやギンガが桶一杯に盛られた飯を平らげたりクアットロがウーノを様々なコスプレさせたり（本人は嫌々）
他にも上げたらキリが無い程の馬鹿騒ぎを展開させていた
それとは別に外に出ると
「やれやれ・・・まさかとは思ったがお前が居るとはなぁ」
外では月を見ながら暗黒寺が酒を飲んでいた
隣にはくろがね屋の従業員を現る半被を着た青年が座っていた
茶色の短めの髪をした好青年である
その青年は笑っていた
「死んだ人間が此処に居ちゃ可笑しいか？」
「別に、俺としちゃまたお前とこうして飲めるのが嬉しいからな」
「そうだな」
そう言って二人は互いに手に持っていた酒を飲む
ほろ苦い味が喉を刺激しながら胃に落ちていく感覚がなんとも心地よかった
「んで、どうしてお前が生きてるんだ？ティーダ」
「さぁてね、話すと長くなるんだよなぁ」
暗黒寺の問いにティーダ・ランスターは頭を掻き毟った

それを聞くと暗黒寺は溜息をついた
「長くなるなら良いや、それより妹にはちゃんと会ってやれよ」
「ああ、そうだな・・・それで、ティアナは立派にやってるか？」
「あぁ、あんな華奢な体の割りにかなり頑張ってるぜ」
「そうか・・・良かった」
安心したのかティーダの顔は安堵の表情になる
「んで、何時会うつもりなんだ？」
「この戦いが終ったら・・・会うつもりだよ」
「お、おい！それどういう意味だよ？」
「もしかしたら、次の戦いで俺はまた死ぬかも知れない・・・だから、アイツには悲しい思いをさせたくないんだ」
「はぁ・・・運良く死ななかったら会うつもりって奴かよ・・・だったら、今度は無茶するなよ」
「あぁ・・・そのつもりだよ」
ティーダはそっと微笑んだ
それを見て暗黒寺もまた笑顔になる
そしてすぐ側にあった徳利を持ってティーダに向ける
ティーダはそれを見て自分の持っていたお猪口を近づける
徳利から透明な色をした酒が並々に注がれる
注がれた酒には月が反射して写っていた
「それじゃ、無事に戦いを終える事を祈って」
「乾杯」
二人がそう言って互いのお猪口を天に掲げる

＊＊＊

此処はくろがね屋の広い庭の一角
其処には一人の少女が立っていた
青いショートカットの髪をした緑色の瞳をした少女、スバルである
スバルは自身のもう一つのデバイス「リュウコン」を手に持っていた
「リュウコン・・・一つ聞いて良い？」
『なんだ？主がワシに質問とは珍しい』
「・・・ゼノンは・・・最後に何て言ってた？」
『・・・・・』
スバルの問いにリュウコンは黙り込んだ
それを見てスバルは俯く
「やっぱり・・・怒ってるよね・・・だって、あの時私・・・ゼノンに酷い事言っちゃったんだもん」
『やれやれ・・・彼奴と良い主と良い、世話の焼ける事じゃ・・・ちょっと待っておれぃ』
リュウコンはそう言うと棍型のデバイスから自身の体を出した
青い鱗をした天を舞う龍である
しかし大きさはそんなに大きくなく二メートルしかない
『余り騒ぎを起こしたくないのでな・・・んじゃ、呼ぶぞ』
「え？呼べるの？」
『ワシを誰だと思っておる？ワシにとって彼奴を呼ぶなど朝飯前よ』
そう言うとリュウコンは自身の瞳を輝かせてスバルの前に照らす
すると其処から現れたのは一人の少年であった
スバルと同じ青い髪に緑の瞳をした少年である
スバルはその少年を見て目を見開く
「ゼ・・・ゼノン！」
「久しぶりだね、スバル」

スバルを見てゼノンは優しく微笑んだ
『流石に肉体を具現化するのは無理じゃったが意識だけは出来たぞい・・・それじゃ心行くまで語り合うが良い』
そう言い残してリュウコンは自身のデバイスの中に消えていった
それを見終わると二人は互いに見詰め合う
「ゼノン・・・私・・・あの時、ゼノンに酷い事言っちゃって・・・」
「スバル、謝るのは僕の方だよ」
「え？」
ゼノンの言葉にスバルは言葉を失う
「僕は、あの時君の事を考えずに酷い事を言ってしまった・・・本当に御免」
ゼノンはそう言って頭を下げる
「顔を上げてゼノン・・・私も・・・ずっと君に謝りたかったんだ」
「・・・僕もだよ」
顔を上げてゼノンはスバルを見る
月夜が二人を照らす
何だか良い雰囲気であった
すると
「こんなトコに居たんだ」
「あ、ティア！」
其処にはスバルが居らず心配の余り探しに来たと思われるティアナが居た
そしてティアナはゼノンを見る
「えっと・・・誰？」
「あ、ティア・・・この人が、私が過去に行った時にお世話になったゼノンって言う人なんだ」
「へぇ・・・確かにスバルに似てると言えば似てる気がするわね」
ティアナがマジマジとゼノンを見る
それにゼノンが困った顔になる

「あわわ・・・てぃ、ティア・・・ゼノンが困ってるし・・・あんまりジロジロ見ない方が」
「はいはい、分かってるわよ。別に取ったりしないからさ」
「う！！！」
言葉の意味が分かってるだけに返答し辛いのか困った顔になるスバルをんなスバルを面白そうな顔でティアナは見ていた
するとゼノンはクスリと笑った
「良かった・・・君は元気そうだね・・・安心したよ」
「ねぇ、ゼノン・・・また一緒に居られるの？」
「それは無理だよ」
ゼノンはあっさりと答えた
「僕の肉体は君の生命維持の為に使ってしまった・・・今の僕は意識の塊に過ぎないんだ」
「そんな・・・それじゃぁ、これでお別れなの？」
「でもね、近い未来、そうだなぁ、もしかしたらもう生まれてるかもしれないけど、僕は人間の体を持って生まれる事が出来るかも知れないんだ」
「ほ、本当！」
それを聞いたスバルの目が輝く
ティアナも少しホッとした顔になった
「多分、生まれ変わった僕は君の事を覚えてないと思う・・・でも、君ならきっと見つけられるよ」
「見つける！絶対に見つけるよ！」
「有難う・・・それじゃ、僕はもう行くよ」
ゼノンが言う
すると彼の足元が徐々に消えていくのが見えた
だが、不思議とスバルは泣かなかった
これが今生の別れではない
肉体や名前が変わってもきっと何時かゼノンと会える
嫌、会って見せる！そう自身で思っていたのだ

「あ、そうだ・・・最後に一言だけ」
ゼノンはそっとスバルの耳元に近づく
そして

「スバル・・・僕は君が大好きだったよ」

ゼノンはそう一言言うと今度こそ光の粒子になり二人の目の前から
姿を消してしまった
スバルはと言うと
「・・・・・・・・・・・・」
無言であった
それだけならまだしも顔が真っ赤であった
「スバル・・・一体何言われたの？」
「えええ！なななななな、何でもないないないよよよよよ！」
明らかに動揺しまくりのスバルにティアナは怪しそうに見るも深く
追求しないでいた
そんな一同の騒がしい一日が終り、新しい一日が幕を開けようとし
ていた
そう・・・決戦の日の夜明けが

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その2（後書き）

次回はいよいよ決戦に向けて動き出します
お楽しみに

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その３（前書き）

今回でいよいよ最終決戦の開幕です

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その3

「うぅ・・・此処・・・何処？」
目を覚ますと其処は見慣れない光景であった
そして今、ヴィヴィオは自分がどの様な状態か理解出来た
玉座に似た椅子に座らされ両手足を拘束具で逃げられないように固定されていた
そしてその回りには七体の不気味な怪物「ミケーネ七大将軍」が立っていた
「ほほぅ、この娘があの剣鉄也の娘か？」
最初に口を開いたのはドレイドウであった
「奴に似て憎たらしい顔をしておるわ」
バーダラーが不満そうに呟く
「こやつの首を奴の前に転がしたら奴はどのような顔になるか楽しみだわい」
ハーディアスは自身の鎌を見て不気味な事を呟いていた
「奴には積年の恨みがある、もっと残酷にしてやったらどうだ？」
「ユリシーザの言うとおりだ」
「わしもそう思うぞ！」
ハーディアスの提案にユリシーザ、スカラベス、アンゴラスがそう指摘する
「ククク、楽しみになってきたわい」
ライガーンが自身の爪を舐めながらヴィヴィオを睨んでいた
それを見ていたヴィヴィオは恐怖に駆られた
このまま自分は殺されるのだろうか
そう思った時であった
「フハハハハ、何をぬるい事を言っておるのだお前達は！」
突如何処からか声がした
すると突如一同の前に燃え上がる焔が湧き上がった

その中には不気味な顔が映し出された
ミケーネ帝国の皇帝であり、かつて１０年前にマジンガー達に敗れた冥王ハーデスの成れの果てである闇の帝王である
「おぉ、これは闇の帝王！」
一同がそれを見て一斉に跪いた
それを見て闇の帝王が気分を良くしたのか口を開く
「良いか、この娘は殺さず散々いたぶってやれ！そうすれば奴は・・・剣鉄也は必ずやってくる・・・其処をこのワシ直々に捻り潰してくれるわ」
「なんと！帝王自らがですか？」
その言葉に七大将軍は驚く
だが、それに対して闇の帝王が口を開く
「奴にはかつてワシの壮大な計画を打ち砕かれた恨みがある。このワシの手で八つ裂きにせねばこの高ぶる怒りは収まらんわ！」
「は・・・ははぁ！」
その言葉を聞き将軍達は一斉に頭を下げる
「お前達は生き残っている人間共を皆殺しにせい！なに、あの機動六課と呼ばれる組織とて最早烏合の衆！何を恐れるか？」
「お任せ下さい。あのような猿共など我等七大将軍の手に掛かれば一捻りに御座います」
「誰がこの地上に君臨すべきか愚かな人間どもに思い知らせてやります」
「フフフ、頼もしい事よ」
将軍達の進言に更に気を良くする闇の帝王
そしてその視線は動けないヴィヴィオに向けられる
「娘よ、貴様の命は今しばらく預けてやろう。間も無く此処に剣鉄也が・・・グレートマジンガーがやってくる・・・お前を助ける為にな」
「ぱ・・・パパや皆は絶対・・・絶対貴方達には負けないもん！」
震える声で必死に声を出す

しかしそれは闇の帝王にとっては快楽のスパイスにしかならなかった
「フハハハハ、だがワシの領域に入れば奴に勝ち目は無い！待っているのは地獄の苦しみと終らぬ絶望よ。そして苦しみに苦しんだ末に殺してやる。その後で貴様はその後を追わせてやる。ワシの慈悲の心を有りがたく思うのだな小娘よ」
そう言うと闇の帝王は不気味に笑い出した
それに釣られて七大将軍達も声高らかに笑い出す
ヴィヴィオは只、こみ上げてくる恐怖と悔しさを必死に抑えるしか出来なかったのだ

＊＊＊

場所は変わり、此処はくろがね屋のとある一室
其処には翼とくろがね屋五人衆、そして機動六課の面々やクロノ達が居た
「さて、それじゃ話しと行こうか」
翼がそう言うと映像を映し出す
其処には機鋼帝国と思われる軍団の戦力が描かれていた
「今奴等の戦力は機鋼獣、合成獣、そしてデビルマジンガーを合わせて数十万の兵力がある」
「かなりの数だな」
それを見てクロノが声を出す
皆も同じ反応であった
だが、それには耳を傾けず翼は続ける

「更にはミケーネ帝国、恐竜帝国、百鬼帝国、邪魔大王国、ベガ星連合軍と各帝国を取り込んでその膨らんだ戦力はおよそ数百万に行くだろうね」
「なるほどな、確かに絶望するにゃもってこいな状況だぜ」
モニターを見ながら隼人が不敵に笑う
「その通りだね、恐らく奴等はこの次一斉に攻撃してくる筈だ。其処で奴等の出鼻を挫くのさ」
そう言って翼は別の映像を写す
それはミッドチルダの全体図であった
所どころが赤く点滅している
「翼さん、その点滅はなんですか？」
はやてが挙手して尋ねる
すると翼は答えた
「此処に奴等が本拠地を構えているのさ」
「何で分かるんだ？」
「ハン、あたしの耳を見くびるんじゃないよ！この程度ならすぐに入るさ」
翼が鼻を鳴らす
頼もしい限りである
「だが、かなり離れているな・・・これじゃお互い助け合う事は不可能に近いな」
「その通りだ。だから結果として戦力は分断される訳だね」
そう言って翼は煙管に火を着ける
「翼さん、ベガ星連合軍はやはり宇宙ですか？」
「あぁ、しかも月に本拠地を構えてるさね」
「其処まで同じだとは」
以前ベガ星連合軍は地球を侵略する際月の裏側に本拠地を構えていたそして此処ミッドチルダでも同じように構えていたのだ
「それじゃまずはその各帝国を滅ぼすのが先なんですね？」
號が聞く

すると翼が頷く
「そうだ、戦力差があるなら少しずつ削り落とせば良い。まずは回りを固めている各帝国を潰すんだ」
「ならば恐竜帝国と百鬼帝国は俺達が潰す」
そう言って名乗りを上げたのは竜馬であった
「だったら俺達も行きますよ」
號もそれに続いた
竜馬はそれに頷く
「それじゃ俺は邪魔大王国をぶっ潰してやるぜ！」
剣児が立ち上がり拳を鳴らす
「俺はミケーネだ！奴等だけは許さん」
鉄也は拳を硬く握り締めてそう言った
大切な娘と育ての親を連れて行かれた怒りがあの拳に宿っているのだ
「俺はどうすれば良い？」
甲一が挙手した
「お前は此処に行け」
翼はそう言ってもう一点の赤い点を指した
「其処は？」
「其処には奴が・・・Ｄｒ．ヘルが居る」
「って事は、其処にさやかさんが居るのか？」
甲児の問いに翼は頷く
「だが、分かってるとは思うが奴等の本拠地にはきっと二重三重の罠が張り巡らされてる可能性がある。下手したら死ぬよ」
翼が顔を強張らせる
だが、それを聞いて震える者は誰一人居なかった
「へ、こちとらはなから命掛けなんだ！罠の二、三個なんざぶっ潰してやるぜ」
「頼もしいねぇ」
剣児が強きに言うのを見て皆もそう思う
その時であった、突如別の映像が流れ出した

「これは！」
それは各都市でミケーネの七大将軍が破壊活動を行っている映像であった
その力は圧倒的であり管理局の魔道士も応戦してるが全く歯が立たないで居た
それを見て翼が舌打ちした
「ちっ、もう手を打ってきやがったか」
「どうする？俺達が殲滅するか？」
「待って下さい」
隼人の言葉をはやてが遮った
「ミケーネの将軍は私達機動六課メンバーが相手します」
「本気か？」
「本気でなかったこないな事言いません」
はやては真剣な顔で隼人を見る
それに納得したのかはやとは頷く
「でも念の為や、なのはは鉄也さんと、フェイトちゃんは甲一くんと、アリシアさんは竜馬さんと、シグナムは剣児くんと一緒に向かってな」
「うん、」
「分かった」
「何で私が剣児となんだ？」
はやての提案に一同（シグナム以外）は頷いた
「さぁて、そうと決まったらおっぱじめるとしようか」
「僕も可能な限り支援する」
「雑魚は任せて下さい」
クロノとユーノもそれぞれ言う
「シャッハ、貴方も」
「心得ております」
カリムの言葉にシャッハが頷く
「よし、そんじゃ今から作戦開始だ！作戦名は「オペレーションダ

イナミックウォーズ」だ！派手に暴れてきな！」
翼が大声で言う
それに皆が頷く

＊＊＊

「悪いなヴァイスの旦那」
「良いって事よ」
此処はくろがね屋の庭先
其処で甲児はヴァイスのバイクを点検していた
マジンガーを失った甲児はこれに乗ってさやかを救出するつもりなのだ
「でも大丈夫なのか？今のお前さんはマジンガーが無いんだろう？」
「まぁな、でも何としてもさやかさんを助けたいんだ」
「強いねぇ、それなら俺もかげながら援護したくなって来たよ」
ヴァイスはそう言って自身のデバイス「ストームレイダー」を構えた
甲児はそんなヴァイスを見る
「すまねぇな、旦那には色々と世話になっちまってよ」
「良いって事よ・・・それと、あの時はサンキューな」
「あの時？妹の事か」
甲児は言った
それは甲児がこの時代に帰って間も無くの事であった
ヴァイスの経歴を知った甲児が何故彼がヘリのパイロットになっているか尋ねた事があったのだ

その理由は過去の任務の際に人質にされた妹を救出しようとした際に手元がずれてしまい妹の片目に被弾してしまった事が原因であったのだ
それを聞いた甲児はパイルダーを使いヴァイスの妹を連れてきたのだそしてその妹から励ましの言葉を貰い彼は立ち直れたのであった
「気にすんなよ。俺と旦那の仲だろう？」
「嬉しい事言ってくれるねぇ」
甲児の言葉にヴァイスは笑みを浮かべる
「さて、それじゃそろそろ行くかね」
「おう、終ったらまたあれ呑もうぜ」
「『レジアス殺し』か、楽しみだぜ」
甲児がにやける
すると頭上に一体の魔神が現れた甲一の操るマジンガーZである
「甲児、準備は良いか？」
「何時でも良いぜ！」
甲児が手を上げてサインを送る
するとマジンガーは大きな手でバイクごと甲児を持ち上げる
その背中にはかつて甲児のマジンガーZが付けていたゴッドスクランダーが取り付けられていた
「良いのか？俺がこれを貰っちまって」
「良いさ、今それが使えるのはお前位だしな」
「サンキュー、それじゃありがたく使わせて貰うぜ」
そう言ってマジンガーは飛び上がる
その先にはグレート、真ゲッター、ゲットマシン、ビックシューター、グレンダイザーが飛行していた
「皆、必ず生きて会おう！」
「おうよ！こんな所で死ぬなよお前ら」
「誰が死ぬかよ！」
「それじゃ、また会おう」
そう言って一同は散らばった

最後の戦いを終らせる為に

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その3（後書き）

ちょっと無理があったかも知れないかなぁ？

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その４（前書き）

激戦開始
そして最後に・・・

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その４

マジンガー達が各地に散った後、残りの機動六課メンバーはくろがね屋の地下に来ていた
其処には一隻の戦艦が眠っていたのだ
それこそ、間も無く廃棄処分される予定だったかつて、「ジュエルシード事件」や「闇の書事件」の際に活躍した戦艦
その名は「アースラ」であった
「まさか、アースラまで此処に持ってきてたんですか？」
「用意できるときに用意しておかなきゃならんだろう？」
翼は当然の如くそう言う
それには機動六課全員が呆れるようななんと言うか説明しづらい顔になる
「さぁ、さっさと行ってきな！こんな戦いとっとと終らせて欲しいもんだよ」
『はい！』
翼の言葉に何故か皆が返事をする
そして皆急ぎ足でアースラに乗り込む
全員が乗り込むとアースラのエンジンに火が入りゆっくりと空に舞い上がっていく
再びアースラを旗艦に機動六課メンバーは戦場の空へと飛び立っていく
「さぁて・・・こっちも準備をしないとね」
そう言うと翼は手近にあった通信機のスイッチを押す
すると其処には二人の女性の顔が映し出された
「よぅ、プレシアにマリー。そっちはどうだい？」
『貴方に言われた通りの事は済ませたわ』
『後はそっち待ちですよ』
プレシアとマリエルが翼に言う

すると翼はニッと微笑む
「そうかい、急いでくれ。デビルマジンガーを倒せるのは今となっちゃ「あれ」しかないからねぇ」
翼がそう言うと二人は頷いた
二人の背後には影が濃く良く見えなかったが、確かに其処には居たそのシルエットは紛れも無く「マジンガー」であった

＊＊＊

剣児、つばき、パルパ・・・そしてシグナムの三人を乗せたビックシューターは邪魔大王国の居る地点に来ていた
其処には一隻の巨大な戦艦「幻魔要塞」が浮んでいた
そしてその天辺には一組の男女が腕を組んで立っていた
竜魔帝王とヒミカである
「きおったな、鋼鉄ジーグ」
「フッ、なに、この俺の手に掛かればあんな奴一捻りよ」
「頼もしいな」
ヒミカが微笑む
それに合わせて竜魔帝王も微笑む
「待っておれ、すぐに片付けてくる」
そう言って竜魔帝王はその場から飛び降りると忽ち１０m位の大きさになった
「来たな・・・つばき！今度は勝とうぜ！」
「勿論！お願いよ剣児」

「任せとけって！」
そう言って意気揚々とビックシューターから雷鋼馬とパルパが飛び出す
その後すぐさまジーグパーツが射出されビルドアップするパルパも巨大化しバルバになる
ジーグとバルバは竜魔帝王を睨む
「ふん、懲りずにまた来たか小僧」
「へん、リベンジマッチって奴だよ！覚悟しやがれ」
ジーグがそう言って竜魔帝王を指差す
「フハハ、ではわらわは側を飛び回る雑魚を片付けるとするか」
ヒミカはそう言うと幻魔要塞から無数のハニワ獣を召還する
「つばき！雑魚は私達で引き受けるぞ」
「分かりました、シグナムさん」
そう言ってシグナムは直ちにバリアジャケットを纏いビックシューターから飛び出す
「行くぜ！」
「来い、今度は容赦せんぞ」

＊＊＊

二つのゲッターチームとアリシアの前にはとても醜悪な光景があった
それは一体の巨大な怪物が居たのだ
大きさからしてゲッターの約四倍はある

しかし何より驚かされたのはその体の各所である
怪物の体の各所には人の顔がついているのだ
しかもその顔はかつて竜馬達が倒した恐竜帝国、そして百鬼帝国の幹部達や兵士達である
そして頭部にはあの二人の顔があった
「あれは・・・帝王ゴールにブライ大帝！」
竜馬は叫んだ
其処にいたのは紛れもなくかつて竜馬達が倒した敵の親玉であったのだ
「竜馬さん、あいつらって」
「あぁ、間違いない！俺達が過去に倒した奴等だ・・・しかし何故？」
「リョウ、今更驚く必要なんざねぇだろう？こうなったらもう二度と出てこないように成仏させてやるのが人の道って奴だぜ」
「隼人さんの言うとおりです。自分も敵とは言えあのような姿になってしまった者を放って置く事など出来ません」
隼人の言葉に続き凱もそう言う
「やりましょう竜馬さん！どの道戦わなければならない相手なんです」
「そうだよ竜馬さん！悩んでる竜馬さんなんてらしくないよ」
號とアリシアが言う
それを聞いて竜馬も決心を固めた
「よし、やろう！こうなったら俺達の手で奴等を葬るんだ」
竜馬がそう言い彼の乗っていた真ゲッターの肩から巨大なトマホークが現れる
ゲッター號はファイティングポーズを取りその場で軽くステップを踏む
アリシアはバルディッシュＭＫ－?をトマホークモードにして硬く握り締める
「行くぞ！」

＊＊＊

グレートマジンガーとビューナスA、そして高町なのははヴィヴィオが捕らえられ、かつ闇の帝王の居るであろう場所に来ていた
「ジュン、怪我の方は大丈夫か？」
「平気よ、でも貴方が私の事心配してくれるなんて珍しいわね」
ジュンが鉄也にそう言って笑う
それを見て鉄也がムッとなる
「何だ？そんなに俺が心配するのが変か？」
「だって、今までの貴方なら「そんな事で怪我するなんてまだまだ未熟だな」って笑うでしょ？」
「昔の事を引っ張るなぁジュン」
確かに昔の自分ならそう言った筈である
そう思い鉄也は思わずニヤリとした
それを隣でなのはが苦笑いを浮べながら見ていた
「二人共凄く仲良いんですね」
「あら、そう見える？」
「ったく・・・」
なのはの言葉にジュンは僅かに頬を赤く染め鉄也は満更でも無さそうな顔で不満そうな声を漏らす
それが今から死闘に向かおうとしている者達の姿である
三人共歴戦を経験している為か何処か余裕が感じられた
その道中には幾多の機鋼獣や戦闘獣こそいたがそれらを軽く蹴散ら

して一向はヴィヴィオの待つ玉座へと辿り着く
其処には手足を拘束されて椅子に座らされているヴィヴィオの姿があった
「ヴィヴィオ！」
鉄也は声を上げた
その声を聞いてなのかヴィヴィオがゆっくりと顔を上げる
だが、その顔はとても弱弱しかった
「パ・・・パ・・・」
見ると体中のいたるところに傷が出来ていた
それが一体何を意味しているのかすぐに鉄也は理解出来た
そして、彼の中に抑えようのない怒りがこみ上げてきたのだ
「ヴィヴィオ、今助ける！」
そう言ってグレートが手を伸ばす
だが、その手は何か見えない力により弾き返されてしまう
「何！」
「これは・・・バリアー？」
ジュンがそう言う
「でも、あれには魔力は感じられない・・・それじゃあれは？」
「あれはサイコパワーだ！出て来い、闇の帝王」
鉄也は吠えた
するとヴィヴィオの前に激しい炎が湧き上がり瞬く間に姿を現した
闇の帝王である
「フハハハハハ、やっと来たかグレートマジンガー、そして剣鉄也」
「闇の帝王！ヴィヴィオは返して貰うぞ！」
グレートが闇の帝王を指差してそう言う
だが、闇の帝王は不気味な笑みを浮かべたままである
「そうはいかん！貴様等は此処でこの娘ごと地獄に行ってもらう」
「地獄に行くのは貴様だ！今度こそ決着をつけてやる！」
マジンガーブレードを取り出して高らかに宣言するグレートマジンガー

＊＊＊

甲一の操るマジンガーZとフェイト、そしてその腕に乗せたバイクに跨る甲児は今Ｄｒ．ヘルの待つ本拠地に辿り着いていた
「甲児さん、さやかさんの居場所は分かるんですか？」
「そんなのは勘で探すさ、いざとなったら手当たり次第で探し回ってやる」
「そ、そんな無計画な！」
甲児の提案に驚くフェイト
だが、甲一は笑っていた
「良いじゃねぇか！それでこそ兜甲児だぜ」
「それ褒めてるのか？」
「好きに取りな」
甲一がそう言ったのでとりあえず褒めてると言う風に勝手に解釈する甲児
そして一気に本拠地内に突入する
「こっからは別行動だ。俺とフェイトはお爺ちゃんを止める」
「ああ、俺はさやかさんを救い出す」
「気をつけてね、甲児さん」
「なぁに、ちゃちゃっと片付けてくるさ」
「そうか、じゃぁ行ってこい」
そう言うと甲児がバイクにエンジンを掛けマジンガーの腕から飛び

出した
そして瞬く間に通路の影に消え去っていく
「よし、俺達も行くぞ」
「うん」
甲一の言葉にフェイトが頷く
その前には無数の機械獣が襲ってきた
「邪魔だ退けぇ！」
だが、それをマジンガーとフェイトが一気に蹴散らしていく
そして二人はとある広い空間に出てきた
其処はまるで闘技場のようであった
「此処は？」
「どうやら此処で決着をつける気みたいだなお爺ちゃん」
『その通りだ』
突如部屋を振るわせるような声が響いた
かと思うと突如地面が盛り上がり中から巨大な怪物が現れた
四方に顔を持ち四本の腕を持っており漆黒のマントを羽織り腹には髑髏を模した顔が取り付けられていた
そしてその大きさはマジンガーより遥かに大きい
「お爺ちゃん！まさかそれに乗ってるのか？」
「Ｋ－１よ、貴様は最早ワシの敵になった、ならばこのワシの最後の切り札、地獄王ゴードンで叩き潰してやる」
ゴードンがそう言って甲一達に襲い掛かる

＊＊＊

「さやかさん！」
甲児が叫びながらバイクを走らす
途中道を塞ぐように機鋼兵が押し寄せるもそれを軽くあしらってひたすらにさやかを探す
「何処だ！何処に居るんださやかさん！」
祈るように叫ぶ
無事で居て欲しい
只それだけを願いながら
すると通路の一番奥に大きな扉が見えた
頑丈に出来た鋼鉄の扉である
「あそこにもしかしたら」
甲児はそう思い扉に光子力ビームを当てる
当てられた箇所は変色し溶けてしまった
其処を突っ切って甲児は部屋に入る
すると其処にはさやかが居た
「さやかさん！」
「こ、甲児くん！」
さやかは甲児を見る
今さやかは十字架に磔にされた格好である
だが、幸いにも体は弄くられた形跡がなくその証拠に服もそのままである
「待っててくれ！すぐに助ける」
バイクを降りて駆けつける甲児
しかし其処へ何者かが降り立った
それは
「とうとう此処まで来たか、兜甲児」
「てめぇ、シュラ！」
甲児の前には因縁とも言える存在のシュラが居た
「貴様のせいで私は機鋼獣指揮将軍の座を追われた、こうなれば貴

様の首を機鋼王様に捧げるのみ」
「ふざけるんじゃねぇ！てめぇ如きにこの兜甲児様がやられるかってんだ！」
そう言って甲児は構える
だが、シュラは腰に挿してあった長い剣を抜き放ち甲児に向ける
「ちっ、相変わらず卑怯なのはそのままらしいな」
「ほざけ、この剣で貴様を切り刻んでくれるわ」
そう言って剣を横薙ぎに振るう
咄嗟に甲児はバックステップでかわす
だが、見ると腕の部分が僅かに切れているのが見えた
「馬鹿な、マジンガーと同じ強度を持つこのスーツが切れた？」
「馬鹿め、この剣は只の剣では無いわ！超合金Ｚすら切り裂く超振動で動く剣よ」
「ちっ、また厄介な物を作りやがって」
甲児は舌打ちするのであった

＊＊＊

その頃、首都クラナガンでは２ｍの大きさの七大将軍達が管理局の局員達を圧倒していた
魔道士達も応戦するも相手はあのミケーネを代表する七大将軍である全く歯がたたないのだ
「駄目ですナカジマ三佐！我々ではとても太刀打ち出来ません！」
「もう少しだけもたせろ！避難を完了させるまでもてばそれで良い」

部下が悲鳴に似た声を上げるとそれにゲンヤが激を飛ばすように叫ぶ
だが、目の前では圧倒的力で魔道士達を吹き飛ばす将軍達が居た
すると其処へ一隻の戦艦が現れた
「あれは・・・廃棄処分予定だったアースラじゃねぇか！何で此処に」
驚くゲンヤ
だが、彼が驚くのはこれからであった
「皆、相手はあの将軍達だけど気合入れていくわよ！」
「おぉ！」
ティアナがそう言い、残りのフォワードメンバーや年の近いナンバーズのメンバーがそれに応じる
「相手が同じ大きさなら負ける気がしねぇぜ」
「ヴィータ、余り油断するなよ」
「そうよヴィータちゃん、敵はあの七大将軍達なんだから」
「わぁってるよ」
息巻くヴィータにザフィーラ、シャマルがそう言う
そして皆一斉に降り立ったのだ
七大将軍達が降り立った彼女達を睨む
だが、彼女達もまた将軍達をにらみ返した
「行くぞぉ！」
ヴィータが叫びそれを皮切りに一斉に駆け出すメンバー達

＊＊＊

此処はミッドチルダの軌道上
其処には無数の大艦隊が押し寄せていた
恐星大王ベガ率いる船団である
そしてその前には一体のロボットと三機のスペイザーが居た
「ベガ大王！」
「また貴様か、デューク・フリード」
最早うんざりした口調でベガ大王はダイザーを見た
「ベガ大王！答えろ、何故ルビーナを利用した」
「何故だと？決まってるだろう。奴はワシの所有物だ、それをどう使おうとワシの勝手よ」
「酷い、それが実の娘にする事なの？」
溜まらずマリアが吠える
だが、ベガ大王は鼻にも掛けない
「安心したぞベガ大王・・・これで心置きなく・・・お前を殺せる」
その口調は何時もの優しい宇門大介ではなく、故郷の星を破壊し、罪なき人々を苦しめ、多くの同胞を死に追いやった男を憎む男「デューク・フリード」に他ならなかったのだ
「ほざけ！今度こそ貴様を八つ裂きにしてくれるわ！」
そう言ってベガ大王が指揮を送る
すると無数のベガ獣や円盤獣達が一斉に襲い掛かる
「来い！一匹たりともあそこへは行かせないぞ！」
グレンダイザーとスペイザー達も迎え撃つ

＊＊＊

機動六課とダイナミックチームの戦いを兜原蔵は剣造と共に見ていた
「ククク、愚かな奴等だ。勝てないと分かっておきながら無謀にも戦いを挑むとは」
原蔵はまるで必死に戦う一同をあざ笑うかのように言った
「もう諦めたらどうですかお爺さん。貴方には万に一つの勝ち目も無いのでは？」
「勝ち目がない？何を馬鹿な事を言ってる。ワシにはこのデビルマジンガーが居る。今奴等を皆殺しにしてくれるわ」
そう言って場面を映す
其処には正に数万とも言える数のデビルマジンガーが集結していた
そして、その集結していた地点には既に瓦礫の山と化した町があった
「フハハハハ、行けぃ、デビルマジンガー達よ！行って愚かな人間どもを血祭りにあげて来い！」
原蔵の言葉を受けて今正に飛び上がろうとしたその直後であった
突如デビルが一斉に天を見上げる
「何だ？どうしたのだ？」
訳が分からず原蔵も映像を天に向ける
すると其処には一体の巨大な魔神が天から降って来たのだ
降って来た魔神はデビルマジンガー達の居る真っ只中に落下する
凄まじい轟音と衝撃波、そして巨大なクレーターが出来上がる
「何だ？何が落ちてきたのだ」
デビル達もその落下物を不審に思い近づく
すると、砂煙の中から猛然と出てきた
それは巨大な二本の腕であった
太さはデビルと同じ、嫌少し大きい
そしてその巨大な腕でデビルの頭部を掴むとまるで果物を握りつぶすかのように簡単にデビルの顔を握りつぶしてしまったのだ
「な、なにぃぃぃぃ！」
それには驚く原蔵である

そして砂煙が晴れ、其処には一体の魔神が立っていた
「あ！あの魔神は・・・」
剣造は声を上げた
そう、そうなのだ
今目の前に現れ一体のデビルを容易く葬ったその魔神こそ、本物のZであり、最強にして最後のマジンガーなのだ
その名はこう呼ばれていた

『マジンカイザー』

次回予告

突然俺達の前に現れたマジンガー
そいつは圧倒的なパワーでデビルを叩き潰していきやがる
でもそいつには敵も味方もなかった
只見える者全てを破壊する破壊の化身だったんだ
奴は敵なのか？
それとも味方なのか？

次回「登場！魔神皇帝」

次回もこの小説にテイィィィィィィィィクオオオオオオオオオオフ！

発動、オペレーション『ダイナミックウォーズ』　その４（後書き）

次回はどうなるかはお楽しみにって事で

登場、魔神皇帝　その１（前書き）

今回は少し短めです

登場、魔神皇帝　その1

一体何だあれは？
兜原蔵は己の目を疑った。無理もない、無敵を誇っていたデビルマジンガーが今目の前で頭を握りつぶされたのだから
超合金ニューZを上回る超合金ニューZγで作られたボディをいとも容易く破壊する魔神。それが今目の前に居る魔神であった
黒と白を基調としたカラーリングに胸には巨大な赤い放熱板。そして顔にはマジンガーを思わせる角と特徴的な口があった。其処までは他のマジンガーやデビルと同じであった
だが、その手足は太く力強かった。まるで人間の筋肉のようなのだ。そして腕には螺旋状に線が浮き出ている。まるで弾丸のような腕だその腕には先ほど引き千切ったデビルの頭部が握られていた。その魔神は頭部を失くして動かなくなったデビルに開いていた方の手を置くとそのまま地面に叩きつけた
凄まじい轟音と振動が響き渡る。それだけであった。それだけにも関わらずデビルの装甲はひしゃげ折れ曲がり引き千切れグシャグシャになってしまった。もう完全にそのデビルは動かない。頭部を失くし機体もズタズタにされたのだから
動かなくなったと知ると魔神は持っていたデビルの頭部を自身の目の前でまるでトマトを握るかのように握りつぶしてしまった
それがほんの数秒前に起こった映像である。その魔神・・・マジンカイザーは動かなくなったデビルになど興味を示さずに回りに居るデビル達を睨む
不思議とデビル達がそのマジンカイザーを恐れているようにも見えた。それが原蔵には我慢ならなかった。機械が恐れる？馬鹿な！機械が、魔神が、デビルが恐れる筈がない！デビルこそこの世の最強の魔神！デビルこそ無敵の魔神なのだ！それ以上の魔神などある筈がない。あってはならないのだ

「えぇい！何をうろたえておる！相手は一体ではないか！さっさと片付けてしまえぃ！」
原蔵は叫ぶ。それを聞いてデビル達が一斉に咆哮してマジンカイザーに襲い掛かる。まず一体が鋭い爪を伸ばしてマジンカイザーに突き立てた。ガリガリと金属を引っかいた音がする。だが、それは全くの無駄であった。カイザーの装甲には傷一つついておらず、変わりにデビルの爪がなくなっていたのだ。それを見てデビルが叫ぶ。
痛みの叫びである
腕を抑えて痛みにのた打ち回る。そんなデビルの頭上にカイザーは自身の足を叩きつけた。グシャァと嫌な音を立ててデビルの頭部は潰れた。その後デビルの体が僅かに痙攣したがすぐに動かなくなったそれを皮切りに一斉にデビルが襲い掛かる
次々とデビルの拳がカイザーに叩きつけられる。だが、それも結果は同じであった。叩きつけたと同時にデビルの腕は潰れひしゃげ折れ曲がった。そして反撃にとカイザーの太い腕がデビルの頭部を吹き飛ばし、胴体に風穴を開け、体を二つに引き千切る
圧倒的、まさにそう呼べる光景であった。カイザー一体の為に数万も居たデビルの内半分が既に破壊されたのだ
「有り得ん・・・こんな馬鹿な事が・・・」
原蔵は信じられなかった。無敵を誇るデビルマジンガー軍団がまさか一体の魔神の為に壊滅的打撃を受けたのだから

＊＊＊

その現場ではデビルにより町を破壊された人達がデビルを破壊する魔神を見ていた
その魔神を見て人々は歓喜の声を上げる。口々に「英雄」や「救世主」と叫んでいる。だが、そんな人々を見下ろしたカイザーの目は明らかに異常であった
その目は真っ赤になっていたのだ。しかも本来マジンガーを操縦する筈のパイルダーは今カイザーの頭部には無い、つまり今カイザーは無人で動いているのだ
そして、カイザーの次の攻撃の矛先はその人間達に向けられた
カイザーはその巨大な足で人間達に向かって振り下ろした
人々は突如青ざめ蜘蛛の子を散らしたように逃げ出す
それをカイザーは追い掛ける。先ほどのデビルには目も暮れずにひたすらに町を破壊していくのだ
まるで破壊の神に取り付かれたかのようである
その証拠にカイザーの胸にはこう書いてあった
『魔』と・・・・・

登場、魔神皇帝　その１（後書き）

続きます

登場　魔神皇帝　その2

剣児は今鋼鉄ジーグに乗りバルバと共に竜魔帝王に挑んでいた
大きさはさほど変わってないがパワーが段違いなのだ。勿論竜魔帝王の方が勝っている
その一撃が全て必殺に匹敵しており迂闊に当たればそれこそバラバラにされてしまうのだ
剣児はどうにかその一撃をかわしカウンターでダメージを与えようと必死になっていた
だが、それは焼け石に水の状態であった。つまり余り効果が無いのだ
打撃だけでは決定打にならない。しかしかと言って技を出していれば隙が出来てしまいその隙に殴り倒されてしまうのだ
「どうした?その程度か鋼鉄ジーグ!」
竜魔帝王がニヤリとする
完全にこちらを舐めている証拠である
その仕草が剣児には溜まらなく癪だった
「野郎、望みどおり向かってきてやるぜぇ!」
その挑発に乗り剣児が飛び掛る
ジーグと竜魔帝王の腕が交差しあい激しい押し合いになった
だが、徐々にジーグが押されていく
やはりパワーの差が出てしまっているのだ
竜魔帝王はニヤリとする。反対に剣児は苦い顔をした
それだけパワー差が出てしまっているのだ
そんな竜魔帝王の首元にバルバが牙を突き立てた。だが、相も変わらず牙が通らない
恐ろしい強度を誇っているのだ
そんなバルバの頭部を竜魔帝王が掴みジーグに向けて投げ飛ばす
それを咄嗟にジーグは受ける
だが、其処に隙が生まれてしまった

「馬鹿め！隙だらけだぞ！」
竜魔帝王の言葉と拳が飛んで来たのはほぼ同時であった
その一撃を諸に食らいジーグとバルバは吹き飛ぶ。「ぐえっ」と剣児の苦痛の叫びが聞こえた
機体の各所から火花と電流が巻き起こる。かなり損傷したようだ。だが立てない程のダメージではない
そう確信してジーグは立ち上がる
「けっ、まだまだ勝負はこれからだぜ」
口元から流れた血を手の甲で乱暴に拭うと剣児は操縦桿を握る。そしてジーグは大地を蹴って竜魔帝王に向かっていった。バルバもそれに続く
それとほぼ同時刻、つばきとシグナムはヒミカが無限に放つハニワ獣と戦っていた
「つばき！あの時のように鋼鉄神になれないのか？」シグナムがつばきに問う。だが、それに対しつばきはかぶりを振る
「駄目なんです・・・鋼鉄神になるにはひろしさんの銅鐸が無ければなれないんです」
つばきの言葉にシグナムは愕然とした。今のままでは鋼鉄ジーグはなぶり殺しである。だが、もう一つの銅鐸が無い以上鋼鉄神にはなれないのだ
「余所見している場合なのかなぁ？」
その時、ヒミカがビックシューターに向かって一筋の雷光を当てる
黒い稲妻がビックシューターの左翼を貫き風穴が開く
「きゃぁ！」つばきが声を上げる。そのまま錐揉み状にビックシューターが落下する
「つばきぃ！」
剣児が叫び鋼鉄ジーグが駆け寄る。丁度落下寸前にジーグがビックシューターをキャッチする。しかしビックシューターは既に使い物にならない状態であった
「剣児・・・御免」

「気にすんな。それより早くジーグに乗れ」
「うん」
剣児はビックシューターからつばきをジーグに移す
移ったつばきが剣児の後ろに座る
「グハハハハ！これでビックシューターを失ったなジーグ。後は貴様を倒せばお仕舞いよぉ」
竜魔帝王が下卑た笑いを浮かべる。同様にヒミカも笑っていた
その回りには今もまだヒミカがハニワ獣を製造していく
その総数は既に百体は越えていた
「どうする？命乞いするなら助けてやっても構わんぞ？」
「舐めるんじゃねぇ！死んだってめぇらなんかに命乞いするかよ！」
「私達は何時だって勝算のある戦いをしてきた訳じゃないわ！でも、それでも私達は勝ってきた！今までも・・・そしてこれからも！」
剣児とつばきが叫ぶ。するとジーグの額に銅鐸の光が浮かび上がる
「こ・・・この光は！」
「な、何だ！」
その光にヒミカや竜魔帝王は勿論、シグナムや剣児やつばきも驚いていた
だが、操縦桿を握っていた剣児や乗っていたつばきには分かった。
これは自分達に力を与えている光だと言う事を
「剣児！今なら」
「あぁ、やれるかもな・・・こぉい！バルバァァァ」
剣児が叫ぶ。それに呼応しバルバが咆哮してジーグに向かって来た
そして剣児とジーグが同時に腕を交差して叫ぶ
「ビルドォォ、アァァァァァップ！！」
眩い光がジーグとバルバを包み込む。そして光が晴れた時、其処には白き鎧を身に纏った『鋼鉄神』が居た
「まさか・・・司馬宙の銅鐸なしで鋼鉄神になれただとぉ！」
それにはヒミカも驚かされた

「なれた・・・鋼鉄神になれた！」
「凄い・・・宙さんの銅鐸なしで鋼鉄神になれるなんて」
つばきは驚いていた
鋼鉄神になるには二つの銅鐸が必要なのだ
なのにそれなしで鋼鉄神になったのだ
驚くつばきに剣児が笑っていった
「忘れたのかつばき、俺達前にもこうやって銅鐸を作ったじゃねぇか」
「あ」
その一言でつばきは思い出した
あの邪魔大王国との最終決戦の際に剣児とつばきは新たに銅鐸を作ったのだ
そう、二人の力が不可能を可能にしたのだ
その前では竜魔帝王が笑みを浮かべていた
「フフフ、なるほど、それがヒミカを敗北に導いた鋼鉄神なのか」
竜魔帝王の顔には恐怖など微塵も感じられない
寧ろ喜んでいるのだ
強敵に出会えた。その喜びに打ち震えていたのだ
「へ、今からそのニヤケ面をボコボコにしてやるぜ！」
鋼鉄神と一体になった剣児が指差す
すると竜魔帝王は腰に挿してあった剣を抜き放つ
「ほざけ！その前に貴様を八つ裂きにしてやるわ」
「あぁ、汚ぇ！こっちは丸腰なんだよ！」
「知るかぁ！戦いに綺麗も汚いも無いわぁ！」
吠えながらの一撃が鋼鉄神を襲う
しかしそれを間一髪でかわす
その後の二撃、三撃も間一髪でかわす
だが余りに素早い為反撃が出来ない
そう思っていた時であった
「剣児、使え！」

そう言って上空に居たシグナムが自身のデバイスを投げてきた
それを鋼鉄神の手で受け取る
だが、分かってると思うが鋼鉄神は小さいとは言え１０ｍはあるのだ
その為レヴァンティンは鋼鉄神の手にスッポリと収まった
「し・・・シグナムさんよおおおおおおお！こんなちんまりした
剣でどうしろって言うんだあああああああ！」
「・・・・・・」
剣児は叫びシグナムは黙り込んだ
恐らく考えなしに放り投げたと思われる
だが、その刹那鋼鉄神の握っていたレヴァンティンが輝いたと思う
と瞬く間に鋼鉄神が使える大きさになったのだ
今ではしっかりと鋼鉄神の手でレヴァンティンの柄を握っている
「す・・・すげぇ！これなら互角でいけるぜ！」
「小癪なぁ！」
怒りの形相になった竜魔帝王と鋼鉄神の剣がぶつかりあう
その上空では鞘のみを手にシグナムがハニワ獣と戦っていた
だが、戦力は一人になるのに対しこちらはヒミカがいる以上無限に
沸いてくるのだ
これでは何時か倒されるのは目に見えている
「フン、待っていろ竜魔帝王、こいつを血祭りに上げた後に貴様と
共に憎き鋼鉄神を叩き潰してやる」
ヒミカがそう言う
「そうは問屋が卸さないぜ」
「！！！、その声は」
声に気づき空を見上げた
其処には
「チェンジサイボォォォォォォォォグ」
両手を胸の前で合わせた叫ぶ
激しいスパークが起こり閃光が包み込む
そしてその中に現れたのは赤い肉体を持ったサイボーグ戦士であった

「貴様・・・司馬宙！何故此処に」
「忘れたのかヒミカ！邪魔大王国のあるところ鋼鉄ジーグありだ！」
サイボーグ宙がヒミカを指差す
するとそれに続いて現れたのは
「ビルドエンジェル！参上」
三機の小型戦闘機であった
それを見た剣児が驚く
「や、柳生さんか！」
「そうよ」
「随分とやられてるじゃないのか？」
「ハン、まだまだガキって事だな」
「げぇ、お前等まで居るのかよ！柳生さんだけで充分だってのによぉ」
剣児は嫌そうな顔をした
それもそうだ
ハッキリ言って剣児は柳生隊長以外の二人にはロクな目にあってないのだ
「剣児くん、上空の敵は私達に任せて」
隻眼の美しい女性である柳生充子が剣児に言う
「その大馬鹿野郎に鋼鉄神の力を思い知らせてやりな」
黒い長髪でキツイ目つきをした女性身堂竜子がそう言った
「負けたら承知しねぇからな！気張って行きやがれ！」
筋肉質で一際大きな女性である早乙女門子もそれに加わった
「剣児！ヒミカは俺が倒す！お前は竜魔帝王を倒せ！」
「行くわよ、宙さん！」
「頼む、ミッチー！」
旧ビックシューターに乗った美和が頷き各ジーグパーツをシュートする
その斜線にはサイボーグ宙がいる
「鋼鉄・ジィィィィィグ！」

そう叫び宙の体は瞬く間に鋼鉄ジーグの頭部になる
其処にパーツが集まり合体し、一体のロボットになった
「ビルドォォォアアアアアアアップ！」
諸手を天に翳して咆哮する
此処に二体の鋼鉄ジーグが現れたのだ
「あれは・・・１０年前の・・・」
シグナムは突如現れた鋼鉄ジーグを見て１０年前の戦いを思い出した
壮絶な戦いであった
そして、今回の戦いはそれ以上の戦いを思わせるものでもあったのだ
「しっかしこの世界はどうなってんだぁ？生身で人間が空を飛ぶなんて信じられないぜ」
早乙女が空を飛んでいるシグナムを見て信じられない顔をしていた
「さぁな、世界が違えば文化も違うという事だろう」
身堂は冷静にそう言う
「無駄口はそれまでよ、それより各自ハニワ獣を撃破するわよ」
「「了解！」」
二人は頷き各自でハニワ獣を攻撃した
それを見て剣児がニヤリとする
「ヘッ、竜魔帝王！どうやら俺とテメェのタイマン勝負みてぇだな」
「元よりそのつもりよ！覚悟しろ！鋼鉄神」
「覚悟するのはてめぇだ！竜魔帝王」

登場、魔神皇帝　その3

一方、こちらでは真ゲッターロボとゲッターロボ號とアリシアの三人が巨大な怪物となった二大皇帝を相手に戦っていた
その姿は正に醜悪としか言い様が無いのだ
正に体中に顔、顔、顔がついているのだ
それもどれも見た事のある顔である
それもそうだ、皆かつて元居た世界で竜馬達が倒した敵の顔なのだからだ
「フフフ、待っていたぞゲッターロボ」
「帝王ゴール、それにブライ大帝！お前達が何故この世界に居るんだ？」
竜馬は叫んだ
それは怒りでもあった
かつて多くの友や愛した人達がこの二大皇帝の歪んだ欲望の為に犠牲になったのだ
その怒りが彼を突き動かしていた
それを感じ取ったのか二大皇帝は微笑んでいた
「知れた事よ、機鋼王様が我等の脳を隠していたのだよ。管理局最高指令と言う隠れ蓑になぁ」
「何！」
「ククク、奴等も間抜けな事よ。自分達の上に立つのが敵であることも知らずに我等の命令に忠実に従う・・・見ていて実に愉快であったぞ」
「ケッ、胸糞悪い話だぜ」
「自分もそう思います」
不快そうな顔で隼人と凱が言う
その通りである
今目の前に居るのは最早帝王の風格など微塵もない只の化け物であ

った
「もう我等の悲願などどうでも良い。只ゲッターロボ！貴様をこの手で葬る事のみが望みよ」
「冗談じゃねぇや！あんな化け物にやられたんじゃ武蔵先輩にあわす顔がねぇってもんだぜ」
「その通りだ！俺達は絶対に負ける訳にはいかないんだ！」
弁慶の言葉に頷く竜馬
「やろうよ竜馬さん！あんな化け物をこのままにしてたらミッドチルダが危険になるよ」
「そうです。それに此処で負けたら管理局の同僚達に合わせる顔が無いってものですよ！」
「ああ、奴は俺達の手で成仏させてやる！行くぞぉ！！」
竜馬が叫ぶ
それと同時に肩からトマホークを出して一気に距離を詰めて切りつけた
肩から一気に斬られる
ドス黒い鮮血が噴水のように飛び出る
だが、それもすぐに修復された
「何！」
「無駄無駄無駄ぁ！」
ゴールが叫ぶ
するとその直後化け物の体中から無数のトゲが放たれる
真ゲッターはかわそうとするも間に合わず全身にトゲが刺さる
「グゥッ」
竜馬が苦悶の声を漏らす
全身まるでハリネズミのような状態なのだ
「まだまだ、次はこれだぁ！」
続いて叫んだのはブライ大帝であった
ブライの立派な角が光る
すると刺さっていたトゲが一斉にスパークし激しい電撃が真ゲッタ

ーを襲った
「ぐわあああああああああああ！」
三人は悲痛の叫びを上げた
そしてそのまま重力に従い落下した
落下した真ゲッターから煙が湧き上がる
電撃の影響でもある
「グハハハハ！脆いものだなぁゲッターロボよ！この姿のわし等は無敵よぉ！今こそ積年の恨みを晴らしてやる」
化け物がゆっくりと迫る
だが、真ゲッターとて何時までも寝ている訳では無い
再び二本の足で立ち上がり空に舞い上がる
「貴様等の恨み事に付き合う気は無い！これで終りにしてやるぞ。ゲッタァァァビィィィィィィム！！！」
真ゲッターの腹部のレンズから桜色のビームが放たれる
それは真っ直ぐに化け物に向けて放たれる
だが、それを受けても化け物はのけぞる様子すら見せて居ない
何故か、答えはすぐに分かった
「ビームを・・・吸収してる」
そう、その化け物は真ゲッターから放たれるビームを吸い取って自分のエネルギーにしていたのだ
直ぐにビームを止める
すると化け物はみるみる巨大になってしまった
以前よりはるかに大きい
恐ろしい成長である
「グフフフ、かつては恐れていたゲッター線も我等には効かぬわ」
ゴールが微笑む
「そうら、返すぞ」
するとゴールの口から先ほど放ったビームの数十倍の威力を誇るビーム砲が放たれた
それを直撃で受けて吹き飛ぶゲッターロボ

「グハァ！」
そのまま地面にたたきつけられてしまった
装甲の各所がボロボロになっていたのが分かった
「くそぉ！」
「おいリョウ、チェンジ出来ないのか？」
「無理だ弁慶！２や３じゃ相手にならねぇ」
弁慶の言葉に苦虫を噛むように隼人が言う
２と３の武装では今の二大皇帝に打撃を与えられないのだ
それを知っていたから隼人は言ったのだ
最早望みはゲッター１に託すしかないのだ
「すまん、隼人・・・弁慶・・・お前等を巻き込んじまうみたいだな」
「フッ、何を今更」
「俺達は死ぬまでゲッターチームだぜ」
謝罪する竜馬に二人はそう言った
それを聞いて竜馬の顔がパッと明るくなった
「よし、ならば行くぞ！」
再びトマホークを構えてゲッターが飛び上がる
「無駄だと言っただろう」
そう言って巨大な腕を振り下ろす
しかし、その腕をゲッターのトマホークが切り裂く
鮮血が飛び散りくるぶしが地面に落ちる
「うおおおおおおおおおおお！」
竜馬が咆哮してトマホークを上空に掲げて振り下ろした
目指すは二大皇帝のいる頭部である
しかし、その突如真ゲッターに衝撃が襲い掛かった
なんと先に切り落とした腕が一人でに動き真ゲッターを掴んだのだ
物凄い力で締め上げる
装甲が軋みヒビが入りだす
「竜馬さん！この野郎！」

「竜馬さんを放せぇ！」
その腕にゲッター號とアリシアが攻撃を当てる
その為に腕を放してしまう
そのまま地面に落下するゲッター
「大丈夫ですか？竜馬さん」
「あぁ・・・この位ならすぐに修復できる・・・だが」
言葉の途中で竜馬は目の前にいる二大皇帝を見た
強い・・・強すぎる・・・
それが率直な感想であった
正直このまま戦っていればいずれは倒されてしまうのは明白であった
「こうなったら・・・翔、凱、あれを使うぞ」
號はそう言って立ち上がる
「まさか、止めろ！號あれはまだ調整中なんだぞ」
隼人が叫ぶ
竜馬と弁慶は何の事なのか分からずに口を挟まなかった
「何なの？隼人さん」
「あれは・・・ゲッター號の最終兵器でもあるが・・・まだ完全に使いこなせる訳じゃない・・・下手すりゃ機体がもたないぞ」
「覚悟の上ですよ」
號はそう言う
そしてゲッターは両手を胸の前で合わせる
するとその間に白い閃光が集まりやがてそれは巨大な斧剣となる
「あれって・・・トマホーク？」
「そう・・・聖剣ソードトマホーク・・・だが、あれは今のゲッターでは制御しきれない代物だ」
アリシアの後に隼人が言う
「どう言う事だ？」
「あれは言わばエネルギー剣だ。実体がないんだ。だから殆どゲッターのエネルギーで賄わないとならない。プラズマエネルギーのゲッターには出力が少ないんだ」

そう、エネルギー剣の弱点がそれであった
ゲッター號はプロトタイプとして作ったゲッターである
まだ中のエネルギーはプラズマ駆動の為真ゲッターのように無限に
動けるわけではないのだ
その証拠に號のコクピットではソードトマホークを出した為に警告
音が鳴り響いていた
エネルギーが底を付きかけているのだ
「頼む、もってくれゲッター！一撃で良いんだ」
祈るようにソードトマホークを握り締めて飛び上がる
そして真下に振り下ろすようにソードトマホークを振るった
二大皇帝はそれを腕で掴もうとした
が、その腕をまるで紙を切るかのように容易くきってしまったのだ
それには二大皇帝は愚か竜馬達も驚いていた
だが、其処までであった
頭部にまで届く前にトマホークは消え去ってしまったのだ
エネルギー切れである
そしてそれの指す先とは、言わずも知れた事実である
「くそぉ・・・後少しだったのに」
號が光を失ったコンソールを叩く
コクピットだけではない
ゲッター號の目から光が失った
機能が停止してしまったのだ
「グハハハハ！このわしに手傷を負わせたのは褒めてやる！その褒
美に一撃で葬ってやるわ！」
「そうは行くか！」
動かなくなったゲッター號に向かって拳を振り下ろそうとするのを
真ゲッターが腕で防ぐ
ゲッターの腕に亀裂が走る
装甲が悲鳴を上げ始める
それでも引き下がらない

それが竜馬の意地というものでもあった
「こんのぉぉぉ」
そんな二大皇帝の頭部に向かってアリシアのバルディッシュが空を切る
だが、それをブライ大帝の牙が咥えた
丁度白刃取りを歯でやった感じである
それも凄まじい力の為全く動かないのだ
そして、そのままブライはバルディッシュの光の刃を噛み砕いた
「その程度の力でワシを倒そうとは笑止なり！」
そういうと二大皇帝の背中から無数のトゲ型ミサイルが弧を描いて三人の元に降り注いだ
爆発と衝撃が響き渡り、その中で一同の悲鳴が出たが全てかき消された
やがて爆煙がやむと其処では二体のゲッターとアリシア達が地面に倒れていた
皆ボロボロである
特に真ゲッターに至ってはこの世界に来てから無理をしてきた為か既に限界がき始めていた
「フハハハハ！勝った！勝ったぞ！ゲッターに勝ったのだ！そうれ、トドメを刺してやるわ」
意気揚々と動かないメンバーに迫り来る二大皇帝
しかしそんな皇帝に突如彼方から砲撃が当てられた
それは桜色の閃光であった
それも一発ではない
何発も二大皇帝に降り注いだのだ
「い・・・今のは！」
「あれは・・・ゲッタービーム！」
そう、今の一撃は間違いなくゲッタービームであった
だが、真ゲッターは動けない
では一体誰が放ったのか

その答えはすぐに分かった
遥か上空の雲を突き破って現れたのは
巨大なゲットマシンを思わせる戦艦であった
しかしその大きさは桁違いであった
次元航行船の数十倍以上はありそう・・・嫌、それ以上を思わせた
そしてその顔は何処かゲッター1にも見えた
「待たせたな、ダチ公」
「そ、その声は！」
其処から聞こえたのはもう聞けないと思っていた声であった
かつて友に戦った仲間であり、こうして自分達が生きていられるきっかけを作ってくれた掛け替えのない友
「その声・・・お前、武蔵なのか！」
「おうよ！約束どおり助けに来てやったぜ！野郎ども！出番だ」
巨大なゲットマシン「ゲッターエンペラー」に乗っていた武蔵がそう叫ぶ
すると其処から数機のゲットマシンが飛び立ち空中で合体を終える
その姿は多種多様なゲッターであった
『ゲッター軍団、見参！！！』

登場、魔神皇帝　その４

闇の帝王を睨むようにグレートとビューナス、そしてなのはは対峙していた
部屋には固定されているヴィヴィオと闇の帝王しか居ない
残りは此処に来る前に殆ど倒したのだ
「闇の帝王！残すはお前只一人だ！覚悟しろ！」
グレートが闇の帝王を指差す
だが、そんな状況であっても奴は笑っていた
「ほざけ、貴様等こそ飛んで火にいる夏の虫よ。此処はワシの手のうちなのだ！すなわち貴様等はワシには勝てん」
「そっちこそほざけ。たった一人で何が出来る！今度こそ貴様との因縁を断ち切ってみせる！」
「闇の帝王！ヴィヴィオは返して貰うわよ！」
「フン、炎ジュン、貴様もワシの野望を打ち砕いた憎き存在よ。この手で捻り潰してやる！」
そう言ったのだ
それを聞いた時、鉄也はふと疑問に思った
どういう事だ？こいつには向こうの記憶があるのか？
でなければジュンを知っているはずが無い
そう思えたのだ
しかし、そんなことはどうでも良い
今すべき事はこいつを倒して娘（ヴィヴィオ）を救い出す事である
「行きましょう！鉄也さん」
隣にいたなのはが鉄也の乗るグレートにそういう
それを聞いて鉄也が頷く
「ばかめ！この中ではワシの力、サイコパワーが充満しているのだ！貴様等は今からワシの力の前に朽ち果てるが良い」
勝ち誇ったかのように言う

するとその闇の帝王の背後から漆黒の闇が迫って来た
それは瞬く間に三人を包み込んだ
辺りは真っ暗で何も見えない
「何処だ！何処に居る闇の帝王！」
回りを見回して叫ぶ
だが返事は帰ってこない
「鉄也、これって」
「奴の力だ、皆離れるな！」
一同は一箇所で固まった
すると目の前に見覚えのある者が現れた
下半身が虎となっている化け物であった
「貴様、ゴーゴン大公！」
「死ね、死ねグレートマジンガー」
その目は血走っていた
そして明らかに冷静さを欠いておりこの一言を繰り返していた
そして暗き影から無数の戦闘獣が現れた
全てかつてグレートとビューナスが倒した敵である
「ちっ、亡霊を蘇らせるとは趣味が悪いぜ」
舌打ちしながらグレートが剣を取り出して切り裂く
目の前に居た戦闘獣は真っ二つにされる
だが、その後怒涛のように戦闘獣がせまり来る
何時しか混戦状態になった
「死ね、死ね剣鉄也ぁぁぁ！」
ゴーゴンが更に怒声を上げる
戦闘獣達が一斉に押し寄せてくる
「鉄也さん、これって幻じゃないんですか？」
「いや、そうともいえない。見ろ」
そう言うグレートの腕には先ほど攻撃された跡が残っていた
恐らくこれは闇の帝王が作り出した空間なのだろう
即ち此処ではダメージを受ければそのまま傷がつき最悪死んでしま

う可能性もあると言うのだ

＊＊＊

皆一体どうしたの？
ヴィヴィオの前ではグレート、ビューナス、なのは達が何もない部屋で切り切り舞いを踊っていた
しかもその体には徐々に傷が増え出していた
なのはも白いバリアジャケットが徐々に鮮血で汚れてきたのだ
「フフフ、間も無くこいつらはワシの力で倒れるわ」
「そんな・・・パパ・・・ママ・・・」
ヴィヴィオの目に涙が浮ぶ
すると突如闇の帝王がヴィヴィオを見た
「貴様にもワシの力で地獄を見せてやるわぁ！」
そう言うとヴィヴィオもまた視界が暗黒に包まれる
するとその足元に無数の手が伸びてきたのだ
「ヒッ！」
恐怖のあまり声を上げる
その腕が一斉にヴィヴィオを掴み沈めようとする
必死にもがくも力の差が有り過ぎて抵抗にもならない
そのまま最初は足だけであったのが徐々に腰まで沈み出していた
このまま死んでしまうのだろうか
今まで一人ぼっちだったのが父と母を得て多くの友達も出来たなのにこんな死に方は嫌だ

そう思ったとき、ヴィヴィオは大声で泣き叫んだ
「嫌だ、いやだあああああ！死にたくないよ！助けて、たすけてえええええええええええええ！パパアアアアアアアアアアアア！ママアアアアアアアアア！」
大粒の涙を浮かべて叫ぶ
だが、それでも誰も助けに来ない
やがて胸から上まで沈み後は顔を沈ませれば終りと言う所まで来ていた
そして彼女の面前に無数の手が襲い掛かる
正にその刹那であった
そんなヴィヴィオの前に一本の巨大な槍が振り下ろされたのだ
その槍の一撃を受けた無数の手は忽ち消滅し、ヴィヴィオの視界も漆黒の闇から神々しい光の空間へと変わっていた
誰？一体誰が助けてくれたの？
そう思い振り返った
其処には紫のマントを羽織り黄金の鎧を身に纏った巨大な神を思わせる風格をもった巨人であった
「貴方は・・・貴方は一体・・・」
擦れるような声でヴィヴィオは聞いた
するとそれを聞いた巨人はゆっくりと振り返った
其処にはマジンガーの頭部を思わせる兜を被った巨人の顔があった
人間を思わせる顔であった
太い眉毛に大きな目
そして自信に満ちた顔つき
全てが偉大な神を思わせる顔立ちをしていた
そしてその巨人が眼下のヴィヴィオに向かって優しく微笑んだ
「私か・・・私は全知全能なる者、君達を守る者。我が名はゼウス・・・しかしてその実体は・・・「Ｚマジンガー」」
「Ｚ・・・マジンガー・・・」
「聖王の血を受け継ぎし娘よ・・・汝に問、汝は力を欲するか？」

「力が・・・欲しい！パパを・・・ママを、皆を守りたい」
ヴィヴィオは強く願った
その思いを聞いたZマジンガーは目を瞑る
「しかし、その力は時として汝の心を蝕むかもしれない・・・それに汝は耐えられるか？」
「分からない・・・でも、私は悪魔にはならない！私はその力で皆を守る！」
「そうか・・・ならば我が力を汝に託す」
「貴方の力を？」
「何時の日か・・・我と汝は共に戦う日が来る・・・その時また会おうぞ」
そう言うとゼウスは閃光に包まれる
そしてヴィヴィオの視界も先行に包まれた

＊＊＊

「グハハハハ、間も無くグレートの最後よ・・・その後はこの世界に住む愚かな人間共を抹殺し、こいつの世界に行き全てを破壊してやる・・・光子力研究所を・・・科学要塞研究所を・・・全て破壊してくれるわあああああああ！」
闇の帝王が下卑た笑みを浮かべる
その突如であった、凄まじい衝撃が闇の帝王を吹き飛ばした
「グエッ」
その一撃を食らい声を上げる闇の帝王

「な、今の力はワシと同じサイコパワー！だが、一体誰が！」
闇の帝王は驚愕し自分を蹴り飛ばした者を見た
其処には紺色の騎士甲冑を身に纏った金色の髪を片方で纏めた髪型をしており瞳は片方が違うオッドアイであった
「これが・・・あの人の・・・ゼウスさんの言ってた力・・・」
少女は変わった自分を見て驚いていた
そして、それは闇の帝王も同じであった
「おぉぉぉぉ！その力はやはり貴様だったのか！ゼウスよぉ！何処までもワシの邪魔をしおって！」
闇の帝王の炎が更に大きくなる
怒りに震えているのだ
蹴られたからじゃない
かつての敵に出会ったから怒っているのだ
そのせいで鉄也達に施されていた幻が消え去る
そして彼等の視界に再び元の部屋が映し出された
「こ・・・此処は！」
「鉄也、あれを見て！」
「む」
ジュンが指す方を見た
其処には玉座には既にヴィヴィオの姿が無い
変わりに先ほど闇の帝王を蹴り飛ばした美しい少女が居た
だが、その顔立ちや髪の色は何処かヴィヴィオを思わせた
「まさか・・・お前・・・ヴィヴィオか？」
「パパ！」
振り返り満面の笑みで鉄也を、グレートを見る
その顔はやはりヴィヴィオであった

＊＊＊

衛星軌道上でグレンダイザーと各スペイザー対ベガ星連合軍の激しい戦いが今も続いていた
「死ね、グレンダイザー！そしてデューク・フリード！」
「ベガ大王！僕はもう迷わない！この世界を救う為に貴様を倒す！」
ダイザーはそう言って肩からハーケンを取り出して要塞を切りつける
要塞に切れ味が入り爆発が起こった
しかしその直後に要塞から放たれた無数のレーザーがダイザーに当たる
「ぐあっ」
声を上げるデューク
直撃した箇所を見た
其処には本来ある筈の右腕が肘から無くなっていた
先の攻撃で蒸発してしまったのだ
恐ろしい威力である
まともに食らえば宇宙の塵になるのは確実であった
そう思っていると、ふとデュークの前のモニターに電源が入り映像が映った
其処にはベガ大王の姿があった
だが、その姿はかつての姿ではなく上半身だけになり巨大なカプセルに入れられその体には無数のコードが取り付けられていた
「ベガ大王！その姿は・・・」
「その通りよ！貴様を倒す為に機鋼王様がワシに今一度命を授けてくれたのよ！今度は貴様がワシと同じ地獄の業火に焼かれる番だ！」

ベガ大王の憎しみの篭った声が響く
だが、それで引き下がるデュークではない
「良いだろう。今度こそお前との戦いを終らせてやる！」

＊＊＊

此処クラナガンの市街では機動六課とミケーネ七大将軍との戦いが続いていた
「フン、人間にしては中々やるわ」
将軍達がそう言って笑う
だが、それに対して返し言葉を言える余裕は彼女達には無かった
正に接戦だったのだ
力は敵の方が僅かに上を行っている
その為油断すれば一気に持っていかれると思えたからだ
「ん？」
そんな中、スバルは戦いの場の中で一箇所だけ時空が歪んでいる場所を見つけた
そして、其処から無数の戦闘員が出てくるのが見えた
それも夥しい数である
「あれは・・・戦闘機人！」
トーレが出てきた戦闘員を見てそう言った
その通りであった
あれはナンバーズ達と同じ廃棄処分される筈であった戦闘機人達な

のだ
本来戦闘機人はケドラの栄養源として作られたがその戦闘力はかなりの者である
その為にこうして使われたのだ
それを見た時、彼女達の中に怒りが生まれた
例え作られた命であろうとそれをあのように使って良い筈がない
それに対する怒りである
そして、それをいの一番に見つけたスバルはある決意を固める
「ティア、私あの中に行ってみる」
「え？何で！」
「あの中にきっとあの子達を操ってる何かがある筈。だからそれを止めてくる！」
「そんな、危険すぎますよ！」
「お前、また死ぬ気なのか？」
エリオとノーヴェの二人が声を上げる
だが、それに対しスバルはかぶりを振る
「死ぬ気は無いよ。只あの子達をあのまま兵器として終らせたくないんだ。」
「だ、だけど・・・」
「分かった、此処は任せろ」
トーレはそう言った
「トーレさん！」
「恐らくあの中には私達戦闘機人を狂わす何かがある・・・それに常人では行ったとしてもまともに戦えない・・・魔神戦士のお前になら戦えるかもしれない」
「うん」
「しょうがねぇなぁ・・・足止めはしてやるから気張って行けよ！」
「絶対に生きて帰って来てねッス！」
「死んだら地獄まで行って殴っちゃうからねぇ」
皆が口々にそういう

その言葉を受けてスバルは頷き歪んだ時空の中に飛び込んだ
それとほぼ同時に表れた戦闘機人達が一斉に襲いかかってきた
「フン、何をする気か知らんが貴様等は此処で皆殺しだ！」
ドレイドゥの言葉を筆頭に七大将軍達も一斉に向かって来た

登場、魔神皇帝　その5

甲一とフェイトの二人はＤｒ．ヘルの操る地獄王ゴードンと戦っていた
「Ｋ－１よ、何故貴様はワシに逆らうのだ！」
Ｄｒ．ヘルが甲一に対してそう言った
かつては実の孫のように思えてきたＫ－１が突如自分に対し反旗を翻したのだ
それにＤｒ．ヘルは怒っていた
それに対して甲一に怒りは無かった
只、祖父を救いたい
そんな思いがあったのだ
「お爺ちゃん、もう止めよう。こんな事をしても無意味だ」
「無意味な物か！ワシの夢は世界を征服する事！それをせずに夢を諦めろと言うのか！」
「あんただって分かってるはずだ！世界征服なんてのが下らない夢だって事に」
「貴様あああああああ！ワシの夢にケチをつける気かあああああああああ」
怒りの形相がより一層激しくなる
そしてゴードンの口から猛烈な炎が吹き出た
ゴードンファイヤーである
「くそ！ブレストファイヤー！」
それを迎え撃つかのようにマジンガーの胸の放熱板から熱線が放たれる
二つの熱線がぶつかりあう
たが、打ち勝ったのはゴードンであった
ブレストファイヤーを撥ね退け熱線がマジンガーに当たる
「うわ！」

甲一は声を上げた
マジンガーが弾き飛ばされる
凄まじい威力である
ブレストファイヤーはマジンガーの最強の武器である
それを弾き飛ばしたとあってはもう他の武器では相手にならないのは明白であった
「はぁぁぁぁぁぁ！」
其処へフェイトがバルディッシュをザンバーフォームにして切りかかった
だが、その一撃をゴードンの片腕がいとも容易く防いだのだ
そしてもう片方の手を大きく広げて上空に居たフェイトを掴み上げる
「あぐ」
フェイトが声を出す
そしてそのまま掴んだ腕をぐっと顔に引き寄せる
「小娘、貴様さえ居なければＫ－１はワシの孫であったのだ！貴様さえ居なければ・・・貴様さえ・・・」
Ｄｒ．ヘルが憎しみの篭った顔でフェイトを睨む
だが、フェイトもそれで怯みはしない
キッと強きな目でＤｒ．ヘルを睨む
「違う！まだ甲一くんは貴方の孫だよ！貴方がそれを見ようとしてないだけだよ！ちゃんと見て、貴方のことを慕っている甲一くんが居る筈だよ！」
「知った風な口を聞くなぁ！」
怒声を上げてフェイトを握りつぶそうとした
しかしその前に甲一の操るマジンガーが腕に一撃を当ててフェイトを自由にした
「大丈夫か？」
「なんとかね」
甲一の言葉にフェイトは頷いて再び距離を置く
「おのれ・・・おのれえええええええええ！」

「お爺ちゃん、俺はもう迷わない！あんたがその夢を諦めないなら俺は全力であんたを倒す！」
「ほざけ！サイクロンファイヤアアアアアアアア！」
ゴードンの体から炎を纏った風が吹き荒れる
その一撃は甲一のマジンガーとフェイトを包み込んでいく
風の中で二人はクルクルとまるで落ち葉のように舞う
そして、その中で二人の体は徐々にボロボロになっていく
「く、この・・・野郎が！」
「私達は・・・絶対に・・・負けない！」
二人はそう叫んでサイクロンファイヤーを振り払った
その時、甲一のマジンガーは黄金色に輝いていた
「野郎・・・大丈夫か？フェイト・・・」
甲一はフェイトの方を見た
その時、フェイトはサイクロンファイヤーを振り払う為に最終形態である「真ソニックフォーム」になっていた
分かる人は分かると思うがこの形態は機動性を重視した為に出来る限り騎士甲冑を薄くしたのだ
その為今のフェイトの格好は黒のレオタードを思わせる格好であり言ってしまえばスタイルが出まくりなのだ
それを見た時、甲一は目を大きく見開いて思考が停止していた
「どうしたの？甲一くん」
フェイトは甲一の様子の変化に気づいて甲一の方を見た
甲一のZは微動だにしない
変に思ったフェイトはモニターを開き中の甲一を見た
其処では甲一はフェイトの方を見て目をまん丸に開いて血走った目で見ており、そして鼻からは鼻血が出ていた
「！！！！！！」
それを見て今自分の格好が少し恥ずかしいと今になって気づいたフェイトであり顔を紅く染めていた
「わ、わりぃ」

急ぎ甲一は指で鼻血を拭う
どうやら甲一にはフェイトのその姿は刺激が強すぎたらしい
「フン、どの様な姿になろうともワシには勝てんわ」
良い雰囲気になってる二人の世界をぶち壊すかのようにＤｒ．ヘルの乗ったゴードンの一撃が襲い掛かる
しかし甲一のＺはそれを両手を使って払い除けフェイトは目にも留まらないスピードでそれを避ける
さながら光であった
光の速さでゴードンに次々と一撃を浴びせていくフェイト
ゴードンの体には気がつけば無数の傷がついていた
「お・・・おのれえええ！」
ゴードンが必死に手を振るもそれは徒労であった
光のスピードで動くフェイトにゴードンの腕は掠りもしないのだ
そして更に其処へ上乗せするかのように甲一のＺがゴードンの頭上に現れる
「さっきのお返しだ！食らいやがれえええええええ！」
甲一が叫ぶ
そして出力全開のブレストファイヤーがゴードンの顔面を吹き飛ばした
すると其処から青い炎で燃え上がるＤｒ．ヘルが現れる
「おのれＫ－１！！！」
怒りの眼でＺを睨む
するとその体に纏っていた炎が唸りを上げてＺのパイルダーに直撃する
「ぐあっ！」
甲一は声を上げた
その声を聞いてフェイトがパイルダーの付近に近づく
「大丈夫？甲一くん」
「あ・・・あぁ・・・と、言いたいが・・・」
そう言ってる甲一の右腕は血まみれで動けない状態であった

これでは満足にZを動かせない
そう思ったフェイトは自身もパイルダーに入りそっと甲一に寄り添って右の操縦桿を握る
その際にフェイトの胸が甲一の肩に押し当てられていたのは事実であり
「ふぇ、フェイトさんんんんん！！！」
明らかに動揺しまくりの甲一であります
「甲一くん、私が甲一くんの右手になるよ。だから一緒に戦おう」
「フェイト・・・有難うよ。よっしゃぁ！んじゃトドメはあれで行くぜぇ！」
「うん！」
甲一の言葉にフェイトは頷く
するとZは空高く舞い上がりそして弧を描いて真っ直ぐゴードンに向かって来た
そしてその姿を巨大な拳に変える
「ビックバンパンチか！小癪なぁ！」
ゴードンが持っている武装全てをビックバンパンチにぶつける
その一撃一撃が当たる度に装甲に徐々に亀裂が走り装甲が剥がれ落ち爆発が起こる
だが、それでもZは減速しない
それどころか益々スピードを上げていた
そして、その一撃はゴードンを腰の辺りから真っ二つにしてしまった
「ば・・・馬鹿な・・・この無敵を誇る地獄王ゴードンが・・・敗れたのか・・・」
Ｄｒ．ヘルは驚愕した
そして倒れるゴードン
だが、それはZも同じであった
ビックバンパンチを放った後のZは変形を解くとそのまま螺旋を描くように地面に落下した
砂煙が上がった

それが晴れると其処には目の光を失い微動だにしなくなったZが居た
その体はあちこちがボロボロでありゴッドスクランダーも殆どボロボロの状態であった
マトモに動きそうにもない
そして、それは中のフェイトと甲一も同じであった
「くっそぉ・・・腕一本動かないとはこの事か・・・」
動かない体を見て甲一が呟いた
今の甲一に出来ることと言えば首を動かすくらいである
体中の損傷が酷く特に右腕は重傷であった
ヘルメットの下では出血したのか額から血が流れていた
ふと、甲一は隣に居るフェイトを見た
隣では同じように衝撃を受けてボロボロのフェイトが居た
しかしこちらの場合は気を失っており返答も出来ない状態であったが
「気絶したのか・・・そう言えばお爺ちゃんは」
甲一は僅かに動く首を必死に動かして見た
其処にはすっかり青の炎が消え去り元の筋骨隆々の体つきに戻ったDr.ヘルが居た
「お・・・お爺ちゃん」
「フフフ、ワシもすっかり甘くなってしまった者よ・・・よもやこの手で貴様を殺す際に迷いが生じてしまうとはな」
其処にはとてもDr.ヘルの口から出たとは思えないセリフが出てきた
「お爺ちゃん！」
「フフフ、K－1・・・いや、兜甲一じゃったな・・・これから先は貴様の人生よ・・・貴様の好きに生きるが良い」
そういうと突如Dr.ヘルの足元が崩れ出した
その下は真っ赤な溶岩が溢れていた
「お爺ちゃん！逃げてくれ！」
「フッ、この体元は死んだ体よ。最早命など惜しくない・・・甲一よ・・・ワシの分まで生きるが良い」

そう言い終わるとＤｒ．ヘルはまっさかさまに溶岩に向かって落ちていった
「お・・・お爺ちゃん・・・」
甲一の目に涙が浮かび上がった
例えさっきまで戦っていたとは言え元は自分を作り出した祖父に他ならないのだ
いわば家族であったのだ
その家族がこうして死んでしまったのは甲一にはショックであったかくして、兜甲一を作り出し世界征服に燃えた科学者Ｄｒ．ヘルは最後に孫の甲一に未来を託しその生涯を終えたのであった
もし、彼が道を誤らなければ枯れはきっと兜博士と肩を並べる程の科学者になっていたであろう
しかし、戻しようのない現実は甲一の前に起こっていたのだ
だが、今の甲一に失意の底に沈む暇などない
今の甲一には守るべき者が出来たからだ
（フェイト）
甲一は側で気を失っているフェイトを見た
自分がコイツを守ってやらないといけない
そう思えたのだ

登場、魔神皇帝　その6

甲児はシュラの猛攻を受けていた
シュラの持っていた剣はどんな装甲も切り裂く超振動の剣なのだ
その為甲児の体を守っていたスーツをもいとも容易く切り裂いてしまうのだ
その証拠に甲児の右腕にはパックリとスーツを切られた跡が残っていた
幸い体は切られておらずスーツだけに留まっていた
「フハハハハ！死ね兜甲児！愛する女の前でバラバラに切り刻まれるが良い」
「冗談じゃねぇ！こんな所で死んで溜まるかよ！」
バックステップでシュラの斬撃をかわしそのまま甲児は腕から光子力ビームを放った
だが、それをシュラが手を翳しただけで防いでしまったのだ
「なにぃ！」
「馬鹿め、私の切り札はこの剣だけではない！私の体自身も以前とは違うのだ」
「どう言う意味だ！」
「これを見ろ！」
シュラは両手で自分の服を開いて中を見せた
其処には機械で作られた体があり、その中央には赤く輝く宝石が収められていた
「その宝石は！！！」
「ホホホホ。そう、レリックよ」
女性の声でシュラがそう言った
その顔は狂気に満ちている
「このレリックは素晴らしいわ。何しろ力が湧き上がってくるのだから。こんな風にねぇ」

嬉しそうに言いながら剣を横薙ぎに振るう
すると剣の先から衝撃波が現れ真っ直ぐに甲児に迫って来た
「うお」
身を屈めてその一撃をかわす
後ろの壁一面が砕ける音がした
ゾッとする思いがした
同じ攻撃を食らえば胴体が真っ二つになるのは間違いない
「フハハハハ、死ね！死ね兜甲児ぃぃぃ」
今度は男の声でシュラが言う
そして勝ち誇ったかのように剣を真上に振り上げて真っ直ぐ振り下ろしてきた
「舐めるなぁ！」
甲児は叫び振り下ろされた剣を両手で挟み込んだ
白刃取りである
だが、超振動する剣の為掴んだ手から血が吹き出る
甲児の顔が苦悶に歪む
「無駄な事を！直に手が砕けて貴様は真っ二つよぉ」
「だったらその前にてめぇが離しやがれぇ！」
剣を掴んだまま甲児はシュラを蹴り飛ばす
その一撃を食らいシュラは思わず剣を手放して吹き飛ぶ
甲児は剣を空中で回転させて柄を握り締める
「お前が使ってた剣ってのは気に入らないが使わせて貰うぜ」
「小癪なぁ！」
シュラが叫び延びた爪を伸ばして迫って来た
だが、それよりも早く甲児の剣がシュラの胸を・・・レリックを刺し貫いた
「ガハッ！」
「へへ、流石超振動の剣だぜ・・・ロストロギアもパックリといけるとはよ」
「おのれ・・・おのれ・・・兜甲児・・・」

「てめぇの恨み言なんざ聞く耳持たねぇぜ」
甲児はパッと剣を手放す
すると剣はそのまま床に突き刺さりその上でシュラは串刺しの状態になった
百舌のはやにえを思わせる光景である
甲児はなるべくそれを見ないようにしてさやかの元へ向かう
「大丈夫かい？さやかさん」
「甲児くん。やっぱり来てくれたのね」
「当たり前だろう。どんな時でも必ず助けに来るのが俺だぜ」
自身有り気に甲児が指差す
そして拘束を解く
するとさやかは突然甲児に抱きついた
「どわっ、さ・・・さやかさんんんん。嬉しいのは分かるけどいきなりそれはちょっとハードル高くない？」
「ずっと・・・ずっと信じてた・・・甲児くんが絶対助けに来てくれるって」
甲児は言葉を止めた
さやかの目に涙が滲んでいたのだ
それを見ると下手な言葉などで無くなってしまったのだ
ホホを掻いて恥ずかしさを紛らわす
「さ、早くこんなとこ出ようぜ」
「うん」
二人は急いでやってきたバイクの元へ走る
だが、その時であった
「うお！」
「きゃ！」
突如辺りを衝撃が襲い掛かった
爆発である
何者かがこの基地を攻撃しているのだ
「畜生、こりゃ急がねぇと生き埋めだぜ」

急いでバイクの元へ向かうが、そのバイクは突如天井から降り注いだ瓦礫の山に埋もれてしまい大破してしまった
「しまった！これじゃ出られねぇ」
「甲児くん」
万策尽きたかと思われた
だが、その時奴はやってきた
「兜ぉぉぉぉ！」
「あの声！」
「まさか」
この聞き覚えのある声を聞いて二人は顔を合わせた
すると壁をぶち破ってやってきたのはボスボロットであった
「いえーい、正義の味方ボスボロット参上だぜぇ！」
「ボス！良い所に来てくれたぜ」
ナイスタイミングとはこの事であった
二人は急ぎボロットに乗り込む
其処にはボス、ヌケ、ムチャの三人が操縦していた
「しかしボス、お前何で此処に来たんだ？」
「へ、女将に頼まれてお前に届け物をしに来たんだよ」
「俺に？」
「兜、それよりこれを見ろ」
ボスは小型テレビを甲児に手渡す
甲児はそれの電源をつけて映像を見る
其処には多くの仲間が戦っている映像が映し出されていた
グレートが、ゲッターが、ジーグが、ダイザーが、そして機動六課のメンバーが皆戦っていた
だが、旗色は悪い
敵の数が多い上にどれもかなり強い敵ばかりなのだ
だが、それ以上に甲児が驚いたのがこの映像であった
それは、迫り来るデビルマジンガー軍団をまるで赤子の手を捻るかのように簡単に叩き潰しながら前進する一体の魔神であった

何処かマジンガーZを思わせたが大きさはそれよりも一回り大きい
恐らくグレートよりも頭一つ位大きい筈だ
体中のいたるところが尖っており筋肉が盛り上がった感じの体つきである
そして何より目を見張ったのが胸のレンズにははっきりと「魔」と書かれていたのだ
「これは？」
「兜、それがお前のZだ」
「これが？これがマジンガーZなのか？」
「正しくはもうそいつはZじゃねぇ。お前のZを女将とお前のお袋、そしてミッドチルダの奴等皆で改造した最後にして最強のマジンガーだってよ」
「最後にして・・・最強のマジンガー・・・」
甲児はその言葉を呟いた
なんと心強い響きなのだろうか
だが、今其処に映し出されているマジンガーはまるで破壊の化身である
目は血のように真っ赤になっており見える物全てを破壊しながら突き進んでいる
そして、そのマジンガーの頭部には本来ある筈のパイルダーがないのだ
ポッカリと開いた頭部が其処にある
恐らくこのマジンガーは自立で動いているのだ
だとすれば、あそこにパイルダーをドッキングさせれば制御可能になるかも知れない
そう思えたのだ
『やれやれ、余計な事まで言うんじゃないよボス』
「お、女将！」
「あ、すんません女将さん」
突如持っていたテレビの映像が女将の映像に移り変わり甲児は驚愕

してボスは頭を掻いた
『良いかい甲児、あれがお前の乗っていた本来のZだ』
「どう言うこと？女将さん」
さやかが聞く
『あんたには言ってなかったね。甲児のZはあんた等よりも数日早くこっちに来たのさ。それで私は剣造と、そしてプレシア達と協力してマジンガーZを改造したのさ』
「待ってくれ、でもたった数日で其処まで出来る物なのか？」
『あたしを誰だと思ってるんだい？それに完成したのはたった今なのさ』
頭が上がらなかった
女将は其処まで考えていたのだ
正直自分は其処までの事は考えられないだろうな
そう思えた
「だけどよ、それならパイルダーは何処だ？パイルダーが無きゃ操縦出来ないぜ」
『ボス、見せてやりな』
「あいよ」
ボスは頷き手元にあるレバーを倒した
すると後ろにあった畳が持ち上がり梯子が現れた
その下を除くと一機の戦闘機が収められていた
ジェットパイルダーと同じ赤い色であるが何処かブレーンコンドルにも見えた
しかしところどころ尖っており先鋭的になっている
『それがあのマジンガーのパイルダーさ』
「これが・・・これがあのパイルダー」
『そうさ、さぁ分かったらさっさとあいつと・・・マジンカイザーとドッキングしな』
「マジンカイザー・・・魔神皇帝って事か・・・気に入ったぜ！」
甲児は笑ってそう言った

そして梯子と降りてパイルダーに乗り込む
上ではさやかが心配そうに見つめている
それを見て甲児がまた笑みを浮かべてこう言った
「心配しなくて良いぜ。ちょっとゴミ掃除するだけだからよ」

＊＊＊

外では百を越える数のデビルと巨大なライガーンが基地を攻撃していた
「撃て！基地諸とも兜甲児を生き埋めにしてやれぃ！」
ライガーンが指示を送りデビルの軍勢が攻撃を加える
その基地の天井をブチ破って現れたのは一機の戦闘機、否、パイルダーであった
「うおぉぉ！すげぇ加速力だ」
パイルダーに乗っていた甲児が余りの加速力に驚かされた
だが、すぐに慣れる
すると回りを見渡せるようになった
見ると無数の数のデビルマジンガーが其処にいた
そして見覚えのある敵も居た
「てめぇ、ライガーンか？」
「その声は兜甲児！運の良い奴だ！」
「てめぇは機動六課と戦ってる筈じゃねぇのか？」
「馬鹿め、あれは我等の姿を模したレプリカよ。わし等が馬鹿正直に愚かな人間と戦うと思ったか？」

ライガーンが笑みを浮べながら言った
甲児の胸中に怒りがこみ上げてきた
卑怯な事をした奴等に対する怒りである
「ふん、まぁ良い。貴様には恨みがあるのだ！やれぃデビルよ」
一斉にデビルマジンガーがパイルダーに迫る
だが、加速力はこっちの方が上である
「野郎、マジンカイザーは何処に居るんだ？」
甲児は辺りを見回してカイザーを探した
すると、パイルダーの真下をゆっくりと歩くカイザーの姿があった
「む、何だあのマジンガーは？」
初めて見るマジンガーにライガーンは首を傾げた
甲児は空中で弧を描き真っ直ぐカイザーの頭部へ向かう
「頼むぜ、マジンカイザー・・・パイルダァァァオォォォォン！！！」
甲児が叫びパイルダーがマジンガーとドッキングした
するとカイザーの目が赤い色から元の黄色に戻り胸の文字が「魔」から「Z」に変わった
そしてカイザーは諸手を天に掲げて咆哮する
その姿はさながらマジンガーZを思い出させた
それは乗っている甲児も同じであった
「同じだ、こいつに乗ってるとZを思い出すぜ。そうだよな、姿は変わってもお前はマジンガーZなんだもんな・・・・よぉし行くぜぇ！」
甲児は叫び駆け出す
足を大地に踏みしめるたびに振動が伝わってくる
操縦桿を通じてマジンガーのパワーが伝わってくる
それだけじゃない
多くの人達の思いも伝わってきた
地上、ミッドチルダ、そしてアルハザード
三つの世界の技術と想いが合わさり完成した魔神

それがこのマジンカイザーなのだ
「ふん、たかが一体で何が出来る！デビル軍団よ。奴を叩き潰せ！」
ライガーンが指示を送りデビル軍団が迫り来る
だが、デビル軍団の攻撃はカイザーの前では全くの無力であった
鋭い爪はカイザーの装甲を傷つけることが出来ず
鋭い顎を突き立てれば牙が砕け散った
凄い装甲だ
超合金ニューZより遥かに固い
一体何の合金で出来てるんだ？
甲児はそう思いながら迫り来るデビルマジンガー軍団をその手で叩き潰した
凄まじいパワーである
只殴っただけでデビルの顔が粉々に砕けたのだ
その光景を見てデビル達は一瞬たじろぐ
圧倒的であった
今まで強敵であったデビルがまるで可愛そうに思える程脆いのだ
それ程までにこのマジンカイザーの強さは圧倒的だったのだ
「てめぇら雑魚に用はねぇぜ！光子力ビィィィム！」
カイザーの目から黄色い閃光が発せられた
Zと同じ光子力ビームである
その閃光を放ちながら甲児は首を横に振った
すると並んでいたデビル達が動きを止めた
勿論ライガーンもである
一瞬何が起こったかと思っていた一同であったが、それはすぐに分かった

ズルリ

そんな音がしたと思うとデビルもライガーンも胴体が真っ二つになって地面に倒れたのだ

「つ・・・強い・・・強すぎる・・・こいつは強いぜ」
乗っていた甲児自身がその強さに感動すら覚えていた
これなら勝てる
奴等に、機鋼帝国に
「よぉし、待ってろよ皆！今行くからなぁ」
甲児は天に向かって咆哮した
それは正に人類の勝利を思わせる叫びでもあった

次回予告

遂にマジンカイザーをその手にした甲児
今から人類の・・・そしてマジンガーの大反撃が始まる
戦え、甲児！
戦え、マジンカイザー！
人類の明日を勝ち取る為に

次回『大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー』

次回もこの小説に

テイィィィィィクオォォォォォォフ！

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その1

凄い、凄すぎる
その思いが甲児の中を駆け抜けていた
甲児が乗っていたかつてマジンガーZであった物、だが、今は姿形も・・・そして名前も変わっていた
全体的に先鋭的になっており大きさもマジンガーZより一回り大きくなっている
顔立ちも力強さが増しているのだ
だが、マジンガーの特徴である二本の角や特徴のある口の縦溝などはある
今甲児が乗っているマジンガーがそれであった
名前をマジンカイザー
甲児の母、兜翼が今は無きアルハザードで設計し、兜剣造とミッドチルダの科学者達がその設計図を元に自分達より早くやってきたマジンガーZを改造した結果出来た最後にして最強の魔神である
この魔神にはデビルマジンガーには無い物が込められているのだ
デビルマジンガーは兜十蔵の父兜原蔵が自分の野望を実現する為だけに作り上げた負の産物である
が、このマジンカイザーには地上、ミッドチルダ、そしてアルハザードと言う三つの世界の人達の思いが込められたのだ
それは平和を願う思いと愛する人達を守りたいと言う愛である
その愛が負の産物であるデビルマジンガーに負ける筈が無いのだ
そう甲児は断言出きる気がした
嫌、断言できるのだ
現に今目の前では既に残骸となったデビルが転がっている
胴体から真っ二つに焼き切られており目からは光が失われている
もうこのデビルは動かないだろう
そしてその中にはミケーネ七大将軍の一人である猛獣将軍ライガー

ンの姿もあった
彼はデビル軍団を指揮して甲児を抹殺しに来たのだ
だが、其処へ現れたマジンカイザーの手により返り討ちにあったのだ
今ではライガーンもまた胴体から焼き切られてしまっており最早目覚める事は無い
そう、全てこのマジンカイザーが行った事なのだ
その突如、基地の天井をぶちやぶってボロットがマジンガーZを抱えて出てきた
「兜ぉ、大丈夫・・・って、ウヒャァ！こりゃデビルマジンガーじゃねぇか！」
「でで、でもボシュ～、あいつら動かないみたいでしゅよぉ」
「ホントだぁ、それに全部胴体が無いですぜ」
ボス、ヌケ、ムチャの三人は動かなくなったデビルを見て呟いた
「甲児くん、これって甲児くんがやったの？」
「あぁ、凄いパワーだぜ、このマジンカイザーってのは。全身に力が漲ってくる感じがしてくるぜ」
甲児はそう言った
正にその通りなのだ
操縦桿を握っている間ずっとマジンカイザーのパワーが自身に流れ込んでくるようであった
それはとても力強く頼もしい位であった
「けっ、結局良い所は全部お前に持っていかれちまったって訳だな」
マジンガーZの中に居た甲一が悔しそうに呟いた
その隣には寄り添うようにフェイトの姿もある
「何言ってんだよ。随分と熱い関係になったんじゃねぇの？お二人さんよぉ」
甲児がからかうように言うと甲一とフェイトが揃って頬を紅く染めた
見てて微笑ましい光景である
「畜生！何で可愛い子ちゃんには何時もこう彼氏が居るんだわよぉ」
「まぁまぁ、我慢しなさいよボス」

涙するボスにさやかがそっと語りかけた
だが、それはボスにとっては返って悲しいだけであった
「そうだ、こうしちゃいられねぇぜ！早く皆の所にいかねぇと！」
そうだった
今皆は苦戦しているんだ
早く自分が救援に行ってやらないと
そう思えたのだ
だが、その時マジンカイザーの元に通信が送られてきた
それは各地で戦う魔神達であった
「俺達の心配なら無用だぜ甲児くん」
「鉄也さん！」
「俺達は俺達でケリをつける」
「だからてめぇはすっこんでな」
「リョウくん、剣児」
「甲児くん、僕達よりも機動六課の彼女達の元へ向かってくれ」
「大介さん・・・分かったぜ！」
甲児は頷く
そうだ
今皆は因縁の相手と戦っているのだ
もし自分が同じ境遇であったら絶対に救援は頼まないだろう
それ程の相手なのだ
自分の手で決着を付けたい
そう皆は思っているのだ
鉄也はミケーネ帝国と
剣児は邪魔大王国と
竜馬達は恐竜帝国と百鬼帝国と
大介はベガ星連合軍と
だが、この世界に居る彼女達には関係ないことでもあるのだ
そもそも機鋼帝国は自分の曽祖父が作った敵である
兜家として自分がケリをつける義務があるのだ

それに彼女達を巻き込む訳にはいかないのだ
「ボス、さやかさんと甲一達を頼むぜ」
「っておい、俺も行くぜ」
「馬鹿言ってるんじゃねぇ！そんな怪我でどうするんだよ？お前は」
「う！」
甲児の言葉に甲一は詰まった
今の甲一は片腕を負傷しているし額からも出血している
マジンガーもボロボロである
とても戦える状態ではないのだ
「後は俺に任せてお前はフェイトちゃんに看病して貰えよ。なんなら膝枕でも良いんじゃねぇの」
「え／／／」
「ななな何言ってんだてめぇは！」
これまた更にからかうように甲児が言う
それには甲一とフェイトも顔を真っ赤にしてしまった
それを見て甲児が楽しそうに笑った
これなら大丈夫だろう
そう思えたのだ
「それじゃ、ちょっくらゴミ掃除してくるぜ」
「おう行ってこい！負けたりしたら承知しねぇからな！」
「しっかりやれよ兜ぉ！」
「気をつけてね、甲児さん」
皆の言葉に親指を立てて甲児は答える
さやかは何も言わず只、甲児の無事を祈っていた
それを見た甲児もまたさやかに何も言わなかった
話したい事は一杯あるだろう
だが、それはこの戦いを終らせてからだ
そう思ったのだ
兜家が異世界を巻き込んで起こしてしまったこの愚かな戦いを
兜家の人間として終らせる義務がある

その思いが甲児を奮い立たせたのだ
「行くぜぇ、マジンカイザー！」
甲児が叫び操縦桿を動かす
それに答えるかのようにマジンカイザーが一歩一歩と大地を駆け出す
その度に地響きが起こる
ふと、空を見上げた
空からは真っ赤な翼を持った巨大な何かが飛来していた
その外見は何処かジェットスクランダーを思わせる形でもあった
だがあらゆる面が先鋭的になっており大きさも一回り大きい
それを見て察するにマジンカイザーとドッキングする為に生み出された物だとすぐに察する事が出来た
カイザーは上空にジャンプする
その背面にスクランダーが位置する
「スクランダァァァクロォォォォォォス！！！」
甲児が叫ぶ
その声を信号にスクランダーとカイザーが上空でクロスし十字を描く
その時初めてカイザーは空の覇者になったのだ
「待ってろよ機鋼帝国！今から俺達が叩き潰してやる」
甲児がそう宣言し上空に舞い上がっていく
その速さは凄まじく、グレートは愚か、ゲッターでも追いつけるか
微妙な程であった
その姿はみるみる内に見えなくなってしまった
（頑張って・・・甲児くん）
さやかは両手を合わせて甲児の無事をひたすら祈り続けた

＊＊＊

カイザーは今上空を飛行している
回りは雲しか見えない
しかも天気は悪く乱気流がところどころで出来ていた
「ちぇっ、最悪の天候だぜ」
甲児が愚痴った
すると目の前にとても巨大な乱気流が現れた
本来なら避けて進むだろう
だが甲児は避ける気などなかった
カイザーに乱気流など通用する筈がないと知っていたからだ
だが、その突如乱気流の中から巨大な戦艦が現れた
円錐型であり四方に顔が取り付けられた異様な戦艦
万能要塞ミケロスであった
そしてその天辺にはミケーネ七大将軍の一人が立っていた
鳥を思わせる外見と顔を持ち背中には巨大な羽を生やした怪物である
「てめぇは、怪鳥将軍バーダラー!!!」
「待っていたぞ、兜甲児」
カイザーを指差してバーダラーが言う
「貴様さえ倒せばこの世界を征服するなど容易い事よ!行けぃ、我が戦闘獣軍団よ。マジンカイザーなど捻り潰せぃ!!!」
バーダラーの声に答えるようにミケロスから無数の戦闘獣が現れた
「舐めるんじゃねぇ!戦闘獣如きにこのマジンカイザーが止められるかよ」
甲児は叫んだ
正にその通りであった
カイザーは迫り来る戦闘獣を只殴り倒していたのだ
武器など使用する必要もない
只拳を当てれば戦闘獣は粉微塵に砕けたのだ

圧倒的であった
そう言う言葉が似合う光景である
やがて戦闘獣を粗方片付けた後ミケロスを見た
其処には先ほどまで居た筈のバーダラーの姿が何処にも無かったのだ
一体何処へ？
そう思っていた
すると突如背後に衝撃が起こった
思わずつんのめりそうになる甲児は必死に耐えた
そして後ろを向くと、カイザーの頭部を両手で押さえるバーダラーの姿があった
「おのれぃ、こうなったら兜甲児！貴様だけでも死ねィ！！！」
そう言ってバーダラーは口から怪音波を放った
それは諸に操縦席に居る甲児に直撃した
「うわぁぁぁ！」
甲児は思わず叫んだ
それを見てバーダラーがニヤリとする
だが、何時までも攻撃を食らってる甲児ではない
「この野郎！何時までへばりついてんだ！離れやがれ」
カイザーがバーダラーの頭部を掴んで目の前に持って行きその胴体を太い足で蹴り飛ばした
蹴り飛ばされたバーダラーはそのままミケロスに直撃した
装甲表面が抉れる
辺りに火花が舞い散り煙が舞い上がる
「お・・・おのれぇ・・・マジンカイザーは化け物か？」
口からオイルを流しながらバーダラーは自身を倒したカイザーを見た
そのカイザーの口から猛烈な突風が巻き起こっていた
「塵になって二度と出てくるんじゃねぇ！ルストトルネェェェェド！！！」
カイザーの口から放たれた突風、即ちルストトルネードは瞬く間にバーダラーごとミケロスを包み込んだ

その中で要塞はキリキリ舞い上がる
そして装甲から機械の部品にいたるまで全てが腐食しボロボロになっていった
無論、それはバーダラーも同じであった
「ギャアアアアアアアアアア！ミケーネ帝国に・・・栄光あれえええええええええええ！」
バーダラーが叫んだ直後爆発が起こった
「へ、ざまぁみやがれ」
甲児が鼻を鳴らす
すると回りに今まで会った乱気流が無くなり視界が良好になった
するとその回りには今まで居なかった筈のデビルマジンガー軍団が居た
その総数は今までミッドチルダに出てきた数・・・およそ数万の大群が居た
恐らくこれで全軍だろう
普通なら青ざめて戦意を喪失する場面である
だが、甲児はそうではなかった
「有り難いぜ、これで探す手間が省けたってもんだ！」
鼻を鳴らし甲児は言う
そしてカイザーの両目が眩く輝く
「きやがれデビルマジンガー！この俺、兜甲児様とマジンカイザーが叩き潰してやるぜ！」

＊＊＊

クラナガン市街では機動六課メンバーと時空のねじれから現れた戦闘機人、そしてミケーネ七大将軍のコピーとの戦いが起こっていた
数でこそ機鋼帝国が勝っている物の、機動六課のメンバーの常識を逸した強さの前に数を徐々に減らしていた
そんな中、奴が現れた
「フン、相変わらず威勢が良いお嬢さん方だ」
「そうでなくては歯ごたえがない」
「お前は！」
「！！！」
エリオ、セッテの二人はその男達を見た
かつて列車事件で戦い自分達を負かした相手、ブロッケン伯爵とピグマン子爵である
「だが、貴様等の快進撃も此処までだ」
そう言ってブロッケンは杖を天に翳す
「さぁ来い！デビルマジンガー達よ！此処に居る虫けらドモを抹殺しろ」
勝ち誇ったかのようにブロッケンは言う
だが、幾ら待ってもデビルは来なかった
「何故だ！何故来ないのだ！」
疑問に感じ再び杖を掲げて叫ぶ
だが、それでもデビルは来ない
徐々にブロッケンの額に汗が滲み出てきた
「一体・・・一体何が起こったというのだ？」
「答えなら俺が知ってるぜ」
ふと、上空から声が響いた
その声は！
聞き覚えのある声であった
ブロッケンとピグマンは愚か、六課メンバー全員が上空を見上げた
其処には戦闘を終えたにも関わらず全く無傷のマジンカイザーが居た

しかもその手にはデビルマジンガーの頭部が握られている
「残念だったな、ブロッケン！お前の虎の子だったデビルマジンガーは・・・この俺が全部叩き壊してやったぜ！」
キャノピー越しに甲児が叫ぶ
それこそ、圧倒的なパワーを持ったマジンカイザーの成せる業でもあったのだ

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その２

「倒しただと？馬鹿な！あのデビルマジンガー軍団が貴様一人に倒されたと言うのか？」

ブロッケンは未だに信じられなかった
機鋼帝国の科学力の全てを結集して作り出したデビルマジンガー軍団がいとも簡単に倒されてしまうとは
しかもそれをあの甲児の乗っている謎のマジンガーの為にだろうかだが、そこでブロッケンは笑みを浮かべる

「ふは・・・ふはは！兜甲児よ、この我輩をたばかろうとしても無駄な事よ。どうせ嘘に決まっておろう！きっともうこちらに来る筈・・・」
「まだ分かってないみたいだな」
「何？」
「嘘だと思うなら見てみたらどうだ？」

甲児はニヤリとした
その顔に苛立ちを感じるも言われた通りにブロッケンは各地の映像を映す
其処に映し出されたのは、マジンカイザー討伐の為に繰り出した全てのデビルマジンガーが残骸となって転がっている映像であった
それを見たブロッケンは青ざめた

「ば・・・馬鹿な・・・そんな馬鹿な事があって良い筈がない」
「諦めろブロッケン！それが現実だ」

甲児とマジンカイザーがブロッケンを指差す

正に勝利宣言であった
機鋼帝国の切り札を打ち破り後はお前達だけだ、と言いたげなセリフ回しである

「フン、どうしたのだブロッケンよ。それではＤｒ．ヘルが浮ばれんぞ」
「おぉ、その声は」

声のした方を向いた
其処には巨大なミケーネの五大将軍が立っていた

「マジンガーなど我等が一捻りしてくれるわ」
「上等だ！てめぇらの相手は俺がしてやるぜ！」
「生意気なのは相変わらずだな、兜甲児よ」
「だが、その生意気な口もすぐに聞けなくしてやる」
「行くぞ」

五大将軍はそう言って上空に跳び上がっていく
甲児は下に居る彼女達を見た

「悪いな、ちょっとあいつ等をぶちのめしてくるぜ」
「分かりました、こっちは任せて下さい」
「負けちゃだめッスよぉ甲児」
「勝って来いよ」
「頑張って下さい」

甲児に向かって皆が言葉を送る
それに甲児が指を立てて答える
そして上空を見上げて飛び上がる

「行くぜ、五大将軍！鉄也さんに代わっててめぇらは俺が蹴散らしてやる！」

＊＊＊

二大ジーグは今邪魔大王国との激しい戦いの中にあった
鋼鉄ジーグはヒミカと戦っており、鋼鉄神ジーグは竜魔帝王と戦っていた

「ヒミカ！今度こそ貴様を倒してこの因縁を断ち切らせてもらう」
「ほざけ司馬宙！それはこちらのセリフよ！わらわの真の姿を見るが良い」

ヒミカの体に黒い稲妻が降り注いだ
するとその体がミルミル変わって行き巨大なハニワ獣になった
手足に鋭い爪が生え体には体毛が生え尻尾には竜の頭が生えだし、
獅子を思わせる鬣が生え顔にはおぞましい牙が生えてきた
正に化け物を思わせる姿であった

「それがお前の真の姿か？良いだろう、此処でケリをつけるぞ」
『こい！司馬宙、嫌鋼鉄ジーグ！』

鋼鉄ジーグとハニワ獣ヒミカが幻魔要塞の上で激しくぶつかり合った
鋼鉄ジーグの繰り出された拳をヒミカは片手で払い除け、お返しに

と鋭い爪をつきたててくる
それをバックステップでかわす
かわした直後に両手を突き出して放つ
ダイナマイトパンチである
放たれた腕はヒミカの胴体と眉間に命中する
それを食らったヒミカが痛そうに眉間を押さえる

「トドメだ！マグネットパワー・・・」
「させんわ！」

ジーグがヒミカを引き寄せようとした時、ヒミカの目が怪しく光った
すると、突如鋼鉄ジーグを紅蓮の炎が包み込む

「うおわあああああああ！」

紅蓮の炎の中で苦しむジーグ

「何、あの炎は！」
「熱反応が無い、宙さん！それは幻よ！」

シグナムが炎の異様さに気づき、美和が叫ぶ
だが、そんな中でもヒミカは笑っていた

「無駄じゃ無駄じゃ！この男は心まで機械に成り下がった醜いサイボーグ、そのサイボーグがわらわの作った術を破れる筈があるまい」

強きな発言をするヒミカ
だが、その時ジーグの目が強く輝いた

「舐めるなよヒミカ！例えこの体が機械で出来ていたとしても・・・

俺の魂は人間だ！こんな幼稚な術で俺を・・・鋼鉄ジーグを倒せると思うなぁぁぁ！」

ジーグは叫び炎を振り払う
それにヒミカは驚愕する

「馬鹿な！わらわの術を破ったと言うのか！」
「ミッチー！ジーグランサーを頼む」
「ランサーセットアップ、シュート！」

ビックシューターから光り輝く一本の槍が現れた
それをジーグが掴み強く握る

「行くぞ、ヒミカァァァ！」

地面を蹴って駆け寄ってくる
ヒミカの顔に恐怖が表れた
あの術はヒミカの成せる術の中でも最高位の術の筈である
それをいとも簡単に破られてしまったのだ

「おのれ・・・おのれえええええええええ！」

苦し紛れに何体ものハニワ獣を生み出して向かわせた
だが、それを後ろから現れたシグナムとビックシューターが蹴散らしていく

「鋼鉄ジーグ！雑魚は私達が引き受けた」
「宙さんはヒミカと決着をつけて！」
「すまない、シグナム、ミッチー、行くぞヒミカァァァァ！！！」

大地を蹴って跳躍しランサーをヒミカに向ける
そして重力に身を任せてそのまま落下した

「おのれ、死ねぃ鋼鉄ジーグ！」
「死ぬのはお前だ！ヒミカ！」

閃光が起こった
遠くから見ればジーグのランサーとヒミカの腕が交差したようにも見えた
其処に映っていたのは、ジーグの片腕を吹き飛ばしたヒミカ
そして、ヒミカの胸にランサーを突き刺したジーグが居た

「グハァ」

ヒミカの口から鮮血が飛び散った
ジーグは二、三歩下がり片膝を付く
肩が上下に揺れていた
恐らく緊張の糸が解れた為であろう

「おのれ・・・おのれ・・・我等邪魔大王国が破れたと言うのか・・・」
「諦めろヒミカ、お前達の敗北はあの時から決まっていたんだ！」

弱っていくヒミカを指差してジーグが言った
それを聞いたヒミカは憎しみの篭った目で最後にジーグを睨んだ
そして、それが最後のヒミカの顔であった
ジーグを睨んだまま、ヒミカは息絶えた
そして、操縦者を失った幻魔要塞はそのまま地面に向かって落下しだした

「剣児、こっちは終ったぜ、後はお前だ」

幻魔要塞を脱出しながら剣児を見てジーグが言った
その下では鋼鉄神になったジーグがシグナムから借りたレヴァンティンを片手に竜魔帝王と激しい戦いを続けていた

「フハハハ、やるではないか！鋼鉄ジーグ」
「敵に褒められても嬉しくないぜ」

剣を交えながら二人が会話する
剣児の後ろではつばきが心配そうに見つめていた

「そう心配そうな顔すんなよつばき、俺は負けねぇよ」
「剣児・・・うん！」

剣児の言葉につばきは強く頷く

「ほざけ鋼鉄神ジーグ！貴様などこの俺の敵ではないわ」
「うるせぇ！俺の後ろにはシグナムさんや皆が・・・そしてつばきが居るんだ！てめぇみてぇなお山の大将なんざに負ける気なんざねぇ」
「ならばそれごと貴様を葬れば良いだけの事よ」
「てめぇには無理だな」

剣児はニッと笑って言った
その顔を見て竜魔帝王の顔が強張る

「何？どういう事だ？」
「だから言っただろう。お山の大将だってな。独りよがりのてめぇなんざに俺は負けない！そして俺達皆もてめぇなんざに負けねぇん

だよ」
「ほざけえええええええええ！」
「うおおおおおおおおおおお！」

竜魔帝王、鋼鉄神ジーグ
お互いが剣を敵に向けて駆け出す

そして最後の一振りを放った
竜魔帝王は縦に剣を振り下ろした
それを鋼鉄神が下から振り上げた剣がぶつかりあった
激しい火花と衝撃が走った
突如、何かが宙を舞った
竜魔帝王の剣である
根元から折れた剣が宙を舞っていたのだ

「おおおおりゃあああああああああああああ！」

そのまま剣を両手に持ち一気に振り下ろした
竜魔帝王はその一撃を頭から受けた
体の真ん中に縦の線が入る

「ば・・・馬鹿な・・・これが・・・これが、人間の力・・・なのか・・・」
「そうだ、これが・・・俺達人間の力だ・・・地獄の鬼達にたっぷり自慢しろよ」

吐き捨てるように言い、剣を肩に担いで背を向ける
そんなジーグに竜魔帝王は手を伸ばす
だが、其処で体が倒れた
体が真っ二つに裂かれたのだ

「剣児」
「あん？」
「終ったね」
「あぁ、悪いがこっちも動けそうにねぇや」

そう言うと鋼鉄神ジーグは忽ちジーグとバルバに戻りそのまま地面に大の字になって倒れた

「畜生！腹へって動けねぇ・・・ま、あいつらなら負けないだろうな」
「そうだね」

空を見上げて剣児がそう言った
そんな剣児の元に宙達が駆け寄って来た

＊＊＊

「何だと！ゲッター軍団だと？」

ゴールは巨大なゲットマシンから現れた数体のゲッターロボを見たどれもが似たような顔をしていたのだ
確かに、どれもゲッターロボであった

「へ、鬼の次は化け物の大将ってのかよ」
「竜馬、見てて気持ちの良いもんじゃねぇからさっさと片付けろ」
「情けない、部下を取り込むとは上に立つ者のする事じゃないな」
新ゲッターロボに乗っていた竜馬、隼人、弁慶がゴール達を見て言った

「にしても此処の親父は大人しいなぁ」
「此処は別世界だからな」
「あぁ、早く終らしてコンビ二のおにぎりが食いたいぜ」
ゲッターロボアークの拓馬、カムイ、獏も口を開いた

「植物よりは楽しめそうだな」
「調子に乗ってると痛い目を見るぞ」
「こいつの言っても無駄だろうぜ」
ゲッターロボ飛焔に乗っていた剣、弾、豪鬼も口を開いた

「ケイ、ガイ、俺達も行くぞ」
「何時でも良いわよ、ゴウ」
「派手にかましてやろうぜ」
そして他のゲッターより一際大きな真ドラゴンに乗っていたゴウ、ケイ、ガイがそれぞれ口を開く

「凄い・・・あれ・・・全部ゲッターなの？」
「みたいだな」
「すげぇ・・・すげぇぜ」

突如現れたゲッター軍団にアリシアは驚き號は興奮していた
そんな中、巨大なゲットマシン「ゲッターエンペラー」から声が響いた

「気に入ったか？お前等」
「な、その声は！」
「まさか」

其処から発せられた声に竜馬と隼人は己の耳を疑った
そう、それは最早聞けないと思っていた声であったのだ
そして、ゲッターの・・・竜馬達の目の前にあったモニターが映り、
其処に顔が映し出された
丸顔で工事用のヘルメットを被り剣道の胴を見に付け刀を背負った
ずんぐり体形の男

「む・・・武蔵」

そう、其処には燃え滾る闘志を目に宿した「巴武蔵」が其処に居たのだ

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その3

武蔵、本当に武蔵なのか？
竜馬と隼人は目の前に飛行するゲッターエンペラーを見て目を丸くしていた
目の前に佇むのは次元航行船のおよそ3倍はあるであろう大きさを誇るゲットマシンである

「武蔵、お前本当に武蔵なのか？」
「当たり前だろ！お前等チームメイトの顔を忘れちまったのか？」

笑みを浮べながらモニターに映っていた男、巴武蔵は言った
それを見て最初は二人は驚いていたが、やがて状況を理解した二人が今度は笑みを浮かべる

「武蔵、この野郎！生きてたんなら何で教えてくれなかったんだよ」
「無茶言うなよ。あの後俺は別の世界に飛ばされていたんだからよぉ」
「どう言う事だ？」

隼人は疑問に思い問いかけた
すると武蔵は額を指で掻きながら答える

「う～ん、俺も良くわかんないんだけどよぉ、目が覚めたらこのゲッターエンペラーに乗って宇宙で戦ってたんだ」
「宇宙で！？」
「おう、実はこいつも本当は星並にでかいんだけどよぉ、転移する際に大きさを変えて来たんだ。でないと一緒に戦えないからよ」
「星並みにだと！？」

それを聞いた隼人はこれまで以上に驚いていた
無理もない
星並の兵器など見た事が無いし、作るなど到底無理な話しなのだ
空を飛行する戦艦を作ること事態大変だと言うのにそんな巨大な戦艦を作るのだから武蔵の行った世界はとんでもないと言う事が理解出来るのだ

「ねぇ竜馬さん」
「ん？何だい」

アリシアが竜馬の乗った真ゲッターの頭部の横に立ち言葉を発したそれを聞いてゲッターもアリシアの方を向く

「あの人竜馬さんの知り合いなの？」
「あぁ、俺達の仲間でかつて共に戦った仲だったんだ・・・だけど、アイツは・・・」

死んだ
そう言いたかったのだ
だが、其処で竜馬は言葉を止めた
言いたくなかったのだ
死んだと思っていた仲間に出会えたのだから
今更そんな言葉など使いたくなかったのだ
だからこそ言葉を止めた竜馬を察しアリシアは聞かなかった
流石である

「おいリョウ」
「何だ武蔵？」
「お前何時の間にそんな可愛い子ちゃんと知り合ったんだ？」

武蔵はさっきとは打って変わって機嫌の悪そうな顔で竜馬を睨んでいた
その顔を見て竜馬は返答に困っていたが、其処へアリシアが更に火に油を注ぐ行為をしだし・・・

「はじめまして、私竜馬さんの彼女のアリシア・テスタロッサでぇす」

それを聞いた時、武蔵の顔に影が浮んだ
そして背中の刀を抜き放つ

「竜馬ぁぁぁぁぁぁ！」
「どわぁぁぁ！武蔵！落ち着け！今敵が目の前に居るから！」
「うるせぇ！俺様を差し置いてあんな超美人でボインな可愛い子ちゃんを彼女にしてるだとぉ！一辺死ぬかてめぇ！」

竜馬は他タジタジであった
何しろ目の前には小さくなったとは言え真ゲッターの数倍はあるであろうゲッターエンペラーでグリグリと押されているのだから

「フッ、リョウ。こりゃ羨ましい限りだな」
「全くだぜ」
「隼人、弁慶、お前等人言だと思って・・・あ！」

其処で竜馬はある事に気づいた

「そう言えば弁慶、お前も確かディエチって彼女が居ただろう？」
「え？そうでしたっけ？」
「弁慶ぃぃぃぃぃぃ！てめぇもかあああああ！」

今度は怒りの矛先を弁慶に向ける
当の弁慶はと言うと

「えぇぇぇ！あいつ俺に惚れてたのかぁぁぁ！」

どうやら今の今まで気づかなかったようである
鈍感にも程がある物である
そんな弁慶を見て竜馬と隼人は溜息をつく

「おい、無駄話も良いけどよぉ、敵を放っておいて良いのかよ？」

剣が指でゴール達を指した
其処には今にも暴れ出しそうなゴールが居た

「おっと、無駄話してる場合じゃねぇや！とにかくリョウ、そして號も一旦エンペラーに乗れ」
「何でだ？」
「お前等に渡す物があるからだ」
「？？？・・・分かった」

何を渡すのか
少し不安になりながらも竜馬と號はエンペラーに乗り込んだ
その間、ゴールの相手はゲッター軍団が行う事になる

＊＊＊

「こ、これは！」

エンペラー内の格納庫にあったのは、かつて自分達が乗っていたのと同じゲッターロボGであった
だが、その各所が違っていた
まず大きさが二回りも大きくなっている
そして両腕には真ゲッターと同じ鋭いブレードが取り付けられており、大きさもそれを上回っていた

「武蔵、これは・・・これはまさか・・・」
「そうだリョウ」

驚く竜馬に変わらない口調で武蔵が話す

「これはあの時、お前等に借りたゲッターロボGを俺達の世界で改造した新たなるゲッターロボだ」
「新たなるゲッターロボ？」

弁慶は首を傾げた
そして武蔵は言葉を放つ

「その名前は・・・真ゲッターロボGとでも言うかなぁ」
「真・・・ゲッターロボ・・・G」

その力強い言葉を思わせる名前であった
これがかつて自分達の乗っていたゲッターロボの生まれ変わった姿なのだろうか

三人はそう思えた
其処には自分を動かす者を今か遅しと待ってるようであった
その姿を三人は見ていた

「竜馬さん、どうするんですか？」
「どう言う事だ？」

竜馬は声を発した張本人である號を見た
その顔には半ば不安が感じられた
それは號自身であのゲッターは何処か危険なのだろうと思えたのだ
その思いは竜馬自身も思っていた
ゲッター線は必ずも人類の味方をするとは限らないのだ
何時恐竜帝国のように人類に牙を剥くかも知れない
そして、それはこのゲッターに乗った直後なのかも知れない
そんな思いがしていたのであった
だが、だとしても今はこのゲッターの力が必要なのは事実であった
そうと分かると自ずと竜馬の口から言葉が出て来た

「確かに、このゲッターは危険だろう・・・だが、今はこのゲッターに頼るしかない。それに、俺はこう思っている・・・ゲッター線を信じればゲッターは俺達に力を貸してくれると」
「竜馬さん」

號には返し言葉が見当たらなかった
その言葉には竜馬の覚悟が感じられたからだ
最早これ以上何を言っても竜馬には無駄だろう
そう思えたのであった
すると今度は號達の方を向いて武蔵は言葉を発した

「號、翔、凱、お前等はこっちのゲッターに乗れ」

そう言って武蔵が手を伸ばした先には竜馬達が乗っていた真ゲッターロボと全く同型のゲッターが立っていた
姿形から大きさまで全てが同じである
只違うのはこのゲッターには目に黒い瞳が付いている事である

「武蔵さん、これは一体？」
「竜馬達には悪いと思ったんだが、その真ゲッターは只のテスト機だったんだ。本来の力の十分の一位の力しか出せない奴でな」
「あ、あれだけの力があって本来の十分の一なんですか？」

武蔵の言葉を聞いて凱が驚いた
勿論號や翔も同じであった
それは真ゲッターの力を知っているからそこ驚いた事なのだ

「これに……俺達が乗るんですか？」

自信が無いのか號は渋る
そんな號の肩を竜馬た掴む
その手からは竜馬の温もりが感じられた
そしてその視線からは優しさが感じられた
その目でじっと號を見る

「自信を持て、號」

竜馬はそう言った
只一言、そう言ったのだ
幾多の戦いを経験した竜馬だからこそその言葉を発した際の重みが伝わってくるのだ

「俺には分かる。お前達はこいつを扱える力が充分ある筈だ」
「僕達に…ですか？」

翔が不安そうに言う
それに竜馬が頷いた

「誰がお前達を鍛え上げたと思っているんだ？お前達ならこいつを動かせる。そう確信してるんだ！だから武蔵もこいつを託したんだ」
「武蔵さんが…」
「俺もそう思うぜ」

今度は隼人が口を開いた
普段は斜めに構えている隼人も今回は真剣な顔をしていた

「ゲッター線を使用してこそ居ないがあのゲッターロボは並の人間じゃ扱えない代物に仕上げてるつもりだ。それに俺達がお前達に課した地獄の特訓をお前等は乗り越えてきたんだ。自信を持て」
「そうだぜ。お前等自分じゃ思ってる以上の力を持ってるんじゃねぇか！」

弁慶も同じようであった
彼は二人とは違い大らかな顔で笑ってそう言っていた

「それにゲッターだってお前等に乗って欲しそうな顔をしてるぞぉ」
「ゲッターが…ですか」

號は再びゲッターを見た
ふと、ゲッターの黒い瞳がこちらを見てる気がした
ゲッターは生きてる
そう実感できた

そして、こうも思えた
今の自分達にはこのゲッターの力が必要なのだと
號は自身の仲間である翔、凱を見た

「翔、凱、やろう！俺達には今はこの力が必要なんだ！」
「そうね、だったらやりましょう」
「自分もそれに賛成です！」

翔と凱もそれに頷く
どうやら異論はないようだ
それを見ていた竜馬達も頷く

「よし、それなら行こう」
「あぁ、何時までも異世界から来た奴等に任せっぱなしじゃ舐められちまうからな」
「そうですね」

竜馬達の言葉に號は頷く
そうだ、此処は俺達の世界だ
俺達が守らないと意味が無いのだ
それを號は内心そう思っていた
すると隣に居た武蔵が微笑んでみていた

「どうやらお前等は頼もしい後輩を持てたみたいだな」
「あぁ、俺達にとって誇らしい後輩達だ」

竜馬は胸を張って言った
それを見て武蔵は嬉しいような、何処か寂しいような声を発した

「そうか・・・じゃぁ俺がもうお前等の元に来なくても良いんだな」

その言葉を聞いた時、竜馬達は驚いたような顔をした
そんな竜馬達に武蔵は語る

「俺達がこの世界にいられるのはほんの僅かな時間だけだ・・・それを過ぎればエンペラーは元の大きさになっちまう・・・そうなっちまったらこの星をぶっ壊しちまう恐れがあるんだ」
「武蔵・・・その時間は具体的にどの位だ？」

隼人が聞いた
それを聞いて武蔵が簡潔に答える

「およそ1時間だ」
「するともう30分は経ったから・・・後30分しか居られないのか」

竜馬は少し残念そうな顔をした
それをみて武蔵が微笑む

「そんな顔をするなリョウ、俺は別の世界で生きてるんだ。別に死んだ訳じゃないんだぜ」
「そうか・・・そうだったな」

武蔵の言葉を聞いて竜馬の中にあった鎖のような何かが音を立てて崩れる思いがした
そうだ、武蔵は此処とは違う世界で生きているのだ
そして、これは推測だがいずれ会えるだろう
そう思えた

「リョウ、何時までも此処で油を売ってる訳にはいかないぜ」

「そうだったな、皆行こう！この世界は俺達の世界だ！俺達が戦わなきゃならないんだ」
「おう、別世界の仲間達に任せっぱなしじゃ笑われちまうぜ」
「弁慶の言うとおりだな」

隼人がニヤリとする
今回は流石に隼人も熱くなっている
かつての仲間の再会
異世界の仲間との共闘
そして自分達の元へ帰って来たゲッターロボ
此処までされて燃えない訳にはいかない
戦わない訳にはいかない
そんな思いが彼等にはあったのだ

「行くぞ隼人、弁慶！恐竜帝国と百鬼帝国との因縁を今こそ断ち切るんだ！」

＊＊＊

エンペラーの外では異世界のゲッター達が戦っていた

「おうりゃぁ！」

新ゲッターに乗った竜馬が叫び持っていたトマホークを振るう

その一撃でゴールの腕が宙を舞う

「小癪なぁ！」

ゴールが不敵に言う
すると宙を舞った腕から無数の管が現れゴールと繋がる
すると忽ち腕が元通りに再生してしまったのだ

「ならこれでどうだぁ！」

それならばとゲッター飛焔の剣が腕から取り出したガトリング砲で蜂の巣にする

「フハハハハ、無駄だ無駄だ！」

今度はブライが笑った
すると撃ち開けられた穴がみるみる元通りになっていく

「なろぉ！いい加減くたばりやがれ！」

ゲッターアークに乗っていた拓馬がそう叫び彼はトマホークでゴールとブライの居た首を切り落とす
だが、それも結果は同じであった
先ほどの腕と同じように無数の管が現れ直ぐに再生してしまうのだ

「駄目だ、トマホークでは再生してしまう、ビームで倒すしかない」

真ドラゴンに乗っていたゴウが冷静に言う

「でも、それで倒せるの？あいつ真ゲッターのビームを吸収したん

でしょ？」
「俺達全員のビームも吸収されちまうんじゃねぇのか？」

ゴウの提案にケイとガイが不安になる
そんな時であった

「心配するな！」
「俺達も力を貸すぜ！」

突如上空から声が響いた
見上げると、其処には2体のマシンが居た
一体は先ほど竜馬達が乗っていた真ゲッターロボと同じであった
だが、もう一機は見知らぬ機体である
何処かゲッターロボGを思わせるが大きさが違う
従来のGより二回り位大きいのだ

「ようやくご登場かよ？」
「散々待たせやがって」
「遅れた分しっかり働いて貰うぜ」

新ゲッターの竜馬、隼人、弁慶が揃って言う
それにリョウ達は頷いた

「竜馬さん、そのロボットは何？」

アリシアが近寄り竜馬に聞く
すると竜馬は答えた

「これが俺達が元の世界から持って来たゲッターロボの生まれ変わった姿・・・その名も、真ゲッターロボGだ」

「真ゲッターロボG！」

アリシアは復唱した
それに竜馬達は頷く

「す・・・凄いパワーだ・・・」
「これが・・・真ゲッターのパワー・・・」
「今にも・・・体が引き裂かれそうだ・・・」

その隣では號達が真ゲッターのパワーに圧倒されていた
それを見た竜馬がそっと真ゲッターの肩に手を置く

「號、ゲッターを力で動かそうとするな、意識を集中させて、心で動かすんだ」
「こ、心で・・・」

號は竜馬の言葉を聞き、そっと目を閉じた
そして意識を集中させて真ゲッターの鼓動を感じ取った
それは心臓の鼓動とも取れた
それは、翔、凱も同じであった
三人は真ゲッターの鼓動を感じ取った
そして今、三人は真ゲッターと一つになったのだ
するとさっきまで圧倒されていたのが嘘のように体が軽くなるのが感じられた

「不思議だ、さっきまで真ゲッターのパワーに押しつぶされそうになっていたのに」
「今の僕達の体は凄い軽い」
「まるで今にも空が飛べそうですよ」

三人は驚いていた

「よし、皆聞いてくれ！」

竜馬は叫ぶ
それを聞いて異世界のゲッターが一斉に集まる

「奴を倒すには俺達ゲッター全員のビームを収束させるんだ」
「俺達全員のビームを？」

獏が呟く
それに竜馬が頷く

「へ、世界は違えど親父の考える事は同じって訳だな」
「お、親父？」

拓馬の言葉に竜馬は目を見開いた
どうやら事情を知らないらしく、溜息混じりにカムイが説明する

「竜馬さん、この単細胞の拓馬は貴方・・・つまり異世界の流竜馬の息子なんです」
「俺のガキだぁ？ざけんな！俺はまだガキどころか嫁もいねぇよ！」

新ゲッターの竜馬が額に青筋を浮かべて怒鳴る

「馬鹿、言っただろう？異世界のお前だよ」
「異世界だろうと何だろうと俺は俺だ！勝手に俺のガキだなんて名乗るな！」
「へ、俺は親父を始めて見たが確かにそんな親父だぜ」
「全くだ、あの竜馬さんそっくりだなぁ」

拓馬と獏は物珍しそうに新ゲッターの竜馬を見る

「おいおい、お話しはあの化け物をぶち殺してからにしようぜ」
「剣の言うとおりです。あのまま放置しておけば付近の町の被害が拡大します」
「そうなると修理が面倒だしなぁ、ちゃちゃっと片付けようぜ」

剣、弾、豪鬼の三人が言う
それを聞いて一同が頷く
ふと、真ゲッターGに乗っていた竜馬がアリシアを見た

「アリシア、君も協力してくれるか？」
「勿論！だって私は竜馬さんに一生ついていくって決めたもん！」

アリシアは胸を張って宣言する
すると回りから野次が飛び交う
それを聞いて竜馬は少しだが頬を赤らめた
だが、すぐに戻った

「皆、真ドラゴンの頭部に乗ってくれ」
『おう！』

ゴウが言う真ドラゴンの頭部
即ち巨大な竜の頭にゲッター軍団が一斉に乗る
それから分かる通り真ドラゴンの大きさは常識を逸しているのが見て取れた

「よし、皆行くぞ！」
「フッ、最初で最後のゲッター軍団って訳だな」

隼人がクールに答える
それを見て新ゲッターの竜馬が少し驚いた顔をする
「へぇ、こっちの隼人は大人しいじゃねぇか」
「お前だって人の事いえねぇだろうが」
「俺は同じみたいだな」
弁慶は言うがその後二人に同時にツッコミを食らう
「お前は変態だろうが！」
と、
それを見ていた真ゲッターロボGの竜馬が多少困った顔になり言う
「あの・・・そろそろ始めたいのですか」
「おう、こっちは何時でも良いぜ！」
竜馬の言葉に竜馬は頷く
そして一斉にエネルギーを臨界にまで上げる
全てのゲッターから緑色の輝きが放たれる
ゲッター線の輝きだ
そして真ゲッターロボGの肩にアリシアが乗り、彼女もデバイスを構え魔力を収束させる
「行くぞ皆！」
「おうよ、一発で決めてやる！」
「ド派手な花火を上げてやろうぜ！」
「一度死んだ野郎が未練たらしく出てきやがって！大人しく成仏しやがれってんだ！！」

「行くぞぉぉぉぉぉ！！！」

一同が叫ぶ
そして一斉に放たれる
それは全てのゲッターから放たれた閃光であった
雄雄しく、力強く、巨大な閃光
その名は・・・

『ゲッタァァァァァビィィィィィィィィム！！！』

一同が同時に叫ぶ
放たれた閃光はその全てが混ざり合い一筋の巨大な閃光になって合体したゴールとブライに襲い掛かった

「馬鹿め、そのようなビームなど吸収してやる」

ゴールとブライが笑って言った
その通りであり、みるみるビームが吸収されていく
だが、それでも彼等は止めない
最後の一滴になるまで撃ちつづけるのだ
そして、それは肩に乗っていたアリシアも同じであった

「いっけぇぇぇぇぇぇ！」

彼女もまた全力で放っていたのだ
そして、それを浴び続けていたゴールとブライの体に変化が起こった
それは、腕が、足が、体のあちこちがブクブクと膨らみ出したのだ

「ば、馬鹿な！エネルギーを吸収しきれない」
「うおお！我等は、我等はここで朽ち果てるのかぁぁぁ！」

ゴールとブライが叫ぶ
すると竜馬が彼等に言う

「お前達はどうやら忘れたみたいだな。百万の軍勢よりも勝る物・・・それは心と心で繋がった仲間だ！」

竜馬がそう言う
それが最後となった
ゴールとブライはそのまま溶け込むようにビームの中に消えていった
もう其処には何もない
あるのはビームで出来た巨大なクレーターである

「やった！やったんだ！」

號が叫ぶ
だが、その直後、他のゲッター達が徐々に空に舞い上がっていくのが見えた
もう時間なのだ

「悪いなリョウ・・・俺達が手助けしてやれるのは此処までだ」
「気にするな武蔵、俺達は負けない・・・絶対に」

竜馬は言う
それを聞いて武蔵はニッコリ笑うと異世界のゲッター達を乗せて元居た世界に帰って行った

（皆、俺達の方は決着をつけた・・・後は君達だ）

竜馬は此処とは違う場所で戦っているであろう仲間達を心配しながらも心の中でエールを送った

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その４（前書き）

今回は魔神皇帝無双です
脳内ＢＧＭは勿論あの曲で決まりです

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その４

ミケーネ五大将軍は空を飛行していた
その後ろを巨大な深紅の翼を身に付けた魔神皇帝が飛行していた

「野郎、何時まで逃げる気だぁ？」

甲児が呟いた
その意図は甲児自身も分かっていた
自分達の有利な場所で戦う
戦いのセオリーである
それは甲児自身も納得していた
だが、遭えて甲児はそれに乗ったのだ
甲児に負ける気など微塵もない
それは今甲児が操っている魔神が居るからだ
かつて、この魔神と共に地球の平和を守ってきたのだ
そして、今姿こそ変われどこの魔神でもう一つの世界「ミッドチルダ」を守る為に戦うのだ
ふと、そんなカイザーの付近を一機のヘリが飛んでいた
ヘリを見ると何処かのＴＶ局を思わせる名前が書かれていた
そして、ヘリの扉を開けて金髪の美人な女性レポーターがマイク片手に何かを話していた

「ん？テレビ局か？」

甲児は気になり通信回線を開き彼女が言っている事を聞いた

『ご覧下さい。私達を苦しめた悪の軍団、デビルマジンガー軍団を赤子のように捻り潰した無敵の魔神が今、私達の世界を守る為に戦

っています』

レポーターが言っているのは間違いなくマジンカイザーの事であった
それを聞いた甲児は何処か恥ずかしいような嬉しいような気持ちになった
そしてヘリに向かって手を振って見る

『あぁ、魔神が私達に向かって手を振ってくれました。きっと奴等は任せておけと言う合図なのでしょうか?私達はミッドチルダ全域に住む皆様に希望をお届けする為にこの魔神と同行してその勇姿をお届けするつもりです』

レポーターが言う
それを聞いた甲児は俄然やる気が増してきた

「よっしゃぁ!其処まで言われたら益々気合が入るってもんだぜぇ!見てろ、その絶望って奴を俺とマジンカイザーが叩き壊してやる」

甲児が叫び更にスピードを上げる
それを見たレポーターの顔に笑みが浮んだ

「やれやれ、迫真の演技でしたねぇ・・・ドゥーエさん」
「フフ、演劇団に入れるかしらね?」

笑みを浮かべながらレポーターの姿から元の戦闘服姿に戻るドゥーエと、ヘリを操縦するヴァイスがお互いに笑っていた

(頼りにしてるわよ、甲児くん)

ドゥーエは心の中でそう呟いていた

「何時までもてめぇらの尻なんざ見たくねぇぜ！」

甲児は叫びスピードを上げる

その前では五大将軍がどうやってマジンカイザーを倒すか話し合っていた

「マズはこの俺が奴とやりあう」

そう言ったのはスカラベスであった

そして大地には無数の昆虫型戦闘獣が待機していた

その数はデビルと同じ位の数が居る

「これだけの数の戦闘獣を使えばマジンカイザーなど赤子も同然・・・」

言葉は途中で区切られた

その原因は後ろから迫って来たマジンカイザーである

カイザーが猛スピードで迫りスカラベスの頭部を掴んでそのまま地面に叩きつけたのだ

激しい振動が大地を揺らす

そんなカイザーの回りを昆虫型戦闘獣の群れが襲い掛かる

「雑魚が何匹集まったってこのマジンカイザーに勝てる訳ないだろうが！纏めて吹き飛ばしてやる！」

カイザーの口から強烈な突風が放たれた

ルストトルネードである
それを浴びた戦闘獣は忽ち塵も残らなかった
それを見てスカラベスはぎょっとした

「馬鹿な・・・我が昆虫型戦闘獣軍団がこうもアッサリ・・・」

その顔は真っ青であった
そして、そのカイザーの矛先が今度は自分に向けられると悟り将軍の誇りなど構わず一目散に逃げ去ろうとした
だが、それをカイザーが許す筈がない

「逃すかぁ！」

甲児が叫ぶ
そしてマジンカイザーの右腕が唸りを上げて高速に回転する
そして炎を吹き上げて飛んでいく
ターボスマッシャーパンチである
その拳はスカラベスを背中から貫き真っ二つに引き裂いた
スカラベスの口から絶叫とドス黒いオイルが吹き出た
その直後、スカラベスは爆発し、彼の体の一部であった機械の部品が辺りに散らばる

「まさか・・・スカラベスがこうもあっけなく・・・」

残りの将軍達も驚いていた
そんな中、アンゴラスが動いた

「いかに強いマジンカイザーであっても水中では能力が落ちる筈！
我等深海戦闘獣軍団で叩きのめしてやる」
「アンゴラス！油断するな」

ドレイドウが釘を刺すように言う
それにアンゴラスが頷く
するとアンゴラスは口から緑色の火炎を放った
マジンカイザーはそれをかわし、次の標的をアンゴラスに定めた

「それで良い、さぁついて来いマジンカイザー。お前を海の底と言う名の墓場に導いてやる」

アンゴラスはニヤリとした
それこそがアンゴラスの作戦である
しかし、この時彼は気づいていなかった
それは、彼は知らぬ内にマジンカイザーを過小評価していた事に

やがて、二体が広大な海上を飛行する
すると突如海面から怪魚型戦闘獣の頭が現れマジンカイザーの足を掴み海中に引きずり込んだ

「何！ち、一杯食わしやがったな」

甲児は舌打ちした
そしてそのままマジンカイザーを海面の岩場に叩きつける

「ホホホ、海の中ではこちらの物、海中でくたばるが良い」

怪魚型戦闘獣がそう呟く
だが、その時であった、彼の腹に猛烈な痛みが走った
何事かと思った時、それは己ずと分かった

巨大な黒き腕が自身の腹を貫いていたのだ
そしてその眼前には怒りの形相を思わせる顔をしたマジンカイザーと兜甲児が居た

「くたばるのはてめぇらだ！」

甲児が言う
そしてその戦闘獣の頭部を掴み頭上で真っ二つに引き裂いた
黒いオイルが海中に漂いあたりを濁す
それを皮切りに海中に居た戦闘獣軍団が襲い掛かる
だが、結果は見えていた
マジンカイザーに水中という弱点などない
その為戦闘獣は次々と屍の山を築く事になった
やがて海面からアンゴラスがやってきた
マジンカイザーの亡骸を回収するためである
だが、其処に居たのは、本来なら残骸となっている筈のマジンカイザーが全くの無傷で立っており、そしてその回りには自身の放った戦闘獣軍団が無残な姿となって横たわっていた

「そ・・・そんな馬鹿な！」

アンゴラスは恐怖した
勝てない
自分ではこいつに勝てない
そう思った時には既に遅かった
マジンカイザーの太い腕が唸りを上げてアンゴラスを吹き飛ばす
顔面を殴られたのだ
そしてそのまま背面にあった岩を突き抜けて岩盤に叩きつけられる
たった一撃であった
たった一撃でアンゴラスはボロボロの状態にされたのだ

何と恐ろしい敵なのだ
アンゴラスはそう思っていた
その前をマジンカイザーが向かって来た
苦し紛れにアンゴラスが火炎を放つ
だが、それでカイザーが焼かれる筈がない
カイザーはその炎の中を平然と向かって来たのだ
そして今度はアンゴラスの胸に蹴りを放つ
再び岩盤を突き抜けてアンゴラスは吹き飛ぶ

「どうした？自慢の水中で戦ってるってのにてめぇらの実力はその程度なのかよ！」

甲児が鼻で笑っていた
ふと、そんな甲児の前を一つの影が横切った
それは人の姿をしていた
嫌、純粋に人であったのだ
それは管理局所属の若き魔道士の亡骸であった
それも一人ではない
カイザーの回りにはそれこそ数百と言えるほどの局員達の亡骸が浮んでいた
皆アンゴラス率いる戦闘獣に挑み殺されたのだ
それを見た甲児の中に激しい怒りがこみ上げてきた

「許さねぇぞ・・・てめぇらだけは一匹も生かしちゃおかねぇ！徹底的に叩き潰してやる！」

上空から三人の将軍達は海面を見ていた
アンゴラスが戦っている為にこうして待機していたのだ

「アンゴラスに勝機はあるだろうか？」
「奴は海中では無敵だ。負ける筈がない」

ユリシーザーがそう言う
すると海面を振動が揺らす
激しい振動と轟音が響く
それは爆発音とも聞き取れる感じがしたが、違った
何か固い物を殴り壊した音である
まさか・・・
一同が戦慄した
その時、海面を勢い良く何かが飛び出た
アンゴラスである
手足を失い体もボロボロのアンゴラスが海中から飛び出たのだ
それから少し遅れて海面からマジンカイザーが飛び出してきた
カイザーはその深紅の翼でアンゴラスの胴体を真っ二つに引き裂いた
引き裂かれたアンゴラスはそのまま上空で爆発し無残にも機械の部品を空に撒き散らした

「馬鹿な・・・海中でアンゴラスが負けるとは」

ドレイドウは信じられなかった
マジンカイザーは無敵なのか？
そうさえ思えた
その目の前に居るマジンカイザーには真っ赤なオーラが漂っていた

「お前達のせいで・・・お前達のせいで大勢の人が死んだ・・・
絶対にてめぇらだけはゆるさねぇ！！」

甲児が怒りの咆哮を上げる

そして猛スピードでツッコミユリシーザーを殴り飛ばした

「ガハァ」

悲痛の声を上げてユリシーザーは大地に落ちる
其処は一面砂漠の海であった
何とか起き上がるユリシーザー
しかし其処へマジンカイザーの練撃が襲い掛かる
唸りを上げて腕が、足が襲い掛かる
ユリシーザーに反撃する時など無かった
只なすがまま殴り続けられていた
そして、その頭部を掴んで目の前のピラミッドに思い切り投げつける
背中からピラミッドに叩きつけられたユリシーザーは既にボロボロであった
対するマジンカイザーには傷一つついていない

「おのれ・・・おのれえええええええええ！」

ユリシーザーは最後の抵抗にと頭部にあった炎の飾りを外しマジンカイザーに向かって投げる
しかしカイザーは自身の背負っていた深紅の翼を外し、それを手で掴むとユリシーザーに向かって投げつけた
高速で回転する翼はユリシーザーの炎の飾りを叩き壊しユリシーザーの元へ向かって来た

「ば・・・化け物め・・・」

それが最後の言葉であった
その直後、深紅の翼がユリシーザーを通り過ぎカイザーの元へ戻っていく

カイザーはそれを手で掴み背中に装着すると空に舞い上がる
その直後、ユリシーザーは真ん中から縦に真っ二つに引き裂かれた
残ったのはハーディアスとドレイドウの二体だけである
覚悟を決めた二体は上空でカイザーを迎え撃つ事にした

「とうとう残ったのはお前等だけみたいだな」
「おのれ、こうなれば刺し違えるまでよ！」

ハーディアスが自身の得意とする呪術を展開した
奇妙な文字が彼を中心に現れる
するとカイザーの足元に紫色に輝く魔方陣が現れ、其処から無数の
悪霊がやってきた
悪霊達はカイザーの体に張り付き侵蝕しようとする
だが、カイザーは大して気にしてはいない
その証拠に甲児の目は未だに紅蓮の炎の如く燃え滾っていたのだ

「こんな子供騙しで俺を倒せると思ってるのか？舐めるんじゃねえ
えええええええええ！」

甲児が叫びカイザーが纏わりついていた悪霊を吹き飛ばす
吹き飛ばされた悪霊達はそのまま霧の如く消え去っていった

「お・・・おのれぇぇぇ！」

決め手を失ったハーディアスが鎌を両手に持ち切りかかる

「だったらこっちも剣を使うぜ！ショルダースライサァァァ！」

甲児が叫び両肩から二本の剣を取り出す
そしてそれを両手に持ち流れるように振るう

一瞬空を何かが舞った
それはハーディアスの両手である
カイザーが一瞬の内にハーディアスの両手を切り裂いたのだ
痛みにのたうち回るハーディアス
ショルダースライサーを戻したマジンカイザーがハーディアスの顔を掴む

「てめぇには裁きの雷をお見舞いしてやるぜ！ボルトスパァァァァク！！！」

カイザーの頭上に幾重もの雷光が降り注ぎ、それが全て二本の巨大な角に集まる
そしてそれを伝ってカイザーは白熱の閃光を放つ
それを手を伝ってハーディアスが浴びる
苦痛の悲鳴を上げながらハーディアスが必死にもがくも両手が無い為に引き剥がす事が出来ない
やがて抵抗が無くなった
ハーディアスであった黒く焦げた物体はそのままカイザーの手で握りつぶされたのだ
カイザーはその後残ったドレイドウを睨んだ
其処には今まで以上の怒りがこみ上げていた

「ドレイドウ！てめぇには俺がアイツの変わりに鉄拳を叩き込んでやるぜ」
「アイツだと？一体誰だ？」
「とぼけんじゃねぇ！てめぇらが初めてこの世界に来た時にお前が傷つけた奴を忘れたのか？」

甲児が叫ぶ
それを聞いてドレイドウが思い出した

それは雪の振る日であった
一人の幼い魔道士が自分に挑みそれを返り討ちにした記憶がある
その幼い魔道士とは

「ヴィータから聞いたぜ・・・てめぇは俺達が居ない間になのはと戦ってあいつに瀕死の重傷を負わせたってなぁ」
「それが・・・それがどうしたというのだ？」

反論するもその声は震えていた
マジンカイザー・・・そして、兜甲児から放たれる怒りのオーラに圧倒されているのだ
そのオーラそのままに甲児は叫ぶ

「俺の大事な仲間を傷つけた礼だ！てめぇは徹底的に叩きのめしてから地獄に送り返してやるぜ！！！」
「舐めるなぁぁぁぁ！」

ドレイドウが叫び竜の顔から炎を放つ

「うるせぇ！ファイヤァァァブラスタアアアアアアア！」

カイザーの胸の赤い放熱板から太陽の温度に匹敵する熱線が放たれたそれはドレイドウの炎を掻き分けドレイドウを焼き地面に叩きつける

「ぐわあああああああああああ！」

逃げ場をなくし地獄の業火とも思える炎がドレイドウの全身を焼き尽くす

「俺の仲間を・・・俺の居る世界を・・・俺の大切な人達を傷つけ

た罰だ・・・二度と戻ってくるんじゃねえええええええええええ！」

怒りの咆哮を上げてカイザーはフルパワーでファイヤーブラスターを放った
その威力は先ほどの十倍は軽く超えている
その威力がドレイドウの全身に当たったのだ

「ま・・・魔神は・・・マジンガー・・・は・・・化け物・・・なの・・・か・・・」

そう言い残し、ドレイドウはこの世から姿を消した
七大将軍はマジンカイザー一体の為に全滅にさせられたのだ
圧倒的・・・正に圧倒的であった
苦戦などない
善戦とも言えない
勝負にならなかった
圧倒的物量をマジンカイザーはひっくり返し、機鋼帝国の勢力を大きく減らしたのであった
すると、そんなカイザーの前に黒い巨大な城が現れた
それこそ、機鋼帝国の根城「機鋼城」であった

「あそこにお父さんが居るのか・・・そして、機鋼王が・・・待ってろよおとうさん、今度は俺が助けるぜ！そして機鋼王を今度こそ叩き潰す！」

甲児は拳を握り締めてそう宣言し、一人機鋼城に向かって飛んでいった

次回予告

ミケーネ七大将軍、恐竜帝国、百鬼帝国、邪魔大王国を倒したダイナミックチーム
残る敵は後僅か
だが、そんな彼等の前に真の敵が現れる

次回「降臨！希望を断つ邪神」

次回もこの小説にテイィィィィィィクオォォォォォォォォォフ！！！

大逆転！勝利を呼べ、マジンカイザー　その４（後書き）

次回、真の黒幕が出現
お楽しみに

降臨、希望を断つ邪神　その１（前書き）

今回は色々と飛びます

降臨、希望を断つ邪神　その1

管理局地上本部
ミッドチルダの平和を守る最後の砦とも言われた場所である
此処で多くの局員達が集まり日々平和の為に日夜戦い続けていたのだ
だが、今その地上本部は混乱の真っ只中に居た
それもその筈である
管理局の最高司令官があろうことか敵の回し者であったのだ
その為多くの局員達が誰を信じれば良いのか分からなくなり、疑心暗鬼に陥っていた
しかし、そんな彼等をいち早く纏め上げたのが彼であった

「馬鹿野郎共！異世界の若者達がこの世界を守る為に必死に戦ってるってのに何俺達がまごまごしてんだ！それでも管理局の精鋭か！」

年の利いた重い声が響き渡る
レジアス中将である
彼は両手にあろうことか質量兵器であるバズーカ砲とガトリング砲を持っていた
上着は既に脱いでおり白のワイシャツは激戦のせいで黒く汚れところどころが破れていた
しかしその目には未だ衰えぬ闘志が宿っていた
それを見た多くの局員達がまた奮起した
彼についていこう
彼と共に戦おうと
そう心に決めた局員達は味方が誰なのか、敵が誰なのか理解し武器を取り応戦した
目の前には今にも自分達の命を刈り取ろうと迫り来る機鋼兵の姿が見えた

西洋の鎧を思わせる風貌であるが、その内には人間ではなく人間の脳を内臓した機械の塊が入っているのだ

「容赦するな！俺達が引き下がれば後ろには市民が居る事を忘れるな！」

レジアスが先陣を切って叫ぶ
手に持っていた武器を一斉に放ち機鋼兵達を吹き飛ばす
打ち漏らした敵は回りの局員達が魔弾を用いて迎撃する
機鋼獣ほどの強力なＡＭＦは機鋼兵では内臓する事は出来ない為局員達でも機鋼兵の迎撃は可能であった
しかし、粗方機鋼兵を倒したその後ろには、それより遥かに数の多い小型機鋼獣の姿があった

「ちゅ、中将！機鋼獣です！機鋼獣が目の前に居ます」
「落ち着け！でかさは同じなんだ！臆するな！」

そうは言うが彼等の脳裏には既に機鋼獣の強さ、恐ろしさが骨の髄にまでしみこまされていたのだ
その為殆どの局員達が逃げ腰に近い状態になっていた
無理も無い話しである
今まで幾千、幾万と言う勇敢な局員達があの機鋼獣の餌食になったのだろうか
そう思うと胸が痛む
だが、レジアスは引き下がる気などなかった
自分が引き下がれば後ろには市民達が居る・・・確かにそれもあっただが、それ以上に彼を不退転の覚悟に仕立て上げたのはその意地である
管理局中将の意地、そして何より男としての意地である
異世界の少年少女達が見ず知らずの自分達の世界を守る為に命掛け

で戦っている
それなのに自分達が逃げる訳にはいかない
そう思えたのだ

「戦えない奴は下がれ！無駄に命を落とす事はないぞ！」

戦えない事を察したレジアスは回りの局員達にそう言う
無理に戦って命を落とす事など彼自身望んではいないのだ
最初それを聞いて局員達は困惑したが、やがて深く頭を下げて前線から下がった
恐らく市民達の救援に向かったのだろう
それで良い、もう死ぬのは俺一人で充分だ
そう思えた
そして両手の武器を構えていざ行こうと思った時、ふと脳裏に一人の青年の姿が思い浮かんだ
それはかつて共にミッドチルダの平和を誓い合った親友と呼べる者であった
あぁ、もうすぐ俺もアイツのところへ行くんだな
そう思うとふと笑みが零れた
だが、

「戦いの最中に笑うとはお前らしくないな」

それは聞き覚えのある声であった
まさか、そんな・・・
信じられない光景であった
それは目の前に居た一人の青年が幾多の小型機鋼獣を一振りで吹き飛ばしていたのだ
そして、振り返った時、その顔は彼が・・・レジアスが最も見慣れた顔であった

その名は・・・

「ゼスト・・・お前、ゼストなのか？」
「当たり前だ、友の顔を忘れたのか？」
「忘れる物か！だが、お前は何故・・・」
「話しは後だ、まずは目の前のこいつらを片付けるぞ」

ゼストはそう言って振り返る
そんな二人の前には地平線を埋め尽くす程にも居そうな小型機鋼獣が迫ってきていた
正直二人でこれを相手にするのは苦しいと、そう思えていた

「やれやれ、どうなってるかと心配になって来て見りゃこの有様かい？」
「誰だ！」

突如したのは女の声であった
二人は振り返る
すると其処には煙管を片手に持っている羽織を羽織った女性であった
この戦場には余りにも場違いな女性である
だが、レジアスはその女性を知っていた

「お前・・・翼か？」
「ほぅ、あたしの事を良く覚えてくれたもんだねぇ。管理局を喧嘩腰同然で辞めた身だってのにさ」
「お前の手腕は凄まじい物だったからな、正直お前が居なくなってから更に管理局はガタガタになったよ」

レジアスは苦笑いでそう言った
だが、翼は余り興味なさそうである

「なんだい？またあたしに管理局に戻れってのかい？冗談じゃないよ！誰があんな狭苦しいところに戻るかね・・・それより、祭りは派手なのが良いだろう？こんな風に」

翼が意味深な発言をする
すると目の前に迫ってきていた小型機鋼獣の大半が突如発せられた眩い閃光の中に消えていった
嫌、蒸発していたと言うのが正しいのかもしれない

「な、何だあの光は？」
「あれが光子力爆弾さ、こっちの世界には無い力さ・・・どうせこのままじゃこの世界はブッつぶれるんだ・・・だったら中途半端じゃ面白くないだろう？何事も派手に行くのが筋ってもんさね」

翼は煙管を叩いて言う
そして煙管の先端を機鋼獣達に向ける

「さぁ、出番だよ！くろがね屋の皆の衆」
『へい！女将さん』

そうドスの利いた声が響くと彼女の背後には何時の間に居たのか大勢の武装した次元犯罪者達、そしてくろがね屋五人衆の姿があった

「お前達、遠慮するこたぁない！機鋼獣は蟻の子一匹逃すんじゃないよ！」
『合点でぃ！』

翼の言葉に皆が頷く
そして一斉に機鋼獣の群れに襲い掛かった

その様は圧巻であった
大勢の次元犯罪者達が彼女の為に命掛けで戦っているのだ
其処には次元犯罪者などの垣根などない
人間、そう・・・彼等も同じ人間なのだ
この戦いはもう機鋼帝国と管理局の戦いなどと言う小さな物ではないのだ
人類の脅威と人類による決戦だったのだ

「レジアス、まだ戦えるか？」
「馬鹿にするな！これでも元陸士だ！まだ技は錆び付いちゃいねぇ」

両手の武器を手放し腕を鳴らしてレジアスが言う
それを見てゼストが微笑む

「なら、行くぞぉ」
「おう！」

くろがね屋に続きレジアス、ゼストの両名も向かっていく
先ほどとは打って変わって今度は機鋼獣が押される形になった
するとどうだろうか、今度は地面から無数の化け物が現れた
デーモンである
余程この地上本部を陥落させたいのだろう
しかし、デーモンの存在を聞いてこの男もこの世界にやってきていた

「相手がデーモンなら俺に任せな」

次元犯罪者達の中にいた一人の青年がそう呟く
そして両手を交差して天に片腕を突き出して叫ぶ

「デービール！」

すると青年の姿はみるみる内に巨大なデーモン・・・否、デビルマンになった

「覚悟しなデーモン！デーモンハンターのデビルマンが相手をしてやるぜ」

デビルマンがデーモン軍団に向かって突進した
そして次々とデーモンを蹴散らしていく
最早勝負はついた物であった
次元犯罪者、管理局、そしてデビルマン
今それぞれが互いに力を合わせて一つの世界を守る為に戦っていたのだ

＊＊＊

「剣造！あれは何だ？あのマジンガーは一体なんだ？」

原蔵は目の前に居る剣造に聞いた
それに対し剣造はニヤリと微笑んでいる
その顔が原蔵には溜まらなく気に入らなかった
そして、すっと剣造は上を向く

「教えよう、あれこそ貴方の探していた本物のZだ」

「何？あれがか？」
「そう、本物のＺに地上、ミッド、そして古の都アルハザードの技術を集結して作り上げた最強のマジンガーだ」
「馬鹿な！デビルを上回るマジンガーがこの世にある筈が・・・」

認めたくなかった
自身の最高傑作がいとも容易く倒される事を
自身のロボットこそが最強である事を覆される事を
自身の作り上げたロボットより強いロボットが居ることを
認めたくはなかったのだ

「貴様、何時の間にあのようなマジンガーを作ったのだ？」
「貴方がずっと見もしなかった場所で秘密裏に作ってたんですよ」
「それは・・・まさか、虚数空間か？」

原蔵の言葉に剣造は頷いた
現状では機鋼獣でさえ虚数空間の中ではまともに動けないのだ
しかし其処を隠れ蓑にするとは恐ろしい男である

「だが、虚数空間を隠れ蓑にしたのにはもう一つ理由がある」
「何だそれは？」
「あのマジンガー・・・マジンカイザーの使っている装甲はデビルと同じ超合金ニューＺγです」
「馬鹿な！ならば同じ強度同士だ、マジンカイザーもダメージを負う筈」

その通りである
同じ材質同士がぶつかれば当然両方ともただではすまない
だが、マジンカイザーは同じ装甲のデビルをまるで紙細工のように破壊していくのだ

その理由が分からなかった
すると剣造が口を開く

「あの超合金ニューＺγは虚数空間の特殊な空間の中で精錬する事により突然変異を起こすのですよ」
「突然変異だと？では、あのマジンカイザーに使われている装甲はγではないのか？」
「そう、マジンカイザーを覆っている装甲は・・・超合金ニューＺαだ」

超合金ニューＺα
デビルマジンガーを守る装甲超合金ニューＺγの突然変異型である
超合金ニューＺγを虚数空間の中で精錬する事により装甲の材質が変異するのだ
その強度はγのおよそ数百倍にも及ぶ
また、その強度の割りに軽量で柔軟な為装甲への組み込みも容易であるのだ
正に最強の名に相応しい装甲である

「だが、装甲だけであれだけの強さがある筈はない？」
「流石はお爺さん・・・その通り、あのマジンカイザーには光子力の他にもう一つのエネルギーを使用している」
「それは・・・一体なんだ？」
「貴方も知っていよう？十年前のジュエルシード事件の折にフェイト・テスタロッサが行った事を」
「それは・・・まさか！」

原蔵は思い出した
十年前・・・
ジュエルシード事件の最終決戦時に甲児の乗ったマジンガーＺは獣

魔将軍の放った戦闘獣に苦戦を強いられていた
その際にフェイトは持っていたジュエルシードをマジンガー目掛けて投げたのだ
するとジュエルシードはマジンガーの中に入り込みスペック以上の力を発揮させたのだ
本来は有り得ない奇跡である

「まさか・・・マジンカイザーの中にはジュエルシードが組み込まれているのか？」
「その通り、最も、今カイザーの中に入ってるジュエルシードは十年前に使用したタイプの為抜け殻に近い状態ですがね」

そう、剣造は遭えて十年前にマジンガーに使用したジュエルシードを使ったのだ
縁起を担ぐと言う意味もあるが何よりあのジュエルシードの方が組み込みやすかったのだ
それに、抜け殻に近い状態と言ってもマジンガーを強くするには十分であった
それがカイザーを無敵の魔神皇帝に仕立て上げた要員である

「剣造・・・まさか貴様はこれを狙って・・・」
「その通り、全ては貴方の野望を打ち砕く為の事・・・最早勝負はついたのではないのですか？」
「ほざけ！現に貴様はワシの手の内にある。あの兜甲児に貴様を人質にすればマジンカイザーの進撃を止める事も容易いわ」
「甘いなお爺さん」

剣造は微笑んだ
それに対し原蔵が不満そうになる

「私は既に死んだ身だ。今更死を恐れる気などない。それに、甲児はもしもの時は私ごとお前を葬ってくれるだろう」
「き・・・貴様其処までの覚悟で・・・」

恐れ多いことであった
其処まで剣造は覚悟していたのだ
何故其処までの覚悟が出来るのだ
この世界はお前の知っている世界ではない
お前の住んでいた世界ではないのだ
なのに何故だ
何故其処まで命を掛けられるのだ
原蔵には理解出来なかった
その時であった、
突如機鋼城内に振動が伝わってきた
かなり大きな振動である
その為、原蔵の脳が入っていたカプセル内の液体が振動し、多数の泡がわきあがる

「何事だ！敵の攻撃か？」

原蔵がわめく
すると映像が映し出された
其処には一隻の次元航行船が機鋼城内に突撃したのだ

＊＊＊

「機鋼城内に侵入完了しました」
「まぁ、確かに突撃といえば突撃ね」

局員の言葉に艦長であるリンディは苦笑いを浮かべていた

「全く・・・あの子も誰に影響されたのかしらね」
『そう言うなリンディ』

不満の声を漏らすリンディの横に待機状態のデバイスが降り立ちそう告げた
声は男の声であった
その声を聞いてリンディが微笑む

「分かってるわよ、クライド」
『何はともあれ、アイツも随分逞しくなったものだ・・・あのまま彼等に会わなかったらこんな戦法は思いつかなかっただろうな』
「でしょうね」

二人はつくづくそう思った
そして目の前には自分達の言う息子とその仲間達が上陸する映像が映し出されていた

「全く、これが提督のする作戦ですか？」

機鋼城内に降り立ったヴェロッサが不満の声を漏らす

「しょうがないさ、他に良い手は無かったんだ。それにこの方が比較的安全だろ？」
「ですが、もっとスマートに行く事は出来なかったんですか？」
「奴等の砲撃の中を掻い潜って行きたいのかい？」
「・・・・・」

彼、クロノの言葉にヴェロッサは黙り込んだ
無論、無理だからだ
機鋼城はそれこそ動く要塞である
城の回りにはそれこそ防衛システムの砲台がひしめき合っていたのだ
まともにやりあえば何席次元航行船があっても足りない
其処でクロノはある一計を立てた
それは、機鋼城が転移してきた直後を狙っての突撃である
半ば賭けであったが、そのクロノの賭けは見事に的中した
機鋼城が次に転移してくるのは恐らくマジンカイザーの近く
そう予測したクロノがカイザーの近くに船を止めたのだ
すると丁度其処に機鋼城が来た訳である

「流石提督ですね。まさか其処までお読みになっているとは」

ヴェロッサの隣で自身のデバイスとバリアジャケットを展開したシャッハがそう告げた
だが、それに対しクロノは失笑を浮かべる

「本来ならこんな無茶な戦法はしないさ・・・けど、誰かが教えてくれたからね」
「兜甲児さん・・・ですか？」

ヴェロッサの言葉にクロノは頷く

成る程、確かに彼等ならこんな無茶な戦法幾らでもしますね
ヴェロッサもそれ位は察していた
甲児達マジンガーの戦いは生で見た事は無く、殆どが映像であった
しかし、そのどれもが無茶苦茶と言える戦いの連続なのだ
良くそれで今まで体がもったと思える程の
それほどまでにマジンガーを信用して、尚且つ超人的な体をもって
なければできない事である

「成る程、流石クロノ・ハラオウン提督が憧れるお方達ですね」
「それは皮肉のつもりか？」

クロノが不満そうに言う
勿論本気ではない
軽い冗談のつもりだ
それをヴェロッサも察したのか笑顔でかぶりを振る

「こりゃおぬし等！そんなとこで油売ってる場合じゃないじゃろう
！」

そんなクロノ達の後ろから老人の声と地響きを立てて近づく何かの
音がした
振り返ると、其処にはユニゾンサイズの十蔵とそれが操る魔神が居た

「十蔵さん、その魔神で大丈夫なんですか？確かそれは」
「馬鹿言え！剣造が作ったこのエネルガーＺ、そう簡単にぶっ壊れ
る訳なかろう！」

そう、十蔵が乗っていたのはかつてＪＳ事件の折に剣造が使用した
エネルガーＺである
あの時確かに自爆したのだが密かにその設計図を持っていたので十

蔵が組み上げたのだ

「こらぁ爺！一人でサボってんじゃねぇ！」
「私達でこれを扱うのって本当に大変なんですぅ！」

その後ろではアギトとリインが必死にエネルガーを動かしていた
分かると思うがユニゾンサイズが魔神を操るのは至難の業なのだ
十蔵が謝罪の言葉を述べながら操縦に戻る
するとエネルガーの両目が輝き再び大地を蹴る

「よし、僕達も行こう」
「はい！」
「私は戦闘が苦手ですので後方に居させてもらいます」
「ご自由に」

クロノが呟くヴェロッサに言った

「ねぇ、十蔵さん」
「ん？何じゃルーちゃん」

所変わって、エネルガーにはリイン、アギト、十蔵の他にルーテシアが同乗していた

「此処に、ドクターが居るんですか？」
「おう、居るぞぉ。あと・・・お前さんのおっかさんもな」
「私の・・・お母さんも？」

静かに呟く
そんなルーテシアに十蔵は頷く

「恐らく原蔵のことじゃ、お前さんの自由を奪う為におっかさんを人質にする事もあるじゃろう。その前に奪い返すぞ」
「うん」

ルーテシアは静かに頷いた
そして、一同は機鋼城内に入り込んだ
それは、時を同じくして甲児も入っていた

「雑魚に用はねぇ！退きやがれぇ！！」

甲児の乗ったマジンカイザーは行く手を遮る機鋼獣や合成獣を火の粉を払うかの如く蹴散らしていく
目指すは父、剣造の元へ・・・

＊＊＊

甲児達の侵入は完全に原蔵には予想外の出来事であった
突然の侵入により機鋼城は破壊の限りを尽くされている
外部には鉄壁を誇る城も内部は脆い物だ

「おのれ・・・おのれマジンガーめ・・・おのれ十蔵めぇぇぇ！」

原蔵は憎しみを込めてそう言った
だが、それとは逆に剣造は笑っていた

「諦めたらどうだ?もうお前に勝ち目はあるまい?」
「抜かせ!こうなったら剣造!貴様だけでも先に地獄に送ってやるわぁ!」

原蔵がそう叫びその回りに無数のレーザー発射装置が一斉に向けられる
だが、その時剣造の背後の両端から巨大な腕が飛び出した
凄まじい音を立てて壁を突き破り剣造に向けられていたレーザー砲を全て破壊する

「な、何だ!」
「これは・・・」
「無事か剣造!」
「その声は、お父さん」

剣造は振り返った
其処には本来ある筈の無い魔神とそれに乗った父兜十蔵が居た

「剣造、わし等じゃこれを扱うのは厳しいんじゃ!さっさと動かしてくれぃ」
「有り難い」

剣造はそう呟き、自身を拘束していた手錠と足錠を力任せに引き千切る
そして腕を伝いエネルガーの操縦席に飛び乗った

「はぁ、やっと来たぜ」
「これで重荷もとれたですぅ」
「すまなかったな、皆」

へたり込むリインとアギトに剣造は言った

「ドクター」
「ルーテシアか」

後ろには剣造に抱きつくルーテシアがいた
彼女にとっては剣造は母親を救ってくれようとした人でもあり、また自分の悲しみを理解してくれた人でもあるのだ
そんなかれが無事だったのが何より嬉しかったのだ
剣造はルーテシアの頭を残っていた手で優しく撫でる
そして前を向いて操縦桿を握る

「兜原蔵！」

その下ではエネルガーに続いてクロノ達が侵入していた
皆原蔵に武器を向けている

「チェックメイトですね・・・大人しく投降して貰いましょうか？」

冷ややかにヴェロッサが言う
だが、原蔵はそれに従う気など毛頭なかった

「馬鹿め！貴様等が来たのなら好都合だ！出でよデビルマジンガー軍団！」

原蔵が指示すると四方にあったハッチが開き、中から十体程のデビルマジンガーがやってきた

「まだ居たのか！」

「ばかめ、ワシはこんな時の為にこうしてデビルを配置していたのだ！さぁ、そのガラクタ諸ともゴミ屑になれぃ」

原蔵がデビルに攻撃の指示を与えようとした
正にその時であった
壁を突き破って何かが出てきた
巨大な腕である
弾丸の如く唸りを上げて拳が回りに居たデビルを粉砕していく

「な、何だ今度は？」
「あれは、ターボスマッシャーパンチ！」
「お父さん！」

壁を蹴破って来たのは拳を放った張本人であるマジンカイザー、そして兜甲児であった

「甲児！」
「お父さん、良かった。無事だったんだね」

甲児は安堵した
親子の再会である
だが、今はそんな余裕などない

「おのれ！ワシはまだ諦めんぞ！」

原蔵はそう言うと真ん中の台座から遥か下に降下していく

「野郎！逃げる気か？」
「待て甲児、奴を追う前にこの城の動力を破壊するんだ」
「動力？何故だい」

「今更脳みそだけで何か出来る筈がない。それよりも奴の守りの要を壊すんだ」
「成る程な、分かったぜお父さん」

甲児は頷いた
マジンカイザーとエネルガーZ
そして管理局の魔道士達
魔神と魔道士たちの共同タッグの結成である

降臨、希望を断つ邪神　その１（後書き）

次回も飛びます

降臨、希望を断つ邪神　その2（前書き）

今回ある作者さんからお借りした技が出ます
皆さん分かるかなぁ？

降臨、希望を断つ邪神　その2

満天の星ぼしが輝く漆黒の宇宙の中でデューク・フリードは驚愕していた
彼の目の前にあるモニターには、変わり果てた姿のベガ大王が居たからだ
小さなカプセルの中異様な色の液体の中をゆらゆら浮び
下半身はなく、上半身のみの体には無数の管が突き刺さっている
そして顔半分が機械となっておりその目が憎憎しげにデュークを、グレンダイザーを睨んでいた

「恐ろしいか？このワシが・・・だが、ワシをこうさせたのは他ではない貴様のせいなのだぞ、デューク・フリード」

ベガ大王の言葉がデュークに突き刺さる
憎しみの言葉が伝わる言葉であった
彼から伝わる感情は憎しみの一言に尽きなかった
だが、その思いはデューク・フリードにもあった

「自業自得だなベガ大王」
「何？」
「お前が今まで行ってきた悪行の数々を思い出せ！貴様の為に一体どれ程の星が滅ぼされたと思う？どれだけの人の血が流れたと思う？どれだけの罪無き人々が死んでいったと思う？」

デュークが次々と述べる
かつて恐星大王と恐れられたベガ大王が行ってきた数々の悪行がそれである
そしてその毒牙はデューク・フリードの母星であるフリード星にも

降り注いだ
ベガ星連合軍はフリード星の豊かな緑を焦がし、町を焼き海を枯らし、星自体をベガトロン放射線で埋め尽くしたのだ
だが、その星も今では復活し現在は地球の協力の元復興作業を行っている
だが、このままこのベガ大王を生かしておけばまた同じ悲しみを今度はこのミッドチルダに撒き散らそうとするのだ
それだけはさせてはならない
そうデュークは思った

「ベガ大王！今度こそ貴様を倒し、貴様との因縁を断ち切る」
「それはこちらのセリフよ！死ねデューク・フリード」

ベガ大王の憎しみの篭った叫びと共に要塞から無数の砲撃が降り注ぐ
それをダイザーが僅差でかわしそのまま要塞に近づくと両肩からハーケンを取り出して要塞の壁をきりつける
金属がひしゃげる音を立てて要塞の壁の一角が切られていく
だが、完全に切られる前に要塞の砲撃がダイザーの右腕に集中する
爆発が響いた
見るとハーケンを持っていたダイザーの右腕が肘の辺りから無くなっていた
破壊されたのだ

「まだだ！」

ダイザーは今度は顔にある雄雄しき角に雷を収束させて放つ
スペースサンダーである
スペースサンダーを浴びた要塞が白熱に閃光する

「フハハ、その程度か？グレンダイザー」

ダイザーのスペースサンダーを浴びても尚ベガ大王は余裕の笑みを浮かべる
すると今度は要塞がダイザーの正面を向く
するとその先端から収束されたビーム砲が放たれた

「くぅっ！」

ビーム砲を必死にかわす
だが、左足だけは回避が間に合わず音を立てて溶けていく
今のダイザーは右腕と左足を失った状態である

「大介くん！」
「兄さん！」

ミチルとマリアの乗ったスペイザーがベガ大王の要塞に攻撃を掛けるだが、ダイザーの攻撃でビクともしない要塞にスペイザーの攻撃では蚊が刺した程にも効いてないのだ
そして、反撃に放つレーザーの雨を避けるかするだけでもスペイザーには致命傷になりかねないのだ
力の差は歴然であった
しかも今のダイザーにはあの要塞を落とせる武装が無いのだ
あるとすれば只一つであった

「こうなったら・・・僕の命に掛けても奴を・・・」
「止めて！大介さん」
「！！！！！！」

その言葉を聞いてデュークは止まった
振り向くと其処にはひかるの乗ったスペイザーがあった

ダブルスペイザーである

「ひかるさん、一体何故？」
「ミチルさんに頼んで変わってもらったの。お願いよ大介さん！死ぬなんて考えないで！大介さんが居なくなるなんて、私考えられないわ」
「ひかるさん・・・だが、このままではベガ大王に勝てない、それに・・・僕一人の命で大勢の命が救われるなら、僕は覚悟を決める」

ひかるの言葉にもデュークは覚悟を変えないでいた
その時であった

「そりゃあかんよ大介さん！誰かの犠牲の上に成り立つ平和なんてあって良いわけないやん！」
「その声は・・・はやてちゃんか？」
「御免な、心配になってひかるさんに頼んで乗せてもらったんや。大介さん、逃げたらあかん！死ぬってのは逃げることや！私の知ってる大介さんは・・・そないに弱虫な筈はない！」
「はやてちゃん・・・御免、僕は危うく逃げるところだったよ」

はやての言葉にデュークは目覚めた
そして再び要塞に向き直る

「ひかるさん、はやてちゃん、今の僕には武器がない、君達の力を貸してくれるかい？」
「ええ、勿論よ」
「バッチシサポートするから安心してな」

デュークの言葉に二人は頷き機体を走らす
ダイザーは漆黒の宇宙の中で宙返りの如く一回転する

そしてその背中にダブルスペイザーが近づく

「コンビネーション、クロォォス！」

デュークが叫ぶ
それと同時にダブルスペイザーとダイザーがドッキングする
するとその刹那であった
ダブルスペイザーが突如眩い閃光を放ったのだ

「こ、これは・・・」
「大介さん！私宇宙じゃ戦えない代わりに、私の魔力を大介さんに、グレンダイザーに渡すわ。だから、だから勝ってな、絶対に勝ってな」
「私の力も大介さんに預けるわ！お願い大介さん！」
「負けないで、大介くん」
「やっちゃえ！兄さん！」

グレンダイザーに皆がエールを送る

「ミチルさん、マリア、はやてちゃん、ひかるさん・・・有難う、僕は皆の力を無駄にはしない！行くぞ、グレンダイザー」

デュークが叫ぶ
すると光を放っていた背中から天使の羽を思わせる翼が現れた
それが羽ばたきダイザーを漆黒の宇宙の中を飛ぶように飛行させる

「これは・・・今まで見た事のないスペイザーだ！」
「私達の思いがダイザーに・・・大介さんに力を貸してくれたのよ」
「そうか・・・有難う、皆の力で僕は奴を・・・ベガ大王を倒す」

ダイザーの視線にはベガ大王の乗る巨大な要塞しか映っていなかった

「小癪な！そのようなこけおどしにワシが怯むとでも思ったか？」

「こけおどしじゃないぞベガ大王！」

デュークが言いダイザーが一気に距離を詰める
そんなダイザーに向かって無数のレーザーが放たれる
ダイザーは左腕を眼前に翳す
するとその手を中心に薄い膜のような物が展開される
それは放たれたレーザーを尽く跳ね返した

「これは・・・まさか、魔法の力！」

「安心して大介さん！今のダイザーにそんなレーザー砲効きはしないよ」

驚くデュークにはやてが言う
そうか、これははやてちゃんの魔法の力なのか
内心そう納得した
そしてそのままの勢いで要塞の装甲表面に降り立つ

「今度はこっちから行くぞ！」

デュークがお返しにと腕を突き出す
その腕が唸りを上げて飛び出し、要塞内をかき回していく
そしてそのまま一直線に要塞の底を突き破って出てきた
その直後に要塞内部が爆発する
レーザーが四方八方に滅茶苦茶に放つ
勿論そんな物にダイザーは当たらない
反撃にと戻ってきた左腕を天に翳す
すると手には雷光に似た閃光が現れ、その閃光はやがてはやてのデ

バイス「シュベルトクロイツ」と同じ形になる

「はやてちゃん、君のデバイスを借りるよ」

デュークは一言そう言う
そしてそれを片手に持ち再び要塞に突っ込んでいく

「うおぉぉぉぉぉ！」

持っていたデバイスの一閃が要塞の壁を切り裂く
切断面は綺麗に切られていた
相当な威力を誇る

「まだだぁ！」

続けざまに各所にあったレーザー砲を次々と破壊していく
やがて要塞にあったレーザー砲は全て破壊されベガ大王の要塞は丸裸にされた

「馬鹿な！何故だ、何処にそんな力がると言うのだ？」
「貴様には分かるまい！己一人の欲望の為に人々の命を食らってきた貴様には、彼女達の思いの力を理解する事など出来る筈がない」
「思いだと？馬鹿な！世の中は力だ！力こそ全てだ！そのような余迷い言でワシがやられるはずがない！」
「嫌、お前が言ってるその世迷い言でこの世を去るんだ！これが僕達の最後の一撃だ！」

そう言ってグレンダイザーは両手を水平に広げる
胸の赤い放熱板が白銀に輝く

「受けろ！僕達の最後の一撃！！『ラグナロクストォォォォォム』
」
デュークが叫ぶ
すると白銀の光線が要塞に向かって放たれる
それを浴びた要塞は瞬く間に装甲、内部構造、全てが蒸発していった

「ワシが・・・ワシが此処で朽ち果てるのか？恐星大王と恐れられた・・・この・・・ワシがあああああああああああああ！」

ベガ大王が絶叫した
それが最後であった
その言葉を最後にベガ大王はこの世から完全に消え去った
残っているのはボロボロになったグレンダイザーと三機のスペイザーである

「終った・・・終ったんだ・・・」
「やったね・・・兄さん」

マリアはデュークにそう言った
彼女の目からは大粒の涙が流れていた
そして、それを見ていたデュークの目からも同じように大粒の涙が流れていたのだ

「終った・・・ベガ星連合軍は滅んだ・・・今度こそ・・・本当に・・・」

デュークはそう言った
だが、その言葉を彼女達は静かに頷くだけであった
誰も返し言葉が思いつかない

それが今の心境であったのだから

＊＊＊

闇の帝王の前には一人の女性が居た
金色の髪を片方で束ねたサイドテールと呼ばれる髪型に、左右の瞳の色が違うオッドアイの美しい女性である
紺色のスーツは何処か旧時代の王族を思わせる物であった
そして、そんな女性から放たれるオーラは神々しいものであった

「あれが・・・あれがヴィヴィオなのか？」

それを見た鉄也の第一声がそれであった
信じられない出来事であった
突然、見た途端彼女の姿や容姿が変わっていたのだ
今まで見慣れた五歳位の少女は何処にも居らず、居るのはなのはと同じ位の年頃の美しい女性である

「おのれ・・・何処までもワシの邪魔をするのか？」
「勿論だよ！あんたの歪んだ野望の為にこれ以上涙を流す人を私は見たくない」
「ほざけ！小娘の分際でぇ！」

闇の帝王が怒りの咆哮を上げる

そして纏っていた炎を矢の如く放つ

「こんなもの！」

だが、ヴィヴィオはそれを片手を翳し虹色に輝く結界を張り防いだ
その顔には苦悶の表情すらない

「今度はこっちから行くよぉ！」

ヴィヴィオが叫び闇の帝王との距離を一気に詰めてその顔面を蹴り飛ばす
蹴られた闇の帝王はそのまま壁に叩きつけられる

「凄い、あの闇の帝王を蹴り飛ばすなんて」

ジュンが声を上げる
確かにそうだ
闇の帝王はいわば精神の塊なのだ
それを蹴り飛ばすには、自身も相当のサイコパワーが無ければ無理なのだ
となれば、ヴィヴィオには闇の帝王に匹敵するだけのサイコパワーが備わっている事になるのだ

「おのれ、ワシの長年の夢を貴様のような小娘に阻まれてなるものか！」

「止めてみせる！あんたのその歪んだ野望は絶対に」

ヴィヴィオがそう進言し今度は拳を握り締めて闇の帝王を殴った
だが、本来ある筈の手ごたえが全くない
そして気がつくと、ヴィヴィオ自身は闇の帝王の炎の中に居た

「ばかめ！二度も同じてに引っかかるワシではないわ！我が地獄の炎で苦しみぬいて死ぬが良いわ！」

そう言うと彼女を地獄の業火にも似た炎の渦が襲い掛かる

「くぅぅぁあああああ！」

悲痛の声を上げる
闇の帝王の体の中をまるで舞い上がる木の葉の如くヴィヴィオがきりきり舞いになっている
逃げ出したいのだが闇の帝王の体の中では思うように動けないのだ

「ヴィヴィオ！」
「今行くぞ！」

そんなヴィヴィオを助けようと鉄也達が駆け出す

「させんわ！」

だが、そんな鉄也達を遮るかの如く今度はグレートに向かって炎の矢を放った
矢はグレートの脇腹、ビューナスの左足に刺さり爆発する
その際にグレートの脇腹からオイルが溢れ出て、ビューナスの片足が吹き飛んだ
なのはも爆風に巻き込まれバリアジャケットに焦げ目が入る

「くっ！」
「グハハハハ！剣鉄也よ！良く見るが良い！貴様の愛する娘が黒焦げの死体になる様をなぁ」

闇の帝王が下卑た笑みを浮かべるなかでヴィヴィオが未だにその中を舞っていた
その顔には苦悶の表情が浮んでいるのが見えた
それを見た鉄也の中で決断が下された

「舐めるな！何処の世に子を見捨てる親が居る！」
「馬鹿な奴よ！貴様もまた親に捨てられた身であろうが！」
「あぁその通りだ！俺は自身の親の顔すら知らない！だが、今の俺には愛する者が居る、愛する子が居る！それを守る為なら俺は何時でも偉大な勇者になる！」

鉄也はそう言って単身闇の帝王に向かっていく

「鉄也！」
「鉄也さん！」

ジュンとなのはが叫ぶ
闇の帝王はグレートに向かって炎の矢を放つ
それをグレートは両手をクロスして防ぐ
炎の矢がグレートの体に次々と突き刺さる
だが、それでもグレートは止まらない
止まる気配がないのだ

「パ・・・パ・・・」

弱り掠れた声でヴィヴィオが向かってくるグレートマジンガーを、剣鉄也を見た

「闇の帝王！娘は返してもらうぞ」

そう言ってグレートは闇の帝王の中に飛び込んだ
自身もまた地獄の業火の中をキリキリ舞になる

「くっ・・・うおおおおおおおおお！」

それでも鉄也は操縦桿を握り締める
そして同じようにキリキリ舞いになるヴィヴィオに向かって腕を突き出してその体を優しく掴む

「ぱ・・・パパ！」
「ジュン、高町！頼む！！」

鉄也はそう言ってヴィヴィオを掴んでいた腕を飛ばす
腕はそのまま闇の帝王の体を突き抜けてなのは達の元へ不時着する

「ヴィヴィオ！」

ジュンのビューナスとなのはがヴィヴィオに駆け寄る
なのはがグレートの腕の中に居たヴィヴィオに肩を貸して起こす
すっかり弱っているのか息が荒い
騎士甲冑もところどころが漕げており何処か焦げ臭い匂いがした

「ヴィヴィオ、大丈夫？」
「う、うん・・・でも・・・でもパパが！」
「鉄也さん！」

ヴィヴィオとなのはグレートを見た
其処にはヴィヴィオを助けた変わりに自分自身が闇の帝王の中をキリキリ舞っているグレートの姿があった

「フン、美しき親子愛と言う奴か！ならば剣鉄也をこの手で葬るまでよ！」

そう言って更に闇の帝王の体が赤く発光しだした
グレートの装甲の各所が音を立てて溶け出した
相当の熱量を誇っているのだ
しかもそれは操縦席に居る鉄也にも直に襲い掛かってきた

「ぐぅぅぉおおおおおあああああああ！」

鉄也が悲痛の叫びを上げた
今コンドル内の温度は既に１００度を軽く越えている
このまま此処に居てはグレートが溶ける前に鉄也の命が危ういのだ
どうすれば良い
どうすればグレートを、鉄也を救う事が出来るのか
なのはは悩んだ
鉄也はかつて１０年前の戦いの時に共に戦った人なのだ
彼女からしてみれば血の繋がりのないがもう一人の兄なのだ
それを見殺しになど出来ない
そう思っていた
その時であった

「撃て・・・高町！」
「て、鉄也さん！」

デバイスを通じて鉄也の声が響いた
かなり声が弱弱しい
もう余り時間がないのが伺えた

「撃て・・・お前の最後の切り札があるだろう・・・あれを・・・
スターライトブレイカーを越える最後の切り札を・・・早く！」
「で、でも・・・それを使ったら鉄也さんだって」
「フッ、お前にトドメを刺してもらえるなら本望だ！このままコイツに殺されるよりはマシだ！それにもう奴を倒す手立てはそれしか無いんだ！だから頼む！撃ってくれぇ！」

鉄也の叫びが木霊した
それを最後に通信が途絶えた
恐らくコクピット内の温度が限界を超え通信機がイカレタのだ
もう一刻の猶予もない
なのはは覚悟を決めた

「レイジングハート・・・モード・・・ファイナル！」
『Ｉｔ　ｉｓ　ｔｏｏ　ｄａｎｇｅｒｏｕｓ．　Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ．（危険すぎます！マスター』

なのはの言葉にレイジングハートが抗議する
だが、彼女も引き下がらない

「鉄也さんだって命掛けで戦ったんだよ！お願い、レイジングハート！！」

なのはが祈るように言う
それを聞いたレイジングハートは暫し黙り込んでいたがやがて

『Ｉｔ　ｈａｓ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ．　Ｍａｓｔｅｒｉｎｇ（分かりました。マスター』

レイジングハートは静かに承諾した

そして、なのはの足元に赤黒い魔方陣が展開される
カードリッジが全てロードされる
弾数から２０発は既にロードした筈だ
なのはの体にかなりの負担が掛かる
正直今の状態でこれは厳しい物である
だが、なのはも引き下がらない
鉄也が命を掛けて自分の娘を守ったのと同じように、自分もまたもう一人の兄を助けたいのだ

「スターライトブレイカーを越える・・・私の本当の奥の手・・・危険過ぎるから禁じ手にしてたんだけど・・・今それを使います！」

なのはは進言しレイジングハートを構える
その先端に赤黒い独特の色をした魔力光が集まっていく
それは最初野球ボール位の大きさだったのがやがて大きくなり人一人を飲みこめるほどの大きさにまで膨れ上がっていた
そしてなのはは声を上げてそれを放つ
その名は・・・

「デスペレードォォォ、デモンブレイカァァァァァァァ！！！」

名を叫んだと同時に赤黒い魔砲が闇の帝王に向かって放たれた
その一撃はその顔面に直撃する

「グオォォォォォォ！何だ！これ程の魔力をまだ持っていたと言うのかぁぁぁ！」

余りの強大な魔力に闇の帝王が驚く
しかし、放っているなのは自身の体は平気ではなかった
体の各所が悲鳴を挙げ始め、節々からは血管が切れて血が吹き出て

いた
その血が彼女の純白のバリアジャケットを鮮血に染め上げていく
視界が虚ろになり出してきた

「まだ・・・まだあああああああああ！」

そんな自身を奮い立たせるかの如くなのはは更に放つ
闇の帝王もそれを食らい苦悶の表情を浮かべる

「馬鹿な！貴様・・・死ぬ気か！」
「私は・・・私は負けない！お前みたいな・・・人の命を何とも思わない酷い人なんかに・・・私は負けない！」

なのはは大声でそう叫んだ
例え腕が吹き飛ぼうと
例え足が折れようと
例え五体がバラバラになろうと、この一撃だけは打ち続ける
その思いで撃っていたのだ

「くっ・・・うぅ・・・」

だが、そのなのはの表情からも察するとおり、もう限界が近いのだ
只でさえカードリッジ２０発のロードは体に多大な負担を掛ける
その上この禁じ手はなのはの命を削って放つ言わば「諸刃の剣」なのだ
既になのはの足の感覚が無くなりだし、視界も徐々に薄れてきていた
手の感覚も鈍っており、レイジングハートを握っているのか手放しているのかさえ分からない状態である

「まだ・・・ま・・・だ・・・」

自身を奮い立たせようと放った言葉も途中で途切れた
そして、遂に彼女を支えていた二本の足のうち片方が崩れなのはの体が地面に向かって落下する
今の彼女に体制を立て直す余力などなく倒れればそのまま意識を刈り取られるだけであった
だが、不思議となのはの体は地面に落ちる事は無かった
誰かが体を支えていたのだ
一体誰が？
そう思いなのはは自分を支えている存在を見た
其処に居たのは・・・

「間に合って良かったよ」
「ゆ・・・ユーノ君！」

其処には鮮血で汚れた騎士甲冑を纏い額から血を流した状態のユーノ・スクライアが居た
彼もまた此処まで来る際に機鋼獣との戦いを経た為か満身相違であった

「ユーノくん・・・どうして？」

掠れた声でなのはは聞いた
そんななのはにユーノは優しく微笑んで答えた

「本当はもっと早く助けに着たかったんだ・・・でも、やっぱり僕は弱いから結構時間掛かっちゃって・・・御免」

ユーノは申し訳なさそうに頭を下げる
だが、そんなユーノになのはもまた笑みを浮かべる

「気にしなくて・・・良いよ・・・だって・・・助けにきてれたんだもん」
「なのは」
弱弱しくもそう言ってくれたなのはの言葉にユーノは胸を打たれる思いがした
ユーノは両手でなのはの体を支える
「なのは、今の僕の魔力じゃ大した力になれないかも知れないけど・・・僕の魔力を君に送るよ」
そう言ってユーノの手を伝い彼の魔力がなのはに送られてくる
温かい力が体全体を通して伝わってくるのが分かった
そして、反対側には
「なのはお姉ちゃん、ヴィヴィオの力も使って」
「ヴィヴィオ！」
「お願い、パパを助けられるのはなのはお姉ちゃんしか居ないの！だから・・・だから、ヴィヴィオの魔力もお姉ちゃんにあげる」
そう言ってヴィヴィオもまた同じようになのはの体を支えて自身の魔力を送る
二人の魔力がなのはに力を与えるのが分かった
今まで感じていた苦しみが嘘のように消え去っていたのが分かった
視界もハッキリ見えるようになり、手足の感覚も元に戻った
そして、眼前にはハッキリと闇の帝王とその中でもがいているグレートマジンガーが映った
「鉄也さん・・・今、助けます！」

なのはがそう言って残った魔力
ユーノとヴィヴィオがくれた魔力を全てつぎ込んで最大の魔砲を放つ
それは今放っていた魔砲よりも更に大きく、更に太い魔砲であった

「ぐおおおあああああああ！」

闇の帝王の苦痛の声が響く
だが、まだ倒れない
なのはだけじゃない、ユーノやヴィヴィオにも苦痛の表情が浮び出してきた
特にユーノは重傷の域にまで達している傷を負っている
これ以上は危険であった

「ユーノくん・・・ヴィヴィオ・・・これ以上は二人共危ないから・・・私から離れて！」
「なのは・・・幾ら君の頼みでも・・・こればっかりは聞けないよ！」
「お姉ちゃんだけに苦しい思いはさせないよ！・・・ヴィヴィオもガンバル」

二人は頑として離れようとしなかった
そんな二人になのははは送る言葉が無く、只額を通じて涙を零すだけであった
その時、後ろのビューナスが動く

「鉄也、皆、私も戦うわ！光子力ビーム！」

ジュンの操るビューナスの目から光子力ビームが放たれる
そのビームもまた同じ箇所に当たる

「おのれ・・・おのれ・・・まだ死なんぞ！この程度でワシは死なん」

闇の帝王はまだ粘っていた
その時、彼の中に居たグレートにも動きがあった

「フッ、こりゃぁ、オチオチ寝ても居られんな」
「な、剣鉄也！まだ生きていたのか？」
「生憎だな、俺は不死身だ！この程度の熱で死ぬ訳がないだろう！折角だ、こっちも持っていけ」

グレートが両腕を水平に構える
そして胸のブイ字型の放熱板に熱が入る

「マジンパワーフルパワー！ブレストバアアアアアアン！！！」

グレートの胸から放たれた最大出力の熱線が真上に放たれる
全ての攻撃が同じ箇所、即ち闇の帝王の顔に向けて放たれる

「ぐわあああああああああああああああ！馬鹿な・・・このワシが・・・人間如きに・・・負けるのか？」
「諦めろ闇の帝王！お前の敗北は既に決まっていたんだ・・・そう、あの時の戦いからな」

鉄也はそう言ってフッと微笑む
そして最後の一撃にと足から一本の白銀の両手剣「マジンガーブレード」を抜き放ち、それを一気に闇の帝王の頭部目掛けて投げつける
投げつけられた剣は音を立てて闇の帝王の顔を串刺しにした

「ぐわあああああああああああああああああ！」

闇の帝王の断末魔の叫びが木霊した
すると彼自身のサイコパワーが逆流してくるのが分かった
余りの威力の為に目の前に居たなのは達は木の葉の如く吹き飛ばされビューナスもまたその巨体を壁に打ち付けられる
グレートはそのまま床に叩きつけられる形になった
そして激しいスパークが起こり闇の帝王が閃光を放ちこの世から消滅した

・・・どれ位経った後だろうか
鉄也は目を覚ました
グレートは装甲の殆どが溶け掛けており動く気配が全くないかなり酷い状態であった
幸いハッチは開くらしく鉄也はハッチを開いて外に出る
そして皆の居る場所まで歩いた
其処には先の衝撃で吹き飛び意識を失ったなのは達が未だに倒れたままであった
皆ボロボロである
起こそうと思ったが止めた
もうここらに敵は居ないのだ
それに居たとしてももう戦う力は鉄也には残っていなかった
その場に腰を降ろして一息つく鉄也
するとさっきまで感じなかった体中の激痛が今になって襲いかかってきたのだ
余りの痛みの為に意識が刈り取られるかと思えるほどである
だが、必死に踏みとどまった
此処まで来て気絶したのでは格好がつかないと思えたのだろう

すると、ビューナスAのあった方からジュンが歩いてくるのが見えた

「ジュン」
「鉄也・・・無事だったのね？」
「どうかな？腕も折れてるしアバラも何本か持っていかれてる・・・
それにグレートも今は動かないしな」
「お互い様よ、ビューナスも動かないし」

ジュンはそう言ってビューナスを見る
ビューナスもまたボロボロの状態であった
幸いジュン自身にはそれほど目立った怪我は無く鉄也は安堵した
するとグラリと鉄也が倒れそうになる
それを咄嗟にジュンが支える

「大丈夫？」
「あ、あぁ・・・流石に無理したみたいだ」
「無茶は貴方の専売特許ですものね」
「フッ、そうだったな」

ジュンの言葉に鉄也が笑う
すると、目の前で気絶していたなのは達がやがて意識を取り戻し起き上がる

「あ、鉄也さん」
「よぉ、大丈夫・・・じゃなさそうだな」
「ニャハハ・・・少し・・・無理しちゃいました」

場を和ます為の笑顔を見せるなのは
だが、鉄也達にも分かっていた
今のなのはには戦う力の殆どが残って居ない事を

やがて、ユーノとヴィヴィオも釣られて目を覚ます

「なのは・・・大丈夫？」

「戦う力は無いけど・・・大丈夫だよ・・・ユーノ君は？」

「僕もだいじょう・・・つぅ！」

大丈夫と言おうとした時、咄嗟にユーノは脇腹を押さえた

「ユーノ君！」

咄嗟に駆け寄ったなのはがユーノの脇腹を見た

其処には機鋼獣の残骸が突き刺さり今でも血が流れている光景であった

「お前・・・こんな体であんな無茶を・・・」

「す・・・すみません・・・でも、これ以上なのはに苦しい思いはさせたくなかったんです」

「ユーノ君」

ユーノの言葉になのはが思わず口元を手で覆う

その目にはうっすらと涙が零れた

「とにかく、今は応急処置を施さないとな・・・ジュン、頼めるか？」

「はいはい、無茶をする男二人とも皆面倒見てあげるわよ」

ジュンは溜息混じりに常備している治療キットを取り出すと治療の準備を始める

「ジュンさん、ユーノ君の治療は私にやらせて貰えませんか？」

「ええ、大丈夫よ。でも出来る？」
「大丈夫です」

ジュンの言葉になのははは頷く
それを見て了解したのかジュンはなのはに治療セットの一式を渡す
そして自身も鉄也の治療に入る
と言っても応急処置なので本格的な治療は出来ないのだが

「パパ」

そんな鉄也の元へヴィヴィオが歩み寄ってきた
姿は元の五歳児に戻っていた

「ヴィヴィオ・・・偉いぞ・・・良く頑張った」
「うん、だって・・・ヴィヴィオは鉄也パパとジュンママの娘だもん！」

ヴィヴィオは誇りを持ってそう言った
すると鉄也はそんなヴィヴィオの頭を優しく撫でてあげた
ゴツゴツした手だが温もりが感じられた

「ママ、パパはまた元気になるの？」

心配になったヴィヴィオがジュンに聞いた
するとジュンは笑顔で答える

「大丈夫よ、鉄也は偉大な勇者なんですもん、すぐに良くなるわよ」

そう言ったのだ
それを聞いたヴィヴィオの顔がパッと明るくなる

一方で、こちらではなのはがユーノの治療を行っていた
と言っても、治療魔法を使えれば良いのだが今なのはに残っている
魔力ではそれは無理であった
従って手作業でユーノの治療を行う事になったのだ

「ユーノ君・・・有難う」
「え？どうしたの一体」
「私ね、あの時心が折れそうだったの・・・もしあのままユーノ君
が来なかったら・・・多分もう私は立ち直れなかった・・・だから、
有難うって言いたかったの」
「なのは・・・僕の方こそ」

治療をしながらもなのはとユーノは互いを見つめ合った

「はい、治療終ったよ」

目立つ箇所を縫合して包帯を巻き一応の応急処置を終えたなのはが
手を叩いて言った
ユーノは起き上がろうとしたが、やはり体が言う事を聞かずそのま
まの体制であった
ゴツゴツした岩場に仕方なくユーノは頭を降ろす
それを見たなのはがそっとユーノの頭を自分の膝の上に乗せた

「え？なのは」
「御免ね・・・でも、こっちの方がユーノ君楽になるかなぁって思
ってね」
「なのは・・・有難う・・・とっても楽だよ」
「良かった」

ユーノの言葉になのはは笑顔になった
そんな二人を見て鉄也とジュンが笑っていた

「あの二人・・・すっかりお似合いになったわね」
「そうだな」
「ねぇねぇ、なのはお姉ちゃんとユーノお兄ちゃんはひょっとして
鉄也パパとジュンママみたいにパパとママになるの？」

ヴィヴィオが聞いた
それを聞いた途端、なのはとユーノは顔を真っ赤にしていた
すると鉄也とジュンはまた笑みを浮かべる

「さぁ、どうだろうな？」
「でも、結構お似合いの夫婦になるんじゃない？」
「て、鉄也さん！ジュンさん！」
「ふ・・・夫婦／／／」

二人はそれこそトマトと見間違える位に顔を紅く染めた
それを見て三人は笑う
ふと、鉄也は穴の開いた天井を見た
空には青い空が広がっている

（後は頼むぞ・・・皆）

戦えない鉄也は皆に思いを託すようにそう心の中で告げるのであった

降臨、希望を断つ邪神　その2（後書き）

続きます

降臨、希望を断つ邪神　その３（前書き）

遥か古代より戦って来た魔神が今蘇る！！！

降臨、希望を断つ邪神　その3

スバルは一人薄暗い空間の中をひた走っていた
辺りは暗い為目の前は一メートル先も見えない状態である
そんな中をスバルは己の勘を頼りに走っていた
この先にきっとこの戦いの鍵を握る物がいる
そう信じて走っていた
すると、やがて目の前を紅い光で照らす広い空間があった
部屋中が円形状であった
そして、その中央には何かが居た
一つの目をしてその下には無数の牙がギラついていた
そして、その体には無数の触手がゆらゆらと蠢いていた
その姿は何処かかつて、列車事件の折にスバルの肩口に噛み付いた異形「ケドラ」を思わせた

「これは・・・あの時・・・私を二つに分けた時の怪物・・・」

スバルが目の前に居た巨大な怪物を見て手に持っていたリュウコンを握り締めていた
すると、目の前に居た怪物の目がギョロリとスバルの方を向く

『やはり・・・お前が来たか・・・神と・・・悪魔を体に宿した・・・魔神の戦士よ』
「しゃ・・・喋った！」
『当然だ・・・我は・・・ケドラ達を生み出した者・・・ケドラ達の王・・・否、女王とでも言うべきかなぁ』
「ケドラの女王・・・クイーンケドラ」

スバルが押し殺すよな声でそう言った

するとクイーンケドラが無数に生えた牙をガチガチと鳴らせて歪に光らせた
とても不気味な輝きであった
その輝きは、全て目の前に居た獲物・・・スバル・ナカジマを見ているようであった
スバルは顔を強張らせてリュウコンを握り締める
こいつが・・・こいつがケドラを生み出した存在
即ち、こいつさえ倒せば全てのケドラは死に絶える
そう思えたのだ
だが、いざクイーンケドラに向かって駆け出そうとしたその時であった
ゴツンと足に何かが当たった
奇妙な感触であった
スバルは下を見た
それは……人の頭部であった

「!!!!!!」

スバルは絶句した
そう、それは生気を失くした人の頭部であった
それも、自分よりも年が行ってない少女の顔であった
それがこの部屋中に溢れ返っていたのだ
それも何十体では済まない
何百・・・何千体もの戦闘機人が転がっていた
其処でスバルは、ふとルーテシアの言った言葉を思い出した

「ケドラは戦闘機人を・・・糧にして成長すると」

そうだ
此処に転がっている戦闘機人は全て・・・全てクイーンケドラの腹

を満たす為の存在でしかなかったのだ
それを知った時、スバルの中に激しい憤りが感じた
例え作られた物だとしても、彼女達には未来があった筈だ
それを自身の野望の為だけに生み出し、こうして消耗品の如く使い捨てる機鋼帝国に・・・そして、それを食って成長するクイーンケドラに激しい怒りを感じた
絶対に倒さねばならない
もうこれ以上悲しい命を作らせる訳にはいかないのだ

「クイーンケドラ・・・お前を・・・倒す！」

スバルは強く言い放ちリュウコンを握り締めて飛び掛る
そんなスバルに向けて無数の触手が迫るがそれを切り払っていく

「うおおおおおおおおおおおお！」

全てを切り払い一気にケドラの頭部に向けてリュウコンを突き立てるだが、其処へ先の戦闘機人達がまるでケドラの盾になるかの如く前に立ちふさがった

「え？」

咄嗟の事であった為にスバルは完全に対応できなかった
そして、目の前に居た戦闘機人の胸には深くリュウコンが突き刺さった
鮮血が飛び散る
断末魔の声が響く
それを聞いたスバルの頭が真っ白になってしまった
そして、思わずリュウコンを手放してそのまま地面に落下してしまう

『どうした！スバル、しっかりせんか！』

リュウコンがスバルに怒声を掛ける
だが、今のスバルには全く届いて居ない
目がうつろになり自身の手を見つめていた

「わ・・・私・・・この手で・・・人を・・・人を・・・殺した・・・の・・・・・」

スバルは恐怖一色に囚われた
例え作られた存在とは言え命を自分自身の手で奪ってしまったのだ
ショックを受けない筈がない
ましてスバルにはこのショックは大きかった
そんなスバルの前にクイーンケドラが迫る

「ククク、こいつらもいざと言う時には役に立つな・・・只我の腹を満たすだけでなく、いざと言う時は盾になるのだからなぁ」

牙をガチガチ言わせながらクイーンケドラが言う

『一体どういうことだ！何故こいつらはお前を守ろうとしたのだ？』

リュウコンがクイーンケドラに聞いた
それに対しクイーンは答えた

「分からぬのか？こいつら戦闘機人は全て我の腹を満たす為に作られた存在。故にこいつらは我の手足として操る事も可能なのだ・・・まぁ、ロストナンバーズは制御出来ないがな」

クイーンは口惜しそうに呟く

そして、視線を未だに放心状態のスバルに向ける

「さて・・・そろそろ戦闘機人も飽きてきたところだ・・・ここらでメインディッシュを頂くとするか・・・魔神により作られた戦士・・・魔神戦士を・・・」

そう言うと、突如としてスバルの周囲に無数の触手が現れた
その先端は口になっており鋭い牙が生えていた
それが一斉にスバルに迫る

『スバル！避けろ！逃げろォォォォ！』
「りゅ、リュウコン・・・はっ！」

スバルの目に光が戻った
だが、その時には既に遅かった
無数の牙がスバルの体に突き刺さった
腕に、足に、腹に、首に、体中全てに鋭い牙が突き刺さり鮮血が辺りを紅く彩る

「くあああああああああああああああああああああ！」

スバルが痛みの声を挙げる
必死にその痛みから逃れようと体を動かすもその牙が深く食い込んでおり全く動く気配がない
それどころか更に深く食い込み血が流れる
しかも噛み付いていた牙の主である触手達は流れ出たスバルの血を啜っているのが分かった
体中の力が抜けていく感覚を感じた

「クハハハハ！何と美味な味だ！流石魔神戦士よ、うごかなくなっ

たら貴様の骨一本残らず頂くとしよう」

クイーンが微笑む
すると更に牙が強く噛み付き搾り出すように血を噴出させる

「うわあああああああああああああああ！があああああああああああ！」

痛みの余り目が大きく開き叫び声が聞いていられない物になった
最早今のスバルにはもがくだけの力など残っておらず声も徐々に擦れ出していた
やがて、スバルの視界が徐々に薄れ出していた

「く・・・・あ・・・・・ぁ・・・・・」

遂にスバルの口から声が消え去った
そして手がダランと落ちた

＊＊＊

「スバル！」

ティアナの脳裏には確かに聞こえた
それはスバルの苦痛の叫びである

だが、今スバルは自分達とは違う場所に居る
それなのにティアナにはスバルの苦痛の叫びが聞こえたのだ

「どうしたんスか？」
「今、確かにスバルの叫びが聞こえた」
「あの鉢巻？おいおい、アイツは今別世界に居るんだぜ。それにお前に聞こえるって事はあたし等にも聞こえる筈だろう？それなのに何でお前にだけ聞こえるんだ？」
「分からないわ。でも確かに聞こえたのよ」

ティアナは強めに言った
だが、今は話しだけをしている場合ではない
目の前にはコピーとは言え等身大の七大将軍が居るのだ
コピーとは言えその能力はかなりのものである
油断をしていればこちらがやられてしまうのだ
だが、スバルの身の安否も気になる
どうすれば良いのか

「どうしたんだ？」
「おいティアナ！何ボウッとしてんだ？死にたいのか？」

トーレとヴィータが言う
だが、今のティアナには目の前の敵よりもスバルの事が心配であった

（スバル・・・もしかしてあんたに何かあったの？）

バスターミラージュを握り締める手が汗ばんできた
不安なのだ
短い間ではあったが相性のあったパートナーである相棒に危機が迫ってきている

なのに自分は其処に行く事が出来ないのが溜まらなく悔しいのだ

「ティアナちゃん！一体どうしたの？」
「シャマルさん、お願いです！私をスバルの所に行かせて下さい」

ティアナは藁にもすがる思いで言った
最初こそシャマルは驚いたがその顔を見て彼女が真剣なのを察した
恐らく何か訳があるのだろう
そう感じたシャマルは静かに頷く

「任せて、恐らくまだ空間の歪みは残ってるかも知れないから私が貴方一人通れる位の大きさを維持してみるわね」
「お願いします」

ティアナの顔が明るくなる
だが、すぐに緊張の顔に戻った
急がねばならない
行ったは良いがついたら手遅れでした・・・では済まないのだ
シャマルはスバルが入って行った空間の歪みに自身のデバイスであるクラールヴィントで空間の穴を広げた
その大きさは小さく、人一人がやっと通れる大きさであった

「気をつけてね」
「はい、行ってきます」

ティアナが頷いて行こうとする

「おい、待て！」
「え？」

そんなティアナをノーヴェらが止める
振り返りティアナは見た

「何？」
「アイツに言っておいてくれ、今度無茶したら引っ叩くからなってな」

頬を染めてノーヴェが呟いた
それを見てティアナがクスリと笑う

「分かったわ、貴方がスバルの事を心配してたって言っておくから」
「って、おい！違うぞ！私は無茶したら引っ叩くって言っただけでそんな事は一言も・・・」

言い終わる前にティアナは空間の中に飛び込んでいた
そしてクラールヴィントも限界に達し空間から離れる
すると空間は縮小し、やがて閉じてしまった

「大丈夫でしょうか？二人は」
「何言ってるんスか？仲間を信頼しなきゃ駄目ッスよぉ」

心配そうな顔になるエリオの肩を叩きながらウェンディが笑う
口ではそう言ってるが彼女もまた心配なのだ

「お前達、そろそろこちらも始めるぞ」

ザフィーラが皆に言う
目の前では既に臨戦態勢を取った将軍達が居る

「念仏でも唱えていたのかね？」

「それはそっちの方だろう？」

軽口を叩く将軍にヴィータが答える
それを聞いた将軍達の顔色が変わる
明らかに不機嫌である

「覚悟しやがれ！てめぇら一匹残らず叩きのめしてやるからよぉ」

その言葉を皮切りに一斉に戦いが始まった

＊＊＊

「此処は・・・」

ティアナは何もない空間をひたすら走っていた
何時まで続くのか分からない
辺りは漆黒の闇だけである
そんな中を一人で走っていたのだ
音はない
自分の足で大地を蹴る音さえ無いのだ
まるで空の上を走っているようであった
薄気味悪い感じがした
早くこんな空間から出たい
でないと頭が可笑しくなりそうであった

すると目の前に眩い光が差し込んだ

「あそこね」

確信し、その光に向かった
其処には驚くべき光景があった
床一面には全裸の女性が転がっていたのだ
しかもそれらは体の節々に機械のコードやら部品などが見受けられた
恐らくこれらは戦闘機人の類であろう
それらがこの場にゴミのように投げ捨てられていたのだ

「うっ！」

思わずティアナは自身の口を覆った
喉から激しい不快感が襲ってきたのだ
口元まで出かかった吐き気を必死に押し戻して涙目になりながらも
ティアナは前を見た
すると其処には更に驚くべき光景が飛び込んできた

「スバル！！」

其処にはかつて列車事件で見たケドラの十倍以上の大きさの化け物
とその化け物の放った無数の牙により上空でズタズタにされダラン
としているスバルの姿があった
体のあちこちからスバルのものと思われる赤い雫が床を彩っていた
すると、目の前のケドラが大きく口を開いた
そして動かないスバルをゆっくりとその口元へと運ぶ
恐らく食す気である

「させるかぁ！！」

すぐさま飛び込みスバルを拘束していた触手の群れを切り払いスバルを抱えて一旦怪物から離れる
体中鋭い噛み傷だらけであった
その痛々しさが伝わってきたのかティアナは顔をしかめた

「スバル、スバル！」
「う・・・うぅ・・・」

ティアナの呼ぶ声にスバルは弱弱しく反応した
うっすらと目蓋を開く
其処には自身の相棒の姿があった

「ティア・・・どうして？」
「馬鹿、あんたが呼んだんでしょ！あんな大きな声で叫ぶから鼓膜が破れるかと思ったわよ！」

不満そうな顔でティアナが言う
それを聞いてスバルが首を傾げていた
恐らく自覚がなかったのだろう
すると目の前に居た怪物が今度はティアナを睨む

「ほぅ、魔神の戦士の次は魔神の魂を宿した輩が来たか。これは今日はついてるわ。久しぶりにご馳走にありつけると言うものよ」

目の前の怪物、クイーンケドラが牙をガチガチならしてそう言った
それを聞いたティアナの額に青筋が浮ぶ
食べる？冗談じゃない
こんな化け物に食べられるなんてまっぴら御免である
そう思ったからだ

「冗談じゃないわ！あんたみたいな化け物に食べられるのなんて御免よ」
「何と言おうとこの空間に居る以上は我の餌になるしか道は無いのだ。諦めろ」
「五月蝿い！だったらあんたを倒して二人で此処を出るだけよ！」

ティアナが自身のデバイスを構えて言う
そして自身の回りにオレンジ色の魔弾を複数呼び出す

「行け！クロスバスターシュゥゥウト！！！」

一斉にクロスバスターを放つ
だが、その魔弾を自身の持っていた触手で軽々と弾く
爆発が起こり払った触手は千切れ飛ぶ
だが、その後からまた新たに生え変わる
恐ろしい程の再生能力である

「無駄だ無駄だ！我にそのような武器は効かぬわ」
「くっ！」

ティアナは苦悶の表情を浮かべた
そんなティアナの元へ先ほどスバルに噛み付いたのと同じタイプの触手が襲い掛かる
それをティアナはスバルへ近づけないようにバスターミラージュを振るい切り払っていく
だが、切っても切ってもすぐにまた再生してしまうのだ
これでは埒があかない
そう思っていた時であった
とある一本の触手を切り裂いた時、その切断面から無数の細い管の

ような触手が現れたのだ
それは完全にティアナの虚をついた
それはティアナの体の自由を奪いデバイスを取り上げてしまった
体の自由を奪われ、更に首にその細い触手が巻きつき締め付ける

「く・・・・うぁ・・・」
「フハハハ！魔神の魂を持っていても所詮は人間。器が無ければ意味は無い・・・諦めてワシの餌となれ」
「だ・・・誰が・・・なるもん・・・ですか・・・」

絶望的状況でもティアナの目は衰えていなかった
その目がクイーンケドラは溜まらなく気に入らなかった

「気に入らん目だ！その目を死に目に変えてやろう」

そう言うとティアナの首に絡み付いていた触手の力が増す
首だけでない
体中に絡みついた触手がティアナを締め上げるように強さを増したのだ

「くぁ・・・か・・・はぁ・・・」

必死にもがくも触手の力は凄まじく振りほどけない
やがてティアナもまた意識が混沌に沈み出した
死ぬ・・・・死ぬのかなぁ・・・
ティアナの脳裏にはそんな思いが過ぎっていた
死・・・
自分の兄ティーダもまた死んだ
もし死んだら兄の元へ行けるのだろうか
死んだ両親の元へ行けるのだろうか

そう思うと死ぬのが怖くなくなってきた

（死ぬのかなぁ・・・でも、それも・・・）

良いかな
そう思えてきた
その時であった

「だ・・・駄目だよ・・・ティア！」
「！！！」

下方から声がした
それはボロボロになりながらも立ち上がろうとするスバルであった
体中から夥しい量の血を流し、白いバリアジャケットは紅くなっている
それでもスバルは立ち上がる

「ティア・・・死んじゃ駄目だよ・・・死んだらもう・・・笑う事も・・・怒ることも・・・泣く事も出来なくなるんだよ・・・それでも良いの？」

スバルは必死に言う
それを聞いた時、ティアナはハッとした
そうだ、此処で死んで良い筈がない
私は何をしようとしていたのだろうか
思わず死を受け入れそうになっていた自分が恥ずかしくなった
だが・・・その時であった

「まだ生きていたのか？しぶとい奴だ」

クイーンがそう呟く
すると先端の尖った細い触手が真っ直ぐにスバルに向けて放たれる
その一撃はフラフラな状態だったスバルの胸部を刺し貫いた
赤い鮮血が飛び散りそのままスバルを遥か上空に持ち上げる
スバルの苦痛の声が響いた
だが、それも一瞬であった
すぐにスバルの目からは光が消えまるで糸が切れた人形のようにだらしなく崩れた

「スバル・・・嘘・・・スバル！スバル！！」

ティアナが必死に叫ぶ
だが、スバルは答えない
最悪のビジョンが頭に過ぎった
自分の死よりも辛いもの
それは相棒の死であった
そうなのだ
今、目の前でスバルは死んだ
そう思えた
そして自身にも死が再び訪れた
先ほど以上の力でティアナを触手たちが締め付けたのだ
まるで体を引き千切るかのようである

「くあああああああああああああああああ！」

ティアナが叫ぶ
痛みが体全身を電流の如く駆け巡る
痛い・・・痛い痛い痛い痛い・・・
そんな言葉がひたすら脳裏に過ぎった
死ねない、死にたくない

だが、無情にも死は目の前にまで来ていた
クイーンの大きな口が動かなくなったスバルとティアナの面前に迫っていたのだ
鮫の牙のような鋭い牙が何重にも重なって見えた
そしてその中からオイル独特の臭い匂いと肉の腐敗した匂いがした
自分もまたこの匂いを出す一部になるのかと思うと余計に死の恐怖が増した
声を出して叫びたかった
だが、もう声は出なかった
喉を締め付けられて声が出ないのだ
痛みと苦しみがティアナの頭の中を支配している
もう駄目だ・・・このまま奴に・・・
そう思えた
その時であった

（魔神の魂を持つ者よ・・・魔神を呼び魔神となれ）

え？
一体今のは何だ
ふと自分の頭に声が響いた
誰の声かは分からない
男かも女かも
老人か青年か子供かも分からない声であった
だが、確かに声が聞こえたのだ

（魔神の魂を持つ者よ・・・魔神の戦士と共に魔神になって戦え・・・さすれば死の運命に抗える）
「死の運命に抗う・・・その為には魔神にならないと駄目なのね・・・でも、魔神戦士と言っても・・・スバルは」
（魔神の戦士は死なん。魔神の魂を持つ者よ。魂の叫びと共に魔神

を長き眠りより解き放て！さすれば汝等の力に魔神は答えてくれよう）

魔神を呼ぶ
そんな事が私に出来るのだろうか
だが、今は考えている余裕はない
最早こうなったらイチかバチかだ
ティアナは苦しみを堪えて大声で叫ぶ
頭にあった答えであった
その魔神の名は

「来ぉぉい！ゴォォォッドマジンガァァァァァァ！！！」

叫んだ
大声で叫んだ
張り裂けんばかりに大声で叫んだのだ
すると、突如クイーンの目の前に眩い閃光が放たれた
その閃光はスバルとティアナを拘束していた触手を引き千切りクイーンを吹き飛ばす

「がはぁ！」

吹き飛ばされたクイーンから声が漏れた
そんなクイーンは無視して光はスバルとティアナをそっと引き寄せる

「これが・・・魔神」

ティアナはまだぼうっとする意識を強引に戻してその魔神を見た
其処にはマジンガーZよりも一回り大きく、体のあちこちが先鋭的になっており、旨にはZの文字が刻まれていた

その魔神はスバルをまず自身のZと書かれた胸に入れるように押し込む
するとスバルの体は吸い込まれるように魔神の中に入っていった
続いて、ティアナも同様にその中に放り込む
不思議とティアナは抵抗しなかった
する必要がないと理解出来たのだ
全てを受け入れるようにティアナは静かに目を閉じた
そしてその体を魔神は自身の中に入れる

目を開くと其処は不思議な空間であった
回りを暖かな光が照らしている
此処が魔神の中なのだろうか
ティアナが回りを見回しながらそう見ていると

（ティア・・・ティア！）
「スバル！生きてたの？」
（酷いよティアァ・・・私まだ死ぬ気は無いよ）
「御免・・・でも、無事でよかった」

相棒が生きていた
スバルが生きていた
そう思っただけで思わず涙が溢れた
しかし疑問に思った
スバルの声がするのにスバル自身が居ないのだ

「スバル、あんた今何処に居るの？」
（私は今魔神と同化してるんだ）

「ま、魔神と同化？」
（うん、魔神戦士は元々マジンガーだって知ってるでしょ？、それでね、ゼノンが私の為にこの体を残してくれたの・・・だから今は私がこの魔神自身なのだよ）
「そ、そうなの」
理解できずに生返事で答える

（でもね、私の中にはゴッドのほかにデビルの力があるんだ・・・だから私一人じゃこの魔神を制御出来ないんだ。だからティア、お願い！力を貸して。ティアの力が無いと思う存分戦えないんだよ）

スバルが頼み込むように言う
それを聞いたティアナがフッと微笑む

「馬鹿ね、そんなの当たり前じゃない！こんな私の力で良いなら幾らだって貸してあげるわよ」
（有難う、ティア）
「お礼を言う前にあの化け物を片付けましょう」
（うん、やろう！ティア）

スバルが嬉しそうに答える
そしてティアナがグッと両の拳を握り締める
すると同じように魔神も両手を握り締めた
どうやら魔神の動きは自身の動きをそのままトレースするようだ
納得したティアナは目の前に居るクイーンに指を指す

「さっきはよくもやってくれたわね！お返しは倍にして返すからね」

そう言いはなったのだ

降臨、希望を断つ邪神　その３（後書き）

次回はリリカルメンバーの激闘を描きます

降臨、希望を断つ邪神　その４（前書き）

機動六課　対　ミケーネ七大将軍

勝利するのはどちらか？

降臨、希望を断つ邪神　その４

外では七体の将軍達と機動六課のメンバーがそれぞれの戦いを行っていた

「フン、我等を只のコピーと侮るなよ」

怪鳥将軍バーダラーがそう言う
鳥の姿をした将軍だけあって空中戦が得意である
そんなバーダラーにはナンバーズのトーレとセッテが挑む

「空中戦で俺に勝てると思っているのか？下等な失敗作どもが！」

バーダラーが鼻で笑う
しかし二人はそんな事を気にも留めなかった

「勝手に思うが良い。だが私はお前達につけられたこのロストナンバーズの名を恥とは思わない！ドクターが私達の命を救い鉄也達が私達に強さを教えてくれ、甲児達が心を教えてくれた」
「私達はこの名前、ロストナンバーズ・・・いいえ、ナンバーズの名を誇りに思う」
「フン、世迷い言は地獄で言え！」
「それは貴様の方だ！」

バーダラーが滑空して突っ込んでくるのと二人が同時に攻撃するのはほぼ同時であった
激しい衝撃と閃光が空を照らす

「くっ」「つっ」

声を上げたのはトーレとセッテの二人であった
彼女達の同じ腕の箇所に鋭い切り傷が出来ていた
そして、バーダラーの爪には赤い雫がついていた

「クックック、遅いなぁ・・・止まって見えるぞぉ」

爪についた血を舐めながらバーダラーが不気味に笑う
スピードで奴に勝つのは難しいようだ

「ならば！ライドインパルス！！」

叫び、自身のＩＳを起動させる
するとトーレの体が眩い光に包まれた
否、それは光の速さで飛行しているのだ
バーダラーもそれを追うかの如く高速で移動する

「はぁあああああああ！」
「まだ懲りないのか！ならば死ねぃ！」

トーレが自身の固有武装「インパルスブレード」を突き立てる
それを迎え撃つかのようにバーダラーも自身の鋭い爪を突き出す
決着は瞬きをする間に終った
トーレの突き出した方のインパルスブレードは砕け散り、バーダラーの爪は彼女の肩に深く食い込む
鮮血が飛び散る

「ぐぁっ！」
「くははぁ！生意気にも赤い血を流すとはなぁ」

バーダラーが大声で笑い今度はもう片方の肩に自身の鋭い牙を突き立てる
そこからも鮮血が溢れる
だが、彼女は・・・トーレはそれを待っていた
自身とバーダラーの距離が縮まる一瞬を

「取ったぞ！」

そう言って空いている方の手でバーダラーの首を掴む
残っている力を振り絞って離れないように固定していたのだ

「き、貴様ぁ！」
「フッ、私にだけ気を取られたのが貴様の敗因だ！セッテ」
「了解です！」
「何！」

背後には自身の固有武装「ブーメランブレード」を持ったセッテがバーダラーに向かって真っ直ぐに降下してきた

「はぁぁぁぁ！」

叫びセッテがブーメランブレードをバーダラーの背中に突き刺す
突き抜けたブレードの先端がバーダラーの胸部にあった顔から突き出る

「ぐあああああああああああ！」

バーダラーが断末魔の悲鳴を上げる

「やりましたね・・・姉上」

「あぁ・・・これで鉄也達に掛かる負担も少しは軽くなったと言う物か・・・」

二人はそう呟く
その直後バーダラーの爆発に二人は巻き込まれてしまった
黒い爆煙が上空に舞う
その中から二つの影が地上に向かって落下した
トーレとセッテである
二人とも意識はなく体もボロボロである
戦闘を行える状態では無いのは明らかであった

別の場所では昆虫将軍スカラベスを相手にシャマルとザフィーラが戦っていた

「フン、下等な人間ごときに我等ミケーネが負ける筈が無いわ！」
「それなら貴方に教えてあげるわ！人間の底力を！」

シャマルがそう言いクラールヴィントを放ちスカラベスを雁字搦めにする

「続けてこれも食らえ！」

ザフィーラが咆哮し大地から氷の柱を作り出す
その柱の尖った先端は真っ直ぐにスカラベスに迫る
だが、その先端は堅牢な甲殻により弾き返される

「馬鹿な！」
「馬鹿め！俺様の体がそんな程度の力で壊せる筈が無いだろう！」

大声で笑って自身を拘束していたクラールヴィントを力任せに引き千切る

「お返しだ！食らえぃ！」

スカラベスが口から蜘蛛の糸に似た物を放つ
それは真っ直ぐにシャマルへ向かって飛んできた

「シャマル！」
「くっ！防いで！」

シャマルが手を突き出して防御結界を展開させる
だが、その糸は結界を貫通してシャマルに迫って来た

「そんな！あうっ！」
「馬鹿め！貴様等の力などとっくに研究済みよ！俺様の糸には貴様等の魔力を無力化する力があるのさ」

勝ち誇ったかのようにスカラベスが言う
糸を食らったシャマルはそのまま近くの廃ビルに叩きつけられる
かなりの粘着性があり並みの力では引き千切る事が出来ない
しかも、その糸には別の能力もあった

「ま・・・魔力が・・・吸い取られてる・・・」

そうなのだ
その糸には魔力を吸収する能力がある
ミッドチルダ所属の魔道士には恐ろしい武器である

「シャマル！待ってろ今・・・」
「余所見してる場合か？」
「なっ！」

シャマルを助けに行こうとした際に隙が出来たらしく其処をスカラベスが突いた
自身の頭部にある立派な角をザフィーラの横腹に突き刺したのだ

「ぐおわあああああああ！」
「ざ、ザフィーラ！」

シャマルが叫ぶ
そんな中、ザフィーラがスカラベスの雄雄しき角に串刺しの状態になっていた

「フン！」

それを軽く頭を振り放り投げる
そのままザフィーラは大地に叩きつけられた
そんなザフィーラにも同様に蜘蛛の糸を放つ

「くっ・・・不覚・・・」

ザフィーラが唸る
そんな中スカラベスが勝ち誇ったかのような雄たけびを上げる

「クハハハハ！弱い、弱すぎるぞぉ！貴様等魔道士はこの程度かぁ？」
「この程度かどうか・・・最後の足掻きを見てから言ってもらおうかしら？」

シャマルが不敵にそう言うと再びスカラベスに向かってクラールヴィントを放った

「無駄な事を」

また自身を拘束するのだろうと思いその場を動かないで居たスカラベス
だが、それが間違いであった
クラールヴィントはスカラベスの体の関節部分に集中的に絡みついたのだ

「何！」
「どんなに固い装甲でも関節は脆い物よ！こんな風に！」

シャマルが勢い良く腕を引く
すると絡み付いていた糸が一斉に強く引き締まりスカラベスの両手足をいとも容易く切断してしまったのだ

「ぐおおわあああああ！ば、馬鹿なあああああああああ！」

切断された箇所から鮮血が飛び散る

「トドメだ！食らえ！」

ザフィーラが再び氷の柱を放つ
今度は切断された手足に向かって放った
外殻は堅牢でも内側は脆いのだ
其処に一撃を食らいスカラベスは文字通り串刺し状態になった

「グフゥ・・・我等ミケーネの野望が・・・まさか・・・」

その言葉を最後にスカラベスは散った
爆発したのだ
辺りにスカラベスの物であったであろう機械の部品が飛び散る
戦闘を終えたシャマルとザフィーラには仲間の救援に行く事は愚か
自身を拘束している糸を引き千切る力すら残っていなかった
既に粗方魔力を吸収された二人はそのままその場で意識を手放して
しまったのだ

チョウチンアンコウを思わせる顔をした将軍、アンゴラスにはオッ
トーとディエチが挑んでいた
オットーが接近戦を挑みディエチがそれを中距離から援護する形で
あった

「はぁっ！」
「ふん！」

オットーの繰り出す連撃をアンゴラスは涼しい顔で捌く

「このっ！」

ディエチがその合間を縫ってアンゴラスに砲撃を撃つ
しかし、その砲撃もアンゴラスは余裕でかわす

「どうしたどうした？もっと俺を楽しませろ！」

アンゴラスが不気味な顔で笑った

「お前と遊んでる暇は無いんだ！」

「此処でケリをつける！」

二人がそう言う

すると突如アンゴラスの顔から笑みが消えた

「そうか、なら俺もお前達と遊ぶ事は止めにするか」

そう言うと突如オットーに向かって尾びれを叩きつけた

「くぁっ！」

横腹に諸にそれを食らい吹き飛ぶ

「オットー！・・・くっ！」

咄嗟にディエチが自身の固有武装「イノーメスカノン」を構える

だが、そんなディエチに向かってアンゴラスは自身の額にあったチョウチンを翳す

するとそのチョウチンから電撃が発せられディエチに直撃する

「くあぁぁぁあ！」

悲鳴を上げてディエチがその場に倒れる

彼女の体から薄黒い煙が湧き上がる

「どうした？早く立ち上がらないとトドメを刺すぞぉ」

アンゴラスが自身の口についた鋭い牙をガチガチ鳴らして唸る
ヨロヨロとしながらもオットーとディエチは立ち上がる

「ま・・・負けるもんか・・・僕達は甲児さん達に教わったんだ！
絶対に諦めないって事を・・・」
「私も教わった・・・人を愛する事の素晴らしさを・・・」
「ほざけ、紛い物の命を持つ分際でそのような事をほざくとは」
「紛い物だろうと関係ない！これは僕達の命だ！」
「私が抱いた感情を・・・お前なんかに否定させない！」

二人が叫びそのまま真っ直ぐにアンゴラスに向かっていく
正面にオットー
背後にディエチが突っ込んだ

「馬鹿め！正攻法で俺に勝てるか！」

アンゴラスはまずオットーに向かって太い腕を伸ばす
その腕がオットーの細い首を掴みそのまま持ち上げる
ギリギリと締め上げる音がする
オットーの顔が苦悶に歪んでいく

「く・・・うぅ・・・」
「フン、折り易い首だ」

アンゴラスが微笑む
だが、その直後、アンゴラスの背中にディエチのイノーメスカノンが突き立てられる

「何を馬鹿な真似をしてるんだ？その距離では貴様も只では済まんぞ？」

「知ってるよ・・・でもそれでお前は倒せるんでしょ」
「き、貴様・・・まさか！」

アンゴラスの顔が変わる
明らかに動揺した顔だ
そしてそれはオットーも同じであった

「幾ら固い体でもこの距離からの砲撃には耐えられないだろう？」
「貴様等・・・死ぬ気か？」
「死ぬ気はないよ・・・」
「僕達は・・・お前を絶対に倒す！」

二人の顔が覚悟を決めた顔つきになる
そして

「イノーメスカノン！」
「ヘビィバレル！」
「「発射！！」」

同時に叫ぶ
そして二人が同時に砲撃を放つ
その砲撃の閃光にアンゴラス・・・そしてオットーとディエチが包まれる
その後激しい爆発が起こった
アンゴラスの爆発である
やがて閃光と爆発が止むとその跡から傷だらけになり意識を失ったオットーとディエチの姿があった

廃ビルの中でノーヴェ、ウェンディ、ディードの三人は猛獣将軍ライガーンと戦っていた

「狭い場所でならこの俺を倒せると思っていたのか？」

ライガーンの言葉に三人はウッと言葉に詰まった

図星である

三人のチームワーク戦法はかなりの物だが逆に手慣れの者から見れば規則正しいものにも見えるのだ

その為こうして廃ビルと言う狭い場所で戦ったは良いが逆にライガーンの超人的な身体能力をいかんなく発揮する結果に終った

ビルの壁を蹴りまるで自由自在に攻撃を展開するライガーンに三人は苦戦を強いられる

「このぉ！ちょこまかしやがって！」

苛立ちを隠せない様子でノーヴェは唸った

そして固有武装「ガンナックル」から無数の魔弾を放つ

「援護するッスよ！ノーヴェ」

続けてウェンディも固有武装「ライディングボード」から同じように魔弾を放つ

だが、それをライガーンがいとも容易く自身の爪で切り刻む

「こんのぉぉぉ！」

其処へディードが自身の固有武装ツインブレイズを振り猛然とライガーンに切りかかる

「馬鹿め！獅子の牙に自ら掛かりに来るとは愚かな」

笑みを浮かべるライガーン
その直後であった
ディードの右腕の腱から鮮血が噴出し右手に持っていたツインブレイズが音を立てて砕け散った
そして肩には何時の間にかライオンの牙で噛まれた跡がついていた

「ぐ・・・は、早い・・・」
「お前が遅いだけだ！」

声がし咄嗟にディードは振り返ったが遅かった
その時にはライガーンの強靭な足による蹴りを食らい地面に叩きつけられる
落下し砂煙を巻き上げるディードにノーヴェとウェンディが向かう
其処へ再びライガーンの猛撃が二人に襲い掛かる
鋭い爪と牙の連撃である

「くあっ！」「つっ！」

二人の腕と脇腹に爪跡と噛み傷跡がつく
ライガーンの爪と牙に鮮血がべっとりとついているのが見て取れた
三人の血である

「フッフッフ、すぐには殺さん！貴様等はあの忌々しき兜剣造の娘達だ・・・じわじわと嬲り殺しにしてからその首を機鋼王様に謙譲させて貰うわ」

笑みを浮かべ、爪を鳴らし牙を震わせながらライガーンがゆっくり

と歩み寄る

「ふざけるんじゃ・・・・」
「む？」
「ふざけるんじゃねぇぇぇぇぇ！」

そんなライガーンの目の前でノーヴェが咆哮し立ち上がる
彼女の周囲を強大なオーラが湧き上がった
彼女の髪と同じ色のオーラである

「てめぇみたいな奴に負けたら甲児に笑われちまうんだよ！そんなのあたしのプライドが許す訳ない！だからお前は絶対此処で叩きのめしてやる！！！」

ノーヴェが自身のガンナックルを強く握り締めて猛然と向かって来たそしてガンナックルを装備した腕を思い切り振付ける
鈍い音がした
それは信じ難い光景であった
ノーヴェの渾身の一撃をライガーンが片手で防いでいたのだ

「クハハハハ！その程度か？その程度なのか？貴様の力は？」
「うるせぇ！あたしは甲児達に教わったんだ！どんな時も諦めないってな！だからてめぇみたいな奴に死んだって「参った」何て言うかあああああああ！」

全身の力を全てこの拳に収束するようにノーヴェが吠える
体中が悲鳴をあげる
ジェットエッジが火花を上げだした
オーバーロードだ
これ以上稼動し続ければ危険な状態になるのは明らかである

だがノーヴェは止まらない
止まりはしない
それが甲児達と出会い知った心なのだから

「フン、威勢の良い娘だ！だったらまず貴様から血祭りにあげ・・・」

言い終わる前にライガーンが突如自身の体に痛みが走るのに気づいた
見ると背後の双方にウェンディとディードが自身の固有武装を突き刺していたのだ

「ノーヴェ！あんただけ良いカッコはさせないッスよぉ！」
「甲児さんから教わったのは私達だってそうです」
「貴様等・・・貴様等あああああああああああ！」

突き刺さった箇所からライガーンの血と思えるドス黒いオイルが溢れる
それが二人の顔や体を汚すが二人は構わず更に深く自身の固有武装を突き刺す

「ノーヴェ！後は・・・」
「任せたッス！」
「有難うよ二人共・・・これで、仕舞いだアアアアアアアアアアア！！！」

叫びノーヴェがライガーンの腕を砕きそのまま胸にあったもう一つの顔を叩き潰す
グシャリと嫌な音を立ててライガーンの顔が潰れる
そして上の顔が断末魔の悲鳴を上げる

「馬鹿な・・・貴様等のような・・・失敗作に・・・」
「何言ってるッスか?私等は失敗作じゃないッスよ」
「私達はドクターの・・・兜剣造の子供達です」
「そして・・・てめぇらからこの世界を守る者だ」

最後にそう言い三人が微笑む
そんな三人をライガーンの爆発が包み込む
それと同時に廃ビルが音を立てて崩壊する
轟音と振動が辺りに響き渡り凄まじい程の砂煙が舞い上がる
そして、廃ビルの跡地には半壊した固有武装を持ったウェンディとディード
そして片腕が崩壊寸前の状態の虫の息の状態のノーヴェの三人が横たわっていた

滑走路では悪霊将軍であるハーディアスとチンク、そしてセインの二人が戦っていた
チンクは自身の固有武装「スティンガー」を使用し、セインは剣造、甲児の作った光子銃(フォトンガン)を使用していた
それに対しハーディアスは死神を思わせる巨大な鎌を振り回していた
その顔は正しく悪霊を思わせるドクロである
そして体は白骨化した人間を模しており手には元の人間であった者の顔が付けられていた

「不気味な奴だなぁ」
「愚痴ってても仕方ない。早めに奴を仕留めるぞ」

嫌そうな顔をするセインをチンクが諭す

だがハーディアスは笑っていた

「貴様等雑魚の相手とは楽なものだ」
「舐めて掛かると痛い目を見るぞ」

チンクが注意を促すように言った直後、彼女の手から無数のスティンガーが放たれる
そしてセインも手持ちの光子銃を放つ
しかしそれをハーディアスは軽々とかわす
そして一気にチンクの目の前まで来た

「早いっ！」
「チンク姉！！」

二人共完全に出遅れていた
そんな中、ハーディアスがチンクの右目を見る

「知っているぞ。貴様がその右目を失った理由を」
「うっ！」

ハーディアスの言葉にチンクは動揺する
そんなハーディアスを引き離すようにセインの光子銃が火を噴く
しかしそれもかわされる

「フハハハハ！お前は立派な裏切り者だ！お前のせいで仲間達は傷ついたのだ！お前が我等に基地の場所を教えたのだ！お前が我等に奴等の戦力を教えたのだ！お前が我等に奴等の弱点を教えてくれたのだ！感謝するぞ」
「黙れ・・・黙れ黙れ黙れだまれえええええええええええ！」

チンクが怒号して激しくスティンガーを投げる
しかし先ほどの冷静な時と違って狙いは滅茶苦茶だ
その為全てが見当違いの方へ飛んでいく

「チンク姉！落ち着いてよ！」

そんなチンクを後ろからセインが抑える

「うがあああああああああああ！私は・・・私はあああああああああ！」
「フハハハハ！悔しいか？悔しいかぁ？自分のせいで我等に負けた事が悔しいかぁ？」
「五月蝿い！私は・・・私は・・・」
「お前の右目に内臓されていたカメラアイのお陰で我等は随分と仕事が容易く済んだわ。礼を言うぞぉ」
「くっ・・・うおおおおおおおお！」

完全に冷静さを失ったチンクがセインを引き離しスティンガーを両手に構えて猛然と切り掛る
だが、そんなチンクに無情にもハーディアスの鎌が振り下ろされる
その鎌がチンクの体を切り裂く
しかし寸前のところで後ろに下がったお陰で両断される事はなかったがチンクの体には斜めに切り傷が出来上がり其処から鮮血が吹き出た

「惜しい！後少しで真っ二つに出来たと言うのに」

ハーディアスが口惜しそうに言う
そんな中、チンクが力なく地面に落下する

「チンク姉！くっ、ＩＳ「ディープダイバー！」」

セインが自身のＩＳを発動して地面に潜り落下する寸前でチンクをキャッチする
だが、チンクの傷はかなり深く出血もかなり酷い

「チンク姉！しっかりしてよ」
「くっ・・・私は・・・私は裏切り者なんかじゃ・・・ない・・・」

うなされるようにチンクはそう呟いた
恐らく先ほどハーディアスが言い放った言葉が原因なのだろう
そう思えた

「クハハハ！貴様もそう思うだろう？こやつさえ居なければあの様な敗北はなかったと？」
「な！」
「そうだ！そんな奴居なければお前達は負ける事はなかった！お前達は傷つく事はなかった。憎いだろう？悔しいだろう？そうだろう？」
「うっさい！この骸骨」
「なにぃ？」

ハーディアスの言葉を止めるようにセインが吠える

「チンク姉のせいで私達が負けた？何寝言言ってるんだ！あれは私達全員の力が足りなかったから負けたんだ！そのせいでチンク姉は右目を失くしちまった」
「セイン・・・」
「チンク姉・・・あんたは知らないだろうけど・・・チンク姉が眠ってる時、鉄兄が来てたんだよ」

「あ・・・兄上が！」

チンクは驚いた
そしてその後セインが言った言葉にチンクは更に驚いた

「そんでチンク姉にこう言ったんだよ・・・「すまない、チンク」って」

「な、何故兄上が謝るんだ？」

「鉄兄はね、チンクが右目を失ったのは自分のせいだと思ってたんだよ。だからチンクをこんな風にしたのに責任を感じたんだよ。誰もチンク姉を責める人なんて居ない！胸を張ってよチンク姉！」

「セイン・・・兄上は・・・兄上は私の事を・・・くぅ・・・・うぅぅ・・・」

セインからの話しを聞き、チンクの目から止め処なく溢れる物があった
涙である
悲しみと悔しさの入り混じった涙である
鉄也の優しさと、そんな鉄也に負い目を感じてしまった自分に対する悔しさの涙である
口下手で常に厳しかったあの兄上の心がチンクの中にあったわだかまりを吹き飛ばす
そして今チンクの中はとても晴れやかな気分であった
自身の足で大地に達両手にスティンガーを構える

「すまないセイン・・・お陰で吹っ切れる事が出来た」

「それでこそチンク姉だよ！」

「あぁ、さぁ、奴を倒すぞ！」

「お～！」

チンクが構えるのと同じようにセインも構える

「フン、どうやら持ち直したようだな。そうでなくては面白くない」

ハーディアスがそう言って再び鎌を構えてやってきた
それに対し今度はチンクとセインの二人が同時に向かって来た

「「うおおおおおおおおおおおお！」」

二人が咆哮しハーディアスに向かう

「死ねぇ！」

ハーディアスの鎌が唸りを上げて横薙ぎに襲い掛かってきた
だが、それをチンクが持っていたスティンガーで防ぐ
火花が舞い上がりスティンガーにヒビが入る

「貰ったぁぁ！」

叫びチンクは残っていた腕でゴホンのスティンガーを握り締めてそのままハーディアスの肋骨辺りに拳をめり込ませる

「こっちも食らえぇ！」

セインも持っていた光子銃を握り締めてハーディアスの頭部に叩きつける

「貴様等・・・何をするつもりだ！」
「お前達を倒すにはこの手しか無いんでな」
「最後は派手に散りな！骸骨野郎！」

二人がそう言う
そしてチンクがゴホンのスティンガーに自身のＩＳ「ランブルデトネイター」を起動させ、セインは持っていた光子銃のリミッターを外し暴走状態にした
そして、激しい閃光が起こる
ハーディアスの絶叫びも、二人の叫びもかき消すほどの閃光であった
やがて、閃光が止むと、瓦礫の上には二人が意識を失い倒れていた
二人共スーツや体の損傷が激しく戦闘の続行は不可能であった

エリオとキャロはブロッケン伯爵とピグマン子爵と激闘を繰り広げていた

「はぁぁぁぁぁ！」

叫びと共にエリオのザンクーガが唸りを上げる
身の丈ほどもある大太刀が空を切る
それに対しピグマンが手持ちの槍で応戦する

「くっ・・・こやつ、以前よりも強くなっている」
「だが、我輩達を倒すにはまだ力不足と言うものよ」

そう言ってピグマンとブロッケン
槍とサーベルの二重攻撃が襲い掛かる
それをエリオがザンクーガを使いかわし、捌き、防ぐ
しかもその動作に無駄が無いのだ
それに対しブロッケンとピグマンは明らかに動揺する

その時、二人の元に突如数発の炎の弾が降り注いだ
キャロとフリードである
フリードが放ったブラストフレアである
それを厄介と思ったのかブロッケンがエリオから狙いを外す

「我輩はあの小娘と竜をやる。お前はその赤髪の小僧を始末しろ」
「任せろ」

頷きブロッケンはキャロの元へ向かう

「させるかぁ！」

ブロッケンの異変に気づいたエリオが切り掛る
だがそれにピグマンが妨害する

「お前の相手は私だ」
「くぅっ！」

エリオが歯噛みする
このままではキャロが危険である
なんとしても倒さなければならない
そう思っていた為かエリオ自身に焦りが見える
その隙をピグマンが見逃す筈がなかった

「まだ甘いぞ小僧！」

ピグマンの叫びと共に鋭い槍の一撃がエリオの右胸より少し上の位置を刺し貫く
激しい痛みが体中を電流となって走る
苦痛の叫びを上げるエリオ

それに対しニヤリと笑うピグマン
だが、その時明らかにエリオの顔つきが変わった
かと思ったその時、ピグマンの胸にザンクーガの太刀が深く刺さったのだ

「ガハァ・・・貴様・・・まさか」
「肉を切らせて骨を断つ・・・けど、やっぱり痛いですね」

苦笑いを浮べながらエリオは言う
完全に不覚であった
まさかこんな子供が其処までの捨て身の攻撃をするとは予想外であったのだ
その時、ピグマンの口から小柄の男が飛び出した
そう、あれがピグマンの本体だったのだ

「ちぃ！こうなればまず先にあの小娘から・・・」
「行かせるかあああああああああ！」

エリオが刺さっていた槍を抜き、ザンクーガを手放してピグマンに向かった

「馬鹿め！武器もなしにどうやって私を倒す」
「武器はなくてもこの拳がある！」

そう言ってるエリオの腕には激しい電流がスパークしていた

「まさか、その技は！」
「ぶつけ本番だけど！食らえ！！『紫電一閃』」

それはヴォルケンリッターの騎士シグナムの得意技であった

最終決戦を前にエリオがシグナムから教わったのだ
そしてそれを手刀の要領で放った
その一撃はピグマンを真っ二つに両断した

「フッ・・・子供だと思って・・・侮ったのが私の敗因か・・・見事だ・・・少年・・・」

そう言い残しピグマンは真っ二つになった
その直後にエリオは地面に落下した
そして、そんなエリオの回りに赤い水溜りが出来る

キャロは向かってくるブロッケンに対し何度もブラストフレアを放つ
最初は持っていたサーベルで切り払っていたがやがて対応出来なくなりブロッケンのボディは無数のブラストフレアを浴び粉々になる

「おのれぃ・・・こうなれば！」

首だけ宙を舞いながらブロッケンは叫ぶ
すると地面を突き破って巨大な機鋼獣が現れた
それはブロッケン伯爵の顔を模した機鋼獣であった

「立て！機鋼獣『ブロッケンＶ２シュナイダー』よ」
「機鋼獣！まだ居たんですか！」
「フハハハハ！切り札は最後にとっておく者だよお嬢さん」

笑みを浮べながらブロッケンの攻撃が降り注ぐ
お世辞にも運動神経が良いとは言えないキャロにそれをかわすのは出来ず衝撃を浴び吹き飛ばされる

「キャァ！」

地面にたたきつけられたキャロが声を上げる
フリードも応戦したが機鋼獣相手では歯が立たず同様に攻撃を受け弾き飛ばされる

「くっ・・うぅ・・・」

まだ体にダメージが残っている
それでもキャロはどうにか立ち上がろうとする
そんなキャロにブロッケンの機鋼獣が歩み寄る

「フフフ、安心したまえ。私は紳士だ。苦しまぬように一思いに殺してやろう」

そう言うとブロッケンの乗った機鋼獣の巨大な足がキャロに向かって振り上げられた

（此処で死ぬ・・・嫌だ・・・そんなの嫌だよ・・・皆と・・・もっとみんなと一緒に居たい）

キャロの脳裏に今まで出会った人達の顔が浮かび上がる
機動六課のメンバー、ナンバーズ、そして異世界から来たマジンガー、甲児達の顔が
皆優しく、とても良い人達であった
そんな人達と別れるのは嫌だ
絶対に嫌だ

「絶対に・・・いやあああああああああああ！」

キャロが叫ぶ
すると彼女の周囲に巨大な魔方陣が展開され、その中から巨大な竜が現れた
深紅の色をした体を持つ雄雄しく、そして巨大な竜であった

「な、何だあの化け物は！」

それはブロッケンの機鋼獣よりも大きい
そんな竜がブロッケンの機鋼獣を睨む
それを見たブロッケンが思わずすくみ上がる
それ程までの威圧感を持っていたのだ

「お願い・・・力を貸して・・・ヴォルテェェェル！！！」

キャロが叫ぶ
そんなキャロの思いに答えるかの如く真竜ヴォルテールの目が輝き
雄雄しく咆哮する

「ま・・・不味い！此処は退散・・・」

する前にヴォルテールの口から灼熱の熱線が放たれた
その熱線は機鋼獣を焦がし中に居たブロッケンともども塵に変えてしまった
後には何も残らなかった
勝ったのだ
だが、キャロ自身も無事ではない
慣れない状態でのヴォルテールの召還は彼女に多大な負担を有したのだ
それでもキャロはヴォルテールを見上げる

「有難う・・・ヴォルテール・・・」

そう言った
その直後、糸の切れた人形のようにその場に倒れる
それを見たヴォルテールはまた魔方陣の中に消えていった
彼女に負担を掛けないためである

空中でヴィータと妖爬虫将軍ドレイドウが戦っていた

「てめぇだけは私の手で倒す！」

ヴィータの怒りの混じった声が響く
だが、それに対しドレイドウはニヤけていた

「フン、まだあの時の事を引きずっているのか？」
「うっせぇ！てめぇのせいでなのははあんな大怪我をする羽目になっちまったんだ！てめぇだけはゆるさねぇ！」

ヴィータの脳裏にあの光景が浮ぶ
真っ白な雪原
そんな中を赤い何かが彩る
血である
そしてその赤い血を流した人物がヴィータに抱きかかえられていたなのはである
まだ１１歳になった辺りの幼い少女が息も絶えたえの状態でありながらもヴィータを心配させまいと笑顔を見せる

だが、その笑顔が逆にヴィータには辛かった
助けられなかった
救えなかった
そんな自責の思いがヴィータを苦しめたのだ

「てめぇだけは・・・てめぇだけは絶対にぶっ潰す」

自身のデバイス「グラーフアイゼン」を振り回しヴィータが向かって来た
そしてフルスイングの一撃をドレイドウに向かって振るう

「フン、猪娘が」

しかしその一撃をドレイドウは涼しい顔でかわす
そして口から灼熱の火炎を放つ

「くぅっ！」

ヴィータはそれを手を翳し防御結界を張って防ぐ
やがて炎が止んだ時、目の前にはドレイドウは居なかった
それにハッとするヴィータ
その時、彼女の背中から自身の胸を何かが貫いた
ドレイドウの尻尾である
鋭く尖った尻尾がヴィータを貫いたのだ

「どうだ？あの小娘が味わったのと同じ痛みを再現してやったつもりだが？」

ドレイドウがニヤリと笑いながら品定めをするように言う
それに対しヴィータの怒りが頂点に達する

「て・・・てめえええええええええええええええ！」

叫びながらヴィータは刺さったドレイドウの尻尾を掴みそのままアイゼンを振るう
尻尾を掴まれていては身動きがとれずそのまま諸に頭部にその一撃を食らう

「グフゥ！貴様・・・まだ動けたのか？」
「舐めるな！あたしは・・・あたしはヴォルケンリッターの一人、鉄槌の騎士ヴィータだあああああああああああああ！」

ヴィータが叫びアイゼンをギガントフォームにして振り上げる

「ブッ潰れろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

渾身の一撃をドレイドウに向かって振り下ろす
それをドレイドウは両手を翳して防ごうとするが、その威力は予想以上に凄まじくそのままドレイドウは大地に叩きつけられる

「ぐおおおおおおわあああああああああ！」

最後にドレイドウの断末魔が響いた
だが、やがて聞こえなくなった
それを聞いたヴィータがアイゼンを手放した

「勝った・・・やったぜなのは・・・・借りは返した・・・ぜ・・・」

そう言い終わった直後、ヴィータはそのまま大地に向かって落下した
叩きつけられるように地面に落下し、そのままヴィータもまた意識
を手放した

空中に魔力で出来たレールを張りギンガはその上を滑走する
その斜線上には超人将軍ユリシーザーが居た

「はあああああああ！」
「ふん！」

ギンガとユリシーザーの蹴りが互いに交差する
しかも一撃ではない
二撃、三撃と繰り返し放たれる
力は互いに互角の域であった

「フハハハハ！良いぞ、お前は中々強いみたいだな」
「敵の貴方に褒められても嬉しくないわ！」

吐き捨てるようにギンガは言う
そして左手に装備された白いリボルバーナックルの手を回転させて
ドリルのようにして突き出す
だが、それをユリシーザーは片手で受け止める
そして打点を逸らし完全に無防備になったギンガの横腹目掛けて

「フンッ！」

渾身の回し蹴りを放つ

「ガハッ！」

諸にそれを食らいギンガが声を上げる
完全に無防備な箇所に攻撃を食らった為意識が飛びそうになった
だが、そんなギンガにユリシーザーの容赦ない連続攻撃が降り注いだ
拳が、蹴りが、雨霰の如く向かってくる
それをギンガは両手を交差して防いだ
しかしそれにも限界が来たのか一瞬、そうほんの一瞬ガードが甘くなったのだ
その隙を突きユリシーザーの突きがギンガの体に放たれる

「くっ・・・あぁぁ！」

声を上げてギンガは吹き飛ぶ
そのまま下にあったビルに叩きつけられる
ビルにもたれかかるようにギンガはうな垂れていた

「他愛ない、これでトドメだ」

最後の一撃にとユリシーザーは頭の炎の冠を外すとギンガに目掛けて投げつけた
今のギンガにそれをかわす余力など残っておらず防ぐ事も出来ない状態であった
覚悟を決めて目を瞑った時であった
突如大きな影がギンガの前に立ちその炎の冠を蹴り飛ばしたのだ

「え？」

思わずギンガは目を見開いた

其処には白の胴着の上に黒の羽織りを羽織っており背中には「竜」と書かれていた
その背丈はかなり大きい
そんな青年がギンガを見る

「馬鹿野郎！何諦めてんだ！俺はお前をそんな根性なしに育てた覚えはねぇぞ！」
「え？ええ？」

青年の言葉にギンガは目を丸くした
育てた？この男が？
全く見に覚えがなかった
一体何者なのだろうか
そう思っているとユリシーザーが青年の前に降り立った

「邪魔するのか？人間」
「あぁさせて貰うぜ。これ以上泣く奴の面見たくないんでな」

そう言って青年は構えた

「え？あの構えは・・・」

ギンガは驚いた
それもそうだ
青年の構えは間違いなく自分達の使うシューティングアーツだったのだから
そしてその構えのまま青年はユリシーザーに向かっていく

「おりゃぁ！」

流れるように蹴り、拳を放つ
それをユリシーザーは捌きながらも反撃をする
青年もそれを捌きながら反撃する
一進一退の攻防であった

「おのれ！」

焦ったユリシーザーの蹴りが青年の顔を掠る
その時青年の額が不自然に切れ、その中にもう一つ別の肌が見えた

「き、貴様！一体何者だ？」
「ちっ、とうとうばれちまったか・・・しょうがねぇ、ネタばらしとするか」

青年はユリシーザーから距離を置くと

「表だっては喧嘩空手の使い手、流竜馬と言われてるがそれは仮の姿・・・その実体は」

竜馬がそう言い自身の体を彩っていた服や不自然な皮膚を掴むと無造作に上空に脱ぎ捨てる
すると其処に現れたのはギンガと同じ色の髪をした一人の女性であった
その女性をギンガは知っていた
その女性は

「まさか・・・そんな・・・母さん！」
「久しぶりね、ギンガ」

振り返り母クイントは軽く手を振る

驚きであった
あのもう一人の流竜馬の正体は実はギンガとスバルの母クイントであったのだ

「フン、何かと思えば女か」
「女だと思って舐めてると痛い目見る事になるわよ」
「母さん！教えて、どうして母さんが生きてるの？」

痛む体を引きずってギンガが母に近づいた

「詳しい話しは後！まずはこいつを片付けましょ」
「う、うん！」

クイントの言葉にギンガは強く頷いた
そして同じように構える
不思議な感覚であった
今まで死んだと思っていた母がこうして目の前に居る
しかもあの時のまま若いままである
どうしてそうなったか気にはなったが今は目の前に居る敵を倒すのが先である

「二人になったからと言って私に勝てると思っているのかぁ！」

怒声にも似たユリシーザーの声と共に向かって来た

「ギンガ！」
「うん！」

二人は咄嗟に左右に避ける
その間をユリシーザーが通る

そしてその直後

「はぁ！」「ふんっ！」

二人のニーキックと肘鉄がユリシーザーに突き刺さった
ギンガのニーがユリシーザーの脇腹に
クイントの肘鉄が頭部に当たる
左右からの同時攻撃は防ぎようがなく諸にダメージを食らう
そのせいでユリシーザーは数歩よろめく
その隙にクイントはユリシーザーの懐まで潜りこみ思い切り拳を突き上げる
その一撃を受けユリシーザーは上空に舞い上がる
それよりも早くギンガはその真上に飛び上がり蹴りの体制に入る
同じようにクイントも下から蹴り上げる体制になる

「「はあああああああああああああ！！！」」

二人が叫びそれと同時に上下からの同時の蹴りがユリシーザーを貫く

「がはぁ・・・まさか・・・我等ミケーネが・・・負けるのか・・・」

それが最後の言葉であった
ユリシーザーはその後爆発し空を爆煙が彩っていた
そのままギンガとクイントは大地に降り立つ
するとギンガは真っ直ぐに母の元へ駆け寄った

「母さん、教えて！一体どうして・・・」
「落ち着いてギンガ、今から話すから」

慌てるギンガを落ち着かせてクイントは話しをする

降臨、希望を断つ邪神　その４（後書き）

ちょっと急ぎ足だったかも知れない（汗）

降臨、希望を断つ邪神　その5

「おのれ・・・おのれおのれおのれ・・・」

原蔵はしきりに唸っていた
折角上手くいった計画も全て水泡に帰してしまったのだからだ
全てはあの剣造の作った未知のマジンガーのせいである

「剣造め・・・何時の間にあのようなマジンガーを・・・」

原蔵の脳裏に浮ぶはあの魔神
即ちマジンカイザーの姿である
最後の切り札でもあったデビルマジンガー軍団をいとも容易く破壊しあまつさえ今こうして自身に刃を突きつけているのだ
生きた心地がしなかった

「だが・・・まだワシには奥の手がある・・・そう、クイーンが居る限りワシは何度でも蘇れる」

原蔵は言った
だが、その思いも打ち砕かれるとは露にも知らなかったのだ

＊＊＊

スバルとティアナが融合したマジン「ゴッドマジンガー」は今クイーンケドラと対峙していた
大きさはほぼ同じ位
勝負は腕前の差と言う事になる

「私が操縦するからあんたは制御に専念して」
『任せて！ティア』
「頼むわよ、はぁぁぁぁぁぁ！！」

ティアナの叫びと共にゴッドが走り寄る
クイーンも応戦するかのように真ん中にあった一つの巨大な目から太いビーム砲を放つ
しかしゴッドはそれを片手で防いだ
そしてそのまま距離を詰めて拳を硬く握り締めてクイーンに叩きつけた
鈍い音と共にクイーンの頭が変形していく
衝撃と共にクイーンは吹き飛ばされ地面に叩きつけられた

「あんたみたいなのに負ける訳ないでしょ！」
『ティアと私、二人揃えば敵無しなんだよぉ！』

拳を突き上げて二人は宣言する
そんなゴッドの前でクイーンは再び起き上がる
すると奇声をあげる
その直後、地面から大量の集合ケドラが現れた
全身をケドラで作られた巨大な合成獣だ

「成る程、一対一じゃ勝てないから物量戦って事ね」

『でも、そんな程度の数じゃ勝てないよ！』
「その通り！それじゃあのクラゲの化け物に私達を舐めたことを後悔させてあげましょうか」

そう言うとゴッドの両腕が唸りを上げて飛び出す
その腕がまず目の前に居た二体の合成獣を粉砕する
それを皮切りに一斉に合成獣が襲い掛かってきた

「こんのおおおおお！」

それを迎え撃つようにゴッドも前に出る
まず目の前に居た一体を蹴り飛ばす
遥か上空を飛び残骸になる
続けて戻ってきた腕を使い二体の合成獣を掴み振り回し放り投げる
その際に巻き込まれた数体の合成獣も同様に破壊される
それでもまだまだ後から湧き出てくる

「キリがないわね」
『やっぱりクイーンを倒さないと駄目みたいだよ』
「親玉を潰すのが先ね」

目標を最奥に居るクイーンに定めるとゴッドは更に早く駆け出した

＊＊＊

「うおおおおおおお！」
「どきやがれえええええ！」

甲児と剣造、エネルガーZとマジンカイザーは二体一組となって機鋼城の中を走っていた
勿論そんな二体に向かって無数の機鋼獣や合成獣が襲い掛かってくるが返り討ちにしていた

「お父さん、本当に此処にルーちゃんのお袋さんが居るのか？」
「あぁ、あの時のままなら恐らくこの城の何処かに居る筈だ」

甲児の問いに剣造が答えた
後ろではルーテシアが必死に剣造にしがみついている
その顔は悲しみも混じっていたが母を救いたいと言う意思も見られた
それを見た甲児も決意を固める

「よっしゃぁ！この兜甲児様に任せておけって！行くぜぇ、マジンカイザー」

甲児が叫びカイザーの目が輝く
そして目の前の分厚い壁にターボスマッシャーパンチを放ち突き破る
突き破った先には巨大な結晶を収めた装置があった

「あれが動力炉か」
「そうだ、あれを落とせば城の機能は無くなる」
「上等だ！さっさとあんなデカブツ叩き潰してやるぜ」

甲児が勢い良くそれを壊そうとした時、その目の前に一体の機鋼獣

が現れた

「な、こいつは！」

「まさか！」

剣造はその機鋼獣に見覚えがあった

それはかつてＪＳ事件の折に剣造の前に現れた機鋼獣ガラダブラで

あったのだ

「へ、何かと思えばまたてめぇか！何度でも叩き潰してやるぜ！」

「待って下さい！甲児さん」

息巻く甲児にクロノが止める

「何だ？」

「あの機鋼獣の胸の部分を見て下さい」

クロノが指す方を見た

其処には小さなカプセルの中に納まってる一人の女性が居た

機鋼獣ガラダブラの胸に収まっているのだ

「あれは！」

「・・・母さん」

「人柱みたいな物ですね」

「卑怯な！」

そうなのだ

ガラダブラはルーテシアの母メガーヌを人柱にしていたのだ

これでは迂闊に手出しが出来ない

余りに卑劣なやり口にヴェロッサとシャッハも顔を強張らせる

「野郎！汚いぞ！正々堂々と勝負しやがれ！」
「そうですよぉ！そんなの卑怯者のすることですよぉ」
「じゃがこれじゃ迂闊に手を出せんぞ」

リインとアギトが同様に騒ぐなか十蔵が唸った

「確かに、だが・・・だからと言って諦めるつもりもない」
「おう、目の前に助け出すお袋さんと動力炉があるんだ！正に一石二鳥たぁこの事だぜ」

甲児も同様に言う
そんな中ガラダブラが雄たけびを上げて頭の角を抜き取り襲い掛かる
その両手をエネルガーとマジンカイザーが抑える

「この程度で」
「俺達を止められると思ってんじゃねえええええええええええ！」

そして勢い良くその腕を引き千切った
千切られた腕からオイルが勢い良く噴出す
苦痛の叫びを上げるガラダブラ
すると両肩にあった長い首から黄色いレーザーが放たれる

「食らうか！」

それを迎え撃つかのようにマジンカイザーが光子力ビームを放つ
お互いのビームがぶつかりあい激しいスパークを起こす
だが、打ち勝ったのはカイザーであった
カイザーのビームで両肩の長い首が吹き飛ぶ
かなりの損傷を負ったガラダブラが後ずさる

「機鋼獣！その人は返して貰うぞ」

その隙にエネルガーが女性の入っていたカプセルを機鋼獣から引き抜く
その最にカプセルを割らないように細心の注意を払っていたのは言うまでもない

「これでお前に遠慮する事は無くなった訳だ！覚悟しやがれ」

トドメといわんばかりにカイザーがガラダブラを持ち上げて頭上で真っ二つに引き千切った
そして千切った機鋼獣を大地に放り投げる

「三人とも、すまんが彼女を頼む」

剣造は手に持ったカプセルをクロノ達に託した
そしてそのまま目の前にあった動力炉に立つ

「行くぞ甲児」
「おうよ！さっさとぶっ壊してやるぜ！」

カイザーの目から光子力ビームが放たれる
だが、そのビームは動力炉を包んでいたバリアにより弾かれてしまった

「か～、相変わらず抜け目ない奴じゃわい！原蔵の奴は」

十蔵が唸る

「心配ないさ父さん」
「おうよ、バリアなんざ叩き壊しちまえば良いんだ！」
そう言ってカイザーとエネルガーが共に仁王立ちして腕を振り上げる
「フルパワーで行くぞ！」
「任せてくれぇ」
カイザーとエネルガーそれぞれフルパワーでこの一撃を放った
「ブレストファイヤー！」
「ファイヤーブラスター！」
二体の胸の放熱板から真っ赤な熱線が放たれた
二つの熱線がバリアに当たり激しい閃光を放つ
それでもバリアが破れる気配は何処にもない
かなりの高出力だ
「まだだ、もっとパワーを上げろカイザー！」
甲児が命じる
するとそれに答えるようにカイザーの目が輝き更に巨大な熱線が放たれる
やがて結界に亀裂が走った
そしてそれから間も無くしてバリアは破壊され中にあった動力炉は物の数秒で粉々に打ち砕かれてしまったのだ
「いよっしゃぁ！」
「よし、早く此処を出るぞ」
「待って下さい！機鋼王はどうするんですか？」

「あの姿ではもう打つ手などないさ。それより早く此処を出るほうが先だ」

剣造は言って一同はこの場を後にした
それから少しして機鋼城が揺れ出した
動力炉を失った機鋼城が落下を始めたのだ

＊＊＊

「ぐおぉぉ！馬鹿な！動力炉がやられたのか？」

脳だけになっていた原蔵はとある場所に来ていた
其処には今までのより一際大きく、そして醜悪な姿をした魔神が立っていた

「フフフ、いよいよこのワシの最高傑作を使用する時が来たようじゃな」

原蔵がそれを見る
それは今までのよりも遥かに強いパワーを秘めたデビルマジンガーであった
そしてそれに自分が乗り込み全てを破壊するつもりだったのだ
だが、

「そういう訳にはいかんなぁ」
「何！」

声がした
振り返ると其処には半分男で半分女の怪人「シュラ」が立っていた

「貴様！よくもワシの前に姿を現わせられた物だなぁ」
「フフフ、機鋼王・・・いや、兜原蔵よ、お前には愛想が尽きた」
「何！」
「もう少し出来るかと思ったのだが所詮この程度か？これではお前を蘇生させた意味もないものだ」
「蘇生だと？一体何の話だ！」
「肉体は返して貰う！もう貴様には用はない。充分楽しませて貰った。後は俺の役目を果たすだけだ」

そう言うとシュラは主室に自身の頭部に手を当てて体を真っ二つに引き裂いた
するとその中からドス黒いオーラが現れそのまま目の前のデビルに憑依する
するとデビルの目が不気味に輝き咆哮する

『ソウ・・・人類ヲ滅ボスト言ウ俺ノ目的ヲナァ』

降臨、希望を断つ邪神　その6

「人類を・・・滅ぼすじゃと！」

原蔵は己が耳を疑った
確かに目の前に居るデビルはそう言ったのだ
不器用な片言とも聞き取れる言葉で確かにそう言ったのだ
人類を滅ぼすと

「貴様！創造主であるワシを差し置いて何を恐れ多い事を言っているのだ！」
『恐レ多イダト？』
「そうだ！人類はワシの下にひれ伏す為に存在するもの！それを滅ぼすなど創造主であるワシに対する反乱だ！すぐにやめろ」

原蔵の黄色い声が響く
だが、それに対しデビルはフッと笑っていた

『ククク・・・相変ワラズオ前ハ楽シマセテクレルナァ』
「何！」
『分カラナイノカ？オ前モソノ標的ニハイッテイルノダゾ』

＊＊＊

「どうにか脱出出来たみたいだな」

カイザーとエネルガーは機鋼城に突撃した戦艦の甲板に立っていた
既に戦艦は機鋼城から出ており目の前では機鋼城が煙を吹いて落下している
機鋼帝国の壊滅であった
それは揺ぎ無い事実であった
ふと、甲児はクロノを見た
クロノは何処か不満そうな顔をしていた
これだけの大事件を起こした首謀者である機鋼王こと兜原蔵
出来ることならそいつを逮捕して罪を償わせたかった
そう思っているのだろう
そんなクロノを察してかヴェロッサが彼の肩をそっと叩く
その隣ではシャッハが自身のデバイスの整備をしている
ふと、別の方に視線を移した
其処にはカプセルから出され担架で運ばれていくメガーヌと、それを見届けている剣造とルーテシア、そしてリイン、アギト、十蔵の姿があった
さっき話しを聞いたがどうやらメガーヌさんは命に別状はなく直に意識を取り戻すそうだ
機鋼王は逮捕できなかったがあの状態では恐らく城と運命を共にするのは確実である
何にしても戦いは終った
そう思えたのだ

だが・・・

「ん？」

ふと、甲児はレーダーを見た
妙な反応がある
機鋼城のある位置に見慣れない反応があるのだ
おかしい
機鋼城の中にある機鋼獣は粗方片付けた筈だ
動ける機鋼獣など居る筈がないのだ
なのにこの反応は一体
その甲児の疑問は瞬く間に解消された
機鋼城の天辺を吹き飛ばし突如現れたのは姿の変わった本来のデビルマジンガーであった
そして、そのデビルの腕には機鋼王こと兜原蔵の脳が入ったカプセルが握られていた

「あれは！」

剣造が目を見開いた
忘れる筈がない
あれこそ・・・あれこそかつて兜原蔵が作り出した忌まわしき魔神デビルマジンガーであったのだ
するとデビルが甲児達を見る

『ホホゥ、オ前カ。機鋼獣ヲ蹴散ラシタトイウノハ？』

「てめぇ、何者だ！」

甲児がデビルを指差す
するとデビルがフッと笑う

『俺ハデビルマジンガー。遥カ昔、今カラ１万年前ヨリ眠リカラ覚メタノダ』

「１万年だと！」

驚いた
まさかそんな過去にマジンガーが居たとは
だが、甲児の予想を裏切るかのようにデビルは口を開く

『オット、コレデハ誤解ヲ招イテシマウナァ。正確ニハ俺ハ此処ニイル兜原蔵ガツクリダシタ魔神ナノダ』
「何だと！どういう意味だよ！」

辻褄が合わない
そう思えたのだ
兜十蔵がマジンガーZを作ったのは少なくとも１０年以上は前である
そしてそれよりも前にデビルとゴッドは出来た
恐らく約２０年は前だ
なのに１万年とは一体どういう意味なのだろうか

「まさか、あの時のせいで時空転移したのか？」
『ソノ通リダ兜剣造』

剣造の推測が当たっていると言うデビル

「どう言う事だよおとうさん」
「・・・・・」

甲児の問いに剣造は黙り込んだ
顔を背け俯いていた
そんな剣造を心配そうに見つめるルーテシアが居た
するとそこでデビルが答える

『貴様ガ答エラレナイノナラ俺ガ変ワリニ答エテヤロウ』

そう言ってデビルは話す
あの忌まわしき出来事を

＊＊＊

２０年以上前

兜十蔵、兜剣造、そして兜原蔵の三人はとある計画を立てていた
それは、富士山麓で発見した新元素「ジャパニウム」の利用方法であった
ジャパニウムは単体では大した効果は得られないが、加工次第で近年問題になっているエネルギー枯渇問題が一気に解決する可能性を秘めていたのだ
だが、同時にジャパニウムは利用法を間違えれば大惨事になる危険性を秘めた恐ろしい物であった
そこで、十蔵はジャパニウムから微量で膨大なエネルギーを得られる「光子力」と堅牢な合金である「超合金Z」を作り出した
そして原蔵はそれを使用するロボットを設計した
そう、それこそが「デビルマジンガー」であったのだ

「お爺さん！このロボットは危険すぎます！」

剣造が原蔵の設計したロボットに対し意見する

其処には常識を逸した余りにも危険過ぎる性能のロボットが居たのだ
だが、その剣造の言葉に原蔵は耳を貸す気など無かった

「馬鹿者！これほどの素晴らしい物が手に入ったのだ！それを利用せんとしてどうするというのだ？」
「何を馬鹿な事を言うとるんじゃ糞親父！これはワシ等が平和利用の為に作った物じゃろうが！」
「たわけ！ワシの目的は只一つ！ワシの作ったロボットで世界を征服することよ！」
「「な！」」

原蔵の目的を聞いた二人は驚愕した

「この馬鹿親父！遂に頭までいかれおったか！」
「お爺さん！考え直して下さい」

十蔵と剣造が原蔵を取り押さえようと襲い掛かった
だが、そんな二人を突如何かが突き飛ばした
見ると、それは西洋の鎧を模した機械の兵士であった

「驚いたか？これはワシが作った機鋼兵よ。ワシの思いのままに動く素晴らしいロボットよ」

原蔵はケタケタと笑っていた
すると更に数体の機鋼兵が現れ十蔵と剣造を持ち上げる

「な、何をする！」
「この馬鹿もん！年寄りはもっと優しく扱わんか！」

ジタバタするも機鋼兵は全く応えてない

「安心しろ、お前等の作った光子力と超合金Zはワシが有効に使ってやるわぃ」

原蔵が高笑いを浮べながらそう言った

機鋼兵により研究所を追い出された剣造と十蔵は悩んだ
このままでは原蔵の思い通りに事が運んでしまう
そうさせない方法が欲しかった

「こうなったら、私達もロボットを作るしかない」

剣造が言った
それに十蔵も頷く
だが、問題があった
それはロボット技術は原蔵の方が二人より一歩も二歩もぬきんでていたのだ
恐らく今のままでは駄目だ
そう言う結論に達してしまった
そんな時であった

「剣造さん」
「翼か」

其処へ剣造の妻である翼がやってきた
手には一枚の設計図が握られている

「翼くん、これは？」
「これは・・・私なりに設計して見たんです・・・どうでしょうか？」

翼は机の上にその設計図を広げる
それを二人は見た
其処にはデビルと同等の力を持つもう一体のロボットが居た
それこそが「ゴッドマジンガー」であったのだ

「凄い！凄いぞ！流石はあの馬鹿親父の愛弟子じゃわい」
「有難う翼！これを作れば原蔵の野望を阻止出来る」
「お役に立てて嬉しいわ」

自分の設計図を見て喜ぶ二人に翼は微笑む

それから数年後・・・

三人はそのロボット、ゴッドマジンガーを完成させた
だが、その起動テストをしようとしたその時であった

「フハハハハ！一足遅かったなお前等！」

突如格納庫を破壊してやってきたのは原蔵の操るデビルマジンガーであった
原蔵は剣造達よりも早くデビルを完成させて襲い掛かってきたのだ
対するゴッドはまだ起動テストも済んでは居ない状態である
今コクピットでは翼が必死に起動準備を行っている

「翼、逃げろ！」

「待って下さい！もう少しで起動できるんです」

剣造が叫ぶなか翼が必死にコンソール等を操作して起動準備を進める
そんなゴッドマジンガーにデビルマジンガーが迫る

「フン、ワシの作ったデビルこそ無敵じゃが、念には念を押しておかんとなぁ」

原蔵が言うとデビルの腕がゆっくりとゴッドの頭部に向かっていく

「翼あああああああああああ！」
「止めろ、この馬鹿親父いいいいいいいいいい！」

剣造と十蔵が叫ぶ
しかしそんな叫びも空しくデビルがゴッドの頭部に手を掛ける
その時であった
突如ゴッドが起動し凄まじいエネルギーを放ちだしたのだ

「な、何だこれは？」

そのエネルギーに反応しデビルもエネルギーを放つ
ゴッドは金色のオーラを放ち
デビルは血のように赤いオーラを放った
そしてそのオーラは忽ち眩い閃光を放ちだす

「剣造、此処は早く離れるんじゃ！」
「待って下さい！まだ翼が中に！」

十蔵が必死に翼を助けに行こうとする剣造を引き止める
その直後、激しいスパークは衝撃波となって二人に襲い掛かった

二人は絶叫しそのまま吹き飛ばされる
衝撃と轟音が辺りに響き渡る
どれくらい経った後であろうか
十蔵が目を覚ます
片目が痛む
恐らく失明したのだろう
痛む体を必死に起こす
すると目の前では瀕死の重傷を負った剣造の姿があった
そして、先ほどまで目の前にあった筈のデビルとゴッドは影も形も無かったのだ

＊＊＊

「そ、そんなことが！」

甲児は驚愕した
兜家にそんな恐ろしい過去があったとは

『ソシテ、俺トゴッドハ共ニ次元空間ノ中ヲ彷徨イナガラ戦ッタ。
ソノ際ニ俺達ニ自我ガ芽生エタノダ』

＊＊＊

ゴッドとデビル
二体の魔神はゆらゆら揺らめく次元空間の中で激しくぶつかり合っていた

「何故だ、デビル！何故僕達が戦わなければならないんだ！」
「知れたことを！俺はその為に生み出されたのだ！命令に従って何が悪い？」
「違う！お前のやろうとしている事は悪魔の所業と同じ事だぞ！」
「それはそうだ、何故なら俺は悪魔の魔神だからなぁ」

デビルとゴッドがお互いの心をぶつけながら激しくぶつかり合う

「こ・・・これが・・・魔神同士の戦い・・・」

ゴッドの中に居た翼はデビルとゴッドが戦っている光景をマジマジと見ていた
凄まじいものであった
まるで神と悪魔の戦いを見ているようである
その名の通りこれはデビルマジンガーとゴッドマジンガー
正しく神と悪魔の戦いなのだ

「翼さん」
「え？」

その時、ゴッドが翼に語りかけた

「申し訳ありません、僕達の戦いに貴方を巻き込んでしまって」
「何を言っているの。そんなの気にしてないわ」
「ですが・・・もう貴方は元の世界に帰れないのです」
「・・・・・・」

翼は黙り込んだ
ショックを受けたと言えば分かるだろう
元の世界には愛する夫
そして幼い甲児と生まれたばかりのシローが居る
彼等を残して逝ってしまうのは正直心残りではあった
だが、もし彼等があのまま元の世界に居ればきっと今度は剣造達に被害が及んでいた筈である
そう考えれば気が楽になった

「構うことは無いわ。あの子達には剣造が居る。きっと強い子に育ててくれる筈よ」
「そうですか・・・お願いです、翼さん。貴方の力で彼を・・・デビルを倒せる魔神を作って下さい」
「え？どういう事？」

翼は驚いた顔をした
それに対しゴッドは応える

「今の僕にはデビルを倒すのは恐らく無理です。僕には魂がありません。ですがデビルの中には歪んでは居ますが魂が宿ってきています。ですから今の僕ではデビルは倒せないんです」
「そんな・・・私如きが原蔵博士を超えるロボットを作るなんて・・・

・」
「貴方なら出来ます。僕を設計した貴方なら！」
「・・・・・」

暫し沈黙したあと、翼は頷いた

「分かったわ・・・何処まで出来るか分からないけど出来るだけの事はします」
「お願いします・・・今から貴方をある世界に飛ばします」
「ある世界？」
「その世界は遥かに進んだ技術のある世界です。其処でどうか・・・お願いします」

そう言うと突如翼の目の前が真っ白になる
声を出す暇すらなかった
意識が遠のく
自分が立っているのか寝ているのか分からない
やがて、目を覚ますと其処は見慣れぬ研究室のベッドの上であった

「此処は？」
「目が覚めましたか？」

翼に研究員と思える男性が翼を見て安堵する

「すみません・・・此処は何処ですか？」
「何処って・・・貴方、もしかして次元漂流者ですか？」

研究員が驚きの顔をする

「えっと・・・そんな物かしら・・・それで、此処は？」

「此処はアルハザードと言います」
「アルハ・・・ザード・・・」

翼はその言葉を繰り返した
その世界は正に神秘とも言えた
科学、そして魔法と言う今まで見た事のない文化があったのだ
翼はその世界で様々な技術を吸収し、そして一心不乱に作り続けた
悪魔の魔神を倒せる唯一の魔神を
そう、それこそが・・・

『マジンカイザー』であったのだ

だが、それだけでは駄目だ
マジンカイザーは並の人間では操縦する事が出来ない
マジンカイザーを操縦する事の出来る人間
それは鋼鉄の意志と不死身の体を持つ人間でしか動かす事が出来ないのだ
其処で翼は遭えてマジンカイザーの設計図をある物に隠した
それこそが、『夜天の書』そして『ゴッドスクランダー』であった

やがて、それらを完成させた後、突如アルハザードの天を裂き二体の魔神が現れた
ゴッドとデビルである
二体は既に冷静な意思を失っており、只目の前の敵を倒す事しか頭になかったのだ
そして、その二体の激戦の末に、神秘の都と言われた世界「アルハザード」は滅んだのだった
それでも二体の魔神は戦い続けた
二体の魔神の戦いは凄まじかった
拳の一撃で次元を揺らし

蹴りの一撃で多次元を切り裂いた
その戦いは何百年と続いた
だが、ある時、お互いの拳がお互いの急所を貫き戦いは終った
幸いゴッドは急所をかすかに掠める程度で済んだ
デビルは確実にゴッドの腕が急所を貫いていた

「流石だな・・・だが、俺はいずれ蘇る・・・その時こそ・・・俺の目的を果たす時・・・覚えていろ」

そう言い残してデビルマジンガーは漆黒の闇の中へと消えていった
ゴッドもまた次元の海を漂い続けた
そして、ゴッドが辿り着いた世界は、四千年前のミッドチルダ『ミッドガルド』であった

＊＊＊

デビルが話した
甲児は最早唖然とするしかなかった
余りにスケールが大きすぎるのだ
二つの世界どころか次元そのものを巻き込んでの魔神同士の戦いである
それほど凄まじい魔神を兜家は生み出してしまったのだ
その為に一体どれ程の人達が消えていったのか

思うだけで胸が痛む

「それじゃ、それじゃ兜原蔵が機鋼帝国を作り上げたのは一体何故だ？」

『決マッテイルダロウ。俺ノ暇ツブシノ為ダ』

「何！」

デビルの言い放った理由は衝撃的であった

暇つぶし

その為に機鋼帝国を作り上げて多くの人の命を奪ったというのか

『考エテモ見ロ、コンナ世界俺一体デ充分破壊出来ル。ナノニ何故機鋼帝国ナル物ヲ作ッタノカ・・・答エハ俺ノ暇ツブシ以外理由ナドナイ』

「そんな・・・そんな目的の為に・・・」

「ふざけるな！機鋼帝国はワシの意思で作り上げた帝国じゃ！それを貴様の暇つぶしじゃと！寝言を言うのも大概にしろ！」

『寝言デハナイ！現ニ貴様ヲ生カシテオイタノモソノタメダ』

喚く原蔵をデビルが睨む

その視線に原蔵は言葉を失った

『俺ハゴッドニ敗レ深イ闇ノ中ニ落チタ。其処ハ人間ノ負ノ感情ノ宝庫デアッタ』

デビルが落ちた場所は人間の負の感情が溜まった世界であった

其処には負の感情に満ちていた

怒り、悲しみ、憎しみ、妬み、殺意、嫉妬、欲望、怨念、そして絶望

ありとあらゆる負の感情がミックスされて出来た世界にデビルは落

ちたのだ

『実ニ・・・実ニ心地ヨカッタ。アノ世界ハ俺ニトッテハ正ニ楽園ダッタ』

悪魔の名を持つデビルにはその世界は安息の地であった
その世界でデビルは一万年もの間居たのだ
そのせいか今デビルを覆っているオーラはドス黒いオーラである
まるで負の感情がそのまま出てきているようである

『ソシテ一万年経ッタ時、俺ハミッドチルダヲ滅ボソウト思ッタガソレデハ退屈ダト思イコノ男、兜原蔵ノ脳ダケヲトリダシテ作リ上ゲサセタノダ・・・機鋼帝国ヲ』

「馬鹿な・・・ワシは貴様の掌で踊っていたに過ぎんと言うのか」

原蔵はショックを受けていた
無理もない
自分の意思で作ったと思っていた機鋼帝国が実はデビルマジンガーが命じて作り上げさせた物であったのだからだ

『機鋼帝国トミッドチルダノ人間共ガ争ウノヲ俺ハ楽シマセテ貰ッタ。シュラト言ウ仮初ノ肉体ヲ使ッテナァ』

「シュラが・・・てめぇだったのか？」

『１０年前、オ前達ガ殺シタトリスタントイゾルデノ遺体ヲ俺ガ復元シテ乗リ移ッタノダ』

「てめぇ、命を玩具にしたってのか？」

『フン、所詮命ナド蛆虫ノヨウナモノダロウ』

甲児の叫びにデビルは鼻で笑っていた
それを聞いていたクロノ達も怒りを露にしていた

『ダガ、コノ世界ノ人間ハ余リニモ弱スギタ・・・其処デ俺ハカツテ俺ノ居タ世界カラ連レテキタノダ・・・ソレガ『オ前達』ダ』
「馬鹿な！あれは転移装置の事故で・・・」
『ソウ仕組ンダノダヨ』

全ての話しが繋がった
全ての元凶は機鋼王ではなく、その機鋼王こと兜原蔵が作り出した悪魔の魔神「デビルマジンガー」の仕業であったのだ
デビルマジンガーはアルハザードを滅ぼしゴッドに敗れ、負の世界に落ち其処で闇の力を得た
そしてミッドを滅ぼす為ではなく自身の暇つぶしの為に原蔵を脳だけ蘇生させて機鋼帝国を作り上げさせてミッドチルダに戦いを挑んだのだ
だが、ミッドの人間はデビルの期待を裏切り余りにも弱すぎた
其処でデビルは元居た世界の人間である兜甲児らをこの世界に召還したのだ
全てはデビルの思惑通りに事が進んだ
ミッドチルダにやってきたマジンガー達はデビルの作り上げた軍勢に敢然と戦いを挑んだ
その中で多くの出会いを繰り返し多くの激闘を制してきた
その中で芽生えた友情、そして愛もあった
それらが全てデビルの仕組んだモノであったのだ

『ダガ、マサカ機鋼王ガ此処マデ腑抜ケデアッタノニハ驚イタ・・・ソレニモウ暇ツブシヲスル必要モナイ。コイツハモウ・・・【用済み】ダ』

そう言ってデビルは原蔵の脳が収まったカプセルを天高く掲げる
ミシミシと音を立ててカプセルにヒビが入っていく

「止めろおおおおおおおおお！助けて、助けてくれえええええええええ！ワシはまだ死にたくない！死にたくないんだあああああああああ！」
『死ネ。ゴミガ！』

吐き捨てるように言い放ちデビルはカプセルを握りつぶした
グシャァと音を立ててカプセルが破壊され中の脳が握りつぶされた
脳を形とっていた肉が弾け飛び辺りに散らばる
余りに凄惨な光景にクロノ達は顔を強張らせ、剣造はルーテシアをそっと後ろに隠す
そして甲児は怒りの形相でデビルを見ていた

「てめぇ・・・この俺が何時までもてめぇの掌で踊ってると思うなよ！」
『フッフッフ、威勢ガ良イナ。流石ハ俺ガ選リスグッタダケノコトハアル』
「うるせぇ！てめぇが仕組んだとかそんなこたぁどうでもいい！要はてめぇが俺の虫のすかねぇ野郎だって事が分かっただけで充分だ！今からてめぇを叩きのめしてやる！」

カイザーがデビルを指差して宣言する
それに対しデビルが微笑む

『来イ、最強ノマジンガー、ソシテ最強ノ男兜甲児！ドチラガ最強ノマジンガーカ決メヨウデハナイカ』
「上等だ！てめぇに教えてやるぜ！マジンカイザーと・・・そして俺の力をなぁ！」

降臨、希望を断つ邪神　その7

『戦場ハ貴様ニ任セル。好キナ死ニ場所ヲ選ベ』

不敵に笑いデビルが言い放つ
かなりの余裕である
見ていてむかっ腹が立ってきた
絶対にこいつだけは倒す
そう甲児は心に誓った

「じゃぁついて来い」

そう言ってカイザーは空に舞い上がる
それを追うようにデビルも空に舞い上がる
二体のマジンは空を真っ直ぐに飛び大気圏を突き抜けて漆黒の宇宙に出た
満天の星空が輝く
星の輝きと太陽の光がなければ闇の世界である
そんな世界でカイザーとデビルは対峙していた

「此処でなら思い切り暴れられるぜ」
『ナルホド、貴様ニシテハ中々ノ趣向ダナ・・・デハ、モウ一ツ手心ヲ加エテオコウ』

デビルがそう言うと二体の間に立つように奇妙な丸い物体が現れた
中央にカメラで言うレンズがついており自立行動が可能のようである

「コイツは？」
『俺ト貴様ノ戦イを一部モ逃サズアノ星ノ奴等ニ見セツケル為ノ物

ヨ。コノ前デ貴様ヲズタズタニ引キ裂ケバアノ星ノ奴等ハキット絶望ノ底ニ沈ムデアロウ』
「へん、あべこべに叩きのめしてやる！行くぞぉ！」

甲児の声が戦いの始まりとなった
二体の魔神の拳が交差しあう
その度に宇宙全体が震えた
物凄い振動が伝わってくる
星の中で戦っていれば間違いなくその振動で星一つが壊れてしまう程だと思えた
なのに二体の魔神は全くの無傷なのだ
そんな拳を一度ではなく二度、三度、何度でもぶつけている
それも恐ろしい速さで

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」
『フハハハハハハ！良イゾ良イゾ！モット俺ヲ楽シマセロ』

叫ぶ甲児とは違ってデビルは不気味に微笑んでいた

＊＊＊

「どぉやら、始まったみたいだな」
「あぁ、そうだな」

遥か頭上の上では二体の魔神が戦っていた
それをミッドチルダの地上から暗黒寺とディーダが見ていた
彼等の回りには機鋼兵の残骸が転がっていた

「にしてもお前、何時の間にそんな強くなったんだ？」
「翼さんが俺を蘇生してくれたのさ・・・もっとも、その代償として俺の中にあったリンカーコアは失われちまったけどよ」
「ナルホドねぇ、んじゃその腰に下げてある立派なもんも今じゃ飾りって訳か」

暗黒寺はティーダの腰のホルスターに収められていた銃を見て呟くそれは彼が愛用していた銃である

「まぁな、魔力がなけりゃこいつは只の飾りになっちまうからな、俺が持ってても意味ないんだよ」
「ちげぇねぇや」

ティーダの言葉に暗黒寺が頷くするとそんな二人の頭上を二体のロボットが飛行した
真ゲッターロボGと真ゲッターロボである

「ん？あそこに居るのって・・・まさか！」

號は真下に居たティーダに気づき機体を降下させる

「どうした？號」
「今下にティアナの兄貴がいた気がしたんです」
「號、ティーダ一等空尉は既に殉職した筈よ！」
「その通りだ、お前の見間違いじゃないのか？」

翔と凱が揃って疑う
だが號は言った

「見間違うものか！俺は陸士学校の頃アイツに見せてもらった事があるんだ！あの顔は間違いない！」

號はそう言って機体から降りる
それを翔と凱が止めるも號は聞く耳など持ってはいないでいた

「あん？あのゲッターロボから何か降りてきたぞ？」
「見たところ少年みたいだな」

ティーダと暗黒寺の元へ號が走り寄った
そして間近でティーダを見る
姿を見るのは初めてであったが写真で見た為顔は覚えていた

「貴方は・・・もしかしてティアナの兄さんですか？」
「そうだけど・・・君は？」
「あ、俺アイツと同期だった一文字號って言います」

號は丁寧に挨拶をする
ティーダはそれを聞いて頷いた

「そうか、ティアナにも君みたいな友人が居たんだな」
「え、えぇ・・・」
「そうだ、君に頼みたい事があるんだ」

ティーダが自身の腰に納められていたアンカーガンを取り出し號に手渡す

「これは？」
「今の俺にはリンカーコアがないからこれが使えないんだ。だがティアナならこれを使える・・・俺の変わりに渡してきてくれないか？」
「それは・・・でも、俺で良いんですか？」
「君に行って欲しいんだ」

ティーダの言葉に號は暫し沈黙するもそのアンカーガンにゆっくりと手を伸ばす

「任せて下さい。必ずあいつに渡してきます」

號はティーダから受け取ったアンカーガンを握り締めてそう言い、再び真ゲッターに戻って行った

「良いのか？」

隣に居た暗黒寺が声を掛ける

「何がだ？」
「アイツなんかにそんな大役を任せてよぉ」
「良いのさ」
「？」
「アイツは妹に惚れてる・・・恐らくはティアナも同じだろう・・・それに、アイツになら妹を任せられる・・・そう思ってね」
「けっ、何処までも妹思いだねぇ」

暗黒寺が帽子の唾を使って目元を隠しながら言う
それにティーダが笑みを浮かべていた
そんな二人の前では真ゲッターロボが上空に舞い上がっていくのが

見えた

（頼むぞ・・・號）

＊＊＊

ギンガとクイントは戦闘を終え互いを見ていた

「母さん、どうして母さんが生きてるの？」

「そうね、本来なら私は死んでる筈だもんね」

ギンガの言葉にクイントは笑っていた

「あの時、私達の部隊は機鋼獣の前線基地を攻略する為の作戦に出ていたの」

クイントが居た部隊「ゼスト隊」はマジンガーが来る前に猛威を振るっていた機鋼獣の前線基地を襲撃したのだ

だが、分かっている通り魔道士では機鋼獣には対抗出来ず隊のメンバーは次々と機鋼獣の前に屍を晒す事になった

「その時援護に来てくれていたレジアス中将の部隊も居たんだけど。中将が負傷してそれを逃す為に私と隊長、そしてメガーヌは殿を務めた」

「それで・・・じゃぁどうして」
「初めは三人で戦ってたんだけど気がついたら孤立してて、回りには機鋼獣だらけ、もう駄目かな・・・って思った時だったなぁ。突然目の前が真っ白になって、気がついたら宇宙に居たの」
「う、宇宙！！！」

話しについていけないのが本音であった
一体何故宇宙に行けるのか
そもそも宇宙に行ったら大変な事になるのでは

「其処では私達の居た世界とは別の世界の住人が戦っていた・・・そしてその中にあの人、流竜馬が居た」
「竜馬さんが！でも竜馬さんならこの世界にも居ますよ」
「平行世界って言葉知ってる？分かり易く言えばパラレルワールドと言う物よ」
「なるほど」
「私はそこで聞いた。この後ミッドチルダで何が起こるか・・・そして、スバルの本当の正体を」

ギンガは黙った
それはギンガも知っていたからだ
スバルはギンガとは違いタイプゼロの戦闘機人ではない
魔神戦士と呼ばれるデビルマジンガーが生み出した存在なのだ
そして、今スバルの中にはゴッドマジンガーも居る
一人の少女の体の中に神と悪魔が住み着いているのだ

「それだけじゃない、もっと恐ろしい何かが迫り来るのも聞いた・・・だから私は戻ってきた。そしたら時間が経過してこうなったって訳」
「でも・・・それじゃ何で竜馬さんの姿に？」

「貴方達を危険な目に合わせたくなかったからよ。まだ幼い貴方達じゃ機鋼獣には対抗出来ない。だから正体を隠し続けていたの」

辛かっただろう
本当なら実の娘達に正体を明かしたかっただろう
その腕で思い切り抱き締めたかっただろう
しかしそれをずっと堪えていたのだ
流竜馬と言う仮面を被って
ずっと・・・ずっと長い時と思える時間を耐えていたのだ

「それじゃ・・・四年前にスバルを救ったのも」
「勿論、私よ」

納得した、四年前と言ったらまだ甲児達がこの世界に来てない時である

「あの時も私は機鋼帝国の跡を追っていた。そしたら機鋼帝国がこの空港を爆破すると言う計画に気づいた。本当ならその爆弾も回収したかったんだけどせいぜい大爆発を防ぐだけで精一杯だった」
「でも、もしあの時母さんが居なかったらきっと、私もスバルも此処には居なかったわ」
「そうなるわね」

ギンガの言葉にクイントは微笑む
すると彼女はギンガに向かって言った

「ギンガ、お願いがあるの。スバルには私の正体は隠しておいてね」
「え？どうして」
「あの子は流竜馬に憧れて強くなろうとしてる。その正体が私じゃ役不足だからね」

「う・・・うん」

半ば理解に苦しむ結果となったがとにかく理解した
すると二人の上空を真ゲッターロボが飛行する

「あれは・・・ゲッターロボ！」
「知ってるの？母さん」
「私の飛ばされた宇宙では星一つ分の大きさのゲッターが戦ってたわ」
「ほ、星一つ分！！！」

驚きの余り声が裏返ってしまった
そんな二人は上を飛ぶ真ゲッターを見上げていた

その頃號はある問題に直面していた

「しかし・・・どうやってティアナ達の居る次元空間に行けば良いんだ」
「號、普通其処は最初に気づくところでしょ？」

翔がツッコミを入れる
同様に凱も溜息をつく

「全く、少しは後の事を考えてから行動したらどうだ？」
「しょうがないじゃん！頼まれたことは必ずやり遂げるのが男ってもんだろう？」

胸を張って號が言う
それを見て二人がまた溜息を放つ
するとそんな真ゲッターの頭上を真ゲッターロボGがやってきた

「心配するな。次元の門を開く事なら俺達のゲッターが出来る」
「本当ですか？竜馬さん」
「任せろ！行くぞ、隼人、弁慶！」
「「おう！」」

真ゲッターロボGが上空に舞い上がり額にエネルギーを収束させる

「真、ゲッタァァァァビィィィィィィィム！！！」

ゲッターの額から桜色の閃光が放たれた
その閃光は目の前に巨大な次元湾曲を起こす
その奥に見えるのは真っ暗な世界であった

「あそこにティアナ達が居るのか？」
「恐らくはそうだと思うわ。だって反応があるし」
「行くべきだな」
「へ、分かりきった事を」

號が笑う
そして竜馬を見る

「助かります、竜馬さん」
「気にするな。それより早く行って来い」
「はい！」

元気良く返事した號が次元湾曲の中に突っ込んでいく

「行っちまったな・・・しかし、本当にあいつ等だけで大丈夫なのか？」
「大丈夫だろうよ。何せ俺達が鍛え上げた後輩なんだからよ」
「あぁ、その通りだ！・・・ところで」
竜馬はふと思った事を口にした
「アリシア・・・あんまりくっつかれると操縦し難いんだけど」
竜馬が額に汗を浮べながら言った
と言うのも狭いコクピットの中でアリシアがずっと竜馬にひっついているのだ
「え～、だって最近戦いばっかりで竜馬さんとロクに話しもしてないんだもん！たまにはね♪」
「う・・・」
満面の笑みで見られると対応に困ってしまった
竜馬も男なのだ
それを下に居た隼人と弁慶が笑ってみている
相変わらずなメンバーだったようだ
＊＊＊

次元空間の中では無限に沸いてくる集合ケドラとクイーンケドラ対
ゴッドマジンガーの戦いが起こっていた
次々と迫り来るケドラの大群をゴッドが蹴散らしていく
だが、余りにも数が多すぎてキリがなく、中々クイーンに辿り着け
ない

「ったく、何時まで出てくれば気が済むのよ！」
『やっぱりクイーンを倒さないと駄目みたいだよ』
「分かってるわよ！でもこれじゃ行けないわよ」

そう、既に集合ケドラの数は千体にまで及んでいるのだ
その遥か奥にクイーンが居る
ふと、クイーンが自身の腕を振り上げた
すると集合ケドラの体から一斉に赤い目玉がギョロリと剥き出る
そしてその視線は全てゴッドに向けられた

「何！」
『何かヤバイ予感がする！早く避け・・・』

言い切る前に集合ケドラの全ての目から高出力のレーザー砲が発射
された
それらは全てゴッドに命中する
二人の悲痛の叫びはレーザーのせいで聞こえなかった
それほどまでの威力だったのだ
やがて、レーザーが止むと其処にはうつ伏せになって倒れているゴ
ッドの姿があった
クイーンが甲高い声を上げる
するとそれに呼応するかのように集合ケドラが一斉にゴッドに襲い
掛かってきた

トドメを刺すためだ
だが、其処へ巨大なトマホークを携えた真ゲッターが切り込んできた

「真打登場！」

號が息巻く
その後ろでは肩で息をしながらもティアナの動かすゴッドが起き上がる
それを横目で號が見た

「よう、どうした？こんな雑魚に苦戦するお前じゃないだろう？」
「うっさい！ちょっと油断しただけよ！」

號の言葉にティアナは言葉を強める
しかしそれは見方によったら照れ隠しにも見えた
その証拠にティアナは頬を少しだけ染めている

「い・・・一応礼は言っておくわ・・・有難う」
「へへ、良いって事よ・・・っと、そうだった」

號は思い出すかのようにティアナに向かってゲッターの腕を伸ばす
其処には一丁の銃が置かれていた

「これは・・・兄さんのアンカーガン！どうしてあんたが持ってるの！」
「知りたかったら生きて此処から出る事だ。それより受け取れ」
「う、うん」

ティアナも同様にゴッドの腕を伸ばす
そしてゲッターの腕からゴッドの腕にアンカーガンが手渡された

するとアンカーガンは突如閃光し、瞬く間にゴッドにフィットする大きさになった
しかもそのアンカーガンからは溢れんばかりの魔力にも似た力が伝わってくるのを感じた

「これは・・・分かる。私ならこれを使える・・・バスターミラージュ！」

ティアナは空いていた方の手を翳して自身のデバイスを呼び寄せるそして銃剣型のバスターミラージュがゴッドの手に握られると突如その形を変えた
それは、かつて使っていたクロスミラージュと同じ形であった

「皆には悪いけどやっぱりこっちの方がしっくり来るわね」

元に戻った相棒を見てティアナが言う
気がつけばバリアジャケットも元に戻っていた
しかし、今違うのはもう片方の手にはかつて兄が使っていたアンカーガンが握られている事である
ティアナは二丁の銃を遥か前方に居る目標「クイーンケドラ」にあわせた

「あれだけの距離に居る敵を撃ち抜くには並の魔力じゃ掻き消される・・・一撃必殺で決める！」
「俺達も手を貸すぜ」

隣に號達の乗る真ゲッターが立つ
ゴッドの持っていた銃の銃口に徐々に魔力が収束される
オレンジ色と桜色の魔力光である

「ぶつけ本番だけど・・・これなら！」

カッと目を見開いてティアナが叫ぶ
その魔砲の名前を
その名は・・・

「スパイラルウゥウブレイカァァァァ！！」

叫びと共に二つの閃光が螺旋を描きながら放たれた

「俺達も続くぞ！ストナァァァサァァァァンシャァァァァァァイン！！！」

真ゲッターも同じようにストナーサンシャインを放つ
ティアナの放ったスパイラルブレイカーと號の放ったストナーサンシャインは真っ直ぐクイーン目掛けて飛んでいく
その道中に居た集合ケドラが壁となり防ごうとするが意味がなく瞬く間に塵になっていく
そしてそのままクイーンを包み込んだ
クイーンの体は激しい閃光に包まれる
断末魔の叫びが木霊する
その中でクイーンの体は塵も残さず蒸発してしまった
するとそれに呼応するかのように集合ケドラ達も次々とその姿を砂に変えていく
女王が死んだ為にケドラ達は一斉に死に絶えたのだ

「か・・・勝った・・・勝った～」
「おっと！」

勝利したと思った瞬間緊張の糸が切れたティアナは倒れそうになる

それを號が後ろから支える

「ったく、無茶するからだよ」

「そうね・・・今回はあんたに感謝するわ」

「へへ、少しは俺の事を見直しただろう？」

「ええ・・・少しはね」

號の言葉にティアナは含み笑いを浮かべた

降臨、希望を断つ邪神　その8

カイザー対デビルマジンガーの戦いは漆黒の宇宙の次元を揺らしていた
その拳の一撃が交差する度に宇宙が震える感じである
その蹴りが放たれる度に宇宙が震撼している程であった
それほど凄まじい魔神同士の戦いだったのだ

「野郎！これでどうだ！」

カイザーの目から光子力ビームが放たれた
デビルも同様にビームを放つ
二つのビームがぶつかり合い激しく爆発する
しかしお互い間髪入れずに再び殴り合いを展開する
凄まじい攻勢である

『オモシロイ、オモシロイゾオマエハ！』
「うるせぇ！今からてめぇのそのニヤケ面を出来なくしてやるぜ」

甲児が叫びカイザーの両腕を突き出す
腕が回転して唸りを上げて飛び出した
その腕がデビルの右腕と脇腹を吹き飛ばす
デビルがうめき声を上げる
勝てる！
負ける気などしない
目の前には右腕と脇腹を吹き飛ばされたデビルが居た
これなら勝てる
そう確信を持てた

「トドメだ！」

一気に距離を詰めたカイザーの胸の放熱板にエネルギーが収束する
そして放つ

「食らえ！ファイヤァァァブラスタアアアアアアア！！！」

カイザーの胸から赤い熱線「ファイヤーブラスター」が放たれた
その熱線はデビルの装甲を燃やし尽くす
紅蓮の炎に焼かれて悪魔が苦しそうにもがくのが見えた
終わりだ。甲児はそう思った
だが、それは違った
まだ悪魔は死んでいなかったのだ

『ククク、ヤハリコレデハヤリニクイナ』
「何？まだ生きてるのか？」
『トウゼンダ。コンナニタノシイヒトトキヲソウカンタンニヤメラレナイカラナ・・・トクベツニミセテヤロウ。オレノシンノスガタヲ』

デビルが言う
すると体を構築していたデビルマジンガーの鎧を弾き飛ばす
その中に現れたのはドス黒いオーラの塊であった
そのオーラが体を構築していきだす
出来上がったのはカイザーの何倍・・・いや、何十倍もの大きさを誇る悪魔の姿であった
ギリシャ神話に出てくる古の魔王を思わせるその風貌は見る者に恐怖を植えつけた
蝙蝠のような羽、鋭い爪と牙、耳元にまで裂けた口、禍々しい眼光
それらが今のデビルを象っていたのだ

「これが・・・これがお前の真の姿だってのかよ！」
『ソノトオリ！サァシアイサイカイダ！』
そう言うと物凄い速度でデビルが迫って来た
ガードする隙もなかった
突然無防備なボディにデビルの蹴りが炸裂した
「ガハァッ！」
甲児の口から苦悶の声が漏れた
それから間髪入れずにデビルの連撃が繰り出される
その一撃は重く以前のそれとは比べ物にならない威力であった
『フハハハハ！ドウシタドウシタ？サイキョウノ魔神ハソノテイドナノカァ？』
「くっ・・・舐めるんじゃねぇぇぇ！」
一旦距離を開けて甲児が再びファイヤーブラスターを放つ
ファイヤーブラスターはデビルの胸に当たる
だが、デビルはそれを涼しい顔で受けていた
全く効いて居ないのだ
「馬鹿な！ファイヤーブラスターが効いてない！」
『オカエシダ！』
デビルがニッと笑って言う
そして鋭い牙をカイザーの肩に突き刺した
嫌な音が響いた
見るとカイザーの腕が肩ごとデビルの牙により毟り取られてしまっ

たのだ
超合金ニューＺαのこの装甲を引き裂く恐ろしい力を持っていたのだ

「くそぉ・・・負けて・・・負けて溜まるかぁ！」

それでも甲児は諦めない
最後の最後まで戦い続けるつもりなのだ
だが、無情にもデビルはそんなカイザーに放つ

『キサマトノタワムレモモウコレマデダ・・・シネ、「デビルノヴァ」』

デビルの体から黒い球体のような物が無数に散らばる
それらはカイザーを包囲するかの如く群がっていく
そしてその球体から野太い黒い砲撃が放たれる
それも無数に一斉にである
それをカイザーは全て浴びてしまったのだ

「うわあああああああああああああああああ！」

甲児の苦痛の声が響く
その向こうではデビルの笑い声が響く
やがて攻撃が止んだ
其処に居たのは

全身がズタボロにされ機能を完全に停止したマジンカイザーの姿があった

次回予告

甲児
「圧倒的な力を持つデビルの前に俺は負けた
だけど俺は諦めない！皆が俺を信じてくれる限り、俺は・・・マジンガーは不滅だ！」

次回「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」

最終話「Ｚ」

最後は皆で

『マジィィィィィィィィンゴォォォォォォォォォォォォォォ！！！』

Z

ミッドチルダ各所のテレビと言うテレビにはとある画像が映し出されていた
漆黒の宇宙、その中で戦う二体の魔神、悪魔の魔神を倒した魔神皇帝、しかし悪魔の魔神が魔神の衣を脱ぎ捨て正真正銘の悪魔になった事、そして・・・悪魔に魔神皇帝が負けた事
それら全てが映し出されていたのだ
人々はテレビに釘付けとなった
そして、皆言葉を失った
ある者は青ざめた顔をし、ある者は発狂しだし、ある者は大地に手をついて絶望していた
人々の脳裏に一つの言葉が浮かび上がった

『絶望』

その言葉が深く浮かび上がったのだ
希望を打ち砕かれ、目の前にあるのは圧倒的な敵
適わない、勝てない、生き残れない
そんな思いが人々の胸に重くのしかかった
誰もが絶望に打ちひしがれていた
そして、映像の向こうでは真デビルマジンガーがある事をしていた
それはミッドチルダの軌道上に次元の歪みを開いたのだ
すると、其処には一つの星が現れた
蒼く輝くミッドチルダと同じ美しい星であった
そう、真デビルマジンガーが呼び寄せたのは甲児達の居た「地球」であった

真デビルマジンガーが地球を呼び寄せた理由、それは地球とミッドチルダを衝突させて二つの星をこの宇宙から消滅させる事であった

＊＊＊

その頃、戦闘を終え傷ついた機動六課メンバー達はアースラ所員達により無事にアースラに回収された
そして、ミッドチルダ全域に放映されていた映像を皆は見ていた
その映像を見た一同もまた血の気が引いた顔をしていた
無理もない話しである
たった一つの希望であったマジンカイザーがああも呆気なく倒されてしまったのだからだ

「そんな・・・マジンカイザーが・・・」
「甲児は・・・甲児はどうしたんだよ？」
「兜ぉ！お前肝心な時に何居眠りかましてんだよぉ！」

皆がモニターに向かって叫ぶ
だが、その声は空しくアースラ内に響き渡るばかりであった
揺ぎ無い事実なのだ
認めたくないが・・・それは現実に起こった事なのだ

『敗北』

そう、今人類はあの諸悪の根源である真デビルマジンガーの前に破れたのだ
信じたくない
信じられない
皆がそう思えた
だが、それが現実であったのだ

「私達は・・・これからどうなるんですか？」
「先ほど、衛星軌道上に待機していた管理局の部隊から通信がありました・・・ミッドチルダの軌道上に突如として地球が現れたそうです」
「何だと！」

それに鉄也は驚いた
デビルが出した地球
それは恐らく自分達の元居た地球だ
そして恐らく、デビルはその二つの星を衝突させようとしているのだ
そうなれば人類は死滅する
何て恐ろしい事を思いつくのだろうか

「すぐに迎撃に行きましょう！」
「無理だ、今の我々では奴に対抗するどころか足止めにもならない」
「そんな！やってみなけりゃ分からないッスよ！」
「そんな体でどうやって戦うつもりだ？」

トーレは息巻く妹達の体を指した
皆ボロボロで立っているのがやっとの状態である
それはダイナミックチームも同様であった
最早、真デビルマジンガーに対抗する手段は何処にもなかったのだ

「畜生・・・此処まで来てこんな終わり方ってありかよ」

ヴァイスが拳を叩き付けて唸る
皆が暗い顔をしていた
そんな時であった
ふと、町の映像が映った
其処には巨大なモニターに向かって必死に何かを叫んでいる者達の姿があった
それは、まだ5~6歳くらいの少年少女達であった
彼等の腕にはマジンガーを模した人形が握られていた

「あれは・・・」
「何て言ってるんだ？」

皆がモニターに注目する
そして音声を拾ってみた
すると少年少女達の声が聞こえてきた

『頑張ってぇ！マジンガー！』
『立ち上がって！マジンガー！』
『負けるなぁ！マジンガー！』

子供達が必死に叫んでいるのは
マジンガーを応援する声援であった
まだ諦めて居ないのだ
子供達はまだあのマジンガーに希望を託しているのだ
そんな子供達を見て自分達は恥ずかしくなった
あんな子供達がまだ諦めて居ないと言うのに自分達は既に諦めていたのだから

「あの、剣造さん」
「なんだい？」

フェイトが剣造に聞いた

「確か、マジンカイザーにはあの時私達が使ったジュエルシードを使用しているんですよね」
「あぁ、その通りだよ」

剣造が頷く

「どうしたの？フェイトちゃん」
「なのは、１０年前の戦いを覚えてる？」
「１０年前？・・・あ！」

なのはは思い出した
それは時の庭園での戦いの折、フェイトはプレシアから受け取ったジュエルシードに自身の願いを込めてマジンガーに投げつけたするとそれに答えるかのようにマジンガーは再び蘇り想像以上のパワーを引き出したのだ

「あの時は、私だけの願いであれだけのパワーになった・・・もし・・・もし、ミッドチルダ全員の願いをカイザーに・・・甲児さんに送る事が出来れば」
「あの時のような力が発動する！」

皆は確信した
まだ希望はある
まだ戦うチャンスはある
そう確信したのだ

「皆さん、こちらも見てください」

シャッハが言う
一同がそちらに向かう
すると、其処には子供達に影響され大勢の市民達が叫んでいる
同じように「マジンガー」を奮い立たせる声援である
それがクラナガンだけではない
ミッドチルダ中で行われているのだ

「おい、こっちも凄いぞ」

今度は弁慶であった
弁慶が見ていたのは地球の映像である
地球では地球に住む市民達が同様にマジンガーに声援を送っているのだ
世界中がマジンガーが立ち上がるのを願っているのだ

「凄い・・・皆がマジンガーに立ち上がって欲しいって声援を送ってる」
「こりゃあたしらも負けてられないな」
「あぁ、今俺達が出来る事をしよう」
「そうだな」

皆は頷きあいモニターの向こうに居るカイザーに向かって声援を送り出した

「立って下さい！マジンカイザー」
「立て！兜甲児！」
「お願い甲児君、立ち上がって」

「兜ぉ！さっさと起きやがれぇ！」

皆が声を張り上げる
その声は皆マジンガー・・・そして兜甲児が再び立ち上がる事を願う声援であった

＊＊＊

聞こえる・・・皆の声が・・・
暗き闇の中を漂っていた甲児の耳にミッド、そして地球の人々の声援が聞こえてきた
それらが全て自分に向かっての声援であったのだ
そして、その中には聞き覚えのある声もあった

『立ち上がって下さい！甲児さん』
『甲児さん！貴方は私と母さんを救ってくれた！今度は私達が甲児さんに力を貸します』
『甲児兄ちゃんは私等の悲しい運命をその拳で打ち砕いてくれた！だから今度も負けないでや！』

なのは、フェイト、はやて・・・それだけじゃない

『負けないで下さい』
『立ち上がって下さい！』

『負けるな甲児!』
『さっさと置きやがれ甲児!』
『負けるな兜!』
『マジンガーは無敵だろ?諦めるな!』
『立て!兜甲児』
『立て!マジンガー!!!!』

聞こえる
俺を信頼してる仲間達の声が
それなのに、俺は情けない
最後の最後で無様に負けちまったんだから
くそっ、俺は自分で自分が情けないぜ
自身を罵倒していた
そんな時であった

『なさけねぇぞ兄貴!』

その声は!シロー
地球に居る筈の弟シローの声が聞こえてきた
俺に声を送っているのだ

『そんなんで諦める兄貴じゃねぇだろう!俺の知ってる兄貴はそんなんじゃ諦めない!不屈の闘志を持ってたはずだ!だから立ち上がれ馬鹿兄貴!』

シロー・・・あいつ
思わず笑みを零す
それだけじゃなかった

『甲児くん、立つんだ』

弓教授！
弓教授の声も聞こえた

『甲児君、皆が君に全てを託しているんだ！頑張るんだ甲児くん』
『一人じゃ立てないなら俺達の力を貸してやる』
『一人前で足りないなら私達の思いを使ってください』
『だからさっさと立ち上がれ！』
『何時までも寝てるんじゃねぇ！』

皆の声と共に皆の思いが、願いが、魂が伝わってくる
あぁ、何て熱いんだ
魂の底から燃え上がるようだ
まるで俺はマグマ・・・いや、太陽になったようだ
此処までされて燃えなかったら
そしたら俺は皆の思いを裏切ることになっちまう
そんなの絶対に出来ない
ならばやる事は只一つ

『立て！兜甲児ィィィィィ！！！』

「おう！」

＊＊＊

『サテ、フタツノホシガブツカルノモアト1ジカントイッタトコロカ』

デビルがぶつかる軌道を取った二つの星を見ていた
これで人類は死滅し果てしない死と言う名の絶望が現れる
それが楽しみで溜まらないのだ
しかし、その時であった
突如二つの星から眩い光が放たれだした
それを見て驚くデビル

『ナンダ、アノヒカリハ！』

全く予想外であった
眩い光が一斉に現れる
そしてその光は皆動かなくなったマジンカイザーに降り注がれる
その光をカイザーが吸収しているのだ

『コレハ、マサカ！ジュエルシードカ！バカナ！アレハタダゲームヲモリアゲルタメノエンシュツノハズ！ソレガナゼ！』

デビルは信じられないと言った顔をしていた
ジュエルシードがマジンガーに力を与えたのは知っていた
だが、それは所詮話しを盛り上げるための演出に過ぎないのだ
だが、今こうして目の前では人々の思いや願いをカイザーに内臓されたジュエルシードが集めているのだ
やがて、カイザーはその眩い光に包まれていく
全ての光がカイザーに降り注がれていきやがて全てが集まるとその光の中から叫び声と咆哮が聞こえてきた

それはマジンカイザーの咆哮と兜甲児の叫びであった
そのまま光が収縮されていき、やがてカイザーの中に全て納まった
其処にはまるで先の損傷が嘘のように元通りになっているマジンカイザーの姿があった

「へへ、此処までされたら勝たなきゃ男が廃るってもんだぜ」
『キサマ、オレニカツツモリナノカ？ダトシタラトンダオモイチガイトイウモノダゾ』

デビルが鼻で笑う
だが、そんなデビルにカイザーが指差す

「黙れ引き篭もり野郎！てめぇに教えてやる！俺達人間の強さを」
『ニンゲンノツヨサダト？ニンゲンナドウジムシノゴトクワキデルガイチュウニスギンダロウガ』
「だったらその蛆虫の強さを思い知れぇ！」

甲児が叫ぶ
するとカイザーが目にも留まらぬ速さでデビルの面前に来ていた
それに驚くデビル
次の瞬間、カイザーの拳がデビルの顔面を殴り飛ばした
凄まじい衝撃と共に吹き飛ぶデビル
更にそんなデビルの後ろに回りこんだカイザーが今度は強烈な膝蹴りを放つ
デビルの体が背中からくの字に曲がる
そしてそのまま吹き飛ぶ
最後に頭上に躍り出たカイザーがデビルのボディ目掛けて太い足で蹴り飛ばしたのだ
その一撃を受けてデビルは宇宙を吹き飛んでいく

「まだまだぁ！てめぇにはたっぷりとお見舞いしてやるぜ！」

甲児が叫びカイザーがそのデビルを追う
デビルが降り立ったのは星全体が凍りついた雪と氷の星である
其処にカイザーも降り立つ
思わず肩を震わせる甲児

「うへぇ、思わずこっちにまで寒さが伝わってきそうだぜ」

そう思えたのだ
すると氷を突き破ってデビルが現れた

『オノレエエエエエエエエエエエエエエ！』

激しく怒り狂っている、そしてデビルは背中から無数の長い腕を伸ばすとそれを地面に突き刺した
奇襲を掛けてくるのかと思えたが違った
何とデビルの突き刺した腕から何かが伝っているのが見えたのだ

「こいつ・・・星の命を吸ってるのか？」
『ガハハハハァ！イカニサイキョウノマジンガートイエドモホシヒトツヲアイテニスレバタチウチデキマイ！コレデトドメダ』

腕を戻したデビルは口から強烈な冷凍光線を放った
青白く輝く冷凍光線はカイザーを包み込み、やがて氷の中に閉じ込めてしまった

『ガッハッハ！オモイシッタカ』
「へん、その程度かよ」
『ナニ！』

甲児の言葉にデビルが驚いた

「星一つ分のエネルギーって言うからちょっとビビッたけど、こんなもん屁でもねぇぜ！」

そう言って両手で氷を打ち砕くカイザー
その姿に驚くデビル

「今度はこっちから行くぜ！燃えちまえ、ファイヤァァァブラスタァアアアアアアアア！！！」

カイザーの胸から更に強力になった熱線が放たれた
それはデビルを包み込みそのまま宇宙に吹き飛ばす

「逃すかぁ！」

それをカイザーが追いかける
やがて二体の魔神は再びミッドチルダと地球の位置に戻ってきた
デビルは全身をボロボロにされている
反対にカイザーはまだ力が溢れてきているのが分かる

「どうだ？お前が蛆虫と呼んだ人間の強さが分かったか！」
『オノレ・・・オノレオノレエエエエエエエエエエ！』

怒り狂ったデビルが咆哮する
そして無数の腕を伸ばし近くにあった星に突き刺す

『コウナレバフタツノホシゴトキサマヲタタキツブシテクレルワァ』

デビルが叫ぶ
すると刺さっていた星はミルミル内に干からび砕けてしまった
そして星の命を吸ったデビルの大きさが更に大きくなっていく
それは最早ミッドチルダ以上の大きさになっていた

『コンドコソシネ！マジンカイザー、ソシテ、兜甲児イイいイイイイイイイイイイイ』
「うるせえええええええええええええええええええええ！！！」

そんなデビルに甲児が咆哮しカイザーが眩い光を放つ
それは光子力と、そしてジュエルシードが集めた人々の熱い思いがスパークして放たれている光である
凄まじいパワーが体中から甲児に流れ込んでくる
熱い、熱すぎる
まるで自身が太陽になった気分だ
今、俺は確かに神をも悪魔をも越える存在になった
だが、俺は神になれないし、悪魔にもなる気はない
只、この力で守ってみせる！
俺を信じる人達を、俺の愛した世界を！
それをてめぇに壊させるわけにはいかない

「行くぞおおおおおおおおおおおおお！」

カイザーの咆哮と共に眩い光が矢の如くデビルに向かっていく
そしてそのままデビルを遥か彼方へ運んでいく

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！バカナ！イッタイオマエハナニモノナノダアアアアアアアアア』

デビルが叫んだ
それに対し甲児が微笑みこう答えた

「只の人間さ」

そしてカイザーから眩い輝きと「Z」の文字が浮かび上がる

「これで最後だ！カイザアアアアアアアアアノヴァアアアアアアアアアアア！！！」

カイザーから放たれた光がデビルの体を焼き尽くす

『グワアアアアアアアアアアアアアア！オレガシヌノカアアアアアアア』

「てめぇは人間の負の感情を取り込んだ、だが俺は人間達の正の感情を取り込んだ！それは負の感情をも勝るエネルギーになるんだ！覚えておきな」

『オノレ・・・ダガ、オレハイズレヨミガエル、マダアノセカイニハオレノマイタ「種」ガアル。イズレアレガかいかしたとき、マタオレハヨミガエル！』

そう言い残してデビルマジンガーは姿を消した
跡には何も残って居ない

「へん、だったらまた俺たちが叩き潰してやるぜ！」

敵の居なくなった宇宙でマジンカイザーが、そして兜甲児がそう叫ぶ
終った、全てが終ったのだ
二つの星を巻き込んだ戦いは、魔法を使う若き戦士達と、魔神の力を使う鋼鉄の巨人達の手によりようやく終ったのだ

Z（後書き）

次回はエピローグを投稿します

エピローグ（前書き）

皆様、長い間お付き合いいただき誠に有難う御座いました
これにてリリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣは終焉を迎えます

エピローグ

甲児は今何も考えていなかった
嫌、考える気になれなかったと言うのが正しいのであろう
苦しい戦いの末に甲児達マジンガー軍団と魔道士達を巻き込んだ戦いは終焉を迎えたのだ
この戦いを引き起こした張本人である兜原蔵が作り出した悪しき魔神デビルマジンガーは兜甲児とミッドチルダ、そして地球の人類全ての力を結集した結果敗れたのだ
だが、甲児の脳裏にあの一言が浮かび上がった

『種は撒いた』

一体何の事だろうか？
甲児には全く理解できなかった
嫌、そうであっても今はどうでも良かった
長く続いた戦いも終り今甲児は本当の意味でホッとしていたのだ
宇宙の中を漂いながら甲児は自分を回収しに来る次元艦隊の到着を待っていた
エネルギー計を見たが、指し示す針の位置は「E」のマークを示している
つまり空なのだ
先ほどのカイザーノヴァのお陰でカイザーの残っていたエネルギー全てを使用した為に今は動けずじまいであった
このまま誰も助けに来なければ後数時間でこの中の酸素が尽きるであろう
そんな状況でもこうして落ち着いていられる自分に含み笑いを浮かべた
だが、そんな心配は稀有に終った

見ると数隻の次元艦隊がこちらに向かってきているのが見えたのだ
どうやら俺は助かるんだな
そう思うと甲児の体にドッと疲れが押しかかってきた
今までの無理が一気に出てきたのだろう
目蓋が凄く重い
どうせ助かるんだ
だったら少し寝てても良いよな
そう思い甲児は目蓋をゆっくりと閉じた

＊＊＊

次に甲児が目覚めた場所は真っ白な部屋であった
そして漂う薬品臭で此処が医務室だと言う事が分かった
そして、回りにはいｓんぱいだったのか一同全員が居た
床で寝ている者、壁を背にしている者、ベットに腕を置いて寝ている者と様々であった
皆甲児の事を心配していたのだろう

「やれやれ・・・おぉい、起きたぞぉ」

間延びした声で甲児が声を発する
するとそれに反応して次々と目を覚ます
そして目を覚ました甲児に対し皆が目を輝かせていた

「こ、甲児くん！」
「甲児！」
「兜ぉ！」

皆が目に涙を浮かべて恥ずかしさなど構う事なく甲児に抱きついてきた
人数が人数だけに甲児も後ろに倒れる

「お、おいおい・・・幾らなんでもそんな一斉にこられたら俺潰れちまうよ」

口では言っているが内心嬉しかったのだ
またこうして仲間達と居られる
それが溜まらなく嬉しかったのだ
ふと、甲児はある事を思い出した
それはミッドチルダと地球の事だ
横目で見ていたが確かデビルマジンガーが次元を歪めて二つの星を衝突させようとしていた筈である
あの後どうなったのか？

「そ、そう言えば、あの後ミッドチルダは・・・地球はどうなったんだ？」
「二つとも無事だよ」
「お父さん！」

甲児の問いに答えたのは剣造であった
剣造の腕はまだ修復が追いついて居ないらしく包帯を巻いただけである
しかしその優しい笑みにはそんな辛さなど微塵も感じさせなかった

「お父さん、それって一体どういう意味なんだい？」
「まぁ、口で説明するより実物を見た方が早いだろう」

そう言って剣造は持っていた携帯端末を起動させると映像を呼び起こす
其処にはミッドチルダと次元の壁を隔てて映る地球の姿が映し出された
二つの星は次元の渦で出来たワームホールの真向かいと言った位置にある

「これは？」
「お前がデビルマジンガーを倒してくれたお陰で、次元の歪みがなくなったんだ。だが、不思議な事にこの次元は収縮しないんだ」
「それって・・・つまり」

甲児の中で一つの結論が見出された
次元の壁が一部壊されたことにより甲児達の世界となのは達の世界が繋がったのだ
しかもそれは永久的に消える事はないと言うそうだ

「だが、まだこの中の次元渦を渡る方法が無くてな、暫くは移動は無理さ」
「でもさぁ、もしそれが出来るようになったら・・・」
「あぁ、その通りだ」

甲児の出した結論に剣造が頷く
意味が分からなかった他のメンバーは首を傾げていた

「えっと・・・つまりどういう事ですか？」

恐る恐るエリオが手を上げる
どうやらさっぱり分かってないようだ

「つまりだ、俺たちの技術とミッドの技術の交流・・・即ち地球とミッドチルダの貿易が出来るようになるって事だよ」
「それって、何時でも甲児さん達に会えるって事ッスかぁ！」

嬉しそうにはしゃぐウェンディに甲児は頷く
それを聞いて一同が嬉しい余りか声を上げる
問題は山積みだがこれで問題は解決されたのだ
機鋼帝国は滅び、ミッドの脅威は去った
デビルマジンガーが引き起こした戦いは今、こうして終結したのであった

＊＊＊

それから翌日の夜
場所はミッドチルダ某所にあると言うくろがね屋ミッドチルダ出張所
其処では店丸ごと貸切の大宴会が開かれていた
そして、その中には機動六課メンバーやダイナミックチームのメンバーも勢ぞろいしている

「さぁさぁ、皆さん。今回は先生が腕によりを掛けて仕上げた自慢の一品達で御座いやす、此処行くまでお楽しみに下さい」

安が笑みを浮かべて言う
それを聞いて皆が一斉に料理にがっつく
ゆうに百人前はあったであろう料理も物の数分で空になってしまう
それほどまでの光景であった
飛ぶように皿が交換されていく
常人の五倍以上の速さで動けるお菊姉さんも今回ばかりは苦労している

「にしてもクロノ、お前随分と背が伸びたな」
「僕はもう２３ですよ。何時までも子供じゃありませんよ」

甲児に頭を撫でられながらクロノが言う
甲児にとっては昨日の出来事でもクロノにとってはかなり前の話しなのだ
その為甲児も最初は大人になったクロノを見て驚いた程だ

「んでよぉ、お前勿論の事嫁さんとかいるのかよ？」
「え、ま・・・まぁ、いますけど」
「ナニイイイイイイイイイイイイ！！！」

当然の如く呟いたクロノに対し甲児が大声で驚く
その声を聞きつけてダイナミックメンバーが集まってきた

「どうしたんだ甲児くん」
「鉄也さん聞いてくれよ！こいつ嫁さんいるみたいだぜ」
「ほぉ、そりゃ俺たちは先を越されたみたいだな」
「ったくよぉ、よくやるぜこの幸せ者！」
「ど、どうも・・・」

甲児に肩を小突かれながらもクロノが言葉を発する

「ンデ、相手は誰だ？エイミィちゃんか？それとも猫師匠のうちのどっちかかぁ？」

甲児が不気味な笑みを浮べながら近づく
その顔に徐々に引き気味のクロノ
するとそんな二人の元にやってきたのが

「ヤッホー、クロノォ、元気にしてるぅ」
「え、エイミィ」

何とも間の悪いタイミングである
其処には二人の子供を連れた綺麗になったエイミィの姿があった

「ん？そっちの二人の子供は誰だ？」

甲児はエイミィの横に居る二人の少年少女を見た
どちらもクロノとエイミィに似てる気がする
そして少年の手にはマジンガーの人形が握られていた

「勿論、私とクロノの愛の結晶ですよぉ」
「こ、こらエイミィ！そんな言い方したら・・・」
『クロノオオオオオオオオオオオオオオ！』

クロノが言う前にそんなクロノに甲児達が襲い掛かった

「てめぇ、ちゃっかり子供まで作ったのか」
「お前以前俺がつけたラッキースケベ通り越しやがってぇ！」
「おめでとう、クロノくん」

「フッ、一丁前に男になったじゃないか」
「さすがだなぁクロノ」
「やるじゃねぇかてめぇ」

と言いながらも男性人の手により揉みくちゃにされるクロノ
そんなクロノを横からエイミィが笑いながらみていた
やがてボロ雑巾のようにされたクロノをその辺に転がすと今度は別の方に移動した

「よ、アルフ」
「ヤッホー、甲児」

今度は１０年後に戻って来てから一度も会ってなかったアルフの元であった
流石に使い魔だからか１０年経っても余り老けた感じがしなかった
しかしそれより甲児は気になった点があった
それは服装であった
以前のようにヘソだしで露出度高めの服ではなく長いシャツを着た普通の服装である
そして何より

「アルフ・・・お前その腹はどうしたんだ？」

アルフの腹は少しだが膨れていた
太ったにしては妙な膨れ方である
それに疑問に思っていた甲児にフェイトが近寄って答える

「甲児さん、アルフのお腹には今赤ちゃんがいるんですよ」
「ンなあああああああああああああああにいいい

再びカルチャーショックを受ける甲児
そして、アルフに誰の子か聞いた
するとアルフは口では答えず目線だけで答えた
その先には・・・

「・・・・・・」

物音を立てないようにひっそりとその場から逃げようとする人影が見えた

「何処に行く気だ?ザフィーラ」
「い、嫌・・・別に大した用じゃないんだが」
「てめぇ其処になおれえええええええええええ!」
「どわあああああああああああ!」

これまた何処から持ってきたのか投げ縄を取り出してそれを上手い具合にザフィーラの首に巻きそのまま手繰り寄せた
そしてそんなザフィーラに激しいストンピングの嵐が降り注ぐ

てめぇ、何時の間に出来たんだ!ムッツリした顔してやることやってるじゃねぇか!流石狼だな!美味しい思いしてんじゃねぇこの犬っころ!

「ちょ、ま、痛い、痛いから止めってぎゃあああああああああああ!!!」

ザフィーラの願いなど届く筈もなく、その後彼がボロボロになるまでストンピングは続いた

「え?って事はあの二人式とか挙げたのか?」
「勿論、これ証拠」

フェイトがそう言って一枚の写真を見せる
其処にはウェディングドレスと花婿衣装で彩った二人の姿があった

「何だろうな・・・見てて凄くムカつくのって俺だけなのか?」
「甲児くん、少し黙って為さい」

青筋を浮かべる甲児にさやかの空手チョップが放たれる
それを食らって思い切り頭を抑える甲児
その一方で女性陣はウェディングドレス姿のアルフを見ていた
そして何故か羨ましそうな顔をしていた

「良いなぁ・・・花嫁衣装は女の子の憧れだよねぇ」
「うんうん」
「私も何時か」
「愛する人と」
「ツーショットで映りたい」

皆が思い思いの好きな人を連想して顔を染める
何とも微笑ましい光景である
そんな感じで宴会は大騒ぎになっていた
場所を変えると其処では鉄也とチンクの二人がいた

「チンク、本当に良いのか?」
「ええ、これは私自身のけじめのつもりです」

鉄也の言葉にチンクはそう返した
すると鉄也は少し暗い顔になる

「余り思いつめるな。お前一人のせいじゃないんだ」
「はい・・・ですが、それでは私自身が納得出来ないんです・・・ワガママかも知れませんが・・・これを私に対するけじめにしたいんです」
「頑固だな」

そう言って鉄也は笑った
鉄也にとってナンバーズの少女達は皆妹のような物だ
現に彼女等に戦い方を仕込んだのは主に鉄也なのだ
そして彼女達は剣造によって命を救われた
兜家と深い関係にあるのは言うまでもない
そして、その剣造はと言うと

「そうか、お母さんは順調に回復しているのか」
「うん、ドクターのお陰で」

剣造の隣でルーテシアが微笑みながら言っていた
あの後各スタッフの懸命な処置によりメガーヌは意識を取り戻し今はリハビリに専念している
それを聞いて剣造はホッとした
やっと約束を果たせたのだ
短いようで長かった
そう思えたのだ

「やれやれ、これでやっとワシも肩の荷が降りるわい」

剣造の肩では十蔵が肩を叩きながら座っていた
彼もデバイスになったとは言え疲れなどは知るようである

「ねぇ、竜馬さん」
「ん？どうしたんだい？」

丼飯を食べていた竜馬がアリシアに呼ばれて振り返った

「この後、竜馬さん達は帰っちゃうの？」
「ああ、俺たちの元居た世界はあそこだからね。それに皆も心配してるだろうし」
「そっか・・・でも、また来てくれるよね」
「勿論、約束するよ」

心配そうに見つめるアリシアに竜馬はそう言った
するとアリシアは何故か頬を真っ赤に染めた
何時もなら此処で名前を叫んで抱きついて来る筈なのだが今回は嫌に大人しいのだ
それが少し気にはなった

「へぇ、リョウ君とベンケイ君にもコノ世界に彼女が出来たんだ」
「フッ、まぁな」

隼人が微笑んでいた
隣でミチルがそれを笑ってみている

「なぁに、その対応は」
「別に、只仲間として嬉しく思っているだけさ」
「あらあら、何時の間にか先輩風になってるじゃない」
「やれやれ、ミチルさんには適わねぇや」

お手上げのポーズを取って隼人が笑う
それを見てミチルも笑みを浮かべる

「ディエチ、悪かったな」
「何が？」

弁慶がディエチに謝っていた
それにディエチが何故謝られるか首を傾げていた

「俺、今まで恋って事したことが無くてさ、ずっとお前の気持ちに気づかなかったんだ」
「うん、知ってたよ」

ディエチは頷いた
弁慶が鈍感なのは知っていたのだ
だからこそ粘り強く弁慶に接してきたのだ
そしてそれが遂に実ったのだ

「こんな俺でも、好きでいてくれるのか？」
「うん、私、弁慶さんの事好きですから」
「有難うよ」

此処に来て初めて弁慶が頬を少し染めた
初めて異性の女性から「好き」と呼ばれた事が答えたのだろう
それを回りで見ていた者達が面白そうに見ていた

「甲一君は甲児君たちと一緒に帰るの？」
「俺は此処に残るさ」

フェイトの問いに甲一が答える

「何しろ俺は元々甲児のクローンだからな。だからあいつらのとこ

ろに帰っても俺には居場所が無いんだ。それだったら此処に残る方が良いしな」
「そうなんだ」

それを聞いてフェイトが少し嬉しそうな顔をした
好きな人と一緒に居られる
それがこれほどまでに嬉しいことだとは思いもしなかったのだ
一方こちらでは

「やっぱり甲児さんと映るのは私ッスよ！」
「いんや、絶対私だよ！」
「私だって映りたいぃ！」

ウェンディ、セイン、ディードの三人が先ほどの写真で揉めていた
そしてそれを溜息混じりに見ているノーヴェが居た

「お前ら相変わらずだなぁ」
「んじゃノーヴェは甲児さんが他の誰かに取られても良いって言うんスかぁ？」
「な、何でそれを私に聞くんだ？別に良いじゃねぇか！アイツが惚れたって奴ならよぉ」

口にはそう言ってはいるが明らかに動揺しまくりである
すると其処にまた一人来た

「譲れません！この想いは絶対に」

それはリィンフォースであった
そう、１０年前の闇の書事件以来、彼女もまた甲児に惚れてしまったのだ

更に其処へ

「ちょっとぉ！私を差し置いて甲児の取り合いなんて許さないわよぉ！」

其処へマリアも加わった
六人が甲児の取り合いで大騒ぎをしている
それを隣で見ていたセッテとオットーは止めるべきか迷っていた

「ひかるさんも大介さんが好きなんやなぁ」
「うん、そう言うはやてちゃんも大介さんの事が好きなの？」
「勿論！」

はやてとひかるが話していた
一人の男を愛した二人が会話をしていたのだ
その頃大介はヴァイスやヴェロッサに酒を勧められて呑んでいる
そして潰れていた
どうやら弱いようだ

「それじゃお互いライバル同士って訳だね」
「負けへんよひかるさん」
「私だって」

ひかるとはやてが静かに宣言した
お互いが大介の事を好きだと言う事を
そして、お互い譲れないという事を

「か～、うめぇ！やっぱくろがね屋の飯は美味いぜぇ！」
「良く食べるわねぇ剣児」

剣児が目の前にあった料理を片っ端から平らげていく
それをつばきが呆れた目で見ており隣ではパルパが皿に盛られた料理を食べていた

「諦めろつばき、そいつは元々そういう奴だろ」
「へへ、確かにそうだな」
「そうね、でも元気そうで良かったわ」

柳生、早乙女、御堂の三人が呆れたような安堵したような声を放っていた

「だが、お前らが元気そうで何よりだよ」
「ええ、私達も心配していたわ」
「御免なさい、おばあ様、宙さん」

つばきが謝罪する、その間も剣児はひたすら食べ続けていた

「しかし、最初に見た時は俺も驚いたぞ」
「すまんな、驚かせてしまって」

レジアスとゼストが互いに杯をかわして飲んでいる
かつて共に世界を守ろうと誓った者同士仲が良いのだ

「しっかしお前あれから全然年食ってないなんて羨ましいじゃねぇか！俺なんかもうオッサンだぞ！」
「そう言うな」

レジアスが愚痴っているのをゼストがやれやれと言った感じで聞いている

「だけど、お前でもオーリスはやらんからな」
「相変わらずの親馬鹿だなお前」
「当然だ！愛しい我が娘をそう簡単に嫁にやれるか！そういうのは父親である俺を倒した奴こそぉ！」

言い終わる前にレジアスは机に頭をぶつけた
その後ろではオーリスがレジアスの頭に踵落としを決めていたのだ

「お父さんがそんなんだから私に未だに彼氏が出来ないんですよ」
「良いではないか！それでオーリスちゃんが汚される心配もない」
「あんた私に一生独身で生きろと言いたいのか？」

物凄い形相で睨まれる
が、それを全く気にせずレジアスが頷きその後鉄拳制裁が下された
事は言うまでもない

「すまなかったなティアナ、今まで連絡の一つも寄越せなくて」
「ううん、兄さんが生きてただけでも私は嬉しいよ」

こちらではティアナとティーダの兄妹が再会を喜んでいた

「それから、執務官の試験受けるんだろう？」
「うん、今猛勉強中」
「頑張れよ。応援してるからな」
「有難うね、兄さん」

ティーダに応援されてティアナも俄然やる気が増したようである
それを隣で暗黒寺が微笑みながら見ていた
同僚が生きていた事、そしてその妹が嬉しそうな顔を浮かべているのが本人にはよかったのだろう

「機嫌が良いですね、暗黒寺さん」
「何だ、お前かギンガ」

隣に座ってきたギンガに暗黒寺が面倒臭そうに言う

「何だってまた俺の隣なんだ？」
「私は貴方のお目付け役ですから」
「けっ、ガキに目付けられても嬉しくねぇっての」
「酷いですね・・・相変わらず」

相変わらずの口調の暗黒寺にギンガは困った顔になる
すると暗黒寺はギンガにとっくりを渡す

「へ？」
「ついでくれよ。ガキでも女が入れてくれりゃ少しは酒が美味くなるだろう」
「はぁ・・・分かりました」

溜息をつきながらもギンガは暗黒寺の持っていたお猪口に酒を並々に注ぐ
そしてそれを暗黒寺は飲み干す

「うん、やっぱ女の入れてくれた酒は美味いぜ」
「お世辞のつもりですか？」
「俺は世辞は言う性質じゃねぇよ」
「そうですか」

ギンガは頷き、それ以上何も言う事は無かった
だが、そんな二人も多少歪だが固い絆で繋がっているのに気づくの

はそう遠くない日である

「久しぶりね貴方・・・随分老けたみたいだけど」
「キツイ事言ってくれるじゃねぇかクイント・・・でも俺は嬉しいよ、こうしてお前とまた会えるなんてよ」

ゲンヤが妻クイントと再会出来た事を喜んでいた
しかし側から見るとかなり年の離れたカップルに見えない事もないそれでも今二人はとても幸せだったのだ

「本当に、何時の間にあんな物を作ったの？翼」
「はん、あたしはあんた等とは違ってもしもの時の為の手を幾つか考えてるもんなんだよ」

リンディとプレシア、そして翼の三名が酒を飲みながら会話をしていた

「でも、あの時は私も驚いたわ。何しろマジンガーの最終調整をしろと言うんですもの」
「なぁに、後は簡単な作業だったからあんたらでも出来ると思って任せたのさ」
「はぁ、貴方には適わないわ翼」

最早お手上げ状態であった
プレシアもリンディも翼には勝てないなと素直にそう思ったらしいその隣では

「ねぇねぇボシュゥ」
「確かプレシアさんって、あのフェイトちゃんとアリシアちゃんの母親で、リンディさんはあのクロノって奴の母親なんすよねぇ」

「あぁ、確かにそう聞いたぜ」

ボス、ヌケ、ムチャの三人がヒソヒソと会話していた

「そのワリには二人共若くないっすかぁ？」
「そうっすよぉ、どう見ても２０代にしか見えないっすよぉ」
「案外年誤魔化してるんじゃねぇのか？」

それぞれ失礼な事を口走っている
聞こえたらまずアウトであろう
しかし三人がそんな会話をするのも無理はない
何しろリンディもプレシアも１０年前と全く変わってないのだ
皺一つついていない美しい顔立ちなのだ
疑っても無理はないのは事実である

『お前ら、リンディ達に聞こえたら事だぞ』
「「うおわぁ！」」

突如三人の頭上に降りてきたデバイス状態のクライドを見て三人が腰を抜かした

『ま、俺は黙っておいてやるからよ、あんま失礼な事言うなよな』
「「「はははぁ！」」」

クライドの穏便な計らいに命を救われた三人は平身低頭・・・要するに土下座したのであった

「しかし来るなら来るって連絡くらいくれよ明」
「へ、神出鬼没が俺の流儀なんでな」

甲児が明に酒を注ぎながら言っている

「って、甲児さん未成年なんですからお酒駄目ですよぉ！」
「そうですよ、またフェイトさんに怒られちゃいますよぉ」

エリオとキャロが止めに入る
しかしそこで甲児はフッと笑う

「安心しろ、今日この日俺は二十歳になったのだ！だから堂々と酒が飲めるんだぜぇ！」
「因みに俺はもう二十歳だから平気で飲めるけどな」

甲児と明はそう言って一気に酒を飲み干す
すると二人揃って顔を紅く染める
その後ろには数本の酒瓶が開けられていた
相当飲んでいたようである
そしてスクッと立ち上がった二人が向かった先には

「おいユーノォ」
「うわ、甲児さんに明さん・・・って！酒臭っ！何ですか？」

酒臭い匂いを辺りに撒き散らしながら甲児と明はユーノに絡んできた
酔っ払いの絡み程鬱陶しい物はないのだ

「お前・・・何時になったらなのはちゃんの事口説くんだよぉ」
「えぇぇ！」
「もう皆知ってるんだぜぇ。お前がなのはに惚れてるって事をよぉ」

甲児と明が互いにユーノの肩に腕を乗せて言う
それを聞いてユーノが顔を真っ赤にする

決して酔っている訳ではない

「え・・・えと・・・その・・・あの・・・」
「だあああああああああ！ウジウジしてんじゃねぇ！男なら決めるところでビシッと決めやがれ！でねぇと俺が貰っちまうぞ」
「そりゃ大変だぁ！甲児になんか貰われたらどうなるか分かったもんじゃねぇぞぉ」

明が面白そうに笑う
それを聞いてユーノが青ざめる

「おい明、てめぇ人を獣(けだもの)みたいに言うんじゃねぇよ！」
「事実だろうが」
「んだとこの野郎！」

忽ち明と甲児の殴り合いの取っ組み合いに入ってしまった
そんな中、ユーノは一人考え込んでいた
何時までもこんな調子ではきっとなのはもガッカリするけど、いざ言おうとしたとき、断られたらどうしよう
そんな思いがユーノの中にあったのだ
だが、其処でユーノは自身の顔を叩きバッと立ち上がる

「よし、今夜、勝負に出る！」

ユーノは一人そう決意していた
因みに隣でさやかと楽しく会話していたなのはには偶然にも聞かれていなかった

「なのはちゃんはユーノ君のことどう思ってるの？」
「ふぇっ、ユーノ君のことですか？」

「うんうん」

さやかに問われてなのはは少し頬を染める
そして答えた

「えっと・・・大事な友達・・・かな？」
「それだけ？」
「え？」
「ユーノ君となのはちゃんって１０年の付き合いなんでしょ？友達以上の関係はあるんじゃない？」
「う、う～ん、どうだろう・・・ユーノ君結構引っ込み思案だから中々思い切ってこないんですよぉ」
「フフ、でもこれ私の勘だけどきっともうすぐユーノ君から言ってくるかも知れないわよぉ」
「あうぅ・・・どうしよう」
「フフ、そんな時は貴方の思った事をそのまま言えば良いのよ」

悩むなのはにさやかがそっと言った
それを聞いてなのはがパッと明るい顔になる

「はい、頑張ります」
「その意気よ、なのはちゃん」

なのはの手を握ってさやかが言う

「そうか、ヴィヴィオは鉄也達についていくのか」
「少し寂しくなるな」
「頑張ってね、ヴィヴィオちゃん」
「うん、ヴィヴィオ頑張る！」

シグナム、ヴィータ、シャマルはヴィヴィオとジュンと会話していた
ヴィヴィオは今の所鉄也が親代わりで面倒を見ている
と言っても鉄也の教育だからかなり厳しい内容なのだがそれをヴィ
ヴィオはついてきているのだ
そして、鉄也が元の世界に帰ると言うのでヴィヴィオもまたついて
いくと言う事になったのだ

「フフ、鉄也はヴィヴィオの憧れの的だもんね」
「うん！それにヴィヴィオの大切なパパだもん」

笑顔でヴィヴィオが答える
もし鉄也が聞いていたらきっとどう対応して良いのか困る事間違い
なしだろう

「皆、今回はお疲れ」
「お疲れ様ぁ、お姉さま」

ナンバーズのウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロの四人はそれ
ぞれお互い乾杯しあい今回の作戦の成功を祝っていた

「トーレも暫くは安静にして怪我の治療に専念しなさいね」
「ああ、分かっています」
「ドゥーエはこの後はまた諜報に出るの？」
「ええ、じっとしてるのは私のしょうに会わないから」
「ふ～ん、それで私とウーノ姉さまはお父様とお爺様のお手伝いな
のぉ？」
「ええ、そうよ。これから地球とミッドチルダの貿易が始まるから
ミッドの人達に光子力の有用性を教えなければならないよ。結構忙
しくなるわよ」

ウーノが笑みを浮かべる
しかしその顔は何処か嬉しそうだ
それを見て三人も同様に微笑んでいた

「それで、號・・・君はどうするつもりなの？」
「どうするって？何がだよ翔」
「決まってるだろう？ティアナに思いを打ち明けるのかぃ？」

翔と凱が號に聞いた
それに號はフッと笑う

「あぁ、こうなったら当たって砕けろだ！一発勝負に出てみるさ」
「頑張りなさい、號」
「自分達も応援してるよ」
「有難うよ、翔、凱」

號が微笑んでそう言う
そんな感じで皆が騒いでる中、スバルは縁側に居た

「此処に置いておくよ」

そう言ってスバルはコップに注がれたジュースを側に置く
そして自身の持っていたコップを軽く飲む

「私ね・・・この力で救える人を救う仕事に就きたいと思ってるんだ」

スバルが誰も居ない場所でそう語っていた
嫌、スバルには見えているのだろう
彼女の隣に「彼」が見えるのだろう

「確かに私はあのデビルマジンガーが生み出した魔神戦士だけど・・・でも、この中には君の意思も篭ってるんだよね・・・だから、私は多くの命を救う仕事をしたいんだ」

そう言ってスバルは頭上の月を見上げる
今宵は満月であった
まん丸の月が真っ直ぐこちらを見下ろしているようである
それを見てスバルがフッと微笑む

「だから・・・ずっと見守っててね・・・ゼノン」

＊＊＊

宴会が一段落ついて皆が雑魚寝状態で寝ている中、数組のカップルが庭を歩いていた
勿論場所はバラバラである
それぞれのカップルを見ていく事にする

池の見える庭にはティアナと號が歩いていた

「あの時は・・・有難うね」
「あの時？・・・俺がお前にアンカーガンを渡した時か？」
「それもあるけど・・・最後のあの時、スパイラルブレイカーを撃って私もスバルも動けなくなった時、號は私達を抱えて次元空間から出してくれたじゃない」
「あぁ、あれか」

號は思い出した
それはクイーンケドラとの戦いの時であった
ティアナが二本の銃口から放った魔砲「スパイラル・ブレイカー」を放ちクイーンケドラを葬った後である
その後ティアナとスバルは共に魔力を使い果たし動けなくなってしまったのだ
そんな二人を號の真ゲッターロボが抱えて次元空間から脱出したのだ

「あのまま放って置くなんて出来ないからよ」
「號らしいわね、そういうところ」
「何だよ、からかってんのか？」
「違うわよ・・・懐かしんだだけ」

ティアナがそう言って空を見上げる
號もまた空を見た
そしてふと呟く

「こうしてると思い出すなぁ・・・陸士学校に居た頃」
「あぁ、俺がまだ翔や凱と会う前の頃か」
「あの頃の私・・・魔法も上手く出来なくてずっと悩んでたよね」
「あぁ、かなり塞ぎこんでたな」
「それで、ずっと一人で悩みを抱えてて、ある時本当におかしくなりそうだった時、そっと声を掛けてくれたのが號だったよね」

ティアナは思い出す
陸士学校に入った当初、ティアナは魔法が余り上手くなく、どんなに練習しても思うように出来なかったのだ
その事で深く悩み苦悩していた
そしてそのせいで精神がおかしくなる手前まで来ていた時であった
そんなティアナにそっと声を掛けてくれたのが號であった
號はティアナ以上に魔法が上手くなく、特筆していたのはその身体能力であった
だが、そのせいで仲間からははみ出し物扱いされていた
それでも號は必死に頑張ってきたのだ
そんな號を見てティアナは再び自身を奮い立たせて立ち上がった
すると今まで苦労していたのが嘘のように魔法が思うように撃てるようになったのだ

「あの時・・・號に出会ってなかったら、きっと私は此処に居なかったわ・・・有難うね、號」
「良いって事よ」

號は少し恥ずかしそうに頬を掻く
そして二人共暫し沈黙した
それから暫くして、最初に沈黙を破ったのは號であった

「あのさぁ・・・ティアナ」
「何？」
「お前・・・好きな人とか・・・居るのか？」

號が少し視線を逸らしながら言う
それに対しティアナが少し笑みを浮かべる
その笑みは明らかに何か企みのある笑みだと號は理解した

だが、それでもどんな答えが帰ってきても良いように身構えていた

「そう言う號はどうなの？好きな人って居るの？」
「ん・・・ま、まぁ・・・居るには居るな・・・うん」

何とも歯切れの悪い受け答えである
内心自分を罵倒したくなってきた
するとティアナがそんな號を見て未だに笑っている

「実はね・・・私も居るよ」
「え！」
「うん・・・しかも、案外近くに」
「マジ！」
「マジ」

そう言って號とティアナが互いに視線を合わせる
その視線を見て號が何かを察した
そして、恐る恐る聞いた

「もしかして・・・俺？」
「・・・・・」

號の答えにティアナは答えなかった
只、必死に笑いを堪えていた
必死に平静を装っては居るが口元が震えている
そして、ダムが決壊するかの如くティアナの我慢も限界に達していた

「アハハハハハ！鈍いわねぇ、本当に」
「な、なんだよそれ！」

今度は別の意味で顔を真っ赤に染める號
そんな號の前で笑い過ぎて目に浮んだ涙をそっと拭っているティアナの姿があった

「そうよ、あんたの事が好きよ・・・満足した?」
「・・・え・・・お・・・うおおおおおおお!マジかあああ!」

やっと言葉の意味を理解したのか號が諸手を上げて喜ぼうとしたが、それをティアナがそっと號の前に指を突き出してきた

「但し・・・今の號は好きじゃない」
「はぁ?どう言う意味だよそれ?」
「あんたは知らないだろうけど・・・私一度甲児さんの事を好きになった事があるんだよ」
「え!甲児さんの事を!」

もしそうなら勝ち目は薄かった
相手はあのミッドチルダと地球を救った英雄
又の名を「エース・オブ・マジンガー」である
それが相手では少しばかりキツイと思えた

「でも今の號は甲児さんより強くない・・・だから好きじゃないの」
「き・・・厳しいなぁ・・・」
「だから、甲児さんより強くなりなさい。そうすれば私も號の事が好きになれるから」
「甲児さんより強く・・・おう!任せておけ!必ずなってみせるさ!」

號が胸を叩いて声高らかに宣言する

するとさっきまでの意地悪そうな顔から一変して優しい笑みに変わった

「よろしい。それじゃご褒美をあげるわね」
「へ？ご褒美？」

號がキョトンとした顔をする
するとそんな號の頬にティアナは自身の唇を当てる
頬を伝わってティアナの温もりが伝わってくる
時間からしてほんの数秒であっただろうが、號にとってはそれは数分にも、数時間にも感じられた
そして、離れていく
ふと、唇が当たった頬を抑える
思わず顔が赤くなる

「今はこれだけ、そっちに欲しかったらさっき言った事、実現しないよ」

號の唇に指を当ててティアナが言う
全く、キスはおあずけって事か
厳しいことだな
内心そう思いながらも口には出さず只苦笑いを浮かべる號であった

＊＊＊

別の庭では甲一とフェイトが歩いていた
二人共同じペースで隣同士を歩いている

「フェイト・・・俺さ、お前と同じ執務官の試験を受けようと思うんだ」
「え？」
「最も、俺は甲児のクローンだから魔力なんてない。だけどマジンガーに乗れるから機甲執務官ってのになれるんだ」

甲一の言う機甲執務官とは、これから先、多発するであろうロボット犯罪に対抗する為に新しく作られた職である
主に執務官と変わり無いがこれはロボット操縦技術を要する物なのだ
その為、ロボット犯罪が起こった場合率先してそれの鎮圧に動く職務を指す

「ティアナも執務官試験を受けるみたいだし、俺もフェイトと同じような職につきたいんだ」
「甲一くん」
「それでさぁ・・・フェイト」

甲一が頬を掻きながら言葉を言っていた
フェイトもこの先の言葉が何なのかは薄々理解していた
だからこそ黙っていた
もしあの言葉を言ってきたら返す言葉はもう決まっていたからだ
やがて、甲一がフェイトの方を見た
真剣な眼差しだ
太い眉毛と黒い瞳の目がこちらに向けられる
あの真っ直ぐな瞳に今にも吸い込まれそうな思いがした

そして甲一が口を開く

「俺に・・・俺にお前が負ってる苦労を背負わせてくれ」

フェイトはポカンとした
何とも甲一らしいと言えばらしい答えであったがまさかそう来るとは思わなかったからだ
因みにフェイトの中ではもっと直球で「付き合ってくれ！」とか「結婚してくれ！」とかの言葉を考えていたのだ
しかし、そんなフェイトの目の前では甲一が今か遅しとフェイトの返答を待っていた
そして、フェイトはそっと甲一の両手を掴んで自分の胸元に持っていく
それに甲一は少し頬を紅く染める
無理もない
女の胸と言ったら文字通りあの「ボイン」があるのだ
其処に男の手が当たる
嫌でも胸の鼓動が高まってしまうのは仕方ないと言う所である
するとフェイトがそっと甲一を見る

「これだけ約束して・・・絶対に一人で無茶しないで。無茶するんなら一緒に無茶しよう」
「・・・あぁ、約束する」

甲一は強く頷いた
そして、誰も居ない庭の中で二人は強く抱き合いお互いの温もりを感じあった

＊＊＊

綺麗な泉が下に広がる橋の上
其処にユーノとなのはは居た
二人して水面に映る月を見ていた
更に泉の中では綺麗な魚が楽しそうに泳いでいた
確か地球では鯉と言った筈だ
鯉と恋・・・一体どんな関係があるのだろうか
ユーノは全く意味の無い考えをしていた
いや、今はそんな事の答えを模索している場合じゃない
決めた筈だ
今、此処で思いを打ち明けるのだと
その為に皆が寝静まった後、なのはをこうして呼んだのだから
しかし、いざ目の前にすると心臓の鼓動が高鳴って思うように言葉が出ない
正直言うと、なのはに思いを打ち明ける機会は今まで何度かあったのだ
しかしその度に緊張してしまい結局言えず仕舞いに終ってしまったのだ
しかし今回は違う
今度こそ言おう、そう心に決めた筈である

「す～、は～」

軽く深呼吸する
ちらりとなのはを見る

彼女はまだ泉を見ている
恐らくまだ気づいて居ないようだ
それは幸いであった気がする
そして、覚悟を決めてユーノはなのはの方を向く

「なのは・・・聞いて欲しい事があるんだ」
「うん、良いよ」

え？
今のなのはの返答に思わず言葉が出そうになった
良いよ？
もしかして、もうなのはは気づいている？
いや、だからどうしたと言うのだ
気づいていようがいまいが自分の思いのたけをぶつけるだけだ
決心したユーノの拳が硬く握られる
額からは汗が流れる
心臓の鼓動が早まる
口が動かない
何故だ！
たった一言
そう、たった一言言えれば良いのに
それが言えない自分が恨めしい
そう思えた
すると、そんなユーノの手をそっとなのはが握る
そしてユーノをじっと見つめてこう言ったのだ

「頑張って」

その一言である
だが、その一言を聞いた途端、ユーノの心を縛り付けていた幾重も

の鎖は音を立てて断ち切れた
口が動く
心臓の高鳴りも幾分かは和らいだ
言える、今なら言える
そう確信したユーノはなのはの目を見て今、口を開いた

「なのは・・・僕・・・僕は・・・僕は・・・僕はなのはが好きです！」

言った
言ってしまった
そう思えた
最早言った以上言葉を引っ込める事など出来ない
後は天に任せるだけであった
言い切ったユーノは目を強く瞑ってなのはからの返答を待っていた
どれくらい待っただろう
未だになのはからの返答はない
だが、ユーノの手には確かになのはの手の温もりが感じられる
温かく、そして柔らかい女性の手がしっかりと自分の手を握っていたのだ
それだけは分かった
ふと、なのはが動いたのが分かった
すっと前に出てきたのが分かった
彼女の手がユーノの手から離れてそっとその細い首の後ろの回る
そして・・・唇に感触を感じた
柔らかく、そして温かい感触である
ユーノはゆっくりと目蓋を開いた
目の前には軽く目を瞑ったなのはの顔があった
そして、そのなのはは、今・・・ユーノと唇を合わせていた
所謂・・・『キス』である

どれくらい経った後であろうか
なのはがそっとユーノから離れる
突然の出来事にユーノはまだ思考がおぼろげであり思わずふらつき
そうになるのを必死に堪えた
そんなユーノを見ながらなのはが笑顔で答える

「これが・・・私の答えです」
「なのは・・・有難う」
「ユーノ君・・・好きだよ」
「僕も・・・好きだよ」

そう言って再び二人は強く抱き締めあった
そんな二人を満天の月が優しく照らしていた

＊＊＊

甲児はそんなカップル達の光景をひっそりと見ていた
最初は良いタイミングで飛び出してからかってやろうと思っていた
のだがやめる事にした
余りにも良い雰囲気だったからだ
これでは返ってからかえないと思えたからだ

「やれやれ、熱いねぇ」

お手上げのポーズを取って甲児はそっと宴会場に戻ろうとした
すると其処には剣造が座っていた

「お父さん」
「甲児、お前も起きたのか？」
「まぁね、お父さんも？」
「あぁ、少し話しするか」

甲児は頷いて剣造の隣に座る
ふと、甲児は剣造を見た
かつてのそれとはまるで違う外見になってしまった父剣造
今の剣造は紫の髪に黄色い瞳をした若い青年の姿である
かつてのように黒い髪に立派な髭を生やした姿ではない
それでも、彼は父なのだ
俺の父さんなのだ
それは揺ぎ無い事実であった
ふと、剣造が口を開いた

「甲児、私がお前と出あった際に最初に名乗った名前・・・覚えてるか？」
「ジェイル・スカリエッティだろう？覚えてるよ。でもあれはお父さんが考えた名前なんだろう？」

甲児は聞いたが剣造はかぶりを振った

「実はな、ジェイル・スカリエッティと言う人物は過去に実在した人物なんだ」
「え？」
「と言っても、今から1万年以上も前の人だけどな」

剣造が言う
甲児は只黙って聞いていた
そんな甲児の横で剣造は続ける

「あの時、翼が古の都、アルハザードに飛ばされた際に、その翼を介抱した助手と言うのが、そのジェイル・スカリエッティと言う人だったんだ」

そんな事が
甲児は内心そう思っていた
確かに、母翼がアルハザードで一人の助手と共にゴッドスクランダーやマジンカイザーを製造していたと言うのは聞いた事がある
しかしそれが今こうして目の前に居る剣造の元の体の持ち主であったとは驚きである

「その後、二人で協力してゴッドスクランダーとマジンカイザーを作った・・・だが、翼は其処で近い将来アルハザードに二体の魔神が現れこの世界を滅ぼすという事を予見したんだ。当時それを回避する方法が無かった事から翼が思いついた物・・・それが『プロジェクトF』だったんだ」
「フェイトやエリオ、そして甲一が出来るきっかけになった奴だな」

剣造は頷いた

「翼はそれで自身のクローンを作り上げて片道用の時空の穴を作り其処に今の「錦織翼」を送った。それからすぐに二体の魔神が現れてアルハザードは滅んだんだ」
「母さんは其処まで考えて・・・」

つくづく母は凄いと思えた

たった一人見知らぬ世界に飛ばされたというのにそれでも諦めずに
生きた人が自分の母であることを甲児は誇りに思った

「甲児・・・次来た時には・・・その時には、一緒に母さんの・・・
「兜翼」の墓参りに行こう」
「そうだな、その時はシローも連れてくるよ」
「あぁ・・・頼む」

剣造は頷いた
そして、そんな一同の元へ朝日が昇ってきた
彼等が待ち望んだ「明日」がやってきたのだ

＊＊＊

機動六課の隊舎前
其処には宴会で騒いだ殆どのメンバーが集合していた
そしてその前には一台のカメラが置かれていた
握っているのはヴァイスであった

「そんじゃ、地球とミッドチルダの輝かしい未来を記念しての一枚、
行って見ましょうか！」

そう言ってヴァイスがシャッターを切る
急いで元居た位置へと戻り皆一斉に満面の笑みを浮かべる

そしてきられるシャッター
眩いフラッシュと共にカシャッと音がし写真が撮られる合図であった
それが連続して何枚も撮られていく
やがて、人数分撮れた後、皆はその場から一斉にカメラに向かって来た
写真を見る為である
ヴァイスがカメラから撮れた写真を皆に手渡していく
其処には鮮明に皆が笑顔で映っている写真があった
甲児はそれを見て思わず微笑んだ
一生大事にしよう
偶然とは言えこうして知り合えた仲間達との思い出である
そして、これからずっと長い付き合いになる仲間達との思い出の品として

＊＊＊

それから暫くして、兜甲児らは次元の穴を通って元の星、地球へ帰っていった
地球ではミッドチルダと言う星が突如現れた事で話題独占であり辺りは大騒ぎであった
それから暫くして、次元航行船であるアースラは本来退役して廃棄処分の筈であったが、地球の技術で修復され、今では地球とミッドを繋ぐ唯一の航行船となり活躍する事になった

またそれからもう暫く経った日、早乙女研究所から新たな次元航行船としてスカイホエールを改造した航行船「コスモフリーダム」が開発される
そして、ミッドと地球、双方が互いに共存して生きていく時代がこうして始まったのだ
魔法少女と鋼鉄の魔神達の出会いと最初の戦いの歴史の一ページがこうして描かれたのである
しかし、それは決して楽な道でも、平坦な道でもない
苦難の相次ぐ道のりである事は確かである
しかし、彼等なら、彼女達ならそれらを乗り越える事は出来るだろうと私は思っている
何故なら、彼等は皆心で繋がった鋼鉄の仲間達なのだから

新暦〇〇年◇月〇日

著　兜誠児

『魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ』

『完』

あとがき

はじめまして、ｓｉｂｕｇａｋｉと申します
今回遂に完結した魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣをご愛読して頂いた読者方には感謝致しております
処女作と言う事もあり色々と文章的にもストーリー的にも微妙な点が見えた点は反省しております
しかし、皆様の声援のお陰で無事に此処まで書く事が出来ました

其処で今回は色々とネタバレ的発言をさせて頂きます

まず此処に載せる前にどんな話しにしていたかですが、
当初実はミッドチルダに行くのは甲児だけでした
そしてマジンガーもデバイス化してセットアップして等身大として戦うつもりで書く予定でした
しかしそれだと等身大のマジンガーでは只鎧を着たロボットと言う感じになってしまうので没にしました
そして、タイトルですが当初は「リリカルなのはＺ」と言うのを予定してましたがこれだとマジンガーＺしか出れないと言う事に気づきこれも没にしました
他にも「Ｇ」や「Ｄ」等も考えていましたが其処でマジンガーを作った会社がダイナミックプロと言うのを思い出して思い切ってタイトルを「ＤＹＮＡＭＩＣ」にした訳です
そして、どうせダイナミックと出るのなら自分の知ってる限りのダイナミック作品を出してしまおうと言う感じになったのです
そして、マジンガーやゲッターはなるべく等身大ではなく元のサイズのまま巨大ロボットとしてミッドで戦ってもらう事にしました
そして、ジェイル・スカリエッティとナンバーズの扱いですが、こ

れも最初は普通に敵として出す予定でした
ですが余りにサイズが違いすぎるのと後々の展開を考慮してこういった展開にしました
そしてユニゾンサイズの十蔵ですが、これは思いっきり「真マジンガー」をパクったネタです
ですが、只パクッただけでは面白くないというので考えていた所、アニメ「リリカルなのはＳＴＳ」でユニゾンデバイスがユニゾンする事で魔道士がパワーアップするのを見てふと「魔道士同士が合体したらどうなるだろう」と言う素朴な疑問から魔道士同士を融合させるデバイスとして十蔵を起用しました
しかし、途中で過去編に行った際に十蔵を忘れてしまい、しかもその後色々とあってそのネタがかすんでしまい結局最初だけのネタになってしまいました
其処は深く反省してます
そして今回一番の目玉であろうスバルとゼノンの関係は勿論作者のオリジナルです
本来ならお互い愛し合ってハッピーエンドと言うのも考えたのですが、此処は遭えて死別すると言う重い演出をして見ました
それはスバルを成長させる為でもあり、また新しい話しへのステップのつもりでもあります
そして機鋼帝国や機鋼王こと兜原蔵は勿論作者のオリジナルです
間違っても原作には出てきませんので勘違いのないように
最後に、皆様この小説を読んで頂誠に有難う御座いました
あとがきで続編の予告をしますのでご覧になって下さい
ではでは

あとがき（後書き）

新番組予告

オペレーションダイナミックウォーズ終結から数年
ミッドチルダに新たな火種が降り注いだ
ドクターキュラス
イクスヴェリア
そして・・・二つの魔神

新たな事件に挑む魔道士達と魔神たち

だが、彼等の知らないところで、少しずつ

『種』は開花する

新番組

『魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ　新章！マリアージュ編』

こうご期待下さい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9154m/

魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ

2011年8月18日19時22分発行